放送大学開設予定授業科目講義内容

平成10年10月

第　16　版

放　送　大　学
教務部教務課

目　　次

1．共通科目（一般科目）

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
一連番号（人文系）						
1	生活学入門－日常生活の探求－	1	1 0	9 セ	R	2
2	生活文化史（'98）	3	1 0	9 セ	TV	2
3	生活構造の理論 （平成10年度限り閉講）	5	7	6	R	2
4	世界の教育（'98）	7	1 0	9 セ	TV	2
5	現代社会と教育 （平成10年度限り閉講）	11	7	6 セ	TV	2
6	教育の心理 （平成10年度限り閉講）	13	7	6	TV	2
7	教育心理学	15	9	8 セ	R	2
8	心理学入門	17	9	8 セ	TV	2
9	心理学史（'98）	19	1 0	9	TV	2
10	フロンティア人間科学（'98）	21	1 0	9 セ	TV	2
11	子どもの発達と社会・文化	23	7	6	TV	2
12	哲学入門	25	8	7 セ	R	2
13	西洋思想の源流	27	9	8	TV	2
14	プラグマティズムと現代	31	9	8	R	2
15	倫理学入門	33	9	8 セ	R	2
16	世界の宗教 （平成10年度限り閉講）	35	7	6 セ	TV	2
17	比較思想・東西の自然観 （平成10年度限り閉講）	37	6	5	TV	2
18	国文学入門	39	8	7	R	2
19	現代詩歌 （平成10年度限り閉講）	41	6	5 セ	R	2
20	国語学概論（'98）	43	1 0	9	R	2
21	日本語表現法	45	9	8 セ	R	2
22	歴史学の現在	47	9	8 セ	TV	2
23	日本の文化と思想（'98）	49	1 0	9	TV	2
24	人文地理学	51	8	7 セ	TV	2
	（社会系）					
25	社会科学入門	53	9	8	TV	2
26	法学入門	55	7	6 セ	TV	2
27	国家と人間－憲法の基本問題－	57	9	8	TV	2
28	政治学入門	59	8	7 セ	R	2
29	国際関係論	61	9	8	TV	2
30	経済学入門	63	8	7 セ	R	2
31	社会学入門	65	9	8	R	2
32	民俗文化史 （平成10年度限り閉講）	67	7	6 セ	TV	2
33	社会福祉論	69	7	6	R	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
34	社会調査の基礎	71	8	7セ	TV	2
35	経営学入門（'98）	73	10	9	TV	2
36	日本の経営・欧米の経営	75	8	7	R	2
37	情報基礎管理学	77	8	7セ	TV	2
38	日本の技術と産業の発展	79	8	7	TV	2
39	科学技術史 （平成10年度限り閉講）	81	7	6セ	TV	2
40	先端工学	83	9	8	TV	2
	（自然系）					
41	数学の歴史	87	9	8セ	R	2
42	微積分入門Ⅰ（'98）	89	10	9	TV	2
43	微分積分学Ⅱ （平成10年度限り閉講）	91	7	6	TV	2
44	線型代数Ⅰ （平成10年度限り閉講）	93	7	6	TV	2
45	線型代数Ⅱ	95	8	7	TV	2
46	確率論	97	9	8	R	2
47	統計学	99	9	8	R	2
48	物理の世界 （平成10年度限り閉講）	101	6	5	TV	2
49	物理科学史 （平成10年度限り閉講）	103	7	6セ	R	2
50	基礎化学（'98）	105	10	9	TV	2
51	化学史 （平成10年度限り閉講）	107	5	4セ	R	2
52	基礎生物学（'98）	109	10	9セ	TV	2
53	人間の生物学 （平成10年度限り閉講）	111	6	5セ	TV	2
54	生物学の歴史	113	9	8セ	R	2
55	病気の成立ちと仕組み	115	9	8	R	2
56	地球と宇宙（地球編）	119	8	7	TV	2
57	地球と宇宙（宇宙編）	121	8	7	TV	2
58	日本の自然（'98） （平成10年度限り閉講）	123	10	9セ	TV	2
59	宇宙観の歴史と人間	125	7	6セ	TV	2
60	科学実験法	127	9	8	TV	2
平成11年度開設改訂科目						
	（人文系）					
	生活と地球社会（'99）	129	11	10セ	R	2
	教育の方法（'99）	131	11	10	TV	2
	宗教への招待（'99）	133	11	10セ	TV	2
	近代詩歌の歴史（'99）	135	11	10	R	2
	（社会系）					
	科学と技術の歴史（'99）	137	11	10	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（自然系）					
	微積分入門Ⅱ（'99）	139	11	10	TV	2
	線型代数Ⅰ（'99）	141	11	10セ	TV	2
	物理の世界（'99）	143	11	10	TV	2
	物理・化学通史（'99）	145	11	10セ	R	2
	物質の科学と技術開発（'99）	147	11	10	R	2
	人間の生物学（'99）	149	11	10	TV	2

2．共通科目（外国語科目）

	（英語）					
61	英語　Ⅰ（'96）	151	8	7	R	2
62	英語　Ⅱ（'98）	153	10	9	R	2
63	英語　Ⅲ（'97）	155	9	8	TV	2
64	英語　Ⅳ（'94）……（平成10年度限り閉講）……	157	6	5	TV	2
65	英語　Ⅴ（'97）	159	9	8セ	R	2
66	英語　Ⅵ（'94）……（平成10年度限り閉講）……	161	6	5	R	2
67	英語　Ⅶ（'97）	163	9	8セ	R	2
	（ドイツ語）					
68	ドイツ語　Ⅰ（'98）	165	10	9セ	TV	2
69	ドイツ語　Ⅱ（'98）	167	10	9セ	TV	2
70	ドイツ語　Ⅲ（'97）	169	9	8	R	2
71	ドイツ語　Ⅳ（'98）	171	10	9セ	R	2
	（フランス語）					
72	フランス語　Ⅰ	173	9	8セ	TV	2
73	フランス語　Ⅱ	175	9	8セ	TV	2
74	フランス語　Ⅲ（'98）	177	10	9セ	R	2
75	フランス語　Ⅳ（'98）	179	10	9セ	R	2
	（中国語）					
76	中国語　Ⅰ	181	9	8	R	2
77	中国語　Ⅱ	183	9	8	R	2
78	中国語　Ⅲ	185	8	7セ	R	2
79	中国語　Ⅳ（'98）	187	10	9	R	2
	（ロシア語）					
80	ロシア語　Ⅰ	189	9	8	R	2
81	ロシア語　Ⅱ	191	9	8	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
	（スペイン語）					
82	スペイン語　Ⅰ（'95）……（平成10年度限り閉講）……	193	7	6セ	R	2
83	スペイン語　Ⅱ（'98）……	195	10	9	R	2
平成11年度開設改訂科目						
	（英語）					
	英語　Ⅳ（'99）……	197	11	10	TV	2
	英語　Ⅵ（'99）……	199	11	10セ	R	2
	（スペイン語）					
	スペイン語　Ⅰ（'99）……	201	11	10	R	2

3．共通科目（保健体育）

84	保健体育……	203	9	8セ	TV	2
	体育実技……		——	——	—	1

4．共通科目（基幹・主題科目）

平成11年度開設改訂科目						
	（基幹科目）					
	現代日本の教育課題（'99）……	205	11	10	TV	2
	現代日本の地方自治（'99）……	207	11	10	TV	2
	日本の自然（'98）……	209	10	9	TV	2
	（主題科目）					
	地球環境を考える（'99）……	211	11	10	TV	2

5．専門科目

生活と福祉

	（生活一般）					
85	家族過程論……	213	7	6セ	R	2
86	ライフコース論……（平成10年度限り閉講）……	215	7	6セ	R	2
87	家庭生活の経済……	217	8	7セ	R	2
88	生活経営論……	219	9	8セ	R	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
89	消費者問題の展開と対応	221	10	9	R	2
90	日本人口論－高齢化と人口問題－	223	10	9セ	R	2
	（衣・食・住）					
91	衣・食・住の科学	225	8	7	R	2
92	ファッションと生活	227	8	7セ	TV	2
93	洗濯と洗剤の科学（'98）	229	10	9セ	TV	2
94	着心地の追究 （平成10年度限り閉講）	231	7	6	TV	2
95	食生活の成立と展開 （平成10年度限り閉講）	233	7	6セ	R	2
96	食物の特性とその役割	235	8	7	TV	2
97	調理とおいしさの科学（'98）	239	10	9セ	TV	2
98	食生活の現代的課題	241	8	7	R	2
99	住まい学入門（'98）	243	10	9	TV	2
100	日本における集合住宅計画の変遷	245	10	9	TV	2
101	住まいの環境学 （平成10年度限り閉講）	247	7	6セ	TV	2
102	新しい都市居住の空間	249	9	8セ	TV	2
	（健康科学）					
103	母性の健康科学	251	8	7セ	TV	2
104	乳幼児の健康科学	253	8	7セ	R	2
105	青年期の健康科学	255	9	8	R	2
106	成人の健康科学	259	8	7	R	2
107	老年期の健康科学	263	8	7	R	2
108	現代の精神保健 （平成10年度限り閉講）	265	7	6	R	2
109	骨と関節の健康科学 （平成10年度限り閉講）	267	7	6	R	2
110	脳と生体統御（'98）	269	10	9	TV	2
111	発がんとその予防	271	8	7	R	2
112	看護学概論	273	9	8	TV	2
	（社会福祉）					
113	子ども家庭福祉論（'98）	275	10	9	TV	2
114	障害者福祉論	277	9	8	R	2
115	高齢者福祉論 （平成10年度限り閉講）	279	7	6	R	2
116	現代の貧困と公的扶助（'98）	281	10	9	R	2
117	地域福祉論 （平成10年度限り閉講）	283	7	6	R	2
118	社会福祉の方法	285	8	7	TV	2
119	世界の社会福祉	287	9	8	TV	2
120	高齢社会の生活設計	291	8	7セ	R	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
平成11年度開設改訂科目						
	（生活一般）					
	近代社会と人生経験（'99）	295	11	10	R	2
	（衣・食・住）					
	着ごこちの追究（'99）	299	11	10	TV	2
	地域と食文化（'99）	301	11	10セ	R	2
	世界の住まいと暮らし（'99）	303	11	10セ	TV	2
	（健康科学）					
	こころの健康科学（'99）	307	11	10	R	2
	医療・社会・倫理（'99）	309	11	10セ	R	2
	（社会福祉）					
	高齢者福祉（'99）	313	11	10	R	2
	地域福祉（'99）	315	11	10	R	2

発達と教育

	（教育学）					
121	教育的人間学（'98）	317	10	9セ	R	2
122	近代の教育思想（'98）	319	10	9	R	2
123	教育の歴史	321	7	6セ	TV	2
124	教育社会学（'98）	323	10	9セ	TV	2
125	道徳教育 （平成10年度限り閉講）	325	7	6	TV	2
126	幼児教育の社会学（'98）	327	10	9セ	R	2
127	現代学校論 （平成10年度限り閉講）	329	7	6セ	R	2
128	現代社会の学力 （平成10年度限り閉講）	331	7	6	R	2
129	教育・経済・社会	333	8	7セ	TV	2
130	子どもと若者の文化	335	9	8セ	TV	2
131	変わる社会と大学	337	9	8セ	R	2
132	地域社会と教育	339	8	7	TV	2
133	国際化と教育 （平成10年度限り閉講）	341	7	6セ	R	2
134	メディアと教育 （平成10年度限り閉講）	343	7	6セ	TV	2
	（心理学）					
135	知覚心理学	345	9	8セ	TV	2
136	認知心理学	347	8	7セ	TV	2
137	学習心理学	349	8	7セ	TV	2
138	発達心理学（'98）	351	10	9	TV	2
139	乳幼児心理学	353	9	8	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
140	青年心理学	355	8	7	R	2
141	老年期の心理と病理（'98）	357	10	9セ	R	2
142	言語発達心理学（'98）	359	10	9セ	R	2
143	社会心理学－アジア的視点から－	361	10	9	TV	2
144	人格心理学	363	8	7	TV	2
145	臨床心理学 （平成10年度限り閉講）	365	7	6セ	R	2
146	精神分析学	367	8	7	R	2
147	カウンセリング	369	8	7	R	2
148	子どもの発達とその障害 （平成10年度限り閉講）	371	7	6	TV	2
	（教育・心理）					
149	生涯発達と生涯学習	373	9	8セ	R	2
150	言葉と教育 （平成10年度限り閉講）	375	7	6	R	2
151	児童心理学（'98）	377	10	9	R	2
152	児童の臨床心理（'98）	379	10	9セ	R	2
153	教育評価 （平成10年度限り閉講）	381	7	6セ	R	2
154	心理測定法（'98）	383	10	9	TV	2
	平成11年度開設改訂科目					
	（教育学）					
	道徳教育（'99）	385	11	10	TV	2
	現代社会の学力（'99）	387	11	10	R	2
	国際化と教育（'99）	389	11	10セ	R	2
	メディアと教育（'99）	391	11	10セ	TV	2
	（心理学）					
	臨床心理学概説（'99）	393	11	10	R	2
	（教育・心理）					
	教育の中の言葉（'99）	395	11	10セ	R	2
	生徒指導（'99）	397	11	10セ	TV	2
	教育評価（'99）	399	11	10	R	2

社会と経済

	（法律学）					
155	民法（'98）	401	10	9セ	TV	2
156	家族法（'98）	403	10	9	TV	2
157	商法 （平成10年度限り閉講）	405	7	6セ	R	2
158	行政の法システム入門（'98）	407	10	9セ	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
159	刑法学	409	9	8セ	R	2
160	経済法	411	8	7	R	2
161	労働法（平成10年度限り閉講）	413	7	6	R	2
162	法と裁判	415	8	7	TV	2
163	法からみる国際関係（'98）	417	10	9	R	2
164	現代法の諸相（平成10年度限り閉講）	419	7	6	R	2
165	法の歴史と思想	421	7	6セ	R	2
	（政治学）					
166	日本政治史	423	9	8セ	R	2
167	西欧都市の政治史	425	9	8	R	2
168	先進諸国の政治	427	8	7セ	R	2
169	第三世界の政治	429	8	7セ	R	2
170	現代の行政	431	8	7セ	R	2
171	現代アメリカの政治	433	9	8	TV	2
172	日本政治思想史	435	9	8セ	R	2
173	近代国家と近代革命の政治思想	437	9	8	R	2
174	政治分析の手法（平成10年度限り閉講）	439	7	6セ	TV	2
175	現代の国際政治	441	7	6セ	TV	2
176	現代日本の政治と政策（平成10年度限り閉講）	443	7	6	TV	2
177	現代日本の地方自治（平成10年度限り閉講）	445	7	6セ	TV	2
	（経済学）					
178	現代の経済学	447	8	7セ	TV	2
179	金融論（平成10年度限り閉講）	449	7	6	TV	2
180	財政学	451	7	6	TV	2
181	国際経済学	453	9	8	R	2
182	日本経済史（平成10年度限り閉講）	455	6	5セ	R	2
183	欧米経済史（平成10年度限り閉講）	457	7	6セ	R	2
184	経済学史入門	459	9	8セ	TV	2
185	経済社会の現代（'98）	461	10	9セ	TV	2
	（社会学）					
186	比較文明の社会学	463	9	8	TV	2
187	コミュニティ論（'98）	465	10	9	R	2
188	都市と農村	467	8	7	R	2
189	ジェンダーの社会学（平成10年度限り閉講）	469	6	5	TV	2
190	逸脱の社会学（'98）	471	10	9セ	R	2
191	国際社会学（平成10年度限り閉講）	473	7	6	R	2
192	メディア論	475	9	8セ	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
平成11年度開設改訂科目						
	（法律学）					
	商法（'99）	479	11	10セ	R	2
	雇用と法（'99）	481	11	10	R	2
	現代法の諸相（'99）	483	11	10セ	R	2
	（政治学）					
	政治過程の比較分析（'99）	485	11	10	TV	2
	現代日本の政治変動（'99）	487	11	10セ	TV	2
	（経済学）					
	金融論（'99）	489	11	10	TV	2
	日本経済史（'99）	491	11	10	R	2
	欧米経済史（'99）	493	11	10セ	R	2
	（社会学）					
	ジェンダーの社会学（'99）	495	11	10	R	2
	都市空間の比較社会学（'99）	497	11	10セ	TV	2
	環境社会学（'99）	499	11	10	TV	2

産業と技術

	（経営学）					
193	経営学	503	8	7	TV	2
194	生産性科学入門 （平成10年度限り閉講）	505	6	5セ	TV	2
195	経営工学総論	507	8	7セ	R	2
196	生産経営論	509	9	8	TV	2
197	生産の設備化と経営（'98）	511	10	9	TV	2
198	労使の関係 （平成10年度限り閉講）	513	7	6	R	2
199	企業経済と情報・戦略	515	7	6	R	2
200	経済・経営統計 （平成10年度限り閉講）	517	6	5	R	2
201	経済・経営統計演習 （平成10年度限り閉講）	519	7	6セ	TV	2
202	会計学	521	8	7セ	TV	2
203	管理会計 （平成10年度限り閉講）	523	7	6	R	2
204	税務会計（'98）	525	10	9	R	2
205	財務管理	529	8	7セ	R	2
206	不動産学の基礎	531	9	8セ	TV	2
207	地域経営 （平成10年度限り閉講）	533	7	6セ	R	2
	（産業論）					
208	現代産業組織論	535	9	8セ	R	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
209	産業と情報社会	537	8	7セ	R	2
210	ベンチャー企業論	539	9	8	R	2
211	サービス産業論	541	8	7	TV	2
212	大地と人間－食・農・環境の未来	543	10	9	TV	2
213	農業経営	545	9	8	R	2
214	発展途上国産業開発論 （平成10年度限り閉講）	547	7	6	R	2
215	東南アジアの日本企業の工業生産	549	7	6	TV	2
216	都市経営 （平成10年度限り閉講）	551	7	6	TV	2
217	都市計画論	553	8	7	TV	2
218	環境アセスメント	555	6	5	TV	2
	（工学・技術）					
219	エネルギー工学と産業・社会（平成10年度限り閉講）	557	7	6セ	TV	2
220	材料工学と産業・社会	559	8	7	TV	2
221	情報工学 （平成10年度限り閉講）	561	7	6	TV	2
222	プログラミングの基礎	563	8	7	TV	2
223	エレクトロニクス入門 （平成10年度限り閉講）	565	7	6	TV	2
224	応用人間工学	567	8	7セ	TV	2
225	計測と制御	569	9	8セ	TV	2
平成11年度開設改訂科目						
	（経営学）					
	生産性科学入門（'99）	571	11	10セ	TV	2
	産業と労使の関係（'99）	573	11	10	TV	2
	マーケティング論（'99）	575	11	10セ	R	2
	企業の経済学（'99）	577	11	10セ	R	2
	管理会計（'99）	579	11	10	R	2
	（産業論）					
	発展途上国の開発戦略（'99）	581	11	10	R	2
	都市・地域経営（'99）	583	11	10セ	TV	2
	（工学・技術）					
	エネルギー工学と社会（'99）	585	11	10	TV	2
	情報工学（'99）	587	11	10	TV	2
	21世紀への技術発展（'99）	589	11	10	R	2

		頁	開設年次	作成年度	ﾒﾃﾞｨｱ	単位
	（哲学）					
226	西洋古代中世哲学史 ……（平成10年度限り閉講）……	591	7	6セ	R	2
227	西洋近世哲学史 ……（平成10年度限り閉講）……	593	7	6セ	R	2
228	現代の思想的状況 ……（平成10年度限り閉講）……	595	7	6セ	R	2
229	科学の哲学 ……	597	8	7セ	R	2
230	人生の哲学（'98）……	599	10	9セ	R	2
231	宗教の哲学 ……	601	8	7	R	2
232	老荘思想 ……	603	8	7セ	R	2
233	仏教思想 ……	605	9	8	R	2
	（文学）					
234	上代の日本文学 ……	607	8	7セ	R	2
235	中古の日本文学 ……	609	9	8セ	R	2
236	中世の日本文学 ……	611	7	6セ	R	2
237	近世の日本文学（'98）……	613	10	9	R	2
238	近代の日本文学 ……	615	9	8セ	R	2
239	清少納言と紫式部（'98）……	617	10	9セ	R	2
240	徒然草の遠景（'98）……	619	10	9	R	
241	日本語の変遷 ……	621	9	8	R	2
242	日本語教育概論 ……	623	9	8セ	TV	2
243	書誌学・古文書学 ……（平成10年度限り閉講）……	625	6	5セ	TV	2
244	中国古典詩学 ……	627	9	8	TV	2
245	中国における小説の成立 ……	629	9	8	R	2
	（史学）					
246	歴史考古学 ……（平成10年度限り閉講）……	631	7	6セ	TV	2
247	日本の古代 ……	633	8	7セ	TV	2
248	日本の中世（'98）……	635	10	9セ	R	2
249	日本の近世（'98）……	637	10	9セ	TV	2
250	日本の近代 ……	639	8	7セ	R	2
251	朝鮮の歴史と文化 ……	641	8	7	R	2
252	中国の歴史と社会（'98）……	643	10	9	R	2
253	南アジアの歴史と文化 ……	645	8	7	TV	2
254	イスラーム世界史 ……	647	9	8セ	R	2
255	古典古代史 ……	649	7	6セ	TV	2
256	ヨーロッパの歴史 ……	651	8	7セ	TV	2
257	ヨーロッパと近代世界 ……	653	9	8セ	R	2
258	アメリカの歴史 ……	655	8	7	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
	（美学・芸術論）					
259	芸術の古典と現代	657	9	8セ	TV	2
260	美術史と美術理論	659	8	7	TV	2
261	西洋音楽の歴史	661	9	8セ	TV	2
262	日本音楽の基礎概念	663	8	7	R	2
263	民族音楽学理論	665	8	7	R	2
264	舞台芸術論	667	8	7	TV	2
265	演劇を読む	671	9	8	TV	2
	（比較文化・地域研究）					
266	文化人類学	673	8	7セ	TV	2
267	世界の民族（'98）	675	10	9	TV	2
268	博物館学Ⅰ（平成10年度限り閉講）	679	6	5	TV	2
269	博物館学Ⅱ	681	7.2	6	TV	2
270	言語学（平成10年度限り閉講）	685	6	5セ	TV	2
	（外国の言語・文化・社会）					
271	古代ギリシャ・ローマの文学	687	8	7	R	2
272	イギリス文学（'98）	689	10	9セ	R	2
273	ドイツ文学（'98）	691	10	9セ	R	2
274	フランスの文学（'98）	693	10	9	R	2

平成11年度開設改訂科目

	（哲学）					
	ギリシャ哲学（'99）	695	11	10セ	R	2
	西洋近世哲学史（'99）	697	11	10	R	2
	美と詩の哲学（'99）	699	11	10	R	2
	（文学）					
	書誌学（'99）	701	11	10	TV	2
	（史学）					
	発掘された古代日本（'99）	703	11	10セ	TV	2
	（比較文化・地域研究）					
	博物館概論（'99）	705	11	10	TV	2
	言語学（'99）	707	11	10	TV	2

自然の理解

	（数学）					
275	応用数学（平成10年度限り閉講）	709	7	6	R	2

		頁	開設年次	作成年度	行行	単位
276	対称性の数学（'98）	711	10	9セ	R	2
277	解析学	713	8	7セ	R	2
278	数学基礎論 （平成10年度限り閉講）	715	7	6	R	2
279	計算の理論 （平成10年度限り閉講）	717	7	6	R	2
280	データとデータ解析	719	8	7	R	2
281	統計の考え方	721	8	7	R	2
282	カオスの数理と技術	723	9	8セ	TV	2
283	パソコンによる解析入門 （平成10年度限り閉講）	725	7	6	TV	2
	（物質科学）					
284	力学	727	9	8セ	TV	2
285	光と電磁場	729	8	7	TV	2
286	エネルギーと熱（'98）	731	10	9セ	TV	2
287	相対論 （平成10年度限り閉講）	733	7	6セ	R	2
288	量子力学	735	9	8	TV	2
289	現代物理学	737	9	8	TV	2
290	物質科学－物理編	739	8	7	TV	2
291	物質の科学・量子化学（'98）	741	10	9	TV	2
292	物質の科学・物理化学 （平成10年度限り閉講）	743	7	6	TV	2
293	物質の科学・有機化合物（98）	745	10	9	TV	2
294	物質の科学・分析（'98）	747	10	9セ	TV	2
295	化学熱力学	749	7	6	R	2
296	生物有機化学	751	8	7セ	TV	2
297	物質の科学と技術開発 （平成10年度限り閉講）	753	6	5セ	R	2
298	自然と科学－物質編 （平成10年度限り閉講）	755	5	4	R	2
	（生物科学）					
299	生命と物質	757	9	8セ	TV	2
300	植物生理学	759	8	7セ	TV	2
301	生態学 （平成10年度限り閉講）	761	6	5セ	R	2
302	分子生物学	763	9	8セ	TV	2
303	動物の進化 （平成10年度限り閉講）	765	7	6	TV	2
304	植物と菌の系統と進化 （平成10年度限り閉講）	767	7	6セ	TV	2
305	動物の行動と社会	769	8	7セ	TV	2
306	細胞生物学（'98）	771	10	9	TV	2
307	現代生物学	773	7	6セ	TV	2
308	自然と科学－生命編 （平成10年度限り閉講）	775	5	4	R	2
	（宇宙地球科学）					
309	太陽系の科学 （平成10年度限り閉講）	777	7	6	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	形行	単位
310	天体物理学入門	779	9	8	TV	2
311	天体と宇宙の進化Ⅰ	781	9	8	TV	2
312	天体と宇宙の進化Ⅱ	783	9	8	TV	2
313	固体地球	785	8	7セ	TV	2
314	日本列島の地球科学 （平成10年度限り閉講）	787	7	6セ	TV	2
平成11年度開設改訂科目						
	（数学）					
	応用数学（'99）	789	11	10	R	2
	数学基礎論（'99）	791	11	10セ	R	2
	計算の理論（'99）	793	11	10	R	2
	パソコンによる解析学（'99）	795	11	10	TV	2
	（物質科学）					
	相対論（'99）	797	11	10セ	R	2
	物質の科学・反応と物性（99）	799	11	10	TV	2
	（生物科学）					
	生態学（'99）	801	11	10	TV	2
	生物の進化と多様性（'99）	803	11	10セ	TV	2
	（宇宙地球科学）					
	太陽系の科学（'99）	805	11	10	TV	2
	日本列島の地球科学（'99）	807	11	10セ	TV	2

＝生　活　学　入　門＝（Ｒ）

―日常生活の探求―

（主任講師：大久保孝治（早稲田大学教授）
主任講師：嶋﨑　尚子（放送大学助教授））

全体のねらい

日常生活というものを客観的かつ新鮮な目でとらえること。そのためには、（１）日常生活の自明性を疑ってかかること、（２）日常生活を記述・分析するのに必要な単語（専門用語）と文法（理論）を学習すること、（３）全体社会と個人生活との間の関係について常に考えることが大切である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言葉（1）言葉と世界	たとえば、日本人にとって虹は七色だが、文化（言葉）によって虹は六色であったり、五色であったり、それ以下であったりする。人間と世界（事物）との間には言葉が存在する。人間は言葉というフィルターを通して世界を見ているのである。日常生活の探求を開始するに当たって、まず、この事実をしっかり把握しておく必要がある。	大久保孝治（早稲田大学教授）	大久保孝治（早稲田大学教授） 嶋﨑尚子（放送大学助教授）
2	言葉（2）名前	「あなたは誰？」と聞かれれば、われわれは自分の名前を答える。名前は自分という存在にとって不可欠の要素である。しかし、誰も自分の名前（本名）を自分で決めることはできない。当たり前のことのようでいて、これは重要なことである。命名という社会的行為をめぐって、そこにどのような規範が存在するのかを考える。	同　上	同　上
3	言葉（3）言葉と社会	言葉は社会構造と密接に関連している。言葉の文化をみることで社会構造の特徴を描き出すことができる。ここでは家族観、ジェンダー観をとりあげる。一方で言葉は社会の変化と呼応して変化する。言葉の収斂と多様化の２方向から考える。	嶋﨑尚子（放送大学助教授）	同　上
4	身体（1）自然・身体・社会	身体行動は、自然なものでありかつ社会的所産である。生物的身体と社会的身体ある。われわれは社会化・文化化をとおして社会的身体へ変容していくのである。われわれの身体的行動の社会性を動作ならびに喜怒哀楽の表現から考える。	大久保孝治	同　上
5	身体（2）「私」と身体	自己と自己の身体は重なり合い、人は鏡に映った自分（の身体）をみて「これが私だ」と確認する。身体は自己と「私」の境界線として位置づけられる。しかし身体の変容によってわれわれは自己と自己の身体とのズレを経験する。成長と老化の過程は、ズレの修正の過程でもある。	同　上	同　上
6	身体（3）身体・生命―その再生産―	女性の再生産行為は自然秩序の一部としてとらえられがちであるが、社会性、文化性を帯びている。出産場面みてもその社会性は明らかである。さらに近年の急速な人口生殖技術の発展により、身体のみならず生命の社会性が高められている。そうした現状を考えていく。	嶋﨑尚子	同　上
7	メディア（1）電話	特定の個人と特定の個人を双方向的に結びつけるメディアをパーソナル・メディアと呼ぶ。パーソナル・メディアの代表といえるものが電話である。電話の導入の歴史と最近の携帯電話の急速な普及について触れながら、対面的なコミュニケーションと電話による電話によるコミュニケーションの相違について考える。	大久保孝治	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	メディア（2）テレビ	不特定多数の人々に向けて一方的な情報の伝達をおこなうメディアをマス・メディアと呼ぶ。その代表であるテレビは、現代の生活に不可欠なほどに普及している。テレビが何を伝え、何を伝えないかを知ることは、テレビの受け手であるわれわれにとり重要なことである。	大久保孝治	大久保孝治 嶋﨑尚子
9	メディア（3）空間移動のメディア	モノや人の移動手段である輸送・交通メディアは、20世紀をとおして急速に進歩した。空間移動のメディアは、物質の流通にとどまらず時間統一、国家語成立、認知世界の拡大をもたらす。一方ではマイカーというパーソナルなメディアは、移動における空間的閉鎖性を高める。両者の展開を考える。	嶋﨑尚子	同上
10	他者（1）「あなた」	他者関係の基本は2者間関係（ダイアド）にある。親子、夫婦、友人、恋人これらの2者間関係は、血縁、姻縁、友情、恋愛感情といった別個の縁によって形成され、その関係性も固有である。ここではこれらの関係のメカニズムの特徴について考察する。	同上	同上
11	他者（2）「彼・彼女」	他者との関係は直接的接触による場合でも、個人の生活や人生に与える影響に多少がある。深く関わる他者が「あなた」であるなら、部分的に関わる他者を「彼・彼女」と呼ぶことができる。接触者と関与者をキー概念に個人と他社との相互作用の質を考察する。	同上	同上
12	他者（3）「彼ら」	直接には接触しない他者、「名前のない他者」は社会規範の代理人としてわれわれ生活に関与している。「名前のない他者」の総質量は膨大であり、その重力によって社会空間は一定の構造を与えられる。「社会」とはそうした社会空間であり、近代社会は共同体と市場の二重構造から成立している。	大久保孝治	同上
13	時間（1）時計と手帳	時計と手帳は近代社会における時間意識の象徴である。近代社会は、時間に多大な価値を与えている。日常生活は、種々の時間をめぐる規範に従っている。また時間は人生の志向性の軸であり、未来志向性と現実志向性は人々の行動様式を規定する。時間志向性は「生き方」にほかならない。	同上	同上
14	時間（2）生活時間の構造	個人は資源として平等にもっている1日24時間という時間をどのような活動に配分しているのだろうか。生活時間研究は、1960年代以降、社会科学において活発に展開されている。ここでは研究の基本的な視点ならびに現代日本社会での個人の生活時間構造の特徴について考察する。	嶋﨑尚子	同上
15	時間（3）年齢	年齢は基本的な社会的カテゴリーである。年齢規範、年齢階梯制など年齢を軸に多くの社会制度が成立している。同時に年齢はライフコースの軸でもある。年齢を軸にしたライフコースは近代人の特徴といえる。こうした2次元から近代社会における年齢意識・年齢差別を考えていく。	同上	同上

＝生活文化史（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平井　聖（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

日本の生活文化は、中国大陸や朝鮮半島からの影響を受けながら築かれてきた。そして、この百年余は、欧米の文化を受け入れ続けている。そこで、日本の生活文化の基礎を築くのに重要な役割を果たした中国及び韓国の人々の生活をみながら、欧米の生活も併せ考えて、日本の住を中心とする生活文化とその特色について見直したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	住居を中心とした日本の生活文化の基本的な性格を、中国ならびに韓国の生活文化と比較しながら考察するこの生活文化史のねらいである。住生活をさまざまな行為に分解したそれぞれの項目の意味や視点などについて説明する。	平井　聖（昭和女子大学教授）	平井　聖（昭和女子大学教授）
2	ね　る－1	「ねる」という姿勢は、「すわる」姿勢と共に、住生活における基本的な姿勢である。また、眠るということは、起きていることと、生活時間を分ける重要な行為である。床に寝る、ベッドに寝るという2つの寝方、寝るための部屋などについて、歴史的経過を追う。	同　上	同　上
3	ね　る－2	一般的に地面に何かを敷いて寝る方式から、床やベットに寝る方式に移行してきた。寝床から固定した床（ゆか）を作って寝るようになった地域、地面に床と呼ぶベッドを置いて寝るようになった地域など、現状と発展の様子を見よう。	同　上	同　上
4	すわる－1	地面に直接座る、床に座る、椅子に腰掛けるの3つの姿勢は、昼間の生活にとって重要である。この3つの姿勢に関し、座る場所と場面、そのための座具などについて考えると共に、生活習慣と住居のつくりの関係についても歴史的に考察する。	同　上	同　上
5	すわる－2	韓国と日本では、座るためと寝るために、板敷が発生した。一方、中国では寝るため座るために、家具である牀（床）が生まれ、早くから椅子に腰掛ける生活方式へ発展した。韓国・日本でも近代化にともなって、椅子式の座り方が普及しつつある。	同　上	同　上
6	たべる－1	椅子に腰掛けて、テーブルを囲む食事風景にたいして、韓国と日本では床に座り食卓を囲む光景もある。歴史的に見ると、日本では膳を運ぶ食事の習慣もあった。このような食事形式の変化は、日本だけではない。食事形式の移り変わりと、その背景について考える。	同　上	同　上
7	たべる－2	食事の場は、台所と分離できない関係にある。日本では欧米の影響を受けて、両者を一体に造るダイニングキッチンが、敗戦後急速に擴まった。その背景に、当時の住宅事情や家族観があり、調理用機器の発達があった。食べる場所と作る場所の関係について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ゆあむ	日本では、ホテルで洋風バスと洋風の便器と洗面所がユニット化されている。一方、住宅では湯舟と洗い場のユニットで、便所、洗面所と洗濯機置き場が別につくられる。それぞれの国の入浴の習慣と浴室およびその周辺について考える。	平井　聖	平井　聖
9	もてなす－1	住宅を考えるとき、客を迎える作法・場所は重要な要素であった。玄関で客を迎える作法、座敷に客を迎える作法と、玄関、座敷の発生と変遷について、歴史的に考える。また、明治以降に生まれた洋式の応接間の役割についても考える。	同　上	同　上
10	もてなす－2	敗戦後の日本では、家庭で客をもてなす習慣が殆ど消滅してしまった。現在の中国および韓国で、客をもてなす場所と方法について聞き、日本との習慣の違い、それぞれの国の独自性について探る。そして、その成立の背景について考えよう。	同　上	同　上
11	くつろぐ－1	日本では、幕末までの暮らしと対照的に、明治維新以降は家族の暮らしが、クローズアップされるようになる。団欒と言う行為に対する意識が、住生活の中で次第に大きくなる。食卓を囲む食事とその後の団欒、そしてその場としての茶の間は、近代化の象徴である。	同　上	同　上
12	くつろぐ－2	近代化の波は、日本だけでなくおそかれ早かれ中国にも韓国にも押し寄せている。その中で、家庭生活にもっとも大きな変化をもたらしたのは、いずれの国でも家族が団欒するという行為であろう。中国、韓国および日本における、その実態を見よう。	同　上	同　上
13	たくむ	電気・ガスが家庭に導入されてから、家事の革命が始まる。同時に、自然に近い生活から人工の生活環境への道をたどりはじめる。この傾向は、第二次大戦後に加速の度を加える。中国、韓国、日本の事情を比較しながら、生活環境と生活文化について考える。	同　上	同　上
14	つたえる－1	中国・韓国・日本あるいはそれらの国を構成する多くの民族には、それぞれの伝統文化が存在する。生活環境の急速な変化の中で、伝承される生活文化と消滅した生活環境について検証し、生活文化によってつくり出された、家族を包む器である住居について考える。	同　上	同　上
15	つたえる－2	伝統文化による生活習慣だけでなく、近代化の中で獲得した新しい生活文化もある。それぞれの国あるいは民族によって事情は違うが、伝承され適が生活文化、新たに獲得した生活文化、これらを次の世代にどのように伝えていけばいいのであろうか。	同　上	同　上

＝生活構造の理論＝（R）

〔主任講師：清野きみ（北海道教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

人の日常生活活動を対象とした研究は、社会や人間理解の基礎領域であり、生活の維持活動を構造的に把える視点は欠かせない。これまでの生活研究遅延の背景をみながら、高齢化社会、情報化社会に生きる子供や高齢者を含めたすべての人びとの課題をとりあげ、生活構造の基本枠組と生活設計への理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活組織の構造	人間はひとりでは生きられず、生から死まで、さまざまな生活組織に所属する。そのうち基礎となる生活組織は家族・家庭である。家庭には消費の共同性と個別性があり、他の生活組織にはみられない家事活動がある。家事活動や余暇は、文化的活動表現でもあり、生活組織の構造要因となる。	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）
2	生活研究の系譜	生活研究には、消費経済学的手段、家政学的生活手段、生活保障や教育などの主体形成を直接とした手段などを学ぶ領域がある。現在では共生をテーマに、社会と生活を結ぶ領域として、それぞれの基礎科学に立脚しながら、生活共同体である家庭・生活を研究する気運が高まっている。	同上	同上
3	家族と生活資料の関係構造	現在の家族は、私的消費構造＝世帯の基本枠組をもち、家庭という集団の場に属する。所属する家族メンバーの内面からみると、ときに養育環境になったり、安定ややすらぎの場になったりする。家庭は、主体形成の場であると共に、家族の組織過程をふくむ集団である。	同上	同上
4	家族と生活資料の関係構造図	私的消費構造と家族集団の組織過程との両面をもつ生活を、家族と生活資料の関係構造をあらわす構成図によって説明する。生活資料と道具、貨幣収入、科学・技術・情報の三点を結ぶ三角図によって、生活活動を表現する生活場面を、生活時間や家事活動、家計構造とする。	同上	同上
5	子どもにとっての生活構造	人間は生活しつつ発達し、発達しつつ生活する。生活主体としての人間の発達は欲求・動機の系と技術・操作の系の組合せによる主導的活動の発展としてみることができる。家庭を中心とした子どもの主体形成は再生産活動を通した大人との関係の中で展開される。	金田利子（静岡大学教授）	清野きみ 金田利子（静岡大学教授）
6	子育て環境と生活構造	家庭の重要な機能である次世代の育成（子育て）は、一人家庭だけでは全うできない。子育てを支える地域のコミュニケーションづくり、社会資源のネットワークづくりは、家庭支援となり、地域を生活主体としての老若男女の発達環境にしていく道につながる。	同上	同上
7	生活の標準化	国民経済の動向と結びついた家計構造をとりあげる。家計構造と社会の経済構造は、生活様式、消費志向と関連するが、とくに、主要耐久消費財の標準化の様相から、標準の形成、標準形成の経路、なされ方、標準達成度を通じ生起する消費生活問題のメカニズムを解明する。	馬場康彦（日本福祉大学助教授）	清野きみ 馬場康彦（日本福祉大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	高齢者にとっての生活の構造	日本の家計における貯蓄率の高さの要因のひとつに、老後の生活不安があげられることが多い。その不安の内容は、健康な状態で老後生活費がいくら必要なのか、さらに家族ないし自分が何らかの障害にかかり介護の必要性が生じた場合の費用はいくらか、介護期をめぐって講義する。	馬場康彦	清野きみ 馬場康彦
9	高齢者の生活設計	高齢社会の対応には、高齢者自身の心身の健康維持のために必要な生活の場が求められる。前期及び後期高齢期の生活構造の特性をみながら、もっともよいあり方、生き方の問題をとりあげる。合わせて現在の子世代にあたる人びとの何老期への対応を考える。	清野きみ 金田利子 馬場康彦	清野きみ 金田利子 馬場康彦
10	食生活の構造	食生活は食材や調理加工手段の供給のあり方、食生活の主体により構成される。それぞれの要素は経済社会構造の発展に照応して大きく変貌し、その結果、食生活は不断に変化している。近年の食生活の激変を素材として食生活構造を動態的に把握する。	中嶋信(徳島大学教授)	清野きみ 中嶋信(徳島大学教授)
11	日本の食生活問題	生活構造の評価は俗流に陥り易いが、慎重に分析すべきである。現代の食生活を検討すると、消費構造の階層性やその内に潜む「新しい貧困」を確認できる。日本の食生活問題の諸相を分析し、問題解決の方向を明らかにする。	同上	清野きみ 中嶋信
12	生活構造のひろがりと余暇観	余暇は個々人の価値的選択による生活時間の領域であり主体の生涯発達の観点から重要性をもつが、労働・生活水準・家族関係、生育環境などに規定され生活構造において必須の部分とはなっていない。生活構造のひろがりのなかで余暇の可能性と条件を考察する。	佐藤一子(東京大学教授)	佐藤一子(東京大学教授)
13	余暇と生涯学習	余暇は休息の時間であるとともに、学習・趣味・文化活動を通じての精神的・身体的充足の時間である。さらに家族・友人・地域社会とのより豊かな関係形成の条件でもある。余暇を通じての生涯発達は文化的生活のために不可欠な現代的人権であることをのべる。	同上	同上
14	生涯発達と生活設計	個の心理的健康を実現するには、所属する生活組織や、近隣地域の健康維持活動と深い関連がある。生活の質の向上と福祉に連ながる生活設計とは何かを考え、質の向上を測るものさしや基準をとりあげる。	清野きみ	清野きみ
15	地球にやさしい生活設計	成長至上主義の社会の仕組みを克服する人類史的な課題に私達は直面している。それは資源浪費型の生活構造についても当てはまる。持続可能な社会を実現するために、21世紀の生活構造はいかにあるべきか。消費構造や生活文化の革新の方向を確認する。	清野きみ 佐藤一子 中嶋信	清野きみ 佐藤一子 中嶋信

＝世界の教育（'９８）＝（ＴＶ）

（主任講師：宮澤康人（放送大学教授））
（主任講師：小林雅之（放送大学助教授））

全体のねらい

現代世界における教育問題の提示と分析を通して初心者の教育研究入門に資する。代表的なトピックを選び、それを典型的に、鮮明にあらわしている国をとりあげる。西洋の近代化がひきおこした世界のシステム化に対応する地球規模での学校化社会とそれの北と南の対照を軸にすえ、現代は異なった民族や文化の共存、人類と自然との共存が教育の課題となりつつある時代であることを示そうとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代世界と教育	全体への導入部として、「近代世界システム」「学校化社会」「南北問題」などのキーワードを説明し、つづいて「教育問題」というときの教育の定義の仕方の諸相にふれ、さらに複雑多様な世界の教育問題を整理するための認識枠組としての類型化とが対比といった方法にふれる。	宮澤康人（放送大学教授）	宮澤康人（放送大学教授）
2	教育制度の概観	・世界各国の教育の普及水準を明らかにし、先進国、中進国、途上国の類型に分かれることを示す。 ・教育システムの基本類型として、単線型と複線型を示し、その具体的な国の例を取り上げ説明する。 ・各国の教育システムが共通にかかえている問題点と教育改革の焦点を説明する。	小林雅之（放送大学助教授）	小林雅之（放送大学助教授）
3	先進国における学校化社会と学歴	・先進国における学歴社会の現状を、ヨーロッパとアメリカ、日本を比較して検討する。 ・学歴社会の問題点を明らかにする。 ・学歴社会の成立の社会的要因を説明する。 ・学歴社会の今後の方向や解決への努力について具体的な事例をあげて説明する。	同上	同上
4	発展途上国における識字教育－ラテンアメリカの場合－	識字は、個人の尊厳、権利を確立する上でも、また、社会の発展のためにも、第一級の重要性を持つ事柄とされている。発展途上国の学校教育制度は、教育拡大に貢献したが同時に、そこから脱落し、あるいは包接されない多数の人々をも産み出している。これらの人々に対し、様々な国や地域で、多様な識字教育が実践されている。本論では、識字教育の過去の歩みと現在の状況とをラテンアメリカを中心として解説する。	江原裕美（帝京大学助教授）	江原裕美（帝京大学助教授）
5	先進国における職業教育	・先進国における教育と職業の結びつきについて、例をあげて説明する。 ・先進国の職業教育の様々な独自の取り組みを、イギリス、スウェーデンなど具体的な事例をもとに検討する。 ・職業教育制度改革の例としてスウェーデンの総合制中等学校の例をあげ説明する。	小林雅之（放送大学助教授）	小林雅之（放送大学助教授）
6	発展途上国における職業教育－ラテンアメリカの場合－	職業教育は発展途上国の「開発」を推進する上で、常に重要視されてきた。特に1960年代以降、開発のためのマンパワー供給が教育に期待されたことから、中等教育段階での職業教育は高等教育と共に、顕著な伸びを見せた。しかし、中等学校での職業教育の効果に対する疑問や債務危機を経ての時代の変化などが、職業教育の今後の在り方の検討を迫っている。ラテンアメリカを中心に途上国の職業教育について考える。	江原裕美	江原裕美

[回]	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	発展途上国における国民統合と学校教育 －多民族国家マレーシアを中心として－	アジアには植民地支配の遺産を引きずり国家形成に苦悩している国々が少なくない。ここでは多民族社会の典型とされるマレーシア他の東南アジア諸国を事例として取り上げ、国民統合と学校教育の問題について考察する。（1）国家形成と教育上の優遇措置（2）カリキュラムと試験制度にみる国民統合の問題などについて考察する。	西野節男（名古屋大学助教授）	西野節男（名古屋大学助教授）
8	先進国における国民統合と学校教育 －欧米諸国の場合－	征服・植民地化等、近代社会の拡大によって生じた少数民族問題の諸相を、「南」「北」の対比を意識しつつ、主に欧米諸国を素材として、多民族多文化社会における国民統合と教育の問題として検討する。	中村雅子（桜美林大学助教授）	中村雅子（桜美林大学助教授）
9	逸脱行動と学校教育 －薬物教育を中心に－	本講義は、欧米諸国とわが国におれる青少年の問題行動の傾向とその社会的背景を比較的に検討し、さらに近年青少年の間にあって最も深刻かつ重大な問題となりつつある薬物乱用の問題をとりあげ、病める社会の病理を明らかにするとともに、学校教育における薬物乱用防止教育の最先端を探る。	二宮皓（広島大学教授）	二宮皓（広島大学教授）
10	価値の教育と宗教 －先進国の場合－	本講義は、イギリス、ドイツなど欧米諸国における価値の教育、とりわけ公教育における宗教の取り扱いと宗教教育の内容について検討する。またアメリカ合衆国における事例を中心として、宗教と公教育の関わりを紹介しながら、価値に関わる教育についての論争を検討する。	同上	同上
11	価値の教育と宗教 －東南アジアのイスラーム教育を中心に－	世界的なイスラーム復興運動の動きはあらためて宗教と教育、そして価値の教育の問題に関心を呼びさました。東南アジアのイスラーム教育に主たる焦点をあてて（1）インドネシアの伝統的な宗教教育と近代学校制度（2）マレーシアにおけるイスラーム行政と教育の特質（3）宗教教育と道徳教育の位置と関連（4）教育のイスラーム化と価値の教育	西野節男	西野節男
12	国民意識と国際理解の教育 －アメリカ合衆国とＥＵの場合－	多民族多文化社会の多様性にこたえようとする様々な教育プログラムを素材に、アイデンティティーと国境という問題に注目し、アメリカ合衆国の場合とＥＵ統合への動きを対比させて検討する。	中村雅子	中村雅子
13	国民意識と国際理解の教育 －東南アジア地域の場合－	東南アジア地域は文化的・宗教的な多様性に富んでいる。国際理解の教育は国内の多民族性とその相互理解の延長線上に位置付けられると言ってもよい。（1）国民教育制度における民族・宗教・文化の位置づけと教育内容に見る多民族の扱いなど国内的な次元と（2）留学、教育協力など国際的な次元と交錯させて国際理解の教育について考察する。	西野節男	西野節男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	留学生交流と教育の国際化	本講義は、諸外国の留学生交流政策を概観するとともに、わが国における留学生交流の政策と実態を概説し、さらに日本留学の特質と問題を検討することでもって、わが国の教育（大学）の国際化の課題と方向を探る。	二宮　皓	二宮　皓
15	地球環境と学校教育	終章として、地球上の人類全体と自然環境との共存の方途を見出すことが不可欠な課題となった現代において、教育に何が期待されているかを、以下の項目の下に考える。自然と人類の対立、環境倫理学の問題提起、環境教育の動向とその北と南、環境教育をめぐる争点。	宮澤康人	宮澤康人

＝現代社会と教育＝（ＴＶ）

（主任講師：新井郁男（上越教育大学教授）
主任講師：岡崎友典（放送大学助教授））

全体のねらい

現代社会の現実像あるいは理想像をさまざまな面からとらえ－たとえば競争社会、共生社会－、それを解決したりあるいは実現するには教育はどうあるべきかなどについて考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	変動社会の教育	現代の日本社会を脱工業社会から学習社会までの１３の社会類型に区分し、それが教育とどの部分でどうかかわっているかということを二人の担当講師が対談の形であきらかにする。	新井郁男（上越教育大学教授） 岡崎友典（放送大学助教授）	新井郁男（上越教育大学教授） 岡崎友典（放送大学助教授）
2	脱工業社会と教育	社会は農業社会から工業社会への発展過程において、物質的な豊かさを手にいれたが、同時に精神的な豊かさを失った。社会発展のこのような光と影は教育にも反映している。そのような姿を考察し、それを克服するにはどうしたら良いかを考える。	新井郁男	新井郁男
3	高齢社会と教育	高齢社会の教育課題を、たんに高齢者に対する課題としてだけではなく、高齢期においても生き甲斐を持てるようになるにはどうしたらよいかという観点から、青少年期をふくめた生涯教育・生涯学習の問題としてとらえる。	同上	同上
4	国際化社会と教育	国際化社会における教育課題を、異文化理解、異文化間コミュニケーションとしてとらえ、日本人のその面における能力が低いのはなぜか、それを高めるにはどのようにしたらよいかということを考える。	同上	同上
5	共生社会と教育	共生の問題を、特定の集団間のそれ～たとえば男性と女性との共生～としてだけでなく、自然と人間との共生をも含め、多様かつ多元的な観点からとらえ、そのような共生社会を実現するにはどうしたらよいかを、教育問題として考える。	同上	同上
6	余暇社会と教育	余暇の社会的意義を労働との対比において検討し、教育のありかたを、余暇の観点から見ても転換すべきであることを考える。	同上	同上
7	地域社会と教育～学校の再編～	新しい地域を形成するには教育はどのように変わらなくてはならないかということを、地域の持つ教育力に目を向けて考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	地域社会と教育 ～地域の再編～	大都市の子どもの生活実態に見合った学校教育、社会教育のありかたについて、東京都の中心部の地域再開発の事例を通して考察する。	岡崎友典	岡崎友典
9	移動社会と教育	流動性の高い社会を「移動社会」と規定し、階層移動、職業／人材移動、地域／居住地移動などの側面からとらえ、教育とどのように関係を持ってきたかということを、明治以降に発展した北海道内の事例を用いて明らかにする。	同上	同上
10	情報社会と教育	情報の生産と消費が人々の生活を規定する社会への移行にともない、教育内容に変化がみられる。とくに義務教育段階の学校で、情報の伝達、処理、検索、選択の教育をどのようにおこなうかということについて考察する。	同上	同上
11	管理社会と教育	高度化、複雑化、多様化する社会では「管理」という社会的な機能は不可欠だが、「教育的管理」はどのような形態をとるべきか。事例をつうじて明らかにする。	同上	同上
12	競争社会と教育	立身出世のために教育が有効な手段として機能する。試験、選抜、偏差値などの教育問題が社会問題化している現実を明らかにし、学校教育の現代的な課題について考察する。	同上	同上
13	福祉社会と教育	福祉を、高齢者、障害者、児童の三領域でとらえ、これらが具体的に展開する地域社会に即して、地域福祉と教育の視点から社会教育上の課題を考察する。	同上	同上
14	高学歴社会と教育	競争社会と、高学歴社会はどのように関係しているか。形式的な教育ではなく、実力をもつ人材を養成する教育機関が設立されるなかで、学歴がはたす役割について明らかにする。	岡崎友典 新井郁男	岡崎友典 新井郁男
15	学習社会と教育	変動社会は生涯にわたり学習を必要とする社会である。日常の生活に生かされる学習を保障するために、どのような教育・学習内容が用意される必要があるのか。生涯学習フェスティバルが開催される地方都市の事例を通じて、教育制度上の課題を明らかにする。	同上	同上

＝教　育　の　心　理＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉田章宏（川村学園女子大学教授）〕

全体のねらい

「教育」という「生きられた世界の出会い」における「人間の心理」を、「授業」を典型とする多様な具体的事例に即して、多視点的に解明する。この解明を通して、「教育の心理」について我々ひとりひとりが持っている「前理解」がより豊かな「理解」となり、我々の「生きられた世界」がより豊かとなること、これが願いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育は共育	「教育」は「共生」の一環としての「共育＝共に育つこと」として理解される。新たな「世界」へと、先生（先学／先覚）は導き、生徒（学徒／覚徒）は導かれ、共に育つのが「教育＝共育」である。一典型例に即して「教育の心理」の意味と構造の理解を共に創る。	吉田章宏（川村学園女子大学教授）	吉田章宏（川村学園女子大学教授）
2	授業と受業	「授業」は「教育」のひとつの典型である。授業は「業」の授受の場として理解される。「業」の内的地平と外的地平を解明し、人と人（＝我と我）の間の「業」の授受により共に育つ人々（＝我々）の「心理」を解明する。授業の教育としての典型性を明示化する。	同　上	同　上
3	心理を学問	「こころ」は未だに人類にとって謎であり続けている。この謎と苦闘してきた多種多様な「心理学」に学びつつも、初心に帰り、「心理を学問」することを我々の願いとして復活し、その願いを共有し、「心＝心理」を「学問する」ことの意味と構造を共に考える。	同　上	同　上
4	人間我世界	人間を「もの」「けもの」「ヒト」「人」と同一化する理解に発し、それらと差異化する理解へと共に向かう。ひとりひとりの人間は、ひとりひとりの「我」であり、ひとつの「世界」「歴史」「物語」である。教育はそれらの間の「出会い」として理解される。	同　上	同　上
5	多元的現実	人間の「生きられた現実」は多元的である。多元的現実を生きる人間と人間の間の「出会い」としての教育から、さらに多元的現実が生まれる。生きられた多元的現実は、人間の心理の「‥‥と化する」受動的／能動的な過程／活動を通じ一層多元的かつ統一的となる。	同　上	同　上
6	真偽と信疑	「至高の現実」である日常的世界の生きられた現実は真でも偽でもありうる。そして、自他の世界の真偽を、我々は信じたり疑ったりする。教育＝共育において、それぞれの生きる世界の真あるいは偽と、それをあるいは信じあるいは疑うことの意味と構造を考える。	同　上	同　上
7	無利私利他利化	教育＝共育がその一環である共生において、人間はそれぞれの生における利を求めている。では、我の利、「私利」と化する共育、他の利、「他利」と化する共育、そして、利を超え、「無利」と化する共育とは何か。それぞれの姿を探索し、解明し、共に考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自由化と拘束化	「‥‥と化する」心理の過程／活動は、我の生きられた世界の物事を、我にとって自由と化したり拘束と化したりする。日常生活世界からの離脱あるいは拘束、さらに、可能性／現実性／必然性の構造化、それを先生／先学／先覚に学ぶことの意味と構造を考える。	吉田章宏	吉田章宏
9	目的化と手段化	人間の心の働きは、我の生きられた世界の特定の物事を「目的と化する」／「手段と化する」。目的化と手段化は互いに循環し環を成す。我はその環に「入り」そこから「脱する」。教育＝共育における、目的化／脱目的化と手段化／脱手段化の意味と構造を探る。	同上	同上
10	主題化と自明化	総てを同時にということは不可能な人間の心の働きは、必然的に、生きられた世界における特定の物事の、主題化と脱主題化／自明化と脱自明化を繰り返し、循環しつつ展開する。それは、中心化／脱中心化の循環とも言いうる。教育におけるその意味と構造を探る。	同上	同上
11	同一化と差異化	「経験の空間」と「期待の地平」に条件づけられている人間の「生きられた世界」に現れる総ての物事は、互いに、同一化と差異化の働きを受ける。それにより、物事の内外間にもたらされる、構造化、脱構造化と混沌化の循環の、教育における意味と構造を探る。	同上	同上
12	近接化と類似化	我の世界に現れる物事は、近接化と類似化によってさらに豊かと「化する」。近接化は、時間的あるいは空間的に現実化し、類似化は、モデル化／アナロジー化／比喩化などとして多様化する。多下位世界にまたがるこれら心の働きの、教育における意味と構造を探る。	同上	同上
13	具象化と抽象化	生きられる世界で、物事は、具象化と抽象化によって、豊かに多様化されるとともに統一化もされる。それは、可覚化と能覚化／可視化と能視化としても、時間化と空間化としても、現れる。教育による、世界の多様化と統一化における、両者の意味と構造を探る。	同上	同上
14	現実化と虚構化	日常生活世界の「至高の現実」から派生した多様な下位世界の内の重要な一つに、虚構の世界がある。現実を虚構化し、虚構を現実化する心の働きの交錯は、生きられた世界の豊饒化に必須である。変化の中に不変を見る想像自由変更など、その意味と構造を探る。	同上	同上
15	我々世界の交響	「教育＝共育」による、我の世界と我の世界の「出会い」を経て、ひとりひとりの「我の世界」も、「我々の世界」も、さらに多様化し統一化する。多様化と統一化／部分化と全体化／構造化と混沌化／深層化／分裂化と豊饒化を経て、我々世界の交響が生まれる。	同上	同上

＝教　育　心　理　学＝（Ｒ）

〔主任講師：永野重史(放送大学教授)〕

全体のねらい

「教える」とはどういうことなのか、「学ぶ」とはどういうことなのか、という問題を心理学的に解きほぐして、問題の考え方の歴史や、理論のよりどころとなっている実証的な研究との関係を平易に説明することによって、術語の丸暗記で済ますことなく、育児や学校教育や社会教育の様々な問題を批判的に考えられる力を養う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	教育心理学とは何か	学校教育の心理学としての教育心理学の意義と歴史。常識的教育論と教育心理学とはどのように違うか。教育心理学のどういうところが信頼出来るのか。教育心理学は教育実践の役に立つのか。生涯学習時代における教育心理学の新しい課題は何か。	永野重史（放送大学教授）	永野重史（放送大学教授）
2	教育を考えるときの二つの立場	精神測定論的立場（客観的に測定できる諸能力を形成することが教育だと考える立場）と、発達論的立場（子供の発達を援助することが教育だと考える立場）の違い。行動主義的学習心理学と発達心理学の役割。行動目標の書き表し方における二つの立場の違い。	同上	同上
3	学習の心理学（1）	行動主義の学習心理学。外部から観察出来ることを研究するのが科学だと考えるところから生まれた行動主義。ねずみの訓練から見つかった学習原理。ソーンダイクの効果の法則とは何か。応用としてのプログラム学習や行動修正の技法とその問題点。	同上	同上
4	学習の心理学（2）	行動の変容が学習なのではなくて、ものの見方の変容が学習なのだとみる認知主義の学習心理学。歴史；ゲシュタルト心理学と構成主義の認識観。行動主義の学習理論と認知主義の学習理論における「誤り」の見方の違い。学習において「誤り」は無価値か。	同上	同上
5	発達の心理学(1)	発達心理学の歴史。年齢による発達の記述と学習因論・成熟要因論。どちらも子どもの主体性を無視。子どもの主体性に注目するピアジェの発達段階論の出現。ピアジェ理論の特徴。発達は普遍的な現象か。教育を考えるのに必要な文化と発達との関係。	田島信元（東京外国語大学教授）	田島信元（東京外国語大学教授）
6	発達の心理学(2)	発達における文化的、環境的要因を重視するヴィゴツキーとバフチンの発達理論。「発達の最近接領域という概念の教育的意味」（援助があるときの能力と独力でするときの能力）。大人との社会的交渉と社会的言語の役割。生涯学習と生涯発達の可能性。	同上	同上
7	動機づけの心理学	学習の意欲とは何か。動機づけの機能。快楽主義の思想。ホメオスタシスによる説明から知的要因の重視へ。外発的動機づけと内発的動機づけの違い。達成動機の測定方法と理論。期待一価値理論。ヒューマニスティックな心理学の立場。	永野重史	永野重史

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	能力観と学習意欲	学習者が、実体としての能力を考えているか発達する能力を考えているかの違いと学習意欲。挫折感、無力感などとの関係。自分が出来事の原因であるという見方と意欲。神経症的な生き方の問題点。「やる気を育てる教室」の実践。	永野重史	永野重史
9	人間観と教育(1)	人間は理性的動物であるか。人間は理性的動物であるという人間観によって学習者の能動性や自発性はかえって軽視されて、教師は知識や技能を教え込もうとするようになる。基礎的学習内容とは何か。学問の入門的知識から順に系統的に教えることは可能か。	同上	同上
10	人間観と教育(2)	人間の理性はきわめて限られているという人間観に関する証拠の数々。人工知能研究でわかったと人間の理性の限界。個人の理性か集団の理性か;限られた理性という人間観をとることによって、教えるということについての考え方はどう変わるか。	同上	同上
11	教育評価とは何か	学習者の成績を決めることだけが教育評価なのではない。教育をめぐる情報の収集と利用が教育評価である。指導の評価やカリキュラムの評価も必要。状況で変わる能力を評価できるか。いわゆる偏差値をめぐる諸問題。	同上	同上
12	記憶の心理学と教育	「単なる記憶」などと言ってもよいのか。知的活動の一側面としての記憶。思考と記憶とをはっきりと区別することがむずかしい。「記憶力」は、学習のための活動、学習者の知識態度、教材の構造と表現、評価のための課題などの諸条件で変わる(四面体モデル)。	同上	同上
13	知能と創造性の心理学	ビネーとゴールトンの知能検査、その教育への影響。知能指数で学力が予測できるか。風変わりな考えをすることを創造性とみた検査の欠点。多面的にとらえられるようになった知能。パーソナリティーや思考のスタイルとしてとらえられた創造性。	同上	同上
14	道徳性の心理学と教育	子どもはどのような点で道徳的か。道徳性の発達は多面的にみる必要がある。知的側面を重視するピアジェとコールバーグの道徳性発達論。道徳性の文化比較(性差)。道徳性の発達をうながす教育。	山岸明子(順天堂医療短期大学教授)	山岸明子(順天堂医療短期大学教授)
15	様々な学習指導の心理学的意味づけ	機械的学習と意味のある学習。発見学習と受容学習。意味のある受容学習における知識の再構成。能力心理学の思想と知識形成論。形式陶冶対実質陶冶論争と心理学的研究。学習の転移はどの程度まで可能か。	永野重史	永野重史

＝心　理　学　入　門＝（ＴＶ）

〔主任講師：相場　覺（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間の心理は奥深く計り知れないものがある。しかし心理学はその解明に挑戦し多くの事実を見いだした。それは心理学者たちが常識や言い伝えに満足しないで独自の方法を考え出して人間の心理を多角的にとらえる努力をしたからである。それらの成果を展望しよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	心理学とは	心理学は19世紀末に実験心理学として歩みはじめたが、それからさまざまな変遷を経て現在のような、広範な領域を持つもっとも先進的な学問の一つとなった。その軌跡を辿る。	相場　覺（放送大学教授）	相場　覺（放送大学教授）
2	感覚過程 ～その生理と心理～	われわれは外界のみならず、われわれの内部においてもさまざまな刺激に接している。それらの種類とその受容の仕方、そらにはその基礎をなす生理・心理的過程について概観する。	同　上	同　上
3	知　覚 ～行動のための指針～	感覚により得られた情報をよりひろい範囲の時間と空間にわたって統合し、行動に役立つようにするのが知覚の働きである。その知覚のいくつかの側面を展望する。	同　上	同　上
4	情報の処理 ～環境情報の認知と利用～	環境の情報の入力と適応的な行動の出力の間の心的過程の仕組み、つまり人間の情報処理の特徴を、感覚情報の入力、入力情報の処理、処理情報の利用の段階に大別し、日常的な事例を援用しながら解説する。	松田隆夫（立命館大学教授）	松田隆夫（立命館大学教授）
5	記　憶 ～人の中の情報と意識～	「記憶」は極めて身近なものだが、様々な側面があり多くの未解決の問題を持つ現象でもある。本講義では特に、自分の意識に上る記憶と上がらない記憶とをとりあげ、両者の相違と関係について、これまでの実験心理学および認知科学の成果を元に考えていきたい。	原田悦子（法政大学助教授）	原田悦子（法政大学助教授）
6	言　語 ～ことばと心のメカニズム～	人間の言語使用を支えている心的メカニズムを対象とする。高速で自律的な音韻処理のためのメカニズム、文法処理のための言語知識とその習得、物語理解を支える常識的知識言語による芸術表現の心理基盤、の各トピックについて講義をおこなう。	往住彰文（東京工業大学助教授）	往住彰文（東京工業大学助教授）
7	思　考 ～考え理解することのしくみ～	人間における推論、理解のメカニズムを対象とする。帰納、演繹などの推論形式と人間の日常推論との異なり、因果推論（帰属推論）の特徴とそれを支える常識的知識、アナロジーやメタファに基づく推論・理解の特徴、の各トピックについて抗議をおこなう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	学習 ～経験が行動を変える～	我々は、人生経験を積み重ねることにより、自らの行動を大きく変化させてゆく。ここでは、そのような行動の変化を学習と呼び、その基本的なしくみについて紹介する。加えて、複雑な問題を解く場合などにみられるより高度な学習のしくみについても解説する。	高橋雅治 (北海道大学助手)	高橋雅治 (北海道大学助手)
9	行動 ～生まれながらの適応のしくみ～	「ロング・ショットでヒトをみる」というのが比較心理学の立場である。この分野の課題を紹介しながら、①行動と遺伝子との関係、②個体史初期の適応、③衝動の様相を取り上げて、環境への行動的対処にみられるヒトの独自性を明らかにする。	辻　敬一郎 (名古屋大学教授)	辻　敬一郎 (名古屋大学教授)
10	発達 ～発達に及ぼす文化の影響～	生物体である人間は、生誕以来、囲りの社会文化的環境との相互作用を通して成長・発達し、個人差・文化差を広げていくが、ここでは、そのしくみを理解するとともに一生涯を通じた発達の年齢差・個人差・地域差・文化差をどう捉えればよいかを考えてみる。	田島信元 (東京外国語大学教授)	田島信元 (東京外国語大学教授)
11	感情・情動 ～機制と臨床～	感情、情動、情緒などとよぶ心の働きは自分の中に生じる喜び、悲しみ、恐れ、怒りなどの主観的な経験である。更に感情は内分泌腺や内蔵反応による生理的変化も示す。このような感情に対する感情反応を測定する、また行動異常のメカニズムを追求する。	浜　治世 (同志社大学教授)	浜　治世 (同志社大学教授) 内山伊知郎 (同志社大学助教授)
12	人格 ～性格の形成と理論～	人格・性格が、遺伝と環境によってどのように形成されていくかをまず概観する。次いで人格・性格という、複雑で、人間性そのものとでもいうべき事象を理解するための、現今の様々な理論について学び、人格・性格を総合的にとらえる道を学ぶ。	水島恵一 (文教大学長)	水島恵一 (文教大学長)
13	心理臨床 ～心の診断と治療～	神経症、非行、その他の心理的障害や児童の行動問題などの理解、その診断、治療、予防などを課題とする。とくに不登校、神経症などの具体例をとりあげ、その心理の理解（心理テストの利用を含む）、カウンセリングその他による治療を学ぶ。	同　上	同　上
14	社会心理学 ～社会と心のダイナミックな関係～	社会心理学には、社会環境の中で生きている人間の認知や行動などと研究する心理学としての側面と、そのような人間が相互に影響を与えあうことによって生まれるマクロな現象を分析する社会科学としての側面があるが、この両面の総合的な理解をはかりたい。	山岸俊男 (北海道大学教授)	山岸俊男 (北海道大学教授)
15	文化と行動 ～世界のなかの私達～	文化は私達の行動にどのような影響を与えるのか。異なった文化に属する人々の間の意志の伝達と交渉に文化はどのような影響を与えるのか。文化と行動について研究することの意義は何か。異文化の人とうまく付き合う方法は何か、などの問題について概説する。	マーク H. B. ラドフォード (インターナショナルサーベイリサーチコーポレーション アジア太平洋地域支配人) 相場　覺	

＝心理学史（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大山　正（元日本大学教授）〕
〔主任講師：上村保子（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現在の心理学の歴史的背景を辿りながら、心理学の主要問題を考察する。心理学の歴史的変遷を忠実に追うことよりも、現在の心理学の適切な理解を歴史的展望から得ることを重視する。心理学史を通して知る心理学入門の性格をもたせたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学史の展望	心理学史を大まかに概観するとともに、その間に議論の対象となってきた主要問題、とくに研究の対象、方法、立場の変遷について述べている。つぎに、ギリシャ時代より近世に至る心理学的思想について概観する。	大山　正（元日本大学教授） 末永後郎（日本大学講師）	大山　正（元日本大学教授） 末永後郎（日本大学講師）
2	連合主義	連合主義は、観念と観念、感覚と観念などの間の結びつきを、多くの心理現象の基礎と考える、心理学の理論的立場である。その17世紀から19世紀に至る発展を述べ、ついで連合主義がその後の心理学にどのような影響を及ぼしたかを論じる。	大山　正 末永後郎	上村保子（千葉大学教授） 一ノ瀬正樹（東京大学助教授）
3	感覚・知覚研究	17世紀から19世紀に至る色覚研究、空間知覚の研究の発展史と、その集大成であるヘルムホルツの研究と学説を、それらが心理学の発展に及ぼした影響について述べる。	大山　正	大山　正
4	精神物理学	フェヒナーの精神物理学の構想とその成果について述べ、その後の心理学への影響について論じる。	同　上	同　上
5	心理学の独立	心理学が独立の科学と認められる過程を、ヴントを中心に述べるとともに、ヴントの学説と彼がその後の心理学の発展に与えた影響について論じる。	同　上	同　上
6	19世紀末の心理学	19世紀末のヴント学派以外の動向、すなわちエビングハウスの記憶研究、キュルペらの思考研究を中心に、ヨーロッパにおける心理学の状況を述べるとともに、アメリカにおけるジェームズ、ティチェナー、ホールらの活動を展望する。	大山　正	上村保子 梅本堯夫（京都大学名誉教授）
7	比較心理学	19世紀末の比較心理学の夜明け（ロマーニズ、モルガン）から古典的比較行動学（ローレンツ、ティンバーゲン、フリッシュ）を経て、現代の動物行動学、比較認知科学にいたる道筋をたどる。	長谷川寿一（東京大学助教授）	長谷川寿一（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	個人差の研究	19世紀に傑出した人物を研究したゴールトン、20世紀初めに知能検査を考案したビネ、それにギリシャ時代より関心がもたれていた性格の研究を取り上げる。	詫摩武俊(東京国際大学教授)	詫摩武俊(東京国際大学教授)
9	精神分析学	精神分析学は行動の動因として無意識を重視し、防衛機制や自我の構造について独自の理論を展開し、また心の深層の研究法として夢の分析を用い、これらを通して現代の心理学の発展に大きな影響を与える。フロイト、ユング、アドラー、新フロイト派を取り上げる。	詫摩武俊 織田尚生(東洋英和女学院大学教授)	詫摩武俊 織田尚生(東洋英和女学院大学教授)
10	ゲシュタルト心理学	連合主義からヴントの構成主義に受け継がれた要素主義の心理学を否定したゲシュタルト心理学について、その中心となったウェルトハイマー、ケーラーらの研究成果と主張を述べるとともに、その後の心理学への影響にも言及する。	大山正	上村保子 鷲見成正(日本女子大学教授)
11	行動主義	1913年にワトソンによって宣言され、その後の心理学に大きな影響を与えた行動主義とはどのような主張か。行動主義の主旨にそった行動研究の例として、パブロフの条件反射の実験と、ソーンダイクの試行錯誤実験などを中心に講ずる。	今田寛(関西学院大学教授)	今田寛(関西学院大学教授)
12	新行動主義	やや極端に過ぎたワトソンの行動主義が、1930年代になって科学論の変化にともなってより穏やかな新行動主義の主張に移行する。その主張はどのうよなものか、その具現者としてのハル、トールマン、スキナーなどの行動理論について講ずる。	同上	同上
13	認知心理学	現代の認知心理学は極めて学際的である。その源流を心理学、哲学、言語学、情報科学、神経科学にたずねる。また、1950年代後半に起こったいわゆる認知革命についてブロードベント、ミラー、サイモンなどの研究を通して概観し、現代に至る道筋を明らかにする。	大山正 上村保子 御領謙(千葉大学教授)	上村保子 御領謙(千葉大学教授)
14	発達心理学	発達研究の源流から今日に至る発達心理学の歩みを辿る。主な内容：人間の成長・発達・エイジングに対する関心、18～19世紀の発達論、発達心理学の始まりと展開、1950年代からの状況、今日の発達心理学。	小嶋秀夫(名古屋大学教授)	小嶋秀夫(名古屋大学教授)
15	社会心理学	1908年はじめて社会心理学と名乗る2冊の書物が刊行された。しかし、社会心理学の問題はその時はじめて発見されたわけではない。さまざまな関心に基づく多様な研究によって今日の社会心理学研究の領域が形作られてきた。その問題史的展開を概観する。	永田良昭(学習院大学教授)	永田良昭(学習院大学教授)

＝ フロンティア人間科学（'９８） ＝ （ＴＶ）

（主任講師：中島義明（大阪大学教授）
主任講師：太田裕彦（放送大学助教授））

全体のねらい

人間は文化や社会の中で学び、悩み、遊び、成長する極めて多面的な特徴を持つ存在である。このような人間の全体像を捉えるには、多視点からの総合的な理解が必要である。本科目では、現代社会において人間が直面する諸問題をテーマとして、人間科学のさまざまな知のフロンティアを紹介しながら、人間を立体的に理解することをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間科学とは何か	社会・文化・パーソナリティを中核に広範な周辺諸科学との知のネットワークとしての人間科学のイメージと、その多様な方法論について概説する。	中島義明（大阪大学教授） 太田裕彦（放送大学助教授）	中島義明（大阪大学教授） 太田裕彦（放送大学助教授）
2	情報と人間	人間は言わば情報を「食べて」栄養素を吸収し、はじめて生存可能となるような生き物である。このような情報を人間の深い関わりについて考察を加える。	中島義明	中島義明
3	エラーと人間	人間の行動にとってエラーは大きな問題となる。しかし、エラーは人間の特性からして起こるべくして起こっているとも言える。このような視点からヒューマンパフォーマンスに関し考察を加える。	同上	同上
4	ゆとりと人間	人間にとってゆとりがいかなる意味をもつのかを人間の労働・余暇・遊びを通して考える。	太田裕彦	太田裕彦
5	生涯学習と人間	人間は死ぬまで新たな知識や創造を追求する生物である。それゆえ、生涯教育という視点が大事である。教育学者の視点よりこの問題に考察を加える。	山本慶裕（国立教育研究所室長）	山本慶裕（国立教育研究所室長）
6	ジェンダーと人間	現在社会において求められる男性・女性の役割や文化と歴史の中の男性と女性について考察を加える。	伊藤公雄（大阪大学教授）	伊藤公雄（大阪大学教授）
7	国際化と人間	現代社会において人間が直面している異文化理解や地球規模での共存の問題について考察を加える。	渡辺文夫（上智大学教授）	渡辺文夫（上智大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ボランティアと人間	ボランティア活動が開く新しい人間関係や社会変革力などについて考察を加える。	大熊由紀子（朝日新聞論説委員）	大熊由紀子（朝日新聞論説委員）
9	ニューメディアと人間	現代社会におけるさまざまなニューメディアの登場が人間の行動やライフスタイルにいかなる影響を及ぼしているのかについて考察する。	中島義明	中島義明
10	特殊環境と人間	現代社会ほど人間がさまざまな環境に進出しようとしている時代はかつてなかった。宇宙環境、高層環境等々に見られる人間の心理について考察を加える。	同上	同上
11	自然と人間	人間は自然をどのように認識しまたどのように自然に関わっているのかという問題を中心に取り上げ、自然を通じた人間の特性を考える。	太田裕彦	太田裕彦
12	いじめと人間	現代社会において「いじめ」の問題は深刻な様相を帯びてきている。この問題に関し、心理学的に考察を加える。	丹野義彦（東京大学助教授）	丹野義彦（東京大学助教授）
13	死と人間	人間は必ず死を迎える。死に直面した人間とその周囲の人間の心理に関し精神科医の立場より考察を加える。	柏木哲夫（大阪大学教授）	柏木哲夫（大阪大学教授）
14	記号的想像力と人間	世界に生きる人間を記号・表現・レトリックの交錯するただ中に探る。	菅野盾樹（大阪大学教授）	菅野盾樹（大阪大学教授）
15	人間科学の可能性	これまでの講義を立体的にまとめ、さらに複数の講師による討議も交えつつ、知のフロンティアとしての人間科学の可能性について考える。	中島義明 太田裕彦	中島義明 太田裕彦

＝子どもの発達と社会・文化＝（ＴＶ）

〔主任講師：三宅和夫（北海道医療大学教授）〕

全体のねらい

生物としてのヒトとして生まれた子どもがまわりの人びととの相互交渉を家庭・学校・地域社会の中で重ねていくうちに社会的人間として成長していく。子どもは文化の中で育っていくのであるが、こうしたことを一方では日米比較研究などの具体的資料の提示により、他方発達の歴史的・文化的要因の理論的考察により説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「ヒト」から「人間」へ	子どもが生まれ育っていく社会がどのようなものであるか、ということを考慮しなくては人間の発達を理解することはできない。言いかえれば子どもがどんな文化的コンテクストの中で育つかということを重視しなくてはならない。導入としてこうしたことを論じたい。	三宅和夫（北海道医療大学教授）	三宅和夫（北海道医療大学教授）
2	乳幼児期の母子相互交渉（1）	子どもが母親との間で展開する相互交渉は社会的人間への道筋の第一歩として重視されるが、そこには大きな文化差が存在する。ここではこれまでになされた日米比較研究の結果を紹介しながら、初期の母子相互交渉とのちの人格発達との関連について考える。	同上	同上
3	乳幼児期の母子相互交渉（2）	子どもが2歳近くにもなれば、母親はいろいろな場面や状況で子どもの行動を統制することが必要になってくる。子どもが禁じられていることをしようとするときなどに母親がどのような形で対処するかについての日米比較研究の資料を中心に考察する。	同上	同上
4	情緒の発達と社会・文化	乳幼児期の間に人間に見られる情緒表出はほぼ完成するといわれるが、喜怒哀楽の表出の仕方、つまりどのような状況で、どの程度の強さでということには文化差がふる。日米の乳幼児についての研究資料を中心に検討しさらに母親との情緒的交渉との関係にふれる。	同上	同上
5	母と子のコミュニケーション	母親と子どもとの間のコミュニケーションおよび母子関係そのものの特質を、コミュニケーションゲームでの母親のコミュニケーションスタイル、しつけ方略などについての日米の対応するデータにより明らかにし、日本語および日本の人間関係の特質にも触れる。	柏木惠子（白百合女子大学教授）	柏木惠子（白百合女子大学教授）
6	「よい子」像と子どもの発達	米国における自己制御機能の発達研究を紹介検討した後、日本の子どもの自己制御機能の発達的特徴を研究資料にもとづいて明らかにする。その上で、背景にあると考えられる親や社会の“よい子”像の日米差を提示して、社会の中の子どもの発達について考えたい。	同上	同上
7	地域環境の影響～都会の子ども・農村の子ども～	日本の国内の文化的な違い、特に地域差に焦点を当てて、それが子どもの発達や子育てに対してどのような影響を与えているのかを見る。加えて、都市と農村のそれぞれの抱える子育てに関わる問題点について考える。	臼井博（北海道教育大学教授）	臼井博（北海道教育大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学び方のスタイル	日本の子どもの知的な課題に対する取り組み方の特徴を認知スタイル（熟慮性・衝動性）と動機づけの側面から解説する。これとあわせて、これらの特徴の形成に影響を与えるわが国の社会・文化的な条件について考える。	臼井　博	臼井　博
9	学校生活と学習	日本の子どもの学力の特徴を国際比較研究から考える。さらに、教室における教師と子どもの相互交渉の特徴や、教室の雰囲気、教師や両親の子ども観などのいわゆる「隠れたカリキュラム」などの背景にある要因についても考える。	同　上	同　上
10	バングラデシュの子どもの生活	子どもの発達は、所与の社会・文化システムのなかでどのような経験をしているかに大きな影響をうける。先進国と非常に違う社会化環境におかれているバングラデシュの子どもに焦点をあてて、社会機構、技術水準や家族をとりまく窓味世界などが、子どもの経験できる世界をどのようにかたちづくっているか考える。	箕浦康子（東京大学教授）	箕浦康子（東京大学教授）
11	第二文化の学習〜インドシナ難民の場合〜	日本に難民として入国してきた人の苦闘をたどることで、個人と歴史がどのように交わっているのか、また、日本で自立した生活をしていくために学ばねばならないことはどのようなことなのかを知ることで、文化学習と発達について考える。	同　上	同　上
12	いつ日本人になるのか〜帰国生の場合〜	文化特有の人間関係対処様式を摂取する感受期は9歳から14、15歳であることがわかってきた。どのようにしてわかってきたのか？帰国子女といわれる人の事例を通して、カルチャーショックとはなにか、文化とパーソナリティの関係などを考える。	同　上	同　上
13	異文化と自文化への関心	異文化に対する態度自体が文化によって違い、それは自文化のとらえ方の反映でもある。現在の異文化への関心から出発して、18世紀までの西洋と日本、19世紀の展開を中心に検討し子育ての違いへの関心の歴史的変化を探る。	小嶋秀夫（名古屋大学教授）	小嶋秀夫（名古屋大学教授）
14	文化比較から学ぶこと	文化により発達の姿が異なるだけでなく、発達の考え方や心理学の中身が違う可能性もまた共通性もある。そのことに関する発達研究者の気づきを、自国文化中心主義の克服の努力と生態学的環境の重視を中心に延べる。	同　上	同　上
15	人間の育ちと社会・文化	これまでの14回の内容を振り返りながら、社会の在り方とその文化が人間の発達にどのようにかかわっているのかをまとめる。そしてこの問題は、子どもの発達だけではなく、人間の生涯発達にかかわることを確認する。	同　上	同　上

＝哲　学　入　門＝（Ｒ）

〔主任講師：渡邊二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、共通科目として開設されるものであるので、誰にでも理解できる、やさしい哲学入門を目指したい。

広く、東西の哲学思想史に目を向けながら、哲学の諸問題について、展望を試みたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	哲学という言葉	哲学という言葉は、日本語としては、明治初年に、西周が造語してできた語である。 そのもとになったのは、西洋語のフィロソフィであり、これはギリシア以来、西洋文化の根幹を形作ってきた。 これらの点について、解説する。	渡邊二郎（放送大学教授）	渡邊二郎（放送大学教授）
2	「愛知」としての哲学	フィロソフィとは、「知を愛する」という意味の言葉である。 それで、哲学が何であるかを摑むためには、真理への「愛」と、それによって求められている「知」について、心得ておかねばならない。これらの点について、究明してみる。	同　上	同　上
3	人生観・世界観の根本知	哲学とは、簡単に言えば、人生観・世界観の根本知なのである。哲学をこのように規定することについて、検討してみる。 ただし、人生観・世界観と言っても、芸術や宗教や道徳とは、違った形で、哲学はこの問題を扱うのである。	同　上	同　上
4	哲学の方法（その1）	哲学が人生観・世界観の根本問題を扱うときの方法について、考え直してみる。それには二つの特色がある。 第一は、取り扱われるべき問題を、ありのままに見つめるという、「現象学」的態度を採るという点である。	同　上	同　上
5	哲学の方法（その2）	第二は、人生観・世界観の諸問題について考究した過去の哲学思想史に、たえず立ち帰って、先哲の思索を学び直すという方法態度が、哲学においては、肝要である。 これを、「解釈学」的態度と呼んでおく。これについて、解明を企てる。	同　上	同　上
6	哲学の分野	哲学が、人生観・世界観の根本知であるとした場合、実際には、どのような諸問題を扱ったらよいのか。 哲学の取り上げるべき諸問題の分野について、考察をしてみる。 西洋哲学の代表的な諸部門が展望される。	同　上	同　上
7	東洋の知恵（その1）	哲学思想といった場合、東洋のそれと、西洋のそれには、大きな違いがある。それで、まず、東洋の哲学思想、その人生知について展望してみる。 最初に、インドに発生した仏教の人生知について、その基本特色を顧みる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	東洋の知恵（その２）	次に、中国で成立した二つの伝統的哲学思想に、目を向けて見る。 一つは、儒家の哲学であり、もう一つは、道家の哲学である。 これらの哲学思想の大きな特色とその流れについて、解説を試みる。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	西洋哲学史の基本的構図（その１）	西洋哲学は、いったい、どのような仕方で歴史的に発展してきたのだろうか。まず、その基本的な特色について、考察してみる。 そのあとで、西洋古代哲学の歩みについて簡略な概観を企てる。その三つの時期について、解説が試みられる。	同上	同上
10	西洋哲学史の基本的構図（その２）	続いて、西洋中世哲学の歩みについて、解明を施す。一般に、中世という時代に関しては、誤解も多いので、その時代の文化史的意義にも注意しながら、考察する。 その中世哲学の二つの時期のうち、最初の教父哲学について、概説を試みる。	同上	同上
11	西洋哲学史の基本的構図（その３）	次に、西洋中世哲学の第二の時期であるスコラ哲学に関し、その考え方の流れを辿り直す。 その時期の初期と、最盛期・後期との、二つの局面を、筋道を立てて展望してみる。 これによって、中世哲学が身近となろう。	同上	同上
12	西洋近現代哲学の生成と動向（その１）	今度は、西洋近現代哲学の歩みを、その基本特徴において、概説してみる。 まず、17世紀の科学革命が大きな意味をもっていることを述べたあと、ルネサンスから、経験論と合理論の対立を経て、カントへと至る歩みが、辿り直される。	同上	同上
13	西洋近現代哲学の生成と動向（その２）	そのあと、カントとドイツ観念論の哲学の特色を顧みたあと、現代哲学の生成と発展に関して、見通しを打ち立ててみる。 ここでは、詳論というよりは、大きな流れと、そこで登場する主要な主義主張について、展望を得ておくことが、肝要である。	同上	同上
14	存在と知識	以上の、東西の哲学思想史の概観を前提した上で、今日、人生観・世界観の根本知としての哲学のあるべき方向について、示唆を与える。まず、自然科学の知を超え、歴史や社会への視野をも切り開きつつ、現実に対して、存在了解をもって立ち向かう点に哲学がある。	同上	同上
15	現実と実存	そのとき、人間は、現実のなかで、実存するという在り方においてある。この実存のうちから科学も生じ、他者と共にある場面や、倫理の問題も生じてくる。 こうして、最後に、人生の生きがいと幸福について洞察を得る点に哲学の真価が存する。	同上	同上

＝西洋思想の源流＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩田靖夫（聖心女子大学教授）〕

全体のねらい

西洋思想の源には、ギリシア人の合理的思考とヘブライ人の超越神への信仰がある。この両者は相対立しつつ相互に補い合い、西洋文化の基礎を形成してきた。それが、今や、科学技術文明の発展、自由主義的民主主義の政治形態の普及、「かけがえのなさ」という人間把握を中核とする人権思想の浸透などの姿の下に、現代世界文明の一つの大きな基礎になりつつある。この事態をその根源にまで遡り、この二つの根源の基本思想を明らかにすることが、本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ギリシア人とはなにか（1） －自由と法－	ギリシア人をギリシア人たらしめたもの、ギリシア人を現代世界文明のある意味での定礎者たらしめたものはなにか。それは、人間がそれぞれ自由で平等な者であり、したがって、独立の自律的生活を営むべき者であることを、かれらが自覚した点にある。この自覚によって、かれらは独裁者による専制政治を打ち倒し、民主主義という政治形態を創造したのであった。この政治形態は、支配者の意志ではなく、法という客観的精神が社会の原理となることにより、可能となった。かれらの精神を貫流するこの自由と法の尊重を、ペルシア戦争などを材料にしながら考える。	岩田靖夫（聖心女子大学教授）	岩田靖夫（聖心女子大学教授）
2	ギリシア人とはなにか（2） －理性と本質への眼差し－	ギリシア人の理性主義は、哲学のみならず、文学、彫刻、建築などあらゆる文化領域に浸透している。それは、様々に変転する多様な現象に埋没せず、その底にそれらの現象を規定している本質を洞察しようとする姿勢である。この本質への眼差しが、哲学を生み、科学を生み、現代世界文明の一つの特徴である合理的精神の元となったのである。	同上	同上
3	ホメロス	ホメロスとは『イリアス』『オデュセイア』の二大叙事詩をいうが、これらはギリシア人の産み出した最古の文学作品であるとともに、ギリシア人の人生観のマグマを表すものである。これらを素材にして、ギリシア人にとり神とは何であったか、ホメロス的人間の霊魂観は何を意味したか、英雄的人生とはどういう生き方なのか、を考え、ギリシア的人間の人生に対する態度の原型を確かめる。	同上	同上
4	ギリシア悲劇	悲劇的人間観はすでにホメロスのうちにその原型を現しているが、それを発展させ比類なき文学へと結晶せしめたのがギリシア悲劇である。本講義では、その代表として、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』と『オレステイア三部作』、さらに、ソフォクレスの『オイディプス王』とをとりあげる。アイスキュロスはこの世界における正義の貫徹を固く信じていたが、この信念を前者では暴君ゼウスの倫理的敗北として、後者ではアルゴス王家の血塗れの凶行の果てし無き連鎖の中で貫徹されてゆく倫理法則の絶対性として、跡づけようとした。これに対し、ソフォクレスは、オイディプス王を素材にして、人間の意図的な努力がことごとく逆の結果を産み出してくるという恐るべきアイロニーを描いて、運命の圧倒的な力に対する人間の無力と諦念を語った。	同上	同上
5	ソクラテス以前の哲学（1）	哲学はミレトスのタレスが万物の根源を求めたときに始まった。この根源の探究の歩みをヘラクレイトスまで辿る。アナクシマドロスは、ハイデガーが存在の思索の初端として極めて重視した哲学者であり、また、ヘラクレイトスは、ニーチェが深い親近性を感じた哲学者であるから、これらの点にも触れて、ギリシア哲学と現代哲学との関連も考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	ソクラテス以前の哲学（2）	パルメニデスからデモクリトスまでを考察する。パルメニデスは存在の思索を最初に体系的に展開した哲学者であるから、その論理をやや詳しく辿り、ハイデガーとの関連も考える。エンペドクレスでは、「魂の堕落と浄め」などのオルフィズムの宗教思想を、デモクリストでは、唯物論的世界観の原型を考える。	岩田靖夫	岩田靖夫
7	ソフィスト	紀元前5世紀に起こったソフィスト運動はギリシア文化における啓蒙時代を現すものである。かれらは伝統的な宗教、道徳、政治などの基礎を洗い直し、これらに破壊的な批判を加えた。かれらの中の重要人物、「人間は万物の尺度である」と言ったプロタゴラス、存在の不可知論を説いたゴルギアス、「正義とは強者の利益である」と主張したトラシュマコスなどを取り上げる。	同上	同上
8	ソクラテス	ソクラテスは、哲学が「外部の自然」に向かっていたのを「人間自身の内面」へと向け変えた人、その意味で倫理学の創始者である。人間が考えるべきもっとも重要な問題は「いかに生きるべきか」の問いである、と言って、かれは善の探究に一生を捧げ、その結果処刑された。かれの立てた問いにとこの哲学活動はなにごとを意味しているのか。	同上	同上
9	プラトン	プラトンは師ソクラテスの哲学的息吹を受け継ぎ、これを理論化した人である。ソクラテスの哲学的信念は不滅の霊魂の確信と固く結びついているが、プラトンは『パイドン』でこの確信に理論的支柱を与えた。また、『国家』では、ソクラテスの求めた正義の理念に具体的な形を与えた。これらの理論の骨組みと意味とを考察する。	同上	同上
10	アリストテレス	アリストテレスは真実の意味で理性主義の実りとしてのギリシア哲学の完成者であり、以後に続く万学の創始者である。このアリストテレスの体系から、自然と実体についての理論を取上げ、理性主義の世界観とは何であるかを簡潔に説明する。	同上	同上
11	旧約聖書へのいざない（1）	旧約文献特にモーセ五書の成立についての諸説と、ほぼ通説となっているところを述べる。文献の成立以前に伝承の集積があり、それについての諸説はさらに定説をさだめることは困難だが、それにも少し触れたい。それらの諸伝承は、東地中海地域全体の歴史と深くからみあっている。メソポタミア・エジプト・パレスチナ・ギリシア等の背景の内でのイスラエルの歴史の位置を、文献学・考古学がどのように推測するかを大まかに述べる。	坂口ふみ（清泉女子大学教授）	坂口ふみ（清泉女子大学教授）
12	旧約聖書へのいざない（2）	歴代志・列王紀・預言者たちは、イスラエルの苦難の歴史のうちで、原初のモーセ五書の宗教性を変化させ、深化させて行った。現実のイスラエルの歴史とのかかわりにおいて、その宗教性の特色と変貌性を述べたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	旧約聖書へのいざない（3）	イスラエル思想の発展の内で、エジプト・メソポタミア・ヘレニズム等のイスラエルと異質な思想の影響はみのがせない。知恵文学と呼ばれるものや、旧約の七十人訳などを材料として、それらの影響がイスラエル思想をたんなる一民族の思想から普遍性を持つ思想へと変えていくプロセスを描きたい。	坂口ふみ	坂口ふみ
14	旧約から新約へ	これまでの発展をふまえつつ、イエス・パウロにおいて、旧約思想がどのように変貌したか、その断絶と連続の相を描く。イエス・パウロの思想はそれぞれ異なった仕方で、旧約の経て来た変化・発展を鮮やかな形で新しい相貌・新しい体系へともたらしたものとみなされうる。	同上	同上
15	「自由で平等な人間」と「神の痕跡」	ギリシア的合理性とヘブライ的宗教性の根源的かつ相補的な意味を、現代の倫理思想において確認する。前者は、正義論の代表的哲学者ロールズの思想のうちに見られる、自由と平等の理念に基づく公平な社会の建設という思想である。後者は、ユダヤ人哲学者レヴィナスの思想のうちに見られる、他者へ無限の責任を負う者としての自己、他者への奉仕のうちに解体する自己、という思想である。これら両者は人間の生を織りなす二つの次元を指し示している。	岩田靖夫	岩田靖夫

＝プラグマティズムと現代＝（Ｒ）

〔主任講師：魚津郁夫（熊本大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代アメリカを代表する哲学思想プラグマティズムをとりあげ、その創唱者であるＣ・Ｓ・パース、それを全世界にひろめたＷ・ジェイムズ、さらに両者の思想を集大成したＪ・デューイなど、この流派の主要な哲学者の思想を概観したのちに、Ｗ・クワイン、Ｒ・ローティーなどによる新しい展開をたどり、プラグマティズムの現代的意義を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	プラグマティズムとは何か	1870年代のはじめ、パースのとなえた「プラグマティック・マクシム」がプラグマティズムの原点であることを見たのちに、その中心思想が、思想と行動の結びつきの重視にあることを指摘し、その名称がカント哲学に由来することを明らかにする。	魚津郁夫（熊本大学名誉教授）	魚津郁夫（熊本大学名誉教授）
2	パースにおける「探究」と真理	パースは、私たちの思考はすべて疑念から信念の確定にいたる「探究」であるとする。そうした探究の四つのパターンを検討し、パースの「実在」観と「真理」観を明らかにする。	同上	同上
3	パースの記号論	パース哲学のもっとも初期に展開された「直観主義の否定」と、そこから帰結する、あらゆる思考を記号によって媒介されたものとする「記号主義」を考察し、さらに晩年に展開された「記号論」を検討する。	同上	同上
4	パースのアブダクションと可謬主義	パースによれば、推論形式には演繹と帰納のほかに、アブダクションがある。科学的探究では、仮説をたてるのにアブダクションがもちいられるが、そこにはつねに誤謬の可能性がつきまとう。こうした「可謬主義」がパース哲学の根底にあることを指摘する。	同上	同上
5	ジェイムズの真理観	ジェイムズは、パースのプラグマティック・マクシムに独自の解釈をくわえて、真理論を展開する。本章では、いわば二重構造の真理説によって、科学的世界観と宗教的信条の両立をはかるジェイムズの試みを検討する。	同上	同上
6	ジェイムズの宗教観	宗教とは、個々の人間が孤独のなかにあって、神的な存在なるものとかかわっていることを自覚するときに生じる経験である、とジェイムズはいう。こうした立場から、ジェイムズによって記述された二つのタイプの宗教を検討する。	同上	同上
7	ジェイムズの根本的経験論と多元論	ジェイムズによれば、経験の原初的な形は「純粋経験」である。そこには主観と客観の区別はない。それはいわば心と物の交点であって、反省によって、外的世界と自我という二つの系列にわかれるにすぎない。こうした見解は、西田哲学につよい影響をあたえた。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ミードの社会的行動主義	ミードは、「社会的行動主義」の立場から、人間の意識は情報伝達という社会的行動のなかからうまれることを主張し、観察可能な社会的行動から、個人の内面的意識を解明することを試みる。したがって、個人の外的行動のみを対象とする行動主義は、社会と、個人の内面を無視するという二重の誤りをおかしている、という。	魚津郁夫	魚津郁夫
9	ミードのコミュニケーション論	ジェイムズの心理学の影響のもとに、ミードは行動を基礎にしてコミュニケーション理論を構築する。ここではミードにしたがって、たんなる「身ぶり」から、「有意味シンボル」としての「有声身ぶり」をへて、「言語」の成立にいたる道筋を検討する。	同上	同上
10	ミードの自我論	自分にたいする相手の態度や役割を自分のなかにとりいれることによって自我が確立される、という「役割取得」説にもとづく、独自な自我論の展開。社会と個人の関係も、同様の観点から論じられる。	同上	同上
11	デューイの道具主義	観念の意味を、その観念にもとづく「行為の結果」との関連においてとらえるパース以来のプラグマティズムの流れのなかで、デューイは、観念を問題解決のための道具とする彼独自の「道具主義」をとなえた。こうした基本的立場の展開をあとづける。	同上	同上
12	デューイにおける探究、真理、および宗教	デューイは論理学を探究の理論としてとらえる。探究とは、不確定な問題状況を、確定された状況へと、制御された仕方で転化させることである。探究はすべて問題解決のための活動であり、五つの段階をへて、「保証された言明可能性」にいたる。	同上	同上
13	デューイと価値の問題	行為の基準として、普遍的価値にうったえる立場と、現実的享受を重視する立場の断絶を埋めることを試みるデューイの価値論。さらに、芸術は、能動と受動からなる一つの統一的経験にひとしい、とする彼の芸術論。この二つを検討する。	同上	同上
14	モリスとクワインの思想	モリスは、パースの影響のもとに、記号過程の研究を構文論と意味論と語用論の三部門にわけて記号論を基礎づけ、クワインはネオ・プラグマティズムの立場から、論理的経験主義の二つのドグマを指摘して、20世紀後半の分析哲学に深刻な影響をあたえた。	同上	同上
15	ローティーのプラグマティズムとその批判 ―全体をふりかえって	プラグマティズムの特徴は、普遍的な本質を否定し、事実と価値の区別をみとめず、他者である探究者との意見交換による連帯を重視する点にある、とするリチャード・ローティの主張に焦点をあてつつ、プラグマティズムの現代的意義を考察する。	同上	同上

＝倫　理　学　入　門＝（Ｒ）

〔主任講師：宇都宮芳明（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい

倫理学とは、一言で言えば、人間の「人間らしさ」としての「人間性」を探究する学である。今回の入門では、西洋のこれまでの代表的な倫理学説をなるべく広範囲にわたって取り上げ、それらを紹介するとともに批判的に検討し、人間の「人間らしさ」がどこに成り立つかを考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	倫理学がたずねるもの	倫理学は「人間とはなにか」とたずねるが、そこでたずねられるのはたんなる生物としての人間ではなく、人間であるにふさわしい「人間らしい人間」であり、それを成り立たせている「人間性」（「非人間性」に対立する）である。	宇都宮芳明（北海道大学名誉教授）	宇都宮芳明（北海道大学名誉教授）
2	人間性について	「人間性」という言葉は、「人間らしさ」を意味するとともに、他方「人間としての本性」をも意味する。後者の意味での人間性についてはさまざまな見方があるが、ここではそれを、自然主義的な見方、歴史主義的な見方、実存主義的な見方に大別する。	同　上	同　上
3	自然主義（１）アリストテレスの倫理	人間は理性的動物であるという自然主義的な見方に基づく人間性の規定はギリシア古代に生じ、そこから理性的に生きることが人間らしい生き方とされた。では、理性的な生き方とはどのような生き方であろうか。アリストテレスの説について考える。	同　上	同　上
4	自然主義（２）エピクロスとストア派の倫理	ヘレニズム時代になると、エピクロスとストア派が登場した。今日エピキュリアンと言えば享楽主義者、ストイックと言えば禁欲主義者を指すが、こうした見方が正しいかどうかを検討し、またストア派から生じた自然法という考えについて触れる。	同　上	同　上
5	主我主義と主他主義	ここで少し視点を変え、倫理学説としての主我（利己）主義と主他（利他）主義の対立について考える。人間の行為はすべて主我的であるとする理論は正しくないし、逆に人間の「人間らしさ」はもっぱら他者の幸福を促進することにあるとする主他主義の主張にも問題がある。	同　上	同　上
6	自然主義（３）功利主義の倫理	18世紀末から、人間には幸福（快）を求める自然的本性があると認めた上で、「最大多数の最大幸福」をもたらす行為が正しいとする功利主義の考え（ベンサム、J.S.ミル）が生じたが、ここではこの功利主義の主張についてその内容を紹介する。	同　上	同　上
7	功利主義批判と義務論	功利主義の主張に見いだされる問題点を指摘し、功利主義を批判して、人間に課せられた「義務」を重視し、行為の正しさは幸福を結果することにではなく、義務を順守することにあるとする「義務論」の考えについて説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	カントの倫理学	義務を順守するようになるのは、人間の「善い意志」によると考えるのがカントであるから、ここではカントによる幸福主義批判に触れ、またカントの「善い意志」と「定言命法」の関係について説明し、人格のうちの人間性が目的自体として絶対的価値（尊厳）を持つとするカントの主張について考える。	宇都宮芳明	宇都宮芳明
9	歴史主義と倫理	人間に備わる不変の自然的本性よりも、人間性の歴史的変化を重視するのが歴史主義的な見方であって、ここから倫理が歴史的に相対的であるという主張が生まれる。ここではこうした歴史的相対主義の考えを紹介し、さらにその批判的検討を試みる。	同　上	同　上
10	実存主義と倫理	個々の人間のあり方をあらかじめ規定しているような人間の本質（人間性）の存在を否定し、人間にあっては個々の実存が本質に先立つとするのが実存主義である。ここではサルトルやハイデッガーを手掛かりとして、このような考えから帰結する倫理について考える。	同　上	同　上
11	人「間」と倫理	人間の「人間らしさ」が、人間と人間との「間」において成り立つことを指摘し、類としての人間の本質（人間性）は個々の人間のうちにあらかじめ内在しているのではなく、個と個の統一（私と汝の統一）において成り立つとするフォイエルバッハの考えを紹介する。	同　上	同　上
12	「私と汝」のその後の展開	フォイエルバッハによる「汝の発見」は、デカルトによる「自我の発見」に匹敵する思想史上の偉業と評価するひとがいる。ここでは現代において展開されているその後の「私と汝」の思想について概観し、それが向かう方向について考える。	同　上	同　上
13	役割関係と役割倫理	レーヴィットは、フォイエルバッハの「私と汝」の関係を「役割」もしくは「ペルソナ」の関係として再構成しようとした。現代では社会学のなかにも人間関係を役割関係として捉える見方があるが、このような視点からどのような倫理が導かれるかについて考察する。	同　上	同　上
14	和辻倫理学	日本の代表的な倫理学者である和辻哲郎は、倫理学を人と人との間の学である「人間学」と規定した。この考えは「私と汝」思想の延長線上に位置するとも言えるが、しかしここでは、主著『倫理学』で展開されている倫理について、さらに立ち入って検討することにする。	同　上	同　上
15	社会倫理と人類倫理	ベルクソンは愛のあり方に注目しつつ、道徳を「社会道徳」（「閉じた道徳」）と「人類道徳」（「開いた道徳」）に区別した。今日われわれに求められているのは人類道徳であるが、それと「私と汝」に基づく倫理とがどのように結びつくかを考える。	同　上	同　上

＝世　界　の　宗　教＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部美哉（國學院大学教授）〕

全体のねらい

世界には、さまざまな宗教があり、それぞれのやり方で人々の生活を枠付けている。この講座では、地域と伝統の文脈にそって、民族固有の神話や儀礼によって支えられている諸宗教および創唱者の教説を中心に広く伝播した諸宗教を、学術的に理解することを目指したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界の宗教〜その概観とガイダンス〜	人々が宗教という言葉によってイメージする現象は、多様である。宗教学者たちが宗教をどのように定義し、分類してきたか、世界諸地域の宗教の分布はどのようになっているのか、といった基礎的な情報を概説する。あわせて、この講座の構成と学び方を述べる。	阿部美哉（國學院大学教授）	阿部美哉（國學院大学教授）
2	神々と神話の世界	神話は、世界の創造や秩序や慣習の成立を物語り、基礎づけようとする。多くの場合、創造や秩序化を行うのは神々である。古代社会を中心に世界各地の神話とそこに登場する神々を概観して、構造や主要なタイプを紹介し、あわせて儀礼との関係を考えていく。	松村一男（天理大学助教授）	松村一男（天理大学助教授）
3	神道と民族宗教	神道は日本古来の宗教で、神社を中心とした神道、民間信仰の中に深く根ざした神道、教団化した神道などがある。一方、神道の儀礼や教えには、東アジアに共通する要素も多く含まれていることが近年注目されていることに言及する。	井上順孝（国学院大学教授）	井上順孝（国学院大学教授）
4	ユダヤの民と戒律	ユダヤ教の歴史を三つの時代に分けてその変遷を確認し、それらを貫くユダヤ人の宗教生活の特徴が契約と戒律にあることを宗教制度の上から跡づけ、現代のユダヤ人が抱える近代特有のアイデンティティの問題を考察する。	市川　裕（東京大学助教授）	市川　裕（東京大学助教授）
5	カトリック的救済と近代意識	カトリシズムは現代日本の代表的宗教とは言いがたいが、近代日本が自己の鏡としてきた西欧の根幹にはキリスト教的救済観が横たわっている。西欧なるものの成立、近代意識の形成といったアジア世界の現在的課題をカトリシズムと民俗の接点にさぐりたい。	関　一敏（九州大学助教授）	関　一敏（九州大学助教授）
6	プロテスタントと信仰	プロテスタンティズムは、カトリシズムを批判し、信仰による救いという聖書的原点への回帰を意図したが、同時に、近代産業社会に適応しつつ発展してきた。その意義や成果、またその問題点などについて述べる。	金井新二（東京大学教授）	金井新二（東京大学教授）
7	イスラームと共同体	イスラームは、神の唯一性の考えを基礎にして人間の生き方全体を統合しようとする宗教である。この直観を軸に歴史の中に展開してきたその様々な思想潮流、また現代世界で活発に行われているその自己主張を検討する。	鎌田　繁（東京大学教授）	鎌田　繁（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	アフリカの宗教	生業に結び付く儀礼、誕生から死までの人生儀礼、共同体の祭りなど、民族宗教としてのアフリカの宗教の特徴を紹介する。他方で、その形態的変化を、憑依、神聖王、イスラム化、独立教会等の例を取り上げて検討する。	竹沢尚一郎(九州大学教授)	竹沢尚一郎(九州大学教授)
9	中南米の宗教運動	中南米の宗教運動はカトリック教会との関係において理解することが肝要である。しかし、現代の急激な社会変化はカトリック中心の宗教システムに改編をせまると同時に、様々な宗教運動を生み出す契機ともなった。そうした動向を主眼に据え、必要に応じて歴史的観点からの援用をはかりたい。	中牧弘允(国立民族学博物館教授)	中牧弘允(国立民族学博物館教授)
10	ブッダとその教えの展開	ブッダの教えは、普遍性に富む教えであった。それがゆえに多くの人々に受け入れられたのであるが、またそれがゆえに、異文化に受容される過程で種々の仏教解釈を生み出した。その過程を歴史を通して考えてみたい。	星野英紀(大正大学教授)	星野英紀(大正大学教授)
11	中国の宗教	中国における諸々の宗教活動の基層には二つの基盤－祖先崇拝と天の祭祀－が存在したが、この二つの宗教現象に内包された世界観が哲学的に昇華されることによって、礼や孝などの思想が成立したことを検討したい。	池澤優(東京大学助教授)	池澤優(東京大学助教授)
12	シンクレティズム ～神仏習合・重層信仰～	日本の宗教伝統は、神と仏をともに敬うことにあるといわれるが、アジアの中ではごく一般的なことであろう。本覚思想、本地垂迹説、修験道などに見られる習合的な文化がもつ現代的な意味を考察したい。	林淳(愛知学院大学助教授)	林淳(愛知学院大学助教授)
13	現代日本の宗教状況	社会が近代化し都市化するについれて宗教の役割が縮小していくと言われることがある。しかし、現代日本においても宗教はさまざまな形で人々の社会生活に関っている。七五三や初詣、多くの企業が神社を祀っている現象などを通して現代日本の宗教状況を把握する。	石井研士(国学院大学助教授)	石井研士(国学院大学助教授)
14	新宗教と現代文化	現代の世界では、歴史的な大宗教とは異なる新しい宗教が大衆の間に広がっている。アメリカや日本で19世紀に発展し始めた運動から、現代の欧米のニューエイジや日本の新新宗教まで、大衆の宗教としての新宗教の特徴を考える。	島薗進(東京大学教授)	島薗進(東京大学教授)
15	ナショナリズムと宗教	今日の世界では、グローバル化が進むとともに、地域圏の形成と民族の伝統の復活が勢いを増している。世俗化が進む一方で、激しく変動する社会におけるアイデンティーの核としての宗教の活性化が著しい。世界の諸宗教における伝統と変化の諸相を俯瞰してみたい。	阿部美哉	阿部美哉

＝比較思想・東西の自然観＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

地球環境破壊問題は、今日の人類に課せられた最大の課題の一つである。本講義は、比較思想の観点からこの問題に取り組み、地球環境破壊を進行させる契機の一つとなったデカルト的・機械論的哲学とは異なる有機的・非近代的な自然哲学を、古今東西に亘って俯瞰し、自然との共生を目指す哲学を建設する一助としたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代における自然哲学の重要性	1．地球自然環境の危機的状況の外観（特に酸性雨問題を中心に、その問題の発祥地ヨーロッパの現状等を見てみる） 2．地球自然環境破壊の観点から見た近代自然哲学の再評価（特にデカルトについて） 3．非近代的自然哲学を求めて	青山昌文（放送大学助教授）	青山昌文（放送大学助教授）
2	安藤昌益	1．昌益の生涯（青森・秋田等に足跡を尋ねる） 2．『自然真営道』について 3．昌益の自然哲学の現代的意義（その反デカルト的自然観と、ディドロとの親近性について）	同上	同上
3	三浦梅園	1．梅園の生涯（大分等に足跡を尋ねる） 2．梅園の自然哲学の概観 3．そのアジア的・環太平洋的性格について	小川晴久（東京大学教授）	小川晴久（東京大学教授）
4	方以智	1．方以智の生涯 2．ヨーロッパ文化の中国への伝播 3．方以智の自然哲学（「気」を中心として） 4．そのヨーロッパ思想との比較	坂出祥伸（関西大学教授）	坂出祥伸（関西大学教授）
5	王船山	1．王船山の生涯 2．易学における船山の位置 3．船山の自然哲学 4．その中国思想史における独自性について	小川晴久	小川晴久
6	アフリカのモシ族	1．アフリカのモシ族について 2．モシ族における自然とのかかわり 3．アフリカの思想における人間と自然のかかわり 4．そのヨーロッパ並びに日本との比較	川田順造（広島市立大学教授）	川田順造（広島市立大学教授）
7	イブン・スィーナー	1．イスラーム的なるものについて 2．イスラーム的世界観 3．発出論的世界観について 4．イスラームにおける自然観（「愛」の問題との関係を中心として）	小林春夫（東京学芸大学講師）	小林春夫（東京学芸大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ソクラテス以前の哲学者たち	1．ソクラテス以前の哲学者たちの生涯 2．ピュシス・パンタ・コスモスについて 3．ギリシア初期自然哲学	廣川洋一（筑波大学教授）	廣川洋一（筑波大学教授）
9	ジョルダーノ・ブルーノ	1．ブルーノの生涯 2．占星術や錬金術等について 3．ブルーノの自然哲学 4．その新プラトン主義等との関連について	樺山紘一（東京大学教授）	樺山紘一（東京大学教授）
10	ライプニッツ	1．ライプニッツの生涯 2．ライプニッツの活動の多面性について 3．ライプニッツの自然哲学（特にデカルト的自然像に対する批判を中心にて）	佐々木能章（横浜市立大学助教授）	佐々木能章（横浜市立大学助教授）
11	ディドロ	1．ディドロの生涯 2．デカルト的自然観との対決 3．自然一元論 4．存在の連鎖 5．その超近代的特質について	青山昌文	青山昌文
12	ゲーテ	1．ゲーテの生涯 2．反ニュートン的・反デカルト的自然観 3．ゲーテの自然観 4．その反近代的特質について	高橋義人（京都大学教授）	高橋義人（京都大学教授）
13	シェリング	1．シェリングの生涯 2．ドイツ観念論哲学について 3．シェリングの自然哲学	西村清和（埼玉大学教授）	西村清和（埼玉大学教授）
14	ニューサイエンス	1．ニューサイエンスについて 2．カプラ・ボームの自然観 3．その東洋思想とのかかわり	竹本忠雄（筑波大学教授）	竹本忠雄（筑波大学教授）
15	自己組織化とエコロジー	1．プリゴジーヌ、モラン等の生涯 2．プリゴジーヌの散逸構造論について 3．モランの科学理論について 4．モスコヴィッシのエコロジスムについて 5．現代における自然哲学の重要性	青山昌文	青山昌文

＝国　文　学　入　門＝（Ｒ）

（主任講師：堤　精二（お茶の水女子大学名誉教授）
主任講師：島内裕子（放　送　大　学　助　教　授））

全体のねらい

わが国の文学と、その文学を研究する学問である国文学について概括する。上代・中古・中世・近世・近代の各時代の特色を検討しつつ、研究法についても述べる。さらに全時代を通して日本演劇・日本漢文学・国語学について概説を試み、国文学との関わりについて考察を加える。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国文学とは	学問としての国文学の意味を考え、文献学、書誌学等の国文学の基礎的研究について述べる。	堤　精二（お茶の水女子大学名誉教授）	堤　精二（お茶の水女子大学名誉教授）
2	上代文学（1）	上代文学の概観を述べ、さらに『万葉集』や『古事記』の中の和歌作品をとり上げ、それらが解釈によって新しい意味を現してくる実態を説明する。	稲岡耕二（上智大学教授）	稲岡耕二（上智大学教授）
3	上代文学（2）	日本ではじめての文学を形成するに当って、強い影響を与えた中国文学との関係という面から、上代文学を考察する。	同　上	同　上
4	平安文学（1）	女流文学を中心に絢爛たる一時期を画した平安朝文学を展望し、諸作品の位置付けを行う。	鈴木日出男（東京大学教授）	鈴木日出男（東京大学教授）
5	平安文学（2）	平安時代文学について、どのように研究するか？－を文献、解釈、表現等の諸点から考察する。	同　上	同　上
6	中世文学（1）	動乱の絶えない社会に生れた中世文学の諸相を概観する。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
7	中世文学（2）	隠者の文学とくに『徒然草』をとりあげて、その内容・表現および前後の時代の作品との関連について具体的に述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	近世文学(1)	出版文化、仏教的世界から儒教的世界へ等、江戸時代の特色について述べ、さらに小説形態の変遷と、とくに西鶴の伝統的研究について述べる。	堤　精二	堤　精二
9	近世文学(2)	(1)で散文を扱ったのに対して韻文作品を通して、近世的抒情の流れ(芭蕉・蕪村等)について述べる。	同上	同上
10	近代文学(1)	近代文学作品の表記・文章・文体等の問題点および作品の内容の傾向と特徴について概観する。	浅井　清(帝京大学教授)	浅井　清(帝京大学教授)
11	近代文学(2)	近代と反近代・東と西・主題と方法等の主な研究上の観点について述べる。	同上	同上
12	日本漢文学の流れ	日本古代以来の日本漢文の流れを概観し、とくに江戸時代の漢詩文作品について考察を加える。	揖斐　高(成蹊大学教授)	揖斐　高(成蹊大学教授)
13	日本演劇	能・狂言等日本の伝統的演劇の変遷をあとづけ、とくに江戸時代に発達する浄瑠璃と歌舞伎の特色について検討を加える。	服部幸雄(千葉大学教授)	服部幸雄(千葉大学教授)
14	国文学と国語学	国文学を理解する上での国語学の役割を語彙・文法・主体等具体的な面から解説する。	山口明穂(中央大学教授)	山口明穂(中央大学教授)
15	まとめ	全体を通してのまとめと、とくに日本文学における「古典と近代」について詳述する。	島内裕子	島内裕子

＝現　代　詩　歌＝（Ｒ）

〔主任講師：野山嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

明治末年から昭和20年前後に至る詩歌を現代詩歌として、その歴史を総合的に把握し理解する。詩・短歌・俳句それぞれの特質を尊重しながら、相互の関連に特に留意し、日本の詩歌のありのままの姿を構造的に考察することがねらい。併せて、文化論への展望も開く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	詩歌のことば－文語と口語－	詩の変遷、短歌俳句の分裂、近代詩歌との関連、略説	野山嘉正（放送大学教授）	野山嘉正（放送大学教授）
2	高村光太郎	明星時代から戦後まで	同上	同上
3	歌人の近代－牧水・空穂・夕暮－	詩歌観の全体像の中で	同上	同上
4	白秋と大正期の詩人	白秋のその後と朔太郎・犀星・拓次・暮鳥	同上	同上
5	四季派の詩人	堀・三好・丸山（含む日本浪漫派）	同上	同上
6	モダニズムのゆくえ	口語・民衆・前衛・イマジズム	同上	同上
7	近代短歌の展開Ⅰ　節・赤彦・茂吉	大正の赤彦、茂吉の戦後まで	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	近代短歌の展開Ⅱ「アララギの隆盛」	文明・憲吉・佐太郎・芳美ら…	野山嘉正	野山嘉正
9	近代短歌の展開Ⅲ白秋とその周辺	柊二・修ら… 白秋と多磨短歌会、付：岡本かの子	同上	同上
10	宮沢賢治	詩・短歌、文語・口語	同上	同上
11	近代俳句の展開Ⅰ「ホトトギス」の新世代	蛇笏・石鼎・普羅・鬼城ら…	同上	同上
12	近代俳句の展開Ⅱ4Sの時代	方法、結社、対自由律	同上	同上
13	中原中也	前衛と伝統、文語と口語	同上	同上
14	現代詩歌の戦中戦後	詩人・俳人・歌人	同上	同上
15	現代詩歌の問題	回顧と展望	同上	同上

＝国語学概論（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：白藤禮幸（東京大学教授）
〔主任講師：杉浦克己（放送大学助教授）

全体のねらい

世界各国との接触が日常的となった今日、私たちの「国語」は従来とは違った視点で見直し、より意識的になる必要があるのではないだろうか。そのような視点で国語の諸分野を概観し、我々の言語を対照的に捉えることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国語とは、日本語の位置	我々日本人は私たちの言葉を国語と呼んできた。こう呼ばれることにはそれなりの歴史があった。その背景を考え、国際化の進んだ今、我々の言葉が、世界の中でどのような位置を占めているか、外国の言葉と対照的に捉えることの意義を考える。	白藤禮幸（東京大学教授）	白藤禮幸（東京大学教授）
2	国語の諸相	一口に国語といってもそれなりの時間的な長さと空間的な広がりを持っている。また、同時代のなかでも位相的に多面的な姿を示す。音声言語と文字言語、話し言葉と書き言葉、男性語と女性語、など国語のいろんな姿を見てみる。	同上	同上
3	国語の音韻	言語の最も基本的な要素は話し言葉の声である。国語のそれにはどのような単位があり、それがどのような仕組み、体系を成しているか、また、他の言語と比較した場合、どのような性質を持っているのか、を音韻の面から述べる。	同上	同上
4	漢字音	日本漢字音としての呉音・漢音などが何時どのようにして日本語の中に定着したか、漢字音が定着する過程で日本語に対しでどのような影響を与えたか、漢字音の表記法（字音仮名遣い）にはどんな問題があるか、などについて考える。	沼本克明（広島大学教授）	沼本克明（広島大学教授）
5	国語の文字	国語の文字は、世界の諸言語と比較しても、文字に関して極めて特異な特色を持っている。表意文字の漢字、表音文字の片仮名・平仮名、その他、アルファベットやローマ数字など多種の文字を使っている。その背景と問題点を考える。	白藤禮幸	白藤禮幸
6	国語の表記	多種の文字を用いる国語の表記には、それ故の問題点がある。その表記の歴史的な変遷を概観し、仮名遣い、漢字制限、漢字仮名交じり、片仮名・平仮名の使い分け、句読点その他の記号の用法など、現代語の表記に関する問題点を考える。	同上	同上
7	国語の構造	現代日本語において、未来・現在・過去の時制はどのように表されているか。また、基準時間において、運動が継続中であるか、それとも既に完結しているかはどのようにして表されているか。現代日本語のテンス・アスペクト体系を諸言語や古代語と比較しながら考える。	鈴木泰（お茶の水女子大学教授）	鈴木泰（お茶の水女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文語と口語	日本語において、活用は、何のために、どのようにして生れたか。そして、活用体系は古代語から近代語に移り変る中でいかなる変遷を辿ったか。そうした変遷の中で変らなかったものは何か。また、それによって日本語の表現はいかなる変化を蒙ったかを考える。	鈴木　泰	鈴木　泰
9	文章・文体	国語の文体を、歴史的な観点て主に表記面から、漢文とその訓読に由来する類と、和歌や女流日記等の平仮名文に由来する類に整理してその成立と発達を概説すると共に、現代の諸文体の特色とその役割をこれに関係づけて述べる。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
10	敬語	敬意に基づく待遇表現としての敬語の基本的な役割の観点から敬語を分類整理し、その発達・変化を概説し、さらに現代では身内他人敬語・荘重語のように人への敬意ではなく場への配慮として用いられる敬語へと変化しつつあることを述べる。	同　上	同　上
11	国語の語彙	意味を表す最小単位として単語をとらえ、単語とその意味はどのようにとらえることができるかを、シソーラスや幼児の「万能語」などを例に概説し、単語はどのように習得され、どのように頭の中で整理されて用いられているかを考える。	同　上	同　上
12	和語・漢語・外来語	国語で用いられる語彙は、その由来によって大きくいくつかのグループに大別できることを述べ、それは単に由来のみでなく表記や文体等とも関係して、国語の実用上に大きな影響を与えていることを、実例を挙げながら概説する。	同　上	同　上
13	方言	日本には、そのせまい国土のわりには、土地によって言葉が違うという方言の差が著しく認められる。その方言の姿を音韻・語法・語彙について、いくつかの事例に基づき、土地・所による言葉の形の差を大きな視点で概観する。	小林　隆（東北大学助教授）	小林　隆（東北大学助教授）
14	国語研究の歴史	国語について、どのような研究がなされてきたか、我々の先人は、国語のどのような面に問題を感じてきたかを、中古以降の音韻・文字・語法の研究書を取り上げ、そこで論じられたことを概観し、あわせて国語の性質を考える。	白藤禮幸	白藤禮幸
15	国語の将来	国語の抱える問題点とその歴史的な背景を概説し、現代社会の多様化や情報化・国際化等と関連づけて具体的な国語政策や教育政策の現状と今後の方向を考える。	杉浦克己	杉浦克己

＝日本語表現法＝（R）

〔主任講師：清水康行（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

現代日本語の表現方法について、話し言葉・書き言葉の両面から、平易に解説し、受講者の言語に対する関心、知識を深め、日本語の運用力を高めることを目的とする。総花的な概説は目指さず、比較的限定された領域について、細切れの知識ではなく、基礎的事項を余裕を持って教授していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本語の現在	現代の日本語を取りまく状況を概観する。世界の中の日本語、日本の中の日本語の位置を押さえ、現代における日本語表現のあり方を考える。	清水康行（日本女子大学教授）	清水康行（日本女子大学教授）
2	日本語の音声的特徴	日本語の音声的特徴の概観。比較的単純な開音節構造を基本とすること、等拍性が重要であること等に触れ、表現上、留意すべき諸点を踏まえる。	同上	同上
3	日本語の文法的特徴	日本語の文法的特徴の概観。基本的文構造、文末決定性、運用面での文末の機能と実態に触れ、表現上の留意点に説き及ぶ。	同上	同上
4	敬語の基本	敬語論の概観。日本語の敬語の特徴と機能、その体系的把握について講じる。	菊地康人（東京大学助教授）	菊地康人（東京大学助教授）
5	適切な敬語	敬語の運用論。敬語運用上の諸注意を講じ、敬語の効果的使用、誤用について理解を深める。	同上	同上
6	日本語の現場（一）	職業的言語表現者であるアナウンサーをゲストに迎え、放送の現場における日本語の表現について考える。	清水康行	清水康行
7	文章語の特質	文章語と口頭語との基本的な性格差を論じ、文章語固有の特徴、表現上の留意点について概観する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	表記の理論	日本語の表記論の概観。表記の原理、法則性について講じる。	小野正弘(鶴見大学教授)	小野正弘(鶴見大学教授)
9	表記の実際	表記上の実際の諸問題に即しながら、表記と効率的な表現との関連について講じる。	同上	同上
10	句読法の問題	句読法の原理と運用について講じ、効果的な表現を得るため、句読法についての理解を深める。	清水康行	清水康行
11	文章構成の原理	文章構成法の概観。起承転結、序論・本論・結論などの文章構成原理について概観する。	同上	同上
12	文章構成の実際	効果的な表現となるための文章構成について実例を示しつつ考えていく。	同上	同上
13	日本語の現場(落語と日本語)(二)	プロの落語家をゲストに迎え、日本の代表的な話芸である落語における表現上の技法・特徴について考える。	同上	同上
14	定型表現の功罪	挨拶や手紙における定型表現を取り上げ、表現法としての重要さと陳腐さについて考える。	同上	同上
15	明日の日本語	日本語の今後について、特に表現手段と技法の問題に焦点を当てつつ考える。	同上	清水康行 菊地康人 小野正弘

＝歴史学の現在＝（ＴＶ）

〔主任講師：福井憲彦（学習院大学教授）〕

全体のねらい

歴史学は、この数十年来、大きな変化を経験してきている。それは歴史を見る目の変化であり、また史資料の種類や、それらを調べ考える方法の変化でもあった。現在の歴史学は、高校の教科書があたえるイメージとはちがうような歴史の姿を、さまざまに浮き彫りにしている。歴史学の現在を、具体例をたずねながら考えてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	歴史の広がり	現在からの問いがあって、歴史ははじめてその姿を現してくれる。では現在、どのような問いがどのような観点から、いかなる方法をもちいて立てられているのだろうか。歴史学が対象とする広大な地平を、まずは眺めわたすことから出発しよう。	福井憲彦（学習院大学教授）	福井憲彦（学習院大学教授）
2	証拠としての史料／資料	過去の社会について調べ、考えるには、手掛りがなければどうしようもない。文字史料は重要だが、絵画や地図、道具や建物など、非文字資料もまた大切である。歴史への問いの性質と史資料との関係など、基本的なポイントをおさえる。	同上	同上
3	歴史における時間	時間といえば時計が示す時間だけを考えるのは、現代人の悪いくせである。歴史的な過去において人々は時間をどのように意識していたのか、そしていま歴史を問う場合に、どのような時間の尺度を、問題に即して立てればよいのだろうか。	同上	同上
4	「こころ」と「からだ」	たとえば、何を食べていたのかわからずして、食糧一揆は理解できるだろうか。衣食住の日常や人々の感性、身体感覚などについての問いは、決して瑣末なことではない。人々の生きる可能性や病気、医療や衛生観ともかかわる領域である。	同上	同上
5	死生観の変化	死を前にした人々の態度、死の受けとめ方は、歴史のなかで大きなリズムを刻むように変化してきた。ヨーロッパ史について明らかにされたその変化の歴史を素材にして、心性の歴史の捉え方や史料との関係についても考える。	同上	同上
6	家族の歴史的肖像	現在常識とされているような家族のあり方は、いつの時代にもあったわけではない。人類学の発想や手法から学んだ歴史人類学は、家族の歴史について多くの知見をもたらし、歴史における女性や子供についての問いを招くことにも貢献した。	同上	同上
7	歴史人口学が開拓した地平	第２次大戦直後からまずフランスで、ついでイギリスで、統計以前の時代についてを含む、出生、結婚、死亡の率を中心とした地道な人口動態の研究が開始された。使用された史料は何で、数量的研究はどのような成果をあげただろうか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人と人とを結ぶもの	人は、たがいにさまざまな関係を形づくりながら、社会を構成している。家族だとか、村や町の住民としてのまとまり、あるいは同じ職業や趣味の関係など、人と人とが結びあう形は、どのように変化し、社会のあり方や政治支配と関係していたのだろうか。	福井憲彦	福井憲彦
9	刷新された政治史の射程	政治の理解も変化した。狭い意味での政界や議会、あるいは戦争や外交だけではなく、政治支配の正当性がどのように成立していたのかも問題である。イメージやシンボルの操作をはじめ、象徴権力を含めた権力の仕組みが検討されている。	同上	同上
10	地域からの視線	しばしば歴史の考察は、ひとつの国を基本的な枠組として行われていた。しかし一国の内部には多様な独自性をもった地域があったのであり、国家形成は多くの場合それらを統合しようとしたものであった。地域からの視線は、差異を見つめる目である。	同上	同上
11	ネットワークと歴史	他の地域や文化圏とまったく無関係に成立した、地域や文化圏の歴史はほとんどない。ここでいうネットワークとは、複数の地域や国、あるいは文化圏や文明を結びつけてきた複合的な関係であり、物や人、情報の動きに着目した歴史の捉え方である。	同上	同上
12	輪切りの発想	交通や情報手段の発達した現代はもちろんのこと、それ以前にあっても歴史の展開は、同時代における地域世界の横のつながりを無視しては、十分に理解できないことがある。経済や外交だけでなく、宗教や思想がかかわる場合も少なくない。	同上	同上
13	他者を見る目と歴史	ある地域世界や文化圏に生きる人々は、他の地域世界や文化圏をどのような目で見ていたのだろうか。そこにはしばしば自分たちの欲望や優越感、あるいは劣等感といった心性が、暗黙のうちに反映していた。それは歴史の展開と大きな関係をもっている。	同上	同上
14	歴史の重層する都市	歴史の変化というものは、ある時点で断層が起こったように生じることもあるが、屋根瓦が重なるようにしてずれながら生じることも多い。巧みな空間構築の技術が読みとれるような都市の事例から、社会にとっての文化技術の伝承や記憶について考えてみる。	同上	同上
15	歴史と環境	人間社会と場所のかかわりは重要である。無限成長を夢見た工業化や科学技術の発展、それを支えた現代人の欲望は、地球環境に重大な危機をもたらした。では歴史の展開は、その舞台である環境とどのようなかかわりをもっていたのだろうか。	同上	同上

＝ 日本の文化と思想（’９８） ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：大隅和雄（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

日本文化の特色を、文字の使用が始まり、仏教が伝来した頃から、現代に至るまでの歴史の中で解明することをめざす。社会の変化に応じて、日本人の生き方が変わり、それが、思想・文化としてどのように表現され、つぎの時代に受け継がれ、現代日本の思想・文化につながっているかを考える文化史にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本文化史の見方	はじめに、文化の概念と文化史の見方を説明し、日本史の時代区分の中で、各時代の思想・文化のあり方を概観する。日本における思想・文化は、外来文化との接触と緊張関係の中で形成されてきたことに注目し、文化史の時代区分を考えてみたい。	大隅和雄（東京女子大学教授）	大隅和雄（東京女子大学教授）
2	神々の祭りと日本神話	近年、遺跡発掘が進展して、日本文化史の源流の解明が進んできたが、ここでは、国家の統一の動きの中でまとめられた『古事記』『日本書紀』の成立の経緯と、記紀神話の特色、神の性格と祭りについて説明し、日本文化の基層を考えることから始める。	同上	同上
3	仏教の伝来と受容	６世紀の半ばに、百済から仏像と経巻が伝えられ、仏教を通じて外来文化を受容する道がつけられた。仏教受容の進展を、飛鳥時代の文化の動向、律令国家の仏教統制、唐文化圏の仏教、南都仏教の教学、最澄と空海の活動の諸項目に分けて説明する。	同上	同上
4	律令制度と官人の学問	日本の国家統一は、隋・唐の文物を摂取することによって進められた。律令の編纂とその運用に必要な知識の性格と範囲、官人の学問と漢詩文について考え、この時代に摂取された唐代の文化が、日本文化の骨格として大きな役割を果たしたことを説明する。	同上	同上
5	かな文字の成立と国文学	官人や僧侶は、漢字漢文を学ぶかたわら、日本語の表記のためにさまざまな試行を続け、平安時代の半ばに、かな文字を成立させた。漢文の外に、和文が成立したことの意味を考え、豊かな国文学の世界が拓かれたことを説明し、国風文化とその伝統を考える。	同上	同上
6	仏教の革新と庶民への浸透	仏教は、貴族文化を支える役割を担っていたが、日本の社会に浸透して行く中で、土着の信仰と習合し、日本化の道を辿った。鎌倉時代の仏教革新運動の中で生まれた、新しい仏教の動向を説明し、日本の思想と文化の中で仏教が果たしてきた役割を考える。	同上	同上
7	公家と武家の文化	中世の公家は、前代の貴族文化を憧憬の対象とし、その継受者であることを主張し、武家は、公家文化の受容に努める中で、武家の立場を自覚するようになった。公家社会の年中行事と、その武家社会への伝播を手がかりに、中世の文化の特色を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	芸能の成熟	中世に入って、庶民生活が向上し、貴族社会と大寺院の文化が、庶民の間にも伝播して行く中で、芸能の世界が拡大し、芸の洗練が進み、日本的な芸能が完成の域に達した。平曲などの語り物、舞と歌謡、能・狂言、絵解きと説話と絵巻、などについて説明する。	大隅和雄	大隅和雄
9	儒教とその日本化	中国の古典に関する知識は、貴族文化の支柱であったが、中世に入って、宋・元・明の学問が伝えられ、それまでの日本に存在していた中国文化の再編が始まった。徳川幕府が重視した朱子学、それを批判した古学について説明し、日本の儒学について考える。	同上	同上
10	国学と洋学	儒学が武家の学問の基本とされる中で、日本の古典に関する学問が起こり、日本精神を重視して儒教や仏教を批判する国学が生まれた。本居宣長を中心に、国学の成立と展開を説明し、同じ頃に始まった、西洋の知識学問の受容と、洋学の成立、性格について考える。	同上	同上
11	町人文化とその思想	近世の日本では各地に都市が成立し、町人や各地の知識人を中心に、新しい都市文化が生み出され、新しい経済関係を背景にした都市生活の諸相が、小説や俳諧、浄瑠璃や歌舞伎、風俗画などの中に描き出された。元禄、化政時代を中心に説明し、その特質を考える。	同上	同上
12	知識人と西欧の思想	幕末、明治の日本人は、西欧の力を前にした緊張の中で、近代化の道を急ぐことになったが、その中で指導的な役割を果たした知識人が、多様な西欧の思想・文化の中で選択したものが何であったかを説明し、明治の日本の思想と文化の特質を考える。	同上	同上
13	日本中心の思想	政府主導の近代化の中で、旧幕臣などの知識人は、表面的な近代化を批判し、前代の日本中心思想を受け継ぐ人は、欧化に反対して、日本の伝統を守ることを主張した。日本中心主義の諸系譜について説明し、その国家観、歴史観などについて考える。	同上	同上
14	近代日本の諸宗教	近代の日本では、神信仰が国家を支える宗教とされ、神社制度が整えられた。いわゆる国家神道の成立過程、戦前の諸宗教の統制、戦後の政教分離、新宗教の活動について説明し、近代の日本人が、宗教に求めてきたものについて考える。	同上	同上
15	国際社会における日本文化	交通通信が急速な発展を遂げる中で、社会生活の世界的な共時性が生まれ、文化の国際化が進んでいる。そういう中で、私たちが、日本の伝統的な文化を理解し、日本文化の特質を外国人に紹介する、というのはどういうことなのか、問題を指摘し整理を試みる。	同上	同上

＝人　文　地　理　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：西川　治（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間集団は、さまざまな土地空間に適応して固有の生活様式を創造し、生活環境を拡充し、村落、都市、国家などの多様な地域社会と人文生態系を組織し、多彩な文化景観を展開し、互に交流し合い地球社会化を進めつつある。本講義では、このようなプロセスを文化地理学的に考察し、より快適で美しく持続的に発展する道を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球人意識と人文地理学	大航海時代以降の地球全体観の発展、啓蒙主義における人類の一体観と風土的多様性の認識などは人文地理学の成立を促した。日本でも西欧人との交流により世界的視野が開け、江戸時代には地理的啓蒙思想が育ち、地球人的意識も生まれた。	西川　治（東京大学名誉教授）	西川　治（東京大学名誉教授）
2	言語の分布と民族移動	言語の世界的な分布に目を向けて、それによって世界の民族の分布状況をマクロに理解するために、今からおよそ1万年前から以降に生じた気候変化と関連づけて、諸民族の移動の跡を推究してみる。	鈴木秀夫（清泉女子大学教授）	鈴木秀夫（清泉女子大学教授）
3	民族の住み分けと融合	諸民族は独自の伝統的な文化を保持しつつ住み分けているが、他方で民族間の文化交流や民族の融合・分化も活発であることをヒマラヤ・雲南などの事例で示す。食事文化の違いがかつての民族の住み分けの大枠を形成した可能性が大きいことにも触れる。	諏訪哲郎（学習院大学教授）	諏訪哲郎（学習院大学教授）
4	食事の文化地理学	今日では新大陸起源の作物も多用されているが、ユーラシアの食事文化の主役はコメとムギで、その調理法も多様であることを各地の実例で示す。コメやムギの普及以前にイモや雑穀が重要であったことが、神話や儀礼から伺えることにも言及する。	同　上	同　上
5	服飾の文化地理学	砂漠では、強い日射や砂ぼこりをよけるための被り物は必需品である。また難民にとって金の装身具や宝石は貯金通帳よりも役に立つ。民族服は少数民族の大切な文化的アイデンティティとなる。これらを例にして「服飾」と人々の暮らしについて総合的に考察する。	向後紀代美（東北学院大学助教授）	向後紀代美（東北学院大学助教授）
6	民族音楽の風土性	洋楽に対して邦楽と呼ばれ、とかく特殊な存在とみられがちな日本の音楽は、実は広くアジアの諸地域と結びついて展開してきたものである。北方系遊牧民族の長い歌、南方系農耕民族の短い歌との関連性、シルクロード、マリンロードを通じての楽器の交流を探る。	江波戸　昭（明治大学教授）	江波戸　昭（明治大学教授）
7	日本の風土と国民性	ユーラシア大陸の東岸に連なる日本列島と、西岸部に位置するドイツ連邦を対象にして、それぞれの風土的特色、農村と都市に見られる差違をふまえて、日本人の自然観や国民性についての考察を試みる。	西川　治	西川　治

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	山村・漁村の生活と民俗	山村では半農半林、漁村では半農半漁の生業が普通であった。最近では高原野菜の栽培、酪農、観光経営で豊かになった山村も見られる。また漁法の近代化による専業漁家や民宿を営む漁家もふえている。しかし、伝統的民俗は比較的よく伝承されている。	市川健夫(長野県立歴史館館長・東京学芸大学名誉教授)	市川健夫(長野県立歴史館館長・東京学芸大学名誉教授)
9	地域の活性化	地域の特性を活かした地域振興の事例を紹介する。そのさい、当該地域を大都市圏、中心地圏網、広域行政圏の中に位置づけ、地域間の協力あるいは競合関係に留意したり、住民の意向や自治体首長の地域経営理念や実績などにも立ち入って考察することになる。	西川　治	西川　治
10	工業活動と地域社会	近年、国際化が進むなかで工業が依然として地域の経済活動に重要な役割を果していることを述べ、技術革新が進むなかでの工業地域システム、風土に根ざした地場産業、それに大都市工業の役割について動態的に考察する。	竹内淳彦(日本工業大学教授)	竹内淳彦(日本工業大学教授)
11	日本産業の国際化と国際文化交流の深化 企業文化の革新と地球文化の創造	日本の産業は、古くからその技術、原材料の輸入、製品の輸出を通して国際市場と深く関連してきた。最近では、その生産工程の一部または全部を海外に移転することが、近代産業のみならず地場産業でも進展して、それを支える文化の交流が不可欠となってきた。	宮川泰夫(九州大学教授)	宮川泰夫(九州大学教授)
12	江戸・東京・東京圏	ユニークな中央集権都市であった江戸は、近代化の過程で地域構造を大きく変えた。交通システム・土地利用・都市景観は、伝統的なものと欧米的なものが混り合い、しかもグローバルな世界都市に成長して、人・物・情報が入り乱れた活気ある巨大都市となった。	正井泰夫(立正大学教授)	正井泰夫(立正大学教授)
13	世界を結ぶ地理情報システム	地理情報はさまざまに利用されている。都市計画、遺跡の発掘、ナビゲーションシステム、都市のインフラストラクチュアの管理、天気予報など、幅広く利用されている。ここでは主として地理情報システムとリモートセンシングについて学習する。	久保幸夫(慶應義塾大学教授)	久保幸夫(慶應義塾大学教授)
14	季節文化と地球環境	今後の情報社会では、シミュレーションによって将来を予知し現在の時点で対応しておくようになる。ここでは数値地図とリモートセンシングデータを用いて、気候と植生・土地利用との対応を明らかにし、それを鍵として地球規模の気候変動の影響予測を試みる。	野上道男(東京都立大学教授)	野上道男(東京都立大学教授)
15	地球社会と人文地理学の役割	人間の生活環境、生活空間についてグローバルに比較研究する人文地理学の応用面は実に広い。かつて内村鑑三は、世界と日本の地理学的考察に基づいて日本国の天職について論じた。地球環境問題をはじめ近代文明の暗黒面の解消に向けて人文地理学の役割を探る。	西川　治	西川　治

＝社会科学入門＝（ＴＶ）

主任講師：坂井素思（放送大学助教授）
主任講師：岩永雅也（放送大学助教授）
主任講師：橋本裕藏（放送大学助教授）

全体のねらい

社会科学とはどのような学問なのか。何を対象とし、どのような方法を用いる学問分野なのか。社会科学の各専門分野へと学習を進める前に、社会科学に関するおおよそのイメージを形作り、基礎的な準備を行うことが必要である。この講義では、社会科学とは何かを知るため、第一に社会を認識することの目的と意味を明らかにし、第二に社会科学の各専門分野に共通する研究上の技法を具体的に学習した上で、第三に政治法律、経済、社会の各分野での典型的な課題に関する研究例をを学ぶ。さらに、社会科学各分野個別の研究に関して理解を深めるだけでなく、さまざまな分野に分岐した社会科学的知識の総合化の可能性と具体的な方法についても展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会のなかの個人	わたしたちがはじめて社会科学というものに出会うのはどのようなときだろうか。交通規則になぜ従わなければならないのか、と考えるときだろうか。選挙の結果が気になるときだろうか。景気の先行きについて考えるときだろうか。なぜわたしたちは社会科学という学問を必要とするのか。その原点にあるものを見つめてみたい。	坂井素思（放送大学助教授）	坂井素思（放送大学助教授）
2	社会とは何か	社会科学が認識の対象とする社会について、とくに自然科学の対象である自然事象、人文科学の対象であるロゴスなどとの対比において、基本的な意味を明らかにし、さらにその構造と機能を検討する。	岩永雅也（放送大学助教授）	岩永雅也（放送大学助教授）
3	社会科学の系譜	社会科学は社会を知るための学問であるが、この章でこのような社会科学の系譜を辿ってみたい。社会科学的な知識がいかに形成されてきたのか、その起源と形成過程について考えることにする。このなかで、社会科学がこれまでどのような問題を対象としてきたのかを考察し、以下の章に進むための準備を整える。	坂井素思	坂井素思
4	問題の発見	ある社会現象に直面して、人はこれを是としあるいは非と考える。このとき各自の立場を漠然と表明したのでは、他者に自己の認識内容や問題意識を伝えることはできない他方、一個の社会現象も見方をかえると違った問いかけをしてくる。ここでは、社会事象を自己の問題として認識する方法を考える。	橋本裕藏（放送大学助教授）	橋本裕藏（放送大学助教授）
5	認識のプロセス	社会事象の認識には、いくつかのレベルに分けられた種々の方法がある。すなわち認知レベルでの指標化と測定、解釈レベルでの追体験、再構成、あるいは比較レベルでの類型化等である。ここでは、社会科学的な事象認識のさまざまな形を整理しながら、その方法を学習する。	岩永雅也	岩永雅也
6	図書館の利用	「真理はわれらを自由にする」というのは、ある図書館のモットーである。この標語に現れているように、図書館は資料や情報の収集に終わるところではない。実はこのようなプロセスで、人は多くのことを学ぶのである。図書館は人と文献をミックスするところであると同時に、人間を文献から解き放つところでもある。	坂井素思	坂井素思
7	情報の収集	ある社会事象につき、問いを見つけたらこれを解決するために情報を収集する必要がある。情報がなぜ必要か、どんな情報を集めるべきか、どのように集めるか、集めた情報をどのように使うか。それらの点について考察する。	橋本裕藏	橋本裕藏

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	調査の技法	社会事象を正確に把握するためには、目的に適合した形態と内容を持った調査を行うことが必要である。適切な調査とはどのようなものか、どのように実施すればよいのか等、社会科学的な調査の概略を学習する。	岩永雅也	岩永雅也
9	論文の書き方	実際に小論文を書いてみる。このとき、何をどのように書くのかに留意する。論理の飛躍はないか、文献や資料を的確に用いているか、構成は適切か。これらの点にふれながら、論文と論文以外の書き物との違いがどこにあるのかを考える。編、章等の立て方、注のいれ方等にも言及する。	高橋和夫(放送大学助教授)	高橋和夫(放送大学助教授)
10	表現の技法	研究成果の表現形態は、論文に限定されているわけではない。口頭発表や映像を用いた表現やディスカッションの技法など、活字媒体以外のメディアを用いる表現方法について学習する。	岩永雅也	岩永雅也
11	政治学における研究	ここでは社会科学としての政治学についての事例研究を行う。特に、戦後政治の分野に題材をとって、倫理的、実践的事例を考察する。	川出良枝(東京都立大学助教授)	川出良枝(東京都立大学助教授)
12	法律学における研究	ある社会事象を法的視点から捉え、一定の論証を経て結論を導く過程を、実際の法律問題を素材にして示し、法学及び法律学、並びに法律関係諸領域の研究の仕方等を考える。	橋本裕藏	橋本裕藏
13	経済学における研究	経済学では、何をどのように知ろうとしてきたか。経済分野でみることのできる、問題発見、資料収集、結論の導き方などについて、ここで考えてみる。すべての経済学分野について観察することは到底できないので、ここではひとつの論文を取り上げて、その形成プロセスを追ってみることにする。	坂井素思	坂井素思
14	社会学における研究	社会学は、現実の社会事象をあるがままに経験的に把握し、その錯綜した複雑な現象形態の背後にある法則性や事象間の関連構造を明らかにすることを目的とする学問分野である。ここでは、古典的な研究成果を参照しつつ、実際的な社会学研究のモデルを展開する。	岩永雅也	岩永雅也
15	社会科学の目的	社会科学という学問が最終的に目指す「目的」には、どのようなことがありうるだろうか。社会科学研究はどのような意味で人間にとって「役立つ」といえるのか。この章では、社会科学の議論方法、結論を導く方法などを考察しながら、社会科学研究の効用について一緒に考えてみたい。	坂井素思	坂井素思 岩永雅也 橋本裕藏

＝法　学　入　門＝（ＴＶ）

〔主任講師：星野英一（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

教養学部における「法学入門」は、法学部に進学する学生に対する「法学入門」とは異なり、何への入門であるべきかなど、困難な問題を含む。とりわけ、「法律嫌い」といわれる我が国民に対するこの講義は、この点を常に自覚し、そのような人々が少しでも「法」「法律」の重要な意味を理解する一助になることを目指したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	法学学習の困難さ、「法」と「法律」	始めに、法学の取りつきにくさの理由を一言する。次いて、全体の序論の一として、「法」「法律」の区別について述べる。両者は我が国では従来混同して用いられているが、原語である、droit,Recht;loi,Gesetzは意味を異にするものであり、その用法の区別がとりわけこの講義にとって有用であるので、説明する。	星野英一（東京大学名誉教授）	星野英一（東京大学名誉教授）
2	法と法律に対する見方、かかわり方	序論に二として、色々の人々と法・法律のかかわりと、その法律に対する見方について考える。法律実現の仕事に専念するのは「法律家」だが（これにも種々のものがあり、法律との関係は一様でない）、その見方と、法律家以外の一般の人々のそれとはどう違うか、一般の人々はどのようにして法律の中に入ってゆくのか、などを考える。	同　上	同　上
3	法律の体系　(1)①社会生活の面と②その規制の方法の面から	法律の中に少しづつ入ってゆく。まず、「法律」の全体像を示すことから始める。この際、我々の営んでいる社会生活（経済、家族、隣人関係、学問・芸術・宗教など）と、法律に独特の社会関係規制の手法（刑罰、実力行使、権利義務設定など）の二面から立体的にアプローチする。	同　上	同　上
4	法律の体系　(2)社会生活の各面からの具体例③観念体系としての法律の構造	以上の点につき、具体的に社会生活の各面について例を上げて検討する。続いて、観念体系としての法律の構造（法律独特の抽象的なもの）について説明する。	同　上	同　上
5	法・法律の各局面 (1)社会規範としての局面	以下やや抽象的に、法・法律の持つ幾つかの局面について眺めてゆく。第一は、その社会規範としての局面であり、法・法律と習俗及び道徳との関係を検討する。	同　上	同　上
6	法・法律の各局面 (2)人間の理想という面①「正義」「自然法」	第二に、人間の理想と、法・法律がどうかかわっているかを考える。まず、西欧において法・法律自体の理想とされてきた「正義」について述べる。さらに、西欧においては古くから、人によって作られた法律を超える「法」とされていた「自然法」について一言する。	同　上	同　上
7	法・法律の各局面 (3)人間の理想という面②他の理想との関係－法律実現の手段	次いで、人間の理想の追求の営みである、学問（「真」の探求）、芸術（「美」の探求）、宗教（「聖」「愛」の探求）と法・法律の関係を考える。進んで、法・法律の第三の局面である、法規範の実現の強力な手段としての実力と法・法律の関係を扱う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	法・法律の各局面 (4)法律現実の手段の面②法律技術	法・法律の第四の局面は、理想や社会的目的を達成するための独特の手段である法律技術（言葉を用いる技術）であり、この点につき、また広く技術と法・法律の関係について説明する。	星野英一	星野英一
9	日本法の形成(1)	明治以前にも法・法律は存在していたが、明治以後の（我々の関係している）法律は、明治時代以来欧米諸国から輸入したものであるが、科学や技術の輸入と異なり、思想・観念の産物の輸入であって、大変な努力を要した。以下二回にわたりその過程を辿る。	同上	同上
10	日本法の形成(2)	その第二回目。	同上	同上
11	法・法律の形成と実現 (1)形成（特に立法）	以下やや抽象的に、法・法律がどのようにして形成され、作られた法律がどのようにして実現されるかについて説明する。第一は、法・法律の形成についてだが、特に今日では「立法」が重要であるので、これについて扱う。	同上	同上
12	法・法律の形成と実現 (2)実現①法律の解釈、適用、「法源」の問題	第二に、法律は、実社会に適用されるが、この際、法律の意味内容を明らかにする「法律の解釈」という作業が不可欠である。また、（特に裁判所は）法律の他に何を適用すべきか、適用してよいかにつき「法源」の問題として議論されているので、一言する。	同上	同上
13	法律のわが国における実態－欧米近代法との対比	第三に、９、１０と１１、１２で扱ったことを総合して、「法律」がわが国でどのように実際に行なわれているか、わが国における「法」（ないし日本人の法意識）はどのようなものか、について考える。この際、欧米近代法と対比しつつ眺める。	同上	同上
14	法学 (1)法学の体系、欧米の法学	最後に、法・法律の研究の対象としている「法学」を取り上げる。法学の体系一般（実用法学と基礎法学）を概観し、わが法学に大きな影響を与えている欧米の法学について一言する。	同上	同上
15	法学 (2)わが国の法学（特に法学と法律実務）	ついで、我が国の法学につき、その特色、長所と短所などについて私見を述べる。特に、我が国における法学と法律実務との関係（乖離していて法学は実務に役に立たないとよく言われる）について、種々の面から検討する。	同上	同上

＝国　家　と　人　間＝（ＴＶ）

―憲　法　の　基　本　問　題―

〔主任講師：佐藤幸治（京　都　大　学　教　授）〕

全体のねらい

日本国憲法の諸規定について有機的・総合的に理解できるように工夫しながら、現代国家に生きる人間が「自由で価値ある生」を全うできるような制度の仕組みや運用のあり方を考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家・主権・憲法	(1)　国家と主権 (2)　国家と憲法 —— 立憲主義の展開 (3)　国民主権の意義 (4)　立憲主義と現代国家	佐藤幸治（京都大学教授）	佐藤幸治（京都大学教授）
2	法の支配と法治国家	(1)　法の支配と法治国家 (2)　法の支配と国民主権 (3)　日本国憲法と法の支配	同　上	同　上
3	国家・個人・集団	(1)　近代立憲主義における個人と集団 (2)　日本国憲法の集団観 (3)　いわゆる「部分社会」論 (4)　集団の自治と個人の自由	同　上	同　上
4	個人の尊重と幸福追求権	(1)　基本的人権・個人の尊重・幸福追求権 (2)　幸福追求権と憲法の保障する各種人権 (3)　基本的人権の保障の限界 (4)　私人間における人権	同　上	同　上
5	プライヴァシーと個人情報の保護	(1)　プライヴァシーの権利の意義 (2)　プライヴァシーの権利の侵害と司法的救済 (3)　個人情報保護制度	同　上	同　上
6	法の下の平等	(1)　法の下の平等の意義 (2)　日本国憲法と法の下の平等 (3)　法の下の平等と家族生活 (4)　議員定数不均衡問題	同　上	同　上
7	内心の自由の保障	(1)　思想・良心の自由 (2)　信教の自由 (3)　学問の自由	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	表現の自由の保障	(1) 表現の自由の意義 (2) 表現の自由の保障とその限界 (3) 「知る権利」と情報公開制度 (4) 集会の自由の保障とその限界	佐藤幸治	佐藤幸治
9	経済的生活と良き生活環境	(1) 経済的自由の意義 (2) 経済的自由の制約 (3) 社会権の保障の意義	同上	同上
10	国会と立法権	(1) 国会の性格と地位 (2) 立法権の意味 (3) 国会の組織と活動 (4) 財政立憲主義	同上	同上
11	内閣と行政権	(1) 内閣の性格と地位 (2) 行政権の意味 (3) 内閣の組織と活動 (4) 独立行政委員会	同上	同上
12	地方の政治と住民自治	(1) 地方自治の本旨 (2) 地方公共団体とその機関 (3) 条例制定権とその限界	同上	同上
13	裁判所と司法権	(1) 裁判所の性格と地位 (2) 司法権の意味 (3) 裁判所の組織と活動	同上	同上
14	憲法の保障と違憲審査制	(1) 憲法の保障の意義 (2) 憲法の改正 (3) 違憲審査制	同上	同上
15	国際協和と平和の追求	(1) 国際協和と平和の追求 (2) 「国際協和」の法的側面 －98条2項- (3) 「国際協和」の政治的側面 －9条－	同上	同上

＝政　治　学　入　門＝（Ｒ）

主任講師：阿部　齊（放送大学教授）
主任講師：久保文明（慶應義塾大学教授）
主任講師：川出良枝（東京都立大学助教授）

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を提供したい。同時に、政治学の入門講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。政治の世界に起こりつつある最近の変化にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	政治と権力	租税と政治　教育と政治　環境保全と政治　政治の機能 権力の特性	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	政府の組織と権力の分立	現代政府の組織原理　議院内閣制　大統領制　社会主義国の政治制度　立憲主義と法の支配	同　上	同　上
3	代議制と議会	民主主義国家と議会　代議制とその発達 地域代表と国民代表　二院制　議会の役割 議会と行政府　　立法過程　議会の問題と課題	久保文明（慶應義塾大学教授）	久保文明（慶應義塾大学教授）
4	行政府の活動	行政府の活動　内閣総理大臣と内閣　官僚制の概念 公務員制度　立法国家から行政国家へ　官僚制の統制 大きな政府と小さな政府	同　上	同　上
5	選挙と選挙制度	政治参加と選挙　政治の大衆化とその意義 投票することの意味　選挙制度の諸類型 わが国の選挙制度改革	同　上	同　上
6	政党と政党制	政党の定義　名望家政党から大衆政党へ　政党の機能 政党制の諸類型　日本の政党政治	同　上	同　上
7	利益集団の圧力活動	現代の政治過程と利益集団　利益集団の活動様式 利益集団の政治的資源　公共利益団体 利益集団と政治体制	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	地方自治と市民参加	地方分離と地方自治　団体自治と住民自治 固有事務と委任事務　首長と議会　住民運動と市民参加	阿部　齊	阿部　齊
9	社会福祉	夜警国家から福祉へ　社会問題と社会政策 社会保障制度の発展　高齢化社会の福祉政策 福祉国家と民主政治	同上	同上
10	自由主義	古典的自由主義　生命と所有の保障　信条の自由 経済活動の自由　自己実現の尊重 消極的自由と積極的自由　自由主義と基本的人権	川出良枝（東京都立大学助教授）	川出良枝（東京都立大学助教授）
11	民主主義	古代の民主政　代議制の歴史　人民主権 自由主義と民主主義　自由民主主義体制の成立 近代社会と民主主義	同上	同上
12	現代の自由民主主義－可能性と課題	社会主義の挑戦　ファシズムと大衆民主主義 現代民主主議論　現代自由主議論	同上	同上
13	国家とはなにか	近代国家の三要素　国家の領域性　主権国家の成立 国民国家の創設　ナショナリズム　近代国家を超えて	同上	同上
14	国際秩序の理論	国際秩序をどう捉えるか　現実主義　相互依存論 世界システム論　国際秩序の歴史	同上	同上
15	日本の政治	明治国家の遺産　戦後の民主主義　保守政党の統治体制 政治改革　一党優位の政治から連合の政治へ	阿部　齊	阿部　齊

＝国　際　関　係　論＝（ＴＶ）

（主任講師：阿部　齊（放送大学教授）
主任講師：高橋和夫（放送大学助教授））

全体のねらい

現代社会の特徴の一つは、その顕著な国際化である。資本や商品や情報は、国境を越えて流通し、人間の移動も日を追って自由化されている。今日の社会科学を学ぼうとするものにとって、国際関係に関する正確な知識は、不可欠になりつつある。また、市民の教養としても、国際関係の基礎的な知識は不可欠であろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際社会の成立	ヨーロッパにおける国際社会の形成と発展を歴史的に追求するとともに、それが地理的に拡大されて、全世界が一個の国際社会を形成するに至った過程をたどりたい。また、ヨーロッパの国際社会の秩序と安定を可能にした諸要因にも言及する。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	国家とナショナリズム	国際社会を構成する単位としての近代国家の特徴を明らかにするとともに、近代国家の史的変容の過程をたどる。さらに民族の国家的独立と発展をめざす運動としてのナショナリズムの展開を追いながら、ナショナリズムが現代の国際関係において果たす役割を論ずる。	同　上	同　上
3	国際政治の展開／冷戦後の世界	冷戦後は地域紛争の時代であるとの通説に反論し、冷戦とは代理戦争という名の地域紛争の時代であったことを示す。また冷戦後の地域紛争の特徴を解説する。またＥＵの拡大に代表されるようなブロック化とバスク地方や北イタリアの独立運動に象徴されるようなマイクロ・ナショナリズムの台頭を検討する。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授）
4	国際社会の法と秩序	国際法と国内法を比較しながら、国際法の特質を明らかにする。次いで西ヨーロッパにおける国際法の成立と発展をたどり、現代の国際社会の秩序を維持する上で、国際法が果たしている役割を明らかにする。	児矢野マリ（静岡県立大学専任講師）	児矢野マリ（静岡県立大学専任講師）
5	国際連合の機能	1996年12月に東京の国連大学で開催された日本の国連加盟50周年の記念シンポジウムの映像を利用しながら国連改革を考える。具体的には、日本が安保理の常任理事国に立候補している問題を検討する。映像にはガリ国連事務総長（当時）や小和田国連大使（当時）などが登場する。	高橋和夫	高橋和夫
6	ヨーロッパの国際関係	国際社会の発展の原点ともいうべきヨーロッパで、国際関係がいかなる特徴を持っているかを明らかにする。ヨーロッパ共同体の現状とその将来の可能性にもふれたい。	高柳先男（中央大学教授）	高柳先男（中央大学教授）
7	東アジアの国際関係	台湾に近い石垣島でのロケ映像を織り混ぜながら東アジアの国際関係を考察する。ポイントは朝鮮半島情勢の展望と中国の発展の国際的な波紋である。	高橋和夫	高橋和夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	アメリカの国際関係	アメリカ合衆国の伝統的対外政策ともいうべき独立主義と膨張主義の構造的関連を明らかにしながら、今日のアメリカ合衆国が直面する外交課題を検討する。さらに、アメリカ合衆国と対比しながら、カナダとラテンアメリカの対外関係の特質にも言及したい。	阿部　齊	阿部　齊
9	イスラム「原理主義」の挑戦	イスラム主義の台頭を世界的な様々な宗教の復興運動の一部と位置付け、その背景を解説する。特にアフガンと呼ばれる人々の存在に光を当てる。最後にイスラム世界との共存の道を探る。	高橋和夫	高橋和夫
10	南北格差と貧困	現代の国際社会にみられる最も重要な問題は、北側諸国の豊かさと南側諸国の貧しさとの間に横わる巨大なギャップである。南側諸国に貧困をもたらした原因を明らかにするとともに、貧困をなくすための国際協力の現状と課題を検討する。	阿部　齊	阿部　齊
11	人口問題と国際政治	人口増加に食料の供給が追い付かないのではとの議論がある。この議論とその反論を検討する。また発展途上国での人口増加が生み出す先進国への流入圧力を紹介し、最後に先進諸国の人口の高齢化が国際政治にどのようなインパクトを与えるかを日本を例にとって考える。	高橋和夫	高橋和夫
12	環境問題の国際化	今や環境問題は、国境を越えて拡大し、地球規模の問題になった。とくに深刻な問題である地球の温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊などを生み出した原因を明らかにしながら、環境問題に対する国際的取り組みの現状と課題に迫る。	阿部　齊	阿部　齊
13	エスニシティと文化の多元化	冷戦集結後の世界における最も顕著な現象の一つは、民族紛争の深刻化である。民族問題を解く新しい基本概念であるエスニシティの意義を明らかにしながら、多民族社会を考える新しい視点としての多文化主義に言及したい。	川出良枝（東京都立大学助教授）	川出良枝（東京都立大学助教授）
14	戦争と平和	戦争の原因を追求し、平和の可能性を探る。戦争の形態変化を跡づけながら、戦争が現代の国際関係においていかなる位置を占めるかを検討する。さらに、戦争を抑制するものとして、安全保障、軍縮と軍備管理、核兵器の廃絶といった問題にも言及したい。	高柳先男	高柳先男
15	国際関係の多元化／新しいパラダイム	外交を国家が外務省を通じて排他的に行う時代は過ぎ去った。企業が、地方自治体が、ＮＧＯが、個人が国際関係に関与する新しい時代が始まっている。ＮＧＯやアメリカのミシガン州政府の東京事務所などの取材を織り混ぜながら、国際関係の多元化の状況を紹介する。	高橋和夫	高橋和夫

＝経　済　学　入　門＝（Ｒ）

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

我々の日常の経済生活に則して、経済学の骨組みを概説する。家計、企業、政府、外国という経済単位の活動について論じ、経済社会の構造を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済生活と経済学	経済学とは何か　人間の経済活動　私的主体と公的機関 取引の行なわれる場－市場 消費財　サービスの市場　労働力の市場　企業の経済活動 資本の市場　私的主体と公的機関	嘉治元郎（放送大学副学長）	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	家計の経済活動 Ⅰ　所得と資産	家計の経済力　家計の所得　家計の資産　資産と所得 所得の種類と国民所得	同　上	同　上
3	家計の経済活動 Ⅱ　消費と貯蓄	所得の処分　可処分所得　消費と貯蓄　日本の貯蓄率 消費性向　最適な消費支出　個別家計の消費と総消費	同　上	同　上
4	企業の経済活動 財の生産	企業の生産活動　生産の行程　生産活動の目的 費用と収入　物的資本	同　上	同　上
5	市場の機能	市場とは何か　市場の種類　価格の機能 需要供給の均衡　市場機構の作用	同　上	同　上
6	産業構造 －財と サービス－	財とサービス　サービスの重要性　サービスの種類 サービス生産の特色　公務と公共サービス	同　上	同　上
7	貨幣	貨幣とは何か　金本位制　管理通貨制 通貨管理の目的　貨幣量管理の手段 価格とは何か	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	金融機関の役割	金融機関の経済活動　お金の便利さと利子 資産の需要と供給　資産の組み合せ	嘉治元郎	嘉治元郎
9	経済社会の構造	巨視的（マクロ）理論と微視的（ミクロ）理論　集計された経済量　一大家計の経済行動　一大企業の経済行動 総需要と総供給	同　上	同　上
10	総需要の理論	経済の変動　消費の決定　投資の決定 総生産水準の決定	同　上	同　上
11	総供給の理論 －経済成長－	総供給能力　供給能力の決定要因　経済発展の諸要因 労働力の変化　生産設備の変化　技術の進歩	同　上	同　上
12	完全雇用と物価	雇用水準の決定　失業とは何か　生産性　好況と不況 インフレーションとは何か	同　上	同　上
13	対外経済関係	対外経済関係とは何か　対外経済関係の内容 国際収支表　貿易の理論　国際通貨　為替レートの変化 生産要素の国際的移動　経済分析の国際化	同　上	同　上
14	政府の経済活動	財政支出の種類　財政支出の規模 「小さい政府」をめぐる論議 政府の収入　租税の種類　財政収支　公債の負担	同　上	同　上
15	経済政策の目標	経済政策の役割　独占の禁止　巨視的経済政策の目標 完全雇用の達成と維持　経済の安定の実現 経済発展の促進　巨視的経済政策の手段 所得配分の公正化　適切な対外経済関係の実現	同　上	同　上

＝社　会　学　入　門＝（Ｒ）

〔主任講師：長谷川公一（東北大学教授）〕

全体のねらい

「紛争」に焦点をあてながら社会学の基本的な考え方やものの見方、基本概念を理解し、現代の社会変動の動向を探る「社会学入門」であり、「現代社会論」である。紛争と社会構造、紛争の場、紛争解決を促進するための政策学を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	20世紀の産業社会	20世紀とくに戦後の高度産業社会は「ゆたかな社会」を現実化したが、社会構造の変容にともなって、社会問題も貧困・失業・不況を中心とするものから大きく変化した。現代の対立・紛争および社会的危機の構造的源泉を概括する。	長谷川公一（東北大学教授）	長谷川公一（東北大学教授）
2	「和の文化」と日本社会	日本社会は長く「和を以て貴し」とすることが美徳とされ、異を唱えることは忌避されがちだった。利害対立の顕在化を日本社会ではどのようにして調整してきたのか、また近年の裁判に対する人びとの考え方の変化を考察する。	同　上	同　上
3	紛争研究と社会学	紛争に関する社会科学的な研究のなかで、社会学的なアプローチの特質はどこにあるのか。紛争・対立・競争をどのように定義すべきか。社会学理論の２つの基本的な立場である紛争モデルと均衡モデルの特長を整理し、それぞれの問題点を考察する。	同　上	同　上
4	紛争は社会にどのように役だっているか	争いや対立はゼロに近づくほどよいというわけではない。「雨降って地固まる」と言われるように、争いは社会の統合にも役立つ。争いはコミュニケーションの形式でもある。社会問題の関示機能はじめ、争いの様々な効用を考える。	同　上	同　上
5	紛争と法・裁判	裁判制度は近代社会に特有の争いの解決のしかたである。裁判の特質はどこにあるのか、法の役割は何か。ウェーバー、川島武宜らの議論を手がかりに、裁判と法による社会統制と秩序維持のメカニズムを考察する。	同　上	同　上
6	家族危機と時代・世代・年齢	1983年前後に家族危機論が高まったのはなぜか。時代効果・世代効果・年齢効果を峻別してとらえ、「団塊の世代」の女性たちに焦点をあてて、価値観が多様化しライフスタイルの選択肢がひろがった現代における新しい家族のあり方を考察したい。	同　上	同　上
7	ジェンダーをめぐる対立・紛争	女性と男性では社会的に期待される行為様式が異なっている。社会的文化的性差はとくに1960年代後半以降、男女間の社会的対立・紛争の焦点となってきた。女性学の問題提起をうけとめつつ、「女らしさ」「男らしさ」をめぐる争いを考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	組織における対立・紛争	目的達成集団としての組織は、効率性の追求か成員間の共同性の重視かという基本的ジレンマを抱えている。組織のリーダーに期待されるのは、組織内の利害調整と、効率性と共同性との間でバランスをとることである。	長谷川公一	長谷川公一
9	階層変動と階級対立の制度化	20世紀、とくに20世紀後半以降、階級間対立の制度化がすすんだが、階層間の利害対立はなお経済政策や福祉政策などをめぐる基本的な対立軸をなしている。	同上	同上
10	環境問題と紛争	公害問題は地域社会に深刻な対立・紛争をもたらした。近年環境問題の焦点はごみ問題などに代表される生活公害型のものに変化してきたが、それは大都市圏と過疎地、南北間、世代間での新たな利害対立を引き起こしつつある。	同上	同上
11	社会運動とNGO・NPO	パートナーシップやコラボレーションに焦点をあててNGO・NPOの特質を考察する。従来の告発批判型の住民運動・市民運動から、対案提示型のNGO・NPOへの転換による政策提案の可能性と意義を考察した。	同上	同上
12	ゲーム理論と協力行動の成立条件	囚人のジレンマとその応用的なゲームをとおして、合理的選択理論の特質を検討する。「反復囚人のジレンマ・ゲーム」における「協力行動」の成立条件と、「しっぺ返し」戦略の社会学な意味を考察する。	同上	同上
13	合意形成と公共政策の転換	紛争は社会システムの矛盾を顕在化させ、表現する。力による紛争の抑え込みには限界がある。上からの「合意調達」にかわって合意形成をはかるためには、市民参加型の制度形成と公共政策の転換がもとめられている。	同上	同上
14	紛争と秩序	「自己決定」をもとめる個人主義の進展は、既存の権威を相対化させ、現代社会に共通する正当性と統合の危機をつくりだしている。ホッブズ以来の自由と共同性のジレンマをめぐる諸説の検討をとおして、社会の秩序維持のメカニズムを原理的に考察する。	同上	同上
15	「共生」の時代をめざして	現代社会は、(1)自然と人間との、(2)異質な文化との、(3)都市と農村、中央と地方との、(4)社会的弱者との、(5)女性と男性との「共生」を課題としている。現代の諸紛争からどのように共生社会を展望しうるか、総括的に考察する。	同上	同上

＝民　俗　文　化　史＝（ＴＶ）

〔主任講師：宮田　登（神奈川大学教授）〕

全体のねらい

私たちの身近かに伝承されている日常生活文化を通して日本文化の構造を探っていく。その場合、現在まで伝承されている日常生活文化から過去にさかのぼらせて日本列島の社会や文化の特色をとらえるという方法から歴史を再構成していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	民俗文化史の構想	民俗文化史は、民俗学的視点から、現在みられる慣習を素材として歴史的世界を再構成する考え方にもとづいている。柳田民俗学や折口民俗学の視点と、アナール派の社会史や生活史の方法を結びつける方向性について解説する。	宮田　登（神奈川大学教授）	宮田　登（神奈川大学教授）
2	海上の道	柳田国男の説いた“海上の道”にそった黒潮の流れは、さまざまの漂流物をもたらし、海の彼方への世界のイメージをつくった。漂着神信仰などをはじめ黒潮の太平洋沿岸や日本海沿岸の事例を通して考察する。	同　上	同　上
3	漁民の文化	日本の漁民の系譜を、海女・海士たちの分布や漁民の生活を通して探る。また漂泊性の強い漁民や、本土沿岸部に定着している半農半漁の典型的な漁民たちの生活文化をとり上げて、日本の漁民文化の特色を探る。	同　上	同　上
4	稲作の社会と文化	中国江南地帯から伝来したといわれる稲を、白米と赤米を対比させながら日本文化の問題として考える。水田稲作農耕のコメ＝白米に対して、赤米のもつ意味、とくに種ヶ島や対馬の赤米神事などをとり上げて、日常の食生活における赤飯・小豆飯とのつながりについて考える。	同　上	同　上
5	餅なし正月と赤米	“餅なし正月”の分布図をみながら、餅を食べない習俗を、坪井洋文の学説を通して考える。東日本では餅ではなく、そば、うどんを食べることや、江戸時代の都市生活のなかに雑煮が成立した食習を考え、餅に依存しなかった正月の存在を位置づける。	同　上	同　上
6	雑穀と畑作文化	日本の伝統的な食生活が豊富な雑穀にもとづいていること。畑作物の小豆や大豆などが巧みに配されていたこと。これらが、水田稲作民以外の山民たちや、焼畑を含む畑作文化に支えられていたことなどを明らかにする。	同　上	同　上
7	山の信仰	日本列島は、山間部が約８割を占めており、山民の生活文化は豊富である。山の神信仰を基に、山岳崇拝の典型である修験道が発達した。山を中心とした民俗宗教の説相をとり上げ、山と日本文化の関連を探っていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	山民の文化	山間部に展開した狩猟民のマタギや山師、炭焼き、木地屋たちの技術文化を生業形態や生活用具を通して観察し、とくに平地の農民たちの文化との異質性を浮彫りさせながら、日本文化における位置づけを考察する。	宮田　登	宮田　登
9	山と海の交流	日本文化の主要素である山と海の文化は、それぞれが別の存在ではない。日本神話の山幸、海幸や、山の神に捧げられる海魚、川を通して行われる山と海の交流の歴史を考える。そして山民と海民、平地の農民に大きな影響を与えていることを明らかにさせる。	同　上	同　上
10	都市生活者の民俗文化	現代日本は、都市生活者によって大部分が占められている。かれらは生産生活を離れて消費生活中心の都市生活を営むために、そこに展開する日常生活文化に特徴がみられる。現代都市生活者の不安を除くための営みを考えていく。	同　上	同　上
11	盛り場と都市の祭り	都市の特徴の一つは、盛り場であり、盛り場に集中的に生活文化がみられる。縁日や開帳の伝統、祭りやイベントの仕かけのなかから、都市生活者たちの心意を追究する。とくに山や海、農村とは異なる都市の祭りのもつ意味を考える。	同　上	同　上
12	学校の怪談	都市に発生するオカルト・ブームの背後に潜む都市生活者の心意の表れの一つが、現代の小中高校生たちの怪談ブームに連なっている。伝統的な妖怪や幽霊との関係や、学校に流行している現象について考察をすすめ都市民俗をとらえてみる。	同　上	同　上
13	アニミズムの世界	万物に霊が宿るとする日本人のカミ観念を中心に、カミやホトケの伝統と現在のあり方をみる。現代は自然を破壊する開発が盛んであるが、地域や環境の変化に敏感であるアニミズムの世界の特色を動・植物の霊異の現象をとり上げて考えていく。	同　上	同　上
14	モノと心	地域文化の文化伝統を考える上で、地域博物館の存在は大切である。地域博物館が山民、海民、農民、武士、商人たちの日常使った生活用具を保存しており、それを通してモノの背後に潜む神の存在を浮彫させ、現代社会に意味あるものとして考えてみる。	同　上	同　上
15	女性の民俗文化	民俗文化史の基調には、女性の考え方や生活行動が大きな影響を与えている。伝統的社会での主婦の文化、子どもとの関わり、女性と子ども中心の行事や祭り、女人祭祀などをとらえながら、近年の若い女性たちの生活文化のあり方を考える。	同　上	同　上

＝社　会　福　祉　論＝（Ｒ）

（主任講師：松村　祥子（放送大学教授））
（主任講師：三ツ木任一（放送大学教授））

全体のねらい

近代的な社会福祉事業が誕生して半世紀を経て、社会福祉は日本人の生活の中で大きな位置を占めるようになってきた。すべての人が健康で文化的生活を営むための社会的支援策の基本的な部分を担う社会福祉の範囲や内容が変化し、財源、組織、方法などの問題点も出てきている中で、その望ましいあり方を追求する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会福祉とは何か	個人や家族の基本的生活機能が損なわれてしまったり、放置すれば損なわれる恐れのある時に、公的責任で金銭やサービスを給付するのが社会福祉の機能である。それは生活自助が困難な事態に対する社会的連帯意識に基づく人々の合意を社会施策化したものである。	松村祥子（放送大学教授） 三ツ木任一（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授） 三ツ木任一（放送大学教授）
2	社会福祉の歩み	長い間、慈善事業や公的救済にゆだねられていた「生活困難の除去、緩和策」が、権利性に基づく社会福祉事業に担われるようになった。それは経済や社会の変化に伴い拡大した生活問題への対応であると同時に、人々の生活や生き方への考え方の変容でもあった。	松村祥子	松村祥子
3	いま社会福祉は	産業や人口構造の変化により小規模化・都市化した今日では、児童の養育や高齢者、障害者の介助・介護を家族だけで行うことは困難であり、病気や失業等による経済的逼迫にも社会的援助なしには対処できなくなっており、新しい社会福祉のニーズを高めている。	同上	同上
4	社会福祉の体系	生活保障のための諸施策の中で、人々の生活の安定や健康保持を目的にしている社会保障制度の一部を構成する社会福祉は一般的には無拠出主義で必要の度合いに従って金銭やモノ或いはサービスが給付され、「生活保護等の公的扶助」「社会福祉サービス」がある。	同上	同上
5	公的扶助　(1) －生活保護の現状と課題－	憲法２５条で明記されている最低限の生活保障が具体化されている代表的な社会政策が生活保護制度である。約１００万人（１９９１年度）の受給者は国際的にも低水準であるが、他の施策や扶養義務者の扶養ができない時の最後的保障としての存在の意味は大きい。	同上	同上
6	公的扶助　(2) －生活保護の理念と方法－	社会手当には、対象者の固有のニーズに対応して給付される児童扶養手当、特別児童扶養手当及び特別障害者手当等がある。しかし一般国民を対象とする児童手当や介護手当等の拡充も望まれている現在、新しい社会手当の位置づけが検討されねばならない。	同上	同上
7	児童福祉　(1)	児童福祉の対象とする要保護児童に対して保育、養護、教護等の施策がある。また、児童の健全育成をめざして児童館や児童遊園等の児童厚生施設や児童文化の促進もおこなわれている。児童福祉法でも明記されている児童育成の社会的責任の施行の実態をみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	児童福祉 (2)	少子社会や女性の社会的進出への対応策として子育て支援策が注目されているが、権利の主体としての児童には社会の都合でふりまわされず自らの力を最大に発揮するための生活が保障されなければならない。国際的動向もふまえて、児童福祉の課題を検討する。	松村祥子	松村祥子
9	高齢者福祉 (1)	高齢化社会をむかえ、高齢者の福祉サービスに対して国民的関心が高まっている。ここでは老人福祉施設に焦点をあて、生活の場としての施設の在り方について、各施設の整備状況や処遇上の問題点といった側面から考える。	山田知子（放送大学助教授）	山田知子（放送大学助教授）
10	高齢者福祉 (2)	高齢者が長年住みなれた地域で暮らし続けられるようにするために、在宅福祉サービスが高齢者の福祉サービスの中心に据えられている。高齢者の生活を支えるために在宅福祉サービスはどうあるべきなのかについて、その具体的展開と新しい方向性を探る。	同上	同上
11	障害者福祉 (1)	近年、障害をもつ人たちをめぐる社会的状況、障害をもつ人たちの生活、生き方が大きく変化してきている。障害者福祉の新しい理念、障害者福祉の動向を検討しながら、障害者福祉の実践と市民生活との接点を探る。	三ツ木任一	三ツ木任一
12	障害者福祉 (2)	障害をもつ人たちの自立と社会参加を促進するために、さまざまな制度やサービスが提供されているが、未解決の課題も少なくない。それぞれのライフステージにおける主要な課題とその解決の方策を検討することによって、障害者福祉の今後のあり方を展望する。	同上	同上
13	社会福祉の組織と方法	中央指令型から地方分権型への移行は、社会福祉の費用負担やサービス供給方法だけでなく、利用者にとっての受給水準や内容の変化をもたらす。在宅福祉や地域福祉の活性化が叫ばれ、地域の福祉計画づくりが盛んな今、大切なことは利用者主体の点検と評価である。	松村祥子	松村祥子
14	社会福祉の担い手と利用者	社会福祉にとってその担い手の質量の確保は諸活動の成否の決め手となる。社会福祉従事者の研修、資格、待遇等の改善発展が促進されなければならない。また、利用者の意識や知識の向上、さらには自ら参加する人を育成する福祉教育の充実等も必要である。	同上	同上
15	これからの社会福祉	２１世紀にむけて変化する社会福祉課題として、高齢者の増加、児童のニーズの多様化、障害者の社会参加促進、新しい社会手当の創設、国際化への対応等がある。従来の分野別縦割り福祉を利用者中心の連携、総合、普遍的なものにする方策が求められている。	松村祥子 三ツ木任一	松村祥子 三ツ木任一

＝社会調査の基礎＝（ＴＶ）

（主任講師：岩永雅也（放送大学助教授）
主任講師：大塚雄作（メディア教育開発センター教授）
主任講師：高橋一男（東洋大学教授））

全体のねらい

社会調査は、社会のありさまを的確にかつ客観的に把握するための重要な手段である。この科目はまず社会科学研究における社会調査の位置づけについて理解したうえで、実際に調査を行なうための技法と調査の結果得られたデータの集計、分析、解釈の方法を学ぶことを目的としている。特に本講義では、量的調査だけでなく、質的調査にも十分ウエイトを置いて、より多面的な現実把握が可能となるように配慮している。また、調査結果の適切な表示の仕方についても学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会調査のすすめ	現実の複雑で非定型的な社会事象から、定量的あるいは定性的な変数を見い出し、その変量を測定する方法が社会調査である。ここではまず社会調査の意味を明らかにしたうえで、社会科学研究との関連について検討し、さらに現在の社会調査に至るまでの系譜にも言及する。	岩永雅也（放送大学助教授）	岩永雅也（放送大学助教授）
2	調査の諸類型	現在最もよく用いられる各種の調査をさまざまな観点から分類し、それらの特性を整理する。分類の観点としては調査の目的（記述と説明）、変数のタイプ（量的と質的）、そして調査結果の用途の三者をとりあげる。	同上	同上
3	調査票調査の設計	量的調査の中心は調査票を用いた調査である。ここではまず量的調査にあった調査テーマとはどんなものかを検討したうえで、その調査テーマにそった調査票調査の設計の方法について学習する。	同上	同上
4	調査票の作成	具体的な調査テーマにそくして実際に調査票を作成するプロセスを紹介し、調査票そのものについての理解を深めるとともに、さまざまな質問技法、ワーディングにあたっての種々の問題点などを学習する。	同上	同上
5	標本抽出と調査の実施	量的調査におけるサンプリングの意義と目的を明らかにする。特にランダムサンプリングの基本とその応用（系統・多段・層別等）について重点的に学習する。また、各種の調査実施方法（面接・郵送・電話等）についても、その内容と手法、留意点などを詳しく紹介する。	高橋一男（東洋大学教授）	高橋一男（東洋大学教授）
6	結果の集計	調査票結果の結果はさしあたり抽象的な数値や記号であって、そこから何らかの具体的な情報を得るためには集計が必要である。ここではまず広義の集計の内容を紹介し、さらに狭義の集計の手法について詳しく説明する。また標本の数値特性を示す代表値、変動値についても学習する。	岩永雅也	岩永雅也
7	統計的検定	対象とする集団の一部からランダムサンプリングによって得られた数量データ（標本）に基づいて集団全体（母集団）の数量的特徴を推論する方法としての統計的検定の基本的な考え方と手続きを紹介する。	大塚雄作（メディア教育開発センター教授）	大塚雄作（メディア教育開発センター教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	二変数間の関連	変数の間にどのような関連があるかを探るための方法とそこで用いられる各種の指標について学習する。具体的には、二群の標本の平均値の差のｔ検定、質的変数間の関連性を検討するためのカイ二乗検定、量的変数間の関連性をあらわす相関係数とその検定法などを紹介する。	大塚雄作	大塚雄作
9	探索的データ解析	社会科学の分野では、ランダムにサンプリングされていないデータを扱うことも少なくない。そのようなデータの特徴を有効に浮き彫りにするための手法として、探索的データ解析の考え方とその基本的な手続きを学習する。	同上	同上
10	多変量解析の概観	多くの変数間の関連性を概括的に捉えるために、多変量解析と呼ばれる一連のデータ解析法が開発されている。その例として、因子分析と重回帰分析の基本的な考え方とそれらの適用例を紹介し、多変量解析の一端に触れてみる。	同上	同上
11	インタビュー法	インタビュー法（聞き取り法）は、質的調査の最も基本的な手法である。まずインタビュー法の用いられる具体的な状況や条件を整理し、さらに実際のインタビューの方法、留意点、結果のまとめ方などについて、実例を交えながら学習する。	高橋一男	高橋一男
12	生活史法	われわれの日常生活には、手紙や日記などの成文化された記録（ドキュメント）がふんだんにある。それらを通じて生活史（ライフ・ヒストリー）を記述するのが生活史法である。ここではフィールドでのインタビューなども交えて生活史研究の手法を紹介する。また、自分史にも言及する。	若林良和（高知大学助教授）	若林良和（高知大学助教授）
13	参与観察法	調査の対象となる集団の活動に調査者も実際に参加し、その集団成員と同じ視点から集団と活動について調査するのが参与観察法である。担当講師が長年フィールドとしてきた島の生産活動や人々の日常生活に参加して調査する様子を紹介しながら、参与観察法のエッセンスを講義する。	同上	同上
14	メディアの利用	現代はメディア社会であり、調査にもさまざまな形でメディアが関わる。調査の題材として、調査手段として、結果のプレゼンテーション手法として、メディアがますます重要になっている現状を紹介し、その意義を検討する。	高橋一男	高橋一男
15	調査結果の記述と表現	さまざまな調査結果をどのように記述し、表現したらよいか、表やグラフの有効な用い方とはどのようなものか、調査結果を説得力のある論稿にまとめるにはどのような点に留意すべきか、といった問題について検討する。	岩永雅也	岩永雅也 大塚雄作 高橋一男

＝経営学入門（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：赤岡　功（京都大学教授）〕

全体のねらい

わずか数人で始めた企業が、よい製品を開発し世界的大企業となり、世界の進歩と人々の幸福な生活に大きな貢献をしている場合もあれば、巨大な企業が崩壊したり、活動を社会から批判をうけ苦悩している場合もある。こうした企業は、だれがどのように経営しているのだろうか。それを導く経営学とはどのようなものであろうか。松下電器、ＮＥＣ、トヨタ、日産、ホンダ、ＧＭ、フォードをはじめ欧米、日本、韓国、中国の数々の企業の実例を紹介しながら理論的理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業の経営学	経営学の面白さと重要さをまず示す。経営の善し悪しによって、急成長し、社会から評判の高い企業群。あえなく消滅していく企業の例や統計をしめし、それと経営学との関係を示すようにつとめる。	赤岡　功（京都大学教授）	赤岡　功（京都大学教授）
2	経営学の発展	経営学は工場の生産性をあげることだけに注目していた段階から、そこで働く人々の人間性や社会性の向上と調和させつつ、利益をあげ、企業成長を達成しうるものとして発展してきていることを、簡潔に分かりやすく興味がもてるように説明するようにつとめる。	同　上	同　上
3	世界の企業、日本の企業	経営学の主たる対象である企業がどのような形で存在しているか。欧米の企業群と日本の企業群、アジアの企業について概略を説明する。	三戸　浩（横浜国大教授）	三戸　浩（横浜国大教授）
4	経営学の時代	歴史的な古典、バーリ＆ミーンズの所有と経営論を簡単に紹介し、日本企業グループを中心に企業のガバナンス、そこでの経営者の位置について述べる。本田技研工業の本田宗一郎氏、倉敷美術館等でも有名な倉敷紡績の大原孫三郎氏をはじめとする経営者を紹介しつつ経営者と企業経営を理解する。	同　上	同　上
5	企業倫理	経営学では、その理論構成の特質から、つねに企業の社会的責任論や企業倫理が論じられる必然性があり、最近では企業倫理論が大きな注目を集めている。そうした議論の内容背景、企業倫理が企業行動に作用する枠組を明らかにする。	赤岡　功	赤岡　功
6	企業目的	企業が利潤を無視し得ないのは当然であるとしても、現実の企業を導く目的については多くの学説が提起されている。そうした企業目的論の概略を説明し、現代の企業を導く企業目的について論ずる。	麻生　幸（千葉商科大教授）	麻生　幸（千葉商科大教授）
7	企業戦略	企業の目的を達成するためには、まず企業戦略が構想される。この戦略の善し悪しが企業の発展とともに、社会との相互作用のありかたをきめる。そうした戦略論の概略を現実に即して説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	企業戦略の展開	現代企業の戦略について、日本企業を中心に明らかにする。欧米、アジアでの展開をできるかぎり要領よく示す。	日置弘一郎（京都大学教授）	日置弘一郎（京都大学教授）
9	企業組織	戦略を遂行し、企業が行動するためには組織が適切である必要がある。そうした組織についての学説を紹介するとともに、現代における組織のあり方について説明する。とくに、1つ企業にコミットすることなく働きたいという人々こたえる組織を理論的に説明するとともに現在大変有名なミスミの組織について映像含め概説する。	太田肇（滋賀大学教授）	太田肇（滋賀大学教授）
10	作業組織	近年では、人間疎外を招くような効率性ばかり重視した組織ではなく、人々の成長をはかりつつ、その成長を利用して経営を発展させる作業組織が追求されている。そうした動向を明らかにする。	赤岡功	赤岡功
11	企業文化	日本経営の強さがアメリカで注目された近年において、組織だけではなく企業文化が注目されるようになっている。そうした企業文化についての論議とともに、欧米・アジア・日本との比較も試みつつ説明する。	日置弘一郎	日置弘一郎
12	モチベーション	人々は組織の中でどのように動機づけられ働くのか。これについては大変多くの研究があるが、そうした議論を概説するとともに、日本の労働者について説明する。	田尾雅夫（京都大学教授）	田尾雅夫（京都大学教授）
13	非企業組織の経営学	経営学は主に民間大企業を中心として展開されてきている。しかし、公共部門等も非民間部門のウエイトも高くなっており、経営学はこうした部門をも対象とするものとして拡張されてきている。そこで、公私組織とそこで働く人々について概説する。	同上	同上
14	21世紀型企業像を探る	ものを生産したり、サービスを提供する組織としては、いわゆる企業のほかに、ワーカーズ・コレクティブが、アメリカやスペイン等多くの国にみられる。そうしたワーカーズ・コレクティブの経営を説明する。21世紀に向けて企業では様々な新しい経営の試みが行われている。そうした定例を紹介しつつ、新しい時代の経営を考える。	小倉行雄（福井県立大学助教授）	小倉行雄（福井県立大学助教授）
15	経営学の未来	全体のまとめとして、新技術を開発・活用し、グローバルに、環境に創造的に適応している企業を展望し、経営学の現状と発展方向について述べる。さらに深く経営学を学ぼうとする人々に、経営学の学び方、研究の仕方について、できるだけ具体的に述べる。	赤岡功	赤岡功

＝ 日本の経営・欧米の経営 ＝ （Ｒ）

〔主任講師：吉森　賢（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

日本と米英独仏の大企業の経営を、会社統治制度を中心としつつ企業所有構造、最高経営責任者、企業間関係、経営・マーケティング行動、文化的・歴史的背景などの基本的視点から比較することにより、各国の経営の特質と企業成果への影響を理解し、日本的経営の将来像を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	比較経営の目的と方法	比較経営の目的、方法、技術、態度について述べる。	吉森　賢（横浜国立大学教授）	吉森　賢（横浜国立大学教授）
2	企業の所有構造	比較対象国における大企業を所有する主体（同族、法人、機関投資家、個人株主など）を概観する。バーリとミーンズによる所有と経営の分離および経営者支配が各国でどのように実現されているのかを考察する。日本において顕著な経営者支配の歴史的背景とその影響を理解する。	同　上	同　上
3	企業概念と経営成果	企業概念、すなわち企業は誰の利益のために経営さるべきか、に関する比較対象国における考え方を考察する。 企業概念の違いが利害関係者間の関係や経営成果にどのような影響を与えるかを考察する。特にアメリカにおいては株主利益中心の企業概念が企業の国際競争力を低下させるという主張がなされている。この主張の妥当性を実証研究の結果により検証する。	同　上	同　上
4	会社統治制度（コーポーレート・ガバナンス）1	会社統治制度とは最高経営責任者による経営活動を監視し、これに助言を与え、その業績を評価し、場合によってはこれを解任、降格するための手続き、組織である。そのための方式を概観し、エージェンシー（代理）理論に基づき、なぜ最高経営責任者は監視さるべきか、を理解する。	同　上	同　上
5	会社統治制度2－株主総会	最高経営責任者の監視機関としての株主総会の機能はどの程度発揮されているのかを比較対象国について概観する。日本においては株主総会の形骸化が指摘されているが、その原因を考察し、主としてアメリカの事情と比較、検討する。	同　上	同　上
6	会社統治制度3－取締役会と最高経営責任者	最高経営責任者に対するもっとも重要な監視機関である取締役会の構造と機能を比較する。比較対象国における取締役会の構造をドイツの二層構造とその他諸国の単層型構造に分類し、それぞれの特質を比較する。ドイツについては労資による共同決定の制度と実態を概観する。	同　上	同　上
7	会社統治制度4－取締役会機能不全の原因	日本をはじめ比較対象国においては取締役会による最高経営責任者に対する監視機能は十分機能していない。その原因を取締役会会長職と最高経営責任者の地位の人的・機能的融合、取締役会役員の選出過程、他社役員の兼務、情報非対称性などの観点から分析する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	会社統治制度5－外部監視	外部監視とは株式市場を通じての企業買収を中心とする最高経営責任者に対する監視方法である。これが日本、ドイツ、フランスではなぜ困難であるかを考察し、アメリカではなぜ盛んに行われるかを究明する。企業買収をめぐるアメリカにおける是非の論争と90年以降の状況を概観する。	吉森　賢	吉森　賢
9	会社統治制度6－企業間関係・主力銀行	特に日本とドイツにおいては主力銀行が最高経営責任者への監視機能を果たし、両国における企業間関係の中心にあるのとされるのでその役割を理解する。主力銀行はなぜアメリカでは日独ほどの発達を見なかったのかを考察し、事例により経営に対する影響を検討する。	同　上	同　上
10	会社統治制度7－企業間関係・企業集団と系列	日本における企業間関係は長期的取引関係、株式持ち合い、役員相互派遣、などに基づくが、その経済的合理性を準統合の観点から考察する。同様の企業間関係はドイツにも存在する。なぜアメリカでは少ないかを検討し、これが経営成果に与える影響を考える。	同　上	同　上
11	会社統治制度8－会社統治制度の改善方向	これまでの会社統治制度に関する考察の総括として、日本に、ドイツ、アメリカ、イギリスおける会社統治制度についての改善方向を概観する。	同　上	同　上
12	最高経営責任者の特質	比較対象国における最高経営責任者はどのような人物であるかを、学歴、出身階層、実務経験、年齢、昇進経路、価値観、などの視点から概観し、それぞれの国の経営成果に与えたと考えられる影響を考察する。	同　上	同　上
13	経営行動・マーケティング行動	官僚制と情報共有、消費者行動と市場への態度、経営者の社会的威信、経営者能力、経営者対官僚の地位格差、会社の繁栄と個人の生活の質との均衡の観点から実態調査にもとづき考察する。	同　上	同　上
14	社会的価値観と企業家精神	比較対象国における国民の企業および企業利益に対する態度の変遷と企業家精神に対する影響を考察し、その違いを実態調査にもとづき検証する。またこれらが比較対象国の経営に及ぼした影響を考察する。	同　上	同　上
15	日本的経営の普遍的要素と展望	これまでの日欧米比較に基づき、日本的経営の特質の中で他の諸国にも妥当する要素は何か、また逆に欧米の経営から日本が学ぶめきものは何かを考察する。さらに日本的経営の光と影を従業員とその家族の生活の質および消費者厚生から評価する。日本企業の経営環境の変化を概観しこれへの適応の方向を展望する。	同　上	同　上

＝情報基礎管理学＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋三雄（麗澤大学教授）〕

全体のねらい

パソコンの普及をはじめ、情報技術が身近なツールとなった。本講義においては企業を念頭におきながらオフィスの生産性をたかめるための情報技術活用の可能性について検討したい。講義においてはオフィスにおける非定型的な業務活動のフレームワークを学習するとともに、、変化の激しい情報技術分野のできるだけ最新の状況を各分野の研究者なり企業の現場のインタビューをまじえて紹介したい。また、具体的なハードやソフトも実際に話題にしてデモをまじえた講義も含める予定である。なお、教材執筆および放送担当はすべて主任教授（高橋三雄）が行う予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	オフィスの生産性と情報技術	オフィスにおける業務内容を整理するとともに、生産性の概念を検討する。オフィスの生産性は基本的にはオフィスワーカーの知的作業を支援することによって高めることができることを理解する。	高橋三雄（麗澤大学教授）	高橋三雄（麗澤大学教授）
2	パーソナルな情報技術の現状	パソコン関連のハード、ソフトの現状をサーベイし、オフィスワーカーにとって情報技術が身近な存在になっていることを確認する。あわせて電話、ＦＡＸ、コピー機、電子手帳などのＯＡ機器も話題にする。また、パソコンソフト、とくにワープロ、表計算ソフト、データベース、グラフィックソフトなど主要なパソコンソフトのジャンルを概観し、情報管理における以後の講義の導入部とする。	同上	同上
3	問題点把握のための情報活用	情報を読みとり、問題となる状況を把握するために表計算ソフトを活用する。表計算ソフトのワークシート上に用意された販売実績データをグラフ化し、アウトライン機能によって構造化し、また、抽出、検索機能などをためすことによって情報技術の具体的な応用を検討する。	同上	同上
4	シミュレーション分析と将来予測	将来の問題点を探るためにはさまざまな前提条件のもとで将来を予測する必要がある。その基本的な手段がシミュレーションである。表計算ソフトのもとでWhat in 分析、ゴールシーク分析をしてシナリオ分析などをこころみる。	同上	同上
5	リスク分析－不確実性のもとでのシミュレーション分析－	将来は当然のことながら不確実性を含む。この不確実性を取り入れたシミュレーション分析はリスク分析とかモンテカルロシミュレーションともよばれる。最近、表計算ソフトの上でリスク分析を行うソフトも利用できるようになった。具体的な状況のもとでリスク分析をこころみ、その可能性を検討する。	同上	同上
6	情報のプレゼンテーション	情報の分析結果は何らかの形で関係者に伝える必要がある。それはレポートとて配布されたり、や会議での報告などの形をとる。最近、会議などでのプレゼンテーションを支援するための情報技術が発展してきた。関連するソフトやハードそして実践例を取り上げる。	同上	同上
7	情報表現媒体としてのマルチメディア	文字、数値による表現だけでなく、グラフやイラストそして最近では音声や写真あるいはビデオ動画など新しい表現媒体も可能となった。これはマルチメディアとよばれる。情報表現あるいはプレゼンテーション方法としてのマルチメディアを話題にするとともに、マルチメディアを使った情報表現の可能性について検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ＣＤ－ＲＯＭデータベース	販売や経理などのデータは基本的な情報源である。しかし、その他にも新聞や雑誌などもまた外部重要な情報源である。これらの情報はＣＤ－ＲＯＭを使ったデータベースとして利用できるようになった。情報活用の媒体としてのＣＤ－ＲＯＭデータベースの現状について具体例をまじえながら検討する。	高橋三雄	高橋三雄
9	オンラインデータベースの可能性	パソコン通信をはじめ、パソコンを情報端末として利用するケースが増えてきた。それによって外部のデータベースにアクセスして多様な情報を入手し、利用できる。パソコン通信のデータベースサービスやオンライン商用データベースの実際を具体的に検討してみる。	同上	同上
10	データベースの構築とその利用	リレーショナルデータベースの基本的な機能を学習し、情報管理の面での利用を考える。	同上	同上
11	情報のナビゲーション、ドリルダウン	事務処理用に収集、維持されているデータをさまざまな角度、視点から分析することを可能とするソフトがある。それがＥＩＳとよばれるジャンルのソフトである。ＥＩＳソフトは通常のデータファイルの構造を自動的に解析し、情報のナビゲーションやドリルダウンを可能とする。このＥＩＳソフトを実際にためしてみる。	同上	同上
12	情報コミュニケーション手段としての電子メール	社内にネットワークが構築されるにつれて電子メールが普及する。また、インターネットなどを通じて、国内、国外の企業などとの電子的なコミュニケーションも可能となった。そうした電子コミュニケーションが情報の収集、配布そして利用の上で大きな意味をもっていることはいうまでもない。電子メールの基礎について学習する。	同上	同上
13	ネットワーク上での協調作業	社内のネットワークが構築され、電子メールが普及するとつづいて、ネットワーク上で複数の人間が協調作業を行う可能性がでてくる。これはグループウェアとよばれる研究や実践である。グループウェアの概念とその具体例についてサーベイする。	同上	同上
14	グループウェアの現状	グループウェア関連製品を話題にしながらグループ文書推敲、グループスケジュリング、電子ホワイトボードなどの実際を検討する。	同上	同上
15	グループ意思決定支援システム	情報管理は基本的には意思決定者への情報供給そしてまた、意思決定活動の支援がその中心課題である。最終回はグループによる意思決定活動を支援するさまざまな情報技術と実際の企業における実践例を話題にする。	同上	同上

＝ 日本の技術と産業の発展 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：森谷正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

第二次大戦後の日本の技術と産業の発展についての概論を行う。大きな経済・社会の発展をもたらした技術を、この時代の技術進歩の特性、日本での進展の特質・他国との比較など多面的に分析して示し、技術の本質の深い認識と将来のあるべき姿についての見解を持てるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代技術の発展 (1) 技術革新とその普及	第二次大戦前後にトランジスタ・ナイロン、原子力などの技術革新が生じたが、それらの革新技術がいかに広く普及し産業を発展させたかを明らかにする。同時に、在来型の技術、産業の果たした大きな役割も示す。	森谷正規（放送大学教授）	森谷正規（放送大学教授）
2	現代技術の発展 (2) エレクトロニクスの進歩と量産進展	技術革新後の技術進展としては、エレクトロニクスの引き続いた急速な進歩が大きく、他分野に広く浸透し、また、量産を急拡大させていったが、その状況を明らかにする。	同上	同上
3	現代技術の発展 (3) 現代の技術の状況	高度な技術を取り込んだ量産製品が、安い価格によって世界中に普及し始め、ハイテク大衆化文明が伝播しようとしている状況を示し、一方で地球環境破壊など困難な問題も生じていることを明らかにする。	同上	同上
4	日本の技術と産業 (1) 戦前の蓄積・戦後の復興	戦前の技術水準は、軍事技術を中心にかなり高いレベルにあり、その分野の技術者たちが戦後は自動車、鉄道、電機産業に入り活躍した。また、復興の過程で多くの新興企業が生まれて技術の発展に寄与した。	同上	同上
5	日本の技術と産業 (2) 経済成長の時代	革新技術を始め多くの分野の技術導入によって、量産工業製品が急速に伸び、国内市場に加えて輸出市場が拡大して、高度経済成長を達成したが、その成長に果たした技術の役割を明らかにする。	同上	同上
6	日本の技術と産業 (3) 技術強国への発展	生産技術力・技術開発力を高めてきて、一方、米国は主要産業が停滞状況に陥り、日本は技術強国といわれるようになったが、日本の強さは何であるかを明らかにする。	同上	同上
7	日本の技術と産業 (4) 現代日本の技術・産業の諸問題	技術強国となって、輸出が急拡大して大幅な貿易黒字が続いて激しい円高となり、海外生産に移行せざるをえず、産業空洞化、引いては技術空洞化のおそれが生じている。一方で、高度情報化技術では米国に対して遅れが大きい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	技術のあり方の再考 (1)技術の社会的役割	技術の社会全体に果たす役割を「産業」「家庭」「社会」に分けて、現代の技術が「産業」「家庭」に偏向し、その結果、社会的生活に多くの問題が残されている事実を明らかにする。	森谷正規	森谷正規
9	技術のあり方の再考 (2)技術を動かすもの	技術発展が偏向しているその問題意識から、経済原理中心の技術発展のメカニズムとなっている現代の問題点を指摘し、より望ましい方向に発展させていくための政治とそれによる仕組みの重要性を示す。	同上	同上
10	技術のあり方の再考 (3)技術を担う企業の人と組織	日本の技術はもっぱら大企業という巨大組織に支えられており、一方で人が中心であるベンチャー企業が生まれ育っていく風土に欠けている事実を明らかにし、これからの技術開発のおける人と組織のあり方を考える。	同上	同上
11	日本と各国との技術比較 (1)アジアとの比較	各国の技術を国民性、風土などから比較する「比較技術論」による分析法を示して、中国、韓国、台湾などアジアとの比較を行って、日本の技術との相違を明らかにする。	同上	同上
12	日本と各国との技術比較 (2)米国、欧州との比較	鉄鋼、化学、量産機械、一般機械など産業による技術の性格の相違と「比較技術分析」を組み合わせて、日本と米国、ドイツ、イギリス、フランスとの技術指向の相違を明らかにする。	同上	同上
13	技術と産業の発展の方向 (1)より望ましい方向への技術進展	「技術進展のアセスメント」の考え方を示して、この20年の技術予測とその結果をもとに、より望ましい方向への技術進展はありえなかったのか、方向を正すいかなる対策がありうるのかを考える。	同上	同上
14	技術と産業の発展の方向 (2)日本における創造性の発揮	技術における創造性をどうみるのか、多種多様な創造力についてのいくかの類を示して、日本における創造性発揮の特性と問題点を明らかにして、これからの創造へのあり方を考える。	同上	同上
15	技術と産業の発展の方向 (3)日本の技術と産業の進む道	日本の技術が新たに進むべき道は「産業」「家庭」に加えて、「社会」さらに「人間」「自然」「化学」の領域であることを示して、それぞれの先進的な技術開発を紹介する。さらに「個の技術」から「場の技術」への転換を考える。	同上	同上

＝科　学　技　術　史＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家達將（放送大学教授）〕

全体のねらい

人類の歴史のなかで、人間が食衣住・健康・文化などを求めて働く際に、手と頭の共同作業、つまり経験・熟練・思索・観察・実験・法則の認識・理論化・生産等によって進めて来た科学・技術の歴史的展開過程を考察したい。併せて、科学・技術の歴史を一連の流れとして把握し、人類史における科学・技術の意義を考察したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	原始社会－経験の知恵－	古代社会の道具や機械づくりに見られる人間の知恵を、旧石器時代の石器づくりや古代中国の指南車製作を例に考察する。早くも石器づくりには石に隠された自然法則を見抜いた科学的方法が、指南車には自動制御のしくみの創造的発明が、見られる点に注目する。	道家達將（放送大学教授）	道家達將（放送大学教授）
2	古典ギリシア－経験から科学へ	古典ギリシアにおける自然哲学者たちの思索によって生み出された体系的自然科学の内容について、ヒポクラテス、アリストテレス、デモクリトス、ユークリッド、アルキメデス、プトレマイオスら群像の仕事を例にして述べ、またなぜギリシアに起ったか考える。	同上	同上
3	イスラム世界と中世ヨーロッパ：文明の出会い	古ギリシアの自然科学を引き継ぎ、インドや中国の科学・技術もとりこんで、創造的に生み出されてゆく中世のイスラム世界の科学・技術の姿を、錬金術や時計・測地の道具（アストロラーベ）を例に述べ、文明の出会いのなかで創造が促進された点に注目する。	同上	同上
4	ルネサンス－分析・総合・実証	近代科学の方法「分析・総合・実証」が、ルネサンス期の絵画の技法において使われ、レオナルド・ダ・ヴィンチはこの方法を駆使して、自動機械や都市を設計し、運河を作り、人体解剖図を正確に描き、また、「落体の法則」発見一歩手前に至ったことを述べる。	赤木昭夫（淑徳大学教授）	赤木昭夫（淑徳大学教授）
5	近代科学の夜明け－歴史を変えた2冊の本	1543年歴史を変えた2冊の本が出版された。コペルニクスの『天体の回転について』とヴェザリウスの『ファブリカ』である。前者は旧来の天動説を批判した地動説の本、後者はリアルな人体解剖書で、旧来のガレノス説を批判した本。日本では1774年に両者が……。	道家達將	道家達將
6	近代科学の方法－ガリレオとハーヴェー	実験的方法によって近代科学が始まる。定量的な実験が推論と結合された。ガリレイは斜面の実験によって落体の法則に到達し、また運動の相対性を把握した。ハーヴェーは、ヘビなどの解剖実験により血液は循環し、心臓がポンプであることを立証した。	藤村　淳（横浜国立大学名誉教授） 道家達將	藤村　淳（横浜国立大学名誉教授） 道家達將
7	ニュートン：力学的世界観	天体運動の知見と動力学の成果のもとに、その両者の統一の中からニュートン力学が誕生する。力学的世界観を芯とする理性の時代の開幕であった。ただ、天と地のつなぎ役となった万有引力は、絶対的な時空概念と、神秘性を含む遠達力を導入するものとなった。	藤村　淳	藤村　淳

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	産業革命と機械 －動力と制御－	産業革命期の科学と技術、とくに機械的技術の発達について展望し、とりわけ、蒸気動力とその自動制御装置（ガヴァナー）の発明について述べる。バヴァナーはワットの手になる技術史上の傑作である。	赤木昭夫	赤木昭夫
9	産業革命と化学 －酸とアルカリ	産業革命は無機化学工業の発達を要求した。大量に生産される木綿を白く仕上げるには、従来の天日さらしでは、時間と場所が多く必要で、材料の有機酸や植物の灰は不足した。そこで発明された、さらし粉量産のために大量の硫酸や人工アルカリが必要であった。	道家達将	道家達将
10	電気から電子へ －ファラディー	1800年にヴォルタが電池を発明して、電流をつくれるようになり、ファラディらによって電磁気学の基礎が研究され、電気の時代が到来した。偶然発見のエジソン効果を検波に利用するため、フレミングが二極真空管を発明（1904）したことで電子技術の時代へ。	赤木昭夫	赤木昭夫
11	ダーウィン －進化論	1858年、ダーウィンとウォーレスは同時に、生物進化の原因に「自然選択説」を発表し、ダーウィンは翌年『種の起源』を出版して進化論を確立した。そこに至るまでのビーグル号航海，家畜飼育家・園芸家との交流などでのダーウィンの思索を追ってみたい。	道家達将	道家達将
12	染料と薬 －伝染病の克服	多数の人間を苦しめて来た伝染病を克服する最初の有力な方法は、1796年ジェンナーによってもたらされたが、それは天然痘に対してだけであった。19世紀から20世紀にかけて、普遍的な伝染病克服策（ワクチンと特効薬の発明等）が効を奏して、死者は激減した。	同上	同上
13	エネルギー・ エントロピー	蒸気機関の開発を契機に、人間生活をも自然界をも動かす基本として「火の動力」の役割が意識される。熱の科学が進歩し、エネルギー保存法則とエントロピー増大法則が確立される。アマチュア科学者も活躍した産業革命期の、技術に触発される科学の時期であった。	藤村淳	藤村淳
14	量子論と相対論 －ニュートン力学を超えて	19世紀末の工業の発展を背景に、未開拓の領域が科学技術の対象となる。新しい世界に対する新しい法則が追求され、物理学の変革が始まる。古典物理学の枠を超えて、相性理論、量子論に集約される新らしい論理が20世紀科学を先導する。	同上	同上
15	現代科学技術の諸相	これまでに述べて来たこと、また述べ得なかった重要な史実をとりあげて、人類史における科学・技術史を総括するとともに、現代の科学・技術の諸相、例えば宇宙、素粒子、遺伝子、コンピュータ、ロボット、エネルギー問題、安全性や環境問題等を論じる。	道家達将	道家達将 藤村淳 赤木昭夫

＝先　端　工　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家達將（放送大学教授）〕

全体のねらい

今日ならびに未来にかけての産業技術、また人間が人間らしく生きていくために必要な諸技術を支えている先端工学について、例として14分野を選び、その研究の状況、研究成果、利用のされ方、問題点などを、各分野の最高・最先端をゆく研究者が、普通では見ることのできない研究や利用現場を見せつつわかり易く述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総論	今日の技術と前近代技術（技能）を比較することによって、今日の技術が依拠している先端工学の特徴、技能の特徴、また先端工学がどのようにして形成されるかについて考える。	道家達將（放送大学教授）	道家達將（放送大学教授）
2	暮らしのなかの先端材料技術－有機材料－	スキーやヨットのマスト、レーシングカー、大スパンの橋、また医用材料など身近なものを例に、最近の高分子材料が、強さも機能も非常に高度なものになってきている実際を見ながら、その秘密を解き明かす。	高久　明（東京家政大学教授）	高久　明（東京家政大学教授）
3	あすをひらくロボット技術－機械工学－	日本の産業用ロボットのめざましい発展が述べられるとともに、最近では、製造業以外からも多彩なニーズが寄せられ、例えば、医療、福祉、ホームサービス用ロボットなど高度な知的機能が求められ、人間を支援してくれるロボット工学の研究状況などが述べられる。	梅谷陽二（豊田工業大学教授）	梅谷陽二（豊田工業大学教授）
4	太陽光発電－電子工学－	今日、原子力発電の問題点・化石燃料による温室効果の問題などに対し、クリーンで無限のエネルギーを保障する太陽光発電について、その特徴と問題点、太陽電池の構造・種類・発電原理、そして、実用化されている現状と未来、宇宙発電などについて述べる。	高橋　清（帝京科学大学教授）	高橋　清（帝京科学大学教授）
5	明日をひらく光通信ネットワーク－電子情報工学－	今日の光通信技術は、レーザーが世に出た1960年に始まり、76年に波長0.85μm帯の、次いで、82年に1.3μmの第二世代システムが実用化され、95年頃からは海底ケーブルなどに光ファイバの最低損失帯にあたる1.55μmのシステムも実用化され始めた。本講義では、光ファイバ、光デバイス、光伝送システムなど光通信技術の基本について述べる。	伊賀健一（東京工業大学教授）	伊賀健一（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	これからの画像技術・ホログラフィー －光情報工学－	ホログラフィーは、光波の干渉性を利用し、物体からの光の波面を乾板上に干渉像として記録し、これに光をあて波面を再生する技術で、記録したものをホログラムと言い立体的に見える。1960年レーザーの発明で干渉性の高い光源が得られ実用化した。本講義では、ホログラフィーの原理と実用（3次元表示、カード等の偽造防止、立体印刷、精密計測、光学素子、立体ＴＶなど）について述べる。	辻内順平（東京工業大学名誉教授）	辻内順平（東京工業大学名誉教授）
7	パターン認識 －情報工学－	文字や音声を認識する働きは、一般にパターン認識と呼ばれている。パターン認識は、人間にとってはたやすいことであるが、電子計算機にとっては甚だ困難なことである。では、機械に文字や音声を識別させることはできないのか？できる。機械が手書きの数字や文字を読むのだ。どうしてそれが可能になったのか、まず「認識とは何か」から始めよう。	飯島泰蔵（北陸先端科学技術大学教授・東京工業大学名誉教授）	飯島泰蔵（北陸先端科学技術大学教授・東京工業大学名誉教授）
8	心を測る －生体情報工学－	機械を使って人間の心を測ることなどできるのだろうか？本講義では、脳波を計測し、そのデータをコンピュータに解釈させることによって感情の動きを客観的な量的変化として表示できることを示す。それは複合した心理状態を、要素的なものに分解して表示することに始まる。映画や音楽を視聴する被験者とその時のデータを見ながら考えてみよう。	武者利光（㈱脳機能研究所社長・東京工業大学名誉教授）	武者利光（㈱脳機能研究所社長）・東京工業大学名誉教授）
9	人口臓器と人口関節 －医工学－	医工学は、工学的手法を使って病気を治そうとする医療技術の科学である。本講義では、人工臓器と人工関節、とくに後者の人工股関節について、それを成功させるためには、1)材料の選択、2)形状とくに摩擦面設計、3)人体への取りつけ等が適切に行なわれる必要があり、とくに、2)について、しぼり膜ＥＨＬが行なわれるように設計すべきことを示す。	笹田直（千葉工業大学教授）	笹田直（千葉工業大学教授）
10	触媒・化学工業に欠かせない魔法の石 －応用化学－	触媒は今日とくに有機化学工業になくてはならぬ存在である。触媒の機能には、活性・選択制・寿命の3つがあるが、この講義では、重油からガソリンを得るときに使う流動接触分解用触媒が、反応上の要求にこたえるべく、いかに巧みな工夫がほどこされているか、また、自動車の排気ガス浄化触媒の活躍ぶりなどを例に触媒について述べる。	八嶋建明（東京工業大学教授）	八嶋建明（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	バイオテクノロジー －生物工学－	本講義では、生物光学の４つの基盤技術①遺伝子組換え②タンパク質工学③細胞工学④バイオプロセス工学を概説すると共に、耐アルカリ性・耐熱性酵素を加えた洗剤や、ホタルの光を出す酵素の遺伝子に細工したプラスミドを大腸菌に組みこんで、大気汚染物質に出会うと発光するバイオセンサ、また、神経細胞で小さな脳を作るなど多彩な例を挙げて生物工学の現状を述べる。	相沢益男 （東京工業大学教授）	相沢益男 （東京工業大学教授）
12	核融合エネルギー －エネルギー工学・その１－	核融合反応を地上でうまく制御しながら起させてエネルギーを得ることができれば、その燃料の重水素（Ｄ）が、海水中に150ppm程度の微量ではあるが存在するので、人類の10億年分くらいのエネルギーが保証される計算になる。本講義では、核融合反応の原理、核分裂反応との違い、実用化への難しさ、その開発の現状と展望など、岐阜県土岐市に建設中の文部省核融合研究所のＬＨＤの現場からの話も入れて論じる。	佐久間洋一 （文部省核融合研究所助教授）	佐久間洋一 （文部省核融合研究所助教授）
13	次世代発電システム・ＭＨＤ発電 －エネルギー工学・その２－	ＭＨＤ発電は電気伝導制をもつ流体が磁界を横切って流れたとき起電力が生じるという原理を利用して、重油・石炭・天然ガスなどの高温の燃焼ガスを、超伝導磁石中を高速で通過させて発電する。従来の発電機よりエネルギー変換効率が良く、省エネルギーCO_2排出量減少に役立つ。本講義では特に、東京工業大学のクローズドサイクルＭＨＤ発電実験装置に光をあてて論述する。	椛島成治 （東京工業大学教授）	椛島成治 （東京工業大学教授）
14	景観工学 －都市工学・その１－	「景」は「ものの姿」、「観」は「ひとの見方」、景観現象は景と観の関係で変化し、ひとの視知覚だでけなく心理や価値観とも関わるが、「景観工学」は景観現象を理解し、より良い景観の創り出し方を科学的に探究する学問である。19世紀西欧の産業革命期の自然や都市の景観の混乱による危機感が、ランドスケープ・アーキテクチュア（造園学）、アーバンデザインなどの概念や技法を生み、今の景観工学の基礎になった。本講義では、景観工学の基礎理論と手法を具体例を挙げて論じる。	小柳武和 （茨城大学教授）	小柳武和 （茨城大学教授）
15	安全で快適な都市づくり －都市工学・その２－	今日人間社会の主たる舞台となっている都市空間に焦点をあて、まず都市とは何か、都市の変容と都市問題発生のダイナミズム、都市空間の構成要素、現代都市問題の諸相等を概説する。次いで、都市問題の解決と都市の理想の追究のための都市の計画の立案について、思工と作業のプロセス、立案のための操作の対象と方法、案の評価方法等の現在の「技術の状況」を事例を交えて講術する。	渡辺貴介 （東京工業大学教授）	渡辺貴介 （東京工業大学教授）

＝数　学　の　歴　史＝（Ｒ）

〔主任講師：長岡亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学は、往古の昔より、人間の不思議な知的領域であり続けてきた。抽象的な概念を論じ、ときには「目に見えないもの」や「常識では理解できないもの」さえ扱いながら、「不可謬の論理」に基づいているがゆえに絶対的な厳密性と普遍的妥当性をもち、それでいて、現実の生活にも深い関わりをもってきた。

このような数学を、完成された学問体系として学ぶのは、能率の良い学習方法ではあるが、しばしば、受動的な姿勢を強いられ、数学の技術的側面にしか注意が行かなくなる憾みがないとはいえない。本講では、ギリシャ時代から近現代までの数学の形成の過程を、それぞれの文化状況において見ることで、数学の立場から、認識の歴史を考察していく。現代の科学文明を支える数学的思考の意味を再考する機会にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「数学の歴史」序論	数学を歴史的過程において考えることの意義と問題点について、やや広い視野で考察する。また、講義全体の計画を（「幾何学時代」「代数学時代」「解析学時代」「算術学時代」という分類の意味と合わせ）述べる。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	幾何学時代の数学（1）	ギリシャ数学の特質をユークリッドの『原論』の第一巻を中心に論ずる。議論の素材は、今日「初等幾何」という名前で親しまれている図形に関する厳密な論証であるので、高等数学に経験のない人にも身近な話題であろう。	同　上	同　上
3	幾何学時代の数学（2）	ユークリッドの『原論』の第五巻の「比例論」に焦点を当て、ギリシャ数学が、通約不能量（無理量）のパラドクスを克服して連続体をどのように扱ったかを論ずる。	同　上	同　上
4	幾何学時代の数学（3）	アルキメデスの『放物線の求積につい』と『方法』を取り上げユークリッド『原論』の対照的な彼の数学（近世の微積分法的なアイデアと現代数学にも通ずる厳密な論証）を紹介する。	同　上	同　上
5	代数学時代の数学（1）	中世末期にスコラ学者の間で行われてギリシャ古典（特にアリストテレース『自然学』）の研究（ルネッサンス）における近代科学＝近代数学的特性の萌芽を見る。	同　上	同　上
6	代数学時代の数学（2）	中世アラビアにおける数学研究（特に方程式研究）を紹介する。	同　上	同　上
7	代数学時代の数学（3）	代数的記号法の発明と発達の歴史を紹介する。あわせて、近世イタリアにおける方程式の研究を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	代数学時代の数学（4）	近代合理主義哲学の祖デカルトの数学と哲学を述べる。「我思う故に我在り」と、彼の数学との不可分の結びつきを考察する。	長岡亮介	長岡亮介
9	解析学時代の数学（1）	フェルマーによる新しい数学の開拓の様子を紹介する。カヴァリエリやケプラーの業績を素材に初期の無限小解析の方法論的特質を探る。また、ガリレオ・ガリレイの数学と力学を中心に新しい科学と新しい数学の結び付きを考える。	同上	同上
10	解析学時代の数学（2）	ニュートンの業績を中心に初期の微積分法の内容を紹介する。	同上	同上
11	解析学時代の数学（3）	微積分法が、自在に応用されて、新しい分野を切り開いていった様子を、オイラーの業績を中心に紹介する。	同上	同上
12	解析学時代の数学（4）	解析学時代の数学のパラダイムの変更が迫られる事件（振動弦論争）を紹介する。またフーリエによって導入された新しい手法（今日フーリエ級数と呼ばれているもの）を紹介する。	同上	同上
13	算術時代の数学（1）	ラグランジュ、コーシ等、フランスのエコル・ポリテクニーク「数学教授」による数学の改革運動（解析学の厳密化）を紹介する。	同上	同上
14	算術時代の数学（2）	ディリクレ、リーマンによるフーリエ級数の研究を中心に、19世紀半ばにおける数学の研究の方向転換を紹介する。	同上	同上
15	算術時代の数学（3）	ワイヤシュトラースを中心とする「解析学の算術化」運動を紹介、あわせてカントルによる集合論の形成を歴史的な視野のもとで論ずる。	同上	同上

＝微積分入門Ⅰ（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）〕

全体のねらい

この放送授業は、まったくはじめて微積分を勉強する人のために、基礎的な部分をできるだけ丁寧に、わかりやすく説くものである。この授業と、これに続く「微分積分学Ⅱ」とで微積分の標準的内容がほぼカバーされる。

微分と積分とがひとつのことの裏表であることを強調し、両者をはじめから並行する形で扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	直線の座標系 — 平面の座標系 — 座標系による図形の表現 — 空間の座標系 — 平均速度と瞬間速度 — 接線の傾きとしての微分係数 — 面積と区分求積法・定積分	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学学長）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学学長）
2	微分係数・導関数・原始関数	はじめに — 微分係数 — 導関数 — 原始関数 — 面積関数としての原始関数	同上	同上
3	導関数・原始関数の計算 (1)	単項式x^nの導関数・原始関数 — 和と定数倍の導関数・原始関数 — 積と商の導関数	同上	同上
4	導関数・原始関数の計算 (2)	逆関数 — 逆関数の導関数 — 合成関数の導関数 — 置換積方法	同上	同上
5	三角関数	三角関数の復習 — 三角関数の導関数 — 部分積分法	同上	同上
6	逆三角関数	逆三角関数 — 逆三角関数の導関数 — 関数のarc tan xの級数表示	同上	同上
7	指数関数と対数関数 (1)	指数関数 — 対数関数 — 対数関数の導関数	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	指数関数と対数関数 (2)	指数関数の導関数 — 対数関数 $log(1+x)$ の級数表示 — 部分分数分解	斎藤正彦	斎藤正彦
9	定積分の応用(1)	区分求積法 — 極座標 — 極領域の面積 — 回転図形の体積 — 回転図形の表面積	同上	同上
10	定積分の応用(2)	曲線の長さ — 付録：曲率	同上	同上
11	微分法の諸定理	連続関数 — 微分可能関数	同上	同上
12	極大極小と最大最小	極大と極小 — 最大と最小	同上	同上
13	高階導関数	2階導関数と曲線の凹凸 — ニュートン法 — 組合せの数または二項係数 — 高階導関数	同上	同上
14	テイラーの定理と多項式近似	テイラーの定理 — 多項式による近似	同上	同上
15	関数の極限・テイラー展開	基本的な極限 — 無限大・無限小の比較 — テイラー展開	同上	同上

＝微分積分学Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）〕

全体のねらい

『微分積分学Ⅰ』又は『微積分入門Ⅰ('98)』の続きとして、無限級数の理論と多変数関数の微積分を扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	数列	数列の定めかた ― 数列の極限 ― 極限に関する諸定理 ― 実数の完備性（または連続性） ― 問題	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）
2	級数	級数の収束性と和 ― 正項級数 ― 問題	同上	同上
3	整級数	コーシー列 ― 絶対値収束 ― 整級数 ― 重要な例 ― 収束半径 ― 問題	同上	同上
4	項別微積分	項別微積分 ― 収束域の端点での挙動 ― 問題	同上	同上
5	偏導関数	偏導関数 ― 合成関数 ― 平均値の定理 ― 接平面 ― 問題	同上	同上
6	高階偏導関数・極大極小	高階偏導関数 ― 極大極小 ― 問題	同上	同上
7	陰関数定理・平面曲線	陰関数定理 ― 平面曲線 ― 問題	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	条件つき極値・最大最小	条件つき極値 ― 開集合と閉集合 ― 最大最小 ― 問題	斎藤正彦	斎藤正彦
9	方形上の積分	積分の定義 ― 基本性質 ― 問題	同上	同上
10	一般領域での積分	面積 ― 一般領域上の積分 ― 広義積分 ― 問題	同上	同上
11	変数変換・曲面積	変数変換公式 ― 曲面積 ― 問題	同上	同上
12	微積分学の歴史	アルキメデスから16世紀に飛び、ニュートン・ライプニッツにいたる微積分の前史および成立史。さらにその後の解析学の発展のあとをたどり、コーシーを経てワイヤストラスにいたる、微積分の基礎づけの歴史をのべる。	足立恒雄(早稲田大学教授)	足立恒雄(早稲田大学教授)
13	ガリレオからニュートンへ	ガリレオからニュートン及びその後まで、力学が次第に数学を使って記述されるようになる。その過程を分析する。基調報告と討論。	同上	足立恒雄 杉浦光夫 倉田令二朗
14	和算と微積分	日本独特の数学である和算は微積分に到達していたか。古来の問題を多面的に検討する。証明の概念を文化史的に比較する。基調報告と討論。	杉浦光夫(東京大学名誉教授)	足立恒雄 杉浦光夫 倉田令二朗
15	素数分布論	18世紀以後の解析学のうち、数学の他の分野と密接に関連する素数分布論を取りあげ、現在にいたるまでの発展のあとをたどる。基調報告と討論。	倉田令二朗(河合文化教育研究所主任研究員)	足立恒雄 杉浦光夫 倉田令二朗

＝線　型　代　数　Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋礼司（元放送大学教授）〕

全体のねらい

線型代数学には連立一次方程式の理論としての代数的な面と、現代のユークリッド幾何学としての幾何学的な面とがある。これらの共通の基礎としての線型空間の構造について様々な理論構成を理解することが目標である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	線型代数とは何か？	線型代数学の占める位置、その由来そして内容について歴史的な解説もまじえた説明のあと、基本的な例を二つ解説する。	高橋礼司（元放送大学教授）	高橋礼司（元放送大学教授）
2	群の概念	今後の展開のあらゆる所に基本的、統一的な役割を演ずる「群」の概念について説明する。	同　上	同　上
3	行　列	行列によって定義される代数系は、抽象的な代数学の対象の中ではもっとも具体的な性格をもっている。そこにいくつかの基本構造の例がみられる。	同　上	同　上
4	線型空間	線型空間の公理系による定義を説明する。	同　上	同　上
5	線型写像	部分空間、準同型写像、その核と像、和と直知、直積	同　上	同　上
6	独立と従属	ベクトルの（線型）独立と従属の概念、線型結合、線型関係。基底の概念とその存在を示す基本定理。	同　上	同　上
7	線型空間の次元	線型空間の次元、部分空間の次元、次元公式	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	線型写像と行列	線型写像と行列との対応について、行列の代数的演算が、いかに写像に関する集合論的演算の自然な表示となっているかを見る。	高橋礼司	高橋礼司
9	線型写像の階数	部分空間の次元を用いて線型写像の正則度をはかること。	同上	同上
10	置換とその符号	有限集合の元の置き換えの作る、いわゆる対称群についての基本次項、とくに置換の符号についてのべ、行列式への準備とする。	同上	同上
11	行列式	連立方程式の解法、連写像の存在の判定に威力を発揮する行列式の概念について説明する。いくつかの定義の仕方と、実際その計算方法について説く。	同上	同上
12	連立一次方程式の解法	クラメルの方法の説明である。	同上	同上
13	内積空間	線型代数によってユークリッド幾何学を記述するのが目標である。正規直交基底、対称行列、エルミット行列の標準形。	同上	同上
14	固有値、固有ベクトル	線型写像の構造を調べるための基本概念である固有値、固有ベクトルについて述べる。 行列の対角化、三角化との関係についても説明する。	同上	同上
15	ガウスのアルゴリズム	連立方程式の解法、線型空間の基底の計算、線型空間の次元の計算、行列の階数の計算、与えられた行列の逆行列の計算 — 以上のすべてが、ガウスによって発見されたアルゴリズムによって与えられる。	同上	同上

＝線　型　代　数　Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋礼司（元放送大学教授）〕

全体のねらい
線型代数Ⅰにつづいて、基本的な理論とその応用について解説する。とくに後半では数理経済学、物理学（量子論、相対論）、通信工学への応用についてもふれる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	線型代数と幾何学	この講義の展望とクラインのエルランゲンプログラムによる幾何学の構想についてのべる。	高橋礼司（元放送大学教授）	高橋礼司（元放送大学教授）
2	複素数	線型代数Ⅰでは実数体のみを取扱ったが、Ⅱでは複素数体上の線型代数についても学ぶので、その準備として複素数についての基本的な考察をする。	同上	同上
3	商空間、双対空間	やや高度の抽象性をもつこの二つの概念については線型代数Ⅰではふれることが出来なかったので、それをここで解説する。	同上	同上
4	ユニタリ空間	複素内積空間の幾何学である。エルミット行列、ユニタリ行列などについてくわしくのべる。	同上	同上
5	線型写像の分類（Ⅰ）	ジョルダンの標準型の話である。多項式に関する準備も含む。	同上	同上
6	線型写像の分類（Ⅱ）	一般固有空間への分解とそれによる標準形についてのべる。	同上	同上
7	二次形式	二次形式の一般論についてのべる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	二次曲線、二次曲面	平面の二次曲線、空間の二次曲面の分類についてのべる。	高橋礼司	高橋礼司
9	ローレンツ群の幾何学	相対性理論で重要な役を果たすローレンツ群について解説する。	同上	同上
10	シンプレクティック群の幾何学	保型関数論の基礎となるシンプレクティック群の幾何学についてのべる。	同上	同上
11	非負行列とフロベニウスの定理	連立一次方程式の非負解の存在条件と、非負行列の非負固有値に関するフロベニウスの定理	同上	同上
12	線型不等式	ゲームの理論、線型計画法、数理経済学等の社会現象の数学的研究の基礎となる線型代数に関する諸結果	同上	同上
13	線型計画法	線型不等式に関するミンコフスキーの定理、線型計画法と双対定理	同上	同上
14	誤り訂正符号理論	有限体上の線型代数である。	同上	同上
15	古典群	現代数学のあらゆる分野に基本的な役割をはたす古典群についてのべる。	同上	同上

＝確　　率　　論＝（Ｒ）

〔主任講師：馬場良和(静岡大学名誉教授)〕

全体のねらい

確率論は、偶然現象を対象とした数学的理論である。現在では、数学一分野となっているが、この講義では、できるだけ具体的な問題と関連させながら、あまり数学的議論には深入りせずに、現象の理解を優先したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	確率論のはじまり	確率論の出発点となった「分配問題」を述べ、その解決を考える。その副産物として、樹（tree）、2項定理などに触れる。	馬場良和（静岡大学名誉教授）	馬場良和（静岡大学名誉教授）
2	組合せ計算	ある条件下での組合せの総数を数える問題。それをどのように計算で求めるかを考える。あとで必要になるスターリングの公式にもふれる。	同　上	同　上
3	確率とその計算規則	確率とは何か？また、それを求める計算規則を提示し、具体的な問題として「誕生日の問題」を考察する。	同　上	同　上
4	和事象の確率の公式とその応用	多くの事象の和事象の確率を計算する公式を導き、その応用として「一致の問題」を考える。	同　上	同　上
5	条件つき確率と独立性	確率論でもっとも重要な概念である事象の独立性と従属性について述べ、くじびきの問題を解く。	同　上	同　上
6	確率変数と確率分布	確率変数とその確率分布、平均値、分散などを述べ、具体的問題として宝くじの当選の確率、期待値などに触れる。	同　上	同　上
7	さまざまな確率分布（1）	離散的確率分布の代表として、2項分布、幾何分布、ポアソン分布について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	さまざまな確率分布（2）	連続名確率分布として、一様分布、指数分布、正規分布を考える。とくに一様分布が関係する数学的問題を取り上げる。	馬場良和	馬場良和
9	ポアソン分布	ポアソン分布が、「場所占め問題」や空間におけるランダムな点の分布問題において重要な役割をはたすことを述べる。	同上	同上
10	大数の法則	独立で同じ確率分布にしたがう確率変数の和の平均値は、もとの平均値の近くに集まってくる傾向があることを述べ、乱数についても触れる。	同上	同上
11	正規分布による近似	2項分布と正規分布の関係について述べ、その問題を一般化した「中心極限定理」に触れる。	同上	同上
12	ランダムウオーク（1）	直線上のランダムウオークの具体的問題として、「投票の問題」、「つり銭の問題」を考える。	同上	同上
13	ランダムウオーク（2）	ランダムウオークの問題として、原点への回帰問題、「リードの問題」を取り上げる。	同上	同上
14	ランダムウオーク（3）	リードの問題の続きと逆正弦法則を述べる。	同上	同上
15	ランダムウオーク（4）	ランダムウオークの原点からの乖離問題、破産問題、2次元ランダムウオークなどについて述べる。	同上	同上

＝統　　計　　学＝（Ｒ）

〔主任講師：長坂建二(法政大学教授)〕

全体のねらい

統計学の基本事項を理解し、簡単な統計的推定と統計的検定ができるようになることを目標とする。このために、まず、記述統計学の分野（１章～４章）で、データの整理の手法、確率論の分野（５章～８章）から、確率の基礎と統計量の分布、そして、最尤統計量を中心とする統計的推定論と区間推定（９章～11章）、最後に、尤度比検定を中心とする統計的検定論と仮説検定を述べ、例題により、実際に統計手法に習熟することを目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	データの整理	統計学で扱う変数とデータの概念を説明し、ＥＤＡで用いられる手法のうち、代表的な幹葉表示、要約表示（文字値表示）、および箱ヒゲ図により、データを整理する。	長坂建二（法政大学教授）	長坂建二（法政大学教授）
2	度数分布とヒストグラム	伝統的な記述統計学の手法である、度数分布の作成、ヒストグラムの書き方、累積度数分布とその性質や、分位値、さらに、データを視覚的に表現する、統計グラフについて述べる。	同　上	同　上
3	平均と偏差	通常最も用いられる、平均とその意味、関連して総和記号について述べる。次いで、偏差の概念から、データの散らばりを示す指標である、分散（標準偏差）の意味を述べ、データの基準化を説明し、応用として、偏差値についてインタビューする。	同　上	同　上
4	相関と回帰	２次元変数とそのデータをまず導入し、散布図、そして相関の概念を説明し、相関係数を計算する。次に回帰直線の方程式の求め方（最小自乗法）と、相関係数の意味を与え、因果関係との違いを考察する。	同　上	同　上
5	確率の計算	確率論入門として、標本空間と事象、事象の確率について、公理論的に導入する。さらに、独立試行と事象の独立は異なることを説明し、例を与える。また、応用として、ベイズの定理を示す。	同　上	長坂建二 松原　望（東京大学教授）
6	確率変数と統計モデル	統計学での変数の概念と、確率論により統計学を組立てるときに不可欠な、確率変数について説明し、確率変数の分布関数、密度関数を導入する。さらに、確率変数の平均、分散の定義を与える。	同　上	同　上
7	２項分布と正規分布	２項母集団を導入し、独立試行であるベルヌーイ試行から、２項分布が導入されることを示す。また、連続分布の代表例として、正規分布を挙げる。それらの性質を導くための手段として、確率母関数、特性関数を導入する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	統計モデルと統計量の分布	確率論での記法や概念を統計学に取り入れて、統計モデルを構築する。つまり、母集団と標本を確率論の言葉で表現し、標本の関数である統計量の分布を、正規母集団に対して求める。	長坂建二	長坂建二
9	統計的推定	統計的推定とは何であるかを概観し、望ましい推定量の求め方として最尤法を説明し、例を与える。また、区間推定の意味を述べ、厳密な標本分布が必要な小標本法と、極限定理を利用する大標本法を述べる。またさらに、確率天気予報に関して専門家の意見を伺う。	同上	同上
10	平均の推定	正規母集団の母平均について、分散既知の場合、および未知の場合の推定方法を述べ、区間推定の例を与える。また、2つの正規母集団の母平均の差の区間推定の方法と例を与える。	同上	同上
11	母比率と分散の推定	2項母集団の母比率の推定を、小標本法と大標本法の異なる方法を示し比較し、標本数が多いときの大標本法の利点を確認する。また、正規母集団の母分散、および、分散比の推定方法を述べる。	同上	長坂建二 松原望
12	統計的検定	統計的検定の枠組と、重要な2つの誤り、さらに検出力関数を導入して、望ましい検定方式、さらに、それを求める有力な方法である尤度比検定について、例を挙げて説明する。	同上	同上
13	平均の検定	検定には、片側検定と両側検定があること、そして、それぞれの場合の棄却域の形を説明する。次いで、正規母集団の母平均についての検定統計量を尤度比検定から導き、検定方法を与えると共に、母比率の検定方法を述べる。	同上	同上
14	分散、平均の差の検定と適合度検定	正規母集団の母分散と分散比の検定をまず説明し、それを適用した後に、母平均の差の検定ができることを示す。また、多項分布を導入して、適合度検定を、尤度比検定から導く。	同上	同上
15	相関係数と独立性の検定	2変数正規分布を導入し、2変数正規母集団の母相関係数0が独立の条件になっていることを注意する。相関係数の分布を求め、検定方法を説明し、離散変数の独立性の検定を、分割表の形で述べる。	同上	同上

＝物　理　の　世　界＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部龍蔵（放送大学副学長）〕

全体のねらい

日常生活と密接に関連した現象を通じて、その背後に潜む物理の原理や法則をできるだけやさしく、わかりやすく説明するのが本講義の目的である。数式が少々現れるが、それがわからなくても全体の理解には差し支えがない。理系の人はもちろんのこと文系の人にも物理の面白さ、大切さが理解していただければ幸いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	乗り物の物理	乗り物（自動車、新幹線など）を題材として、力学の基礎的事項である速度、加速度、運動の法則について学ぶ。エアートラックの演示実験、コンピューターグラフィックなどを利用し、運動の法則、微分、ベクトルなどを説明する。	阿部龍蔵（放送大学副学長）	阿部龍蔵（放送大学副学長）
2	スポーツの物理	運動の法則の理解を深めるため各種のスポーツを考察する。ゴルフボールの放物運動を説明し、またハイジャンプに対するモデル実験を紹介する。さらに、ハンマー投げと関連し等速円運動、力学的エネルギー保存則と関連しスキーのジャンプを考える。	同　上	同　上
3	温度計の物理	各種温度計の原理、温度の範囲（温度の下限）、極低温（超流動、超伝導）、極高温、物質の三態などを中心として温度と熱について学ぶ。	同　上	同　上
4	水と空気の物理	パスカルの原理、ボイル・シャルルの法則、車のエンジン（熱機関）などで熱力学の初歩を論じた後、少々難しいかもしれないが、エントロピーの説明を行う。	同　上	同　上
5	カメラの物理	光の直進性、光学機械（メガネ、カメラ、望遠鏡、顕微鏡、光ファイバー）、シンキロウ（屈折）、反射（鏡）など幾何光学の原理について説明する。	遠山紘司（文部省・教科書調査官）	遠山紘司（文部省・教科書調査官）
6	太陽光の物理	光の波動性（偏光、回折）、屈折率、光の速さ、色、虹、紫外線、赤外線、可視光線、横波、スペクトル（太陽、星）などを題材に電磁波としての光について論じる。	同　上	同　上
7	楽器の物理	各種の楽器を考え、縦波（タイコ、スピーカー、シロホン）、横波（弦の振動…振幅、波長、振動数）、弦楽器、空気の振動（パイプオルガン、フルート）、音速、超音波など振動と波動について学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	標準と基準の物理	単位（長さ、重さ、時間の決め方）、光、温度、明るさ（ルクス）、堅さ、柔らかさ、音の標準、色の標準（R．G．B）、テニスボールの硬さの基準、ガットの張り方など単位や標準を説明する。力を考察する。	遠山紘司	遠山紘司
9	時計と時間の物理	時計のメカニズム（ネジマキ、クォーツ、原子時計）、標準時、昔の時間（水時計、明日香村）などを扱い、その延長として相対論（ローレンツ変換）に触れる。	同上	同上
10	発電所の物理	発電のためのエネルギーとして位置エネルギー（水力、揚水）、運動エネルギー（風力、潮力）、熱エネルギー（地熱、火力…石油、ＬＮＧ、ゴミ）、原子力エネルギー、太陽エネルギー、化学エネルギーなどを論じ、エネルギー変換について考察する。	同上	同上
11	家庭の電気	乾電池、電熱器、モーター、発光、積算電力計、電子レンジ、契約電流、家庭内配線、kwh 、100Vか200Vかといった家庭の電気と関連する物理法則について学ぶ。	阿部龍蔵	阿部龍蔵 遠山紘司
12	ラジオ・テレビの物理	電磁波の物理を電磁波の発生、その伝播、アンテナ（受信）、波長、携帯電話、ＡＭ、ＦＭ、搬送波などを題材にして論じる。	遠山紘司	遠山紘司
13	記録の物理	磁気記録（テープレコーダー、ＶＴＲ）、古磁気、ＣＤ（コンパクトディスク、光の干渉、反射）、形状記憶合金、コピー機（静電気）などを例に、磁気、静電気、物質の性質について考える。	同上	同上
14	建築物の物理	断熱材（熱伝導）、耐震（消震）、風抜き（モンロー効果）、レーザー（地下鉄工事、畳工事、直角、垂直）、耐光、防音、遮光、セラミックスなどと関連して物理のさまざまな様相を論じる。	同上	同上
15	医療の原理	胃カメラ（光ファイバー）、電磁波（Ｘ線、レーザーメス、ＭＲＩ）、圧力（血圧、眼圧、脈拍、心電図、mmHg）、音波（超音波診断）、ポジトロン消滅など物理の医療面における応用を考察する。	同上	同上

＝物　理　科　学　史＝（Ｒ）

〔主任講師：橋本毅彦（東京大学助教授）〕

全体のねらい

明治以来日本が導入した西洋近代科学とは何であるのかという問題設定の下、①古代中世の科学や中国科学との比較対照、②近代科学革命で起こったこと、③その後の科学研究の理論的発展と研究制度の整備、技術的応用、という３つの基本的テーマを歴史的に順次追いながら、その特徴・あり方を論説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	科学とは、どこでも動く機械ではなく、育つべき土壌を必要とする生命体のようなものであるという、お雇い外国人教師ベルツの言葉を手がかりに、日本が移入した西洋近代科学とはいかなるものか論説しつつ、講義の概要を説明する。	橋本毅彦（東京大学助教授）	橋本毅彦（東京大学助教授）
2	ギリシアにおける自然学の誕生	近代科学の最も重要な源泉はギリシャ科学である。神話的な説明様式にとって代わって、論理的・整合的な説明が始まる。タレスの自然哲学に始まり、無理数の発見、パルメニデスのパラドックス、そしてアリストテレスの総合化によるギリシャ科学の完成を解説する。	同上	同上
3	中世の科学	ギリシャ科学は、アラビアを経由して、「１２世紀ルネサンス」の時代に西欧ラテン世界に導入され、新しく登場した大学で講じられるようになる。ギリシャ科学は、キリスト教の枠組みの中でいかに変容され、独自の学問体系に組み込まれていったのか論じる。	同上	同上
4	中国の科学	ギリシャ以降の西洋の科学の発展と好対照をなすのが中国における科学の発展である。特に歴の作製と結びついた天文学のあり方に注目して、官僚的な中国科学の姿を紹介する。また中国で近代科学が生まれなかった理由に関して問いかける。	同上	同上
5	コペルニクス革命	近代科学革命のハイライトは、コペルニクスによる地動説の提唱である。プトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説とを概略を説明し、その後の地動説への反応、またその継承発展をテイコ・ブラーエ、ケプラーなどを取り上げて説明する。	同上	同上
6	魔術的自然観	中世キリスト教世界において抑圧されていた各種の魔術・占星術は、ルネサンスの人間主義の登場とともに大いに流行する。小宇宙・大宇宙のアナロジーに代表される魔術的自然観を紹介するとともに、実験哲学を準備した「自然魔術」の歴史的意義を論説する。	同上	同上
7	機械論的自然観	アリストテレス的自然観、魔術的自然観にとって代わって近代科学の基礎概念として登場したのが、デカルトらによって提唱された機械論的自然観である。デカルトの著作を通じて、機械論のあらましを紹介し、その背景として、真空実験や精巧な機械の普及を解説。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ニュートンの宇宙論	ニュートンは、地動説に基づくケプラーの天文法則と、ガリレオの落下の法則に代表される地上の運動論とを、見事に総合し近代力学を作り上げ、科学革命を完成させた。錬金術や神学の研究にも専念したニュートンの科学思想の全体像を説明する。	橋本毅彦	橋本毅彦
9	化学革命	フランス革命前夜にラヴォワジェは、新しい燃焼理論を打ち出すとともに、体系的な元素表を提案し、今日の化学の基礎を築いた。ラヴォワジェによるこの化学革命を、18世紀における化学技術の発展という背景を見ながら分析する。	同上	同上
10	数学的実験物理学の誕生	ナポレオン体制下のフランスにおいて、光・熱・電気・磁気などの物理現象に関して、古い光粒子説などに代わって新しい光波動論が提唱されるとともに、精緻な数学的物理理論が登場する。「第2の科学革命」とも呼ばれるこの時期の物理学の躍進を解説する。	同上	同上
11	古典物理学の成立	19世紀の英国では、ファラデー、ケルビン、マックスウェルらの物理学者によって、古典物理学の中核をなすことになる電磁気学が完成される。この事情を、これら英国物理学者が共有する独特の自然像や、大英帝国の電信網の発展に関連させつつ説明する。	同上	同上
12	有機化学の誕生	合成染料の開発を契機に、飛躍的発展を遂げた、19世紀後半の有機化学の発達を概観する。その基礎を築いたリービッヒの化学実験教育、パーキンの最初の合成染料の発明、そしてその後の科学研究のあり方のモデルともなる企業研究所に関して論じる。	同上	同上
13	量子力学の誕生	プランクによって提唱された量子仮説は、古典物理学の根底を覆し、ミクロの世界に関して全く新たな認識をもたらした。ボーアの原子構造論、シュレディンガーの波動力学、そしてハイゼンベルクの不確定性原理などを解説する。	同上	同上
14	原子物理学と原爆開発	ミクロの世界の探求は、新しい素粒子の発見などを経て、核分裂の発見へと導かれる。この発見が第二次大戦下にあって、いかに原爆開発へとつながっていったかを説明する。また大戦中の米国で、科学者・技術者による兵器開発の研究がいかに組織されたかも見る。	同上	同上
15	巨大加速器と巨大科学	ＳＳＣといった巨大加速器に象徴される現代の巨大科学。加速器と検知器の発展の歴史を追うことにより、いかに素粒子研究が、巨大組織化されていったかを見る。サイクロトロンの発明、泡箱の発明、そしてＳＳＣの計画などについて論じる予定。	同上	同上

＝基礎化学（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平川　暁子（放送大学教授）〕
〔主任講師：市村禎二郎（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

内容としては化学のごく基礎的な事項に限り、その科学的意味を理解することに重点をおいた講義とする。化学の基礎的な言葉や考え方を学び、日常体験する物質に関係する現象が化学の視点からどのように説明されているかを理解し、物質の存在と共に成り立っている生活のあり方・方法について考えるための材料とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の世界と化学	化学は物質をしらべる学問である。物質に取り囲まれて暮らしてきた人間が物質をどのように理解しどのように利用してきたかを知り、生命の安全や自然の保全のために物質の理解が重要であることに気付く。 1）はじめに　2）物質理解の歴史　3）物質のなりたち	平川暁子（放送大学教授） 市村禎二郎（東京工業大学教授）	平川暁子（放送大学教授） 市村禎二郎（東京工業大学教授）
2	元素の性質と原子	物質の構成単位は原子である。原子の構造によって元素のさまざまな性質があらわれる。原子の構造が解明されてきた過程、現在の原子の理解、物質を扱うときの国際的な約束について学ぶ。 1）元素の周期律　2）原子の構造　3）電子配置 4）原子量とモル	同　上	同　上
3	分子	物質の多くは分子からなり、多種多様な種類の物質を作る。100種ほどの原子から作られている分子の種類は1000万種におよぶ。物質を取り扱うには分子の記述が必要である。 1）物質の表現と分類　2）化学式と構造式 3）分子の形	同　上	同　上
4	化学結合	分子は原子間の化学結合によって作られる。化学結合とは何か、化学結合の種類と規則性、物質の性質と化学結合との関係について学ぶ。 1）原子価と電子配置　2）結合の形成 3）物質の特徴と化学結合	同　上	同　上
5	化学変化	物質の変化には、組成が変わらない物理変化と変わる化学変化がある。化学変化の法則を知ることで物質の科学的理解が始まった。化学変化とは何か、その法則と表現法について学ぶ。 1）化学変化の法則　2）化学方程式　3）化学変化と熱	同　上	同　上
6	物質の三状態	物質は気体・液体・固体の状態で存在するが、温度や圧力によって状態は変化する。その法則性を学び、気体・液体・固体の特徴と物質による差異の理由を学ぶ。 1）物質の相　2）気体状態方程式 3）気体・液体・固体の特性と粒子の運動 4）分子の大きさと分子間力	同　上	同　上
7	混合物	自然界の物質は完全な純物質として存在することはなくほとんど混合物である。混合現象とは何か、混合成分の割合、混合による性質の変化について学ぶ。 1）混合と溶解　2）濃度　3）混合物の性質 4）分離と精製	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	水溶液と酸・塩基	溶液の中でも水溶液は我々の生活の中でとくに重要な役割をはたしている。酸・塩基・塩はイオンに解離して水に溶解する。イオンの濃度と水溶液の性質について学ぶ。 1）電解質の溶解　2）酸・塩基の反応 3）水素イオン濃度	平川暁子 市村禎二郎	平川暁子 市村禎二郎
9	有機化合物の性質	有機化合物は炭素を主体に10種類程度の原子からなるが、1000万種におよぶ化合物の中大半を占める。その理由、有機化合物の種類と各々の特徴を系統的に理解する。 1）有機化合物の特徴　2）炭化水素 3）官能基と化合物の特徴	同上	同上
10	有機化合物の反応	化学反応によって新しい有機化合物が合成され、優れた機能をもつ物質を使うことができるようになった。有機化合物の反応の規則性について学び、有用な物質を作りだす化学工業の工夫を知る。 1）有機化合物の合成　2）反応の種類　3）反応の機構	同上	同上
11	酸化と還元	一般に鉄が錆びる反応を酸化、錆を鉄にする反応を還元というが、酸化・還元はもっと多くの化学反応に関係している。酸化・還元反応の意味、それに密接にかかわる電気と化学反応の関係について学ぶ。 1）酸化・還元とは　2）金属のイオン化 3）電気と化学反応	同上	同上
12	無機化合物の性質	元素の大部分は無機化合物として存在する。無機化合物は古くから金属や塩として利用されてきたが近年は新しい無機機能性材料が作られている。さらに本章では元素変換に伴う諸現象について学ぶ。 1）無機化合物の特徴　2）遷移元素と不定比化合物 3）元素の変換	同上	同上
13	光と化学	地球上の自然現象は太陽からの光のエネルギーに支配されている。光と物質との相互作用、化学反応と光エネルギーの関係について学ぶ。 1）太陽光の利用　2）光と化学物質　3）光と生物	同上	同上
14	化学反応のしくみ	さまざまな化学反応について学んできたが、化学反応がなぜ起こるか、どのように進行するかについて考え、化学変化の本質を理解する。 1）化学反応のおこりやすさ 2）化学反応はなぜおこるか（化学平衡） 3）化学反応はどのように進むか（反応速度）	同上	同上
15	暮らしと物質の理解	人間活動の諸分野に、物質の科学が広く深く関連していることに気付く。物質現象の面白さとともに、現在と将来の暮らしのあり方として、物質を理解することの重要性に気付き関心を深めるための材料を提供する。 1）化学は Central Science である	同上	同上

＝化　　学　　史＝（Ｒ）

〔主任講師：竹内敬人（神奈川大学教授）〕

全体のねらい

この講義は、基本的には「化学史」であるが、決して化学の発展の全てをカバーする通史ではない。また、歴史家が説く様な、化学の発展の初期の段階を中心とした歴史でもない。この講義は、現代化学の基礎に連なるものであり、実際に研究に従事している科学者の目でみた化学史である。また化学を文化の一側面とみる立場で全体を構成する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	化学の誕生	(1) 化学の誕生 (2) ヘレニズム時代の自然科学と錬金術 (3) アラビアの化学　(4) ヨーロッパでの化学の復興 (5) 化学者のルーツとしての薬剤師 (6) 科学革命を用意した知的環境 (7) 『懐疑的化学者』	竹内敬人（神奈川大学教授）	竹内敬人（神奈川大学教授）
2	化学革命	(1) フロギストン説 (2) 気体の世紀 (3) 質量不変の法則 (4) 新しい燃焼理論 (5) 『化学通論』 (6) 命名法の新体系	同上	同上
3	原子論	(1) 原子論の背景 (2) 定比例の法則 (3) ドルトンの原子論 (4) 倍数比例の法則 (5) 『化学哲学の新体系』 (6) 原子の実在の証明	同上	同上
4	分子論と原子価説	(1) 気体反応の法則　(2) アボガドロの仮説 (3) 原子量の精密決定 (4) カルルスルーエの国際会議 (5) 有機化学の発展と異性体の発見 (6) 原子価理論による説明 (7) ケクレ・クーパーの理論	同上	同上
5	化学工業	(1) 化学工業の勃興 (2) 硫酸製造法の改良 (3) ルブラン法とソルベー法 (4) 電気化学工業の勃興 (5) 新しい教育制度 (6) ＢＡＳＦ社の興隆	同上	同上
6	周期律	(1) 元素の性質の共通性 (2) メンデレーエフの周期律 (3) 希ガスの発見 (4) 周期律の根拠	同上	同上
7	物理化学	(1) 熱力学と化学 (2) ヘスの法則と質量作用の法則 (3) アレニウスの電離説 (4) 物理化学の応用	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	有機化学	(1) ベンゼンの構造 (2) 炭素正四面体構造 (3) フィッシャーの研究 (4) 有機合成化学の進歩 (5) 天然有機化合物への挑戦 (6) 生化学の独立	竹内敬人	竹内敬人
9	高分子化学	(1) 高分子の本性 (2) シュタウディンガーの高分子説 (3) ポリエチレンとポリプロピレン (4) 合成ゴム (5) ナイロンの発明	同上	同上
10	化学の組織	(1) 学会の成立 (2) 化学会の成立 (3) 学会誌とレフリー制度 (4) 化学者の再生産・教育システム (5) 命名法の国際的統一 (6) 国際純正応用化学連合（ＩＵＰＡＣ）	同上	同上
11	無機化学	(1) 19世紀末の無機化学 (2) 放射性元素と同位体の発見 (3) 元素の変換と超ウラン元素 (4) 配位説と錯体化学の世界 (5) 希ガス化合物の発見 (6) 地球化学と宇宙化学	同上	同上
12	理論有機化学	(1) 「有機電子論」の登場 (2) ワルデン反転と有機電子論 (3) 付加と脱離 (4) 直線自由エネルギー関係（ＬＦＥＲ） (5) 配座解析	同上	同上
13	分光学	(1) 分光学の登場 (2) 赤外吸収スペクトル（ＩＲ） (3) 核磁気共鳴（ＮＭＲ）スペクトルの登場 (4) 感度と分解能の向上への努力	同上	同上
14	量子論と量子化学	(1) 初期の化学結合理論　(2) ボーア理論の登場 (3) ルイス・コッセルの理論 (4) アイトラー・ロンドンの理論 (5) ヒュッケル分子軌道法 (6) コンピュータの登場 (7) 非経験的分子軌道法　(8) 化学反応経路の計算	同上	同上
15	これからの化学	(1) 化学と社会との関係 (2) 自然との調和を目指した化学 (3) 化学嫌いを無くすための化学 (4) まとめ	同上	同上

＝基礎生物学（'９８）＝（ＴＶ）

主任講師：中澤　透（放送大学教授）
主任講師：山田晃弘（放送大学教授）

全体のねらい

生物科学の発展により、遺伝子のレベルから高次の神経活動、あるいは生態や進化など生物の多様性が明らかになりはじめている。生物現象を正確にとらえて生命の本質に迫るために、基礎的な生物科学を学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の特徴	30億年以上にわたり発展を続けてきた生命体は、生命の基本的営みに必要なつくりを保持しながら、生命の多様化に対処するつくりを発達させた。このような非生命体にはみられない生物の特徴を学ぶ。	中澤　透（放送大学教授） 山田晃弘（放送大学教授）	中澤　透（放送大学教授） 山田晃弘（放送大学教授）
2	細胞－かたちとはたらき	細胞は生物の基本単位である。いろいろな細胞には核をはじめ特有なはたらきの細胞小器官がある。細胞は分裂によって増殖し、細胞内部の情報伝達が機能調節を担当する。かたちとはたらきの関係を探る。	中澤　透	中澤　透
3	生体を構築する分子	生命の営みは生体を構築する分子のはたらきによっておこる。生体を構築する分子として、炭水化物、脂質、タンパク質および核酸のどのような構造が生体のはたらきの基盤になっているかを学ぶ。	山田晃弘	山田晃弘
4	代謝	生体構築分子は合成と分解をくり返し、生体の維持と成長に役立てている。このような代謝を触媒する酵素のはたらきについて、また代謝の進行に伴って出入りするエネルギーについて学ぶ。	同上	同上
5	遺伝と遺伝子の本体	メンデルの法則とその再発見がなされてから、遺伝子の本体がＤＮＡであることが証明されるまでの道筋を解説する。	東江昭夫（東京大学教授）	東江昭夫（東京大学教授）
6	遺伝子のはたらき	ＤＮＡの構造が解明されたことは生物学のいろいろな分野に大きな影響を与えた。この章では、遺伝暗号の解読、遺伝子のはたらき、および遺伝子操作法などについて解説する。	同上	同上
7	生殖	30数億年以前に出現した生物は、自分と同じ性質の子孫を残す生殖のはたらきによって維持されている。形質を受け渡す遺伝現象は生殖と深く関わること、生殖細胞の出現や性の決定の重要性などについて学ぶ。	中澤　透 山田晃弘	中澤　透 山田晃弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	発生	生殖細胞の卵と精子は受精によって発生を開始する。胚の細胞は分裂・増殖し、そして独特な分化が始まる。発生のプログラムは遺伝情報の発現によって進行し、形態や性質の多様性がつくりあげられることを学ぶ。	中澤　透	中澤　透
9	運動と神経のはたらき	動物の運動は筋肉や繊毛によって行われるが、それはどのような仕組みによるのだろうか。また、神経はどのようにして信号を伝えるのだろうか。動物の活動を理解する上で重要なこれらのことがらについて概説する。	高橋景一(国際基督教大学教授)	高橋景一(国際基督教大学教授)
10	感覚と行動	視覚と聴覚について脳のはたらきとの関連を紹介する。動物の行動に関しては、ミツバチの視覚行動やフクロウとコウモリの聴覚行動について考察する。さらに本能行動や刷り込みについても言及する。	青木　清(上智大学教授)	青木　清(上智大学教授)
11	ホルモン	内分泌系は神経系や免疫系と協調して、体内の環境を一定に保っている。その他にホルモンが動物の行動様式を定めたり、変態のめざましい形態変化を起こすなどの重要でおもしろいはたらきについても言及する。	川島誠一郎(全薬工業研究所長)	川島誠一郎(全薬工業研究所長)
12	植物の特徴	植物は太陽エネルギーを利用して合成した有機物を動物、菌類、細菌類などに供給し、地球上に広く発展した生態系の維持に重要な役割を果たしている。植物のもつ機能的特徴、構造的特徴と生育環境要因との関連について考える。	庄野邦彦(東京大学名誉教授)	庄野邦彦(東京大学名誉教授)
13	生態と環境	生物は地球上のさまざまな生態系で生活している。生態系の構造を学ぶにあたり、島の生態系に注目する。生物の水平分布や垂直分布と生態系との関連、さらに生態系におけるヒトの位置についても論ずる。	松本忠夫(東京大学教授)	松本忠夫(東京大学教授)
14	進化と生物の多様性	生物はすべて共通にＤＮＡからなる遺伝子によって、その機能と構造を規定されている。それにもかかわらず、生物に驚くほどの多様性をもたらしたのは進化である。進化の要因と生物多様化の道筋について概説する。	石川　統(東京大学教授)	石川　統夫(東京大学教授)
15	生物学の現状と将来	最近の生物学の発展によって、多様な生物の側面が明らかになっている。この章では将来につながる問題として4つの問題を取り上げている。生物進化には地球の進化や個体発生の検討が関連し、生物の多様性の確保には地球環境との関係を探り、バイオテクノロジーの問題点を把握し、そして宇宙生物学の可能性を明らかにするなどの諸問題があり、すべて見通しをつける必要がある。	山田晃弘 中澤　透	山田晃弘 中澤　透

＝人間の生物学＝（ＴＶ）

〔主任講師：新井康允（順天堂大学教授）〕

全体のねらい

人間を客観的に見ようとする場合、われわれ自身が人間であるので、生物学的というよりヒト固有のものとして考えがちである。ここでは、ヒトを生物の一員として、医学、薬学、人類学などの範疇にとらわれず、もっと広く生物学的な立場で、できるだけ身近な問題を取り上げて考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	人類の起源と進化	生物としての人間はどんな特徴を持っているのか。そのような人間が生物の進化の歴史で、何時、何処で誕生したのか。人類の起源と進化の問題を化石の最近の研究結果や最近の分子生物学の地検を交えて解説する。	新井康允（順天堂大学教授）	新井康允（順天堂大学教授）
2	ヒトの身体の基本構造－細胞・組織・器官	ヒトの身体はただ細胞が無秩序に集合してできているのではない。細胞と細胞の生産物質が一定の配列と形態をなして集まって、いくつかのタイプの集団－組織を作っている。ヒトの器官は機能に応じてこれらの組織がうまく組み合わさってできているのを理解する。	同上	同上
3	細胞の活動と寿命	細胞の基本構造としての細胞小器官の生命活動における役割、特に、細胞内膜系の機能的意義について理解する。細胞は生命の最小単位であるが、われわれは個体の生命と細胞の生命という生命の二重構造の中に生きている。ヒトのいろいろの臓器の細胞の寿命の違いについて考える。	同上	同上
4	ヒトの性と生殖１－生命の誕生	生殖は生物の最も基本的な機能であり、生物は生殖によって種の維持をはかっている。生殖を担う生殖細胞と体細胞の違いや、ヒトの精子や卵子のでき方とその違い、そして、受精から着床までの過程について解説する。	同上	同上
5	ヒトの性と生殖２－男と女の体はどのように作られるか（その１）	受精時の性染色体の組み合せで、体の性は必ずしも自動的に決まるものではない。精巣ができるか、卵巣ができるかやＹ染色体の上にある精巣決定遺伝子が働くかどうかによって決まる。最近、ＳＲＹという遺伝子が精巣決定遺伝子であることが判明した。その働きについて解説する。	同上	同上
6	ヒトの性と生殖３－男と女の体はどのように作られるか（その２）	体の性が決まるにはいくつかの関門があり、それぞれの関門に両性になり得る選択肢が用意されていて、それを決定するのは卵巣の２種類のホルモンである。何故、男子に子宮ができないのかなどの疑問について考えてみたい。	同上	同上
7	ヒトの性と生殖４－男らしさ女らしさ	体と性分化の次にくるのは脳の性分化である。ホルモンの分泌パターンや性行動のパターンばかりでなく、子供の遊びのパターンなどの性差を脳の性分化の観点から考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	脳とニューロン－心のハードウェア	脳の構成成分である神経細胞（ニューロン）とグリア細胞の特性と基本的な働きについて解説する。心のハードウェアとしての脳を理解する上で、脳の生後発達における、神経細胞の樹状突起の発達とシナプスの増加による神経回路網複雑化を理解するのが重要である。	新井康允	新井康允
9	ヒトの脳１－感覚と運動の制御	ヒトの大脳皮質の機能の局在性があり、外界からの刺激情報がどのような経路を経て大脳皮質へ到達して意識にのぼるか、また、大脳皮質の運動の司令がどのような経路で体の運動を制御するのかを理解する。	同上	同上
10	ヒトの脳２－大脳皮質の進化	ヒトの大脳皮質の新皮質、古皮質、原皮質の発達を動物と比較しながら、特に、高次神経機能に関連ある連合野の働きについて理解し、脳の進化を考える。	同上	同上
11	脳の左右差	利き手があるように、脳の機能的な左右差が認められる。言語中枢は多くのヒトでは左半球に存在する。それにともなって左右の半球で形態的にも左右差が認められる。ヒトの脳の左右差に関する最近の知見を加えて考えてみる。	同上	同上
12	ホルモン	神経系とともに、生体内情報伝達系としての内分泌系の役割について解説する。ホルモンの概念、ホルモンの進化、傍分泌と内分泌ホルモンの作用の仕組みと受容体について解説し、ホルモンの分泌調節機構としての神経内分泌調節のメカニズムについて理解する。	同上	同上
13	生体の防御～免疫系を中心に～	主として、生体の免疫機構について、免疫担当細胞の種類や、抗体産生の仕組み、抗原抗体反応、体液性免疫、細胞性免疫、移植拒絶反応などについて解説し、現在問題になっている問題点 —— エイズなどについて述べる。	同上	同上
14	老化の生物学	老化にともなう諸変化を個体レベルばかりでなく、細胞レベル、分子レベルまで追求する。脳神経系、内分泌系、免疫系、循環器系などの老化の指標となるものについて考え、老齢化会での問題点を考える。	同上	同上
15	ヒトの遺伝学－遺伝子治療の将来	ヒトの遺伝に関する諸問題や現在話題となっているヒトのゲノム解析計画や遺伝子治療の現状や未来への展望について解説する。	同上	同上

＝生物学の歴史＝（R）

〔主任講師：横山輝雄（南山大学教授）〕

全体のねらい

現代生物学における重要な概念である「進化」の概念が歴史的にどのように形成されてきたかを見ることを通して、人類文化全体の流れの中にそれを位置づけ、また生物学の性格が時代によってどのように変化したか、ラマルク、ダーウィン、メンデル等の代表的科学者の研究方法の特色、生命観の欧米と日本との違いについて明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物学史における進化論	進化論は、現代生物学の中で重要な位置をしめているだけでなく、一般の人々も非常に関心をもつ領域である。それは、生命とは何かという本質的な問いにつながるものであり、そのため社会思想や宗教とも関連をもってきた。進化論の歴史を見ると、生物学全般に対する理解を深めることができる。	横山輝雄（南山大学教授）	横山輝雄（南山大学教授）
2	古代中世の生物学	古代ギリシアには、後に進化論的思考とされる考えも出ていたが、それは科学的というよりは思弁的な大胆な思索であった。古代の生物学においては、進化論的な考えは直接には見られないが、「存在の連鎖」とか「存在の階級」などの進化論にかかわる重要な概念がある。	同上	同上
3	近代の生物学	ヨーロッパにおいて近代科学が成立すると、機械論的生命観が生まれた。しかしそれは進化論を直接にはもたらさず、発生学や分類学における種概念がむしろ逆に静的定的自然観を強化した。	同上	同上
4	進化論の先駆者	18世紀には、E．ダーウィン、ビュフォン、ディドロなどの進化論の先駆者とされる人物が登場してきた。彼らの進化論は、当時の静的自然観と動的自然観の対立の中で、自然発生の可能性の問題などと結びついて展開された。	同上	同上
5	ラマルクと進化論	ラマルクにおいて進化論は、最初の体系的な展開をみた。彼の進化論は、通常「獲得形質遺伝説」として知られているが、それは彼の進化論の中心ではなく、「前進的発達傾向」が彼の理論の基本である。後に「ラマルク正義」と彼の進化論は違うものである。	同上	同上
6	ダーウィンと進化論　I	ダーウィンは、『種の起原』によって進化論を確立した。その過程についてこれまで主にかれの『自伝』をもとにした叙述が普通であった。それに対して近年のダーウィン研究は、それと違った新たなダーウィン像を提出しつつある。	同上	同上
7	ダーウィンと進化論　II	ダーウィン自身だけでなく、ダーウィンと同時代の状況についても、これまでの記述は、さまざまな点で訂正が必要になっている。ダーウィン説が『種の起原』出版後に科学者の中枢を占めたのは事実であるが、それは理論的説得力よりも、社会的要因によっていた。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	社会進化論	19世紀後半においては、進化論は生物進化論としてよりは、社会しんかろんとして一般に広がった。スペンサーがその代表者であり、文化進化論、宗教進化論などもあらわれた。その影響は、日本や中国にも及び、その時代の人々に大きな影響を与えた。	横山輝雄	横山輝雄
9	進化論と宗教	ダーウィンの進化論がキリスト教と対立し、「科学と宗教の闘争」がおこったとよく言われているが、必ずしもそう単純ではない。キリスト教の側で進化論を認めた人々が多くいたし、また進化論が必然的に宗教を否定するものでもない。	同上	同上
10	進化論と遺伝学	ダーウィンは自然選択説を打ち立てたが、遺伝については今日否定されている「混合遺伝」という考えをとっていた。メンデルの理論があらわれると、それは当初ダーウィンズムと対立するものと思われており、その両者の関係をどうとらえるかが問題になった。	同上	同上
11	進化総合説の成立	現代進化論の主流である進化総合説はダーウィンの自然選択説とメンデルの遺伝学を総合することによって成立した。それゆえもともとのダーウィンの考えと現代進化論は同じ部分だけでなく、異なった考え方をもとり入れている。	同上	同上
12	現代進化論の理論的諸問題	進化総合説は、第二次大戦後進化論の主流であったが、その後分子生物学や動物行動学などの知見とともに新たな展開が行われた。また断続平衡説などの議論も提出され、1970年代から再び進化論をめぐってさまざまな議論が行われるようになった。	同上	同上
13	社会生物学論争・創造説論争	アメリカを中心に社会生物学に関して、広い範囲の論争がおこった。社会生物学は現代における社会進化論であり、差別の正当化でという批判も出された。この論争と創造説をめぐる論争は、生物学と社会の関係を今日的にあらわにするものである。	同上	同上
14	日本における進化論	進化論は一方では、生物学としての各国の文化を超えた共通性をもつとともに、他方ではそれぞれの国や地域に応じた文化の中で解釈される。明治期から今日までの日本における進化論に対する態度の欧米と違う独自の性格について考える。	同上	同上
15	進化論史をかえりみて	進化論の展開を中心として、生物学史の流れをみてきたが、そこでは科学研究にさまざまな要因が介在し、またその成果は社会や文化に対しさまざまな影響を与えてきたことが示された。それらをふまえて、生物学史の意義を考える。	同上	同上

＝ 病気の成立ちと仕組み ＝ （ R ）

〔主任講師：鬼頭昭三（兵庫大学教授）〕

全体のねらい

人生に病気はつきものである。病気についての概念とその変遷を述べると共に、健康と病気の区切りについて述べる。さらに病態と自覚症状との関係についていくつかの例をあげて説明を試みることにより、病気のメカニズムに対する理解を深めたい。病気に対するアプローチの仕方、医師と患者の関係も変わりつつある。病気の成立ちと仕組みを理解することにより、病気に立ち向かう姿勢を獲得することが大切である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	病気の概念とその変遷	かつては、病気とは自覚症状のあるものであった。現在では、かなり進行するまで自覚症状のない、それでいて予後のあるに病気が多い。人間の病気は時代と共に質的に大きく変わってきている。病気の概念の時代的な変遷について述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
2	病気の研究はどのようにしてなされるか	病気には様々な側面があり、それぞれの立場から研究が行われる。例えば、(1)その病気の原因を探る基礎医学的な研究。遺伝病の原因遺伝子を探る研究やその遺伝子をノックアウトして病気のモデルを作る研究など、(2)その病気を疫学的に調べる社会医学的な研究。病気の頻度や分布を知る研究など、(3)その病気の病態や治療にかかわる臨床的研究。症状発現のメカニズムの研究や最も適切な治療の選択の研究など、である。本講ではこれらの研究を具体的に例を挙げて学ぶことにする。	同上	同上
3	免疫の仕組みとその病気	免疫系は感染防御、がんの発生阻止、移植拒絶などの仕事をしており、それにはリンパ球、白血球、抗体、補体などが関与している。その欠陥があると、感染が血症化しやすくなり、がんの発生が増加する。薬剤や病気の中には免疫力を弱めるものがあり、そのような問題を起こす。一方不適切な免疫反応が生じるとアレルギーとか自己免疫病とかの病気が発生する。移植を成功させるには拒絶を起こす免疫反応を上手に抑える必要がある。	矢田純一（東京医科歯科大学教授）	矢田純一（東京医科歯科大学教授）
4	神経系とその病気	神経系の病気は難治である。神経細胞は障害を受けた後、突起を再び伸ばすことはあっても、喪失した細胞が再生することはない。この意味ではアルツハイマー病を予防したり、その進行を停止させる薬は将来開発される可能性があるとしても、現在ある症状を後退させる意味での治療薬というものは、将来とも理論的には存在しない。 本章では主な神経系の病気について概説しながら、その根底にある神経系そのものの特徴について述べることとする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
5	病気と分子生物学	近年の分子生物学の進歩は著しく、殊に遺伝子レベルでの生命現象の解明が進んでいる。臨床医学の分野にも分子生物学が広く導入され、明らかな遺伝疾患はもちろんのこと、癌や糖尿病などこれまで内的及び外的因子が複雑に関与すると考えられていた身近な疾患にも、その病態解明に対し、分子生物学的アプローチがなされている。又、病気の診断にも応用されているし、更に、遺伝子工学的手法により生産されている薬物もある。本章では、これらの医学・医療面への分子生物学の寄与について述べる。	三好理絵（放送大学非常勤講師）	三好理絵（放送大学非常勤講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	症状が語る病態(1)	発熱と解熱の仕組み まず体温の慣常性はどのようにして保たれるのか。体温の産生と放散はどのように行われ、体温調節中枢はどのようなしくみでこの両者のバランスを保つのか。次に発熱の原因、発熱物質、発熱の型、発熱の功罪について解説し、解熱剤の作用点、発熱対策を考える。	本間日臣(元放送大学教授)	本間日臣(元放送大学教授)
7	症状が語る病態(2)	息切れ、呼吸困執、チアノーゼ これらの症状が発生する仕組みを理解するためにまず肺の機能解剖学、すなわち気管支・肺の構造と呼吸機能の概要を解説する。次で運動時の息切れ、老年期の息切れ、病気のための息切れのおこり方を考える。次に酸素の運搬を担当する赤血球ヘモグロビンの動態から、酸素不足状態を示すチアノーゼのおこる仕組みを説明する。	同上	同上
8	病気の原因	病気はその原因から、感染、欠陥障害、腫瘍、変性、代謝異常、中毒、免疫異常、奇形、機能性障害その他に分けられることも可能である。しかし、外因と内因は相互に影響し合うし、最も根本的な原因が不明な疾患も多い。例えば、感染や中毒などでは外因がより重要であるが、変性や先天性代謝異常では根本的な原因が不明であり、血管障害や腫瘍では内因、外因いずれもが、大きく影響する。最近は分子遺伝学や分子生物学的レベルからのアプローチも行われつつある。異常の点を総括して病気の原因について考えてみたい。	平井俊策(都立神経病院院長)	平井俊策(都立神経病院院長)
9	病気の診断	病気の診断というと一般には病名を同定すること、つまり疾病診断を指しているが、より広義には病変部位の診断、障害の程度の診断などが含まれる。特に部位診断は神経疾患の診断上、疾病診断と並んで大切である。診断は一般に、問診、診察、検査の結果を総合してつけられる。最近は検査の技術が飛躍的に進歩し、例えばX線CT、MRI、PETなどの画像診断や血液その他を用いる生化学的検査などの比重が大きくなっている。しかし、やはり効率的な検査と正しい診断の基礎として従来からの問診や患者さんを全体としてよく観察するための理学的診察の重要性は変わらない。最近の新しい検査法をも分かり易く解説しつつ、診断へのアプローチの方法を述べる。	同上	同上
10	病気の治療	病気の治療には、生活指導をも含めた一般療法、食事療法、薬物療法、手術療法、放射線療法、物理療法ならびに一部これと重複するリハビリテーション、精神療法その他さまざまなものがある。生活指導や食事療法は治療法であると共に、病気の予防にとっても基本となるものである。リハビリテーションは一般の治療とは別に扱われる人もある。それによって生じた障害を対象としているからである。しかし、広義には治療に含まれる。最近はQOLを重視した治療が行われる傾向にあるが、新しい方法によるアプローチをも含めた治療という問題を概説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	治る病気と治りにくい病気	病気を治療の立場からみると、自然経過の間に治癒する病気、積極的な医学的治療を施すことによって治る病気（この中に痕跡を残すことなく治る病気と、何らかの後遺症害や欠損を残して治る病気が含まれる）、難治性の病気に分けることが出来る。近年、治療研究の焦点となっているのは、難治性の癌や内因性の神経疾患であり、この点を中心に述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
12	薬はどのようにして開発されるか	動物実験で種々の投与量の作用、各臓器に及ぼす影響、致死量などを検討。人における適正量を推測。この量の前後の量を健常上に投与し安全性を確かめる（第Ⅰ相）。ついで、適切と思われる量を患者に投与し、効果と安全性から適切な投与量を決定する（第Ⅱ相）。患者を対象とし適正と決められた投与量で既製の同種同効の薬剤の効果、安全を二重盲検法で調査し、有用性を確かめ、厚生省に提出、調査会の審査をパスすれば市販される。最後の調査（第Ⅲ相）はプラセボーと比較することがある。	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）
13	病気の分布とその将来像	この課目では病気の成立機序を種々の角度から総論時的にのべているが、「病気の分布とその将来像」の章だけが集団レベルの視点、すなわち病気をその発生母体となる集団との関連でとらえている。 このような分野は「疫学」とよばれ、近年、医学研究だけでなく、病気への対策とその評価の上で役割が増している。 そこで、改訂版ではこのような点に一層ふかく配慮し、資料を新しくして書き改める予定である。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
14	病気と死	生物が有性生殖という遺伝子survivalの手段を獲得したとき、それと引き換えに死という宿命を背負った。病気は死につながる現象であることは言うまでもないが、今日の先進国では、大多数の人々にとって死因となるのは、いわゆる成人病である。 成人病の基本的原因は老化であり、老化それ自身、すくなくとも一次老化といわれるものは遺伝子によってプログラムされている。 老化、病気、死という避けることの出来ない基本的生物学的現象に対して、個人は、そして医学は何かできるのか？について考えることとする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	まとめ	病気そのものがかわりつつある。医学研究も日進月歩である一方、医療社会は社会的経済的要因の影響を大きく受ける。患者として病気になった時の対処の方法、医療を施す側の問題について、その将来のあるべき姿を論じてまとめとする。	同上	同上

＝地球と宇宙（地球編）＝（ＴＶ）

（主任講師：濱田隆士（放送大学教授）
主任講師：小尾信彌（元放送大学長・東京大学名誉教授））

全体のねらい

宇宙全体から見れば、ゴミのような微小な存在である地球。しかし、それは人間にとってかけがえのない生存の場を提供してくれる、巨大かつ偉大な存在である。この母なる地球は、いま科学の眼でどのように捉えられ、理解されているのか、そしてヒトはその地球にどのように関わっているのか。構成・歴史・現況を概観する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	小尾信彌（東京大学名誉教授・元放送大学長）	小尾信彌（東京大学名誉教授・元放送大学長） 濱田隆士（放送大学教授）
2	地球の形成	太陽系の一惑星として誕生した地球の最も早い時期に関する諸説を紹介し、他の惑星との関連も、比較惑星学の立場から概観する。地球のもつ美しい成層構造の成立、大陸と海岸の出現など、地球のメガフィーチュアをとらえ、海洋中心の水圏、大気圏等にも言及する。	濱田隆士	濱田隆士
3	地球観の移り変わり	地球に関する人間の関心の歴史をたどりながら、さまざまな地球観の成立とその背景を探る。他の天体の動きと地球の運動についての論争だけでなく、大地そのもの、海そのものの成り立ちや歴史の解釈、地球の年齢に関する推定の移り変わりなどにもふれる。	同上	同上
4	動く大地の認識	生活の場としての地球の大地が、あるいはそれをとり囲む海洋が、決して成立以来やすむことなく変動してきたことが、研究史を通じて明らかにされる。目で直接確認できない地中のできごとや、大過去での経過を探る地球科学の手法や考え方を示す。	同上	同上
5	地表の形態	地球に水と大気があり、太陽のまわりを公転しつつ、自転する球体であるために、表層部ではさまざまな営力による変形作用が進む。浸食と堆積により地形が形成され、地層がつくられる。そして、地形は海底地形を含め、ダイナミックに時代変遷をとげてきた事を示す。	同上	同上
6	地層と時間	地球の歴史を数値時間で表現したいとする科学の願望がいかにして改良され、精度を上げてきたかを通観する。重力場における物質の配列－地層・岩層の形成、鉱物に含まれる放射性同位体が示す過去の時間の測定法をとりあげ、地球史編年の原理を理解する。	同上	同上
7	地球通史	46億年という長い地球史について、いくつかのキーエポックあるいはキーイベントをとり上げることにより、大局を通観する。地殻変動や火山活動、変成作用等のみならず、生命との相互作用と環境変遷を含め、地球カレンダーをつくり上げてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	生命の発展	水の惑星の特異な現象とされる、地球型生命の発現とその後の発展に焦点を当てて地球史を眺めてみる。地球生命は宇宙生命とどのような関わりがあるかにもふれる。進化という不可逆事象の結果が、化石という証拠に残されながら地球史を刻んでいく様をみる。	濱田隆士	濱田隆士
9	環境変遷史	地殻変動が不断に起こり、生命がその中で進化をとげて行く以上、その相互作用系としての地球環境もまたさまざまな変容を遂げてきた。過去の地球環境の実態と、そこから推定される環境変動要因を、地球外部からの作用をも含めて考えてみる。	同上	同上
10	森林の歴史	生命史に大きな役割を果たしたのは、云うまでもなく植物界の核をなす葉緑素のもつ化学力である。地史にみる森林の変遷は、したがって地球大気の変遷史でもあり、そこに養われる動物界にも不可分の関係をもつ。恐竜の歴史もそこに位置づけられる。	同上	同上
11	サンゴ礁の歴史	葉緑体をもつ褐藻透を体内に共生させる透礁性サンゴ礁は、まさに海中の森林に例えられる。そのうえ、CO_2を$CaCo_3$の形で、“岩石化”していくなど、サンゴ礁が地球史に占める意義を、歴史的ならびに環境科学的な視点から明らかにしてみる。	同上	同上
12	文明と都市化	地球上に人類が誕生したのは、長い地球史のごく最近に過ぎない。その人類は、智的進化の先端に位置づけられ、二足歩行と脳の大化を背景に文明化を進めてきた。この作用が地球表層部に与えた地形的要素として都市化を眺めることは意義深い。	同上	同上
13	人為の役割	ヒト属が、際限のない欲望を満足させようとする生物進化の側面をもってしまった以上、そこに、人類の地球システムに対する介入・干渉が始まった。人為の果たす地球自然へのインパクト役は、地球型生命の中では特異なものであり、ヒトの反地球型性格が見える。	同上	同上
14	地球環境問題	他意はなかったにせよ、人類の歩んできた文明化の道は、結果として、地球自然に対して大きな歪を与えることになった。CO_2増加と地球温暖化をはじめ、地球環境問題としてとり上げられる幾つかの事態を、地球史とヒトの特異性との接点として捉えて学んでみる。	同上	同上
15	ブループラネットの未来	地球環境問題を解決する力がなく、ヒトも地球も滅びる、とする俗説を超え、地球進化史と生物進化史の示す一つの流れを地球科学の立場から捉えてみる。ヒト社会の成り行きという近未来のみならず、プレート運動の結果おこる日本列島の形状変化まで考えてみる。	同上	同上

＝地球と宇宙（宇宙編）＝（ＴＶ）

（主任講師：小尾信彌（元放送大学長・東京大学名誉教授）
主任講師：濱田隆士（放送大学教授））

全体のねらい

地球と宇宙という私たちの自然環境を学ぶ科目のなかで、ここでは宇宙について学ぶ。人間の宇宙観の歴史に始まって、太陽系や恒星、銀河系や銀河について学習した後に、宇宙全体の構造や進化、そして最後に地球を含む太陽系の起源を学んで地球編につなぐ。全体を定量的に扱うわけではないが、可能な限り事柄を量的に理解させる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	天文学の歴史Ⅰ	天文学は最も古く興った科学の一つである。ここではギリシア天文学から16～17世紀における太陽系の確率、それに続く古典天文学の発展や恒星天文学の誕生、さらに天体分光学から天体物理学が始まる19世紀末までを扱う。	小尾信彌（東京大学教授名誉教授・元放送大学長）	小尾信彌（東京大学教授名誉教授・元放送大学長）
2	天文学の歴史Ⅱ	今世紀に入って天文学は面目を一新して、大反射鏡の建造、新しい物理学による物質観や時空観の革新、電波観測や宇宙開発、コンピューターなどの技術開発によって、天文学も大きく展開し、人間の宇宙観も一新した。それらの発展の経過を学ぶ。	同上	同上
3	現代の天体観測	ケプラーの法則からビッグバン宇宙の検証まで、宇宙の知識は宇宙の観測にもとづいている。今日では、光学観測ばかりでなく電波観測や大気圏内の観測が重要な位置をしめているが、それら種々の観測を概観し、また分光観測など観測の基本についても学ぶ。	同上	同上
4	太陽系の運動	惑星は距離が近いため明るく見え、その動きも古くから観測され、占星術が興り、天動説や地動説が唱えられ、ニュートンに至って力学的な太陽系像が確立した。ここでは太陽系における運動の典型的なものとして、惑星の運動について学ぶ。	同上	同上
5	太陽系の天体	惑星や小惑星、衛星、隕石、彗星や流星物質など太陽を回る無数の天体は、呼び名が異なるように、大きさや外観などをはじめとする性質に大きな違いが見られる。ここでは惑星をはじめ太陽系の主要な天体について学ぶ。	同上	同上
6	太陽	太陽系の中心である太陽はふつうの恒星であるが、距離が近いため、表面の現象やその変化が観測できる唯一の恒星である。恒星に関する知識のかなりのものは、太陽の観測や研究が基礎になっているし、また地球に大きな影響をもつ点でも極めて重要な天体である。	同上	同上
7	恒星Ⅰ	自分でエネルギーを放って輝いている点で、恒星は太陽と同種の天体である。しかし、質量や半径、光度は広い範囲にわたっている。恒星についての種々の性質を知る手段や、その結果について学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	恒星 Ⅱ	分光観測によって、表面の湿度や化学組成をはじめ恒星についての多くの情報を得ることができる。ここでは分光観測の原理やその成果を学び、また光度や表面温度、質量などの個々の性質の間にみられる統計的な関係についても学ぶ。	小尾信彌	小尾信彌
9	恒星の進化	恒星は星間雲のなかで誕生し、質量によって異なる寿命を終る。その間で主系列星や巨星、超巨星など特徴の大きく異なる状態を経過する。また寿命を終る際も、質量により様相が異なる。ここでは進化を研究する原理から、進化の各段階の特徴を学ぶ。	同上	同上
10	銀河系の天体	銀河系には新星や超新星などの変わった天体や、星団のような恒星集団も見られる。また星間には星間物質や星間雲、さらに電波天体やX線天体なども見られる。これら銀河系の各種の天体について学ぶ。	同上	同上
11	銀河系の構造	われわれのまわりの恒星は、星間物資や星間雲とともに直径が約10万光年の薄い円盤状の集団をつくっている。これが銀河系である。ここでは銀河系研究の歴史を概観した後で、銀河系の構造や運動、また銀河系天体の種族について学ぶ。	同上	同上
12	銀河の世界	銀河系の外には、銀河系と対等な別な銀河が無数に観測されている。これら銀河の距離や大きさ、電波、さらに型などについて学ぶ。さらに、銀河やクエーサーなど特異な銀河や銀河集団について学ぶ。	同上	同上
13	宇宙の構造	宇宙の全体的と特徴をまとめて概観したあと、相対論的宇宙論の基礎になっているフリードマンの宇宙モデルについて学ぶ。またフリードマンのモデルに基づく膨張宇宙の性質について学ぶ。	同上	同上
14	宇宙の進化	われわれの宇宙は、およそ 150億年前にビッグ・バンの大爆発で開闢した。その直後に現れた素粒子と光は、膨張し冷えていく宇宙の中で元素をつくり、天体そっくり、それらは進化を続けて現在の宇宙をつくっている。このような膨張宇宙の進化について学ぶ。	同上	同上
15	宇宙の進化と地球	広大な宇宙に存在するわが銀河系の、そのまた片隅を占める太陽系。その太陽の不可視伴星の一つである地球は、水惑星の名に相応しく、生命を育んだ奇跡の星とされる。この小さな天体も人間にとっては巨大であり、46億年の歴史に飾られた奥深い存在と言える。	濱田隆士(放送大学教授)	濱田隆士(放送大学教授) 小尾信彌

＝日本の自然（’９８）＝（ＴＶ）

（主任講師：濱田隆士（放送大学教授））
（主任講師：中村和郎（駒澤大学教授））

全体のねらい

黒潮と親潮にはさまれ火山が多く、多様な景観をみせる日本の自然をさまざまな視点からとらえる。

番組では、日本列島の成り立ちからその環境変遷、日本をとりまく海と大気、土、森林、そこに住む動物そして、人々との関わりを考察するとともに、今日的な問題である環境保全、その将来についても展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	豊かな日本の自然	北半球の中緯度を占める日本列島は黒潮と親潮にはさまれ、火山が多く、自然に非常に高い多様性をもつ。	濱田隆士（放送大学教授） 中村和郎（駒澤大学教授）	濱田隆士（放送大学教授） 中村和郎（駒澤大学教授）
2	日本の大地	地形は地球史の最新の歴史的産物であり、ダイナミックに変化しつつある。そしてそこに人為が加わってゆく。	同上	同上
3	大地をつくる地質と歴史	日本列島の成り立ちのあらましを探り、偉大なる自然のしくみと経緯をたどる。	同上	同上
4	日本列島の環境変遷	過去約50万年以降の日本列島での環境変遷をグローバリズム、ローカリズム両面から解析する。	同上	同上
5	日本の川と文化	自然界の水は、一つのシステムとして循環しており、その実態を捉えるにはマクロな視点が欠かせない。	大熊孝（新潟大学教授）	大熊孝（新潟大学教授）
6	日本をとりまく海と大気	温和な気候は海の強い影響で保たれている。豊かな生物資源の基礎的な環境条件を考える。	濱田隆士 中村和郎	濱田隆士 中村和郎
7	日本の土	大地と水・大気の相互作用が土を生む。植生はそれに支えられ、また逆に土を変えてゆく。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	森林の役割り	南北に細長く伸び、海流に四周を囲まれる日本列島には様々な美しい森が形成され、人がそれを利用する。	武内和彦（東京大学教授）	武内和彦（東京大学教授）
9	重要な里山の自然	列島に定住する人口の増大とともに、ヒトと自然との接点が特有の環境－里山－をつくり出した。	同上	同上
10	日本の植物と昆虫	地域と季節の特性を敏感に反映する虫と花とは、生物分布の大きな基本態をみせてくれる。	石井実（大阪府立大学教授）	石井実（大阪府立大学教授）
11	日本の鳥類	鳥の多様性はその地の環境示標である。渡り鳥も交錯する日本列島を鳥達の立場から探る。	樋口広芳（東京大学教授）	樋口広芳（東京大学教授）
12	日本の森と動物	狭い列島に、多様な動物が特有の分布をとっている。最近その数や地域が減少し、環境も変化してきている。	同上	同上
13	火山・地震の災害	地震・火山列島とも呼ばれる日本では、加えて津波や高潮にも見舞われ、人為もからんで様々の災害に遭遇する。	伊藤和明（文教大学教授）	伊藤和明（文教大学教授）
14	気象災害の恐ろしさ	台風、土石流、冷害など、気象・気候に大きな影響を受ける日本列島の実態を探る。	同上	同上
15	日本の自然環境の将来	レッドデータブックが各方面から出される今日、日本の自然をこれからどのように観、いかに救うか論議する。 日本人の自然観、輸入文化としての自然史（誌）学、治山治水の思想、学校教育、生涯学習等々、非専門家のレベルが問われる。	濱田隆士 中村和郎	同上

＝宇宙観の歴史と人間＝（ＴＶ）

〔主任講師：金子　務（図書館情報大学教授）〕

全体のねらい

古代から現代に至るまで宇宙の姿を人々がどう思い描きどう観測してきたかを考えていく。とりわけ人間の逞しい想像力と鍛えぬいた推理力が、天上界と地上界をどうつなぎどうコスモス像を確立するようになったのかを、洋の東西にわたって検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	落下文明と宇宙神話	人間が天上から落ちたというイメージ（ルチフェル、修羅）は東西に共通する。その地に蠢く人間が上昇への技術を開発し、天空への思慕と想像力から数々の神話宇宙を生む。混沌・複雑な対象に秩序を与える試みである。	金子　務（図書館情報大学教授	金子　務（図書館情報大学教授
2	時間認識と暦法	宇宙についての時間・空間認識は、地上と天上に規則性を見つけ方位と刻みを入れて自分の立つ世界を確認することに始まる。東西における古来の日月年の暦と天地の測量術の展開を調べ、時空認識と文明の高まりを見る。	同　上	同　上
3	世界認識と測量術	この地球や太陽系を知るには、まず正確な空間認識と技術が必要になる。星図と対応して地上の航海図が大航海時代の展開が不可欠である。地図を得るのに、緯度と経度の決定や球面幾何学や投影術などの技法が追求された。	同　上	同　上
4	現象を救え！	火星等の惑星運動の不規則性を円運動からどう説明するか、このプラトンの問いから数学的天文モデルが生まれる。ピュタゴラス的宇宙やあいつぐアド・ホック理論は人間の合理性にもとずく神々への挑戦と回答であった。	同　上	同　上
5	二重コスモス像の成立	アリストテレス自然学とキリスト教神学に結びついたプトレマイオス宇宙モデルは、月を第一天とする天上界と地球を含む月下界からなる。ダンテの『神曲』にもある姿だ。マクロ・ミクロ両コスモスの問題も考えていく。	同　上	同　上
6	コペルニクス革命は革命か	『天球の回転』（1543）がもたらした意義とその受容を日欧に見ながら、科学革命の意味と科学理論の優劣を考える。とりわけ目視観測の第一人者ティコが別の天文体系を立てた意図を、人物比較とあわせて検討してみる。	同　上	同　上
7	ガリレオの望遠鏡と宗教裁判	振り子等から落下運動法則を確定したガリレオは自作の望遠鏡を天上界に向け、木星の４衛星・金星の相変化・太陽黒点と自転等を発見する。その『天文対話』から生じたガリレオ裁判の意味と新観測手段の革新性を問う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ケプラーが聴いた天上の音楽	楕円軌道の発見等のケプラー3法則の成立を見てからその宇宙モデルにおける新プラントン主義の影響を考える。光学理論にもとずく新型望遠鏡の考案、月世界人の想定やガリレオとの関係その他、各種エピソードも面白い。	金子　務	金子　務
9	ニュートンの万有引力世界	反射望遠鏡で注目のニュートンは光学実験と並行して万有引力に想到する。リンゴの落下体験の意味を考えてから、運動の3法則の成立と重力をめぐるフックとの先取権問題、錬金術趣向と神学への傾倒等と宇宙観を見る。	同　上	同　上
10	複数世界論の勝利	この世界以外に別世界があるか否か、古代ギリシヤの原子論はそれを肯定し、アリストテレスは否定した。18世紀にかけ、ブルーノ、フォントネルらの支持で確立する。あわせてオルバースの宇宙パラドックスを考える。	同　上	同　上
11	エントロピー宇宙と時の矢	19世紀半ばに登場した熱力学は宇宙の熱機関モデルと一方向への変化を示唆した。物理学に進化論がドッキングする始まりである。エネルギーとエントロピー概念の意義を考えながら、太陽や宇宙の熱死の恐怖を考える。	同　上	同　上
12	光の物理学とアインシュタイン宇宙	世紀末の混沌の中から20世紀になって光をめぐって相対性理論と量子力学が誕生する。非ユークリッド幾何学と結びついたアインシュタインの重力理論がもたらす解釈が、宇宙は静的か動的か等の根本課題に迫っていく。	同　上	同　上
13	ハッブルの後退する宇宙	パロマー山の巨大な光学望遠鏡を駆使したハッブルはついに、遠方の銀河が遠ざかることから、宇宙が膨張しつつあることを発見する。膨張宇宙論の誕生である。それを支持したかずかずの研究者と傍証データを確認する。	同　上	同　上
14	宇宙探査とＥＴ問題	第2次大戦後に登場した宇宙ロケットと電波望遠鏡は宇宙の直接探査を飛躍的に高めた。アポロ計画の有人月着陸・ボイジャーの太陽系探査等からは、ＥＴの存在を示すものはまだ見つかっていない。探査問題を検討する。	同　上	同　上
15	ビッグバン以降の宇宙論	量子論を基礎にした量子宇宙論の登場で、宇宙の創生と進化が論じられるようになった。ブラックホールからホーキング宇宙その他に至る現代宇宙論の科学的および思想的な諸問題を、研究者等の素顔もあわせて見ていく。	同　上	同　上

＝科　学　実　験　法＝（ＴＶ）

〔主任講師：兵藤申一（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

自然科学の特徴である実験や観察について、その意義や視点、基本的な手法・技術・考え方・実験にまつわる注意事項・約束事項などを、なるべく事例に即しながら平易に説明する。物理学的な実験が主に扱われるが、化学実験や生物学的観察などが対象になっている部分もある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	実験とはなにか	実験の前には予測が必要。再現性の問題。単純化分析と総合。定性と定量。	兵藤申一（東京大学名誉教授）	兵藤申一（東京大学名誉教授）
2	観察と整理	観察の大切さ。整理・分類・体系化。生物の分類。周期律の発見。	岡本　尚（横浜市立大学名誉教授） 平川暁子（放送大学教授） 天野　誠（千葉県立中央博物館学芸研究員）	
3	単位と標準	量で表されるものと表せないもの。単位の統一。国際単位系。ＳＩ関連事項。化学てんびんの扱い方。質量標準と精密測定。測定関連用語。	兵藤申一	兵藤申一
4	大づかみな把握	自然科学者とコンセプト。グラフの描き方。対数方眼紙の使い方。有効数字。次元解析。	同上	同上
5	実験条件の整え方－物理的条件	実験条件の選び方や測定環境。具体例。低温の実現。高温の実現。伝熱や熱絶縁。真空排気。シールディング。	酒井　明（京都大学教授）	酒井　明（京都大学教授）
6	実験条件の整え方－化学的条件	海水から塩化ナトリウムを採取する計画。結合質量による原子量の決定。主成分の定量。不純物の定量。水の精製。実験の過程での汚染。不純物のタイプ。	石森達二郎（立教大学名誉教授）	石森達二郎（立教大学名誉教授）
7	測定系の構成（1）	熱膨張計。測定計の基本要素。検出と変換。直動変換。電位差計。変調変換。参照と刺激。信号の性質と信号の処理。指示と記録。	兵藤申一	兵藤申一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	測定の構成(2)	生物機能の電子計測。差動変圧器を利用した成長計。検量線の作成。実験試料と計測への準備。	岡本　尚	岡本　尚
9	エレクトロニクスの活用	アナログ計測とデジタル計測の利点。デジタル信号の規則。アナログーデジタル変遷。コンピュータと計測システムの接続。ＰＩＤ制御。	酒井　明	酒井　明
10	危険の防止	整頓と準備の必要性。危険の大別。電気・高温・低温・高圧。ガラスについて。危険な物質。実験室からの廃棄物。	石森達二郎	石森達二郎
11	静的な現象の測定	適合計器の選択。データへの余分な寄与。ドリフト。分解能。	酒井　明	酒井　明
12	動的な現象の測定(1)	繰り返しの現象の基本。繰り返しの現象の測定。交流信号の検出。	同　上	同　上
13	動的な現象の測定(2)	非定常的な現象。単発現象の信号。単発現象の信号の計測。高速度写真。トリガー信号。	同　上	同　上
14	統計現象	ブラウン運動。ポアッソン分布。熱雑音とナイキストの定理。ゆらぎの積極的意義。	兵藤申一	兵藤申一
15	報告と発表	実験のまとめ。序論の心得。巨視型と微視型。原理の記述。パラグラフ。口頭発表の注意。	同　上	同　上

＝生活と地球社会（’９９）＝（Ｒ）

（主任講師：清野きみ（北海道大学名誉教授）
主任講師：原ひろ子（お茶の水女子大学教授））

全体のねらい

現代生活の構造的要因が地球規模であり、また、日常的であることを意識する人が多くなった。しかし自己との関係において必ずしも、体系知、生活知にはなっているとはいい難く、とくに過剰消費を克服するライフスタイルの構築は、緊急課題といえよう。本講では生活者、生活の担い手が、次世代家族とその生活活動の持続可能な生活環境要因を深く理解するため、国際化、高齢化、少子化、食料問題、環境と平和、ジェンダーの視点から生活技術と文化の知見を述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球社会と生活構造	生活の質の向上を考えたとき、生活は学際的、総合的に捉えなければならない。転換期における生活の分析には、人の生命・生存・文化の総体として多角的なアプローチが望まれる。本章では、“21世紀は家族と女性の時代”といわれる構造的背景、高度テクノロジーが深く家庭に浸透している時代におけるライフスタイル、生活主体と支援、生活の再生と課題を述べる。	清野きみ（北海道大学名誉教授）	清野きみ（北海道大学名誉教授）
2	日常生活と経済システム	日本の日常生活は環境への負荷が非常に高い。身近な食生活の例でその実態を検証しよう。日本は食料輸入大国であり、消費スタイルは資源浪費型である。これは世界的な資源・環境問題を加速させている。そして問題は日本の消費者にも跳ね返っている。	中嶋　信（徳島大学教授）	中嶋　信（徳島大学教授）
3	飢える世界と日本の課題	食料問題は人類全体が解決を迫られている課題だ。地球上の人々が健やかに暮らすために、各国は自国内の食料生産を増大させるとともに、食料の配分や消費のあり方の改善を図っている。「例外国家・日本」の食料・農業政策を改革することが必要だ。	同　上	同　上
4	共生型の経済システム	経済成長を最優先する社会はさまざまな問題を激化させる。公共財政の危機、環境・公害問題、家庭経済のひずみ、国際的対立などの諸問題は従来型システムの破綻を物語っている。日本および世界が調和的に発展できる経済システムに転換させよう。	同　上	同　上
5	国際化時代における生活の構築	国際的な経済のグローバル化は、ものや人や情報の交流の促進をもたらしている。日本でも海外生活者、海外成長者として経験をもつ人や、多様な文化的背景をもつ人の共住が進行している。異質な文化的規模をもつ人々が共存にむけてどのような生活を構築するか。	原　ひろ子（お茶の水女子大学教授）	原　ひろ子（お茶の水女子大学教授）
6	高齢社会と生活の構築	高齢社会では、異なる世代がどのように共存するか。それは世帯、家族、親族、友人、職場、コミュニティにとっての課題であると同時に、生活者が社会政策のあり方にどう発言していくのか課題でもある。また、各自は加齢とどうつきあうのか。比較文化的に考える。	同　上	同　上
7	地球社会の中の子ども	武力紛争や貧困など経済的・社会的事情から子どもらしい暮らしが保障されず、子ども時代を奪われている子どもたちがいる。一方、日本の子どもは恵まれているようにみえるが果たしてどうであろうか。地球社会に暮らす子どもたちの現状をみる。	中森千佳子（金城学院大学教授）	中森千佳子（金城学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	少子化社会の生活と子育て	少子化は高齢化とともに経済社会の発展にともなう共通した人口課題となっている。豊かさを求め、ライフスタイルの多様な選択が可能になる中で、子育てに何が起きているのだろうか。結婚観や子ども観の変化を軸に、少子化社会の子育てを考える。	中森千佳子	中森千佳子
9	消費社会における子育て	これからの子どもたちは国際化、高度情報化が進展する消費社会での生活が中心となろう。したがって、消費社会の生活者として、消費者としての学習は不可欠である。子どもの消費者としての発達を一例に、消費社会における子育てを考える。	同上	同上
10	環境とヒトの健康	ヒトは環境に影響を与えるとともに、それからさまざまの影響を受ける。本講ではヒトが快適に生活するための条件としての環境、労働衛生的問題、環境側の要因による疾病、公害、ヒト活動の究極の問題である地球レベルの環境問題について論じ、環境法制、国際協力などにも触れる。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
11	身近な環境と生活	温暖化、オゾン層破壊、海洋汚染などの地球環境問題は、つきつめてみれば私たちの日常生活と密接に結びついている。ごみ、水、エネルギーなど私たちの身近な環境問題を取り上げ、エコロジー思想を踏まえながら生活環境の豊かさとは何かについて考える。	荻原なつ子（東横学園短期大学講師）	荻原なつ子（東横学園短期大学講師）
12	環境保全型社会実現への生活者の取り組み	地球環境問題を解決するには、「地球規模で考え地域で行動する」ことが最も重要な視点である。現在国内外で様々な環境問題への取り組みが行われている。市民・行政・企業による具体的な環境活動の事例を取り上げ、ライフスタイルの見直しの糸口を探る。	同上	同上
13	地球社会と生活設計	これまでの放送を踏まえて、環境や食料、開発といったグローバルな視点から現代日本人の生活設計のあり方について考える。具体的な事例としては象牙問題、環境家計簿、グリーンコンシューマー、オルタ・トレード、グリーン購入ネットワークなどを取り上げる。	阿部治（埼玉大学助教授）	阿部治（埼玉大学助教授）
14	持続可能な社会と環境教育	これからの地球人に必要とされる視点として、世代内公正、世代間公正、種間公正があげられる。これらの課題の達成は非常に困難ではあるが、人類の存続にとっては不可欠である。この課題の具体化が環境教育・環境学習であり、その取り組みは着実に広がっている。	同上	同上
15	ライフスタイル構築の課題－文化としての生活再考	地域におけるトータルな生活コミュニティの構築と再生のための諸課題を述べ、歴史と風土に根ざした生活づくりとは何かを考察する。	清野きみ	清野きみ

＝教育の方法（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　学（東京大学教授）〕

全体のねらい

授業の具体的な事例を対象としながら、教育方法学の諸問題を、歴史的、心理的、社会学的に検討する。教えるとは、どういう行為なのか、授業において子どもと教師は、どのようなコミュニケーションを成立させ、何を経験しているのか。これらの検討を通して、これからの学校教育の役割と教師の使命についても講述したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	授業という世界へ	さまざまな授業の風景を提示しながら、教育方法学が扱う問題についてオリエンテーションを行う。	佐藤　学（東京大学教授）	佐藤　学（東京大学教授）
2	教育方法の歴史（１）	古代と中世の学校と教育の様相について示し、「教えるということ」「学ぶということ」について、どのような問題が提示されてきたのかをたどる。ソフィストの教育、ソクラテスの方法、中世の修道院の教育など。	同　上	同　上
3	教育方法の歴史（２）	近代学校の成立と教授学、授業の定型の形成を提示し、今日の基本となっている授業の骨格について歴史的に検討する。モントリアル・システム、一斉授業の様式、日本における授業の成立。	同　上	同　上
4	教育方法の歴史（３）	学校の革新の中で追求されてきた教育方法の変化を、1910年代以降、今日までの改革の歩みの中で探る。 新教育の方法、個性化教育、単元学習、オープン・スクールなど。	同　上	同　上
5	教室という場所	教室という場所が、教師にとっても子どもにとっても、さまざまなディレンマに直面する場所であることを示す。あわせて、日米の教室の風景を比較し、教室における人間関係の組織、学習環境の違いについて考察する。	同　上	同　上
6	授業を創る（１）	小学校の実際の授業の様子を紹介し、授業における様式の特徴として、(1)「変容的様式」と(2)「模倣的様式」があることを示す。	同　上	同　上
7	授業を創る（２）	中学校、高校における授業の改革の実例を紹介し、教科学習において「わかる」ことの意味と、コミュニケーションを通じた学びのあり方について考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	授業を創る(3)	今、試みられている授業改革の努力を紹介し、教師が授業を創造するにあたって、どのような問題ととりくんでいるのかを示す。総合学習、共同学習など。	佐藤　学	佐藤　学
9	カリキュラムの原理と実践(1)	カリキュラムの意味、カリキュラム研究の状況について説明し、カリキュラムの改革についての研究が、どのように進展しているのかについて示す。	同　上	同　上
10	カリキュラムの原理と実践(2)	教科の意味、総合学習の意義について紹介し、カリキュラム開発を学校と教室を基礎にして推進する方法について講述する。	同　上	同　上
11	授業研究の方法(1)	授業を改善するための研究方法が、どのように開発されてきたのかを概観し、行動科学の方法によるカテゴリー分析の実例を通して、授業の道程を科学的、分析的に見ることの可能性と限界について考える。	同　上	同　上
12	授業研究の方法(2)	行動科学の批判以降の新しい授業研究の流れを紹介する。参加観察法による研究、ビデオ記録や物語の記録による質的研究の可能性を探る。	同　上	同　上
13	教職の専門性	教職の専門性についての理論を講述し、今日の教師の専門性が、どのような現実にあり、どのような改善が求められているのかについて示す。	同　上	同　上
14	教師として育つ	教師の仕事を職業的アイデンティティの追求と専門家共同体の形成という視点で分析し、教師が生涯をとおして学び成長する姿を紹介する。	同　上	同　上
15	学校改革の課題	授業とカリキュラムを中心とする学校改革の現状を紹介し、今後の教育方法学の課題について検討する。	同　上	同　上

＝宗教への招待（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大峯　顯（龍谷大学教授）〕

全体のねらい

死すべき命を生きる人類の生活と文化は、昔から人間と人間以上の実在との関係としての宗教を根本にして成り立って来たが、科学が発生してからは、この重要な基盤が動揺しはじめた。これは現代文明における深刻な根本の問題である。人間存在にとって宗教がなぜ必要かを明らかにして、宗教の再生の途を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代日本と宗教	仏教の伝統が崩れてきた明治以後の日本社会は、真の宗教を失って世俗化し、いろいろな擬似宗教を経験してきたと言える。日本はおそらく世界中のどの国家よりも世俗化が進んだ非宗教的な社会だと外国人の目に映るようである。その実態を明らかにする。	大峯　顯（龍谷大学教授）	大峯　顯（龍谷大学教授）
2	民族宗教と世界宗教	宗教は民族宗教（原始宗教）と世界宗教（歴史宗教）の二つの類型に分けられる。両宗教のちがいを明らかにすることによって世界宗教の本質的な特質である現世否定と現世超越性を明らかにする一方、宗教研究の二つの立場である「宗教学」と「宗教哲学」について述べる。	同　上	同　上
3	現代人と死（その１）	現代文明社会に生きる人間の特徴は、死というものに対する異常なまでの拒否であると思われる。しかし、人間が死すべき存在である以上、死の問題を拒否することは、とりもなおさず人間を見失うことである。古代と中世までの死生観の紹介。	同　上	同　上
4	現代人と死（その２）	近代から現代までの哲学にあらわれた死生観の紹介。	同　上	同　上
5	現代人と死（その３）	大乗仏刹の死生観の紹介。	同　上	同　上
6	宗教の本質を問う（その１）	宗教といういとなみをそれ以外の人類のいとなみとを区別する特質、宗教をして宗教たらしめるところのものが宗教の本質である。これを最初に問題にしたのが近代ヨーロッパに成立した宗教哲学であるが、現代の非宗教的な状況の中でもう一度この問題をあつかう。	同　上	同　上
7	宗教の本質を問う（その２）		同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	宗教と言葉	言葉が最も根源的な姿をあらわしてくるのは宗教においてである。キリスト教の聖書や禅仏教、浄土教の「名号」などにあらわれている言葉の諸相を明らかにして、人間にとって言葉とは何かという問題を考える。	大峯　顯	大峯　顯
9	日本人の自然観（その１）	日本の仏教や文芸の著しい特色は自然というものを親しい友として見ると同時に人間以上の聖なるものと見ている点にある。仏教の言葉で言えば、自然は仏であったり衆生（同朋）であったりする。日本人の自然体験の流れを具体的なテキストに即してたどる。	同　上	同　上
10	日本人の自然観（その２）		同　上	同　上
11	聖と俗	宗教とは人間と聖なるものとの関係だと言ってよい。しかし、人類の歴史の中で聖なるものの観念はいつも同じではなく、さまざま変貌を見せている。東西の宗教思想における聖のいろいろな姿をたどりながら、聖と俗との交渉を明らかにする。	同　上	同　上
12	宗教と科学	今日すべての宗教が直面している最も深刻な問題は科学や科学技術との関係である。科学的な世界観は宗教的世界観と正反対のところがあるが、それにもかかわらず、人間精神の中で、この二つは何らかの仕方で統一されなければならない。その統一の途を探る。	同　上	同　上
13	宗教と哲学	宗教と哲学とは共に絶対的なものにかかわる人間のいとなみでありながら、同時にまた信仰と知性という正反対の面をもっている。この両方がどのように関係するかという問題をとりあつかう。	同　上	同　上
14	無神論とニヒリズム	19世紀末のヨーロッパに出現した宗教批判の思想は、「神は死んだ」というニィチェの言葉に象徴されるニヒリズムにいたって宗教そのものの基盤への挑戦となった。今日の宗教の可能性を探るには、このニヒリズムとの対決が不可避的である。	同　上	同　上
15	生命とは何か	宗教は個人の願望とかイデオロギーではなく、各人の内にある生命それ自身の要求、生命が生命自身を自覚しようとするいとなみである。ライフ・サイエンスは生命を外から研究するのに対して、生命と生命自身の内から明らかにする。	同　上	同　上

＝近代詩歌の歴史（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：野山嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい
明治以後において詩歌の変革が避けられない大きな問題であったことを明らかにするのが目標。前代からの連続と断絶、変革の実際などを述べて、内部から近代詩歌の本質を解明する。さらに、散文・小説との関連に照明を当てて外側から近代詩歌のありかたを分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	詩歌の歴史の構想	ことばの定義と全体の構成、詩歌の内外を総体として考える。明治期に全領域の基本構造を見定め、さらに散文・小説まで視野に組み込んで考察する。	野山嘉正（放送大学教授）	野山嘉正（放送大学教授）
2	詩歌の変革	正岡子規１　第２回から６回まで子規を視点に据えて考える。前代の韻文・詩歌の状況と、そこから出発した子規のありかた、及び変革の不可避であったことを述べる。	同上	同上
3	文学としての詩歌	正岡子規２　明治二十年代文学を概観し、そのなかで詩歌が占めていた位置を考えながら子規の存在意義を見定める。	同上	同上
4	短歌形１－俳句	正岡子規３　子規の最も重要な成果である俳句革新の具体的な様相を追跡する。	同上	同上
5	短歌形２－短歌	正岡子規４　子規のもう一つの大切な仕事であった短歌革新について概説する。	同上	同上
6	歌俳の系譜１	正岡子規５　子規の理想がどの程度実現したか、または挫折したか、をできるだけ細かく観察し、併せて結社の展開の姿を略述する。	同上	同上
7	新体詩と短歌明星派１	明星派１　初期明星派が結成される過程と結社に対する考えかたを略述する。主な対象は与謝野鉄幹・晶子。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	新体詩と短歌 明星派2－ 白秋と啄木	明星派2　詩歌の全域を自分の個性として構想した北原白秋と石川啄木について考える。	野山嘉正	野山嘉正
9	新体詩と短歌 明星派3－ 白秋の全領域	明星派3　第8回に引き続き白秋の後半生に集中して詩歌の全領域への展開の具体的な事実を追跡する。	同上	同上
10	詩歌と小説1 －近世から近代へ－	近世から近代へ　詩歌と小説の歴史的な位置関係の変化を観察する。併せて小説偏重の文学史を見直す。取り上げる主たる対象は坪内逍遙と北村透谷。	同上	同上
11	詩歌と小説2 島崎藤村	島崎藤村と田山花袋　いわゆる〈詩歌から散文へ〉という図式を再検討する。二人それぞれの詩歌と小説に対する考えかたを考察する。	同上	同上
12	詩歌と小説3 －『抒情詩』の詩人たち－	柳田国男と国木田独歩　柳田の散文の背景、独歩の内部の詩歌などを考え、詩歌と韻文の関連を論ずる。	同上	同上
13	詩歌と小説4 森鷗外	森鷗外について ― 「啓蒙家」の姿を見せながら、他の追随を許さぬバランス感覚を持っている鷗外が、文学史で果した役割を詩歌を通じて考える。	同上	同上
14	詩歌と小説5 夏目漱石	夏目漱石について ― 第一級の俳人、漢詩人であった面を強調することで漱石の本質を再検討する。	同上	同上
15	結び－芥川龍之介からの一つの見通し	芥川龍之介を転回点に、明治大正期以後の詩歌について、本書の立場から展望する。	同上	同上

＝科学と技術の歴史（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：道家達将（放送大学教授）
主任講師：赤木昭夫（淑徳大学教授）〕

全体のねらい

古典ギリシアから現代までの科学と技術の歴史に沿って、古代・中世・近代・現代の各時代における特徴的な歴史事例を選んで考察し、科学・技術の歴史の流れがどのようなもので、今後どのように展開されてゆくかを考える。科学の出発点は何故と問う問題を見つけること、技術の出発点は解決すべき問題を見つけることである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古代ギリシアの壺	古典ギリシアでは不思議な陶器が作られた。初期は赤い地肌に黒い絵だったが、のちに反転され黒地に赤い絵を焼きつけたものが作られた。この陶器の作り方を調べることで、古典ギリシア人の柔軟な思考力、彼らの高い技術（技能）と科学の成り立ちを考察する。	道家達将（放送大学教授）	道家達将（放送大学教授）
2	アリストテレスの生命論	現代科学の源流は、体系的なものとしては、ギリシアに発する。なかでもアリストテレスは万学の父といわれ、とくに彼の動物学は際立っていた。生命はもとより自然を生成として捉え、生成を形相と質料の概念で説明した。彼の学の継承克服がその後の科学を形成した。	赤木昭夫（淑徳大学教授）	赤木昭夫（淑徳大学教授）
3	アラビアの錬金術	古典ギリシアの科学の成果は、西欧だはなく主にアラビアに継承された。アレキサンドリアでＡＤ１～３世紀頃に生まれた錬金術は中世のアラビアで大いに発展した。その実状を考察する。	道家達将	道家達将
4	実験科学の誕生	12世紀頃、アラビアの科学・技術が西欧に伝わった。それをもとに16～17世紀にかけて、実験によって事実を探究する実験科学がガリレオやハーヴェーらによって盛んになる。ハーヴェーは血液が循環し、心臓がポンプであることを実験で示した。	同上	同上
5	デカルトの身心論	17世紀のフランスの哲学者・数学者デカルトは、中世スコラ哲学から脱するため、自明なことのみから探究を展開する「方法」を唱えた。人間を身と心の二つに分け、心が身を統御すると説明した。彼の身心二元論は後代に大きな影響を与えた。	赤木昭夫	赤木昭夫
6	紡績工場にみる産業革命	18世紀半ばのイギリスで始まった産業革命は、輸入綿花から綿糸を作る紡績機と、綿糸から綿布を作る織機に代表される作業機械の自動化、動力化による大量生産を起点とする。これを契機に、機械は人間、経済、社会に大きな力を及ぼすようになる。	同上	同上
7	化学工場にみる産業革命	産業革命の進展によって、化学工業も盛んになった。その内容は何であったか。その発展によって早くも公害が発生した。それはどのようにして解決されたか。今日につながる化学工業と、その要請で生まれた理論化学の発展について見てゆく。	道家達将	道家達将

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	細胞：観察と理論	顕微鏡で細胞が見られるようになった17世紀から、生命単位として細胞を位置づけるようになる19世紀半ばまでの観察と理論をたどる。それを通じて、技術と哲学と科学の関係（観察と技術的制約、観察にたいする理論的負荷）についてふりかえる。	赤木昭夫	赤木昭夫
9	生命化学への道	人間をふくめ、生きているということは、どういうことか、その仕組みをめぐって、19世紀半ばに論争が起こった。生命現象は生命力があるからだとする説と、分子・原子レベルの問題だとする説が対立し、実験を使って論争が繰り広げられた。	道家達将	道家達将
10	育種・進化・遺伝	産業革命の進展のなかで、動植物の育種も盛んになった。なぜかくも多くの動植物がいるのか、またなぜ子は親に似るのかなどの問いにたいし、育種・進化・遺伝の仕組みをダーウィンたちが考えた。彼らの思索・行動・社会背景を考察する。	同上	同上
11	電気の科学と技術	ファラデーは、推理と実験の積み重ねで電流と磁気の働きを解明し、それをもとに発電機やモーターを発明した。彼の成果をマクスウエルが方程式にまとめた。またファラデーは科学の啓蒙でも大きな足跡を残した。彼らの思考のプロセスを追跡する。	赤木昭夫	赤木昭夫
12	エネルギーとエントロピー	19世紀に熱機関の仕事と効率からエネルギーとエントロピーの概念が生まれた。20世紀に入って、エネルギーの存在形態としての量子、エネルギーと質量の統一を経て、自然の層的理解が深まった。それにはボルツマン、プランク、アインシュタインが貢献した。	同上	同上
13	コントロールとコンピュテーション	状態をつくり、状態を変える、それをコントロールすることで、歯車式、ついで電子式の計算機が作られた。その母体は、カードにしたがって模様を織り出すジャガード織機だった。計算機の可能性を追求したラブレス夫人とチューリングの役割を紹介し評価する。	同上	同上
14	複雑性への挑戦	20世紀後半になって、システム、サイバネティックスといった捉え方に始まり、気象のコンピュータ・シミュレーションによるカオス現象の解明などを経て、生命や経済などの複雑な現象を捉える試みが展開された。その経過と今後の方向を展望する。	同上	同上
15	日本の科学と技術の歴史	日本で、科学とりわけ近代科学がどのように育ってきたのか。それし、生産活動の中で求められてゆっくり育ち、1774年の「解体新書」の出版を原点として急速に連鎖的に発展した。そうなった理由と、今日までの展開過程を検討する。	道家達将	道家達将

＝微積分入門Ⅱ（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）〕

全体のねらい

『微積分入門Ⅰ('98)』の続きとして、級数（1～4）、偏微分法（5～8）、重積分（9～11）およびベクトル解析（12～14）を扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	数列	数列の定めかた —— 数列の極限 —— 極限の定義の反省 —— 極限に関する諸定理 —— 定数の完備性（または連続性）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）	斎藤正彦（湘南国際女子短期大学長）
2	級数	級数の収束性と和 —— 正項級数 —— 交項級数	同上	同上
3	整級数	コーン一列 —— 絶対値収束 —— 整級数 —— 収束半径	同上	同上
4	項別微積分	項別微積分 —— 収束域の端点での様子	同上	同上
5	偏導関数	偏導関数 —— 全微分 —— 接平面 —— 合成関数 —— 平均値の定理	同上	同上
6	高階偏導関数・極大極小	高階偏導関数 —— 極大極小	同上	同上
7	陰関数定理・平面曲線	陰関数定理 —— 平面曲線	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	条件つき極値・最大最小	条件つき極値 —— 開集合と閉集合 —— 最大最小	斎藤正彦	斎藤正彦
9	方形上の積分	積分の定義 —— 累次積分 —— 積分範囲が有界でない場合 —— 開方形の場合 —— 微分と積分の順序交損	同上	同上
10	一般領域での積分	面積 —— 一般領域での積分 —— 体積 —— 広義積分(1) —— 広義積分(2)	同上	同上
11	変数変損・曲面積	変数変損公式 —— 曲面積	同上	同上
12	線積分・グリーンの定理	線積分 —— 単純閉曲線・領域の境界 —— グリーンの定理	同上	同上
13	面積分・ガウスの定理	座標系の向き —— 曲面の向き —— 面積分 —— ガウスの定理 —— ベクトル解析の記号について	同上	同上
14	ストークスの定理	法線方向の微分 —— ガウスの定理（再） —— パラメーター曲面 —— 向きつきの変数変損公式 —— 空間曲線に沿う線	同上	同上
15	反省と補足	微積分の基本定理 —— 定積分の近似計算 —— 無限小解析の基礎づけ —— 無限小量の使用について —— 微分方程式について —— 放射性物質の崩壊	同上	同上

＝線型代数Ⅰ（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：長岡亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数理科学諸分野の勉強を志す人に必要な線型代数の基本部分の確実な理解を主目標におきつつ、必ずしも技術的な知識だけにこだわらず、現代数学の方法論的特徴が実感できるような講義を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	講義の目標と流れ	線型代数という手法の数学的な意義について、概括的な解説をあたえる。講義全体に対する鳥瞰図的な把握を目標とする。	長岡亮介（放送大学教授）	長岡亮介（放送大学教授）
2	現代数学の方法（1）	現代数学は、高等学校以下の数学とは、かなり異なった叙述方法を採用する。ここで学生諸君の感ずる違和感を少しでも減らすために、現代数学の方法論的な特徴を概説する。	同　上	同　上
3	現代数学の方法（2）	現代数学で良く使う（とりわけ線型代数ではすぐに必要とする）基本概念を集合、写像を中心に解説する。	同　上	同　上
4	線型空間（数ベクトルの世界）	最も身近な2次元、3次元の数ベクトルの話題から、やや一般的なn次元数ベクトル空間の具体的な話題を紹介する。n次元の数ベクトル空間を考える上で、連立一次方程式の知識が不可欠であることを理解する。	同　上	同　上
5	連立一次方程式から行列へ	初等的な解法の水準を超えて連立一次方程式の解法を理論的に見つめ直し、その解法の中に、行列とその演算が隠されていることを理解する。この立場から、連立方程式のもっとも基本的な解法を論ずる。	同　上	同　上
6	行列の代数学（行列の演算）	連立方程式を理論的に論ずるために必要となった行列についての基礎的な方法を体系的に論ずる。特に、行列についての和、積が、恣意的な規約としてではなく、理論的に自然な合理性をもって定義されていることを実感してもらいたい。	同　上	同　上
7	行列の基本変形（逆行列の計算）	行列に対して、“可逆な変形”とは何かを学ぶ。逆行列を求める実用的なalgorithmの一つを扱う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	階級（rank）の概念	基本変形を通じて行列の階数を定義し、これが、連立一次方程式の方程式における解の自由度などに深く関係していることを明らかにする。	長岡亮介	長岡亮介
9	行列式の定義に向けて	行列の集合が持つ代数的な構造を具体例として、群論の入門的な議論を紹介する。それを受けて、置換と置換群、対称群、交代群の概念を講ずる。	同上	同上
10	行列式の概念	置換に基づく行列式のもっとも基本的な定義から始め、これに基づいて行列式の基本的な性質（多重線型性）を導く。	同上	同上
11	行列式の計算	実用的な行列式の計算法について具体的な列を通じていくつか実践的に学ぶ。	同上	同上
12	余因子行列の概念、Cramerの公式	逆行列に対する行列式の立場からのアプローチを紹介する。その副産物として、有名な連立一次方程式の解の公式を導出する。	同上	同上
13	行列と行列式論のまとめ	行列に関するこれまでの議論を演習を交えて振り返り、何がこれまでにできたか、この上に何がすぐにできるか、を考える。たとえば、行列の表す一次変換（線型変換）について考える。	同上	同上
14	抽象的なベクトルの理論	公理的なベクトルと線型空間の入門的な解説を行う。具体的なベクトルはまさにその具体的出現にすぎないこと、素朴には「方向」も「大きさ」もなさそうな数学的概念がベクトルの一種であることを理解する。	同上	同上
15	今後の課題と展望固有値	線型代数Ⅱで学ぶ、固有ベクトル、固有空間、行列の対角化、三角化と呼ばれる線型代数のもっとも重要な概念と手法についての概括的な展望を講義する。	同上	同上

＝物理の世界（’９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：阿部龍蔵（放送大学副学長））
（主任講師：遠山紘司（文部省主任教科書調査官））

全体のねらい

日常生活と密接に関連した現象を通じて、その背後に潜む物理の原理や法則をできるだけやさしく、わかりやすく説明するのが本講義の目的である。数式が少々現れるが、それがわからなくても全体の理解には差し支えがない。理系の人はもちろんのこと文系の人にも物理の面白さ、重要性が理解していただければ幸いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	乗り物の物理	自動車、新幹線、飛行機などの乗り物を題材として、力学の基礎的事項である速度、加速度について学ぶ。また、エアートラックの演示実験、コンピュータグラフィックなどを利用し、運動の法則、微分、ベクトルなどを説明する。	阿部龍蔵（放送大学副学長）	阿部龍蔵（放送大学副学長）
2	スポーツの物理	運動の法則の理解を深めるため各種のスポーツを考察する。ゴルフや砲丸投に現れる放物運動を説明し、またハイジャンプに対するモデル実験を紹介する。さらに、ハンマー投と関連し等速円運動を、力学的エネルギー保存則と関連しスキーのジャンプを考える。	同上	同上
3	圧力の物理	地球表面では大気の重さのために、人間を含めすべての物に約１気圧の圧力が加わっている。ここでは人の血圧について考えた後、１気圧よりさらに圧力を加えた場合と、逆に１気圧より減圧し、真空にした場合の日常生活との関連について学ぶ。	遠山紘司（文部省主任教科書調査官）	遠山紘司（文部省主任教科書調査官）
4	摩擦の物理	物体と物体との間には互いに運動をさまたげるような摩擦が働く。ここでは摩擦の種類とメカニズムについて述べた後、摩擦を積極的に利用する例として車のタイヤと路面の関係を、逆に摩擦を減らす例として潤滑やベアリングを摩擦係数の面から論じる。	同上	同上
5	温度と熱の物理	各種温度計の原理、温度の範囲（温度の下限）、極低温（超流動、超伝導）、物質の三態、臨界点などを中心として温度と熱について学ぶ。また、臨界点近傍の水（臨界水）の思わぬ応用例について述べる。	阿部龍蔵	阿部龍蔵
6	水と空気の物理	パスカルの原理、ボイル・シャルルの法則を紹介した後、車のエンジン（熱機関）を例として熱力学の初等的な事項を学ぶ。また、少々難しいかもしれないが、エントロピーの説明を行なう。	同上	同上
7	カメラの物理	光の性質のうち、幾何光学に関する部分を学ぶ。直進、反射、屈折について述べた後、それを応用したカメラ、顕微鏡、虫めがね、望遠鏡の原理、さらに近年、通信分野や医療分野で急速に利用が増している光ファイバーについて述べる。	遠山紘司	遠山紘司

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	太陽光の物理	光の波動性（偏光、回折）、屈折率、光の速さ、紫外線、赤外線、赤外線リモコン、コタツ、ＵＶカット、可視光線、横波、スペクトル（太陽、星）などを題材に電磁波として光について学ぶ。また、虹、色の三原色など色に関する事項を論じる。	遠山紘司	遠山紘司
9	電話の物理	携帯電話、ＰＨＳ、ラジオ（ＡＭ、ＦＭ）、テレビ、ＣＳ放送などを題材として電磁波の性質のうち、光より波長の長い領域である電波を中心に学ぶ。また、電波を発生させる方法、空中の伝わり方も論ずる。	同上	同上
10	楽器の物理	起きている時も、寝ている時も音は私たちの耳に届く。気持ちの良い音、いやな音もある。音には何か規則性があるのだろうか。 ここでは楽器の音を中心に音の性質、音のでる仕組み、聞こえ方、さらに人間の耳に聞こえない音などについて学ぶ。	同上	同上
11	単位の物理	物理量を扱うさい、単位の決め方は重要な意味をもつ。ここでは、長さ、重さ、体積、時間の単位の決め方を学び、また加速度、密度などの組立て単位についても考察する。 国際単位系（ＳＩ）を中心に日常生活、社会習慣と単位の関係についても考える。	同上	同上
12	宝石の物理	宝石のもつ硬さや美しい色は何に起因するのであろうか。宝石を形作っている原子の並び方である結晶構造を中心に、宝石特有の性質を学ぶ。 さらに、原子の並び方に規則性がない場合についても考える。	同上	同上
13	発電の物理	発電のためのエネルギーとして位置エネルギー（水力、揚水）、運動エネルギー（風力、潮力）、熱エネルギー（地熱、石油、ＬＮＧ、ゴミ）原子力エネルギー、太陽エネルギーがある。これらを通してエネルギーの変換を学ぶと同時に送電について考える。	同上	同上
14	家庭の電気	家電製品、電子レンジ、モーター、電熱器、ＦＡＸなどの電気器具を題材として、電気の基本的概念である電圧、電流、抵抗、オームの法則、直流、交流、電力、実効値などについて学び、電気的な現象を支配する物理法則を論じる。	阿部龍蔵	阿部龍蔵
15	記録の物理	磁気記録（テープレコーダー、ＶＴＲ、フロッピーディスク、磁気カード）、光記録（光ディスク、ＣＤ）、光磁気記録（ＭＤ）など、それぞれの記録のメカニズムを通して、日常生活とのかかわりあいについて学ぶ。	同上	同上

＝物理・化学通史（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：橋本毅彦（東京大学助教授）〕

全体のねらい

明治以来日本が導入した西洋近代科学とは何であるのかという問題設定の下、①古代中世の科学や中国科学との比較対照、②近代科学改革で起こったこと、③その後の科学研究の理論的発展と研究制度の整備、技術的応用、という３つの基本的テーマを歴史的に順次追いながら、その特徴・あり方を論説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	科学とは、どこでも動く機械ではなく、育つべき土壌を必要とする生命体のようなものであるという、お雇い外国人教師ベルツの言葉を手がかりに、日本が移入した西洋近代科学とはいかなるものか論説しつつ、講義の概要を説明する。	橋本毅彦（東京大学助教授）	橋本毅彦（東京大学助教授）
2	ギリシャ科学	近代科学の最も重要な源泉はギリシャ科学である。神話的な説明様式にとって代わって、論理的・整合的な説明が始まる。タレスの自然哲学に始まり、無理数の発見、パルメニデスのパラドックス、そしてアリストテレスの総合化によるギリシャ科学の完成を解説する。	同上	同上
3	中世の科学	ギリシャ科学は、アラビアを経由して、「12世紀ルネサンス」の時代に西欧ラテン世界に導入され、新しく登場した大学で講じられるようになる。ギリシャ科学は、キリスト教の枠組みの中でいかに変容され、独自の学問体系に組み込まれていったのか論じる。	同上	同上
4	中国の科学	ギリシャ以降の西洋の科学の発展と好対照をなすのが中国における科学の発展である。特に歴の作製と結びついた天文学のあり方に注目して、官僚的な中国科学の姿を紹介する。また中国で近代科学が生まれなかった理由に関して、問いかける。	同上	同上
5	コペルニクス革命	近代科学革命のハイライトは、コペルニクスによる地動説の提唱である。プトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説とを概略を説明し、その後の地動説への反応、またその継承発展をテイコ・ブラーエ、ケプラーなどを取り上げて説明する。	同上	同上
6	魔術的自然観	中世キリスト教世界において抑圧されていた各種の魔術・占星術は、ルネサンスの人間主義の登場とともに大いに流行する。小宇宙・大宇宙のアナロジーに代表される魔術的自然観を紹介するとともに、実験哲学を準備した「自然魔術」の歴史的意義を論説する。	同上	同上
7	機械論的自然観	アリストテレス的自然観、魔術的自然観にとって代わって近代科学の基礎概念として登場したのが、デカルトらによって提唱された機械論的自然観である。デカルトの著作を通じて、機械論のあらましを紹介し、その背景として、真空実験や精巧な機械の普及を解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ニュートンの宇宙論	ニュートンは、地動説に基づくケプラーの天文法則と、ガリレオの落下の法則に代表される地上の運動論とを、見事に総合し近代力学を作り上げ、科学革命を完成させた。錬金術や神学の研究にも専念したニュートンの科学思想の全体像を説明する。	橋本毅彦	橋本毅彦
9	ラヴォワジェの化学革命	フランス革命前夜にラヴォワジェは、新しい燃焼理論を打ち出すとともに、体系的な元素表を提案し、今日の化学の基礎を築いた。ラヴォワジェによるこの化学革命を、18世紀における化学技術の発展という背景を見ながら分析する。	同上	同上
10	ラプラス物理学	ナポレオン体制下のフランスにおいて、光・熱・電気・磁気などの物理現象に関して、古い光粒子説などに代わって新しい光波動論が提唱されるとともに、精緻な数学的物理理論が登場する。「第2の科学革命」とも呼ばれるこの時期の物理学の躍進を解説する。	同上	同上
11	電磁気学・古典物理学の完成	19世紀の英国では、ファラデー、ケルビン、マックスウェルらの物理学者によって、古典物理学の中核をなすことになる電磁気学が完成される。この事情を、これら英国物理学者が共有する独特の自然像や、大英帝国の電信網の発展に関連させつつ説明する。	同上	同上
12	有機化学の発達と企業研究所の出現	合成染料の開発を契機に、飛躍的発展を遂げた、19世紀後半の有機化学の発達を概観する。その基礎を築いたリービッヒの化学実験教育、パーキンの最初の合成染料の発明、そしてその後の科学研究のあり方のモデルともなる企業研究所に関して論じる。	同上	同上
13	量子力学の誕生	プランクによって提唱された量子仮説は、古典物理学の根底を覆し、ミクロの世界に関して全く新たな認識をもたらした。ボーアの原子構造論、シュレディンガーの波動力学、そしてハイゼンベルクの不確定性原理などを解説する。	同上	同上
14	原子物理学の発展と原爆開発	ミクロの世界の探究は、新しい素粒子の発見などを経て、核分裂の発見へと導かれる。この発見が、第二次大戦下にあって、いかに原爆開発へとつながっていったか説明する。また大戦中の米国で、科学者・技術者による兵器開発の研究がいかに組織されたかも見る。	同上	同上
15	巨大加速器と素粒子論研究	ＳＳＣといった巨大加速器に象徴される現代の巨大科学。加速器と検知器の発展の歴史を追うことにより、いかに素粒子研究が、巨大組織化されていったかを見る。サイクロトロンの発明、泡箱の発明、そしてＳＳＣの計画などについて論じる予定。	同上	同上

＝ 物質の科学と技術開発（’９９） ＝ （Ｒ）

（主任講師：平川暁子（放送大学教授）
主任講師：道家達将（放送大学教授））

全体のねらい

今日そして今後の生活を支える素材には、これまでにない高度な機能を備えた新物質が利用される。その開発には、物質や方法についての基礎的・理論的研究、そして開発に固有の研究が必要である。資源・環境問題への配慮も要る。本講義では、これら最先端の開発研究に当ってこられた方々の苦心談を聞いて共に考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	これからの工業材料（持続可能な発展に向け、工業材料はどうあるべきか）	製造業における「労働生産性」、「資本生産性」の追求が大量生産・大量消費を生み、その結果として大量廃棄・地球環境負荷増大をもたらした。これからは持続可能な発展に向けて「資源生産性」重視へ考え方を変換しなければならない。	村田朋美（新日本製鉄㈱顧問、先端技術研究所元所長） 平川暁子（放送大学教授） 道家達将（放送大学教授）	
2	無機物① 鉄鋼材料（日本の鉄はなぜ優れているか）	鉄は古くて新しい。産業の基礎素材として日本の鉄鋼材料が世界を凌駕してきた理由を３視点から述べ21世紀への課題と展望に繋げる。放送教材では、主に自動車用鋼板について述べる。	阿部光延（新日本製鉄㈱顧問） 道家達将	阿部光延（新日本製鉄㈱顧問） 道家達将
3	無機物② 高温超電導* 材料（開発はどこまで進んでいるか）	高温超電導材料は、電力貯蔵、輸送、エネルギー変換などの領域で最も期待されている材料技術である。①高温超電導特性発現の理論と材料技術の現状、②利用技術、利用システム開発の壁と対応策、③この材料を生かした未来技術と私達の夢。	橋本　操（新日本製鉄㈱先端技術研究所企画グループリーダー） 道家達将	
4	無機物③ 不定比化合物（不定比化合物の理論と応用）	①不定比化合物とは何か、その歴史的経緯、②鉄やウランなどの酸化物を例に遷移元素、欠陥構造、相図など話す、③固容体の熱力学、④不定比化合物の物理的性質（ホッピング型半導体、イオン伝導、原子価と色など）、⑤機能性材料など役立つ不定比化合物、⑥高温超伝導* 物質と不定比性等について述べる。	舘野　淳（中央大学教授） 道家達将	舘野　淳（中央大学教授） 道家達将
5	光① 光の基礎的特性	通信・情報処理・加工などの先端技術を支える光の基礎的特性について解説。すなわち波としての性質により引き起こされる反射・屈折・干渉・回折などの現象を説明する。自然界でのこれらの例についてもふれる。	大津元一（東京工大教授） 道家達将	大津元一（東京工大教授） 道家達将
6	光② 光の限界とその打破	波として光を考えると説明できない現象がいくつかある。これを説明するために、光をエネルギーの粒として扱う量子力学の必要性、その産物の一つであるレーザーの原理についてふれる。一方、波長よりも小さな光の粒を発生させるための近接場光学の原理とそれによる顕微鏡・光メモリ・原子の操作などの話題にもふれる。	同　上	同　上
7	光③ 光ファイバ技術の勝利	光ファイバ通信の原動力となった低損失光ファイバの開発の経緯を紹介し、合せて、技術開発のポイントや情報通信へのインパクトを明らかにする。	須藤昭一（ＮＴＴ光エレクトロニクス研究所研究企画部長） 道家達将	

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	炭素① 炭素の構造と物性	炭素は人類が最も古くから利用してきた物質である。燃料や製錬など化学反応材料として用いられると同時に吸湿ろ過材・顔料・宝石研磨材など広く使われて来たが、今日の新素材としての炭素の利用は、炭素の構造と物性の研究の上に展開されていることを述べる。	大谷杉郎 (群馬大学名誉教授) 平川暁子	大谷杉郎 (群馬大学名誉教授) 平川暁子
9	炭素② 炭素繊維の開発	炭素繊維は軽量で高強度・高弾性率・耐熱性等のすぐれた性質を持つ素材であって、宇宙開発から民生用までさまざまな面で使用されている。このような優れた性能をもつ炭素材料を得るまでの過程での研究開発戦略・問題点の解決方法などについて述べる。	同上	同上
10	炭素③ ダイヤモンド膜の開発	ダイヤモンドは光の屈折率が高いことによる宝石としての価値だけでなく、原子全体が共有結合を作ることによる高い硬度と高い熱伝導性によって、きわめて優れた素材物質となる。このためにダイヤモンド膜が開発されているが、その開発の手段、問題点を述べる。	佐藤洋一郎 (科学技術庁無機材質研究所総合研究官) 平川暁子	佐藤洋一郎 (科学技術庁無機材質研究所総合研究官) 平川暁子
11	有機物① 有機導電性物質の発見	有機化合物にも電気伝導性を示すものがあることが知られて以来、金属に比べ重量・加工性・多様性等に優れた有機物を導電性素材として使用する試みが進められている。有機導電性物質の基本的な物性と機能と各種の有機導電性物質の特性・合成方について述べる。	松永孜 (元、ブリヂストン㈱研究開発本部理事) 平川暁子	松永孜 (元、ブリヂストン㈱研究開発本部理事) 平川暁子
12	有機物② ポリマーバッテリーの開発	現代の情報化時代に使われる機器には、軽量・高性能の電池が不可欠である。しかも天然資源の有効利用のためには繰返し充放電できる2次電池が求められる。はじめて実用化された有機ポリマーバッテリーの開発の方針・開発過程での問題と解決の経験を述べる。	同上	同上
13	有機物③ 分離膜の物性と機能	物質を取扱う際には混ざっているものを分離することが重要な過程である。しかもこの分離は選択性が高く時間的効率が高いことが望ましい。分離膜はこのために有効である。膜の分離機能はどのような物性によりあらわれるのか、機能性分離膜の作り方を述べる。	神沢千代志 (通商産業省・物質工学工業技術研究所システム部長) 平川暁子	
14	有機物④ 分離膜の開発	海水から真水を得る分離膜、合成化学原料、COをとりだす分離膜等、それぞれの素材開発について述べる。	同上	同上
15	物質の科学と技術開発	以上の話を総括する。	道家達將 平川暁子	道家達將 平川暁子

注：超電導*、超伝導* の用語は、内容は同じで、英語としては、superconductivityであるが、日本では工学系は主に前者を、理学系は主に後者を使っており、担当講師のご意見を尊重してそのまま使うことにした。

＝人間の生物学（’９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：新井康允（順天堂大学教授）
主任講師：近藤洋一（群馬大学名誉教授））

全体のねらい

人間を客観的に見ようとする場合、われわれは自身が人間であるので、生物学的というより、ヒト固有のものとして考えがちである。ヒトを生物の一員として、医学、薬学、人類学などの範疇にとらわれず、もっと広く生物学的な立場で、できるだけ身近な問題を取り上げて考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人類の起源と進化	生物としての人間はどんな特徴を持っているのか。人間の進化の歴史で、何時、何処で、人類が誕生したのか。人類の起源と進化の問題を化石の最新の研究結果や最近の分子遺伝学の新知見を交えて学習する。	新井康允（順天堂大学教授） 近藤洋一（群馬大学名誉教授）	新井康允（順天堂大学教授） 近藤洋一（群馬大学名誉教授）
2	ヒトの身体の基本構造－細胞・組織・器官	ヒトの体はただ細胞が無秩序に集合しているのではない。細胞と細胞の産生物質が一定な配列と形態をなして集まっていて、いくつかの機能的な細胞集団－組織を作っている。ヒトの器官は（臓器）は機能に応じてこれらの組織がうまく組み合わさってできていることを理解する。	新井康允	新井康允
3	ヒトの性と生殖－生命の誕生を中心として	生殖は生物の最も基本的な機能であり、生物は生殖によって種の維持を図っている。生殖をになう生殖細胞と体細胞の違いや、ヒトの精子や卵子の出来かたの違い、そして、受精、着床、胎児の発生までの過程について理解する。	同上	同上
4	男と女の体はどのように作られるか－１	受精時の性染色体の組み合わせで、体の性は必ずしも自動的に決まるものではない。精巣ができるか、卵巣ができるかはＹ染色体上にある精巣決定遺伝子が働くかどうかによって決まる。最近、ＳＲＹという遺伝子が精巣決定遺伝子であることが判明した。その働きについて学習する。	同上	同上
5	男と女の体はどのように作られるか－２	体の性が決まるにはいくつかの関門があり、それぞれの関門に両性になるうる選択肢が用意されている。それを決定するのは精巣の２種類のホルモンである。なぜ、男子の子宮がないのかなどの問題や、行動的な性差－脳の性分化がどのようにして起こるかを学習する。	同上	同上
6	脳とニューロン－心のハードウェア	脳の構成成分である神経細胞（ニューロン）とグリア細胞の特性と基本的な働きについて学ぶ。心のハードウェアとしての脳を理解するうえで、脳の生後発生における、神経細胞の樹状突起や軸索の伸展とシナプスの増加による神経回路の複雑化の過程を理解する。	同上	同上
7	ヒトの脳－１感覚と運動の制御	ヒトの大脳皮質の機能の局在性があり、外界からの刺激情報がどのような経路を経て大脳皮質に到達し意識にのぼるか、また、大脳皮質の運動の指令がどのような経路で身体の運動を制御するのかを理解する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ヒトの脳－2 大脳皮質の進化と脳の左右差	ヒトの大脳皮質の新皮質、古皮質、原皮質の発達を動物と比較しながら、特に高次神経機能に関連のある連合野の働きについて理解し、脳の進化を考える。脳の高次機能には左右差のあるのがあり、ヒトの脳の機能的、形態的左右差の最近の知見に関して学ぶ。	新井康允	新井康允
9	免疫の役割－1 感染や障害と闘う	病気になる、あるいはその誘因があると体は治癒のための、あるいは防御のための行動を起こす。免疫反応はその一つである。障害を受けた細胞の処理、侵入した異物、微生物類の抗体による処理など生体防御の仕組みを学ぶ。	近藤洋一	近藤洋一
10	免疫の役割－1 私とあなたを見分ける－臓器移植の問題点	ヒトの体の構造や機能は遺伝子によって決められている。しかし、遺伝子が同じ一卵性双生児でも免疫細胞には区別がある。他人の臓器は見分けられ、排除される。免疫は自他を区別する精緻な仕組みといえる。自己認識の仕組みを学び、免疫の意味を理解する。	同上	同上
11	体の調整の仕組み－1　ヒトのゲノムとバイオシグナル	ヒトのゲノム（全ＤＮＡ）には10万の遺伝子があり、体の形や細胞の基本的な機能を決める。この情報を有効利用するためには環境や体内の情報を知らせるバイオシグナルが必要である。ゲノムとホルモンやサイトカイン等バイオシグナルの実体を学ぶ。	同上	同上
12	体の調節の仕組み－2　ホルモン群による成長と健康の維持	すべてのヒトの体は一個の受精卵から始まる。複雑な大人の組織を作り、成熟した体の健康を守るためには、バイオシグナルを効率よく使ってタイミングのあった調節が必要である。掘る民やサイトカインはどのように働くのか？その仕組みを学ぶ。	同上	同上
13	調節の破壊によるヒトの病気－癌とエイズの生物学	癌は増殖の調節がきかなくなった自分の体の細胞集団である。エイズはウィールスによる免疫機構の破壊である。どの様にしてこの様な破壊が起こるか、対抗する手段があるのか、生物学からみた病気の実体を学ぶ。	同上	同上
14	老化と死－最終過程の調節	老化は避けることのできない生命の最終過程と考えられている。アルツハイマー病の発生を中心に癌の多発や心身機能の衰えなどの老化現象と内分泌系、神経系、免疫系などのバイオシグナル機構の破綻の関係を学び、老化と寿命の原因を探る試みにも触れる。	同上	同上
15	自然環境と人間－環境汚染と環境ホルモン	人間が生活していくうえで自然環境との調和が大切である。人間の作った物質が環境を変化させ、それが地球上に住むヒトを含めた生物に重大な影響を与えるようになってきた。ＤＤＴ、ＰＣＢ、ダイオキシンなどのホルモンかく乱物質を１例として、この問題を考える。	新井康允	新井康允

＝英　語　Ⅰ('96)＝（R）

（主任講師：平賀正子（放送大学助教授）
主任講師：藤井洋子（放送大学助教授））

全体のねらい

日本語と英語の比較に基づいて英語の難しさを考える。
英語の基礎的な文法を復習し、さらに効果的な学習方法を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	なぜ英語は難しいのかについて考える。この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。	平賀正子（放送大学助教授） 藤井洋子（放送大学助教授）	平賀正子（放送大学助教授） 藤井洋子（放送大学助教授）
2	英語の音声	英語の発音、アクセント、リズムなどについて、どこが日本人にとって難しいのか、日本語の音の仕組みとも比較しながら説明を加える。	同上	同上
3	英文法の復習	基本的な英語の文法について復習する。文型、文の要素、品詞などについて、日英語の比較を通して考える。	同上	同上
4	重要な品詞（1）－動詞	英語の動詞の種類、動詞に関係する時制、態などについて再検討する。	同上	同上
5	重要な品詞（2）－名詞、形容詞および副詞	英語の名詞と形容詞を再検討する。	同上	同上
6	語彙	いくつかの標準的な語彙の活用を中心に、語彙力の付け方を検討する。	同上	同上
7	日本語からみた英語（1）	日本語と英語の文の構造の違いを、「省略」という点から探る。日本語ではどのように省略がおこり、それがなぜ英語を学ぶときの難しさにつながるのかについて説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日本語から見た英語（2）	日本語と英語の文や表現の構造の違いを「曖昧さ」という点から探る。日本語に曖昧な表現が多いといわれているが、それが英語を学ぶとき、どのような影響を与えるのかについてのべる。	平賀正子 藤井洋子	平賀正子 藤井洋子
9	日本語にない英語の特徴（1）－擬人法的表現	英語によくおこる無生物主語（擬人法）などの文法的な特徴を再検討する。	同上	同上
10	日本語にない英語の特徴（2）－Itやoneを中心に	英語らしい語法を形作るitや oneを中心に文の構文的な特徴を再検討する。	同上	同上
11	難しい英文（1）－長文	なぜ文は長くなるか検討し、難しい長文を易しく理解できるようにする。	同上	同上
12	難しい英文（2）－省略文	省略はなぜおこるのかについて説明し、省略のある英文になじめるようにする。	同上	同上
13	難しい英文（3）－丁寧文	英語にみられる英語や丁寧表現の特徴について説明し、理解を深める。	同上	同上
14	英語の常識	日常的な物事を英語でどのように表現するのか、知っていそうで知らない英語の表現を、文化的なことを含めて説明する。	同上	同上
15	まとめ	この科目で学んだことの総復習をし、知識を知識のまま終らせることなく、実際の英語の経験のなかで役立たせるにはどのようにしたらよいかについて、今後の学習の方向を示す。	同上	同上

＝英語Ⅱ（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：霜崎　實（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな現代的なテーマを扱いながら、英語コミュニケーション能力の基礎を習得することを目的とする。毎回テーマを導入する英文を読み、語彙・表現・背景的知識を確認する。次に関連テーマについての対話文を通じ、口頭でのコミュニケーションにおいて語彙や表現を活用する方法を学ぶ。さらに、様々な機能表現を学ぶことによって、表現の幅を広げていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	Computer and Society	インターネットの普及にともなって、現代社会は急速にコンピュータ依存社会になりつつある。第１回目の今回は、コンピュータと私たちの生活との関わりをテーマとして取り上げる。	霜崎　實（慶應義塾大学教授）	霜崎　實（慶應義塾大学教授）
2	Recycling	私たちの生活はゴミと切り離すことができない。近年では使い捨て文化の蔓延でゴミが激増し、処理が追い付かない状況になっている。そこで、資源の再利用がますます重要となる。今回のテーマはリサイクル。	同　上	同　上
3	Wind Energy	毎日の生活に電気は必要不可欠である。しかし、水力発電用のダムは自然の生態を破壊する可能性があり、原子力発電には安全上の問題がある。今回のテーマは環境にやさしいとされる風力発電。	同　上	同　上
4	The Ozone Layer	物質文明の進展にともない私たちの生活は豊かになったが、地球環境はますます悪化しているとされる。今回は、私たちの日常生活で使われている化学物質によるオゾン層の破壊をテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
5	Diet	健康は私たちの最大の関心事である。しかし、現代人はストレス・過食症・拒食症・肥満・アレルギー症など、さまざまな問題を抱えている。そこで今回は、健康とダイエットをテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
6	Drinking	最近日本でのワインの消費量が増えているという。確かに、私たちのまわりにもワイン党の人が増えているが、一方ではビールや日本酒にこだわる向きも相変わらず多い。今回のテーマは飲酒。	同　上	同　上
7	Review (1)	今回は、第１回から第６回までの復習を中心に行う。具体的には、これまでに扱った語彙および慣用表現を再確認するのと同時に、重要な機能表現を含む対話文を新たに紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	Smoking	最近ではようやく煙草を吸わない人への配慮が定着しつつある。レストランでも禁煙席を設けているところが増えているし、公共の交通機関でも禁煙が当然となりつつある。今回のテーマは喫煙を取り上げる。	霜崎　實	霜崎　實
9	Cellular Phones	携帯電話は便利ではあるが、問題点も少なくない。自動車運転中の使用は交通事故の危険をともなうし、電車やレストランの中での使用は他人の迷惑にもなる。今回のテーマは携帯電話。	同　上	同　上
10	Computer and Health	コンピュータにより必要な情報を短時間で検索し利用することが可能になった。しかし、長時間にわたるキーボードの使用は健康被害をもたらすという。今回は、コンピュータと健康がテーマである。	同　上	同　上
11	Working Women	近年女性の社会進出が目覚ましいが、まだ男女間の待遇格差は依然として残っている。フェミニズム運動の盛んなアメリカにおいても事情は同じらしい。今回は働く女性の問題がテーマである。	同　上	同　上
12	Work and Leisure	ワーカホリックと呼ばれたのは一昔前のことで、私たち日本人も休暇を楽しむ余裕が持てるようになった。しかし、休暇をとれる期間は国によって事情が異なるようである。今回のテーマは仕事と休暇。	同　上	同　上
13	Automobile Society	急激に「車社会」へと変貌した最近の日本では一家に2台の車を持つ家も珍しくはない。確かに生活は便利にはなったが、交通渋滞や交通事故の問題は深刻である。今回は車社会をテーマとして取り上げる。	同　上	同　上
14	Space	宇宙は神秘的であるがゆえに、魅力的である。しかし、最近では惑星探査ロケットが送ってくる情報によって、少しずつではあるが神秘のベールが剝がされつつある。今回のテーマは、宇宙。	同　上	同　上
15	Review (2)	今回は、第8回から第14回までの復習を中心に行う。具体的には、これまでに扱った語彙および慣用表現を再確認するのと同時に、重要な機能表現を含む対話文を新たに紹介する。	同　上	同　上

＝英語　Ⅲ（’９７）＝（ＴＶ）

〔主任講師：平賀正子（放送大学助教授）〕
〔主任講師：藤井洋子（放送大学助教授）〕

全体のねらい
標準的な速さの英語を聴いて理解する力を養成するとともに、語彙、文法、コミュニケーションの学習を通して、英語の総合力をつけることを目的とする。テレビドラマ２本を教材として用いる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Snapshots: We're In This Together (1)	The Collino family, John, Mary, their children, Jennifer and Mark, and John's mother, Frances, respond to sudden announcement that John's employer is moving to another town. The family has to face a major decision about whether or not to move with the company from Pennsylvania to Florida.	平賀正子（放送大学助教授） 藤井洋子（放送大学助教授） Victoria Muehleisen（早稲田大学外国人講師） Jerome Young（慶應義塾大学非常勤講師）	平賀正子（放送大学助教授） 藤井洋子（放送大学助教授） Victoria Muehleisen（早稲田大学外国人講師） Jerome Young（慶應義塾大学非常勤講師）
2	〃 (2)	Mary and Jennifer have strong reasons for staying in the community. Mary's recent promotion makes it difficult for her to decide; but, she knows that she cannot support the family on her salary no matter how much the promotion means to her.	同上	同上
3	〃 (3)	Jennifer resists moving because she does not want to leave her school in her senior year. Mark, on the other hand, is positive about moving.	同上	同上
4	〃 (4)	There is conflict and disagreement concerning the possibility of a move, but each family member is able to express his or her concerns before a compromise plan is eventually worked out.	同上	同上
5	〃 (5)	The family celebrate their tentative solutions and begin to look ahead to their new lives. This drama shows how good communication skills can result in close family relationships.	同上	同上
6	The Gift of Amazing Grace (1)	"The Gift of Amazing Grace" is the story of a close-knit urban family on the verge of making it big as a gospel singing group. The family, known professionally as the Wheeler Singers. has been selected to appear on the TV talent show "Future Faces."	同上	同上
7	〃 (2)	As the first gospel group ever to appear on "Future Faces" the Wheeler Singers are a huge hit. Everybody in the family is excited about it except for Grace, a young teenager, who has no singing talent.	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	The Gift of Amazing Grace (3)	Although Grace secretly wants to leave the family, she loses her nerve to say it when she figures out that Aunt Faith still agonizes over her daughter's extrangement from the family. In the meantime, Silvertone Records is eager to produce a record by the Wheeler Singers.	平賀正子 藤井洋子 Victoria Muehleisen Jerome Young	平賀正子 藤井洋子 Victoria Muehleisen Jerome Young
9	〃 (4)	Silvertone offers to produce a record, but on one condition. The record must include rock and pop music, sung in their style. The family members have mixed feelings about this.	同上	同上
10	〃 (5)	Grace worries about ruining the family's career. One day, she has to sing alone at the recording studio. Although she tries to do her best, she ends up running away in shame.	同上	同上
11	〃 (6)	Grace decides to leave the family and to live with her cousin Subaya, who has a separate life from the Wheelers. However, down deep both Grace and Subaya miss the family.	同上	同上
12	〃 (7)	The Wheeler Singers are worried that they may lose the "Future Faces" championship since they haven't found a pop song to sing on the next show.	同上	同上
13	〃 (8)	Both Morris, Grace's father, and Aunt Faith, Subaya's mother are heartbroken that their daughters have left them.	同上	同上
14	〃 (9)	Subaya has found that Grace has a talent for musical composition. Subaya and Grace take her new song to the Wheeler Singers at the studio, where they are reunited with the family to sing and win the championship.	同上	同上
15	〃 (10)	This entertaining drama underscores the need for people of all ages to grow and develop as individuals as well as family members.	同上	同上

＝英語　Ⅳ（'９４）＝（ＴＶ）

〔主任講師：中田清一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

テレビの音声と映像をフルに活用し、現代の社会で実際に使われている生きた英語を学ぶ。コミュニケーション革命、識字運動、サラリーマンのストレスなどの教材を目で見、耳で聞くという作業を通して英語の仕組みを総合的に学習し、練習によって実践能力の定着を図る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Towards the Global Family (1)	現代は、情報、もの、人間などが地球的規模で交流しているグローバル・エイジである。ここでは、その交流の重要な要素の一つである情報に焦点を当て、それをやりとりする手段としての技術の進歩、いわゆるコミュニケーション革命を取り上げた。具体的には、「地球家族への道程（Towards the Global Family）」のタイトルの下で、コミュニケーションの歴史、通信衛生の開発と進歩などのトピックを音と映像で示し、そこで用いられているSpoken Englishを通して現代英語の総合的学習を目的とする。 以上を４回に分けて練習する。	中田清一（青山学院大学教授） Lisa Vogt（東邦大学助教授） David Reedy（青山学院高中部教員）	中田清一（青山学院大学教授） Lisa Vogt（東邦大学助教授） David Reedy（青山学院高中部教員）
2	〃 (2)		同上	同上
3	〃 (3)		同上	同上
4	〃 (4)		同上	同上
5	Learn to Read (1)	アメリカでは、成人の五人に一人は十分な識字能力を持っていないと言われている。この三回のシリーズでは、読み書きのできない人を無くすための識字率向上運動で働くボランティアの活動を追い、字が読めることがいかに大切であるかという問題に迫る。アメリカ三大ネットワークの一つであるＡＢＣのTed Koppelがホスト役を務めており、彼の歯切れのいい英語を通して、現代英語を総合的に学ぶ。	同上	同上
6	〃 (2)		同上	同上
7	〃 (3)		同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	Stress & Productivity (1)	今、日本では過労死が社会問題となり、このことばがそのまま“Karoshi”として英語のvocabularyに入っているほどである。アメリカにおいても、社員のストレスが大きな問題となっており、職場の管理職はいかにこれと対処していくかに苦心している。 まだ社会に出て働いたことのない人も、学校での対人関係、試験、その他で様々なストレスを経験すると言われているので、この教材は参考になる。 ここでは、四回のシリーズを通して、現代英語を総合的に学習し、練習などにより、実践へと結びつける。	中田清一 Lisa Vogt David Reedy	中田清一 Lisa Vogt David Reedy
9	〃 (2)		同上	同上
10	〃 (3)		同上	同上
11	〃 (4)		同上	同上
12	Make-Believe Marriage (1)	最後の四回のシリーズは、これまでの、どちらかと言うとserious な内容から離れて、軽いトピックになってはいるが、やはり考えさせられるテーマである。結婚の演習とでもいうべきMake-Believe Marriage は、高校生がクラスでの教育活動の一環として「仮の」夫婦になるところから始まる。結婚には、忍耐とコミュニケーションとユーモアが欠かせないという結論になるのだが、スポーツマンのゲーリーと秀才のゲイル「夫妻」のドラマを通して、現代英語を総合的に習得することに努める。	同上	同上
13	〃 (2)		同上	同上
14	〃 (3)		同上	同上
15	〃 (4)		同上	同上

＝英　語　Ⅴ('97) ＝ (Ｒ)

(主任講師：佐藤良明(東京大学教授)
主任講師：内野　儀(東京大学助教授))

全体のねらい

第二次大戦後のアメリカを代表する戯曲から、5作品を抜粋して読みます。俗語を含む多様な口語表現に慣れ、台詞と卜書きしかない戯曲の行間を読みとる力を養うことが語学的な目標です。その一方、演劇というメディアにからめとられた、戦後アメリカの精神史的変遷を知ることも学習の目的になるでしょう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	『セールスマンの死』 (1)	Arthur Miller作の「Death of a Salesman」(1949)を3回にわったて読みます。1回目は幕開き直後、主人公のセールスマン、Willy Loman が過去の幻想にひたる場面を取り上げます。さらに、物語全体の枠組みを解説しつつ、戯曲の読み方の基礎を学びます。	佐藤良明(東京大学教授) 河合祥一郎(東京大学助教授)	内野　儀(東京大学助教授) 河合祥一郎(東京大学助教授)
2	『セールスマンの死』 (2)	2回目は、第1幕の幕切れ近く、生きがいを失って自殺を考える Willyをめぐる、妻 Lindaと2人の息子 Biff と Happy の場面を取り上げます。この作品の主要テーマである家族と資本主義、個人と社会といった問題を取り上げ、解説を加えます。	同　上	河合祥一郎
3	『セールスマンの死』 (3)	3回目は、全体の幕切れ近く、Willy とBiffの最後の対決の場面を取り上げます。もう一度作品全体の流れを把握するようつとめ、さらに、この作品のテーマとより広い意味での戦後アメリカ社会の問題との関係を、さまざまなレベルで考察します。	同　上	同　上
4	『欲望という名の電車』 (1)	Tennessee Williamns作の「A Streetcar Named Desire」(1947)を3回にわたって読みます。1回目は、作品の概説をまじえ、第1場で主人公の Blanche Debois がニューオリンズの妹 Stella の家を訪ねてくる場面の、久々に再会した姉妹の会話を取り上げます。	同　上	同　上
5	『欲望という名の電車』 (2)	2回目は、第6場。Stellaの家に居すわることになった Blanche 。心身ともに疲れた彼女の前に、救いをもたらすかもしれない Mitchという未婚の男が現れます。ここでは遊園地でデートをした後、深夜帰宅した2人の会話を取り上げます。	同　上	同　上
6	『欲望という名の電車』 (3)	3回目は、第10場。この作品のもう一人の主人公、Stellaの夫Stanley KowalskiとBlanche の幕切れ近くの対決の場面を取り上げます。作者Williamの劇作家としての特長や、要望、女性、暴力、アメリカ南部といった、この作品のテーマについても解説します。	同　上	同　上
7	『フール・フォア・ラヴ』 (1)	Sam Shepard作の「Fool for Love」(1983)を3回にわたって読みます。1回目は、幕開き直後の2人の主人公 EddieとMay の再会の場面を取り上げます。作品の概説を行ないにかなり特色あるShepard の劇作法についても解説し、こうした戯曲の読み方に慣れることを目指します。	佐藤良明 内野　儀(東京大学助教授)	内野　儀(東京大学助教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	『フール・フォア・ラヴ』 (2)	2回目は、作品の半ば近く、復縁を迫る Eddieが怒って出ていき、舞台上に2人の幻想として存在する The Old Man が Mayを慰めるために、過去の回想を行なう場面を取り上げます。1回目から引きつづき、Shepard 劇の登場人物や場面構成の特色について概説します。	佐藤良明 内野 儀	内野 儀
9	『フール・フォア・ラヴ』 (3)	3回目は、作品の幕切れ近く、 Eddieと Mayが、The Old Man をめぐる2人の決定的な過去を、それぞれまったく異なる物語として語る場面を取り上げます。作品のテーマは何かを考え、更に幻想、物語性、神話といった現代的な問題がこの劇とどうかかわるかを考察します。	同 上	同 上
10	『オレアナ』(1)	David Mamet 作の「Oleanna 」 (1992) を3回にわたって読みます。1回目は、第1幕の幕開き近く、大学教授Johnの部屋にやってきたJohnと「女子」大生Carol の会話部分を取り上げます。沈黙と間が支配するMamet 独特の台詞術に慣れることを目指します。	同 上	同 上
11	『オレアナ』(2)	2回目は、第2幕、「セクハラ」で大学当局に訴えられたJohnが Carolを説得しようとする場面を取り上げます。ここでは特に、2人の会話中にみてとれる第1幕での2人の関係の逆転に注目し、言語と権力という問題を考察します。	同 上	同 上
12	『オレアナ』(3)	3回目は、第3幕終盤の、JohnとCarol の最後の対決の場面を取り上げます。「セクハラ」で裁判所にまで訴えられて窮地に追い込まれたJohnとフェミニスト団体のバックアップを受け勝利を確信するCarol。さらに、この作品が同時代的に持つ意味について概説します。	同 上	同 上
13	『エンジェルズ・イン・アメリカ』 (1)	Tony Kushner作の「Angels in America 」第1部 (1992) 、第2部 (1993) を3回にわたって読みます。1回目は作品の概要を解説し、第1部第1幕の第4場で、この劇の主人公Prior がゲイのパートナーLouis に、HIV ウイルスに感染したことを告げる場面を取り上げます。	同 上	同 上
14	『エンジェルズ・イン・アメリカ』 (2)	2回目は、第1部第3幕の2場で、Louis が友達で元ドラッグ・クイーンのBelizeに、Prior を見捨てた罪悪感をまったくちがう話としていいわけがましく語る場面を取り上げます。80年代アメリカで何が問題になっていたかが鮮明に伝わる場面。	同 上	同 上
15	『エンジェルズ・イン・アメリカ』 (3)	3回目は、第2部第2幕の2場、予言者に選ばれたPriorのもとに天使が降臨する場面を取り上げます。ハルマゲドン、イデオロギーの終焉、ゲイ・パワーの台頭とアメリカ保守主義の復権といった同時代的問題をKushner がどうこの作品に取り込んでいるかを概説します。	同 上	内野 儀

＝英語 Ⅵ（'94）＝（R）

〔主任講師：山内　久明（日本女子大学教授）
主任講師：グレアム・ロー（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

現代英語になじむために、1980年代のフィクションの抜粋を読む。いずれも作者は、イギリスで広い読者層を持つが、生粋のイギリス人とは限らず、アイルランド、南アフリカ、西インド諸島、香港、日本など、出身背景は多岐にわたる。多様な題材、テーマを扱う抜粋を通して、さまざまな文体のテクストの理解をめざす。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Empire of the Sun	An account of the experiences of a young British boy separated from his parents as Shanghai is invaded by the Japanese Imperial Army.	山内久明（日本大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）	山内久明（日本大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）
2	The Remains of the Day	A description by an aging bachelor butler of his brief reunion with the woman who might have become his wife, on a motor trip to the south-west of England.	同上	同上
3	The Life and Love of a She-Devil	An ironical account of the dramatic revenge that a married woman begins to take on her unfaithful husband burning down their house.	同上	同上
4	Lamb	A description of the relationship between a priest and a young boy in a Catholic home for young offenders in rural Ireland.	同上	同上
5	Nice Work	A lively discussion between a female university lecturer in literature and a male factory manager, reflecting their diffring views on life and society.	同上 斉藤兆史（東京大学助教授）	同上
6	July's People	A prophetic account of how a white South African family take refuge in the outback village of their black servant following a violent revolution.	山内久明 グレアム・ロー	同上
7	A History of the World in 10½ Chapters	An amusing and speculative re-telling of the Bibilical story of the flood from the viewpoint of a wood-losue stowing away on Noah's ark.	同上 丹治愛（東京大学教授）	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	Sour Sweet	A description of the lifestyle of a young Hong Kong Chinese family who have recently emigrated to the UK.	山内久明 グレアム・ロー	山内久明 グレアム・ロー
9	The Radiant Way	A portrayal of three young women as they meet for the first time in the 1950s at their interviews to enter Cambridge University.	同上	同上
10	The Enigma of Arrival	A description of the emotions of a young man from Trinidad in the West Indies on his arrival in London for the first time in the 1905s.	同上	同上
11	Hotel du Lac	An evocation of the uneasy thoughts and feelings on the morning of her marriage of a sensitive romantic novelist approaching middle-age.	同上	同上
12	Psalms	A young girl's irreverent account of her relationship to her idiosyncratic fundamentalist Christian mother and her pet tortoise.	同上	同上
13	Waterland	An account of the history of fenland area of Eastern England, and the role of the narator's ancestors in the struggle to reclaim land from the sea.	同上 高橋和久(東京大学教授)	同上
14	Oscar and Lucinda	A dramatic account of a midnight poker game between unlikely partners, and Anglican priest and an independent young woman, on a ship bound for Austalia in the late nineteenth century.	山内久明 グレアム・ロー	同上
15	The Child in Time	An account of the shattering experience of a young father when his little daughter disappears during a routine shopping expedition to the local supermarket.	同上	同上

＝英　語　Ⅶ('97) ＝ (R)

〔主任講師：佐藤良明(東京大学教授)
主任講師：柴田元幸(東京大学助教授)〕

全体のねらい

1950年代から90年代まで、アメリカの社会と文化はどのように移り変わってきただろうか。小説作品とエッセイを行き来しながら（時々ポピュラー・ソングも挟んで）それぞれの時代の雰囲気を感じとっていく、ちょっとおしゃれなレッスンである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名
1	50年代（1）	John Cheever "The Enormous Radio" より。「豊かな社会」を実現したアメリカの高層アパートに暮らす夫婦の心理の綾を描き出す、短編の名手による秀作。	柴田元幸（東京大学助教授）	柴田元幸（東京大学助教授）
2	50年代（2）	かつてフォークソング集会は、抑圧的な社会への異議申し立ての意味を担っていた。"We Shall Overcome" の歌を全米に広めたフォークシンガー、Pete Seeger の回想文を読む。	佐藤良明（東京大学教授）	佐藤良明（東京大学教授）
3	50年代（3）	白人中産階級が繁栄を謳歌する一方で、黒人・ユダヤ系など少数派が文学を通して「声」を持ちはじめた。ユダヤ系の代表的作家 Bemard Malamud の叙情的な短編、"The First Seven Years"を読む。	柴田元幸	柴田元幸
4	50年代（4）	George Toomer の青春メモワール*Before I Forget*より。テキサスの少年が「黒人」の音楽にどうやって引き込まれていったかを、誇張したユーモラスな文体で綴る、文化史的にも情報豊富な一篇。	佐藤良明	佐藤良明
5	60年代（1）	激動の時代の過激な黒人指導者Malcolm X の演説は、どんな点が新しく魅力的だったのだろうか。ケネディ暗殺と同じ63年11月の講演 "Message to the Grass rocts" を聞きながら彼のスタイルとメッセージについて考えよう。	同上	同上
6	60年代（2）	Thomas Pynchon, *The Crying of Lot 49*の一節。60年代に登場した新しい世代の作家の中で最大の評価を得ることになったピンチョンの、重厚なイメージ世界に挑戦する。	柴田元幸	柴田元幸
7	60年代（3）	ロック評論家Greil Marcusがウッドストックのコンサートを体験したすぐあとで、Rolling Stone 誌に寄せたルポ。躍動する文章の中に、時代が大きく動いていることの興奮が焼き付いている。	佐藤良明	佐藤良明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	70年代（1）	70年代の到来とともに、アコースティックなサウンドで私的な世界を歌うシンガー=ソングライターが人気を博した。James Taylor, Carole King, Jackson Browne 等について、歌詞の英語に触れながら、講師二人が対話する。	佐藤良明 柴田元幸	佐藤良明 柴田元幸
9	70年代（2）	幼いころから山野を歩き、禅を修め、インディアンの心の世界を自分のものにしてきたGary Snyder 。彼なら、西洋物質文明を批判する資格は十分ある。ピューリッツァ賞に輝いた詩集*Turtle Island*所収の講演“Wilderness”を読んで「エコロジー」の一歩奥を考えよう。	佐藤良明	佐藤良明
10	70年代（3）	Jayne Anne Phillips, “Rayme ”より。作者は「熱い」60年代から「冷たい」70年代にかけて青春時代を過ごした世代の女性。時代の空気が冷えていき、心が「解放」から「癒し」へと向かう流れを、あざやかにすくいとっている。	柴田元幸	柴田元幸
11	70年代（4）	70年代なかば以降、選びぬかれた素朴な言葉を使って、小さな町に住む名もない人々の生活の一断面を切り取った秀作が多く書かれるようになる。そうした流れの代表的作家Raymond Carverの“The Calm”を読む。	同上	同上
12	80年代（1）	Carverや村上春樹のように、読者の心を吸い取って流れるような物語が浮上してきたことと、Brian Eno らの「環境音楽」の登場とは同時平行的な現象のように思える。ＢＧＭを論じたJoseph Lanzaの快著*Elevator Music*の中からＴＶシリーズ「ツイン・ピークス」の音楽を扱った部分を読んでみよう。	佐藤良明	佐藤良明
13	80年代（2）	70年代に続いて静かで小さな物語が書かれる一方、世紀の終わりが近づくにつれて、もうひとつの20世紀、もうひとつの現代世界をまるごと夢見ようとする壮大なスケールの作家も出てくる。その一人、Steve Ericksonのデビュー作*Days Between Stations*の一節を読む。	柴田元幸	柴田元幸
14	90年代（1）	1950年代以降若者文化は基本的に「噪」の状態にあった。現代は違う。可能性の閉ざされた世界に生きる内向的な世代のスポークスマンとして登場した、Douglas Couplandの*Generation X*の一章を読んで、過剰なメディアの中を生きる心のありようを見つめてみたい。	佐藤良明	佐藤良明
15	90年代（2）	すべての物語が語られてしまったように思える現代でも、“a good story”を求める気持ちは根強い。80年代に登場した物語の名手による、“a good story”そのものをテーマとした小品を読む。Paul Auster, “Auggie Wren's Christmas Story.”古風な語り口に支えられた現代的な透明感を味わうことで、この講座を締めくくりたい。	柴田元幸	柴田元幸

＝ドイツ語Ⅰ（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：新田春夫（武蔵野大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語の文法の基礎を学びます。各課ごとに少しずつドイツ語の文法法則を学び、次にそれらを使った基本表現を練習します。最後に、やさしいドイツ語で書かれたテクスト読み、それらが実際にどのような場面で使われるかを見ます。また、テレビでは、「ドイツ小劇場」でテクストの内容がドイツ人ゲストによって演じられています。このようにして、ドイツの社会と文化を知る鍵としてのドイツ語文法を体系的に、かつ、実際の運用の場との関連で学びます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ドイツ語の音と文字 (1)	この課と次の課では、ドイツ語の発音とその文字による表記を学びます。まず、アルファベットを学び、それらを使って表される身近な略語の読み方を練習します。次いで、母音の発音を学び、単語による練習をします。また、テレビでは、ドイツ語の発音の耳慣らしに、ドイツのポップミュージックを聴きます。	新田春夫（武蔵野大学教授）	新田春夫（武蔵野大学教授）
2	ドイツ語の音と文字 (2)	ここでは、ドイツ語の子音の発音を学び、基本的な単語による発音練習をします。また、似たような語を発音し分ける練習もします。これらの学習を通じて、音声言語と文字言語との関係についても考えてみましょう。また、テレビでは、前回聴いたドイツのポップミュージックの続きを聴きます。	同上	同上
3	動詞の人称変化（現在） (1)	ドイツ語では動詞は１人称、２人称、３人称といった人称によって変化します。これを人称変化といいます。これは主語と動詞の語尾によって表されます。ここではその仕組みについて学び、基本的な動詞について練習します。また、テレビでは今回からテクストをドイツ人ゲストによる「ドイツ小劇場」が始まります。	同上	同上
4	名詞の性と格	ドイツ語の名詞には性、数、格の区別があります。ここではまず、性と格について学びます。性は語のグループ分けの為の文法的な区別であり、自然性とは必ずしも一致しません。格は、主語、目的語と言った、名詞が文中で果たす役割を表しています。これらの区別は主に冠詞の変化によって表されています。	同上	同上
5	動詞の人称変化（現在） (2)	動詞の中には、現在人称変化する際に、語尾だけでなく、一部の人称で、動詞の語幹の母音ａがウムラウトをおこしたり、また、ｅがi[e]に変化するものがあります。これらはたいてい日常的によく使われる重要な動詞ですので、これらについて練習をします。また、命令表現、要求表現についても学びます。	同上	同上
6	名詞の数	名詞には性と格の区別の他に、数の区別があります。数には、単数と複数の区別がありますが、複数形の作り方には、英語と異なって、何種類かがあります。ここではそれらのさまざまな複数形の作り方を学びます。また、日常生活に必須の、数詞とそれを使った、物の値段や時刻などの数量表現の練習もします。	同上	同上
7	人称代名詞 疑問代名詞 指示代名詞	代名詞も名詞の仲間です。従って、性、数、格の区別があります。しかし、それらは語尾変化ではなく、語形そのものが変化します。ここではそれらの語形変化と用法を学びます。また、疑問代名詞を使って、人にものを尋ねる表現の練習もします。さらに、不規則動詞wissen「知っている」の人称変化も学びます。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	冠詞類	dieser, jenerなどの語は定冠詞と同じ語尾変化をし、mein, deinなどの所有冠詞と否定冠詞keinは不定冠詞と同じ語尾変化をします。これらは定冠詞、不定冠詞と同様に、名詞の性、数、格を表示する機能を担っています。定冠詞、不定冠詞やそれらと同じ変化をする語の存在はとりわけ名詞の格表示の重要性を物語っています。	新田春夫	新田春夫
9	前置詞	前置詞は名詞、代名詞などの前に置かれて、それらが表す事物の位置・方向関係、時間関係、因果関係、手段などの意味を表します。ただ、どの場合にどの前置詞を使うかは言語習慣的な部分も多く、なかなか難しいこともあります。ここでは主要な前置詞の使い方について学び、具体的な場面での練習をします。	同上	同上
10	語順、否定表現	外国語の語順は必ずしも母語とは一致しないので、難しいものの一つです。しかし、ドイツ語の語順は、不定詞句で考えたときに、英語とは対称的で、むしろ日本語の語順に近く、あとは、文になったときの定動詞の位置だけが問題になります。ここではドイツ語の語順の基本原則について考え、その関連で否定語の位置を学びます。	同上	同上
11	分離動詞	ドイツ語文法で分離動詞と呼ばれるものは動詞が副詞や名詞など共に一つの新しい意味を持つようになった熟語表現ですが、従来、単語として扱われて来ました。ここではそのような分離動詞についてドイツ語の語順規則との関連で考えます。また、分離動詞は日常的にかなり頻繁に使われる重要な動詞が多く見られます。	同上	同上
12	再帰表現	他動詞の目的語が主語と同じ人称の代名詞である場合を再帰表現と言います。これは全体として自動詞表現であり、喜怒哀楽、関心などの感情表現が多く見られます。自動詞表現に他動詞を使うという発想も日本語には見られませんが、他動詞表現と比較しながら、一つの決まった表現として覚えましょう。	同上	同上
13	非人称表現	自然現象、心理状況、生理状態など、主語を特定しがたい場合は、esを主語とした表現を使います。これを非人称表現と言います。このような、日本語とは発想が異なった表現について練習します。また、テレビでは、今回から、ドイツ歌曲を鑑賞します。今回はモーツァルトの「春へのあこがれ」を聴きます。	同上	同上
14	形容詞(1)(付加語的用法)	ドイツ語の形容詞は名詞の前に置かれると語尾変化をします。それは冠詞と同様、名詞の性、数、格を表示するためです。ただし、定冠詞や不定冠詞などとの組み合わせによって語尾変化のパターンが異なります。ここではその仕組みを学びます。テレビで、今回鑑賞するドイツ歌曲はブラームスの「子守歌」です。	同上	同上
15	話法の助動詞(1)	話法の助動詞は本動詞が表す行為や出来事に関して、主語の能力、義務、許可、禁止などを表したり(客観的用法)、推量、命令、伝聞などといった話者の主体的判断を表します(主観的用法)。ここでは話法の助動詞の語形変化と客観的用法を学びます。テレビでの今回のドイツ歌曲はメンデルスゾーンの「歌の翼に」です。	同上	同上

＝ドイツ語Ⅱ（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：新田春夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰに引き続き、文法の基礎を固めます。さらに、ドイツ語Ⅱでは、ドイツの歴史の発展に貢献した８人の人物とそれらの人が活躍した７つの都市について書かれたテクストを読み、ドイツの歴史、社会、文化に関する理解を深めることを目指しています。また、これらのテクストは、講義、インタビュー、新聞記事、日記、手紙など、さまざまな文体で書かれていますが、それらに特徴的な表現形式にも慣れて頂きます。テレビでは、ドイツでロケを行い、テスクトで扱われている人物と都市の紹介をします。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動詞の３基本形	不定詞、過去、過去分詞を動詞の３基本形と言います。不定詞からは現在人称変化、過去からは過去人称変化、過去分詞からは現在完了形や受動形が作られます。ですから、これらは動詞の変化体系の原形とも言うべきものです。ここでは、過去、過去分詞の作り方を学びます。また、今回と次回では言語学者、グリム兄弟とカッセルの町を紹介します。	新田春夫（武蔵大学教授）	新田春夫（武蔵大学教授）
2	時称 (1)	ドイツ語の時称には、現在、過去、現在完了、過去完了、の４つの区別があります。ここでは、過去時称における人称変化とその用法について学びます。また、現在形が未来の事柄も表すように、時称は必ずしも物理的な時間関係を表すわけではありません。このような文法規則としての時称と物理的な時間関係についても考察します。	同上	同上
3	時称 (2)	ここでは現在完了と過去完了の作り方、それらの人称変化および用法について学びます。ドイツ語では現在完了は過去形と同じく過去の事柄を表しますが、そこには過去の事柄についての捉え方の違いが表れています。そのような両者の迷いについても考察します。また、今回と次回では、発明家でツァイス社の共同設立者、エルンスト・アッベとイェーナの町を紹介します。	同上	同上
4	動詞の結合価	動詞がとる目的語や副詞などの個数とそれら目的語の格は動詞ごとに決まっています。従って、それは日本語の場合に対応しているとは限らず、純粋に個別言語的な決まりです。これを動詞の結合価と言います。ここでは重要な動詞について結合価のパターンを学びます。これは正しいドイツ語の文を作るために極めて重要です。	同上	同上
5	不定詞、分詞	不定詞は名詞的に主語や目的語などとして、過去分詞、現在分詞は形容詞的に修飾語や副詞などとして使われますが、同時に本来の動詞としての性質から自らも目的語や副詞をとって複雑な内容の文を作ることができます。そのような不定詞、分詞の用法を学びます。また、今回と次回では、社会学者マックス・ウェーバーとハイデルベルクの町を紹介します。	同上	同上
6	話法の助動詞(2)	ここでは命令、伝聞、推量など、話者の主体的判断を表す形式を学びます。これらは話法の助動詞の主観的用法と呼ばれています。特に、推量表現は話者が自らの判断について持っている確信度によってさまざまな表現があります。また、werdenを使った、いわゆる未来形についても考察します。	同上	同上
7	形容詞 (2)（比較表現）	形容詞は名詞を修飾する付加語的用法、seinやwerdenと共に動詞句を形成する述語的用法、動詞を修飾する副詞的用法がありますが、これらのどれについても比較表現を作ることができます。ここでは比較級、最上級の作り方と用法を学び、また、その他の重要な比較表現を学びます。今回は教育家ルードルフ・シュタイナーとシュトットガルトの町を紹介します。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	受動表現(1)	動詞が表す行為に関して、その行為者の側から捉えた表現が能動表現ですが、同じ行為を受け手の側から見たものが受動表現です。ここでは受動形の作り方と用法について学びます。また、今回と次回では、女性建築家、マルガレーテ・シュッテ＝リホツキーとフランクフルトの町を紹介します。	新田春夫	新田春夫
9	受動表現(2)	助動詞werdenと過去分詞によって作られる受動表現は動作受動と呼ばれますが、ここでは、助動詞seinと過去分詞で作られる状態受動表現を学びます。また、これらの他にもいくつかの受動的意味の構文がありますが、それらについても学び、それらが担っている機能について考察します。	同上	同上
10	使役表現	使役表現は、他者になんらかの行為を実行させるという意味を表しますが、その他にも、その派生的用法として、容認、勧誘、受動、可能などの意味も表します。ここでは、使役表現の作り方とその用法を学びます。また、今回と次回は、ノーベル賞物理学者、ヴェルナー・ハイゼンベルクとゲッティンゲンの町を紹介します。	同上	同上
11	接続詞と複合文(1)	一つの文の中に別の文を埋め込んで複合的な文を作ることができます。その場合、前者を主文、後者を副文と言います。主文と副文の関係を表すのが接続詞です。ここでは、両者の関係が時間、原因・理由、目的、手段などの副詞的関係にあることを表す接続詞を学びます。また、副文における定動詞は副文末に置かれますが、そのような語順の練習もします。	同上	同上
12	接続詞と複合文(2)	引き続き接続詞と複合文を勉強します。ここでは、副文が主文の中で主語、目的語などの名詞的役割を果たす際の接続詞dassや疑問文を主文に埋め込む方法について学びます。また、これとの関連で不定詞句についても考察します。今回と次回では、女性哲学者ハンナ・アーレントとハイデルベルクの町を紹介します。	同上	同上
13	関係文	関係文も複合文の一つです。関係文の場合は、主文中の名詞（先行詞）を副文（関係節）が修飾しているという関係にあります。接続詞に相当するものが関係代名詞であり、これは先行詞を受けたものです。ここでは関係代名詞の語形変化と関係文の作り方を学びます。	同上	同上
14	接続法(1)	これまで学んだ動詞の変化体系は直説法と呼ばれ、話者が事柄を事実であると捉えている場合の形式ですが、接続法は事実性に関しては中立や非事実として捉えている場合の形式です。ここでは、接続法Ⅰと呼ばれる形式を学びますが、主に要求文や間接引用に使われます。また、今回と次回ではジャーナリスト、ルードルフ・アウクシュタインとハンブルクの町を紹介します。	同上	同上
15	接続法(2)	ここでは接続法Ⅱと呼ばれる形式を学びます。これは非現実の事態を想定する場合に使われます。また、これからの派生的用法として、丁寧な要請、控えめな主張など、表現を和らげる用法があります。これらは日常的にも頻繁に使われる重要な表現手段ですので、ほとんど慣用的な表現として覚えましょう。	同上	同上

＝ドイツ語Ⅲ('97) ＝ (R)

〔主任講師：石光泰夫(東京大学教授)〕

全体のねらい

ドイツ語圏の文学、思想、エッセイなどのジャンルから含蓄深い文章をいくつか厳選し、そのひとつひとつについて数回ずつをかけながら、じっくりとドイツ語にひたってゆきます。その際、文法事項の確認はもちろんのことですが、主眼はあくまでもドイツ語のきわめてユニークな特質、そしてその特徴を生かしてはじめてえられるそのテクストの独特な味わいを感得するところにあります。一点一画もゆるがせにしないミクロな文法の理解から、歴史的・文化的な背景というマクロのレヴェルまで、言語の広大な宇宙を旅する読解という冒険を、この時間でともに体験してみることにしましょう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	独文解釈の入門的心得	吉本バナナの『キッチン』を独訳したものから二カ所ほどをとりだし、ドイツ語の文章の特異性を検討しながら、これからドイツで書かれた文章を読んでいくさいに注意すべき事項をいくつかあげる。	石光泰夫(東京大学教授)	石光泰夫(東京大学教授)
2	独文解釈のための文法事項を確認する(1)	ドイツ語のテクストでよくでてくる割には理解がゆきとどいていない接続法を詳細に解説する。	同上	同上
3	独文解釈のための文法事項を確認する(2)	例文を豊富にあげながら、接続法の説明を継続する。	同上	同上
4	独文解釈のための文法事項を確認する(3)	ドイツ語の文章のニュアンスを決定するほど重要な役割をしていながら、辞書などでその真の意味合いが確かめにくい不変化詞を詳述する。	同上	同上
5	独文解釈のための文法事項を確認する(4)	例文を豊富にあげながら、さらにいくつかの不変化詞をとりあげてそのニュアンスを解説する。	同上	同上
6	独文解釈のための文法事項を確認する(5)	ドイツ語は英語などとは決定的に異なる語順で文章を構成する。したがって語順にたいする繊細な理解は独文解釈においてきわめて重要であるのに、比較的かえりみられることがない。その語順をとりあげて詳述する。	同上	同上
7	独文解釈のための文法事項を確認する(6)	豊富に例文をあげながら、さらに語順を検討する。例文は、次回以降にむけて、少しずつ長いものを採用している。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	小説の文章を読む（1）	ケストナーの『エーミールと探偵たち』を読む。長い文章になれることが主眼。文脈を見失わない読み方をするよう心がける。	石光泰夫	石光泰夫
9	小説の文章を読む（2）	ヨーハン・ペーター・ヘーベルの愉快な掌編小説『ワカリマセン』を読む。語順の妙味などが発揮されているので、以前に確認したことを思い出しながら精読する。	同上	同上
10	小説の文章を読む（3）	同じくヘーベルの『思いがけない再開』を読む。これ掌編小説ながら、ドイツ文学全体のなかでも傑作に数えられるほどの文章なので、味わいを大事にして読むようにする。	同上	同上
11	小説の文章を読む（4）	オーストリアの作家アーダルベルト・シュティフターの名高い短編小説『石さまざま』のなかから「水晶」の一部を読む。これも大変に美しい文章である。いかにもドイツ語らしい言い回しもふだんにあるので、ドイツ語の面白さを味得してもらうことを主眼にする。	同上	同上
12	小説の文章を読む（5）	今回は一転して現代のもっとも問題性に富んだ作家カフカの有名な短編小説『起きてのまえで』を読む。文章は平易なので、内容をしっかりと考えるような読み方を工夫する。	同上	同上
13	思想の文章を読む（1）	フロイトの代表作『夢解釈』から、第7章冒頭を読む。全体が夢の記述なので、読みにくくはないはず。含蓄のある夢の記述から、深い意味を読みとれるよう努力する。	同上	同上
14	思想の文章を読む（2）	次回とあわせてハイデガーの「創造的な風景ーわれわれはなぜ田舎にとどまるか」を読む。ドイツを代表する哲学者の文章で、ドイツ語の特性が最大限生かされている。原語でなければ味わえないニュアンスを重点的に吟味する。	同上	同上
15	思想の文章を読む（3）	前回の続き。これが締めくくりになるので、このあとさらに長い文章にもアタックしていけるようなアドヴァイスもする。	同上	同上

＝ ドイツ語Ⅳ（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：幸　田　　薫（東京大学教授）〕

全体のねらい
さまざまな種類のテクストを読みながら、ドイツ語の読解力を身につけるとともに、ドイツ人の思考法やものの見方に学んでいきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	◦会話文：ドイツの印象、日本の印象 ◦文法：単語の整理(1)	日本人とドイツ人の主任講師がそれぞれドイツと日本の印象を語り合いながら、自己紹介する。 文法：ドイツ語Ⅰ・Ⅱ（1997年度）にテキストに現れた単語を2回に渡ってまとめる。今回は単一語。	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）
2	◦インタビュー：ドイツの若者たち ◦文法：単語の整理(2)	週間新聞 die Zeit (1996.8.23) の若者へのインタビューと投書を読む。 文法：前回に続き、単語の整理を行う。今回は派生語と複合語	幸田　薫	同　上
3	◦ショートストーリー：過去への追慕 ◦文法：主な文型(1)	過去を振り返ることの必要性を考えさせる短い文章（Jürgen Becker: Früher war das ganz anders)を読む。 文法：ドイツ語の基本的な文型を整理し、読解に利用する方法を学ぶ。	同　上	同　上
4	◦ショートストーリー：人間の適応力 ◦文法：主な文型(2)	人間がいかに過去を忘れやすいかを考えさせる短い文章（Maria Luise Kaschnitz: Zu House）を読む。 文法：前回に続き、基本文型について学習する。熟語的表現についても学ぶ。	同　上	同　上
5	◦ショートストーリー：ドイツ的ウィット ◦文法：時称の用法	前章は多少難しかったので、息抜きとしてウィット2題を読み、ドイツ的ユーモアについて考えてみる。 文法：現在、過去、現在（過去）完了、未来の時称が実際の文章でどの様に使い分けられているか調べる。	同　上	同　上
6	◦説明文：環境先進国ドイツ ◦文法：受動文	ドイツにおける環境問題への取り組みについて書かれた説明文を読む。（出典は、Tatsachen Deutschland, 1996） 文法：能動文と受動文の練習。	同　上	同　上
7	◦説明文：民族のるつぼ中欧 ◦文法：副文と語順(1)	Luise Rinser の “Wer wirft den Stein ?”の一節を読み、ドイツにおける小数民族の問題を考える。 文法：不定詞句の練習を行なう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	◦随筆文：統一後のドイツ ◦文法：副文と語順(2)	統一ドイツの社会的・経済的状況などに関するLeipzig大学の Steffi Richter 教授へのインタビューを随筆文として書き直したものを読む。 文法：副文の構造と副文の種類について既習知識を整理する。	幸田　薫 Gabriele Stumpp Steffi Richter (Leipzig大学教授)	幸田　薫 Gabriele Stumpp
9	◦小説：女性の時代 ◦文法：副文と語順(3)	ドイツの代表的女流作家である Barbara Frischmuth の“Glück”の一節を読み、人口減少の続くドイツの事情を考える。 文法：副文　関する練習問題を行なう。	幸田　薫	同　上
10	◦小説：個人主義 ◦文法：接続法(1)	ドイツのノーベル賞作家 Heinrich Böll　の“Wie in schlechten Romanen”という短編の一節を読む。 文法：接続法の種類について既習知識を整理する。接続法Ⅱの練習をする。	同　上	同　上
11	◦インタビュー：ドイツ語の現在と未来 ◦文法：接続法(2)	国立ドイツ語研究所所長の Gerhard Stickel 教授に新しい正書法や言語変化の実態などについて聞く。 文法：接続法Ⅰについて練習する。	幸田　薫 Gerhard Stikel (ドイツ語研究所所長)	幸田　薫
12	◦論文：ことばと思考 ◦文法：文脈と文の機能(1)	Wilhelm von Humboldt のことばと思考に関する論文の一部を読み、具体的にドイツ語と日本語の思考がいかに異っているかを考える。 文法：文と文をつなぐ文法的手段について考える。今回は接続詞と指示語。	幸田　薫	幸田　薫 Gabriele Stumpp
13	◦報道文：インターネット ◦文法：文脈と文の機能(2)	週刊誌 Spiegel(1996.11) の「インターネットが社会を変革する」と題する記事の一部を読んで、情報社会について考える。 文法：前回に続き、文と文をつなぐ言い替えなどの手段について考える。	同　上	同　上
14	◦演説：技術時代 ◦文法：テクストの構造	元大統領の Carl Friedrich von Weizsäcker の演説「人間の目的に役立つ技術」を読む。 文法：テクストの文法的・意味的・機能的な構成について学習する。	同　上	同　上
15	◦新聞社説：戦後51年目 ◦文法：テクストの機能	Süddeutsche Zeitung(1997.1.1) の社説「戦後51年目」を読んで、同じ様な立場にある日本と比べてみる。 文法：テクスト機能 ― テクスト全体の持つ目的 ― をまず捉えることによって、読解が容易になることを学ぶ。	同　上	同　上

＝フランス語Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：増田一夫（東京大学助教授）〕
〔主任講師：鈴木啓二（東京大学教授）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰ、Ⅱあわせて45分×30回を１つの全体としてとらえる。フランス語Ⅰでは、無理のないプログラム構成によって、コミュニケーション能力の獲得への基礎を学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	La belle histoire（うるわしき物語）	内容：アルファベット、名詞の性と数、不定冠詞、定冠詞、発音練習１	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）
2	Rouge ou blanc?（赤か白か？）	内容：主語人称代名詞、être動詞、avoir動詞、-er（第１群規則）動詞、部分冠詞、１～30までの数詞、発音練習２	同上	同上
3	Le jardin extraordinaire（魔法の庭）	内容：疑問文（イントネーション、est-ce que?）、否定文、il faut ＋不定詞とdevoir、動詞vouloir, pouvoir、発音練習３	同上	同上
4	Nos amis les betes（人類の友）	内容：on、否定疑問文とsiを用いた答え、名詞の複数形２、形容詞、tout、発音練習４	同上	同上
5	Attention! peinture fraiche!（注意！ペンキ塗りたて）	内容：部分冠詞、du,de la、縮約形、du,des,au,aux、否定文中の部分冠詞、不定冠詞、国の名前	同上	同上
6	L'amour sans fil（糸の切れた愛）	内容：様々な動詞の活用（ ― ir型動詞、aller,venir,sortir）近接未来、近接過去、31から100までの数字	同上	同上
7	Double surprise（二重のおどかし）	内容：疑問代名詞 qui,quést-ce qui,que,quést-ce que など、疑問副詞、quand,où,pourquoi,comment など、疑問形容詞　quel	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	Lesintrus (闖入者)	内容：指示代名詞 ce,cetle,ces 所有代名詞 mon,ma,mes など、強調構文 cést,qui,cést,que	鈴木啓二 増田一夫	鈴木啓二 増田一夫
9	A vos ordres Mesdames! (お気に召すまま)	内容：非人称動詞、不規則動詞 faire, dire, prendre, pouvoir, vouloir, devoir, savoir＋不定詞、時刻	同上	同上
10	Un, deux, trois! Partez! (1、2、3、スタート!)	内容：人称代名詞の強勢形、ne...rien, ne...personne, ne...nulle partを使った否定文	同上	同上
11	Bas les masques (仮面を捨てろ)	内容：形容詞と副詞の比較級と最上級、指示代名詞	同上	同上
12	Diner surprise (思いもかけぬ夕食)	内容：動詞の肯定命令形、動詞の否定命令形、代名動詞 s'appeler,se promener など	同上	同上
13	Les inspirations du créateur (創作家のひらめき)	内容：複合過去形（肯定形、否定形）、関係代名詞qui,que,oú,dontr	同上	同上
14	Le coeur á tout casser (とてつもない心臓)	内容：受動態（現在形、複合過去形）、様々な否定の表現（ne…plus,ne…jamais,ne…pas encoreなど	同上	同上
15	まとめテスト		同上	同上

＝フランス語Ⅱ＝（ＴＶ）

（主任講師：増田一夫（東京大学助教授）
主任講師：鈴木啓二（東京大学教授））

全体のねらい

フランス語Ⅰにひきつづいて、生きたフランス語の習得をめざす。何本かのスケッチをもとに、様々な表現や文の構造を覚え、それが実際に応用できるようにする。授業では、発音の練習にも時間をさき、単なる一方的な知識の伝達に終わらないよう心がける。文法の説明は、フランス語Ⅰ．Ⅱ．全体で完結させる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Bsisers volés（盗まれた口づけ）	関係代名詞　lequel, laquelle, lesquels, lasquelles. 前置詞＋関係代名詞	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）	鈴木啓二（東京大学教授） 増田一夫（東京大学助教授）
2	Une âme charitable（慈悲深い心）	目的語となる人称代名詞　me, te, nous, vous, le, la, les. など。	同上	同上
3	lemystére de la dane noire（黒礼の女の謎）	動詞の半過去形、大過去形	同上	同上
4	La filature（尾行）	中性代名詞　le, en, y	同上	同上
5	Les professinnels（仕事師たち）	faire, laisser, voir, entendre＋不定詞	同上	同上
6	Rira bien qui rira le dernire（最後に笑う者が勝つ）	直説法単純未来形および前未来形	同上	同上
7	Savoir recruter（リクルートのノウハウ）	条件法現在形、条件法過去形、所有代名詞	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	Drole de locataire（奇妙な下宿人）	現在分詞、n'importe quoi, n'importe qui, n'importe quel	鈴木啓二 増田一夫	鈴木啓二 増田一夫
9	Les trois coups（三度の木追音）	ジェロンディフ、様々な諺、シラブルの数え方	同上	同上
10	Une armoire rebelle（言うことを聞かぬ戸棚）	接続法（1）	同上	同上
11	Ah les golies vacances（ああ美しきかなヴァカンス）	接続法（2）	同上	同上
12	Complexe d'CEdipe（エディプス・コンプレックス）	状況補語説における接続法、形容詞節における接続法、形容詞、auoun, chaque	同上	同上
13	Casting（キャスティング）	直接話法、間接話法、時制の一致	同上	同上
14	Le tournoi（馬上槍試合）	直説法単純過去形、複合過去と半過去の用法	同上	同上
15	まとめ		同上	同上

＝フランス語Ⅲ（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：三浦信孝（中央大学教授）〕

全体のねらい

受講生に中級から上級への橋渡しになるような総合的フランス語力の養成をめざす。素材としては18世紀から20世紀までのフランスの作家が日本について書いた文章を15選んで詳しく読む。従ってフランス人の日本像の変遷を辿るという比較文学比較文化的アプローチを重視する。実際の講義は協力者のM.フェリエと行い仏語を多用する。気晴らしを兼ねて毎回プレヴェール作詩のシャンソンを１曲聴く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	18世紀　啓蒙の世紀の日本像	「百科全書」とヴォルテール プレヴェールのシャンソン(1)	ﾐｶｴﾙ・ﾌｪﾘｴ（中央大学助教授） 三浦信孝（中央大学教授）	ﾐｶｴﾙ・ﾌｪﾘｴ（中央大学助教授） 三浦信孝（中央大学教授）
2	19世紀後半の日本像　(1)	ゴンクール兄弟とジャポニスム プレヴェールのシャンソン(2)	同　上	同　上
3	19世紀後半の日本像　(2)	ジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』 プレヴェールのシャンソン(3)	同　上	同　上
4	19世紀後半の日本像　(3)	ピエール・ロティの『お菊さん』 プレヴェールのシャンソン(4)	同　上	同　上
5	20世紀前半の日本像　(1)	詩人大使クローデルの日本 プレヴェールのシャンソン(5)	同　上	同　上
6	20世紀前半の日本像　(2)	「日本の一野蛮人」アンリ・ミショー プレヴェールのシャンソン(6)	同　上	同　上
7	20世紀前半の日本像　(3)	アンドレ・マルローの伊勢神宮 プレヴェールのシャンソン(7)	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	20世紀前半の日本像 (4)	ルロワグーランのアイヌへの旅 プレヴェールのシャンソン(8)	ミカエル・フェリエ 三浦信孝	ミカエル・フェリエ 三浦信孝
9	20世紀後半の日本像 (1)	マルグリット・デュラスとヒロシマの記憶 プレヴェールのシャンソン(9)	同上	同上
10	20世紀後半の日本像 (2)	ロラン・バルトと「記号の帝国」日本 プレヴェールのシャンソン(10)	同上	同上
11	20世紀後半の日本像 (3)	ユルスナールの「企業国家」日本批判 プレヴェールのシャンソン(11)	同上	同上
12	20世紀後半の日本像 (4)	レヴィ・ストロースの隅田川 プレヴェールのシャンソン(12)	同上	同上
13	20世紀後半の日本像 (5)	ニコラ・ブヴィエと日常の中の能 プレヴェールのシャンソン(13)	同上	同上
14	20世紀後半の日本像 (6)	イヴ・シモンと未来への旅 プレヴェールのシャンソン(14)	同上	同上
15	20世紀後半の日本像 (7)	フランソワ・ローの竜安寺石庭 プレヴェールのシャンソン(15)	同上	同上

＝フランス語Ⅳ（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：保苅瑞穂（獨協大学教授）〕

全体のねらい
フランス語を読む能力を高めることを目的とする。そのためにさまざまな種類の文章にふれて、文法の知識を確実にすると共に言葉に対する感覚が身につくように講義を進めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アナトール・フランス『わが友の書』1	左記の本から作者の少年時代を回想した一節を取り上げる。やさしい単語と平明な構文で書かれた古典的な名文として有名な一節である。	保苅瑞穂（獨協大学教授）	保苅瑞穂（獨協大学教授）
2	アナトール・フランス『わが友の書』2		同上	同上
3	アンドレ・ジッド『田園交響曲』	半過去と単純過去を基調とする伝統的な小説における動詞・時制の使い方に注意すること。6回目のカミュの『異邦人』と比較して双方の異同を確かめること。	同上	同上
4	サン＝テクジュペリー『人間の土地』1	彼は『星の王子さま』で日本でも知られる飛行士の職歴をもった作家で、この一節は砂漠に不時着した2人の飛行士が死の直前に救われるクライマックスを描いたもの。緊迫した前半と救われた生命への讃歌である後半の対比の妙を味わうこと。	同上	同上
5	サン＝テクジュペリー『人間の土地』2		同上	同上
6	アルベール・カミュ『異邦人』	主人公ムルソーが太陽の照りつける海岸でアラブ人を射殺するいわゆる不条理殺人を描いた場面。カミュは小説の地の文に複合過去を用いることで小説技法に革新をもたらした。その点に注意してよんでみる。	同上	同上
7	アラン「散文について」	アランの『芸術論集』の中の散文論をよんで、散文の特徴について勉強する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	アラン 「詩と散文について」	詩を散文に比較して、詩の特徴について基本的な点を勉強する。	保苅瑞穂	保苅瑞穂
9	ポール・ヴェルレーヌ 『月の光』	8回目で取り上げた詩の勉強をふまえて、ヴェルレーヌの『月の光』をよむ。	同上	同上
10	デカルト 『方法叙説』	この本の冒頭部分をよむ。これは17世紀の文章であるが、現代文法の知識があれば少し古い文章でも十分によめることを知ること。また論理的な思考の展開をしっかりと把握すること。	同上	同上
11	ジャン＝ジャック・ルソー 「マルゼルブへの手紙」	これは18世紀のルソーの手紙の一節である。比較的長い文であるから、文の構造をまず正確に摑むこと。その上でルソーのゆたかな感性と散文の美しさを味わうこと。	同上	同上
12	スタンダール 『赤と黒』	スタンダールの簡素で、スピード感のある文章を味わうこと。	同上	同上
13	ギュスターヴ・フローベール 『感情教育』	フローベルは散文による文学表現に生涯にわたって骨身をけずった作家であったが、『感情教育』はその成果である。一語一語のことばの重みを感じとるように努めること。	同上	同上
14	マルセル・プルースト 『失われた時を求めて』	フランス語による散文表現が長い伝統をふまえた上で、どこまで可能であるか。この小説ではそれがほとんど限界まで突きつめられている。各回の読解力をためすつもりで、挑戦してほしい。	同上	同上
15				

＝中　国　語　Ⅰ＝（Ｒ）

〔主任講師：傳田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

やさしいスキットを読みながら、中国語の発音と文法の基礎を学習する。文法は全体の枠組みを見通しての理解を心がけ、中国語Ⅰでは文の構成、品詞の機能、動詞を中心とした統語構造を学習する。平行して機能後を中心に基本語彙の習得をはかって、中国語Ⅱに接続する。２個学期で基礎課程を終える予定。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発音　Ⅰ	四つの声調 単韻母(1)：　a，e 声母(1)：　b，p，m，f 声母(2)：　d，t，n，l	傳田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傳田　章（放送大学教授）
2	発音　Ⅱ	声母(3)：　zh，ch，sh，r 声母(4)：　g，k，h 複韻母(1)：　ai，ei，ao，ou 複韻母(2)：　an，en，ang，eng 第三声の連続　　主語と述語	同　上	同　上
3	目的語	軽声　　声母(5)：　i，q，x 動詞と目的語 修飾語：　連体，連用，副詞 特殊疑問：　疑問詞疑問文 構造の重なり	同　上	同　上
4	補語 相　Ⅰ	声母(6)：　z，c，s 単韻母(2)：　zhi，zi の韻母 断定，動詞と補語：　動詞“是” 状況の相：　助詞“了”，“呢” “不”の声調変化	同　上	同　上
5	発音　Ⅲ	単韻母(2)：　i，i で始まる複韻母 単韻母(3)：　u，u で始まる複韻母 単韻母(4)：　ü，ü で始まる複韻母 韻母 o　　韻母　ê 選択疑問(1)　　場面の提示(1)	同　上	同　上
6	語気　Ⅰ	限定修飾語(1)：　連体修飾語，助詞“的” 限定修飾語(2)：　名詞句代理 当否疑問：　助詞“吗” 推量：　助詞“吧”	同　上	同　上
7	語気　Ⅱ	意志・勧誘：　助詞“吧” 感情の表出：　助詞“啊” 助詞“啊”の連声 文の三層構造	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	移動・授与	場所目的語：　存在，移動動詞“在”，“来”など 二重目的語：　授与動詞“给”など 形容詞述語(1) 人称代名詞　　指示詞・指示代名詞 “一”の声調変化	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	数	韻母　ｅｒ 限定詞－助数詞構造(1)： 限定詞助数詞構造(2)：　名詞句代理 数詞　　基数と序数 末尾桁助数詞省略	同　上	同　上
10	相　Ⅱ	疑問数詞：　“几”と“多少” 完了相：　“Ｖ了” 未然：　副詞“没（有）” 状況の相と動詞の相	同　上	同　上
11	相　Ⅲ	持続相：　“在－ＶＰ”，“Ｖ着” 経験相：　“Ｖ過” 選択疑問(2)：　“Ｖ了没有？”	同　上	同　上
12	動作量	動作量補語(1)：　“看一次” 動作量補語(2)：　“看一看” 動作量補語(3)：　“看一会儿” 動作量補語と目的語：	同　上	同　上
13	認定	動詞句補語を伴う動詞：　“能”，“要”など 動作量補語(4)：　“好一点儿”	同　上	同　上
14	思考・認識	文補語を伴う動詞：　“想”，“説”など 文目的語をとる動詞：　“知道”，“告訴”など 文補語と文目的語	同　上	同　上
15	目的補語	目的補語を伴う動詞(1)：　“請”など 動詞と補語，動詞と目的語： Ｖ－Ｏ，Ｖ－Ｃの整理 語句の結合：　統辞構造の整理	同　上	同　上

＝中　国　語　Ⅱ＝（Ｒ）

〔主任講師：傅田　章（放送大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰに接続して文法の基礎の学習を続ける。述語動詞句のやや複雑な形のものからさらに複文の接続関係に進んで、文法の大枠の学習を終える。発音についても、音節の仕組みや発話の際のアクセント・イントネーションなどに及んで整理された理解をはかりたい。中国語Ⅱで基礎課程の学習を終える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現象描写	存在の表現：　動詞“有” 現象描写：　“来了一个朋友” 場面の提示(2)・方位詞：　方位詞“上”，“里” 個体叙述と現象描写：　“雨住了”と“下雨了” 目的補語を伴う動詞(2)：　“有－Ｏ－Ｃｏ”	傅田　章（放送大学教授） 呉　念聖（早稲田大学講師）	傅田　章（放送大学教授）
2	連用　Ⅰ	動詞句連用(1)：　“ＶＰ－来（／去）” 動詞句連用(2)：　“来（／去）－ＶＰ” 動詞句連用(3)：　“Ｖ着－ＶＰ”	同　上	同　上
3	連用　Ⅱ	前置詞句連用(1)：　前置詞“在” 前置詞句連用(2)・形容詞述語(2)：　前置詞“比” 主題としての動作対象など 事態の断定：　“（是）…的”	同　上	同　上
4	連用　Ⅲ	前置詞句連用(3)：　前置詞“从，到，離，給” 前置詞句連用(4)：　前置詞“跟”，“和” 前置詞句連用(5)：　使役表現，前置詞“叫”，“譲” 前置詞句連用(6)：　受身表現，前置詞“被” 前置詞句連用(7)：　前置詞“把”	同　上	同　上
5	連用　Ⅳ	包　括(1)：　前置詞“連” 包　括(2)：　“一点儿也…” 包　括(3)：　“什麼都…”	同　上	同　上
6	連用複合　Ⅰ	動作の評価：　“Ｖ得－ＡＰ” 結果の事態：　“Ｖ得－Ｓ” 動作結果複合(1)：　“ＶＲ”複合	同　上	同　上
7	連用複合　Ⅱ	動作結果複合(2)：　“Ｖ上来” 動作結果複合(3)：　“Ｖ得Ｒ”，“Ｖ不Ｒ” 動作結果複合(4)：　“Ｖ得了”，“Ｖ不了”	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	連用複合 Ⅲ	動作結果複合(5)：　“V到” 動作結果複合(6)：　“V住” 動作結果複合(7)：　“V着” 動作結果複合(8)：　“V在”	傳田　章 呉　念聖	傳田　章
9	連用複合 Ⅳ	動作結果複合(9)：　“V上”などの補助動詞化 動作結果複合(10)：　“A極了，A得很，A得多” 動詞の試行相：　動詞の重ね型 r　化	同　上	同　上
10	相 Ⅳ	起動相　：　“V起来” 継続相　：　“V下去” 経過相　：　“V過（…了）”	同　上	同　上
11	接続 Ⅰ	接　続(1)：　“又…又…”など 接　続(2)：　“一…就…”など	同　上	同　上
12	接続 Ⅱ	接　続(3)：　“要是…就…”など 接　続(4)：　“因為…所以…”など 選択疑問(3)：　“X還是Y？”	同　上	同　上
13	接続 Ⅲ	不定称接続：　“什麽…什麽…” 描写形容詞：　形容詞の重ね型 de（的）でくくられる描写修飾語 擬声語	同　上	同　上
14	補遺 Ⅰ	名詞句述語：　“現在几点？” 過度のle（了）：　“太…了” 承前疑問：　“他呢？”	同　上	同　上
15	補遺 Ⅱ	不信疑問：　“…？” 付加疑問：　“…，好吗？” 文・節末の助詞に近い語句：　“…的話，“X”など	同　上	同　上

＝中　国　語　Ⅲ＝（Ｒ）

〔主任講師：傳田　章(放送大学教授)〕

全体のねらい

中国語Ⅰ・Ⅱの学習の上にたって、文学作品等の文章の講読に入る。Ⅰ・Ⅱで学習した基礎の文法項目を随時復習しつつ、さらに細かい項目にわたって文法学習を系統的に深化させることを主眼とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「農貿市場」(1)	§1.1　命名動詞“叫” §1.2　列挙の“啦” §1.3　“Ｖ来Ｖ去” §1.4　“一片”	傳田　章（放送大学教授）	傳田　章（放送大学教授）
2	「農貿市場」(2)	§2.1　“Ｖ上” §2.2　認定動詞“可（以）” §2.3　概数の“来” §2.4　副詞“不大”	同　上	同　上
3	「我的伯父　魯迅先生」	小学語文より §3.1　制限補述の“就是” §3.2　“Ｖ過来” §3.3　“是不是…？” §3.4　当否疑問文による反語	同　上	同　上
4	「火焼雲」　(1)	小学語文より §4.1　重ね型形容詞(1) §4.2　“一”の省略 §4.3　“Ｖ也不Ｖ”	同　上	同　上
5	「火焼雲」　(2)	§5.1　“有人…”の訳し方 §5.2　“好像…似的” §5.3　“Ｖ開” §5.4　重ね型形容詞(2)	同　上	同　上
6	「鳳　鳴」　(1)	曹禺『家』第二幕 §6.1　疑問詞の三用法 §6.2　疑問詞疑問文による反語 §6.3　限定詞	同　上	同　上
7	「鳳　鳴」　(2)	§7.1　否定の“什麼…” §7.2　“非…不可” §7.3　“Ｖ好”	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	「鳳　鳴」 (3)	§8.1 “V啊V啊” §8.2 “V過一次了” §8.3 “V着V着”	傳田　章	傳田　章
9	「鳳　鳴」 (4)	§9.1 “不再…”，“再”と“又” §9.2 状態形容詞の重ね型 §9.3 “不過”，副詞と接続詞	同　上	同　上
10	「鳳　鳴」 (5)	§10.1 “好”の認定詞用法 §10.2 反語“哪（儿）有…”	同　上	同　上
11	「鳳　鳴」 (6)	§11.1 復音節形容詞の語構成 §11.2 副詞の語順 §11.3 “好好儿”の発音	同　上	同　上
12	「鳳　鳴」 (7)	§12.1 復音節動詞の語構成 §12.2 V－O型の‘離合詞’ §12.3 ‘少し’と訳さない“A点儿” §12.4 “要…了”	同　上	同　上
13	「鳳　鳴」 (8)	§13.1 助詞“（還）…呢” §13.2 “以為” §13.3 “就是…也…”	同　上	同　上
14	「鳳　鳴」 (9)	§14.1 “一V就是…” §14.2 “給”，動詞と前置詞 §14.3 認定動詞“要”のいろいろ	同　上	同　上
15	「鳳　鳴」 (10)	§15.1 包括の“都” §15.2 補足陳述を導く“免得…”	同　上	同　上

＝中国語Ⅳ（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：木村英樹（東京大学助教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅲに続いて講読の授業を行う。現代作家の短編小説２篇を題材とし、これまでに学習した基礎的な文法事項や表現形式の復習と整理を行いつつ、さらに難度の高い文法項目や表現法をきめ細かく学習し、機能語の意味などを注意深く読み取りながら、精緻な読解力の習得を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	『黄油烙餅』（汪曾祺作）を読む (1)	『黄油烙餅』（汪曾祺作）を読む。 毎回、１回を前後半に分ける。最初にネイティヴ・スピーカーによる１回分の前半部のテキスト朗読を聞き、次に内容解説（本分の読解・文法説明・語句解釈など）を行う。	木村英樹（東京大学助教授）	木村英樹（東京大学助教授）
2	同上（汪曾祺作）を読む (2)		同上	同上
3	同上（汪曾祺作）を読む (3)		同上	同上
4	同上（汪曾祺作）を読む (4)		同上	同上
5	同上（汪曾祺作）を読む (5)		同上	同上
6	同上（汪曾祺作）を読む (6)		同上	同上
7	同上（汪曾祺作）を読む (7)		同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『小芳』（汪曾祺作）を読む (1)	『小芳』（汪曾祺作）を読む。 毎回、1回を前後半に分ける。最初にネイティヴ・スピーカーによる1回分の前半部のテキスト朗読を聞き、次に内容解説（本分の読解・文法説明・語句解釈など）を行う。後半部も同様の形式で、ネイティヴ・スピーカーによるテキスト朗読からはじまる。	木村英樹（東京大学助教授）	木村英樹（東京大学助教授）
9	同上（汪曾祺作）を読む (2)		同上	同上
10	同上（汪曾祺作）を読む (3)		同上	同上
11	同上（汪曾祺作）を読む (4)		同上	同上
12	同上（汪曾祺作）を読む (5)		同上	同上
13	同上（汪曾祺作）を読む (6)		同上	同上
14	同上（汪曾祺作）を読む (7)		同上	同上
15	同上（汪曾祺作）を読む (8)		同上	同上

＝ロ　シ　ア　語　Ⅰ＝（Ｒ）

〔主任講師：川端香男里（中部大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語の基礎を基本的な単語・文型を反復練習させることによって習得させることを目的とする。入門編（1－5）基礎編（6－12）発展編（13－15）の3部構成とし、学習者にロシア語学習の成果を実感させつつ勉強をすすめるように工夫してある。詳細な文法表、単語集も附し、学習者の便宜に供することとした。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文字と発音	基礎的な発音練習 アクセントとイントネーション アクセントのない母音の発音 文型「これはイヴァンです」	川端香男里（中部大学教授） 清水道子（東京大学講師）	川端香男里 清水道子 岡野エレナ（東京大学非常勤講師）
2	名詞の性	有声子音と無声子音 名詞の性 所有代名詞 文型「これはイヴァンですか？」	同上	同上
3	形容詞と動詞	所有代名詞、指示代名詞 形容詞硬変化 動詞現在人称変化 文型「私は読書をしています」 「あなたはロシア語が話せますか？」	同上	同上
4	名詞の格と動詞の過去	名詞の格（生格の用法） 活動体と不活動体 前置詞 動詞過去形 文型「昨日あなたは何をしましたか？」	同上	同上
5	名詞の与格・造格、動詞の未来形・命令形	名詞の格（与格と造格の用法） 不完了体と完了体 動詞の未来形 文型「ごらんなさい！きれいな鳥ですね！」	同上	同上
6	名詞の硬変化と軟変化、複数形	名詞と形容詞の変化 ― 硬変化と軟変化 形容詞混合変化 名詞複数形 文型「これは和露辞典です」 「私は青が好きです」	同上	同上
7	形容詞・代名詞の複数形と格変化	形容詞、所有代名詞、指示代名詞の複数形。 前置格の用法。 －ся動詞。 文型「私はモスクワ大学の一年生です」 「私は父のことを考えています」	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	所有の表現、生格の用法	不定人称文、無主体文（無人称文)。 所有代名詞、所有と所有の否定。 文型「私の娘はナターシャといいます」 「兄弟がおありですか？」 「どうぞよろしく」	川端香男里 清水道子	川端香男里 清水道子 岡野エレナ
9	無人称述語	月の名前。 曜日の名前。 無人称述語 文型「寒くないですか？」 「ぼくテレビ見ていい？」	同上	同上
10	動詞の体	完了体と不完了体 不完了体未来と完了体未来。 体の形成、勧誘の表現。 文型「以前彼はよく手紙をくれました」 「今この葉書を書いてしまいます」	同上	同上
11	運動の動詞	運動の動詞という概念。 定動詞と不定動詞。 接頭辞のついた運動の動詞。 文型「私は店へいくところです」 「毎日子供たちは学校へ通います」	同上	同上
12	形容詞短語尾形と造格の用法	形容詞短語尾形。 述語の造格。 形容詞、代名詞の造格、時刻の表現。 文型「今晩おひまですか？」 「私は教師になりたい」 「今、何時ですか？」	同上	同上
13	仮定法、生格の用法	仮定と仮定法。 数量生格　名詞・形容詞の複数生格。 文型「もし明日時間があったら、お宅へ遊びに行くのですが」 「一週間に何冊雑誌を読みますか？」	同上	同上
14	複数の対格・与格・前置格・造格、関係代名詞	複数活動体対格 複数与格、複数前置格、複数造格。 文型「どんな作家がお好きですか？」 「今私は都心にあるホテルに滞在しています」	同上	同上
15	比較級、最上級	年齢の表現。 現容詞・副詞の比較級と最上級。 福動詞、能動形動詞。 文型「兄は私より二歳年上です」 「本を読みながら彼女は泣いていた」	同上	同上

＝ロ　シ　ア　語　Ⅱ＝（Ｒ）

〔主任講師：川端香男里（中 部 大 学 教 授）〕

全体のねらい

「ロシア語Ⅰ」を受けて、中級のレベルへと学習者を引き上げ、ロシア語の多様な側面を学ばせることを目的とする。「ロシア語Ⅰ」で学んだ基礎的なことをより確実にし、学習者が自立して勉強して行けるような手がかりを与えるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「ロシア語Ⅰ」の復習　(1)	生格の用法（部分生格・否定生格）。 不定代名詞。 完了体と不完３体（ペアの形式）	川端香男里（中部大学教授）	川端香男里（中部大学教授） 岡野エレナ（東京大学非常勤講師）
2	「ロシア語Ⅰ」の復習　(2)	数詞。 複数の生格。 無人称文(1)。	同　上	同　上
3	運動の動詞―定動詞・不定動詞	動詞の定と不定。 定代名詞。 定動詞－不定動詞	同　上	同　上
4	従　属　節	従属節（副文章）。 譲歩・認容文。 斜格の概念。	同　上	同　上
5	－Ｓｙａ動詞	受身文章のつくり方。 普遍人称文。	同　上	同　上
6	関係代名詞、命令法、比較級	関係代名詞の用法。 命令法。 比較級。	同　上	同　上
7	形動詞、副動詞	副動詞と形動詞の復習。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	最上級、時の表現	形容詞の最上級表現。 時の表現。	川端香男里	川端香男里 岡野エレナ
9	話法	話法。 被動形動詞。 否定代名詞。	同上	同上
10	関係副詞、同格(1)	関係副詞の用法。 同格表現 — 孤立附語(1)。	同上	同上
11	同格(2)	孤立附語(2)。 総話論について。	同上	同上
12	不定形	不定形の用法。 抽象名詞の形成。	同上	同上
13	動詞の体の構成	動詞のペアーの作り方。	同上	同上
14	ロシア語の文体(1)	新聞の文体、学術語文の文体。 句読法(1)	同上	同上
15	ロシア語の文体(2)	文学作品の文体。 接頭辞の用法。 句読法(2)	同上	同上

＝スペイン語Ⅰ（'95）＝（Ｒ）

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

スペイン語の初歩の第一歩からの学習であるが、日本語を母語とする者にとって親しみやすいスペイン語の発音に慣れつつ、日常的な状況の場面での簡単な話を通じて、スペイン語の基本的な用語・表現と文法項目等を学んでいく。スペイン語の初級レベルにおいては動詞の活用を覚えることが重要である。ぜひ、書くことと共に口頭の訓練を積んでほしい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	挨拶、お互いの紹介	Alfabetoと文字と発音の関係を学び、基本的な挨拶の表現と動詞serを用いて簡単な紹介の仕方を練習する。	山口羔正（放送大学助教授）	山口羔正（放送大学助教授）
2	「どこの件？」「何をしているの？」	発音の続きと、serの復習、－AR規則動詞を用いて、お互いのこと、友人・知人のことを話す。	同上	同上
3	日々のこと、身の周りのもの	動詞estar,－ER／－IR規則動詞を学んで、家で用いる基本的で簡単な表現を学ぶ。	同上	同上
4	仕事・勉強・家の外での生活	今まで学習した文法項目を生かしつつ、外での日常生活を語る。動詞hayの表現。	同上	同上
5	家族構成・身内の関係	語根母音変化不規則動詞を学びながら、家族・身内の話をする。	同上	同上
6	身体のこと・健康	動詞tenerを中心に、身体の状態の表現と「どうすべきか」「何ができるか」の言い方を学ぶ。	同上	同上
7	授業・試験・クラスのこと	学校での話題を学年度スケジュールと共に扱う。小さい数と年月週の語句を学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	曜日・時間・年齢	カレンダー、時間、年齢等で数の練習をする。不規則動詞irと動詞句<ir a+不定詞>も合わせて覚える。	山口羔正	山口羔正
9	電話での約束・パーティ	電話での話し方、パーティの招待を話題に、文法的には直接・間接目的格人称代名詞と1人称単数活用形の語尾が-go となる動詞を学ぶ。	同上	同上
10	天気・外出・買物	天気の表現と色々な買物をテーマに、大きな数・gustarの用法等を扱う。	同上	同上
11	乗り物・通勤・通学・目的地に行く	どのようにして目的の場所に行けるか尋ねる。前置詞(句)の学習。	同上	同上
12	旅行・外国滞在	旅行と外国滞在の話題と感情表現の語句を学ぶ。	同上	同上
13	頼み・感謝・許し・勧め	主要な動詞とお礼、頼み、許し等の表現を学ぶ。	同上	同上
14	人との付き合い	紹介や貸借など、人と人との関係の出来事を表現する。conocerとsaberの相違、再帰動詞が新たな文法事項である。	同上	同上
15	日常生活の行動	再帰動詞を用いて日々の生活における自分の行動がいろいろ表現できる。	同上	同上

＝ スペイン語Ⅱ（'98） ＝ （Ｒ）

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

スペイン語Ⅰで学習した動詞の現在形による表現を基礎として、それぞれの日常的な場に応じた語句を用いて基本表現を発展させる。文法的には、動詞の過去形と命令形を中心に学ぶが、スペイン語を習得するには動詞活用は避けて通れないので、各自練習に努められたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	出会い・別れの表現	パーティにて、いとまごいをする 会社を訪ねる 空港での出迎え・見送り、週末の別れ 再帰動詞の復習	山口羔正（放送大学助教授）	山口羔正（放送大学助教授）
2	人のことを尋ねる・話す	スペイン語の国・国民名、職業は？ どんな人か？ 現在分詞 過去分詞	同上	同上
3	自然・気候などを話す	展望台にて、天候の表現 田園での余暇生活 再帰動詞（続き）：受け身的用法、無人称的表現分、単人称動詞	同上	同上
4	比較の表現	身近な品物、家族・友人、町・地方について話す 大きな数を学ぶ	同上	同上
5	命令形を用いて1	勉強・遊びの中で勧め・忠告、要求、命令等の表現を用いる tú、vosotrosへの命令	同上	同上
6	命令形を用いて2	仕事・付合いの中で頼み、詫び、禁止等の表現を用いる usted, ustedesへの命令 否定命令	同上	同上
7	命令形を用いて3	家の中で日常的に用いる表現 目的格人称代名詞を伴った命令 再帰動詞の命令	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	過去を話す1	昨日行ったところ、スペイン語のパーティ 直説法完了過去： -AR規則動詞 不規則動詞1（leer/ir/ser）	山口恭正（放送大学助教授）	山口恭正（放送大学助教授）
9	過去を話す2	先日何をしたか：同窓生の集まり、家に友人を招く 直説法完了過去： -ER/-IR動詞 不規則動詞2（estar/hacer/tener/venir）	同上	同上
10	過去を話す3	子供のころの思い出、その時何をしていたか？ 直説法不完了過去	同上	同上
11	過去を話す4	スペイン語の国での生活経験から：スペインで困ったこと、メキシコへ行った人 直説法完了過去：不規則形3 （poder/querer/poner/dormir） 直説法現在完了	同上	同上
12	過去を話す5	対人関係を話題にする、仕事仲間のこと、友人の結婚 直説法完了過去：不規則形4 （decir/dar/pedir/saber）	同上	同上
13	複文による表現	今日の天気、展覧会へ行く、パソコンはむずかしい？ 文を名詞化するque／仮定・条件文のsi／時を表すcuando／理由・原因をしめすcomo、porque／譲歩のaunque等を用いた複文	同上	同上
14	未来の表現	勉強、仕事で／旅行に行く話しで意図、予定、推量等を表現する 直説法未来	同上	同上
15	関係詞による表現	買い物、訪問地での語らい、送られてきたもの 名詞を修飾する関係代名詞queの形容詞節／lo queの表現／関係副詞のdonde	同上	同上

＝英　語　Ⅳ（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山　内　久　明（日本女子大学教授）〕
〔主任講師：グレアム・ロー（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

英語圏文化の原型としてのイギリスも、ボーダーレス化したといわれる現代においては、相対的個別の一つに過ぎないかもしれないが、イギリスの文化と社会のなかに普遍的価値を見つけ出すことを目指し、同時に日本との比較も視野におさめた英語学習。15章（回）からなる印刷教材、放送教材は、教育、コミュニティ、仕事の三分野に大別。各章はそれぞれのテーマを紹介する短いテクスト、現地取材のインタヴュー、さまざまの語学的演習、テーマに沿った短い文学テクストなどから成り立つ。特に読解と聞き取りに力点がおかれる。題して'Voices from Britain'。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	First School	On the early years of compulsory education at primary school from age five to eight, focusing on the child-centred education movement.	山内久明（日本女子大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）	山内久明（日本女子大学教授） グレアム・ロー（早稲田大学教授）
2	Sixth Form	On the final years of secondary education from age sixteen to eighteen, focusing on the issues of early specialisation and freedom of choice.	同　上	同　上
3	Ancient University	On historical development and modem functions of Oxford and Cambridge Universities, focusing on the collegiate sysetm.	同　上	同　上
4	New University	On the foundation and function of newer universities founded since the nineteenth century, with a particular focus on the post-war campus university.	同　上	同　上
5	Open University	On the creation and development of Britain's own "University of the Air", focysing on its contribution to the expansion of abult and continuing education.	同　上	同　上
6	House	On the development and structure of residential housing, focusing both on both socio-economic and cultural aspects.	同　上	同　上
7	Garden	On the physical and psychological roles of the modern domestic garden, emphasizing its continuities with the formal public garden.	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	In the Country	On the economic and cultural function of the countryside in the past and today, focusing on its interdependence with the growing urbanised areas.	山内久明(日本女子大学教授) ｸﾚｱﾑ・ﾛｰ(早稲田大学教授)	山内久明(日本女子大学教授) ｸﾚｱﾑ・ﾛｰ(早稲田大学教授)
9	In teh City	On the process of urbanisation, focusing on the presence of the past in the modern city, traditions of town planning, and the decay and renewal of the inner city.	同上	同上
10	In the Metropolis	On life in London in the past and today, focusing on the same three themes as in Unit 9 above.	同上	同上
11	Working from Home	On the increase in self-employment and teh role of the home as a place of work, focusing on the situation of writers and artists.	同上	同上
12	Teacher	On the role of the teacher in education and scholarship, focusing on career structure and socio-economic status.	同上	同上
13	Doctor	On the role of the physician within the National Health Service, focusing on the General ractictioner and the local health centre.	同上	同上
14	Architect	On the role of the architect and town planner in the past and today, focusing on teh relations between public and private initiatives.	同上	同上
15	British Voices on Japan	On interest in ahd studies on Japanese culture and society in Britain today, focusing on the views of several eminent British Japanologists.	同上	同上

＝英　語　Ⅵ（'９９）＝　（Ｒ）

〔主任講師：池上嘉彦（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

私たちの日常生活の中で大きな役割を果たしている意味のやりとり ― これを捉え理解するために、どのような概念や方法が用いられるのか、英語を中心に、そして日本語の場合との対照をも含めつつ、具体的な例に多く言及しながら考えてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常の言語生活の中でのことばの意味	日常の言語生活の中で、私たちは意味に関わる多種多様の経験をしている。どのような出来事にどのような意味の問題が関わっているのか、導入として、以後の授業で取りあげる問題の多様性を確認する。	池上嘉彦（昭和女子大学教授）	池上嘉彦（昭和女子大学教授）
2	ことばの意味	ことばの〈意味〉ということで、私たちはどのようなことを諒解しているのであろうか。私たちはことばで、あるものを〈指す〉とか、あることを〈表わす〉とか言う。このような場合、〈意味〉はどう関わっているのか。〈意味〉の意味を考えてみる。	同　上	同　上
3	ことばの意味と辞書　(1)	私たちはことばの〈意味〉を調べるために辞書を見る。しかし、辞書に記載の〈意味〉が不十分という経験をよくする。辞書に記されている〈意味〉とは何なのか、またそれとどうつき合えばよいのか ― この点を改めて考え直してみる。	同　上	同　上
4	ことばの意味と辞書　(2)		同　上	同　上
5	語彙の中の意味関係　(1)	語の〈意味〉には似ているもの、似ていないもの、関係あるもの、関係ないもの、さまざまな場合がある。語と語の〈意味〉の間にはどのような型の関係が想定できるのであろうか。	同　上	同　上
6	語彙の中の意味関係　(2)		同　上	同　上
7	文法と意味　(1)	文法は一応身につけたはずなのに何かが旨く行かない ― こういう経験をするのは、適切な言語運用は文法だけで決まるものではないからである。文法からもれるきめの細かい意味の問題、そして文法それ自体に深く浸透している意味の問題 ― 文法と意味のインターフェイスを考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	文法と意味 (2)	前頁のつづき	池上嘉彦	池上嘉彦
9	意味とコンテクスト (1)	現実の言語運用は、具体的な場面で具体的な思惑を持つ話し手、聞き手の間で行われる。そこではそれらの要因との関係で、ことばの意味はさまざまに変容され、駆け引きの対象にすらなる。そのようなレベルでの意味の問題を考える枠組を取りあげる。	同上	同上
10	意味とコンテクスト (2)		同上	同上
11	意味の変化 (1)	ことばが時と共に変化するということは古い資料を見ればすぐ分かるし、現代でも進行中の変化を経験することがある。ことばの意味も例外ではない。一見ばらばらに見える変化にも、実はかなりの決まった方向性が認められるものである。	同上	同上
12	意味の変化 (2)		同上	同上
13	意味の普遍性と相対性 (1)	違った言語で語の意味を較べてみると、似ているもの、似ていないもの、そして一見似ていながら微妙にずれているものがある。対応の仕方は出鱈目のようであるが、実はここでも意外と共通の制約の働いていることが知られている。	同上	同上
14	意味の普遍性と相対性 (2)		同上	同上
15	意味と文学	自明のことなのだが、文学が〈言語〉の芸術であるということは忘れられがちである。同じようにことばを素材としていても、何があるものを〈文学〉にし、あるものをさせないのであろうか。ことばを通しての芸術的創造性ということを考えてみる。	同上	同上

＝スペイン語Ⅰ（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

近代外国語の学習の目標・方法も、単なる「訳読」中心から広くコミュニケーション全般の語学能力を高めることに重点が置かれるようになって来ている。本授業ではスペイン語を「ネイティブの国で初心者が学ぶ立場」から、平易な話し言葉を中心に基本的な表現を文法的な知識と共に学習していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	滞在地到着時の表現	名前を言う 行き先を言う 人称代名詞主格 動詞ＳＥＲ	山口羔正（放送大学助教授）	山口羔正（放送大学助教授）
2	簡単な挨拶 朝食にて	朝食時挨拶を交わす 何を食べるか？ 冠詞、名詞 －ＡＲ・－ＥＲ規則活用動詞	同上	同上
3	住む家や品物を描写する	家の中を見る 私の持ち物 形容詞、指示形容詞 動詞ＥＳＴＡＲ、ＨＡＹ	同上	同上
4	自己について語る	自分・相手の事を話す －ＩＲ規則動詞 不規則動詞ＴＥＮＥＲ	同上	同上
5	目的地へ行く	大学へ行く バス・地下鉄を利用する 不規則動詞ＩＲ、ＳＡＬＩＲ 語源母音変化動詞１	同上	同上
6	入学手続き	受付けで係の人との話し 不規則助動詞ＶＥＮＩＲ、ＶＥＲ 語根母音変化動詞２ 数１	同上	同上
7	外国人の友達と	国・言語・家族や授業などを話題にする 不規則動詞ＨＡＣＥＲ、ＤＡＲ 指示代名詞、所有形容詞	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	買い物	デパート・お店で必要な品物を求める 目的格人称代名詞 不規則動詞ＰＯＮＥＲ、ＯＩＲ	山口羔正	山口羔正
9	食事	大学のカフェテリアで昼食を取る、レストランにて 不規則動詞ＣＯＮＯＣＥＲ、ＳＡＢＥＲ	同上	同上
10	天候・暦	天気や月・日のことを話す 主語無し表現 数２	同上	同上
11	時間	人と会う約束 仕事のこと 時間の表現	同上	同上
12	趣味・好きなこと	趣味や好きなスポーツについて語る 動詞ＧＵＳＴＡＲ 不規則動詞ＪＵＧＡＲ	同上	同上
13	旅行をする	休暇でセカンドハウスへ 出張でホテルに泊まる 再帰動詞	同上	同上
14	日常生活の行動	普段の生活で用いる 再帰動詞の表現	同上	同上
15	健康・病気	健康な生活 医師の診療を受ける 薬を買う	同上	同上

＝保　健　体　育＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡邉　融（放送大学教授）
〔主任講師：臼井永男（放送大学助教授）

全体のねらい

この講義のねらいは、生涯スポーツの観点から、日常生活の中にスポーツ等の運動を取り入れて、生活の質の向上を図ろうとする際に必要な考え方と科学的な知識を提供することである。とくに、運動が身体に及ぼす影響をスポーツ科学的な見地から講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯スポーツの時代	スポーツという言葉の意味は国の数ほどあると言われるくらいに多義である。スポーツに対する考え方をいくつか紹介しながら、現代の「生涯スポーツ」の考え方、これを推進している民間運動や行政の具体的な展開状況、日本でのあり方等について講義する。	渡邉　融（放送大学教授）	渡邉　融（放送大学教授）
2	歴史の中のスポーツ	人間は今までに多くのスポーツを作り、楽しみ、捨ててきた。また、スポーツは単なる楽しみに止まらず、時代・社会によってさまざまな意味を伴って行われてきた。スポーツが人間にとって何であったかを、いくつかの例を取り上げながら見てゆく。	同　上	同　上
3	知っておきたいからだの知識	ヒトは、直立ならびに二本足歩行という他の動物には見られない特有の移動様式を持つ。このようなヒトのからだの構造と機能について説明し、スポーツを科学的に学習するうえに必要な、からだの基本的な仕組みについて概説する。	臼井永男（放送大学助教授）	臼井永男（放送大学助教授）
4	スポーツ活動への科学的アプローチ	走る・投げる等の身体運動（スポーツ）の分析と統合に関する科学的接近の概要を解説するとともに、身体運動の成り立ちを人体の構造的側面及びエネルギー伝達の側面から考える。	福永哲夫（東京大学教授）	福永哲夫（東京大学教授）
5	「筋力」発揮のメカニズム	ヒトが随意努力下で発揮する「筋力」の大小は、筋の太さ、組成や神経の働きにより影響され、また筋の活動様式により左右される。そのメカニズムについて説明するとともに、スポーツの成績を決定する要因についても解説する。	同　上	同　上
6	パワーアップトレーニングの科学	強い「筋力」をす速く発揮することにより高いパワーを得ることができる。パワーアップトレーニングの科学的メカニズムを説明するとともに、健康・体力つくりのためのトレーニング及びスポーツ競技力向上のためのトレーニングについても解説する。	同　上	同　上
7	持久的トレーニングの生理	ジョギングやマラソンなど、持久的運動をおこなった時の生理的機能について説明するとともに、持久的トレーニングによって生じる効果を、いろいろな角度からとらえてみる。持久力の測定法や、主観的・客観的指標についても学ぶ。	小林寛道（東京大学教授）	小林寛道（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	運動と心拍水準	エアロビックダンス、ウォーキング、サイクリング、水泳など、いろいろな運動をおこなった時の酸素摂取量や心拍数の水準について調べてみる。年齢や体力水準の違いによって、それらがどのように変化するかを勉強し、健康増進のための運動負荷水準を探る。	小林寛道	小林寛道
9	持久的トレーニングの方法	年齢とともに体力がどのように変化してゆくのかをとらえるとともに、トレーニングが体力推移にどのような影響をもたらすかについて検討する。持久的トレーニングをおこなう場合の留意点や、暑さ対策、給水、栄養などについても勉強する。	同上	同上
10	たくみとスキル	自分の意志で行う身体運動の個人差を、我々は「強さ」と「巧みさ」という尺度を用いて評価している。巧みだと評価される動作の特徴を探り、そのような動作を可能にしている能力（スキル）について解説する。	大築立志（東京大学教授）	大築立志（東京大学教授）
11	脳と運動制御	巧みな動作は、神経系、特に脳の働きによって初めて可能になる。「体でおぼえる」とは実は「脳が覚える」ことである。脳を中心とした神経系と運動の関係を探る。	同上	同上
12	運動の上達	箸や鉛筆の使い方もスポーツの動作も適切な練習によって上達する。運動の上達とは脳・神経系のどのような仕組によってもたらされるのか。どのような練習をすれば「うまく」なれるのかについて考える。	同上	同上
13	スポーツの医学（1）けがと予防	スポーツという運動負荷は、われわれの身体に健康や体力の充実感を与える反面、重症事故や慢性障害もひき起こす。これらの事故の実態や応急処置・リハビリテーションの原則について解説する。	中嶋寛之（日本体育大学教授）	中嶋寛之（日本体育大学教授）
14	スポーツの医学（2）けがと処理	スポーツによる事故や損傷に関与するさまざまな要因について述べる。とくにスポーツをする人の個人的な身体要因は最も重要で予防の立場から内科的あるいは整形外科的メディカルチェックについて解説する。	同上	同上
15	身体障害者とスポーツ	近年、機能向上・回復のためだけでなく、身体障害者の間に、さまざまなスポーツを楽しむ機会が増えてきた。その意義について述べ、親しまれているいくつかのスポーツを紹介するとともに、障害の部位と程度の違いによる留意点について言及する。	臼井永男	臼井永男

＝現代日本の教育課題（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：麻生　誠（放　送　大　学　教　授）〕
〔主任講師：天野郁夫（国立学校財務センター教授）〕

全体のねらい

今、日本の教育は大きな転換期にある。教育をめぐって、これまではなかったような広がりと深さを持つ問題が生じている。このような現状を的確に把握し、そこに至る歴史的背景を正しく認識した上で、これからの日本の教育のあり方を広い視野から展望し、現代社会における教育の意味を理解することが、本講座の目的である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本の教育－何が問題か	近代的な学校制度が作られてから一世紀余り、日本の発展を支え、国際的にも高い評価を得てきた教育が、今そのあり方を根底から問われている。日本の教育の何が今、問題なのか、日本の教育はどこから来て、どこへ行こうとしているのかを考える。	天野郁夫（国立学校財務センター教授）	天野郁夫（国立学校財務センター教授） 麻生　誠（放送大学教授）
2	教育と近代－日本の経験	問題の根底にある物を探り当てるためには、まず、近代学校制度の出発点にさかのぼってみる必要がある。明治の初期になされたさまざまな選択が、日本の教育と社会に何をもたらしたのか、戦前期におけるその明暗を明らかにする。	天野郁夫	天野郁夫
3	戦後改革の意味－効率化と平等化	第二次大戦後、アメリカの占領下に日本の教育は大きな変革を経験する。「第二の教育改革」と呼ばれるこの学制改革がいかに明治以来の教育の構造を揺さぶり、一変させ、戦後日本の高度成長のための基礎を創り出したかを見ていく。	同　上	同　上
4	大衆教育の時代－豊かな社会へ	1960年代から80年代にかけて、教育と経済はともに高度成長を遂げ、豊かな消費社会と大衆教育の時代をもたらした。誰もが18歳まで、さらに半数近くが20歳になるまで教育を受けるようになった時代。その豊かさが教育の大きな転換をもたらした。	同　上	同　上
5	学歴社会－教育と職業の間	現代社会では、学校で受けた教育の水準と内容を示す学歴が、人々の職業や社会地位と深い関わりを持つ。日本社会がことさらに「学歴社会」と呼ばれるのは何故か。またそれは変革の可能性を持ちうるのかを考える。	同　上	同　上
6	受験競争－教育と社会の病理	進学をめぐる激しい競争は、戦前期から、日本の教育と社会の最も深刻な病理現象とされてきた。受験戦争はなぜ起こるのか、それは解決可能なのか、高校や大学入試をめぐるさまざまな改革努力に触れながら、将来への展望を試みる。	同　上	同　上
7	家族の変質－躾の崩壊	家族は学校と同様、日々成長していく子どもたちの最も強力な社会化装置である。家族の持つ社会化機能を原理的に理解した上で、戦後日本の家族が教育に果たしてきた機能を整理し、現代家族の深刻な変質について検討する。	麻生　誠	麻生　誠

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	病んでいく心－真善美の教育は死んだか	これまでわが国の学校教育はシステムとして十全に機能してきたと言われてきた。たが今日、精神的な不調を訴え保健室へ逃避する子どもたち、あるいは不登校、いじめが増加している。これは何を意味しているのか。子どもたちの心の問題を考える。	麻生　誠	麻生　誠
9	増加する非行とその変質－無規範型非行の増加	逃避とは異なる形での社会システムからの離脱に非行がある。戦後日本の少年非行の動向をたどり、その傾向を把握した上で、現代青少年の逸脱状況と、その背景としての規範意識の変質について考察する。	同　上	同　上
10	男女共同参画社会への道－女性リーダー形成の障害	男女共同参画社会の現実が、国の政策として取り上げられてからはや5年が経過が経過したが、実現への道はなお遠いと思われる。その中で教育が果たすべき役割は非常に大きい。だが現実には、日本の教育と職場とが手を結んで、女性の社会的参画を阻む場合さえある。	同　上	同　上
11	人権と教育－同和教育の実態とその課題	同和教育にそのテーマを絞って、大阪大学とラトガース大学との共同で行われた日米同和問題国際調査等の研究成果をもとに、人権教育の展開を教師と地域住民の役割を中心に考察する。	池田　寛（大阪大学教授）	麻生　誠
12	才能教育と学校－適能教育を構想する	戦後、エリート教育や才能教育は特に公教育の領域でタブー視され姿を消したが、最近、「教育上の例外措置」と言う形で才能教育が政策課題となっている。だがその力は微々たるものである。蔓延する受験才能教育に対し、公教育で望まれる才能教育の姿を追ってみる。	麻生　誠	麻生　誠
13	生涯学習社会のゆくえ－豊かな自己実現への道	生涯学習は今や時代の風潮ともいいうる現象である。しかしその実体は多種多様であり、とても一括りに論じられるものではない。生涯学習の今日的意味について、放送大学の10年の歴史を検討し今後の我が国の生涯学習の可能性を探る。	同　上	同　上
14	教師とその養成－生涯学習型教師の登場	教育の場での直接の実践物は教師であって、教師を通すことなしにはいかなる教育上の理想や改革も実現できない。戦前、戦後のわが国で教師の果たしてきた役割を学習し、現在の教師の状況とその養成はどう行われ、いかなる問題をはらんでいるのかを考察する。	同　上	同　上
15	第三の教育改革－自由化と個性化	80年代後半の臨時教育審議会以来、日本の教育は明治初期と第二次大戦後に次ぐ「第三の教育改革」の季節を迎えた。改革のキーワードは「自由化」と「個性化」。多くの困難な課題を抱えた現代日本の教育はどこに行こうといているのか。	天野郁夫	麻生　誠 天野郁夫

＝現代日本の地方自治（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕

全体のねらい

地方自治は市民の日常生活に最も密着した公的活動領域である。しかも、従来の中央集権型の政治に代えて、地方分権型の政治が推進されている今日、地方自治の重要性は日を追って高まりつつある。この地方自治の領域に現れる諸問題は、日本の政治や社会が抱えている基本的な問題と密接に関連しているといえよう。この科目では、日本の地方自治の制度的な特徴を明らかにした後、具体的な政策問題の検討を通して、参加型地域社会形成の可能性を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地方自治と中央政治	政治とは何か 自治とは何か 地方政治と地方自治 中央集権と地方分権 日本の地方自治の特質	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	首長の役割	首長の権限 首長の地位 首長の任期 地方行政の仕組み 自治体職員の活動	同　上	同　上
3	地方議会	議会の機能 条例と予算の審議 首長との対抗関係 議会事務局 地域住民との関係	同　上	同　上
4	住民と選挙	地方選挙の制度 地方選挙の現実 陳情と請願 監査請求の効果 住民投票の意義	同　上	同　上
5	地方財政	地方財政の構造 地方税制の仕組み 補助金の役割 地方債の累積 財政再建の課題	同　上	同　上
6	都市計画	都市計画の意義 都市計画法 都市計画と住民参加 自治体の対応 マスタープランの策定	同　上	同　上
7	コミュニティ	コミュニティの意義 過密と過疎 コミュニティの解体 コミュニティの再建 ボランティア活動	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報公開	公開性と地方自治 情報公開 資産公開 会議公開 プライヴァシーの保護	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
9	性差別の是正	政治における性差別 女性首長の不在 女性議員の現状 女性施策の貧困 女性と地方自治	同　上	同　上
10	環境保全	公害規制 環境アセスメント 生活ゴミと産業廃棄物 下水道 地球環境問題への対応	同　上	同　上
11	地域福祉	社会福祉と自治体 高齢化社会への対応 在宅福祉とゴールドプラン 高齢者医療と国民健保 社会福祉と地域医療	同　上	同　上
12	文化行政	「ハコモノ」行政の限界 文化活動への助成 自治体と博物館・美術館 文化政策の貧困 社会教育と生涯学習	同　上	同　上
13	危機管理	警察行政の現状 消防行政の課題 防災体制の確立 緊急事態への対応 神戸の教訓	同　上	同　上
14	国際化への対応	自治体外交の現状 自治体の国際交流 外国人への行政サービス 外国人の権利 「内なる国際化」	同　上	同　上
15	自治体改革	地方分権の推進 政策的自立 議会改革 住民自治の拡大 「小さな政府」の可能性	同　上	同　上

＝日本の自然（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田隆士（放送大学教授）〕
〔主任講師：中村和郎（駒澤大学教授）〕

全体のねらい

自然の正しい理解のためには、事象や景観から受ける感動を大切にするのが基本となる。当科目では、ビジュアル世界に判り易い解説を付しながら日本列島とその周辺の気象・地形・生物等の多様性や特性を、個別アイテムの羅列とせずエコシステムに位置づけ、かつ人間生活と関わりを重視しながら紹介し、自然観の涵養に資する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	豊かな日本の自然	グローバルに見ると、豊かな緑に包まれた日本列島は、砂漠が広がる中緯度高圧帯に位置している。その厳しさを柔らげるのが海の存在であることはを強調する。豊かさは地形の複雑さにも由来することをいくつかの事例をあげ、感覚的に日本の自然の多様性を学ぶ。	濱田隆士（放送大学教授） 中村和郎（駒澤大学教授）	濱田隆士（放送大学教授） 中村和郎（駒澤大学教授）
2	日本の大地	日本列島は激しい隆起地帯であり、険しい山に深い谷が刻まれ、大量の砕屑物が川によって運ばれ、平野を構築・植生等の特徴や利用する人の知意を探る。地勢を表わす地図化の手法や種類についても紹介する。	同上	同上
3	大地を造る地質と歴史	日本列島は、造山運動の激しい地帯の特色として、多様性の高い岩相・地層の帯状分布をもつ。岩石も鉱物も段数が多く、それらは形成時のさまざまな物理・化学環境を反映している。列島を造る大地の性質は、植生や動物相にも少なからぬ影響を持つことが示される。	同上	同上
4	日本列島の環境変遷	日本列島は、初めから列島であったわけでなく、プレートテクトニクスとしてのプレート運動に支配され、さまざまな気候帯を反映しながら現在に至っている。４億年前にサンゴ礁が発達し、以後くり返し温暖期が記録されている。関東地域に氷河期の影響も残される。	同上	同上
5	日本の川と文化	川を独立したユニットとして見る時代は終った。地球上の水循環の中に位置づけ、山と平野・海とを結ぶ物質移動の経路であることを認識しなければならない。森は川の源であるとする受け止め方があれば、人がそれらを利用する姿勢も自ずと方向が見えてくる。	大熊孝（新潟大学教授）	大熊孝（新潟大学教授）
6	日本をとりまく海と大気	列島をとり巻いて流れる黒潮と親潮は、ただ単に気温への影響が大であるばかりではない。豊かな海の幸が育ち、変化に富む植生を育み、気象・海象・気候が一連の環境変遷の主要因をなす。海・陸インターフェイスの重要性も強く指摘され、生物の多様性にもふれる。	濱田隆士 中村和郎	濱田隆士 中村和郎
7	日本の土	大地の表層は、基本的に植生ひいては動物相を支配する大切な要素である。湿潤な気候や火山灰の存在は、日本列島の土の多様性を産み出し、豊かな自然環境を形成する正しく　地をなしている。人の生活様式は土の利用形態につながり、独特の分かを育て上げる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	森林(もり)の役割り	日本の森林は、ヨーロッパほどでないが最早原生の状態を留めている所が少い。山林の主体となる二次林や植林は、当然人と自然との相互作用として形成され、涵養されてきた。森林は生態の場だけでなく、大気の浄化を含め列島自然環境形成の主軸をなしている。	武内和彦(東京大学教授)	武内和彦(東京大学教授)
9	重要な里山の自然	里山という場と概念は、自然林と人の生活との接点において形成されてきた。里山は変化しつつある環境であり、生活文化の発祥の原点である。その里山も、国土の近代化政策により都市化という著しい変形を蒙り、激減に向いつつある実態に目を向ける必要がある。	同上	同上
10	日本の植物と昆虫	日本の野生生物は大きな生態的多様性を示すが、なかでも植物と昆虫との関り合いには注目すべきものが多い。里山という限定された環境下でのチョウと植物との関係を追いながら、自然界のシームレスなエコシステムの例を学び、その意義について述べる。	石井実(大阪府立大学教授)	石井実(大阪府立大学教授)
11	日本の鳥達	鳥は飛べる生き物でありながら、その分布や移動のパターンにはかなりの制約があることが知られている。鳥達の生き様に従って非常にバラエティに富み、不思議ともいえる知恵で子孫につないでいることも多い。単純な共存とか闘争といった図式だけでは説明できぬ。	樋口廣芳(東京大学教授)	樋口廣芳(東京大学教授)
12	湿地と動物達	湿地や干波という特定の環境は、一般にはマイナーな存在と見られがちであるが、エコシステムからみると、実は非常に大事な位置を占めている。鳥や魚、エビやカニ、昆虫など多くの小型生物にとってかけがえのないナーサリーゾーンであることを例証する。	同上	同上
13	火山・地震の災害	自然に恵まれた日本列島は、その反面自然の恐しさも同居させている。自然災害のうち、大地と関連して発生する日本列島にとっては避けられない火山・地震現象に起因するものが少くない。それだけに、その国土に住む人々にとって火山・地震への理解を欠かせない。	伊藤和明(文教大学教授)	伊藤和明(文教大学教授)
14	気象災害の恐ろしさ	季節によって変わるグローバルな気圧配置の下で、さまざまの気象災害が日本列島を見舞う。災害は雨や風だけでない。冷害も、フェーン現象による大災の危険が常にある。地勢の複雑さと、人の住む領域拡大に伴う土地の変形や変質が災害に直結する例も多くなった。	同上	同上
15	日本の自然教育と自然観	豊かな自然に住めば、自然への畏敬や感謝の念は薄らぐという事実がある。日本では縄文－弥生を経て恵まれた自然環境が激減し今日の文明化を迎えている。その経緯での環境悪化をどのように捉え、今後に資するかが今厳しく問われている。地球的課題にも共通する。	濱田隆士 中村和郎	同上

＝地球環境を考える（’９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：道家達將（放送大学教授）
主任講師：新飯田宏（放送大学教授））

全体のねらい

今日深刻な問題となっている、地域的公害からさらに拡大した地域規模での環境問題について、その現状・原因、そして解決策を、自然、社会、科学・技術等各方面から考察し、総合的な理解をめざすものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球環境問題とは何か	今日起っている多様な地域環境問題について、概観し、その相互連関性を考察し、この問題をどのように捉えたらよいかを考える。	道家達將（放送大学教授） 新飯田宏（放送大学教授） 阿部齊（放送大学教授） 濱田隆士（放送大学教授）	道家達將（放送大学教授） 新飯田宏（放送大学教授） 阿部齊（放送大学教授） 濱田隆士（放送大学教授）
2	地球温暖化とは何か	化石燃料の大量燃焼から発生する地球温暖化は、なぜ地球環境に悪影響を及ぼすのかを明らかにしつつ、その自然科学的メカニズム、その予防策、国際的取組について説明する。そこでは、Sustainable development(持続可能な開発）の理念とは何かも明らかにされる。	新飯田宏	新飯田宏 濱田隆士
3	消えゆく森林	多様な生物が息づく熱帯雨林。アマゾンに焦点を当て、その開発による破壊の状況、大原生林消滅の危機的状況を見ながら、なぜそのようなことが行なわれるのか、その影響はどのようなものか、どうすればよいのか等を考える。	新飯田宏	新飯田宏
4	水の惑星・地球	地球は太陽系唯一の水の惑星である。水は生命を育み、豊かな自然をもたらし続けてきた。その地球の水環境が急速に悪化している。今回は、地球水システムの本質、水の持つ自然浄化力、川や海の機能、そして水環悪化の現状・原因と解決策を考える。	濱田隆士	濱田隆士
5	砂漠化はなぜ起きる	世界各地で砂漠化が進んでいる。そもそも砂漠とはどんなところなのか、砂漠化の原因は何か、解決策はあるのか等につき考える。 異常気象が循環システムの乱れであること、熱帯海域は「海の砂漠」であること、また都市化は砂漠と同義であることなども述べる。	同上	同上
6	拡がるオゾンホール	フロン、メタンによるオゾン層の破壊が極地だけでなく全地球上空に広がりつつある。代替フロンもオゾン層を破壊する。オーロラが語る環境破壊への警告などを聞きながら、地上の現実生活における解決策を考える。	同上	同上
7	生物多様性の保全	レッドデータブックの見方・読み方、「絶滅」についての正確な理解、生態的に反地球型生物と言える人間の問題について考え、種の多様性保全の意義について述べ、生態保存策と開発思考との矛盾について考える。動物の権利、野生生物はペットではない点にも論及。	阿部齊	阿部齊 濱田隆士

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	廃棄物ーサイクルとリサイクル	今日私たちは、自分たちの廃棄物の処理に悩んでいる。自然には、自然のエネルギーと物質の循環がある。人間の廃棄物がこの循環系に入るとどのようなことになるのかを見るとともに、人間や生物の安全が確保できるリサイクルシステムについて考える。	道家達将	道家達将 阿部　齊
9	エネルギー	今日私たちは、石油・石炭など化石エネルギーを大量に使用することで、利便さを発展させる反面、環境を悪化させつつある。環境悪化を招かないようなエネルギーの発生と利用はどうすれば可能になるのか。それには科学・技術だけでなく社会的問題の解決が要る。	新飯田　宏	新飯田　宏
10	試される自動車社会の功罪	20世紀文明の象徴である自動車の大量生産と利用は、プラスの面とともに、マイナスの面をもたらしている。その実態に迫るとともに、今後どのようにすれば、マイナス面の克服が可能となるのか、各方面から検討してみる。	同　上	同　上
11	ビオトープとナショナルパーク	世界各国の環境保護政策について論じる。 バイソンを絶滅から救うために設けたとされるアメリカのナショナル・パークやドイツのビオトープなどを例として考察し、わが国における環境保護政策についても検討したい。	阿部　齊	阿部　齊 濱田隆士
12	人類と生態系	エコシステムと「エゴシステム」とも言える反地球型活動を行う人間によるシステムを対比し、エビ養殖とマングローブ林開発などに見られるような過剰生産・過剰消費の現状を調べ、人間がいかに地球生態システムを乱しているかを考え、解決策を論じる。	濱田隆士	濱田隆士 阿部　齊
13	日本の環境問題と政策	世界の中のとくに日本における環境問題・環境政策に焦点をあてて問題点と解決策を論じる。例として、ゴルフ場の問題、干潟・海浜の消滅など、また水俣病や自然保護の問題などについても検討したい。	阿部　齊	阿部　齊
14	環境政策と国民の取組	まず、地域環境問題から地域環境問題へと基本的性格の変化に国民の意識が遅れていたことが情報の不確実性と重なって、環境対策を遅らせて来たことを明らかにしつつ、「持続可能な開発に向けて、産業・エネルギー・民生の各部門が、また政府がどう対応しつつあるか、またＮＧＯの役割についても検討する。	新飯田　宏	新飯田　宏
15	不確実な未来へ向けて	これまで論じて来たこと、また論じられなかったことを取り上げ、地球環境問題について総括したい。	道家達将 新飯田　宏 阿部　齊 濱田隆士	道家達将 新飯田　宏 阿部　齊 濱田隆士

＝家　族　過　程　論＝（Ｒ）

〔主任講師：正岡寛司(早稲田大学教授)〕

全体のねらい

20世紀には、家族の世界にも激動的な変化が発生した。20世紀半ばには、世界中の家族の「（西欧的）夫婦家族」への収斂説が優位を占めたが、しかし20世紀後半における急激な社会変動は、家族の収斂説を退け、むしろ家族の多様性をうみだしている。本講義では、社会的状況における家族の変動、それにともなう家族発達過程の変化、そして個人のライフコースにおける家族キャリアの変化に焦点を当てる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	家族は変わる	(1)結婚 (2)家族 (3)近代都市の発展と家族の変動	正岡寛司（早稲田大学教授）	正岡寛司（早稲田大学教授）
2	家族の自然と文化	(1)家族は人間にとってどれほど自然であるか (2)人間文化としての家族 (3)家族についての巨大変動理論	同　上	同　上
3	結婚と家族の社会システム	(1)社会システムとは (2)結婚の社会システム (3)家族の社会システム	同　上	同　上
4	配偶者の選択と結婚	(1)結婚の現状 (2)結婚までの過程 (3)結婚の意味と結婚後の生活の不確実性	同　上	同　上
5	現代家族の特徴と社会変動	(1)家族の定義 (2)近代家族の特徴 (3)家族の社会変動	同　上	同　上
6	家族のライフサイクル	(1)家族のダイナミックス (2)ロウントリーの貧困研究とその後の社会変化 (3)家族過程の生活段階	同　上	同　上
7	家族の集団過程	(1)家族を考察する次元 ― 「社会集団」として ― (2)夫婦家族制のライフサイクル ― 社会制度の次元 ― (3)直系家族制のライフサイクル ― 社会制度の次元 ― (4)家族の集団構造 ― 集団の次元 ―	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	家族・世帯・生活集団、そして家族の発達段階	(1)家族・世帯・生活機能集団の概念的識別と生活世界 (2)家族制度と家族集団 (3)家族の発達段階 —— 従来の家族発達論についての批判的検討	正岡寛司	正岡寛司
9	家族の構造と発達過程	(1)家族の発達段階とは — 役割移行 (2)個人の発達と家族の発達 — 年齢（成熟）共時化 (3)他の社会制度との調整 (4)家族の発達過程	同上	同上
10	子どもの誕生と子どもの就学	(1)結婚と出生行動、そして家族集団の形成 (2)家族の形成と家族構造の複合 — 親子関係、世代の形成、異性の親子、きょうだい関係、1人っ子への定着・離脱 (3)子どもをもたない夫婦 (4)出生期間と人生人数 (5)家族コミュニケーションと基本的信頼感の内面化（子どもと親、そして夫婦） (6)学校制度と家族 (7)家族時間と学校時間の綱引き (8)世代間の対立とジェンダー対立 (9)学業終了の遅延と家族集団のスケジュールの進行	同上	同上
11	職業キャリアと家族発達	(1)近代家族と家庭外就労 — 夫、妻、そして子ども (2)妻の家事専業化と夫の職場への吸収 — 階層 (3)家族課題と妻の就業 (4)職業制度と家族制度 — シンクロの難しさ	同上	同上
12	子どもの巣立ちと家族発達	(1)巣立ち期間 — 第1子離家から最終子離家まで (2)巣立ちと家族集団の変化 (3)成人子と親の相互作用 (4)成人子のきょうだい関係と家族集団	同上	同上
13	親と子の役割移行	(1)親族世代の重複状態 — 人口学的および家族的 (2)サンドイッチ世代のねじれ — 子どもの教育・みずからの成熟・老親の介護、祖父母になれない、あまりに早期に祖父母になる (3)世帯の合流と分離 (4)老親の介護役割 (5)老親の終い	同上	同上
14	脱結婚・脱職業そして家族	(1)各種キャリアの終端部分での共時性と非共時性 (2)家族キャリアの終端 (3)家族のキャリア生活史と脱家族 (4)配偶者との別れ	同上	同上
15	家族のライフコース	(1)家族制度の変化 — ジェンダー役割の変化 (2)家族の適応的変化と制度の対応 (3)時代の影響と家族の集合的逸脱行動 (4)家族のライフサイクルと家族のライフコース	同上	同上

＝ライフコース論＝（R）

（主任講師：大久保孝治（早稲田大学教授）
主任講師：嶋﨑　尚子（放送大学助教授））

全体のねらい

ライフコースとは社会的役割の複合体としての個人がその生涯においてたどる役割移行の軌跡である。個人はある時代に特定の社会の一員として生まれる。そしてさまざまな集団（家族・地域社会・学校・職場・施設……）の間を遍歴しながら、社会内での位置を変化させていく。その間、個人にとっての環境である社会構造も変化する。ライフコース論とは社会的人間としての個人の一生と社会変動との間の相互作用の研究である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ライフコース研究の視点(1) 社会構造とライフコース	社会学的にみると人間とはさまざまな社会的役割の複合体である。この複合体は加齢に伴って構成を変化させていく。すなわち、さまざまなライフイベントを経ながら旧い役割の変質や喪失、新しい役割の取得を経験する。このように人間の一生は役割移行の過程としてとらえることができる。	大久保孝治（早稲田大学教授）	大久保孝治（早稲田大学教授） 嶋﨑尚子（放送大学助教授）
2	ライフコース研究の視点(2) 社会変動とライフコース	人間の一生を役割移行の過程としてとらえた場合、社会構造は役割移行が行われる環境に相当する。ところが個人の一生の間にこの社会構造そのものも変動する。したがってライフコース研究は個人時間（年齢）だけでなく歴史時間（時代）というもう1つの時間軸を分析枠組みに組み込む必要がある。	同　上	同　上
3	データ収集の方法(1) 回想法	ライフコース研究が実証的な学問であるためには、何よりもまず実証的なデータを収集しなければならない。回想法とは、人生の途上にある人々に過去を振り返ってもらって、これまでの出来事経験についてのデータを収集する方法である。	同　上	同　上
4	データ収集の方法(2) 追跡法	追跡法とは、人生の途上にある人々を対象にして、人生上の出来事を経験していく過程をリアルタイムに調査しながらデータを収集する方法である。大学生が職業を選択し職場に適応していく過程の調査を例にして説明する。	嶋﨑尚子	同　上
5	データ収集の方法(3) 復元法	回想法にしろ、追跡法にしろ、それが人生の途上にある人々を対象にする以上、その歴史的射程は100年間に満たないものである。数百年前の人々、たとえば江戸時代の農民のライフコースについて知るためには、歴史的資料による再構成法が用いられる。	同　上	同　上
6	統計的分析と事例分析	分析とは対象をいくつかの構成要素に分解し、それら要素間の連関構造を明らかにする行為である。分析には統計的分析と事例分析とがある。前者は集団を対象とした分析であり、後者は個人を対象とした分析である。ライフコース研究の場合でいえば、コーホート法は前者であり、生活史法は後者である。	大久保孝治	同　上
7	統計的分析の実例（1） 家族経歴	役割移行の過程としてのライフコースは複数の経歴の束としての概念化することができる。その場合、家族的役割の連鎖である家族経歴は多くの人々に共通するもっとも重要な経歴である。その家族役割の時代的変化について考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	統計的分析の実例 (2) 男性の職業経歴	職業経歴は家族経歴と並ぶ重要な経歴である。しかし、男性と女性とでは職業経歴のパターンが大きく異なる。そこで、まず男性の職業経歴をとりあげ、企業間移動のパターンの時代的変化について考察する。	大久保孝治	大久保孝治 嶋崎尚子
9	統計的分析の実例 (3) 女性の職業経歴	かつては職業経歴をもつ女性は少なく、職業経歴そのものも短かったが、しだいに職業経歴をもつ女性が多くなり、その職業経歴そのものも長くなってきた。こうした女性の職業経歴における就業パターンの時代的変化について考察する。	嶋崎尚子	同上
10	統計的分析の実例 (4) 転機と時間	ライフコースの方向の変化あるいは確定を伴う出来事を転機と呼ぶ。特定の個人の転機を予測することはできないしかし、転機のたくさんの事例を統計的に分析すると、転機と年齢、および転機と時代との間には一定の関係があることがわかる。	大久保孝治	同上
11	統計的分析の実例 (5) 人生の浮沈感覚	ライフコースを構成する経歴には、家族経歴や職業経歴といった外的経歴以外に、ものの見方や考え方の変化を意味する内的経歴というものがある。この内的経歴に及ぼすライフイベントの浮沈効果について考察する。	同上	同上
12	事例分析の実例 (1) 転機の類型	転機とは単一の出来事ではない。それは複数の出来事の連鎖であり、一連の過程である。転機はどのような原因で生じ、どのような過程を経て、どのような結果をもたらすのか。転機のメカニズムを事例分析の手法を用いて明らかにする。	同上	同上
13	事例分析の実例 (2) 戦争と転機	急激な社会変動はその中で生きる人々の人生にどのような転機をもたらすか。1945年の敗戦が日本人のライフコースに及ぼした影響について考える。	同上	同上
14	ライフコース研究の多様性 (1) 個人・家族・企業	ライフコースという概念は特定の学問分野だけではなく、さまざまな分野で利用されている。現代人のライフコースは多様だが、最近のライフコース研究もまた多様なのである。最後の2回は大きく広がりつつあるライフコース研究の全容を俯瞰する。	嶋崎尚子	同上
15	ライフコース研究の多様性 (2) 個人・コーホート・社会	ライフコースという概念は特定の学問分野だけではなく、さまざまな分野で利用されている。現代人のライフコースは多様だが、最近のライフコース研究もまた多様なのである。最後の2回は大きく広がりつつあるライフコース研究の全容を俯瞰する。	同上	同上

＝家庭生活の経済＝（Ｒ）

〔主任講師：御船美智子（お茶の水女子大学助教授）〕

全体のねらい

個人が経済社会と関わる際の重要な媒体が家計である。家庭生活における経済的側面と生活全体との関わり、家計費の構造、個人と家計との関係を認識し、同時に、家庭の経済生活を、それを取り巻く経済社会環境との相互作用の中で検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	家庭生活と家計と経済	家庭生活は、その経済的側面のどの部分が、どのように経済社会の中に組み込まれ、影響を受けているのか、また家計の行動がどのように経済社会のあり方を方向づけているのかを、家庭生活や家計を経済の循環の中に位置づけて明らかにする。	御船美智子（お茶の水女子大学助教授）	御船美智子（お茶の水女子大学助教授）
2	家庭生活の経済	家庭生活の経済の機能とは何か、家庭の内部の経済はどのような要素とプロセスから成り立っているのかを概説し、経営組織体としての家計の内部を、主体、構造的側面、時間軸などから観察し、家庭生活の中に経済を相対的に位置づけ、特徴を明らかにする。	同上	同上
3	家計費のフローとストック	家計を構成する主要な要素が家計費である。このフローとストック両面から家計を把握をする。収支、資産・負債の定義と分類、内訳を示し、各の意味と関連をとらえる。家計費の基本的な概念、フローとストックの関連づけを整理する。	同上	同上
4	経済取引と家計費	経済取引が資産の増減、負債の増減、実収入、実支出の組み合わせとして家計費にあらわれるときの論理（仕訳）を示す。家計がする具体的な経済取引を例に、どのように仕訳されるのか、そして、それを把握するための技術（会計）を提示する。	同上	同上
5	くらしのマネージメントと家計	生活資源を対象とするくらしのマネージメントの中で、経済的なマネージメントをどのように図るのか、ひと、もの、おかねなどの関連づけをし、家計が時間軸を用いて、過去と現在と将来のリンクを可能にすることを示し、具体的な方法を提示する。	同上	同上
6	豊かな生活と「経済的」生活	家庭生活の経済的水準はどのように推移してきたのか、戦後日本を中心にみたい。経済の変化によって７期に区分し、経済・社会政策がどのような家庭生活のあり方を理想として策定されてきたのか、制度的要因が家庭の経済生活をどのように変化させたのかを整理する。	同上	同上
7	働くことと仕事と労働	家庭生活の経済において「働くこと」と仕事そして労働は異なった意味をもつキーワードである。貨幣を伴う仕事とそうでない仕事の違いを明らかにし、その帰結が家計内部の成員にどのような影響を及ぼすのか、また働き方の多様性との関連を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ものを買う、使う、活かすことと消費	経済学の概念である「消費」が何のための概念であるかその性格を明らかにし、購入、使用、活用など生活における類似の概念のどの部分をさすのか検討する。また、消費支出を規定する要因、変化、その把握方法を示す。	御船美智子	御船美智子
9	サービス化、情報化と家庭経済	生活におけるサービスや情報の意味を明らかにし、なぜサービス化、情報化が進むのか経済のサービス化、情報化と家庭経済のサービス化、情報化がどのような相互作用を及ぼし、それがどのように進展しているのかを検討する。	同上	同上
10	家計の社会化－家計と財政	家庭の経済生活と財政との関係を、現実面と理論的根拠などについて整理し、市場経済との関連を検討したい。福祉国家においてなぜ財政との関係が強くなるのか、家計と財政の相互作用の中で、家計の社会化がどのように進展し、家計や生活が変化しているかを考える。	同上	同上
11	家計の金融化－家計と金融	家計費の中で貯蓄割合が増加し、家計が様々な金融商品を購入したり、モノやサービスの取引手段として消費者信用を利用するなど金融化が進んでいる。各金融商品の特徴を検討し、家計の金融化がなぜ、どのように進むのか考える。	同上	同上
12	家計のストック化	家計のストック化とは何か、なぜ進んでいるのか、どの範囲で、どのような形で進展しているのか、現状を把握する。ストック化へ対応、家計や生活にとっての意味を考え、また、ストック概念を再検討する。	同上	同上
13	家計の国際化	家計の国際化をとらえる視点を提示し、家計の国際化の現状・意義と問題点を考える。外国為替相場の変動や国際的な経済動向がどのように家計に影響を与えるのか、購買力平価、内外価格差について考え、家計の国際化のあり方を検討する。	同上	同上
14	家計の共同性と個別化・個計化	家計の内部形態は個人と家族のあり方、共同性を反映する。複数の個人がどのように家計を形成するのか、家計の個別化、個計化がなぜ進んでいるのか、しかしなぜ家計でもあるのか、経済社会の変化と家族のあり方の両面から検討する。	同上	同上
15	生活の経済	経済発展が必ずしも生活の豊かさの実現につながらないと言われるが、それはなぜか。従来の経済指標が何を示すのか、家計・家庭経済・家庭生活レベルで生活者の経済的福祉指標はどのようなものか、生活の豊かさにつながる経済社会のあり方、実現のための条件を考えたい。	同上	同上

＝生　活　経　営　論＝（Ｒ）

〔主任講師：清野きみ（北海道教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

生活は人間の実践領域であり、生活文化の領域である。各人が生活文化の創造的な担い手となるためには、自己の生活管理能力を高め、生活経営上の不安要因を科学的に、客観的に認識できることが鍵となる。本講では、生活経営上のリスクに焦点をあて、健康、家計、孤立、事故などにみる日常的課題を明らかにし、自己と家族の生活技術を高め、外部環境に働きかける新しい生活スタイルを提言する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活経営のねらいと課題	生活経営は、生活管理とその設計を包括し、家庭経営・生活管理と類似の領域を対象とした新しい生活科学である。人間にとって根元的な生活経営とは何かを追求し、ひとつの組織体に価値の序列をつけないで生活主体を確立するために、生活を組織し事故に対処する生き方を考える。	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）
2	生活環境と生活の教育	生活環境醸成の諸条件について、生活主体と生活手段（技術・資財）の総合としての生活実践を中心に、生活経営能力育成のプログラムを考える。特に、我が国の生活教育の源流にたちかえり、今日の生活の教育にいかに活かせるかをみる。	同　上	同　上
3	生活診断とライフヒストリー	生涯生活設計の記録に、家庭における日常的なライフヒストリーが用いられる。ここでは、生業別、地域別、世代別、行事（家庭）別にそれらを整序し、生活経営目標と生活のし方に必要とされる生活診断の諸相を探る。	同　上	同　上
4	家族の多様化と新たな生活文化の創造	今日の家族多様化の動向を明らかにし、家族多様化が意味する生活リスクの増大に対して、「安心」に焦点を当てた新たな生活文化の創造を探る。	木田淳子（大阪教育大学助教授）	木田淳子（大阪教育大学助教授）
5	性別分業型家族から生活共同型家族へ	日本の家族に今日なお根強くあるところの性別役割関係によって、生活経営上どのような問題が生じているかを考察し、それらを克服する方向として、生活共同型家族を展望する。	同　上	同　上
6	開発途上国の家族の生活経営	開発途上国では生活のみならず、生産の場においても家族という単位が重要な位置を占めている。わが国と比較して、こうした形態の家族の生活環境と生活経営の特色を述べる。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
7	母子保健と生活経営	妊娠・出産管理の主体および場が、地域・家庭から医療機関へと移行したことに伴い生じた様々な問題を検討し、これからの妊娠・出産管理の望ましい姿を生活者の立場から考察する。	山越成美（元関東短期大学非常勤講師）	山越成美（元関東短期大学非常勤講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	妊娠期間における主婦の家事労働	妊娠中の専業・就業主婦の家事労働の実態調査結果をもとに、妊娠が招来する身体的・精神的変化の家事労働遂行に及ぼす影響を非妊時と比較しながら明らかにする。	山越成美	山越成美
9	妊娠と労働管理	妊娠時に測定されるエネルギー代謝率の含意を明らかにすることを通して、妊婦の労働遂行許容範囲のスケールとしての、非妊時エネルギー代謝率の適用性について検討を加える。	同上	同上
10	高齢期の生活経営－自覚的健康感と健康状態－	現代は、人生50年時代の生活から人生80年時代の生活へと急速に変化している。それに伴い、個人においても社会全体としてもさまざまな生活問題が懸念されるが、人生80年時代のより良い生活を構築するには、高齢期の生活経営が緊要な課題である。	遠藤マツエ（元埼玉大学教授）	遠藤マツエ（元埼玉大学教授）
11	高齢期における孤独意識	一般に、高齢者の生活問題は病気、貧困、孤独に集約されると言われるが、なかでも主観的な孤独意識の把握は、高齢期の生活経営を人生の円熟期になるように図るうえで、重要な課題である。日常生活における生活行動を通して孤独意識とその緩和を考える。	同上	同上
12	高齢者の日常的な健康管理	高齢者が幸せな生活を営むには、健康であることが極めて重要である。健康は、生活者と生活者を取り巻く環境との相互作用の過程に現れる状態であるので、日常生活における高齢者の生活意識や生活態度の積み上げ過程を通して、高齢期における生活経営を考える。	同上	同上
13	事故と生活経営	事故とは安全に対するリスクであり、正常な活動が損なわれる事態の発生をいう。現代では高齢化・サービス商品化・債務・情報化などが、事故に繋ながることが多い。生活基盤を失う地震災害はもっと恐ろしい。地震災害と生活の終結そして再生をとりあげる。	清野きみ	清野きみ
14	家庭援助サービスと生活経営	長令化・少子化の一側面として単身の世帯が増えていくが、地方、在宅介護の中核となるホームヘルパーの家事援助が注目される。業務内容を検討しながら、受け手の側にたつサービスとは何かを考える。	同上	同上
15	生活課題と生涯学習	生活を科学することは、文化を学び、文化を創り、文化価値の創造につながるものである。21世紀の生活の課題とは何か、ひとりの人間の出来ることは何か、その可能性をゲストを交えながら最大限追求してみたい。	同上	同上

＝消費者問題の展開と対応＝（Ｒ）

〔主任講師：小木紀之（名古屋経済大学教授）〕

全体のねらい

消費者問題の解決は一朝一夕に可能な問題ではなく、行政、企業、消費者のそれぞれの積極的な対応が要求される。この科目は「消費者は真に守られているか」を視点に消費者問題の本質を理解し、消費者が健全な消費者主導型の経済社会を実現させていくための消費者の役割、企業、行政の責務について考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい消費者像を求めて	21世紀の新しい消費者像を模索し、自立する消費者のあり方を学ぶ。	木村立夫（東京経済大学教授）	木村立夫（東京経済大学教授）
2	消費者問題の課題と展望	消費者問題とは何か、消費者問題が発生してきた経済社会的な背景、主要な消費者問題、消費者の権利、新しい消費者問題の潮流などを中心に消費者問題の全体像を学ぶ。	小木紀之（名古屋経済大学教授）	小木紀之（名古屋経済大学教授）
3	消費者運動の歴史と展開	消費者問題解決の一側面を担う消費者運動のあゆみ（歴史と展開）を、日本・アメリカ・その他と対比させながら消費者運動の役割を学ぶ。	同上	同上
4	消費者行政の展開	消費者保護はなぜ必要なのか。国および地方自治体の消費者行政の仕組み、消費者保護基本法の理解を通じて、今後の方向性を探る。	同上	同上
5	消費者問題と消費生活関連法(1)	消費者問題に対応する消費者法にはどのようなものがあるか。情報公開と消費者・製造物責任法を中心にその課題を探る。	中村年春（青森大学教授）	中村年春（青森大学教授）
6	消費者問題と消費生活関連法(2)	安全・商品選択・適正な商取引と法律、訪問販売・通信販売・割賦販売と法規制、表示・警告、景品、広告と法規制など身近な消費者法を考える。	同上	同上
7	企業の社会的責任と消費者対応	メセナ、フィランソロピー、企業ボランティアなどの企業の社会貢献活動の実態と企業のあるべき社会的責任の課題を検討する。	木村立夫	木村立夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	企業の販売戦略と消費者	高度大衆消費社会における企業の販売戦略は、時として消費者不在のマーケティング活動を促す。消費者にとってのマーケティングの意味を学ぶ。	木村立夫	木村立夫
9	流通政策の展開と消費者	わが国の流通構造は、近年大きくその姿を変化させてきている。わが国の商取引・商慣行、国際化の進展、規制緩和などの中で、消費者志向型の流通政策のあり方を探る。	小木紀親（松山大学講師）	小木紀親（松山大学講師）
10	高齢化社会の進展と消費者対応	わが国における高齢化の進展は、消費者としての私たちの生活を様々な形で変化させてきている。具体的には、雇用・年金、健康・福祉、教育・文化、住宅・生活環境と高齢化の問題を検証する。	井上崇通（明治大学助教授）	井上崇通（明治大学助教授）
11	情報化社会の進展と消費者保護	マルチメディアの進展は、私たちの消費者としての環境を劇的に変化させてきている。生活のボーダレス化の持つ利便性と問題点を検討するとともに、今日、論議されている電子商取引についても取り扱う。	同上	同上
12	資源・環境問題と消費者	環境問題は、地域的な問題であると同時に世界規模の問題としても論議する必要がある。地球に優しいライフスタイルの確立に向けて、省資源、省エネルギー、ごみ問題等、わが国および各国の具体的な取り組みについて学ぶ。	同上	同上
13	サービス経済化と消費者問題	豊かさの象徴と言われるサービス経済化現象について学ぶ。サービス化の進展は、一方で消費者の支出構造に影響を与え、他方では雇用機会の変化をもたらしてきている。これらの側面についての知識を得る。	同上	同上
14	消費者教育の課題と展望	消費者教育の理論について学習し、学校・企業の消費者教育の意義を学ぶ。	小木紀親	小木紀親
15	消費者生活相談の現状と課題	多様化、複雑化する消費生活相談の現状と企業と消費者の接点に立って活躍する、消費者生活コンサルタント、消費生活アドバイザー、消費生活相談員、ヒーブ、ACAPの役割を学ぶ。	小木紀之	小木紀之

＝ 日本人口論－高齢化と人口問題－ ＝ （ R ）

〔主任講師：清水浩昭（日本大学教授）〕

全体のねらい

人口高齢化の問題は、日本のみならず世界における現下の最重要課題であるといわれている。そこで、本講座では、世界人口の高齢化の動向を念頭におきながら日本社会における人口高齢化の特徴と問題点を人口学的な視点から概説することにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本人口論の到達点と課題	日本の人口学が今日までに蓄積してきた研究成果を紹介するとともに、高齢化問題研究の意義を明らかにする。	清水浩昭（日本大学教授）	清水浩昭（日本大学教授）
2	人口分析の方法とその特徴	人口学は人口現象を対象にして研究を展開している学問であるが、この学問にみられる研究方法の特徴を明らかにする。	同上	同上
3	人口高齢化研究の意義と高齢化の人口学	今、何故、人口高齢化について研究しなければならないのか。また、人口高齢化は、どのような人口学的条件の変化によって生ずるのかを明らかにする。	同上	同上
4	人口高齢化の現状と将来	人口高齢化の国際比較を行うとともに、日本の人口高齢化の特徴と問題点を全国レベルと地域レベルの二つの側面から明らかにする。	同上	同上
5	結婚と出生－晩婚化・少産化の動向と高齢化問題	人口高齢化をもたらす要因の一つである出生率低下の趨勢を結婚・出産期女子人口の減少（普通出生率の低下）、有配偶出生率の低下、夫婦の「有子少産」の出生行動の定着化に焦点をあてて考察する。	中野英子（聖泉短期大学教授）	中野英子（聖泉短期大学教授）
6	死亡－長寿化の動向と高齢化問題	人口高齢化をもたらす要因の一つである死亡率（寿命）の趨勢について概観するとともに、死亡率の低下（寿命の伸長）がもたらす影響の問題を日本人のライフサイクル、ライフコースの変動に焦点をあてて考察する。	高橋重郷（国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長）	高橋重郷（国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長）
7	移動－高齢者移動の動向と高齢化問題	日本の人口移動は、若年層を中核としているが、最近、高齢者移動も微増しつつある。このような人口移動の動向をふまえて、移動構造の変化が高齢化にどのような影響を与えているかを浮彫りにする。	山崎光博（秋田県立農業短期大学教授）	山崎光博（秋田県立農業短期大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	家族－核家族化の動向と高齢化問題	日本の人口動向を家族に焦点をあてて検討すると、核家族化の進展という問題が浮彫りになってくる。この核家族化の進展が高齢化問題といかなる関連を有しているかを概観する。	渡辺吉利（国際医療福祉大学教授）	渡辺吉利（国際医療福祉大学教授）
9	労働力－労働力の中・高年化と高齢化問題	寿命の伸長は、高齢期における非労働力期間を長くし、長い高齢期における新しい役割構造が必要となってくるものと思われる。このような動向をふまえて、労働力の中・高年化の問題と高齢化とのかかわりあいを就業行動・労働力の再配分等との関連で考察する。	中野英子	中野英子
10	結婚と出生構造の変化と地域の高齢化問題	日本社会における高齢化問題を地域的な視点でみると、地域によってその現れ方は多様である。そこで、この問題を結婚・出産期女子人口の地域性、出生行動・結婚行動の地域性に焦点をあてて考察する。	同上	同上
11	死亡構造の変化と地域の高齢化問題	人口移動と死亡率低下の地域差は、人口構造（人口高齢化）の地域的多様性をもたらすことになった。このようにして生じた世代間人口の地域的多様性とそれに伴う世代間ギャップの問題を死亡率の動向に焦点をあてて考察する。	高橋重郷	高橋重郷
12	移動構造の変化と地域の高齢化問題	人口移動が地域の高齢化に与える影響の問題を高齢化先行地域と高齢化後発地域に焦点をあてて考察するとともに、そこに内在する問題点を浮彫りにする。	山崎光博	山崎光博
13	家族構造の変化と地域の高齢化問題	日本の核家族化現象を地域的な視点でみると、地域差が存在している。この地域差の問題を日本の家族文化の多様性との関連で明らかにするとともに、核家族化の地域差が地域の高齢化問題とどのように関連しているかを考察する	渡辺吉利	渡辺吉利
14	労働力構造の変化と地域の高齢化問題	労働力構造の変化は、地域の高齢化問題に様々な影響を与えている。そこで、この問題を労働力の中・高年化、女子化と就業構造の地域性、女子の就業行動の変化に焦点をあてて考察する。	中野英子	中野英子
15	高齢化問題とその対応策	人口高齢化の進展は、様々な問題を惹起した。そこで、この問題を解決するために今日までどのような対応策が提示されてきたかを概観し、本講座のむすびとしたい。	清水浩昭	清水浩昭

＝衣・食・住の科学＝（Ｒ）

（主任講師：酒井豊子（放送大学教授）
主任講師：本間博文（放送大学教授））

全体のねらい

衣食住という語が日常生活を代弁する概念として使われるほど、衣服、食物、住居は生活の重要な要素である。ここでは、生活主体としての人と、生活手段としての衣・食・住とのかかわりに関する科学の成果と現状を概観し、物が充足した現代における、生活者の視点に立った人と物のかかわりの科学の課題を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	衣・食・住に関する科学的視点	衣・食・住の生活は、特別な科学的知識がなくても誰でも営むことができる。衣・食・住を科学することには、どういう意味があるのだろうか。この講義への導入として、衣・食・住の科学の意義と目的を考察し、本講義の狙いなどを述べる。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授） 本間博文（放送大学教授）
2	衣・食・住の科学と周辺諸科学	生活事象の研究は、自然科学、社会科学、人文科学の諸領域にわたる多くの科学とかかわり、これらの手法を取り入れながら実生活の認識に立った総合的視点が要求される。衣・食・住の科学の周辺諸科学とのかかわりと独自性について考察する。	本間博文（放送大学教授）	本間博文 酒井豊子 今井悦子（放送大学助教授）
3	食の文化 －歴史学的・比較論的アプローチ－	食生活は、風土、社会構造等に影響されながら連綿と受け継がれてきた。その長い歴史の中で、築かれてきた食の文化について、時間軸（歴史学的）および空間軸（比較論的）を切り口とした研究事例を紹介する。	今井悦子（放送大学助教授）	今井悦子（放送大学助教授）
4	栄養学発展の歴史	人が健康を維持・増進していくためには、第一に必要な栄養が充足されなければならない。ここでは、栄養素および栄養と人の健康との関係についての研究事例を、その進歩を中心に紹介する。	今井悦子	今井悦子
5	食品の科学と技術 －その発展の軌跡－	食品は多様な成分の集合体である。科学の進歩とともに成分バランスを巧みに整え品質を高める技術が次々と誕生した。最近ではバイオテクノロジーを応用した新食品も登場している。研究法を紹介しながら発展の軌跡を辿り、食生活と食品とのかかわりを考える。	荒井総一（元東京大学教授）	荒井総一（元東京大学教授）
6	食生活の構造 －その現状を考える－	戦後のわが国の食生活は、社会の激変に伴って、他国に類を見ないほど著しく変化した。ここでは、社会の構造やその変化と食生活との関係についての研究を紹介し、現代の食生活を考察する。	今井悦子	今井悦子
7	衣服製作の科学と技術	われわれの用いる衣服は既製服がほとんどである。多くの人の体型・サイズに適合した、仕立てのよい既製服の生産には、既製服サイズの整備と縫製工程の高度化が重要なポイントである。この章では、身体計測とパターンメーキングならびに縫製の科学と技術の跡を辿る。	酒井豊子	酒井豊子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	衣服素材の多様化	こり一世紀足らずの間に衣服の素材は種類・量とも飛躍的に増加した。化学繊維は天然繊維模倣の時代から、新しい機能性追究の時代に入っている。時代を追いながらこれらの繊維・繊維製品について理解を深めるとともに、新しい製品開発の方向について概観する。	酒井豊子	酒井豊子
9	服装の心理	衣服は人の外観を構成し、内面を表出する。ここでは、衣服の選択・着装など、衣生活にかかわる人の行動を、着る人のパーソナリティー・価値観・態度などと、社会の慣習・規制、文化水準などとの関係において研究する被服心理学の研究方法・成果などを紹介する。	小林　茂（共立女子大学教授）	酒井豊子
10	洗濯を取りまく科学	洗濯は手洗いから洗濯機へ、洗剤は石けんから合成洗剤主流へと変化した。洗濯は汚れを除去するのが主目的であるが、同時に衣服に損傷をもたらすこともある。洗濯排水の環境問題も無視できない。これらの洗濯にかかわる諸事象について研究の取り組みを紹介する。	酒井豊子	酒井豊子
11	生活科学と住居学	日本の伝統的な住まいは、欧米はもとより中国大陸や朝鮮半島とも異なる独特の様式を生み出して今日に至っている。主に住まいの歴史に関する研究成果の紹介を通して、わが国の住文化の特徴を考える。	本間博文	本間博文
12	高齢社会と住居学	住まいは住生活の容器であるといわれる。この意味で住まいの第一義的機能は、さまざまな外的危険性や不敵切な状況に対し、適切なシェルターを用意することである。構造的安定性、物理的環境調整等、自然科学的手法が住居学にいかに取り入れられているか紹介する。	同　上	同　上
13	住まいの安全性	住まいは家族生活の基礎的な単位空間である。住まいの変化は家族生活の変化によるが、反面住まいが家族生活を規制することもあり得る。このように、住居学は社会科学的方法を取り入れ、さまざまな知見を得ているが、本章はその一端を紹介する。	同　上	同　上
14	快適な住まい	わが国は、生活大国への移行を迫られているが、中でも住宅事情の改善はその中核となるものであろう。しかし、住まいの改善は関連諸分野が複雑に関係し合っており、容易ではない。総合的な判断に基づいた問題解決の実例を紹介する。	同　上	同　上
15	衣・食・住研究の課題	14回までの講義を概観し、衣・食・住の科学の成果と、日常生活に対する位置付けを確認し、生活者の立場に立った研究の今後の課題を考察する。	酒井豊子 本間博文	酒井豊子 本間博文 今井悦子

＝ファッションと生活＝（ＴＶ）

（主任講師：酒井豊子（放送大学教授）
主任講師：藤原康晴（鳴門教育大学教授））

全体のねらい

ファッションは本来、事物の様式を指す語であるが、服装について使われることが多い。これは、衣服・服装に期待される役割の中で、ファッション性の比重がすこぶる大きくなって来たためである。ここでは、服装の演出する役割について整理するとともに、衣生活の諸要素・諸側面と関連産業の実情を検証し、ファッションの意味を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活の中の衣服	衣服・服装の果たす本来的機能の再認識に立って、社会の変化、とりわけ生活水準の変化とともに変化する衣生活のありようと、人々が衣服・服装に期待する機能の変化について考察する。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授）
2	服装の社会規範	服装に関する社会規範を、規範の社会的圧力の強さあるいは追従しない場合に受ける社会的制裁の弱いものから強いものへの順に、習俗、慣習、習律、法律に分類し、それぞれに該当する服装規範を解説する。さらに、これらの服装規範に対する同調と逸脱り制定基準に関する個人差についても言及する。	藤原康晴（鳴門教育大学教授）	藤原康晴（鳴門教育大学教授）
3	社会的役割と服装	社会組織のなかで個人は何らかの社会的役割を担っており、その役割には期待されている服装がある。性役割は男女による服装の違い、職業上の集団員としての役割はユニフォームなどで表現されている。これらの役割及び役割意識と服装との関係について考察する。	同上	同上
4	服装の流行と流行色	服装や服装色には流行がある。これらの流行をその普及の形態あるいは普及の規模によって分類して概説するとともに、過去と情報化の進行した今日における服装流行の様式や普及過程の違いを解説する。また、流行を採用する時期、流行採用の動機についても考察したい。	同上	同上
5	個性と服装	服装はその人自身を表現する手段の一つとして用いられ、質素な人は質素な服装をし、また、こうありたいと思っている自分のイメージを服装で表現していることを実証データを基に解説する。さらに、似合う衣服、似合わない衣服に関して着用者の身体的な特性と衣服の種類との関係から考察する。	同上	同上
6	ライフスタイルと服装	消費者の価値観の量から質への転換に伴い、パーソナリティ、生活意識、趣味などを総合したライフスタイルが多様化、個性化した服装を説明する要因として用いられている。このライフスタイルを用いて衣生活、衣服の購入、着用などを分析した例について解説する。	同上	同上
7	衣服の品質	衣服がその機能を果たすために、衣服に期待される品質にはどのようなものがあるか、それらは、素材の性質などとどのように関連して作り上げられ、実用の過程でどのように維持されていくかなどを考察する。	酒井豊子	酒井豊子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	衣服の表示	既製服等の衣料品に付けられている種々のラベルは、消費者にとって自分の求める品質のものであるかどうかを判断する手がかりとなる。品質表示、サイズ表示などについて、表示のきまりと意味について概説する。	酒井豊子	酒井豊子
9	衣服の素材 1 繊維	衣服に利用されている綿、毛、絹などの天然繊維、レーヨン、ナイロン、ポリエステルなどの化学繊維についてそれぞれの特質を理解し、吸湿性、熱可塑性など、実用上重要な性質について理解を深める。	同上	同上
10	衣服の素材 2 布	布は平面状であるが、複雑な形の人体を包む衣服に用いられる。しかも人体のさまざまな活動に対応する必要がある。布の種類とそれぞれの特質、さらに、それらが衣服の構成上どのように利用されているかを理解する。	同上	同上
11	新しいファッション素材	高度化した消費者要求に対応するために、繊維産業界では、次々と新しい素材開発につとめている。新素材開発の考え方と、最近までのいくつかの製品について解説する。	同上	同上
12	アパレル産業	現在われわれの用いる衣服の大部分は既製服である。既製服の商品企画、生産システムの現状、流通、販売の実状を概観し、既製服としての衣服について理解を深める。	酒井豊子 風間健(武庫川女子大学教授)	風間健(武庫川女子大学教授)
13	衣服の 消費と廃棄	わが国の衣生活の量的レベルは、世界の繊維資源や消費の実状の中でどのように位置づけられるであろうか。統計資料などからわが国の繊維消費について認識を深めるとともに家庭などから排出される衣服の処分方法ならびに廃品衣料のゆくえを探る。	酒井豊子	酒井豊子
14	衣生活の社会化	作る、縫う、洗う、しまうなどの衣生活の諸作業は、既製服、リフォームショップ、商業クリーニング、トランクルームなどにほとんど移行している。これらの実態と意味について考察する。	同上	同上
15	衣生活の 消費者問題	衣料品の消費者苦情や意識調査などに基づき、衣服や衣生活に潜在する問題を探り、消費者としての立場から考察する。	同上	同上

＝洗濯と洗剤の科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部幸子（青山学院女子短期大学教授）〕

全体のねらい

伝統的な技法に代わり、今日の洗剤と洗濯機による洗濯方法が一般化したのはこの半世紀のことであり、近年の科学技術の発展に負うところが大きい。本講座では衣類の洗濯を主題とし、洗剤の特性や洗浄のメカニズムを明らかにすると共に、洗浄力評価法や、実際の洗濯条件、さらには、洗濯と環境との関わりなどについて考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	水と洗濯	大昔から、人は水辺での洗濯を行ってきたが洗濯の方法は軟水地域と硬水地域では異なっていたと思われる。そこでまず、洗濯に及ぼす水質の影響について考察する。また、汚れの成分には各種の物質があるが、汚れ成分と水による除去性について取り上げる。	阿部幸子（青山学院女子短期大学教授）	阿部幸子（青山学院女子短期大学教授）
2	洗剤とは	洗剤は、水による汚れの除去を一層促進するために添加される配合製品で、界面活性剤を主剤に各種のビルダー（アルカリ剤、イオン交換剤など）および補助剤（酵素、再汚染防止剤など）が配合されている。界面活性剤の洗浄作用とビルダー作用について考察する。	藤井富美子（大阪市立大学教授）	藤井富美子（大阪市立大学教授）
3	洗剤作用のメカニズム－１ぬれ	洗濯はぬれることからはじまる。洗浄過程の第１段階であるぬれは、繊維などの基質表面の空気が洗浄液で置き換えられる過程であり、界面自由エネルギーを用いて記述できる。ここでは、ぬれの定義、ぬれの尺度、表面ぬれ、浸透ぬれなどについて述べる。	田川美恵子（奈良女子大学教授）	田川美恵子（奈良女子大学教授）
4	洗剤作用のメカニズム－２分散作用	凝集した状態で付着している汚れを洗剤液中で洗う場合、まず凝集粒子が分散する形で部分的に取り除かれ、最後の段階で繊維に直接付着している粒子が除去されることが多い。この過程を、広義の分散現象としてとらえ、コロイド安定性理論によって説明する。	同上	同上
5	洗剤作用のメカニズム－３乳化	人体皮脂を主体とする油汚れで汚染された衣類を洗剤水溶液に浸すと、界面活性剤の吸着により油汚れと水との界面張力が低下し、僅かな機械力で油汚れは微粒子になり水中に分散除去される。この現象を乳化とよび、乳化が有効に生ずる条件について考察する。	藤井富美子	藤井富美子
6	泡沫と洗浄	洗剤水溶液中での気泡は、汚れの除去には寄与しないが、洗剤の洗浄力の有無を判定する一つの目安となる。気泡の集積である泡沫は、シャンプーやカーペットの洗浄のほか、工業的に古紙の再生に利用されている。生活におけるさまざまな泡沫の効用について述べる。	同上	同上
7	洗浄における酵素の作用	洗剤には、タンパク質分解酵素、脂質分解酵素、でんぷん分解酵素、繊維素分解酵素などが複合配合されており、それぞれの酵素の基質になる汚れに作用して、汚れを除去されやすい状態に変化させる。そのメカニズムと効果について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	汚れ除去と漂白・増白	しみ汚れや黄ばみなどは、洗剤の界面化学的な働きによっては除去されない。色素を除去するには漂白剤を、黄ばみの除去には蛍光増白剤が用いられ、これらが洗剤中に配合されている場合も多い。漂白や増白の原理、効果的な処理方法等について述べる。	片山倫子(東京家政大学教授)	片山倫子(東京家政大学教授)
9	汚れ除去と機械作用	一般に、洗浄においては、汚れの付着力を低下させるために洗浄剤を添加し、さらに攪拌などにより物理的な力が加えられる。洗濯液の流動や、布地の変形・衝撃力などさまざまな形での機械力が考えられるが、代表的なものを取り上げ概説する。	田川美恵子	田川美恵子
10	洗浄力の評価	洗剤をどのように使ったらよいのか、例えば洗剤濃度や洗浄温度などを知る、あるいは洗剤を選びたい、などの場合に洗浄力評価が必要になる。いくつかの方法が考えられているが万能なものはない。洗浄力試験の考え方と試験法の現状について述べる。	阿部幸子	阿部幸子
11	洗濯の方法	伝統的な洗濯の方法には、たたく、踏むなどの操作を行うものや、煮洗いなどがあり、これらの方法の合理性について検証された研究がある。また、今日では洗濯機が普及し、新しいタイプのものも開発されているが、これらの特徴について概説する。	同上	同上
12	洗濯の条件	洗濯では、洗濯物の量を基準にして水の量を決め、水量に対して洗剤の投入量が決まる。洗剤には標準使用量が表示されているが、コンパクト化が進むにつれて使用量が少なくなってきている。洗剤濃度や洗浄温度などの洗濯条件はどのようにして決めるのだろうか。	同上	同上
13	すすぎと脱液	すすぎによって除去すべき物質は、洗濯物から離脱した汚れと、洗剤とである。ここではすすぎのメカニズムについて述べる。また、脱液の必要性やその効果的な方法についても概説する。	同上	同上
14	乾燥	洗濯物の乾燥には、自然乾燥と人工乾燥とがあるが、いずれの場合にも、乾燥時間は水分の量、温度、湿度、風速、洗濯物の表面積に依存する。衣類乾燥機による各種繊維製品の乾燥例をもとに、乾燥のメカニズム、乾燥方法とエネルギー効率などについて考える。	片山倫子	片山倫子
15	洗濯と環境問題	近年、生活排水による水質汚濁が問題になっているが、洗濯排水については、洗剤による汚濁負荷量、界面活性剤の生分解性や水棲生物に対する安全性などが問題となる。これら環境にかかわる問題点を取り上げ、これからの洗剤と洗濯のあり方について考える。	阿部幸子	阿部幸子

＝着心地の追究＝（ＴＶ）

（主任講師：丹羽雅子（奈良女子大学長））
（主任講師：酒井豊子（放送大学教授））

全体のねらい

健康で快適な衣生活を実現・維持する上に重要な要素である衣服・寝具・履き物などの着心地について、衣服の構成・構造や、素材の性能についての認識と人体の体型・寸法や感覚・生理の理解に基づいて科学的に追求し、着心地のよさを人間と衣服の感覚的適合と生理的適合の両面から明確にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	着心地のよさとは	着心地とは何か。衣服に期待されるさまざまな機能における着心地の位置づけを考察し、着心地を追求する科学の範囲と内容を概観する。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授）
2	衣服と人体生理	人体生理の基本は恒常性と概日リズムである。着心地を客観的に判断する基準として、これらの生体の機能が種々の着装下で正常に作動しているかどうかを観察することの重要性について解説し、これらの立場から人体生理と被服の関係を論ずる。	登倉尋實（奈良女子大学教授）	登倉尋實（奈良女子大学教授）
3	運動条件、外部環境条件	着心地への影響要因として、人間の活動状態と室内および屋外の外部環境条件を取り上げ、着衣の快適性への影響を人体の体温、皮膚温、快適感などの人体反応からさぐる。主に、運動時における温度、湿度、日射、風などの着心地に及ぼす影響をみる。	磯田則生（奈良女子大学教授）	磯田則生（奈良女子大学教授）
4	布の熱・水分移動特性と着心地	着心地を左右する衣服そのものについて、衣服の構造、衣服材料の諸性質と着心地との関係について解説する。まず、温熱的な着心地をとりあげ、暖かさ、涼しさに関わる衣服を通しての熱・水分移動特性、通気性と衣服の構造について群述する。	丹羽雅子（奈良女子大学長）	丹羽雅子（奈良女子大学長）
5	体温調節と衣服	着心地のよさを人間の温熱生理的適合性の視点から検討する。その基礎として、ヒトの体温調節の仕組み、特に温冷感受性、皮膚温調節、発汗調節などが人体の部位によってどのように異なるかに注目しながら、衣服による衣服内気候の形成、環境への適応を解説。	田村照子（文化女子大学長）	田村照子（文化女子大学長）
6	冬暖かく、夏涼しく	衣服による保温と放熱の機構を考察し、暑熱・寒冷環境下での快適な着心地について、さらに特殊環境下での衣服の着心地についても人体シュミレーションを通して問題点を明らかにし、その解決方法への試みを紹介する。	同上	同上
7	布の力学物性と着やすさ	温熱的な着心地と並んで、被服材料の柔らかさ、しなやかさ、ソフトさなど触感にもたらす着心地と、変形のしやすさによる運動、動作適応性、美しい曲面形成性、形態保持性など、いずれも材料の力学物性と着心地が大きく関わることについて考察する。	丹羽雅子	丹羽雅子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	肌ざわりのよさと風合い	人間と触れて使われるものの典型は衣服である。これらの本質的性能は、肌触り、風合いなどの人間の感性との適合である。ここでは、接触冷温感を含む肌ざわりのよさと、その着心地、手触りによる感性性能の評価について解説する。	丹羽雅子	丹羽雅子
9	衣服のシルエットの美しさ	計算機を用いて着衣形態や衣服圧を予測することができる。型紙、材料物性、人体計状と着衣形態との物理的関係、着衣形態と美しさや着心地との心理的関係を探る手段として、この予測法の有用性と限界について述べる。	今岡春樹(奈良女子大学助教授)	今岡春樹(奈良女子大学助教授)
10	動作しやすさと着やすさ	様々な動作によって体表は伸縮する。この皮膚伸びに追従して身体を包むために、衣服のゆとり量と衣服による人体拘束との関係、および、衣服を着て快適と感じる衣服圧レベルと素材の特性について考える。	伊藤紀子(鳥取大学教授)	伊藤紀子(鳥取大学教授)
11	衣服と身体寸法	個人の身体寸法に適合した着心地のよい衣服を提供するために、体型を総合的に正しく把握する方法および国際的標準化を目指して定められた既製服サイズのＪＩＳ規格について解説する。	同上	同上
12	着心地の耐久性	着用、洗濯を繰り返すと、衣服は疲労し、寸法変化、風合い変化をもたらす。この疲労現象の機構を考察し、着用・洗濯による衣服の型くずれ、疲労回復のための洗濯、風合い耐久性のための柔軟処理と着心地の保持性との関係などについて論じる。	丹羽雅子	丹羽雅子
13	寝心地のよい寝具	寝衣や寝具の快適性は、人間の眠りの質を左右し、健康と深く関わる。本章では、睡眠の意義、脳波その他の生理反応による眠りの質の観察、寝衣・寝具の役割について述べ、保温、透湿、体圧分布などの面から寝心地のよい寝具の条件について考察する。	田村照子	田村照子
14	快適な履物	履き物の快適性には、歩行補助道具としての機能性と、蒸れや保温性など温熱通気性が挙げられる。そこで、解放性履き物、閉塞性履き物などのタイプ別に、両観点から実験データをもとに解説する。	真家和生(大妻女子大学短期大学部助教授)	真家和生(大妻女子大学短期大学部助教授)
15	着心地追究の課題	１４章までを概観しつつ補足すべき事項についてまとめ、また一層着心地のよい衣服あるいは環境づくりに向けての課題を考察する。	丹羽雅子 酒井豊子	丹羽雅子 酒井豊子

＝食生活の成立と展開＝（Ｒ）

〔主任講師：石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）〕

全体のねらい

わが国において営まれる食生活は、気候、風土、産物と、現代にいたる各時代の政治、経済、社会または思想的事象とが深く関わり合いながら形成・発展してきた。

本講では、こうしたプロセスを把握し、これを構築してきた先人の知恵と努力と実践の究明を通して、わが国の食文化と食生活の今後のあり方を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食生活の変遷を学ぶ	食生活の変遷を学ぶにあたって、まず最初に「食生活」についての理解として、その構成因子とそれらの相互関係について解説し、変化、変容、発展等、食生活の移り変わりの捉え方、その特徴、それがもたらす影響など、考察の視点について講述する。	石川寛子（武蔵野女子大学教授）	石川寛子（武蔵野女子大学教授）
2	日本の自然と食(1) 山と海の幸	はるかな古代より、優れた食素材を創り育んできた食のあり様を日本の自然との関わりについて次の項目に区分して探ってみたい。 1.木の実の採集から稲の栽培へ 2.野菜の伝来と定着 3.漁場と魚食料理	畑　明美（くらしき作陽大学教授）	畑　明美（くらしき作陽大学教授）
3	日本の自然と食(2) 多雨多湿の恵み	日本列島は夏期の降雨量が多い。平野部が狭く河川は急で澱まない。また、酸性土壌による水の低硬度などのため、水を多用する食品の発達を促した。また温帯で多湿なため酒、調味料など、独特の発酵食品を多く生み出した。	和仁皓明（東亜大学教授）	和仁皓明（東亜大学教授）
4	異文化接触と受容(1) 大陸文化	日本人が現代まで継続して常食としている穀類や蔬菜類は、古墳時代頃までに大陸からの渡来民によってもたらされたものが多い。その際、その食料に宗教や作法などの実存的記号を伴っていたので、食の思想が定着した。	同上	同上
5	異文化接触と受容(2) 南蛮文化	ポルトガル人の種子島漂着を契機として始まった南蛮諸国との交易・交流によってもたらされたさまざまな新しい食品を解説し、これによってわが国の食生活がどのように変容していったかについて、砂糖と香辛料を中心に講述する。	石川寛子	石川寛子
6	異文化接触と受容(3) 欧米文化	江戸時代も末となって、建前として永続してきた肉食禁忌も、洋学生あたりから崩壊しはじめた。それと共に欧米文化の圧倒的な勢いが食生活をも巻き込み、明治の牛鍋屋と西洋料理店を生み出した。このような肉食文化受容の過程を資料に即して考えたい。	前坊　洋（上野学園大学教授）	前坊　洋（上野学園大学教授）
7	食品の調達と入手	食品の調達は、狩猟、漁労の採取から稲、麦などの栽培へ進むことにより比較的容易になった。やがて食品の交換の場として市が成立し、日常的にその入手が可能となった。これらの経緯を次の項目によって解説したい。 1.市場・店の発達 2.食品の旬	畑　明美	畑　明美

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	食事の成立と形態	食欲のままに、また生命維持のためだけの食物摂取行動の中から、一定のルールにもとづく「食事」が成立していく過程を考察し、食事の意義や「食物摂取」と「食事」の相違、さらにわが国におけるさまざまな食事の形態について解説する。	石川寛子	石川寛子
9	料理様式の形成	平安時代の大饗料理以来、わが国では精進・本膳・懐石・会席料理など、供応のための料理様式を生み出し、江戸時代は日本料理の完成期といわれている。まず各様式の特徴と成立過程を解説し、さらに外来の料理様式である卓袱料理などと比較検討してみたい。	今田節子(ノートルダム清心女子大学教授)	今田節子(ノートルダム清心女子大学教授)
10	行事食の意義と変容	行事食とは日常食に対し年中行事や人生儀礼など特定の日の食事を指す。古来より行事には神仏を迎え普段とは異なる食物を供え、人と神が共食する習慣があった。本章では行事食の意義を探ると共に、社会状況の変化を考慮しながら行事食の日常化について考える。	同上	同上
11	非常の食と工夫	人々の命をおびやかしてきた飢饉と戦争の2つの非常事態を取り上げ、その中でどのような食生活が営まれ、食物の獲得のためにどのような努力・工夫が行われたかを各時代による食糧増産政策、食品加工・調理上の工夫などから探る。	江原絢子(東京家政大学教授)	江原絢子(東京家政大学教授)
12	食養生と人々の知恵	近代科学が取り入れられる以前の食生活のあり方、各時代の社会や人々にどのように伝えられ、発展していったのであろうか。ここでは健康と食生活との関わり方とさまざまな料理や調理法を中心にしながらその伝承の方法と内容について述べる。	同上	同上
13	近代科学と食物教育	明治維新以降、栄養・食品学などの分野に近代科学を取り入れた食物教育は、まず近代学校において急速に浸透し、経験的伝承方法が軽視・排除されていった。いくつかの例を挙げながらこうした教育が浸透・変化していく過程を探っていく。	同上	同上
14	外国人のみた食生活	16世紀のイエズス会宣教師来日以降、鎖国期にもオランダ人等が、また幕末には軍人や外交官等が、そして明治になるとお雇い外国人や旅行者等がやってきて、日本の食生活を記録した。それらの中から興味深いものを選んで解説する。	前坊洋	前坊洋
15	食生活の現状と今後	より望ましい食生活のために、数多くの人々の知恵と努力と実践が積み上げた現代社会の食生活を通して、わが国の食文化とその特色について考察し、さらに国際化等、今後、よりはげしく変動・変容する社会の中での食生活の形態やそのあり方を探る。	石川寛子	石川寛子 畑明美 和仁皓明

＝ 食物の特性とその役割 ＝ （ＴＶ）

（主任講師：五十嵐脩（お茶の水女子大学教授）
主任講師：今井悦子（放送大学助教授））

全体のねらい

つい数十年前までの長い間、わが国の多くの人々は生きるために必要な食物でさえ十分ではなかった。しかし今食物は溢れ、それとともに不適切な食物摂取によるところの健康上の諸問題も起きている。そこで、健康を保ち心身ともに豊かな生活を営むために必要な食生活に関する知識の修得を目的としてこの科目を開設する。すなわち食物中の栄養素とその消化吸収、人体に果たす役割についての基礎知識と、食物摂取と健康との関わり、望ましい食生活等について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食生活の現状	経済の発展に基づく社会の変動や食品産業の発展は、多種多様な食品を市場に溢れさせ、日本人の体格向上や健康増進に貢献し、日本を世界一の長寿国にした。また同時に食に対する人々の考え方をも多様化させ、食生活を大きく変革させた。今、私たちは豊かな食生活を享受し、その一方で食物の過剰摂取等による健康障害に不安を抱いている。このような食生活の現状を多方面から明らかにする。	五十嵐　脩（お茶の水女子大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）	五十嵐　脩（お茶の水女子大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）
2	炭水化物と食物繊維	日本人は、主食とする穀類より栄養素の中では量的にもっとも多くの炭水化物を摂取しているが、炭水化物はこの30年でもっとも摂取量の減少した栄養素でもある。炭水化物について、その種類と消化、吸収、代謝等を解説する。また、非栄養素ではあるが、健康とのかかわりで注目されている食物繊維の多くは炭水化物（多糖）である。その食物繊維についても説明する。	今井悦子	今井悦子
3	脂質の特性と役割	炭水化物と相反してもっとも摂取量の増加した栄養素は脂質である。現在、健康という視点から摂取量の過多傾向が問題となっている栄養素であり、また一方で新しい生体調節機能の発現も期待され注目されている栄養素でもある。脂質の特性と役割について広い視野から論じる。	五十嵐　脩	五十嵐　脩
4	たんぱく質とアミノ酸	人体の主要組織はたんぱく質を中心にして構成されている。したがって、食物たんぱく質の摂取は栄養上非常に重要である。たんぱく質とそれを構成する20種類のアミノ酸、、たんぱく質の栄養価、脂質と同様に新しい生体調節機能が見出されているペプチド等について解説する。	今井悦子	今井悦子
5	ミネラルと水	今日本人には明らかに数種のミネラルが不足していることが指摘されており、さらに精製した食品の摂取の増加とともに微量元素の不足が懸念されている。多種類あるミネラルの、体内での様々な働きと、次第に明らかになってきた微量元素の働きや、ミネラルの吸収、利用に関与する要因等も解説する。	五島孜郎（東京農業大学名誉教授）	五島孜郎（東京農業大学名誉教授）
6	ビタミンの役割	ビタミンは、生体内の代謝を含む様々な生理現象に潤滑油的な働きをしており、微量で人の栄養を支配する栄養素である。近年、いくつかのビタミンが健康や老化との関係で注目されている。主なビタミンの働きや、健康や老化に関する新しい研究の成果を解説する。	五十嵐　脩	五十嵐　脩
7	栄養所要量と食品構成	前章までに解説した各栄養素を毎日どれくらい摂取すればよいかの目標が、日本人の栄養所要量である。栄養所要量策定の変遷は日本人の食生活の変化を物語っている。ここでは、栄養所要量の解説と、その栄養所要量を満たすための食品構成、栄養所要量に関連して配慮されている運動量の目安を解説する。	小林修平（国立健康・栄養研究所所長）	小林修平（国立健康・栄養研究所所長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	食物と健康総論	人はそれぞれ遺伝素因が違っており、食物摂取に対する反応は一様ではない。ライフステージ別に身体の必要とする栄養素量は異なり、健康を維持するための食物の摂取には個体側の諸要因を考慮に入れる必要がある。必須栄養素は不足すると疾病を引き起こすが、過剰であっても中毒症など傷害をもたらす。疾病を予防し健康を維持するためには、栄養アセスメントを行い、適切な食物の組合せと摂取量を決めていかなければならない。	板倉弘重（国立健康・栄養研究所特別研究員）	板倉弘重（国立健康・栄養研究所特別研究員）
9	食物とがん	発がんは長い時間をかけて、多段階を経て進行する複雑なプロセスである。幾重にも張り巡らされた防御反応をくぐり抜けてがんが成立する過程で、外的環境因子が、がん遺伝子、がん制御遺伝子などに与える影響が大きな役割を演じている。この環境因子のうちで、食物および嗜好品の占める意味が大きい。食物と嗜好品を中心とした外的環境因子の立場から、がんの予防について論じる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
10	食物と糖尿病	人類の歴史は多かれ少なかれ常に飢餓に悩まされてきた。この飢餓に強い素質が、現在のわが国のような生活環境では糖尿病を起こす素質となる。糖尿病との関連で問題となるのは、総エネルギー摂取量のみではなく、糖質、たんぱく質、脂質の割合も重視することが必要で、さらに慢性糖尿病合併症防止のため、コレステロール、塩類等の摂取量もコントロールしなければならない。このようにすべての食行為が糖尿病の発生、治療にむすびついている。	金沢康徳（自治医科大学教授）	金沢康徳（自治医科大学教授）
11	食物と高血圧および心疾患	食物摂取のあり方は、特に高血圧症および心疾患にとって、その非薬物治療法の重要な部分を占めている。現在日本人の大きな死因となり、かつ一次性（本態性）、二次性高血圧症とも不可分の関係にあるアテローム性動脈硬化症を基盤とする心臓血管疾患と合併症を中心に、その予防ならびに治療にどのような栄養素がどの程度必要なのか、あるいは進んで摂取すべき食品などを各疾患の病態生理に基づいて述べる。	木下安弘（千葉大学名誉教授）	木下安弘（千葉大学名誉教授）
12	食物の安全性	日常使用する食品の数十％以上が加工食品であり、輸入される生鮮および加工食品も多いわが国では、今食物の安全性はもっとも関心のあるテーマの一つである。国内外の各種の食品規格の解説と、食品添加物、残留農薬、ホストハーベスト、新しい技術による食品素材等について、現状と功罪、安全性の考え方について述べる。	五十嵐脩	五十嵐脩
13	食物のおいしさ	食物は、まず安全であり、栄養が考慮されたものである必要がある。さらに、人の嗜好を満足させるものであることも重要である。おいしさに関与する要因のうち食品の色、味、香り、テクスチャーを中心に、その他おいしくするための操作等について解説する。	今井悦子	今井悦子
14	食事計画	前章までの知識を総括して、栄養、安全、おいしさ、そして人の健康を考慮した食事計画を解説する。さらに実際の食事計画例をもとに、いろいろな観点からの点検と改善方法をデモンストレーションする。	岡崎光子（女子栄養短期大学教授）	岡崎光子（女子栄養短期大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	食生活と健康	健康で長寿を全うするためには、どのような食生活をおくったらよいのであろうか。今私たちにできることは何であろうか。前章までの知識をもとに、過去から現在までの様々な体験、研究成果をも併せて一緒に考えたい。	五十嵐　脩 今井悦子	五十嵐　脩 今井悦子

＝ 調理とおいしさの科学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：島田淳子（お茶の水女子大学教授）〕
〔主任講師：今井悦子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

食物摂取は人の生命維持に必須であるとともに、潤いや満足感をもたらす生活の営みである。満足感に大きく関わるのはおいしさであり、おいしさを創造するのに必要不可欠な工程が調理である。ではおいしさとは何か。調理中の食材の変化とおいしさはどのように関わっているのか。この講義では、これらに関する科学の基礎と最新の研究成果を、さまざまな切り口から解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	調理とおいしさの科学	地球上ではさまざまな民族が日々さまざまな調理をしている。調理操作や調理による食材の変化には全世界に共通する普遍性があるが、でき上がった料理とそのおいしさは文化圏によって大きく異なる。調理学は、文化としての調理とおいしさを、自然科学、感覚心理学など多彩な学問を駆使して科学する、新しく学際的な学問であり、本章では調理学の最新の成果を取り入れたこの講義の特徴を総括する。	島田淳子（お茶の水女子大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）	島田淳子（お茶の水女子大学教授） 今井悦子（放送大学助教授）
2	おいしさの構造と官能評価	人は、感覚器官の全てを動員して食物からの情報を脳に送り、そこで心理状態、生理状態、記憶等を統合しておいしさを評価する。おいしさを感じる複雑なメカニズム、おいしさの表現、人を測定機器としておいしさを総合評価する官能検査の実際などについて解説する。	今井悦子	今井悦子
3	味の科学の最先端	おいしさの中心となる味。味覚情報はどのように脳に伝達されるか、味の嗜好と人種や民族とは関係があるのか、味の嗜好と人が生存するために必要な栄養摂取とは関係があるのかなど、食行動に大きく影響する味の科学について最新の研究成果を中心に解説する。	鳥居邦夫（味の素中央研究所基礎研究所主席研究員）	鳥居邦夫（味の素中央研究所基礎研究所主席研究員） 島田淳子
4	テクスチャーの探求	口ざわり、舌ざわり、噛みごたえ、のどごしなどさまざまなことばで表現されるテクスチャーは味とともにおいしさに大きく関与する。テクスチャーの制御は、調理操作のポイソトの一つであるといえる。複雑なテクスチヤーとその実態に迫ろうとする機器評価の試み、そしてその成果を解説する。	今井悦子	今井悦子
5	伝統技術とその科学 －うま味を引き出す日本人の知恵－	おいしく調理するために人類はさまざまな技術を育ててきた。そして今、これらの伝統技術に隠された合理性が科学の光によって照らし出されている。世界語となった“ＵＭＡＭＩ”の発見、うま味を引き出す日本の伝統技術の科学を中心に解説する。	下村道子（大妻女子大学教授）	下村道子（大妻女子大学教授） 島田淳子
6	米 －粘りにこだわる日本人－	米は、日本人の食生活においてもっとも基本となる食材である。ジャポニカ種の米でふっくらと炊きあげたご飯のもつ粘りは、日本人が共有するおいしさであるが、地球レベルでみるとこれをおいしいと感じる民族は少数派に属する。このおいしさを創り出すために必要な米の性質と調理条件に関する研究成果を解説する。	島田淳子	島田淳子
7	小麦粉 －多様な料理を生み出す穀物の魔術師－	小麦粉から作られる料理の種類の多さとテクスチャーの多様性は、他の穀物の追随を許さない。この秘密はユニークなたんぱく質グルテンにある。グルテンを中心とする小麦粉調理の最新の科学について解説する。	島田淳子	島田淳子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	魚・畜肉 －複雑なおいしさをもつ食卓の主役－	たんぱく質源として、伝統的に日本人の食卓で主役を果たしてきた魚と、現代の食生活の中で一躍トップに踊り出てきた畜肉。おいしさの秘密は共に複雑なうま味と独特のテクスチャーである。うま味を引き出し、テクスチャーを制御する調理のコツを科学する。	下村道子	下村道子 今井悦子
9	卵 －優れた多機能食材－	生では液体で、加熱により固体に変化する性質は卵独特のものである。また、卵白は優れた起泡剤、卵黄は優れた乳化剤とそれぞれ異なる機能をも合わせもつ。これら多様な機能を利用した卵料理の基礎にあるさまざまな科学を解説する。	今井悦子	今井悦子
10	野菜 －期待される生理機能と鮮度－	野菜は昔から、食卓に彩りを添える脇役として欠くことのできない食材である。近年、野菜中のビタミンや食物繊維の生体に果たす機能が見直され、注目されるようになった。野菜の保存および調理による変化にスポットをあてて解説する。	畑江敬子(お茶の水女子大学助教授)	畑江敬子(お茶の水女子大学助教授) 今井悦子
11	砂糖 －知られていない多彩な機能－	調理における砂糖の主要な役割は、甘味を付与する調味料としての働きであり、またその親水性の高さを利用した保存料としての働きである。さらに、砂糖は加熱の程度により様々に様態を変え、視覚的なおいしさに寄与している。このような砂糖のもつ多彩な機能の科学について解説する。	今井悦子	今井悦子
12	加熱の原理とおいしさの決め手	加熱は調理の主要操作であり、加熱の方法により仕上がった料理のもつ性質は全く異なったものになる。各種加熱の原理を分子レベルで解説し、おいしさとの関わりや最近話題の遠赤外の効果などについて最新の研究成果を紹介する。	飯淵貞明(和洋女子大学教授)	飯淵貞明(和洋女子大学教授) 今井悦子
13	調理のもう1つの担い手 －調理器具－	調理の担い手は人である。そして、欠くことのできないもう一つの担い手が調理器具である。古くから調理の必需品であった包丁、一方最新の電化製品、電子レンジや多機能を売り物にした炊飯器などの理論と構造、また、調理器具の材質の違いがおいしさにおよぼす影響などを解説する。	同上	同上
14	現代の食生活の担い手 －新食品をどう利用するか－	この数十年の間に日本の食は大きく変化し、加熱するだけで食べられる食品が簡単に入手できるようになった。新しい食材や最新の調理加工技術等について、また、日本人の食卓にどのようなものがどのような経路で登場するかを解説する。さらにこれらの賢い利用法を考える。	田村真八郎(農林漁業金融公庫技術参与)	田村真八郎(農林漁業金融公庫技術参与) 今井悦子
15	調理とおいしさを考える -未来への課題-	21世紀へ向けて世界は一層変化し、生活の利便性や快適性はさらに向上しつつある。しかし一方において、人類と地球環境の共生の危機が叫ばれている。このような中での食に関する研究を紹介し、生活者の立場から、未来への課題について考えてみる。	島田淳子 今井悦子	島田淳子 今井悦子

＝食生活の現代的課題＝（Ｒ）

〔主任講師：豊川裕之（㈶循環器学研究振興財団理事）〕

全体のねらい

食生活は健康を左右する要因であり、かつ、日常生活（衣食住）を構成する重要な人間行動である。しかし、日常的行動であるために、科学研究の対象としてよりは、趣味・娯楽の対象でありがちだった。最近、ようやく食生活を学問として集大成する動きが始まっており、本教科目でも、その立場から食生活の現代的課題を教授する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食生活と文化	いろんなことが激しく変動している現代において、食生活も例外ではない。食生活は文化－自然環境に対して人間が造った環境－と密接にかかわっている。そのことを総論的に述べる。	豊川裕之（㈶循環器学研究振興財団理事）	豊川裕之（㈶循環器学研究振興財団理事）
2	食生活の変化	人間は工夫・努力をする動物であるから、食生活も常に変化してきた。急激な変化が起こるのは食糧の供給法が変わる場合である。現代日本の食生活変化は50年前の敗戦後、貿易立国を推進したのが大きな理由である。	田村真八郎（農林漁業金融公庫技術参与）	田村真八郎（農林漁業金融公庫技術参与）
3	国際化の中の食生活	日本は狭い国土にかなり大きい 1.2億人の人口をかかえており、豊かな食生活のためには食糧の輸入をせざるを得ない。貿易立国という形で国際的に食糧を買うことにより現代日本の食生活が成立しているのである。	同上	同上
4	食生活の伝承と変化	文化の伝承は貴族社会から庶民社会への流れを持ち、食生活についてのそれは「ハレ」から「ケ」へと進む中でおきている。変化は「流れ」と「進み」の中でおきており、食生活を多彩にし、選別してきた。	熊倉功夫（国立民族学博物館長）	熊倉功夫（国立民族学博物館長）
5	食品をめぐる付加価値の変化－「遊び」としての食－	現代の食生活では、一見して伝承よりも変化が目立つが、その中で綿々と続いているのが遊びごころといえる。手抜き、健康志向、高級品好み、エスニック流行りなどがあるが、その中の遊びごころを取り上げる。	同上	同上
6	台所（厨房）の変化	うす暗い台所から明るいキッチンへの変貌の歴史。家庭電化機器登場の意味。主婦の台所からみんなで調理へ。個食からホームパーティまで、食べ方の変化と台所。食品調理工場と家庭の台所との役割分担から台所未来論へ。	山口昌伴（㈱GK道具学研究所所長）	山口昌伴（㈱GK道具学研究所所長）
7	日本人の食物摂取のくせ	「なくて七くせ」といわれるように、わたし達の食物消費の仕方にもくせがある。そのくせと病気との関連を説明する。これらを知って自分の食生活を見直すことができることを期待する。	豊川裕之	豊川裕之

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	食品流通機構の変化・多様化	食に関する健康ニーズ、手軽さニーズ、楽しみニーズが益々強まっている。生活者の変化が食の形態を内食、中食、外食各分野に多様化をもたらしている。これに応える企業側の対応が流通機構の大きな変革を促している。	山口貴久男（㈱生活行動研究所代表取締役社長）	山口貴久男（㈱生活行動研究所代表取締役社長）
9	学校給食とその役割と課題	飽食の中で、食事内容の偏りが見られる。一日一食である学校給食は児童生徒にとって重要な教育活動の場であり、生涯を通じて健康な生活を送るための基礎を培う上で多様な教育効果を持つ学校給食として期待している。	川戸喜美枝（宮城教育大学非常勤講師）	川戸喜美枝（宮城教育大学非常勤講師）
10	子どもたちの食生態	子どもたちの食をめぐる問題点が多々指摘されている。子どもたちにとってのぞましい。子どもらしい食生活とは何か。どうとらえ、どの方向に教育や環境づくりをすすめたらよいかなどについて、食生態学、国際栄養学の立場から問題提起したい。	足立巳幸（女子栄養大学教授）	足立巳幸（女子栄養大学教授）
11	マスメディアと食の情報	◆新聞、雑誌、テレビなどがこれまで「食」をどう位置づけ、どう報道してきたか、の歴史をたどり、◆現在高度メディア社会での、「食の情報」の機能と結果を見つめて、◆食生活ジャーナリズムにとっての課題を問い直す。	村上紀子（女子栄養大学教授）	村上紀子（女子栄養大学教授）
12	高齢社会における食の問題 －福祉と医療－	身体的、社会的そして心理的に様々なハンディキャップを抱えた人達が増加した高齢社会では、日常生活における食のあり方に対する期待も大きく変わりつつあり、いま、新たな食の概念の確立とその転換が望まれている。	藤田美明（東京都老人総合研究所栄養学部門室長）	藤田美明（東京都老人総合研究所栄養学部門室長）
13	食品衛生 －安全性と サービス－	今日、食品を取り扱う者が、食品衛生を知らずしてその業務に携わることは許されない。食品衛生は食品の安全性を主領域とする科学で、同時に健常性、有益性との密接な相互関係を持つ。だから食品衛生の役割は食品の保全管理システムの確立に主力が注がれている。	倉田浩（㈶東京顕微鏡院食品衛生検査所所長）	倉田浩（㈶東京顕微鏡院食品衛生検査所所長）
14	食生活とゴミ処理	食生活の変化がゴミ処理に影響を及ぼしている。ゴミは何故発生するのか、発生源ではどんな対応が求められているのか、食生活とゴミの量や質に与える影響、ゴミ問題解決の手段、および家庭から排出されたゴミの処理の実態などについても解説する。	田中勝（国立公衆衛生院廃棄物工学部部長）	田中勝（国立公衆衛生院廃棄物工学部部長）
15	食生活と健康づくり	「健康づくりのための食生活指針」（厚生省）の基本から係わっている者として、現代において食生活を、健康によいように営むための考え方について説明する。	豊川裕之	豊川裕之

＝住まい学入門（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

住居は生活空間つまり物体であり、住み手の生命の安全を保障し、外部の自然を調整し人間の生存に適当な環境を創り、家族生活の基盤としての役割を果たし、生命の生産そして再生産の中核となる場を提供してくれる。一方居住とは人間が生活空間を媒体として展開する行為の総体であり、空間との関係において成立する。「住まい学」は、物（住空間）と人（行為）とを有機体のような不可分の関係として対象化しようとするもので、本講義では住むことの意味と課題、そして今後の展望について様々な角度から概観しようとするものである。併せて放送大学の住居関連科目の入門科目として構成されている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	住まい学のめざすもの	本講義の目的、対象、視点、範囲について概説し、「住まい学」と名づけた本講義の狙いについて解説する。	本間博文（放送大学教授）	本間博文（放送大学教授）
2	和風と洋風	明治以後の欧米の住まい（洋風）がわが国の住まいにいかなる影響を与えたか、それに対して日本の住まい（和風）の伝統がどのように受け継がれたか。現代の日本の住まいの特徴、そして今後の動向を予測するために、異なった文化的な土壌のもとで形成された二つの住文化と現代の住まいとの関係を考える。	内田青蔵（文化女子大学教授）	内田青蔵（文化女子大学教授）
3	和風の系譜	我々が和風の住まいとしてイメージする住宅の様式が確立するのはそれほど古いことではない。せいぜい江戸時代後半のことである。それ以前の日本人の住まいは、それぞれの時代にいかなる様式で、どのような過程を経て今日のような形に移行したのかを概説する。	同上	同上
4	洋風の系譜	幕末から明治初頭にかけて居留地を中心に建設されたいわゆる「洋館」は、わが国の住宅に様々な影響を与えた。幾多の紆余曲折を経て昭和初頭に「中廊下式住宅」と呼ばれる都市の中流階層の新しい住宅様式として定着することになるが、その間の経緯を概観する。	同上	同上
5	現代の住まい	わが国の現代の住まいはどのように特徴づけられるのだろう。第二次大戦後の新しい民法に保証された近代的な家族制度のもとで、それに見合う住空間の模索が盛んに試みられ、昭和30年前後に「公私室型住宅」として確立する。そして今日まで基本的にはこの型を受け継ぎながら、様々な変化も認められる。現代の住まいについて考察する。	同上	同上
6	規模算定と空間の組み立て	家族生活の場としての住居は、家族の様々な行動を保証するための適正な空間が用意されなければならない。政策として提案された住宅の規模に関する指標を検討し、適正規模を算定するための試案を提示する。	本間博文	本間博文
7	生活と平面図	子供の空間、あるいは老人室などの領域などが住空間の中でどのように扱われているのか、あるいは変化しつつあるか。住宅誌に掲載された平面型などを参照しながら家族生活と居住空間との関係を分析する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	集合の住まい	今やマンション、公営住宅などの集合住宅は都市部を中心としてごく一般的な居住形態として日本の社会に定着している。同時に集合の住まいが抱える様々な課題も顕在化しつつある一方で課題解決のための新しい集住空間も提案されている。こういった集合の住まいに関する最近の動向を紹介する。	本間博文	本間博文
9	新しい供給方式	わが国では土地は原則として私有地であり、高騰する土地を個人の努力で購入し、その上に住宅を建てるといった方式がごく一般的である。結果として住宅は土地も含めて資産であり、その価格はきわめて高価である。良好な借家も皆無に近い。しかし近年このような状況を打開する新しい住宅供給方式が提案され、具体化しつつある。その様子を紹介する。	同上	同上
10	風土と住まい	わが国の気候風土は、四季折々の変化に富んだ美しい自然を生み出してきたが、そのような変化に富んだ自然条件を制御し、快適に暮らすことはきわめて困難である。結局「住まいは夏を旨とするべし」という家造りの基本は反面で冬を諦めるということでもある。風土と住まいの伝統について概説し、今後のあり方を考える。	同上	同上
11	環境共生	最近の環境調整技術は、わが国の変化の大きい気候条件を制御し、四季を通して快適な屋内環境を提供できるところまで到達しつつある。しかも人工的なエネルギーを浪費することなく、自然のエネルギーを活用することによって省エネルギーを図り、なおかつ快適な環境を作り出そうとするものである。新しい環境共生技術の現状を紹介する。	同上	同上
12	災害と住居 Ⅰ	地震発生のメカニズムと日本が「世界有数の地震国」といわれる所以を述べ、地震発生の実態を紹介する。また在来の耐震構法、設計法の歩みを概観し、日本の伝統的住まいと木造家屋に見られる先人の知恵を学ぶ。	長橋純男(千葉工業大学教授)	長橋純男(千葉工業大学教授)
13	災害と住居 Ⅱ	地震時における構造物倒壊、非構造部材の落下および家具の転倒移動等による人的被害について、阪神・淡路大震災の事例を概観する。更に、「安全な居住空間」を提供する建築物として最近大いに注目されている免震構造を紹介する。	同上	同上
14	災害と住居 Ⅲ	震災時における生活と安全に関わる諸問題として、情報伝達(安否・被害・余震・生活関連等の情報)、避難場所、仮設住宅における生活、被災者の心のケア、罹災世帯、罹災家屋への公的支援、及び地域防災計画について述べる。	同上	同上
15	これからの住まい	本講義のまとめとしてこれからの住まいがどのように変化していくかを予測する。そしてそれが果たして望ましいものであるか、もしそうでなければどのように修正するべきか、将来の住まいの方向について展望する。	本間博文	本間博文

＝ 日本における集合住宅計画の変遷 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：高田光雄（京都大学助教授）〕

全体のねらい

わが国の集合住宅の歴史は第二次世界大戦前の同潤会のアパートに始まるが、本格的に供給され、都市域における一般的な住宅形式として認知されるようになったのは、戦後のことである。

50年足らずではあるが、わが国の社会情勢の急激な変化に対応して、集合住宅も様々な変遷を経て今日多様な表現をとりつつある。この間の経緯を明らかにし、変化がいかなる要因によるものかを探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概説	集合住宅計画の変遷	高田光雄（京都大学助教授）	高田光雄（京都大学助教授）
2	戦前および戦後復興期 (1)	集合住宅団地の誕生 －同潤会アパートを中心に－	服部岑生（千葉大学教授）	服部岑生（千葉大学教授）
3	戦前および戦後復興期 (2)	住宅で街をつくる試み －古市中団地－	富江伸治（筑波大学教授）	富江伸治（筑波大学教授）
4	戦前および戦後復興期 (3)	高層化の夢 －晴海高層アパート－	初見学（東京理科大学教授）	初見学（東京理科大学教授）
5	高度経済成長期 (1)	マンションという商品 －第一次マンションブーム－	高井宏之（㈱竹中工務店副主任研究員）	高井宏之（㈱竹中工務店副主任研究員）
6	高度経済成長期 (2)	大規模団地とニュータウン －千里ニュータウンを中心に－	杉山茂（大阪市立大学助教授）	杉山茂（大阪市立大学助教授）
7	高度経済成長期 (3)	高層集合住宅街区の建設 －広島基町高層住宅と芦屋浜高層住宅－	森保洋之（広島工業大学教授）	森保洋之（広島工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	第一次石油ショック以降 (1)	低層集合住宅の復活 －水戸大番池団地とタウンハウスの隆盛－	小林秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）	小林秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）
9	第一次石油ショック以降 (2)	地域性を活かした集合住宅 －地域型公営住宅－	志田正男（東北工業大学教授）	志田正男（東北工業大学教授）
10	第一次石油ショック以降 (3)	集合住宅計画への住まい手参加 －コーポラティブ住宅「ユーコート」－	定行まり子（日本女子大学講師）	定行まり子（日本女子大学講師）
11	安定成長期からバブル経済崩壊まで (1)	都市内居住と複合化 －大川端・神谷－	石倉健彦（住宅・都市整備公団係長）	石倉健彦（住宅・都市整備公団係長）
12	安定成長期からバブル経済崩壊まで (2)	街区と集合住宅 －ベルコ・リーヌ南大沢－	小柳津醇一（芝浦工業大学教授）	小柳津醇一（芝浦工業大学教授）
13	安定成長期からバブル経済崩壊まで (3)	住まい手の個性とインテリア －内装自由設計の集合住宅－	沢田知子（文化女子大学教授）	沢田知子（文化女子大学教授）
14	展望 (1)	住まい手と住まい	園田眞理子（明治大学専任講師）	園田眞理子（明治大学専任講師）
15	展望 (2)	「いえ」と「まち」の関係	高田光雄	高田光雄

＝住まいの環境学＝（ＴＶ）

〔主任講師：梅干野　晁（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

周囲の自然環境や人工環境を調整して人間の居住に適した環境をつくり出すことは、住まいの重要な機能である。そのためには、住宅をとりまく外部環境（気候、風土）に対する正しい知識と、それを制御する有効な手段を知る必要がある。同じ温帯にありながらわが国と対照的な気候風土を持つヨーロッパ地域と比較しながら、住まいの環境のあるべき姿と環境の調整手法について学ぶ。住環境と切り離せない都市環境問題についても言及する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論（快適な住まいとは）	どのような住環境が快適であるかは、地域的な、あるいは歴史的な違いもあるが、光、熱、空気、音などの環境物理と快適な環境とがいかに深く関わっているかをわが国やヨーロッパの住まいの実例を紹介しながら問題提起し、本講義の目的を明確にする。	梅干野　晁（東京工業大学教授）	梅干野　晁（東京工業大学教授）
2	気候・風土と住まい	わが国のほとんどの地域では、夏と冬の両方で気候調節を必要とするため、年間を通じて快適な居住環境をつくり出すことはきわめてむずかしい。また、地勢の変化に富むことから特有の局地気候が形成させる。本章では気候・風土と住まいとの関係の重要性を指摘するとともに、快適な室内気候の形成やパッシブシステムの設計の基本となる気候特性の把握方法について述べる。	同　上	同　上
3	都市環境と住まい	都市は、大気汚染、騒音、生活排水など多くの公害及び環境問題を抱えている。ここでは地域環境へのインパクトをできるだけ小さくし、かつ住環境の安全性、保健性、快適性を確保するという立場から、現在までの公害の実態とその対策を歴史的に振り返るとともに、これからの都市環境のあるべき姿とそれを達成するためになすべき行動について考える。	同　上	同　上
4	都市気候	ヒートアイランド現象をはじめとして、都市には郊外とは異なった気候が形成される。まずはじめに、都市気候についてその特徴と形成要因を概説する。次に、都市気候を形成する基本単位となり、一方では、室内気候を直接的に規定する建築外部空間の微気候に着目し、その形成のメカニズムを示す。さらに、リモートセンシングによる観測結果を紹介しながら、土地被覆の改革によって表面温度がどのように変わるかを明らかにする。	同　上	同　上
5	都市緑化とグリーンアーキテクチュア	機能性や効率が優先され、極度に人工化されつつある都市の中にあって、都市緑化とグリーンアーキテクチュアは、アメニティの高い環境共生型の都市づくりの主要なキーワードとなろう。本章では、緑が都市の中に依存することの価値に着目し、緑のスケールごとに、都市公園などの大面積の緑の都市気候調整効果や、屋上植栽や壁面緑化などのグリーンアーキテクトチュアによる熱環境調整効果を明らかにする。	同　上	同　上
6	日照と日射	わが国では、その気候風土の特徴から日照と日常生活との関わりは深い。しかし、近年、都市では建物の密集化と大規模な建築の増加によって、日照障害が重要な環境問題の一つになっている。本章では日照の光源としての太陽放射の特徴や日照の効果を知る。さらに、日影図の使用方法を習得するとともに、建物によってできる日影の様子を理解する。	同　上	同　上
7	住まいと光	視覚は生活上の情報の８～９割を支配するともいわれており、視環境は快適な住まいづくりに大きなウェイトを占めている。本章は、まず初めに視環境を規定する主な要素について解説する。さらに、昼光照明と人工照明について、光源の特徴や明るさの基準など、快適な視環境をつくりだすための基本的な考え方や具体的な照明方法を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	住まいと音	私たちにとって音は身近に存在する。言葉を使って意志の伝達を行い、音楽は私たちの心、感情を動かす。住まいの音を考えてみると、AV機器からの音、洗濯機、クーラーなどの音に代表される生活騒音が存在する。また、住まいの中に侵入してくる道路交通騒音、工場騒音などあらゆる音が存在する。ここでは、音の性質、騒音の特徴、音響材料及び音響設計と評価方法について述べる。	山下恭弘（信州大学教授）	山下恭弘（信州大学教授）
9	室内気候と快適性	屋外の気候変動を和らげ、快適な室内気候をつくり出すことは、シェルターとしての住宅の主要な役割である。人間が熱的に快適であるとはどのようなことであるかを考える。次にこれを規定する主な要素について概説するとともに、それらの要素を用いた快適性の評価指標を紹介する。最後に快適な室内気候を得るために住宅として要求される熱的な性能について整理し、室内気候に関連する第10～13章の位置づけを明確にする。	梅干野　晃	梅干野　晃
10	暖かい住まい	暖かい住まいづくりのために建物に要求される主な熱的性能は、断熱性能と気密性である。建物に適度の熱容量を持たせることも安定した室内気候を得る上で有効である。本章では、断熱性能と気密性能、建物の熱容量に着目し、これを理解するための基礎知識と定量的な把握方法について概説する。次に、建物の熱的性能及び暖房設備と室内気候との関係について論ずる。	同　上	同　上
11	空気汚染と換気	住宅の気密化やライフスタイルの変化に伴い、室内空気の汚染が問題となり、適切な換気の必要性が指摘されている。本章ではまず初めに、居住者の活動、あるいは様々な設備、建物の構造体や内装材などから放出される汚染物質について整理する。次に換気の必要性を明らかにするとともに、換気の原理や方法、さらに換気計画について述べる。	同　上	同　上
12	湿気と結露	近年、住宅の断熱、気密化に伴い、室内外の気温、湿度に大きな差が生ずることが多く、熱的に弱い部分での結露の危険性が増し、被害も顕在化しつつある。まず、湿気に関する基礎事項を示した上で、結露のメカニズムについて述べる。さらに結露によって生ずる被害の実態を示すとともに、結露の防止対策に関する理論と実際について考える。	同　上	同　上
13	涼しい住まい	わが国においては、梅雨から残暑にかけての高温多湿な気候を凌ぐには、強烈な日射を徹底的に遮ることと、通風・換気を積極的に利用することが基本とる。本章では、日射遮蔽の基本的な考え方を述べ、具体的な手法を紹介するとともに、通風の効果や通風計画について概説する。	同　上	同　上
14	パッシブシステム	日射や風などの自然の力を巧みに生かした住まいづくりは古くから民家などで行われてきているが、近年、パッシブシステムと呼ばれ、機械力に頼らず建築そのものによって積極的に自然のポテンシャルを生かして、冬暖かく夏涼しい快適な住まいを実現しようとする設計手法の科学的アプローチが試みられている。本章ではその基本的な考え方と具体的な手法について概説するとともに、主な手法の効果について紹介する。	同　上	同　上
15	これからの住まい	これからの住まいを目指して、わが国やヨーロッパで試みられている住宅や街づくりの実例を紹介しながら、特に窓などの開口部における光、熱、空気、音などの環境調整に焦点をあてて、わが国の気候風土に適した住まいのあり方を考える。	同　上	同　上

＝新しい都市居住の空間＝（ＴＶ）

主任講師：渡辺定夫（工学院大学教授）
主任講師：服部岑生（千葉大学教授）
主任講師：本間博文（放送大学教授）

全体のねらい

本講義では主として大都市圏を取り上げ、都市に居住する空間とはどういうものかを考える。大都市域でも市域の７割は住宅地域である。欧米の実状、わが国の変遷を概括した上で、都市における新しい居住者像やコミュニティの動向、管理といったソフト側の条件と、性能、日照、オープンスペース居住環境、土地利用といった空間側の条件について現状と今後の動向を掲示する。

あわせて現在取り組まれている先進的な事例を取り上げ、どの様な居住形態、所有形態が望ましいのか、住宅の類型、土地利用の類型に分けて考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい都市居住の空間づくり	本科目は都市型住宅、住宅地の新しい枠組みは何かを、計画・設計、住宅供給、管理、更新の４つの視点から考察する。新しい動向や提案あるいは具多的な事例を紹介し、既存の学問分野の枠にとらわれることなく今後の都市居住の空間づくりの方向を見据えた計画課題や政策課題を探る。	渡辺定夫（工学院大学教授）	渡辺定夫（工学院大学教授）
2	欧米の都市住宅地	主に欧米の都市住宅地の変遷を紹介し、住宅・オープンスペースの配置の考え方など住宅街区の構成手法などを学ぶ。	服部岑生（千葉大学教授）	服部岑生（千葉大学教授）
3	日本の都市住宅地Ⅰ～日英住宅比較～	住宅需給構造の変遷を欧米と日本を比較し、それぞれの特長を明らかにする。	三宅醇（豊橋技術科学大学教授）	三宅醇（豊橋技術科学大学教授）
4	日本の都市住宅地Ⅱ～三大都市圏比較～	東京、大阪、名古屋の三大都市における住宅需給構造の変化を比較し、それぞれの都市の抱える固有の問題を明らかに、今後の政策課題を考える。	同上	同上
5	都市人口と住宅需給構造	これからの大都市における人口構造から住宅の需給予測を行い、需給構造に対応した都市型住宅の将来像を展望する。	同上	同上
6	新しい都市居住者像	都市居住の主体的な条件としての都市居住者像を素描し、地域や社会との関連の中で、それぞれの居住者に対応する住宅像を探る。	本間博文（放送大学教授）	本間博文（放送大学教授） 園田眞理子（明治大学講師）
7	新しい住宅供給方式	公共ならびに、民間の供給する都市型住宅の新しい流れを紹介するが、とりわけ定期借地権という供給方式に着目しそれを応用した事例を具体的に紹介する。	本間博文	本間博文 小林秀樹（建設省建築研究所住宅計画研究室長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	都市型集合住宅の実験	ＮＥＸＴ21と名付けられた大阪市内に建設された実験集合住宅を紹介し、その基本となる２段階供給という新しい住宅供給システムのコンセプトを明らかにする。	高田光雄（京都大学助教授）	高田光雄（京都大学助教授）
9	集合住宅の管理	マンション管理の問題、区分所有法などを中心として、阪神大震災の被災住宅の再建などにも論及し、都市型住宅としてのマンションが抱える維持管理ならびに更新に関する諸問題を考察する。	梶浦恒男（大阪市立大学教授）	梶浦恒男（大阪市立大学教授）
10	都市住宅の住戸計画	集合住宅の住戸の意味とその計画条件の設定を通して都市型住宅とはそもそも何であるか、それが満たすべき成立条件を明らかにする。	服部岑生	服部岑生
11	都市住宅の住棟計画	集合住宅の住棟を取り上げ、その構成の仕方、群として環境を形成する方法、ハードの耐久性とソフトの面からのメンテナンスなどを考慮して、その成立条件を考える。	同上	同上
12	新しい住宅開発	千葉市幕張地区に建設が進行しつつある新しい都市型集合地を取り上げ、居住者の日常生活や評価を通して更地における都市型住宅地の計画条件を考える。	篠崎道彦（芝浦工業大学助教授）	渡辺定夫 篠崎道彦（芝浦工業大学助教授）
13	既成住宅地の再編	既成市街地における住宅地の更新過程を、数少ない具体事例を取り上げ、そこでの実践をトレースすることにより計画上の諸問題を明らかにする。	野澤康（工学院大学助教授）	渡辺定夫 野澤康（工学院大学助教授）
14	住宅団地の建替	第二次大戦後の早い段階に建てられた住宅団地の更新問題を取り上げ、具体的な事例を紹介し、計画上の諸問題を明らかにする。	服部岑生	服部岑生
15	既成市街地の再生と都市住宅のあり方	14回の講義を通して、わが国での都市住宅地の諸問題を総括し、これからの新たな方向を探り、計画条件、政策課題を探る。	渡辺定夫 服部岑生 本間博文	渡辺定夫 服部岑生

＝母性の健康科学＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩崎寛和（筑波大学名誉教授）〕

全体のねらい

排卵、受精に始まり、胎児を子宮の中で育て（妊娠）、出産し、さらに授乳、育児という次の世代の人間を育成する役割、生物現象を母性という。女性はそのために男性とは形態的にも機能的にも異なっており、その働きの良否は人間の将来に深く関わっている。この母としての機能を果すメカニズムを解説したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	母性の健康科学のねらい	医療や社会保障の進歩に伴って、母性の健康は飛躍的に向上した。その実情を母子保健統計の面から解説するとともに、21世紀に向かっての母性のあり方や健康増進の方策について考えてみたい。	岩崎寛和（筑波大学名誉教授）	岩崎寛和（筑波大学名誉教授）
2	女性の一生－加齢による性機能の変化	女性の一生は毎月、月経がある性成熟期を中心にして、幼小児期、思春期、性成熟期、更年期、老年期と大きく5つの時期に区分される。思春期は母性の準備期間として、更年期は生殖年齢を終えて、母性の完成期への移行という意味で重要である。	鈴木秋悦（世界保健機構・ヒト生殖科学技術アドバイザー）	鈴木秋悦（世界保健機構・ヒト生殖科学技術アドバイザー）
3	女性のバイオリズムと排卵	女性の性周期は排卵を中心として廻っている。それに応じて各時期のホルモン分泌が女性のバイオリズムを上手に調節している。すなわち排卵を中心として性機能のみならず生活活動における周期的調節が行われ、精神的、身体的安定が維持されている。	同上	同上
4	生命の誕生	新しい生命は精子と卵子が合体する受精によって始まる。すなわち新しい生命の遺伝子は両親から供給されるそれぞれ23個づつの染色体が混り合い、倍数化（46個）されて受け継がれて行く。この領域の最近の進歩は目覚ましく、生殖補助技術にも活かされている。	同上	同上
5	胎児の発育と行動	直径約 0.1㎜の受精卵は約10カ月の間に身長約50㎝、体重約 3,200g の胎児に発育する。ここでは妊娠持続期間に沿った胎児の発育ならびに各臓器の発生と発育について述べる。さらに超音波診断装置によって解明された子宮内胎児の行動や生理機能の意義について解説する。	太田孝夫（帝京大学教授）	太田孝夫（帝京大学教授）
6	胎盤・臍帯・羊水	子宮内膜に着床した受精卵から、胎児以外に胎児付属物と総称される胎盤・卵膜・臍帯・羊水が形成される。これらは胎児の発育に重要な役割を演じている。ここでは、これらの構造と機能ならびにその判定法について述べるとともに、羊水検査法にも触れる。	同上	同上
7	妊娠とホルモン	妊娠すると母体には胎児－胎盤ユニットから各種のホルモンが大量に分泌され、妊娠の継続、胎児の発育、分娩、出生後の哺乳などに深く関与している。母体－胎盤－胎児間のホルモンの相互関係について解説する。	伊藤博之（聖路加国際病院産婦人科医長）	伊藤博之（聖路加国際病院産婦人科医長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	妊婦の栄養と代謝	妊婦は妊娠の維持と胎児の発育のために特有な代謝機能をもっている。その特徴を母児相関におけるエネルギー、糖、脂質、蛋白質、ミネラルなどの代謝の特性と内分泌調整の面から考察する。これらはすべて妊娠のための合目的的性をもった適応現象である。	望月眞人（神戸大学名誉教授）	望月眞人（神戸大学名誉教授）
9	胎児の栄養と代謝	胎児の栄養代謝はすべて母体に依存し、栄養素は胎盤を通過しうる低分子物質である。胎児の臓器が発育過程にあるため、代謝機能は未熟であるが、一方では出生後に備えた代謝機構の準備もしている。ここでは臓器を中心とした胎児代謝の特徴を述べるが、胎児発育障害機序にも触れたい。	同上	同上
10	妊婦の心とからだの変化	妊娠により母体はからだも心も大きく変化する。これらの変化は出産や育児に向けての準備状態である。妊娠経過とともに刻々と変る母体、出産に対する期待と不安が交叉する心、この両者の関係に迫りたい。	伊藤博之	伊藤博之
11	妊婦の環境と生活	妊婦はさまざまな環境の中で生活しており、それらの因子は妊娠の経過や胎児の発育に直接、あるいは間接に影響を及ぼしている。さらに健康志向の高まっている今日では、妊婦の日常生活も著しく変化してきた。最近の妊婦像を紹介するとともに、そのあり方を解説したい。	同上	同上
12	お産とは	お産は本来自然の営みであるが、この半世紀の間に起ったお産をめぐる社会的、医療的な状況の変化は、安全性の向上、産婦のお産に対する主体性の自覚など、その変化は多岐に亘っている。ここではお産の全経過とわが国における現状を歴史的視点も踏まえて解説する。	太田孝夫	太田孝夫
13	乳汁分泌とその異常	母乳は乳児の発育に不可欠な要素である。母乳の生成と分泌には各種ホルモンの作用が複雑に関与しているが、さらに様々の環境からの影響も受けやすい。それに伴って様々の疾患も発生しやすい。女性らしさの象徴としての乳房の働きについて解説したい。	岩崎寛和	岩崎寛和
14	母性（女性）に特有な病気と対策	女性が母性としての機能を完遂するためには、身体各部が形の上でも機能の上でも健康でなければならない。そこで、母性としての生殖機能を障害しやすい特有な疾患とそれに対する対策のあらましを解説したい。	同上	同上
15	リプロダクティブ・ヘルス －避妊と不妊－	母性の基本的役割が妊娠、出産、育児にあるからには、受胎調節・避妊による出生の抑制だけではなく、不妊治療による出生の促進も含んでおり、これらには人口学的な観点から多分に社会医学的側面をもっている。ここではその今日的課題について述べたい。	同上	同上

＝乳幼児の健康科学＝（R）

〔主任講師：加藤精彦（山梨医科大学名誉教授）〕

全体のねらい

少産少死の日本における子育ては、現在いろいろの問題を抱えている。生まれてから思春期に至るまでの子どもの成長や発育、これには単に肉体的のことのみでなく、精神的或は心理的な発達過程があり、これらの面で順調な育成がされるために必要な項目や問題点を分かり易く解説することがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	成長発育の個人差、男女差	子どもが大人と違う最大の基本的問題は、日々刻々成長発育や発達が心身ともに行われていることである。しかもそれ等に個人差と男女差があり、その原因としてからだの成熟が大きく関与していることである。	加藤精彦（山梨医科大学名誉教授）	加藤精彦（山梨医科大学名誉教授）
2	子どもの健康増進と幸せ	育児相談、児童相談の立場から、子どもの健康増進と幸せのために個人的には養育者や家族たち、社会的には行政・法令や諸施設がそれぞれどんな役割を現に分担し、また今後担当していくべきかについて述べる。	山岸稔（産業医科大学名誉教授）	山岸稔（産業医科大学名誉教授）
3	乳幼児のからだの成長発育	乳幼児期のからだの成長発育の特徴の一つは、その大きな個人差（一人一人の子どもの個性）にある。私達はともすれば、標準的発育という物差しにとらわれ、子どもの個性を忘れ勝ちである。この幅広い個人差を点検してみる。	松尾宣武（慶應義塾大学教授）	松尾宣武（慶應義塾大学教授）
4	わが国の子育て	各国の子育てをみると、それぞれの国の歴史、伝統、文化を基盤とする特長がある。わが国の子育て、母と子の関係などを西欧と比較しても、長短一様ではない。それらについて過去、現在、将来を見通して、わが国の子育てを展望したい。	巷野悟郎（日本保育園保健協議会会長）	巷野悟郎（日本保育園保健協議会会長）
5	乳幼児の心の発達とそのチェック	乳幼児の心の発達の個体側の要素には、感覚・情緒・運動・言語・社会性・思考・自我などが、また環境側には、母親・父親・家族・社会・文化などがある。発達はこれらの統合的機能であることの理論と実際を述べる。	秋山泰子（川崎医療福祉大学教授）	秋山泰子（川崎医療福祉大学教授）
6	母乳栄養	健康で栄養豊かな女性の母乳は、人類に特有な完全食品といわれている。母乳栄養には乳児の身体的成長に最適であるだけでなく、母親と子どもが直接接触する時間が多くなり、さらに感染症にたいする防禦作用があるなど利点が多い。	山下直哉（慶應義塾大学助教授）	山下直哉（慶應義塾大学助教授）
7	子どもの環境	乳幼児は次第に家庭から社会へと適応していくが、そのための日常生活のあり方、つまり睡眠、排泄、摂食などが自律的になっていく過程について述べ、母や家族とのかかわり合いも考察する。	巷野悟郎	巷野悟郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	子どもの生活	子どもの健康は環境によって大きく変化する。子どもの遊び、事故、ストレスに対する心身の反応などを考える場合、環境との関わりを無視できない。母は子どもにとって最も重要な環境因子と考えられる。	巷野悟郎	巷野悟郎
9	子育ての要点 －言い伝えの科学性－	子育てについての諺や言い伝えは昔から色々あり、有益な助言と思えるものがある一方、ほんとかしら？と疑問を感じるものもある。人々の生活体験から出てきたはずのそれぞれの要点を、科学的に再検討してみたい。	山岸　稔	山岸　稔
10	親離れ、子離れの必要性と問題点	親と子の生物心理社会的発達の進行中に、親離れ、子離れの行動が起る。ここに問題が生ずることは、発達に支障があることの示唆である。共生一分離個体化論などの理論的理解に基づいて、実際的問題が考えられるように講述する。	秋山泰子	秋山泰子
11	乳幼児の感染症とその対策	子どもの感染症は成長にともない、かかりやすい病気の種類、症状の重さが変化する。予防接種は子ども個人を病気から守るだけではなく、接種が徹底することにより社会全体の健康を守ることができる。	山下直哉	山下直哉
12	乳幼児の皮膚のていれ	子どもにはおむつかぶれ、とびひ、いわゆるアトピー性皮膚炎など独特の皮膚の病気があり、このために病院を訪れる機会が多い。日頃の皮膚の手入れの基本は、清潔にこころがけることと思われる。	同　上	同　上
13	子どもとAIDS	子どものAIDSは、欧米ならびに一部の発展途上国で大きな問題となっている。15歳より49歳までの HIVに感染した女性は世界で約 200万人と推定されている。わが国でも充分な対応が出来るように準備しておくべきである。	山田兼雄（聖マリアンナ医科大学客員教授）	山田兼雄（聖マリアンナ医科大学客員教授）
14	小児成人病 －小児期から始まる成人病対策	大人にみられる成人病は加齢によるからだの衰えにより避けられないが、若年期からその risk factorといわれる因子を最小限に抑えることによって成人病の発生阻止或は予防することが大切で、それは小児期に遡る。	加藤精彦	加藤精彦
15	思春期の心身の悩みと対策	わが国の子どもは、先進諸国中、最も早く思春期を迎える。このため肉体的成熟と精神的未熟というアンバランスが生じ易く、様々の社会病理につながるおそれがある。われわれ大人はなにをなすべきか、考えてみたいと思う。	松尾宣武	松尾宣武

＝青年期の健康科学＝（R）

〔主任講師：鬼頭昭三（兵庫大学教授）〕

全体のねらい

この科目では年代順の健康科学の一部として青年期を論ずる。青年期ことに18才から20才の間は人間の肉体も、脳の機能もピークに達しその状態が続く時代である。しかし、環境の変化、拡大によって、こころの歪もおこりやすい。青年期の健康科学を主として生物学的な面を中心としてその社会的、心理的な面も加味しながら解説することとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	青年期は人間の機能のピークに達する時期であるが、社会人としての経験、判断力は、未熟な時期である。このような青年期の特徴をふまえて青年期の心身の健康が環境の拡大に伴ってどのような影響を受けるかを述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
2	男のからだと女のからだ	男性と女性のからだには、いろいろな違いがある。骨の形や筋の発達にも性差がみられるが、生殖器の差異はもっとも目立つ。その違いを解剖学的、生理学的に説明するとともに、どのようにしてその違いができるのか、生殖器の発生と発達を解説する。また、受精から胚子の器官形成、胎児の発育、分娩にいたる妊娠の経過とその異常について述べる。さらに、半陰陽などの性分化の異常についても触れる。	安田峯生（広島大学教授）	安田峯生（広島大学教授）
3	男の脳と女の脳	性ホルモンの働きにより男女にからだの性差がつくられるが同時に脳にも差が生じる。そのため脳のある部位では、神経細胞の表面に存在する蛋白分子に違いがみられまた神経回路網にも差が起こる。この脳の差に加えて社会的な因子が加わり男女間の心理的・情動的な性差が表れるのである。本章で生物学的な立場から脳の性差を述べ、お互いの理解を深めることを目的とする。	三好理絵（放送大学非常勤講師）	三好理絵（放送大学非常勤講師）
4	青年期のこころ	人生というものは、どの段階をとってみてもそれぞれにかなり特徴的な状況・状態がみられるものである。青年期の心というものを、そういった観点から眺めてみて、どんな事柄が指摘されるのかについて考えてみる。そしてそれらがこころの健康について、どんな意味をもったものかを併せて考えてみる。	小倉清（クリニック おぐら院長）	小倉清（クリニック おぐら院長）
5	青年期と甘え	甘えというものは、人間の一生を通して、ずっとみられる心理な側面の一つであるといえよう。もちろんそれがみられる年齢によって、甘えの型やその意味は微妙に異なることになろう。そこで青年期という、特殊な時期にみられる甘えにはどんな意味をもちうるのか、どんな問題を提起しうるのか、などについて一定の考察を試みる。	同上	同上
6	青年期の食生活	青年期は成長と成熟とを合わせ持つ複雑な時期である。また肉体的・精神的に将来を決定する重要な時期でもある。この特性に焦点を合わせ、幼児期から成人への流れの中で栄養の位置づけを考えていきたい。栄養の摂取は食欲に従って摂れば必要にして十分の種類と量が摂取出来るはずである。しかし青年期における心理・社会・家庭状況により食欲が正常に働かないことにより問題が起こる。食欲調節機構の疾患もこの時期に起こりやすい。	金澤康徳（自治医科大学教授）	金澤康徳（自治医科大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	青年期と睡眠	睡眠についての研究は非常に広く行われている。ここでは青年期における睡眠の意義やその特徴について考えてみる。特に睡眠中の成長ホルモンの分泌について、その生物的な意味について考えてみる。更にはこの時期における睡眠中の心理的な動きについて考えてみる。	小倉　清	小倉　清
8	酒とタバコの問題点	有史以来の人類の嗜好品である酒とタバコは依存性があるために、その摂取は継続的・日常的となり生活習慣の一部となり易い性質を持つ、青年期に「大人のしるし」として飲物や喫煙を始めると、飲酒習慣、喫煙習慣となって一生継続することが多い。青年期にこれらの嗜好品に接するに当っては、それぞれの生体へ及ぼす影響と功罪とをあらかじめ十分に承知しておくことが大切である。	本間日臣（元放送大学教授）	本間日臣（元放送大学教授）
9	青年期とカー・バイクライフ	大部分の青年が二輪・四輪を好きなことは事実である。車を運転するスピード、緊張感、仲間との連帯感、そういった感覚を若者が欲しているのだろうか。しかし、彼らは恐らく車を高速で運転しているときの生理学を良く知らない。高速になり、座席が低い程スピード感のために視認出来る視野が狭くなること、他に注意を向ける余裕がなくなること、いくら反射神経が早くても対処し切れない場合があることなどについて、医学、生理学的に説明する。	谷島一嘉（日本大学教授）	谷島一嘉（日本大学教授）
10	青年期とスポーツ	青年期のスポーツを生涯スポーツとの関連で考える。中高年期における身体活動度が高いことは、成人病の予防や寿命の延長につながり、生涯スポーツの必要性が言われている。しかし、実際のスポーツ習慣のある者の率は低い。青年期は体力的には最高の能力を発揮できる時期であり、スポーツ活動の成熟期であり、生涯続けられるスポーツとしてとらえる必要がある。一方、スポーツの障害面についても注意が必要である。	川久保　清（東京大学助教授）	川久保　清（東京大学助教授）
11	青年期の薬物乱用	青年期にしばしば見られるシンナーや睡眠薬などの乱用は、そのまま成人期の本格的な薬物乱用（覚醒剤や麻薬の依存）へと発展することが多い。青年期に特有の自己の不確実性や対人関係の未熟性などが、自己破壊的な薬物乱用の根底にある。また、薬物の乱用とアルコールの乱用とは相互に関連しあっていることも知られている。本章では青年期に始まる薬物乱用の実体とその対策について述べる。	仙波純一（放送大学助教授）	仙波純一（放送大学助教授）
12	青年期の心身医学	青年期は思春期と成人期の移行間としてとらえられ、その時点での心身の発達はめざましいものがある。とくに心の面では自我同一性の獲得が重要となり、不安が身体化ないし行動化してあらわれやすい。 心身症としては摂食障害（神経性食欲不振症、神経性大食症）、過換気症候群および過敏性腸症候群などが好発し、ストレス関連障害として適応障害などもみられ、その他神経症性障害などもみとめられる。	筒井末春（東邦大学教授）	筒井末春（東邦大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	青年期の病気	青年期は、人生の中では病気の少ない時期である。心身症を含めた精神医学的な異常、外傷などの外因性の病気が高い頻度を占める。一方では飽食の時代の反映として、高脂血症、高血圧症、動脈硬化症などの後年、成人病発生の基礎となる病態が青年期に増加しつつあることが注目されている。青年期の病気の現状とその将来像について述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
14	青年期の心の病気	青年期には身体の急速な成長や性の成熟が見られ、それに伴い精神面では感情の不安定化や自我感情の亢進などが見られるようになるように、青年期は心身ともに不安定な時期である。青年期には、自己同一性をめぐる神経症が発症したりするほかに、精神分裂病や躁うつ病気などのいわゆる精神病が初発しやすい時期でもある。また神経症も、周囲に対する問題行動となって表れやすい。この章では、青年期によく見られる心の病について解説する。	仙波純一	仙波純一
15	まとめ	青年期は、疾病の罹患率は少ないが、青年期の生活習慣がそのまま、青年期以後にもたらされるため、健康な人生を送るための重要な時期である。しかし、各自の健康意識は高くない。理想に燃えた青年が自己尊重の精神に基づいて自らの健康をケアすることが必要である。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

＝成人の健康科学＝（R）

〔主任講師：鬼頭昭三（兵庫大学教授）〕
〔主任講師：木下安弘（千葉大学名誉教授）〕

全体のねらい

青年期の健康科学にひきつづく、成人の健康科学で重要なことは、この時期が生産活動が最も盛んであり、社会的責任に基くストレスが多い時期であるとともに、健康な老年期への布石でもあるという事実でもある。生活習慣病としての成人病を予防するための、この時期における気配りの程度が、各個人の将来の活動可能年数の長短と密接な関係を持つ。

この観点から、成人の健康科学について、日常生活と生体反応を中心として、概括的に論ずることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	成人の健康科学序論	成人期は、日常生活が最も多様な時代である。それに伴って精神的及び肉体的負担が大きい。成人期における生活習慣がそのまま老年期の生活を左右することも大きい。本章では健康、健康科学の定義と概念を明らかにすると共に健康診断のあり方、受け方について述べ、健康な生活の基盤を考える。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
2	細胞・組織・臓器・個体	人体は、細胞、組織、臓器（器官）、個体という、しだいに複雑化する階層構造にしたがって理解されることが多い。こうした階層のそれぞれは、一定の形態と機能がある構成要素のたえまない変化により、定常状態に保たれている。このような視点を、生命現象の例を挙げて考える。	西塚雅子（順天堂大学講師）	西塚雅子（順天堂大学講師）
3	体内時計と生活リズム	生命活動には周期性があり、1日、1ヵ月、季節、1年を周期とするものから、瞬時も止まることのない律動リズムなどいろいろある。 このうち主として日周リズムについて調節中枢、睡眠と覚醒、呼吸・循環の周期性を解説し時差ボケの成因を考える。	本間日臣（元放送大学教授）	本間日臣（元放送大学教授）
4	遺伝と外的因子の関わり合い	遺伝は、親から与えられたもので不変のものであろうと考えられがちである。近年、分子生物学の進歩に伴って、遺伝子の発現様式が外からのいろいろの要因によって変化をうけることが益々明らかになった。環境は遺伝子にどのような影響を与えるであろうか？	鬼頭昭三	鬼頭昭三
5	運動・安静と健康	運動時と安静時には、からだの中にどのような生体反応がおこるか、健康にとってプラスの面とマイナスの面とを点検し、健康的な生活習慣をつくるためにどのように応用するかについて解説する。	本間日臣	本間日臣
6	環境と生体反応	温浴時などの高温環境、寒冷などの低温環境においてどのような生体反応がおこるか、また高地・高山への移動時におこる変化を高山病を例にとって考えるる。更に汚染大気の生体へ及ぼす影響を解説する。	同上	同上
7	肥満とその対策	肥満は体内における脂肪の過剰な蓄積を意味し先進諸国の社会環境に生じる1つの生体現象として、その成因、身体および社会に及ぼす影響などが注目されるようになった。 肥満がまた身体（循環、呼吸、内分泌、運動、生殖器系など）に様々な好ましくない影響を及ぼし、時には疾患の誘因、原因となることが明らかにされた。 その病態生理に基づき肥満対策として、食事、運動、薬物療法などが試みられているが、その現況について述べる。	木下安弘（千葉大学名誉教授）	木下安弘（千葉大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	飲酒・禁煙と健康	有史以来の人類の嗜好品である酒をタバコについて、その吸収、代謝過程、生理薬理作用を解説し、健康への利用法とを考える。	本間日臣	本間日臣
9	成人期食生活と保健	日々の食物摂取は成人では、その日常の生命活動を支えるエネルギー源としてなくてはならぬものである。 健康を「その社会一般の日常生活を営むのに全く支障のない身体の状態」と定義しても、両者の関係は我々周囲の環境に深く依存しており、また先人より受け継いだ食生活習慣に加え、その内容はその時代の影響を強く反映している。 成人期を中心にバランスを欠く食事、偏向した嗜好なども加えて健康の保持に必要な食生活の事項について述べる。	木下安弘	木下安弘
10	くすりの効き方	いろいろな常用薬を使っている人は意外に多い。睡眠薬等は、その代表であろう。薬の効き方は、従来考えられていたよりはるかに複雑である。医師から処方されているからと言っても必ずしも安心できない場合がある。薬とはどのようなものであるか、どのように使うべきかについて解説することを目的とする。	三好理絵(放送大学非常勤講師)	三好理絵(放送大学非常勤講師)
11	ストレス、疲労,睡眠	人間を含むすべての生物は、その周囲の環境から常に生体の恒常性(homeostasis)を障害しようとする力－ストレッサーを受けながら生命を維持している。 ストレスは時に生命活動を高めても、過剰になるにつれて身体全体に多様な障害を引き起こす。 疲労はストレスによっても生じる未知なことの多い生体感覚の1つである。 睡眠は動物にとって必須の生体現象であるが、その機構、調節、脳内化学物質などに関してこの現象を司る生体の働きについて述べる。	木下安弘	木下安弘
12	女性の内分泌と代謝	成人女子の身体機能や生活活動、生殖機能の根源である内分泌系の周期性によって支配され、これが一生の中で最も活発である。成人期には各臓器で徐々に加齢現象が進むが、その中で最も早期に、しかも急速に機能が減退するのは卵巣である。視床下部・下垂体・卵巣系の働きが他のホルモン系や自律神経系、物質代謝に及ぼす影響について述べ、さらに耐機能の変化や高脂血症について概説する。	古谷博(昭和女子大学講師)	古谷博(昭和女子大学講師)
13	職域環境と保健	成人の多くは1日うち約1／3を職域で生活する。しかも、職域では一般環境に比べ有害性因子の室や量が高く影響大である。有害因子には、①化学因子(産業化学物質)②物理的因子(熱、音など)③生物的因子(微生物など)があり、各々特有の健康障害がある。しかし、近年、産業保健の発展で職業病の発生は少なく、逆にメンタルヘルスや局所疲労が重視されている。	和田攻(東京大学名誉教授)	和田攻(東京大学名誉教授)
14	成人期と老化	成人と老人の間には明らかな生物学的環境線ははい。成人期は老化の進む時代であり、老人期への移行の時期でもある。老化の一般論に次いで成人期の老人について成人健康科学の立場から述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	健康科学からみた成人期の生き方	老年期における健康、自立、輝きは、遺伝子によって、プログラムされた宿命である要素も多いが、成人期の生活態度によって、決定される面が多いことも事実である。成人期、そして老年期を生き抜く為の成人期のありかたについてまとめを述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

＝老年期の健康科学＝（R）

〔主任講師：鬼頭昭三（兵庫大学教授）〕

全体のねらい

生物学的には、老化は20歳以後、着実に進行するが、社会的存在としての人間では、65歳以上を意味する老年期は、一つの時代的単位であり、高齢化社会の到来とともに、その持つ意味が大きい。又、老年期は健康度の個人差が最もおおきい時期でもある。光りある老年期を各個人が迎えることが、次の時代の社会の活性化を来す。この意味をこめて生物学的な現象としての老化、それを基盤とした老年期の健康科学について述べることとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老年期健康科学序論	老年期は、健康及び社会的条件の個人差が激しい時代である。80、90歳まで社会で活躍する人、健康上は活動能力がありながら、場が与えられない人、病床に就いたままの人、いわゆる老人ボケになって家庭内の若い人の社会的活動に支障を与える人等、幅が広い。本講座では、老年期のもつ問題をあげ、光ある老年期を送るための健康上の問題を解説する。本章では“老年期とは何か”という一般論を中心に述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
2	分子・細胞レベルからみた老化のメカニズム	最近老化のメカニズムは分子、細胞レベルの研究を通じて論じられることが多い。老化は遺伝子によってプログラムされた生物の宿命であると同時に、二次的な老化として作られる面もある。アルコールの多飲、日光浴等は後者の例である。老化のメカニズムとその生物学的意味は老年期健康科学の基本である。	三好理絵（放送大学非常勤講師）	三好理絵（放送大学非常勤講師）
3	ホメオスターシスと老化	ホメオスターシスとは外部環境がどのように変化しようとも生体の内部環境を一定の状態に維持する機構をいう。老化は加齢に伴う遺伝子的に規定された過程であるが生体の諸機能の低下が外的な種々の環境変化に対応できずついにはホメオスターシスの破綻をきたす状態となる。この章では老化に伴うホメオスターシスの変化について解説する。	小田桐恵美（東京女子医科大学助教授）	小田桐恵美（東京女子医科大学助教授）
4	外貌の変化と検査値の加齢変化	白髪、顔のしわやしみ、顔つき、体型、皮下脂肪、歩行パターンなど外見の変化をもたらす生体内の変化と検査値の加齢変化とを対応させながら解説する。	本間日臣（元放送大学教授）	本間日臣（元放送大学教授）
5	神経系の老化(1)－脳・脊髄・末梢神経	神経系は、最も老化しやすい組織、臓器である。脳の老化に伴って、全身的な機能が低下し、一方では、人格が円満になるなどの現象が現れる。神経系の老化を現実の形として把握するのが本章の目的である。	平井俊策（東京都立神経病院院長）	平井俊策（東京都立神経病院院長）
6	神経系の老化(2)－感覚器	神経系の一部としての感覚器の老化も著明である。老人は、聴覚、視覚等が低下することによって生きる気力を失い、それが老化を促進することになる。また刺激に対する反応性の低下は老人の特徴である。	同上	同上
7	呼吸・循環系の老化	階段や坂を登る時の息切れ、夕方に現れる足の甲のむくみ、夜就寝時のせき、夜間の頻尿など日常みられる変化の背後にある呼吸器および循環器の加齢変化にもとづく機能低下を解説する。	本間日臣	本間日臣

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	内分泌・代謝機能の老化(1)	加齢に伴って多くの内分泌機能は低下するが高齢者の内分泌疾患は若年者に比べ臨床症状に乏しく見のがされる事が多い。また糖尿病や痛風など代謝疾患も加齢と共に増加する。この章では加齢に伴う内分泌、代謝機能の変化および高齢者の内分泌、代謝疾患の特徴と対策についてのべる。	小田桐恵美	小田桐恵美
9	内分泌・代謝機能の老化(2)	中・高年女性のエストロゲン欠乏が主因の一つといわれる更年期障害、骨粗鬆症、動脈硬化症、高脂血症などを予防する健康管理の有力な手段として、ホルモン補充療法（hormone replace therapy:HRT）が行われつつあるが、それにはまず、これらの老化現象の本態をよく理解する事が必要である。HRTは長期間にわたるので、Quality of life（QOL）の向上を目標として、HRTの利点、欠点を評価したい。	古谷博（昭和女子大学非常勤講師）	古谷博（昭和女子大学非常勤講師）
10	腎機能・消化機能の老化	老人では、腎臓のはたらきである排泄、再吸収機能ともに低下し、容易に脱水症状や、薬剤、毒物による中毒症状を起こしやすい状態にある。消化器においても、消化液の分泌、消化管の運動、養物の吸収力ともに低下してくる。これらの機能低下が、老年期の生活に与える影響について解説する。	成清卓二（群馬大学教授）	成清卓二（群馬大学教授）
11	防御・免疫機能の老下	まず生体の防御・免疫機構とその発動様式全般について解説し、これが加齢と共にどのような変化をおこし、そのためにどのような病気がおこりやすく、かつ治りにくいかを考える。	本間日臣	本間日臣
12	老年期痴呆(1)－脳の変化と症状	老年期痴呆は、変性性のアルツハイマー型老年痴呆と脳血管性痴呆に大別される。脳の変化と萎縮と脳血管障害（脳梗塞が多い）が中心である。症状は、記銘力、記憶力の著明な低下、見当識障害、計算力障害、思考障害、情緒障害、異常行動などである。	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）
13	老年期痴呆(2)－実態と対策	老年期痴呆は、老年期の増加と共に、毎年約10％内外増加する計算となる。85歳以上では約25％は発病する。一旦罹患すると治療は不可能な状態であり、薬物などによる治療もごく一部の症状の対応療法のみである。予防については確実なものはない。	同上	同上
14	寿命・老年期の病気、死	寿命を支配するもの、老年者によくみられる病気、老年者の宿命である死について医学的立場からみた老年期のまとめを述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	健康科学からみた老年期の生き方	老年期は人生の集大成の時期である。光に満ちたものでなければならない。老年期こそ残された人生に希望を持つ生き方が大切である。その成否は少年期、青年期、成人期を通じての個人の心がけに左右されることが多い。この章で栄光に満ちた老年期を迎えるための青年期から要求される問題を引きおこし本講座のまとめとする。	同上	同上

＝現代の精神保健＝（R）

〔主任講師：仙波純一（放送大学助教授）
主任講師：高橋祥友（東京都精神医学総合研究所副参事）〕

全体のねらい

現代社会は、情報量の増大・価値基準の多様化・家族形態の変化など、ひとむかし前とは比較にならない急速な変化をなしつつある。この中にあって、われわれの心の健康もおびやかされている。ここでは、現在問題とされているいくつかの項目について、トピックス的にとりあげ、勉強してゆくことをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代における精神保健の意義	現代社会における心の保健－精神保健－の必要性について述べる。また2章以下の項目のねらいについてくわしく説明する。	仙波純一（放送大学助教授）	仙波純一（放送大学助教授）
2	心の病気	心の病気について、その内容・分類法・治療法について簡潔に説明する。以下の章で述べられる予定のいろいろな精神の病の解説とする。	同上	同上
3	アルコール依存症	アルコールは人類の歴史とともにあり、さまざまな喜怒哀楽を人類に与えている。文明の進歩と豊かな生活は、その陰として多くのアルコール依存症を生みだした。真の治療・回復・社会復帰は、身体の治療だけでなく、心の治療、社会的治療と人間性の回復にある。	榎本稔（榎本クリニック院長）	榎本稔（榎本クリニック院長）
4	薬の乱用と依存	麻薬、覚せい剤、シンナー、睡眠薬などの乱用は代表的な社会病理現象のひとつであり、現代人の心の健康と密接な関係をもっている。乱用の広がり、個体及び環境における要因、乱用によって起こる精神障害、規制する法律、対策と治療について解説する。	中谷陽二（東京都精神医学総合研究所参事研究員）	中谷陽二（東京都精神医学総合研究所参事研究員）
5	現代における異文化適応と不適応	(1)健常者に見られる文化受容過程 (2)移住者に見られる精神障害の特徴 (3)在日外国人の精神障害の諸問題 (4)中国帰国者の心の問題	江畑敬介（東京都立中部総合精神保健センター所長）	江畑敬介（東京都立中部総合精神保健センター所長）
6	地域精神保健システム	地域社会で生活する精神障害者に対する在宅ケア、居住の場の保障、働く場の保障、所得の保障などの社会資源の整備状況、そして、わが国の地域精神保健の現状と将来について概観したい。	浅井邦彦（医療法人静和会浅井病院院長）	浅井邦彦（医療法人静和会浅井病院院長）
7	心の救急	精神科救急を定義し、その精神医療における位置付けをカプランの予防精神医学の観点から行う。対象となる疾患と状態像を述べる。診断、治療過程の特徴を述べ、身体救急との相互依存性を指適する。地域医療戦略の観点から救急精神医療の課題と展望する。	土井荏史（都立荏原病院神経科医長）	土井荏史（都立荏原病院神経科医長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名 所属・職名)	放送担当講師名 (所属・職名)
8	家族の精神保健	家族を形成する世代内及び世代間の人間関係について社会変動との関連から考察する。特に、思春期青年がひき起こす非行、登校拒否、自殺未遂等の問題行動を通して家族の病理を探る。更に欧米で発達した家族療法についても簡単な説明を試みる。	内田千代子（東芝林間病院神経科医師）	内田千代子（東芝林間病院神経科医師）
9	職場のメンタルヘルス（精神保健）	人生のうちでも、最も活躍できる時期に、しかも、一日のうちでも一番活動的な時間を、多くの人達は職場で過ごしている。 仕事を通じて、健康で有意義な人生を送るために、職場での心の健康に焦点をあて、その問題と対策について述べる。	梅垣和彦（東京都総務局勤労部健康管理参事医）	梅垣和彦（東京都総務局勤労部健康管理参事医）
10	大学生の精神保健	戦後大学生の心の病として「五月病」の後に登場した「スチューデント・アパシー」を念頭におき、ここ２０年ほどの休学や退学の事例と統計から、現代の大学生（最終教育の対象）のアンデンディティー獲得の苦悩を描きたい。初等・中等教育の示唆にもなれば幸い。	中島潤子（茨城大学保健管理センター所長・教授）	中島潤子（茨城大学保健管理センター所長・教授）
11	生と死　①ターミナルケアー・ホスピス～残された人々への心理的援助～	ターミナルケアの概念とホスピスについて学び、あわせて死別による悲嘆への援助についてにも触れる。	宇田川雅彦（都立墨東病院神経科医師）	宇田川雅彦（都立墨東病院神経科医師）
12	生と死　②自殺とその予防	わが国では毎年およひ２万２千名の人々が自殺によって死亡し、この数は交通事故による死亡者数の２倍にも上る自殺の危険の高い人の心理社会的背景を検討するとともに治療法や対策などについて解説する。	高橋祥友（東京都精神医学総合研究所副参事）	高橋祥友（東京都精神医学総合研究所副参事）
13	精神保健法	1988年、従来の精神衛生法が改正され「精神保健法」が施行された。本年は同法施行後５年目に当たり、その一部が改正。今回の改正は社会復帰施設から地域社会へとさらに一歩進めた内容となっており、精神障害者地域生活援助事業（グループホーム）が法定化。	小林暉佳（（社会福祉法人）東埼玉・中川の郷施設課長）	小林暉佳（（社会福祉法人）東埼玉・中川の郷施設課長）
14	高齢者の精神保健	痴呆症には大別してアルツハイマー型と脳血管性といわれる２つのタイプがある。とくに近年、わが国では前者が増加している。これらの原因・症状や治療薬の現状、また在宅での介護に関わる問題などを扱う。	朝田　隆（国立精神神経センター武蔵野病院医長）	朝田　隆（国立精神神経センター武蔵野病院医長）
15	精神保健の今後の課題	以上の章のまとめと、今後に残された課題、また今後遅かれ早かれ問題となると考えられる事柄について説明する。	仙波純一	仙波純一

＝骨と関節の健康科学＝（R）

〔主任講師：青木虎吉（順天堂大学名誉教授）〕

全体のねらい

骨は身体を形づくる基幹であり、関節は運動の支点になるところである。まず、骨と関節の機能、その構造と成長のしくみ、姿勢と関節運動および骨と関節の代謝を学び、日常に多い外傷について理解を深め、とくにスポーツによる外傷と障害、骨と関節の病気、それらに対する機能の回復と健康保持の方策について学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	骨と関節の形態と機能	人体各部の骨はそれぞれ固有の形をしていて、あるものは内臓を保護し、あるものは身体の支柱の働きをする。骨の連結部で可動性のある部を関節といい、それぞれ特有の形でそれに応じた動きをすることを理解する。	青木虎吉（順天堂大学名誉教授）	青木虎吉（順天堂大学名誉教授）
2	骨と関節の構造と成長	骨の外周は緻密な骨皮質で形作られているが、その中はスポンジ様の海綿骨と骨髄と呼ばれる軟組織である。関節部分は軟骨組織で覆われていて滑動に適応している。この骨がどのようにでき、どのように成長するのか興味深いところである。	同　上	同　上
3	姿勢と運動および歩行	姿勢、関節運動、歩行などは骨と関節の問題だけではなく、筋、神経の関与することであるが、健常者のそれをよく観察し、さらに骨、関節を触れて健常な状態を理解しておくと、異常状態を判別することが容易になる。	同　上	同　上
4	骨と関節の代謝	骨はコラーゲン線維その他の有機マトリックスに主としてカルシウムとリンから成る無機塩が沈着してできており、関節は骨と骨が軟骨で接し運動に際して自由度が大きい。ホルモン、サイトカイン、物理的負荷が骨関節の代謝に影響を与え、その恒常性を保つ。	藤田拓男（神戸大学名誉教授）	藤田拓男（神戸大学名誉教授）
5	骨の硬化と粗鬆	骨ことに無機相の骨塩が増加したものが骨硬化、骨量主として骨塩量が減少するのが骨粗鬆化であり、後者の方がはるかに多く見られまた健康に対する脅威となる。骨粗鬆症には閉経後女性や高年男性に起こる原発性と、副腎ステロイド服用等による続発性がある。	同　上	同　上
6	骨と関節の先天性形成異常	骨と関節は遺伝および胎生期の障害による先天性の形態異常が多い。頻度が高くわれわれの生活に関係の深い疾患、先天性股関節脱臼、先天性内反足、筋性斜頸、その他の手足の変形、全身性の骨の異形成などについて学習する。	吉川靖三（筑波大学名誉教授）	吉川靖三（筑波大学名誉教授）
7	骨と関節の後天性変形	発育に伴って、あるいは成人になってから現れる形態異常、脊椎側弯症、脊椎後弯症、老人性円背、O脚、X脚、扁平足、外反母趾、うちわ歩行などについて学習する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	骨と関節の外傷	骨と関節の外傷は日常生活でも転倒や墜落などで起こり、交通災害、労働災害、スポーツ外傷の発生も多く、そのために不測の損失をもたらすものである。骨と関節の外傷として骨折、脱臼、捻挫、挫傷、創傷の病態と症状および応急処置について学習する。	吉川靖三	吉川靖三
9	上肢の外傷	鎖骨骨折、肩鎖関節脱臼、肩関節脱臼、回旋筋腱板損傷、上腕骨骨折、顆上骨折、外顆骨折、肘内障、橈骨遠位端骨折、手の腱損傷、突き指などの主な上肢の外傷について学習する。	同上	同上
10	下肢の外傷	大腿骨頸部骨折、大腿骨骨幹部骨折、前十字靱帯ほか膝の靱帯損傷、半月板損傷、下腿骨骨折、足関節の骨折と捻挫、アキレス腱損傷などの主な下肢の外傷について学習する。	同上	同上
11	体幹の外傷	頸椎の捻挫、脊椎の骨折と脱臼、脊椎損傷、腰椎の捻挫、肋骨骨折、骨盤の骨折などの体幹の外傷について学習する。	同上	同上
12	スポーツと骨・関節	スポーツは健康保持のためもあって一般に普及し、現今では各年齢層に広がってきた。競技種目として多くのものがあるが、種目別に特徴的に多い外傷と障害を理解し、その対応を考慮しておくことが大切であろう。	青木虎吉	青木虎吉
13	骨の病気	骨には先天性、外傷性、代謝性、炎症性、退行性、腫瘍性といった疾患があるが、ここではとくに炎症、退行変性、腫瘍による骨疾患について学習し、骨の健康について考察する。	同上	同上
14	関節の病気	関節に起こる疾患にも骨と同様の分類がなされるが、関節に独特の疾患もある。ここでは主要な関節疾患について学習し、関節の健康について理解を深める。	同上	同上
15	骨と関節の機能回復と健康保持のために	骨と関節の疾患の治療は、機能障害が起こらないように、すでに機能障害があれば回復するように努めるが、そのために自分でできる方法は積極的に行うこと。ただしやり過ぎないよう加減が大切である。健康保持の運動もこれを十分理解して行うべきである。	同上	同上

＝脳と生体統御（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：仙波純一（放送大助教授）〕

全体のねらい

脳は生体のすべての機能を制御する中枢である。脳を理解するには、分子生物学・神経系の機能・精神活動という異なった次元からの多角的なアプローチが必要である。この講義のねらいは、さまざまな分野での脳研究の現状を述べ、困難であるが最も魅力的な脳の機能を学ぼうとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	脳概論	脳科学を学んでいくには、まず脳の形態を知らなくてはならない。脳の構造とその名前などの巨視的なレベルから、脳を構成する細胞、神経細胞の形態と神経伝達などの微視的なレベルまで、脳の形態を中心に学ぶ。最後に脳の系統発生や個体発生などについて学習する。	仙波純一（放送大学助教授）	仙波純一（放送大学助教授）
2	脳の情報伝達Ⅰ	脳はからだの内部や外部からの情報を受けて、それに応答する。この情報の処理を担うのが神経細胞である。神経細胞どうしがどのように情報を伝えているかを、シナプスでのできごととして説明していく。まず、神経伝達物質と受容体について学習する。	同上	同上
3	脳の情報伝達Ⅱ	神経細胞が情報を受け取ると、さらに細胞内部に情報を伝え、それに対する応答として、何らかの生理学的な反応がひきおこされる。これを細胞内情報伝達系といい、近年急速に解明が進んでいる分野である。最近の知見を交えて紹介していく。	同上	同上
4	脳の分子生物学	最近、分子生物学の導入による医学研究の進歩には眼をみはるものがある。基礎神経科学、神経内科学の領域でも、遺伝子工学的手法を利用した研究成果が次々と得られている。主なものとしては、前章で述べた情報伝達機構が遺伝子レベルでとらえられるようになったことである。又、遺伝性神経疾患の遺伝子解析により病因遺伝子の同定が進んでいることである。更に、多因子疾患への遺伝子解析のメスも入れられている。	三好理絵（放送大学非常勤講師）	三好理絵（放送大学非常勤講師）
5	脳の可塑性と神経細胞脳死	脳の可塑性とは、脳が外的影響を受けた結果、その機能状態が持続的に変化する性質のことをいう。神経細胞は再生しないが、脳は固定的なものではなく、その可塑性は広い範囲にわたってみられる。遺伝子を介する長期効果も脳の可塑性の一部である。可塑性と神経細胞死は、情報伝達機構の上でも機能の上でも、密接に関連しあっている。可塑性を通じて、脳の機能を考えるのが、本章の目的である。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
6	脳の画像診断	「生きた脳の働きをなんとか外から眺めることはできないか」という科学者の望みは、最近の核技術や工学技術で可能になり、そのうちのいくつかはすでに脳の病気の診断にも使われている。この章ではいくつかの脳の画像化の技術を紹介していく。	仙波純一	仙波純一
7	脳と知能	人の人たる所以は知能の基本である記憶が言語機能などと結びつき、さらに、大脳連合野での制御、統合を受け、必要に応じて古い記憶は連合野に蓄えられるなどのプロセスを経過して、結果において、バランスのとれた行動を形成する点にある。海馬を中心とした記憶機能について、分子生物学のレベルでの研究も進んでいる。これらの点について概説的に述べることにする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	脳と情動	ヒトの怒り・驚き・喜びなどの強い感情は情動とよばれ、単なる主観的な感情だけでなく、表情や身ぶり、動悸や発汗などの身体の症状を伴う。この情動は脳のうちの辺縁系とよばれる部位が関与している。この脳内の情動に関する機構を学習していく。	仙波純一	仙波純一
9	脳と運動	我々が体を動かすという行為のための信号は、大脳皮質の運動領（運動野、運動前野、補足運動野からなる）から錐体路を通して脊髄、末梢運動神経、筋肉へと送り出される。そして、小脳はこの運動性伝導路の制御を司るコンピュータであり、大脳基底核は、小脳による運動の制御に、更に制御を加える役割を演じていると考えられる。我々が微妙な運動ができるのはどのようなメカニズムによるかについて述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
10	脳と感覚	感覚は、神経系の最も基本的な入力機能として、外的、内的環境からの情報を取り入れ、運動系との連動を通して、脳による生体統御の最も基本的な部分を営んでいる。感覚には、体性感覚、内臓感覚、複合感覚、特殊感覚などがあり、その情報伝達の様式もそれぞれの感覚に特異的である。感覚機能は、言語機能、脳の高次機能との連関により、人に特徴的な発達をしている。これらの点について解説する。	同上	同上
11	脳とホルモン	脳とホルモンの関係を研究する学問を神経内分泌学という。最近の脳研究の中でも注目を集めている領域の一つである。ホルモンは男女の脳分化を支配する。古典的には視床下部が脳におけるホルモンの支配中枢とされてきたが、近年、海馬がさらに視床下部よりも上位の脳におけるホルモンの最高中枢として研究の対象になっている。ホルモン様物質が脳で生合成されることも知られてきた。神経内分泌学の現状について述べる。	同上	同上
12	脳と薬	障害された脳の細胞の機能を補うために薬物が使われる。この薬物の基本的な機能は、神経伝達に対する作用で説明できる。脳に働く薬物は治療薬だけでなく、依存をひきおこすような薬物もある。これらの薬物の作用機序を学習していく。	仙波純一	仙波純一
13	脳と生物リズム	ヒトを含む生物には睡眠覚醒に代表されるように、活動にリズムを持ったものが多い。このリズムは脳によって自律的に生み出されていて、外界と相互作用することによって生物の活動は営まれている。生物リズムの統御器官としての脳を取り上げる。	同上	同上
14	脳の進化と発達 脳科学の歴史と現状	脳は、生体統御の中心であり、全身のホメオスターシスの維持から高次機能に至まで、複雑でかつ重要な多くの機能を担っている。本章では14章までの間に取り上げられなかった点を補足しながら、脳科学の現状と将来について述べ、まとめとする。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	脳とこころ	こころは脳の機能であることは明らかであるが、それではこころの働きとは何かという問いに対する答えは難しい。この最後の章では、いたずらに思弁的になることを避け、神経科学の立場からこの答えをどのように考えているかを紹介したい。	仙波純一	仙波純一

＝発がんとその予防＝（R）

〔主任講師：山本　雅（東京大学教授）
〔主任講師：鬼頭昭三（兵庫大学教授）

全体のねらい

がんは遺伝子の病気である。身体をつくっている一つ一つの細胞の中のがん関連遺伝子が様々に変異して、つまり遺伝子に傷が生じて、がんが発生する。何故遺伝子に傷がつくのか？がん関連遺伝子とはどのようなものなのか？最近の分子腫瘍学から得られた知識を背景に、病理学、疫学的観点からがんについて学び、最後にがんの予防について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発がん概論	煙突掃除夫の陰嚢がんの記述をはじめとするがん研究を歴史的に振り返りながら、化学発がんに関する研究、ウイルス発がんに関する研究を紹介し、そのような研究の一つの到達点としての分子腫瘍学に基づく発がんの原理を解説する。	山本　雅（東京大学教授）	山本　雅（東京大学教授）
2	遺伝子とがん（1）	RNA腫瘍ウィルスの発がん能が、ウイルスが有しているがん遺伝子に起因することがわかって以来、発がんを遺伝子のレベルで説明することが可能となってきた。そしてヒトのがん細胞では複数のがん原遺伝子、がん抑制遺伝子が変異しており、そのような変異遺伝子が共同してがんを作成していることが分かってきた。第2章から第4章では、がん遺伝子、がん原遺伝子、がん抑制遺伝子について、その機能を発がんとの関連に注目しながら解説する。	同　上	同　上
3	遺伝子とがん（2）		同　上	同　上
4	遺伝子とがん（3）		同　上	同　上
5	細胞増殖の調節	分子生物学の発達により癌抑制遺伝子の実体が急速に明らかになり、現在、癌抑制遺伝子の研究は癌の基礎研究のうちでも最もhotな研究分野となっている。本講義では、癌抑制遺伝子の産物による細胞増殖の調節機構について基礎から最先端の話題までを紹介する。	秋山　徹（東京大学教授）	秋山　徹（東京大学教授）
6	ウイルスと発がん（1）	がんウイルスは感染・増殖し、果てにはがんを起こす。白血病、肝臓がん、子宮がんの原因ウイルスなどについて、人から人への感染、増殖の様式、がんを起こす機構について分子レベルで解説し、予防を含めて今後の問題について述べる。	吉田光昭（東京大学教授）	吉田光昭（東京大学教授）
7	ウイルスと発がん（2）		同　上	同　上
8	がん病理の基礎	病理学とは、病気のなり立ちの解明を目的とする研究領域である。患者さんから切り取られた病変組織を取り扱うこと、顕微鏡などをもちいて形態を観察することなどが病理学でよく使われる技法である。がんが、この病理学という立場でどのようにとらえられるか解説する。	森　茂郎（東京大学教授）	森　茂郎（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
9	遺伝性のがん	遺伝性のがんの原因となっている遺伝子は大別して次の3種類に分類される；（1）癌抑制遺伝子（APC・家族性大腸腺腫症など）；（2）がん抑制遺伝子（RET・多発性内分泌腺腫瘍症2型）；（3）DNA修復遺伝子（遺伝性大腸がんなど）である。	中村祐輔（東京大学教授）	中村祐輔（東京大学教授）
10	がんの遺伝子診断	がんの遺伝子診断は（1）がんができる危険を予知するもの；（2）便や尿を用いてがんの存在を遺伝子レベルでみつけるもの；（3）がんがどの程度の悪性か、あるいは薬剤や放射線に有効かどうかを判定するなどの3つの目的に大別される。	同上	同上
11	がんの疫学	我国では、がん頻度の第1位は胃がんから肺がんに変わるなど、環境因子の変化に伴ってがんの疫学的な動態は活発に動いている。がん疫学は遺伝素因と外的環境との関わりを示す意味で重要である。外的因子からみた疫学調査と平行して、内的な立場から見たハイリスク遺伝子の分布とその評価、同定に関する研究もがんの疫学の新しい方向である。がんの疫学の持つ意味と現状について述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授）
12	がんと環境因子	発がんは長い時間をかけて、多段階を経て進行する複雑なプロセスである。幾重にも張り巡らされた防御反応をくぐり抜けてがんが成立する過程で、外的環境因子が、がん遺伝子、がん抑制遺伝子などに与える影響が大きな役割を演じている。この環境因子のうちで、食物および嗜好品の占める意味が大きい。食物と嗜好品を中心とした外的環境因子の立場から、がんの予防について論じる。	同上	同上
13	消化器のがんとその予防	高齢化社会の到来とともに消化器のがんの罹患率、死亡率が増加している。この要因として食生活を中心としたライフスタイルの関与が挙げられる。特に、食塩と胃がん、喫煙と食道がん、胃がん、アルコールと食道がん、食物繊維、脂肪と大腸がん等である。そのほか、近年肝がんに対する肝炎ウイルスの濃厚な関与が判明した。本稿では、これまでのライフスタイルと発がんの関連性の報告のうち確立され知見のもとに、実現可能な消化器がんの予防につき記載したい。	吉田豊（弘前大学長）	吉田豊（弘前大学長）
14	呼吸器のがんとその予防	肺がんは、タバコなど（外因）と癌遺伝子・抑制遺伝子（内因）が組合わさって出来る。タバコのみに出来易い肺がんとタバコのみでない人に出来易い肺がんが分かっている。予防については禁煙が大事だが、食事なども影響するらしい。	川上義和（北海道大学教授）	川上義和（北海道大学教授）
15	発がんの研究と健康科学	発がんのメカニズムは分子生物学の普及、進歩に伴って、DNAの修復機構の研究など、めざましい発展が見られる領域である。一方我々は、日常発がん物質に囲まれて生活している。発がんの分子メカニズムを知ることは、3人に1人ががんで死亡する日本社会で、最も今日的な教養の1つである。本章では発がんのメカニズムの研究の現状と将来を述べ、それが日常の健康科学の中にどの様に取り入れられるかについて論ずることとする	鬼頭昭三 山本雅	鬼頭昭三 山本雅

＝看　護　学　概　論＝（ＴＶ）

〔主任講師：ケイコ・イマイ・キシ（香川医科大学教授）〕

全体のねらい

看護を学び、その分野で活躍したいと思う方や、すでにその分野におられる方が、新しい時代のニーズに対応するよう、看護科学の概念を把握し、他の医療専門家達と共同をし、または独自な専門職として、発展していくための人間学としての看護理論、技術、考え方、看護に影響する文化の価値観についての紹介。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	看護科学序論	看護は人間を対象とする科学であり、そして技術、芸術である。人間の健康上の問題の反応が何であるか調べ、つきとめ、計画的に処理をし、評価する。医療チームの一員としての共同作用、又は看護科学の概念にもとづき人間的なケアを行うことの記述。	ケイコ・イマイ・キシ（香川医科大学教授）	ケイコ・イマイ・キシ（香川医科大学教授）
2	ライフサイクルからみた看護	健康状態は生から死まで、病気や障害がなくてもたえず変化している。発達段階、疾病の予防、健康教育、病気障害、リハビリのためのケア、死にゆく人とその家族のケア等についての記述。	同　上	同　上
3	環境と人間の相互作用	健康に影響する環境には外面的、内面的なものがある。物理的、化学的、生物学的、社会的、家族的、文化的なものから、心理的なものなど、人間と環境の相互作用がいかに、個人、家族、地域集団の健康上に影響をおよぼしているかを理解し、看護のケアを考える。	同　上	同　上
4	家族と看護	人間が生まれてから社会で一人前の成人になるまで、何らかの形で家族の影響を受けている。現代の家族は複雑で変形が多いが、個人のケアをする場合も家族を理解すると問題が明らかになりやすい。また、個人の健康上の問題で、家族のケアが必要になるという説明。	同　上	同　上
5	文化と看護	看護ケアの心髄は文化の中にある。看護を専門職として行う者は、その国の文化を理解し、地域の特徴、特に健康に関する考え方や価値観、風習、習慣を把握した上で、科学的なアプローチをとることの必要性を説明する。文化の相対性と普遍性についての影響の説明。	同　上	同　上
6	コミュニケーションと看護	人間のケア、看護ケアをするために、言語的、及び否言語的コミュニケーションの理論、知識、技術を学び、背後にある文化の意味するものを理解することにより、人間の健康上の問題の看護ケアをすることが大切であるということの説明。	同　上	同　上
7	健康上の反応と看護	健康と疾病をはっきりとわけることはむずかしい。人間の生態活動はたえず変化して、人間の健康状態はいろいろな刺激に対しての反応として現れ、変化をおこしている。 その変化の例として、成人病、救急な病気や障害、リハビリ等についての看護の対応。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	死と看護	死を学び生を生きる。健康の維持、回復の過程をとらずに疾病、障害、事故又は老衰で死に行く人に対する看護ケア、及び、その家族のケアについて説明する。死のケアをするために地域社会における文化、風習を知り、総合的医療組織、ホスピス等の説明をする。	ケイコ・イマイ・キシ	ケイコ・イマイ・キシ
9	看護の倫理と法律	看護は科学であり技術であるというが、対象が人間であるために、看護を実践していく時に倫理的観点をこころえる必要がある。つまり、プライバシーを守るとか、インフォームドコンセントについて、医療過誤について、看護はどういう対処するかの説明。	同上	同上
10	看護の技術	看護を科学的に実践するためには、人間の健康上の反応を検査し、データを集め、分析、分類し、問題を発見し、看護処理をするために計画をたて、計画を実行し、評価する。 この過程を看護過程と呼んでいる。ここではフィジカルアセスメントの技術が必要である。	同上	同上
11	看護の理論と実践	何故看護に理論が必要であるかを説明し、看護の知識体系をつくってきた理論が、看護の実践、教育、サービス、研究にどのような相互作用を与えてきたかを説明する。看護理論の例をあげ、説明を加える。	同上	同上
12	看護と看護研究	主な歴史的な研究の流れを説明し、看護研究の目的、意義、方法、結果、考察等について説明する。看護研究は看護実践にどうむすびつけるかを説明。	同上	同上
13	アメリカの看護	1946年以後、日本の看護の発展は米国の看護の影響を受け、現在にいたっている。二つの国は文化の相違を持ちつつ、看護において、人間のケアにおいて普遍的なものを見いだそうという努力がみられている。ここでアメリカの看護の紹介をこころみる。	同上	同上
14	地域社会における看護の役割	新しい日本の医療政策と制度、新ゴールドプランのなかで看護はどのような影響を受け、国民の健康を守り、維持し、増進し、ケアをし、患者の養護者として活躍するのであろうかの説明。	同上	同上
15	21世紀の看護	看護教育の大学化が進み、教育のレベルアップ、医療科学技術の進化、産業文明の高度化とストレス、高齢化社会という変化の中で、新しい役割を持ったナースプラクティショナー、ナース・スペシャリスト、ナース事業化など、200種類の新しいナースの役割が生まれた。	同上	同上

＝子ども家庭福祉論（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋重宏（駒沢大学教授）〕

全体のねらい

「ウェルフェア」から「ウェルビーイング」へという新たな理念、「児童福祉」から「子ども家庭サービス」へという新たなフレームワークから児童福祉を教授するためのテキストとして編集した。テレビの特徴を生かし、目で見て学ぶ子ども家庭サービス論としたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	今、日本の子どもと家庭は	・講義全体の解説と担当講師の紹介 ・現在子どもと家庭をめぐって起こっている問題や認識、現象などについて講義で取り上げる内容に沿って検討する。 子どもへの不適切な関わり 保育に欠ける子どもたち 学校生活と子ども（不登校、いじめ） 非行 思春期の問題（不定愁訴、摂食障害） 遊び場と機会を失う子どもたち 早期教育の問題	高橋重宏（駒沢大学教授）	高橋重宏（駒沢大学教授）
2	子どもの権利に関する条約	国連の子どもの権利に関する条約について解説し、新たな理念、子どもの権利擁護サービスのあり方について学ぶ。 ・ウェルフェアからウェルビーイングへ ・こどもの権利擁護（子どもの権利ノートなど）	同上	同上
3	児童福祉のあゆみ	(1)明治期以降児童福祉法成立までの法律および実践の紹介 (2)児童福祉法による児童福祉の実施体制の紹介 (3)戦後の児童福祉の展開 (4)児童福祉から児童家庭福祉への転換	山縣文治（大阪市立大学助教授）	山縣文治（大阪市立大学助教授）
4	子ども家庭施策の新潮流	平成２（1990）年６月のいわゆる「1.57ショック」以降、急速に加速しつつある児童福祉改革の動向について、政府、関係団体等による各種報告書をもとに整理し、児童福祉改革の展望について考察を進める。	柏女霊峰（淑徳大学教授）	柏女霊峰（淑徳大学教授）
5	児童福祉実施体制	児童福祉に関する基本法及び関連法の概要を押さえるとともに、児童福祉行政の実施主体、児童相談所等の主たる実施機関、児童福祉施設、児童福祉の費用、施策体系等について解説する。さらに、児童相談所の活動に焦点をあて、児童福祉実施体制の課題及将来展望について考察する。 ＜構成＞　行政機関、審議機関実施機関（児童相談所、福祉事務所、保健所、児童委員等） 措置制度（児童福祉施設入所のしくみ） 児童福祉施策体系、費用	同上	同上
6	児童福祉施設	児童福祉法に基づく児童福祉施設の現状と課題について検討する。 ①児童福祉施設の種類と内容 ②児童福祉施設の展開（戦後の数値） ③児童福祉施設の運営 ④児童福祉施設の実践 ⑤児童福祉施設の今後	山縣文治	山縣文治

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	保育制度とひとり親への支援	・わが国の児童福祉施策の中心となってきた措置制度による認可保育所による支援サービスの経緯と現状、今後の方向性について検討する。 ・母子を中心としてきたひとり親（母子・父子）家庭への支援サービスの経緯と現状、今後の方向性について検討する。 (1)制度の概要とその変遷 (2)現在の動きと今後の方向性	山縣文治 山本真実（愛育研究所研究員）	山縣文治 山本真実（愛育研究所研究員）
8	母子保健サービスと障害児童への支援	昨今、地域サービスにおける保健と福祉の統合への動きが高まりつつある。健常児および障害児に対する保健と福祉の連携の現状を具体的な事例を用いて示す中から、解決しなければならない課題を明らかにし、今後の展開方向を検討し学習する。	安梅勅江（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所研究員）	安梅勅江（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所研究員）
9	子どもへの不適切な関わりと子ども家庭サービス	子どもへの不適切な関わり（虐待・ネグレクト）について概説し、子どもの権利擁護サービス、子どもと親へのトリートメントの実態を紹介しながら、虐待・ネグレクトを予防するための啓発・教育のあり方を探る。	高橋重宏 柏女霊峰	高橋重宏 柏女霊峰
10	多様な子ども家庭サービスのメニューの広がり	従来は「保育に欠ける子」という考え方に代表されるように、健全育成に支障がある状態にある場合や具体的なケアを必要とする子どもや家庭に対してのみ支援サービスが提供されてきたが、社会の変化や生活の多様化に伴って生じた新しいニーズへの対応も求められている。多様なサービス発生の背景とその実態について紹介する。 ①多様な子ども家庭サービス出現の背景 ②多様な子ども家庭サービスの種類 ③多様な子ども家庭サービスの実践 ④多様な子ども家庭サービスの今後	山縣文治 山本真実	山縣文治 山本真実
11	子ども家庭サービスを支える人とソーシャルワーク実践	子ども家庭サービスを支えるヒューマン・パワーを紹介し、ソーシャルワーカーに焦点を当てつつその専門的な援助技法について検討する。	高橋重宏 山縣文治	高橋重宏 山縣文治
12	デンマーク　①	ＥＵにおける子どもと家庭施策のモデルとなっているデンマークの施策体系、サービス供給の実態などを、子どもと家庭に対する支援策の基盤となる社会的背景・動向、考え方や成り立ちなどを踏まえながら紹介する。	高橋重宏 山本真実	高橋重宏 山本真実
13	デンマーク　②	第２回目は個別サービスの状況を取り上げ、就学前や学齢期の子どもと家庭に対するサービスの提供状況、今後の政策的見通しなどを把握する。	同　上	同　上
14	カナダ　①	オンタリオ州における子どもの権利擁護サービス・システム（子ども家庭アドボカシー等）と児童保護援助協会の活動、イン・ケアにある子どもの生活（グループホーム）、ペープ資源センターの活動等を学習する。	同　上	同　上
15	カナダ　②	子どもへの不適切な関わり（虐待とネグレクト）の実態の解説と、子どもと親へのトリートメント機関とその内容を学ぶ。	同　上	同　上

＝障害者福祉論＝（R）

〔主任講師：三ッ木任一（放送大学教授）〕

全体のねらい

1981年の国際障害者年を契機として、わが国の障害者をめぐる社会的状況は大きく変化し、障害者施設もかなりの進展をみた。また、1993年の障害者基本法の制定は、障害者施策のあり方に更なる変革を促している。

障害があることが社会的不利にならない社会を実現するために、いま何をなすべきかを問い直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	障害者福祉の動向	国連による「障害者の福祉宣言」の採択、それに引き続く国際障害者年、国連・障害者の10年の実施は、わが国の障害者福祉を大きく進展させた。「障害者基本法」の制定は更なる変革を促している。この間の動向を概観する。	三ッ木任一（放送大学教授）	三ッ木任一（放送大学教授）
2	障害者福祉の理念	人権の尊重、リハビリテーション、ノーマライゼーション、自立生活、自立と社会参加の促進など、障害者福祉に関わるさまざまな理念を概観しながら、これからの障害者福祉がよりどころとする理念について検討する。	同上	同上
3	障害者福祉の対象	障害者福祉の対象は、身体的または精神的な機能障害を持ち、そのために日常生活や社会生活で困難を抱え、その困難を解決、軽減するために社会福祉の援助を必要とする人々のことである。この方向への近年の発展を整理しつつ、今後の課題を検討する。	佐藤久夫（日本社会事業大学教授）	佐藤久夫（日本社会事業大学教授）
4	障害者福祉の制度	わが国の障害者福祉の法・制度の体系は、障害種別毎に定められており、サービス供給のシステムも異なっている。主要な法・制度を概観しながら、福祉サービスの格差を是正する方策について検討する。	三ッ木任一	三ッ木任一
5	障害児の療育と教育	医学の進歩により障害者像が大きく変わろうとしている中で、早期療育や学校教育はどのような進展を遂げているのであろうか。その現状や課題を概観しながら、卒業後の社会参加を踏まえた教育のあり方を検討する。	石渡和実（東洋英和女学院大学助教授）	石渡和実（東洋英和女学院大学助教授）
6	障害者の在宅福祉	障害者福祉サービス体系の中で、地域での生活を支えるさまざまな福祉サービスの成立過程と現状を紹介し、今日特に注目されている地域福祉と在宅福祉との関係を整理しながら、今後の課題を検討する。	中野敏子（明治学院大学教授）	中野敏子（明治学院大学教授）
7	障害者の施設福祉	障害者福祉サービス体系の中で、従来最も中心的に展開されてきた「施設」という形態を利用した福祉サービスの成立過程と現状を紹介し、施設改革の動向を踏まえながら、今後の課題を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	障害者の雇用	「障害者の雇用の促進等に関する法律」への改正後、雇用状況がどのように変化してきたかを障害種別に概観する。また、重度障害者や高齢障害者への新しいサービスの動向にも触れ、雇用に関する課題と解決策を検討する。	石渡和実	石渡和実
9	障害者の福祉的就労	授産施設や作業所をめぐる最近の動向、精神障害者へのサービス、雇用への移行を目指した援助などについて概観する。また、より重度な障害者の日中活動の保障など、「職業観」の変化を踏まえた新しい流れを検討する。	同上	同上
10	障害者の地域活動	障害者基本法では、法の目的として障害者の自立と「あらゆる活動への参加」の促進を掲げている。地域で市民としての生活を繰り広げる上で不可欠なさまざまな社会参加の現状と課題を検討する。	中野敏子	中野敏子
11	障害者の社会行動	障害者、家族、関係者による組織的な取り組みは、障害者福祉を推進させる原動力となった。親の会活動、自立生活運動などの経緯と現状を概観しながら、当事者の果たすべき役割について検討する。	三ッ木任一	三ッ木任一
12	障害者の生活環境	障害者福祉の基盤は、それぞれの住まい、居住空間であり、近隣、地域であるといえる。生活しやすい、バリアフリーの住まいづくり、まちづくりの経緯と現状を概観しながら、生活環境整備のあり方を検討する。	同上	同上
13	諸外国の障害者福祉	1981年の国際障害者年以降、障害者問題を世界の共通の課題として取り組もうという気運が高まり、1993年のアジア太平洋障害者の10年の開始とともに国際交流がいっそう盛んになりつつある。欧米、アジア諸国などの障害者の生活と障害者福祉の状況を紹介する。	佐藤久夫	佐藤久夫
14	障害者福祉のマンパワー	障害者福祉には、社会福祉職員、介護福祉職員、理学療法士、作業療法士など多くの種類の専門職員や、障害を持つ当事者、家族そしてボランティアなどが関わっている。これらのマンパワーの状況と援助方法、チームワークなどについて検討する。	同上	同上
15	障害者福祉の展望	めまぐるしく転変する社会的状況において、障害者福祉は何をめざして進めばよいのか。これまでの学習を総括して、主要な課題とその解決への指針を検討し、21世紀に向けての障害者福祉のあり方を展望する。	三ッ木任一	三ッ木任一

＝高齢者福祉論＝（Ｒ）

〔主任講師：小笠原祐次（立正大学教授）
主任講師：山田　知子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高齢者福祉は今日の我が国にとって、社会的・経済的・政治的に重大課題となっている。高齢者の福祉課題の背景を、高齢者の個有の変化や社会的視野から検討を加えると共に、現状の高齢者福祉の制度や実態を分析し、その問題と課題を明らかにし、これから目前に迫る超高齢社会における高齢者福祉のあり方について考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高齢者の特性と福祉課題	加齢に伴う心身の虚弱化、社会的役割からの引退。健康、経済自立、身辺生活自立の喪失などによって、またこれらを支援する家族機能などの弱まりによって、高齢者の生活問題が発生する。これに対応する福祉課題を示す。	小笠原祐次（立正大学教授）	小笠原祐次（立正大学教授）
2	高齢者と家族	高齢者のひとりぐらし世帯や高齢者世帯が増加している。しかしそれは果たして高齢者側の主体的な選択の結果なのであろうか。家族と同居している高齢者は本当に幸せなのであろうか。高齢者と家族の関係について若い世代の扶養意識の変化などから考える。	山田知子（放送大学助教授）	山田知子（放送大学助教授）
3	高齢者の介護問題と社会的介護	寝たきりや痴呆など要介護老人の介護は、介護期間が長期・短期にかかわらず様々な介護上の問題が生活上の問題を生じることが多い。高齢者の介護に視点から家族の介護能力や家族への支援の在り方を考察する。	中村律子（中京大学助教授）	中村律子（中京大学助教授）
4	「老人観」と高齢者福祉の理念	老人福祉法では高齢者の定義はおおむね６５歳以上をもって高齢者としている。しかし社会の仕組みや文化の変遷に基づき、「老い観」や社会的対応も変化している。老いの意味や高齢者福祉の理念について考察する。	同上	同上
5	高齢者福祉制度の枠組とその展開	年金、老人保健制度、老人福祉サービスなど今日の高齢者福祉制度が、どのような法制度によって形づくられているかを見、それぞれの制度を概観し、それらの制度成立の歩みを見る。	小笠原祐次	小笠原祐次
6	高齢者の経済生活と所得保障	高齢者の所得保障の主柱である公的年金を中心に、わが国の近年の改革の趣旨、制度の仕組みの基本を踏まえた上で、国際的にみたわが国の制度の特徴点をあきらかにし、２１世紀にむけての課題について考える。	山崎泰彦（上智大学教授）	山崎泰彦（上智大学教授）
7	高齢者の健康と保健・医療制度	高齢者の健康問題については、老人保健制度が健康増進、疾病予防、治療、リハビリテーション等について総合的に対応している。そこで、高齢者の健康問題の所在を明らかにした上で、制度の解説を行い、若干の検討を加える。	小山秀夫（国立医療病院管理研究所医療経済研究部長）	小山秀夫（国立医療病院管理研究所医療経済研究部長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	高齢者の就労問題と就労対策	65際以上の4人に1人が「働いている」など高齢期の就労率は高い。高齢者雇用は高齢化社会における生産力の確保や高齢者自身のいきがいを高める視点から重要である。高齢者就労問題とその対応について考察する。	中村律子	中村律子
9	高齢者の住居と住環境	住宅や近隣環境の質は、高齢者の自立や介護負担さらに社会参加など生活に深く影響を及ぼし、在宅福祉の推進におおきく関わる。ここでは、高齢者の住宅や近隣環境へのニーズを明らかにし、高齢社会における居住環境に求められる基本的条件と施策の現状について概観する。	児玉桂子(日本社会事業大学教授)	児玉桂子(日本社会事業大学教授)
10	高齢者の生きがい対策	人はだれでも生涯、社会と関わりながら自己のもっている能力を発揮したいと考えている。高齢者と生きがいについて社会参加という視点から、就労や余暇の実態と施策の現状をふまえ、生きがいの創造のための基本的条件とは何かについて考える。	山田知子	山田知子
11	老人福祉の改革と老人福祉サービス体系	一連の社会福祉の制度改革の流れの中で、1990年「老人福祉法等の一部を改正する法律」が成立した。改正によって老人福祉サービス体系がどう変わったのかを明らかにし、高齢者福祉施策の新しい方向を模索する。	同上	同上
12	在宅福祉サービスの内容と方法	どのような身体状況にあったとしても高齢者が家族とともに、あるいは自立して住み慣れた地域で老後生活を過ごすことを支援する在宅福祉サービスの充実が重要である。その制度的枠組や内容や具体的方法を考察する。	中村律子	中村律子
13	施設福祉サービスの制度と方法	老人福祉サービスの中でも、最も重要な役割を果たしている老人ホームの制度やしくみ、施設における処遇の内容や方法、特に介護の方法について検討し、施設の地域福祉活動のあり方などについて考える。	小笠原祐次	小笠原祐次
14	住民参加型サービスとシルバーサービス	高齢化社会の進展と社会福祉の普遍化に呼応するように、わが国でも多様な福祉サービスの供給システムが出現してきている。その実態を明らかにするとともにその有効性と限界について考える。	山田知子	山田知子
15	これからの高齢者福祉の課題	超高齢社会を目前にして、高齢者福祉は年金や保健・医療の財源、それとの関わりからの制度のあり方、ゴールドプランの実現とマンパワーの獲得、福祉サービスの量的整備とサービスの質の課題など、問題が山積している。これらの課題について検討する。	小笠原祐次	小笠原祐次 山田知子 児玉桂子

＝現代の貧困と公的扶助（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：杉村　宏（北海道大学教授）〕

全体のねらい

社会保障制度の根底を支える公的扶助について、その成り立ちと現代社会における役割を考える。わが国の公的扶助は生存権を保障する生活保護制度であるが、この制度の役割や現状を、国民の生活問題としての貧困と関連させて考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「現代の貧困と公的扶助」の課題 －この講座のねらいと考え方－	この講座のテーマを「現代の貧困と公的扶助」とした理由について、貧困問題と公的扶助の現状と関わらせて説明し、あわせてこの課題を考察するための視角を提示する。	杉村　宏（北海道大学教授）	杉村　宏（北海道大学教授）
2	公的扶助とは何か －社会保障における公的扶助の位置と性格－	公的扶助は社会保障制度の重要な構成部分であるが、「社会保障の父」といわれたビヴァリッジの計画における位置付けを手がかりに、社会保険との違いと関連、および所得保障にとどまらない公的扶助「実践」の課題について検討する。	同　上	同　上
3	近代公的扶助の形成 －貧困・貧困観の変化と救済制度－	公的扶助制度の源流である救貧法の成り立ちと機能をイギリス救貧法の歴史を例に検討する。また19世紀末の労働者生活における貧困の原因究明を通じて、救貧制度が改良されていった経過を概観する。	同　上	同　上
4	戦争と社会保障 －人間観の転換と生存権の具体化－	私たちは20世紀の前半に２度の大戦を経験したが、その反省と教訓の上に「人間らしく生きる」権利としての生存権を獲得したと言える。失業と貧困を克服するための「戦争国家」と「福祉国家」の争点を考える。	同　上	同　上
5	戦前日本の救貧制度 －わが国の救貧制度の歴史的性格－	明治維新以後、太平洋戦争の終結までのわが国の救貧制度のあゆみとその特徴を、「恤救規則」と「救護法」の性格に則して考察し、その問題点をさぐる。	同　上	同　上
6	生活保護制度の目的と基本原理	わが国の生活保護制度は、生存権を保障することをその目的にしており、そのための基本原理を規定している。原理の背景と今日の社会状況における意義と問題点を考える。	同　上	同　上
7	生活保護制度のしくみと行政の役割 －柔軟な構造を生かす行政の責任－	生活保護法は、その実施に当たっての原則も規定しているが、それは極めて柔軟な構造を保障するものとなっている。こうした制度を生かすための行政の役割と責任について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	国民生活と生活保護基準	生活困窮を測るものさしとしての生活保護基準の変遷を、国民生活の変化と関連させて考察する。また生活保護基準による生活の問題点と賃金水準や社会保障給付水準との関連性についてもあわせて検討する。	杉村　宏	杉村　宏
9	生活保護行政の動向と被保護層－保護人員・世帯の推移と問題点－	生活保護制度は国民生活に密接に関連しているから、その動向は社会・経済の変化に敏感である．生活保護行政の変遷と生活保護を受けている人々の動向を概観し、生活保護行政の現状を考える。	同　上	同　上
10	要保護層の生活実態と生活保護（1）母子世帯の現状と生活保護	生活保護を受給しているか否かを問わず、保護を要する状態にある人々＝要保護層の生活と生活保護の現状を考える。とくに近年「女性の貧困」が社会問題化しているが、母子世帯に焦点をあててその現状と生活保護における問題を検討する。	同　上	同　上
11	要保護層の生活実態と生活保護（2）ホームレスの生活実態と生活保護行政	最近大都市圏で「ホームレス」が社会問題化しているが、こうした人々に代表される不定住的貧困層の実態と生活保護の関係を、わが国の社会福祉の歩みとかかわらせて考察する。	岩田正美（東京都立大学教授）	岩田正美（東京都立大学教授）
12	生活保護の施設福祉	生活保護は、在宅における所得保障の側面とともに、施設における社会福祉サービスの提供も行なっている。社会福祉施設の原点となっている保護施設の現状と課題を考える。	同　上	同　上
13	ケースワーカーのしごと（1）生活保護における社会調査	生活保護に携わるケースワーカーの主なしごとは、生活に困窮する人々の生活の場におもむき、保護の要否や程度、生活の建て直しにむけて何が必要かを調査し、援助することにある。調査の意義や方法、留意点ついて考える。（生活保護行政の一線で活躍しているケースワーカーにインタビューをする）	杉村　宏	杉村　宏
14	ケースワーカーのしごと（2）ケースワーカーの専門性	ケースワーカーの実践に必要とされる専門性について、現職のケースワーカーとともに考え、現状での問題点と今後のあるべき姿をさぐる。	同　上	同　上
15	生活保護の今後の課題	生活保護制度が、現代社会における公的扶助にふさわしいものとなるためには、今後解決していかなければならない課題がある。公平で公正な生活保護の実施のために改善すべき課題を検討する。	同　上	同　上

＝地　域　福　祉　論＝（Ｒ）

〔主任講師：大橋謙策（Ｈ本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

地域福祉は社会福祉における新しいサービス提供システムであり、実践方法である。地域福祉は社会福祉における地方分権化を前提として、居宅における自立生活を支援する在宅福祉サービスを軸に、地域住民の参加を得て福祉コミュニティを形成する実践である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会福祉の変容・発展と地域福祉の実態化	1.高齢化社会の到来と社会福祉問題の国民化・地域化 2.都市化・工業化に伴う家庭の介護・養育能力の脆弱化と地域福祉 3.社会福祉施設緊急整備計画とコミュニティ・ケア構想	大橋謙策（日本社会事業大学教授）	大橋謙策（日本社会事業大学教授）
2	１９９０年社会福祉改革と市町村地域福祉の時代	1.１９９０年８法改正の背景と要旨 2.市町村主義の意義 3.在宅福祉サービスの制度化の意義 4.「住民の理解と協力」の意義	同　上	同　上
3	地域自立生活の保障と地域福祉の考え方	1.自立生活の考え方 2.地域福祉理論の発展史 3.地域福祉の考え方と構成要件	同　上	同　上
4	在宅福祉サービスの考え方と家族介護力	1.在宅福祉サービスとレスパイトケア 2.在宅福祉サービスの施設福祉サービス 3.在宅福祉サービスの構成要件とあり方	同　上	同　上
5	在宅福祉サービスの供給方法のあり方と供給組織	1.在宅福祉サービス地区構想の意味 2.在宅福祉サービスとケースマネージメント 3.在宅福祉サービス供給組織の比較－社協・福祉公社、福祉事業団等	同　上	同　上
6	在宅福祉サービスのインフォーマルケア	1.在宅福祉サービスの利用意識と近隣住民 2.フォーマルケアとインフォーマルケアとの関係 3.孤独・生きがい問題とフォーマルケア	同　上	同　上
7	地域福祉の主体形成と福祉教育	1.地域福祉の主体形成の必要性 2.地域住民の福祉意識の現状 3.福祉教育の考え方とすすめ方	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ボランティア活動の構造とあり方	1. ボランティア活動の歴史と現状 2. ボランティア活動の構造 3. ボランティア活動の性格	大橋謙策	大橋謙策
9	地域福祉推進体制 (1) 社会福祉協議会	1. 社会福祉協議会の歴史的性格 2. 社会福祉協議会の現状 3. 社会福祉協議会の今後の課題	同上	同上
10	地域福祉推進体制 (2) 民生・児童委員制度	1. 民生委員制度の歴史 2. 民生委員制度の現状 3. 地域福祉推進と民生委員制度の課題	同上	同上
11	地域福祉推進体制 (3) 共同募金活動と民間財源	1. 共同募金の歴史と現状 2. 地域福祉推進における民間財源のあり方 3. 超高齢社会における負担問題と民間財源	同上	同上
12	地域福祉実践の方法 (1) 福祉コミュニティ形成の実践と方法	1. コミュニティ・ワークの展開課程 2. コミュニティ・ワークの目標 3. コミュニティ・ワーカーの役割と養成	同上	同上
13	地域福祉実践の方法 (2) 当事者の組織化とピアカウンセラーの役割	1. 社会福祉問題を抱える当事者の意識と問題の共有化 2. 当事者の組織化と社会的役割 3. ピアカウンセラー活動の意義と役割	同上	同上
14	地域福祉計画の理念と策定方法	1. 市町村社会福祉行政の計画化と地域福祉計画 2. 地域福祉計画の構成要件と考え方 3. 地域福祉計画のつくり方と住民参加の意義	同上	同上
15	地域福祉の歴史と国際比較	1. 日本における地域福祉実践の系譜 2. イギリスにおけるコミュニティ・ケアの発展史 3. デンマーク・スウェーデンにおける社会サービスと在宅福祉サービス	同上	同上

＝社会福祉の方法＝（ＴＶ）

（主任講師：三ツ木任一（放送大学教授）
主任講師：山田　知子（放送大学助教授））

全体のねらい

社会福祉の実践には、各種の専門援助技術が用いられている。本講では、各分野の主要な実践の展開例を通して、援助に関わる専門職員の役割と援助技術の内容を包括的に検討し、社会福祉についての理解を深めることをねらいとしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会福祉の方法とは	社会福祉の各分野における多様な実践を概観するとともに、社会福祉の専門援助技術の体系および内容について検討する。	三ツ木任一（放送大学教授） 山田知子（放送大学助教授）	三ツ木任一（放送大学教授） 山田知子（放送大学助教授）
2	児童福祉（1）～在宅子ども家庭サービスの展開とソーシャルワーク～	子どもの未来21プランの基調には「子どもの権利条約」と「国際家族年の原則」がある。そして新たな理念として、子どもと家庭（親）のウエルビーイングの促進が登場してきた。新たに制度化されつつある「子ども家庭サービス」の現状と課題について検討する。	高橋重宏（駒澤大学教授）	高橋重宏（駒澤大学教授）
3	児童福祉（2）～子どもの社会的養護と子ども家庭サービス～	法律による子ども家庭サービスを支える資源（児童館、保育所、養護施設、教護院、グループホーム、里親、情緒障害児短期治療施設）の現状を紹介し、これからの方向や課題を検討する。	同上	同上
4	児童福祉（3）～子どもへの不適切な関わりとファミリーサービス～	法律によらない、自発的な民間の子ども家庭サービス（自主保育、家庭養護促進協会、虐待 110番）を紹介し、これからの方向や課題を検討する。	同上	同上
5	障害者福祉（1）～地域リハビリテーションの展開～	総合リハビリテーションセンターによる地域リハビリテーションサービスの実際を紹介し、保健・医療・福祉の効果的な連携のあり方を検討する。	三ツ木任一	三ツ木任一
6	障害者福祉（2）～当事者による自立生活援助サービス～	障害を持つ人たちが主体的に運営する自立生活センターの活動を紹介しながら、自立生活運動の理念、自立生活を支える援助サービスのあり方を検討する。	同上	同上
7	障害者福祉（3）～施設生活から地域生活へ～	知的障害者の施設生活から地域生活への移行をめざすリハビリテーションシステムと、さまざまな居住形態に応じた地域生活援助の実際を紹介しながら、地域福祉のあり方を検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	高齢者福祉(1) ～施設での暮らしをどう支えるか～	高齢者への生活援助、介護とは何かについて考える。特別養護老人ホームにおける生活援助の実際にふれながら、寝たきり痴呆性によって重介護を要する状況になっても、人間としての尊厳を最後まで守られる援助の在り方とはなにかについて考える。	山田知子	山田知子
9	高齢者福祉(2) ～住宅での暮らしをどう支えるか～	在宅福祉サービス、とくにホームヘルプサービスの実践を通して、高齢者の在宅生活を支える援助の在り方について考える。高齢者の在宅での生活実態をどう把握するか、日常生活行為の自立状況や家族関係、生活リズム、住環境等を視野にいれながら、在宅での快適な生活を営むためにどのような援助が必要とされているのかについて考える。	同上	同上
10	高齢者福祉(3) ～地域で支える高齢者の暮らし～	情報の一本化、ニーズの掘り起こし、保健と福祉の統合、医療との連携、そして迅速な問題解決等について、行政の相談窓口に焦点をあてながら考える。また、地域住民による高齢者への生活援助、見守り活動の実際を通して、地域の人々によって高齢者の暮らしがどう支えられているか、地域に根付いた住民の活動の在り方について考える。	同上	同上
11	公的扶助 ～生活保護制度をめぐって～	社会保障の一環として、生存権保障の観点から重視されている公的扶助、とりわけ生活保護制度について、そのあらましや利用手続き等とともに、豊かな社会と言われる今日にどのような社会的意義をもつのか、その制度の役割や機能、課題等について学習する。	大澤　隆 (東洋英和女学院大学教授)	大澤　隆 (東洋英和女学院大学教授)
12	地域福祉(1) ～地域援助の方法～	ケースワークやグループワークに対して間接援助として位置づけられる地域援助とは何かを、コミュニティーワークの歴史と概念から検討する。具体的には「地域組織化」「福祉組織化」の活動を通して、高齢社会における地域支援ネットワークの課題を考える。	田畑光美 (日本女子大学教授)	田畑光美 (日本女子大学教授)
13	地域福祉(2) ～住民参加とボランティア活動～	地域福祉を構成する住民参加の意義と方法を検討し、参加型福祉と言われる在宅福祉サービスの実践を学習する。また、ボランティア活動の現代における意義と活動類型を分析し、地域福祉を推進する実践のあり方を考える。	同上	同上
14	福祉のマンパワー	高齢化社会の到来等の中で、社会福祉が国民的、普遍的課題として登場し、その担い手が多様化し、かつ専門的職業として期待されている。そこでこれらのいわゆるマンパワーの現状や課題等について、その制度的動向や養成の状況、問題点等を学習する。	大澤　隆	大澤　隆
15	社会福祉の方法の課題と展望 ～ぬくもりのある社会の創造と社会福祉実践～	社会福祉の方法についてのこれまでの学習を総括して、優先的に取り組むべき課題を検討するとともに、21世紀に向けての社会福祉の方法のあり方を展望する。	三ツ木任一 山田知子	三ツ木任一 山田知子

＝世界の社会福祉＝（ＴＶ）

〔主任講師：松村祥子(放送大学教授)〕

全体のねらい

世界中の多くの国で児童、障害者、高齢者、低所得者等に対する社会福祉活動が公私の領域で実施されている。産業化によって拡大した生活問題の緩和の為に社会福祉的方法を使うことは、20世紀の社会的合意と言える程広く多様に普及してきた。本講義では各国の問題状況の把握と福祉方法・課題の国際比較をし、我々が直面している福祉改革の大波を乗り切る方向を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	世界の社会福祉の現状	広い意味での社会福祉制度を何らかの形で有する国は約150ヵ国に達している。先進工業諸国では、介護や保育等に代表される社会福祉サービスがすべての人々の広範な生活領域で不可欠なものになっている。開発途上国では、飢餓や疾病等に対する社会的援助が強く求められている。相互依存の高まる国際社会の中で、地域的固有性と国際連関性を併せ持つ社会福祉の現状を世界地図の上に示したい。	松村祥子（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授）
2	世界の社会福祉の歩み	長い歴史の中で積み重ねられてきた社会的生活支援の為の実践活動は、一般的には選別的で治安維持的なものから普遍的で権利擁護的なものに変化してきている。19世紀末から20世紀初頭の欧米諸国から広がった「近代的社会福祉」の理念、対象、方法等が何故、どんな経路で、どのような変容を伴いながら世界中に広がったのか。社会福祉の世界史年表から検討してみたい。	同上	同上
3	アメリカの社会福祉	自立援助型といわれるアメリカの社会福祉の特色を、歴史と社会の全体像の中から描き出す。経済規模、人口数、文化的多様性等で世界有数のアメリカでは、人種問題、エイズ患者の発生、薬物中毒の蔓延、暴力の過激化等の社会福祉課題が増大している。社会福祉政策のみならず実践技術レベルでも新しい方策が要請されている状況を明らかにする。	平山尚（テネシー大学副学長） 武田尤（テネシー大学研究室員）	平山尚（テネシー大学副学長）
4	スウェーデンの社会福祉	社会福祉の世界的最前衛としてのこの国では、どのようなプロセスで高い質量の社会福祉活動が生み出されてきたのか。スウェーデン社会の構造とそこに暮らす人々の生活文化等も含めて検討したい。高福祉高負担型の福祉施策は、福祉サービスに対する社会的責任と個人の権利意識に支えられ、社会福祉の内実を豊かにしてきたが、現在では、経済や政治状況の変化とどう調和させていくかの課題解決も不可避となっている。	外山義（東北大学助教授）	外山義（東北大学助教授）
5	フランスの社会福祉	フランスの社会福祉活動の実働はアソシアシオンといわれる非営利組織によって担われている。年金、医療、家族手当の運営機関である社会保障金庫や行政組織とともにユニークな体系の中で多元的で柔軟性のある社会福祉が実現されている。「社会的連帯」をキーワードとするフランスの状況を、20世紀初頭からの高齢化の進展や第二次大戦後のヨーロッパの国際的地位の変化をも視野にいれながら示してみたい。	松村祥子	松村祥子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	タイの社会福祉	全人口の27％が貧困状態（1988年タイ政府統計）にあり、低所得者への援助活動はタイの社会福祉の中心課題である。特に急激な経済開発の影響を受けた農村地帯では、経済的貧窮だけでなく棄児や虐待等の児童問題、また売春や海外出稼ぎ等の女性問題そして家族的にも社会的にも安心できる生活支援を受けられない高齢者、障害者問題が拡大している。伝統的な生活様式の崩壊が進み、それに代わる新しい生活保障が未確立な中で模索される社会福祉の現状と課題を考究する。	高嶺　豊（国連障害者問題担当官）	高嶺　豊（国連障害者問題担当官）
7	日本の社会福祉	国民所得水準の上昇の陰で、人々の生活不安は高く、特にこれからの高齢社会への危惧は老後生活への不安を80％の人がもっている（1989年総務庁調査）ことからも分かる。第二次大戦後50年間に急速に発展した日本の社会福祉は、国際的にみるとどんな水準にあり、どのような特徴を持っているのだろうか。他の先進工業国と比べると、貧弱な児童手当や家族依存型の在宅福祉、そして厳しい資産調査を伴う公的扶助等の「後進性」と全国一斉に取り組まれている老人保健福祉計画などの「先進性」が混在する状況とその問題性を浮き彫りにする。	松村祥子	松村祥子
8	子どもの成長と社会福祉	生涯の基礎形成期である子ども時代のあり方は、それぞれの社会特性の象徴でもある。児童観の変遷をみると、子どもを親の私物視したり、未来の労働力としてのみ期待したりする段階から、子ども自身の成長・発達を第一義として家族と社会が協力する段階へと移行してきている。しかし各国の児童福祉の実際の状況は、「子どもの最善の利益」からはほど遠い施策や活動も少なくない。ここでは保育サービスなどの比較を中心に各国の共通点と相違点をみてみたい。	同　上	同　上
9	高齢者、障害者と社会福祉	先進工業国のみならず、世界中の多くの国で人口の高齢化が進んでいる。高齢期の生活費の確保や介護ニーズへの対応の仕方は、各国の高齢者観によって異なっている。また障害を持つ人の自立と社会参加を促進するための社会的支援策も施設福祉から在宅福祉、地域福祉へと広がってきている。 各国の高齢者、障害者への社会福祉活動の大きな推進力となった国連国際年の影響等も含めて、世界的動向を考察したい。	同　上	同　上
10	貧困と社会福祉	多くの国の社会福祉は、貧困対策ことに生活物資の欠乏による生活破壊を予防したり緩和することから始まったといっても過言ではない。先進工業国では、経済開発による一般的生活水準の上昇によって絶対的貧困は減少する傾向にある。しかし階層間の貧富格差や地域間で異なる貧困問題（過疎、過密地区の貧困や、国際的関係によって引き起こされる貧困等）が拡大している。日本の生活保護制度に相当する最低生活保障システムの各国の状況について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	家族、地域と社会福祉	社会福祉の形態や機能は、家族、地域の生活相互扶助力と大きな関係がある。世界の家族の状況はその規模（平均世帯人員２人から７人の幅）と所在（都市人口割合90％から５％の差）だけみても多様性に富んでいることが分かる。概して産業化が進むと家族間、地域間の生活相互扶助力は低下し、社会福祉等の社会的生活支援策が拡大する。しかし実際には各国の生活文化や社会政策のあり方も影響し独自の関係を生み出している事等を示しながら、それぞれの国の問題点と課題を明らかにする。	松村祥子	松村祥子
12	医療と福祉の連携	すべての人の「健康で文化的な生活」を目的にする社会福祉活動にとって、保健医療の充実は基礎的条件である。また、疾病予防や早期回復のためには適正な社会福祉活動が不可欠である。人々の生活の中では車の両輪ともいえる医療と福祉が、縦割り行政や関連職間の連携不足のために、サービスの欠落、重複、過剰等種々の問題を発生させている。何故連携が必要なのか、どのような形の連携が望ましいのかについてアメリカの事例を参考に述べてみたい。	平山　尚	平山　尚
13	社会福祉と生活環境	「施設ケアから在宅ケアへ」というのが、近年の社会福祉の方向となっている。「住み慣れた家で暮らし続けたい」という高齢者や障害者の希望も強く、又社会的保護を要する子どもにとっても安全でプライバシーの保てる生活環境としては個別住居が望まれている。社会福祉サービスの供給拠点としての施設と在宅それぞれの特徴を点検しながら、供給サイドと利用サイド双方の社会福祉環境形成のあり方を追求したい。	外山　義	外山　義
14	社会福祉の組織化	多くの自由主義諸国では、民間社会福祉と公的社会福祉は平行して存在し、相互補完的にその役割を果たしてきた。第二次大戦後のヨーロッパ諸国を中心に社会福祉の基礎的部分での公的責任性や専門性が強調されてきたが、1980年以降は民活化やボランティア活用の推進が一つの流れとなっている。 財政難、マンパワー不足、組織運営の非効率性等を克服するために試行されている各国の福祉改革の状況を示しながら、利用者にとっての最良の途を探りたい。	松村祥子	松村祥子
15	今後の社会福祉の課題と展望	社会福祉が真に人々の生活支援策として機能するためには、国際的に普遍化された課題と各国固有の社会状況から生じる課題の双方向的取組みが必要であろう。また、公的福祉施策のフレームと社会福祉活動実践の方法・技術がお互いに密接な連絡を取りながら、同時にそれぞれが自律した活動体系の下で発展しなければならない。本講義で取り上げた各国、各領域の社会福祉状況を踏まえて今後の方向を展望する。	同上	松村祥子 平山　尚 外山　義

＝高齢社会の生活設計＝（R）

〔主任講師：本間博文（放送大学教授）
主任講師：松村祥子（放送大学教授）〕

全体のねらい

生活水準の向上、社会保障の発達、医学の進歩などによってもたらされた「個人の長寿化」と「社会の高齢化」は、人間の能力と活動の可能性を広げ、人の生き方や社会のあり方を変化させている。高齢社会では、絶対的にも相対的にも急増する高齢者への対応にとどまらず、社会経済の総合的なシステムの転換も含めた全国民的課題としての生活設計が必要とされている。

本講義では、高齢社会の諸相をできるだけ正確に描写し、そのような社会において、各世代の人はいかなる生活課題を有し、その解決のためにはどんな生活設計が必要であるのか。そのための情報を可能な限り適切に提供することをめざしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高齢社会とは	高齢人口の増加と年少人口の減少を特色とする高齢社会では、生活様式の個人別化や多様化が進み、それに付随して現れる様々な生活問題への個人的、社会的対処が必要となってくる。特に、生産・開発主義優先の高消費型社会から、自然と人間生活の調和をはかる新しい生活原理と社会システムが求められている。	松村祥子（放送大学教授）	松村祥子（放送大学教授）
2	高齢者とは	加齢変化の内で萎縮性退行性の性格を持つものを老化という。遺伝子的にプログラムされた一次性老化と、環境化因子などによって左右される二次性老化に分けられることが多い。脳という肉体の老化の結果として心理的精神的変化が起こる。細胞、組織、臓器、個体にとっての退行性の機能低下としての老化は、高齢に至って初めて現れるものではなく、ヒトでは20才の頃一斉にスタートし、その後絶えず進行するプロセスである。その結果としての高齢者の肉体的、精神的変化について述べる。	鬼頭昭三（兵庫大学教授） 仙波純一（放送大学助教授）	鬼頭昭三（兵庫大学教授） 仙波純一（放送大学助教授）
3	家族生活	高齢社会における長寿化と少子化の現象が個人の家族的関係のあり方にもたらす変化として、①親子関係の長期化（半世紀にわたる親子関係）、②家族内における親子関係の単純化（特定化）、③家族関係の多世代化の3点をとりあげ、諸統計をもとに述べる。また未婚化・子どもをもたない夫婦の出現との関連から家族外生活者の増大についてもふれる。	嶋崎尚子（放送大学助教授）	嶋崎尚子（放送大学助教授）
4	家庭経営	生涯発達、自己実現に資する家庭経営上の課題を、①生活標準化作用を受けやすい高齢世帯、②就労引退と家庭経営、③高齢者介護サービス、④世代の違いによる自己形成力（家庭経営技術と生活目標）、⑤世代間・次世代間平等からとりあげる。	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）	清野きみ（北海道教育大学名誉教授）
5	社会参加	高齢者の社会参加について、就労・地域活動という面から考える。高齢者の就労実態、シルバー人材センターや老人クラブの活動、高齢者協同組合などの新しい取組を紹介しながら、高齢者自身が地域社会の新しい担い手としてどう社会とかかわっていくか、これからの高齢者の社会参加のあり方を考える。	山田知子（放送大学助教授）	山田知子（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	衣生活	衣服は人の外観を造るものであるところから、人々の商品選択には、衣服の外観的品質に重点が偏りやすい。快適な生活の創造に向けての商品選択や消費者要求のあり方について、衣生活を中心に考える。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授）
7	食生活	高齢社会において、特に高齢者は健康であることが老後の幸せの鍵になるといっても過言ではなかろう。健康で長寿を全うするためには青年・成人期、いや発育期からの適切な食生活が不可欠である。この章では、健康な高齢期を迎えるために大切な、発育期からの食生活設計を概説する。	今井悦子（放送大学助教授）	今井悦子（放送大学助教授）
8	住生活	高齢社会における諸問題のかなりの部分が、住まいの問題に起因するといって過言ではない。そして住まいの問題は、結局のところ高齢者家族のあり方と密接な関わりを持つことも自明である。住まいを通して今後の高齢者の家族の動向を考察し、その結果に基づいた住宅改善の方向を探る。	本間博文（放送大学教授）	本間博文（放送大学教授）
9	余暇活動	①余暇と余暇活動の意味づけ、②余暇活動の実態、③高齢者と余暇活動（実態と希望）、④高齢者と運動（老化と運動、高齢者のトレーナビリティ）、⑤高齢社会におけるスポーツ	渡邉融（放送大学教授）	渡邉融（放送大学教授）
10	医療	老年期になると、心身ともどもいろいろな病気にかかりやすくなる。統計的にみても、ガンや心筋梗塞による死亡が増え、脳では脳梗塞や老人性痴呆などが始まり、一部の疾患については、現在でもその進行が不可逆である。本章では老年期に特徴的にみられる疾患とそれに対する医学的な対策を述べるだけでなく、社会的な観点から医療あるいは福祉制度としての老人医療を考えてゆく。	仙波純一（放送大学助教授）	仙波純一（放送大学助教授）
11	社会福祉	高齢社会の社会福祉は、高齢者の福祉にとどまるものではない。だれもが必要に応じて福祉サービスの受け手になることからも、すべての国民に共通する生活課題なのである。エンゼルプラン、新ゴールドプラン、障害者プランを中心として、生活者自身が主体的に参加する、権利としての社会福祉のあり方を検討したい。	三ツ木任一（放送大学教授）	三ツ木任一（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	生まれる	高齢社会は高齢者だけの問題ではない。社会全体が成熟し、変容していく過程で、高齢者の比率が高まるという現象が顕在化してくる。新しい生命を、社会としてどのように保障するのか、わが国の今後の社会に与えられた重大な課題である。	古谷博(昭和女子大学講師)	古谷博(昭和女子大学講師)
13	生きる	人生100年87万3600時間を、人間の発達と生活の安定のためにどう配分すればよいのだろうか。生活費、生活時間、生活空間、生活意識の変化をたどりながら、我々の置かれている生活環境の特徴を明らかにするとともに、そこで生きることの積極的意味を考察してみたい。	松村祥子	松村祥子
14	死からみた生	人は、死を意識しながら生きている唯一の生物である。細胞の死、固体の死はそれぞれ固体の保持、種族の維持の為に必要な合目的現象である。主として生物学的立場から、細胞死及び固体死の持つ意味について論じ、それを基盤として、ヒトの死のもつ社会的、文化的意義についても論じる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	高齢社会の生活設計	高齢社会を暗くて、展望の持てない深刻な社会が到来すると考えるのは間違いである。各回の講義内容を踏まえて、日常生活の各分野にわたって普段から目標を立て、自助努力を怠らず、なおかつ充実した公的な支援体制を整備することによって、国民等しく豊かな老後を過ごすことが出来るような未来社会のあり方を考える。	鬼頭昭三 本間博文 酒井豊子 松村祥子	鬼頭昭三 本間博文 酒井豊子 松村祥子

＝近代社会と人生経験（'９９）＝（Ｒ）

（主任講師：正岡寛司（早稲田大学教授））
（主任講師：嶋崎尚子（放送大学助教授））

全体のねらい

近代人近代社会は、前近代の伝統や生活様式を破壊し、そして別のさまざまに新しい生活様式をつくりだし、それらを制度化してきた。講義では、近代社会において広く普及した事柄を取り上げるが、その際とくに人びとが人生において経験する出来事のタイミングや出来事の配列に注目しながら、近代社会の特徴とその変化の趨勢を記述し、説明することに主眼をおくことにする。

講義では、近代人にあらわれた人生経験の特徴を、信頼できる時系列データ —— 個人のパネルデータやコーホート法による出来事経験データ —— によって明らかにしていく。そのデータは、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本で長い年月をかけて収集された貴重な資料からなっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代社会の生成と変容	最近100年間における人間生活ならびに人生の組織化にあらわれた変化は、これに先立つ数千年の間にあらわれた変化をはるかに凌ぐものであったかもしれない。たとえば、人間の平均寿命もこの間に著しい伸長をみせた。人生の延長は人びとにいったい何をもたらしたのか。	正岡寛司（早稲田大学教授）	正岡寛司（早稲田大学教授） 嶋崎尚子（放送大学助教授）
2	近代化とライフコース	人が時間のなかを生きるのではない。むしろ、人の経験が時間を作りだすのだ。近代人の精神的特徴は、その時間意識の強さ、厳しさ、そして重要さにある。近代社会に先立つ牧畜・農耕社会において、人びとは自然のサイクル時間を生きていた。産業社会は時間の正確な測定、時計の普及から始まった。現在では、時間は人びとにとって、貨幣にまさる価値をもっているかもしれない。それゆえ、人生の時間的組織化は誰にとってももっとも重要な人生課題である。	正岡寛司	正岡寛司
3	経済恐慌と子ども、そして家族	子どもは家族・家庭を介して全体社会・時代と接触する。子ども期における大きな歴史的出来事との遭遇は、子どもの生活をどのように変えるのだろうか。また彼らのその後の人生経験にどのような刻印を押すのだろうか。大きな外的圧力を受けたとき、子どもはどのように大人になっていくのだろう。子ども期に大恐慌を経験した者たちの人生経験をとおして考えていく。	嶋崎尚子	嶋崎尚子
4	学校キャリアと職業キャリアの選択	教育を受けることは、個人が近代社会において自らの人的資源を獲得するための経験である。教育経験がその後の職業選択の分岐に対して構造的にもたらす影響をイギリスのＮＣＤＳデータを用いて考察する。学校での位置は、その後の人生経験をどれほど広げるのか、あるいは狭めるのか、敗者復活はあるのか、構造上の位置の連結（パスウェイ）の揺らぎから考えていく。	同上	同上
5	近代青年の役割移行	青年期、あるいは／そして若者期が社会制度として成立し、そして世界的規模で広く普及したのは近代、とくに20世紀の現象である。青年期には達成すべき生活課題が含まれている。親の家族からの独立、学業あるいは職業訓練の修了、労働力への参入、そして結婚と家族形成である。本章では、期待される役割移行の順序と、その期待から外れた場合の社会的効果について考察する。	正岡寛司	正岡寛司
6	結婚と離婚	青年期あるいは／そして若者期を経過した若い成人は、配偶者をみつけて結婚し、やがて次の世代を再生産する。このような世代間の再生産過程をとおして人間社会は時間的に継続していく。近代社会はこの社会的再生産過程に大きな転換をもたらした。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	人生の転機	人びとはその人生航路においていくどかの大きな軌道修正の出来事・状態（転機）を経験する。転機となる出来事はさまざまである。それらの中の１つに、自分自身が選択したのではない種類の社会的事件、たとえば戦争や経済的大不況によってもたらされる予期せざる変化や転換がある。戦争の効果はその時代を生きるすべての人びとになんらかの影響を与えるが、その時期を青年期において遭遇する若者たちは直接的に戦争に動員されていく。	正岡寛司	正岡寛司
8	働く母親の心理的福利と社会環境	20世紀、とくに第二次世界大戦以降における社会的変化のうち、もっとも顕著な趨勢の１つは女性の労働力参加、とりわけ乳幼児をもつ母親たちの就業参加である。若い母親たちの就業継続は家族における性別役割分担にいかなる変化をもたらしたか。また、若い母親たちの心理的な満足度は就業を継続することによってどのような影響を受けたか。そして、若い母親たちの満足度は国家政策の改善策によって高まったかどうか。本章では、スェーデンのパネルデータを用いて若い母親および父親について考察する。	同上	同上
9	サラリーマンの昇進	近代産業社会においては、個人の職業キャリア（職業生活）は企業組織間・内の職位や職務の移動に特徴はづけられる。終身雇用制・年功序列制雇用慣行システムを擁する日本企業社会にあって、サラリーマンはどのようにピラミッド型の職位・職務体系を移動していくのだろうか。大企業ホワイトカラー男性社員の人事管理データに基づいて、その日本固有のメカニズムを明らかにする。	嶋崎尚子	嶋崎尚子
10	家族時間の意味	基幹産業を支える多量なブルーカラー労働者。彼らの職業生活は、家計経済の家族戦略に組み込まれた形で展開していく。近代社会の産業勃興の歴史は、ブルーカラー労働者と彼らの家族のライフコースにほかならない。アメリカ合衆国1830年代から１世紀にわたる紡績産業の盛衰と労働者・労働者家族の事例から産業勃興期におけるブルーカラー労働者と家族の人生経験をみていく。	同上	同上
11	中年期の親と子どもの離巣過程	人生に組み込まれた生活段階のうち、子ども期、青年期、そして老年期についてかなり多くのことがわかっているが、中年期についてはあまり多くのことがわかっていない。「中年」という言葉が示すように、その意味は人生の中程の期間をあらわしているだけで、その内容は明確でない。本章では、子育てと親の介護という２つの重大な社会的役割を遂行しながら、しかも自身に身体的・精神的な変化の兆候があらわれ始める中年の親、とくに母親を取り上げる。	正岡寛司	正岡寛司
12	定年退職と家族の生活段階	定年退職はそれまでの成人期を通して生活の中心的領域を占めてきた職業生活に別れをつげることの第１歩である。出来事としての定年退職、そしてその前後のキャリアのありようは、家族の生活段階（家族時間の進行）と共時性をもつ。働くこと（仕事）と愛すること（家族）という近代社会の人生テーマが結実し、収穫される時期である。ホワイトカラー・サラリーマンのデータから考察していく。	嶋崎尚子	嶋崎尚子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	高齢期への移行と生活満足	近代における2つの側面における劇的な変化、すなわち個人の寿命の著しい伸長と福祉国家の形成とは、高齢者の生活に劇的な変化をもたらした。しかしだからといって、パーソナルな面における世代間関係のニーズと欲求が低下しているわけではない。定年退職をした子どもたちが超高齢の親たちの介護にあたるという現象も稀ではなくなった。	正岡寛司	正岡寛司
14	高齢者のライフスタイルと未亡人期への移行、そして死	高齢者のライフスタイル、および既婚女性の未亡人期についてパネルデータを用いて考察する。その際、とくに先行要因が現在のライフスタイルにいかなる影響を及ぼしているかに焦点を合わせる。また、人生の最後に必然的に訪れる死は、死にゆく当人のみならず残された家族や友人にとっても危機的移行であるとみなされる。死に方にも近代社会は大きな影響を及ぼした。	嶋崎尚子	嶋崎尚子
15	ポスト・モダンと社会文化的ライフコース	近代社会における人生経験過程への具体的な研究を詳細に考察することからえられた成果ならびに残された課題を提示する。とりわけ日本における今後の研究展開の方向性と可能性を探っていく。	嶋崎尚子	正岡寛司 嶋崎尚子

＝着ごこちの追究（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：田村照子（文化女子大学教授）
主任講師：酒井豊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

健康で快適な衣生活を実現・維持するうえに重要な衣服等の着心地について、衣服の構成・構造や、素材の性能についての認識と、人の体系・寸法や感覚・生理の理解に基づいて科学的に追究し、着心地の良さを、人間と衣服の感覚的・生理的適合の面から明確にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	着ごこちのよさとは	衣服に期待されるさまざまな機能を概観し、その中における着心地の位置づけを考察する。着心地を人の感覚との対応について追究する科学の範囲と内容について概説する。	酒井豊子（放送大学教授） 田村照子（文化女子大学教授）	酒井豊子（放送大学教授） 田村照子（文化女子大学教授）
2	衣服と皮層　①肌ざわりと着ごこち	肌触りに関係する衣服の要因とその評価法を概説する。また衣服の汚れ吸収性と衣服の快適性との関連について触れる。	丹羽雅子（奈良女子大学学長）	丹羽雅子（奈良女子大学学長） 酒井豊子
3	衣服と皮層　②安全性をめぐる諸問題	衣服による皮膚障害、皮膚アレルギー、衣服のダニ、衣服による紫外線防御等、衣服と皮膚の安全性を巡る諸問題を取り上げ考察する。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
4	衣服と身体寸法	個人個人の身体寸法に適合した衣服製作の基本概念、体型・寸法の把握方法、体型分類、ならびに、既製服サイズの現状について概説する。	松山容子（大妻女子大学教授）	松山容子（大妻女子大学教授） 酒井豊子
5	衣服圧と身体拘束	衣服による身体拘束の指標となる衣服圧のメカニズムと測定方法について述べ、衣服圧が身体に及ぼす悪影響や振動抑制、血液循環促進等の作用について考察する。	田村照子	田村照子 酒井豊子
6	ヒトの体温調整機能	着心地のよさを、人間の温熱生理的適合性の視点から理解する基礎として、温冷感受性、皮膚温調節、発汗調節などヒトの体温調節の仕組みについて概説する。	同上	同上
7	衣服による体熱放散調節	衣服による保温と放熱の機構を考察し、暑熱・寒冷環境下での快適な着心地について、衣服の素材、形、着方などの面から考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	衣服と水分蒸散	不感蒸散や汗の放散に衣服がどのように関わるかを理解し、水分移動に関し快適な着心地を担保する衣服素材の性能について理解を深める。	田村照子	田村照子 酒井豊子
9	環境適応と衣服	特殊環境を含むさまざまな環境条件下における、快適衣服内気候形成のための衣服の選択と着装について考察し、気候・風土と密接に関わって成立してきた衣服・服装の実例を世界の民族服の中から検証する。	道明三保子(文化女子大学教授)	道明三保子(文化女子大学教授) 田村照子
10	着ごこちの耐久性	着用・洗濯の繰り返しによる衣服性能のさまざまな変化を着心地の劣化、あるいは、着心地性能の維持という視点から考察する。	酒井豊子 丹羽雅子	酒井豊子 丹羽雅子
11	身体ハンディキャップと衣服	病床にあるときの衣服、身体の不自由に対応した衣服等について、さまざまな事例を見ながら、着用者にとって、あるいは、介護者にとって快適で便利な衣服を考察する。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
12	寝ごこちのよい寝衣・寝具	脳波等の生理反応による眠りの質の観察と、保温、透湿、体圧分布などの面から、快適な眠りを得るための寝具・寝衣の役割と条件を考察する。	田村照子	田村照子 酒井豊子
13	スポーツと衣服	さまざまなスポーツの分野で、ウエアの改良が記録の更新に貢献している。スポーツウエアにおける素材・形・寸法などの工夫の例を取り上げる。	酒井豊子	酒井豊子 田村照子
14	快適な履物	解放性履物、閉塞性履物などのタイプ別に、歩行補助道具としての機能性と、通気性保温性などの観点から快適性について考察する。	眞家和生(大妻女子大学講師)	眞家和生(大妻女子大学講師) 酒井豊子
15	着ごこちの追究 －今後の課題	人間の活動の広がりに対応して衣服に期待される安全性、快適性の考え型と、資源・環境問題、情報化、国際化、高齢化などに対応した今後の方向について考察する。	酒井豊子 田村照子	酒井豊子 田村照子

＝地域と食文化（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）〕

全体のねらい

日常営まれる食生活は、地域によって用いる食材、調理・調味の仕方、供食形態等に相違がある。また日本各地には、郷土食として長く伝承されて来た独特のすぐれた食物が数多い。こうした地域が生み育んだ食文化を通して、地域間の相違、特色、変化を学び、地域と食文化との関わりを理解することが本教科のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域と食文化との関わり	食の文化は時代、階層、地域によって、それぞれ異なった特徴を示すが、なかでも食生活が営まれる地域の気候や風土、産物等との関わりや影響が大きい。これにより独自の、独特の文化が生まれ、これが波及し伝承されて一つの文化圏が構築されることを講義する。	石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）	石川寛子（武蔵野女子大学短期大学部教授）
2	主食の変遷と地域性	日本の主食は、古くから米が中心であったといわれているが、その種類や形態は、時代、地域、階層により異なっている。時代によるちがいを学ぶとともに、近世、近代を中心に地域による主食の種類・形態のちがいをその特徴およびその形成要因について考える。	江原絢子（東京家政学院大学教授）	江原絢子（東京家政学院大学教授）
3	粒食の地域性（米・麦・雑穀）	日本において日常食の中心となった「飯」は、米・麦・雑穀などを粒のまま利用したもので、このような形態を「粒食」とよぶ。各地域で伝統的に食べられてきた粒食について日常食、行事、儀礼食における特徴とその食べ方を学び、地域の特性を考える。	江原絢子	江原絢子
4	粉食の地域性	穀類の摂取については、米を中心にした粒食と小麦を中心にした粉食に大別される。粉食においては、パンと麺がその大部分を占め、全国的に画一化している。しかし、調理の仕方や食べ方には地域の独自性がみられる。こうした地域性や主食における粉食の地位について考察する。	三田コト（長野県短期大学教授）	三田コト（長野県短期大学教授）
5	芋食の地域性	自生のやまいもと稲作以前に伝来したさといもを儀礼食とする地域は多い。さつまいもとじゃがいもは江戸時代救荒食品として広まり、前者は西日本の食糧供給の安定化に貢献し、後者は洋風料理と共に普及した。生食の他、保存・加工の地域特性にも言及する。	大坪藤代（長崎女子短期大学助教授）	大坪藤代（長崎女子短期大学助教授）
6	豆利用の地域性	日本の食における豆の利用は、特に大豆において多彩であり、重要である。普遍的に分布する豆腐に対して、未熟大豆の食用が東日本に偏在する如く、その利用の仕方に地域性が認められる。大豆を主にしながら、豆利用の地域性について解説し、考察する。	本間伸夫（県立新潟女子短期大学名誉教授）	本間伸夫（県立新潟女子短期大学名誉教授）
7	野菜果物摂取の地域性	日本列島の南北への広がりと多様の気候のもとで、それぞれの風土に適した野菜・果物が栽培されてきたが、水分多く軟質のため輸送・貯蔵に不適であるので、産地での消費が原則であった。野菜・果物摂取の地域性を風土、生産、消費の立場から解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	魚食の地域性	四面を海に囲まれ、また河川・湖沼に恵まれたわが国では、古くから各地に水準の高い魚食文化が展開している。これについて解説するとともに、その中から代表的な魚食形態をいくつかとりあげ、その分布状況を地域的に考察し、魚食の地域性について考察する。	石川寛子	石川寛子
9	肉食の地域性	肉食禁忌の長い歴史を持つわが国では、山鳥・鯨以外は摂食形態の地域性は薄い。とはいえ、明治の解禁時の農耕家畜の種類や、中国との交流等が反映し、肉の種類に地域性がみられる。また外国の料理を伝統的な調理法で適応させ、独自の発達をしたありさまをみていく。	大坪藤代	大坪藤代
10	味付けの地域性	日本料理の味つけは、みそ、しょうゆなど発酵性調味料が中心となっているが、その使い方には地域による特徴がみられる。うどんなど麺類の味やみその味の違いなど地域による味つけの特徴的事例をあげながら、その地域分布と要因などにつて考える。	江原絢子	江原絢子
11	茶菓子文化の地域性	中世以降、各地の美しい風物、器物を模した煉物、焼物、半生物等、銘菓が続出し、同時期の「茶の湯」の発達と「一服の茶」の伸展にともない、全国に広まった。この菓子と茶の二つの分布を地図上で重ね合わせ、これらが織りなす文化の地域性について考察する。	石川寛子	石川寛子
12	餅の地域性	日本において餅は、古くからハレの日の食物として、さまざまな種類の、さまざまな形態の餅が生活の中にとり込まれてきた。ここでは「半つぶし餅」「搗餅」「粉餅」「混ぜ餅」等の餅の形状と用途、そして食べ方を通して、暮らしの中の餅の地域性を考察する。	同上	同上
13	すしの地域性	現在わが国でみられるすしには豊富なバリエーションがあり、郷土料理として認識されているものも多い。ここではそれらを例示しながら、日本におけるすし文化の多様性や地域性を紹介するとともに、そうした現状を生み出すに至った背景について考察する。	日比野光敏（市邨学園短期大学助教授）	日比野光敏（市邨学園短期大学助教授）
14	漬けものの地域性	日本における日常食の基本は、飯・みそ汁・漬けものであった。漬けものは、各地域でその産物を塩や酢で漬けて保存食としたのが始まりである。その後、調味料の発達につれて調味漬けや旬の野菜の浅漬けなども惣菜化してきた。地域の特産品もあり、地域と関わりも検討する。	三田コト	三田コト
15	地域振興と食文化	21世紀の食生活は、それぞれの地域に住む人々が、地域の特性を充分に踏まえ、知恵と努力によって創造し伝承してきた独自性の強い食べ物を大事にしながら、その同質化に努力し社会性を高めることを理解し、地域振興との関わりについて考察する。	石川寛子	石川寛子

＝世界の住まいと暮らし（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：服部岑生（千葉大学教授）〕

全体のねらい

世界の人口の大部分が都市に住む時代である。講義の中心は、世界の都市居住の実態－住まいと暮らし－から、その都市居住の理想と今後の姿を求める講義とする。主な特徴は、以下である。

1) 地球上には、様々な形の都市の住まいがある。都市住宅の先進国である欧米に焦点をあてて、その立地環境、歴史・文化による違いを、住まいの豊かさとして紹介する。

2) 未来の住まいに必要な条件について、多様性、生活、文化や環境の観点から、その取り組みの事例を取り上げ解説する。

3) 都市居住の大極にある未開や辺境の住まいについての講義を組み合わせて、住まいのあり型の過去と未来、世界と日本を対比して考える。

4) 授業の資料としては、現地取材ビデオ映像や写真映像などのビジュアルな情報を用い、建築のイメージによって、平易で魅力的なものにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	住まいの豊かさ	イギリスの住まいと街の事例（プレーズハムレットの環境、ビバリーの環境・生活）を通して、人々の日常生活の豊かさを語る。その中で住まいが暮らしに対して持つ役割を考える。さらに、講義の目的を述べ、世界の住まい－中国ヤオトン・イエメンの高層住宅－の多様性、特に都市住宅・住宅地の様子、歴史を外観にしながら、これからの住まいの課題と条件を考察する。	服部岑生（千葉大学教授）	服部岑生（千葉大学教授）
2	原点の住まい－アジアの住まい	アジアの辺境地域の各地には、いまだ十分に紹介されていない風俗を維持する住まいの伝統がある。その風俗と生活共同体を前提にした暮らしと住まい・集落の様子を学ぶ。それらと忘れられた日本の伝統とのつながりも示唆する。	同上	同上
3	原点の住まい－エーゲ海の住まい	同様にエーゲ海などの島嶼の各地には、いまだ十分に紹介されていない風俗を維持する住まいの伝統がある。その風俗と生活共同体を前提にした暮らしと住まい・集落の様子を学ぶ。それらの都市住宅・住宅地への示唆を学ぶ。	同上	同上
4	歴史の中の住まいとインテリア	ヨーロッパの都市住宅とその住宅地の構成を、伝統的な住まい（イギリス・サセックスの民家村）、イタリアの古代住宅の史跡（ローマ・オステイア）などの住まいの事例について、現地写真や図例を中心に、住まいを歴史的に解説し、その多様性が現在に伝えられていることを概説する。また、ヨーロッパの住まいのインテリアの伝統についても、暮らしを視覚的に紹介（ウルビノの住まい）する。特に、歴史文化、気候環境などと住まいの形の発祥の関係、住まい方と民族性などの関連について、論ずる。	同上	同上
5	都市住宅地のはじまり－集合と単位	都市の住まいは、多様な単位と群という集合でできている。その単位は、都市の集積のために、コンパクトで高密である。群としての住まいは、その配置（集合形成）に、人々の社会生活を表現する。これらについて、イタリアの古代都市の集合住宅の史跡（ローマ・オステイア）、スペインの歴史都市（グラナダとその周辺）、パリの中世のイメージを残す街区（セントポール街区）、バルセルナの計画的に作られた街区（セダーによる計画街区）、アムステルダムの閉鎖型街区の都市住宅（アムステルダム南部）などを例に、都市の住まいおよび、その集合のパターンを楽しく紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	欧米の都市住宅地－囲み配置の住まい	伝統のパリの中世のイメージを残す街区（セントポール街区）から、20世紀初頭の改良型の都市計画アムステルダム南部地区計画、中庭型住宅（パリのビットルージュ住宅地、ベルリンのメーベスの街区、ウイーンのマルクスホフ）、さらに1980年以降の欧米の都市型住宅計画（ロッテルダムのスパンゲン街区、ベルリンのパーダーボーナー街区、ストックホルムのスカルプナック住宅地）まで、都市住宅・住宅地の流れを紹介し、考察する。特に、パリの都市生活の様子を紹介し、街区の防御性が重視される実態に焦点をあてる。	同　上	同　上
7	楽しい様々な住まい－集合住宅の展開	ローマ時代からの集合住宅の歴史を概観する。はじめに、集合住宅の成立要因を、古代ローマの集合住宅遺跡を示し、解説する。特に、近世に発見された集合住宅は、どのような経緯で典型的なフラットの平面計画や住棟計画に至ったかについて、英国の20世紀初頭のＬＣＣ住宅（ロンドン、ページ通りの住宅）を例示し考える。その後、住戸の多様性として、タウンハウス（ロンドンのベルグレービア）、中庭型集合住宅（スウェーデン・スカルプナック）、メゾネット住宅（コルビュジェのマルセイユ・ユニテ）、健康環境住宅のモデル（ベルリンの事例）から、住棟の多様性として、オランダの樹状集合住宅、ベニスを再現しようとしたロッテルダムの集合住宅（オフデック）、超高層住宅（ロンドン・バービカン）まで、さらにはコーポラティブ住宅など多様な発展を、スタイルブックや現地取材（パリ大学エルブ教授のインタビュー）、写真で説明する。	同　上	同　上
8	楽しい様々な住まい－カントリーハウスからデザインハウスへの展開	欧米の独立住宅の実態を、歴史的なカントリーハウス（コッツオルズ）を紹介するとともに、そのモデルとなった古典の住宅（ロンドン郊外の様々な宮殿やカントリーハウス、ローマのビラやパラッツオ）、20世紀をリードした建築家のアイデア（マイヤーのアテニウム）を取り混ぜて、その変遷を解説する。これらから各国のスタイルブックに見られる個性を楽しく考察する。欧米のあこがれの住まいについて、貴族の理想の住宅であったカントリーハウスから、都市居住者のホワイトカラーたちが求めた独立住宅へと展開した系譜として解説する。	同　上	同　上
9	郊外住宅の形－田園都市からニュータウンまで	ヨーロッパの20世紀の郊外住宅地の歴史を概観する。特に英国の田園都市（コッツオルズ）、最初のニュータウン（ドイツベルリンのジーメンシュタットや、イギリスのヘンメルハンプステッド、ハーロー）、現代のニュータウン（ドイツ・ベルリンのニュータウン）までの歴史を概観し、都市と郊外住宅のかかわり、その結果としての郊外住宅の計画の特性を考察する。特に、第二次世界大戦後、住宅復興のために欧米で大量に建設されたニュータウンの集合住宅は、今や耐久性の寿命が終わり、再生を待っている、年を取った住まいの運命と今後の課題（イギリスのシェフィールド、ボストン－ハーバーポイント）について、考察する。総合として、専門家のインタビューを行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
10	都心住宅地の形－タウンハウスからインフィルハウスまで	欧米の都心住宅地の歴史を、健康、復興、再生、可変などの価値観の変化として、概観する、特にパーティーウオールによるインフィル住宅の意味について考察する。まず、パリの都心に住む専門家の家を訪問する。事例としては、イギリス・ロンドンのベルグレービア地区、ベルリンのＩＢＡ街区、ロンドンバービカン、サンフランシスコのタウンハウスとゴールデンゲート住宅などの紹介による。	同　上	同　上
11	アメリカの住まい－郊外の理想	ヨーロッパからの移住に起源を持つ、アメリカの都市住宅の理想は、20世紀のはじめに郊外移住のブームとなった、それによって生まれた郊外住宅を、解説する。まず、アメリカの生活を、ニューヨークに長く住む専門家に語ってもらう。事例としては、インデアナ・ニューハーモニーのヒストリック・ニューハーモニー、ニューヨークのフォレストヒルズ、ワシントンのレストン、サンフランシスコのフォスターシティー、都心に郊外を実現したサンフランシスコのゴールデンゲート住宅などによる。	同　上	同　上
12	アメリカの住まい－高層プールとスーパーのある生活	もうひとつのアメリカの住まいの典型として、特に超高層住宅の住まいに焦点をあてる。ニューヨーク、シカゴには数多くの世界一高い超高層住宅があり、アメリカの定番の住宅となっている、そのような高層住宅の作りと暮らしを探る。事例は、高層集合住宅の始まりとされるニューヨークのダコタハウス、さらにルーズベルトアイランド、同じく1199プラザ、シカゴのジョンハンコックセンターの現地紹介と多数の写真による。現地の超高層住宅で生活する日本人のインタビューを行う。	同　上	同　上
13	未来の住まい－立体の街の住まい	コルビュジェのマルセイユのユニテは、生活施設を内蔵しコミュニティーとして自律する住まいであった。このような自立型の集合住宅の起源は、古くユートピア思想とともにあり、その事例をロンドンのドルフィンスクエア住宅、を紹介する。現在ではさらに助け合って住む住まいが、高齢者の集合住宅やコーポラティブ住宅（スエーデン・エスロブ）など、多様に見られる。	同　上	同　上
14	未来の住まい－環境としての自然と自然知	豊かな自然を取り込んだ新しい街と住まいづくりについて、デービス市の事例で紹介する。さらに、人工的に計画されたニュータウンの住宅、高密に集積した都市の住まいとは異なり、自然の環境に優しい、緑を取り込み、太陽のエネルギーを活用し、有害廃棄物など環境への負荷を縮減する住まいづくりの実態を学ぶ。事例はベルリンの環境共生住宅、バイオイフィア、オランダのエコニアなどの現地紹介による。	同　上	同　上
15	世界と日本－ゆとりある住まいを求めて	まとめとして、単位の住まいについて、科学技術や工業生産技術の進歩より、従来の住まいづくりの条件であった、自然条件が克服され、またより高度に環境条件が制御されていく時代となった、このような技術がもたらす未来の住まいと平均化する実態の住まいを対比して、住まいの課題を考察する。さらに、集合としての都市住宅地について、今後の居住物の生活の変化、コミュニティーの変化の課題や、閉鎖型の再認識、路地型街区などフィジカルな課題を確認する。	同　上	同　上

＝ こころの健康科学（’９９） ＝ （Ｒ）

〔主任講師：仙波純一（放　送　大　学　助　教　授）
〔主任講師：高橋祥友（東京都精神医学総合研究所副参事）〕

全体のねらい

現代社会は、情報量の増大、価値基準の多様化、家族形態の変化など、ひとむかし前と比べて急速に変化しつつある。このなかでおびやかされているわれわれの心の健康を考える。心の健康を援助する仕事にたずさわる人との役割についても紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代における心の健康の意義	現代社会で、心の健康を保つことがどうして必要なのか、またそれを得るためにはどのように注意し、努力してゆくべきかについて概観する。以下の章のねらいについて説明する。	仙波純一（放送大学助教授）	仙波純一（放送大学助教授）
2	心の病気 (1) 精神分裂病	精神分裂病は精神障害のうちで最も重要な疾患のひとつである。その推定される原因、症状、経過、および治療法（リハビリテーションも含む）について解説する。	同上	同上
3	心の病気 (2) 気分障害	気分障害とは、従来、躁うつ病と呼ばれてきた病態をさしている。その原因、症状、経過、治療法などについて解説する。ストレスの多い現代社会において、心の健康を保つための具体的な方法についても触れていきたい。	高橋祥友（㈶東京都精神医学総合研究所副参事）	高橋祥友（㈶東京都精神医学総合研究所副参事）
4	心の病気 (3) 不安障害	不安障害は、以前神経症とよばれていたものの大部分を占めている。各種の不安障害の症状や治療法などについて解説する。	仙波純一	仙波純一
5	心の病気 (4) 人格障害	人格障害は、極度の人格の偏りのために、当人自身が苦しんでいたり、あるいは社会的に問題が起きている状態を指している。さまざまなタイプの人格障害があるが、講義では最近話題になることの多い境界性人格障害を中心に取り上げる。	高橋祥友	高橋祥友
6	心の病気 (5) アルコールと薬物依存	現代社会の高度発展・多様化・国際化とともに、カルチュラル・ラグをきたし、人間の心はとまどいをみせ、アンビヴァレントな状況にある。いっときの癒しを求めて、アルコールや薬物をのむが、いつしか依存していくようになり、嗜癖・乱用へとつき進んでしまう。さまざな社会的問題（病気）をひき起こし、精神的に混乱（病気）し、身体的病気となり、顕在化する。治療的には身体的、精神的、社会的にトータルな治療・ケア・教育が必要である。	榎本稔（榎本クリニック院長）	榎本稔（榎本クリニック院長）
7	精神科医療における精神科医の仕事：その1	現代の精神科医療においては、精神科医、看護者、臨床心理士、ソーシャールワーカーといった多分野の専門家がチームを作って、心の問題を抱えた人の治療にあたっている。そのような現状の中での精神科医の役割について解説する。	高橋祥友	高橋祥友

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	精神科医療における精神科医の仕事：その2	引き続き前回の内容について取り上げる。なお、放送では、2人の精神科医による対談を通じて、実際の現場での精神科医の役割やさまざまな問題点、そして将来への展望などについて話し合う。	高橋祥友	高橋祥友
9	精神科医療における臨床心理士の仕事：その1	仕事の第1は、評価・査定である。対象の年令は、乳幼児から老年までと幅広く、内容的には、発達、知能、人格、作業能力などを、心理検査などの様々な媒体を用いて、評価・査定する。また、個人とその家族との相互作用も対象となることがある。	溝口純二(㈶東京都精神医学総合研究所臨床心理研究部門主任研究員)	
10	精神科医療における臨床心理士の仕事：その2	仕事の第2は、心理療法・カウンセリングである。対象の年令は、この場合も乳幼児から老年までと幅広く、内容的には、個人の抱えている精神的な苦痛に対して、心理的な援助をおこなう。また、家族の働きかけをおこなうこともある。	溝口純二	溝口純二
11	精神科医療における看護婦(士)の仕事：その1	病院を含めた地域社会の中で、精神障害者及び家族のケアとその自立を支えるための援助のあり方について、精神科看護に携わってきた立場から論じる。また、地域の諸資源を活用するために必要な他職種との連携について述べる。	田上美千佳(㈶東京都精神医学総合研究所主任研究員)	田上美千佳(㈶東京都精神医学総合研究所主任研究員)
12	精神科医療における看護婦(士)の仕事：その2－精神科看護からの発展	精神科看護からの発展領域として、リエゾン精神看護について論じる。筆者は、がん患者を対象として個人カウンセリングやサポートグループを実施しているが、その実践を紹介することを通して、心の問題を抱えた身体疾患患者の看護について考察する。	廣瀬寛子(戸田中央総合病院カウンセラー)	廣瀬寛子(戸田中央総合病院カウンセラー)
13	精神科医療におけるソーシャルワーカーの仕事：その1	我国において、精神科ソーシャルワーカー（以下ＰＳＷを略す）が精神医療の中で、どのような役割を担ってきたのか概括し、そこから今現在の状況、及び今後の課題についてふれてゆく。	大原美知子(㈶東京都精神医学総合研究所技術課主任)	大原美知子(㈶東京都精神医学総合研究所技術課主任)
14	精神科医療におけるソーシャルワーカーの仕事：その2	現在ＰＳＷの仕事は単に医療内にとどまらず、地域精神保健分野をはじめとして、多岐にわたり、その活動先が広がってきている。それらの具体的仕事を述べながら「精神障害者の支援」とは何かを考察する。	同上	同上
15	現代社会で心の健康を保つには	以上の章をまとめ、いくつかの残されている課題を追加する。全体をながめて、これからわれわれが社会の中で生きてゆくにあたって、心すべき事柄について考える。また放送では、地域の精神保健についてゲストにお話していただく。	仙波純一	仙波純一

＝医療・社会・倫理（'９９）＝（Ｒ）

（主任講師：近藤喜代太郎（放　送　大　学　教　授））
（主任講師：藤　木　典　生（福井医科大学名誉教授））

全体のねらい

医学生物学の進歩は医療の向上の原動力であるが、さまざまの社会的影響をもたらし、法・倫理にかかわることも少なくない。技術的進歩の恩恵とともに被害を受けるのも患者であり、医療は患者の立場をいつも考えなければならない。この科目では患者の権利を基本的な観点として、医療・医学と患者および社会との接点に起こる多岐にわたる問題のなかから、とくに大切な15課題をとりあげ、技術的進歩が本当に人々の役に立つには個人・医師・医学者・社会・行政はどうすべきかを考える。しかし時間数の関係で医療制度・医療経済・社会保障などの問題は除く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	医学・保健・医療と社会の接点	医学は病気を中心とするヒトの生物学であり、学理の探究をめざした体系をもっている。一方、保健医療は国家のしくみで、法令・予算・施設・専門職・科学技術などの要素からなっている。医学と保健医療は車の両輪で、その進歩は国民の幸福を増すが、ときに好ましくない問題が起きることも少なくない。第１回では医学・医療と社会にはどんな接点があり、どんな問題が起きているのかを知るための序説とする。	近藤喜代太郎（放送大学教授）	近藤喜代太郎（放送大学教授）
2	医療の倫理と患者の権利	医療と社会の接点を考える上で根幹をなすのは倫理である。これは古い課題ではあるが、近年、医療技術の進歩と国民の意識の変化によって新しい段階に入っている。生命の始期と終期の問題は別の回に論じられるが、医療の場ではその他にも生命権と治療決定をめぐって多岐にわたる問題が起きる。本講義ではそれらを巾広く展望し、患者の権利と自己決定権をいかに守り、よい医療をいかに提供するかを考える。インフォームド・コンセントにかかわる問題はとくに大切なので次回でのべる。	星野一正（京都女子大学教授）	星野一正（京都女子大学教授）
3	インフォームド・コンセント	医療の倫理を考える上で基本となるのは「患者の権利」と「インフォームド・コンセント」（ＩＣ）である。ＩＣはアメリカで生まれた法概念で、医療とその過誤を裁く上での基本となり、日本では「説明と同意」と訳されることが多い。「説明」とは病気の性質・予後、さまざまな検査・治療・薬剤などの効用とリスクなどについて、患者が知る権利に応えることで、それに基づいて患者が自己決定した「同意」を受けて医療を行う。この講義では、ＩＣをめぐるさまざまの問題を述べ、日本に適した提言を行う。	星野一正	星野一正
4	医療の自己規制と倫理委員会	医療は患者と医師の個別的な契約による行為ではあるが、移植、受精卵技術、輸血拒否、遺伝子治療など、倫理問題の起きやすい医療行為については、担当医のみに任せず、病院があらかじめその内容を審議し、好ましくない事態から患者と医師を守ることが必要とされている。これが「倫理委員会」で、日本でも各大学に普及し、各分野の教授、法律家などが参加し、申請に基づいて医療の内容を検討し、大学病院としての責任を果たしている。一般病院や地域への普及は今後への課題であり、医療以外にもヒトを被験者とする治験などにも施設内または第三者による評価が必要となることが多い。	武部　啓（近畿大学教授）	武部　啓（近畿大学教授）
5	生命技術と倫理	ヒト・ゲノム計画は、遺伝子診断・治療としてゲノム多様性といった遺伝医学への応用の他に、体外受精などの生殖医学、クローン研究などの発生生物学、行動のメカニズムなどの科学の分野で輝かしい進展をとげてきた。反面、多岐にわたる倫理的・法的・社会的問題点を惹起してきた。本講義ではこれら背景を展望した上で、その倫理的考察を行ない、あるべき理念を検討したい。	藤木典生（福井医科大学名誉教授）	藤木典生（福井医科大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	遺伝医学と倫理	遺伝子は個人の所有物であるだけでなく、家族と共有するものである。最近、技術の進歩によって比較的容易にそれぞれの個人に特有の遺伝情報を解析できるようになった。これらは遺伝性疾患にとどまらず、人生後半に起こる生活習慣病の診療にもさまざまの恩恵をもたらしたが、複雑な人文的問題をもひき起こした。本講義では生命倫理の基本に従って、医療としての遺伝医学の正しいあり方を考える。	松田一郎（熊本大学名誉教授）	松田一郎（熊本大学名誉教授）
7	脳死と移植	昭和40年の和田手術から平成9年の「臓器移植法」までの永い年月、脳死がヒトの死かどうか、その判定の可否をめぐる国家的な論争がつづき、脳死者からの臓器移植でしか救命できない患者が外国に行くなどの事態がつづいた。脳死をめぐる問題は医学の技術的進歩がきわめて広範な社会的分野に反響を呼んだ事例として他に類をみない。この講義では、この問題を広く回顧し、立法に至った経緯をのべ、日本文化との係わり合いにも触れる。	中山太郎（衆議院議員）	中山太郎（衆議院議員）
8	死の医学	病気の治療を目的とした医学にとって、死に至る病気は、ともすれば医学の敗北とみなされがちである。しかし最近、ホスピスや緩和ケア、安楽死・尊厳死などに対する社会の関心が高まり、いわゆる「死の医学」の重要性が叫ばれるようになってきた。この講義はそれらについてのべ、日本にふさわしい終末医療のあり方についても考える。	柏木哲夫（大阪大学教授）	柏木哲夫（大阪大学教授）
9	医療のシステム	医療は診察と治療とからなるが、すべての医師がすべての病気を正しく診療、治療できるのではない。良質で適切な医療はさまざまな技術・能力を組み合わせることで確保される。本講義では良い医療を保障できるシステムを築くにはどのようなデザイン・運用・監視・教育・人事などが必要であるのかを説明・例示する。	信友浩一（九州大学教授）	信友浩一（九州大学教授）
10	医療政策と情報公開	行政のあり方は国民生活に大きな影響がある。日本は乳幼児死亡率が世界最小、寿命が最長であり、それには行政も大きく貢献した反面、薬害エイズのように行政ミスによる事件も起きている。本講義では、医療政策はどうあるべきか、情報を公開し、国民も参加した政策をいかに確立すべきかを考える。	信友浩一	信友浩一
11	障害児をもつ親	患者の障害の告知、親としての障害の受容などの問題について実例を紹介しながら講義する。重症の障害をもつ新生児の選択的治療停止や、親による治療拒否などの倫理的な問題、患者団体のあり方など、患児の近親からみたさまざまの問題に触れる。	玉井真理子（信州大学医療技術短期大学部講師）	玉井真理子（信州大学医療技術短期大学部講師）
12	医学研究と社会	医学の進歩のためには研究が欠かせないが、研究の美名のもとになんでも許される訳ではない。遺伝子組換え、クローン技術などは5、6回で論じられるので、本講義ではヒトを被験者とする研究、ヒト集団を対象とする疫学調査、治療法を比較するコントロール化臨床試験、動物の愛護と実験などに触れ、研究の利益と不利益の釣衡を考える。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	薬をめぐる問題	薬は両刃の剣と言われる。病気を治すために使った薬が、予想もしない副作用を招くこともある。不適切な薬剤行政は薬害エイズのような不幸をもひき起こす。薬は治療には欠かせない手段であるが、企業にとっては商品でもある。この講義では薬に関する行政のあり方、科学的・倫理的に望ましい開発、医療に当たって、証拠に基づいた適正な薬剤の選択を行うにはどうすべきかなど、薬をめぐる多くの問題を考える。	別府宏圀（東京都立府中療育センター副院長）	別府宏圀（東京都立府中療育センター副院長）
14	日本・アジアの社会と生命倫理	本講義ではアジア的生命倫理の特殊性について考える。欧米がヒューマニズムと人権の理念に基づく生命倫理を推進しているのに対し、アジア的コミュニタリアニズムは欧米の受けとめ方と異なる点が少なくない。本講義ではこれから21世紀に向けての地球的倫理を構築するための東西の生命倫理の融合の道を探りたい。	坂本百大（青山学院大学名誉教授）	坂本百大（青山学院大学名誉教授）
15	医療と国際協力	国際協力というと、開発途上国への援助の面からしか考えられていない。本講義では医療を国際的視野で考え、人間として基本的医療を受ける権利を有することから、医療資源の適正配分の考え方を述べる。医療資源は人的資源、物的資源、社会経済的資源に分けられるが、それらの適正配分を国際協力の立場から考える。	岡崎勲（東海大学教授）	岡崎勲（東海大学教授）

＝高齢者福祉（’９９）＝（Ｒ）

（主任講師：直井道子（東京学芸大学教授）
主任講師：山田知子（放送大学助教授））

全体のねらい

高齢社会の到来は、社会の在り方のみならず、ひとりひとりの生活・人生の在り方をも根本から問い直すことを迫っている。本講義では、今日の我が国の高齢者の生活実態と高齢者の生活を支える福祉等の施策の実状をふまえながら、利用者主体の高齢者福祉のあり方を追求する。すべての人の高齢期を生き生きとしたものにするために、どのような社会的努力が必要であろうか。21世紀の新しい高齢者福祉を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高齢社会の進展	第１部　現代社会と高齢者 日本社会の高齢化はいつごろから、どのように進んできたのだろうか。今後、どのように少子化・高齢化が進行するのだろうか。それが日本社会にどのような影響をもたらすのかを考察する。	直井道子（東京学芸大学教授）	直井道子（東京学芸大学教授）
2	歴史の中の老い	老い（高齢化）は、生物学的な現象だと思いがちであるが、老いを社会がどう意味づけるかによって、高齢者の役割や生き方は異なっていることを知る。特に、近代化によって老いの意味づけがどう変化してきたかを考察する。	同上	同上
3	高齢期の心と身体	歳をとるということは、心や身体がどのように変化していくことなのだろうか。日常生活における注意点などを考えると同時に、福祉サービスを考える上で必要な日常生活自立度などの概念について学習する。	杉澤秀博（東京都老人総合研究所研究員）	杉澤秀博（東京都老人総合研究所研究員）
4	高齢者と家族	従来、多くの高齢者は、子どもと同居して老後の問題を解決してきたが、それがどうして困難になってきたのか。夫婦関係や別居子との関係を含めて、社会の変化と関連づけて検討する。	直井道子	直井道子
5	高齢期の社会・経済生活	収入源と生きがいという二つの視点から、高齢期の就労の現状を明らかにする。また、引退後の生計のたて方や消費生活の現状、生きがいを求めての学習、余暇活動にも目をむけつつ、心豊かな老後の実現にむけての方途を探る。	同上	同上
6	高齢者と人権	第２部　高齢期の生活支援策 高齢者の人権はどのような理念にもとづいて、守られようとしているのだろうか。高齢者をめぐる法制度について憲法、世界人権宣言、国連行動計画や老人福祉法等を概観しながら考える。	河野正輝（九州大学教授）	河野正輝（九州大学教授）
7	高齢者と医療、介護保障	高齢期の健康を守る制度としての医療保障、介護保障の現状を示し、そこでの問題点と課題について述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	高齢者と雇用・年金・生活保護	高齢期の経済生活の基盤である雇用の現状及び年金制度について述べる。また、高齢者の最低生活を守る生活保護の現状と課題についても考える。	河野正輝	河野正輝
9	高齢者と住環境・まちづくり	豊かな高齢期の生活基盤である住宅に焦点をあてる。高齢者はどのような住宅に住み、どのような課題をかかえているのか、安心して住み続ける居住条件とはなにか、住宅改造やまちづくりの視点を含めて考える。	児玉桂子（日本社会事業大学教授）	児玉桂子（日本社会事業大学教授）
10	高齢者保健福祉（1）施策の展開	老人福祉法から介護保険法にいたる戦後の高齢者をめぐる福祉施策の流れを追いながら、どのような社会経済的状況のなかで、わが国の高齢者福祉等の施策は展開されてきたのかを概観し、今日的な政策課題について検討を加える。	山田知子（放送大学助教授）	山田知子（放送大学助教授）
11	高齢者保健福祉（2）高齢者生活支援サービスの体系	高齢者の生活を支える保健福祉等のサービスについて在宅・施設福祉等サービスの現状を福祉現場の実態分析を含めて概観し、サービスの種類、量と質について考察する。	同上	同上
12	高齢者保健福祉（3）保健・医療等と福祉の連携	在宅、施設を問わず、豊かな高齢期の生活を支えるための福祉や保健等のサービス体制をどう構築するか、保健と福祉・医療の連携、相談体制のあり方等について考える。介護保険法に基づく要介護認定、介護計画立案からサービス提供という流れを追いながら、高齢者の生活自立を支えるサービス提供のあり方を考える。	同上	同上
13	消費者としての高齢者の保護・高齢者の当事者運動	高齢者福祉の新しい展開のために高齢期は身体的低下のみならず、精神活動の低下にみまわれることもある。消費者としての高齢者をどう守るかについて検討する。また、高齢者自身がみずからの権利を守る活動・運動を展開する動きもある。高齢者自身の活動・運動を取り上げながら、当事者運動としての可能性を考える。	同上	同上
14	福祉人材の確保と方策	ソーシャルワーカー、ケアワーカーといった福祉の人材の確保、養成について考える。高齢社会を支える福祉従業者はどのような環境のもとで働いているのだろうか。その多くは女性である。女性労働としての福祉労働の問題点を賃金、労働時間、雇用形態といった側面より考え、これからの人材の確保・養成のあり方をさぐる。また、専門福祉労働の周辺を支えるものとして、住民参加型サービスの担い手やボランティアについてもふれ、より質の高い人材を確保するために何が必要であるか考える。	同上	同上
15	21世紀の高齢者福祉の展望と課題	超高齢社会に立ち向かい、すべての人の生き生きとした高齢期の生活を創り出していくためには、生産第一主義、効率主義一辺倒の社会システムを生活・人間中心のシステムへ転換していく必要があるのではないだろうか。そのための変革の視点を家庭生活、教育、労働といった側面より考える。今日の高齢者福祉が抱える課題と解決のための方策を探る。	直井道子 山田知子	直井道子 山田知子

＝地域福祉（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：大橋謙策（日本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

地域福祉は社会福祉における新しいサービス提供システムであり、実践方法である。地域福祉は社会福祉における地方分権化を前提として、居宅における自立生活を支援する在宅福祉サービスを軸に、地域住民の参加を得て福祉コミュニティを形成する実践である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	社会福祉の変容・発展と地域福祉の実態化	1. 高齢化社会の到来と社会福祉問題の国民化・地域化 2. 都市化・工業化に伴う家庭の介護・養育能力の脆弱化と地域福祉 3. 社会福祉施設緊急整備計画とコミュニティ・ケア構想	大橋謙策（日本社会事業大学教授）	大橋謙策（日本社会事業大学教授）
2	1990年社会福祉改革と市町村地域福祉の時代	1. 1990年8法改正の背景と要旨 2. 市町村主義の意義 3. 在宅福祉サービスの制度化の意義 4.「住民の理解と協力」の意義	同上	同上
3	地域自立生活の保障と地域福祉の考え方	1. 自立生活の考え方 2. 地域福祉理論の発展史 3. 追記福祉の考え方と構成用件	同上	同上
4	在宅福祉サービスの考え方と家族介護力	1. 在宅福祉サービスとレスパイトケア 2. 在宅福祉サービスの施設福祉サービス 3. 在宅福祉サービスの構成要件とあり方	同上	同上
5	在宅福祉サービスの供給方法のあり方と供給組織	1. 在宅福祉サービス地区構想の意味 2. 在宅福祉サービスとケースマネージメント 3. 在宅福祉サービス供給組織の比較－社協・福祉公社、福祉事業団等	同上	同上
6	在宅福祉サービス推進におけるフォーマルケアとインフォーマルケア	1. 在宅福祉サービスの利用意識と近隣住民 2. フォーマルケアとインフォーマルケアとの関係 3. 独立・生きがい問題とフォーマルケア	同上	同上
7	地域福祉の主体形成と福祉教育－地域住民の理解と協力	1. 地域福祉の主体形成の必要性 2. 地域住民の福祉意識の現状 3. 福祉教育の考え方とすすめ方	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ボランティア活動の構造とあり方	1.ボランティア活動の歴史と現状 2.ボランティア活動の構造 3.ボランティア活動の性格	大橋謙策	大橋謙策
9	地域福祉推進体制 (1) 社会福祉協議会の理念と課題	1.社会福祉協議会の歴史的性格 2.社会福祉協議会の現状 3.社会福祉協議会の今後の課題	同上	同上
10	地域福祉推進体制 (2) 民生・児童委員制度	1.民生委員制度の歴史 2.民生委員制度の現状 3.地域福祉推進と民生委員制度の課題	同上	同上
11	地域福祉推進体制 (3) 共同募金活動と民間財源	1.共同募金の歴史と現状 2.地域福祉推進における民間財源のあり方 3.超高齢社会における負担問題と民間財源	同上	同上
12	地域福祉実践の方法 (1) 福祉コミュニティ形成の実践と方法	1.コミュニティ・ワークの展開課程 2.コミュニティ・ワークの目標 3.コミュニティ・ワーカーの役割と養成	同上	同上
13	地域福祉実践の方法 (2) 当事者の組織化とピアカウンセラーの役割	1.社会福祉問題を抱える当事者の意識と問題の共有化 2.当事者の組織化と社会的役割 3.ピアカウンセラー活動の意義と役割	同上	同上
14	地域福祉計画の理念と策定方法	1.市町村社会福祉行政の計画化と地域福祉計画 2.地域福祉計画の構成要件と考え方 3.地域福祉計画のつくり方と住民参加の意義	同上	同上
15	地域福祉の歴史と国際比較	1.日本における地域福祉実践の系譜 2.イギリスにおけるコミュニティ・ケアの発展史 3.デンマーク・スウェーデンにおける社会サービスと在宅福祉サービス	同上	同上

＝教育的人間学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：和田修二（佛教大学教授）〕

全体のねらい

教育的人間学は、第二次大戦後にドイツ語圏を中心に興った教育の哲学的人間学的な研究である。本講では、教育学の発展との関連で、教育的人間学の必要性を明らかにすると共に、子どもの人間学的な研究を起点として、人間学的にみた教育の根本問題を論述する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	日常の教育と教育学	教育の原型は何か、学問としての教育学の自立が遅れたのはなぜかを省察する。	和田修二（佛教大学教授）	和田修二（佛教大学教授）
2	教育学の展開	教育学はどのような性格の学問として出発し、どのような展開をとげたかを論述する。	同上	同上
3	教育的人間学の課題と方法	教育的人間学の代表者と目されているドイツの O. F. ボルノーの所説を中心に、教育人間学の課題と方法について述べる。	同上	同上
4	子どもの人間学の必要性	戦後、子どもの人間学的研究を進めたオランダの M. J. ランゲフェルトに注目し、子どもの人間学を中核とした統合的な教育的人間学を構想する。	同上	同上
5	子どもとは何か	子どもを「まだ小さな人間」と考えることによって、人間と子どもに対するわれわれの見方にいかなる変革と新たな展望が生まれるかを考える。	同上	同上
6	発達の意味と條件	子どもが発達するとはいかなることかを、子どもの経験に即して省察し、発達の意味と発達の動因、個々の子どもの発達の分析と援助の要点を述べる。	同上	同上
7	両親と家庭	子どもにとって「親がいる」「家庭がある」とは何を意味するか。また、それとの対比で、われわれが「親になる」ことの意味と、「親である」ことの責任と課題は何かを考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ものとからだ	子どもにとって自分のからだと自分のまわりの物がどのような意味とはたらきをもつかを省察する。	和田修二	和田修二
9	しつけと遊び	しつけと遊びが子どもにとってなぜ大切かを考える。	同上	同上
10	学校生活の意味	今日の子どもにとって学校とは何かを省察し、学校改革の今日的課題を考える。	同上	同上
11	教師とは何か	生徒のねがいと教師の課題、教師の成長と教職の病理について考える。	同上	同上
12	言語と教育	人間にとって言語とは何か。子どもの言語能力はどのように形成されるかを省察し、基礎学力としての言語教育の今日的課題を論究する。	同上	同上
13	道徳と教育	人間にとって道徳とは何か。子どもの道徳教育が成功するための条件は何かを問い、価値不確定な時代における教育者の倫理について考察する。	同上	同上
14	生涯教育	人が互いに影響し合いながら生涯にわたって生成すると考えたとき、それぞれの世代がどのような異質の生を生き、自他に対していかなる教育的な課題と責任があるかを概観する。	同上	同上
15	国際化と伝統	国際化との連関で伝統を再考し、ポストモダンに向けて日本の文化的な使命を考える。	同上	同上

＝近代の教育思想（’９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：宮澤康人（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の教育制度や教育理論の基本的枠組が作られるうえで、西洋近代の教育と教育学は大きな役割を果した。その背景にある西洋近代の教育思想に含まれる基本的概念や理論を、近代に生きた思想家の個性から切り離さずに学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	教育思想とは何か	全体の序論として、教育思想をどのようにとらえるか、教育思想なるものが成立する条件は何か。西洋近代において、教育思想が社会思想、政治思想などから独立してくることなどを説明する。	宮澤康人（放送大学教授）	宮澤康人（放送大学教授）
2	近代の教育－思想の特徴－	３章以下の個々の思想家の思想に入るまえに近代の教育思想のきわだった一般的特徴にふれ、それが近代の社会と文化の独自性によって作られた、教育主体と学習主体、大人と子供の間の葛藤を克服しようとする課題を負っていることを明らかにする。	同上	同上
3	モア－ユートピアと教育－	近代の教育思想の特徴の一つに、そのユートピア性がある。といっても、（暗黙の裡にであれ）思い描かれるユートピアと教育の関連は、さまざまなものがあり得る。ここでは、「ユートピア」という造語の発祥の場トマス・モア『ユートピア』（１５１６年）の中で、教育がどのような位置を占めたかを明らかにしようとする。ユートピアは教育社会として構想されざるを得ず、教育はユートピアであり続けることを課せられる。	寺崎弘昭（東京大学助教授）	寺崎弘昭（東京大学助教授）
4	コメニウス－人間と社会の改造のための術－	近代教育学、とりわけ教授学の祖ともいわれるコメニウスの思想を次の項目に従って説明する。コメニウスへの関心、コメニウスをめぐる時代状況、教育の役割と教育可能性、教授学と汎知学。	金子茂（中央大学教授）	金子茂（中央大学教授）
5	ロック－習慣形成と近代社会－	近代教育思想は当然にも、フィクションとしての近代社会と相伴ってその姿を現す。それらの関連を体現したものとして、市民社会理論家であると同時に教育論者であったジョン・ロック（１６３２～１７０３年）があげられる。その教育論は、習慣形成を通じて生涯学習主体のエートスを育むことに向けられるものであったが、その基底に「懲治」を捉えることによって、近代市民社会の周縁を不断に中心へと還流させることを保証しようとするものであった。	寺崎弘昭	寺崎弘昭
6	ルソー－子どもの発見－	ルソーの『エミール』の主題は、彼自身の言うところによれば「大人になる前の子どもというものはどのような存在であるか」を明らかにし、それにふさわしい教育のあり方を考察することであった。この主題の意味を、ルソーの時代認識とそこから導かれた人間観を分析することによって明らかにする。	森田伸子（日本女子大学教授）	森田伸子（日本女子大学教授）
7	コンドルセ－進歩の思想と教育－	コンドルセの公教育思想は、フランス啓蒙思想の特徴をそなえつつ、革命の動乱のなかであらわとなったブルジョワ社会の矛盾に対して応えようとする実践的な問題意識に貫かれたものであった。彼の公教育思想の歴史的意味を、こうした背景と彼の進歩思想と関係づけつつ考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ペスタロッチー「技術」としての教育と教授－	成人として生活していくうえで必要なことを、子どもたちが子どもなりに大人の社会生活に参加するなかで、自然に、みようみまねで学んでいく。これが教育のもっとも素朴な形だろう。しかし近代の教育思想はそのような素朴な教育がもはやなりたたなくなったときに誕生したのだった。何をどのように教えるのか。それは自覚的に取り組まなければならない課題となったのである。近代教授学の創始者として知られるペスタロッチが、この問題をどう考えたのか。それをここではたどってみたい。	鳥光美緒子（広島大学助教授）	鳥光美緒子（広島大学助教授）
9	ヘルバルト－教授による教育－	「学者」としてのヘルバルト、「教育」と「教授」、教育的教授、学問しての教育学、『一般教育学』の構造、人格の客体的部分と主体的部分、といった事柄について説明する。	金子　茂	金子　茂
10	フレーベル－幼児教育の意味と方法－	幼児教育の重要性は、今日しばしば指摘されている。早期からの知的教育が推進される一方では、幼児期にこそ、知識中心主義的な学校教育とはちがった自由な「本当」の教育が必要だし可能なのだという声もある。幼児教育理念の創始者であるフレーベルは、幼児期とその教育の意味をどのように考えていたのだろうか。彼は子どもたちに何を、どのような方法で教えようとしたのかという問題を中心に、彼にとっての幼児教育の意味について考えてみたい。	鳥光美緒子	鳥光美緒子
11	ミル－父と子の葛藤と自立の教育学－	近代社会は、近代情愛家族を析出することによって、思春期の子どもと親の葛藤を顕在化させた。こうした父子間葛藤をくぐり抜け、現実化した近代社会との対峙の中で社会論・教育論を紡ぎ出したのが、ジョン・スチュアート・ミル（１８０６～１８７３年）である。父ジェイムス・ミルによる被教育体験を経て、自由教育論・＜公衆(the public)＞形成論へと子ミルが自立してゆくプロセスを追う。	寺崎弘昭	寺崎弘昭
12	マン－コモン・スクールの思想－	19世紀のアメリカ合衆国において公教育制度の確立に貢献したホーレス・マンの思想を中心として、コモン・スクール運動の背景にある学校教育の「義務」「無償」「中立」の諸原則に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦良充（明治学院大学助教授）	松浦良充（明治学院大学助教授）
13	ライン－国民教育の理論化の試み－	明治中期の日本の教育界に圧倒的な影響を与えたヘルバルト派を代表するラインの理論は、ヘルバルトの「教育的教授」の理論を国民的規模での学校制度が普及する状況において具体化することであった。そこに至る経過を略述する。	金子　茂	金子　茂
14	デューイ－成長そのものとしての教育－	20世紀のアメリカ合衆国における進歩主義教育運動に関して、ジョン・デューイの思想を中心に、進歩主義批判の思想も含めて、この磁気の教育論争に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦良充	松浦良充
15	教育思想の近代から現代へ	結びの章として、20世紀以降の現代教育思想に対して近代の教育思想をどう位置づけたらよいかを次のごとく展望する。近代の帰結としての現代、現代という時代区分とその特徴、教育と教育思想における近代と現代、現代と教育思想への視点。	宮沢康人	宮沢康人

＝教　育　の　歴　史＝（ＴＶ）

〔主任講師：石川松太郎（㈳石門心学会理事長）〕

全体のねらい

日本を中心とし、なかでも近現代に重点をかけて教育の具体的な史的軌跡を明らかにする。まず「教育の歴史」を研修することの意義、前近代より近代へと教育が転換を遂げる意味、初等教育・中等教育・高等教育・生涯教育等のテーマを設け、社会文化史の背景とともに、できうるかぎり外国教育史と比較しつつ検討をすすめる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育の歴史を学ぶ意味	教育史学は、現代教育に生起する諸問題の史的な掘下げを試みながらその意義を把握するとともに、「当然」と考えられている諸事象の歴史的な背景を探って問題を剔出して将来の課題を見出す点におかれていることを認識する。	石川松太郎（㈳石門心学会理事長）	石川松太郎（㈳石門心学会理事長）
2	前近代より近現代への過程	古代より近世にかけて醸成された教育思想、学制等の軌道より近代にはいって欧米先進国の教育思想・学制を受容して作られた教育の軌跡への展開について考察する。とくに、明治維新期に重点をおき、近世教育のなかに近世かぎりのものと近代の芽生えを見出す。	大戸安弘（東京学芸大学助教授）	大戸安弘（東京学芸大学助教授）
3	初等教育　(1)	まず近世より近代初頭にかけての寺小屋の教育状況（開設、規模、師匠、寺子、教材、学習法等）を概観して、ついで明治初年より創設され普及を遂げた近代小学校の教育状況（公権力の施策、開設状況、教師、父兄、児童、就学率、教育課程等）について検討する。	同　上	同　上
4	初等教育　(2)	明治後期より大正期を経て昭和初期にいたる小学校の教育状況（公権力の施策、教師、指導、教育課程）を概観する。とりわけ、大正期自由教育運動、生活綴方運動の理念と実践に着目し、欧米諸国の場合と比較考量してみる。	石川松太郎	石川松太郎
5	初等教育　(3)	日中戦争以降における超国家主義教育理念の盛行と実施、国民学校教育の準備と実施、初等教育にみられる戦時教育、学童疎開の状況等について解説する。そして戦後、６－３体制下における小学校の教育状況を検討する。	同　上	同　上
6	中等教育　(1)	近代初頭より第二次大戦直後にいたる中学校（旧制）の軌跡を概観する。そのうえで、明治初年から同30年代におよぶ中学校の成立と展開の過程（制度、組織、教育課程、教師、生徒等）について詳しく検討する。	神辺靖光（兵庫教育大学名誉教授）	神辺靖光（兵庫教育大学名誉教授）
7	中等教育　(2)	近代初頭より第二次大戦直後にいたる女学校・高等女学校の軌跡を概観する。そのうえで明治初年より「高等女学校令」の発布（同32年）を経て末期におよぶ女学校・高等女学校の成立と展開の過程（制度・組織・教育課程・教師・生徒等）について詳しく検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中等教育 (3)	近代初頭より第二次大戦直後にいたる実業学校の軌跡を概観する。そのうえで、明治初年より「実業学校令」の発布（同32年）を経て末期におよぶ実業学校の成立と展開の過程（種類・組織等）について検討し、日本の産業発展とのかかわりについて注意する。	神辺靖光	神辺靖光
9	高等教育 (1)	古代の大学寮をはじめ、中世・近世における高等教育の流れを瞥見したうえで、近代初頭より第二次大戦直後にいたる大学の軌跡を概観する。特に明治19年の「帝国大学令」以降の大学・教員・学生の実情について詳しく解説し、今日に及ぼしている問題点を探る。	大戸安弘	大戸安弘
10	高等教育 (2)	近代初頭より第二次大戦直後にいたる高等学校ならびに専門学校の軌跡を概観する。成立期における藩校ないし私塾とのかかわり、「高等学校令」発布前後における高等学校・専門学校の実情を中心として、それぞれ今日の教育に及ぼしている意義を考察する。	同上	同上
11	社会教育（生涯教育） （Ⅰ）	近代初頭より第二次大戦直後にいたる教員養成について師範学校・高等師範学校（男女共）を中心に概観する。師範・高師の成立と展開について検討すると共に、師範学校系以外の教員養成の実情にも目配りを施し、諸外国の教員養成制度との比較考量を試みたい。	石川松太郎	石川松太郎
12	社会教育（生涯教育） （Ⅱ）	明治末期以降より昭和前期に重点をおき、天皇制絶対主義下における諸矛盾の激化にともなって起こった社会教化について扱う。主に青年層を対象とし、公権力と民間生起の運動の実態について検討し、それぞれが今日の生涯教育に及ぼしている意義について考察する。	清水康幸（青山学院女子短期大学助教授）	清水康幸（青山学院女子短期大学助教授）
13	戦時下の教育～（皇国民錬成）の理念と実践～	戦時教育下の思想・理念とその実践の実態を明らかにする。一方では非合理的・起合理的な絶対随順の精神と奉仕を強制しながら、他方では合理的・科学的な思考・実験・実習を遂行していく教育施策の矛盾・相剋の実態を明らかにしていく。	同上	同上
14	戦後の教育改革	戦争直後の占領軍による教育政策、アメリカ教育使節団と日本の対応、新学制の構想と発足など戦後教育改革の総体としてみられる特徴をとらえる。そして、この改革の教育理念と実態が、いつ、どのような契機で変容ないし崩壊に逢着するのかについて検討する。	同上	同上
15	戦後の教育と教育史研究	明治初年より現代にいたる教育史研究の動向を概観する。とりわけ第二次大戦後における教育史研究、教育史研究にかかわる諸学会の軌跡と現状を詳しく述べて、今後に取り組まねばならない諸課題について数人の教育史研究者との話し合いのなかで検討する。	石川松太郎	石川松太郎

＝教育社会学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：天野郁夫（国立学校財務センター教授）〕
〔主任講師：藤田英典（東京大学教授）〕
〔主任講師：苅谷剛彦（東京大学助教授）〕

全体のねらい

教育現象についての実証科学としての教育社会学について概説する。教育は個人にとっても社会にとっても、その成長・存続・発展の要に位置する重要な社会的営みであり、社会生活のあらゆる側面と関連している。そのような教育の形態・構造・機能、個人と社会にとっての意味、教育と社会との関連などについて、教育社会学はどのように考察してきたかを概説し、そのなかで教育社会学の理論と方法について説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育社会学とは	教育社会学とはどのような学問であるかについて概説する。それは教育に関わる諸現象を社会的に研究する学問と定義されるが、その対象の捉え方、社会学的方法、基本的概念について説明する。また、日本の教育社会学の特徴についても簡単に説明する。	藤田英典（東京大学教授）	藤田英典（東京大学教授）
2	社会化と社会統制	個人が文化を習得し社会の成員になっていく過程を社会化という。それは、社会が世代を越えて再生産される過程でもある。この二重性をもった社会化の過程はどのように構造化されているか、その構造化の様式は社会によってどのように異なるかについて考える。	同上	同上
3	家族・地域の教育	高学歴化や産業化・都市化・情報化の進展にともなって、教育環境はどのように変化してきたが、それにともなって子どもたちの生活と成長の過程はどう変化してきたか、社会化の担い手としての家族・地域の人間関係はどう変化してきたか、といった問題について考える。	同上	同上
4	情報化社会の教育	コミュニケーション・メディアの変化は生活様式と文化は生活様式と文化空間をどのように変えてきたか、とくに情報化と消費の高度化の進展は青少年の意味世界をどのように変えてきたか、成長の過程と教育の課題はどのように変化してきたか、といった問題について検討する。	同上	同上
5	教育問題の社会学	「学校の荒廃」が言われて久しいが、青少年の非行・逸脱や、教育に関わる諸問題はどのように変化してきたか、その変化は社会環境の変化とどのように関連しているか、教育社会学はそれをどのように据え、どのように解明してきたか、といった問題を検討する。	同上	同上
6	学校制度の社会学	組織的な教育の場である学校が、どのようにして生まれ、産業化の進行とともに発展をとげ、現在のような巨大な制度へと成長するに到ったのかを歴史社会学的にあとづけることにより、学校制度の基本的な構造を明らかにする。	天野郁夫（国立学校財務センター教授）	天野郁夫（国立学校財務センター教授）
7	カリキュラムと教育的知識	学校は、古い世代から世代へと文化を伝承していくため、の専門的な機関である。どのような文化や知識が、選ばれ分類され、序列づけられるのか。教育的知識の選択・配布・序列づけと社会との関係について考える。	苅谷剛彦（東京大学助教授）	苅谷剛彦（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学校の組織と文化	学校は、教師集団、生徒集団からなる社会的組織である。それぞれの集団は、ものの見方や考え方を共有することで、教師文化、生徒文化を形成している。学校の組織としての特徴、教師文化と生徒文化の形成のメカニズム、それが教育過程に及ぼす影響について考える。	苅谷剛彦	苅谷剛彦
9	教育過程と教室空間・学校空間	教育という社会的行為の最小単位は、教師と生徒、ないし生徒同士の相互作用である。教師の期待効果、生徒のグルーピングの学習への影響、さらにはそれらの相互行為を外枠として規定している教室空間、学校空間の特徴について考える。	同上	同上
10	学校の社会的機能	学校で行われる様々な活動は、社会との関わりで見たときに、どのような役割を果たしているのだろうか。学校における諸過程が、人材選抜機能、社会化機能、正当化機能を果たしていることについて検討する。	同上	同上
11	高等教育の社会学	初等教育から始まった学校教育の発展の波が中等教育をへて高等教育の段階へと及んでいく過程で、高等教育の中核的な機関である大学の重要性が増すとともに、性格が変化し、学歴社会を出現させ、さまざまな問題を生み出していることを明らかにする。	天野郁夫	天野郁夫
12	階層・学歴・職業	現代社会の主要な制度のひとつとなった学校が、その階段的な構造のゆえに、いかに人々の能力（業績）による評価と選抜の機構として機能し、人々をさまざまな、職業に代表される社会的な地位に配分していくかを説明する。	同上	同上
13	教育改革と学習社会	現代社会の巨大化した学校制度が、その内部に、また社会の諸制度との関連でさまざまな問題を抱えるようになり、それがくり返し改革の動きを生んでいること、そのなかから学習社会の実現が改革の重要な目標として浮かびあがっていることをのべる。	同上	同上
14	教育社会学の技法	教育社会学は経験科学のひとつである。理論は実証研究によって強化され、実証研究は理論によって枠組みを与えられる。教育社会学において、実証研究の基礎となる調査の方法と研究テーマとの関係を中心に、データの収集と分析の方法について考える。	苅谷剛彦	苅谷剛彦
15	教育社会学のパラダイム展開	教育社会学研究の発展過程を概観し、機能主義、葛藤理論、方法的経験主義、解釈的アプローチ、社会史的／歴史社会学的研究など、主要なパラダイムの特徴と最近の研究動向について検討し、教育社会学における理論と方法および今後の課題について考える。	藤田英典	天野郁夫 藤田英典 苅谷剛彦

＝道　徳　教　育＝（ＴＶ）

（主任講師：木原孝博（ノートルダム清心女子大学教授）
主任講師：武藤孝典（東京電機大学教授））

全体のねらい

教育とは、子どもが社会の一員として社会人に必要な諸能力を身につけていく過程であるが、道徳教育は、人間としての子どもの諸能力のうち、道徳意識の側面の成長発達を促進しようとするものである。この講義では、道徳教育のすすめ方の一端を具体的な実践を通して解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学校教育と人間像	現代社会は変動社会である。常に新しい問題が生起し解決を迫る社会である。現代社会に生きる人間は、新しい問題に対決し解決していける能力を身につけていかなければならない。問題解決能力を中核とした人格の主体者とならなければならない。	木原孝博（ノートルダム清心女子大学教授）	木原孝博（ノートルダム清心女子大学教授）
2	学校教育のしくみと道徳教育	子どもの問題解決能力を育成するためには、学校はある種のしくみを持っている。学校教育の構造の中で、道徳教育はどのような位置を占めているかを明らかにする。	同　上	同　上
3	道徳教育の実践原則	問題解決能力を育成するためには、社会の側からの要求と子どもに対する受容が必要不可欠である。道徳教育の実践原則である受容と要求を明らかにする。	同　上	同　上
4	道徳的体験と道徳教育　(1)	学級生活の中で子どもに自己決定の機会を与え、自主的体験をさせることによって、子どもが道徳的価値を学習していく過程を実践に即して明らかにする。これを教師の側から見れば、学級経営、学級づくりのいとなみを大切にすることである。	武藤孝典（東京電機大学教授）	武藤孝典（東京電機大学教授）
5	道徳的体験と道徳教育　(2)	学級生活の中で子どもを受容することで、子どもが自主的生活態度を身につけていく過程を実践に基づいて考察する。いじめなどの病理的現象に学校はどのように対応することが可能であろうか。	同　上	同　上
6	道徳的体験と道徳教育　(3)	「豊かな心をもち、たくましく生きる子ども」を育てるための道徳指導のあり方を総合単元的道徳指導の実際例のなかに探る。	同　上	同　上
7	道徳の授業論	道徳教育において、間接的体験（道徳的価値）をとおして学習することの意義を明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	道徳の授業 (1)	道徳の実際の授業をとおして、子どもが道徳的価値を学習していく過程を明らかにする。	木原孝博	木原孝博
9	道徳の授業 (2)	道徳授業を実践する際に、指導のねらい、児童生徒の実態、資料の意義、授業展開の方法、指導の成果について、どのように理解し、道徳授業を実現すればよいか、理論および授業実践をとおして考察する。	武藤孝典	武藤孝典
10	道徳の授業 (3)	道徳授業は子どもの道徳的価値を深めることにどのように貢献できるのか、理論および授業実践をとおして、考察する。	同上	同上
11	道徳の授業 (4)	進路の意義を理解することをとおして、道徳授業ではどのように道徳的価値を育てることが可能であるか、授業実践をとおして考察する。	同上	同上
12	教科の授業と道徳教育	教科の授業の実際を取り上げて、そこで行われている道徳的価値の学習について考察する。	木原孝博	木原孝博
13	アメリカ合衆国の道徳教育	アメリカ合衆国道徳教育におけるコールバーグ説および価値明確化説について解説するとともに、デュウィ(Dewey)の道徳教育論の意義について考察する。	同上	同上
14	イギリスの道徳教育	イギリスのヘア(Hare)の倫理学説について考察するとともに、イギリスの学校教育ではどのように道徳教育を実践しているか、その実状を探る。	武藤孝典	武藤孝典
15	わが国の道徳教育	わが国の道徳教育の特色について戦前の修身科教授にまでさかのぼって考察するとともに、この番組のまとめを行う。	木原孝博	木原孝博

＝幼児教育の社会学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：萩原元昭（江戸川大学教授）〕

全体のねらい

今日、幼児の能動性、有能性や人とのやりとりの能力に関する新たな知見が、幼児教育のパラダイムの転換を招き、家庭、地域や幼稚園、保育所のカリキュラムや方法、環境構成の見直しが求められている。本講では、幼児の遊び、生活の場である家庭、園、地域を、個性形成のコミュニケーション体系として把え社会学的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	幼児の発達への社会学的アプローチ	幼児の発達の特性を、能動性、有能性や人とのやりとりの能力の形成として捉え、異なる個性を持つ幼児一人ひとりの心理的要求に適応するaccommodation systemの形成のにない手としての保育者・教師と幼児の二者関係、知識習得の方法など社会学的に究明。	萩原元昭（江戸川大学教授）	萩原元昭（江戸川大学教授）
2	家庭環境	幼児の最初の社会化の場としての家庭において、父親の育児参画・加の必要が訴えられている割合には少ない現状もあってか、母親の育児不安を解消するための手段として、園が地域の子育て支援センターとして家庭を支援するしくみの必要性が期待されている。	同上	同上
3	遊びとメディア	幼児の生活のほとんどが遊びであり幼児は遊びを通して多くのものを学ぶ。その遊びもマルチメディアの発展に伴い、テレビゲームを初め電子メディア遊びが盛んになり、新しい幼児教育の問題を生み出している。問題点を具体的に取り上げながら課題を明かにする。	森楙（広島修道大学教授）	森楙（広島修道大学教授）
4	幼児の仲間関係	発展的視点を含めて幼児期の仲間関係の特徴をふまえた上で幼稚園・保育所という集団保育施設が幼児の仲間関係の形成に果たす役割について考察する。園生活における幼児の仲間関係について、観察事例をもとに、遊びや保育形態、園環境などとの関連から捉える。	青井倫子（広島大学助手）	青井倫子（広島大学助手）
5	保育所の生活環境	保育所は子どもが生活時間の多くを過ごすところであるので、安全で情緒の安定した生活のできる環境を整えることが大切である。その中での遊びの指導を通して心身の健康の基礎や豊かな感性、表現力などを育成するのである。このような保育環境の重要性を考察する。	栃尾勲（立正大学教授）	栃尾勲（立正大学教授）
6	幼稚園の生活環境	幼稚園教育は「環境を通して行う」といわれているように、どのような環境のもとで、どのように生活を展開するかが重要となる。幼稚園の生活環境について、心身の発達、関係性の発達、表現力の発達という視点から、何が大事になるのかを考えてみる。	柴崎正行（東京家政大学助教授）	柴崎正行（東京家政大学助教授）
7	保育内容の社会学	保育内容構成の原理として収集型から統合型への変化を、領域「絵画製作」「音楽リズム」の廃止、それに代わり、領域「表現」の創設という例示で考察すると同時に、幼児の興味・関心に基づく指導計画の作成過程について考察を加えてゆく。	萩原元昭	萩原元昭

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	幼児の保育方法と環境構成	幼稚園や保育所における保育方法は、時代の変化に伴って変わりつつある。日本において保育方法がどのように変化してきたのかを論ずると共に、そこでの保育者の役割についても明らかにする。特に現在の保育における環境構成の意義と内容については詳しくふれる。	柴崎正行	柴崎正行
9	日本の幼児教育文化	幼稚園や保育所では、幼児を意図的・組織的な集団単位に組み込んで保育活動を展開する。幼稚園で編成される集団単位の種類とその編成原理、それらの集団単位を前提に展開する保育者と幼児の間の相互作用の様相から、日本の幼児教育の文化的特質を考察する。	結城恵(群馬大学講師)	結城恵(群馬大学講師)
10	幼児教育実践の研究	保育者自身が行なう園内研究、保育者以外の者が幼稚園や保育所をフィールドとして行なう研究など、幼児教育実践の研究の意義や方法また限界などについて研究をする際の視点の持ち方や保育者－幼児－研究者の相互の関係なども視野に入れて考察する。	青井倫子	青井倫子
11	園と家庭・地域との相互支援	いじめ問題や不登園問題にあえぐ幼児にとり家庭の父母と園の保育者とが相互に支援しあうシステムを意図したさまざまな連携方法について、例示しながら考察してゆく。その際統合的視点として、幼児一人ひとりの心理的要求に適応する視点の重要性について論ずる。	萩原元昭	萩原元昭
12	地域における子育て支援センターの役割	子育ての伝承や見聞が希薄化する中で、保育所や幼稚園に対して地域の子育て支援センターとしての役割が要請されている。子育て環境の変化と地域の子育て相談、親同士の交流等について、子どもに視点を合わせながら、その実態と課題を考察する。	栃尾勲	栃尾勲
13	プレイ・パーク	ロンドン郊外にあるオランダ公園の中にあるプレイパークを訪れ、幼児にとって魅力のあるプレイパークの条件を、社会学的視点からアプローチし、明らかにすると同時に、プレイリーダーの役割や幼児の生活環境の安全性などの関連とで究明する。	萩原元昭	萩原元昭
14	マルチ・カルチャリズムに基づく幼児教育	外国籍幼児の増加に伴い、保育者と幼児・親とのデスコミュニケーション、異文化としての幼児・親との接触による園の多文化など日本の幼児教育のパラダイム転換のひきがねにもなっている現状について考察する。マルチ・カルチャリズムの視点から園保育を論及。	同上	同上
15	幼児教育思想とその社会的背景	子どもの生活と遊びを大切にしようとする現在の保育文化は歴史的遺産と背景をもっている。幼児教育の思想と実践を歴史的な展開の中でたどるだけでなく、当時の社会におかれた幼児や親の生活の状況などその社会的背景についても考察してゆく。	林信二郎(埼玉大学教授)	林信二郎(埼玉大学教授)

＝現　代　学　校　論＝（Ｒ）

〔主任講師：舘　　昭（学位授与機構教授）〕

全体のねらい

本講義では、学校にまつわるイメージ及び概念の整理と、学校の基本的な機能の考察を通じて、現代的な視点から学校について考える。生涯学習という言葉が象徴するような現代社会の状況を踏まえて、高等教育までを視野に入れた学校論を展開する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代学校論の課題	学校論の起源と、その現代的な課題を明らかにする。学校を意図的・組織的な教育の場ととらえ、それにまつわるイメージと概念の整理が必要なこと、その上で学校と社会の関係づけについて考察する必要があることを論じる。	舘　昭（学位授与機構教授）	舘　昭（学位授与機構教授）
2	牧場・田畑イメージの学校観	社会の基幹的な生産の場のイメージが、潜在的に学校観を規定している。ここでは、西洋の牧場イメージの学校観と、日本の田畑イメージの学校観を比較して考察する。	同　上	同　上
3	工場イメージと学校	西洋近代に発生し、近現代社会を支配する工場イメージの学校観と、それにもとづく学校論について検討する。	同　上	同　上
4	花園イメージと学校	近代教育思想の中に潜む花園イメージの学校観について検討する。	同　上	同　上
5	普通教育と専門教育	教育の目的、内容に関する概念を整理する。特に、普通教育と専門教育の区別、学問教育、生活教育、職業教育の考え方について検討する。	同　上	同　上
6	試験と資格	学校教育における評価の問題を、試験と資格にまつわる概念の整理を通じて考察する。	同　上	同　上
7	初等教育の学校	初等教育段階の学校について、これまでの考察をふまえて分析する。義務教育制度をはじめとする。学校と法制度とのかかわりについても考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中等教育の学校	中等教育段階の学校について、これまでの考察をふまえて分析する。特に、中等教育に課された多様な機能について考察する。	舘　昭	舘　昭
9	高等教育の学校	高等教育段階の学校について、これまでの考察をふまえて分析する。特に高等教育機関の多様なあり様、形態に注目して考察を深める。	同　上	同　上
10	生涯学習と学校	生涯学習の理念と実際を検討する中で、学校について考える。	同　上	同　上
11	学校と社会	社会の側からみた学校の機能について考察する。	同　上	同　上
12	学校と経済	経済の側からみた学校の機能について考察する。	同　上	同　上
13	学校と政治	政治の側からみた学校の機能について考察するとともに、学校と政治のかかわりについて概念的な整理をする。	同　上	同　上
14	学校にかかわる政策	学校に関する政策的な課題について総合的に考察する。	同　上	同　上
15	学校論と教育学	学校論の教育学全般の中での位置づけについて考察し、まとめとする。	同　上	同　上

＝現代社会の学力＝（Ｒ）

〔主任講師：駒林邦男（岩手大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代日本社会における学力をめぐる問題状況について論じ、日本の子どもたちの学力は、どうなっているか、「日本型」高学力の弱点はどこにあるか、「日本型」高学力を支える授業の特質は何か、子どもたちの人生にとって学力はどんな意味をもっているか、そもそも、「学力」とは何か、いま、どのような学力観、授業が求められているか ― これらの論点について、具体的な例をあげて講義したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「学校化・情報化・消費化」社会の中の子どもたち	講義の方針と概略を説明する。現代日本の子どもをめぐる社会を「学校化・情報化・消費化社会」状況ととらえ、戦前から1960年頃までの子どもの生活（家庭・地域・学校の中の生活）と比較する。	駒林邦男（岩手大学名誉教授）	駒林邦男（岩手大学名誉教授）
2	学力をめぐる社会状況	過熱する学力競争の社会的背景と過熱化の経緯について、具体的な例をあげながら述べ、学力競争に子どもたちを向かわせる親の心理についても考えていく。	同上	同上
3	「学校からの逃走」と、「学力（学歴）信仰」という逆説的事態の同時展開	1970年代以降の「教育荒廃」、「子どもたちの学校からの逃走」という事態に対する臨時教育審議会、1990年代後半の中央教育審議会などの対応を取り上げるとともに、社会の「学力（学歴）信仰」をめぐる問題について論じる。	同上	同上
4	学力観概史	1872年の「学事奨励に関する被仰出書」から今日に至るまでの学力観の変遷を、明治以来の教育理念の変化と関連させながら論じる。	同上	同上
5	「新学力観」、その問題点	「新学力観」、特に「関心・意欲・態度」の重視についのべ、3点にわたって、「新学力観」の問題点を指摘する。	同上	同上
6	学校知、学校知学力	普通「学力」と呼ばれているのは「学校知学力」である。「学校知」とは何かを明らかにすることによって社会的通年としての学力の「制度化・公定化部分」の基本的性質（基礎可能性、規範性）について論じる。	同上	同上
7	日本型高学力を支える授業の特質	国際的学力調査（ＩＥＡ）、文部省学力調査のデータによって、日本の子どもの学力の高さを示す。この高水準を支える授業は、知識注入型授業であることを、放送担当者が行った調査結果に基づいて具体的に説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日本型高学力の問題点	学力の地域差・階層差、断片的知識の量とそれら知識の意味的関連についての理解の質との著しい跛行、理解のドロップアウト学力の「剥落」、子どもたちの「勉強・学力観」について論じる。	駒林邦男	駒林邦男
9	伝統的構造の一斉授業	高学力を支えてきた「伝統的構造」の一斉授業とはどんな授業かを、評価の特徴、学びの組織化の特質、一斉授業と学びの個別性との構造的摩擦について説明する。	同上	同上
10	学校知の学びの特異性（学校化された学び）	具体的生活の中での学びとの対比によって、学校知の学びの人工性・迂回性を浮かびあがらせる。	同上	同上
11	学校知学力の特性	社会的通念としての「学校知学力」の基本特性が「非・ヴァナキュラー性」であること、すなわち受験手段性・依存性、「学校課題」性であることについて論じる。	同上	同上
12	もう一つの学力＝隠れたカリキュラム、「生活学力」	「もう一つの学力」としての「隠れたカリキュラム」を教育学的に定義し、学校知学力の対極にある「生活学力」について、さまざまな角度から論じる。	同上	同上
13	子どもにとっての学校知の学び（一）	具体的データを使って、子どもの授業実感について探り、「学びの疎外」状況の広がりについて述べる。	同上	同上
14	子どもにとっての学校知の学び（二）	高校生の学びの現状 ― 学校離れ、学力離れ観について紹介し、また、高校生の否定的自己認識（自己過少評価）について述べる。	同上	同上
15	教育改革と学力問題	14回の講義を整理する。「まとめ」として、現在の教育改革の動向との関係の中で、学力問題について論じる。	同上	同上

＝教育・経済・社会＝（ＴＶ）

〔主任講師：金子元久（東京大学教授）
主任講師：小林雅之（放送大学助教授）〕

全体のねらい

教育を経済現象や社会現象との関連で捉えることによって、教育システムの構造や機能を理解する。教育の拡大と経済成長、学歴社会、教育財政について解説する。学生に「教育は経済・社会とどのような関係にあるか」ということをマクロに把握させる。特に、現在の日本の教育、とりわけ高等教育を理解することが目的であるが、そのために歴史比較や国際比較も行う。なお、パソコンにより各種図表・パターンの提示を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育と経済を見る眼	・教育と経済・社会の関わりについて、簡単な図式をもとに解説する。教育がなければ社会は成り立たない、逆に社会がなけれ教育は成り立たない、という関係を説明する。・この科目を通じて、学生に考えてもらいたい問題を設定する。現代社会と教育の接点のどこが問題か。・各回の内容の簡単な紹介をする。	金子元久（東京大学教授） 小林雅之（放送大学助教授）	金子元久（東京大学教授） 小林雅之（放送大学助教授）
2	教育と社会・経済発展 (1)	・教育と社会システムの関連をとらえるマクロな図式を提示する。・中世から近代、現代にいたる教育システムの発展を説明する。・その結果生じた現代の教育システムの特徴、システムの問題点を説明する。・生涯学習などシステムの変化への動きとその背景を概説する。	小林雅之	小林雅之
3	教育と社会・経済発展 (2)	・近代以前の教育、特に江戸時代の教育の特徴を簡単に説明する。・明治の教育改革の考え方とそれによって生じた教育システムの拡大を解説する。・社会的選抜と教育的選抜の結びつきによる学歴社会システムの成立と発展を概説し、その戦後への遺産についてふれる。	同上	同上
4	教育と社会・経済発展 (3)	・社会経済発展と教育の関連を、世界各国について比較する。GNP と就学率の関連などを図で説明する。・発展途上国がかかえる問題点を、国際会議などの報告書をもとに紹介する。・途上国の例としてタイをとりあげ紹介する。	金子元久 小林雅之	金子元久
5	経済現象としての教育 (1)	・教育を社会的投資と見る見方を説明する。識字率と就学率や近代化との関連などを例にする。・経済発展と教育との関連を、人的能力政策を例に説明する。・経済学理論として人的資本論の登場の背景を説明する。・人的資本論の骨格をわかりやすく説明する。	同上	同上
6	経済現象としての教育 (2)	・人々の進学行動を人的資本論の立場から経済学的に説明する。・個人的な投資に対する利益の算出方法を具体的に提示し、収益率により進学行動を説明できることを具体的に示す。・教育だけでなく、人間行動の理論としての人的資本論について簡単に紹介する。	同上	同上
7	経済現象としての教育 (3)	・教育を経済的な現象として捉える見方を、「教育機会市場」と「労働市場」の二つの市場モデルをもとに説明する。・教育機会市場の構造と変化を具体的に説明する。・学卒労働市場の構造と変化を具体的に説明する。・二つの市場の関連を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	しごとと教育(1)	・職業と教育の関連をマクロに捉え、具体的なデータに基づいて、分析する方法を提示する。・戦後日本について、分析した結果を図やグラフでわかりやすく提示する。・特に、日本では教育と職業が密接な関係を持たない理由を説明する。	小林雅之	小林雅之
9	しごとと教育(2)	・学歴獲得と社会移動の関係について一般的なモデルを提示する。・日本の終身雇用制と内部労働市場化による学卒一斉採用方式について説明する。・職場で要求される知識や技術と学校教育の対応などミクロな教育と職業の対応について説明する。・人的資本論に批判的な経済学的・社会学的理論による教育と職業の対応関係の捉え方を紹介する。	同上	同上
10	しごとと教育(3)	・女子の労働参加と高学歴化との関連を捉える見方を紹介する。・女性と職業の関連について、日米の相違を比較する。・今日の女性と職業の問題点を論ずる。	同上	同上
11	教育問題の政治経済学 (1)	・戦後日本における教育の量的拡大を紹介する。それに対する政策的課題を提示する。・高度成長のための手段としての教育と教育需要の急激な拡大の関連を説明する。・教育の拡大とその歪みの増大、社会問題化した教育の例をあげる。・それに対する教育政策として、自由化、多様化、個性化など国際社会の中での社会資本としての教育のありかたを説明する。	金子元久	金子元久
12	教育問題の政治経済学 (2)	・教育と社会階層の関連、それをむすぶものとしての社会学的、経済学的な要因に関する研究を紹介する。・教育の機会均等に関する様々な議論と問題点を紹介する。・現代日本における教育の機会均等を具体的に評価する。・教育の機会均等にむけた奨学金や授業料などの政策を紹介する。	同上	同上
13	教育問題の政治経済学 (3)	・教育における政府の役割と市場メカニズムの関連について、様々な理論を紹介する。・新自由主義の思想など、政府の教育への介入が必ずしも自明でないことを説明する。・教育制度のコントロールと政府の関連、その問題点を説明する。・政府の教育支出について、日本の特徴を国際比較によって具体的に解説する。・高等教育への政府補助を例に、政府と教育に関する現在の問題点を解説する。	同上	同上
14	教育問題の政治経済学 (4)	・臨時教育審議会や大学審議会、中央教育審議会などの議論をもとに、教育改革の方向を解説する。・中等教育の改革について、業者テストの廃止や総合制などの動きを紹介する。・高等教育の改革について、教育改革などの動向を紹介する。	同上	同上
15	日本の教育と社会的課題	・教育改革とその問題点について総括的に論じる。・世界の教育改革の動向と日本の改革を比較する。・教育の生産的機能と選抜配分機能という観点から、教育と経済・社会の関連をまとめる。	金子元久	金子元久

＝子どもと若者の文化＝（ＴＶ）

〔主任講師：本田和子（聖学院大学教授）〕

全体のねらい

現代の文化は、子どもや若者によって不断にリフレッシュされているが、それは、一方では、伝統文化の変容に連なり、世代間の葛藤の原因ともなっている。本講義は、それら今日的な問題に焦点を合わせ、彼らの文化の解析を通して逆照射される「文化の継承し変容、およびその創造」について考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化と若い世代	全体のねらい。および、「文化」「子ども」「若者」などの用語の定義と説明。 次回以降の内容の概略。	本田和子（聖学院大学教授）	本田和子（聖学院大学教授）
2	文字と映像の文化 (1)	文字が文化をリードした時代から、映像の時代へ、さらに電子メディアの時代へと、社会の中心媒体が変化すると同時に、大人と若い世代との関係も変化を余儀なくされている。このことに言及し、現代における「文字文化」の位置を考える。	同上	同上
3	文字と映像の文化 (2)	「教科書」と「児童文学」は、従来、子どもに関連する出版文化の代表的存在であった。現在は、「子どもが本を読まなくなった」と言われる一方で、「ヤング・アダルト」という新ジャンルが勃興している。今回は、それらについて考察する。	同上	同上
4	文字と映像の文化 (3)	文字に代わって、先ず子どもの世界を席巻したのは漫画文化である。それらは、1960年代にはテレビと結び付いてアニメ文化を形成する。ここでは、子ども向けアニメを取り上げつつ、映像文化について考える。	同上	同上
5	身体文化の中の子どもと若者 (1) －甲子園神話と「若者」像－	からだを動かして遊ぶことは、子どもや若者にとってどんな意味を持つか。それらは、伝統的社会から現代に向けて、どのような変貌を遂げたか。	清水諭（筑波大学講師）	清水諭（筑波大学講師）
6	身体文化の中の子どもと若者 (2) －規格化される子どもの身体と精神－	遊びとスポーツの同質性と異質性。 遊びからスポーツへという変化は、子どもや若者に何をもたらしたか。	同上	同上
7	身体文化の中の子どもと若者 (3) －自然の中での遊びと身体－	スポーツ・イベントとして、運動会や甲子園大会などを取り上げ、その意味と変遷を探る。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	「もの」の文化史 (1)	現代は、人の暮らしに大量の「もの」を提供し、子どもの生活も「もの」と不可分である。これらの現象の解明に当たって、先ず、子どもの世界を特徴づける玩具・遊具に焦点を合わせる。	本田和子	本田和子
9	「もの」の文化史 (2)	現代の子ども・若者の世界には、従来の意味での玩具・遊具の範疇に入らないものが、生活の快適化のために取り込まれている。個室に用意されたテレビ・ラジオ、電話器・パソコンなど。これらは、彼らの生活に何をもたらしたのだろうか。	同上	同上
10	「もの」の文化史 (3)	伝統的生活観を欠如からの発想とすれば、現代の若い世代のそれは充足からの発想と言い得る。充足を目指して不足を補うために行動が開始される状態と、何も必要としない状態から何らかの動きが開始される状態の違いを考える。	同上	同上
11	都会の中の子どもと若者 (1) デパートのなかの子どもと若者	現代の都市空間のなかで、盛り場と呼ばれる歓楽の中心は、若者によって形成されたとも言われる。この経緯を踏まえつつ、現代の都市と彼らの関係に焦点を合わせ、その特性について論及する。(遊園地論を含む)	吉見俊哉(東京大学助教授)	吉見俊哉(東京大学助教授)
12	都会の中の子どもと若者 (2) 映画館のなかの子どもと若者	新しいメディア空間の形成に関する貢献と関与は、若い世代が先行世代を凌駕している。これらニューメディアにかかわる彼らの生態に注目し、その意味するものについて考える。	同上	同上
13	新しい言語と新しい現実(1) 情報メディアと若者	コンピューターは、もう一つの言語として、私どもの生活に不可欠の道具と化した。それに熱中する少年・少女たちをどう考えるかは、避けて通り得ない現代の課題である。コンピューターリテラシイの発達について、ゲストと対談する	本田和子	本田和子
14	新しい言語と新しい現実(2) 地球環境問題と若者	コンピューター世代の生きる場所は、従来の現実世界とは異なり、新しく生成される架空の現実であると言われている。しかし、情報網を通じて遭遇する新しい現実の一つとして、地球環境問題が浮かび上がっているが、それらと若者のかかわりを巡って、ゲストとの討論を試みる。	同上	同上
15	現代文化と子どもと若者 －展望と課題－	急変を続ける現代文化の中で、子どもと若者はどのような役割を担い、どのように自身の世界を形成していくのだろうか。それらに関して、私ども大人の責任は何か。現状を整理しつつ、今後の課題を考える。	同上	同上

＝変わる社会と大学＝（Ｒ）

〔主任講師：牟田博光（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

第二次世界大戦後50年以上を経て、大学教育を中心とした高等教育は大きな転換期にある。明治維新や終戦・占領といった社会の大変動に伴って行われた改革とは違い、平時において、変わる社会に対応して変化していく様はこれまでに見られなかったことである。戦後を中心として、大学がこれまでどのように変化し、これからどのように変化しようとしているかについて理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	大学の発展	大学の歴史は中世にさかのぼる。大学の慣習の中にも当時の伝統を引き継いでいるものもある。さらに、大学は各国の社会経済的事情によって様々な発展を遂げた。日本の大学の発展に関係のある事柄を中心に、大学の発展過程をたどる。	牟田博光（東京工業大学教授）	牟田博光（東京工業大学教授）
2	進学率の変化と高等教育計画	戦後、大学進学率は順調に伸びてきたが、昭和50年頃から15年間ほどは停滞から減少傾向を見せた。しかし、その間、専修学校は拡大した。高等教育計画が実施に移されたのもこの時期である。進学率がこれからどう推移するかも重要な関心事である。	同上	同上
3	大学の配置と進学移動	地方在住の子弟が都会の大学に進学する場合などに、進学に伴う地域間移動が顕著である。進学移動は大学入学希望者の地域分布と大学の地域配置のアンバランスによってかなりな程度説明可能である。大学の地域配置は政策による影響が大きい。	同上	同上
4	大学教育の大衆化	大学進学率が増加することは、一部のエリートだけではなく、誰もが大学に行けることを意味する。当然、大学はどうあるべきかに関する考え方、教育の中身、学生生活などにも変化が見られる。大学教育の大衆化の行方、影響について考える。	同上	同上
5	大学改革とカリキュラムの変化	設置基準の大綱化によって、各大学のカリキュラムは各大学が自由に編成できるようになった。大学改革の歴史的経緯もふまえながら、一般教養的科目と職業的専門科目のバランス、カリキュラムの改善などについて説明する。	同上	同上
6	自己点検・評価	多くの大学で自己点検・評価が行われている。この動きは我が国だけのものではない。各国の動向もふまえながら、なぜこのようなことが一般的に行われるようになったか、各大学で具体的にどのような自己点検・評価を行っているか、それらがもたらす政策的意味は何かについて考える。	同上	同上
7	入学試験のあり方	入学試験のありかたは大学の問題であるばかりでなく、受験勉強を通して、高校以下の教育にも影響を与える。なぜ今のような入学試験制度ができたのか、他の国ではどうやっているのか、日本では今後どのように改善していくことが可能かについて示す。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	大学の高度化	大学が高等普通教育化しても、一部の大学では高い研究機能を維持することが要求される。大学における研究機能は大学院に移っていく。さらに大学院は研究者の養成の場であると共に、高度な職業人養成の場としての役割もはたさなければくなってきた。	牟田博光	牟田博光
9	受益者と負担区分	大学教育によって、教育を受けた個人だけではなく、大学が存立する地域社会、あるいは国全体としても大きな利益を受けている。一方、大学を運営するには多くの財源が必要である。個人や国、地方公共団体が費用を分担して負担することになるが、どのような割合で負担すれば良いかについては議論のあるところである。	同上	同上
10	卒業後の進路	大学へ進学する目的の一つは、大学での学習を基礎として、実社会で活躍できる足がかりをつけることにある。大学における職業能力の開発は大きな課題である。大学の専門と職業の関連がどのように変化しているか、職業への準備教育はどうなるか、というった問題を明らかにする。	同上	同上
11	高等教育の多様化と柔軟化	大学以外にも大学レベルに相当する教育・訓練・研究施設がある。単位互換制度、連携・併任制度、学位授与機構の活動などにより、大学との関連も強まっている。大学と大学以外の高等教育機関の違いは何か、様々な高等教育機関がどのように共存していくのかなどについて考える。	同上	同上
12	新しい通信技術の利用	衛星放送、光ファイバー、高性能コンピュータなどの技術革新を教育に導入することにより、新しい形の大学教育が可能になりつつある。これらの技術を大学教育に実際に利用しているケースを紹介し、大学の技術的未来像を明らかにする。	同上	同上
13	遠隔高等教育の可能性	日本だけではなく、他の先進国や発展途上国にも放送大学のような遠隔教育大学が増えてきている。それぞれ設立の経緯は異なるが、同じ様な特徴も見受けられる。海外の遠隔教育の実態と比較することにより、日本の放送大学の将来について考える。	同上	同上
14	大学の国際化	国際化の波は大学にも押し寄せている。多くの大学、大学院で留学生の数が増え、授業を英語で行うところも出てきた。留学生を引き受けるだけではなく、国際研究交流も盛んになった。発展途上国に出かけて、その国の大学のレベルアップに貢献している教官も増えた。大学は教育に関する政府開発援助の前線となってきている。	同上	同上
15	学習社会と大学の未来	職務上の知識の更新や、生き甲斐を求めて多くの成人が学習を続ける学習社会が長期的には到来すると考えられる。そのなかで大学がこれからどのような役割を果たしていくべきか、大学の未来について考える。	同上	同上

＝地域社会と教育＝（ＴＶ）

〔主任講師：岡崎友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

地域社会が変貌するなかで、教育が果たす役割について、日本の地域開発の歴史を踏まえつつ、教育が具体的に展開される場面に即し、また人間の発達段階に沿って明らかにするとともに、教育実践上の課題についても考察する。生涯学習社会と類型化される現代の日本社会の教育は、特定の時期だけ、また限られた場所だけでなく、しかも様々な形態で行われている。この科目（本書）では日本の各地域で展開される教育を、社会学の理論と手法を中心に用いて分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域社会の変動と教育	戦後の地域開発政策の展開過程に即して、地域社会の教育上の課題を提示する。 本科目で取り上げる内容について、概説する。	岡崎友典（放送大学助教授）	岡崎友典（放送大学助教授）
2	教育環境としての地域	地域社会を教育環境の視点からとらえ、そこで成立する教育現象について、都市と農村、中央と地方、自然と人工とを対比する形で考察する。栃木県、東京都を事例とする。	同上	同上
3	地域社会と教育	近代の学校の成立過程を捉えた上で、現代の学校の再編過程について、具体的な教育内容に即して検討する。近代の学校の成立過程を新潟県松之山町を事例で捉え、現代の学校の再編過程について富山県高岡市の事例を通して学ぶ。	新井郁男（上越教育大学教授）	新井郁男（上越教育大学教授） 岡崎友典
4	教育内容と地域	山形県上山市を事例に、地域住民として必要な教育内容は何かについて、教育関係者と、住民の具体的な生活をもとに検討する。生活綴り方教育の歴史をたどり、生活記録として、これを教材にいかに取り入れるかについても考察する。	岡崎友典	岡崎友典
5	子どもの地域生活	子どもの放課後の生活を指導する地域教育組織の役割と課題について、香川県国分寺町の学校と子供会育成団体の事例を通して分析する。	住田正樹（九州大学教授）	住田正樹（九州大学教授） 岡崎友典
6	学校と地域住民組織	佐賀県唐津市の中心部と郊外の二地区の小学校のＰＴＡの実践活動の中から、学校と地域社会の住民組織が、どのような形で連携していくかについて、学校（教師）と住民から生の意見を聞きＰＴＡの果たす役割について提起する。	同上	同上
7	人材の養成と移動(1)	長崎市の商業校と普通科高校と沖縄県の総合高校の教育内容についてみることにより、高校教育と職業の関連を分析する	吉本圭一（九州大学助教授）	吉本圭一（九州大学助教授） 岡崎友典

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人材の養成と移動(2)	長崎県と沖縄県の高等学校の卒業後の進路について担当者から動向を聞き、地域によってどのような形態（タイプ）が形成されているかについて学習する。	吉本圭一	吉本圭一 岡崎友典
9	地域社会の変容と学区の再編	学校の統合・新設の伴う通学区の再編について、北九州市と福岡市の事例を通して、学校と地域住民組織がどのような形で連携しているかについて、関係者の証言をもとに課題を探る。	住田正樹	住田正樹 岡崎友典
10	高等学校の制度改革と通学区	高等学校の再編が緊急な政策課題となっている。戦後の高校教育の理念にひとつだった「小学区制」の果たす役割について、松江市の高校再編の過程を通して地域問題として捉える。	岡崎友典	岡崎友典
11	高等教育の就学機会の拡充	北海道江別市と沖縄県名護市新設された異なるタイプの大学の設立の経緯と教育内容について紹介し、高等教育の機会の拡充が情報・通信網の発達によりどのように変化してきているかを捉える。	吉本圭一	吉本圭一 岡崎友典
12	地域の国際化と教育	地域社会での国際化が、日本人と外国人の双方からなされることについて、静岡県浜松市の国際交流委員会、ボランティア団体、学校の事例を通して見ることによって、わが国の国際化としての教育の課題を探る。	新井郁男	新井郁男 岡崎友典
13	移動社会と地域文化の継承	流動性の高い地域社会と社会の低い社会を対比する形で、地域文化の伝承と創造の過程を北海道の上川地区と沖縄県の八重山地区を事例に検討し、学校教育と社会教育がいかに連携していくかについて考察する。	岡崎友典	岡崎友典
14	地域社会の再生と生涯学習	岩手県の沢内村の福祉を中心とした生涯学習の実践を通して、高齢者から子どもまでの各世代が相互に学習することの意義について、福祉と教育、行政と住民組織、公共施設と民間施設といった二つの機能の「共同性」の視点から分析する。富山県高岡市での学社連携についても考察する。	新井郁男	新井郁男 岡崎友典
15	地域社会の形成と教育の課題	「地域社会の教育」が学校と家庭、住民との協同作業・営みとして続けられることの必要性について、各回の担当講師4人が、それぞれ提起した問題をもとに座談会の形でまとめる。	岡崎友典	新井郁男 住田正樹 吉本圭一 岡崎友典

＝国際化と教育＝（R）

〔主任講師：小林哲也（京都大学名誉教授）〕

全体のねらい

経済をはじめとする社会の各面での国際化が進むなかで、そうした変化に応じるとともに、それらを望ましい方向で発展させることのできる教育が必要とされている。それはどのようなものか、実態によりながら、またその理論的根拠をたどりながら考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際化社会の教育	社会の国際化の進展がどのようなもので、またそれが教育にどのような課題を与えているかを考え、これまでの教育やその国際化の姿勢について反省し、今日の日本の社会の国際化と教育の課題領域を概観し、この講義の導入とする。	小林哲也（京都大学名誉教授）	小林哲也（京都大学名誉教授）
2	世界の教育の国際化	教育の国際化はひとり日本だけではなく、世界の人類共通の課題であることを国際教育の思想的系譜と、国際協調のための教育の発展をたどり、また、今日の国際機関の役割とそこでの各国の協力について考察する。	同上	同上
3	日本の教育の国際化	明治以降の日本における教育の国際化の発展を歴史的にたどり、その阻害要件とともに発展の契機を検討する。第２次大戦以降の教育の国際化を、民主主義と「共存と日常性の国際化」という視点で考える。	同上	同上
4	教育における国際交流	教育における人、もの、かね、情報等の国際交流がどのような考え方や政策で、どのような組織や集団、個人によって進められているか、またそうした交流の促進のためにどのような教育や研究が進められているかを検討する。	同上	同上
5	外国への留学	外国での外国人との付き合いの(1)として外国留学を取り上げ、日本における留学の伝統と、大学レベルの留学と高校の留学および海外学習旅行の現状と問題を検討する。また外国における日本人教育諸施設を考察する。	同上	同上
6	海外で育つ子供たち	外国での外国人との付き合いの(2)として、海外で育つ子供たち、いわゆる海外子女の教育を取り上げ、それがなぜ問題となるのかを、とくに彼らの帰国後の受入れ、いわゆる帰国子女教育との関連で検討する。	同上	同上
7	外国人留学生	日本での外国人との付き合いの(1)として、外国人留学生を取り上げ、その受入れの制度について検討し、またその具体的な問題を、大学・専修学校等の留学生・就学生と、小・中・高校の外国人児童・生徒について考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	定住外国人等の教育	日本での外国人との付き合いの(2)として、日本に永住ないし長期滞在する定住外国人等、とくに、もっとも古く、また人口の多い在日韓国・朝鮮人と、近年、増加しつつある外国人労働者や難民、日本人引き揚げ者の教育を検討する。	小林哲也	小林哲也
9	外国人学校・国際学校の教育	日本での外国人との付き合いの(3)として、外国人学校・国際学校を取り上げ、その実態と問題、とくにそれらの日本の教育制度における位置付けを検討し、それらとの関連で「民族教育」「多民族教育」について考える。	同上	同上
10	国際共同教育事業への参加	国際社会での異なった文化・民族の人々との付き合いとして、国際共同教育事業への参加を取り上げ、政府および非政府機関（ＮＧＯ）による活動、とくに発展途上国との教育協力およびそれを支える教育活動としての開発教育を検討する。	同上	同上
11	国際理解教育	異なった文化・民族の人々との付き合い方の教育としての国際理解教育について、その発展をたどりながら目的や方法、意義、基礎となる文化・コミュニケーション理論を検討し、また国際意識と愛国心、自国と他国の理解などの論点について考える。	同上	同上
12	学校の国際化	日本の学校をめぐる国際化の状況を検討し、学校教育の国際化を必要とする社会的要請とそれを促進あるいは阻害する条件、とくに学校教育についての社会的期待と、国際化に関する教師の役割について考察する。	同上	同上
13	大学の国際化	日本の大学の国際化の実態とそれを促進または阻害する条件を、主要外国諸国と比較しながら、主として学生・教員とカリキュラムおよび大学の目的・機能の面から検討し、また近年話題となっている「国際大学」について考察する。	同上	同上
14	地域社会での国際教育	地域社会における国際交流とその一環としての国際教育活動を、国境を越えた地域社会間の教育交流、国際化する地域社会内の教育活動、生涯教育の国際化等の諸面から考察する。	同上	同上
15	地球市民の教育	教育の国際化の目的を、異なった民族・文化の人々との共存とそのための地球市民の育成とする観点を検討し、この「グローバル教育」に含まれる理論的、実践的課題を整理・考察することによってこの講義のまとめとする。	同上	同上

＝メディアと教育＝（ＴＶ）

主任講師：高柴康雄（江戸川大学教授）
主任講師：遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授）
主任講師：白鳥元雄（聖徳大学教授）

全体のねらい

授業は教師と児童・生徒のコミュニケーション過程である。そこではことばのほかに種々のモノが媒体として使用される。基本的な手段である音声言語を始め、文字・活字・映画・電波・コンピュータなど、それぞれのメディアの発達の跡を意識しながら、新しいメディアが人間社会にもたらしたものを教育との関わりを通して考察し、メディアをどう受け入れ、活用していくかを探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コミュニケーション・メディア	メディアとは何か。ヒトは、メディアとしての「ことば」をどのようにして獲得したのか。他の動物のコミュニケーションと比較して、ヒトと動物に共通するもの、また、ヒト独自のものは何か、動物行動学の研究者に聞いて、「ことば」への道筋を明らかにする。	遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授）	遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授）
2	ことばの特性	ヒトが、「ことば」を聞くとき、それは単なる物理的な音を聞いているのではない。音を「ことば」として聞く手がかりはなにか。大量の情報を高速度で伝達することを可能にした「ことば」の特性を考察し、メッセージの受容に何が必要なのかを考える。	同　上	同　上
3	絵文字からアルファベットへ	音声は一過性で跡を残さない。「ことば」を伝え、記録するメディアが必要となった。絵文字が作られ、やがて「ことば」を写す文字が考案され、新しい世界が開いた。ここではヒトの記録への努力を見ていく。文字によって失われたものについても考えたい。	同　上	同　上
4	文字を教える・文字で教える－社会装置としての学校	文字が誕生したときから、社会は文字を読み書きする人々を必要とし、意図的な教育が始まる。すぐれた情報の貯蔵システムである文字から多彩に文化が展開し、その伝達は言語（音声と文字）というシンボルによって行われるようになる。学校の誕生である。	白鳥元雄（聖徳大学教授）	白鳥元雄（聖徳大学教授）
5	文字複製のメディア－グーテンベルクを中心に	印刷の歴史は中国で発明された木版から始まるが、15世紀なかばグーテンベルクの活版印刷技術の発明はそれをさらに飛躍させる。F．ベーコンがいうように、それは火薬、羅針盤と並んで、全世界の外観と状況を一変させた。マス・メディアへの第一歩である。	同　上	同　上
6	『世界図絵』コメニウスのもたらしたもの	コメニウスの『世界図絵』は、世界で最初の絵入りの言葉の教科書である。『世界図絵』は、それまでの文字中心主義の教育に新しい道を開くこととなった。視聴覚教育の源流といわれるコメニウスと、その後の直観教育の思潮が教育に与えた影響を考察する。	井ノ口淳三（追手門学院大学教授） 高柴康雄	高柴康雄（江戸川大学教授） 井ノ口淳三（追手門学院大学教授）
7	新聞というメディア	社会体制の変革期に情報欲求は生まれる。16世紀には手書きの「新聞」が誕生した。17世紀初頭には印刷された週間新聞が、そして王と市民たちの緊張関係の中で日刊新聞へと成長する。文字によるマス・メディアは、読み書きの力 —— リテラシーを前提にし、文字の習得を加速する。	白鳥元雄	白鳥元雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	黒板と掛け図	近代の教育は、黒板と掛け図に象徴される一斉教育である。校舎も標準化し、今日多く見られる教育環境としての学校が誕生した。教育メディアとしての掛け図を初めとする経験素材の広がりと、それらのメディアの果たした役割を考える。	高桑康雄	高桑康雄
9	動きを伝えるメディア	動きを記録し伝えるだけであった映画は、空間的な物象と時間的な活動のすべてを記録・保存・伝達するメディアとして、教育にも大きな影響を与えることになった。学校教育では「動く掛け図」論争に見られるように利用方法について活発な議論が行われた。	同上	同上
10	メディアとしての博物館	実物・図・写真などさまざまなメディアを利用した博物館は、博物館そのものがメディアであるといってよい。さらに、映像展示・体験型装置などの導入によってイメージも一新されつつある。さまざまな経験を通して、博物館でどのように学ぶかを考える。	同上	同上
11	ラジオの登場	放送は、登場当初からその教育的役割が注目された。大正15年に始まったわが国のラジオ放送には、高レベルの教育プログラムが用意された。ここでは学校放送が誕生するまでの跡をたどりながら、教育放送の役割を考察する。	遠藤　栄	遠藤　栄
12	教育メディアとしてのテレビ	戦後、学校教育の中で放送の果たした役割は大きい。全国の子供たちがすぐれた教材で学ぶことを可能にした。同時にその利用をめぐって活発な論争が展開された。しかし、教育メディアとしてのラジオ・テレビの利用は学校に限らない。今後の可能性を考える。	白鳥元雄	白鳥元雄
13	メディアとしてのコンピュータ	コンピュータ技術は、計算機としての役割から、データ・ベース、マルチ・メディア、通信とコミュニケーションツールに変わってきている。これまでプロにしかできなかった編集や制作をだれにでもできるようになった。これらの点を技術的な立場から紹介する。	永野和男（静岡大学教授）	永野和男（静岡大学教授）
14	学習の場におけるコンピュータ	今、学校の中で子ども達自身がメディアを編集して行っている活動がクローズアップされてきている。コンピュータを表現のための道具として活用している事例を紹介しながら、コンピュータ技術が教育的にどのような意味を持っているかを考える。	同上	同上
15	メディア・リテラシー	今、我々が接するメディアは多種、多様である。利用の効果を上げるためには、それぞれのメディアをどう読み取るか、利用者の技能の向上が必要である。メディア・リテラシーをどう考えたらよいか、また、どのように獲得されるべきなのかを考える。	高桑康雄	高桑康雄

＝知　覚　心　理　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：相場　覚（放送大学教授）〕
〔主任講師：鳥居修晃（聖心女子大学教授）〕

全体のねらい

人間における知覚活動は、そのほかのすべて心的活動のもととなる極めて重要な機能といえる。そこには神経生理学的基礎過程から高次の認知的精神過程までを含む複雑な機構が関係し、それらを理解することによって、われわれは人間の精神活動に一層深い洞察を得ることができよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	感覚・知覚・認知	感覚と知覚と認知はともに密接に関連しあっている。これらの間の関係を考察し、それぞれの働きと特徴を概観する。	相場　覚（放送大学教授） 鳥居修晃（聖心女子大学教授）	相場　覚（放送大学教授） 鳥居修晃（聖心女子大学教授）
2	知覚研究の方法	知覚研究のためには数多くの研究法が開発されて来た。そのあるものは心理学とおなじ位の歴史を持ち、またあるものは最近になって使われはじめた。それらを解説し、知覚研究の進展との関係をみる。	同　上	同　上
3	視覚（1） 明るさ・色	視覚のもっとも基本的な属性である明暗の知覚と色彩視について、それらの日常の経験との関連について考察し、またそれらの働きを担うメカニズムについての最新の理論を解説する。	相場　覚	相場　覚
4	視覚（2） 形・立体視	形には平面図形の形状と立体の形態とがある。平面図形のうちには輪郭線図形と面図形とがある。これらの平面図形の形をひとはどのように知覚するかという問題について論述し、次に、立体の形に関してはその見方が視点に依存して異なることを中心に考察する。	鳥居修晃	鳥居修晃
5	視覚（3） 運動視	われわれの視覚的世界は運動する事物に満ちている。またわれわれも動きながら物を見る。したがって運動の知覚はわれわれの生存に欠く事の出来ない機能である。そのメカニズムと生物学的な意義を論ずる。	相場　覚	相場　覚
6	開眼手術後の視知覚	先天性の視覚障害の人たちが開眼手術を受けた直後、どのような視覚体験をするかという問題を取り上げて論考する。次に、手術後、色・形の視知覚ならびに事物の認知活動がどのような過程を経て増強・形成されていくかという問題を中心に考察を進める。	鳥居修晃	鳥居修晃
7	聴覚（1） 聴覚の基礎	聴覚の基礎として、音の物理的性質と聴覚の属性との関係について、コンピュータ・グラフィックスを用いて説明する。マスキング実験などを通じて聴覚の基礎的モデルの1つである臨界帯域の概念について概説し、さらに聴覚の動特性について例をあげて紹介する。	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）	難波精一郎（宝塚造形芸術大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	聴覚（2） 音楽・音声 騒音	音楽の演奏表現に大きく関与する高さ、大きさ、音色の時間的変化についてデモ実験により説明する音声の知覚に及ぼす諸要因について合成音声を用いて紹介する。騒音の人間に及ぼす影響について例示し、音環境のアセスメントの重要性について概説する。	難波精一郎	難波精一郎
9	触覚	触覚については、触覚器官の代表であるヒトの手を主題とし、その触情報処理メカニズムについて解説する。まず、触情報を受容する皮膚機械受容単位の種類と機能を述べ、次にそれらの情報から主観的な触感覚がどのように産出されるかに言及する。	宮岡　徹（静岡理工科大学助教授）	宮岡　徹（静岡理工科大学助教授）
10	痛覚	痛覚については、その出現・抑制に心理的側面が極めて重要であることが知られている。そこで、末梢的な痛神経系の解説は基本的な事項に止め、トップダウン的な痛覚御機構について詳しく述べる予定である。	同　上	同　上
11	空間認知	空間認知に関する研究の流れを跡づけ、次に両眼・単眼による立体視、距離が異なる同一対象の大きさの知覚の問題を取り上げる。ギブソンのきめの勾配、ジュレッツのランダムドットステレオグラムに関しては具体例を示して解説を加える。	鳥居修晃	鳥居修晃
12	味覚・嗅覚	味やにおいの知覚について、閾値、感覚的強度、味・においの分類に関する学術的知見を学び、特にこれらの感覚に特徴的な快不快と前述の知覚との関係、またそのような快不快が形成される過程やその要因について考える。	斉藤幸子（通産省工業技術院生命工学研究所研究室長）	斉藤幸子（通産省工業技術院生命工学研究所研究室長）
13	時間知覚	時間は普段はあまり意識されない。そして意識されたとしても時と場合によってそれは全く異なって把握される。それらを規定する要因は何か。また時間知覚の生物学的基礎は何か、などについて概観する。	相場　覚	相場　覚
14	知覚の計算理論	計算機の発達にともなって、人間の知覚機能を計算機によって模擬させる試みが多くなされた。それらを概観し、それがわれわれの知覚機能の理解にどのように役立っているかを考察する。	同　上	同　上
15	知覚研究の応用 感覚代行	知覚の研究が応用面にどのように活用されているかについて論じる。先天性盲人ないし早期失明者における視覚の障害状況について解説するとともに、それらの人たちに視覚以外の感覚系を通して視覚情報を伝達する試み（感覚代行技術）について紹介する。	鳥居修晃	鳥居修晃

＝認　知　心　理　学＝（ＴＶ）

（主任講師：小谷津孝明（慶應義塾大学教授）
主任講師：星　　薫（放送大学助教授））

全体のねらい

認知心理学とは意味づけて知る、共感的に知る、創造的に知る、ことの心理学である。伝統的な科学的心理学の枠組みからすれば、知覚、記憶、学習、理解、思考、推論、問題解決、等が主題となるが、本講では素材を実験室的心理学内のみならず日常経験や文学・芸術あるいは文化人類学等の領域にも求め、従来とかく認知特性の要素的・機械論的研究に終わりがちであった点を反省し、出来るだけ人間および人間心理の全体像を、発達成長的側面も加味しながら、浮かび上がらせるよう努力したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	認知心理学とは何か	認知とは何か。感覚と知覚とどう区別されるのか。記憶や知識との関連はどうか。心理学の歴史の中でまた計算機科学など関連諸学において認知がどのように論じ研究されてきたかについて概述し、現在および将来の認知心理学のあり方について展望する。	小谷津孝明（慶應義塾大学教授）	小谷津孝明（慶應義塾大学教授） 星　薫（放送大学助教授）
2	「もの」の認知	“もの”の認知は物理的実在の単なるコピーではない。対象性、外在性、関係性を把えることがその本質である。その対象性の認知（同定）が知識なくしては成立しないこと、その知識との照合のメカニズムの基礎的なモデル、枠組の効果、補完・分節・平滑化といった能動的処理外在性の認知を支える内的メカニズムと投射機能等について述べる。	同　上	同　上
3	「こと」の認知	認知はしばしば意味・概念・エピソードなどにおよぶ。それは“こと”の認知である。対象が複数個集まればそこに関係性が認知される。「部分と全体」の関係はゲシュタルト心理学の主題だ。また、“こと”の認識が“生”に対してもつ深い関わりについて「目と目の世界」というテーマで話したい。	同　上	同　上
4	注意のはたらき	特定対象への予期的注意は意識を明瞭にし、認知を鋭敏化し、焦点化し、思考・判断・決定へのレディネスを高め、そして対処反応を速める。一方、新奇のもの、変化するもの、主体との関わりの強いものなどは特に注意を向けていないときにも認知されやすい。これらのメカニズムについて論じる。	同　上	同　上
5	記憶の世界(1)	認知した結果は記憶され、その後必要に応じて検索・想起され、次の認知に資する。その記憶の仕組みについて、情報処理的視点から、短期記憶と長期記憶、精緻化とスキーマ、意味記憶とエピソード記憶、意味ネットワーク、想起の再構成性等のサブテーマを設定し、構成的に概説する。	同　上	同　上
6	記憶の世界(2)	記憶の想起の仕方と精神障害の視点から4種類の記憶を分類し、それらの重層性と神経生理学的解体・精神医学的解体について述べる。左脳・右脳と機能局在説や老人性健忘症などについては、“人間の実存”という視点からも論じることにしたい。	同　上	同　上
7	学習と動機づけ	私たちは時には人に教えられ、時には自らの経験を通して、知識を習得し、知識間の関連を見つけて整理し、さらには考え方をも学んでゆく。この学習の形成過程と学習行動を積極的・効果的に自発・促進させる動機付けのメカニズムについて論じる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	思考と問題解決	思考とは問題解決に際して行われる知識の操作であるが、それはしばしば形式論理よりも生活経験に基づく実際知識や直感に依拠し、結果は誤りや曖昧さを伴いやすい。その実相を知り、対処の方策を考える。また、インターネットを通じてのグループ問題解決など最新の研究についても紹介したい。	小谷津孝明	小谷津孝明 星　薫
9	知的理解とスキーマ	談話・文章・諺・資などを素材として、それぞれの理解の仕方とそれをそのように方向付けるもの、①フォーカシング：特定の述語・題・詞書など、②枠組み：スキーマ・スクリプトなど、③連想・類比・メタ認識など、について論じる。	同　上	同　上
10	共感的理解と主客融合の視点	人と人との“間主観的理解”ほど人の共存・実存にて重要なものはない。それは相互の身体的・言語的・感性的表現を通して意図や気持ちを知的・共感的に理解することを要請する。伝承や文学芸術作品を素材にして、記憶とも関連させながら述べる。	同　上	同　上
11	感情、情動、そしてこころの原風景	幼児期に経験したシーンの記憶のうち成人してからの認識の仕方のありようを大きく支配しているものがある。これを原風景と呼ぶ。それには陽性的なものと陰性的なものがあるが、後者の典型は“トラウマ”であろう。感情と感動の問題として論じたい。	同　上	同　上
12	こころの構図を描く	これまで主として“こころの機能・働き方”について考えてきた。行動主義のように、こころを非実体的なるが故に心理学の対象とすることに反対する立場もあったが、この辺で“機能を産み出す構造”に力点を置き“こころ”の構図を描くことにする。	同　上	同　上
13	カウンセリングと認知の機能	“うつ”の治療法として最近注目されている“認知療法”を軸に、二三の代表的なサイコセラピーについて、特に知的・情動的認知の視点から述べ、さらにそれぞれが人間のこころをどのように見てきたか－つまり人間観－について考え、認識を深める。	同　上	同　上
14	思いやりと看護のこころ	人を思いやるということは、自己中心的思考から他者中心的思考に変わることである。それを媒介するものはその人の憂うべき身体的、精神的状況に対する共感的理解だ。それは愛他心、ｱﾙﾄｩﾙｲｽﾞﾑの基底でもある。これらを看護の問題と絡めて論じる。	同　上	同　上
15	認知心理学的自己実現のすすめ	自分があるべきと思う最高の自分を実現して行くこと、私たちはそこから身を引いていすぎはしないか。日々を生き生きと生きるために、現在の自己を見つめなおし、ありたいと願う最高の自己を生きるにはどうしたらよいかについて考えたい。	同　上	同　上

＝学　習　心　理　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：金城辰夫（専修大学教授）〕

全体のねらい

個体はさまざまな環境との相互作用のなかで発達していくが、特に経験や教育を通じて環境との関係のもち方や環境への働きかけ方が習得され変化していく側面は「学習」とよばれる。その学習の過程あるいは仕組みに関する心理学的な理論や研究を中心に、事例も交えながら解説していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学習とは	発達の進行には、素質に基づく成熟の要因と経験効果に基づく学習の要因が相互作用的に関与することを示し、学習のもつ意義ならびに学習の諸定義を述べたうえで、現段階での学習に関する心理学的アプローチの範囲（各章でとり上げられるテーマ）を紹介する。	金城辰夫（専修大学教授）	金城辰夫（専修大学教授）
2	初期学習	出生直後からすぐに種々の環境的作用が個体に影響を及ぼすが、そうした初期経験の効果の重要性を示すいくつかの研究＝＝動物における母子隔離実験・体性知覚制限実験や先天盲者の開眼時視知覚の事例など＝＝を紹介し、解説を加える。	同上	同上
3	条件づけ学習（1）	条件づけ学習の2つのタイプとして、パブロフ型（古典的）とオペラント型（道具的）のあることを示し、それぞれにおける「強化」・「消去」ならびに「般化」という基礎過程について例示しながら解説をする。また、「分化」や「弁別」の過程についても取り上げる。	同上	同上
4	条件づけ学習（2）	オペラント条件づけにはいくつかの様式があるが、そのうちの嫌悪刺激に関わるもの、とくに受動的・能動的回避条件づけの仕組みについて解説をし、さらに、味覚嫌悪や学習性無気力の研究事例も取り上げてみていく。また、できれば、行動療法にも触れる。	同上	同上
5	動作学習	知覚－運動協応ないし動作的技能について、それらが補正的・追跡的な性質をもつ単位動作からなる一連の連続的段階的構造になっていることを示し、その習熟にあたっての各種のフィードバック情報の重要性を解説する。また、練習法の問題にも触れる。	同上	同上
6	観察学習	攻撃行動および援助行動を題材にして、他者の行動観察を通じて社会的行動がどのように習得されていくのかを解説する。テレビの暴力場面の影響などにもふれる。	安藤清志（東京女子大学教授）	安藤清志（東京女子大学教授）
7	言語習得の過程（1）	幼児期までの子どもが急速に言語習得を達成する過程について、そこでどのような言語発達の変化がみられるのかを押え、それを規定する大きな2つの要因＝＝生得的要因VS環境的要因＝＝のかかわりについて整理する。言語習得の現象を押さえることを通して、言語の多様な側面に気づかせる。	荻野美佐子（上智大学助教授）	荻野美佐子（上智大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	言語習得の過程（2）	言語のもつ記号、コミュニケーションの機能を解説し、これらを可能とする生理学的、社会的要因について述べる。記号としての言語習得にかかわる認知的制約、語彙習得の諸理論、チンパンジーの記号習得について解説し、さらに自己内コミュニケーションの過程として、思考、行動調整における言語の役割を解説する。	荻野美佐子	荻野美佐子
9	記憶の過程	すべての学習は記憶に依存するが、記憶は記銘（符号化）・保持（貯蔵）・想起（検索）の3段階からなることを情報処理模型にしたがって解説し、短期記憶と長期記憶やその他の記憶の区分について解説する。	篠原彰一（東京都立大学教授）	篠原彰一（東京都立大学教授）
10	記銘学習	学習すべき事柄を学習の時点では自分の知識体系に関連づけられず、そのままのかたちで丸暗記する機械的学習を促進する諸要因について解説する。また、干渉その他の忘却の諸要因についても触れる。	同上	同上
11	知識と学習	学習におけるスキーマの働きを解説する。また、理解と記憶の関係、記憶における構成的側面についても事例によりながら説明し、既得の知識体系に新しい知識を関係づけながら習得する過程を具体的に示す。	同上	同上
12	概念と推理	概念の習得過程を概念達成実験を例にとり解説し、概念のプロトタイプについても触れる。推理の過程については、演繹推理、帰納推理ならびに類推について研究の事例を引きながら解説する。	同上	同上
13	問題解決	問題解決の諸要因について解説する。問題解決に影響を与える要因として、副次的目標、問題の表現、類推の働きをとりあげる。また、機能的固定性、構えなどの問題解決に及ぼす影響についても解説する。	同上	同上
14	態度・価値の形成	態度に関する基本的な概念を解説した上で、態度の形成過程を、条件づけ、直接経験、認知的一貫性、準拠集団の影響、モデリングなどの立場から検討する。	安藤清志	安藤清志
15	学習と動機づけ	種々の欲求と学習活動との関連性について述べ、とくに達成動機と原因帰属の仕方、機能的快感・認知的動機づけ、自己有能感・自己効力感などの学習活動における重要性を取り上げる。また、終りに、学習意欲の諸問題についても考察していく。	金城辰夫	金城辰夫

＝発達心理学（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小嶋秀夫（名古屋大学教授）
〔主任講師：三宅和夫（北海道医療大学教授）〕

全体のねらい

人間の生涯にわたる心理学的発達の姿を、乳幼児期から老年期に至る重要な問題を取り上げて概観する。発達的変化に関係する個体側の条件とともに、個体がかかわる環境条件に注目する。発達の姿の学習に加えて、学際的視野、日常生活の中での発達の視点の意義などを具体的に学ぶことを通して、発達心理学への理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現在の発達心理学	発達心理学の現状を概観する。それがどのような問いに答えようとする学問であるかを述べ、発達心理学の役割を学際的視野、社会的役割、日常生活との双方向的つながりの点から説明し、全15回の構成を示し導入とする。	小嶋秀夫（名古屋大学教授）	小嶋秀夫（名古屋大学教授）
2	発達研究の歩み	発達心理学の先駆けとしての発達研究にかんたんに触れた後、過去100年にわたる発達心理学の歩みを辿る。代表的な理論と理論家たち、発達心理学が用いる主な方法を説明する（縦断法・横断法、時代差を含む）。	同上	同上
3	ヒトから人へ	人間の初期発達を題材にしながら、発生・発育と発達についての理解を深める。時間軸に沿った変化には遺伝的なものと、環境に影響されるものがある。種としてのヒトがどのようにして社会的な人になるのかを、それらの相互作用の中で考える。	河合優年（三重大学教授）	河合優年（三重大学教授）
4	種々の機能が働き始めるとき	人間の種々の機能はいつ頃から働き始めるのかを、個々の機能系について、前回との関連から検討する。聴覚系、運動機能、さらに視覚系を扱う。	同上	同上
5	発達を作り出すもの	かなり早い時期から発達する個々の機能系が、相互にどのように関連しているのか、それがどのように発達を作り出すのかを考える。ここでは運動能力と認知機能、母子関係の成り立ちと後の発達について触れた後、他領域における発達研究の意味を述べる。	同上	同上
6	乳幼児の社会的発達	子どもは生まれて間もなくから母親を初め家庭内の人々とのかかわりの中で育って行く。やがて家庭外の子どもやおとなとの交渉を持つようになり、子どもの社会的世界は拡大して行く。このような過程を通じての社会的発達について、縦断的・生態学的に考察する。	三宅和夫（北海道医療大学教授）	三宅和夫（北海道医療大学教授）
7	乳幼児の情緒的発達	発達において情緒が担う役割を、乳幼児期に情緒表出がどのように社会化して行くか、親子の情緒的コミュニケーションの在り方が後年の羞恥心、罪悪感、道徳性などにどのようにかかわるかの検討を通して説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	認知機能の発達	ここでは、ピアジェの発達論やそれを裏付けるような実験データ、最近の認知発達理論に基づく新たな知見を述べる。その中で幼児期とは異なる児童期および青年前期の知的特性を浮き彫りにしたい。	丸野俊一（九州大学教授）	丸野俊一（九州大学教授）
9	社会性の発達	ここでは道徳性、愛他行動、自己の発達などを中心に述べる。その中で児童期から青年期前期における現実自己と社会規範（価値観）にもとづく理想自己のずれ、時間的展望などについて講義する。	同上	同上
10	個人差に応じた教育	ここでは認知スタイルやＡＴＩを中心に知的機能の個人差、創造性を育む教育形態などについて考える。また、今後社会的に必要になってくる自分の考えを自己主張できる態度・技能を育むために、教育環境や家庭環境はいかにあるべきかについても講義する。	同上	同上
11	大人になること世代をつなぐこと	大人は子どもを世話する存在となる。成熟した人間は、他者から必要とされることを必要とするからである。自己を確立し大人になることと次世代を育てることを関係付け、アイデンティティ、ジェネラティヴィティ（世代性）というエリクソンの概念を深める。	山田洋子（京都大学教授）	山田洋子（京都大学教授）
12	人生半ばの危機を越えて	もう若くない自分に向き合い、老いと死、人生の有限性を自覚し始めるのが中年期である。人生後半は必ずしも下り坂ではなく、中年期は内なる心の声に耳を澄まし、個性化の道を歩み始めるときであることを実際に示す。	同上	同上
13	人生サイクルと人生の物語り	人は自分の人生の物語りを誰かに語りたいと思い、また、自分の人生をより大きな生の循環系と重ね合わせて意味づけたいと願う。肉声で語られる日常の例を基に、ライフ・サイクルと人生を物語る意味について考える。	同上	同上
14	生涯発達の中での老年期	老年期の研究者をゲストに招いて、老年期に見られる心理的変化の特徴を把握するとともに、エイジングの個人差を生む生物学的・環境的・個人史的要因を探る。この時期を含めて、生涯発達をどう考えるかを説明する。	小嶋秀夫	小嶋秀夫
15	発達心理学の課題と将来の展望	前回までの講義を通じて、発達心理学研究が今日までに大きな進歩を遂げてきたことが理解されたであろうが、それがどのくらい現実の社会的問題の解決に貢献しているかについて考え、さらに今後進むべき方向について検討する。	三宅和夫	三宅和夫

＝乳幼児心理学＝（ＴＶ）

〔主任講師：三宅和夫（北海道医療大学教授）
主任講師：内田伸子（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

出生より小学校入学までのおよそ６年間における子どもの心理的発達について一方において近年の研究の成果にもとづいた新しい知見を具体的に提示し、他方において社会、家族をめぐる変化を踏まえて乳幼児保育のあり方などについても検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	乳幼児期の発達の重要性	この20年ほどの間に乳幼児期とりわけ生後２～３年間における子どもの発達についての心理学研究が急激に発展してきた。それがどのような理論の進歩によるのか、またどのような社会的背景のもとで起きたのかについて考察する。	三宅和夫（北海道医療大学教授）	三宅和夫（北海道医療大学教授）
2	発達初期の子どもの能力	かつて乳児は無力な存在として扱われ心理学の研究もあまりこの時期のことを取り上げていなかった。ところが近年の研究は乳児がすばらしい能力をもつ能動的な存在であることを明らかにした。このことについて具体例をあげて説明する。	同上	同上
3	気質と行動発達	出生後間もなくの子どもにはその行動的特徴において個体差が見られる。それらは生得的な基礎をもつものであるが、養育者に少なからぬ影響を及ぼす。ここでは気質についての研究を紹介しそれが乳幼児の行動発達にどのようにかかわるかを考察する。	同上	同上
4	情動の発達	情動の機能主義的考え方を中心に、乳児期の情動発達の問題を解説する。乳児の情動は、単に親に対する信号としてだけ働いているのではなく、自分自身の状態や行動を制御する働きをもつ。そのような情動制御の研究を紹介する。情動表出の日米比較研究も紹介する。	氏家達夫（福島大学教授）	氏家達夫（福島大学教授）
5	母子システムと愛着の発達	およそ生後１年間に、母子は互いに相手に適応し、強い情緒的絆＝愛着を形成する。その適応過程には、母親自身の経験や子どもの特徴、母子を取り巻く社会状況などが関わっている。愛着の発達を、それら要因間のダイナミックシステムとして考察する。	同上	同上
6	世界を捉えるしくみ －認知機能の発達－	子どもは乳児期を通して外界を認識する枠組を形成していく。事物の認識、生物概念や数概念、数を操作する仕方や出来事を因果的に捉え、自分自身の行動をモニターしたり制御できるまでを実証研究を踏まえて検討する。	内田伸子（お茶の水女子大学教授）	内田伸子（お茶の水女子大学教授）
7	ことばの生まれる道筋 －言語機能の発達－	言語は人とやり取りする手段として人との関係を作る働きをする。また認識や情動、意志と絡み、イメージの形成や認識を深める手段となる。言語機能の発達を踏まえて、ことばの習得が子どもの発達とどう関わるか考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	対人関係の発達	家庭における人間関係の中で父子関係と兄弟関係に特に焦点をあてて検討する。また、夫婦関係や家庭の外のネットワーク（祖父母や近隣の人々）の子育てに対する影響についても併せて考える。	臼井　博（北海道教育大学教授）	臼井　博（北海道教育大学教授）
9	社会的認知の発達	かつて幼児といえば、自己中心的に思考し行動すると考えられてきたが、こうした幼児観は近年急速に塗り替えられてきている。幼児が他者や、自分の生活世界についてどのように理解しているのかについて検討する。	藤崎春代（帝京大学助教授）	藤崎春代（帝京大学助教授）
10	遊びの構造	「遊べない」子どものことが問題視されるほど、子どもにとって遊びは重要な活動と考えられている。なぜ遊びは子どもにとって重要なのか、あるいはそもそも遊びの中で子どもは何を行っているのかについて考察する。	同　上	同　上
11	メディアからの学び	日本の子どもは、誕生直後からテレビに接し、その後も絵本やテレビゲーム、そして最近ではコンピュータなど多様なメディアに囲まれて生活している。子どもはメディアとどのようにかかわり、何を学んでいるのかについて概観する。	同　上	同　上
12	反抗期と自律の発達	反抗期は、自律の発達と関係づけて理解されることが多い。しかし、反抗は自動的に自律を生み出すのではない。反抗を自律をへと結びつけていく親との相互作用を通して、子どもは自律的反抗を発達させる。その発達の様相を日米の母子を比較しながら明らかにする。	氏家達夫	氏家達夫
13	日本の幼児教育実践の特徴	日本の幼児教育の実践を特徴づける保育者の子育ての目標、子どもの発達についての見方、教育の方法についての信念とこれらの信念が実際の保育の方法にどのような形で反映されているのかを考える。	臼井　博	臼井　博
14	読み書き能力の獲得	幼児期の終わり頃までには、子どもは読み書きの世界への第一歩を踏み出す。読み書きを媒介にして子どもの世界は「今」「ここ」を超えて広がるようになる。読み書きの獲得の基盤、読み書きの獲得過程について考察する。	内田伸子	内田伸子
15	乳幼児期から児童期へ	乳幼児期から児童期にかけての発達的な連続性と変化について、またそれに対するさまざまな影響要因について考える。その中で乳幼児期の経験の発達的な意味や発達的な課題についても検討する。	臼井　博	臼井　博

＝青　年　心　理　学＝（Ｒ）

〔主任講師：久世敏雄（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

子どもからおとなへの過渡期は、心身の変化が著しく、人格構造が再体制化される時期である。したがって、本書では、初期青年期に始まる思春期的、認知的、社会的役割の一般的変化を考察し、つぎに家族、仲間、学校環境などとの相互的影響を検討する。最後に、青年の特徴である個別的変化について論述するものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	青年期の成立と青年心理学	青年期は、ホール，Ｓ．の著書『青年期』（1904）によって、社会的に認知されるようになったといわれる。以後、90数年経過しているが、ここでは、青年期の成立以後の歴史をふりかえり、青年心理学の体系化について述べる。	久世敏雄（愛知学院大学教授）	久世敏雄（愛知学院大学教授）
2	本書の枠組と青年発達理解の視点	本書の枠組を理解するために、まず、青年期の基本的変化、青年の生活環境との相互作用の結果としての青年の個別的特徴にふれる。つぎに、こうした青年発達を理解する視点としての人格形成の過程と、理解の方法について解説する。	同上	同上
3	生物的・思春期的変化	青年期の身体的成熟には、質的な変化が顕著に見られる。特に性的成熟の徴候としての第二次性徴の発現は、青年の生活に多大の影響をおよぼす。こうした身体的な変化が青年の心理面にどのような影響をおよぼすかを考察する。	福富護（東京学芸大学教授）	福富護（東京学芸大学教授）
4	心理的・認知的変化	自分の存在を自ら意識し「自我を発見」するとされる青年の心理的世界は、児童期とどう異なるのか、認知的能力の著しい発達とともに自己－他者－社会－世界のとらえ方がどう変化するか、について述べる。	山岸明子（順天堂医療短期大学教授）	山岸明子（順天堂医療短期大学教授）
5	社会的役割の変化	青年期になると、家庭や社会の中での地位・役割に変化が生じ、それに応じた適切な行動が求められる。しかし、境界人ともいわれるように、青年の社会的立場は不安定であり、青年は、不安や動揺に陥ることも少なくない。この時期の社会的役割について考える。	高木秀明（横浜国立大学助教授）	高木秀明（横浜国立大学助教授）
6	家族関係と青年	両親や兄弟などとの家族関係が、青年の心理的発達と相互に影響し合うことを考察する。また、青年の心理的変化が生じる時期は、両親の身体および生活環境に変化が生じる時期でもあることを考え、家族システムの観点から概説する。	二宮克美（愛知学院大学教授）	二宮克美（愛知学院大学教授）
7	仲間関係と青年	仲間関係は、青年期の心理的・社会的発達に影響を及ぼす。特に、同性の親友を持つことは意味があり、協調性や共感能力を育てる。一方、健全な仲間関係を築くためには、健全な家族関係の存在が基盤となる。この時期の仲間関係の発達的意義について考える。	高木秀明	高木秀明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	学校環境の特徴	青年の自我、価値や社会性の発達に重要な役割を果たしている学校環境について述べる。とくに、学校生活でのストレスや学校環境への適応さらに学校環境の移行に伴う諸問題について考察する。	二宮克美	二宮克美
9	労働・アルバイトの意味	青年期は、子どもから大人への過渡期である。労働という観点からも、一生を通じての職業を選択していくのが青年期である。生涯を通じての労働の意味、青年期において近年盛んになっているアルバイトの実体とその意味を、自我心理学的立場から考察する。	大野久（立教大学教授）	大野久（立教大学教授）
10	アイデンティティの発達	エリクソン，E.H.が、1950年代に提唱したアイデンティティの概念は、人間の全生涯における青年期の意味をとらえるものとして、今なお鍵概念となっている。本章ではアイデンティティの概念規定、その機能、発達、バリエーションなどを実例を交えながら述べる。	同上	同上
11	性的発達	性的発達の中には、身体的なレベルでの性的成熟に加えて、性役割の形成過程や性的欲求に触発される性行動の発達過程が含まれ、青年期はこれらの発達に関して重要な時期といえる。本章では、性役割や性行動の発達が青年の生活に及ぼす影響を考察する。	福富護	福富護
12	達成と親密性	自分の力により何事かを達成すること、及び他者と親密なつながりをもつことが、「確かな個としての自分」を確立しようとしている青年にとって如何に重要か、またそれらが何によって規定されているのかについて述べる。	山岸明子	山岸明子
13	自律性と愛着	青年期は、さまざまな側面で親への依存を脱し、自律性を獲得していく時期である。しかし、親子間の愛着は消滅するわけでなく、一方的な権威－服従の関係から、対等で協調的な関係へと質的に変化する。この時期の自律性と愛着の発達と変化について考える。	高木秀明	高木秀明
14	青年発達と青年援助	本書の枠組みに沿って青年発達を理解するとき、例えば、青年発達の標準、水準および移行期の特質を知ることや青年期に発生する心理病理（学）の連続性、非連続性の知識をうることは、青年を援助するのに役立つことを述べる。	久世敏雄	久世敏雄
15	生涯発達と青年期	1980年代以降、生涯発達の視点が強調されるようになり、青年期までを主として対象としてきた発達心理学は、曲がり角に立たされている。ここでは、生涯の発達を視野に入れたときの青年期の意味と課題は何か、について考察する。	同上	同上

＝ 老年期の心理と病理（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：竹中星郎（大 正 大 学 教 授）〕

全体のねらい

老年期にみられる精神症状や痴呆を理解するためには、人間関係や生活の変化などがどのような意味を持つかを考えることが必要である。そのためには老年期心性の特徴を現実の状況との関連でとらえ、認識することが大切となる。それをふまえて、老年期にみられる多彩な精神症状について事例を通して具体的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老年期の心理的特性をめぐる問題 (1)	老年期とは「生きる空間の狭溢化」が避けがたい状況である。心身の衰えや人間関係、役割などの喪失は老年者を限られた人間関係や生活空間に閉じこめることになる。さまざまな喪失体験と孤独および孤立が老年者にどのような意味を持つかを考える。	竹中星郎（大正大学教授）	竹中星郎（大正大学教授）
2	老年期の心理的特性をめぐる問題 (2)	人生の最終段階に人格の発達はあるか、そして老年期における性格変化の諸形態を臨床的に整理する。また老年期は死が現前化するがそれをどう受けとめているかを考える。そして喪失体験や孤立、および性格の問題をふまえて老年者に課せられる適応、不適応を考える。	同上	同上
3	老年期の心理学 (1)	老年期に生じる身体的、感覚知覚的、認知的変化について概観し、これらの変化を経験することで高齢者がどのように自己像を変化させ、人格的に変化する可能性をもっているかという問題を、生涯発達の視点から考察する。	星薫（放送大学助教授）	星薫（放送大学助教授）
4	老年期の心理学 (2)	老年者は好むと好まざるに拘らず、多くの環境変化を経験させられる。仕事からの引退、祖父母役割、余暇時間の増加、住み慣れた場所からの移転、施設への入所、身近かな者との死別、自らの死の自覚などの問題について概観し、今後の老年期のあり方を考える。	同上	同上
5	老年期の精神病理 (1) 妄想－1	老年期の精神科臨床では妄想が最も多く、症状も多彩である。精神病の素因や特定の性格との関連より、人間関係や生活の不安葛藤で生じそれを反映してテーマは現実的である。盗られ妄想の臨床を通して、老年期妄想の特徴、精神分裂病や作話との相違を論ずる。	竹中星郎	竹中星郎
6	老年期の精神病理 (2) 妄想－2	思春期青年期の妄想の代表的疾患である精神分裂病は老年期にどのような経過をとるか、高齢発症はあるかなどを臨床的に考察する。また「分裂病的」といわれる迫害妄想が、高齢者ではうつ病や心因により生じることが多く臨床症状の特徴を整理することが大切である。	同上	同上
7	老年期の精神病理 (3) 妄想－3	老年期に多くみられる接触欠損妄想症と「幻の同居人」妄想について、老年期心性から考察する。また老年期では痴呆とみなされることが多い人物誤認と家族否認の老年期の特徴を論ずる。そして身体面だけで受けとめられがちな慢性体感幻覚症の事例を紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	老年期の精神病理 (4) うつ病	さまざまな喪失体験に遭遇する老年期は、抑うつ的心理が根底に流れている。しかしうつ病を仮性痴呆ともいうように老年者では痴呆との鑑別が重要である。また老年者ではせん妄や不安焦燥、コタール症候群が多い。そして身体的管理が重要になるなどの特徴がある。	竹中星郎	竹中星郎
9	老年期の精神病理 (5) 神経症圏	老年者をとりまく状況は神経症的傾向を再燃させうる。またさまざまな身体病やその不安は心身症的な色彩を強める。強迫症者は自己の完全性を保ちがたい老年期には脆く、身体的不調に心気的退行を増幅する。なかでも介護者を悩ませることが多い強迫と心気症状への対応を論ずる。	同上	同上
10	老年期の精神病理 (6) 人格障害、異常行動	老年期は生活空間が狭まり人間関係が濃密になる。そのため人格の問題が顕在化する。そのことを妄想型人格障害の事例を通して考察する。また脳病変部位の症状として人格変化が生じる。そして老年期の適応形態の特異なものとして無感情、人格のスプリットを紹介する。	同上	同上
11	痴呆の臨床 (1)	痴呆は老年期の最大のテーマのひとつであるが、妄想やうつ病なども含めて「ぼけ」といわれるように、その認識は不十分である。医学的特性をふまえて痴呆性疾患の臨床症状を論じ、非痴呆性疾患との鑑別に触れる。とりわけアルツハイマー病について論じる。	同上	同上
12	痴呆の臨床 (2)	せん妄は脳の急性症状であるが、痴呆と区別されずに適切な治療や対応が怠かにされる。また、痴呆患者ではせん妄が多く、鑑別とその成因の理解は治療や痴呆の進行を止めるうえで重要である。さらに夕方症候群とＲＢＤについて臨床例を示して考察する。	同上	同上
13	痴呆の臨床 (3)	痴呆老人の精神症状や異常行動の大半は知的障害者の心理的反応ととらえられる。事例を通してその心理的プロセスを考え、それをふまえて医療や福祉の現場の看護や介護の問題を検討する。痴呆老人のターミナルケア、尊厳死について具体的に考える。	同上	同上
14	高齢者医療について	一般病院や老人病院（治療型）での精神科コンサルテーションが必要な患者は30%前後である。そこには身体病や薬による精神症状や慢性疾患や後遺症に対する医療の問題も含まれている。老人医療の多様な形態を紹介して医療のかかわりとその限界を論じる。	同上	同上
15	高齢者福祉と医療	老人ホームや在宅介護を支えるために医療はどのような役割を担い、立場をふまえるべきかを具体的な実情に即して考える。また施設入所や入院にあたって老年者に対するインフォームドコンセントや痴呆老人の人権の問題、および財産保護のための成年後見制度について紹介する。	同上	同上

＝言語発達心理学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：内田伸子（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

読み、書き、話す営みは人間生活において基本的な営みである。乳児期から喃語や片言で母親と「会話」を始めるし、幼児期のはじめから、子どもは新聞・雑誌を読む大人の姿に興味をひかれ、やがて文字に目をとめるようになる。たえず他者とあるいは自分自身と語り、活字文化に触れる中で、人は自分の世界を広げ、まとまりのある意味世界を構築していくようになる。人間にとって基本的な、読み、書く、話すという営みについて、最新の発達心理学、認知心理学、教授学習の心理学の知見を踏まえ、さらに、ことばの生理学などの最新の成果に基づいて、ことばと人間の関わりについて考察を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ことばと人間	ことばは世界認識の手段であり、人とやり取りする手段でもある。言語はどのようにして出現し、また獲得されていくのかについて言語獲得に制約を与える生物学的基礎を明らかにするとともに、人間にとってのことばを獲得するということの意味を考える。	内田伸子（お茶の水女子大学教授）	内田伸子（お茶の水女子大学教授）
2	会話の発達	会話は、話し手と聞き手がかわりばんこに発話をすることによって成立する。このような相互作用のパタンは、授乳の過程にも見いだすことができるという。―この章では、会話の発生、発達の過程をみていく。	仲真紀子（千葉大学教授）	仲真紀子（千葉大学教授）
3	絵本との出会い	今日では乳幼児向けの絵本が数多く発行され、子どもは早ければ0、1歳台から絵本と出会っている。絵本の読み聞かせを通して子どもは「本を読む」ことを経験し学んでいく。この章では、乳幼児期における読み聞かせがどのように行われているのか、また絵本を読むことが子どもの発達に与える影響について考える。	秋田喜代美（立教大学助教授）	秋田喜代美（立教大学助教授）
4	物語行動の発達	ことばは象徴機能を基礎にして成立し、人とのやり取りの手段として、また内的なモデルを構成する手段となり、しだいに、まとまりのあるディスコース（文章）が生成されるようになる。ことばから文章までの発達過程を物語産出という面から考察する。	内田伸子	内田伸子
5	読み書き能力の獲得	自分で考えていること、人に伝えたいことを文字で表現できるようになることは、生後1年して二足歩行ができるようになることと同じくらい大きな出来事である。読み書きを媒介にして、子どもの世界は「今」「ここ」を超えて広がる。この文字の世界に子どもが足を踏み入れるのはきわめて早い。本章では幼児期から就学期までの読み書き能力の獲得過程について具体的資料に基づき考察を進める。	同上	同上
6	文章の理解過程	私たちは日常生活の中で、本や教科書、新聞、雑誌、電化製品やコンピュータの取り扱い説明書など数多くの文章を読んでいる。読んでいてわかりやすい文章もあればわかりにくい文章もある。こうした時に、私たちの心の中ではどのような処理が行われているのだろうか。文章を読むとはどのような心理過程であるのかについて、認知心理学の代表的研究を紹介しながら考えていく。	秋田喜代美	秋田喜代美
7	読みの発達と教育	児童期を中心に読みに関して何が発達するのか、また読みや読書行動を促すにはどのような教育的働きかけを行うのがよいのかについて考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	作文の発達と教育	子どもはかなり早くから文字を読んだり書いたりする。しかし、自分で考えたことを文字で自由に表現することができるまでにはしばらく時間がかかる。本講では作文の発達について焦点をあて、作文過程でどのような精神活動に従事しているかについて考察するとともに、書くことを通して認識の深まりを助ける教育のあり方について考える。	内田伸子	内田伸子
9	読書行動の発達	読むことの心理過程についての考察（第6講・第7講）を踏まえ、読書という生活の中の一つの行動として読むことを捉え、年齢に伴う変化と環境が読書に与える影響について考える。	秋田喜代美	田喜代美
10	会話の発達を支えるもの	人は生まれおちた瞬間から相互交渉をもつべく方向づけられていることを学んだ。だが適切な社会的、言語的環境になければ話ことばは育たない。どのようなはたらきかけによってことばは育つのかについて考察する。	仲真紀子	仲真紀子
11	話しことばの特徴	話しことばは原初的な言語活動である。ここでは話ことば全般について、書きことばと比較しながらその特徴を考察する。話ことばに伴う身振り動作についてもふれる。	同上	同上
12	会話の情報処理	発話を理解するには、文字どおりの意味が分かるだけでは不十分である。推測される背後の意味（含意）や発話の意とをも知る必要がある。本講座で発話の理解がどのように行われるのかを検討する。	仲真紀子	仲真紀子
13	聴こえとことばの生理学	聴く・話す・読む・書くの神経機構を解説する。外界の情報を取り込む器官である聴覚器官のしくみとその働きについて理解を深め、さらに外界に働きかけるときの主要器官である発声・発語器官のしくみとその働きについて講ずる。	進藤美津子（広島県立保健福祉短期大学教授）	進藤美津子（広島県立保健福祉短期大学教授）
14	聴こえとことばの障害	話しことばが作りだされ、さらに、それが情報として受け手に伝わり、理解される過程、いわゆる“ことばの鎖”をつくりだす神経機構のどの部分に働き異常が起こったときに、どのような障害が生じやすくなるかについて取り上げる。	同上	同上
15	言語治療	言語治療の現場から子どもから大人まで、具体的症例をあげ、治療の方法と回復の過程について解説する。これを踏まえて、ことばを失うことが人間生活にとってどういうことかを理解し、ことばが人間生活においてどのような意義があるかについて考える。	同上	同上

＝社　会　心　理　学＝（ＴＶ）

－アジア的視点から－

〔主任講師：山口　勧（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本人の社会的行動について考えること。特に、アジアの中の日本という視点から、実証的な研究結果に基づいて、比較文化的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アジアの社会心理学へ	全体の枠組みを提示する	山口　勧（東京大学教授）	山口　勧（東京大学教授）
2	方法論・固有文化心理学	相関的方法、実験的方法の解説および文化に固有な心理学の必要性について解説する	同　上	同　上
3	個人主義－集団主義	個人主義・集団主義の国際比較について解説する	同　上	同　上
4	自己－文化心理学的アプローチ	相互独立－相互協調的自己観において日本人と西洋人との間に顕著な違いがあることを解説する	北山　忍（京都大学助教授）	北山　忍（京都大学助教授） 山口　勧
5	文化の継続性について	文化がどのようにして維持されるかについて考える。	嘉志摩佳久（ｵｰｽﾄﾘｱ・LaTrobe University教授）	嘉志摩佳久（ｵｰｽﾄﾘｱ・LaTrobe University教授） 山口　勧
6	集合性の理論－グループ・ダイナミックス	人間の集合体を一つの全体としてとらえ、理論的に考察する。	杉万俊夫（京都大学教授）	杉万俊夫（京都大学教授） 山口　勧
7	日本人の社会的行動1「コントロール観」	日本人およびアジアの人々のコントロール観について解説する。	山口　勧	山口　勧

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日本人の社会的行動2「信頼」	日本人の信頼感の特徴に付いて、アメリカと対比させながら解説する。	山岸俊男(北海道大学教授)	山岸俊男(北海道大学教授) 山口　勧
9	日本人の社会的行動3「甘え」	日本人に特徴的とされる「甘え」の現象について解説する。	山口　勧	山口　勧
10	日本人の社会的行動4「紛争解決」	日本人およびアジア人の社会的葛藤の解決法について、西洋人のそれと対比させながら、解説する。	大淵憲一(東北大学教授)	大淵憲一(東北大学教授) 山口　勧
11	中国人の社会的行動1「中国文化における対人関係のダイナミックス」	日本人と同様に集団主義的と考えられる中国人の集団行動の特徴について、日本やアメリカとの対比をしながら解説する。	Kwok Leung(香港中文大学教授)	Kwok Leung(香港中文大学教授) 山口　勧
12	中国人の社会的行動2「中国文化における体面」	中国人にとって重要とされる体面の問題について解説する。	Kwok Leung	Kwok Leung 山口　勧
13	韓国人の社会的行動1「恨」	韓国人を理解するために重要と考ええられている「恨」について解説する。	Uichol Kim	Uichol Kim 山口　勧
14	韓国人の社会的行動2「我々意識」	韓国人が強く持つ「我々意識」を、日本人や西洋人のそれと比較しながら解説する。	同　上	同　上 山口　勧
15	文化間のコミュニケーション・まとめ	同じ様な文化を持つ、さまざまな勝ちを共有するようにみえるアジアの人々の間でも、コミュニケーションの難しさは存在する。この点について考え、全体のまとめを行う。	渡辺文夫(上智大学教授) 山口　勧	渡辺文夫(上智大学教授) 山口　勧

＝人　格　心　理　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：鈴木　乙史（聖心女子大学教授）〕
〔主任講師：佐々木正宏（國學院大学教授）〕

全体のねらい

人格には、多くの人々が関心をもっているが、その複雑で多面的な性質から、理解は容易でない。人格心理学では、まず、人格とは何かを取り上げ、また、基礎理論として、精神分析、現象学、行動主義の三大アプローチを紹介、比較する。さらに、人格の形成過程と、適応－不適応の諸問題を詳述する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「人格」とは	「人格」とはどのようなものなのかについて論じる。人格と類似した語に、性格があるが、その説明も行い、差異を考察する。さらに個人差についても取り上げる。	佐々木正宏（國學院大学教授）	鈴木乙史（聖心女子大学教授） 佐々木正宏（國學院大学教授）
2	「人格」理解の方法	人格理解の方法として、面接、生育史に関する情報を得る、家族アセスメント・心理検査などの具体的方法を概説する。次に、心理検査に関して性格検査と知能検査について解説し、最後にまとめとしてテスト状況やテスター・被験者関係について取り上げる。	大貫敬一（共立女子大学教授）	大貫敬一（共立女子大学教授）
3	人格理論（1）精神分析的アプローチ	フロイトが創始した精神分析のアプローチについて概説する。無意識や、エス、自我、超自我の三者から成る人格の構造や、防衛機制について述べ、さらに、精神分析療法についても、人格やその変化とのかかわりの点から取り上げる。	佐々木正宏	佐々木正宏
4	人格理論（2）現象学的アプローチ	現象学的アプローチについて概説する。とくにロジャースの自己理論における経験や自己概念、及びそれらの関係を述べ、さらに、彼の創始したクライエント中心療法における人格変化のとらえ方を述べる。	同　上	同　上
5	人格理論（3）行動主義的アプローチ	研究対象を行動とする行動主義のアプローチについて概説する。その基礎をなしている古典的条件づけや道具的条件づけについて述べ、不適応行動を取り除き、適応行動を獲得することを目指す行動療法についても取り上げる。	同　上	同　上
6	3理論の位置づけと比較	精神分析、行動主義、現象学的自己理論の位置づけを、因果関係論と現象学（意味）の枠組みから比較・検討する。特に、人を理解する上での意味論の重要性を指摘する。	鈴木乙史	鈴木乙史
7	人格の形成（1）乳幼児期	発達の初期である乳幼児期は、人格形成の出発点である。最初のうちは自分があることすら不明確であった新生児が、この時期に両親との親密で信頼に満ちた関係の中で、人格の基礎を形成していくことを解説する。	清水弘司（埼玉大学助教授）	清水弘司（埼玉大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人格の形成（2）青年期	人間の発達において、青年期は子どもからおとなへの移行期として位置づけられる。それは依存してきた親から分離し、児童期までの自己像を改変して、親の片割れや雛形ではない「他ならぬ自分」を形成していく青年期の人格形成過程について概観する。	清水弘司	清水弘司
9	人格の形成（3）成人期・老人期	成人期・老人期であっても人格は成長・変化することを実証的研究を用いて論じる。この回は人格の形成についての最後の回なのでライフサイクル論についても論じる。	鈴木乙史	鈴木乙史
10	人格と適応(1)正常－異常神経症と精神病	正常と異常、健康と病気、適応と不適応の概念に関して概説する。次に、神経症と精神病概念の歴史的変遷と現在の分類について概説する。最後に、実例として不登校などの現代の心理的諸問題を取り上げて考察する。	大貫敬一	大貫敬一
11	人格と適応（2）ストレス・対処	人と環境の関係を扱うストレスを取り上げる。生理学的ストレス論から心理学的ストレス論への発展の経緯を述べ、さらに、心理学的ストレス論において重視される、認知的評価、情動中心の対処、問題中心の対処について説明する。	佐々木正宏	佐々木正宏
12	人格と適応（3）別離体験	適応が難しい体験の中でもとりわけ重大なものと考えられる別離体験に焦点を合せて論じる。とくに、フロイトの対象喪失の考え、幼い子どもの母親との比較的短期間の別離体験、おとなの愛する人との死別体験について述べる。	同上	同上
13	人格と適応（4）家族関係	家族システム論の考えを紹介する。この観点は、人格は関係に規定されるというものである。また、兄弟関係と性格、夫婦関係と子どもの不適応、精神病と家族関係研究なども論じる。	鈴木乙史	鈴木乙史
14	人格と適応（5）文化・社会	人格形成に影響を及ぼす要因としての文化・社会について論じる。日米比較研究、文化人類学的研究、文化精神医学的研究領域から多くの実証的研究をひいて、適応－不適応の問題を論じる。	同上	同上
15	人格の成熟と変化	全体のまとめをおこなう。人格の恒常性と変化、成熟した人格論などを材料にして、人格の形成と変化、適応と不適応について考察する。また、変化の技法としてのカウンセリングについてもふれる。	同上	同上

＝臨　床　心　理　学＝（Ｒ）

〔主任講師：田畑　治（名古屋大学教授）〕

全体のねらい

現代人にとって切実な心の健康の回復や促進、あるいは行動上の問題の理解や解決に対して、臨床心理学は大いに有効な知見を提供する。本講座では、臨床心理学の成り立ち、課題領域、方法、内容などについて基礎的な理解を行いうるように、具体的実践例を交えながら概説し、かつ実践学としての臨床心理学を講じていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	臨床心理学とは何か	臨床心理学とは、いったいどのような学問をいうのであろうか。ここでは定義、特質をはじめ、その実践・研究に携わる心理臨床家の活動、専門性、倫理などに言及し、臨床心理学の独自性、実践性、倫理性、責任性などについて、解説する。	田畑　治（名古屋大学教授）	田畑　治（名古屋大学教授）
2	臨床心理学の歩みと課題領域	臨床心理学は、先進国であるアメリカから導入された。ここではアメリカでの発展の歴史を概観し、あわせて日本における臨床心理学の歩みを回顧する。そして現在わが国で臨床心理学は、どのような領域で展開されているか、課題にはどのようなことがあるか論じる。	同　上	同　上
3	臨床心理学の方法論	臨床心理学には、いったいどのような方法論があるであろうか。歴史的には、個の理解や援助が固有のものであり、方法として臨床事例研究が重視される。しかしその他に実験的研究や数量的な調査的統計的研究も行われてきている。それらの長所・短所にも言及する。	同　上	同　上
4	臨床心理と精神医学の関連	精神病理学、精神の病いの歴史について展望しながら、医療モデルの基本を概説する。そして幼児・児童期、思春期・青年期、成人期・壮年期、および老年期に好発する主な精神病理についての基礎的知識を整理し、医療モデルから教育・発達モデルへと展開する。	本城秀次（名古屋大学教授）	本城秀次（名古屋大学教授）
5	臨床心理アセスメント (1)アセスメント面接	臨床心理アセスメントは、臨床心理学の主要課題領域の一つである。これは悩める個人の心理療法や心理的援助のための一ステップである。アセスメント面接では、どのような手続き、過程や段階をたどって行われるかについて、具体的事例を示しながら解説する。	同　上	同　上
6	臨床心理アセスメント (2)知能検査と質問紙検査	臨床心理アセスメントで必らず使用される検査は、その個人の知的能力の水準や特徴、さらに情意的側面、性格的特徴などを客観的に把握するものである。ここでは代表的に個人式知能検査としてウェクスラー法、性格検査としてＭＭＰＩを採り上げて説明を行う。	田畑　治	田畑　治
7	臨床心理アセスメント (3)　投　映　法	臨床心理アセスメントにおける投映法とは、どのようなことをいうのであろうか。まず投映法の種別にどのようなものがあるかを述べそのあとで描画法とロールシャッハ法を中心に採り上げていき、具体的な事例をもとに詳解する。	池田豊應（愛知学院大学教授）	池田豊應（愛知学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	臨床心理アセスメント (4)諸結果の解釈と伝達	臨床心理アセスメントは、心理臨床家がどのように相手（クライエント）に伝達されるかによって有効になってくる。治療や援助にもつながっていく。ここでは、諸検査結果の解釈、まとめ、そしてそれらの伝達をどのように行うか、具体的事例をもとに説明を行う。	池田豊應	池田豊應
9	心理療法とは何か	臨床心理面接は心理療法と呼ばれる。その種類は200とも300ともあるといわれる。ここでは、その主な源流をたどり、概観する。そして治療者の特質、クライエントの特質、治療者－クライエント関係などについて、それらの共通点や差異点を浮き彫りにする。	田畑　治	田畑　治
10	精神分析的方法	精神分析的な心理療法の特徴としては、無意識を扱うこと、心の世界の歴史（幼い頃からの心の世界の発達）を扱うこと、そして面接場面でのカウンセラーとの関係を扱うことなどがあげられる。このような精神分析的方法の特徴について、具体例を交えて概説する。	鶴田和美（名古屋大学助教授）	鶴田和美（名古屋大学助教授）
11	児童の心理療法	児童の心理療法の中心をなしているものは遊戯療法（プレーセラピー）である。その対象とする障害は情緒障害である。ここでは主な情緒障害の心理的問題とメカニズムを概説し、遊戯療法の主要な理論の解説と治療過程上の諸問題を具体的事例を用いて詳説する。	蔭山英順（名古屋大学教授）	蔭山英順（名古屋大学教授）
12	来談者中心療法／パーソン・センタード・アプローチ	個人の心理的援助でとり入れられる方法は、この方法が基本になっている。治療者がクライエントと接する際の態度はどのようなものが有効であるか、その治療過程はどのように展開するのか、そして終結点での特徴はどのような状態になるのか。それらを解説する。	田畑　治	田畑　治
13	行動療法	行動療法は、心理療法に対するものとして生まれてきた。異常行動は、誤って学習されたものであるという考え方を学習理論をベースとして発表してきており、この立場で数多くの技法が駆使され、さまざまな異常行動の改善に適用され、効果をあげてきている。	同　上	同　上
14	コミュニティのなかでの心理的援助 (1) 統合教育	総合保育・教育は障害を持つ子どもも、障害を持たない子どもも共にコミュニティのなかで生活するために必要な「心」を形成するための教育である。ここではその理念と統合保育および交流教育の実践の中で検討されてきた諸問題について解説する。	蔭山英順	蔭山英順
15	コミュニティのなかでの心理的援助 (2)危機介入・コンサルテーション	人びとは、現実に地域社会に住み、かつ生活をしている。臨床心理学のなかに、コミュニティ心理学という比較的新しい考え方がとり込まれてきたのも、上述のような前提がある。ここでは心理臨床家が専門家として、どのような役割があるのか、実際例を通して述べる。	田畑　治	田畑　治

＝精　神　分　析　学＝（Ｒ）

〔主任講師：牛島定信（東京慈恵会医科大学教授）〕

全体のねらい

精神分析は、心の中の動きを説明するだけではなく、広く社会現象や芸術に関する学問にまで影響を及ぼしている。現代社会では生活する上で不可欠の学問である。その成り立ち、基本的原則を学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	精神分析の誕生	フロイトの生涯と精神分析の誕生までを概観する。	牛島定信（東京慈恵医科大学教授）	牛島定信（東京慈恵医科大学教授）
2	無意識の発見とそのダイナミズム	精神分析は無意識の姿見に始まる。無意識世界のあり様を学ぶ。	館　直彦（東京慈恵医科大学講師）	館　直彦（東京慈恵医科大学講師）
3	無意識へ至る道	症状、夢、錯誤行為、自由連想など無意識へ至る道、その至り方を学ぶ。	同　上	同　上
4	フロイトの性欲論	フロイトは、幼児に性欲があるといって物議をかもしだしたが、やがてエディプス・コンプレックスという概念に至る。	馬場禮子（放送大学教授）	馬場禮子（放送大学教授）
5	フロイトの神経症論	「精神分析入門」といくつかの症例を踏まえて、フロイトの考えた神経症がどのようなものであったかを概観する。	川谷大治（川谷医院院長）	川谷大治（川谷医院院長）
6	フロイトの精神病論	シュレーバ症例や「悲哀とメランコリー」をもとにして、フロイトが精神病をどのように考えていたかを概観する。	松木邦裕（医療法人恵愛会福間病院精神科部長）	松木邦裕（医療法人恵愛会福間病院精神科部長）
7	パーソナリティー論	フロイトの立てた、いくつかの人格論、ことにエス・自我・超自我について、さらには防征材制、最後に、性格類型を概観する。	牛島定信	牛島定信

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	フロイトの患者たち	フロイトには、有名な5症例があるが、そのラナドラの症例、ハンスの症例、ねずみ男の症例、狼男の症例の概容とそれらの精神分析学への寄与を説明する。	牛島定信	牛島定信
9	精神分析療法の実際	治療契約、転移、抵抗、解釈、治療目標、自由連想など精神分析療法を具体的に説明する。	松木邦裕	松木邦裕
10	フロイトの文化論	芸術論、宗教論、その他社会現象に対する精神分析的見方を学習する。	馬場禮子	馬場禮子
11	精神分析の展開Ⅰ －フロイトからユングへ－	ユングのフロイトとの出会いと別れ、そしてユング独自の分析心理学の成立までの軌跡をたどりつつ、ユング心理学の主要な概念について紹介する。	豊田園子（京都文教大学講師）	豊田園子（京都文教大学講師）
12	精神分析の展開Ⅱ	英国での展開を中心にしながら、対象関係論を中心に、新しい精神病論と境界論まで触れる	松木邦裕	松木邦裕
13	精神分析の展開Ⅲ	米国での展開を中心にハルトマン、エリクソン、コフート、さらには力動精神医学への発展〔心身医学、家族療法、行動療法などにまで触れる〕を概観する。	川谷大治	川谷大治
14	精神分析の展開Ⅳ	その他の丸井清泰、アジャセ・コンプレックス、土居の甘え理論、日本の事情などを概観する。	牛島定信	牛島定信
15	現代と精神分析	まとめに代えて、現代の思想、文化に及ぼした影響を語る。	同上	同上

＝カウンセリング＝（R）

〔主任講師：水島恵一（文教大学長）〕

全体のねらい

カウンセリングのあり方を、その理論、過程、方法を含めて、具体的な事例を引用しながら考えていく。相談助言や心理指導的カウンセリングについて簡単にふれたのち、心理療法的カウンセリングを中心にしながら、その中で起こる心の動き、人格統合の過程に重点をおく。また関連した特殊な理論や技法についても述べ、集団、家族、地域の中でのカウンセリングについても述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カウンセリングのさまざま	心の悩み、ストレス、行動問題に対して、今日カウンセリングは、多くの機関、施設で行われており、その他日常生活の場面でも必要とされている。そのいくつかの例からカウンセリングをまず広くとらえる。	水島恵一（文教大学長）	水島恵一（文教大学長）
2	相談・指導とカウンセリングの沿革、定義	カウンセリングは、心理的な相談助言、心理的指導から始まり、次第に心理療法としての色彩が強まってきた。その歴史、日々行われている相談や指導の実態からして、カウンセリングとは何かを考える。	同上	同上
3	自己表現と自己洞察	心理療法的カウンセリングとして、自己を表現し、洞察していくことが、いかに心の治療ないし再統合に結びついていくかを考察する。また体験過程としてのとらえ方についても学ぶことにする。	同上	同上
4	心の動きとメカニズム	精神分析的見方からして、治療的カウンセリング過程の進行に対して働く抵抗や自己防衛のメカニズムついて学ぶ。ついでいわゆる「転移」や「治療的退行」とよばれる心的過程について考察する。	同上	同上
5	カウンセラーのあり方	カウンセリングが効果的に進展していくためには、カウンセラーの共感と、相手を無条件に尊重する態度が必要である。そうしたあり方がいかに相手に作用するか、またカウンセラーとしての訓練について述べる。	同上	同上
6	人格・臨床心理学的理論	治療的カウンセリングのもとになっている人格・臨床心理の理論を概観する。フロイトの精神分析、ユング、アドラー、新フロイト派の分析理論をはじめ、有機体理論、ロジャース、その他の人間学的理論を含む。	同上	同上
7	カウンセリングの理論	前回の理論をふまえ、ロジャースのクライエント中心カウンセリングの理論、精神分析的カウンセリングの理論、および行動カウンセリングの理論を3本柱として考察する。行動療法、認知療法、その他の理論を含む。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	遊戯療法、イメージ・芸術療法	カウンセリングの特殊な技法ないし関連領域の理論・技法として、まず子どもに対する遊戯療法について述べる。次いで成人までを含んだ非言語的領域の療法として、イメージ・芸術療法を概観する。	水島恵一	水島恵一
9	論理療法とマイクロカウンセリング	カウンセリングの動向のひとつ折衷主義には、統合主義（ねりあん方式）と選択主義（つぶあん方式）のふたつがある。前者の代表例は論理療法、後者のそれがマイクロカウンセリング。このふたつを介して今後のカウンセリングを展望したい。	国分康孝（聖徳栄養短期大学教授）	国分康孝（聖徳栄養短期大学教授）
10	交流分析とゲシュタルト療法	伝統的カウンセリングの限界を乗り越えようとするところに、交流分析やゲシュタルト療法の属する第三勢力の意義がある。これら新興勢力からカウンセリング界は何を学ぶことができるか。これに答えるつもりで論議したい。	同上	同上
11	グループアプローチ	グループには一対一の面接には見られない人間の成長促進機能がある。特に今日のようにカウンセリングの対象が健常者を含むほどに拡大してくると、時間経済的にもグループを用いたカウンセリングは必要になる。グループエンカウンターが代表例である。	同上	同上
12	家族システム理論と家族療法	家族を生態系の一つのシステムとみる立場から、個人および家族の精神病理を把握し、さまざまな心理療法的な取組が行われている。構造派、戦略派などの家族療法のおもな理論モデルをめぐって基本的な考え方および技法の特徴について概説する。	岡堂哲雄（文教大学教授）	岡堂哲雄（文教大学教授）
13	家族のためのブリーフ・セラピー	家族療法発展のなかで登場したブリーフ・セラピーは、問題の原因究明ではなく解決の仕方を変化させる技法による短期集中療法である。本講では、ブリーフ・セラピーの理論モデルをめぐって基本的な考え方および技法の着眼点について解説する。	同上	同上
14	危機の理論とコミュニティ・アプローチ	心理面の危機に直面する個人や人々への援助には、適時に的確な介入が求められる。それには、カウンセリングの理念が地域社会に普及することが必須である。本講では、コミュニティ・アプローチの基本的な考え方および介入技法の要点について講述する。	同上	同上
15	総括と人間性の問題	さまざまなアプローチを総括し、広く現代社会のさまざまな場面で行われるカウンセリングの人間的意義を考察し、それが深層心理とともに人間の実存、存在の根本問題にまでかかわる点を考察する。	水島恵一	水島恵一

＝子どもの発達とその障害＝（ＴＶ）

〔主任講師：山崎晃資（東海大学教授）〕

全体のねらい

社会的・経済的・政治的状況が目まぐるしく移り変わる現代社会において、子ども達はさまざまな問題を経験し、それを乗り越えながら成長・発達している。本講座では、子ども達が直面している多様な問題を国際的な広い視点から整理し、近未来の子ども達に予測される問題にふれながら、子どもの発達とその障害について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代に生きる子ども達	社会的・経済的・政治的状況が目まぐるしく移り変わるなかで、家族関係・友人関係が急激に変遷している。現代に生きる子ども達が直面している多様な問題を整理しながら、子どものライフ・サイクルを考える。	山崎晃資（東海大学教授）	山崎晃資（東海大学教授）
2	世界の子どもは、今 (1)	少子化、難民、ホームレス・ピープル、ストリート・チルドレンなど、世界の子ども達が、今、直面している問題は、子どもの発達にどのように影響しているのだろうか。	同上	同上
3	世界の子どもは、今 (2)	核家族、核分裂家族、離婚、母子家庭、父子家庭などの増加が、子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか。社会・経済・文化の差異による子どもの発達の様相を考える。	同上	同上
4	周産期とこころの曙	親は過去の深い無意識の中にある乳児期記憶を呼び起こしながら、自分の願いや葛藤をわが子に向けていく。親の生い立ちや現在の夫婦関係とさまざまな乳幼児側要因が、このデリケートな親－乳児の世界に影響を及ぼす。周産期のダイナミックな親－乳児相互作用とそのリスクへの対応を考える。	渡辺久子（慶應義塾大学講師）	渡辺久子（慶應義塾大学講師）
5	乳幼児期の親子関係	乳幼児の行動の個人差と、養育者との相互作用に焦点を当てて、関係の形成プロセス（社会的参照、間主観性、愛着など）を考える。乳児の気質と認知発達の意味も考える。	臼井博（北海道教育大学教授）	臼井博（北海道教育大学教授）
6	家族の中の人間関係	子ども・母親・父親の３者関係と夫婦関係の質が、養育行動にどのような影響を与えるのか。母親と父親の養育行動の差異、きょうだい関係がもたらす影響について考える。	同上	同上
7	こころの世代間伝達	親の意図や葛藤にもかかわらず親子間で反復される前世代の葛藤と、その伝達メカニズムを理解する。世代間伝達による家族の精神生活が、子どもの発達にどのような影響を及ぼし、どのようにして伝達の連鎖を断ち切ることができるのかを理解する。	渡辺久子	渡辺久子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	異文化に生きる	異文化との接触が子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか。また、外国で暮らすようになった子どもや外国から日本にきた子どもが、それぞれの生活の場でどのように適応し、どのような発達上の問題を持つのかを見ながら、発達における文化の意味について考える。	臼井　博	臼井　博
9	関係性障害と乳幼児	乳幼児は周りの人々との関係性の中で発達する。乳幼児の関係性の世界がオーケストラに似たダイナミックな世界であるためのリスクと対応方法を、マーラーの再接近期危機、スターンの情動調律や対象関係論を踏まえて紹介する。	渡辺久子	渡辺久子
10	子どもの精神障害	児童精神医学の領域で扱われる多彩な精神障害と、その症状・問題行動の成立ちを整理する。発達障害の今日的な課題をまとめ、情報処理システムからみた治療・療育のプログラムを検討する。	山崎晃資	山崎晃資
11	障害を持つ子どもと家族	心身の発達に障害を示す子どもを持って、家族はさまざまな困難や課題を抱えるようになる。障害の種類によっても異なるが、家族関係や子どもの養育などの困難性を理解し、その対応の仕方について具体的に考える。	石井哲夫（白梅学園短期大学長）	石井哲夫（白梅学園短期大学長）
12	障害を持つ子どもの保育・教育施設	多様な発達障害を示す子ども達は、保育園・幼稚園・学校という生活状況の中で、友達やおとなの出会いを通して成長していく。わが国における障害児の教育・福祉の問題について、その状況を具体的に考える。	同　上	同　上
13	障害を持つ子どもの社会的支援	わが国の社会福祉制度の枠組みは、諸外国に比べて優れた内容を持っていると言われるが、未だ多くの困難な問題を抱えている。発達障害児・者に対する社会的サポートの現状を整理し、そのあるべき姿を具体的に検討する。	同　上	同　上
14	子どもの心性とライフ・サイクル	乳幼児期に一人の子どもとして生きた情緒的世界は、児童・思春期以後のライフサイクルにわたる精神発達にも影響を及ぼし続け、思わぬ波紋や障害を引き起こす。私達おとなの日常生活にふと現れる子どものような心理の意味を考える。	渡辺久子	渡辺久子
15	新しい時代の子ども達	本講座では、子どもの発達とその障害をさまざまな視点から考えてきたが、それでは親は子どもにどのように対応するとよいのであろうか。思春期の子どもの心性に焦点をあてながら、子どもの発達、親子関係、そしてこれからの家族について、諸外国の実状を見ながら考える。	山崎晃資	山崎晃資

＝生涯発達と生涯学習＝（Ｒ）

（主任講師：麻生　誠（放送大学教授））
（主任講師：堀　薫夫（大阪教育大学助教授））

全体のねらい

人間の発達は生涯にわたって継続するものである。だが人間の発達は生物的な意味での成熟と異なり、自然の過程で実現していくものではない。それぞれの発達段階やライフコースのなかで生ずる多種多様な難問を学習の力によって解決していきながら人間的発達を獲得していくものなのである。生涯学習こそ生涯発達にとって不可欠な過程なのである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯学習の理念	生涯学習は人びとの生涯にわたる発達を完成させるために、その全生涯を通して個性的・社会的・職業的な人間発達を保障せんとする理念的営みである。 これらの多種・多様な学習活動のうち、あるものは教育の仕組みのなかに組み込まれて生涯教育としてシステム化される。他のものは、余暇活動のように自由な学習者の手にゆだねられる。生涯にわたる発達、学習、教育の相互関係を包括的にとらえ、生涯学習の理念を明確にしよう。	麻生　誠（放送大学教授）	麻生　誠（放送大学教授）
2	生涯発達論の背景と展開	今日、人間の生涯発達やエイジングに関する文献の量が急増してきている。生涯発達論のルーツを発達心理学と老年学の歴史から学び、今日の生涯発達論がどのような研究領域と課題を設定しているのか、それに注目していこう。	堀　薫夫（大阪教育大学助教授）	堀　薫夫（大阪教育大学助教授）
3	生涯発達とライフコース	我々の生涯にわたって歩む人生は、社会や文化によって意味づけられている。年齢段階や年齢規範の問題を手がかりとして社会によって意味づけられた我々の生涯（ライフコース）の問題を考えてみよう。	同　上	同　上
4	生涯発達と発達課題	我々は、人生のさまざまな節目で達成が期待される発達上の課題に出会い続ける。とくに成人期以降の心理・社会的発達課題に焦点を当てて、我々のかかえる発達課題がどのようなものであり、その解決に生涯学習がいかに貢献するのかをみつめていこう。	同　上	同　上
5	成人期における知的能力の変化	我々の学習する能力は、30代、40代、50代とどう変化していくのであろうか。成人を対象とした知能検査の具体的な結果をふまえながら成人期における知力の変化と知恵の深まりの問題を考えてこう。	同　上	同　上
6	高齢者教育の可能性	生涯学習の完成期は高齢期である。では、高齢者の学習にはどのような特徴があるのであろうか。また、その援助のポイントはどのあたりに求められるのか。具体例などもまじえながら、高齢者教育の可能性を探ってみよう。	同　上	同　上
7	成人の特性を活かした教育学（ｱﾝﾄﾞﾗｺﾞｼｰ）の構想	これまで、そして今日の教育学の主流は、子ども－学校教育学である。しかしおとなの学習を援助していくには、おとなの特性を活かした教育学を構想していく必要がある。この可能性を探ってみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	成人の学習要求と生涯学習の方法	学校を出てからの成人は、どのような学習の内容に関心をもち、どのような方法での学習に関心をもっているのであろうか。このテーマに関するいくつかの調査の結果を見ながら、成人の学習要求と学習方法を構造化してみよう。	堀　薫夫	堀　薫夫
9	生涯学習とマルチメディアの利用	大量の教育情報をスピーディーに社会のすみずみまで運ぶことのできる放送は、生涯学習にとって必要欠くべからざるメディアである。さらに最近では各種のニューメディアが加わり生涯学習の情報メディア環境は大きく変わりつつある。これらのメディアが生涯学習にもたらすメリットとデメリットを考えてみよう。	麻生　誠	麻生　誠
10	日本の生涯学習のルーツを探る	日本人は、生涯学習に対して一般に好意的である。このような日本人の学習好き・教育好きはどのような伝統的価値観に支えられているのか。そのルーツを江戸時代の在野の儒者・中江藤樹の思想と実践に探ってみよう。	同　上	同　上
11	欧米諸国の生涯学習	アメリカ、イギリス、スウェーデンなどの先進諸国の生涯学習を比較しながらそれぞれの国の生涯学習の特徴をとらえ、わが国の生涯学習に対する教訓を学んでいこう。	堀　薫夫	堀　薫夫
12	生涯学習の谷間	わが国は高学歴社会となり、国民の平均的学歴水準は大きく上昇した。そしてこの国民の高学歴化を背景とした生涯学習論が唱えられるようになった。だがその中で170万人と言われている義務教育未修了者の問題が忘れられようとしている。生涯学習社会の谷間とも言うべき彼らの存在のなかに生涯学習の原点を探ってみることにしよう。	麻生　誠	麻生　誠
13	地域社会と生涯学習	私たちの生活は、生活圏としての地域社会を基盤として営まれている。このような地域社会のなかで、住民たちに対してどのような学習機会が提供されているのであろうか。 特にそのなかで、学校や公民館、図書館、博物館などが果たす役割を考えながら、生涯学習の地域システムを構想してみよう。	同　上	同　上
14	生涯学習の体系と行・財政問題	生涯学習論に最も欠けているのは、行・財政論といわれている。まさに生涯学習論のアキレス腱である。生涯学習理論を実現しようとすれば、行・財政は、質的・量的観点からどのような方向に変わらなければならないかを検討してみよう。	麻生　誠 堀　薫夫	麻生　誠 堀　薫夫
15	生涯学習社会の可能性と課題	日本の生涯教育の柱は、学校教育・社会教育・職業訓練の三つである。これら三つの柱の生涯学習能力を検討するとともに、これらがどのように関係づけられていけばよいのか考えてみよう。三つの柱を基本とした生涯学習機会のゆるやかな統合という観点に立って将来を展望してみよう。	同　上	同　上

＝言　葉　と　教　育＝（Ｒ）

〔主任講師：福沢周亮(聖 徳 大 学 教 授)〕

全体のねらい

主として、幼児・児童を対象とした言葉に関する教育について、教育心理学・言語心理学の立場から取り上げる。その展開にあたっては、教育の理論的な面のみでなく、指導の実際的な面もできるだけ取り入れ、問題を多角的に考察する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	言葉と人間(一)	言葉と人間とのかかわりの問題について考える。 (1)言葉と人間とのかかわり　(2)言葉と伝達　(3)言葉と思考	福沢周亮（聖徳大学教授）	福沢周亮（筑波大学教授）
2	言葉と人間(二)	言葉と人間とのかかわりの問題について考える。 (1)言葉と記憶　(2)言葉と知能　(3)言葉とパーソナリティ (4)言葉と環境	同　上	同　上
3	言葉の教育の課題	発達段階に応じた言葉の教育の課題について考える。 (1)乳幼児期の課題、(2)児童期の課題　(3)青年期の課題 (4)外国語教育の位置	同　上	同　上
4	言葉の発達	言葉の発達について通覧する。 (1)言葉の獲得の理論　(2)言葉の発達の様相　(3)言葉の発達段階	同　上	同　上
5	話し言葉の教育	聞くことと話すことに関する教育の問題について考える。 (1)伝えることの難しさ　(2)聞くことと話すこと　(3)ぼくとわたし	同　上	同　上
6	文字の教育―かな―	かなに関する教育の問題について考える。 (1)かなの特徴　(2)かなの学習の機構　(3)入門段階の指導のあり方	同　上	同　上
7	文字の教育―漢字―	漢字に関する教育の問題について考える。 (1)漢字の読み書きの実態　(2)読字学習の機構　(3)漢字の指導のあり方	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	語彙の教育(一)	語彙教育の問題について考える。 (1)語彙の教育の意義　(2)教育のための基本語彙の選定 (3)語彙学習への動機づけ	福沢周亮	福沢周亮
9	語彙の教育(二)	語彙教育の実際の問題について考える。 (1)語彙の拡充のための指導　(2)語彙の定着のための指導 (3)機能語の指導	同上	同上
10	読みの教育(一)	物語文を中心として、読みの教育の問題について考える。 (1)読みの教育の意義　(2)音読と黙読　(3)物語文の読み (4)物語文とイメージ　(5)物語文の指導	同上	同上
11	読みの教育(二)	説明文を中心として、読みの教育の問題について考える。 (1)説明文の特徴　(2)説明文の読み　(3)説明文の指導	同上	同上
12	読みの教育(三)	読書に関する教育の問題について考える。 (1)読書の実態　(2)幼児期の指導　(3)読書指導のあり方 (4)読書療法	同上	同上
13	作文の教育	作文に関する教育の問題について考える。 (1)文章化の意味　(2)作文の能力の発達　(3)イメージと論理	同上	同上
14	思考の教育	「一般意味論入門」として、この立場から思考の教育の問題について考える。 (1)思考の教育の意義　(2)言葉と事実　(3)言葉の魔術	同上	同上
15	言葉の能力の把握	言葉の能力に関する測定と評価の問題について考える。 (1)言葉の能力の意味　(2)語彙力の把握　(3)読解力の把握 (4)作文力の把握	同上	同上

＝児童心理学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：無藤　　隆（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい
小学校期を中心に一部中学校を含めて、その時期の子どもの心の発達とその現代的背景についてまとめる。学校教育への意義を考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童期の発達の考え方	基本的な発達の理論、特に、ヒアジェ、ヴィゴッキー、エリクソンなどの考えを述べ、幼児・児童・青年の時期の対比を行う。	青木多寿子（岡山大学講師）	青木多寿子（岡山大学講師）
2	幼児から児童へ	幼稚園・保育園から学校に移行する際の発達的変化と、学校への適応の問題を述べる。	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）
3	言葉の発達と教育	言葉によるコミュニケーションや文字の獲得についてまとめ、国語教育への意義を述べる。	青木多寿子	青木多寿子
4	数量的理解の発達と教育	幼児から児童期の数量概念の発達と教育的意義を述べる。	同　上	同　上
5	科学的認識の形成	自然科学的認識の形成を素朴概念という観点からまとめ、理科教育への意義を述べる。	同　上	同　上
6	体験学習と表現力と感性の発達	幼児教育、生活科教育、総合的学習、さらに造形や音楽等の表現の学習の特徴を述べ、その発達的意味を整理する。	無藤　隆	無藤　隆
7	友人関係の広がり	児童期の同年齢の子ども同士の関係の発達と教室での様子を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	道徳性と価値観の発達	道徳性や価値観、さらにその背景としての社会的対人的認識について述べる。	青木多寿子	青木多寿子
9	自己の成長と人間関係	自己認識の広がりとそれが友人関係や教師との関係とどう関わるかを述べる。	伊藤美奈子（お茶の水女子大学助教授）	伊藤美奈子（お茶の水女子大学助教授）
10	メディアとの関わり	読書、テレビ、テレビゲーム等のメディアとの関わりを現代での遊びの変容との関連で述べる。	無藤　隆	無藤　隆
11	現代の家庭と子ども	児童期の親子関係の特色とそれが現代の変化の中でどうなっているのかを述べる。	同　上	同　上
12	児童から思春期へ	小学校から中学校への制度的変化と思春期を迎えることが絡まっての大きな発達的変化について述べる。	伊藤美奈子	伊藤美奈子
13	問題行動の諸相	問題行動の分類を行った上で、特に、不登校と、いじめについて述べる。	同　上	同　上
14	子どもの問題行動をどうとらえるか	子どもの心の問題の顕在化の兆候と、それについて子ども自身、また親や教師や専門家がとらえる見方の違いやその意味を述べる。	同　上	同　上
15	今、先生に求められること	不登校の事例に基づき、子どもの心のあり方とその抱える「問題」の発達的意義を述べる。	同　上	同　上

＝児童の臨床心理（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：上野一彦（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

今日、子どもを取りまく家庭、学校、社会環境は複雑化し、さまざまな問題行動や心理的な不適応を引き起こすケースも多く見受ける。そうした児童の心と行動のメカニズムを明らかにし、行動の改善や不適応の軽減を目的とする発達支援へのニーズはますます強くなってきている。ここでは臨床心理学的観点からの児童、ならびに関連する諸要因の理解とアプローチの仕方を紹介した後に、具体的な適応・発達に課題をもつ事例を通して、現代に生きる子ども像について学び、考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童の臨床心理とは	問題行動・不適応の基本的理解、発達障害と適応障害、臨床心理学の歩みと児童理解に関する基本的アプローチについての概観的な紹介をする。	上野一彦（東京学芸大学教授）	上野一彦（東京学芸大学教授）
2	児童と発達環境	児童期を中心に、子どもの発達について概観をする。昨今の子どもたちの特徴、家庭、学校、地域社会など、子どもを取り巻く環境の変貌などを視野に入れ解説する。	松村茂治（東京学芸大学教授）	松村茂治（東京学芸大学教授）
3	行動の理解とアプローチ	児童の問題行動・不適応行動がどのような心理的メカニズムで生じてくるのかについて、防衛・適応機制に触れるとともに、現代の学習理論からの解説と行動論的なアプローチの応用について述べる。	小林正幸（東京学芸大学助教授）	小林正幸（東京学芸大学助教授）
4	発達援助とカウンセリング	子どもの心の発達理解のために必要なポイントについて述べながら、子どもと親のためのカウンセリングやその他の心理的援助について解説する。	佐野秀樹（東京学芸大学助教授）	佐野秀樹（東京学芸大学助教授）
5	子どもの対人関係とソーシャルスキル	子どもの社会的行動の発達と、その領域で出現する対人関係に関わる問題について学ぶ。仲間関係と、そこで習得するソーシャルスキルについて、集団生活の大切な場である学級に焦点を当てる。	松村茂治	松村茂治
6	臨床アセスメントⅠ－発達と能力－	児童理解のためのアセスメントとして、生育歴、発達検査、知能検査などを中心に発達の押さえ方と種々の能力検査の利用について述べる。	上野一彦	上野一彦
7	臨床アセスメントⅡ－行動とパーソナリティー－	行動やパーソナリティのアセスメントを行うための方法について述べる。子どもと親を援助するために必要な面接法、観察法、パーソナリティ検査などにも触れる。	佐野秀樹	佐野秀樹

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	不登校	近年増加の一途をたどる不登校について、その社会的背景や要因、発生のメカニズムについて考える。その上で予防と対処法について、児童の状態像に応じたアプローチの仕方について述べる。	小林正幸	小林正幸
9	いじめ（暴力）	一頃激しかった校内暴力が表面的に沈静化した後、いじめの問題が表面化してきた。ここではいじめの特徴とこの問題に対処していくための具体的方策について学ぶ。	松村茂治	松村茂治
10	こころの不適応	児童に多くみられる心の問題から生じるさまざまな不適応行動を取り上げる。神経症、心身症のほか、チックなど神経性習癖、さらには対人恐怖を背景とする引っ込み思案などにも触れ、その理解と対処法について紹介する。	小林正幸	小林正幸
11	発達の遅れとかたより	知的発達障害（精神遅滞）・自閉症・言語障害ほか、発達に遅れや偏りをもつ児童に対する基本的理解と本人と親への発達支援と心理教育サービスについて述べる。	上野一彦	上野一彦
12	学習障害とその周辺	軽度の発達障害への援助ニーズが高まってきている。なかでも、近年、急速にその対応が注目されつつある学習障害（LD）とその周辺の問題について、学校教育との関わりに中で述べる。	同上	同上
13	現代の家庭と家族	時代とともに、家族がどのように変化してきたか。さらに現代の家庭と家族の特徴について述べる。子育ての不安や児童虐待などにも触れ、これからの育児、家庭家族のあり方についてカウンセラーの立場からまとめる。	小林正幸	小林正幸
14	学校と教育臨床	学校で起こるさまざまな問題に対処するために、スクールカウンセラーなどが機能し始めた。こうした対応がより効果を上げるために必要な学校の組織や教師の機能と専門的な援助のあり方について学ぶ。	松村茂治	松村茂治
15	児童臨床心理の明日を考える	児童をめぐるさまざまな発達・適応の諸問題を、激動する時代的、文化的背景の中でどのように理解し、対処していけばよいのか。これからの児童臨床心理の課題について、総合的に考察しまとめとする。	上野一彦	上野一彦

＝教　育　評　価＝（Ｒ）

〔主任講師：梶田叡一（京都大学教授）〕

全体のねらい
教育における評価の問題について、いくつかの基本的な視点から考えてみる。とくに、学校での日常的な見とりや見きわめ、テストや成績づけなどのあり方を、子どもの学習や成長とのかかわりで原理的な地点から検討してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育評価のはたらき	評価は、学校といった組織的な教育形態においては古今東西を問わず行われてきた。教育においてなぜ評価が必要となるのか、学ぶ側、教える側、管理運営する側それぞれにとっての意義を考えて見る。	梶田叡一（京都大学教授）	梶田叡一（京都大学教授）
2	測定から評価へ	評価は客観的科学的ではなくてはならないという発想がある。しかしこれを押し進めていくと本当に大事な面が見落とされ、表面的なつまらない面ばかりが重視され評価されるという落とし穴に落ちる。この意味で1930年代のタイラーの主張を振り返り、現代の評価論の大前提を考えてみる。	同　上	同　上
3	教育の目標と評価	教育に当たっては目標が体系的に設定されるが、その目標がまた評価の視点や基準となる。目標の明確化のためには、ブルーム等の『教育目標のタキソノミー（分類体系）』が有名であるが、こうした仕事の意義について考えて見る。	同　上	同　上
4	行動目標論の克服	子どもの学びや育ちを外的客観的に見ていくため、行動目標の考えが提唱されてきた。しかし今や行動目標論は乗り越えられている。子どもの学びや育ちを本当に問題にするためには、内面を見落とすことはできないのである。こうした視に立って、達成目標・向上目標・体験目標の考え方を述べる。	同　上	同　上
5	内面の育ちの把握	学びや育ちの現実を見てとるためには、関心や意欲や理解の状況など内面世界の読み取りが必要となるにしても、これは非常に困難な課題である。内面を洞察する上での手がかりを学校で具体的にどのように得られるか、授業とのかかわりを中心に考えて見る。	同　上	同　上
6	相対・絶対・到達度評価	子どもの学びや育ちを評価する際、他の子どもと比べて見る（相対評価）か、教える側の内的基準による判断に任せる（絶対評価）か、何らかの到達基準に達しているかどうかを見る（到達度評価）か、といった違いがある。それぞれの意義と利害得失について考えて見る。	同　上	同　上
7	形成的な評価	テスト得点や成績は、学びや育ちの「結論」であるかのように受け止められがちである。しかし本来それは、長い道のりの中でのラップタイム（途中計時）でしかない。教育におけるあらゆる評価は、学びや育ちの次の段階に役立ってこそ意味を持つ、という形成的評価の考え方について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自己評価	学びと育ちは、最終的にはその人自身によって評価され、その人自身の次の段階に向けての努力を引き出し、支えるものでなくてはならない。自己教育を基礎づけるものとしての自己評価でなくてはならないのである。こうした自己評価の具体的あり方について考えて見る。	梶田叡一	梶田叡一
9	学習指導と評価	学習指導を有効かつ適切なものにするため、具体的にどのような場で、どのような評価活動を行い、それをどのように生かしていけばいいのか、さまざまな場合を例にとって考えて見る。	同上	同上
10	学力テストの論理と問題点	学力を客観的な形で測定するために工夫されてきたテストの構成と結果処理の考え方について検討する。特に旧来の集団標準にもとずくテスト（ＮＲＴ）と最近の到達基準にもとずくテスト（ＣＲＴ）とを比較する。高次の知的能力を測定するための工夫を見る。	同上	同上
11	知能検査を考える	20世紀初頭ビネによって考案されて以来、長い間にわたって「頭の良さ」を測る道具として用いられてきた知能検査はどのような論理に立つものであろうか。またその検査結果の表示法として用いられてきたＩＱ（知能指数）が今日なぜ信頼されなくなってしまったのであろうか。ＩＱ神話の成立と崩壊について考えて見る。	同上	同上
12	指導要録と通知表	学校での成績は、指導要録（学籍簿）と通知表に記入され、当人や親に対して権威を持ってきた。現在それはどのような形式・内容であるのか。その背後にある基本的な評価観は何であるのか、これまでの様式・記入法の変遷を見ながら検討する。	同上	同上
13	入学試験と進路指導	現在の入学試験や進路指導のあり方に偏差値教育と呼ばれるようなゆがみが生じているという指摘がある。過熱した受験準備体制の中では子供の発達そのものにもゆがみが現れざるをえない。これを是正するため、どのような入学者選抜方法を用いるか、どのような進路指導をしていくか、大きな課題である。この問題についていくつかの方向から考えて見る。	同上	同上
14	評価する側の眼	評価する側も人間である。固定観念を持って見てしまったり、背光効果や寛容効果などのゆがみが忍び込んでしまったりしがちである。しかし、自分の眼にどのようなゆがみの可能性があるかを認識することによって、そのゆがみに振り回されて非教育的な態度や決定を取ってしまうことも少なくなる。この問題について特に主要な点を検討する。	同上	同上
15	評価される側の心理	テスト不安など評価される場に身を置くことによって生じる心理的な効果についても考えておかねばならない。また、誉められたり叱られたりすることの効果の問題もある。評価される側がその評価によってどのような心理的影響を受けるか、いくつかの点から考えてみる。	同上	同上

＝心理測定法（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：繁桝算男（東京大学教授）〕

全体のねらい

心理学における測定の重要性がよく分かることを出発点とし、実際の測定方法、及び、それを支える理論について知ること、ついで、これらの測定から得られる心理学的知見について認識を深めることを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学における研究法と測定	心理学研究における測定の重要性を説明する。実際の実験の例を通して、測定値を分散分析によって分析し、研究の課題に答えるプロセスと、調査によって多変量データを得、多変量解析によって知見を得るプロセスを考察する。	繁桝算男（東京大学教授）	繁桝算男（東京大学教授）
2	知的能力の測定理論	創造性を含め知的能力の構造を因子分析によって探究する。I.Q.の歴史を批判的に概括し、知能テストの将来を展望する。	同上	同上
3	知能テストの実際	知能テストの実施の方法を示し、教育場面における知能の測定値の利用の仕方を説明する。	大六一志（武蔵野女子大講師）	大六一志（武蔵野女子大講師）
4	性格テストの測定理論	性格の測定の代表的な測定法、すなわち、質問紙法、投影法、作業検査法等代表的な測定法を紹介し、それらの違いを説明し、無意識的傾向の測定の可能性について論じる。	丹野義彦（東京大学助教授）	丹野義彦（東京大学助教授）
5	性格テストの実際と異常行動予測	性格テストの実施の方法を説明し、異常行動の説明と臨床的対処における性格テストの結果の利用の仕方について説明する。	同上	同上
6	社会的態度の測定	ＡＳ尺度、Ｅ尺度、Ｆ尺度の例を通じて、社会的態度の測定を論じる。次に、サーストン法、リッカート法による調査紙構成の方法を具体的に説明する。	繁桝算男	繁桝算男
7	精神物理的測定法	物理的量と心理量との対応関係を探る。調整法、恒常法等伝統的な測定法について説明する。	佐藤隆夫（東京大学教授）	佐藤隆夫（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	一対比較法	心理量を測定する有力な方法、一対比較法の理論と具体的手続きを説明する。	繁桝算男	繁桝算男
9	適正と興味の測定	適性と興味を測定するテストの現状を説明し、進路指導におけるテスト資料の利用の仕方を実例に即して説明する。	西村純一(東京家政大学教授)	西村純一(東京家政大学教授)
10	因子分析と共分散構造分析	潜在する因子を抽出する因子分析と、さらに、これらの潜在因子間の関係をモデル化する共分散構造分析(構造方程式モデル)について例を用いながら、そのコンセプトを説明する。	繁桝算男	繁桝算男
11	多次元尺度構成法	変数間の類似性行列から、変数を多次元的に図示する多次元尺度構成法について、心理学的応用例を通じて説明する。	前川眞一(大学入試セ助教授)	前川眞一(大学入試セ助教授)
12	公理論的測定論	心理量の測定はそもそも可能なのかに関する問に答える公理論的なアプローチを説明する。また、コンジョイント測定も実際を説明する。	繁桝算男	繁桝算男
13	意思決定と測定	意思決定の本質に関する主観確率と効用の測定の具体的な方法、たとえば、AHPによる効用測定等を説明する。	同上	同上
14	古典的測定理論	測定値の性能を記述する議論、特に測定値の信頼性と妥当性についてその理論的基礎と応用例を紹介する。	前川眞一	前川眞一
15	項目反応理論	学力の測定において、モデルを通して、正誤データから、真の学力の推定値を得る方法について説明する。	繁桝算男	繁桝算男

＝道徳教育（'９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：木原孝博（ノートルダム清心女子大学教授）
主任講師：大西文行（横浜市立大学教授））

全体のねらい

道徳教育を単に学校教育に位置づけて考えるだけでなく、学校教育を取り巻く地域的、社会的、文化的環境との相互作用的、共同的な観点から、考えることを目的にする。道徳教育の目的は、道徳性、すなわち人間の自・他相互の福祉の向上に資する傾向を形成することです。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	道徳教育と教育学	ペスタロッチ、ヘルベルト、デューイ、コールバーグ、マカレンコなどの道徳教育理論を解説する。教育的目的論から道徳教育を論じる。	木原孝博（ノートルダム清心女子大学教授）	木原孝博（ノートルダム清心女子大学教授）
2	道徳教育と教育社会学	教育社会学者の道徳教育理論ないしは社会化理論を解説する。	同上	同上
3	道徳教育と心理学	道徳性の形成、発生のメカニズムについて心理学的な面からの研究から道徳教育を考える。バンデューラなどの道徳性の形成、道徳的行動、道徳的情意形成について理論と道徳性の個別性についての人格理論を解説する。	大西文行（横浜市立大学教授）	大西文行（横浜市立大学教授）
4	道徳教育と発達心理学	道徳性の形成、発生のメカニズムを発達的側面からの研究から道徳教育を考える。フロイト、ピアジェ、コールバーグらの道徳性の発達についての研究からの研究から道徳教育を考える。	同上	同上
5	道徳教育と文化人類学	文化による価値、道徳的価値の多様性について学習し、多様な価値体系での道徳教育について考える。	木原孝博	木原孝博
6	家庭教育と道徳教育	道徳性の発達の基盤となる家庭での親子、兄弟関係や相互作用での道徳性の発達の過程について学習する。	大西文行	大西文行
7	地域教育と道徳教育	学校での道徳教育は、学校と地域共同体との密接な連携でなされることが必要である。この章では、地域共同体と連携し道徳教育を実践しているアメリカのボストンでの教育実践を中心に考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	生涯教育と道徳教育	幼児期、幼児期、少年期、青年期の発達課題とその解決を通して人格が形成されていくプロセスを明らかにする。	木原孝博	木原孝博
9	国際化社会と道徳教育	従来の国という概念を超えた概念が広がっている。国際化である。他国についてり理解とともに、他国と主体的、共同的に対処する必要がある。国際化社会での道徳教育に実態の観察を通して道徳教育のあり方を考える。	大西文行	大西文行
10	多文化社会と道徳教育	現在我が国は、アメリカやカナダのように未だ多民族、多文化、多宗教の国ではないが、9章で論じられたように、近い将来そのような状況を迎えることになる。そのような状況での道徳教育のあり方を、カナダの実践を通じて考える。	同上	同上
11	情報化社会と道徳教育	情報技術の発達に伴い、多様な価値、道徳的価値を含んだ情報を処理することが求められてくる。情報処理能力の形成の観点から道徳教育のあり方を考える。	同上	同上
12	学校教育と道徳教育 (1)	学校教育の仕組みを領域と機能の視点から分析、教科指導と教科外指導、学習指導と生徒指導の役割を明確化しながら、学校教育の仕組みの中に道徳教育を位置づける。	木原孝博	木原孝博
13	学校教育と道徳教育 (2)	わが国の道徳教育の歴史を辿りながら、「道徳」の時間を特設して道徳教育をする事の意味を明確にする。	同上	同上
14	道徳の時間の実践例 (1)	「道徳の授業」理論を取り上げ、それぞれのメリット、デメリットを明らかにする。	同上	同上
15	道徳の時間の実践例 (1)	「道徳性発達」理論を取り上げ、それぞれのメリット、デメリットを明らかにする。	大西文行	大西文行

＝現代社会の学力（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：駒林邦男（岩手大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代日本社会における学力をめぐる問題状況について論じ、日本の子どもたちの学力は、どうなっているのか、「日本型」高学力の弱点はどこにあるのか、「日本型」高学力を支える授業の特質は何か、子どもたちの人生にとって学力はどんな意味をもっているか、そもそも、「学力」とは何か、いま、どのような学力観、授業が求められているか ― これらの論点について、具体的な例をあげて講義をしたい。なお、1990年代後半の教育改革論議における学力問題についても論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「学校化・情報化・消費化」社会の中の子どもたち	講義の方針と概略を説明する。現代日本の子どもをめぐる社会を「学校化・情報化・消費化社会」状況ととらえ、戦前から1960年頃までの子どもの生活（家庭・地域・学校の中の生活）と比較する。	駒林邦男（岩手大学名誉教授）	駒林邦男（岩手大学名誉教授）
2	学力をめぐる社会状況	過熱する学力競争の社会的背景と過熱化の経緯について、具体的な例をあげながら述べ、学力競争に子どもたちを向かわせる親の心理についても考えていく。	同上	同上
3	「学校からの逃走」と、「学(校)歴仰」	1970年代以降の「教育荒廃」、「子どもたちの学校からの逃走」という事態に対する臨時教育審議会、1990年代後半の中央教育審議会などの対応を取り上げるとともに、社会の「学（校）歴信仰」をめぐる問題について論じる。	同上	同上
4	学力観概史	1872年は「学事奨励に関する被抑出書」から今日に至るまでの学力観の変遷を、明治以来の教育理念の変化と関連させながら論じる。	同上	同上
5	「新しい学力観」、その問題点	「新学力観」、特に「関心・意欲・態度」の重視について述べ、3点にわたって、「新学力観」の問題点を指摘する。	同上	同上
6	学校知、学校地学力	普通「学力」と呼ばれているのは「学校知学力」である。「学校知」とは何かを明らかにすることによって、社会的通年としての学力の「制度化・公定化部分」の基本的性質（基礎可能性、規範性）について論じる。	同上	同上
7	「日本型高学力」と、それを支える授業の特質	国際的学力調査（ＩＥＡ）、文部省学力調査のデータによって、日本の子どもの学力の高さを示す。この高水準を支える授業は、知識注入型授業であることを、放送担当者が行った調査結果に基づいて具体的に説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	「日本型高学力の問題点	学力の地域差・階層差、断片的知識の量とそれら知識の意味的関連についての理解の質と著しい跛行、理解のドロップアウト学力の「剥落」、子どもたちの「勉強・学力観」について論じる。	駒林邦男	駒林邦男
9	伝統的構造の一斉授業	高学力を支えてきた「伝統的構造」の一斉授業とはどんな授業かを、評価の特徴、学びの組織化の特質、一斉授業と学びの個別性との構造的摩擦について説明する。	同上	同上
10	学校化された学び特異性	具体的生活の中での学びとの対比によって、学校知の学び(「学校化された学び」)の人工性・迂回性を浮かびあがらせる。	同上	同上
11	学校知学力の特性	「学校知学力」の基本特性が「非・ヴァナキュラー性」であること、すなわち受験手段性・依存性、「学校課題」性であることについて論じる。	同上	同上
12	隠れたカリキュラム、「日常知」	「もう一つの学力」としての「隠れたカリキュラム」を教育学的に定義し、学校知学力の対極にある「日常知」について、さまざまな角度から論じる。	同上	同上
13	子どもにとっての学校・学び・学力(一)	具体的データを使って、子どもの授業実感について探り、「学びの疎外」状況の拡がりについて述べる。	同上	同上
14	子どもにとっての学校・学び・学力(二)	高校生の学びの現状 ― 学校離れ、学力離れ観について紹介し、また、高校生の否定的自己認識(自己過少評価)について述べる。	同上	同上
15	教育「改革」と昏迷の中の学力問題	14回の講義を整理する。「まとめ」として、現在の教育改革の動向との関係の中で、学力問題について論じる。	同上	同上

＝国際化と教育（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：佐藤郡衛（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

21世紀は、トランスナショナルという国境をこえた人の動きが盛んになり、否応なく異文化との共生を迫るようになる。教育も例外ではなくトランスナショナルな動きに対応し、異なった文化をもつ人との共生が大きな課題になろう。国際化の進展により異文化共生という新しい課題が提起され、そのための教育をどのように構想するかが問われるようになっている。それは、19世紀以降前提にしてきた国民教育という枠組みから、「地球人」といった普遍的な価値や意義をもつ教育への転換を迫っている。本講座は、こうした視点から国際化に伴い必然化する日本の異文化間教育にかかわる諸問題について考察することを課題にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際化社会における教育 ・国際化の流れ ・日本の国際化 ・教育の国際化	本章では、国際化の進展が日本の社会や教育にどのような課題を提起しているかを考察する。近年、「トランスナショナル」な動きが急速に進行している。これは、否応なく異文化との共生を迫る。教育も例外ではなく、異文化との共生していくためにはどのような教育が必要かを考察する。	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）	佐藤郡衛（東京学芸大学教授）
2	日本の教育の国際化 ・異文化間教育の日常化 ・国際化推進のための政策 ・国際化の課題	日本では国際化の進展とともに異文化間にまたがる教育現象が日常化している。こうした異文化間にまたがる教育に対して政策としてどのような対応をしてきたかを探るとともに、その問題点と今後の課題について考察する。	同上	同上
3	日本における異文化間教育の進展 ・異文化間教育の階層 ・異文化間教育をとらえる視点 ・異文化間教育の課題	海外・帰国子女教育、留学生教育、外国人子女教育など日本の異文化間教育の概要を概括的に説明する。ついで、こうした異文化間教育をとらえる視点を明確にするとともに、その教育の課題を明らかにする。	同上	同上
4	海外子女教育 ・海外で生活する子ども ・日本人学校と補修授業校 ・異文化体験の多様化	国際化の進展とともに、海外で育つ日本の子どもが増えている。この子どもたちは海外子女と呼ばれるが、その海外子女の就学形態である日本人学校と補修授業校の実態と問題点を明らかにする。ついで、海外子女の異文化体験について考察する。	同上	同上
5	帰国子女教育 ・帰国子女の実態と帰国子女教育の推移 ・帰国子女の自文化復帰 ・帰国子女教育の課題	帰国子女の実態と帰国子女教育の政策、実践の推移を考察する。ついで、帰国子女の自文化復帰について学校文化との関連で検討し、その問題点を明らかにしたい。そして、帰国子女教育の今後の課題を展望する。	同上	同上
6	在日外国人子女教育 ・急増する外国人子女 ・日本語教育 ・エスニシティと教育	本章では、最近、急増している在日外国人子女の実態を取り上げる。特に、日本語ができない子どもの急増に対応し、日本語教育の課題が浮上しているが、その実情と問題点を検討する。ついで、外国人子女のエスニシティを教育との関連で考察する。	同上	同上
7	外国人留学生 ・外国人留学生の現状 ・留学生政策 ・留学生の異文化適応とその支援	本章では、急激な増加を続けている外国人留学生を取り上げる。留学生が日本で直面している問題点を明らかにする。そして、留学生の異文化適応に焦点をあて、異文化適応を支援するための様々な試みについて考察していく。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	在日外国人学校・国際学校 ・外国人学校・国際学校とは ・民族学校 ・日本の教育と外国人学校民族学校	日本にある外国人学校、国際学校を取り上げる。日本に在留する外国人のための学校について、その実情と問題点を明らかにするとともに、日本の学校制度との関連について考察する。	佐藤郡衛	佐藤郡衛
9	異文化間教育におけるアイデンティティ ・異文化接触とアイデンティティ ・文化とアイデンティティ ・アイデンティティの確立に向けて	異文化間教育の中で特に重要なのがアイデンティティの問題である。アイデンティティに及ぼす異文化接触の影響、文化とアイデンティティなどの問題について考察する。そして、アイデンティティの確立に向けてどのような働きかけが必要かについて考察する。	同上	同上
10	異文化コミュニケーション ・異文化間教育とコミュニケーション ・異文化適応スキル ・異文化間マスコミュニケーション	異文化間コミュニケーションは、異文化への適応過程や異文化間教育における2文化の相互作用の過程の中心的テーマである。本章では、異文化適応スキルの習得におけるコミュニケーションの役割、異文化間コミュニケーションにおけるステレオタイプ化の問題などについて考察する。	同上	同上
11	異文化接触と言語発達 ・異文化接触と言語発達 ・第2言語教育 ・バイリンガル教育とその実践	本章では、異文化接触と言語について取り上げる。異文化間教育では、第2言語の習得が大きな課題になるがその教育の実情と問題点について考察する。そして、日本の海外子女、外国人子女を対象にしたバイリンガル教育の実践についてもその特徴と課題について検討する。	同上	同上
12	国際理解教室 ・国際理解教育の展開 ・日本の国際理解教育 ・国際理解教育の課題	本章では、国際理解教育の日本における発展の軌跡を政策的に跡づけながら、その目的と方法、そして今日的課題について考察する。	同上	同上
13	教育における国際交流 ・国際交流の実態 ・教員の国際交流 ・国際教育交流の課題	国際化社会の進展は、国際交流活動を活発化させる。本章では学校における国際交流活動、教員の国際交流、そして地域における国際教育交流などを取り上げ、その実情と問題点、そして今後の課題を考察する。	同上	同上
14	グローバルな教育への取り組み ・国際共同教育事業の取り組み ・教育開発とさの支援 ・グローバルな教育	本章では、国際共同教育事業としての開発途上国への教育援助・協力の問題を南北問題との関連で考察する。ついで、今後、ますます重要視されるグローバルな教育の取り組みについてもその必要性と課題について検討する。	同上	同上
15	国際化と教育の課題 －日本の異文化間教育の展望－ ・異文化間能力とは ・異文化間リテラシーの育成に向けて	本章は、これまでの講義のまとめとして、これからの日本の教育の課題を総括的に検討する。国民教育という枠組みに代わる新しい教育をどのように構想するか、その理念と方法について考察する。	同上	同上

＝メディアと教育（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：白鳥元雄（聖徳大学教授）
主任講師：高楽康雄（江戸川大学教授）〕

全体のねらい

教育は、教える者と学ぶ者相互のコミュニケーション過程である。教育の場面で使われるメディア ― 基幹的媒体である音声言語を初め、文字・活字・映画・電波・コンピュータなど、それぞれのメディアが産みだされた歴史的・社会的文脈と教育との関わりを考察し、現在の問題としてメディアの受容と活用の方法を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報化とメディア	・オリエンテーションとして、1970年代以降の社会の急激な情報化 ― 情報量の巨大化とメディア技術の高度化と多様化による情報の質の変化 ― について考察する。 ・教育とメディアの関係をデールの「経験の円錐」とその展開によって捉える。	高楽康雄（江戸川大学教授） 白鳥元雄（聖徳大学教授）	高楽康雄（江戸川大学教授） 白鳥元雄（聖徳大学教授）
2	「言語」というメディア	・生物進化の歴史の中で獲得されたヒトHomo sapiensの基幹的なコミュニケーション・メディアとしての音声言語の特性を考察し、特に、ことばを「聞く」という行動を分析してメッセージの受容に何が必要かを考える。	遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授）	遠藤　榮（元帝塚山学院大学助教授） 白鳥元雄
3	文字と学校	・文字の誕生は、文明にとって画期的な発明であった。ヒトの営為が時間と空間を超えて伝達・蓄積され新しい世界が開かれた。視覚メディアである文字の特性を考察する。 ・また文字の誕生は、その技術に習熟させるための訓練機関 ― 「学校」の誕生を促した。	同上	同上
4	グーテンベルク革命	・文字の文化の象徴としての「図書館」、そして12世紀から続々誕生する「大学」。その時代的雰囲気の中でグーテンベルクの活版印刷術が発明される。後にF．ベーコンがいうように、それは火薬・羅針盤と並んで、全世界の外観と状況を一変させた。	白鳥元雄	白鳥元雄
5	教科書と体験	・コメニウスの「世界図絵」の特徴と意義を教育の大衆化との関係で捉える。 ・教科書の変遷を学校教育の思想との関係でたどる。 ・直観教授の伝統と直接経験を重視する教育思潮を考察する。	高楽康雄	高楽康雄
6	掛け図と黒板－教育の大衆化のなかで	・教育のメディアのひとつとして学校の建築様式と施設について開智学校を例に考察する。 ・近代学校の特徴的な方法である一斉教授のメディアとして重要な黒板の利用をみる。 ・一斉教授に効果的な視覚的メディアである掛け図を考える。	同上	同上
7	新聞	・明治期、日本の新聞 ― 特に「小新聞」は漢字にルビをふることによって、文字に弱かった階層にまで市場を広げ、同時に人々の識字力を高めた。新聞は教育を目指したメディアではないが、「現在」を伝える強力なメディアとして、今も教育の場で教材性をもつ。	白鳥元雄	白鳥元雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	映画はなにをもたらしたか？	・映画の発明とわが国への導入の経過をふりかえる。 ・初期の映画への教育界の対応の否定的な立場と肯定的な立場を解説する。 ・積極的な映画への取り組みとして、成城学園の事例を紹介する。	高柴康雄	高柴康雄
9	ラジオとテレビ	・ラジオの発明と教育への活用 ― アメリカの事例から考察する。 ・わが国でのラジオ放送にみられる社会教育のメディアとしての応用を歴史的に跡づける。 ・ラジオからＴＶへ ― 「学校放送」の発展と学校教育の改革との関係について考える。	高柴康雄 遠藤　榮	高柴康雄 遠藤　榮
10	テレビと生活文化	・1960年代に入ってＴＶは急速に普及した。何のスクリーニングも経ずに子どもの生活圏に入ってくるＴＶはさまざまな影響を与える。20世紀後半子ども文化の中心的存在となったＴＶとその周辺のビデオやＴＶゲームなどを含め、その影響力と教育力を検証する。	白鳥元雄	白鳥元雄
11	博物館再発見	・資料（メディア）の集結と展示による博物館の教育活動を実例により考察する。 ・館内・館外でのイベントへの発展と ・博物館の新しい展開 ― 「見る博物館」から「さわる・試す博物館」「バーチャル・ミュージアム」へ ― を紹介する。	高柴康雄	高柴康雄
12	コンピュータの登場	・戦後間もなくコンピュータが発明され、単なる自動計算機械から情報処理機器へ、さらに人間の思考をシミュレーションしたり、機械を制御したりするようになる。ここでは、コンピュータのもつ本質的な仕組み、メディアとしての発展・変容について紹介する。	永野和男（静岡大学教授）	永野和男（静岡大学教授）
13	学習環境としてのコンピュータ	・コンピュータの導入は、教育現場に大きな変革の衝撃を与えている。教師の教材提示だけでなく、子ども自身が道具としてコンピュータを使い、情報活用能力を高める実践も行われている。学習の場でのコンピュータの役割を、実践も紹介しながら考察する。	同　上	同　上
14	情報ネットワークと教育	・インターネットの普及によって、コンピュータはコミュニケーションの窓口としての機能が期待されている。時間と空間を超えたコミュニケーションは教育の構造を大きく変える。情報ネットワークが教育にどのような変革をもたらすのか、事例を紹介し考察する。	同　上	同　上
15	新しいリテラシー	鼎談 ・情報社会に求められる「リテラシー」とは何か。 ・コンピュータ・リテラシーの必要条件を考える。 ・映像を読み解く力、批判的読解と自己表現の力をどのように育てるか。	高柴康雄	高柴康雄

＝臨床心理学概説（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：馬場禮子（放送大学教授）〕

全体のねらい

臨床心理学の基本的理論と方法、社会に向けて果たすべき課題について概説する。理論的な基盤を押えつつ、平易にまた臨床の実際が伝わるように記述し、図表などを加えて視覚的に捉え易くする。概説すべき内容は大量なので、テキストでは必要な項目にすべて触れておき、説明の不足はラジオ放送で補って内容の充実をはかる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	臨床心理学とは何か	①定義　②実践の内容－心理アセスメント、心理療法、コミュニティ援助、それらに関する研究　③領域と対象－教育、医療、司法、その他において、乳幼児から成人、高齢者まで、健常者も病者もが対象であること。　④歴史－米国と日本を中心に。	馬場禮子（放送大学教授）	馬場禮子（放送大学教授）
2	臨床心理学の理論的背景 (1) 心理学の諸領域	人格、発達、社会、学習、認知などの心理学がどのように臨床心理学の基礎理論としての役割を持つのか、臨床心理学との関連においてこれらを解説する。	青木紀久代（東京都立大学助手）	青木紀久代（東京都立大学助手）
3	臨床心理学の理論的背景 (2) 医学の諸領域	精神医学、心身医学（心療内科学）、小児科学、高齢者医学などの理論と基礎知識を臨床心理学との関連で、特に臨床心理学にとって必要なものに焦点づけて解説する。精神薬理も含む。	大野　裕（慶応義塾大学講師）	大野　裕（慶応義塾大学講師）
4	臨床心理学の理論的背景 (3) 精神分析学と分析心理学	両学の人格理論の部分を、臨床心理学の基礎理論という位置づけで解説する。無意識仮説、心的構造論などを比較の形で出すか、別個にするか、検討を要する。	永井　徹（都立大学助教授）	永井　徹（都立大学助教授）
5	臨床心理アセスメント (1) アセスメント総論	①心理アセスメントとは何か（導入、動機づけ、秘密義務を含む）　②面接と検査があること、両者の関係　③アセスメント面接について　④テストバッテーについて　⑤アセスメントのまとめ方と伝え方。	馬場禮子	馬場禮子
6	臨床心理アセスメント (2) 知能検査と質問紙法	まずどのようなものがあるかを羅列（表示）し、原理について簡単に触れ、代表的なものについて解説する。　知能検査はウェクスラー法を重視。質問紙はねらいの異なるものを選ぶ。放送授業にそなえて検査用紙を提示しておく。	黒田浩司（茨城大学助教授）	黒田浩司（茨城大学助教授）
7	臨床心理アセスメント (3) 投映法	投映法の原理、分類法（どれか１つ）、代表的なものを概説。紙幅から、きわめて概略的な説明しかできないので、各検査についても原理を重視し、解釈法の細部などは放送授業とする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	心理療法 (1) 心理療法総論	①心理療法とはなにか（相談、カウンセリングにも触れる） ②方法－各学派（表示）、各設定（個人、集団、家族）、各手段（会話、行動、芸術表現など） ③対象－乳幼児から高齢者まで、精神的障害者から健常者まで含むこと。	馬場禮子	馬場禮子
9	心理療法 (2) 精神分析的心理療法	①原理 ②方法－対象と方法について。児童治療、成人個人、集団、家族、芸術表現療法のそれぞれについて精神分析的観点と方法を解説する。	同上	同上
10	心理療法 (3) ユング派心理療法	同上の内容でユング派心理療法の対象別の方法を解説。	永井徹	永井徹
11	心理療法 (4) クライエント中心療法	同上の内容でクライエント中心療法の対象別の方法を解説。	馬場禮子	馬場禮子
12	心理療法 (5) 認知・行動療法	同上の内容で認知・行動療法の対象別の方法を解説。	大野裕	大野裕
13	コミュニティ援助 (1) 危険介入とコンサルテーション	①コミュニティ援助の領域と方法の総論（図表） ②リエゾン・コンサルテーション（学校臨床、高齢者援助を含む） ③危機介入 ④予防活動 ― 以上順序は偏光ありうる。	黒田浩司	黒田浩司
14	コミュニティ援助 (2) 育児と親への援助	①意義と実際－親子（母子）関係の重要性、援助の可能性 ②対象－親、保育者、など ③障害児の治療教育。	青木紀久代	青木紀久代
15	臨床心理学の研究法	調査研究、事例研究について解説する。それぞれの難しさ、留意点にも触れる。卒論研究にも生かせるように配慮する（例えば資料の作り方、論文のまとめ方など）。	同上	同上

＝教育の中の言葉（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：永野重史（放送大学教授）〕

全体のねらい

「国語」以外の教科におけることば、学力テストと言葉の関係、文章読解、など、具体的な話題を考えることによって、「教育の中の言葉」にどのような問題があるか、また、問題を解決するためには、「言葉」というものをどのようにとらえなければならない。かということがわかるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育の中の言葉（問題の所在）	講義内容ぜんたいの紹介。英語のブロック報告書「生活のための（生涯のための）言葉」と教育。	永野重史（放送大学教授）	永野重史（放送大学教授）
2	言語と思考 (1)	貧しい階層の子ども達の知的発達の原因としてあげられた言語生活の特徴。その改善のためにとられた方策。	同上	同上
3	言語と思考 (2)	言語が人の思考を左右するという考え方。ベンジャミン・ワーフの言語相対性仮説とその心理学的検証。	同上	同上
4	言語と思考 (3)	リテラシーの効用。文字のない文化と文字のある文化。文字をつかってものを書くことが人々の知的能力を高めるという説の検討。	同上	同上
5	「言語」とは何か	幼児の母語の獲得の様子と学校の国語の学習とを比較しながら、「言語」についての考え方を整理する。ラングとパロール。「言語音が集まって語となり、語が集まって文となる。」という見方の検討。	同上	同上
6	「国語」という教科は道具教科か	「言語教育はすべての教育学習の基礎だ。」という考え方の検討。外国語のイマージョン教育。「カリキュラムぜんたいを通しての言語教育」という考え方。	同上	同上
7	学力テストと言葉	教育評価のための指導目標の記述。「要目かす論」。唯言語主義（バーバリズム）を育てるテスト。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	社会・数学・理科の学習と言語	生活知と科学知とのつながり。外国人に「将軍と天皇はどうちがうか」とたずねられて。「円のまんなか」ではいけないか。「円の中心」でいいか。言語相対仮説をあらためて考える。	永野重史	永野重史
9	言葉のつかいかた (1)	モリスの「話しのタイプ」。マンドとタクトと反響語。「言葉のお守り的使用法」	同上	同上
10	言葉のつかいかた (2)	一般意味論の運動。言語学上の意味論との違い。一般意味論の主張。	同上	同上
11	字引と辞書	意味の説明とは。ソシュールのチェスのたとえ。良い辞書とは。個人にとっての言葉の意味。子どもがつくる辞書。	同上	同上
12	文字表現の読みと正書法	「正しい読み方」とは何か。音読みと訓読み。正書法。	同上	同上
13	文章の理解	文章の意味は書き手のものか、読み手のものか。三つの要素（言語、機能、状況）。	同上	同上
14	文章をつくる	こどもの作文とおとなの作文。感想文と科学論文。パラグラフ構成の指導。	同上	同上
15	言語観の拡張	認識の道具としての記号・数式・表・グラフ・コンピュータ。言語の分析から文化の分析へ。エティック的見方とイーミック的見方。	同上	同上

＝生徒指導（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：秦　政春(大阪大学教授)〕

全体のねらい

いま学校のなかでもっとも困難をきわめているものが生徒指導だといわれている。そうした生徒指導に関する実態を明らかにするとともに、現実に子どもたちがどんな非行・問題行動をおこしているのか、そしてその背景にどんな事情があるのか検討する。そうした検討をふまえて、生徒指導の今後のありかたを探っていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	Ⅰ．生徒指導の実際 生徒指導の理念そしてその実態	生徒指導の理念が、子どもたちのよりよい人間形成をはかるものであることはいうまでもない。しかし、実際には非行防止、非行対策の名のもとに「管理的」な色彩がますます強まっている。こうした実態のもつ問題状況を明らかにする。	秦　政春（大阪大学教授）	秦　政春（大阪大学教授）
2	体罰に依存する教師	「管理的」生徒指導の基本的なものが体罰である。教師の体罰は学校教育法が禁止されているにもかかわらず、現実にはこれがかなり多い。ここでは、教師の体罰に関する実態を明らかにするとともに、これによってもたらされた悪循環について検討を加える。	同　上	同　上
3	校則(生徒心得)による管理	体罰と並んで校則（生徒心得）も、「管理的」生徒指導の１つである。これについてはよく「校則問題」というかたちで話題になっているが、これの実態、とくに規定の内容やどのように運用されているのかという点を中心にして検討を加える。	同　上	同　上
4	校則(生徒心得)の曖昧性	校則が「管理的」生徒指導の１つとはいっても、これ自体に教育的意味がないわけではない。むしろ、これが運用される場合に、これの性格の曖昧さのなかで問題が生じることが多い。簡単にいえば心得が規則かといった問題である。この点について検討を加える。	同　上	同　上
5	Ⅱ．非行・問題行動の実態 非行・問題行動に関する推移	昭和50年前後に「戦後第３のピーク」と呼ばれた少年非行の急増した時期以降、現在にいたるまでつぎつぎと子どもたちの問題行動が多発している。いじめ、不登校、校内暴力といった具合であるか。こうした推移を明らかにするとともに、その背景を検討する。	同　上	同　上
6	いじめ問題と子ども	昭和61年頃に急激に「鎮静化」したと思われていたいじめ問題は、実際には継続してきており、かつてより悪質な行為もみられるようになってきた。ここしばらくのいじめ行為の推移を明らかにするとともに、どういった背景からいじめが生じているのか検討する。	同　上	同　上
7	子どもたちのいじめ行動の特質	子どもたちのいじめ行為の特質をひと言でいえば「集団による弱者いじめ」ということになる。ここでは、いじめという行為の特質を考えるとともに、いかなるパターンや形態をもってこの行為が成立しているのか検討を加える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	不登校問題と子ども	いじめと並んで、不登校問題も大きな社会問題・教育問題としてクローズアップされている。しかも、不登校児童・生徒の数は、年々増加傾向をみせている。こうした量的な推移に加えて、質的にいかなる変化がみられるのか、その原因もあわせて検討する。	秦　政春	秦　政春
9	Ⅲ．子どもたちの状況 子どもたちのストレス	いまの子どもたちは、とても疲労しておりストレスがたまっている。しかも、これによってさまざまな症状がでている。なかには、極端な身体的不調や異常行動をとるケースも少なくない。こうした実態を明らかにするとともに、これの影響について考える。	同　上	同　上
10	ストレスと非行・問題行動	子どもたちのストレスは、たんに症状がでているというだけではない。これによってさまざまな非行・問題行動に結びついていくことも少なくない。たとえば、ストレスの有無は、いじめ行為にも密接に関係がある。原因→ストレス→問題行動の関係を検討する。	同　上	同　上
11	子どもたちの規範意識	子どもたちの規範意識は、確実に崩れてきている。ささいな校則違反、服装違反ならともかく、明らかな反社会的行動、逸脱的行動に対しても「絶対にしてはいけない」という割合が低下してきている。こうした規範意識の崩れの背景を探ることにしたい。	同　上	同　上
12	Ⅳ．生徒指導を阻害するもの 教師のストレス	いま学校では、子どもたちにストレスがたまっているというだけではない。教師にもかなり厳しいストレスがある。そして、子どもたちと同様にさまざまな症状がでている。ここでは、こうした教師のストレスの原因、実態、その影響について明らかにする。	同　上	同　上
13	教師のストレスによる悪影響	教師のストレスは、確実に子どもたちに対して悪影響をおよぼしている。たとえば、子どもたちに「やつあたり」をするといった具合である。これに対して、子どもたちはまたストレスを感じ、教師に反抗するといった悪循環がある。こうした構造を明らかにする。	同　上	同　上
14	教師集団の人間関係の崩れ	生徒指導は、ひとりひとりの教師が個別的に行なうのでは限界がある。教師集団の連携や協力体制が不可欠の条件である。ところが実際には、あまり連携や協力体制がとれていない。こうした教師集団の組織化を阻害する悪因がどこにあるのか明らかにする。	同　上	同　上
15	Ⅴ．生徒指導の今後 組織的でゆるやかな生徒指導	今後、どのような生徒指導のありかたを求めていればよいのか。１つは、教師集団の連携や協力体制を基本にした組織的な生徒指導であり、いま１つは「管理」を脱却したゆるやかな生徒指導である。こうした生徒指導の実現に関する可能性を探っていく。	同　上	同　上

＝教育評価（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：梶田叡一（ノートルダム女子大学長）〕

全体のねらい

教育における評価の問題について、いくつかの基本的な視点から考えてみる。とくに、学校での日常的な見とりや見きわめ、テストや成績づけなどのあり方を、子どもの学習や成長とのかかわりで原理的な地点から検討してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育評価のはたらき	評価は、学校といった組織的な教育形態においては古今東西を問わず行われてきた。教育においてなぜ評価が必要となるのか、学ぶ側、教える側、管理運営する側それぞれにとっての意義を考えてみる。	梶田叡一（ノートルダム女子大学長）	梶田叡一（ノートルダム女子大学長）
2	測定から評価へ	評価は客観的科学的ではなくてはならないという発想がある。しかしこれを押し進めていくと本当に大事な面が見落とされ、表面的なつまらない面ばかりが重視され評価されるという落とし穴に落ちる。この意味で1930年代のタイラーの主張を振り返り、現代の評価論の大前提を考えてみる。	同上	同上
3	教育の目標と評価	教育に当たっては目標が体系的に設定されるが、その目標がまた評価の視点や基準となる。目標の明確化のためには、ブルーム等の『教育目標のタキソノミー（分類体系）』が有名であるが、こうした仕事の意義について考えてみる。	同上	同上
4	行動目標論の克服	子どもの学びや育ちを外的客観的に見ていくため、行動目標の考えが提唱されてきた。しかし今や行動目標論は原理的に乗り越えられている。子どもの学びや育ちを本当に問題にするためには、内面を見落とすことはできないのである。こうした視に立って、達成目標・向上目標・体験目標の考え方を述べる。	同上	同上
5	内面の育ちの把握	学びや育ちの現実を見てとるためには、関心や意欲や理解の状況など内面世界の読み取りが必要となるにしても、これは非常に困難な課題である。内面を洞察する上での手がかりを学校で具体的にどのように得られるか、授業とのかかわりを中心に考えてみる。	同上	同上
6	相対・絶対・到達度評価	子どもの学びや育ちを評価する際、他の子どもと比べて見る（相対評価）か、教える側の内的基準による判断に任せる（絶対評価）か、何らかの到達基準に達しているかどうかを見る（到達度評価）か、といった違いがある。それぞれの意義と利害得失について考えてみる。	同上	同上
7	形成的な評価	得点や成績は、学びや育ちの「結論」であるかのように受け止められがちである。しかし本来それは、長い道のりの中でのラップタイム（途中計時）でしかない。教育におけるあらゆる評価は中間的かつ一時的なものであって、次の段階に役立って初めて意味を持つ、という形成的評価の考え方について検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自己評価	学びと育ちは、最終的にはその人自身によって評価され、その人自身の次の段階に向けての努力を引き出し、支えるものでなくてはならない。自己教育を基礎づけるものとしての自己評価でなくてはならないのである。こうした自己評価の具体的あり方について考えてみる。	梶田叡一	梶田叡一
9	学習指導と評価	学習指導を有効かつ適切なものにするため、具体的にどのような場で、どのような評価活動を行い、それをどのように生かしていけばいいのか、さまざまな場合を例にとって考えてみる。	同上	同上
10	学力テストの論理と問題点	学力を客観的な形で測定するために工夫されてきたテストの構成と結果処理の考え方について検討する。特に旧来の集団標準にもとずくテスト（ＮＲＴ）と最近の到達基準にもとずくテスト（ＣＲＴ）とを比較する。高次の知的能力を測定するための工夫を見る。	同上	同上
11	知能検査を考える	20世紀初頭ビネによって考案されて以来、長い間にわたって「頭の良さ」を測る道具として用いられてきた知能検査はどのような論理に立つものであろうか。またその検査結果の表示法として用いられてきたＩＱ（知能指数）が今日なぜ信頼されなくなってしまったのであろうか。ＩＱ神話の成立と崩壊について考えてみる。	同上	同上
12	指導要録と通知表	学校での成績は、指導要録（学籍簿）と通知表に記入され、当人や親に対して権威を持ってきた。現在それはどのような形式・内容であるのか。その背後にある基本的な評価観は何であるのか、これまでの様式・記入法の変遷を見ながら検討する。	同上	同上
13	入学試験と進路指導	現在の入学試験や進路指導のあり方に偏差値教育と呼ばれるようなゆがみが生じているという指摘がある。過熱した受験準備体制の中では子供の発達そのものにもゆがみが現れざるをえない。これを是正するため、どのような入学者選抜方法を用いるか、どのような進路指導をしていくか、大きな課題である。この問題についていくつかの方向から考えてみる。	同上	同上
14	評価する側の眼	評価する側も人間である。固定観念を持って見てしまったり、背光効果や寛容効果などのゆがみが忍び込んでしまったりしがちである。しかし、自分の眼にどのようなゆがみの可能性があるかを認識することによって、そのゆがみに振り回されて非教育的な態度や決定を取ってしまうことも少なくなる。この問題について特に主要な点を検討する。	同上	同上
15	評価される側の心理	テスト不安など評価される場に身を置くことによって生じる心理的な効果についても考えておかねばならない。また、誉められたり叱られたりすることの効果の問題もある。評価される側がその評価によってどのような心理的影響を受けるか、いくつかの点から考えてみる。	同上	同上

＝民　　法（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：奥田昌道（鈴鹿国際大学教授）〕

全体のねらい

民法（財産法）の内容を、人と財産をめぐる法的規律という視点から捉えてみる。できるだけ日常生活に関わりのある身近な問題を念頭におきながら、民法（財産法）の全体像が浮かび上がるようにつとめる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	民法とは何か	(1) 民法とはどのような法か。わたしたちの生活関係のうちのどの部分をどのように規律するのか、(2) 成文法としての民法（民法典）の生い立ちとその後の変遷、(3) 民法に関係の深い法律について、概説する。	奥田昌道（鈴鹿国際大学教授）	奥田昌道（鈴鹿国際大学教授）
2	民法のしくみ	民法（民法典）は、総則、物権、債権、親族、相続の5編から成るが、その内容を「人と財産をめぐる法的規律」という視点から概観する。	同　上	同　上
3	人と法律との出会い	人は出生から死亡にいたるまで、民法とどのように関わるかを、(1)胎児、(2)出生、(3)未成年者、(4)婚姻、(5)死亡、のそれぞれにつき概謹し、特に、意思能力・行為能力の不完全な者についての財産の保護・管理のための制度について説明する。	同　上	同　上
4	法人をめぐる法律問題	民法は人（自然人）のほかに、ある種の団体や一定の目的に捧げられた財産（財団）に法人格を認める（法人）。このような法人制度の意義、および、法人の設立、管理運営、活動に関する法的規律について概説する。	同　上	同　上
5	財産の保護と民法	(1) 民法上、財産とは何か。財産と財産を構成する権利（財産権）との関係はどのように捉えられるか、につき考察し、(2) 財産ないし財産権の法的保護の仕組みを、民法（実体法）と民事手続法の両面から概説する。	同　上	同　上
6	物権取引をめぐる法律問題	民法は、有体物（不動産と動産）の上に成立する所有権を中心に物権に関する法的規律を定めている。その概要を説明し、不動産物権変動に関して特に重要な公示（登記）の問題、取引の安全の問題について概説する。	同　上	同　上
7	所有権の法と占有の法	民法は、所有権の法のほかに、占有の法（占有制度）を定めている。それは何故か。占有制度には多様な役割・機能が担わされている。その概要を、実体法と手続法の両面から説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	契約自由とその規制	民法は、私人間（個人対個人、企業対企業、企業対個人）における経済的生活関係（取引関係）の形成を原則として、当事者の自己規律（契約）に委ねている。そのメリットとデメリットを考察し、法はそれにどのように対処しているかを概説する。	奥田昌道（鈴鹿国際大学教授）	奥田昌道（鈴鹿国際大学教授）
9	代理制度について	さまざまの契約の締結、その交渉や契約の実現（履行）の際に、代理人その他の他人（第三者）が介在する場合が多い。これらのうち、代理制度についての法律上の規律を概観し、特に重要な問題や留意すべき事項を取り上げる。	同上	同上
10	売買契約に関する法的規律	日常生活の中で最もポピュラーな契約である売買契約を取り上げ、契約の成立から履行に至るまでの間に、および、履行が終わったのちに、現れてくるさまざまな問題について、民法はどのような規律をしているかを概説する。	同上	同上
11	不動産利用の法律関係	建物所有の目的で他人の土地を利用する法律上の手段として、地上権を取得する方法と賃借権を取得する方法とがある。建物の利用の場合は賃貸借契約による。これらに関する民法および借地借家法の規律を概説する。	同上	同上
12	時効制度について	民法は、時効制度を設け、所有の意思をもって一定の期間、他人の物を占有する者に所有権の取得を認め（取得時効）、一定の期間、権利を行使しない者に権利の消滅を認める（消滅時効）。この制度の存在理由などを中心に、時効制度を概観する。	同上	同上
13	物的担保制度と人的担保制度	主として金銭債権の履行確保の法的手段として民法が用意しているのは、物的担保制度と人的担保制度である。前者は、抵当権、質権、仮登記担保などであり、後者は保証制度である。これらの諸制度の要点を概説する。	同上	同上
14	不法行為制度の概要	個人や法人＝企業、それらの被用者の加害行為により、また、他人の支配下にある工作物等の瑕疵により、人身損害や財産上の損害を被った場合の法的救済制度を定めているのが、不法行為法である。まず、その概要を説明する。	同上	同上
15	特殊不法行為について	個人や企業の被用者・従業員の加害行為の場合の使用者の責任、責任無能力者の加害行為の場合の法定監督義務者の責任、企業設備や工作物の設置・保存の瑕疵による損害発生の場合の所有者・占有者の責任、製造物責任などにつき概説する。	同上	同上

＝家族法（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：泉　久雄（専修大学教授）〕

全体のねらい

家族法は、私たちの保族生活である夫婦、親子の生活関係（それに相続を含めて）を対象とした法の世界であるが（民法典では、親族法と相続法といっている）、保族生活は人類の生存に不可欠であり、人類生存の基礎である。そういった認識の下に、現行家族法の描く家族関係の全体と理想像を追及したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	(1)現行家族法の理念と構成 (2)家族法の基礎的概念	現行家族法は核家族を念頭において個人の尊厳と両性の平等を理念として、その上に夫婦・親子の関係を規律していることを明らかにする。 次に、家族法の基礎的概念である、血族と親族関係を説明する。	泉　久雄（専修大学教授）	泉　久雄（専修大学教授）
2	婚姻(1) 婚約 婚姻の成立	婚姻の成立をめぐる問題を一括説明する。第１に婚約をめぐる法律問題、第２に婚姻の成立要件、第３に成立要件に違反した婚姻の効力＝無効・取消を説明する。	同　上	同　上
3	婚姻(2) 婚姻の効力	氏とか貞操義務といった婚姻の一般的効力と夫婦財産制（婚姻生活をめぐる財産関係）を説明する。民法は夫婦の財産関係について別産制を採っている。―別産制の長所と欠点は何か、その解決策は？といった問題にもふれたい。	同　上	同　上
4	離婚(1)	離婚は当事者に再婚の可能性を保障する制度であるが、わが国の離婚制度がヨーロッパとちがった道を歩んで来たことを明らかにし、ついで、統計を使いながら、今日の離婚の全体像と離婚法の構造および特色を説明する。	同　上	同　上
5	離婚(2)	民法に規定する離婚の方法、協議離婚と裁判離婚を（めぐる問題を）説明し、続いて離婚の効果（親権者の決定とか財産分与など）を説明する。	同　上	同　上
6	内縁	内縁の判例法はわが国特有の法領域であるが、どうしてそうなっているのかを判例の変遷をたどって説明し、ついで内縁判例法の現状を説明する。内縁以外の男女共同生活（同棲）にもふれたいと思う。	同　上	同　上
7	親子(1)	親子関係には実親子と養親子があり、実親子は婚姻によって出生した嫡出子と婚姻外の子、非嫡出子がある。人工生殖子もある。こういった親子関係の成立をめぐる問題を説明する。通常、教科書では、実子、養子として説明されている部分である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	親子(2)親権	子の監護教育を民法は親権という表類のもとに一括して規定しているが、親権は子の身上監護（子育て）と財産管理の二分野から成っている。それも説明し、親権の剥奪にもふれたいと思う。	泉　久雄	泉　久雄
9	扶養	広く扶養というときには、夫婦間の扶養（婚姻費用の分担）、未成熟子の扶養（養育ないしその費用の支出）、それ以外の親族間の扶養の三種を含む（私的扶養という）が、私的扶養と公的扶助との関係から始めて、親族間の扶養を説明する。	同　上	同　上宣
10	現行相続法の基礎と特色	現行相続法は諸子均分相続制と配偶者相続権の強化（それに遺言の自由を加えてもよい）を柱として組立てられているが、それはどういう理由によるのか、明治民法の家督相続の理念、相続制度の歴史などを引合いに出しながら説明する。	同　上	同　上
11	相続人	相続人には血族相続人と配偶相続人とがあるが、その相続順位を説明し、ついで相続権剥奪制度である、相続欠格と相続人の廃除制度を説明する。続いて相続の仕方（相続の承認・放棄）に進み、最後に相続人不存在の場合の遺産の行方を説明する。	同　上	同　上
12	相続の効力	生命侵害に対する損害賠償請求権の相続と、保証債務の相続を通して、相続が故人の遺産を承継する制度であることを明らかにする。祭祀財産の承継にもふれる。次に、遺産分割をするまで、相続した遺産の管理がどういう形で行われるかを説明する。	同　上	同　上
13	遺産分割	遺産分割の前提となる各相続人の相続分を説明し、ついで遺産分割の二つの方法、協議分割と審判分割について注意すべき問題点を説明する。	同　上	同　上
14	遺言(1)	遺言が死後行為（遺言者の死亡によってはじめて効力が生ずる）であることを述べ、続いて、遺言の内容を明確にするために定められている、遺言の方式（仕方）を説明する。遺言の撤回にもふれる。	同　上	同　上
15	遺言(2)	遺言による財産処分、遺贈をめぐる問題を説明し、遺留分との関係にふれる。最後に、遺言を実現する方法である、遺言の執行を問題にする。	同　上	同　上

＝商　　法＝（Ｒ）

〔主任講師：濵田道代（名古屋大学教授）〕

全体のねらい

私たちの市場経済社会にあっては、人々が自分の欲望や要求を満たすために自由な意思に基づいて取引を繰り返すことによって、生活が成り立っている。この講義では、そのような市場経済社会の基礎となるルールを定める商法の基本知識を、伝えて行きたい

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	商法を学ぶ意義	まず商法典を覗きながら、商法典においては、おおよそどのような事柄が規定されているのか、商法とは一体何なのか、それをこれからどのように勉強していったらよいのか、といったことから、考えてみることにしよう。	濵田道代（名古屋大学教授）	濵田道代（名古屋大学教授）
2	取引をなす権利主体と取引の権限	この回では、商取引関係の主体となる商人と、商人から権限を与えられて企業活動を行う代理人について、説明する。商取引を行うに際して、相手方やその権限を確認したい時に便利な、商業登記制度についてもふれる。	同　上	同　上
3	取引の相手方の信用のチェック	相手方やその権限を確認して有効な取引を行っても、相手方が無資力では如何ともしがたい事態に陥るかもしれない。相手方に信用を与える場合には、どのような点を注意しなければならないかを、押さえておこう。	同　上	同　上
4	商事売買	商事売買は、商人の取引活動の中心をなす。というよりも、市場経済社会で行われる活動の典型が商品の売買なのであるから、それに関する本ルールを理解すれば、その他の活動に関するルールに関してもおよその見当をつける力が身につくであろう。	同　上	同　上
5	企業取引ネットワークの展開	企業活動を展開する際には、他の企業と継続的組織的な取引ネットワーク関係をいかに作り上げるかも重要である。この回では、代理店網の構築やフランチャイズの展開等のほか、問屋、仲立人、運送・倉庫業者、保険会社との法律関係を考えてみよう。	同　上	同　上
6	会社の意義と種類	この回から、会社法の講義に入る。最初に、会社の意義と基本的な仕組みを見ていこう。わが国にある会社のほとんどは株式会社と有限会社であり、両者は似ているので、講義では株式会社を中心とするが、他に合名会社と合資会社があることも説明する。	同　上	同　上
7	株式会社の計算	出資者による共同事業を支えているのは、会計による企業活動状況の情報の集約と活動成果の分配である。会計情報はまた、納入業者・顧客・銀行・社債権者・従業員・徴税者等、企業をとりまくあらゆる利害関係人間の利害調整に、威力を発揮する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	株式会社の機関	出資者である株主が構成する株主総会は取締役や監査役を選任し、取締役が構成する取締役会は代表取締役を選任する。これらの機関の仕組みを学ぶことにより、株式会社のみならず、これに代表される近代的な組織のあり方を理解しよう。	濵田道代	濵田道代
9	株式	株主（株式会社の社員）の地位が、細分化された均等な割合的単位の形をとっているのが、株式である。株式は譲渡自由が原則である。この回では、株式、株券、株主名簿、上場会社による振替決済、小規模閉鎖的企業における株式譲渡制限、といった事項を扱う。	同上	同上
10	株式会社の設立	株式会社の設立は、法律に従って手続を進め、きちんと出資をなし、設立登記をなすことによって、誰でも自由に行うことができる。この回では、具体的にはどのようにして株式会社を設立したらよいかを、説明する。	同上	同上
11	株式会社の資金の調達	上場会社等の場合には、株式の譲渡により投下資本を容易に回収できる。したがって会社は、新株発行により、資本市場から資金を調達できる。会社はまた銀行等から借り入れることも多いが、社債の発行により、資本市場から直接資金を調達することもある。	同上	同上
12	株式会社の基本的変更	企業経営環境が激変する場合には、株式会社も本格的な構造改革に取り組まなければならない。それに失敗すれば、倒産の事態に陥るかもしれない。会社法の講義の最終回であるこの回では、定款変更、合併、組織変更、解散、清算、更生といった事項を扱う。	同上	同上
13	手形・小切手の意義と利用	この講義の最後の部分は、手形法・小切手法にあてる。手形・小切手が、銀行の当座勘定取引や手形交換の仕組みの中で活かされている事情を見ながら、手形・小切手とはどのようなものであり、なぜ利用されるのか、を理解していこう。	同上	同上
14	手形・小切手の振出・譲渡・支払	手形・小切手はどのように振り出したらよいのか、これを譲渡するにはどうするか、どのようにして支払を受けたらよいのか、といったことは、手形・小切手を利用するために、具体的に覚えておかなければならない。	同上	同上
15	手形・小切手をめぐる紛争の解決	ほとんどの場合は、手形・小切手を利用して順調に事が進むのであろうが、万一それを巡って厄介な事態が生じた場合には、それを解決するための法的ルールが物を言う。そのようなルールの概略は、常に念頭に置いておく必要があろう。	同上	同上

＝行政の法システム入門（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：阿部泰隆（神戸大学教授）〕

全体のねらい

行政法は、行政の手を通じて「公共性を実現」するための重要な法制度である。毎日の新聞には、「犬も歩けば棒に当たる。君も歩けば、行政法に当たる。」というほど、多数の行政法上の問題が掲載されている。それは一見きわめて断片的であるが、その構造的特色を明らかにし、その不合理性と改善策を提言する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	行政法の存在理由と変革期における行政の法システム	毎日の新聞に出てくる行政法の存在理由を、特に民刑事法との関連で分析・分類し、その基本的な原則を明らかにする。それとともに、規制緩和、市場原理の重視、法治行政化、行政手続、情報公開、地方分権などに簡単にふれて、今日国民と行政の関係が大変革の時期にきていることを説明する。	阿部泰隆（神戸大学教授）	阿部泰隆（神戸大学教授）
2	行政の監督システム　その１	行政の大きな任務は民間活動の監督である。それは基本的には経済介入手法と経済不介入手法に分けられる。これまでの護送船団型監督から市場原理に基づく監督へ移行する必要があるとともに、監督自体もいきすぎたり、不十分であったりするので、効率的なシステムに切り替える必要がある。その仕組みの基本と、規制のいきすぎ、不十分な規制の改善策の動向を学ぶ。	同上	同上
3	行政の監督システム　その２	行政の監督手法である許認可と私権の関係、不法行為と行政規制の関係を学ぶとともに、金融不祥事、脱税、薬害、違反建築などに見るように必ずしも十分に機能していない監督手法の改善策を工夫する。 また、濫用され気味な行政指導を法治行政に適合するようにルール化する。	同上	同上
4	行政上の強制実現・制裁のシステム	行政規制に違反した場合とられる強制手法として、代執行や刑事制裁、また、税金のような行政上の負担の強制徴収のシステムが必ずしも機能しない現状を明らかにし、その改善策などを解明する。	同上	同上
5	サービス・事業システム	行政による公共サービスの体系について、国民の利用権、費用負担、組織形態、民営と公営の関係などを明らかにする。 特に、行政の事業の簡素化、土木工事システムから民間の補完、監督手法への転換を提案する。	同上	同上
6	土地利用規制のシステム	日本の都市はなぜ貧相か、なぜ自然環境を守れないかを開発自由の原則によって説明し、秩序あるまちづくり、公平な受益と負担の関係を基本とした土地利用の法システムを提案する。	同上	同上
7	経済的手法・補助手法	人間を権力ではなく、金で動かす経済的な手法は、ゴミ収集の有料化、障害者雇用納付金・雇用調整金などにみるように新しいものであるが、通行課徴金など、今後の活用可能性は広い。また、金銭を支給する補助金も、適切に活用されるように改善策を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	情報の収集管理保護システム	行政が情報を適切に収集し、保護し、管理して公開し、かつ、プライバシーを保護するように、情報の総合的なシステムを作っていく必要がある。情報公開は行政と市民の関係を、恩恵の関係から権利義務の関係へと改善し、行政改革の一環でもある。	阿部泰隆	阿部泰隆
9	事前手続	行政処分をするときは、事前に言い分を聞いたり、理由を提示したりして、間違いが少なくなるようにする必要がある。これを定める行政手続法の仕組みを明らかにし、それが行政と市民の関係の改善に寄与することを示す。	同上	同上
10	住民参加	行政が活動するとき、関係する住民の意向をどのような方法で反映すべきか。これまでの制度は行政の一方的執行と住民の一瞬の参加によって特徴づけられてきたが、住民参加を強化するとともに、そのいきすぎを防止する方法を考える。	同上	同上
11	行政はどこが行うのか	地方分権の流れとその課題を明らかにするとともに、中央政府の行政改革、公務員制度の改革を念頭において、行政の組織の仕組みを考える。	同上	同上
12	損失補償法	土地収用、土地区画整理などのような、公共のために財産権を制限・剥奪する法制度と補償のシステムを説明する。これは損得無しの制度であるが、実は機能しにくいので、適正補償のために、上乗せ補償、ゴネ損方式を提案する。	同上	同上
13	国家賠償法	エイズ、水俣、学校事故などを例に、公権力の違法・有過失の行使、公物営造物の設置管理の瑕疵を理由とする国家賠償法の解釈問題を扱う。さらに、震災の被災者など、国家賠償と損失補償の射程外の生活支援、冤罪の犠牲者など、いわゆる国家賠償の谷間の救済を考える。	同上	同上
14	行政訴訟	違法な行政活動に対する救済の解釈問題を考える。争点は、誰が争えるか、どの行為を捕まえることができるのか、どのような訴訟形式なら許容されるのか、判決の効力はどこまで及ぶかといった法技術的な点にある。この制度は必ずしも機能していないので、行政訴訟制度の改善策にも及ぶ。	同上	同上
15	行政への不服申立てと行政の監視	1．行政不服申立て 税金への不服などを例に、行政への不服申立ての仕組みを考える。また、不服申立ての仕方を教える教示の例を示して、制度の不十分さと改善策を考える。 2．行政の監視 会計検査院、行政監察、地方公共団体の監査委員などの監査の不備を検討し、外部監査や行政監視院法案など、その改善の方向を探る。官官接待を明らかにした住民訴訟にもふれる。	同上	同上

＝刑　　法　　学＝（Ｒ）

〔主任講師：大谷　實（同志社大学教授）〕

全体のねらい

刑法の目的は市民生活の安全の確保による社会秩序の維持にあるということを基調として、犯罪の原因および現在の犯罪の実態を踏まえながら、刑法の体系に即して重要な問題を取り上げ、刑法と犯罪対策との関係を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	犯罪防止と法	先進諸国家の犯罪の情勢と我が国の犯罪の実態を検討したうえで、犯罪がもたらす害悪を示し、その防止の必要性を説き、さらに、犯罪原因論と犯罪防止システムとの関連を概観し、刑法もそのシステムの一環であると主張する。	大谷　實（同志社大学教授）	大谷　實（同志社大学教授）
2	刑法・刑罰の運用	現行刑法の背景を概観して、刑法が定めている刑罰の体系と種類を説明したうえで、刑の執行猶予や仮釈放を説明し、実際に刑罰が使われる場合は少数であることを、明らかにして刑法が犯罪防止に果たす役割と限界を論ずる。	同　上	同　上
3	刑法の任務	刑罰による犯罪抑止と人権侵害との関係を明らかにし、刑法では特に効率性と同時に正義性が問われるゆえんを論ずる。次に、正義性との関連を踏まえながら、犯罪成立要件である構成要件該当性、違法性、責任の内容を検討する。	同　上	同　上
4	罪刑法定主義と構成要件	犯罪防止と人権保障の調和を図ることが刑法の運用で最も重要であることを説き、その調和のためには、罪刑法定主義に立脚した構成要件論を展開する必要があるという認識から、近年有力となってきた実質的犯罪論を批判する。	同　上	同　上
5	個人法益に対する罪	個人の尊重を価値の根源とする社会では、個人の利益〔法益〕の保護が最も重要であるという観点に立って、生命、自由名誉・信用および財産などの個人の利益を侵害する犯罪を概観し、重要な論点を取り上げる。	同　上	同　上
6	社会法益に対する罪	社会の利益と個人の利益との関連を検討した後、社会の利益を侵害する犯罪を概観し、たとえば、コンピュータに関連する犯罪など現代的な犯罪について検討するとともに、財産的情報の保護についての立法問題にも言及する。	同　上	同　上
7	国家法益に対する罪	社会の利益と国家の利益の区別を明らかにし、国家の利益を侵害する犯罪を概観する。特に、収賄罪などの公務員の職務に関連する犯罪について、やや詳しく検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	犯罪の成立要件	個々の構成要件に共通する一般的な犯罪成立要件としての構成要件、違法性、責任の相互関係を説いてから、構成要件に該当すると原則として犯罪が成立し、犯罪成立阻却事由は、犯罪認定上例外的に検討すれば足りることを明らかにする。	大谷　實	大谷　實
9	実行行為と因果関係	構成要件該当性に関して問題が生ずる不作為犯、間接正犯及び未遂犯を中心に実行行為の態様を検討する。特に、近年有力となってきた結果発生の危険ある行為を実行行為と解する見解にメスを入れて、あるべき危険概念を提言する。	同　上	同　上
10	故意と過失	故意と過失を構成要件要素とする立場から、それぞれの内容と両者の限界線を明らかにする。次に、故意の裏の議論である事実の錯誤について検討し、最後に、過失の内容を明らかにする。	同　上	同　上
11	未遂犯と共犯	共犯の処罰根拠の問題を軸にして正犯と共犯の違いを明らかにし、共同正犯、教唆犯および幇助犯の成立要件を吟味した後、共犯の特殊問題として、①共犯と身分、②共犯の中止・離脱について検討する。	同　上	同　上
12	正当行為と安楽死・尊厳死	正当行為（法令行為、業務行為、その他の正当行為）を説明し、被害者の同意と自己決定権との関連について論じたうえで、安楽死及び尊厳死は自己決定権の尊重という観点から違法性を阻却すると主張する。自救行為、義務の衝突、許された危険にも触れる。	同　上	同　上
13	正当防衛と緊急避難	正当防衛と緊急避難の意義・要件を説明し、両者の相違点を明らかにした後、特に正当防衛について、防衛行為の相当性、正当防衛の意思を詳しく検討して、その結論が緊急避難にも波及することを明らかにする。	同　上	同　上
14	精神障害と犯罪	精神障害犯罪者の処遇の現状と保安処分について検討した後、心神喪失・耗弱は責任阻却・減軽事由であるとする立場から、責任能力を概観し、原因において自由な行為の問題点を整理する。	同　上	同　上
15	違法性の意識の可能性と期待可能性	違法性の意識の不在在及び期待可能性の不存在は責任阻却事由であるとの前提から、違法性の意識の可能性について故意および刑法38条三項との関連を論じ、最後に、期待可能性の判断の内容及び基準について検討する。	同　上	同　上

＝経　　済　　法＝（Ｒ）

〔主任講師：丹宗暁信（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、経済法を、競争市場の秩序維持を通して消費者主権を確立することをめざす法体系として構成することを企図する。そこでは独占禁止法を中核として経済法が体系化されるが、今日競争原理は一国独禁法の原則たるに止まらず、国際間の自由貿易原則としても拡大され、一国経済法から国際経済法へと展開されていくことを示したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ－経済法総論 (1)（経済法の定義と基本的枠組構造）	経済法の定義を示し、次に経済法の基本的枠組構造である市場・企業及び国家と経済（市場と企業）の関係について説明し、市場経済への国家介入の必要性と限界性を検討する。社会主義経済体制崩壊の原因を検討することにより、競争市場経済体制の有効性を明らかにする。	丹宗暁信（大東文化大学教授）	丹宗暁信（大東文化大学教授）
2	経済法総論 (2)（経済法の歴史）	第２次大戦終了前までの経済法制－明治以降の開発型法制や1940年以降の総力戦型経済法制－を検討し、次に第２次大戦後の独占禁止法を中核とする経済法制を検討し、さらに近年経済法制が貿易自由の拡大と共に国際化する過程にも論及していきたい。	同　上	伊従　寛（中央大学教授） 丹宗暁信
3	経済法総論 (3)【経済法（特に独占禁止法）の憲法上の地位と隣接法域分科との関連】	経済法（特に独占禁止法）の憲法上の位置づけと経済法の隣接諸法との関連を検討することにより、独占禁止法の特殊性とその多面的性格を示したい。３限目では、経済法の性格と経済法の憲法上の位置づけを明らかにするため、営業の自由論を素材として対談方式での講義をする。	同　上	同　上
4	Ⅱ－経済法の中核としての独占禁止法 (1)（独占禁止法の基本構造①）	最初にテキスト　3.の中の私法（民商法）と経済法、公法（行政法と刑事法）と経済法との関係を検討する。 次に、独占禁止法の目的について検討し、公正かつ自由な競争秩序維持が何故消費者の利益と連なって行くかを明らかにし、経済民主主義との関連を示したい。	同　上	丹宗暁信
5	経済法の中核としての独占禁止法 (2)（独占禁止法の基本構造②）	独占禁止法の基礎概念では、最初に独占禁止法の中心概念である競争概念を検討する。独占禁止法の「競争」の定義規定の限界を示し、有効競争理論を採用する必要のあることを示した上で、競争の実質的制限、公正競争阻害について検討し、独占禁止法の全体構造をみることにする。	同　上	同　上
6	経済法の中核としての独占禁止法 (3)（私的独占の規制）	私的独占の規制を検討し、ついで不当な取引制限の規制と事業者団体の規制とを一体として検討するわけであるが６限目では、最初に私的独占の構成要件について説明し、私的独占についての代表的ケースを例示しつつ解説したい。（公共の利益についてもここで解説する。）	同　上	同　上
7	経済法の中核としての独占禁止法 (4)（カルテルの規制・事業団体の規制）	カルテルないしカルテル類似行為を本時限で説明する。カルテルは、独占禁止法上最も問題の多い違法行為類型である。当然違法（illegal per-se）とされるカルテルから必ずしも違法とされない共同行為（カルテル）まで様々の態様があることを、ケースに即して解説して行きたい。	同　上	伊従　寛 丹宗暁信

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経済法の中核としての独占禁止法 (5) (市場構造の規制)	市場構造規制の法構造の特色を説明し、次に市場構造規制の中にも非競争的市場構造形成の予防規定と、出来上った非競争的市場構造を分割する規定とがあること。企業集団に対する独占禁止法の関係も、市場構造規制の一環としてその問題点を検討する。	丹宗暁信	丹宗暁信
9	経済法の中核としての独占禁止法 (6) (公正競争阻害規制法①)	最初に不公正な取引方法規制の法構造の特色を説明する。本規定違反行為は二つの類型に分けて説明する。一つは売手・買手間の取引をめぐる不公正な取引方法に重点をおいて違法性を判断する類型であり、他は競争事業者間の関係に重点をおいて違法性を見る類型である。本限では前者のケースを分析する。	同上	同上
10	経済法の中核としての独占禁止法 (7) (公正競争阻害規制法②)	本限では、競争事業者間の不公正な取引方法に対する規制について説明する。その後で、違法な不公正な取引行為の様々の組合せから成る流通系列・下請け系列等の分析を試みたい。	同上	同上
11	Ⅲ－政府規制と独占禁止法	許認可行政や行政指導も競争法原理に従うべきこと、それが今日、日本経済の発展にとって必要となっていることを説く。許認可行政と競争法では規制緩和の必要性、行政指導と独占禁止法では競争原理違反の行政指導の撤廃。そして経済省庁の再編の必要性にも言及したい。	同上	伊従寛 丹宗暁信
12	Ⅳ－独占禁止法の執行力	独占禁止法の実効性の担保要求がアメリカから出されて法改正等を行った。排除措置・課徴金・行政指導の撤廃・刑事罰の強化・私人による訴訟（民事訴訟）等独禁法の実効性の確保のためのさまざまの手段があるが、日本では競争原理についての理解の乏しさがそれらの有効な活用を阻んでいることを説く。	同上	同上
13	Ⅴ－経済法から国際経済法へ(1) －競争法から国際競争法－	企業のグローバル化と国家のボーダレス化が、自由貿易体制の拡大と広域市場の形成と共に進み、競争市場の国際化は独占禁止法の域外適用問題を多発し、反トラスト法国際協力法案の提案や自国産業保護のための通商政策に対してＧＡＴＴによる修正がなされていること等を説く。	同上	丹宗暁信
14	経済法から国際経済法へ (2) －競争法から国際競争法－	ウルグァイ・ラウンドでは、自由貿易原則が“モノ”から“サービス”にも拡大され、二国間ないし多国間貿易交渉から世界貿易機構（ＷＴＯ）へと進展した。ウルグァイ・ラウンド諸協定の内容や世界貿易機構への進展を展望し、国際経済法制のあり方を考えたい。	同上	同上
15	Ⅵ－貿易政策と競争法	本講義の結び。競争原理に基づく経済法の未成熟が、日米貿易摩擦の原因の一となっており、国内的には生産者優先・消費者無視の経済政策が長く行われてきた。経済民主主義の未成熟は政治的民主主義の遅れと官僚支配の強さを示していること。公正かつ自由な競争原理に基づく経済法の確立の程度が、健全な市民社会確立のバロメーターでもあることを説いて結びをしたい。	同上	伊従寛 丹宗暁信

＝労　　働　　法＝（Ｒ）

〔主任講師：山口浩一郎（上智大学教授）〕

全体のねらい

現在、多くの人は企業に雇用されて働き、そこでえる報酬によって生活している。この雇用関係に関する法が労働法である。講義では、採用から退職までの労働者個人と使用者の関係（個別的労働関係）と、労働者の団体である労働組合と使用者の関係（集団的労働関係）を中心に問題を考えてみる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	労働法の領域と法源	最初の３回は総論として、労働法全体に関係することを説明する。第１回は、労働法の分野全体を概観し、どういう法源があり、それらの相互関係がどうなっているかということを考えてみる。	山口浩一郎（上智大学教授）	山口浩一郎（上智大学教授）
2	就業規則	労働法の法源として重要な役割をはたしている、就業規則をとりあげる。就業規則の機能、その内容、作成、変更の手続、効力等を説明し、不利益変更にともなう問題を考えてみる。	同　上	同　上
3	労働協約	第２回に続いて、労働協約をとりあげる。労働協約の意味、内容、効力等について説明し、最後に余後効の問題を考えてみる。	同　上	同　上
4	採用・試用・派遣	第４回から１１回までは、個別的労働関係を扱う。この回は、そのうち雇用関係の入口にあたる採用と試用をとりあげ、内定取消などにもふれる。新しい就業形態である派遣についても、ここで説明する。	同　上	同　上
5	配転・出向・休職	人事異動に関する配転、出向、休職を扱う。わが国の長期雇用（いわゆる終身雇用）慣行と関連し、配転、出向は人事異動のなかで重要な役割をはたしてきた。この回は、これに休職をつけ加え、人事異動の問題をとりあげる。	同　上	同　上
6	賃金・賞与・退職金	賃金は労働者の生計の基礎となる重要なものである。これについてどのような法的保護があるのかを説明し、あわせて、わが国で重要な役割をはたしている賞与と退職金について、ここでとりあげる。	同　上	同　上
7	労働時間・休日・休暇	賃金とならぶ重要な労働条件として、労働時間がある。これについては労働基準法に詳しい規定がおかれているので、休日、休暇とあわせ、その内容を説明する。休暇の中心問題は年次有給休暇である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	女子労働者の保護と平等	労働時間を中心として、伝統的に女子、年少者には特別の保護が定められてきたが、現在性差別をなくするために、雇用平等を目的とする法規が発展してきている。この回は、その動向・内容を概観する。	山口浩一郎	山口浩一郎
9	災害補償と安全衛生	労働者が働く際、職場の安全衛生を確保し、災害事故が発生した場合、被災労働者やその遺族にどのような補償をするかも、労働法の重要な役割である。この回はこれらの問題をとりあげ、現行の制度のしくみを説明する。	同　上	同　上
10	服務規律と業務命令と制裁	企業がきちんと運営されていくためには規律とか秩序というものが必要であるが、そのためのしくみはどうなっているのか、というのがこの回の問題である。懲戒処分の根拠手続などについて説明する。	同　上	同　上
11	定年・解雇・退職	雇用関係の終了についての問題をここでとりあげる。解雇を中心として、わか国で広く普及している定年の問題もここでとりあげる。解雇のところでは整理解雇にもふれるが、中心問題は解雇制限である。	同　上	同　上
12	労働組合の結成と運営	第１２回から最終回までは、集団的労働関係を扱う。この回は、労働者の集団である労働組合の結成に与えられている保護と内部運営の原則について説明する。	同　上	同　上
13	団体交渉と労使協議	労働組合の最も重要な任務は、組合員のために労働条件その他について団体交渉をすることであるが、その法的なルールがどうなっているかをここでとりあげ、あわせて、わが国で広く普及している、労使協議について説明する。	同　上	同　上
14	争議行為の保護と規制	団体交渉がうまくいかない場合、労働組合には争議行為をおこなうことがみとめられている。この回は、これについての保護とその限界について説明する。限界を逸脱した場合の責任の問題も、この回のテーマである。	同　上	同　上
15	不当労働行為制度	労働組合の結成・加入、組織運営を保護するため、不当労働行為制度というものがおかれている。この回は、その内容、救済手続などにをとりあげ、労働委員会の役割についても考えてみる。	同　上	同　上

＝法　と　裁　判＝（ＴＶ）

〔主任講師：竹下守夫（駿河台大学教授）
主任講師：小暮得雄（平成国際大学教授）〕

全体のねらい

「現代社会」における法と裁判の基本的な仕組み（体系）および理念を平易に解説し、われわれの社会の中で、法と裁判がどのように相互に関わりあっているか、またそこにどのような問題が含まれているか、を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会あるところ法あり	人が集まって社会生活を営むところ、おのずから法が生まれる。ふるく種々の社会規範が渾然と未分化な状態のなかから、やがて“法”が分化し、独自の発展をとげた。上記の法格言を手がかりに、法とは何か、を考える。	小暮得雄（平成国際大学教授）	小暮得雄（平成国際大学教授）
2	法のネットワークと密度	法にはさまざまな種類、さまざまな存在形式があり、全体として壮大な体系を形成している。法のネットワークはしだいに膨張し、六法全書は年ごとに厚味を加えてゆく。〈法三章〉の故事から、どんな教訓を汲むべきだろうか。	同　上	同　上
3	法の究極にあるもの	かつて尾高朝雄博士は、“法の究極に在るもの”を追求し、法を動かすものが政治の力であること、政治には矩があること、を説いた。正義の女神像は、左右の手に秤と剣をもつ。法の理念や目的、矩について省察する。	同　上	同　上
4	法の適用と解釈	現代法の主役は成文法であるから、いわゆる三段論法にしたがって法を適用するには、成文法規範の内容を明らかにする作業＝解釈が必要となる。２～３の問題例ないし、裁判例を素材として、法解釈の難しさを浮きぼりにしたい。	同　上	同　上
5	司法権の範囲	裁判は、憲法によって裁判所に付託された司法権の作用として行われるが、では司法権の及ぶ範囲はどこまでであり、現代社会に生ずるさまざまな事件のうち、どこまでが裁判所で裁判をすることができるのかを考える。	竹下守夫（駿河台大学教授）	竹下守夫（駿河台大学教授）
6	司法権の優位（違憲審査制）	憲法は、国民の基本的人権を、国会や行政府からもまもるため、裁判所に法令の合憲・違憲を審査する権限を認めている。日本の違憲審査制は、どんな特色を有するのか、また現実にどのように機能しているのかを考える。	同　上	同　上
7	裁判を受ける権利	憲法は、裁判を受ける権利として、国民に自分の権利が侵害されたときには司法権の発動を求め、これを守ってくれるよう要求する権利、また裁判を経ずに刑罰を科されない権利を保障している。その現代的意味を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	裁判所の種類と役割	裁判所によって国民の権利を守り、法秩序を維持していくには、いろいろな種類の裁判所を設け、その役割分担を定めている。その具体的内容、各裁判所の問題点を探る。	竹下守夫	竹下守夫
9	国民の司法参加－陪審制と参審制－	司法の担い手は、法曹と呼ばれる専門集団だけではない。陪審制と参審制は、市民による司法参加の代表的な形態といえよう。諸外国の経験やわが国の歴史を省みながら、司法と国民の距離を埋める諸制度について考える。	小暮得雄	小暮得雄
10	現代社会と民事裁判	高度技術化・国際化・情報化の進む現代社会では、どのような民事紛争が起こり、民事裁判には何が求められているのか。迅速な裁判、国民がだれでも利用できる裁判を実現する条件は何かを考える。	竹下守夫	竹下守夫
11	現代社会と行政裁判	現代の行政は、原子力、福祉にみられるように、社会の危険管理、所得の再配分など国民生活に直接に関わる事項を処理している。行政裁判は、それらの行政が法の枠を逸脱した場合の是正手段として重要性を増している。	同上	同上
12	現代社会と刑事裁判	現代社会を特徴づける国際化や情報化、技術化の進展は、刑事裁判にもさまざまな問題を投影している。刑事裁判の役割、民事裁判との違い、などに論及したうえで、刑事裁判の当面する諸課題について理解を深めたい。	後藤昭（千葉大学教授）	後藤昭（千葉大学教授）
13	罪刑法定主義とデュープロセス	＜法律なければ犯罪なく、刑罰なし＞の原則は、刑事法の根幹といってよい。デュー・プロセス（適正手続）も、これと同根の法理である。刑罰はなぜ科せられるのか、刑事法が法体系の後衛と呼ばれるのはなぜだろうか？	小暮得雄	小暮得雄
14	検察官と弁護士	新しい時代の法律家の役割を、刑事関係では検察官、民事関係では弁護士に代表してもらって、いろいろな角度から検討し、将来を展望する。	竹下守夫	竹下守夫
15	裁判官による法の形成	裁判の本来的機能は紛争解決にあるが、近年、その法創造的機能が注目を集めている。その具体的現れと、原因を探りたい。	小暮得雄 竹下守夫	小暮得雄 竹下守夫

＝法からみる国際関係（'９８）＝（Ｒ）

（主任講師：筒井　若水（早稲田大学教授）
主任講師：道垣内正人（東京大学教授））

全体のねらい

国際的な法律問題について、国家、国際組織を主体とする国際（公）法的側面と個人・企業を主体とする国際私法的側面から、総合的に講義する。全体の法的枠組みを理解した上で、具体的事例をみてゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家・個人からみた国際的法律問題	国際社会の法規律は、伝統的に国家間の規律であった。こんにちでも、個人・企業の活動は、国際社会の法規律ではなく、国家のそれによって規制されている。ここでは、まず、通常、国際（公）法といわれる伝統的な国家間の法規律を取り上げ、それがどのように展開してきたかを概観する。	筒井若水（早稲田大学教授）	筒井若水（早稲田大学教授）
2	国内法と国際法の関係	国際法は慣習と条約にわかれるが、前者については、国内法と同様に扱う国が多い。条約は政府が締結することが多いが、当然に、国内法となるかどうかは、議会の法律締結権との関係で問題となる。国家が国際法に拘束されるのは当然であるが、個人は、結局、国際法とどの様な関係に立つのか。日本の場合を中心にみる。	同上	同上
3	個人・企業からみた国際的法律問題	個人・企業の国際的活動に対する一国の法規制はどこまでできるのか（域外適用の問題）と、個人・企業の間の国際的法律問題はどのように処理されるのかとに分け、全体像を概観する。	道垣内正人（東京大学教授）	道垣内正人（東京大学教授）
4	国際私法の考え方	個人・企業間の国際的法律問題については、各国の私法が統一されていないことを前提に、どこの国の法律を適用するかを決定するという方法が用いられている。この国際私法の考え方、仕組みを講義する。	同上	同上
5	条約の締結と履行	国家間の関係は、新たに、条約を結ぶことによって開かれる。これまでに、どうような関係が築かれてきたか。条約は、常に、対等の立場から合意されるのか。条約の約束が履行されなかった場合、どのようなことになるのか。具体例を交えて説明する。	筒井若水	筒井若水
6	国家領域への排他的主権（日本の領土と係争点）	領土のない国家は存在しないが、領土の範囲には変動がある。その範囲をめぐっては、時に、深刻な争いとなる。日本の領土の変遷と、現在の係争地点につき、その法的論点と、解決の方法について、考える。	同上	同上
7	国際法の規制領域の拡張変質（宇宙と海洋）	人類の活動分野とともに、国際法の規制領域も拡大した。上空、宇宙は新規の領域であるが、伝統的な海洋も、利用法の多様化から、規制の内容が激変した。これらの規制には、一方で、利用に伴う危険に対しても、有効に対処していることが求められる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人権の国際的保障	法の最終目的は、人類の福祉にある。国際法による人権の保障も、いわば、この最終目的にせまるものである。第2次大戦後、多くの人権条約が結ばれてきたが、実施のための国際的な場は、どの程度発達しているのか、また、国家は、政策全体に、人権保障をどのように位置づけているか。実情をふまえて考察する。	筒井若水	筒井若水
9	国際連合（国際機構）と国際社会の発達	国際社会は、国家間の社会とされてきたが、19世紀後半から、国際機構（組織）を抜きにしては、考察できないものとなった。平和の問題にも、国際連盟、国際連合という世界的機構がかかわってきた。国際連合にこんにち何が期待され、加盟国はどのような義務を負うのか。日本と国際連合のかかわりを中心に、考察する。	同上	同上
10	法と正義による国際紛争の解決	国際社会も紛争は避けられず、その解決を、力ではなく、法と正義によるためには、裁判が最適である。国際裁判は、かねてより仲裁裁判として行われ、今日では、国際司法裁判所も存在する。係争国の合意による等、司法としての限界の一方で、国際裁判が、国際法の発展に貢献してきた足跡をたどる。	同上	同上
11	経済の調和ある発展と国際法	第二次大戦後の自由主義復活の試みと、途上国発展のための「新国際経済秩序」、さらには、GATTから世界貿易機構への改組により、経済の調和ある発展が試みられてきたあとをたどる。更に、欧州共同体の代表する地域統合の動きなど、経済活動と国際法とのかかわりをみる。	同上	同上
12	国際取引をめぐる法律問題	貿易取引、国際金融取引、外国投資などをめぐる法律問題を扱う。契約、債権譲渡、担保物権などの準拠法の決定が問題となる。また、どの国の裁判所に訴えるか、一国の判決は他の国でも効力を有するのかなどの国際民事手続法上の問題も扱う。	道垣内正人（東京大学教授）	道垣内正人（東京大学教授）
13	国際不法行為をめぐる法律問題	国際線の航空機の墜落事故、外国製品の欠陥による事故、外国のメディアによる名誉毀損などをめぐる準拠法決定、国際民事手続法上の問題を扱う。たとえば、外国法上認められる懲罰的損害賠償を日本でどのように扱うかなどが問題となる。	同上	同上
14	国際結婚・離婚をめぐる法律問題	国際結婚の成立（婚姻適齢や届出などの問題）、夫婦財産制、離婚をめぐる準拠法決定、国際民事手続法上の問題を扱う。たとえば、重国籍や無国籍の場合、一方の常居所が知れない場合、アメリカのような州によって法律が異なる国に国籍を有する場合などが問題となる。	同上	同上
15	国際親子関係・相続をめぐる法律問題	親子関係の成立（嫡出・非嫡出の問題や養子縁組など）、親子間の法律関係（親権者の決定や親権の内容など）をめぐる準拠法決定、国際民事手続法上の問題を扱う。国境を越えて連れ去られた子の取り戻しや相続の問題にも触れる。	同上	同上

＝現　代　法　の　諸　相＝（Ｒ）

〔主任講師：水野忠恒（一　橋　大　学　教　授）〕

全体のねらい

「法学出門」ともいうべき講義である。最近の社会問題となっている先端的法領域で、ようやく学問的体系化がなされつつあるもの、未だそこまで行っていないもの、合計５つを選び、新進気鋭の学者が分担して行う、「オムニバス講義」である。全体を通ずる特色は、公法・私法といった従来の学問体系に囚われない領域である点にある。今回は、租税法（水野：一橋大学）、社会保障法（岩村正彦：東京大学）、知的財産法（玉井克也：東京大学）、環境法（大塚直：学習院大学）、消費者法（大村敦志：東京大学）という内容である。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	租税法① －租税の基本原則－	税制改革論議の基礎におかれるべき租税の原則、特に公平負担の原則をとりあげ、個人の租税負担の基準となる所得、消費、財産のそれぞれの特質について論じたのち、所得の概念について考える。	水野忠恒（一橋大学教授）	水野忠恒（一橋大学教授）
2	租税法② －所得課税－	所得概念の論議ののち、個人所得税の理論について、法人の所得税である法人税の課税の根拠ならびに法人税のあり方について検討する。いわゆる配当二重課税の調整という問題が法人税の中心的課題である。	同　上	同　上
3	租税法③ －消費課税－	所得税に対する批判として注目を集めるようになった消費支出税の論議を検討したのち、間接税としてのわが国の消費税とそのモデルである付加価値税について説明する。	同　上	同　上
4	社会保障法① －高齢化社会と社会保障法－	高齢化社会の到来によって、医療保障、日常生活の支援などを行う社会保障法はその重要性をますます増しつつあるが、他方で大きな変容を迫られている。私達の生活を支える社会保障法が高齢化社会において果たす機能とその変貌を考えたい。	岩村正彦（東京大学教授）	岩村正彦（東京大学教授）
5	社会保障法② －医療保障法と年金法－	社会保障法の中核をなす社会保険法を取り上げる。国民の医療へのアクセスを保障する健康保険法、国民健康保険法等の医療保障法と、老後の所得保障を行う国民年金法、厚生年金保険法等の年金法を概観し、これらの法分野の抱える問題点と今後の課題を考察する。	同　上	同　上
6	社会保障法③ －社会福祉法－	高齢者や障害者などに介護、必要な器具の供与、施設への入所といった便宜を提供する社会福祉法を概観する。とりわけ老人福祉の分野に着目して、現在押し進められている施設の充実、福祉労働力の増強、老人医療との連携などの政策を中心に考察を加える。	同　上	同　上
7	知的財産法① 「情報」と法律	知的財産法、知的所有権法などといわれる分野は、経済的価値のある情報を法的な側面から考察するものと言える。現代社会における情報の価値という観点から、知的財産法の全体について、大きな枠組みを概観する。	玉井克哉（東京大学教授）	玉井克哉（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	知的財産法② 創作の保護	知的財産法が保護する情報のうち、主要なものは、創作的価値のある情報である。そうした観点から著作権法や特許法などについて解説する。現代社会において発生した新たな問題についても、言及したい。	玉井克哉	玉井克哉
9	知的財産法③ 営業標識の保護	知的財産法には、経済的価値のある情報を保護する法制度のほか、ブランドやマークについて保護する法制度も含まれている。そうした制度としての商標法と不正競争防止法について解説し、現代的な問題にも触れる。	同上	同上
10	環境法①	環境法に関して、その生成の歴史、特色、基本原則、体系、環境規制の手段等、総論というべき分野について解説する。その中で、環境計画、環境影響評価、汚染者負担原則にも触れたい。	大塚直 (学習院大学教授)	大塚直 (学習院大学教授)
11	環境法②	環境規制・整備・保全に関する法律に関し、重要と思われるものを摘出して説明する。具体的には、大気汚染・水質汚濁、廃棄物処理、野生鳥獣の保護等を中心として述べる。	同上	同上
12	環境法③	環境に関する民事訴訟及び行政訴訟の問題点を概観すると共に、公害に関する費用負担についても説明する。なお、地球環境の問題についても簡単に言及したい。	同上	同上
13	消費者法① －消費者法とは何か	消費者と法との関わりについて導入的な説明を行う。消費者問題とはいかなるものか。消費者法が必要とされるのはなぜか。実際には、消費者法はどのように形成されてきて、今日、どのような問題をカバーしているのか。	大村敦志 (東京大学助教授)	大村敦志 (東京大学助教授)
14	消費者法② －行政の側から見た消費者法	消費者法を行政の側から見る。行政は消費者問題に対応するために、どのような法的手段を用いているのか。安全性や取引条件に関する規制行政、独占の排除などの競争規制、教育・情報提供などのサービス行政について説明する。	同上	同上
15	消費者法③ －消費者の側から見た消費者法	消費者法を消費者の側から見る。肉体的・経済的な被害を受けた消費者が救済を受けるためにはどうすればよいか。また、行政に働きかけることによってあるいは自主的な活動によって、積極的に消費生活のあり方を変えていくことはできないか。	同上	同上

＝法の歴史と思想＝（R）

（主任講師：石部雅亮（大阪国際大学教授）
主任講師：笹倉秀夫（早稲田大学教授））

全体のねらい

本講義では、ヨーロッパの法と法学の発展を考察し、その伝統と現在の姿を明らかにすることを課題とする。それは日本法の源流の一つを遡り、それとの比較において日本法の特色を一層鮮明に理解するための作業である。そのさい、法を規定する政治と経済の構造、法の担い手である法律家、裁判や立法の制度と思想など法文化的要因にも目を向けたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法文化とその特色	法文化およびそれを規定する要因を取り上げ、法文化を考察する意味と歴史的・比較法的方法について検討する。	石部雅亮（大阪国際大学教授）	石部雅亮（大阪国際大学教授）
2	古代の訴訟と法	紛争とその解決方法の諸類型を問題として取り上げ、その中で訴訟制度のもつ特色を明らかにする。古代の訴訟制度とそれに対応する法の構造、訴訟に関与する人々の活動の仕方を検討し、古代のギリシアやローマの法の歴史の一端に触れる。	同上	同上
3	中世の法と法学	中世法の観念をめぐる最近の議論を紹介したのち、12世紀における古代法文化の復活とともに、大学の法学と専門的法律家身分が成立する過程を考察する。ヨーロッパ大陸とイギリスの法律家の在り方を比較して特徴づける。	同上	同上
4	法の継受	いわゆるローマ法の継受を、ヨーロッパの法文化の構造変化としてとらえ、法律家の進出、裁判所制度の変化、法観念の転換に焦点を合わせて考察する。ヨーロッパがローマ法と葛藤・相克を繰り返しつつ、これを受容・摂取する過程を取り扱う。	同上	同上
5	主権国家の形成－立法および行政	近世国家の台頭とともに、主権の観念が成立し、立法権がその中核となる。ここでは立法と法律の観念を問題とし、古い法の観念との対立に注目する。同様に官僚制の発展とポリツァイ観念の成立を扱う。	同上	同上
6	法典編纂	絶対主義国家または初期市民的国家における法典の編纂の歴史を考察し、法典編纂の背景や原因、思想的基盤としての啓蒙期自然法の台頭、実定法学の変化に目を向ける。	同上	同上
7	自然法の歴史	古代ギリシャ・ローマから連綿と続く自然法の議論を紹介し、それを踏まえて啓蒙期自然法の主要な特徴とその歴史的位置を明らかにする。	笹倉秀夫（早稲田大学教授）	笹倉秀夫（早稲田大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	近代市民法学の成立と展開	近代市民社会における専門的法学（近代市民法学）の形成を、歴史法学、法実証主義の問題として考察し、さらにその集大成としてのドイツ民法典の成立過程を問題にする。	石部雅亮	石部雅亮
9	近代市民法学の思想的基礎	前章で扱われた近代市民法学の思想基盤を一層掘り下げ、自由と平等の法観念、学問主義的志向と実践的志向、さらに歴史意識について分析し、それらの相互的関係を探る。	笹倉秀夫	笹倉秀夫
10	近代法とその変容	科学技術の発達、高度資本主義経済の発展、政治的イデオロギーの対立・抗争に直面して、近代法の枠組みでは補足しがたい問題が発生することに注目し、企業と労働、土地問題などを例にして、その法理論的把握の努力を追う。	石部雅亮	石部雅亮
11	現代法学の諸相	現代法の理論として、自由法論、利益法学、リアリズム法学などの法学方法論を考察しながら、現代の法解釈学の置かれている状況を示し、最近実践哲学の復興にともない、トピク論など法学におけるその再評価の動きを紹介する。	同上	同上
12	法と道徳	近代法学における法と道徳の分離の過程を明らかにするとともに、現代において、その両者を再び結合する思想傾向があらわれてきたことを指摘し、この二つの方向のそれぞれの問題点を明らかにし、法と道徳にかんする現在の理論状況を紹介する。	笹倉秀夫	笹倉秀夫
13	現代の人権	現代社会では、古典的な個人的自由権と並んで、社会権や「新しい人権」の登場が注目される。自由権と社会権の関係およびとくにプライバシー、自己決定権、環境権など、「新しい人権」の本質に重点を置いて最近の人権論を紹介し、問題点を検討する。	同上	同上
14	法的思想の新しい動向	現代社会の変化に伴って生じた新しい根本的な問題について法思想はどのように取り組んでいるか。ポスト・モダニズムの法思想など最近の議論を紹介してコメントをつける。	同上	同上
15	現代法文化の置かれた状況	以上を総括して、ヨーロッパの法と法学との比較において、日本の法文化にはどのような特徴があるか、それは現代の法的問題を認識し解決するのにどのような点で寄与しうるか、を検討する。	石部雅亮	石部雅亮 笹倉秀夫

＝日　本　政　治　史＝（R）

〔主任講師：坂野潤治（千　葉　大　学　教　授）〕

全体のねらい

1871年の廃藩置県から1940年の大政翼賛会成立の直前までの、約70年の戦前日本政治史を、保守・中道・革新の政治体制構想の三つ巴の対立の歴史として描く。戦前日本の政治史を単なる経済的利害の対立としてではなく、自由主義、民主主義、社会主義、国家主義、ファシズムなどの思想対立の歴史として見直したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	立国過程Ⅰ－「強兵」「富国」「民主化」－（1871～1877）	1871年の廃藩置県で軍事力と収税値を掌握した明治政府は、今後の方針をめぐって三つのグループに分かれた。西郷隆盛らは民族主義を強調して、朝鮮、台湾をめぐって清国との対決を主張し、大久保利道は上からの工業化を、木戸孝允は上からの民主化を重視した。	坂野潤治（千葉大学教授）	坂野潤治（千葉大学教授）
2	立国過程Ⅱ－「開発」か「民主化」か－（1878～1881）	1877年の西南戦争で民族主義派を鎮圧した明治政府は、上からの工業化を重視するものと、上からの民主化を優先するものに分裂し、その間隙をぬって下からの民主化運動が全国的に盛んになった。この三つ巴の対立が1881年の政変で終了するまでを検討。	同　上	同　上
3	立国過程Ⅲ－憲法発布と大同団結－（1887～1890）	1881年の政変で、保守的な立憲君主制論が勝利すると、下からの民主化派の左派は直接行動に出て鎮圧された。しかし、1887年頃から大同団結運動と呼ばれる下からの民主化運動が再び盛り上がり、1890年の第1回総選挙まで藩閥政治を脅かした。	同　上	同　上
4	立国過程Ⅳ－自由党の転向－（1890～1894）	1890年に最初の議会が開かれてから1893年2月の天皇の詔勅が出るまで、藩閥政府と衆議院の多数を占める民党との正面衝突が続いた。しかし、1893年から94年にかけて、最大党派の自由党内で現実主義派が力を増大し、第2次伊藤内閣と妥協した。	同　上	同　上
5	明治立憲制の展開　Ⅰ－立憲政友会の成立－（1895～1900）	伊藤内閣と自由党との妥協は、日清戦争以後さらに進み、伊藤博文を総裁とする立憲政友会に自由党も合流した。この過程で自由党は、与党として国家予算を支持基盤に散布する利益政治を確立した。積極政策と呼ばれたこの路線は政友会の一枚看板となっていく。	同　上	同　上
6	明治立憲制の展開　Ⅱ－明治憲法の三つの解釈－（1906～1912）	天皇主権を語った明治憲法にも、詳しく検討すれば解釈改憲の余地はあった。穂積八束は文面通りの天皇親政論を、美濃部達吉は天皇機関説と呼ばれた国家主権説を、北一輝は天皇機関説を再解釈して、「天皇・国民共同主権説」を唱えた。	同　上	同　上
7	大正デモクラシーⅠ－大正政変－（1912～1914）	立憲政友会の結成に対抗して、軍部・枢密院・貴族院らの権威主義勢力は元老山県有朋の下に結集した（山県閥）。この二元的政治対立は、両勢力が交互に政権に就くことによって調和の道を見出した（桂園体制）。この体制に対して大正初期に国民運動が起こった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	大正デモクラシーⅡ －吉野作造と原敬－ (1915～1921)	日本で最初の本格的政党内閣として有名な原敬内閣（1918～21）は、二大政党制にも男子普通選挙制にも反対する保守的な政党内閣であった。このような保守的な政党内閣を一貫して批判したのが、民本主義者吉野作造であった。	坂野潤治	坂野潤治
9	大正デモクラシーⅢ －政党政治の成立－ (1925～1930)	1925年の男子普選法の成立以後、1932年の5.15事件までは、戦前日本唯一の政党内閣時代として知られている。この時代の前半期を、保守政党政友会と自由主義政党憲政会二民政党の対立の時代として描き直すことが、ここでの課題である。	同上	同上
10	軍部独裁への道Ⅰ －政党内閣時代の終焉－ (1931～1932)	1931・32年の両年は、政党政治の危機の時代として知られている。大恐慌による経済危機と満州事変による対外危機と軍人のテロによる政治危機の三つの危機に対して、政友会と民政党とがどのように対応したのかを両党の相違を重視して分析する。	同上	同上
11	軍部独裁への道Ⅱ －立憲独裁、協力内閣、憲政常道－ (1932～1936)	5.15事件から2.26事件までの約4年間、斎藤実と岡田啓介の挙国一致内閣が続いた。この過渡期に、民政党や社会大衆党は職能代表制を加味した立憲独裁を、民政党と政友会の少数派は政・民連携による協力内閣を、政友会主流は政友会単独内閣を構想した。	同上	同上
12	軍部独裁への道Ⅲ －無産政党の進出と軍部の反撃－ (1936年)	1936年2月20日の総選挙で、保守的な政友会が敗北し、自由主義的な民政党と社会民主主義的な社会大衆党が勝利した。国民は政治の自由化民主化を求めたのである。しかるにそのわずか6日後に起こった青年将校のクーデターで、歴史はまた一歩右傾化した。	同上	同上
13	軍部独裁への道Ⅳ －政党の反撃と日中戦争の勃発－ (1937年)	2.26事件で反乱軍を鎮圧した陸軍主流派は、同時に政治に対する発言力を一層増加した。広田弘毅、林銑十郎両内閣の下での陸軍の議会無視に対して国民は1937年4月の総選挙で政友・民政・社大の三党に投票して議会制度支持の態度を表明した。	同上	同上
14	東亜新秩序と政界再編 －日中戦争下の内政と外交－ (1937～1940)	総選挙の結果を軍部と議会の勢力均衡と判断した近衛文麿は、政権担当を決意した。しかし、内閣成立の1ヵ月後ちに起こった日中戦争により、内閣は軍部の意向を抑える力を失った。二転、三転する日中戦争の性格変化の結果、近衛内閣は退陣した。	同上	同上
15	総括 －イギリス・モデルの登場、展開、崩壊－ (1871～1940)	1879年に福沢諭吉が『民情一新』を著わしてイギリス型の二大政党制の導入を提唱して以来、1931年に民政党の第2次若槻内閣が退陣するまでの約50年間、イギリス自由主義は日本政治の到達目標であった。この事実の日本政治史上での意味を検討する。	同上	同上

＝西欧都市の政治史＝（Ｒ）

〔主任講師：田口　晃（北海道大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパにおける国民国家の揺らぎは、ＥＵの方向だけでなく、地方分権の方向にも進んでいる。そこで、本講義では、より小さい地方的政治単位である都市に焦点をあて政治史をふりかえってみたい。各時代の代表的都市を次々に取り上げる一方、一つの都市ウィーンについては全時代を通して光をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	講義のねらい 分析視角・講義の方法	政治の中でも(1)支配構造、(2)共同体のあり方、(3)公共性の性格に焦点をあわせ、古代、中世、近世、現代という五つの時代区分を用いて都市の政治史を見る。 又、都市研究の意味についてもここで考える。	田口　晃（北海道大学教授）	田口　晃（北海道大学教授）
2	アテーナイの民主政	古典古代ギリシャの諸都市の中からアテーナイをとりあげ、まず、その歴史をかいつまんで論じる。次いでアテーナイ民主政の構造を、ポリス共同体の特性、公共性の特異なあり方に光をあてることで、浮き彫りにする。	同　上	同　上
3	共和政ローマ	前半で都市ローマの成長を概観した上で、主として共和政時代のローマについて、アテーナイとの比較を念頭におきつつ、その政治構造を把える。後半ではローマ帝国内の周辺都市のあり方を論じ、ウインドボナ（ウィーン）にも言及する。	同　上	同　上
4	中世都市	中世都市の成立、発展を諸学説と地域差に着目しながら展望し、次いで共同体としての中世都市の権力構造を、対外関係と内部構造に分けて検討する。そして、古典古代とは異なった性格の公共性の出現、公共性の第一次構造転換を論じる。	同　上	同　上
5	中世都市としてのチューリッヒとウィーン	中世都市の具体例としてチューリッヒを中心に、自治都市の展開を見る。さらに、一時期自治都市となりながら、すぐに自治権を失ったウィーンを取り上げ、あわせて中世都市の自治とは何かを考える。	同　上	同　上
6	近世都市の展開－イタリアの場合－	近世は自治都市が最後の輝きをみせた時代である。この章では近世都市の一つのグループをなすイタリア諸都市の自治運営と公共政策を概観し、具体例としてフィレンツェの政治構造とその変遷をみる。	同　上	同　上
7	近世都市の展開－アムステルダム－	ここでは、北方の近世都市の代表として、アムステルダムを取り上げ、オランダ共和国の独立と関連させながら、その特異な統治構造と独自の都市計画及び、公共政策を論じ、都市の可能性を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	バロック都市	近代国家の登場とともに、都市は統一体、一つの全体であることをやめ、上位に立つ国家に組みこまれる。そして公共性を独占する君主の御座所のみがバロック都市として光り輝くことになる。ヴェルサイユを中心にそうした事情を見よう。	田口　晃	田口　晃
9	バロック・ロココ都市としてのウィーン	トルコ軍に備えた城壁の強化、バロック都市の建設、啓蒙専制君主の登場と続く中で、ウィーンは拡大し、整備される一方、ハプスブルク帝国の首都とは言え、帝国行政の画一的な下部単位の一つにすぎなくなる。	同　上	同　上
10	19世紀の都市改造 －パリ－	産業革命で都市が工業の中心になると、人口集中と都市の生活条件の劣悪化が進み、民衆反乱も発生する。そこで、多くの都市で改造が試みられる。中でも大掛かりだったのはパリとウィーンである。この章では第二帝政時代に行われたパリの大改造を見る。	同　上	同　上
11	19世紀の都市改造 －ウィーン－	19世紀中葉ウィーン市政は「小さい政府」論の立場をとる自由主義勢力の手中にあって不活発だった。対照的に帝国首都としては、皇帝の発意によって市壁が撤去され、リング大通りが建設される。そこには様々な様式の公共建築物と豪華な民間住宅が建ち並ぶ。	同　上	同　上
12	自由主義都市社会主義田園都市 －ロンドンの変遷－	世紀後半になると、都市の生活条件の改善が喫緊の課題となる。上・下水道、街区照明、交通等の整備を自治体が率先して行ったものがいわゆる「都市社会主義」である。又、田園都市論も起こる。この章では発祥の地イギリスのロンドンを扱う。	同　上	同　上
13	ウィーンの都市社会主義	世紀末に大ウィーンが作られ、そこに抬頭した小市民層中心の「キリスト教社会党」がK．ルエーガーを市長におし上げる。彼はガス・電力事業の市営化と交通網の整備、長大な上水道の建設、あるいは福祉の萌芽的施策等に、借款に頼りながら、成果をあげた。	同　上	同　上
14	戦間期ヨーロッパ政治と都市 －ベルリンの場合－	両大戦間期のヨーロッパは激しい政治対立を経験した。その中で都市がどのような位置を占めたか、ヴァイマール共和国の首都ベルリンについて検討してみよう。又、オーストリア共和国の政治対立の中での、いわゆる「赤いウィーン」の成立過程も見ておきたい。	同　上	同　上
15	「赤いウィーン」の実験	社会民主党市政が行った、ウィーンにおける実験的な政策を、財政、教育、福祉、住宅等について概観し、国内対立に基因するその崩壊も見た上で、市政における公共政策の歴史的意味を探り、現代都市の諸問題を考える一助としたい。	同　上	同　上

＝先進諸国の政治＝（R）

〔主任講師：下斗米伸夫（法政大学教授）〕
〔主任講師：高橋　直樹（東京大学教授）〕

全体のねらい

先進諸国の政治を相互に比較することを通して、主要先進国の政治に関する基礎的な理解を深めるとともに、政治とは何かを考えるための手掛かりを与える。各国の政治を個別に取り上げるほか、北アメリカ、西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシアの諸地域が、地域として政治的にいかなる特性を持つかについても考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アメリカ合衆国(1)	比較政治論の意義や方法について、簡単にふれた後、民主主義国として最も古い歴史を持つアメリカの政治制度を概観する。権力分立の原則、連邦議会、大統領、行政部、裁判所などにふれる。	阿部　斉（放送大学教授）	阿部　斉（放送大学教授）
2	アメリカ合衆国(2)	アメリカの政治過程を概観した後アメリカの外交政策の基本的な傾向にふれる。選挙、政党、有権者、利益集団、孤立主義、膨張主義、イデオロギー優位の外交といった項目をとりあげたい。	同　上	同　上
3	カナダ	かなだの政治を概観した後、アメリカの政治とカナダの政治を比較検討し、両国の政治の差異を生み出した要因を明らかにする。憲法、連邦制、政党制といった問題を中心に比較を試みたい。	同　上	同　上
4	西ヨーロッパ政治の全体像	まず、西欧デモクラシーにおける、政治社会の歴史的な特徴と現在の特質を整理する。つぎに、その政治社会の中で発達した政治制度や政治行動について解説する。	高橋直樹（東京大学教授）	高橋直樹（東京大学教授）
5	フランスの政治	フランス政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同　上	同　上
6	ドイツの政治	ドイツ政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同　上	同　上
7	イギリスの政治	イギリス政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	南欧の政治	スペイン、イタリア、ポルトガルにおける政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	高橋直樹	高橋直樹
9	中欧の政治	ベルギー、オランダ、スイスにおける政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同上	同上
10	北欧の政治	スウェーデン、ノルウェー、デンマークにおける政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同上	同上
11	西ヨーロッパの政治の今後	西欧デモクラシーに共通する、国内政治の課題を整理し、つぎに、ＥＣの統合を中心とする、国際政治と国内政治の関係を解説する。	同上	同上
12	旧ソ連の政治	旧ソ連の政治体制と変動を、ロシア革命後の段階、特にレーニン、スターリン、以後の共産党と国家の関係に即し論じる。ペレストロイカにも触れる。	下斗米伸夫（法政大学教授）	下斗米伸夫（法政大学教授）
13	ペレストロイカからロシア連邦へ	ペレストロイカ以後のソ連邦の崩壊と、その後の市場移行・民主化・国民国家への移行について、問題点にふれる。 ロシア以外のウクライナ、中央アジア、バルト諸国についても、その相互関係を含め論じる。	同上	同上
14	独立国家共同体の政治	社会主義体制の崩壊に伴いなぜ民族問題が噴出しているのかを、ソ連、チェコスロバキア、ユーゴスラビアなどを例にしながら論じる。	同上	同上
15	東欧の政治	第二次大戦後の東欧諸国を、ソ連型システムの導入と矛盾、改革と自立、そしてペレストロイカに伴う崩壊のプロセスに即して論じる。	同上	同上

＝第三世界の政治＝（R）

〔主任講師：高橋和夫(放送大学助教授)〕

全体のねらい
中東、アフリカ、ラテン・アメリカ、インド亜大陸の政治の理解のための知的枠組みと基礎的な情報の提供を目指す。同時に比較政治と地域研究の立場から第三世界の政治の理論的な分析を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	第三世界への招待	第三世界研究に長年かかわってきた三人の講師が、研究上の難しさや喜びなどを語りながら、それぞれの専門地域を紹介する。エスニック音楽なども流れて、気分はもう第三世界。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学（助教授） 勝俣誠（明治学院大学教授） 孤崎知己（専修大学助教授）
2	中東という世界	中東の全体像を紹介する。またイラン出身のモハマッド・ナギザデ明治学院大学教授をゲストに招いて、西アジアの人々が日本をどう見ているかを尋ねる。	高橋和夫	高橋和夫
3	クルド人とは	クルド民族の紹介とイランのクルド問題を解説する。クルド問題を考える上でも、イランの将来を展望する上でも必要不可欠な知識である。	同上	同上
4	トルコのクルド	トルコのクルド人の反政府ゲリラ組織ＰＫＫの基地を取材したジャーナリストの勝又郁子さんをゲストに迎え、トルコのクルド問題を紹介する。	同上	同上
5	イラクのクルド	イラクの将来を考える際のカギとなるイラク北部のクルド問題を紹介し、その将来を展望する。	同上	同上
6	アフリカの政治（1）	アフリカと言う地域を解説する。	勝俣誠	勝俣誠
7	アフリカの政治（2）	帝国主義の時代のアフリカの政治を論ずる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	アフリカの政治（3）	独立以後のアフリカの政治を論ずる。	勝俣　誠	勝俣　誠
9	インド亜大陸の政治　（1）	インドと言う地域を紹介する。	佐藤　宏（(特)アジア経済研究所主任調査研究員）	佐藤　宏（(特)アジア経済研究所主任調査研究員）
10	インド亜大陸の政治　（2）	帝国主義の時代のインド亜大陸の政治を論ずる。	同　上	同　上
11	インド亜大陸の政治　（3）	独立以降のインド亜大陸の政治を論ずる。	同　上	同　上
12	ラテン・アメリカの政治（1）	ラテン・アメリカと言う地域を紹介する。	孤崎知己	孤崎知己
13	ラテン・アメリカの政治（2）	戦前までのラテン・アメリカの政治を論ずる。	同　上	同　上
14	ラテン・アメリカの政治（3）	戦後のラテン・アメリカの政治を論ずる。	同　上	同　上
15	比較と分析	各地域を比較し、地域研究、第三世界研究、そして比較政治のもつ問題点を考える。	高橋和夫	勝俣　誠 高橋和夫 孤崎知己

＝現　代　の　行　政＝（Ｒ）

〔主任講師：森田　朗（東京大学教授）〕

全体のねらい

行政国家といわれる現代国家では、市民生活の大部分に行政活動が関わっているが、その全体像を理解することは容易ではない。この講義では、行政活動の枠組である基本的制度について論じるとともに、行政活動の社会的機能、およびその担い手たる行政官僚制の構造と特質についての理解を深めることをめざす。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「行政」とは何か？	行政国家といわれる現代国家において、行政とはどのようなものか。自動車に関わる行政を例として、現代行政には、枠組となる「制度」、社会へ向けての「活動」、そして担い手たる「組織」の３つの側面があることを述べる。	森田　朗（東京大学教授）	森田　朗（東京大学教授）
2	行政国家の成立	歴史的に社会経済が発展することによって、行政活動も拡大し質的に多様化してきた。それとともに、三権間において行政府が相対的に大きな権力を保有するようになり、行政国家が誕生した経緯を論じる。	同　上	同　上
3	行政学の発展	行政国家の誕生とともに、効率的な行政活動を行いつつ、民主的な統制を確保する方法を模索して、アメリカで行政学が発達した。アメリカ行政学で展開された政治行政分断論から政治行政融合論への変化について述べる。	同　上	同　上
4	現代の政府体系	現代行政の前提をなす国家、中央－地方関係、議会・裁判所・行政府の三権関係、行政機構といった政府体系の構造とそれが有する問題点について、歴史的な発展過程および外国との比較の観点から解説する。	同　上	同　上
5	行政活動と政策	行政の「活動」の側面について、多くの課題を抱える現代の社会システムの制御という観点から、その基本的な仕組と限界を明らかにし、行政活動のシナリオともいうべき政策の概念について論じる。	同　上	同　上
6	政策過程	政策課題の設定から、政策原案の作成、法律等の形式による政策の決定、そして政策の実施、その結果についての評価という５つの段階からなる政策過程について解説し、それが循環過程であることを明らかにする。	同　上	同　上
7	執行活動　Ｉ－基準の作成	本来の行政活動というべき政策の執行活動に焦点を当て、規制行政およびサービス行政の具体例を素材にして、執行活動枠組としての制度、必要とされる行政資源、手段等を考慮して活動のための具体的な基準がいかに作成されていくかについて考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	執行活動 Ⅱ －基準の適用	前章の具体的事例を用い、社会との接点である執行活動の最前線におけるいわゆるストリートレベルの行政官の行動の分析を通して、執行活動の制約条件、行政官の行動様式等について考察する。	森田　朗	森田　朗
9	法治行政と行政裁量	現代の行政活動が法律の根拠を要し法律に基づいて行われなければならないことはいうまでないが、現実には、全活動を法律によって拘束することはできない。この章では、現代の行政における法律の機能、行政裁量とその統制のありり方、そして行政指導について述べる。	同　上	同　上
10	官僚制（Ⅰ） －構造的特質	行政活動は、官僚制と呼ばれる巨大で複雑な組織によって担われている。この章では、主としてM．ウェーバーの官僚制論の紹介を通して、近代官僚制の構造的特質を明らかにし、現代の巨大化した官僚制を理解し、それがもつ限界についても考察する。	同　上	同　上
11	官僚制（Ⅱ） －作動メカニズム	現代組織論の枠組を使って、官僚制において各構成員の行動がいかにして組織としての行動に統合されるのか、という組織活動の動態を、情報の伝達および決定のあり方に焦点を当てて考察する。	同　上	同　上
12	官僚制（Ⅲ） －官僚の行動	官僚制において働く人々は、さまざまな動機で行動する。官僚の心理とそれが引き起こすいくつかの官僚制の病理現象について解説し、それを予防し克服するための諸方策について論じる。	同　上	同　上
13	日本の行政システムⅠ －政官関係と官僚制の特質	今日国際的にも注目されている戦後日本の行政システムについて、その制度的特質、とくに国会と内閣の関係、安定した省庁編成、政策形成過程等について、マクロ的な視点から考察する。	同　上	同　上
14	日本の行政システムⅡ －官僚制の行動様式	前章に続き、戦後日本の行政システムの特質を、官僚の行動様式、業界と行政機関との関係、用いられる行政手法等のミクロ的な視点から考察し、現在行政システムが直面している課題について論じる。	同　上	同　上
15	行政責任と行政の民主的統制	議会や裁判所等の制度的統制機構の有効性が失われた状況においていかなる統制の方法が考えられるのか、行政責任論に言及しつつ検討し、情報公開、行政手続保護、市民参加の諸制度の有効性について論じる。	同　上	同　上

＝現代アメリカの政治＝（ＴＶ）

（主任講師：阿部　斉（放送大学教授））
（主任講師：久保文明（慶應義塾大学教授））

全体のねらい

アメリカの政治は、グローバルな視点に立っても、あるいは、日本との関係で考えても重要な意味を持つ。アメリカの政治について正確な理解を持つことは、政治学の重要な課題の一つである。ただアメリカの政治には、日本や西欧の政治と比較しても、ユニークな面が多い。その理解のためには、体系的な学習が必要とされよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	合衆国憲法	合衆国憲法の制定過程とその基本原理を明らかにする。アメリカが世界で初めて成文憲法を制定したことの意義を説明し、次いで、合衆国憲法の基本原理である権力分立の意味に言及する。さらに憲法修正の手続きと主要な修正条項にもふれたい。	阿部　斉（放送大学教授）	阿部　斉（放送大学教授）
2	連邦制と地方自治	アメリカの政治における連邦制の意義を理解するために、アメリカの州と日本の都道府県とを対比する。連邦法と州法の違いにもふれたい。また、地方自治体の政府が、日本の市町村と異なり、多様性を持つことを明らかにしながら、地方自治体の特質を検討する。	同　上	同　上
3	大統領	ヨーロッパの大統領制と比較しながら、アメリカの大統領制の特徴を明らかにする。大統領の権限、副大統領の地位にふれた後、大統領が統括する行政部を概観する。具体的には、各省庁の構成、大統領府の機能、独立行政機関の役割など言及したい。	同　上	同　上
4	連邦議会	連邦議会の二院制が両院対等というユニークな特徴をもつことを説明した後、委員会を中心とした法案の審議過程をとりあげる。さらに、議員が地域代表的な性格を持つため、国民代表的な立場に立つ大統領と議会との間には、不断の対抗関係があることにふれる。	久保文明（慶應義塾大学教授）	久保文明（慶應義塾大学教授）
5	最高裁判所	最高裁判所の違憲立法審査権が持つ政治的意義を明らかにした後、政治的に重要な意味を持った判決、たとえば、ドレッド・スコット判決ニューティール立法に対する違憲判決、ブラウン判決などをとりあげる。最近の最高裁の保守化にも言及したい。	阿部　斉	阿部　斉
6	選挙と選挙制度	まず、大統領選挙と連邦議員選挙の制度を説明し、次いでアメリカの選挙の特徴ともいえる有権者の登録制度と予備選挙をとりあげる。さらに、最近棄権率が増大していることの意味を探りながら、政治全体のなかで選挙が持つ意味が変わりつつあることにふれる。	久保文明	久保文明
7	政党と政党政治	アメリカの政党制の特徴とされる二党制とローカリズムについて説明した後、今日の二党制を構成する民主・共和両党を概観する。次に、両党の支持基盤を分析し、支持基盤再編成としての「決定的選挙」にふれる。最近の脱政党化の傾向に言及したい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	利益集団とその活動	アメリカの政治における利益集団の役割を明らかにした後、利益集団の代理人として活動するロビイストをとりあげる。また、利益集団の政治活動として大きな意味を持つＰＡＣにもふれたい。さらに、最近重要性を増している公益集団にも言及する予定である。	久保文明	久保文明
9	政策決定過程	アメリカの政策決定過程において、大統領、行政部、連邦議会、政党、利益集団などが果たす役割を明らかにする。さらに、最近その影響力が注目されているシンク・タンク、政策争点ごとに形成されるイッシュー・ネットワークにも言及したい。	同上	同上
10	人種とエスニシティ	アメリカの特徴の一つは、人種的民族的に多元的なことである。黒人の政治的発言権の増大は、アメリカの政治に大きな影響を与えてきたが、最近では新しいタイプの黒人政治家の台頭が注目される。また、スペイン系アメリカ人の急増も無視しえぬ意味を持つ。	阿部　齊	阿部　齊
11	女性	アメリカでも性別格差は歴然と存在しているが、1960年代以降、積極的優遇措置などにより、雇用面では格差はかなり是正された。しかし、政治における男女格差は依然として厳しい。格差是正の方策と女性政治家の可能性などを考える。	同上	同上
12	福祉政策と貧困	アメリカの福祉国家の歴史的形成の過程をたどり、今日の社会保障制度の概要を明らかにする。さらに、福祉政策との関連で、アメリカの貧困の原因、現状、対策などを検討したい。	久保文明	久保文明
13	外交	まず、アメリカ外交の特徴とされる孤立主義、膨張主義、イデオロギー第一主義などを説明し、次にアメリカ外交の文脈のなかで、冷戦の意味を究明する。さらに、冷戦終焉後の国際政治への対応を湾岸戦争や「新世界秩序」構想などを手掛かりとして検討する。	阿部　齊	阿部　齊
14	政治文化	アメリカの政治に内在する政治的原理を検討する。協和主義、民主主義、自由主義、立憲主義、革新主義、平等主義といった諸原理をとりあげ、ヨーロッパと比較しながら、アメリカ的特質を明らかにする。最近の新自由主義と保守主義の関連にも言及する。	同上	同上
15	現状と課題	ニューディールの時代にアメリカの政治は大きく転換し、「大きな政府」のもとで社会改革を進める政治が新しい伝統になった。しかし、80年代以降、潮流は変わり、保守主義が支配的になっている。こうした現状を踏まえて、90年代を展望する。	久保文明	久保文明

＝日本政治思想史＝（R）

〔主任講師：平石直昭(東京大学教授)〕

全体のねらい

主に徳川時代（西暦17世紀～19世紀半ば頃）の約二百五十年間の政治思想（広義）を扱う。①各時期の歴史的背景と関連させて主な観念の変化を跡づける。②代表的な思想家の内在的な理解と今日的な意味の導出に努める。③一般的な概説よりは、新しい見方や論点の提出に重点をおき、学生が自分の頭で考える参考にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	キリシタン禁教の思想	はじめに講義全体の構成について概観したのち、今日の主題に入る。全国統一をめざす武士政権がどんな理由からキリシタン禁教と弾圧に至ったかをみる。秀吉段階と家康・秀忠段階の違いの分析に重点をおき、とくに崇伝執筆の追放文を重視する。	平石直昭（東京大学教授）	平石直昭（東京大学教授）
2	天道思想の諸相	近世初期における幕府権力の自己正統化の施策（家康の国家的守護神化）をみたのち、当時の支配的な言説だった「天道」思想が様々な観念の折衷としてあったこと。またそれが担っていた思想的な課題（キリシタン神学との対抗など）を分析する。	同上	同上
3	新儒学の受容と構想	理学や心学など、新儒学の体系的な導入や構想の努力を、松永尺五、中江藤樹に即してみる。とくに一般庶民層まで包摂した普遍的な教説として儒教が強調された理由、尺五における二つの「気命」の区別、藤樹の「なりはひ」論などが分析される。	同上	同上
4	儒学思想の展開	近世前期における儒教をとりまく客観状況の変化（寺請制の一般化など）をみたのち、儒教古典や宋明学研究の進展と自分の生きる日本の現実への理解の深化の中で、儒教思想が再定式化されてゆく諸相をみる。蕃山の朝幕関係論、素行の士道論などが扱われる。	同上	同上
5	仁斎学の基本構成	前期儒学の最高の達成として伊藤仁斎の儒学についてみる。陰陽と仁義の区別、性と道徳の区別など程朱学的な天人相関論の否定とともに「天道福善禍淫」の再定式化がもった意味、またその古義学の方法や論孟中心主義について分析する。	同上	同上
6	仁斎の鬼神論／徂徠の古文辞学	仁斎の鬼神・卜筮論の分析を通して、彼が三代聖王と孔子を区別し、政治と道徳の二領域を峻別していたことをみる。ついで仁斎学を継承しつつ独自の儒学を構築した近世中期の儒者荻生徂徠にうつり、今回はその古文辞学という方法論を時代背景との関連で分析する。	同上	同上
7	徂徠学の基本構成	近世思想史の転回点に立つ徂徠学を、その主要な側面に即して分析する。仁斎以上に徹底した天人相関論の打破、天の不可知化、聖人信仰、道の聖人制作説と窮理観の関連、聖人が建てた仮構としての鬼神観、「物」としての六経と「道」の区別、「格物致知」論などを扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	石門心学論	近世中期における庶民層の社会的自覚の高まりを示すものとして石田梅岩の思想を扱う。一世代前の西川如見らの町人エトス論との比較、「市井の臣」論における藤樹や徂徠との比較、商業利益の正当化にみられる特徴、道徳・職業を共に天命で正当化する思想など。	平石直昭	平石直昭
9	経世思想の展開	太宰春台・海保青陵に即して、徂徠の経世思想が近世中期～後期にかけてどう変容していったかをみる。商品経済に対する三者の対応の仕方の違い、春台に現われる利己的人間像の青陵での展開、商品売買を引照基準とした天理観の提出、世襲制批判の論理などをみる。	同上	同上
10	徂徠学の影響の諸相	徂徠学が近世後期の思想界に与えた影響の諸相をみる。古文辞学の方法が蘭学や国学など儒学以外の分野に与えた影響、その「天地自然」の不可知観が、三浦梅園の自然哲学や本居宣長の国学、吉益東洞の古医方を促した面、また民俗学的関心の高まりを導いたことなど。	同上	同上
11	本居宣長の国学	契沖以来の歌学と荷田春満の皇国学が賀茂真淵で合流し宣長学の形成を準備する過程を概観したあと、初期宣長に即して、儒教に代る全体的思想像の基礎を彼がどう作っていったかをみる。主に契沖、真淵、徂徠からの影響や示唆がどう組合わされているかを分析する。	同上	同上
12	西洋像の変遷	近世中期における特徴的な西洋像を新井白石、荻生徂徠、伊藤東涯、西川如見、西川正休についてみる。ついでそれらの西洋像が、近世後期に蘭学を介した理解の深化により修正変容される様子を前野良沢、杉田玄白、本多利明らに即してみる。	同上	同上
13	「鎖国論」とその影響	19世紀初頭に邦訳されたケンペルの「鎖国論」がいかに日本の鎖国策を正当化しているかを検討する。ついで幕末期に本書が日欧双方にとって議論の共通ベースになった経緯を考察し、「鎖国論」が日本の開国を促した皮肉な事情を分析する。	同上	同上
14	西欧の衝撃と日本の開国	日本・中国・朝鮮という東アジア三国のうち日本がいち早く近代化に着手した歴史的条件として、儒教の社会的存在形態の違い、支配エリート層のエトスの違い、旧体制の構造的相違、世界秩序像の相違などに即して、比較の見地から検討する。	同上	同上
15	幕末政治思想論	幕末の儒教的思想家をとりあげて、儒教的価値の多様性と多義性が西洋文明に対する評価の相違をうんだ事情を明らかにする。その上で後期水戸学の「国体」論、佐久間象山の自然科学観とその国民教育の必要論、横井小楠の0議輿論思想を近代日本と関連させてみる。	同上	同上

＝ 近代国家と近代革命の政治思想 ＝ （ R ）

（主任講師：松本礼二（早稲田大学教授）
主任講師：川出良枝（東京都立大学助教授））

全体のねらい

市民革命と近代国家を導き、またそれについて考察した政治思想の諸相を、18、19世紀の歴史過程に即して論ずる。思想と時代の現実との関わりを重視するが、後代に引き継がれる思想史上の問題も考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	政治思想における近代	政治思想における近代の意味を考えることを通じて、講義の対象と視角を定め、全体の見通しを与える。	松本礼二（早稲田大学教授）	松本礼二（早稲田大学教授）
2	社会契約説(1) ～ホッブスとロック	近代国家の構成原理をなす社会契約説の源流、ホッブスとロックの政治理論をイギリス革命の現実との関わりの中で考察する。	同上	同上
3	貴族の自由とイギリス人の自由 ～モンテスキュー	自然権理論と並んで革命に根拠を与えた歴史思想の展開と権力分立論とをモンテスキューを中心に考察する。	川出良枝（東京都立大学助教授）	川出良枝（東京都立大学助教授）
4	啓蒙の政治思想 ～フィロゾーフとアンシャン・レジーム	啓蒙の政治思想の意味を、個々の思想家というより、共通する思考様式に注目し、フィロゾーフの立場に関する知識社会学的考察を加えて考える。	松本礼二	松本礼二
5	社会契約説(2) ～ルソー	ホッブスやロックの契約論を批判的に摂取すると同時に「文明社会」の根底的批判を企てたルソーの政治思想を考察する。あわせて17･8世紀における社会契約論の意味を総括し、その後の批判、20世紀末におけるその再生についても考える。	同上	同上
6	革命のイデオロギー ～ペインとシエース	アメリカ革命とフランス革命とを直接に導いたパンフレット『コモン・センス』と『第三身分とはなにか』を中心に、革命のイデオロギーを考察し、あわせてこの二つの革命の共通性と相違点を考える。	同上	同上
7	アメリカ建国の思想 ～ジェファソンと『ザ・フェデラリスト』	アメリカ革命と建国の思想を独立宣言起草者としてのジェファソン、そしてマディソン、ハミルトン、ジェイの書いた『ザ・フェデラリスト』を中心に考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	反革命の政治思想 ～バークとド・メストル	フランス革命を徹底的に批判して近代保守主義の原点をなしたバーク、これを受けてさらに急進的な反革命の理論を展開したド・メストルの思想を検討し、近代革命の意味を裏側から検証する。	松本礼二	松本礼二
9	ヘーゲル哲学と近代	近代革命とその帰結としての立憲国家に歴史哲学の見地から評価を加え、近代精神を総合したヘーゲル哲学の政治思想における意義を検討する。	同上	同上
10	自由主義の政治思想 ～ｺﾝｽﾀﾝ,ｷｿﾞｰ,J.S.ﾐﾙ	近代革命の原理を継承する反面、フランス革命の現実への批判から権力と自由との緊張関係を19世紀の状況の中であらためて問題にした自由主義の思想を英仏の代表的思想家に即して検討する。	同上	同上
11	近代民主制と自由 ～トクヴィル	産業化と大衆化の文脈におけるデモクラシーの問題点をアメリカをモデルに考察したトクヴィルの政治思想を、そのフランス革命論ともあわせて検討する。	同上	同上
12	社会主義と無政府主義	1848年を分水嶺とするヨーロッパの革命運動の中で生まれ、市民社会と近代国家に疑念を提出した思想として社会主義と無政府主義を考察する。	川出良枝	川出良枝
13	女性解放の思想	自由、平等という近代革命の原理にもかかわらず、ブルジョア社会の現実において男女の性差が社会的に固定化される傾向を批判し、今日にまで問題を投げかけているフェミニズムの問題を歴史的に考察する。	松本礼二	松本礼二
14	バジョットと『イギリスの国家構造』	選挙法改革による大衆民主主義状況の到来を早熟的に予想する中で、イギリスの政治的支配構造の分析を通じて20世紀の政治学を先取りしたバジョットの著作を検討する。	同上	同上
15	20世紀の政治的経験と近代の反省	大衆化と組織化が頂点に達した20世紀の歴史的経験、全体主義や二つの世界戦争を経て、近代の語原理がいかなる反省を迫られてきたかを展望し、全体のしめくくりとする。	川出良枝	川出良枝

＝政治分析の手法＝（ＴＶ）

〔主任講師：大嶽秀夫（京都大学教授）〕

全体のねらい

政治を分析する手法について、日本の具体的な政治過程を例にとって（ここでは１９８０年代前期の「行政改革」に焦点をおく）学習する。その過程で、日本政治を理解するための様々なモデルを検討し、それらを使いながら具体的な政治過程の分析を行い、政治を理論的に考察する手法を学ぶ。また、欧米などとの比較分析についても考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	鈴木・中曽根内閣と行財政改革	鈴木・中曽根内閣時代（１９８１～８６）における政治の展開を、まず、二人の首相に焦点を当て、関係者へのインタビューや当時のニュースなどを利用してドキュメンタリー風に紹介する。そして、当時最大の政治課題であった「行財政改革」について、イシュー登場の背景、政策目標、成果を概観する。また、大平内閣の「田園都市構想」からの転換の意味についても考える。	大嶽秀夫（京都大学教授）	大嶽秀夫（京都大学教授）
2	自由主義的改革の世界史的潮流－サッチャー・レーガン革命－	英国、米国の政治を専門にしている学者（五十嵐武士東京大学教授、阪野智一神戸大学教授）をスタジオに招いて、当時のニュースを交えつつ、日本との比較を念頭におきながら、１９８０年代における世界史的な自由主義的潮流の意味を考える。	同　上	同　上
3	新自由主義の思想的基礎	ハイエク、フリードマン、ブキャナンなど、自由主義改革を支えた思想家の主張とその歴史的背景を検討する。また、サッチャー政権やレーガン政権登場の背景となったリバテリアニズムと伝統的右翼主義との「同盟」という現象の意味について、猪木武徳大阪大学教授との対談を通じて考える。	同　上	同　上
4	左右対立の中の行政改革　(1)	日本の行政改革（とくに中曽根行革）は、左翼の側からは、軍拡路線の一環と解釈され、厳しいイデオロギー的対決を再燃させた。そこでここでは、日本政治についての「原イメージ」を構成してきた、戦後の左右の対立とは何であったかを、エリート・モデル、「支配層」の概念などを手がかりに検討する。さらに対立の背景を「文化政治」モデルによって、対立軸の固定化という現象をRokkanやEspin-Anderson のヨーロッパ政治についての研究に依拠しながら、考察する。	同　上	同　上
5	左右対立の中の行政改革　(2)	国鉄の分割・民営化を素材に左右の古典的対立が、８０年代において実際の政治過程の中でどのように展開したかを検討する。それを通じて、戦後政治における左翼急進主義の意味を考える。併せて、右翼ナショナリズムの意味にも検討を加える。	同　上	同　上
6	日本における自由主義的改革(1)	戦後における経済的自由主義と社会民主主義の対立の歴史を、財界、政党、官庁などの政策エリートの思想の検討を通じて考察する。とくに、従来見過ごされがちであった財界における自由主義思想の系譜と、大衆レベルの「小さい政府論」の存在に焦点を当てる。	同　上	同　上
7	日本における自由主義的改革(2)	１９７０年代後期において、オイル・ショック以後の経済危機克服の過程で、経済的自由主義がどのように復権してきたかを検討する（美濃部都政批判、「英国病」キャンペーン等々）。そして、自由主義イデオローグの主張と政策プログラムについて、加藤寛、香山健一など、行政改革の中心になった人々へのインタビューを通じて考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	小さい政府実現としての行政改革	財政再建の政治過程を、大蔵省の立場、族議員の役割、田中派の活躍、利権の再配分といった様々な局面から考察を加える。この考察の中で、テクノクラート・モデル、多元主義モデル、(労働なき)コーポラティズムといった、これまで日本政治理解のために作られたモデルの再検討を行う。	大嶽秀夫	大嶽秀夫
9	「鉄の三角形」への挑戦としての行政改革	1984年の健康保険法改正素材に、「アイディアの政治」、「ゴミ缶モデル」といった新しい政治学のモデルがどのように日本の政治過程に適応できるかを考える。そして、従来無視されてきた消費者の利益がどのように代表されたか、その過程で官僚的合理性がどのように復権されたかを併せて考える。また、論争テーマとなっている金融の自由化の意味を検討する。	同上	同上
10	日本型コーポラティズムの展開としての行政改革	1970年代において公共部門と民間部門における労働組合相互の対立の深刻化が何故に進行し、民間労組がどのようにして行革支持に向かったかを考察する。そして、(西)ドイツやスウェーデンなどとの比較を通じて、世界的傾向たる労働のdecomposition という現象が日本にも当てはまるかどうかを検討する。	同上	同上
11	福祉再編としての行政改革	行政改革を日本型福祉社会論、地域社会の見直しという観点からとらえる見方を検討する。そして、その後の福祉政策の展開を、在宅福祉の推進やゴールド・プラン策定という争点に焦点を当てて、この解釈の是非を考える。	同上	同上
12	行政改革の中の社会的自由主義と国際貢献	ここでは、まず、世論調査の分析などを通じて、70年代から80年代にかけての「生活保守主義」の強化と自民党への柔らかい支持の増大の意味を考える。そして、とくに臨時教育審議会での議論に焦点を当てて、日本の国際化という争点の登場と展開に追ってみたい。さらに、防衛費のGNP1%枠撤廃の動きなど外交、防衛政策の転換について、行政改革路線との関連を検討する。	同上	同上
13	利権の再編	行政改革は保守党なりの政治腐敗への対応であったが、実際には、リクルート疑惑という中曽根政権の中枢を直撃する疑獄事件を引き起こした。自由主義的改革の中でのこの事件の意味と、行革を支えた田中支配、竹下支配と呼ばれた権力の二重構造の意味を検討することを通じて、利権政治とは何であったのかを考察する。また、80年代前期の行政改革から80年代後期、90年代前期の政治改革への転換を展望する。併せて、利権政治を分析するモデルとしてのクライアンテリズム、パーソル・ネットワークなどの政治学的概念枠組みに検討を加える。	同上	同上
14	日本の政治文化	行政改革を支えた日本の政治文化について、日本における集団主義と個人主義、日本社会における競争原理などの問題を考える。とくに、行政改革の一環としての土地利用政策の失敗に焦点を当てる。また、大衆レベルの「利権政治」ともいうべき、政治家による世話焼き活動が、この日本の政治文化に深く根ざしていることを指摘する。	同上	同上
15	世界史的潮流としての自由主義の復興・再考	日本における自由主義的改革を、フランス、韓国、ロシアなどの例をも比較の対象として、それぞれの専門家をゲストに加えて、再度、世界史的潮流の中で考える。とくに、「ケインズ型福祉国家の危機」という問題を「第二の産業分水嶺」、デュアリズム戦略などのモデルを使って検討する。	同上	同上

＝現代の国際政治＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

冷戦後の国際情勢の見取り図を提供することが本講座の眼目である。目指すものは、国際政治のミニアチュール（細密画）ではなく、全体の構図を示すスケッチである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	テレビと国際政治	湾岸戦争で劇的な形で示されたように、テレビは国際政治で大きな役割を果たしている。テレビを巧みに利用した最初の政治家と言われるケネディについてボストンのケネディ博物館で語り、またアトランタのＣＮＮセンターでアメリカ主導のテレビ業界の再編成の問題点を指摘する。テレビの国勢政治への衝撃を考える。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授）
2	ヨーロッパの冷戦	第二次世界大戦後の世界は米ソ両超大国間の激しい対立、つまり冷戦によって特徴付けられていた。マーシャル計画が発表されたハーバード大学の構内で、また「封じ込め」戦略を提唱したジョージ・ケナンの研究するプリンストン高等研究所を背景に冷戦の起源を語り、その展開を振り返る。	同　上	同　上
3	板門店からキューバへ	冷戦は朝鮮戦争によってアジアに拡大した。この朝鮮戦争から冷戦史のクライマックスであるキューバ危機までの国際政治を米ソ関係の進展を軸に跡づける。	同　上	同　上
4	デタント	キューバ危機以降の米ソ関係の展開を追う。その主要なテーマはデタントである。またソ連のアフガニスタン介入以降の超大国間の関係である。	同　上	同　上
5	ペレストロイカと冷戦の終結	ゴルバチョフのペレストロイカが冷戦構造の枠組みを突き崩した。冷戦を終結させたこのダイナミズムを分析する。	同　上	同　上
6	中国という名の巨龍	巨大な龍が天に登るような発展を続ける中国は、東アジアの国際関係にどのようなインパクトを与えているのだろうか。中国の発展に、ロシア、日本、東南アジアはいかに対応しているのか。超大国アメリカの中国政策は？また中国の発展を脅かす国内的要因な何か。中国の発展の国際政治への衝撃を考える。	同　上	同　上
7	アジア・アフリカの独立	第二次世界大戦後の国際政治の大きなうねりの一つはアジア・アフリカ諸国の独立であった。この壮大なドラマを振り返り、その意味を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	インドシナ戦争とＡＳＥＡＮ	戦後の東南アジアの現代史を振り返り、その将来を展望する。その中でも経済的に最も成功したシンガポールでのインタビューや博物館のロケ映像を織り混ぜながら日本と東南アジアとの関係についても言及する。	高橋和夫	高橋和夫
9	ドル支配の崩壊と混乱	第二次世界大戦後の国際通貨体制の変遷を描写しつつ、その変化の原動力となった金融の国際化の意味を考える。戦後の通貨体制の骨格を決めたブレトン・ウッズ会議、また変化の節目となったスミソニアン博物館のプラザ・ホテルでの会議なども、現場を訪れて跡づける。	同上	同上
10	貿易体制の変遷	第二次世界大戦後の国際貿易体制の枠組みの成立と変遷を概観する。	同上	同上
11	南北問題	地球上には貧しい国々と豊かな国々が並存している。この貧富の格差とそれにともなう様々な問題は南北問題として知られる。この南北問題を巡る議論の展開を紹介する。	同上	同上
12	エネルギーと国際政治	国家は石油のために戦争をし、戦争のために石油を必要とする。また平時においては経済成長のために石油を必要とする。振り返ってみると20世紀は石油を求めての争いの世紀でもあった。この石油と言う名の戦略物資を中心にエネルギーを巡る国際政治を論じる。	同上	同上
13	環境保護の政治力学	環境の大切さについては議論の余地がない。議論があるのは、環境保全のためのコストを誰が、どういうメカニズムで負担するかという点である。この環境保護の政治力学を探る。	同上	同上
14	国連／国際政治を映す鏡	国連の機能を麻痺させていた冷戦の終結により、国連への期待が高まっている。その国連の歴史をニューヨークの国連本部で振り返る。また長年ＰＫＯの実施に関わった人物とのインタビューなどを交えて、国連の直面する問題にも触れる。	同上	同上
15	冷戦後の世界	冷戦後という「戦後」の風景を鳥瞰し、その将来を展望する。またアナウンサーとの座談という形式でいくつかの質問に答える。	同上	同上

＝現代日本の政治と政策＝（ＴＶ）

（主任講師：新藤宗幸（立教大学教授）
主任講師：山口二郎（北海道大学教授））

全体のねらい

1980年代の先進国政治の有力な潮流であった新保守主義が後退するとともに、米ソ冷戦構造も崩壊した。こうした条件を受けて日本の政治は、どのような状況にあるのか、また日本政治の課題とは何か。これらを平易に解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本政治の座標(1) －ポスト55年体制の政治－	第2臨調行革以降の政治と経済の関係を振り返った上で、政府介入政策あるいは混合経済体制の課題について論じる。	新藤宗幸（立教大学教授）	新藤宗幸（立教大学教授）
2	日本政治の座標(2) －ポスト冷戦の時代－	ポスト冷戦という国際政治の大変動が日本にもたらしているインパクトは何か、について論じる。	同上	同上
3	国会と議会政	上記2つの変化の中で、国権の最高機関である国会はいかなる状況にあるか、現代の議会政とはどうあるべきか、について論じる。	山口二郎（北海道大学教授）	山口二郎（北海道大学教授）
4	政党間政治の実態	1955年体制の終焉が語られているが、政党はいかなる機能をになっており、またどうあるべきかについて論じる。	同上	同上
5	議院内閣制の機能と限界	議院内閣制の見直しの気運が生じているが、政治の容量と議院内閣制の機能とはどのような関係にあるかについて論じる。	同上	同上
6	ポスト新保守主義と官僚制	ポスト新保守主義あるいはポスト福祉国家という状況の下で、官僚制の役割とは何かについて論じる。	同上	同上
7	官僚制の政策実施手段	6章の課題に引き続き官僚制が用いる政策実施手段の実態について論じる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ポスト冷戦と安全保障政策	巨大な経済的バーゲニングパワーをもつ日本は、ポスト冷戦の下でどのような安全保障政策を展開しているか、その課題とは何かについて論じる。	新藤宗幸	新藤宗幸
9	国際機関と日本の役割	国連をはじめとして日本は多数の国際機関に加盟しているが、そこでいかなる役割を果しているか、また何を求められているか、について論じる。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
10	経済ルールと摩擦	自由貿易体制が国際社会のルールとはいえ、経済上の紛争は生じざるをえない。日本はこの紛争にどのように対応しているか、その課題とは何か、について論じる。	同　上	同　上
11	ODA・NGOと国際協力	日本は巨額のODAを支出している。またNGO活動も徐々に活発化しつつある。国際協力の方法としてのODA・NGOへの支援の実態について論じる。	同　上	同　上
12	公共投資と社会資本	“生活大国”を求めて公共投資が展開されているが、それは社会資本の整備にいかなる貢献をしているか、これについて論じる。	新藤宗幸	新藤宗幸
13	高齢化社会の社会保障	高齢型社会が到来しつつある、これに対応できる社会保障とはどのようなものであるか、国民の負担はどうあるべきか、について論じる。	阿部　齊	阿部　齊
14	社会的公正と再規制	生活の公正・平等のために政府規制はどのような役割を担うべきか、政府規制の実態はどうか、について論じる。	新藤宗幸	新藤宗幸
15	新しい政治のルールと思想	国際協調、国内における公正の確保などのために、政治のルールは何を求められているか、また民主主義、進歩主義、保守主義などの思想は、いまいかなる位相にあるか、について論じる。	阿部　斉	阿部　斉

＝現代日本の地方自治＝（ＴＶ）

〔主任講師：大森　彌（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の地方自治を、地球における暮らしの視点に立って、その意義、歴史、基本制度、国との関係、具体的な仕組み、議会・首長・職員による運用、住民参加、改革問題などについて検討し、住民による住民のための政治行政の営みの姿と課題を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常の暮らしと自治の営み	私たちは、住所を定めて暮らすかぎり、必ずどこかの市区町村の住民である。住民であることによって自治体からさまざまなサービスを受け、また税を払うなどの負担をしなければならない。住民としての暮らしが、どのような形で身近な自治体の活動と結びついているかを概観する。	大森　彌（東京大学教授）	大森　彌（東京大学教授）
2	日本国憲法と地方自治の保障	私たちの地方自治は、日本国憲法によって保障されている。憲法第８章の規定の内容、特に、知事・市区町村長（首長）と地方議会の議員を住民が直接公選していること（二元的な代表制）の意義と「地方自治の本旨」の大切さを、国政の仕組みと比較しながら、「地方政府」論の観点から解説する。	同　上	同　上
3	歴史の中の地方自治	日本の地方自治は、明治期における制度創設、その後の展開、太平洋戦争期、戦後改革、高度成長期、そして低成長期へと、変遷をとげてきた。それぞれの時期における特色を概観する。現在日本の地方自治に歴史の光を当てることによって、民主主義と地方自治の機能を明らかにする。	同　上	同　上
4	比較の中の地方自治	国民社会の政府体系を連邦制と単一主権制に大別し、わが国の地方自治の営みが大きく中央地方関係によって規定されていること、また都道府県と市町村という二層制をとっていることの意味を、諸外国の地方自治制度との比較に中で明らかにし、地方自治制度を捉える集権－分権／分有－分離という理論的な枠組みを解説する。	同　上	同　上
5	二元的な代表制と二層制	地方でも政治のプロを選挙選抜で選ぶことにしている意味を解説し、二元的な代表制の政府形態と二層制の自治体構成の特色を述べ、「地方政府」の根幹を明らかにする。二元的代表制に関しては特に首長と議会との関係を「与野党関係」と捉える見方を、また二層制に関しては両者の関係のあり方を問題にする。	同　上	同　上
6	行財政の仕組みと運用	日本の自治体は、どのような仕事（事務）を、どのような権限と財源を使って行っているのかを概観し、自治行政の可能性と限界を明らかにする。あわせて自治行政の差が各自治体の意欲と力量の差でもあることを、地域に根ざし施策の企画立案と限られた行政資源（権限・財源・職員）を最大限有効な活用の重要性の観点から解説する。	同　上	同　上
7	住民参加のシステム	わが国の地方自治の特色を住民参加の観点から明らかにする。住民は、どのような根拠で、また、どのような制度をとおして自治体の政治行政の営みに参加できるのかを解説する。地方選挙への参加、議員・議会との接触、行政への働きかけ、審議会、直接請求・住民訴訟など、さまざまな住民参加の仕組みを情報の公開との関係で取り上げる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地域の政治と議会	4年任期で選挙によって選ばれる地方議会の議員の役割と行動を、地域における「政治」観と議会運営の実態とに関係づけながら解説する。政党・会派への所属、国会議員との関係（系列）、対住民の「世話やき」活動、議会での審議、執行機関との関係、定数、歳費など、地方議員と議会の活動の姿と問題点を浮き彫りにする。	大森　彌	大森　彌
9	首長と自治行政の展開	4年任期で公選・独任の首長の権限と役割について概説する。特に、自治体の代表者としての首長、その日常活動と演技（パフォーマンス）、行政運営での見識と手腕などを検討し、地域に根ざした個性的で生き生きした自治行政の展開にとって首長のリーダーシップのあり方がいかに重要であるかを明らかにする。	同　上	同　上
10	自治体職員の世界	原則「試験選抜」で選ばれる自治体の職員は、研修・配置転換・昇任・退職といった人事運用の中で地方公務員として過ごす。この人事制度にはどのような特色があるのか、それが職員の意識と行動にどのように関係しているのかを、労働条件にも言及しつつ解説する。また、人材論の観点から職員の能力開発の重要性にも触れる。	同　上	同　上
11	大部屋主義の組織と意思決定の手順	自治体の職員は課や係などに所属し、その一所の任務を分担しつつ協力して遂行している。これを「個室主義」に対する「大部屋主義」の職場組織と呼び、その特色を管理職の役割を含めて解説する。また、こうした職場組織を前提にして役所内の意思決定がどのように運ばれるのかを明らかにする。	同　上	同　上
12	地域の個性と魅力	自然と物と人の一定の結びつき（まとまり）を地域と捉えれば、全国の地域は実に多様である。その多様性を作り出している条件（地域の規模、位置、特性など）と自治体・住民の努力と工夫（地域づくり・まちづくり）を例示し、地域間の格差だけでなく個性にも注目する必要と魅力的な地域作りの手法を検討する。	同　上	同　上
13	住民の自治と行政の責任	住民と役所の関係のあり方は地方自治の営みを大きく規定する。住民は役所の活動に批判や要望を出し、役所は住民の理解と協力を求めるが、これをめぐって行政の責任や仕事の仕方（直営と民間委託など）が問題になる。そこで、地域における住民自治の実態と役所の対応との関係を検討する。	同　上	同　上
14	地域づくりと住民の元気	自治の息吹きは、住民の「自発と自前の元気」や「自律的な秩序形成の元気」の発現であると考えることができる。こうした住民の元気が横溢する姿を、人口が高齢化する都市型社会を前提にして、喜びをもって共に生きようとする地域での実践活動を例示しながら、概観し、住民（民間）活動独自の意義を解き明かす。	同　上	同　上
15	社会変動と地方自治の改革	少子化・高齢化・情報化・国際化・地球環境問題・持続可能な成長など現代社会の諸変化が自治体にいかなる対応を求めているか、また、規制緩和や分権化の動きが自治体にいかなる課題を投げかけているか、自治体の政治と行政にはどのような自己改革の必要があるかを検討し、これからの地方自治を展望する。	同　上	同　上

＝現代の経済学＝（ＴＶ）

（主任講師：嘉治　元郎（放送大学副学長））
（主任講師：新飯田　宏（放送大学教授））

全体のねらい

急激に変化している世界経済に対応して、現代の経済学も新しい発展を遂げつつある。この講義では、現代経済学の共有財産になっている基礎理論をできるだけ正確に説明し、現在重要性を増している問題のいくつかをとりあげて、経済学がいかなる解答を興し得るのかを示すことにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代経済学の体系	現代の経済問題を説明する学問体系として、現代経済学がどのような分析方法をとっているのかを概説する。具体的には、理論モデルの性格、ミクロ分析とマクロ分析、実証的経済学と規範的な経済学、などの経済学の諸分野について説明する。	嘉治元郎（放送大学副学長）	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	家計の行動	家計の選好を示す無差別曲線を用いて、消費者行動、労働供給、貯蓄行動について説明する。	新飯田　宏（放送大学教授）	新飯田　宏（放送大学教授）
3	企業の行動	利潤を最大化しようとする企業が、どのように産出量を決定し、生産要素の需要量を決定するかを説明する。	同　上	同　上
4	競争市場の均衡と有効性	完全競争市場の均衡がどのような性格を持ち、役割を果しているのかを交換、生産、消費者主権の観点から説明する。	同　上	同　上
5	不完全競争と産業組織	市場構造のタイプにしたがって、独占・寡占・独占的競争のモデル分析を説明し、完全競争市場における成果と比較する。独占禁止法との関係についても明らかにされる。	同　上	同　上
6	市場の失敗と公共政策	いわゆる市場の失敗といわれる事例（外部性、公共財、自然独占）について説明し、公共政策による資源配分の改善の可能性について説明する。また情報の不完全性に基づく市場の失敗と、政府の失敗についても触れる。	同　上	同　上
7	経済循環と国民所得	一国経済の活動水準がどのように測定されるかについて説明し、ＧＤＰ（ＧＮＰ）をめぐるマクロ経済の循環図式と、マクロ経済学の主要課題が何かを明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	国民所得水準の決定	いわゆる有効需要理論にしたがって、総需要と総供給の一致から、国民所得水準が決定されるモデルについて説明する。乗数理論、オープン・マクロの経常収支の決定についても触れる。	新飯田　宏	新飯田　宏
9	貨幣と利子・所得	国富を構成する実物資産と金融資産の経済活動における役割を説明しつつ、貨幣量と利子率の関係を明らかにする。貨幣市場の需給均衡を通して所得と利子率がどのような関係にあるかをＬＭ曲線によって説明する。	同　上	同　上
10	消費・投資と利子率	消費関数（ケインズ型短期消費関数とライフサイクル型長期消費関数）と投資関数について説明し、財市場の均衡条件からＩＳ曲線を導き、ＩＳ・ＬＭ両曲線によって所得を利子率の同時決定のメカニズムを説明する。	同　上	同　上
11	財政政策と金融政策	経済安定化政策として利用される両政策の手段について説明し、財政政策と金融政策の効果をＩＳ・ＬＭ曲線によって比較検討する。	同　上	同　上
12	インフレーションと失業	貨幣供給・ＧＮＰ・物価の関係を明らかにしつつ、オークン法則・フィリップス曲線について説明する。インフレ予想と自然失業率、スタグフレーションの関係も明らかにされる。	同　上	同　上
13	国際収支と為替レート	経常収支に対する３つの考え方を説明し、それぞれに対応する経常収支調整政策を紹介する。一体、経常収支の調整に国際協調は必要かどうかについて説明する。	同　上	同　上
14	経済成長	国民経済の供給能力が増大する要因を説明し、成長率の不安定性を明らかにする。	同　上	同　上
15	景気循環	景気循環の型と周期についての通説を紹介し、景気循環発生のメカニズムを説明する。ついでケインジアン・マネタリスト、最近の新ケインズ派の景気循環についての考え方を比較することで、マクロ経済についての各学派の意見相違の核心を検討する。	同　上	同　上

＝金　　融　　論＝（ＴＶ）

〔主任講師：貝塚啓明（中央大学教授）〕

全体のねらい

経済活動は物の取引と金融取引に大別される。この講義では、金融取引が物の取引にどのような影響を及ぼすかを説明する。具体的には、さまざまな金融取引の仕組みとそれを仲介する金融仲介機関の機能を説明しつつ、金融や経済成長、雇用、インフレ、貿易などにどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	金融とは何か	金融活動を定義し、金融問題の例を挙げてこの講義のいと口とする。金融の機能としては、貨幣の存在とこれを前提とする貸借が中心となる。金融問題としては、インフレーションと株価の暴落を例として説明する。	貝塚啓明（中央大学教授）	貝塚啓明（中央大学教授）
2	貨幣	金融制度の基礎として貨幣制度が定着している必要があり、まず、日本の貨幣制度を概観する。さらに中央銀行、銀行制度、その他の諸制度を日本の実情に即して説明する。	同上	同上
3	金融構造	金融制度の背後には、金融構造がある。間接金融と直接金融、既発行証券市場の確立、銀行と企業との関係など金融システムの性格を左右するのが金融構造の差異である。これらの問題を日本と先進主要国との比較において説明する。	同上	同上
4	貨幣の供給	一般的支払手段として機能する貨幣は、一国経済の金融資産のなかでも重要な役割を担っている。この章では、貨幣を定義した上で、それらが中央銀行と民間銀行とからなる銀行部門によって、供給されるメカニズムを明らかにする。	同上	同上
5	貨幣の需要と利子率	利子率は投資に影響を及ぼし、投資は国民所得・雇用・物価・インフレ率などに影響を及ぼすという意味で重要な経済変数である。この章では、利子率が貨幣の供給と需要が等しくなるように決定されることを証明する。	同上	同上
6	通貨と国民総生産・雇用・インフレ	貨幣の供給は経済成長と雇用に投資への影響を通じて影響を及ぼす。この章では、このマクロ経済のメカニズムを説明する。	同上	同上
7	貨幣とデフレ・不況	1929年に始まるアメリカの大不況はなぜ生じたか。その原因を貨幣供給との関係で探った後、ケインジアンによる原因説明との関係を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	貨幣とインフレ	インフレは物の供給量の増加率よりも貨幣供給の増加率の方が大きいときに生ずるという素朴な考え方がある。この考え方の妥当性を短期と長期に分けて実証的に検討する。	貝塚啓明	貝塚啓明
9	財政赤字とインフレ	財政赤字は貨幣供給や国債残高の変化を通じて国民所得・雇用・インフレなどに影響を及ぼす。この章ではこのメカニズムを説明する。	同上	同上
10	金融政策の目的と手段	金融政策の目的は何か、それらの目的を達成する手段としての金融政策にはどのようなものがあるかについて説明する。	同上	同上
11	金融政策のあり方	金融政策のあり方は、金融政策の効果の遅れや市場の自動調整機能をどのように考えるかによって異なる。この章では、歴史的経験を踏まえて、これらの問題を考慮し、金融政策のあり方を検討する。	同上	同上
12	国際金融	今日、国際金融上の重大な問題は、為替レートの変動である。為替レートの変動は私たちの生活にどのような影響を及ぼすか、それはなぜ大きく変動するのか、安定させるための経済政策は如何にあるべきか等を説明する。	同上	同上
13	金融仲介の機能	第10章までは銀行などの金融仲介機関の存在を明確に考慮せずに金融のメカニズムを説明してきた。この章では、金融仲介機関が存在することによって、どのようなメリット（経済成長の促進など）が生ずるかを説明する。	同上	同上
14	金融自由化	銀行を始めとする金融仲介機関はさまざまな規制を受けているが、昭和50年代に入って、規制緩和＝自由化が徐々に進行している。このような事態はなぜ発生したのであろうか。金融自由化はどのように進めるべきであろうか。それは、金融サービスの消費者にとってどのようなメリットをもつであろうか。この章ではこれらの問題を説明する。	同上	同上
15	新しい金融取引	最近では、金利スワップ・金融先物・通貨先物・オプションなど新しい金融取引が活発になっている。これらの新しい金融取引の仕組みと機能を説明する。	同上	同上

＝財　　政　　学＝（ＴＶ）

（主任講師：貝塚啓明（中央大学教授）
主任講師：宮島　洋（東京大学教授））

全体のねらい
財政のシステムは制度としてかなり複雑であるが、なるべく平易にこれを説明し、公共部門のもつ役割を主として公共支出と租税についてくわしく説明し、その機能を経済的に明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	財政とはなにか	財政とは、経済活動のなかでどのような特色をもつか、実例をあげ、これからの講義の構成を説明する。	貝塚啓明（中央大学教授）	貝塚啓明（中央大学教授）
2	公共部門と民間部門	公共部門の行動と民間部門の行動は、異っている。市場経済の下での民間部門の行動と民間部門の経済活動がもたらす外部不経済などの市場の失敗を是正する政府の役割を示す。	同　上	同　上
3	日本の財政システム(1) －予算－	この節では、財政システムの中心的な制度である予算について説明する。それとともに予算ができ上がるプロセスを跡づける。また、財政計画についてもふれる。	同　上	同　上
4	日本の財政システム(2) －租税と公債－	政府収入の中心である租税の概要を説明する。直接税と間接税などの分類にもふれる。また、公債発行の制度的側面にもふれる。	同　上	同　上
5	日本の財政システム(3) －地方財政－	日本の地方財政システムの概略を説明する。地方交付税の役割、地方税の構成などが扱われる。地方分権についてもその考え方と日本の地方分権のあり方がふれられる。	同　上	同　上
6	公共部門の役割	公共部門の存在理由として、純粋公共財の必要性が説明される。公共財の理論のもっともわかり易い議論が紹介される。	同　上	同　上
7	公共部門の多様性	現実の公共部門は、多様である。準公共財と呼ばれるものや、場合によっては私的財も公共部門が供給する。また社会資本も民間資本に対して独自の役割をもつ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	公共部門と社会保障	財政支出の分野に占める社会保障の比重は高い。社会保障の役割は、財政からみても重要である。社会保険の機能など、的確な説明が必要である。また、高齢化社会への移行と社会保障との関係にもふれる。	貝塚啓明	貝塚啓明
9	租税体系	租税をどのような税目から課税すべきか、その組み合わせを考えることは重要である。公平さ、中立性、簡素などの要件が説明される。また、歴史的発展にもふれる。	宮島　洋（東京大学教授）	宮島　洋（東京大学教授）
10	所得税	直接税のなかで中心的な租税である所得税の仕組みが説明される。所得のなかで資産性所得の課税のあり方やクロヨン問題にも言及される。	同　上	同　上
11	法人税	日本の租税のなかで比重が高い法人税の仕組とその働きを説明する。個人の所得と法人所得との関係、法人税のもつ企業投資への影響がとり扱われる。	同　上	同　上
12	消費税	最近導入された消費税やＥＣが採用する付加価値税の仕組みを説明する。また、過去にあった個別消費税との対比で一般税としての消費税の特色が述べられる。	同　上	同　上
13	資産税	相続税や固定資産税などのストックに課税される資産税の特色が説明される。全体の税体系のなかでの地位、その仕組みなどが議論される。	同　上	同　上
14	公債発行の問題点	公債発行がマクロ経済にどのような影響を与えるかを扱う。公債の負担の概念の明確化や、金融上の役割にもふれる。	貝塚啓明	貝塚啓明
15	今後の財政問題	21世紀を展望したときの日本の財政問題にふれる。高齢化と公共部門の規模、公債発行の比重、社会資本整備のあり方を論ずる	同　上	貝塚啓明 宮島　洋

＝国　際　経　済　学＝（Ｒ）

〔主任講師：嘉治元郎(放送大学副学長)〕

全体のねらい

国際経済学の主要な内容について解説し、世界経済の現状について理論的に分析を加える。このことを通して、わが国の国際社会における地位と役割を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	国際経済学とは何か	国際経済学の対象 対外経済取引 対外取引の種類 対外取引と国際通貨 通貨の交換と為替レート 国際収支とその表示	嘉治元郎（放送大学副学長）	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	国際貿易の理論	貿易活動の目的 比較生産費説 自由貿易の利益	同　上	同　上
3	自由貿易論	今日の世界貿易体制 自由貿易論の基本原理 自由化に伴う摩擦 貿易自由化とそれに対する反対論	同　上	同　上
4	保護貿易論	保護貿易政策 自由貿易理論の諸前提 幼稚産業の保護 経済的安全保障への配慮	同　上	同　上
5	国内経済と対外経済関係	開放巨視モデル　総需要と総供給　政府購入 家計の消費　企業の投資　封鎖巨視モデル 輸入の説明　輸出の説明　貿易乗数の理論	同　上	同　上
6	貿易外収支	貿易外収支とは何か　サービス取引の特長 サービス需要の増大　金融活動の国際化 貿易外収支と生産要素の国際移動	同　上	同　上
7	国際資本移動	貿易収支の実態　直接投資　延払信用　借款 証券投資　短期資本収支　国際資本移動の原理 国際投資に伴う危険　自発的収支と調整的収支	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経済発展と対外経済関係	経済発展の諸段階　国際収支の段階的変化 若い債務国　成熟した債務国　若い債権国 成熟した債権国　世界諸国の実績 貯蓄・投資と国際収支	嘉治元郎	嘉治元郎
9	国際金融の理論	国際金融とは何か　国際通貨とは何か 国際通貨の役割　現実の国際通貨 国際通貨としてのドル　国際通貨の適量	同上	同上
10	国際金融の機構	国際金融のシステム　システムの崩壊 システムの再建　戦後国際経済システムを支える組織 国際通貨基金（International Monetary Found） 国際復興開発銀行（世界銀行） 国際金融システムの調整	同上	同上
11	外国為替の理論	為替レートとは何か 為替レートの表示法 外国為替の需要・供給 為替レートの長期的変化	同上	同上
12	国際収支の均衡	国際収入の均衡とは何か 収支均衡化のメカニズム 金本位制の自動調整機能 経済政策による国際収支の調整 国内均衡と国際均衡の同時達成 為替レートの変動と国際収支	同上	同上
13	労働力の国際移動	生産要素の国際移動 労働の国際移動の誘因 国際的な賃金格差 労働力の国際移動の実績 労働力の国際移動の経済効果 第二次大戦後の労働力の国際移動	同上	同上
14	国際経済の現状	世界経済の分析方法 貿易マトリックス（貿易行列） 国際資本移動の分析 南北関係 東西関係 世界経済の一体化と国際経済学	同上	同上
15	日本経済と世界経済	戦後における日本経済の発展 Ⅰ　援助と特需の時期　朝鮮動乱と特需 Ⅱ　重化学工業化達成の時期　軽工業から重化学工業へ Ⅲ　貿易黒字、円の為替レート上昇の時期 貿易収支と為替レート　Ⅳ　経済大国への移行の時期 Ⅴ　債権国の役割を果たすべき時期	同上	同上

＝日　本　経　済　史＝（Ｒ）

〔主任講師：原　　朗（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代の日本経済が、前近代と近代の長い経済的発展という歴史的な基礎のうえに成立していること、とく近代における日本の急速な経済的発展が近隣諸国をふくむ国際社会に対して大きな影響を与えてきたことを十分に理解することをねらいとする。全体として第１次大戦後の現代史に重点を置き、第２次大戦後も詳しく扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	幕末開港以前	幕末開港により日本が資本主義経済発展を開始する以前の日本社会の経済的発展を概観する。律令制社会、荘園制社会、幕藩制社会の特徴を対比しながら、開港直前の農民層分解や手工業などの経済的発展水準、幕末期における幕府と諸藩との対立の根拠について検討する。	原　朗（東京大学教授）	原　朗（東京大学教授）
2	明治維新	開港後の激しい経済的変化の中で明治維新が起こり、維新政府の地租改正・秩禄処分・殖産興業政策、通貨金融制度の整備と大隈財政・松方財政の展開、農民層分解の進展や士族層・職人層の崩壊による賃労働者の創出、政商の資本蓄積などにより資本制社会発展の前提条件が形成される過程をあとづける。	同　上	同　上
3	産業革命	松方デフレ後の企業勃興により産業革命期に入り、先進資本主義国からの技術導入によって紡績業・石炭業・軍需工業が発展し、製糸業などの輸出産業や鉄道業・製鉄業・造船業が発展する。日清戦争で日本は台湾を領有し、賠償金を基礎に金本位制を採用し、日露戦争期から朝鮮支配を強め1910年にはこれを領有する。	同　上	同　上
4	第１次世界大戦	大戦による海運の活況と輸出の急増により日本は債務国から債権国に転化し、急速な産業発展と労働者数の増加がみられ、労働運動も発展した。大戦後も活況は続いたが、1920年に激しい戦後恐慌に見舞われ、大規模な救済政策がとられた。 一時停止した金本位制に復帰しないまま1920年代を迎える。	同　上	同　上
5	１９２０年代	戦後恐慌後も小規模な恐慌が続き、さらに関東大震災の打撃が加わる。慢性的な不況の中でも産業発展は進み国内市場も拡大するが、輸入の増大を輸出でカバーできず国際収支は慢性的入超となる。電力化や重化学工業が進展し、経済政策も新たな展開方向を模索する。	同　上	同　上
6	昭和恐慌	震災手形処理の失敗で．1927年に金融恐慌が起こり、銀行集中が進む。1929年には井上蔵相の緊縮財政と金解禁の断行が世界大恐慌と重なり、深刻な昭和恐慌となって諸産業は痛烈な打撃を受け、合理化を強制される。糸価・米価の激落で製糸業の没落と農業恐慌の深刻化が進む。	同　上	同　上
7	満州事変	昭和恐慌のさなかに関東軍が満州事変を引き起こし、中国の東北三省を征服して満州国を作り、統制経済の実験を始める。国内では高橋蔵相の赤字国債による景気回復政策が成功して工業生産は急速に恐慌から回復し重化学工業化が進展するが、農業恐慌は長く続く。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日中戦争	軍事費抑制を主張した高橋蔵相は2・26事件で殺害され馬場蔵相は軍備拡張路線に踏み切る。経済統制が必至となり、日中戦争期に日本経済は全面的な経済統制下に入る。満州・華北・華中を円ブロックに組み込むが、第三国に対する深刻な外貨不足が制約となって統制はつぎつぎに強化される。	原朗	原朗
9	太平洋戦争	南部仏印進駐で対日資産凍結と石油禁輸に追い込まれた日本は対米英開戦に踏み切り、南方占領地に軍隊を展開して資源略奪を行ったが、船舶不足は著しく、国内経済も中国や南方の占領地の経済も十分に維持できなかった。軍需生産のための様々な措置が強行されたが、海上輸送力の不足による縮小再生産で敗戦に至る。	同上	同上
10	戦後改革	アメリカを中心とする占領軍は日本の非軍事化と民主化のため財閥解体・労働改革・農地改革などの経済改革を実行する。冷戦の開始のため初期の占領政策は転換し賠償政策も緩和されるが、インフレ安定のため単一為替レート設定と緊縮財政の断行、労働運動の抑止が要請され、ドッジ・ラインにより物価は安定する。	同上	同上
11	朝鮮戦争と講和	朝鮮戦争の特需で産業は一挙に活気づき、戦前水準に回復する。消費水準も上昇し、合理化投資も再開された。長期金融機関制度の整備や独占禁止法改正、資本蓄積優遇税制や各種の産業育成政策など高度成長の前提条件が整備され、景気循環の復活に至る。	同上	同上
12	第1次高度成長	1955～6年の神武景気、59～61年の岩戸景気と好況が続き、高率の設備投資が行われて著しい産業発展がみられ、とくに機械工業を中心に重化学工業化が急速に進展した。国民所得倍増計画が景気を加速し、オリンピック景気も続いたが、1965年には深刻な証券不況が起こり、戦後初めて赤字国債が発行された。	同上	同上
13	第2次高度成長	財政的刺激と輸出拡大で65年不況から脱却してからは長期にわたり好況が続き、産業投資の大型化と消費水準の上昇が進んだ。国際収支は黒字基調となり、労働力不足も進展した。1971年の国際通貨危機で円ドルレートは360円を離れて上昇し、インフレ進行の中で起こった第1次石油危機により高度成長は終了した。	同上	同上
14	石油危機	1973年の第4次中東戦争に伴う第1次石油危機は不況下の激しい物価上昇というスタグフレーションをもたらし、各産業は省エネルギーと減量経営に努めた。1979年のイラン革命に伴う第2次石油危機の際には国際物価上昇と同程度の物価上昇でショックを吸収することができ、日本経済の相対的地位は高まった。	同上	同上
15	経済大国	1985年のプラザ合意により円は急速に上昇して円高不況となったが短期間に円高好況に転換し、輸出依存から内需依存に切り替えつつ、ME革命による情報産業の発展を中心に長期にわたって好況を享受した。地価・株価など資産価格の上昇が続いたが、91年に投機は崩壊して不況は深刻化した。	同上	同上

＝欧　米　経　済　史＝　（Ｒ）

〔主任講師：関口尚志（フェリス女学院大学教授）〕
〔主任講師：梅津順一（聖　学　院　大　学　教　授）〕

全体のねらい

この講義では、十五・六世紀から現代にいたる欧米諸国の経済発展を対象とし、主要な問題群を比較史的に検討することによって、「近代化」の意義を考える。例えば、近代資本主義の発生をめぐる南欧と西欧、国民経済の構造をめぐるイギリスとオランダ、アメリカ大陸の南と北、産業革命をめぐるイギリスと大陸諸国、後発資本主義としてのドイツとロシア、ナチスとニューディール等の比較を試みる。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代ヨーロッパの商業的拡大と貿易国家の盛衰 (1)	はじめに ポルトガル・スペインの海外進出 スペインの経済的衰退 ＜視角と焦点＞日本から見た欧米経済史	梅津順一（聖学院大学教授）	梅津順一（聖学院大学教授）
2	近代ヨーロッパの商業的拡大と貿易国家の盛衰 (2)	オランダとイギリスの抬頭 貿易国家オランダの興隆 オランダの衰退 ＜視角と焦点＞貿易史から見た近代イギリス	同　上	同　上
3	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業 (1)	経済的衰退の様相 イギリスの農村工業の基盤 中世の都市と農村 領主的市場経済の衰退 農民的市場経済 ＜視角と焦点＞ヨーロッパの農民社会－西と東－	同　上	同　上
4	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業 (2)	経済発展の経路 都市の商人と農村の生産者 農村都市と新しい流通網 農村生産者の経営形態 ＜視角と焦点＞ヨーロッパの農村工業と産業革命	同　上	同　上
5	近代ヨーロッパにおける「独占」と「経済的自由」	農業経営の変化 日用品工業の定着 絶対王制の経済政策 絶対王制の財政危機義 市民革命の経済史的意義 ＜視角と焦点＞アダム・スミスの市民革命論	同　上	同　上
6	近代資本主義と宗教意識	ヴェーバー学説の経済史的側面 合理的経営的資本主義と政治指向的資本主義 プロテスタンティズムの禁欲と資本主義の精神 ＜視角と焦点＞英国クエイカー派の職業倫理と経済生活	同　上	同　上
7	イギリス重商主義と南北アメリカ	名誉革命体制の財政制度と信用制度 国内産業の保護 スペイン領植民地の経済 英仏のプランテーション植民地と黒人奴隷 アメリカ独立の経済的背景 ＜視角と焦点＞アメリカの独立と「ハミルトン体制」	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	イギリス産業革命の世界史的意義	近・現代史把握の基礎視点 イギリス産業革命の展開 イギリス産業革命の革新性・古典性 自生的産業変革の前提諸条件 エネルギー革命としての産業革命 ＜視角と焦点＞「生活水準論争」	関口尚志（フェリス女子学院大学教授）	関口尚志（フェリス女子学院大学教授）
9	産業化の波及と後進資本主義の経済構造	後発資本主義・後進資本主義と産業革命 フランス革命と産業革命 独立戦争・南北戦争とアメリカ産業革命 プロシア農民解放とドイツ産業革命 後進資本主義型産業革命の基本性格 ＜視角と焦点＞「東洋の英国」と「東洋の土人部落」	同上	同上
10	19世紀の世界資本主義	後発性の経済・不経済 自由貿易と国際金本位制－先進国ナショナリズム 自由貿易と帝国主義 世界市場の構造と後進国の保護主義 ＜視角と焦点＞－幕末開港の世界経済史－ 貿易摩擦と文化摩擦	同上	同上
11	「大不況」と資本主義の構造変化	「大不況」とその背景 長期農業不況と自由貿易の終篤 独占資本の形成－アメリカ－ 独占資本の形成－ドイツ－ 「独占の限界」と「競争的経営者資本主義」 ＜視角と焦点＞反独占運動と消費者の利益	同上	同上
12	イギリス産業精神の衰退と植民地支配	「第2次産業革命」とイギリス「工業独占」の解体 多角的貿易（＝決済）機構 「イギリス病」の歴史的起源 「生活権の足枷」と「過去の重荷」 帝国主義と「資本主義の精神」の崩壊 ＜視角と焦点＞「パーソナルな資本主義」への執着	同上	同上
13	帝政ドイツ・旧ロシアの経済と社会	帝政ドイツの高度産業化－金融資本の形成 中小企業・農民問題 ユンカー経営の歴史的特質 「ユンカー的・ブルジョア的」帝国主義 ロシアの工業化とミール共同体 ＜視角と焦点＞ソヴィエト工業化と農村社会	同上	同上
14	ニューディールとファシズム	両大戦間における資本主義の変容 基軸国アメリカ－高度大衆消費社会 大恐慌と世界経済 ニューディール ナチス統制経済 ＜視角と焦点＞フランス国有化と経営的革新	同上	同上
15	近代化と現代資本主義	ナチス成立の社会的基盤　下層中産階級の経済的・心理的貧窮化　「社会主義の貧困」と「中産層社会主義」　近代化とファシズム－ドイツ革命の根本問題－　近代化と現代資本主義　反独占の視点－現代資本主義をどう捉えるか－ 現代資本主義と低開発経済 ＜視角と焦点＞低開発経済の自立・発展と比較経済史	同上	同上

＝経済学史入門＝（ＴＶ）

〔主任講師：根岸　隆（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経済学が発展してきた歴史を学ぶことにより、現代の経済学についての理解を確かめることを目的とする。現代経済学の観点から経済学の歴史を考察し、また、わが国の学者による研究成果にもできるだけ言及したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済学史をなぜ学ぶのか	主流派である新古典派のほかに、さまざまな学派が存在すする現代経済学の状況について述べ、なぜ経済学の歴史を学ぶのかを考える。	根岸　隆（青山学院大学教授）	根岸　隆（青山学院大学教授）
2	経済学のあけぼの	経済学のあけぼのである重商主義（マーカンテイリズム）と重農主義とを概観する。ことに、後者におけるケネーの「経済表」に注目する。	同　上	同　上
3	Ａ・スミスと「諸国民の富」	重商主義を批判、「諸国民の富」により古典派経済学を創始したアダム・スミスについて概説する。ことにその経済成長論について検討し、マルサスの批判にも言及する。	同　上	同　上
4	リカードの巨視的分配論	古典派経済学の代表的理論家であるリカードの経済学、ことに資本家、労働者、地主の諸階級間の分配に関する理論を検討する。	同　上	同　上
5	比較生産費説	国際貿易に関するリカードの比較生産費説について概説する。英国、ポルトガル、服地、ワインをめぐる有名な数値例についての疑問を検討し、さらにリカード理論による交易条件（国際的な財の交換比率）の決定可能性について考察する。	同　上	同　上
6	Ｊ．Ｓ．ミルと賃金基金説	古典派経済学の殿将であるＪ．Ｓ．ミルの経済学を概観する。古典派経済学における賃金基金説の意義をあきらかにし、ソートンの批判に対してミルがそれを放棄したわけを検討する。	同　上	同　上
7	マルクスと「資本論」	古典派経済学を継承しながら資本主義の歴史性を主張したマルクスの「資本論」を概観する。等価交換をつうじて資本が労働を搾取するというなぞを解明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	利潤率低下法則	マルクスの利潤率低下法則を概説し、それを否定するわが国の柴田・置塩の定理を数値例によって解説する。	根岸　隆	根岸　隆
9	古典派経済学と限界革命	古典派経済学のまとめとして、現代経済学にとってその意義を検討する。さらに、1870年代における古典派経済学に対する限界革命、新古典派経済学の誕生について概説する。	同　上	同　上
10	クールノーの数理経済学	クールノーの先駆的な独占理論、寡占理論、完全競争理論についてのべ、その考え方が現代経済学におけるゲームの理論のそれにつながることをあきらかにする。	同　上	同　上
11	ワルラスと一般均衡理論	市場経済の原理を求めて新古典派経済学の中心的な理論である一般均衡理論を展開したワルラスと、その後継者であり厚生経済学の基本定理（競争的資源配分の最適性）に関する重要な概念を提示したパレートの経済学を説明する。	同　上	同　上
12	ジェボンズと裁定行動	ワルスラとはことなった方法で市場均衡を解明したジェボンズとエッジワースのアプローチ、ことに有名なエッジワースのボックスダイアグラムについて説明する。	同　上	同　上
13	メンガーとオーストリア学派	メンガーにはじまるオーストラリア学派の現代的意義を論じる。また、ベーム・バヴェルクとシュンペーターの資本利子に関する論争など新古典派経済学にたいする貢献について検討する。	同　上	同　上
14	マーシャルとケンブリッジ学派	実際の経済問題を解明するための分析用具を開発したマーシャルの経済学、ことに消費者余剰分析による経済厚生論を概説する。	同　上	同　上
15	ケインズの「一般理論」	ケンブリッジ学派の自己批判であり、現代マクロ経済学の出発点であるケインズの「一般理論」を概説する。また、ケインズと経済学史の関係についても考察する。	同　上	同　上

＝経済社会の現代（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：坂井素思(放送大学助教授)〕

全体のねらい

今日の経済社会には、どのような現代的特徴があるだろうか。経済社会の現代性について考える。とくにこの講義では、このような特徴が顕著に観察される「消費社会」の問題に焦点をあてることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	消費社会とはどのような社会か	消費社会とは、人びとの消費が共通の様式を整えるような社会である。消費が社会全般の現象として観察されるところに特色が見いだせる。消費社会の変遷について考えてみたい。	坂井素思（放送大学助教授）	坂井素思（放送大学助教授）
2	消費とはどのような活動か	消費は、人びとの欲求やテイストを実現する活動である。このような欲求についての考え方や、テイストについての理論を見ていきたい。とりわけ、現代の趣味理論について、注目してみる。	同　上	同　上
3	人はなぜ消費を行うか	消費とは財を購入して、それを使用することである。この活動は主として家計によって行われるが、この章ではその家計消費の特徴について考える。	同　上	同　上
4	消費と必需の考え方	人はなぜ財を求めるのか。必需や標準という考え方のなかにみられる消費の規準について、考えてみる。このとき、エンゲル法則や、標準パッケージなどの意味についても注目してみたい。	同　上	同　上
5	所得水準と消費の関係	財を求める理由について、マクロ経済要因を中心に考察する。生産によってもたらされる所得が、消費に与える影響についてみる。このなかで、消費性向や、デモンストレーション効果などの、所得の及ぼす作用についてみていく。	同　上	同　上
6	贅沢消費はなぜ生ずるか	消費概念のなかで、必需と並んで重要な、贅沢の概念について考える。このなかで、絶対的欲求と相対的欲求の関係、禁欲と浪費などの問題点について考察する。	同　上	同　上
7	サーヴィス消費はなぜ増大するか	消費社会の現代的な特徴のひとつは、サーヴィス消費が増大しているところにある。消費にみられるサーヴィス経済化について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	余暇消費のパラドックス	サーヴィス消費のなかでも、とくに際立った特徴を示すのが、余暇に使われる消費である。現代の余暇活動について考察する。	坂井素思	坂井素思
9	消費社会のなかの流行現象	流行現象のなかに、消費活動の現代的特徴を観察する。流行のメカニズムと消費との関係、流行の模倣過程などの点について、考えることにする。	同上	同上
10	消費社会の大衆性	今日の消費の大きな特徴は、大量消費という点にある。これが生じたのはなぜか。その基本的な原因を考えてみたい。	同上	同上
11	広告と消費社会	企業のマーケッティングの役割について考察する。広告や宣伝が、消費活動に与える影響についてみていく。	同上	同上
12	ブランドとグッドウィル	デパート・スーパーマーケット・小売店などの流通業が消費社会で果たす役割について考える。この産業で発達してきたさまざまな販売技術について見ていく。消費者に対して産業がもつ、さまざまな営業権について考える。ここでは、ブランドや商標などについて考察する。	同上	同上
13	消費社会の文化	消費文化について考える。このなかで、キッチュやパスティシュなどの動きについて見ていく。	同上	同上
14	消費社会と環境	消費活動の増大とともに、深刻な問題となってきているのが、消費によって生ずる、廃棄物の処理などの環境問題である。環境にかかるコストについて考える。	同上	同上
15	産業社会と大衆消費社会	消費社会と産業社会の接点について考察する。産業社会の在り方と、消費活動がどのように関係してくるのかについて考える。消費社会の示す現代的な特徴を整理・検討して、将来の課題について、問題提起を行う。	同上	同上

＝比較文明の社会学＝（ＴＶ）

（主任講師：米山俊直（大手前女子大学長）
主任講師：吉澤五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所室長））

全体のねらい

文明は文化と並んで重要な社会理解の鍵になっている。この講義では、伝統的な文明あるいは文明史の諸説を紹介、検討しながら、現代の地球上に認められるいくつかの文明の現象をとらえて、具体的に検証することを通して、「諸文明の時代」とよばれる現代社会の動向とそのゆくえを考えようと試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化と文明	文化と文明の概念を規定し、この科目の目指すものを明らかにする。ことに将来の地球文明のあり方をさぐるという意図を明示する。	米山俊直（大手前女子大学長）	米山俊直（大手前女子大学長）
2	日本と文明	日本文明史の総体的な意味と展望について、中国化や西洋化などの文明変動をとらえながら、地球文明における課題を考える。	吉澤五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所室長）	吉澤五郎（聖心女子大学キリスト教文化研究所室長）
3	歴史と文明	歴史と文明の多様な営為と新しい知的転換の道程を、『歴史の研究』の著者トインビーの世界史像と、西欧文明の歴史的検証を通して解明する。	同上	同上
4	地球と文明	梅棹忠夫の『文明の生態史観』の枠組みと、情報化時代のその展開を紹介検討する。	米山俊直	米山俊直
5	科学と文明	伝統的な科学史像をこえる「世界の科学」の観点から、人類史を読みかえる独自の構想と、「地球環境問題」への指針を示す。	伊東俊太郎（麗澤大学教授）	伊東俊太郎（麗澤大学教授）
6	宗教と文明	文明史における一神教・多神教の様相と、紛争要因としての宗教をあとづけ、さらに西欧の一神教的デモクラシーに対するアジアの多神教的デモクラシーの抵抗を究明する。	山折哲雄（白鳳女子短期大学教授）	山折哲雄（白鳳女子短期大学教授）
7	都市と文明	都市と文明の歴史的考察を通して、「伝統的都市」と「近代都市」の断絶の諸相、さらに問題解決のモデルを追求する。	桐敷真次郎（東京都立大学名誉教授）	桐敷真次郎（東京都立大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	移動と文明	「動くものとしての人間」（ホモ・モビリタス）という視点から、諸文明の形成をあとづけ、イスラム・ネットワークの将来性を語る。	片倉もとこ（中央大学教授）	片倉もとこ（中央大学教授）
9	日本語と文明	文明のキーワードである文字の発明を概観しながら、「外国語としての日本語」の位相と文明の連関を、留学生のインタビューをまじえて検討する。	佐々木瑞枝（横浜国立大学教授）	佐々木瑞枝（横浜国立大学教授）
10	芸術と文明	音楽と美術をめぐる文明間の交流と、西欧的な価値観の偏見を是正し、西欧とアジア双方向の触合による新たな芸術創造の息吹を描写する。	藤井知昭（中部大学教授） 吉田憲司（国立民族学博物館助教授）	
11	戦争と文明	戦争と文明との関連について、原初的な農耕と武装の関係をはじめ、戦争発生の季節的分散や経済循環との係わりをつきとめ、さらに21世紀文明の戦争回避の可能性と新しい方向性を考察する。	猪口邦子（上智大学教授）	猪口邦子（上智大学教授）
12	経営と文明	広義の経営学の立場から、生産様式と社会システムの変化をたどり、さらに文明移転の様相と今後の新しい方向づけを試みる。	日置弘一郎（京都大学教授）	日置弘一郎（京都大学教授）
13	海と文明	世界史を海洋史観の立場から見直し、とくに近代工業文明として浮上する2つの海洋勢力・イギリスと日本の勃興と、今後の「太平洋文明」を展望する。	川勝平太（国際日本文化研究センター教授）	川勝平太（国際日本文化研究センター教授）
14	情報と文明	現代の「情報化社会」の成立をはじめ、情報の成立およびコンピュータの新しい可能性を多面的の追究しながら、高度文明社会との関連性と課題を検討する。	杉田繁治（国立民族学博物館教授）	杉田繁治（国立民族学博物館教授）
15	諸文明の時代	「諸文明の時代」の難問を中心に、「文明的世界システム」の基本的視角から、生態系と文明系が共生する新しいパラダイムを提示する。	神川正彦（国学院大学教授）	米山俊直 神川正彦

＝ コミュニティ論（'９８） ＝ （Ｒ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕

全体のねらい

コミュニティの概念－－古典的コミュニティと現代的コミュニティ－－についての基礎的な理解をすること、高度成長後の日本社会の社会目標としてのコミュニティという問題提起について理解することを目的とする。あわせて現在日本各地で進められている多様なコミュニティ活動の事例を紹介し、地域社会と市民活動の関連についての考察を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コミュニティ論を始めるに当たって	ヨーロッパの社会的現実の中で実態として存在した牧歌的コミュニティとはどのようなものであったかを解説すると共に、コミュニティ論の概観を行う。さらに日本の実例をもとに講義の全体像を示す。意味空間としてのコミュニティ、共同生活と共同経験、コミュニティ・アイデンティティがキーワード。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
2	コミュニティの概念	社会学におけるコミュニティの代表的な概念規定であるマッキーヴァーのコミュニティとアソシエーションの対比、及びエコロジー的な概念であるパークのコミュニティとソサイアティの対比を説明する。コミュニティ概念の整理。地域性と共同性。	同　上	同　上
3	コミュニティ問題の登場	牧歌的コミュニティの衰退が、都市化の過程で生じたこと、公衆衛生や社会福祉の領域におけるコミュニティ・オーガニゼション、都市計画領域で近隣住区の考え方が社会的技術として形成されたことを理解する。高度経済成長にともない、コミュニティ問題が日本社会の課題として浮上し、国民生活審議会でコミュニティが取り上げられた背景。	同　上	同　上
4	都市的生活様式とコミュニティ	社会目標としてのコミュニティとは何を意味するかを理解する。伝統的な地域社会における相互扶助システム、都市的社会における専門処理システム相違と相補的関係、２つのシステムの組み合わせによる新しい最適システムとしてのコミュニティの意味を考える。	同　上	同　上
5	伝統的な地域社会と町内会	欧米のコミュニティに対比される日本の地域社会の特徴を理解する。“むら”の社会と都市における町内が取り上げられる。それぞれどのようなものであったか、欧米のコミュニティとどのように違うかなど。	同　上	同　上
6	町内原理とその変容	なぜ町内会が日本の９割以上の世帯を組織しているのか、町内原理が日本文化の基底にあることの意味を考える。町内原理とは何か、町内会の組織のあり方の特徴、自治体行政とのかかわり、末端行政補完機能。さらにその変容の契機としての地域共同管理、町内会の文化変容の可能性。	同　上	同　上
7	行政と住民	なぜ日本では町内会が行政と住民をつなぐというしくみが維持されているのか、［行政 — 町内会 — 住民］というシステム（日本）と［行政 — Ｖｓ — 住民］というシステム（イギリス）とを対比して考える。第３の方法の吟味。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	コミュニティ意識	都市化と共に地域社会について無関心・無気力・無責任になったとされる住民の意識の実態について、データをもとに考える。市民意識の類型、その中でのコミュニティ・モデルなど。	倉沢　進	倉沢　進
9	コミュニティセンター	1970年代のコミュニティ行政の主要な産物：全国に1万余建設されたコミュニティセンターは今日の地域社会でどのような役割を果たしているか。武蔵野けやきコミュニティセンターでの住民リーダーとの対話を素材に、コミュニティ・センターのあり方、行政ないし自治体と地域住民の果たす役割について考える。	同　上	同　上
10	自己充実活動の展開	コミュニティ活動は、自己充実活動、奉仕活動、問題解決活動に分類される。その中で自己充実活動の意味を考える。趣味学習スポーツ領域のコミュニティ活動は80年代以降遊び心をキーワードとして展開していることを、徳島県の村芝居白百合座でのインタービューをとおして考える。加えて親交的コミュニティ、自治的コミュニティの意味に触れる。	同　上	同　上
11	問題解決活動の展開	コミュニティ活動は、自己充実から次第に問題解決活動へと発展する。ゴミ問題に取り組む住民活動を取り上げ、町づくり住民活動について考える。受益圏と受苦圏という概念を用いて、住民活動の展開を考える。	同　上	同　上
12	地域社会の条件	現在の日本の地域社会のあり方の問題点。日本の地域社会の中で学校の持つ意味と役割を、アメリカのコミュニティ教育の実験との対比の中で考える。学校区の持つ意味、とコミュニティレベルの自治組織。	同　上	同　上
13	異文化とコミュニティ	これまで同質的な住民で構成されていた日本の地域社会も次第に異質な人々を包含するようになった。外国人労働者など、異質な人々との共生の町は、どのようにして形成されるか。インタービューを通して考える。	同　上	同　上
14	盛り場とコミュニティ	盛り場とコミュニティは相いれない存在だろうか。巣鴨の地蔵通りを例として、盛り場のコミュニティ機能について考える。キーワードとして第3空間の考え方を吟味する。コミュニティ概念が社会変動に応じて拡大してゆく方向を探る。	同　上	同　上
15	コミュニティの展望	コミュニティ論全体のまとめ。地域社会の条件について改めて考える。青い目で見た日本のコミュニティのインタービューを交えて考える。 コミュニティの主要な機能である安全、コミュニティを成立させる条件の一つ、コミュニケーションメディアの役割。そして鍵を握る住民意識の方向など。	同　上	同　上

＝都　市　と　農　村＝（Ｒ）

〔主任講師：米山俊直（大手前女子大学長）〕

全体のねらい

都市と農村の対比は古くからの社会学的課題であり、都市社会学、農村社会学の伝統が生まれた。それを総合して、世界の都市民、農耕民の知見を加えながら、現代の動向に則したあたらしい地域社会学の構築を目指すことを主なねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地縁関係と地縁集団	社会は人間関係と人間集団の二つの視点からとらえることができる。この関係と集団は、血縁・地縁・社縁の三つの相で成り立っている。そのなかでも地縁関係・地縁集団によっている都市・農村は古くかつ新しい問題を多くはらんでいる。	米山俊直（大手前女子大学長）	米山俊直（大手前女子大学長）
2	都市と農村	都市社会と農村社会の対比は、テニースやトマス、ズナニエツキ、あるいはレッドフィールドや柳田國男などによって論じられ、社会学の主要な課題になっきた。その対比の実例と、なぜそれが生まれたか、その現代における意味を探る。	同　上	同　上
3	農耕民・農民・農業者	農耕牧畜さらに林業に従事している人々には農耕民・農民（農山漁村民）・農業者（および林業者、漁業者）という呼び方がある。それぞれの社会の特色について比較検討する。さらに、世界の農耕民社会と企業的農業について、社会学的に考察する。	同　上	同　上
4	農村研究の伝統	農村研究にはそれぞれの国に農村社会学、文化人類学の農民研究などの伝統がある。アメリカの農村社会学、フランスの農村研究、日本の村落社会学研究、あるいは文化人類学の農民研究などの伝統を概観し、その時代的、学派的伝統を検討する。	同　上	同　上
5	農村の特色	伝統的農民社会・村落社会の研究を概観し、日本の農民社会に見られる東北型と西南型の二類型の特色（福武）を検討し、類似の民族学的理解（岡）と対比する。また農民（ペザントリー）についての論争についても言及して、農村の特色を検討する。	同　上	同　上
6	半社会としての都市・農村	レッドフィールドによって提起された半社会という概念とその妥当性と、村落共同体の概念を合わせて検討する。そして、過去１～２世紀にわたっての農村の変貌と、いわゆる世界的規模でおきている都市化の動向について概説する。	同　上	同　上
7	都市の二類型	都市の原型をアフリカの事例によって農耕民社会の中に見たのち、伝統的都市と近代的都市の二類型について検討。日本における都市の発達と、植民地体制下の都市についても検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	非情なる産業都市の出現	マンフォードが「非情なる産業都市」と呼んだ近代工業都市の発達と、その結果出現した都市大衆社会について概説し、さらにそれがもたらした都心部の衰退、インナーシティ問題の登場、都市核の拡散、メガロポリスの出現にふれ、脱工業化時代の都市を論じる。	米山俊直	米山俊直
9	都市研究の伝統	都市社会学をはじめ都市計画、都市行政、あるいは広範な都市問題についての欧米や日本の動向を概観し、その動向を検討する。	同上	同上
10	都市化の地球的規模への拡大	都市－農村連続体（都鄙連続体）という視点はなお重要だが、現在は向都離村の人口移動が国際的に起こっていて、過密都市と過疎地域が共存する状況になっている。いまや地球的規模で都市化の帰趨を確かめる必要があることを指摘する。	同上	同上
11	現代都市社会の特色	マスコミの影響などによって、大衆社会が出現して、「都市の自由」は拡大した。匿名性による個人主義とともに、家族が解体し、群衆としての都市生活者の孤独、疎外も問題になる。都市施設の充実の反面、環境の悪化、犯罪の増加などの問題を取り上げて論じる。	同上	同上
12	都市の時代の農村社会	環境問題などの登場もあって、郊外ないし田園的生活への再評価がうまれている。他方農業生産、林業生産はなお人類にとって重要なことは言うまでもない。都市卓越の時代にあらためて農村的生活様式の存在意義を考えてみる。	同上	同上
13	地球の未来と都市・農村	文明の発達につれた多様な都市を総括し、そのもっとも基本的な特色を人口の要素をはずしたいくつかの実例によって検討する。	同上	同上
14	地域研究の意味	国家の枠組みをこえた人々の動きや連帯がＮＧＯなどの新しい社縁集団を作り出し、また他方ではＥＣやＮＩＥＳが生まれている。この状況の下で地域研究の重要性が高まっている。その現状と将来を展望し、そのなかで都市と農村の問題を再考する。	同上	同上
15	地域社会研究の将来	都市社会研究と農村社会研究の総合を目指した地域社会学の構築の構想を述べ、その具体的な見通しを考える。最後に本講義を総括して地縁関係と地縁集団のこれからを考察して結論とする。	同上	同上

＝ジェンダーの社会学＝（ＴＶ）

主任講師：目黒依子（上智大学教授）

全体のねらい

社会のグローバル化と同時に多元化が進んでいる現代の大きな変化をとらえるためには、生産や権力のメカニズムとヒューマン・クオリティを結びつける視点が必要である。近代社会の「当たりまえ」を見直すジェンダー（社会・文化的に規定された男女の関係）の視点はその１つであり、この角度から社会生活の諸側面に光を当てる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ジェンダーとは	ジェンダー概念が欧米で生まれてきた背景やその意義について検討する。さらに性差別観や実態の変動を国際比較を通して描き出し、先進国、途上国を含むグローバルな視点としてのジェンダーを考える。	目黒依子（上智大学教授）	目黒依子（上智大学教授）
2	結婚・家族・性別役割分業	ジェンダーを切り口として、結婚・家族の変動を考察する枠組みを示し、新しい家族の概念を探る。また、「夫－外での仕事、妻－内での家事」という性別役割分業が根強く残っているは、それが配偶者選択にからんでいるとみて、結婚の意味の男女差を通じて、性別役割分業が自然に維持されるメカニズムを外観する。	山田昌弘（東京学芸大学助教授） 目黒依子	山田昌弘（東京学芸大学助教授 目黒依子
3	教育にみる男女差	学校における社会化と進路選択をジェンダーの視点から問い直してみる。前者は、「かくれたカリキュラム」のレベルで性的社会化が進行していることを、教師－生徒間などの日常的相互作用の中にみる。後者は、進路選択の性による違いを、データとして示すと同時に、その差異が顕れる学校内過程を問う。社会化担当者の価値、教育志望がクーリングアウトしていく進路選択過程を説得的に示す。	渡辺秀樹（慶応義塾大学助教授）	渡辺秀樹（慶応義塾大学助教授
4	女性と表現	言葉やしぐさ、服装、音楽、絵画など様々な表現には、性差があるのだろうか。またあるとすればそれは社会生活とどう関わるのだろうか。フェミニズム、アート、文学など、海外の動きも含めて考える。	江原由美子（東京都立大学助教授）	江原由美子（東京都立大学助教授
5	女性とメディア	マスメディアは女性・男性をどのようなものとして伝え、また女性に関する情報・女性の声をどれだけ伝えているのかなどメディア内容の問題点を明らかにし、それがもつ意味や問題の背景などについて考える。そして、どのような方向にむけて改善を進めたらよいのかを探るため、進んだ取くみをしている国々の様子も紹介する。	村松泰子（東京学芸大学教授）	村松泰子（東京学芸大学教授）
6	セクシュアリティ	性と生殖に関する態度や行動をセクシュアリティという。現代社会における、セクシュアリティの変動とそれをめぐる社会問題を、ジェンダの変動と関連させながら、考察する。人工妊娠中絶・ポルノグラフィー等。また、「さわる－さわられる」事が、男性・女性にとって意味がちがうことを、セクシュアリティの違いから説明。	江原由美子 山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
7	主婦と家事	主婦の歴史、家父長制、労働としての家事などについて概観し、主婦とは何か、家事とは何かを考える。また、日本の主婦がどのような家事をどのようにしているかについて調査データを基に検討し、現代日本の主婦の活動を考察する。	直井道子（東京学芸大学教授） 目黒依子	直井道子（東京学芸大学教授） 目黒依子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	女性の職業・男性の職業	職業分野、職業選択、企業での処遇、引退など職業をめぐって女性は男性とどのように異なった状況に置かれているかを、産業化の程度や文化の差のある社会を比較しながら検討する。家庭や教育、価値観などとの関係が焦点となる。	岡本英雄（上智大学教授	岡本英雄（上智大学教授
9	女性と階層	社会的資源の不平等な配分である階層は、その不平等をもたらす要因によって職業階層、年齢階層などが考えられるが、性（ジェンダー）による階層もその一つである。性による階層が潜在的なものからしだいに顕在化していく過程を産業化との関係において考えていく。また、貧困と女性の構造的関連を考察する。	岡本英雄 庄司洋子（立教大学教授）	岡本英雄 庄司洋子（立教大学教授）
10	高齢期の男女	女性が高齢者になったときに遭遇する諸問題への対応柵（年金、介護など）は、現状では、女性に不利である実態とその原因を考察する。いろいろな社会での老後の様相をとおして、よりよい老後のあり方を考えてみる。	直井道子	直井道子
11	福祉活動の担い手	社会福祉活動の担い手の意識調査や実態調査等を検討し日本の福祉活動の担い手の多くが女性であることについて、の問題点を考察する。また北欧先進国の事例と比較し、福祉活動を支える社会的基盤や女性の意識の違いなどについても論じる。	安立清史（九州大学助教授）	安立清史（九州大学助教授）
12	政策のなかの女性	夫婦間の扶養義務を廃止したスウェーデン、中絶の是非で揺れるアメリカなどの例からもわかるように、ジェンダーにかかわる政策は、先進国の間で大きな論議を呼んでいる。女性政策・家族政策・性と生殖の管理に関する政策の現状と課題を明らかにする。	庄司洋子	庄司洋子
13	女性の市民活動・社会参画	日本の女性の市民活動・政治参加の現状を概観し、欧米民主主義先進国等で進展をみせている女性の公的・政治的活動への参画の新動向と比較する。そして、近年の日本の女性の政治参加動向の具体的事例を紹介しながら、それらが、「男女平等参画型社会」形成にむけたグローバルな女性運動の方向とどのように切り結ぶものであるかについて、活動の担い手、目標、課題等の点から検討を加える。	矢澤澄子（東京女子大学教授）	矢澤澄子（東京女子大学教授）
14	ジェンダーと開発	男性に比べて資源や機会へのアクセスや貧困・暴力への抵抗力に欠ける女性にとって開発とは何かを考えるために、途上国の例を中心に、先進国の援助による開発の社会・経済・文化的インパクトについて、ジェンダーの視点から検討する。	目黒依子	目黒依子
15	ジェンダーの未来	前回までの論点を整理し、変化している部分を明確にする。また、今回のシリーズで取り上げなかったテーマで、その重要性が増しているものを指摘し、検討する。世界の中の日本社会における日常生活をジェンダーの視点でとらえ直し、グローバル化と多元化が進む現代社会の変化と未来についてジェンダーの視点で展望する。	目黒依子	矢澤澄子 江原由美子 渡辺秀樹

＝ 逸脱の社会学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：清永賢二（日本女子大学教授）
主任講師：岩永雅也（放送大学助教授）〕

全体のねらい

どのような社会あるいは集団も必ず何らかの規範体系を持っている。そうした規範体系が成員に要求する行為や状態から一定限度以上外れた行為または状態を逸脱とよぶ。逸脱の範疇に含まれる行為、状態は、日常的な問題行動から犯罪まできわめて多様であるが、本講義ではそうした逸脱をただ単に形態的に整理して解説するだけでなく、規範との関係を常に考慮しながら、逸脱の持つ社会的意味を考察していく。特に、逸脱を「あるべからざる異常なもの」と見る立場の対極に立ち、通常の社会事象と同様に発生の要因とメカニズムあるいは社会的影響などを考察する。また、近年の逸脱の実態と傾向を把握し、その現代社会における意味についても検討を加える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	規範と逸脱	逸脱を定義し、逸脱論の基本的視座を提示する。特に社会や集団の支配的な文化・規範との関連で、逸脱の位置づけを試みる。さまざまな逸脱の形態を分類し、類型化を試みる。さらにこれまでの逸脱研究の系譜も概観する。	岩永雅也（放送大学助教授）	岩永雅也（放送大学助教授）
2	社会的変動と逸脱	デュルケムのアノミー、ショウ、マッケイらの社会解体などの概念を手がかりに、規範によって秩序と均衡が保たれている社会の中に逸脱が生じる要因とメカニズムを、個人と社会とのつながりという側面から検討する。	同上	同上
3	社会的緊張と逸脱	均衡状態にある社会の規範が弛緩した状況下で生じる、いわば'非日常的な'逸脱に対し、'日常的な'逸脱はむしろ社会的規範と個人的願望の間の緊張が高まった状況のもとで生じる。社会的緊張の強弱と逸脱との関連を探る。	清永賢二（日本女子大学教授）	清永賢二（日本女子大学教授）
4	逸脱文化の学習	現実の社会はグランド・セオリーが前提とするような単一文化社会ではなく、中心的な規範とは異なる多くの下位文化が存在する。逸脱的下位文化もその一つである。ここでは逸脱的文化の学習が逸脱を生むメカニズムを考察する。	岩永雅也	岩永雅也
5	ラベリング	逸脱する主体の側から逸脱を考察する逸脱論に対し、そうした行為を逸脱と規定して逸脱者を作り出す社会の側が持つ機能に焦点をあてたのがラベリング論である。社会が必然的に逸脱を作り出す、という観点から逸脱を俯瞰する。	同上	同上
6	逸脱研究の現状	1970年代以降、ラベリング論は理論的にも実践的にも閉塞状況に陥った。ここでは、現在の逸脱論の二つの潮流である、実践的立場からのラベリングと実証主義との融和、およびラベリングをさらに先鋭化した構築主義的アプローチの二者を中心に、ラベリング以降の逸脱論を検討する。	同上	同上
7	家族内規範と逸脱	家族は社会の中で最も基本的な規範単位である。近年における家族およびそれを取り巻く環境の変化が、家族内の規範構造にいかなる変化をもたらし、どのような逸脱を生んでいるのか、家族の社会化力に焦点を当てて分析する。	木村涼子（大阪女子大学助教授）	木村涼子（大阪女子大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	性と逸脱	「性」は逸脱の多くの部分に何らかの形で関わりを持っている。性に関わる逸脱には、レイプのような重大犯罪から日常的なセクハラまで著しい多様性があるが、その現状と根底に通流する社会的な意味について検討する。	木村涼子	木村涼子
9	学校と逸脱	学校は単に知識や技能を提供する場ではなく、日常生活を通じて社会の新たな構成員としての子どもに、何が正当で何が逸脱かを刷り込んでいく巨大な規範装置である。いじめなども含め、今学校で生じている逸脱を考察する。	清永賢二	清永賢二
10	都市空間と若者	都市は若者を引き付ける。都市の限られた空間には、その場限りのアノミーな雰囲気・気分が充満している。日常社会では逸脱とされる行為もそこでは普通に行われる。彼らの都市空間での行動を通じ青少年の逸脱の本質を探る。	同上	同上
11	逃避的行動	逸脱的行為は多かれ少なかれ他の社会構成員を害するものであるが、逃避的行動は自損的である点で逸脱の中でも特異である。自殺、家出、ホームレス、薬物依存など、さまざまな逃避的行動の意味と現状を分析する。	岩永雅也	岩永雅也
12	ホワイトカラーの逸脱	サザランドは、本来支配的規範の枠内にあるために最も逸脱から遠い存在と考えられていたホワイトカラー層にも、独自の様式と背景を持った犯罪や逸脱的行動があることを明らかにした。わが国でも近年増加しつつあるホワイトカラーの逸脱について検討する。	西村春夫(国士舘大学教授)	西村春夫(国士舘大学教授)
13	集団的逸脱と組織	ある種の犯罪の多くは、やくざやテキヤなどの逸脱集団との何らかの関わりによって生じるといわれる。さまざまな形態を持つ逸脱集団の構成と成立の背景、社会的機能などについて考察する。	同上	同上
14	逸脱の動向	犯罪、非行といった逸脱の量的な変化は、決して一様ではない。犯罪や非行の量的な動向を歴史的に検討し、さらにその傾向を国際的に比較することによって、わが国の逸脱の性格と特徴を時系列的に把握する。	清永賢二	清永賢二
15	逸脱をどう見るか	社会に規範が存在する限り、逸脱は不可避である。われわれの生きる近代社会が、一方で逸脱を逸脱として定義付けながら形成しつつ、他方ではそれを減少させようと統制に努めるのはなぜか。前半の理論編、後半の実証編の両者をふまえ、逸脱現象の見方、考え方を展望する。	同上	同上

＝国　際　社　会　学＝（Ｒ）

〔主任講師：梶田孝道（一橋大学教授）〕

全体のねらい

国境を越える社会現象や問題を、社会学の視点から分析する。それによって、国際政治学や国際経済学とは異なったアプローチを提示する。国民国家や国民社会という枠組みに乗りにくい問題を、一つには、国家を越えた存在（グローバル化や地域統合）に着目して、また一つには、国家の文化的コンセンサスを崩すようなエスニック・マイノリティや外国人労働者といった存在に着目して分析する。その際、特にエスニシティや民族の問題を重視したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際社会学とは何か	国際社会学が扱う主要なテーマについて述べる。社会学を、国内問題ではなく国際関係や国際社会の問題に適用するという意味での「国際・社会学」と、国民国家以外の単位（ＥＵ、地域、国境をまたいだ広域圏など）を分析するという意味での「国際社会・学」が二本の柱である。また、グローバリゼーションやグローバル・イッシューを扱うという意味では、それは「世界社会学」「地球社会学」とも言える。さらには、国際社会学の分析の際の重要な視点としては、「関係」とともに、「比較」という視点も重要であり、「比較社会学」ともいえる。こうした「国際社会学」の諸側面について述べる。	梶田孝道（一橋大学教授）	梶田孝道（一橋大学教授）
2	エスニシティとナショナリズム	民族ないしは民族運動の類型について述べる。民族運動は、大別して自己の歴史的領土（ホームランド）をもったナショナリズムと、それを持たない移民・難民の主張とに分かれる。移民・難民の主張や、西欧諸国の地域運動の中から社会を前提とした形でのエスニシティの動きが生じたことを紹介する。またエスニシティとは重なりながら、微妙に異なるナショナリズムについても触れる。	同　上	同　上
3	移民・外国人問題	人の国際移動の諸類型について述べ、続いて、事例として戦後西欧諸国が経験してきた外国人労働者問題の概要について述べる。定住化に至る過程、外国人問題の局面変化、第二世代問題、文化摩擦などについて説明する。日本の外国人問題がもつ特徴にも言及したい。	同　上	同　上
4	外国人労働者の受け入れの方式	しばしば言及される世界システムという議論を、世界都市と移民労働者という二つの焦点に注目しながら紹介する。国家とは異質な論理によって成長する世界都市とそれが抱える問題点に触れ、また新国際分業の下で、世界各地域で働く労働者と労働者の移動について紹介する。	同　上	同　上
5	業績主義社会のなかの属性主義	今日ではあたりまえとなったエスニシティや民族問題・ジェンダー問題が、近代化・産業化のなかで、そうした期待を裏切る形でなぜ生じてきたかについて説明する。業績主義の進行が、属性主義を消滅させるのではなく、むしろ属性に関係する問題群を生じさせる点を、「属性化された業績」「業績主義を支える属性」という視点に注目して説明する。それによって、次回からの本格的なエスニシティ論のための序論とする。	同　上	同　上
6・7	エスニシティ論の展開	１９７０年代以降、先進諸国で民族問題の噴出がみられた。高度成長期の中で、なぜ民族問題が噴出したか、なぜ従来の産業化論や近代化論はこの現象を把握できなかったか、について述べる。その際、「エスニシティ」という概念についても説明する。続いて、この民族現象を説明すべく登場してきた各種のエスニシティ論を紹介する。同化理論、原初的アプローチ、文化的差異に基づく労働分業論（国内植民地論）、エスニック集団競合論などについて、具体的な事例にも触れる形で紹介する。	関根政美（慶應義塾大学教授）	関根政美（慶應義塾大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	エスニシティ論の事例研究 －オーストラリア－	前回、前々回説明したエスニシティ論を使用しながら、戦後オーストラリアが経験してきた民族問題や移民問題について紹介する。そこでは、国内問題と国際問題とが、いかに密接に関係しているかが示される。具体的には、白豪主義の放棄、アジア諸国との関係、多文化主義の採用が議論される。	関根政美	関根政美
9	多文化主義をめぐる問題	オーストラリアのエスニシティ状況の説明を受ける形で、今度は、多文化主義一般について考える。オーストラリアに限らず、カナダ、アメリカ、西欧諸国などで多文化主義ないし文化的多元主義が語られることが多いが、多文化主義の誕生、展開、問題点などに触れ、そのメリットやジレンマについて議論する。	梶田孝道	梶田孝道
10	超国家・国家・地域	「国民国家」モデルについて述べ、このモデルが今日揺らぎつつある現実をＥＵを例に説明する。「国民国家モデル」にかわって、ＥＵ・国家・地域の「三空間並存モデル」が登場してきている点について述べ、併せて、その中で人々のアイデンティティがどう変化するかを考える。	同上	同上
11	三空間並存モデルの応用	前回説明した「三空間並存モデル」を使って、西欧諸国とは異なる地域を分析してみる。第一に、欧州統合が進行する西欧とは対照的に連邦が解体し、民族共和国が分離・独立した東欧・旧ソ連を分析し、どの点が西欧と異なるかを説明する。第二に、このモデルを過去の事例にも適用し、イギリスとスコットランドの民族問題の歴史的変遷を説明する。	同上	同上
12	グローバライゼーションとはなにか	中央集権主義と地方分権主義、連邦制について説明し、続いて連邦制と民族問題との関わりについて考える。多民族を抱える国家の類型として多極共存型民主主義などに触れ、また少数民族集団への対応をめぐって、リベラル多元主義、コーポレイト多元主義、アファーマティブ・アクションについても触れる。	同上	同上
13	世界都市と労働のグローバライゼーション	ここでは比較の観点から「後発効果」について述べ、先発国（先進国）と後発国（発展途上国）では、発展、近代化、社会問題、価値観などがどのように異なって現れるかについて述べる。併せて、学歴問題や日本的経営をめぐる問題を、Ｒ・ドーアの議論を紹介しながら説明する。さらに、後発効果の議論を応用しながら、先進国と発展途上国では民族問題や国民統合がいかに異なって扱われているかを述べる。	同上	同上
14	先発国と後発国 －比較社会学の視点から－	ボーダーレス世界の中で、現代社会の「文化」状況がどう変化しているかを論じる。一方では、地域統合や情報化の中でライフスタイルや消費行動などの「社会学的文化」の拡大がみられ、他方では、人の国際移動によって先進国は多民族・多文化化し、人種、宗教、民族などの「人類学的文化」の噴出が見られる。ここでは、二つの文化に着目しつつ、「越境する文化・越境しない文化」にも触れつつ、現代の文化状況を説明する。	同上	同上
15	文明の問題と文化の問題	全体をまとめる意味で、「民族問題」や「文化摩擦」に対して「文明」と「文化」という二つの視角からアプローチする。「文明」とは、一定の普遍的性格をもち、他の国や地域に移植可能なものであり、そこでは効率や生産性が重要な意味をもつ。これに対して「文化」とは、宗教、民族性などのように特殊な性格をもつ。現在の「民族問題」や「文化摩擦」には、この二つの問題とが混在している点を指摘し、二つの問題群の解決をさぐる。	同上	同上

＝メ　デ　ィ　ア　論＝（ＴＶ）

（主任講師：吉見俊哉（東京大学助教授）
主任講師：水越　伸（東京大学助教授））

全体のねらい

私たちは、現代の急速なメディア状況の進展と、それに伴うコミュニケーションや文化の混沌とした変化を、どのようにとらえていけばいいのであろうか。この講義の目的は、そのような認識枠組みを手に入れるために、近代社会とメディアがいかなるかたちで相関し、展開してきたかについて、歴史社会的検討を加えることにある。17、18世紀における印刷術と書物の普及から20世紀末のサイバースペースの展開にいたるまでの状況を、ほぼ時代順に検討していく予定である。社会や人間を捨象して情報技術の可能性ばかりを説く議論からも、情報技術やメディアのあり方を固定化した議論からも距離を取りつつ、情報技術、メディア、社会、人間の相互連関をなるべく幅広い視野の下で語っていくことを心がけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	メディア論の視座	一連の講義の目的や視点の置き方、進め方のスタイルなどについて、説明を加える。その上で近年注目されつつあるメディア論という領域が、どのような背景の中から登場し、なにを課題として取り組んでいるかといった点について、なるべく広い視野のもとで座談会形式で明らかにしていく。	吉見俊哉（東京大学助教授） 水越　伸（東京大学助教授）	藤竹　暁（学習院大学教授） 吉見俊哉（東京大学助教授） 水越　伸（東京大学助教授）
2	印刷革命と活字の文化	印刷術の発明とその社会的影響について論じる。活版印刷の発明がいかなる歴史的文脈のなかで起き、宗教改革やルネッサンス、科学革命などとどのように結びついていったのか。印刷術は人間の知識や読書のあり方をどのように変えたのか。されでもなお、19世紀に到るまで、活字文化と口承の文化はどのような関係を保っていたのか。できるだけ多くの図版資料を使いながら、これらの点について解説していく。	吉見俊哉	吉見俊哉
3	鉄道と電信がつなぐ国土	電信網と鉄道網は、相互に密接に結びつきながら、近代国民国家の均質的な時間と空間の広がりを可能にしていった。18世紀から19世紀にかけて、どのような情報と交通のシステムが電信や鉄道に先行していたのかも紹介しながら、とりわけ19世紀を通じ、電信と鉄道がどのようにして近代国民国家の骨格を形づくっていったかを論じる。	同　上	同　上
4	近代ジャーナリズムの展開	市民社会とブルジョア文化の発展のなかで、新聞を中心とする近代ジャーナリズムが果たしていった役割と変容に焦点を当てる。英仏では1830年代あたりから、日本でも日露戦争以降に進行するジャーナリズムの商業化についても考える。また、日本については、草創期の新聞や姿や瓦版から新聞への展開についても言及したい。	同　上	同　上
5	電話の誕生と声の文化	19世紀後半から、電話や蓄音機からラジオに到る声の複製技術が次々に誕生する。ここでは、人間の声を複製していこうという考え方がどのような技術のイメージと結びつきながら発展してきたのか。初期の電話や蓄音機を19世紀の人々はどのように受けとめ、どのようなメディアとして社会化していったのかについて論じる。	同　上	同　上
6	パノラマ・写真・映画	電話や蓄音機が、人間の身体性を聴覚次元で複製していったとするならば、写真や映画は、視覚次元で身体と環境の大規模な複製化を進めた。ここでは写真から映画の発明までの映像技術の発展過程をたどりながら、人間の視覚性の変容とイメージの自立化のプロセスについて論じたい。パノラマやジオラマなどの同時代の技術にも言及する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	無線からラジオへ	19世紀末から20世紀前半期にかけての時期に、無線技術がはらんでいた多様な可能性を再検討するとともに、その中から、さまざまな社会的条件と大衆の欲望のもとで、ラジオ放送というマスメディアとしての在り方が突出して発展してきた過程とそれが他のメディアにもたらしたインパクトについて、内外の博物館、アーカイブなどを利用しつ明らかにする。	水越　伸	水越　伸
8	テレビの登場と視聴者文化	ラジオと同等の歴史を持つテレビジョン技術がどのように展開し、結果としてラジオ放送の発展版として位置づけられるようになったか、確立したテレビの中にはラジオや映画など既存のメディアのいかなる部分が受け継がれ、いかなる部分が新しくはじまったか、そしてこのメディアをめぐる視聴者増とその文化的特性について論じていく。内外の博物館、アーカイブなどを利用し、テレビの技術、番組、社会的な影響過程について跡づける。	同　上	同　上
9	マスメディアの確立	おもに第二次世界大戦以後の世界において、新聞、テレビ、出版などのマスメディアは安定して発展を遂げ、国家、あるいは資本の論理のもとで体制的に確立し、いわゆる独占集中化が進行していった。この発展過程に反比例して、我々が関わることのできるメディアの多様性は失われていくことになる。ここでは、おもに日米における新聞、テレビの事例を取り上げつつ、これらの実態を検証していく。	同　上	同　上
10	メディアとしての広告	ラジオやテレビ、大衆雑誌などのマス・メディアは、その成立時から資本主義の市場戦略と結びついていたが、1920年代以降のアメリカにおいて、巨大な広告産業を成立させ、そのコマーシャリズムによって大衆文化を組織していく。ここではとりわけ20世紀のコマーシャリズムの進展との関係において、今日のメディアの意味を考える。	吉見俊哉	吉見俊哉
11	メディア論の現在	この回の講義には、中間まとめの意味を持たせ、討論形式でメディア論の現代的展開の状況を明らかにしていく。マスコミュニケーション論からメディア論への連続性と非連続性、マクルーハン、イニスをはじめとするトロント学派の再評価の状況、広義のカルチュラル・スタディーズの中での位置づけ等を中心に議論を進める予定である。	吉見俊哉 水越　伸	藤竹　暁 吉見俊哉 水越　伸
12	メディアとしてのコンピュータ	パーソナル・コンピュータ（ＰＣ）は、それまでの近代的産業社会の組織活動を支えてきた大型、中型コンピュータとは一線を画し、1970年代のカウンター・カルチャーの影響を色濃く受けて出現した。ＰＣの展開過程を、市民社会と産業資本の力学関係のもとで、歴史的に再検討をしていくとともに、当初それまでのマスメディアなどとまったく異質であったものが、いかにして互いに接近、融合しつつあるかを明らかにする。	水越　伸	水越　伸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	新しいメディア表現者の台頭	コンピュータ・ネットワークの中に展開するサイバースペースは、電話、テレビなど従来のメディア文化の特性を継承しつつも、新たなメディア空間として、1990年代以降我々の社会や身体に多様な影響を与えつつある。この新たなメディア空間をめぐって巨大メディア資本が繰り広げる政治経済的攻防と、そこに立ち現れる新たなメディア表現者たちの生態を追いつつ、公共圏としての可能性と	水越　伸	水越　伸
14	メディアのグローバル化と日本	これまで支配的だったマスメディアは、程度の差はあれ国民国家の枠組みと合致して体制的に確立していた。しかし、近年の情報技術の展開の中でその体制が急速に変容しつつある一方、新たな権力関係も現れつつある。おもに1980年代半ば以降に生じた、いわゆるグローバル・メディアの展開を、内外の取材をもとに跡づけるとともに、その中での日本の位置づけについて論じる。	同　上	同　上
15	メディア論の構図	15回の講義のまとめをおこなう。また、討論形式で、メディア論の展開の意味を、広く19世紀的な学問体系の変容の中に位置づけ、科学技術論、都市論、公共圏論、リテラシー教育などとの関係性を明らかにし、今後の課題を浮き彫りにしていく。	吉見俊哉 水越　伸	藤竹　暁 吉見俊哉 水越　伸

＝商　　法（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：森本　滋（京都大学教授）〕

全体のねらい

公開会社の実態を前提に、株式会社の設立・管理運営機構・資金調達さらには合併等の組織再編にかかる商法と証券取引法の規制および企業取引活動に関する基本的な法制度を概説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	株式会社、とりわけ、公開会社の組織の基本構造の概要（商号・商業帳簿・機関等）と公開会社にかかわる基本的な法規制（商法・証取法・独禁法・経済法等）を解説する。	森本　滋（京都大学教授）	森本　滋（京都大学教授）
2	経営管理機構その一（株主総会）	公開会社の株主の法的地位を説明した後、株主総会の招集手続・議事運営・権限、および、株主代表訴訟等の株主の監督是正権について解説する。	同　上	同　上
3	経営管理機構その二（企業経営）	取締役の法的地位を整理した後、取締役会制度と代表取締役および業務担当取締役について検討する。	同　上	同　上
4	経営管理機構その三（経営コントロール）	公開会社の健全かつ効率的な経営を確保するために、商法が規定する経営コントロールないしチェック機構（取締役会・監査役・会計監査人）の概要を示した後、決算手続における経営チェック・システムについて説明する。	同　上	同　上
5	合併分社化・持株会社	公開会社の合併・営業譲渡、分社化としての子会社設立、さらに、持株会社の設立について、商法・証券取引法、さらに、独禁法の規制の概要を解説する。	同　上	同　上
6	資金調達	公開会社の資金調達方法としての新株発行と社債の募集について、商法と証券取引法の発行開示規制を合わせて解説する。	同　上	同　上
7	計算・監査・公開（企業会計法）	公開会社の計算・監査・公開制度を、証取法の継続開示規制と合わせて解説し、公開会社における開示の機能について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	商法と証券取引	公開会社の組織に関する体系的な法規制としての、商法と証取法の関係を整理した後、証券取引の公正確保および証券業者にかかる証取法の規制内容について解説する。	森本　滋	森本　滋
9	閉鎖会社の特殊性	中小規模の株式会社と有限会社の管理運営、さらに、資金調達を巡る問題（同族会社の法的問題）について解説する。	同　上	同　上
10	銀行と企業	銀行（金融機関）が、企業の組織活動および取引活動に対してどのような役割を果たしているか、とりわけ、企業の資金調達と手形・小切手取引における銀行の役割を説明し、銀行法についても解説する。	同　上	同　上
11	約束手形と小切手	企業取引における決済手段としての約束手形と小切手、さらに、信用取引を助長し金融手段としても利用されている約束手形について、銀行取引と関連付けて解説する。	同　上	同　上
12	企業取引と民法・商法	企業取引にも取引にかかる一般法である民法が原則として適用されるが、商法は民法の特則ないし特別規定を定める。この商法の特則の解説を通して企業取引の特色を明らかにする。なお、消費者保護の問題についても簡単に触れる。	同　上	同　上
13	問屋・運送業・倉庫業	企業の取引活動を補助する補助商として、問屋・運送業・倉庫業等がある。これらの補助商にかかる商法の特則と関連業法について触れた後、貨物引換証・倉庫証券と為替手形についても簡単に解説する。	同　上	同　上
14	保険と代理商	保険制度について概説した後、家計保険を巡る最近の法的問題（変額保険・団体保険等）について、代理商・保険ブローカー制度と併せて検討する。	同　上	同　上
15	まとめ	これまでの講義内容をまとめたあと、今後のわが国の企業法制の在り方について検討する。	同　上	同　上

＝雇用と法（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：諏訪康雄（法政大学教授）〕

全体のねらい

労働者と使用者との間に成立する労働関係は、信頼と対立の契機を内包している。労働法は主として対立の契機への対応を主眼としつつ、全般的な利害調整規準を提示する法領域である。労働市場をめぐる法、個別的労働関係をめぐる法、集団的労働関係をめぐる法の三者を中心に構成される労働法の構造と機能について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	労働法とは何か？	労働法の特徴について概説する。その過去と現在を眺めて、労働法の誕生のいきさつ、その後の発展と果たしてきた役割、現時点におけるその姿などをめぐり、簡単な考察を加える。ここでは、欧米諸国で発展してきた労働法とその理論が中心となる。	諏訪康雄（法政大学教授）	諏訪康雄（法政大学教授）
2	日本の労働法	明治末期ころかせ労働立法が現われはじめた日本では、その後、労働法がどのように発展してきたかを概説する。とりわけ欧米諸国と相当に異なる社会経済状況のなかで、どのような特徴を有するに至ったかを、立法、判例および法理の各面から考察する。	同上	同上
3	採用と法	労働関係の成立は採用に始まる。この採用をめぐり労働法はどのような利害調整規準を用意してきたか。採用プロセスの流れに沿って法的な問題点を説明し、労働法が用意した問題解決手法を考察する。採用、内定、試用期間などが中心となる。	同上	同上
4	配置と法	採用された労働者は、初期研修などを経たうえで、しかるべき職務に配属される。使用者の配置の権限は人事権と呼ばれる一連の権限の核となるものの一つである。配置、配置転換、転勤、出向、転籍などをめぐって、労働法がどのような判断の仕方をするかを見る。	同上	同上
5	服務と法	労働者は職務を誠実に行なうことを要求される。使用者の指揮命令権のあり方を中心にして、服務をめぐる法的問題点を説明する。服務規定、懲戒処分などの論点にも及ぶ。ともすれば無限定な服務要求が出がちななかで労働法はどういった限界づけを行うのか。	同上	同上
6	労働時間と法	労働時間、休日、休暇などをめぐる法規制のあり方を中心に説明する。これらの問題は労働者の労働義務の範囲を確定し、人間的な働き方を確保するうえで、非常に重要な点である。時間短縮などの動きとその達成手法との関係についても言及する。	同上	同上
7	賃金と法	労働者が働いたことに対する報酬は、経済的なものにとどまらない。働く喜び、人間的成長などが指摘される。だが、賃金、賞与、退職金などがまるで期待できないのでは、働く喜びも何もない。労働法は賃金についてどういった法規制をするか考察してみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	安全衛生・労働災害と法	安全で衛生的な環境で働けることは、労働関係の基本中の基本である。たが、必ずしも理想どうおりにいってない例が多くある。労働災害と職業病の予防としての安全衛生の確保ならびに発生した場合への対処として、労働法はどのような対応策を用意しているか。	諏訪康雄	諏訪康雄
9	退職と法	労働関係の終了原因には、退職、解雇、死亡などがある。この退職などをめぐっては、労使間の利害が激しく衝突することも少なくない。労働法が用意する利害調整規準をめぐって考察する。日本型と呼ばれる判例法理のあり方についても検討を加えよう。	同上	同上
10	労働組合と法	個人では使用者と十分な交渉ができない労働者に対して、法は団結して交渉力を高める道を用意する。労働組合の結成と運営、団体交渉、争議行為、労働協約など、労働組合法を中心として法領域について説明する。集団的労働関係法、労使関係法の考察である。	同上	同上
11	非典型雇用と法	パートタイム労働、派遣労働、契約労働といった新しい働き方が広がってきている。フルタイムで長期に雇用されて働くという典型雇用とは異なる世界の拡大は、労働法にどのような課題を提起し、法はどのような解決策を形成してきているのだろうか。	同上	同上
12	機会均等と法	雇用機会を均等に用意させるため法が規制を加えるようになってきている。日本では男女間の機会均等が中心だが、外国では人種、年齢などでの差別を禁止し、しかも雇用以外へもこれを広げる動きも顕著である。なぜ均等法なのかを含め検討する。	同上	同上
13	雇用政策と法	労働法は労働市場を前提として存在する。しかし、より狭義の労働市場法として、職業紹介、職業能力開発、雇用保険などの法制が存在する。これらは国の雇用政策の基礎をなし、その運用に関係するという意味で、雇用政策法とも呼ばれる。ここを検討する。	同上	同上
14	苦情・紛争と法	社会あるところに利害の対立は不可避で、それを処理すべきルールとルール運用手続きが不可欠である。労働法における苦情・紛争の処理システムはどのようになっているかを考察する。とりわけ日本の労働法の特徴を説明したい。	同上	同上
15	労働法はどうなるのか？	労働法の未来について考える。労働市場の変化、社会経済の変化のなかで、労働者像が変わってきている。労働関係も違いを見せてきた。これから21世紀に向かって、労働法はどのような課題を担い、どのように変遷していくことだろうか。	同上	同上

＝現代法の諸相（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：水野忠恒（一橋大学教授）〕

全体のねらい

「法学出門」ともいうべき講義である。最近の社会問題となっている先端的法領域で、ようやく学問的体系化がなされつつあるもの、未だそこまで行っていないもの、合計５つを選び、新進気鋭の学者が分担して行う、「オムニバス講義」である。全体を通ずる特色は、公法・私法といった従来の学問体系に囚われない領域である点にある。今回は、租税法（水野：一橋大学）、社会保障法（岩村正彦：東京大学）、知的財産法（玉井克也：東京大学）、環境法（大塚直：学習院大学）、消費者法（大村敦志：東京大学）という内容である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	租税法① －租税の基本原則－	税制改革論議の基礎におかれるべき租税の原則、特に公平負担の原則をとりあげ、個人の租税負担の基準となる所得、消費、財産のそれぞれの特質について論じたのち、所得の概念について考える。	水野忠恒（一橋大学教授）	水野忠恒（一橋大学教授）
2	租税法② －所得課税－	所得概念の論議ののち、個人所得税の理論について、法人の所得税である法人税の課税の根拠ならびに法人税のあり方について検討する。いわゆる配当二重課税の調整という問題が法人税の中心的課題である。	同上	同上
3	租税法③ －消費課税－	所得税に対する批判として注目を集めるようになった消費支出税の論議を検討したのち、間接税としてのわが国の消費税とそのモデルである付加価値税について説明する。	同上	同上
4	社会保障法① －高齢化社会と社会保障法－	高齢化社会の到来によって、医療保障、日常生活の支援などを行う社会保障法はその重要性をますます増しつつあるが、他方で大きな変容を迫られている。私達の生活を支える社会保障法が高齢化社会において果たす機能とその変貌を考えたい。	岩村正彦（東京大学教授）	岩村正彦（東京大学教授）
5	社会保障法② －医療保障法と年金法－	社会保障法の中核をなす社会保険法を取り上げる。国民の医療へのアクセスを保障する健康保険法、国民健康保険法等の医療保障法と、老後の所得保障を行う国民年金法、厚生年金保険法等の年金法を概観し、これらの法分野の抱える問題点と今後の課題を考察する。	同上	同上
6	社会保障法③ －社会福祉法－	高齢者や障害者などに介護、必要な器具の供与、施設への入所といった便宜を提供する社会福祉法を概観する。とりわけ老人福祉の分野に着目して、現在押し進められている施設の充実、福祉労働力の増強、老人医療との連携などの政策や介護保険を中心に考察を加える。	同上	同上
7	知的財産法① 「情報」と法律	知的財産法、知的所有権法などといわれる分野は、経済的価値のある情報を法的な側面から考察するものと言える。現代社会における情報の価値という観点から、知的財産法の全体について、大きな枠組みを概観する。	玉井克哉（東京大学教授）	玉井克哉（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	知的財産法② 創作の保護	知的財産法が保護する情報のうち、主要なものは、創作的価値のある情報である。そうした観点から著作権法や特許法などについて解説する。現代社会において発生した新たな問題についても、言及したい。	玉井克哉	玉井克哉
9	知的財産法③ 営業標識の保護	知的財産法には、経済的価値のある情報を保護する法制度のほか、ブランドやマークについて保護する法制度も含まれている。そうした制度としての商標法と不正競争防止法について解説し、現代的な問題にも触れる。	同上	同上
10	環境法①	環境法に関して、その生成の歴史、特色、基本原則、体系、環境規制の手段等、総論というべき分野について解説する。その中で、環境計画、環境影響評価、汚染者負担原則にも触れたい。	大塚直 (学習院大学教授)	大塚直 (学習院大学教授)
11	環境法②	環境規制・整備・保全に関する法律に関し、重要と思われるものを摘出して説明する。具体的には、大気汚染・水質汚濁、廃棄物処理・リサイクル、野生鳥獣の保護等を中心として述べる。	同上	同上
12	環境法③	環境に関する民事訴訟及び行政訴訟の問題点を概観すると共に、公害に関する費用負担についても説明する。なお、地球環境問題についても言及したい。	同上	同上
13	消費者法① －消費者法とは何か	消費者と法との関わりについて導入的な説明を行う。消費者問題とはいかなるものか。消費者法が必要とされるのはなぜか。実際には、消費者法はどのように形成されてきて、今日、どのような問題をカバーしているのか。	大村敦志 (東京大学助教授)	大村敦志 (東京大学助教授)
14	消費者法② －行政の側から見た消費者法	消費者法を行政の側から見る。行政は消費者問題に対応するために、どのような法的手段を用いているのか。安全性や取引条件に関する規制行政、独占の排除などの競争規制、教育・情報提供などのサービス行政について説明する。	同上	同上
15	消費者法③ －消費者の側から見た消費者法	消費者法を消費者の側から見る。肉体的・経済的な被害を受けた消費者が救済を受けるためにはどうすればよいか。また、行政に働きかけることによってあるいは自主的な活動によって、積極的に消費生活のあり方を変えていくことはできないか。	同上	同上

＝政治過の程比較分析（'９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：大嶽秀夫（京　都　大　学　教　授）
主任講師：野中尚人（学　習　院　大　学　教　授））

全体のねらい

本講義は、日本とフランスの戦後政治を相互にかつ総体的に比較することをつうじて、政治過程の分析を具体的に行おうとするものである。両国には、戦後における厳しいイデオロギー対立、官僚主導の経済成長などの共通性と、議会や統治機構の上での相違性がある。これらの論点の検討をつうじて、政治過程の比較分析を試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	戦後イデオロギー対立の原型・フランス	第一部　歴史的アプローチ フランス革命に始まるといわれるフランスにおける左右の厳しい対立が、戦後どのように再生産されたかを、ドイツによる占領とレジスタンスの遺産、労使関係の展開、東西冷戦、植民地独立への対応などの争点をつうじて、検討する。	大嶽秀夫（京都大学教授）	大嶽秀夫（京都大学教授）
2	戦後イデオロギー対立の原型・日本	フランスの例と比較しながら、日本における左右のイデオロギー対立がどのように形成され、展開されたかを検討する。とくに、労使関係、再軍備と平和運動、東西冷戦、アジアにおける冷戦などの争点が日本の国内政治をどう特徴づけることになったかを検討する。	同　上	同　上
3	経済成長と政治指導・ドゴールと経済官僚	1960年代にヨーロッパで最も目ざましい経済成長を遂げたといわれるフランス経済において、政府の高級官僚（テクノクラート）の果たした役割や、それを支えた政治指導、とくにドゴールの役割を検討する。また、財界と政府の役割についても検討する。	同　上	同　上
4	経済成長と政治指導・池田・佐藤と経済官僚	1960年代における日本の高度成長を、大蔵省、通産省などの果たした役割と、それを支えた自民党の池田内閣、佐藤内閣の役割という観点から検討する。また、財界、業界、企業のレベルにおける政治と経済のかかわりについても検討する。	同　上	同　上
5	民主化から自由化へ：フランス	1968年の５月革命の与えた、社会的、経済的、政治的インパクトを検討し、そこから生まれてきた左翼・リベラル優位のシステムから、ミッテラン政権の誕生を経て、やがて市場競争を再導入する試みが登場するまでの過程を分析する。	同　上	同　上
6	民主化から自由化へ：日本	60年代末の地方自治体における革新首長の登場から、オイル・ショックを経て、労働運動が変質し、さらに、行政改革の名でネオ・リベラリズムが登場し、官と民との関係の再調整や福祉の見直しが行われていった過程を分析する。	同　上	同　上
7	1987年以降のフランスと日本	1980年代中期に中曽根首相とシラク首相の下に、民営化など新自由主義政策が導入されたあとの日本とフランスの、一見したところ対照的な展開を跡づける。とくに労使関係、福祉政策、対外的経済政策に焦点を置いて検討を加える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	政治過程の全体的構図	第二部　構造的アプローチ 半大統領制と議院内閣制、あるいは大統領と総理大臣との比較や、内閣、与党、議会、行政官僚制など、主たる政治制度・アクター間の関係を検討することを通じて、政治過程の全体的な見取り図を描く。	野中尚人（学習院大学教授）	野中尚人（学習院大学教授）
9	議会と立法過程	立法過程の実態、委員会の運営の仕方などに関して、憲法構造との関連を念頭に置きつつ比較検討し、内閣提出法案の優越制や審議の形骸化についてまとめる。また、議会内での討議のあり方と議員の能力・キャリアパターンとの関連性についても検討を加える。	同　上	同　上
10	行政官僚制の構造と機能	行政組織の構造、官僚のリクルートメント、天下りや出向、昇進の制度などを比較検討し、それが日仏の官僚のイデオロギーや組織利益、行動などにいかに影響を与えているかを分析する。また、行政と政治の相互作用を議員と官僚の関係から考察する。	同　上	同　上
11	政党と政党システム	主要政党の組織構造、党員の日常活動、派閥や政策機関・手続きなど、党内での政策・意思決定の仕組みについて論じる。また、政党間関係たる政党システムのあり方が、与野党間関係や政府－与党関係に対してどのような影響を及ぼしたかを分析する。	同　上	同　上
12	選挙と圧力団体	フランスにおける選挙活動の実態について紹介しつつ、公認決定や選挙運動、投票行動、政治資金との関連などについて比較検討する。また、労働組合や財界団体などの圧力団体活動の実態と、各団体が政党や行政に対して持つネットワーク構造について日仏比較を行う。	同　上	同　上
13	政治的リーダーシップ	フランスの大統領と日本の首相との政治的リーダーシップのあり方の違いを、与党との関係、議会との関係、スタッフのリクルートメントといった構造的側面から検討する。リーダーシップの強弱やスタイルが歴史制度的に規定されていることも論じられる。	同　上	同　上
14	政策決定のパターン	合意形成のあり方と、エリート・リーダーへの委任の形態を日本とフランスの間で比較検討する。また、対立調整における党首、国家のトップ・エリートの役割を比較する。さらに、与党と行政官僚制との間の関係構造や相互調整のあり方を考察する。	同　上	同　上
15	1990年代の政治変動	日本における93年の自民党単独政権から連立政権への移行、フランスにおけるコアビタシオンの頻繁な出現など、90年代に入って日仏両国の政治は大きく変動しつつある。こうした変動の意味を構造的・歴史的に捉えて分析する。	同　上	同　上

＝ 現代日本の政治変動（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：山口二郎（北海道大学教授）〕

全体のねらい

1993年以降の戦後日本の政治システムの大きな転換をあとづけ、変化の原因を探るとともに、これからの日本政治のあるべき方向性について考察する。政党政治、官僚制と行政改革、地方政治の新たな動き、市場参加など様々な側面から変化を浮き彫りにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	55年体制崩壊の虚像 (2) －連立政権の意義と限界	1993年政変の過程を振り返り、なぜこの時期に自民党単独政権が崩壊したのかを明らかにする。そのうえで、細川政権以降の連立政権が何を変えようとし、なぜ政治の転換に失敗したかを考察する。そして、残された課題が何であるかを考える。	山口二郎（北海道大学教授）	山口二郎（北海道大学教授）
2	55年体制崩壊の虚像 (2) －政党再編の夢と挫折	自民党単独政権の崩壊と同時に、政権交代可能な政党システムの必要性が叫ばれたが、自民党に代わる政党が生まれていないのはなぜだろうか。政党再編成論を振り返り、なぜ政党再編の試みが挫折したか、なぜ無党派層が増加したのかを考える。	同上	同上
3	55年体制崩壊の虚像 (3) －選挙制度改革がもたらしたもの	小選挙区比例代表並立制は、日本の制度をどのように変えたのか。政治改革の目玉として導入された新しい選挙制度を検証する。そして、政治改革の意義を再検討し、さらなる改革の課題について考える。	同上	同上
4	社会党の消滅	55年体制の一翼を担ってきた社会党は、なぜ政党再編の渦の中で消滅しようとしているのか。その歴史的役割をふまえ、土井ブームから村山政権、新党運動の挫折の過程を検証しながら、社会党の消長について考える。	新川敏光（北海道大学教授）	新川敏光（北海道大学教授）
5	利益団体と政治 (1) 労働組合と政治	長年革新勢力を支えてきた労働組合は、経済構造の変化の中で、その政党的役割をどのように変えようとしているのか、労働基準法改正、社会保障制度改革などの政策事例を検証しながら考える。	同上	同上
6	利益団体と政治 (2) 経済界と政治	長年保守政党を支えてきた経済界は、経済構造の変化の中でその政治的役割をどのように変えようとしているのか、規制緩和、財政再建、景気対策などの政策事例を通じて検証する。	同上	同上
7	官僚支配の動揺と変化	エイズ薬害事件、福祉汚職、金融不安と大蔵省など官僚制の失敗がなぜ90年代中頃に噴出したのか。組織的要因、政策的要因を掘り下げて考える。そして、官僚制による行政と行政責任のあり方について検討する。	山口二郎	山口二郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	行政改革という課題の浮上	1996年総選挙を契機に、行政改革が政権の公約となったが、なぜこの時期に行政改革が必要なのかを考える。そして、1997年の行政改革会議の議論を振り返り、行政改革に対する取り組みの仕方について検証し、真の改革課題についても考察する。	山口二郎	山口二郎
9	福祉国家の再構築	日本型福祉政策は、行政改革、財政危機の中でどのように再構成させているのか。また、高齢社会の到来の中で、どのような対応が行われているのかを検討する。	新川敏光	新川敏光
10	社会保障システムの再編	介護保険の導入、年金制度の改革、医療保険における負担の強化など、目まぐるしく動く社会保障政策について検討し、なぜ改革が必要か、改革をめぐる政治力学はどのようなものかを考える。	同上	同上
11	公共事業と政治	政治と公共事業の関係について整理し、政治・行政改革の中での公共事業改革の必要性について考える。また、財政再建によって公共事業がどのように影響を受け、それが政治にどのような影響を及ぼすかを検討する。	山口二郎	山口二郎
12	地方政治の新たな展開	官僚接待などの矛盾の噴出によって地方政治がどのように変化したかを追跡し、情報公開や行政改革を推進する新しいリーダーの登場の過程を分析する。また、新潟県巻町、沖縄、岐阜県御嵩町などの住民投票運動の背景についても検証し、地方における新たな民主主義の可能性について検討する。	同上	同上
13	分権改革の意義と可能性	地方分権委員会答申の意義と分権改革の今後の展開について考察する。また、21世紀のあるべき地方自治の姿についても考えてみたい。	同上	同上
14	日本の対外政策の変化	安保再定義を契機とする日米安保体制の変質の過程を検証する。また、地球環境問題、アジア経済の安定化など新たな課題に対する日本の対応を検討しながら、これからの日本の対外政策の座標軸について考える。	同上	同上
15	日本型民主主義の特質と今後の行方	21世紀の日本の民主主義のあるべき姿について考える。	同上	同上

＝金融論（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩田規久男（学習院大学教授）〕

全体のねらい

金融は私たちに預金をはじめとする貯蓄手段を提供するとともに、企業等に対しては資金を調達する手段を提供している。これらの金融活動は、国内総生産や雇用量や物価などのマクロ的な経済変数への影響を通じて、私たちの生活に大きな影響を及ぼす。この講義では日本の金融制度の仕組みを解説しつつ、金融活動をめぐる諸問題を説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	貨幣と決済システム	私たちの経済では、お金（貨幣）が様々な取引の決済手段として用いられている。貨幣が決済手段として機能するためには緻密、かつ安定した決済システムが存在しなければならない。第１回は日本の決済システムの仕組みについて説明する。	岩田規久男（学習院大学教授）	岩田規久男（学習院大学教授）
2	貨幣の貸借と資金の運用・調達	個人や企業の中には、一方に貨幣が余っているものが存在し、他方に貨幣が不足しているものが存在する。第２回は貨幣の貸借の仕組みと日本全体の貨幣の流れについて説明する。	同上	同上
3	金融機関の役割	貨幣の貸借には様々な取引費用がかかる。この取引費用をできるだけ小さくして貨幣が貸し手から借り手にスムーズに流れるようにするのが、各種の金融機関の役割である。第３回は金融機関の役割を情報の不完全性という視点から説明する。	同上	同上
4	日本の金融機関と貨幣の流れ	日本の金融機関の種類、各々の金融機関の機能の相違、及び、貨幣が各種の金融機関を通じてどのように流れるかを説明する。	同上	同上
5	銀行と貨幣の供給	貨幣を定義したうえで、貨幣は日本銀行と民間銀行とによって供給されること、及び両者の関係について説明する。	同上	同上
6	貨幣の需要と利子率	利子率とは何かを説明した後に、貨幣のさまざまな機能に着目しつつ、貨幣の需要と利子率との関係を説明する。	同上	同上
7	利子率の決定	利子率は、第５回で説明した銀行による貨幣供給と、第６回で説明した個人や企業の貨幣需要とを等しくするように決定されると考えられる。第７回はこの流動性選好説と呼ばれる利子率決定理論を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	利子率と投資	利子率は、企業の在庫投資や設備投資及び個人等による住宅投資に大きな影響を及ぼす。第8回はこれらの投資がどのようなメカニズムを通じて利子率に依存するかを説明する。	岩田規久男	岩田規久男
9	金融政策の手段	日本銀行による金融政策は貨幣の供給量や利子率に影響を及ぼし、利子率は企業等の設備投資に影響を与える。第9回は金融政策の手段にはどのようなものがあるかを説明する。	同　上	同　上
10	ケインズ・モデルにおける金融政策の効果	代表的マクロ経済モデルのひとつであるケインズ・モデルを用いて、金融政策が国内総生産や雇用量や物価に及ぼす影響を説明する。	同　上	同　上
11	古典派モデルにおける金融政策の効果	もう一つの代表的マクロ経済モデルである古典派モデルを用いて、金融政策が国内総生産や雇用量や物価に及ぼす影響を説明し、ケインズ・モデルと比較する。	同　上	同　上
12	国際金融と金融政策	為替レートと貿易とを考慮して、金融政策が為替レートへの影響を通じて国内総生産や物価にどのような影響を及ぼすかを説明する。	同　上	同　上
13	新しい金融取引	1980年代半ば以降から、金融先物、オプション、金融スワップなどのデリバティブと呼ばれる新しい金融取引が盛んになった。第13回では、これらの新しい金融取引の仕組みとその機能を説明する。	同　上	同　上
14	金融自由化－金融ビックバン－	金融システムの安定を図る金融規制は、規制がいきすぎると金融の非効率を招く。第14回は80年代の初め以後進められてきた金融自由化と、2001年に完成予定されている金融バックバンについて説明する。	同　上	同　上
15	金融規制と金融システムの安定	経済の安定にとっては、金融システムが安定していることが重要である。金融システムの安定を図る手段としての金融規制や預金保険機構等の仕組みについて説明する。	同　上	同　上

＝日本経済史（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：原　　朗（東京大学教授）〕

全体のねらい

近現代日本経済の歴史的展開を部門別に概観することに力点を置く。前近代の日本経済を概観したのち、戦前の近代日本における産業貿易・金融財政・社会階級構造と恐慌・戦争の意義を検討し、戦後の現代日本における高度成長と景気循環・対外経済関係を分析して、最終的には世紀転換期日の課題を自覚することを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	前近代の日本経済	古代・中世・近世の日本経済を考察する。旧石器時代・縄紋時代の原始的共同体、弥生時代における農耕共同体の成立・貢納制社会への移行と古墳時代・律令制国家・院政期・鎌倉期・室町期・戦国期など荘園制社会の諸階段、幕藩制社会の成立と展開を概観する。	原　朗（東京大学大学教授）	原　朗（東京大学大学教授）
2	資本制社会への移行	幕末開港の影響と倒幕運動の展開、明治新政府の成立と明治維新期の諸変革（地租改正・秩禄処分・殖産興業）、紙幣整理と小生産者の分解（日本型の原始的貯蓄）、企業勃興による産業革命の開始、自由民権運動と天皇制国家の成立などを概観する。	同　上	同　上
3	近代日本の産業貿易構造	軽工業部門における輸出産業の発展（紡績業・製糸業）と鉱山業（石炭・銅）、重工業部門の展開（重工廠・製鉄業・造船業）、農業部門と工業部門との関連、産業諸部門間の関連と貿易構造、商業その他諸部門の比重、植民地との関連などについて説明する。	同　上	同　上
4	近代日本の金融財政構造	明治新政府の財政経済策、産業革命期の銀行分業体系成立、日清・日露戦争の軍事財政と戦後経営、第一次対戦期の金融と財政、1920年代の経済政策体系、金解禁・井上財政と高橋財政、日中全面戦争・アジア太平洋戦争期の軍事財政などについて概説する。	同　上	同　上
5	近代日本の社会階級構造	資本制部門での労資関係と賃労働の状態で、労働争議・労働運動の展開、農業部門での零細自作農と地主小作関係、寄生地主制と小作争議、社会政策と調停法体制、中間層の広範な存在、資本家団体と地主団体・産業組合、財閥資本と独占体制などについて概説する。	同　上	同　上
6	近代日本と恐慌	1980年恐慌、日清戦後第一次・第二次恐慌、日露戦争後恐慌、日露戦後の景気循環、1920年戦後恐慌、1920年代の「慢性的不況」、1927年金融恐慌、1929～31年昭和恐慌などについて概説し、景気循環と恐慌が近代日本の経済と社会に与えた影響について検討する。	同　上	同　上
7	近代日本と戦争	産業革命と日清・日露戦争ならびにその戦後経営、台湾・朝鮮における植民地支配の展開と南満州の半植民地化、第一次世界大戦と対華二一ヶ条要求・西原借款、シベリア出兵、ワシントン軍縮、山東出兵、張作霖爆殺事件、ロンドン軍縮、満州侵略につき概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日中全面戦争期の日本経済	日中全面戦争と統制経済への移行、物質動員計画、外貨不足問題、国家総動員法、物動計画改訂、価格統制の展開、日米通商航海条約の廃棄、第二次欧州大戦、日独伊三国軍事同盟、北部仏印進駐、独ソ開戦、南部仏印進駐、対日資産凍結などにつき概説する。	原　朗	原　朗
9	アジア太平洋戦争期の日本経済	アジア太平洋戦争と戦時体制の強化、軍需生産の動向、労働力の動員、戦時下の農業、「大東亜共栄圏」の経済的実態、南方占領地からの物資略奪、中国占領地と植民地の支配戦時末期の増産政策、船舶不足問題、戦時経済の崩壊などについて概説する。	同　上	同　上
10	被占領下の戦後変革	アメリカ初期対日占領政策の形成、財閥解体・労働改革・農地改革、財政改革・地方行政制度改革、賠償問題、敗戦後の経済危機、傾斜生産方式の採用、冷戦と占領政策の転換、ドッジラインとインフレ収束・統制撤廃・労資関係の再編などについて概説する。	同　上	同　上
11	戦後日本の高度成長	高度成長の前提条件、朝鮮戦争と特需景気、経済復興と国際経済復帰、産業合理化、独禁法改正、外貨管理、景気循環の復活、重科学工業化の展開、工業生産力と技術革新、巨大企業と中小企業、労働力不足と労務管理、金融・財政政策と地域展開につき概説する。	同　上	同　上
12	高度成長期の社会的変化	都市化の進展、農工格差の拡大と農業の衰退、農業共同体の解体、耐久消費財の普及、モータリゼーション、生活水準の向上、進学率の向上、公団住宅の増加、大衆消費社会の実現、中流意識・保守主義の拡大、平均寿命の延長、ＭＥ革命の開始などを概説する。	同　上	同　上
13	戦後日本の景気循環	神武・岩戸景気、転型期不況と証券恐慌、いざなぎ景気、第一次石油危機と低成長への移行、スタグフレーション、第二次石油危機への対応、プラザ合意と円高不況、円高好況への転換とバブル経済、バブル崩壊と平成金融危機など景気循環に即して概説する。	同　上	同　上
14	戦後日本の対外経済関係	国際経済復帰、世界経済の拡大、対米関係、貿易自由化と賠償支払い、資本自由化、ベトナム戦争、国際通貨危機と変動相場制移行、東南アジア諸国との経済関係、「経済大国」化と通商摩擦の激化、ソ連東欧社会主義の崩壊などについて概説する。	同　上	同　上
15	世紀転換期の日本経済	公害問題の激化、過密・過疎問題、第一次石油危機、第二次石油危機、情報化の進展、財政危機と行政改革、金融自由化、企業社会の病理、1997年金融恐慌、高齢化社会への移行、地域環境問題、低開発国貧困問題、世紀転換期日本の課題などについて概説する。	同　上	同　上

＝欧米経済史（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：藤瀬浩司（愛知淑徳大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は資本主義と社会システムから成り立っていますが、この講義では資本主義の経済発展を、イギリス産業革命から現在までの約２世紀を中心に考察します。資本主義の発展に見られる大きな枠組みや流れに重点を置き、またとくに資本主義を構成する国民国家と世界経済という２つの要素に注目したいと考えます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ⅰ．歴史社会としての資本主義 共同体社会と資本主義	資本主義は16世紀に登場し、イギリス産業革命によって成立した歴史社会です。これ以前の歴史社会は共同体という関係を基礎とした、資本主義とは異なった社会システムでした。共同体社会の基本的性格とともに、完成された市場経済としての資本主義の特徴を考察し、さらにその構造へ変動に関する予備概念を説明します。	藤瀬浩司（愛知淑徳大学教授）	藤瀬浩司（愛知淑徳大学教授）
2	資本主義社会への移行	14世紀半ばから15世紀に西ヨーロッパでは市場経済の発展を伴った封建社会の解体が始まります。15世紀末の地理上の発見によって資本主義は急速に展開し、ヨーロッパを中心とした世界経済が生成します。こうした世界経済の分業体制、中心的諸国の経済発展や経済政策、さらにイギリス産業革命の前提条件を検討します。	同上	同上
3	Ⅱ．19世紀資本主義 イギリス産業革命	イギリス産業革命によって資本主義は本格的に展開を開始します。産業革命の過程、最初の産業革命としての特徴、イギリスの産業や社会、また世界経済に対する影響を考察し、さらに同時期のフランス革命など欧米の諸変革を検討します。またイギリス産業革命を起点とする19世紀の資本主義発展の段階と曲面を概観します。	同上	同上
4	イギリス資本主義の成熟	19世紀中葉イギリスは自由貿易政策に転換します。イギリス資本主義は19世紀の第３四半期に大きく成長し、世界の工業、商業、金融の中心としての地位を確立します。自由貿易と平行する制度改革、産業と金融の組織、また世界経済の大拡張をもたらす運輸革命（鉄道、海運、電信）と自由貿易体制について検討します。	同上	同上
5	欧米資本主義国の産業革命	西ヨーロッパの国々やアメリカ合衆国では、19世紀第３四半期の世界経済の拡張期に産業革命を達成し、イギリスを取り巻く中心工業諸国を形成します。これらの産業革命は、鉄道建設を起点とし、国家と金融組織の新しい役割に支えられていますが、それぞれの国の産業革命の特徴と社会経済構造に与えた影響を考察します。	同上	同上
6	周辺経済の分極化－工業化と原材料供給他	中心諸国の政治的経済的拡張は、地球上の広範な地域を世界経済の中に組込み、旧周辺地域を含めて新しい分業体系を創り出します。一連の周辺諸国は欧米に対抗して工業化を実現しようとし、他の地域は世界市場向けにもっぱら原料や食糧を供給する地域に転化されます。周辺的工業化や原材料供給地形成の特徴を考察します。	同上	同上
7	19世紀末大不況	1873年の世界恐慌以後約４半世紀は通常大不況と呼ばれている時期です。しかしこの時期は景気循環の「不況」ではありません。世界的に価格や利子率は低水準に留まりましたが、経済成長は鈍化したものの持続していました。大不況期の構造変動を技術、生産方法における変化の動き、世界市場の再編成について検討します。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	Ⅲ．20世紀資本主義 20世紀資本主義発展の特徴	20世紀の資本主義は19世紀に見られた資本主義とは異なった特徴を持っています。20世紀資本主義は曲折を経ながらも、アメリカにリードされアメリカを中心に構成されていった資本主義です。その構造や特徴を概括するとともに、最近の統計的整理に基づいて全体の時期を２つの段階と４つの曲面に区分します。	藤瀬浩司	藤瀬浩司
9	大型企業体の出現	19世紀末から新鋭産業において一連の大型企業体が出現します。大型企業体は大量生産・大量流通により低コストを実現し、巨大な市場を創出していきます。こうしたタイプの企業体が成長し、様々な分野を支配していく過程が、20世紀資本主義の発展の原動力になります。大型企業の特徴と社会経済への影響を検討します。	同上	同上
10	世界経済の構造と国際経済システム	世界経済の稠密化の中で20世紀初めに世界経済の新たな構造が現れます。第１に中心機能が、金融の中心と工業生産の中心に分化し、第２に周辺的工業国が形成され、最後に世界的規模での原材料供給地が開発形成されます。こうした構造の特徴、その上に成立する多角的決済システムや国際金本位制を考察します。	同上	同上
11	帝国主義と戦争	二つの世界対戦は列強国の帝国主義的対立を原因としています。植民地帝国のイギリスやフランスに対抗して、多くの後発国は自身の支配地域を獲得しようとしました。こうした対立の根源、支配地域における独立運動や反帝国主義運動、社会主義との関連、新しい選択としてのウイルソンの政策構想について検討します。	同上	同上
12	1930年代大不況と戦時経済	第１次大戦後ヨーロッパの経済回復は遅く、アメリカだけが繁栄を享受していました。しかし1929年恐慌とともに世界は膨大な失業を伴う長期不況に陥ります。金本位制は崩壊し、世界経済はブロック経済に分解しました。各国の不況と克服策、国際的な再建の努力、戦時経済における国家の経済管理について検討します。	同上	同上
13	アメリカ体制と経済改革	第２次世界大戦によりアメリカを中心とする世界体制が、それに対抗する拠点としての社会主義圏を含みつつも成立します。また各国で経済改革が実施されますが、それは国家の経済管理における責任を前提に新しい方向と秩序を創出しようとしました。戦後世界体制、経済改革、国際的な協調機構の特徴や意義について検討します。	同上	同上
14	資本主義の黄金時代の光と影	20世紀の第３四半期に多くの資本主義国が高水準の経済成長を達成します。アメリカ型の生産方式が西欧や日本に広がり、新しい分野を支配してゆき、同時に国家は経済成長のため総合的手段を講じました。しかし国際的には発展途上国問題や社会主義経済の行詰まりが発生しました。黄金時代の構造と問題点について検討します。	同上	同上
15	成長国家の終焉と再編集	黄金時代の経済成長は1960年代末から70年代初にかけ悪性のインフレーションの進行と戦後国際金融システムの崩壊によって終わります。従来の制度や政策が有効制を失い、戦後の国際体制が大きく変化する過程を考察するとともに、情報革命、経済のグローバル化、アジア経済の成長など新しい資本主義の方向を展望します。	同上	同上

＝ ジェンダーの社会学（'９９） ＝ （Ｒ）

〔主任講師：江原由美子（東京都立大学助教授）〕
〔主任講師：山田　昌弘（東京学芸大学助教授）〕

全体のねらい

この講義は、ジェンダーの視点から現代社会をとらえ直し、よりより社会生活・社会関係のあり方についての考察を深めることをねらいとする。前半においては、性別という現象への分析力を高めることを主眼とした講義を行い、その後、家庭・職場・福祉・政治などの社会生活諸領域の考察を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ジェンダーとは	ジェンダーという言葉について説明を行い、ジェンダーという言葉が現在どのような意味で使用されているか、またその背景にはどのような問題があるのかを概説する。	江原由美子（東京都立大学助教授）	江原由美子（東京都立大学助教授）
2	女らしさと性役割	「女にしさ」というものが、どのように性役割（家事・育児役割）と関連しているかについて考察する。女性の性役割についてのこれまでの研究を概観し、性役割を役割取得していく過程における「女らしさ」という美意識・価値観との関わりを追う。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘（東京学芸大学助教授）
3	男らしさと性役割	女らしさが問題になると、その対極にある「男らしさ」にも注目が集まる。最近は、男性学を銘打つ研究も現れ、「男らしさ」研究が盛んになりつつある。従来の男らしさはどのように捉えられたかを考察し、「男性解放」について考える。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
4	トランス・ジェンダー、トランスセックス	同性愛・性転換など、「セクシュアリティー」の領域で、従来の男性・女性の枠組みを越える現象が話題になっている。これらの人々の意識や運動などを考察することを通じて、根本的なレベルでのジェンダーを理論化する。	同上	同上
5	恋愛・結婚	多くの人は、恋愛・結婚において、自分の性別を身近に感じ始める。人を好きになり、一緒になるという時にもジェンダーが関係していくる。恋愛対象、恋愛関係、配偶者選択にかかわるジェンダー現象を探究する。	同上	同上
6	リプロダクション－子産み・子育て	出産期は、夫婦関係・男女関係におけるもっとも大きな危機の一つである。出産をめぐる男女の意識のズレ、子育てをめぐる夫婦の葛藤をジェンダーとの関連で考察する。生殖医療の問題にも言及する。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘
7	家事とジェンダー	家事は従来女性の担当とされてきた。家事に込められる意味、特に「家事は愛情表現である」という意識が、女性への家事の押しつけに繋がっている。家事は、歴史的にどのように成立し、女性に割り当てにれて行ったかを明らかにある。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	職場とジェンダー	職場もジェンダーと無縁な場ではない。性別による職業や職位・職務の相違が、どのようにジェンダーと関連しているのかを明らかにする。女性職と性役割の関連性、近代官僚制と「男らしさ」との関わりなど。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘
9	セレモニーとジェンダー	固定的なジェンダー関係は、伝統的な慣習の中に埋め込まれている。しかし最近では、伝統にとらわれないセレモニーも模索されている。結婚式とお葬式、お墓の問題などをとりあげ、その中にみられる新しいジェンダー関係の模索を考察する。	江原由美子 山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
10	セクシュアリティーと家族	男女の性意識、性行動は、大きく異なるといわれている。通常、男性の性欲は自然で攻撃的であり、女性の性欲は受動的といわれている。セクシュアリティーのジェンダー差の意味と、男女関係に与える影響について論じる。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
11	女性に対する暴力	最近、レイプなどの性暴力や、ドメスティクバイオレンス（夫から妻への暴力）が、社会問題化している。これらの問題を追うなかで、「男性の攻撃性」「女性の受動性」など従来のジェンダー観をとらえ直すことを試みる。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘
12	性の商品化	買売春問題は、非常に多岐にいわれたる社会的要因と非常に深い心理的問題とを伴っている。買売春問題を一つの手がかりとして、現代社会において様々な形をとる「性の商品化」現象を、ジェンダーとの関連性において考察する。	同上	同上
13	介護とジェンダー	ケア（介護・看護など）の担い手の大多数は、家族の中でも外でも女性である。ケアの場面で女性が期待される理由を、「さわること」のジェンダー的意味の考察を通じて明らかにする。高齢化が進む中で、介護における男女平等とは何かを考える。	山田昌弘	江原由美子 山田昌弘
14	セラピーとジェンダー	最近、心の悩みやセラピー（心理療法）に対して関心が集まっている。その中で、従来のセラピーのやり方が、男性中心に偏っているという批判も出てきた。そこで、フェミュスト・セラピーを紹介しながら、臨床場面におけるジェンダー問題を考察する。	同上	同上
15	ジェンダー改策と未来	従来女性改築と呼ばれてきた領域で、男性を対象として改築の必要性が主張されてきている。ジェンダー改築のこうした新たな動きは、ジェンダー秩序を変えることができるのか。望ましい本来とは何かを展望する。	江原由美子	江原由美子 山田昌弘

＝都市空間の比較社会学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：倉沢　進（放送大学教授）〕

全体のねらい

都市社会学という学問がどのような都市的現実、都市の実際の問題状況から生まれ出たのか、空間構造に焦点をあて都市社会学の展開を見る。１～７は、理論とその理論を生んだ都市 ― パリ、シカゴ、ボストン、メリダ（メキシコ）という展開の舞台で、シカゴ学派都市社会学とそれに対する批判・反批判の流れを検討する。８～10は、ヨーロッパ、東アジア、東南アジアの都市の特色を、それぞれのキーワード（広場、風水、バザー）に即して示す。11以下は日本の都市、特に東京を中心として、その社会・空間構造と変動を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	14番目のパリ	G.Simmelの見たパリ、14番目屋の話を導入として、都市社会の意味を考える。 これを受けて都市の概念規定を吟味する。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（大阪大学教授）
2	20世紀初頭のシカゴ	都市社会学を生んだ20世紀初頭のシカゴがどのうよな都市であったか。 アメリカの歴史、農村社会から工業社会への変動と、その中でシカゴが果たした役割。 またこの状況が都市問題の噴出をもたらしたこと。	松本　康（名古屋大学教授）	倉沢　進
3	大都市の同心円構造	ループと呼ばれる都心地区、周辺のスラム街などシカゴを彩る空間の紹介。 バージェスの同心円理論。貧乏な人はなぜ地価の一番高いところに住むか、の問いかけを手がかりに同心円構造の形成を観察する。	同　上	同　上
4	ベースマップと人間生態学	シカゴ学派都市社会学の形成の歴史。 都市問題の研究の方法としての社会問題基礎地図はどのような環境で生まれたか。 指導者パークと人間生態学方法。	同　上	同　上
5	ボストンの社会文化生態学	歴史の散歩道を手がかりに、ボストンという都市の歴史上の位置を理解する。 ファイアレイの研究したボストン都市の３つの事例地区を見る。 歴史的都市の類型と、同心円構造を歪曲する社会的要因の相互関係。 イーストエンドから、ストリートコーナーソサイアティ研究 ― ギャング社会関係。	倉沢　進	倉沢　進
6	アーバニズムと都鄙連続体	シカゴ学派都市社会学の大成物ワースのアーバニズム理論の紹介。 その成立とかかわったレッドフィールドのユカタン半島４つの地域社会の研究。 民族社会と都市社会の連続体概念。	同　上	同　上
7	前産業型都市とメキシコ都市の変容	アーバニズム図式に対する批判。その一つのショウバーグの前産業型都市都市の類型。 貧乏な人はなぜ郊外に住むか。シカゴモデルと異なる空間構造の説明要因。 前産業型都市と植民都市。変容を説明する理論 ― アーバニズム。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	広場とヨーロッパ都市	広場を中心に持つヨーロッパの中世都市。その空間構造と社会構造。 M.Weberの市民都市論を映像と共に吟味する。 あらためて中世市民都市と、近代大都市。	倉沢　進	倉沢　進
9	風水の東アジアの都市	中国の風水思想と都市 朝鮮におけるその変容 ソウルの空間構造	吉田光男（東京大学教授）	倉沢　進
10	バザールと東南アジアの都市	途上国社会と首位都市 バンコクの都市形成 市場 新中間階層とスラム居住層	松薗祐子（いわき明星大学助教授）	倉沢　進
11	日本都市の類型	宮処と市をキーワードとする古代都市。 城下町、宿場町など近世の都市類型と、明治以降の都市発展の連続性と断絶性。 倉沢の発展類型 ― 伝統消費型都市の類型。鈴木の産業都市。	倉沢　進	倉沢　進
12	東京の社会地図	社会地区分析の方法、因子生態学の発展、ロンドン社会地図、東京社会地図の方法。 総合型都市としての東京。江戸から東京への発展と社会的、空間的変容。 日本都市の混住性とセグリゲーション。セクター型とゾーン型。	同　上	同　上
13	山の手と下町	セクター型の具体的実態としての山の手と下町の分化。 ドーアの下山町。 社会的パーソナル・ネットワーク分析の方法とファインディングス。	同　上	同　上
14	スプロールと団地	ゾーン型の実態としてのインナーシテイと郊外。 戦後都市化3段階。第2期の都市化の特徴としての郊外化。公団住宅団地建設の意味。 市民意識の特徴と、コミュニティ形成。アーバニズム理論の検証。	同　上	同　上
15	世界都市東京の変動	グローバリゼーションの概念。グローバリゼーションと世界都市の形成。 青いバナナとベソト。世界都市形成の社会的結果。 空間構造へのその反映。	松本　康 吉田光男 松薗祐子	同　上

＝環境社会学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：鳥越皓之（関西学院大学教授）〕

全体のねらい

三つのねらいがある。ひとつは具体的な事例を通じて環境を社会学的に分析する方法論の理解。二点目は、環境社会学的切り口で、環境や環境問題がどのようにみえてくるかを明らかにすること。三つ目は、環境について身近に感じるとともに、自分も考えみよう、あるいは環境をよくする活動に参加をしてみようと思ってもらえること。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境社会学とは	環境社会学的な考え方がどのようなものであるかを理解してもらうことをねらいとする。方法論的な討議は抽象的になりやすいので、ゴミを例として自分との距離（部屋のなかにゴミを散らかすと気になるが、遠い島の産業廃棄物には関心が薄い）の問題を通じて、私的なこと社会的なことを考える。また、国の文化の違いが環境政策にも影響することを述べる。	鳥越皓之（関西学院大学教授）	鳥越皓之（関西学院大学教授）
2	環境問題とエコーシステム	生態学の成立がエコロジカルな運動を起こすきっかけになり、アメリカに国立公園をつくらせるなど、自然環境保護運動がたかまった事実を述べる。ただ、生態学のエコーシステムの考え方と人間を要素とする社会システムの考え方とを合体させた有効なシステム論が現状では存在しない。それが環境政策にも反映して、具体的な施策としては両者を空間的に分けて、そん間を線引きをして生態域（自然域）、人間域（社会域）とに区分する方法がしばしばとられる。白神山地の森林とイリオモテヤマネコ（西表島）を例に人と自然との関係について考える。	同上	同上
3	森・川・海－コモンズ	村の空間をイメージするとよい。人びとの家や耕地の外側に広がる森や川や海は独特の使われ方をされてきた。それをコモンズ（入会）とよぶ。そこは人びとの共同利用地となっていた。この全くの自然ではなく、また田や畑のように人間の手によって強く改変された自然でもない、ちょうど中間に位置するのがコモンズである。イギリスなどヨーロッパの荒蕪地に春になると薄紫の花をつけるヒースの野原などがコモンズの典型である。	同上	同上
4	農業と自然	人びとは農地をとりあえず自然の一部とみなしているが、自然を遠慮なく人間の思い通りに変形させてしまったのが農業である。とはいえ、人間にとって農業は不可欠である。この農業の問題点は近代化の名の下に、化学化（農薬、化学肥料）と過度な機械化が行われたことである。結果的に農民の窮乏化、また消費者の健康の問題などを引き起こしている。農民からつくる楽しみを奪ったことも問題であろう。この近代化の批判から起こった有機農業について現場からの声をきく。	同上	同上
5	生活環境に焦点をあてる	「生活環境主義」というモデルをつかって環境問題の理解を試みる。それはエコロジー論（自然環境主義）とも近代技術が最終的には環境問題の解決に寄与するとみなす近代技術主義とも異なって、人びとの生活のシステムを軸において分析する方法がある。具体的には森林保全の問題を生活環境主義から解釈のしなおしをする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	住民は環境を自分で決められるか	環境保全を考えるとき「住民の主体性」がたいへん大きな役割をはたす。この住民の主体性を軸にして、住民の課題を問題とする。住民はいつも相互に連帯するわけではない。相互に意見を異にして対立することもある。また、住民は生活を積み重ねることによって「生活権」とでもよべるものをもつことにもなる。住民の環境創造的な試みもとりあげる。	鳥越皓之	鳥越皓之
7	社会的ジレンマとしての環境問題	汚水を流すことや、タバコのポイ捨てのように、自分一人ぐらいが注意を怠っても別にどうということはないにもかかわらず、そう思って全員が行うととんでもないことになる現象を社会的ジレンマとよぶ。社会的ジレンマ論を使いながら、多様な環境問題のあり方を考える。	同上	同上
8	ゴミとリサイクル	ゴミとはそもそも何を意味するのか、「もったいない」という価値観はないのだろうか、というような点から考えはじめ、リサイクルの活動の分析をし、新しいライフスタイルの模索をする。	同上	同上
9	開発計画と加害者・被害者	加害者および被害者がもっている多様な側面を開発計画とかかわらせながら分析をする。日本の伝統的な公害をあつかう預定であるが、視野を東南アジアにも広げることによって、それが現代のグローバルな課題であることを示したい。	同上	同上
10	公共事業と地元の利害	原発などが典型であるが、公共事業はたんに公共のためによくなるというのではなくて、たいへんつよく地元の利と害がからんでいる。アメリカの事例などを出しながら、エネルギー論にまで言及できればと思っている。	同上	同上
11	歴史的環境保全の運動	明治期に建てられた西洋建築を守る運動、また歴史的に由緒のある橋を保全する運動、さらには町並みの全体を保全する運動など歴史的環境保護運動の対象は広い。これがいわゆる文化財保護とどのように異なるかを検討しつつ、その結果や可能性を考える。具体的には沖縄の竹富島を対象としてとりあげたい。	同上	同上
12	景観の形成	歴史的環境保護の延長上にくらしの景観をとりあげたい。奈良の明日香や淡路、徳島の人形浄瑠璃に視点をすえながらまちづくりのありようを考える。	同上	同上
13	環境ボランティアとNPO	阪神淡路大震災後、ボランティアとNPOが注目されるようになった。かれらがどのような活躍をし、それが現代社会でどのような意味をもつのかを考える。オルタナティブ社会という新しい社会論の可能性を検討する。行政との関係にも言及する必要があろう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	内発的発展論とコミュニティ・ビジネス	内発的発展とは地域内部からの力で発展を行うことである。外部資本の導入がしばしばその地域の未来の発展をそこなうという考えから、地元（とくに若者）が集まって地域の発展を考え「地元のための」ビジネスを模索する。その可能性を問いかける。	鳥越皓之	鳥越皓之
15	政策と実践	全体のまとめを行う。地元の小さなコミュニティをキチンともっていることが環境保全にとって大切なことを事例を通じて説明をする。人間がコミュニティ（共同性）をもつ意味、将来の可能性についても言及する。	同上	同上

＝経　　営　　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営学とはどのような学問であるか、何を問題にするかを明らかにする。ここでいう経営学は、企業を対象にした実践科学である。実践とは理論と実際を統合する主体的行為、平易にいえば当事者の立場に立ってみることをいう。実践科学としての経営学では、企業の構造と行動がどのような行為原理に立っているかを明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営学の性格と課題	経営学が社会科学の一部であることは明白であるが、その対象や性格については、見解が分かれている。ここでは、組織体一般ではなく企業を対象にする経営学について、その性格（実践科学）と課題（構造と行動に内在する原理の解明）を説明する。	森本三男（青山学院大学教授）	森本三男（青山学院大学教授）
2	企業形態と企業体制	企業のために用意されている法的制度を、企業法律形態、略して企業形態という。代表的企業形態は株式会社であるが、それは元来成長した企業のための制度であるにもかかわらず、そのようには利用されていない。そのため、実態の発展を企業体制として問題にする。	同上	同上
3	現代企業の特質	現代企業とは、単に現代に存在する企業という意味ではなく、成長・発展をとげて経営的に高度と見なされる段階に到達している企業をいう。それは、所有と経営が分離し、経営上の自主性をもち、１個の社会的制度として環境主体に責任を負う存在となっている。	同上	同上
4	現代企業の構造	現代企業は、組織・人間的側面（経営組織）と計数・資本的側面（経営経済）をもつ。またそれは、動的には、投入・産出システムとして生産を行い、環境適応を通じて成長・発展する構造をもつ。そのためには、関係者の貢献を配合し、成果を配分する必要がある。	同上	同上
5	経営理念と経営文化	経営行動を通じて実現しようとする思想・信条・哲学を、経営理念という。それは、目的の価値的側面である。それには、儒教などの伝統色の強いものと、企業の制度的存在を反映した現代的なものとがある。経営理念を基底とした各企業の個性が、経営文化となる。	同上	同上
6	経営者の役割とコーポレート・ガバナンス	経営行動の核は経営者である。経営者は、イノベーションを推進し、経営理念を実現させるリーダーシップを発揮し、関係者の利害を調整して成果を配分しなければならない。現代企業の経営者は機関となっているから、そのあり方が役割に適合している必要がある。	同上	同上
7	経営の目標	目的の具体的状態を示すものを経営目標という。その内容と数は、企業の発展と共に多様化する。つまり単一目標から多目標に移行し、後者では目標体系が形成される。また、これと共に目標の達成水準は、極大化原理から満足化原理へと変化する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経営戦略（1）製品・市場戦略	現代企業の特色は、戦略を軸にした経営すなわち戦略的経営を行うことにある。経営戦略の中で最も重要なものは、企業がどのような製品・事業についてどの市場で活動するかを選択することである。このような製品・事業戦略の策定について、枠組みを紹介する。	森本三男	森本三男
9	経営戦略（2）ＰＰＭ	製品・市場戦略を前提にして、各種の個別戦略が策定される。まず必要なものは、特定の製品・市場に関する競争戦略である。その他必要に応じて、リストラ（事業分野再構築）、リエンジニアリング（事業遂行方法の再形成）、企業の買収、戦略的提携をはかる。	同上	同上
10	現代企業と経営組織	組織構造に関する代表的な類型を、組織形態という。組織は戦略を遂行するためのシステムであるとの観点に立てば、特定の戦略には特定の組織形態が適合していなければならない。このような適合についての考え方と現実の展開について、説明する。	同上	同上
11	現代企業と経営経済	経営の経済現象に関する原理をまとめたものに費用理論がある。それにも伝統的な収益法則的費用理論と、現代的な適応的費用理論とがある。両者の中から環境適応的操業，利益管理のための損益分岐点に関する部分、規模や範囲の経済に関する部分などを説明する。	同上	同上
12	経営の国際化	経営の国際化は、資材・製品の輸出入に始まり、経営資源そのものの国際的移動である現地生産（直接投資）からグローバル経営へと進展する。このような国際化は、企業の組織や管理にこれまでにない問題を生じさせる。それらを経営文化に関連させて検討する。	同上	同上
13	意思決定と情報	すべての経営行動は、意思決定を契機として展開される。行動の良否は意思決定によって左右される。各種意思決定の方向を整合させ、意思決定の質を高めるには、そのプロセスと技術の解明が欠かせない。また、それに関連して情報という資源が問題となる。	同上	同上
14	生産性と付加価値	生産のために必要な関係者の貢献を持続的に確保するには、彼らに誘因を提供しなければならない。その源泉は、資源の効果的使用による成果である。そこで生産性の向上が問題になる。生産性にはいろいろな指標があるが、付加価値が成果指標として最適である。	同上	同上
15	企業の社会的責任	社会的制度となっている現代企業は、各種の利害者集団（顧客、株主、従業員、取引先、地域社会など）の多様な期待にこたえなければならない。その内容は、法的責任、経済的責任のみでなく、それを超えた自発的な社会貢献にまで及び、遂行の評価も問題となる。	同上	同上

＝生産性科学入門＝（ＴＶ）

〔主任講師：黒澤 一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

生産性科学とは如何なる学問として今日要請されているのかを明らかにする。まず、この学問の発生の由来とその学問方法論とをしっかり考察したのち、制度と生産性、政策・運動と生産性、環境・資源問題と生産性、また創造性と生産性、等々のトピックを論じる。世上一般の通念とされている生産性論議と根本的に違っている点に興味が持たれると思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	生産性科学の誕生と課題：生産性論の系譜 その1	現代の産業・情報社会の深刻な問題を解決するという課題の中から生産性科学は誕生するのであるが、それの方法論とその根拠をこの学問の系譜の批判的吟味に求める。	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）
2	生産性科学の誕生と課題：生産性論の系譜 その2	この系譜論は経済学、経営学、技術論、資源論、環境科学について展開される。その結果として、我々の生産性科学の構造への展望が描かれる。	同上	同上
3	生産性科学の対象と方法：その1	以上の系譜論とその上にたった構造的展望の上に、我々の考える生産性科学の対象、すなわち産業・情報社会の根源構造（メタ構造）が規定される。	同上	同上
4	生産性科学の対象と方法：その2	引き続いて、人間と自然との相互作用（Ｍ－Ｎ系）の構造が解明される。	同上	同上
5	生産性科学の対象と方法：その3	Ｍ－Ｎ系を総括する概念としての生産力の構造が解明される。	同上	同上
6	生産性科学の対象と方法：その4	人と人との社会関係（Ｍ－Ｎ系）の構造が解明され、産業・情報社会の総構造が与えられる。	同上	同上
7	制度と生産性：その1	Ｍ－Ｎ系とＭ－Ｍ系との交差域にあって、それらの相互作用を媒介するフィルター構造としての制度とそのうちでの生産性の関係を論ずる。 ソ連邦の形成、崩壊のプロセスの例題が示される。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	制度と生産性：その2	日本の明治維新以降の産業発展と制度の関係を分析する。	黒澤一清	黒澤一清
9	制度と生産性：その3	日本の第2次大戦後の農地改革と農業生産力の関係を例として、制度と生産力の関係を考察する。 ＴＶでは、日本の漁場・漁業制度と生産性の問題を考察する。	同上	同上
10	制度と生産性：その4	上のテーマの続き。	同上	同上
11	プロダクティヴィティ・スキーム その1	産業的・社会的運動としての生産性の歴史と構造を論ずる。Ｐ．Ｓの前史。	同上	同上
12	プロダクティヴィティ・スキーム その2	第2次大戦後のＰ．Ｓの展開、ＯＷＬ，ＱＬ及び国際生産性スキームを論じる。	同上	同上
13	プロダクティヴィティ・スキーム その3	上の続き。	同上	同上
14	環境・資源問題と生産性	生産性原理の基礎は、人間と自然との相互作用系を、人類の生存・繁栄にとって最適であるように設計・管理する点にある。この観点から環境・資源生産性と人間生産性の統合のシステムをを考察する。 ＴＶでは海洋生物資源利用の基本問題を討論する。	同上	同上
15	創造性と生産性	人間の創造性が産業生産性の基礎でなければならない。この観点から、とくに知識集約型スタッフの生産性の管理問題を考える。	同上	同上

＝経　営　工　学　総　論＝（Ｒ）

〔主任講師：熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

本講は、社会へ価値を提供する経営体の優れた目的達成のための、経営技術学（Managerial Engineering）を述べるものである。経営体は、公共企業体、１～３次を含めて多種あるが、主に製造業の工企業体を対象とする。工業は、円高による国際競争力低下、海外展開と空洞化、途上国の台頭など、難しい状況にある。そこでの生存のための経営技術を探ることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ある経営の話	生産と経営の事例。	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
2	経営の成り立ち	開発・調達・生産、販売、財務、労務、経営分析。	辻　正重（青山学院大学教授）	辻　正重（青山学院大学教授）
3	経営工学の発展	アメリカの発展、テーラーシステム、フォードシステム、日本の発展、日本経営行動特質、ＴＱＣ、ジャストインタイム、ＴＰＭ、小集団活動	熊谷智徳	熊谷智徳
4	経営目的	利潤目的、価値目的、価値条件ＱＤＣ、経理倫理。	同　上	同　上
5	市場と製品開発	市場の成り立ち、市場変化、製品の計画と開発。	同　上	同　上
6	品質	品質の成り立ち、製品開発、市場変化、多品種の構造、要因設定、製造管理。	同　上	同　上
7	時間とコスト	製品の時間過程、リードタイム、在庫低減、原価構成、低減方策。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	生産システム	工程システム、作業システム、設備、労働、管理システム。	熊谷智徳	熊谷智徳
9	設備	設備の構造と性能と管理、生涯過程、保全システム。	同上	同上
10	労務	労働の生産側面と社会性側面、技能開発、配置、評価、労働保全。	池田良夫（愛知工業大学教授）	池田良夫（愛知工業大学教授）
11	社会性課題	安全、環境、人間性、製品責任、立地社会性、景観性。	熊谷智徳	熊谷智徳
12	数理的方法	市場の方法、生産の方法、分布の数理、計画の数理、管理の数理、経営と管理と生産への整理活用。	大野勝久（名古屋工業大学教授）	大野勝久（名古屋工業大学教授）
13	管理と情報システム	経営情報リテラシ、経営と管理のコンピュータシステム、ＣＡＤ、ＣＡＭ、ＣＩＭ。	中村雅章（中京大学助教授）	中村雅章（中京大学助教授）
14	経営変化	社会変化、製品ライフサイクル、高技術化、業種変化、立地変化。	熊谷智徳	熊谷智徳
15	海外生産	海外生産の形態、東アジア工業圏、日本的経営の課題、空洞化。	同上	同上

＝生　産　経　営　論＝（ＴＶ）

〔主任講師：熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

生産は価値の産出である。これによる社会への寄与を永続させていく生産経営について価値への条件である品質と時間とコストの本質を探り、それを生み出すシステムの構造を体系的にとらえる。日本が発展させた世界的生産経営方式の特質を明らかにする。とくに中国の工業とアジア工業圏の進展において、日本企業の国際展開と創造語術開発の生産の重要性に視点をおく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営と生産	経営の目的、利潤目的と社会目的、主観目的と客観目的、経営理念、価生産、生産価値条件・品質Ｑ・時期Ｄ・コストＣ	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
2	品質と時間とコスト	品質の総構造、機種品質・使用性・社会性・信頼性・改造性、市場期と品質変化。リードタイムの構成、ジャスインタイムの原理、生産コストの構成と低減。	同　上	同　上
3	生産システムの成り立ち	生産システムの性能と社会性と変化、工程と作業と管理、設備と労働、自動化、開発と就職と転職。	同　上	同　上
4	工程と作業	工程視点、工程のなりたち、工程のＱＤＣ能力、工程設計と分析	同　上	同　上
5	生産経営の成り立ち	価値条件ＱＤＣとシステム要素ＭＦＷと管理過程ＰＤＯＳの３元マトリックスの構成生産経営と生産管理、開発、製造、マーケティング	同　上	同　上
6	生産経営の発展	発展の構造、20世紀前半期のアメリカの発展、テーラーシステム・フォードシステム、20世紀後期の日本の発展ＴＱＣ、ＪＩＴ、ＴＰＭ小集団活動	同　上	同　上
7	生産経営の変化	産業社会変化、工業貿易ライフサイクルと貿易摩擦、市場ライフサイクル、立地寿命と空洞化。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	品質とＴＱＣ	製品開発と経営、製品開発の体制、自動販売機の新製品開発の実際。総合的品質管ＴＱＣ	熊谷智徳	熊谷智徳
9	製品開発と自動化	長期市場力の製品開発による高度自動生産自動車要素機能品の開発と自動生産の実際、食品製品開発と自動生産の実際。	同上	同上
10	ジャストインタイム生産	ジャストインタイム生産の発展、フォードの同期生産、トヨタのジャストインタイム生産の実際。	同上	同上
11	生産と設備	生産システムの設備化の進歩、管理の自動化、設備の開発と就役の開発と転化、保全管理、ＴＰＭ。	同上	同上
12	生産と人間	技術開発、労務保全、作業の人間性向上日本の労働倫理の検証と革新。	同上	同上
13	中国の工業化と日本工業	中国の工業化の進展、アジア業圏と日本の役割。中国への欧米企業の進出。 実例：上海のフォルクスワーゲン（独）社	同上	同上
14	野本工業の中国展開	モーターサイクル日系企業の実際（重慶）。 日本の中小企業の中国展開の実際、品質と原価の中国生産経営の問題点と向上方策。	同上	同上
15	経営と社会	生産経営の社会性課題の構成、日本に於ける内的社会性の優位と外的劣位の構成、将来方向。	同上	同上

＝ 生産の設備化と経営（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

設備管理は、基盤管理である。基礎を良くすれば、品質・時間・コストの良い成果が結果づけられる、という思想に基づく管理である。それは戦略から日常保全に至るまで、多元な構造をもっている。本講は、狙いを設備経営の体系化においた。生産と経営からとらえることである。それは、実践者が経営における仕事の位置をとらえ、進路を見い出すのに役立つ。そして論理の基礎を与えることと、応用力を高めることにねらいをおいた。技術革新の設備の適正な開発と、生産への活用を意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	設備	設備とシステムは、用役への性能をもち、性能を発揮する構造をもち、性能と構造が就役によって変化する。変化への適応が保全である。	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
2	経営と生産と設備	設備は生産のために、生産は経営のために、経営は社会のためにある。社会寄与の経営目的に対して、生産システムと設備の開発と運営は、一貫して合目的に進めなければならない。	同上	同上
3	生産経営と設備管理の発展	今世紀前半は主にアメリカで、後半は日本も発展に寄与してきた。発展の法則と21世紀の方向を探る。	同上	同上
4	設備経営と設備管理	開発から生産就役、次代転化の設備生涯、累代生涯に対する設備経営。就役過程の保全としての設備管理。	同上	同上
5	製品開発と設備開発	生産経営の開発段階は、製品開発に始まって設備開発に終る。市場への価値産出の製品開発の方策と設備開発。	同上	同上
6	保全	設備とシステムの内的劣化への発現保全、外的変化への改良保全。信頼性、保全性、可動性。	同上	同上
7	保全作業	保全作業の人依存性。保全の品質・時間・コストの構造、作業の分析と改善方法、現地作業の特徴と問題点、生体的悪条件と精神的好条件の特質。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	技能開発	保全の高技能者には10～20年を要する。基本技能養成、ＯＪＴ、評価、処遇。設備革新と技能生涯開発。	熊谷智徳	熊谷智徳
9	事例研究　1	自主保全。生産変化への設備適応。ＪＩＴ適応の設備システム。製品と生産革新の設備革新。半導体生産の先端設備体制等の事例と論理。	同上	同上
10	事例研究　2		同上	同上
11	事例研究　3		同上	同上
12	事例研究　4		同上	同上
13	労務保全	仕事への能力向上と人への仕事の好適化。その均衡実現のＱＷＬ（仕事人生の質）の、現業職の向上と管理専門職の方策。	同上	同上
14	生産経営革新のＴＰＭ	設備化の下に日本で発展したＴＰＭ（総合的生産保全）が、生産経営革新へ進む方向と内容。	同上	同上
15	設備化と社会性	公害、環境、景観破壊、リサイクルなど高度工業化による社会性問題の構造、日本の問題点、将来方策。 身体障害者の生産工場（放送）。	同上	同上

＝労　使　の　関　係＝（Ｒ）

〔主任講師：桑原靖夫（獨協大学教授）〕

全体のねらい

戦後の５０年近い年月の間に、日本経済の変遷とともに労使の関係も劇的な変貌をとげた。６０年代までは「前近代的」とまでいわれた日本の雇用・労使関係も今日では世界の「先進モデル」という評価まで与えられるまでになった。技術革新、サービス化の進展などで、職場の実態も大きく変容した。２１世紀に向けて、高齢化、国際化などの変化も労働の世界に大きな影響を与える。講義ではこうしたダイナミックな変化を分析・提示することに重点を置きたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国家の盛衰と労使関係	第２次対戦後の極貧の時代から、いまや世界の頂点へ立つことになった日本の発展過程で、労使関係は毀誉褒貶の波に翻弄されてきた。１９６０年代までは「前近代的」とまでいわれた雇用・労使関係は今日では「世界の先端モデル」という評価さえ与えられている。この光と影の実態を展望する。	桑原靖夫（獨協大学教授）	桑原靖夫（獨協大学教授）
2	日本的労使関係：歴史的変遷	労使の関係は戦後の「労使対決の時代」から「労使協調の時代」へと変化した。その後、労働組合組織率の低下、労働争議減少の過程で伝統的労使の関係も変容をとげつつある。将来を展望するために戦後の労使関係の変化を新たな角度から見直してみる。	同　上	同　上
3	激変する雇用・労働の世界	現代日本の労働市場では、サービス化、高齢化、女性の増加、外国人労働者などで雇用の仕組みの再編、新たな就業パターンの台頭がみられる。この実態を提示する。	同　上	同　上
4	雇用機会としての企業	現代社会では、企業は労働者がそこに雇用され、賃金・俸給を得る場所以上の意味を持っている。生きがい発見の場、スキル蓄積の場としての企業の意味、日本人が企業に期待するものはなにかを考察する。	同　上	同　上
5	現代日本の経営構造と労使関係	働く場としての日本の企業は、構造の上でいかなる特徴を持っているのか。なぜ大企業への就職を志向する人が多いのか。労使の関係の特徴はなにか。大企業に特有な終身雇用制、年功序列制などの意味を考察する。	同　上	同　上
6	中小企業の雇用と労使関係	日本の雇用機会の大部分を構成するのは中小企業である。中小企業における雇用についての通念と現実の差異、雇用労働の特徴を分析する。	同　上	同　上
7	採用と昇進・配置	企業における採用、昇進、配置のあり方は、労働者の勤労意欲、報酬、効率などに重要な意味を持つ。今日求められている公正な採用、配置、昇進とはいかなる内容か。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	変わり行く労働組合	伝統的労使関係は、労働組合と使用者（団体）の関係を意味してきた。しかし、今日では組織率の低下などで、労使の関係は実態および概念の双方において再編を迫られている。新しい労使関係の枠組みとはなにかを探る。	桑原靖夫	桑原靖夫
9	景気循環と賃金・雇用調整	資本主義社会においては景気循環は避けがたい現象である。企業は頻繁に発生する経済変動に対応するために、賃金・雇用の調整を行う。調整の仕組みは労働者の厚生、生活に重要な関わりを持つ。弾力性が高いといわれる日本の労働市場における調整のメカニズムを考察する。	同上	同上
10	技術革新と変貌する職場	１９７０年代以降、マイクロエレクトロニクスなどの技術革新の進展で日本の職場は大きく変貌した。ＦＡ、ＯＡなどの変化が雇用や仕事の内容に与える影響を考える。	同上	同上
11	サービス化、情報化と労働のあり方	サービス化の進展は、ホワイトカラー労働の増加、労働の量的・質的変化、労働時間の弾力化など、多くの変化を職場にもたらした。今日の国民的課題ともいえる時間短縮のあり方についても考察する。	同上	同上
12	高齢化時代の経営と労働	２１世紀初頭には世界有数の高齢国となる日本では、従来の雇用慣行にも様々な修正が迫られている。高齢者に適した職場の再編、処遇、生きがいのあり方などについて考える。	同上	同上
13	国際化と労使関係	日本企業の海外直接投資の拡大に伴って、日系企業で働く現地従業員の数も大きく増加している。それとともに、現地の経営風土との間で様々な摩擦も生まれている。他方、１億人を超える高度な市場である日本を目指しての直接投資も増加している。そこでは日本的労使関係はいかに評価されているだろうか。	同上	同上
14	外国人労働者と日本	１９８０年代後半から急速に増加した外国人労働者は、日本社会に種々な衝撃をもたらした。日本の対応のあり方は、今後の国際化に向かっての試金石である。その実態と日本の政策の現状と将来を展望する。	同上	同上
15	新しい働き方を求めて	バブル経済の崩壊とともに、真に人間らしい仕事と生活の両立を求めて、「新しい働き方」の模索が始まっている。終身雇用、年功処遇などの日本的雇用慣行の見直し、再編も必至である。２１世紀に向けての期待される働き方、労使の関係を模索・展望してみたい。	同上	同上

＝企業経済と情報・戦略＝（Ｒ）

〔主任講師：黒澤一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

意志決定の問題を中心としたマイクロ・エコノミクスの企業経営管理論への適用の部分を講義する。また第２次大戦後の日本における企業経営の在り方についての議論を経営付加価値概念を中心に総括し、その上に経営多目的論の解析的表現を与える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	意志決定理論	企業における意志決定の基本枠組みを論じる。	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）
2	効用とリスクプレミアム	意志決定メカニズムにおける効用法則の定式化を中心に論じる。	同上	同上
3	不確実性下での意志決定	意志決定者の側の環境についての予測・知見が皆無であるとき、あるいはほとんど無知である場合の意志決定の諸方式。	同上	同上
4	ゲーム理論	意志決定理論の最先端を担いつつあるゲーム理論の基礎を説明する。	同上	同上
5	非ゼロ和ゲーム	一方の十が他方の一であるゲームとは違って、より一般的に、両者の利得が前より大きくなりうるモデルである。過剰生産のケースを例示する。	同上	同上
6	企業目的論	企業・経営の目的論を総括する。	同上	同上
7	企業の主体性と環境	企業の経営活動をめぐる環境とそのもとでの企業の主体性という関連を今日的な観点から論じる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経営多目的論	第6回以降の議論を経営多目的論として総括する。	黒澤一清	黒澤一清
9	企業経営と合理性	企業経営における技術合理性・経済合理性・企業倫理の関係をシステム化する。	同上	同上
10	生産関数と均衡条件	確実性下の意志決定モデルとして最も古典的な分野の総括。	同上	同上
11	利潤極大化モデル	第10回にひきつづいて、収益、コスト関数を媒介に利潤極大化モデルを総括する。	同上	同上
12	多目的満足原理	第6回以降の諸議論が多目的満足化という原理で統合されることを示す。	同上	同上
13	各種目標の解析的吟味	第12回の一般モデルの上に、各種の条件の設定による均衡条件を吟味する。	同上	同上
14	経営戦略分析(その1)	情報化社会における企業・経営情報と経営生産力の関係の理論的・統計的考察を与える。	同上	黒澤一清 阿部克己(明星大学教授)
15	経営戦略分析(その2)	日本と米国との自動車工業の競争関係について、両国の工業統計及び企業の財務統計を用いて戦略的水準の分析を示す。	黒澤一清 阿部克己(明星大学教授)	同上

＝経 済 ・ 経 営 統 計＝（Ｒ）

〔主任講師：黒澤一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

経済・経営における生産性－収益性の関連領域の投入－産出変換システムの統計的分析法を示す。基本的な方法は経済指数のの要因別分析法である。量の理論に基づく指数の構造論、国民経済－産業系、産業－企業系、企業水準の生産性－収益性系というようにマクロ－セミマクロ－マイクロの系絡のシステマティックな分析法を示す。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済指数の基礎（その１）	経済・経営現象の経済指数による要因別分析の構造論を展開する。本講義の方法論的土台である。	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）
2	経済指数の基礎（その２）		同 上	同 上
3	生産性指数体系（その１実体論の基礎）	経済指数の基本形態としての実体的集計システム、すなわち絶対値の上に直接構成される集計的指数の構造と相対値（比と指数）の一般体系を示す。	同 上	同 上
4	生産性指数体系（その２実体論の基礎）		同 上	同 上
5	機能論的指数体系の構造	機能論的指数体系の　一般形式を解説する。	同 上	同 上
6	異なるウェイトをもつ総合化指数の間の一致・不一致の判別式	ボルトキェヴィッツに始まる判別式の構造とその展開。	同 上	同 上
7	指数の変種と指数の体系	指数の変種の性質の吟味。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	関数論的指数論	指数の経済学の解説。	黒澤一清	黒澤一清
9	国民経済－産業系の要因別指数分析体系	国民経済生産性と産業経済生産性とを連結したシステム、すなわち「国民経済－産業生産性と経済福祉系分析のための複合指数体系（ＣＩＬＩＮシステム）の一般形態を示す。	同上	同上
10	ＣＩＬＩＮシステムの国際経済比較への適用	ＣＩＬＩＮシステムを国際水準で用いるときの諸問題を考察する。	同上	同上
11	産業－企業系の生産性－収益性システム：AIPRシステム（その１）	総コストをベースとした生産性－収益性変換過程の要因別分析体系であるＡＩＰＲシステムの一般構造とそれの実務上の手続きの標準型を示す。	同上	同上
12	産業－企業系の生産性－収益性システム：AIPRシステム（その２）	ＡＩＰＲシステムの実務上の標準的手続きを示す。	同上	同上
13	付加価値生産性－収益性の指数分析体系	主として企業水準の付加価値に焦点をあてた生産性－収益性の指数による要因分析法を示す。	同上	同上
14	企業水準の付加価値分析	同上の続きであるが、ここでは経営分析指標の体系的分析を示す。	同上	同上
15	経営における可視労働資源とその利用構造の計測	企業経営における人間労働の利用の仕組みを、人数、日数、時間（実働と稼働）の区別において生産性の構造に反映させる計測・管理の指数体系。	同上	同上

＝経済・経営統計演習＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部克己（明星大学教授）〕

全体のねらい

企業経営レベルでは生産性－収益性に関する分析体系の、そして産業－企業系、国民経済－産業系の計量システムとその集計・分析を中心に演習する。分析の基本的な方法は経済指数の要因別分析法である。本科目は経済・経営統計（黒澤一清教授担当）の演習である。単に断片的な分析や計算の実務を知ることではなく、首尾一貫した目標をもち、実践的なシステムとしての構造的解析の演習にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	経済・経営統計演習のフレームワークとそのねらい	本演習科目のフレーム・ワークを先ず説明し、演習が目的とするところを明らかにしておく。経済指数分析とはどういうものかについて俯瞰的な展望を与える為に、生産性分析の事例を取り上げて説明する。	阿部克己（明星大学教授）	阿部克己（明星大学教授）
2	経済指数編成の基礎	経済指数編成上における基本的な接近法、すなわち経済複合値の数量因子（外延量）と質量因子（内包量）の関係を説明する。単純指数と加重平均指数の各種指数、指数算式のテスト等について。	同上	同上
3	生産性指数体系（その１）	伝統的な指数編成形態であるＬ式、Ｐ式総和指数の実体論的総和指数（ＳＡシステム）を生産性指数編成中心に演習する。可変構成（PIVS）、不変構成労働生産性指数（PICS）、構成変化影響指数（ISC）、共同変動指数（COV）のの編成とその解釈が中心。	同上	同上
4	生産性指数体系（その２）	PICS、ISC 、COV の幾何学的な意味とそれらのPIVSへの貢献度分析。異なるウェイトをもつ総合指数の判別式について。	同上	同上
5	機能論的指数体系	相対値をベースに編成される方式（FAシステム）の代表的な形態であるAIPHOシステム：下位組織から上位組織の総合生産性指数へと集計する編成法とその計算演習を行う。	同上	同上
6	CILIN システムによる計量・分析演習 (1)	国民経済一産業生産性と経済福祉系分析のための複合指数体形（CILIN システム）のPCI NPシステム（国民経済生産性と国民経済福祉指標とを媒介するシステムの一般体系）を重点的に行う。DECD諸国の分析を例に挙げる。	同上	同上
7	CILIN システムによる計量・分析演習 (2)	下位産業から上位産業への集計する産業の多段階構成をもつ国民経済生産性分析体系（NAP HIS システム）の演習を行う。OECD諸国の分析を例に挙げる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	CILIN システムによる計量・分析演習 (3)	CILIN システム分析の実際：CILIN システム分析の総括として、日本と米国の国民経済―産業系の生産性分析結果を示す。	阿部克己	阿部克己
9	資本設備の実質減価償却の推定	企業の有形固定資産と減価償却費は取得時の価格が混在した薄価で示されている。その実質化は実質総コスト生産性－収益性の分析に不可欠であり、その方法について述べる。	同上	同上
10	AIPRシステムによる総コスト生産性－収益性の関係分析 (1)	米国において、一般に用いられている総要素生産性(TFP)を吟味し、これと対比的に黒澤教授の実質総コスト生産性の実践的有効性について述べる。生産性－収益性の関係を統合的に分析するAIPRシステムの枠組みについて熟知する。	同上	同上
11	AIPRシステムによる総コスト生産性－収益性の関係分析 (2)	日・米の工業統計表をベースにした産業水準のAIPR分析演習。	同上	同上
12	AIPRシステムによる総コスト生産性－収益性の関係分析 (3)	国内の競争的関係にある実企業の例を取り上げ、企業水準でのAIPRシステムの演習を行う。	同上	同上
13	企業の付加価値生産分析	生産性・賃金・価格間には理論的な関係があるが、先ずこれを理解し、実際の企業でも賃金率決定政策に有効な方式を試みる。	同上	同上
14	パーソナル・コンピュータによる経済・経営演習 (1)	パーソナル・コンピュータの使用を前提にして、市販の統計資料（データベース）の有効的利用法、統計解析、グラフィックソフト・ウェアの活用法について述べる。	同上	同上
15	パーソナル・コンピュータによる経済・経営演習 (2)	パーソナル・コンピュータによるCILIN システムとAIPRシステム分析演習が中心。言語は、DOS版QUICK BASIC 、またはWindows版VISUAL BASICを用いる。	同上	同上

＝会　　計　　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：小川　洌（城西国際大学教授）〕

全体のねらい

本講座は、会計学の理論とそれを技術的に支える複式簿記の計算システムについて修得できることを目的としている。そのために、財務諸表作成のための記録・計算の方法を具体的事例をまじえて解説し、その基礎にある会計学独特の理論について理解できるようにする。さらに財務諸表から情報をとり、企業の内容を判断する方法について触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	会計の役割	企業会計は、企業の行う経済的諸活動を貨幣数値を用いて記録・分類・整理し、その結果を財務諸表として集約表示する。それによって作り出される会計情報は企業外部に公表開示され、同時に企業の内部管理資料としても役立つ。このシステムについて説明する。	小川　洌（城西国際大学教授）	小川　洌（城西国際大学教授）
2	財務諸表の仕組み	財務諸表は複式簿記の計算システムをベースに作成される。そこでまず、財務諸表を構成する損益計算書と貸借対照表の構造と両者の関係について説明し、利益が損益計算書と貸借対照表の両者によって算出されるプロセスを概観する。	同　上	同　上
3	記録・分類・整理－仕訳と転記	複式簿記では企業の経済活動の結果を借方および貸方の２つの要素に分解し、それらを各勘定科目ごとに分類し、試算表へと集計する。その際用いられる仕訳と転記という計算技法と数字の流れについて説明する。	同　上	同　上
4	決算手続	試算表は計算記録の正確性を自動的に検証する機能を持っている。まずその仕組について説明し、さらに試算表の数字が損益計算書と貸借対照表に集計されるプロセスを精算表によって説明する。	同　上	同　上
5	企業会計の特質	企業会計は一般の計算とは異なる特質を持っている。その基本的な考え方や試算の方法をとりまとめたものに「企業会計原則」がある。この章ではこの原則を中心に、企業会計の基本理論および企業会計を行うにあたっての諸原則の基本について説明する。	同　上	同　上
6	損益計算書の様式	まず、損益計算書の形式について説明する。つぎに、損益計算書は企業の損益をいくつかの段階に分けて計算・表示するが、その際用いられる様々な利益（または損失）の意味を明らかにし、段階的な区分計算の仕組みについて説明する。	同　上	同　上
7	費用・収益の発生と実現	企業の収益は一般に、売上高として計上される。しかし、収益として計上するには基本的に守らなければならないルールがある。また、費用の計上にも同様にいくつかの制約がある。ここでは、これらのルールや制約について説明する。また損益試算と収支計算の違いにも触れる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	貸借対照表の様式	まず貸借対照表の形式について説明する。つぎに貸借対照表に集計された資産・負債・資本の表示の基準について述べ、それぞれの項目の配列の基本的なルールについて解説する。	小川　洌	小川　洌
9	貸借対照表の内容（1）－棚卸資産の評価	貸借対称表に計上する棚卸資産の価額をどのように算出するかについて述べる。この算出方法については、様々な方法が認められており、それらが企業の財務にとってどのような意味をもっているかについて解説する。また有価証券の評価法について説明する。	同　上	同　上
10	貸借対照表の内容（2）－固定資産	貸借対照表に計上する固定資産の価額をどのように算出するかについて述べる。特に、取得資産の計上の方法と減価償却の諸方法について詳説する。後者については、それが企業の利益の算定にいかなる影響をあたえるかについても触れる。	同　上	同　上
11	貸借対照表の内容（3）－繰延資産と負債	繰延資産の意義と内容について述べる。さらに資本調達の重要な源泉である負債の意味について考える。特に、近年企業財務の分野において問題となっている社債などの性格やその取扱について説明する。また負債のなかの一項目としての引当金の概要にも言及する。	同　上	同　上
12	貸借対照表の内容（4）－資本	株式会社の資本の性質とその内容について説明する。とくに資本金、資本準備金、利益準備金、任意積立金などの諸項目の内容について詳説する。また、利益処分の基本的なルールを具体的な処分の事例を挙げながら検討する。	同　上	同　上
13	ディスクロージャーと監査	商法の規定によって開示される営業報告書と証券取引法の規定によって開示される有価証券報告書の内容について説明する。また財務諸表の信憑性を確認する手段としての会計監査がいかに行われているかについて説明する。	同　上	同　上
14	財務諸表の分析（1）－財務諸表の見方	財務諸表を観察するにあたって必要な知識について述べる。また企業の内容を分析評価するにあたって、どのようなポイントを中心に分析したらよいかについて、その理由を検討しながら財務情報の利用の仕方を解説する。	同　上	同　上
15	財務諸表の分析（2）－財務諸表の分析技術	財務諸表を利用して企業の内容を判断する際に必要な分析技術について説明する。特に、増減分析表、比率法、構成比率法、趨勢法などの諸方法を具体的に解説する。また、財務諸表を分析して得られたデータをどのように総括し評価するかについて検討する。	同　上	同　上

＝管　理　会　計＝（Ｒ）

（主任講師：古川浩一（東京工業大学教授）
主任講師：佐藤宗彌（横浜市立大学教授））

全体のねらい

管理会計は、経営管理に必要な、様々な価値情報を提供するための方法である。本講では、そこで用いられる価値情報の性質、管理会計で利用される諸方法を概説し、それらがどのように応用されるかの概略を示す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	管理会計の意義と役割	効果的な経営管理のためには、客観的な情報が必要である。管理会計は、そのような情報を価値によって提供する。本章では、このような役割を持つ管理会計の意義について述べる。	古川浩一（東京工業大学教授）	古川浩一（東京工業大学教授）
2	会計制度による価値情報	本章では、企業などの組織体における会計制度が作り出す会計情報の特色と作成方法を説明する。営利企業にあっては、財産計算と損益（利益）計算を同時に行う複式簿記の理解が企業分析や意思決定にとって重要である。	佐藤宗彌（横浜市立大学教授）	佐藤宗彌（横浜市立大学教授）
3	経済的価値に関する情報	経営管理は経済的行為でもあるので、そのために、経済的な立場での情報を必要としている。この章では、管理会計で用いられる経済的な情報の特質を述べる。	古川浩一	古川浩一
4	原価計算の考え方と方法　(1)	原価計算とは製品やサービスを提供している企業で、どれ位のコストが発生するかを把握する計算方法である。その目的として、原価計算基準では、財務諸表作成目的、原価管理目的、予算編成目的など５つ挙げている。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
5	原価計算の考え方と方法　(2)	原価計算は、目的に応じて色々な方法や考え方がある。目的が異なれば原価の概念や計算方法も違ってくる。本章では、特に財務諸表作成目的に役立つ実際原価計算とその計算プロセスに焦点を当てる。	同　上	同　上
6	原価計算と原価管理	原価管理目的は、標準原価計算によって行なわれる。コストを引き下げ、無駄なコストを発生させる活動を防止することによって、良質な製品やサービスの生産を維持し、それを社会に絶えず提供し続け、利益を獲得できる。	同　上	同　上
7	経営管理における収益－費用の情報	全般的な経営管理においては、収益と費用の関係を把握し、それらを活用していくことが求められる。この章では、利益計画に用いられる手法を取り上げる。	古川浩一	古川浩一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	セグメント別の収益－費用の把握と評価	今日の企業は多角化し、また地域別など多くのセグメントに分けて管理されている。本章は、これらの課題を取り上げ、各セグメントの業績の把握と評価の方法を述べる。	古川浩一	古川浩一
9	プロジェクトの経済性の評価の方法 (1)	プロジェクトの有利性を判断するための情報提供は、管理会計における重要課題の1つとなっている。この章では、プロジェクトの経済性評価に用いられる代表的な方法について述べる。	同上	同上
10	プロジェクトの経済性の評価の方法 (2)	プロジェクトの経済性評価の従来からの方法は、いくつかの問題があることが指摘されてきている。この章では、最近提案されている方法を取り上げて、概説する。	同上	同上
11	製品企画と原価企画	安くて品質の良い製品やサービスを提供するには、新製品設計段階から、技術革新を取り入れた製品企画やコストの低減を図ることが必要である。原価企画は、こうした考え方を我国の自動車産業に応用したものである。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
12	振替価格と企業間関係	我が国では、最終メーカーに対して多くの部品製造企業が部品を納入している。この章では、長期的に関係を持つ企業間、あるいは企業内の部門間で問題となる振替価格を取り上げる。	古川浩一	古川浩一
13	海外事業の管理会計	現地販売・生産の段階にまで進んだ国際企業にとって、為替変動、インフレーション、金利格差、カントリーリスクへの対処が需要になっている。海外事業の環境変化下での利益計画や利益計算をどうすべきかを考察する。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
14	業績評価と経営監査	企業の業績評価には企業自体の評価、各部門の評価、個々の管理者・従業員の評価、関連会社の評価などがある。監査役は、企業の社会的責任などを考慮して、こうした仕事をする機関としてますます重要になりつつある。	同上	同上
15	管理会計の現代的課題	この章では、これまでに学んできた管理会計の諸課題を要約し、それらが今日抱える問題点を探るとともに、その将来を展望する。この章の放送授業は、座談会形式で行う。	古川浩一 佐藤宗彌	古川浩一 佐藤宗彌

＝税務会計（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：武田隆二（大阪学院大学教授）〕

全体のねらい

税務会計は、主に企業に課せられる税金の中で最も基本的で重要な法人税について勉強する教科である。法人税は、企業の稼得した当期利益をベースに算定される課税所得に対して課せられる税金であるから、この講座では、課税所得がどのように算定されるのかについて、講義することを課題とする。企業利益は企業会計で、課税所得は税務会計で扱われるわけであるから、税務会計は企業会計を基礎として成り立っているといえる。その意味では、税務会計の勉強は、財務諸表論の延長の上で、企業の生きた経理実践と密着した形で、課税所得を「会計」と「法」の論理をもって解明することを狙いとしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法人税の仕組み	本論に入る前に、税務会計の前提にある税金の意味、税金の種類と分類、法人税法の構造、法人税の仕組み、帳簿の備え付け義務等の基本的な問題について説明する。	武田隆二（大阪学院大学教授）	武田隆二（大阪学院大学教授）
2	税務会計の制度的基礎	税務会計は、法人税法という法律制度の上に成り立つ会計領域である。しかも、商法の決算を前提として課税所得の計算が行われる。このような法律と法律との間の関係を、一般に「確定決算主義」と呼んでいる。 しかも、確定決算主義の基礎には、「一般に公正妥当と認められる会計処理の基準」を前提とするという考え方が存在する。 そこで、この講では確定決算主義および課税所得計算の構造の解明を中心に、税務会計全体の「制度の仕組み」を説明したい。	同上	同上
3	所得概念と課税所得概念	企業課税は、「所得課税」の形態をとる。従って、税務会計の中心概念は、「所得」である。この講では、所得概念をめぐる「所得源泉説」と「純資産増加説」との相違を説明し、この二つの考え方が会計学上の「当期業績主義」と「包括主義」という損益計算に関わる二つの立場に通ずるものがある点を明らかにすることが課題である。 現行の法人税法上の所得概念が、純資産増加説に基づく所得概念を基礎として、現実には、「修正された給付能力ある所得」としての性格をもつものであることを明らかにする。	同上	同上
4	益金概念と損益概念	現行の法人税法上の「益金概念」と「損金概念」が、どのように定められているのか、その特徴点を描き出すとともに、企業会計上の収益概念と費用概念とどのような点で違いがあるのかについて説明する。	同上	同上
5	債務確定主義の特質	法律上最も安定した状態が、債権・債務の確定である。税法も法律であるから、課税所得計算の基礎には、「債権の確定」や「債務の確定」をもって収益・費用を認識するという考え方が、横たわっている。 この講では、損金計算の基礎とされる「債務確定主義」の条件について説明し、企業会計上の「発生主義」とどのような点で違いがあるのかについて明らかにしたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	権利確定主義の特質	課税所得の計算における積極要素としての「益金の額」は、「損金の額」の場合と同様に、法的に最も安定的になった状態である「債権の確定」をもつて計上される。 この講では、税務上の「権利確定主義」か、会計学上の「実現原則」とどのような関連にあるかということを明らかにし、権利確定主義の特徴を描き出してみたい。	武田隆二	武田隆二
7	棚卸資産の税務処理	企業の経済活動において「収益財」として役立つ「棚卸資産」が、使用材としての固定資産とどのような違いがあるのか、棚卸資産の取得原価をどのように算定し、また、どのように期間に配分するのかについて説明する。 さらに、原価計算上の予定価格と実際原価との食い違いにより生ずる原価差額について、その調整問題をその基本に従って説明したい。	同上	同上
8	有価証券の税務処理	有価証券の範囲、原価集合問題（取得原価の計算の問題）、株式分割があった場合に問題となる「身代り株式」の取得価額の付け替えの問題、原価配分法（有価証券の評価方法）と評価替え（低価法の適用、評価減の適用）等の諸問題について解説する。	同上	同上
9	固定資産の税務処理	「使用資産」としての「固定資産」をめぐる税務処理問題について説明する。固定資産の範囲、原価集合（取得価額の決定）、減価償却制度の特色、資本的支出と収益的支出、評価替え、特別償却等について説明する。	同上	同上
10	圧縮記帳の税務処理	繰延課税の方法としての「圧縮記帳」の本質とその特徴について、国庫補助金、保険差益、交換差益等の具体的な事項を取り上げて、その会計処理の方法について解説する。	同上	同上
11	繰延資産の税務処理	「繰延資産」は、期間損益計算を適正にするために認められた計算擬制的資産としての特質をもつものである。 この講では、資産としての本質は何か、その範囲、償却の方法並びに商法上・税法上記められた繰延資産の具体的内容について概観するとともに、その処理法について講義する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	引当金・準備金の税務処理	「引当経理」の本質を先ず明らかにし、続いて、税法上の債務確定主義の例外として認められた税法上の六つの「引当金」を中心に解説するとともに、租税特別措置法上の「準備金」の特徴について関説する。	武田隆二	武田隆二
13	資本等の金額と利益積立金額	会計学上、利益は一定の「資本の余剰」として規定される。税務上の所得金額も、資本余剰としての性格をもつものであるから、所得確定の前提としての「資本等の金額」についての税法の規定を解説する。 また、企業会計原則の場合と同様に、「資本等取引」と「損益取引」とが明確に区別されなければならない。 税法上の「利益積立金額」が、企業会計原則上の「利益剰余金」や商法上の「剰余金」と区別される点はどこにあるかについて説明したい。	同上	同上
14	リース取引の税務処理	近年著しい発展をみた「リース取引」について、リースの仕組みや税法で定めるリース取引の意義について解説するとともに、賃借人側の会計処理並びにリース会社側の会計処理について、その特徴的となる点について関説する。 他に、リースの特殊形態としてのレバレッジド・リースについても説明したい。	同上	同上
15	企業会計と税務会計との差異	企業会計（企業利益）と税務会計（課税所得）との「差異」が、どのような「原因」で発生するのか、その原因を類型化して示すとともに、その差異がどのような「形態」で、さらにどのような「効果」を伴うものであるかについて明らかにするとともに、最近の問題である「税効果会計」について、その要点を解説したい。	同上	同上

＝財　務　管　理＝（Ｒ）

〔主任講師：古川浩一（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

財務管理は、生産活動を行う企業の資本の調達と運用に関連する領域を対象としている。そこで、本講では、財務管理に必要な考え方を述べ、次いでそれに必要な分析方法を概略する。ついで、財務に関連して企業が接している資本市場の行動を概観し、最後に、企業が直面している国際化と合併・買収問題を取り上げる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	財務管理の課題	本章では、財務管理とは何か、が抱える課題について、その発展の軌跡、財務管理の目標とそれが今日抱える問題の性質等を説明する。	古川浩一（東京工業大学教授）	古川浩一（東京工業大学教授）
2	財務におけるリスクとリターン	本章では、財務管理で重要なリスクとリターンの考え方を検討し、それらの間にある関係を検討する。またリスク回避にどのような方法があるかを述べる。	同　上	同　上
3	企業をめぐる資金の流れ	この章では、企業をめぐって起こる資金の流れを取上げ、自己資本と他人資本の違い、直接金融と間接金融の性質、内部金融と外部金融の特質等を取上げる。	同　上	同　上
4	資金の時間価値	この章では、なぜ資金が時間価値を持つかを説明し、異なる時点で発生する資金の時間価値を調整する方法を、将来の資金の流れが確実である場合、不確実である場合に分けて説明する。	中里宗敬（青山学院大学講師）	中里宗敬（青山学院大学講師）
5	財務諸表分析（1）	企業の過去の業績を示す財務諸表の多面的な分析は、企業の実態を明らかにし、将来の展望を与える。この章では、比率分析を中心に財務諸表分析の概要を取上げ、企業の利害関係者にとって有用な情報の獲得を検討する。	蜂谷豊彦（東京工業大学助教授）	蜂谷豊彦（東京工業大学助教授）
6	財務諸表分析（2）	この章では、比率分析以外の分析方法を取上げる。具体的には、企業の損益構造の分析を中心に、財務レバレッジ、損益分岐点分析、営業レバレッジの分析方法を取上げて説明する。	同　上	同　上
7	ポートフォリオ選択の基礎	本章では、資本市場を通しての投資決定、そこでの企業の評価を扱う。まず、この章では、リスクを伴う資産への投資理論であるポートフォリオ選択の基本的な方法を述べる。	中里宗敬	中里宗敬

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	資本資算評価モデル	個々の投資家が最適なポートフォリオを選択するとき、リスクを伴う資産は市場全体の動きとの関連つけて分析できる。この章では、そのために提案されている資本資産評価モデルを取上げ、その意義を説明する。	中里宗敬	中里宗敬
9	資本コストと配当政策	資本コストは、資本調達決定と投資決定に対する基準として、財務管理では重要な役割を持っている。この章では、資本コストの考え方、計測方法を取上げ、またその活用方法にも触れる。	蜂谷豊彦	蜂谷豊彦
10	設備投資の評価	設備投資のような大規模の資本支出のために企業は別途に予算を組むことが多い。本章では、別枠の、長期的視点に立つ資本予算の設定に用いられる方法や考え方を、投資プロジェクトの戦略性と経済性評価と関連付けて説明する。	同上	同上
11	運転資本管理	財務管理の重要な課題の一つに、営業活動に使用される資金を管理し、それに滞りなく資金が供給されるとともに、資金不足を招かないように図っていくことがある。この章では、この運転資本管理の方法を取上げる。	古川浩一	古川浩一
12	資本構成と企業評価	資本市場は、企業がどのような種類の資本をどれだけ調達し、それをいかに運用しているかを評価する役割を持っている。この章ではよく知られたMM理論を中心に、市場における企業評価を検討する。	中里宗敬	中里宗敬
13	派生証券の利用	派生証券は、通貨とか株式といった原資産に付随して発行される先物やオプションなどの証券である。これらは、投資に関連するリスクの回避に重要な役割を果たすので、今日、様々な面から注目されるに至っている。	同上	同上
14	合併と買収	わが国の企業は、事業構造の再構築に取組んできている。企業の合併・買収（M&A）はその一つとして、経営戦略を進める上で重要な役割を持っている。本章では、この問題を取上げ、その方法や利害関係を説明する。	蜂谷豊彦	蜂谷豊彦
15	企業活動の国際化と財務問題	企業の活動の国際化の進展は著しい。この章では、国際化にはつきものの為替リスクと、その回避のために用いられる様々な方法を述べ、国際化時代の財務管理の課題を検討する。	古川浩一	古川浩一

＝不動産学の基礎＝（ＴＶ）

（主任講師：高辻秀興（麗澤大学教授））
（主任講師：前川俊一（明海大学助教授））

全体のねらい

急激な都市化の過程を経て形成されたわが国の都市は必ずしも健全な環境にあるとはいいがたく、まだ多くの整備課題を残している。土地を有効に利用しつつ良好な市街地環境を築こうとすると、不動産の開発と管理に関する系統的な知識が必要となる。この講義は、都市計画、法学、経済学、経営学、政策学の側面から立体的に不動産の開発と管理に関する基礎知識を述べようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	不動産と国民生活	不動産学の領域 不動産をめぐる問題と課題	高辻秀興（麗澤大学教授）	高辻秀興（麗澤大学教授）
2	都市化と土地・住宅政策の変遷	復興から高度成長期（1950 ～ 1973 年） 地方定住期（1974 ～ 1986 年） 地価高騰から今日まで（1987年～）	同上	同上
3	地価形成の理論と不動産の評価	土地の財としての特徴と土地市場 地価の形成 土地評価の必要性と問題点	前川俊一（明海大学助教授）	前川俊一（明海大学助教授）
4	経済活動と地価の変動	地価の長期的変動と国民経済 地価の決定と変動 地価水準の妥当性	同上	同上
5	不動産金融と税制	わが国の住宅問題 不動産（住宅）金融の現状と問題 不動産（住宅）税制の現状と動向	田中啓一（日本大学教授）	田中啓一（日本大学教授）
6	不動産と不動産所有法	不動産法の対象と体系 所有権の絶対性とその制限 区分所有法	丸山英気（千葉大学教授）	丸山英気（千葉大学教授）
7	不動産利用法	不動産利用法権 民法および建物保護法・借地法 借地借家法 定期借地権	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	都市計画と土地利用規制	土地利用規制の必要性 都市計画の内容と事業・誘導・規制 市街化区域等の区域区分と開発許可制度 用途地域制・密度・形態制限 地区計画制度	高辻秀興	高辻秀興
9	不動産取引と登記	不動産取引と登記の歴史 不動産売買のプロセス 不動産登記法 不動産登記のコンピュータ化の現状と課題	相馬計二(相馬司法事務所代表)	相馬計二(相馬司法事務所代表)
10	不動産の流通と管理	不動産流通の重要性と課題 不動産管理の課題と対策	田中啓一	田中啓一
11	不動産開発の企画と経営	不動産投資と資金調達 不動産開発の企画と投資分析	前川俊一	前川俊一
12	住宅の需要と宅地開発	住宅需要の発生要因 住宅・宅地供給の動向と課題 住宅地開発の手法	高辻秀興	高辻秀興
13	商業・事務所・工業の立地と開発	商業立地 事務所立地 工業の立地需要と用地供給	同上	同上
14	都市再開発と環境整備	都市再開発の背景と目的 再開発基本計画と市街地再開発事業 民間再開発の課題とプロセス 事業手法	同上	同上
15	不動産開発の外部影響評価	不動産開発の外部影響 開発影響評価の方法 外部影響評価の課題	小野宏哉(麗澤大学教授)	小野宏哉(麗澤大学教授)

＝地　域　経　営＝（Ｒ）

〔主任講師：岡崎昌之（福井県立大学教授）〕

全体のねらい

現代における地域経営の意義と課題そして今後の展望について考察する。現在の日本の各地域の抱える課題を明確にし、その課題を解決する方策を地域経営の視点から検討する。また地域経営に関する具体的な各地域での取り組みについて分析する。自立的、内発的地域振興には如何なる方策が地域経営として可能かを検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
Ⅰ	地域経営とはなにか			
1	地域経営の原則	他に依存することなく、地域に内包された力で地域の可能性を追求し、またその地域経営は短期的なものでなく、次世代に地域を受け継いでいくためにはいかなる方策があるか。	岡崎昌之（福井県立大学教授）	岡崎昌之（福井県立大学教授）
2	地域経営の方策	地域の良きものを保存、悪しきものを規制排除、また地域の資源を活用、必要なものを整備拡充し、地域の可能性を結合していく具体的な地域経営の方策を検討する。	同上	同上
Ⅱ	地域経営を取り巻く課題			
3	過疎化・高齢化する地域	過疎化、高齢化により日本の国土が荒廃している。米の部分的自由化もあいまって中山間地域をはじめとする農業の行方も不透明である。こうした地域の実像を明確にする。	同上	同上
4	条件不利地域への対応	過疎地域、豪雪地域、離島、半島地域等、他と比較して地域経営を進めていく上で条件が著しく不利な地域が日本には多く存在する。その実態とそれへの対応を考える。	同上	同上
5	都市への集中	日本列島の周辺地域における過疎化と裏腹に大都市、地方中枢都市へは諸機能が集中している。東京への一極集中、中枢都市への地域的集中が進んでいる。その功罪を考察する。	同上	同上
6	地方分権	地域を巡る課題を地域に身近なところで判断し、解決していこうと地方分権の気運が高まっている。地方分権を進展する道、また本来の地方自治のあり方を探る。	同上	同上
Ⅲ	地域経営と産業振興			
7	特産品から地域産業へ	地域に産する資源を活用し、地域の技術を駆使して身近なところから産業を振興しようとする地域づくりが各地で取り組まれている。この特産品づくりをいかに地域産業へ高めていくか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	観光開発への取り組み	地域の資源を活かした観光振興への取り組みは全国各地で盛んである。しかし永続的に魅力と活力を維持し続ける観光地経営は多くの工夫を要する。地域経営の観点から観光を考える。	岡崎昌之	岡崎昌之
9	地方都市と情報拠点形成	地域での情報創造と地域からの情報発信は新しい時代の地域形成にとって不可欠である。その地域への拠点性を高め、いかなる情報を発信するか。	同上	同上
Ⅳ	地域経営の取り組み			
10	地域間交流・都市農村交流	移動性の高まった今日の社会では特定地域への定住人口だけでは地域経営は考えられない。地域間の交流、特に都市と農山村との交流の可能性について考察する。	同上	同上
11	グローバリゼイションとまちづくり	地域経営は国境を超えて課題となり始めている。従来の国際交流では捉えられないほど、経済的、社会的にもボーダーレス化の波は強まっている。こうした中での地域経営への取り組みを考える。	同上	同上
12	地域イベントの効用と課題	地域振興に図る上でイベント開催の効用が主張される。イベントをどのように捉え、地域を変革するようなイベントはいかに構築されるか。	同上	同上
13	広域連携・広域経営	人々の移動の広域化、経済活動の広域化等に伴って地域の広域的連携は必要不可欠な課題となってきた。単なる自治体の合併ではなく地域経営の視点から地域の広域連携の方向を検討する。	同上	同上
14	地域を担う人材の育成	地域経営の中心はその地域を担う人材である。地域の将来を担う人材にはどのような資質が要求されるのか。そうした人材の育成にはいかなる方策がありうるのか。	同上	同上
15	地域のグランドデザイン	今後の地域経営を展開していくために地域の将来を見据えた新しい地域の計画、グランドデザインはどのような視点が不可欠なのか、いかに描くことができるか。	同上	同上

＝現代産業組織論＝（Ｒ）

〔主任講師：武蔵武彦（千葉大学教授）〕
〔主任講師：廣瀬弘毅（福井県立大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会をみるためには、産業の視点が不可欠である。しかし一口に産業といってもさまざまな態様をしており、簡単に理解することはできない。本講義では、産業が中心的な役割を果たしている現代経済を読み解くひとつの視点を与える「産業組織論」を平易に説明する。また、ケース・スタディとして現実の産業の分析も行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	市場組織と産業組織論	現実の経済の歴史的な変化を念頭に置きながら、産業組織論の成立過程を振り返る。そうすることで、産業組織論の目的や視点、分析方法の特徴を理解する。特に、後に展開される章との関係で、産業組織論の固有の課題を掲示する。	廣瀬弘毅（福井県立大学助教授）	廣瀬弘毅（福井県立大学助教授）
2	市場組織と経済厚生	産業組織論の分析方法を理解するための準備として、完全競争市場と独占市場の特徴を理解する。次に、市場がうまく機能しているかどうか（経済厚生）を量るためのツールとして、余剰分析を理解する。そして、市場の構造と経済厚生の関係の重要性を示す。	同上	同上
3	産業組織論の分析法	産業組織論の伝統的な枠組について概説する。市場構造が市場行動を規定し、ひいては市場成果を生みだすとする考え方について多角的にとりあげ出来るだけ平易に解説する。	武蔵武彦（千葉大学教授）	武蔵武彦（千葉大学教授）
4	寡占理論	現実の市場は完全競争でも独占でもない場合がほとんどである。それは寡占であり、企業と企業の相互依存性に特徴がある。この様な寡占企業の価格設定行動を中心に詳しく解説を加える。	同上	同上
5	独占禁止政策	アメリカを例にとって、独占禁止法政策の歴史的な変遷をたどる。その中で、独占禁止政策が持つ問題点をいくつかの判例を見ながら理解する。最後に、日本の独占禁止政策の運用の特徴点を指摘する。	廣瀬弘毅	廣瀬弘毅
6	鉄鋼業	日本鉄鋼業の戦後復興期から高度成長期さらに現在への足跡を辿り、日本産業に果した役割りと構造を見ると共に、最近顕著になっている電炉メーカーや輸入品に対抗した構造変革にふれる。さらに大手５社内のシェアー変化に伴う日本鉄鋼業の地盤の激変に言及する。	村田修造（神戸大学講師）	村田修造（神戸大学講師）
7	石油化学産業	化学・石油化学産業を概観し、キャッチ・アップ主体の産業政策と産業組織論による分析を行う。特に、産業政策と結びついた市場行動の市場構造と正負の市場成果への影響を解析する。また、原料問題を国際比較の中で論じ、併せて同産業の国際化問題を見ていく。	斯波正輝（元昭和電工㈱有機化学品営業部長）	斯波正輝（元昭和電工㈱有機化学品営業部長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	半導体産業	半導体産業の産業組織論的概説を試みる。 歴史を概観し、次に市場構造として産業の特徴、市場行動として企業の特徴的行動、市場の成果として企業利潤率の傾向について述べる。公共政策の影響にも触れ、政府の産業育成策、貿易摩擦に伴う政府間協定を述べる。	中里裕臣（元丸紅ハイテック㈱半導体事業部技師長）	中里裕臣（元丸紅ハイテック㈱半導体事業部技師長）
9	自動車工業	自動車産業は20世紀の産業である。それは、アメリカで発展し、急速に寡占化した。日本は戦後、国の保護の下で発展し、やがて世界市場を脅かすほどになった。その実態とそれが日本経済に持っている意味、日米経済関係に与えた影響等を考える。	伊東光晴（福井県立大学教授）	伊東光晴（福井県立大学教授）
10	消費財産業	代表的な消費財産業として、トイレタリー（石けん・洗剤）産業を例に見る。メーカー間で商品の実質的な差が比較的小さい産業の場合には、広告による差別化などが特徴的な競争形態となる。その上で、問題点などを探る。	廣瀬弘毅	廣瀬弘毅
11	ネットワーク外部性と新しい競争	最近、新しい競争の形態として話題になっている「ネットワーク外部性」の問題を取り上げる。簡単なモデルを提示し、この外部性が持つ特徴が、電気通信やパソコンのＯＳ間競争、フォーマット間競争など、多くの場面で重要な鍵となっていることを示す。	同上	同上
12	公益事業規制とコンスタビリティ理論	固定費が非常に大きく規模の経済性が働くような産業における「公益事業規制」の必要性を理解する。その上で、最近の規制緩和の理論的な根拠の一つとなったコンテスタビリティ理論を理解する。次に、その例として、アメリカの航空輸送産業を紹介する。	同上	同上
13	シカゴ学派とオーストリア学派	主流派のハーバード学派の産業組織論の対抗勢力として存在するシカゴ学派と、イデオロギー的に非常に異なるオーストリア学派を採り上げ、各々どの点が対立しているのかを明らかにする。そうすることで産業組織論の持つ問題点（特に政策面）の理解を深める。	同上	同上
14	産業政策と戦略的貿易政策	日本とアメリカの間をはじめとして、最近の国際的な経済摩擦の背景となっている考え方の一つに、戦略的貿易政策がある。規模の経済性や学習効果などの要因を考慮に入れることで、この考え方を理論的に説明し、あわせて危険性も指摘する。	同上	同上
15	これからの産業組織論	以上の講義を振り返って、ここまでの議論を総括し、残された課題を示す。さらに、ゲーム理論や取引費用の経済学、内部組織の経済学など最近の活発な理論的な進展などを紹介し、今後の産業組織論の発展について考える。	同上	同上

＝産業と情報社会＝（R）

〔主任講師：藤本義治（名古屋市立大学教授）〕

全体のねらい

現代は産業の情報化の進展が著しく、情報が決定的に重要な役割を果たす情報社会といえる。この講義では、産業の情報化の状況を述べ、情報通信技術、通信ネットワークなど技術的な側面から講じるとともに、情報がいかに産業社会に影響をもたらすのか述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業の情報化(1)	現代社会において情報がいかなる役割を持っているのか、また産業の情報化はどのように達成されているのか述べる。あわせて講義のアウトラインを示す。	藤本義治（名古屋市立大学教授）	藤本義治（名古屋市立大学教授）
2	産業の情報化(2)	産業の情報化の基盤となるコンピュータの利用の現状、コンピュータ関連産業について述べ、産業の情報化の方向を説明する。	藤本義治 永井文秀（茨城大学助手）	藤本義治 永井文秀（茨城大学助手）
3	情報の伝達　(1)	有線による情報伝達の仕組みと動向を説明する。電話でのディジタル通信、B－ISDN、さらにインテリジェントネットワークの解説をし、CATV、通信と放送の融合などについても述べる。	横山光雄（豊橋技術科学大学教授）	横山光雄（豊橋技術科学大学教授）
4	情報の伝達　(2)	無線による情報伝達の仕組みと動向を説明する。無線伝送路、変・復調、誤り制御、フェージング対策、多元接続など基礎知識の説明をし、自動車電話やコードレス電話などの移動通信や衛星通信の国内・国際動向を説明する。	同上	同上
5	情報通信ネットワーク	パソコンネットワーク、ワークステーションネットワーク、LAN、インターネットなどについて説明し、今後の動向なども合わせて述べる。	永井文秀	永井文秀
6	マルチメディア(1)	今後の産業社会を変える可能性のあるマルチメディアについて説明し、それを支えるハードウェアを解説する。	同上	同上
7	マルチメディア(2)	マルチメディアを支えるソフトウェアを説明し、その応用分野についても述べる。また国内外の動向も説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	企業と情報化(1)	わが国の企業が国際的に競争力をつけるためには、オフィスワークの生産性向上が重要な課題である。これを実現するための新しい情報技術としての注目を集めているグループウウェア・テクノロジーの活用方法と実現のアプローチを述べる。	佐藤正春(㈱富士通システム総研首席部長)	佐藤正春(㈱富士通システム総研首席部長)
9	企業と情報化(2)	経営情報の有効な活用を実現するための経営情報システムについて、情報の蓄積方法と活用法、さらに情報力向上策としての情報リテラシーのあり方を述べる。	同上	同上
10	情報経済論 (1)	情報とは何か、財やサービスと比較してどのような特徴を持っているのか、また情報はなぜ価値を生むのかなど、情報経済論の理解に不可欠な基本的ことがらについて述べ、情報と市場の関連について説明する。	山口薫(大阪産業大学教授)	山口薫(大阪産業大学教授)
11	情報経済論 (2)	産業革命に始まる工業化時代は、市場経済・計画経済、および混合経済という3つの経済社会を生んだ。それに対し、情報財の生産が大きな比重を占める情報化の時代はどのような経済社会か、また未来の情報社会を経済学の分野から考える。	同上	同上
12	情報サービス産業論 (1)	情報サービス産業とはどのようなものか説明し、この産業の成立する背景を考える。さらにわが国の情報サービス産業の現状、立地的性格を説明する。	藤本義治	藤本義治
13	情報サービス産業論 (2)	情報サービス産業は大都市を選好する産業であるが、地域展開について経営と立地を分析して論じる。事例対象地域は愛知県である。	同上	同上
14	情報ネットワーク産業社会論(1)	情報およびネットワークの意味を吟味し、さらに情報ネットワーク産業社会とはいかなるものか、情報の技術的側面との対応を考慮しながら、どのような視点が可能であるのか論じる。	同上	同上
15	情報ネットワーク産業社会論(2)	情報ネットワーク産業社会において発揮される連結の経済性などについて、主として産業立地論における集積利益のとらえ方に基づき論じる。さらに、講義全般の総括を行う。	同上	同上

＝ベンチャー企業論＝（R）

〔主任講師：森谷正規（放送大学教授）
〔主任講師：藤川彰一（（株）ジャフコ企画部長）〕

全体のねらい

戦後の日本経済を支えた大企業に行き詰まりがみられ、企業の変革が求められる中で、ベンチャー企業への期待が大きい。米国はコンピュータ、通信、バイオなどの高技術のベンチャー企業が大活躍しており、その分析を行ない、日本の実状と問題点を明らかにして、ベンチャー企業の経営のあり方を論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名所属・職名	放送担当講師名所属・職名
1	ベンチャー企業の時代へ	ハイテク量産工業製品の時代が終わるという日本の産業および社会の大変革の中で、これまでの経済・産業の発展を支えてきた大企業に代わって、ベンチャー企業が新たな発展を招いていく期待が大きい現状を明らかにする。	森谷正規（放送大学教授）	森谷正規（放送大学教授）
2	日本のベンチャー企業の歴史	戦後のソニー、本田技研、その後の京セラなど日本にも数は少ないがベンチャー企業が生まれ成長し、70年代前半に第1次の、80年代前半に第2次のベンチャー・ブームが生じたが、大きくは発展しなかったベンチャー企業の歴史を明らかにする。	同上	同上
3	ベンチャー企業の現状	日本のベンチャー企業の現在の状況について、年商・従業員などの規模、数多くみられる業種・創業年・主なる出資者などを示し、またベンチャー企業が何を経営の力としているか、強さに自身を持っているかその特性を明らかにする。	同上	同上
4	ベンチャー企業の経営者	ベンチャー企業の発展は創業経営者の力量によるところが大きいのだが、その経営者たちはいかなる人物であるのか、学歴、職歴、創業の年代などを示し、またそうした起業家に求められる能力や起業の動機などを明らかにする。	同上	同上
5	米国でのベンチャー企業の発達	第二次大戦後、米国に輩出したベンチャー企業の代表例を取り上げ、現在のベンチャー大発展にいたる要因を分析する。とくに創業者とそれを支えた人々の役割を明示してベンチャー企業が“人”に依ることを明確にする。	藤川彰一（（株）ジャフコ企画部長）	藤川彰一（（株）ジャフコ企画部長）
6	米国でのベンチャー企業の活躍	コンピュータ、国際ネットワークなど、米国で急成長している産業と、それを先導するベンチャー企業が活躍する地域の経済ネットワークの現状を明らかにする。新産業において、ベンチャー型経営が不可欠であることを示す。	同上	同上
7	米国のベンチャーキャピタルとキャピタリスト	米国のベンチャー企業発展を支える最大の要因の一つであるベンチャーキャピタルの特性を示し、また特有のベンチャーキャピタリストの持つ大きな役割を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ベンチャー企業の起業戦略	ベンチャー企業を起こすに際して、いかなる準備が必要であり、いかなる問題をクリアすべきかを明示する。重要な戦略項目を12とり上げ、それぞれについて、起業段階で、考慮すべきことを、整理する。	藤川彰一	藤川彰一
9	ベンチャー・ファイナンスの現状と展望	ベンチャー企業が安定した段階に達するまでの資金調達の方法について、日本の現状を整理する。特に、エクィティ・ファイナンスの重要性を明らかにし、その担い手であるベンチャーキャピタルの歴史と現状を、米国と比較しながら、明らかにする。	同上	同上
10	ベンチャー企業の成長への戦略	新しく開拓していく領域で企業を急成長させるべきベンチャー企業の経営戦略はいかにあるべきか、人材確保・市場開拓・組織運営などについて、米国と日本の成功企業の実例をもとに、成長への戦略を論じる。	森谷正規	森谷正規
11	ベンチャー企業と株式公開	ベンチャー企業にとって、株式公開のもつ意味、特にそのメリットとともに、株式公開に伴う義務についても、明らかにする。ベンチャー企業の株式公開市場として重要な店頭市場の発展の歴史と現状を、米国と比較しながら、まとめる。	藤川彰一	藤川彰一
12	ベンチャー企業と産業・地域	既存の大企業、中堅企業、中小企業もベンチャー企業と深いかかわりがある。大企業のベンチャー制度や中小企業の新事業進出などについて示す。また地域社会の産業振興にベンチャー企業は重要であり、地域とのかかわりや種々の施策の必要性を示す。	森谷正規	森谷正規
13	ケーススタディⅠ	米国のベンチャー企業4社を取り上げて、それぞれについて、その経営の全貌を明らかにする。	藤川彰一	藤川彰一
14	ケーススタディⅡ	日本のベンチャー企業4～5社を取り上げて、その発展過程と経営の全貌を明らかにする。	森谷正規	森谷正規
15	ケーススタディⅢ	ベンチャー企業に関する総括を行って、これから日本のベンチャー企業がいかに発展していくか、その将来を展望して取り組むべき課題を示す。	同上	森谷正規 藤川彰一

＝サービス産業論＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊東光晴（福井県立大学大学院経済・経営学研究科長）〕

全体のねらい

国内総生産のなかば以上が、わが国では第３次産業である。第２次産業も、サービス化が進んでいる。にもかかわらず、これらを対象とする学問分野は未だ確立していない。農業分野と対照的である。この放送では、第３次産業をふくむサービス産業を公共政策との関連で考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	サービス産業の重要性と経済のサービス化・情報化	サービス産業の重要性。そのウエイトの増大。第２次産業の情報化，サービス化。ソフトウェアの重要性。価格はどうしてきまる。産業構造の相互関係。産業間の立体的相互関係。	伊東光晴（福井県立大学大学院経済・経営学研究科長）	伊東光晴（福井県立大学大学院経済・経営学研究科長）
2	電話事業の形態化	1980年代後半に、アメリカ最大の株式会社ＡＴＴは長距離通信と市内通信との分離を命ぜられ、イギリスの電々公社も日本の電々公社も株式会社され、イギリス、アメリカにくらべ日本の民営化はどのような特徴をもっているのであろうか。	同上	同上
3	電話料金論	電話産業は公社形態から株式会社に変わったとはいえ公益事業であり、政存現制を受けている。この場合、電話料金の水準と体系を決定する理論はどのようなものであろうか。	同上	同上
4	情報化社会の現在と将来	電話における技術革新は社会を大きく変えた。東京国際金融市場の成立も、バブルの発生と崩壊も、それは無縁ではない。その将来は、はたしてバラ色であろうか。	同上	同上
5	医療経済の特徴	先進国は一様に医療問題が経済問題化している。その基礎に何があるのか。通常の市場とちがって、患者と医者との間には知識の偏在があり、消費者主権はほとんど存在していない。技術革新も特異である。経済理論の通念への挑戦としての医療市場について考える。	同上	同上
6	日本の医療問題	医療保険の問題点は何か。診療所から病院へのシフト。病院へのシフト。病院の経営難。医科と歯科の対比、看護婦不足、等々。日本の医療問題の現状を考える。	同上	同上
7	続日本の医療問題	医科と歯科、医療行為の分解、新しい看護老後問題との関連等を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	流通と小売業	小売業には、個人商店、専門店、百貨店、スーパー・マーケット、コンビニエンス・ストア、通信販売などいろいろの形態がある。その経営上の特徴を考える。	伊東光晴	伊東光晴
9	流通政策	流通過程に対する国の政策は、小零細店の保護、育成、消費者保護、流通の合理化等多種多様でるが、90年代に入って、ガットにかわる世界貿易機構（ＷＴＯ）の発足とともに、その国際的側面が加わった。また県、市町村の政策としては、商圏の拡大、商業集積再開発等、地域振興政策が大きな柱となっている。	同上	同上
10	流通業の経営戦略	流通業の経営戦略 流通業の商慣習、それを破壊する動き、大阪商法と京都商法、なぜスーパーがお客を吸引するのか、生鮮食品の安売り構造。	同上	同上
11	戦後の交通問題と経済理論	戦後交通経済学の地位は高まった。それは従来の経済学の前提をこえる多くの問題が、この分野であらわれ、経済学の発展に寄与したからである。この問題を外部性、公共財ないし準公共財、収穫進増産業の三つを基礎とする「市場の失敗」との関係で考える。	同上	同上
12	国鉄経営の破綻と運輸政策　Ⅰ	国鉄貨物の衰退、大都市交通線の黒字減、幹線経営の破綻、地方交通線の赤字等、国鉄経営を破綻させた要因を考える。	同上	同上
13	国鉄経営の破綻と運輸政策　Ⅱ	前講につづき、国鉄経営を破綻させた人員構成のアンバランス、公営という名の国営企業体質を考え、ＪＲへの転換とその後の５年間の経営を見ていく。	同上	同上
14	交通政策における受益と負担	大手私鉄の料金、航空料金、空港・港湾利用の受益と負担、道路利用の受益と負担、混雑現象等について考える。	同上	同上
15	サービス産業再論	サービス産業は、個々の業種ごとに、独自の特色がある。いくつかの事例をとりあげ、ついで経済成長にともなうサービス産業の発展と、生産性上昇率格差等にあらわれる製造業との関係を考える。	同上	同上

＝大　地　と　人　間＝（ＴＶ）

－食・農・環境の未来－

〔主任講師：祖田　修（京都大学教授）〕

全体のねらい

人類はその生存のために食料を不可欠とする。それを担うのが農業生産である。しかし農業生産技術の発展は、他方で環境破壊の面も持っている。また一方では飽食と大量廃棄をしながら、他方では飢餓と栄養不足も深刻だ。このような世界農業・日本農業の現実をふまえ、高度文明社会における大地と人間という視点より農業を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文明史の中の食と農	現在の農業および食生活は多くの問題をかかえている。それは高度文明社会に特有の問題である。農業のあり方と行方は、今後の人間社会のあり方を決定づける意味をもつことを指摘する。	祖田　修（京都大学教授）	祖田　修（京都大学教授）
2	飽食社会への道－日本の食生活	日本は食料を大量生産－大量消費－大量廃棄する、飽食社会のただ中にある。そして大量輸入も飽食を支えている。こうした飽食の陰にある問題を究明する。	古沢広祐（國學院大学教授）	古沢広祐（國學院大学教授）
3	飽食を支える農業の発展と技術	日本の食生活を支えているのは、大量生産、周年生産といった農業技術の発展である。しかしその技術は同時に、環境問題や食の安全性をそこなう大きな問題をもつものであることを指摘する。	同　上	同　上
4	食生活と農業を結ぶ	上記のような、食生活と農業生産に所在する問題をのりこえる道は、生産者と消費者がその事実を見つめ、相互に協力して新たな食と農の関係を築いていく以外に道がないことを明らかにする。	同　上	同　上
5	農産物貿易の経緯と現実	農産物の貿易は、国家間・地域間の過不足を補い、無いものを交換しあうという意味で不可欠で有意義なことである。しかしあまりにも外部依存を深めると、種々の問題も起る。こうした農産物貿易の現実と、国家間の交渉経過を追う。	八木宏典（東京大学教授）	八木宏典（東京大学教授）
6	貿易自由化と日本農業の展望	近年日本は貿易自由化を押し進め、大幅に農産物自給率は低下している。日本農業の将来を切り開くにはどうすればよいか。その経営経済的条件を探る。	同　上	同　上
7	揺らぐ循環と共生の大地－アフリカ農業の行方	発展途上国ではなお急速な人口増加が続いている。それを補う食料生産の拡大がなければならない。過酷な条件の中で、アフリカ諸国は農業生産の発展方向を模索している。その実態を紹介する。	祖田　修	祖田　修

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	掠奪される大地 －新大陸型農業の行方	日本はアメリカという新大陸型農業国に大きく食料を依存している。しかしアメリカ農業自体も掠奪農業化し、限界に直面しつつあるといわれる。その現実と可能性はどうか。	八木宏典	八木宏典
9	失われゆく大地と森林 －森林破壊と砂漠化の現実	人口増加と工業化によって、森林は急速に縮小しているといわれる。また既存の農地も塩害や砂漠化などを引き起しているところも多い。農業と環境の複雑で困難な関係に迫る。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
10	激動する大地 －中国農業・農村の行方	中国は世界人口の4分の1を占める。この中国の工業化、農業生産についての考え方は、世界の食料問題を大きく決定づける意味をもつ。激動する中国の農業と農村の実態を明らかにする。	同上	同上
11	保全される農業と環境 －ヨーロッパの農政の動向	ＥＵ諸国は、農業と工業の調和、農業と環境の調和を考え、次第に農産物自給率を高める傾向にある。そうした政策の方向と内容を紹介し、日本の方向を考える。	同上	同上
12	人類と地球永続のための世界農業再編	これまで問題にしてきたように、食糧の確保、環境の保全は、現在地球的規模で考えざるをえなくなってきた。それは人類と地球との永続的関係を探る必要性を提起している。その関係の再編方向を探る。	古沢広祐	古沢広祐
13	現代文明の病根と再生	現在の食生活、農業生産、環境の問題は、現代文明の到達点と帰結を現わしている。このような諸問題の原因は何か、そのあるべき姿への再生の条件は何か。こうした点について文明史視点より論ずる。	井上ひさし（作家）	井上ひさし（作家）
14	日本文化と米	日本の自然と農業のありようは、永年の農民の知恵も蓄積した日本文化の基底をなしている。その事実と意味を検討し、考える。	富山和子（評論家）	富山和子（評論家）
15	21世紀の食・農・環境 －大地と人間の未来	これまでの14回の講義を総括し、21世紀に向けての食・農・環境の関係、大地と人間の未来について展望する。	祖田修	祖田修

＝農　業　経　営＝（Ｒ）

〔主任講師：西村博行（近畿大学教授）〕

全体のねらい

わが国の農業は家族を中心とした経営組織で営まれてきた。自然的あるいは社会・経済的な諸条件の下で形成されてきた経営の構造と形態を理解し、今日の農業経営が直面する課題として、地域と農業経営の関連、企業形態の経営の模索、そして期待される生産組織とサービス事業の展開のあり方を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	事業としての農業の営み	農業は工業や商業と同じように、国民経済の一部を構成する産業である。その農業生産を担う経営は組織体として、生産財の購入、生産物の生産と販売などの活動を行い、その過程で意思決定をしていく。農業経営の構造と運営は商・工業のそれらとどう異なっているか。	西村博行（近畿大学教授）	西村博行（近畿大学教授）
2	経営の構造と組織	農業経営は幾つかの生産部門から構成されている。多角的な経営と専業化した経営では、それぞれがどんな有利性と不利な問題点をもつか。経営活動を有利に展開するためには、経営の組織化で必要な工夫はどうしてきたのだろうか。	同上	同上
3	経営の規模と集約度	一般の企業経営と同様に、農業経営でも経営の大きさを測る尺度として、規模という用語がある。では何で測るのか。大規模経済の有利性とはどういうことなのか。一定の経営規模であっても、資本や労働の投入の仕方で特徴が見られる。その限界はどうなっているか。	同上	同上
4	農業経営の分析・診断・計画	経営の成果と資源の効果的な利用をどう測るか。経営の管理と運営の内容を分析し、その実績を診断する方法を考える。経営の計画はどこに着眼して作成するのか。	同上	同上
5	経営管理と情報	農業経営者の行動は一般企業の経営者の行動と比べ、どこが異なっているか。農産物の販売を工夫したり、資金を有効に活用し、経営の組織化を図ることは大切な経営戦略である。情報の利用、教育と普及のもつ役割を考える。	同上	同上
6	稲作経営	わが国の農業を特徴づけているのは水田利用の稲作である。その稲作経営の形態や規模の拡大はどうなっているのだろうか。また、経営の生産性や収益性の高さはどれ位の水準だろうか。	同上	同上
7	野菜作経営	一口に野菜と言っても様々な種類があり、それらの栽培方法も多様である。幾つかの野菜について施設や露地を利用した経営を紹介しながら、経営計画をたて、収益の大きさや収益性の高さを試算してみる。経営部門の編成をどう変えることが合理的であろうか	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	花き作経営	生活の水準が向上し、その内容が豊かになると、どの国でも花などの観賞用植物の栽培が盛んになってくる。経営の形態も専業的または複合的な家族経営から、企業経営として法人化された営みもある。経営の収益や投資の採算はどうなっているのだろう。	西村博行	西村博行
9	果樹作経営	わが国は国土面積が狭い割に、多種類の果樹が栽培されている。永年性の植物である果樹については単年性植物の野菜の場合と違った経営方法と経営計算の仕方が必要になる。	同上	同上
10	菌茸経営	栽培の過程と形態は複雑で、経営の生産性と収益性は生産対象とする菌茸の種類によって異なる。菌の培養から大規模な生産まで、そして生産物の販路は海外までというように、生産から販売へ至るまでの過程が林間での採取に頼っていた往時とは大きく変貌した部門である。	同上	同上
11	大家畜経営	乳牛を飼養し、主として牛乳を生産する酪農経営と、肉資源を生産する肉用牛飼養経営をとりあげる。後者について、更に、繁殖経営と肥育経営をとりあげ、技術的にも経営的にも違いがあることを学ぼう。	同上	同上
12	中・小家畜経営	豚を飼養する経営には、繁殖豚を飼養して子豚の生産を目的とする繁殖経営と、子豚を他の経営から導入して肉豚の肥育を専門化して行う経営や、これらを同一の経営で行う一貫経営がある。鶏については採卵とブロイラーの養鶏経営をとりあげて学んでみよう。	同上	同上
13	立地と経営の編成・組織化	農業は自然条件や社会経済条件により、生産部門の構成・形態・規模・集約度などに差異がもたらされる。経営の立地要因とは何か。また、生産行程の一部を他へ任せたり、他の経営と組織を組んだりしている。それら生産、組織と地域との関連はどうなっているか。	同上	同上
14	企業的経営 ～法人化～	今日の農業経営が直面する競争条件では、企業法人形態を選択することが1つの方途と考えられ、政策としても採り上げられるようになってきた。その法人化の利点と課題は何であろうか。そして、そこにはどのような問題点があるのだろうか。	同上	同上
15	農業サービス事業体	農業経営は個別の経営体としてだけではなく、地域の資源や社会組織と深く関わりあっている。そして、個別の経営体ではできないサービスを補完したり、代行したり、地域へ広く供給するまでにもなった。それらのサービスはなぜ必要になり、どんな形で与えられているのか。	同上	同上

＝発展途上国産業開発論＝（Ｒ）

〔主任講師：河合明宣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

農業部門の比重が高い点では共通する南アジア諸国の産業開発の課題を、国別の産業構造の特色および産業政策の具体的理解を基に考察する。あわせて南アジア地域理解の深化と南アジア諸国における日本の援助のあり方を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	南アジア諸国における産業開発	「発展途上国開発論」のアウトラインを示す。対象地域として取り上げる南アジアの歴史と地域的特色を概説する。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
2	発展途上国産業開発と農業問題	発展途上国においては農業部門の発展が他部門の発展を大きく規定する。南アジアの産業開発政策における農業部門の位置づけを検討する。	同上	同上
3	多元的・混合経済的開発戦略 インド(1)	多言語、多民族、多宗教・カーストが交錯するインド社会の実態にふまえて、議会制民主主義国家形態のもとで遂行されてきたインドの経済開発戦略の特質について、多民族の国民的統合課題とかかわらせて、産業政策の展開に焦点を当てて考察し、あわせて経済開発の成果と問題について論及する。	西口章雄（同志社大学教授）	西口章雄（同志社大学教授）
4	経済自由化と開発戦略の転換 インド(2)	インドの経済開発戦略の変容過程について、その内的・外的諸要因を検討し、１９７０年代中葉以降の経済自由化政策を回顧しつつ考察する。ついで経済自由化政策が１９８０年代において、深刻な財政・経常収支赤字をインド経済内部に構造的にビルト・インしてきたことについて論及し、インド経済のグローバル化を指向する現今の新経済政策の背景と問題について検討する。	同上	同上
5	土地改革の課題と農業構造 インド(3)	耕地に対する人口圧が高いインドでは土地改革によって農村人口の全てを自作農化することはできなかった。１９５０年代６０年代に完施された土地改革の内容と農村の社会構造にどのような変化が見られたかを検討する。	河合明宣	河合明宣
6	「緑の革命」と産業構造の変化 インド(4)	１９６０年代半ば以降小麦に始まり稲や他の作物に及んだ「緑の革命」とよばれる農業技術革新・生産力の増大が、①農業構造をいかに変えたか、②他部門の発展にどう連関したのかについて考える。	同上	同上
7	インド農業・農村開発の課題 インド(5)	土地改革と「緑の革命」によって農村の階層間の所得格差および地域間格差が拡大した。この発展の結果生み出された新たな問題を地方行政改革・分権化を通した地域政策によってどのような解決の道が探られているのか。今日の農業・農村開発の課題を把握する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	社会開発置き去りの経済発展 パキスタン (1)	イギリス植民地から独立した時のパキスタンは後進的農業国であったが、１９９１年には国内総生産にしめる工業の割合は約２０％、一人当たり国民所得は４１４ドルとなった。しかし国民の識字率は３４％でしかない。この「社会開発なき経済発展」の実態を探る。	浜口恒夫(大坂外国語大学教授)	浜口恒夫(大坂外国語大学教授)
9	「緑の革命」と農村社会 パキスタン (2)	１９６０年代末以降の「緑の革命」によって、ほぼ食糧穀物生産は年間５．５％の伸びを記録して食糧自給体制が実現され、米は主要輸出商品の一つとなっている。この農業増産が、農村社会にどんな変動をもたらしたかを考える。	同上	同上
10	農業の構造的停滞と開発政策 ネパール	ネパール国内総生産にしめる農業の割合は６０年代の８割から９０年代には５割以下に低下した。他方、農業従事者は９割から８割となる程度で両者の格差が広がっている。その原因は農業の構造的停滞と開発政策に求めることができる。	ｹｼｬﾌﾞ・ﾗﾙ・ﾏﾊﾗｼﾞｬﾝ(広島大学助教授)	ｹｼｬﾌﾞ・ﾗﾙ・ﾏﾊﾗｼﾞｬﾝ(広島大学助教授)
11	自然環境保護と開発 ブータン	ブータンは、他の発展途上国における開発による自然破壊や急速な都市化の結果もたらされる人心の荒廃などの側面を見て開発に対して抑制したユニークな態度を取り続けている。伝統文化に基くアイデンティティと自然保護を尊重するブータンの「開発」政策を紹介する。	栗田靖之(国立民族学博物館教授)	栗田靖之(国立民族学博物館教授)
12	ジュート経済－植民地の経済 バングラデシュ (1)	独立以降の産業開発政策の概況を捉えた上で土地改革と「緑の革命」が農村構造に与えた影響を考える。	河合明宣	河合明宣
13	農村開発と地方分権化 バングラデシュ (2)	バングラデシュの農業・農村開発における地方分権化の課題を探る。	同上	同上
14	農村開発援助の現状 バングラデシュ (3)	８割近くの国民にとって農村は生活と仕事の重要な場となっている。バングラデシュの「経済的自立」は農村の発展によってもたらされると思われる。多額の外国援助が投入されている農村開発の現場から援助と農村開発の望ましいあり方を模索する。	安藤和雄(京都大学助教授)	安藤和雄(京都大学助教授)
15	南アジアと日本－自助努力支援－	政府開発援助や経済開放、自由化政策下での外国資本投資は南アジア諸国の産業開発政策に大きな影響力を持つ、南アジアと日本との関係という観点から産業開発における自助努力と援助という問題を整理する。	河合明宣	河合明宣

＝東南アジアの日本企業の工業生産＝（ＴＶ）

〔主任講師：熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

1.相手国発展への貢献に理念をおく　2.世界とアジア工業圏の視点に立つ　3.日本企業の経営と社員への真の住民意識の探求　4.日本の生産経営方式による寄与と現地化　5.日本の地域工業発展での正負問題の前轍的反映　6.工場景観の重視と勝景化　7.日本のとくに次代の人々への国際認識の深化

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	東南アジアの理解 (1) 歴史・宗教・文化	島部、大陸部の原歴史興亡、殖民地時代、日本進攻、独立、インド化、中国化、原始宗教、上座部佛教、イスラム、経済展望、工業化経済成長	和田正彦（元放送大学客員助教授）	和田正彦（元放送大学客員助教授）
2	東南アジアの理解 (2) 経済・政治	島部、大陸部の原歴史興亡、殖民地時代、日本進攻、独立、インド化、中国化、原始宗教、上座部佛教、イスラム、経済展望、工業化経済成長	吉原久仁夫（京都大学教授）	吉原久仁夫（京都大学教授）
3	日本の工業の発展と変化	日本工業の特色、貿易ライフサイクル、輸入、規制起因、経済起因、ＴＱＣ（全社品質管理）、ＪＩＴ（ジャストインタイム生産）、ＴＰＭ（総合設備管理）の発展・構成・特質	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）	熊谷智徳（名古屋工業大学名誉教授）
4	日本の生産経営の発展と特質	日本工業の特色、貿易ライフサイクル、輸入、規制起因、経済起因、ＴＱＣ（全社品質管理）、ＪＩＴ（ジャストインタイム生産）、ＴＰＭ（総合設備管理）の発展・構成・特質	同上	同上
5	輸入規制現地生産型の事例 (1)	エンジンの鋳造・機械加工・組立・試験の一貫現地生産を進め、21世紀の国際自由市場競争態勢の志向と確立	同上	同上
6	輸入規制現地生産型の事例 (2)	タイ国、ＡＳＥＡＮのモータリゼーションと世界自由貿易（ウルグァイラウンド）時代へ向けての生産と経営の高位化	同上	同上
7	ＡＳＥＡＮ域内市場域内生産型の事例	30余年前創業、域内市場開発、拡大を基に生産工場を拡大し、関連事業を多角させてきた、原料、生産、市場にわたる総合現地化経営	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	世界航路的立地型の事例	タンカーのドック入保全修理を主体に、中近東と日本の中間的航路位置に立地した、船舶工場の四半世紀の歩みと将来課題	熊谷智徳	熊谷智徳
9	グローバル市場生産立地型の事例 (1)	球技ボール生産を皮・アメリカ、糸・日本、生ゴム・マレーシア・タイ、立地・タイ、市場・日本とASEANと欧米へのグローバル最適経営	同上	同上
10	グローバル市場生産立地型の事例 (2)	ミクロン単位のエレクトロニクス、メカトロニクスの高精密部品を、自社開発の高精度自動ラインで生産、軌道化後は現地企業へ生産移換し次へ進む経営	同上	同上
11	グローバル市場生産立地型の事例 (3)	マレーシア・ペナン島地域に、重合から紡織までの繊維工場と、重合から成形までのプラスチックス工場を集約して一貫生産し、原料と製品市場の域内およびグローバル最適経営を志向した臨海立地の統合的生産経営基地	同上	同上
12	グローバル市場生産立地型の事例 (4)	エアーコンディショナーの生産と市場供給と開発研究を、日本と海外拠点との連合で、グローバル最適経営を志向して建設した、海外の中心拠点的生産経営基地	同上	同上
13	生産経営からの考察	品質、生産管理、国際社員の課題	同上	同上
14	経営労務からの考察	労働市場、労働経済、技能教育、小集団活動	同上	同上
15	経営社会と将来課題	東南アジア展開の経営態様、アジア工業圏と日本の機能、相手国視点からの課題	同上	同上

＝都　市　経　営＝（ＴＶ）

（主任講師：小泉允圀（明海大学教授）
主任講師：林　亜夫（明海大学教授））

全体のねらい

都市は現在の複雑で高度な経済・社会活動の重要な場となっており、その機能を効率的、合理的なものにするために、都市の開発、維持管理を積極的に推し進めていかなければならない。本講義は、複雑化した都市を如何に認識し、そして開発、管理をしていくかを実例を交えながら科学的に考察することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市経営と政策科学	都市経営の理念、目的について概説し、都市経営における政策科学の考え方と実例を紹介しながら、政策科学的視点の有効性と問題点を学ぶ。	林　亜夫（明海大学教授） 小泉允圀（明海大学教授）	林　亜夫（明海大学教授） 小泉允圀（明海大学教授）
2	都市経営と政策科学	複雑な都市を認識し、開発、管理するためには科学的な態度や手法が不可欠であり、都市経営における政策科学的視点が重要となる。都市経営における政策科学の考え方と実例を紹介する。	林　亜夫	林　亜夫
3	都市の危機	現行の都市行財政制度のもと、複雑な都市的活動や環境の変化で容易に都市は危機的状況に陥る。実例を国内と米国の都市問題を見ながら、その原因を考察する。	同　上	同　上
4	都市財政運営のしくみ	都市経営の基本となる都市財政運営のしくみについて制度面から概説するとともに、地方財政における意思決定プロセスの特徴について解説する。	小泉允圀	小泉允圀
5	各種計画の役割とその立案過程	都市経営を具体的に展開していく上で各種の計画があるが、その役割について述べ、さらに計画立案過程における「科学的方法」について事例を通じて概説する。	同　上	同　上
6	都市経営支援システム －システム・ダイナミックス－	都市活動の様々な側面を長期にわたり予測したり、計画策定のシナリオを作成したりすることに用いられるシミュレーション手法を学び、その手法の有効性と問題点を検討する。	林　亜夫	林　亜夫
7	都市経営支援システム －都市地域計量モデル－	都市活動の様々な側面を計量経済学の視点から分析し、具体的都市計量モデルを提示しながら、予測や計画の影響を推定する方法論を学ぶ。	山口　誠（豊橋技術科学大学教授）	山口　誠（豊橋技術科学大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	都市経営支援システム －地理情報システム－	都市活動が物理的に投影される様々な都市空間を計算機上の情報システムとして構築し、各種の都市政策や計画の基礎資料、更には予測に用いられる地理情報システム（ＧＩＳ）について学ぶ。	川口有一郎（明海大学助教授）	川口有一郎（明海大学助教授）
9	広域行政と市町村合併	広域行政の究極的姿の一つとして市町村の合併による行政区域の統合が考えられる。また、古くから道州制や様々な広域行政体の議論がある。今後の都市経営を考えるにあたってのこれらの利点や問題を考察する。	林　亜夫	林　亜夫
10	要綱行政の役割	要綱行政を成立させた社会的背景について言及し、ついで、全国的に普及してきた要綱行政の機能と限界について検討を加え、具体的事例（リゾートマンション）をもって検討してみる。	小泉允圀	小泉允圀
11	宅地開発とその経営	宅地開発関連公共公益施設の整備が、自治体の財政や開発者の事業採算性や入居者の宅地購入価格にどう関係しているかを概説し、その問題点や今後の整備の在り方について考察する。	同　上	同　上
12	宅地開発形態と都市の動態	計画的に開発された住宅団地と自然発生的に成長したスプロール地区では、公共公益施設整備の水準に大きな格差があるだけでなく、住民意識や属性、さらには長期的な都市活動に大きな差が出てくる。両地区のこのような差について都市経営的視点から考察する。	林　亜夫	林　亜夫
13	住民意識と都市経営	都市住民の意識は都市経営上重要な要素である。住民意識をどのように捉え、経営的視点から活用していくかその方法論の実例を紹介し、検討する。	同　上	同　上
14	行政事務のＯＡ化と情報化	行政事務の多様化と複雑化に対処する為に、ＯＡ化、情報化が進行している。その実態と将来の展望、そして問題点について考察する。	同　上	同　上
15	都市・地域の活性化	都市経営や地域経営の観点から様々な地域活性化方策が進められてきたが、その実態を体系的に整理するとともに、「ふるさと創生１億円事業」等の果たしてきた役割や効果について検討する。	小泉允圀	小泉允圀

＝都　市　計　画　論＝（ＴＶ）

〔主任講師：阪本一郎（明海大学教授）〕

全体のねらい

本講義のねらいは以下の通りである。①都市が今日いかなる状況に直面しているかを都市計画の視点から理解する。②都市空間のあるべき姿についての考え方を学ぶ。③都市計画の持つ手段の有効性は社会条件に規定されることを理解した上で、都市の未来に対して我々の為すべきことを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市計画は何をしてきたか（1）	都市計画を必要とした社会状況とそこで都市計画がいかなる応え方をしたかを、欧米のケースについて歴史的に概観する。都市計画自体の概説でもある。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
2	都市計画は何をしてきたか（2）	都市計画を必要とした社会状況とそこで都市計画がいかなる応え方をしたかを、欧米のケースについて歴史的に概観する。都市計画自体の概説でもある。	同上	同上
3	都市の拡がりと密度	都市の郊外化・拡散化が進行する現状と、その都市計画的意味を、米国のエッジシティなどを参照しつつ検討する。	同上	同上
4	拡がりを決定するもの	付け値地代を用いて都市拡散化のメカニズムを説明するとともに、社会の変化と拡散化の関係を述べる。	同上	同上
5	拡がりのコントロール	都市域拡大の抑制のために試みられてきた都市計画手法を概説するとともに、それらが十分に機能していない状況と背景を述べる。	同上	同上
6	都市内部の棲み分け	都市内のマクロな土地利用分布についてバージェス等のモデルを紹介し、その決定メカニズムを付け値地代を用いて説明する。さらに土地利用の時間的な推移について、その固有の様相を概説する。	同上	同上
7	自発的な棲み分けと強制的な棲み分け	土地利用のあるべき姿を外部経済の観点から検討し、公的な土地利用コントロールの必要性を述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	棲み分けのコントロール	米国の郊外住宅地におけるゾーニングの要請、ユークリッドゾーニング、わが国のゾーニングの導入の歴史等を通じて、ゾーニング制定の背景と役割を示す。	阪本一郎	阪本一郎
9	道路と敷地と建物	地区の構成要素である道路と敷地と建物について、そのあるべき関係を示すとともに、わが国の都市計画制度の特徴と問題点を述べる。	同上	同上
10	近隣環境保全と開発の制限	近隣環境の悪化を防止するために開発を規制することは世界中で行われているが、欧米諸国との比較を通じてわが国の開発規制の特徴を明らかにする。	同上	同上
11	都市をとりまく環境の変化と地区の混乱	都市をとりまく環境の変化が地区の土地利用の混乱や停滞を招くことを工業地区や商業地区について示すとともに、都市計画の視点から問題の所在を論じる。	同上	同上
12	都市の活力と環境の創造	都市に新たな活力をもたらし良好な環境を生みだす拠点開発について、また歴史的建造物等都市の文化的資産の保全について、欧米諸国の例を含めて、その開発誘導手法の概要と都市計画上の論点を示す。	同上	同上
13	問題地区の改善	都市内に広範に分布する問題市街地の改善について、再開発の歴史を概観するとともに、各種再開発手法の効果と限界を論じる。	同上	同上
14	都市の費用と負担	よい都市を創るためにいかなる費用を支払わねばならないか、そして誰がその費用を負担するか。地価の成り立ち、都市の効率性と未来投資、開発利益還元、環境負荷などを通じて都市の費用の幅広い意味を論じる。	同上	同上
15	都市計画と社会	あらためて社会との関係の中で都市計画の在り方を考えるために、開発途上国の都市づくりを日本や欧米との比較で検討する。	同上	同上

＝環境アセスメント＝（ＴＶ）

〔主任講師：原科幸彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

開発事業が及ぼす環境への影響を配慮した意思決定のために環境アセスメントが行われるが、環境保全意識の高まった今日、これは計画の必要条件である。本講義はこのアセスメントの理解を深め適切な判断が行えるよう、その考え方と方法をシステム分析など理論面や制度の解説だけでなく、多くの具体的事例を示して修得させる。このため、国内事例だけでなく、アセスメント先進国である米国の事例も多く紹介し、我国における今後のあり方についても考察を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	開発と環境保全	環境と人間、人間の環境、大都市環境の例（東京圏、New York圏） 自然環境の保全と開発（Jackson, Wyoming）開発と環境の対立 日本の環境問題の変遷：郊外防除から未然防止へ、そして計画へ	原科幸彦（東京工業大学教授）	原科幸彦（東京工業大学教授）
2	アセスメントとは何か	環境に配慮した人間行為の選択、公共の判断形成支援、住民参加 政策分析としてのシステム分析、科学的、民主的手続き アセスメントの手続き、計画案の修正例 （San FRANCISCO の再開発事例）	同上	同上
3	評価枠組の設定	分析全体の流れ、スコーピング：評価項目の選定、選定方法、誰が選ぶか 影響範囲の確定、現況把握の方法、代替案の作成（または確認）	原科幸彦 村山武彦（福島大学助教授）	村山武彦（福島大学助教授）
4	環境影響の予測(1)	環境影響の予測、予測モデル、予測の前提と方法、誰がどう予測するか 大気汚染の予測、水質の予測、騒音・振動の予測、パソコンの活用事例	村山武彦	村山武彦
5	環境影響の予測(2)	自然環境の予測：身近な緑の保全、貴重な動植物の保護、生態系の変化 社会環境の予測：景観の変化（予測システム）、利便性、コミュニティ	同上	同上
6	環境影響の評価	項目別の評価、定性的評価と定量的評価、評価関数、評価結果の表示 解釈（総合評価）、重み付け、誰の重みか、単一指標は必要か	原科幸彦	原科幸彦
7	コミュニケーションーの方法	関連主体に関与、アセスメントの手続き、住民意見のフィードバック 文書による方法と会議による方法、準備書と評価書、良い文書の作り方 説明会（神奈川県の事例）、公聴会（川崎市の事例）、問題点の改善方法	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日本の制度	我国の制度成立の経緯、歴史と背景、我国の制度の特質 閣議決定の要綱、省庁別のアセス、自治体のアセス、アセスの手続き これまでの実績、法制化はされていないが既に定着したアセスメント	森田恒幸(環境庁国立環境研究所総合研究官) 原科幸彦	森田恒幸(環境庁国立環境研究所総合研究官) 原科幸彦
9	日本のアセスメント事例	国家的大規模プロジェクト：本四連絡橋のアセスと事後評価 都市近郊の産業型施設：東扇島ＬＮＧ火力発電所（川崎の環境配慮 開発と自然保護の対立：石垣島空港計画における計画案の変更	森田恒幸	森田恒幸
10	現行制度の効果と課題	政策効果の測定、効果測定の枠組、これまでの政策効果、日本の経緯 現行制度の課題、事業アセスと計画アセス、海外協力でのアセス	同上	同上
11	アメリカの制度と事例	アメリカの背景：国土・社会・文化の違い、行政手続法と情報公開制度 制度成立の歴史、ＮＥＰＡ、制度の特徴、ＣＥＱ、これまでの実績 アセスメントの具体事例（Boston, Red Line Case:地下鉄の延伸計画）	原科幸彦	原科幸彦
12	アセスメントと紛争	アセスメントによる環境紛争の発生、紛争解決の方法、裁判よりも話し合い 紛争解決の事例（Lackson, Wyomingの下水処理場建設紛争：開発と自然保護、Seattie の州際道路90号線建設紛争：開発と地域住民）	同上	同上
13	より積極的な住民参加	現行制度の問題点：狭い評価項目、計画変更が困難、事業者が評価書作成 住民関与が不十分、米国に見る積極的な住民参加の事例 住民・行政・事業者の関係、環境基本法、国際的視野からのアセス	同上	同上
14	環境管理計画	アセスメントと環境管理計画、環境管理計画の概要、ソフトなアプローチ 具体事例、環境管理の新たな概念、価値観の変化、新たな環境論理	内藤正明(京都大学教授)	内藤正明(京都大学教授)
15	アセスメントの今後	総合的なアセスメント、Project, Program and Policy Assessment 住民参加による環境創造、San Antonio のウォーターフロント開発の例 環境計画と成長管理、東京とNEW Yorkの都市圏の違い、広域的な計画	原科幸彦	原科幸彦

＝エネルギー工学と産業・社会＝（ＴＶ）

〔主任講師：牛山　泉（足利工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギー工学と産業・社会の関わりをいろいろな視点から明らかにする。先ず、国内外のエネルギー事情や地球規模での環境問題を調べ、次にエネルギー技術や環境問題の歴史をたどる。さらにエネルギー技術と産業・社会の現状を学んだ後、エネルギー工学と社会の将来のあるべき姿を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常生活とエネルギー	日常生活とエネルギーの関係を明らかにするため、エネルギーの原点から出発し、エネルギーの保存と散逸で熱力学の法則を学び、さらに、日常生活で使われているエネルギーを調べる。	牛山　泉（足利工業大学教授）	牛山　泉（足利工業大学教授）
2	世界のエネルギー事情	世界の一次エネルギー消費量とエネルギー資源の埋蔵量とを比較し、国際エネルギー需給の現状を明らかにすると共に、エネルギー資源がいつまでもつのかを考えてみる。	同　上	同　上
3	日本のエネルギー事情	国内の近年のエネルギー需給動向を明らかにし、産業、民生、運輸の各部門のエネルギー消費やエネルギー転換部門の状況について調べる。また、経済成長とエネルギー消費についても考える。	同　上	同　上
4	地球環境問題	地球規模での環境問題を分類し、地球環境問題とエネルギー消費の関係を調べる。また、温暖化や酸性雨の問題とCO_2排出量の現状を明らかにすると共に、問題解決の対策を考える。	同　上	同　上
5	エネルギーの社会学	エネルギー問題と産業社会との関係を概観した上で、エネルギーと国際政治、エネルギーと環境との調和、エネルギーの安全保障、さらにはエントロピーと世界観などについても言及する。	同　上	同　上
6	エネルギー工学の技術史	エネルギー工学のうちで動力技術に焦点を絞り、水車や風車のような自然エネルギー利用から、熱エネルギーから動力を取り出す蒸気動力や内燃機関、さらには電気エネルギーについて述べる。	同　上	同　上
7	エネルギー技術と環境問題の歴史	エネルギー資源とその利用技術の歴史を木材・木炭の時代から、石炭への転換、さらには石油文明の時代へとたどり、これらに伴う大気汚染などの環境問題についても明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	エネルギー技術と日本の産業構造の変革	戦後日本の産業構造の変革の歩みを、高度成長期から石油危機、石油危機以降とに分け、エネルギー技術の視点から明らかにするとともに、日本型脱工業社会についても展望する。	牛山　泉	牛山　泉
9	エネルギー変換の技術	現代の産業・社会を支えているエネルギー技術のうちで、エネルギー変換の工学について焦点を絞り、力学、熱、化学、電気、光・放射の各エネルギーの変換について概括する。	同　上	同　上
10	原子力発電システム	現代のエネルギーシステムの中で賛否両論のある原子力発電について、世界の原子力発電の現状、原子力発電のしくみと燃料サイクルについて学び、原子力利用の安全性と経済性について考える。	同　上	同　上
11	自然エネルギー利用技術	地球に優しいエネルギー源である自然エネルギーの利用技術を、太陽、海洋熱、地熱などの熱や光と、水力、風力、波力などの流体エネルギー、さらにはバイオマスとに分けて概説する。	同　上	同　上
12	エネルギーの評価	エネルギーの有効利用を考える上で、エネルギーの正しい評価が不可欠である。そこでエクセルギーという概念を導入して、資源と環境を再評価すると共に、エネルギーの利用効率を評価する。	同　上	同　上
13	省エネルギーとエネルギーパス	産業・社会における省エネルギーの取り組みについて明らかにすると共に、エネルギーの消費構造を調べ、ソフトエネルギーパスの選択によるエネルギーの有効利用の可能性について考察する。	同　上	同　上
14	開発途上国とエネルギー問題	開発途上国における人口爆発とこれに伴う、食糧不足やエネルギー不足が深刻化している。持続可能な開発のための開発途上国援助をエネルギー問題の視点から提案する。	同　上	同　上
15	エネルギー工学の課題と産業社会の将来	エネルギー問題と環境危機について再認識すると共に、環境と調和する将来の産業・社会とライフスタイルを提案し、これに果たすべきエネルギー工学の役割りや目標について考える。	同　上	同　上

＝材料工学と産業・社会＝（ＴＶ）

〔主任講師：東　千秋（放送大学助教授）〕

全体のねらい

産業・社会の成立基盤として重要な工学・技術は、情報、エネルギー、材料の３要素があって成り立つものである。したがってこれからの材料工学を展望することは、未来の産業・社会を望見することになり、また逆に材料工学への産業・社会のこれからのニーズを考えることは材料工学の未来を展望することにもなる。その意味で、ここでは金属、セラミックス、有機材料と言った従来の材料固有の分野を個々に取り上げるのではなく、横断的に材料工学を産業・社会との係わりから総合的に考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業発展における技術革新の役割	産業・社会の成立基盤として重要な工学・技術の国際的優劣が国際経済摩擦を生み出しているように、技術革新は国家の経済発展のための鍵となっている。ここでは産業の歴史的変遷と技術革新の役割を生産経営学の立場から見るとともに、産業発展における技術革新の役割について考察する。	東　千秋（放送大学助教授）	東　千秋（放送大学助教授）
2	技術革新と材料革命	新しい産業・社会の実現のための技術革新の原動力として材料の革命がある。これからの産業・社会のあるべき姿を2020年の科学技術予測から展望し、そこでの材料革命へのニーズから21世紀の材料工学を展望する。	同　上	同　上
3	環境への安全対策	地球環境と生物に安全であることは材料工学の最も重要な課題である。ここでは、マクロな地球環境とミクロな製造プロセスにおける有害物質への対策と取り組みを取り上げ、環境への安全対策について考える。	同　上	同　上
4	材料のライフサイクルアセスメント	製品として使われる材料は、使用された後の廃棄処理をも含めたトータルなライフサイクルの中で評価されなければならなくなった。ここでの大きな課題として、製品や資源のリサイクルを取り上げ、材料のライフサイクルアセスメントを考える。	同　上	同　上
5	材料の高性能化	これまでの材料の性能を極限まで引き出す材料の高性能化について、それぞれの材料の特徴をもとに材料の高性能化がどのように試みられ、どのような産業・社会が出現するのか考える。	同　上	同　上
6	材料の高機能化	ニーズとしての機能は多様である。それぞれの材料の特性がどのように機能発現に利用されているのかを見るとともに、それぞれ材料の高機能化がどのように試みられ、どのような産業・社会が出現するのかを考える。	同　上	同　上
7	インテリジェントな材料	材料自身が環境の変化を察知し、その内容を的確に判断し、迅速に対応できるインテリジェントな材料を開発する試みが始まっている。その開発の現状と将来について展望する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	情報技術と材料	ますます高度情報化に向かう人間社会において、情報をより速く多量に容易に信頼性高く処理する技術が必要であり、デバイス技術、ソフトウェア技術、システム技術の高度化が要求される。ここでは材料の革新と直接係わるデバイス技術について展望する。	東　千秋	東　千秋
9	光・電エネルギー変換と材料	ディスプレーや光通信さらには環境保全のためのクリーンなエネルギー利用として期待される太陽光発電など、そこで利用されている光・電エネルギー変換は、人間社会においてますます重要になっている。ここでは光・電エネルギー変換と材料について展望する。	同　上	同　上
10	エネルギー貯蔵技術と材料	エネルギーのクリーンな利用が環境保全のために急務になっており、いかにエネルギーを貯蔵するかが課題である。水素燃料自動車における水素の貯蔵や電気エネルギーの貯蔵などエネルギー貯蔵技術と材料開発の現状と将来から未来の産業・社会を展望する。	同　上	同　上
11	超伝導と材料	高温超伝導材料の実現は、物体や電力の輸送におけるエネルギー損失の問題を解決するだけでなくセンサーや電子デバイス技術にインパクトを与え、人間社会を大きく変革するものと期待されている。ここでは、超伝導材料の開発の現状と将来から未来の産業・社会を展望する。	同　上	同　上
12	医療と材料	疾病を直しまた生体機能の欠陥を補う医療活動は人間が生活をする上でなくてはならないものである。このための医薬や医療用具・機材においていろいろな材料が重要な役割を果たしている。ここでは、医療における材料工学から未来の産業・社会を展望する。	同　上	同　上
13	ナノテクノロジー	数百オングストロームすなわちナノメーターの大きさの固体物質はこれまで材料として扱ってきた大きなサイズの通常の固体とは異なった物理的・化学的性質を示すようになる。このような材料作成の先端的プロセスであるナノテクノロジーについて解説する。	同　上	同　上
14	コンピュータと材料工学	材料を量子力学を基にした第一原理から計算して設計したり、材料の安全性やライフサイクルの評価を多様な膨大なデータベースを駆使してコンピュータシミュレーションにより事前に行う技術がますます重要になっている。ここでは、このような材料工学におけるコンピュータの役割について展望する。	同　上	同　上
15	これからの産業・社会と材料工学	これまでの講義を総括し、これからの産業・社会のあり方と材料工学の未来を総合的に考える。	同　上	同　上

＝情　報　工　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：都倉信樹(大阪大学教授)〕

全体のねらい

「情報工学」は、情報に関するものを工学的な立場からアプローチするもので、コンピュータの構成法と、要素となるハードウェア、さらにコンピュータの工学的応用を考えたシステムやその基盤技術などである（坂井利之先生）。この講義では、主として、コンピュータの仕組み・原理を基礎から講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	コンピュータはどう使われているか	身のまわりで計算機がいかに使われているかをいくつかの例でみる。情報工学について簡単に説明する。	都倉信樹（大阪大学教授）	都倉信樹（大阪大学教授）
2	コンピュータでのデータ処理	コンピュータの構成要素を概観し、データ処理の例をいくつか通して、コンピュータでどのようにデータ処理が行われるかをみる。	同上	同上
3	計算機ではどのようにデータを表現するか	計算機ではデータをどう表現するのかを学ぶ。記号、数の表現法、２進表現での計算法、パリティチェック	同上	同上
4	コンピュータの構成（１）〜レジスタとメモリ〜	コンピュータの内部構成に入る。 記述言語として、レジスタ転送表現を用いてその働きを説明する。記憶装置。	同上	同上
5	コンピュータの構成（２）	バスの働き、周辺装置とのインタフェースの基礎的な事項を説明する。 割り込みについても簡単にふれる。	同上	同上
6	プログラマから見たコンピュータ（１）	プログラマから見た計算機の姿を説明する。 コンピュータの構成（アーキテクチャ）、命令、アドレシングモードなどを説明する。	同上	同上
7	プログラマから見たコンピュータ（２）	具体的にどういう命令があるかを紹介していく。機械語プログラムについてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	プログラムとプログラム言語	アセンブリ言語とそのプログラミング、高水準のプログラミング言語について基礎的な事項を説明する。	都倉信樹	都倉信樹
9	コンピュータの仕組み（1）～組み合せ回路～	コンピュータがどのような仕組みで動くのかを順に説明する。ゲート、ＩＣなどを説明し、組合せ回路の解析法をのべる。	同上	同上
10	コンピュータの仕組み（2）	組合せ回路の構成法をのべ、具体的に2進数の加算器、加減算器などの回路がどのように作られているかを説明する。	同上	同上
11	コンピュータの仕組み（3）～ＡＬＵ～	コンピュータの中で演算を行うＡＬＵ（算術論理演算部）、シフタなどを説明する。順序回路を導入する。	同上	同上
12	コンピュータの仕組み（4）～順序回路～	フリップフロップを説明し、順序回路の実現法を述べる。制御部の考え方を説明する。	同上	同上
13	コンピュータの仕組み（5）	サブルーチンと割り込み、スタック、割り込み処理の基本的考え方について学ぶ。	同上	同上
14	通信	通信の基礎的な概念といくつかのコンピュータ間通信に関する事項を取り上げる。	同上	同上
15	動向と展望	コンピュータの能力について、考えてみよう。 最後に、さらに進んで勉強するための案内を試みる。	同上	同上

＝プログラミングの基礎＝（ＴＶ）

〔主任講師：都倉信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

単にプログラム言語を学ぶだけではプログラムはかけない。むしろ、設計に重点をおいて、しっかりしたプログラム作りをめざす。本講義は４つの素材を用いる。本体は入門的な内容と主とし、基礎的な考え方や概念を伝えることを目指し、第２はプログラム言語についてのコラム。第３は実際場面での種々の問題を扱うコラム。第４は放送教材で種々の事例を紹介する。プログラミングということを総合的に理解していただくことをねらっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	プログラミングとは	プログラミングとは，関連概念，用語 ・プログラム言語とは ・プログラミングとソフトウェア	都倉信樹（大阪大学教授）	都倉信樹（大阪大学教授）
2	プログラムの構成要素　1	制御構造の表現 ・プログラミング言語の歴史 ・ライフサイクル	同　上	同　上
3	プログラムの構成要素 2	プログラム対象，整数型，配列など ・アセンブリ言語と高水準言語 ・プログラミングツール、エディタ	同　上	同　上
4	目的のデータを探す	配列中の探索など，アルゴリズムと評価 ・ＦＯＲＴＲＡＮ，ＣＯＢＯＬ，ＡＬＧＯＬ，ＰＬ／Ｉ ・コンパイラに関連する諸概念	同　上	同　上
5	再　　帰	関数・手続き，再帰の考え方 ・ＰａｓｃａｌとＣ(1) ・デバッグ	同　上	同　上
6	並べ替えること	ソーティング ・ＢＡＳＩＣ，ＬＩＳＰ，ＳＮＯＢＯＬ，ＡＰＬなど ・プロファイラ（Ｋｎｕｔｈの経験則）	同　上	同　上
7	構文記述　1	ＢＮＦ，拡張ＢＮＦ，図式表現 ・ＰａｓｃａｌとＣ(2) ・よくある虫	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	構文記述 2	構文に沿った処理 ・PascalとC(3) ・テストについての諸概念	都倉信樹	都倉信樹
9	データ構造 1	ポインタ，スタック，キュー，adt ・PascalとC(4) ・デバッグのこつ	同上	同上
10	データ構造 2	表 ・PascalとC(5) ・ソフトウェアの品質	同上	同上
11	状態遷移 1	イベントの処理 ・OOLの基礎概念(1) ・読みやすく書く(1)	同上	同上
12	状態遷移 2	アセンブラ ・OOLの基礎概念(2) ・読みやすく書く(2)	同上	同上
13	入出力	ファイル，テキスト ・その他のパラダイム 論理型 ・ソフトウェアの生産性向上のために 再利用	同上	同上
14	時間の扱い	時間の取得，リアルタイムプログラミング ・その他のパラダイム 関数型 ・ソフトウェアの生産管理	同上	同上
15	さらに学ぶために	関連する分野の紹介 ・言語の将来展望／総合環境など環境 ・ソフトウェア開発の今後	同上	同上

＝エレクトロニクス入門＝（ＴＶ）

（主任講師：小川鑛一（東京電機大学教授））
（主任講師：富田英雄（東京電機大学教授））

全体のねらい

エレクトロニクスの応用は、今や家庭電化製品、交通・運輸の自動化システム、産業現場、事務処理に至るあらゆる分野に見られる。現代社会はエレクトロニクス技術なくして今日の生活は成り立たないといっても過言ではない。こうしたエレクトロニクス（電子）応用技術の一端が少しでも理解できるようにとの願いを込め、本講義ではエレクトロニクスの基礎について、多くの実験を交え分かり易く解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	電気の基礎－直流回路－	エレクトロニクスを学ぶには、まず電気の現象と特性を知る必要がある。ここでは、電圧、電流、抵抗などの電気の基礎事項とその電気回路の計算に必要な諸法則を学び、直流電気特性を知ることから始める。	富田英雄（東京電機大学教授）	富田英雄（東京電機大学教授）
2	電気の基礎－交流回路－	ここでは、電気特性に重要な交流回路を学ぶ。周波数や位相などの交流の基礎事項、フェーザを用いた交流回路の計算法などを学び、その特性を測るためにエレクトロニクス技術者必須のオッシロスコープの原理と使い方を述べる。	同上	同上
3	電気回路の諸特性	種々の周波数成分を含む電波を発生させたり捉えたりする発振器や復調器の原理は、回路の共振現象に基づくものである。また、高速で動作する電子回路は回路の過渡的現象を基礎としている。本章ではこれらの基礎的事項と応用例を述べる。	内川義則（東京電機大学教授）	内川義則（東京電機大学教授）
4	導体・半導体の電気特性	エレクトロニクスを学ぶには、まず半導体の原理と特性についての知識を学ぶことが必須である。ここでは物質の電気の通し易さの指標である導電率を用いて導体や半導体の電気特性を理解する。さらに、Ｐ型やＮ型の半導体およびその応用であるダイオードを知る。	平栗健二（東京電機大学助教授）	平栗健二（東京電機大学助教授）
5	トランジスタの原理と特性	エレクトロニクスの主役はトランジスタである。ここでは、バイポーラトランジスタの動作原理と種類およびその静特性を学び、さらにバイポーラ型とともによく用いられる電界効果トランジスタ（ＦＥＴ）の原理と特性についても学ぶ。	星野洋（東京電機大学教授）	星野洋（東京電機大学教授）
6	トランジスタ増幅器	トランジスタの最大効果は電流の増幅作用にある。そのため、この効果を利用して小さな電気信号を大きな信号に変換するトランジスタ増幅器が用いられる。本章では、トランジスタを用いた各種増幅回路や特性およびその設計法などを学ぶ。	同上	同上
7	特殊半導体デバイス	ダイオードやトランジスタには、様々な応用デバイスがある。ここでは、主なものとして定電圧ダイオード、発光ダイオード、ホトトランジスタ、サイリスタ、トライアックなどの原理とその応用について述べる。	平栗健二	平栗健二

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	オペアンプと基本回路	トランジスタを始め複数の半導体が数多く組み合わされて一つのデバイスを構成しているのが累積回路（ＩＣ）である。このうち、代表的なアナログＩＣが演算増幅器（オペアンプ）である。本章ではこれを用いた基本増幅回路とその特性について学ぶ。	平栗健二	平栗健二
9	オペアンプの応用	前章で学んだ基本的な演算増幅回路の知識を基礎とし、さらに複雑な種々の波形変換回路を学ぶ。ここでは、オペアンプが実用的な電子回路で常に用いられる積分器や微分器、比較器、特殊波形発振器、アクティブフィルタなどについて述べる。	星野　洋	星野　洋
10	パルス回路	デジタルコンピュータにおけるハード・ウェアの基本はパルス回路である。ここでは、その基礎技術であるパルス化技術とマルチバイブレータを用いた各種パルス回路の動作原理とその使用法を述べる。	佐久間一郎（東京大学助教授）	佐久間一郎（東京大学助教授）
11	ディジタル回路	デジタル電子回路の応用は大型コンピュータや通信機器に留まらずロボットや工作機械などの産業用や日常家電製品に至るまで多岐に及んでいる。本章ではデジタル回路を用いて各種電子回路を構成する基礎として、ブール代数に立脚した論理回路構成を学ぶ。	同　上	同　上
12	センサとエレクトロニクス	エレクトロニクスとセンサとは密接な関係がある。温度や光などの物理量は、多くの場合電気量に変換される。その変換素子として、温度センサを例にとり、その動作原理について述べる。	内川義則	内川義則
13	電子計測と制御	制御はセンサなしでは成り立たない。ここでは、照明の明るさと温度制御の例を挙げ、その制御に関するエレクトロニクスの動作原理について述べる。	小川鑛一（東京電機大学教授）	小川鑛一（東京電機大学教授）
14	コンピュータとエレクトロニクス	世の中の物理現象はアナログ的に変化する。デジタルコンピュータが発達した今日、アナログ量はデジタル量に変換され、それが社会・産業・日常生活の面で役立っている。ここではそのような面を踏まえ、コンピュータとエレクトロニクスとの関係について述べる。	同　上	同　上
15	産業技術とエレクトロニクス	今日のように電子機器が広く普及したのは、半導体集積回路、大小様々なデジタル計算機、その関連技術の発達による。ここでは、デジタル技術とアナログ技術を対比しながら、エレクトロニクスと産業技術の展望について考察する。	同　上	同　上

＝応用人間工学＝（ＴＶ）

〔主任講師：池田良夫（愛知工業大学教授）〕

全体のねらい

人間は与えられた環境下で、可能な選択肢を選び、それに基づき行動を起こす。人間工学はシステムの目的を達成する際に、所与の環境条件が人間の機能に整合するように周辺環境を整備、または設計することに関する学際的技術体系である。本講座では、人間の機能を理解し、この知識を日常生活と労働の場に応用できることをねらいとし、最後に現代社会への人間工学の役割を展望している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	システムの構成と講座の概要	生活や労働の場をシステムとすると、システムは効率的かつ効果的であることが望ましい。システムは人間と人間をめぐる広義の環境とで構成される。環境は狭義の環境条件と機械設備と仕事・手続きなどの形のないものから構成される。人間と環境との相互作用を人間機能に整合させる概念を概説し、講座の概要を紹介する。	池田良夫（愛知工業大学教授）	池田良夫（愛知工業大学教授）
2	人間機能の理解（１） 生物医学的視点	人間の身体機能は神経系と体液・内分泌系によって支配・調整されている。人間工学的職場設計や改善において、人間の作業行動に関わる身体機能について、大脳中枢神経系、感覚・脳神経系、運動神経系、自律神経系に沿って、刺激情報と反応行動との関連から職場環境への適応状態について概説する。生物医学的視点から生体システムとしての人間機能を理解する。	斉藤むら子（早稲田大学教授）	斉藤むら子（早稲田大学教授）
3	人間機能の理解（２） 社会心理・行動医学的視点	人間の認知行動、環境適応行動の結果としての作業成績と心身機能への影響を理解することは職場設計や改善に極めて重要である。主体的行動の源泉である認知・判断・意志決定を行う思考力は環境認識の限界があって必ずしも適切に発揮されない。ネットワーク社会における人間の適応行動は内外条件に制約されて発現する。この制約性を考慮して主体システムとしての人間機能を理解する。	同上	同上
4	ディスプレイとコントロールと人間工学	人間と環境との相互作用において、ディスプレイは環境側から人間の感覚器官に受容される刺激や情報をさし、狭義にはそれらの情報を提供する機器・表示器をさす。 逆に、コントロールは人間側からの働きかけに対する環境側の受容部分で、狭義には操作器具をさす。ディスプレイやコントロールの人間機能への整合化を考察する。	池田良夫	池田良夫
5	作業システムと作業空間の設計と人間工学	作業システムと作業空間で使用する道具、機器、機械設備、施設などはそれらを使用する人々にとって使いやすい、誤使用の少ない機能を備えたものであることが望ましい。システム目的遂行に対して、個別的に考察したディスプレイとコントロールと人間機能と狭義の環境とが効率的・効果的になるように統合的に配置することを考察する。	同上	同上
6	人間工学チェックリストと職場改善	職場の人間工学的な改善が重要である。ＩＬＯ方式のチェックリストの活用によって、インターフェイスの適正化、作業負担の緩和、作業環境の整備、労働時間の短縮による生活サイクルのゆとり化、自律労働の促進など、多面にわたる対策の打ちかたと、その有効性について検討する。	酒井一博（財団法人労働科学研究所副所長）	酒井一博（財団法人労働科学研究所副所長）
7	人体計測とその応用	衣服、椅子などの什器は、私たちの体型をもとデザインされる。そのために、日本人の人体計測値が大規模に測定され、人体計測データベースとして公表されている。人体計測の方法、計測値の統計処理と活用の仕方、また企業の製品設計への応用例を概説する。	小松原明哲（金沢工業大学教授）	小松原明哲（金沢工業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日常生活の人間工学	人間工学は特別なものではなく、私たちの生活の中にも、深く浸透している。使いやすい道具、安全な機器やシステム、障害者や高齢者などへの配慮など、私たちの身近な生活の中に人間工学を実践する態度を養う。	小松原明哲	小松原明哲
9	コンピュータ応用機器の「使いやすさ」	近年、家庭に、オフィスに、街角に、様々な高機能なコンピュータ機器があふれている。その中には、「使いにくい」ために、イライラや、誤使用を招きやすいものも少なくない。「使いやすさ」とは何か、またこれらの機器を使いやすくするにはどうしたらよいのか、事例を通じて考察する。	同上	同上
10	コンピュータ労働と労働衛生	コンピュータ労働は多岐にわたる健康被害を及ぼす恐れがあると指摘されている。これらの健康被害のそれぞれについて、誘発させる諸要因とそれを回避するための対応策について人間工学の視点から概説する。	神代雅晴(産業医科大学教授)	神代雅晴(産業医科大学教授)
11	労働安全衛生と人間工学	人間工学の名称であるergonomicsはその言語から仕事の適正管理と意訳することができる。この視点から、現代の産業労働がかかえる病巣を明らかにし、その源泉からの対策を導き出すことができる。労働の人間化をいかにはかるかについて、その理念と技法を概説する。	同上	同上
12	障害者、高年齢者雇用と人間工学	労働省が身体障害者、高年齢者の雇用促進を企業に要請しているにもかかわらず、雇用は必ずしも思うように増加しない。受入れ側の企業にとり、生産能率を低下させたくない論理がある。事例を通じて、身体障害者、高年齢者雇用のための支援機器、作業改善について概説する。	岸田孝弥(高崎経済大学教授)	岸田孝弥(高崎経済大学教授)
13	ジャストインタイム生産方式と人間工学	少品種大量生産方式から多品種変量生産方式へと生産方式が変化するとともに、作業者の働き方にも変化が出てきた。ジャスト・イン・タイム生産方式が持つ効率性と作業者への負担の増加とは、一見二律背反ともかんがえられがちである。この問題について人間工学的観点から考察する。	同上	同上
14	PL(製造物責任)と人間工学	PL(製造物責任)法が成立して、企業側が対応に苦慮しているといわれる。しかし、消費者側も企業側も製造物責任について、人間工学的視点を持つことの必要性を理解すれば、この問題へのアプローチが見つかるはずである。製造物責任に対する理解について人間工学の役割を考察する。	同上	同上
15	交通システムと応用人間工学の要点	交通システムの内、我々になじみのある公共バス、鉄道、乗用車では、道路・舗装・道路標識・視環境などがドライバーと運転環境とが人間の特性に整合していることが重要である。バスや鉄道では、システム利用者の視点からシステムを概説する。最後に、応用人間工学講座を総括し、生活の場、職場における応用人間工学の活用に資するための総合的なまとめを行う。	池田良夫	池田良夫

＝計　測　と　制　御＝（ＴＶ）

主任講師：森　　政弘（東京工業大学名誉教授）
主任講師：森田矢次郎（拓殖大学教授）
主任講師：中野道雄（東京工業大学教授）

全体のねらい

希望通りの結果を得ようと対象になっているものに働きかけることを制御という。制御を行うためには、まず対象を知らなければならないし、制御を行った結果を把握しなければならない。このためには計測が不可欠となる。本講義では、社会における計測と制御の学問・技術の適用状況の解説を背景に、計測と制御に必要となる基礎事項を説明し、産業における顕著な応用例を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	計測と制御の役割	すべてのものごとは、制御なしには所要のはたらきを現わすことはできない。そして制御のためには、計測が不可欠である。計測はまた制御以外にも、人間の知識欲を満たすためなど、人間の重要な行為でもある。ここではこれから学ぶ計測と制御を概観する。	森　政弘（東京工業大学名誉教授）	森　政弘 高瀬國克 森田矢次郎 香川利春 中野道雄
2	計測とは	人類誕生以来今日まで、ものを測るということは、その内容、手段、規模を次第に豊富にしながら行われてきた。ここでは計測の始まり、基本原理、方法、使われる機器やシステムの形態、トレサビリティ、情報と計測などを述べる。	森田矢次郎（拓殖大学教授）	森田矢次郎（拓殖大学教授）
3	計測技術	計測の対象は計器によって測られ、人間にとって理解しやすい数量として変換される。対象に触れて変換を行う計器の部分をセンサというが、この章では具体的なセンサをいくつか取り上げて説明し、その応用について述べる。	同　上	同　上
4	測られる対象とセンサ・計測システム	センサの種類、またそのその使い方は多種多様であるが、それらに共通して見られる特性を考える。制御との関連で特に重要な信号の伝達という面を線形性、たたみこみ、伝達関数などの説明を加えて述べる。	同　上	同　上
5	制御システム	ここでは制御システムについてその概要を述べる。まず“制御”について説明した後、制御信号の伝わり方、それにかかわる伝達関数について述べる。	中野道雄（東京工業大学教授）	中野道雄（東京工業大学教授）
6	ブロック線図とその応用	制御システムを図的に表現する手段としてよく用いられるブロック線図について述べる。	同　上	同　上
7	制御システムの基本特性	この章ではまず制御システムの特性について概説したのち、定常状態の特性と過度状態での特性について検討する。さらに安定問題で重要になる周波数特性についても触れることにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	制御システムの分類	制御システムを様々な観点から分類する。その中で制御量に注目して分類した結果、位置もしくは速度、力を制御量とする制御システムをサーボ機構とよんでいる。ここではこのシステムについて述べる。	中野道雄	中野道雄
9	プロセス制御	プロセス制御とは温度、レベル、流量、圧力、成分などのプロセスの重要な諸量を適切に操作する制御を言う。まず主なプロセスの例と特徴を示す。次にセンサ、制御装置及び操作機器を述べる。またこれらの要素で構成される制御システムの調整法を示す。	香川利春(東京工業大学教授)	香川利春(東京工業大学教授)
10	ロボットの計測と制御	ロボットは人間の五感に相当する受容器、手足に相当する効果器そして頭脳にあたる知能から構成され、これを実現するためには高度な計測・制御技術を駆使する必要がある。ここでは、種々の計測・制御の統合化技術、知能化手法などに焦点を当て解説する。	高瀬國克(電気通信大学教授)	高瀬國克(電気通信大学教授)
11	ロボットの応用	ロボットの応用範囲は工場での工業応用、建築などのフィールド応用、最近では、アミューズメント、医療福祉、警備等にもどんどん拡大している。ここでは、種々の応用例を紹介し、そこに使われる応用技術を概観するとともに将来を展望する。	同上	同上
12	画像による計測(1) デジタル画像とフィルタリング	近年、計算機の能力が飛躍的に向上するにつれ、CCDカメラなどで撮影した画像を用いて、そこからさまざまな情報を獲得する機会が増えてきた。ここでは、その際必要となる画像処理の基本と、画像を用いた計測について、応用例を交えながら解説する。	奥富正敏(東京工業大学助教授)	奥富正敏(東京工業大学助教授)
13	画像による計測(2) 対象の2次元計測と識別	人間は視覚を通じて非常に多くの情報を得ている。同様に視覚情報処理は、コンピュータ(ロボット)にとっても貴重な外界の情報獲得手段となる可能性がある。ここでは、その際重要となる「画像からの3次元情報(世界)の獲得(把握)」等を中心に解説する。	同上	同上
14	画像による計測(3) 3次元構造の復元 人間の視覚とコンピュータビジョンの挑戦	計算機による視覚情報処理としてのコンピュータビジョンの応用例(例えば、3次元計測、ロボット、バーチャルリアリティ等)を紹介すると同時に、それらを通じて、元になる理論の説明、技術的意味の考察等を行う。	同上	同上
15	まとめ	ここでは、各講師がこれまで講義してきた内容について補講し、全体のまとめを述べる。	森政弘 森田矢次郎 中野道雄	全員

＝生産性科学入門（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小林和生（帝京科学大学助教授）〕

全体のねらい

生産性の視点から我が国の国際社会における地位を理解するとともに、生産性概念を追求する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生産性科学の誕生と課題	生産性科学の誕生の由来、系譜について概説し、なぜ今生産性が重要であるか述べる。とりわけ経済学と生産性科学の違いに焦点をあて、この学問の課題を明確にする。	小林和生（帝京科学大学助教授）	小林和生（帝京科学大学助教授）
2	生産性科学の対象と方法－その1	生産性科学の対象である産業社会の理論的規定を与える。すなわち、人間－人関係と人間－自然系の交差構造として産業社会が構成されていること。またその構造の詳細を明確にする。	同上	同上
3	生産性科学の対象と方法－その2	多元的要因が複雑に関連して形成されている産業社会の分析のためのフレームワークとしてのＳ－Ｆスキームについて解説する。	同上	同上
4	日本経済の発展と生産性	日本経済の発展を国民の豊かさの観点から分析する。すなわち国民一人当りＧＤＰの変化とその要因分析を行う。	同上	同上
5	国民経済と産業構造	国民経済とそれを構成する各産業の関係（産業構造論）について解説する。また産業連関論についても解説する。	同上	同上
6	国民経済生産性と部門生産性	生産部門別の生産性の変化と国民経済生産性の関連について分析する。	同上	同上
7	企業生産性と付加価値	国民経済の構成単位である企業の主体性と国民経済への寄与について明らかにする。また総生産性について述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	企業における収益性と生産性	企業の収益性と生産性の分析枠組を示す。生産性関数を用した分析を行う。	小林和生	小林和生
9	プロダクティヴィティ・スキーム	生産性推進運動であるプロダクティヴィティ・スキームの展開について解説する。	同上	同上
10	知識集約型要員の生産性	知識集約型要因（ＫＩＳ）の仕事の性格とその重要性を論述し、その創造性発揮のための仕組みを解明する。	同上	同上
11	資源・環境問題と生産性	資源・環境問題のあり方と、生産性向上運動への示唆について考える。	同上	同上
12	国民の豊かさの国際比較	統計資料を活用して、先進国および発展途上国間の国民経済福祉、国民経済生産性の国際比較を行う。	同上	同上
13	部門生産性の国際比較	統計資料を活用して、部門レベルの生産性の国際比較を行う。	同上	同上
14	企業生産性の国際比較	企業レベルでの国際競争力の計測論的接近を試みる。	同上	同上
15	情報化社会と生産性	産業の情報化にともなう産業社会の今後のあり方と生産性について考察する。	同上	同上

＝産業と労使の関係（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：神代和欣（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は、企業社会であり、雇用社会である。多くの人は、企業に雇用され一定のルールに従って働かなけれならない。他方、企業は市場の競争に耐え、利潤を上げなければならない。そこに労使の葛藤が生まれる。葛藤の解決には、経済の論理や労働の取引に関する方の枠組みを理解し、労使の経験に学ぶ必要がある。国際比較の視野も欠かせない。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業の発展と雇用社会	A．サラリーマン社会（雇用社会の主役：企業とサラリーマン。職業の自由と失業の危険） B．使用者と労働者（使用者とは誰か、管理職の役割） C．離職・協調・緊張（いやなら辞めるか、労使で改善に努力するか、争うか）	神代和欣（放送大学教授）	神代和欣（放送大学教授）
2	工業社会から情報社会へ	A．産業革命とペティ法則（技術進歩と所得の増加が産業・雇用構造を変えた） B．ホワイトカラー化（ホワイトカラーの増大、サービス経済化、上昇する学歴水準） C．情報通信革命（第三次産業革命、ＭＥ革命、デジタル革命、ソフトウェアの重要性）	同上	同上
3	ものづくりのシステム	A．テイラー・システムとフォード・システム（大量生産方式、労働能率の刺激制度） B．ホーソン実験と人間関係論（労働者のやる気を起こさせる法） C．トヨタ式生産システム（ジャストインタイム方式、協力企業との長期的取引関係）	同上	同上
4	雇用関係	A．職業選択と採用の自由（労働者の職業選択の自由、企業の採用・解雇の自由） B．いろいろの雇用形態（個別労働契約、労働協約、長期雇用、有期雇用、パート、派遣） C．飴と鞭（労働規律、能率刺激の方法、解雇と懲戒処分）	同上	同上
5	生産性の向上と成果配分	A．付加価値を生み出す（付加価値とＧＮＰ） B．技術革新（生産復興、傾斜生産、主要産業の発展、エネルギー転換、石油危機、ＭＥ革命とデジタル革命） C．成長成果の公平な分配：効率化と民主化（団体交渉、労使協議、生産性向上運動）	同上	同上
6	キャリア形成	A．採用と配置（学歴別定期採用、中途採用、配置転換、出向） B．教育訓練と技能形成（人的資本、ＯＪＴ、公共職業訓練、キャリア・パターン） C．評価と昇進（昇進・昇格と人事考課、年功序列から職能制度へ）	同上	同上
7	労働と余暇	A．週40時間労働制（標準労働日、所得と余暇の選択、変形労働時間制、裁量労働制） B．残業（婦人・年少者の保護、三六協定、残業割増、労働時間の国際比較） C．休日・休暇（週休二日制、年次有給休暇、病気休暇、育児・介護休業）	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	報酬の体系	A．賃金制度（出来高給と時間給、賃金体系、基本給と諸手当、月給制、工・職身分差別の廃止、定期昇給とベースアップ、年俸制） B．ボーナス（盆暮の手当、生活補給金、利潤分配、賃金の伸縮性） C．退職金・企業年金（労働年齢と平均寿命、退職一時金、定年制、公的年金、企業年金）	神代和欣	神代和欣
9	労働組合との関係	A．民主的労使関係の枠組み（団結権、団体交渉権、争議権；労働組合は必要か、組織率低下；争議調整、不当労働行為、労働裁判） B．対立と協調（労働運動とイデオロギー対立、漸進的改良主義、組合分裂、労使協議） C．職場の労使関係（職場闘争、苦情処理、ＱＣサークル）	同上	同上
10	日本的雇用慣行	A．終身雇用（長期雇用の経済合理性、解雇権濫用の法理、解雇制限と雇用調整） B．年功賃金（生活保障給、勤続給のもつ刺激効果、長期の競争、人事考果、円高で際立つ年功賃金の高コスト、職能給化） C．企業別労働組合、（従業員組合、工・職混合組合、企業別組合の功罪、欧米との比較）	同上	同上
11	団体交渉の経済的効果	A．労働組合の交渉力（ショック効果、労働需要の弾力性と組合交渉力） B．春闘方式（春闘方式の意義、賃上げのメカニズム、波及効果、公共部門の賃上げ） C．人員整理と合理化（人員整理を巡る大争議の教訓、産業政策と雇用政策）	同上	同上
12	男女の雇用機会の均等	A．女性の職場進出と性差別（民法改正と学制改革、女子雇用の増大、裁判闘争、均等法） B．女子労働者の保護と平等（労働規準法の保護規定とその見直し、均等法の改正） C．男女賃金格差（あからさまな性差別から訓練・昇進の機会の差別へ、統計的差別）	同上	同上
13	高齢化社会の労使課題	A．人生80年時代の生き方・働き方（加速する高齢化、60歳定年制、65歳現役雇用、なだらかな引退） B．老後の所得保障（退職一時金、賃金後払い、功労褒賞、一時金から企業年金へ） C．高齢者医療と介護（膨張する老人医療費、介護保険とその人材確保）	同上	同上
14	大競争時代の労使の在り方	A．貿易摩擦と海外現地生産（日本の産業の国際競争力、多国籍企業、雇用の輸出） B．円高と国際調達の増大（東南アジア経済の発展、共産圏の崩壊、新しい国際分業体制） C．産業空洞化は避けられるか（強い日本の基盤技術、高齢化の圧力、将来展望）	同上	同上
15	外国人労働者問題	A．バブル時代の人手不足（専門職の門戸解放、不熟練者の禁止、日系人、技能訓練生） B．到来する若年労働力の不足時代（加速する若年労働力不足、経済成長の見通し） C．増加する国際労働移動とその対応（ＥＵの域内移動、苦悩するアメリカ；東南アジア）	同上	同上

＝マーケティング論（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：田村正紀（神　戸　大　学　教　授）〕

全体のねらい

マーケティングは、顧客創造を担当する企業活動である。マーケティング活動がどのように展開されるのか、また、その活動の市場における有効性はどのように決まるか。この講義の狙いは、この問題に答えるための、マーケティングの基本的な考え方と知識をできるかぎり実践的に講義することである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングという企業活動は、どのような課題を担って生まれてきたのか。その誕生の社会経済的条件を展望しながら、マーケティングにおける、企業と市場のかかわり合いを図式化する。	田村正紀（神戸大学教授）	田村正紀（神戸大学教授）
2	マーケティング発想の３つの視点	マーケティングの導入によって、市場を見る企業の視座はどのように変わるのか。それを流通機能の代替性、顧客需要の異質性、個別市場の構想、の３つの視点から明らかにする。	同　上	同　上
3	マーケティングの基本戦略	マーケティングの基本戦略は、マーケティングの基本指向であり、かつマーケティング活動の基本形式である。最終顧客指向、ブランド化、流通組織化という基本戦略を取引概念との関連で講義する。	同　上	同　上
4	マーケティング意思決定過程	マーケティング意思決定過程は、マーケティング活動の展開様式を企業内で決めていく過程である。この過程は、市場機会の分析、標的市場と市場目的の設定、マーケティング計画の策定からなる。	同　上	同　上
5	マーケティング・ミックス：製品と価格の決定	マーケティング諸活動の集まりは、マーケティング・ミックスと呼ばれる。マーケティング・ミックス決定の内、製品と価格の決定が、どのような決定問題を含んでいるかを展望する。	同　上	同　上
6	マーケティング・ミックス：経路と販売促進の決定	マーケティング・ミックスの決定は、経路と販売促進の決定も含んでいる。製品をどのような販売を通じて流通させるのかが販路決定問題である。販売促進決定は、広告、パデリシティ、流通サポート、販売部隊の決定を含む。	同　上	同　上
7	ブランド化戦略の有効性	ブランド化戦略は、市場細分化や製品差別化から構成される。市場でのブランドのポジショニング、知覚品質と価格の関連を手がかりに、市場で成功するブランド化戦略のポイントを探る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	流通組織化戦略の有効性	流通組織化戦略は、垂直統合、流通系列化、製販同盟などから構成させる。これらの戦略の市場での有効性が、ざのような市場要因（競争、需要、製品特性など）の影響を受けるのかを検討する。	田村正紀	田村正紀
9	製品ライフサイクルとマーケティング戦略の有効性	すべての製品は、導入、成長、成熟、衰退という製品ライフサイクルを描く。製品ライフサイクルが以上の段階を経過するにつれて、マーケティング戦略をどのように変えていく必要があるかを明らかにする。	同上	同上
10	営業の役割	マーケティング計画の実施は、営業による個々の顧客との個別取引を通じて行われる。営業が個別顧客との取引において、マーケティング活動をどのように実施統合しているかという観点から、営業の役割を明らかにする。	同上	同上
11	営業部隊の管理	営業部隊の管理問題は、営業マン数、営業努力の製品別・地域別分配などの活動水準だけでなく、営業マンの行為を対象にした人員管理の側面がある。この側面について、結果統制と過程統制の２つの管理儀式を比較検討する。	同上	同上
12	機動営業	過程統制や結果統制だけでは、市場の多様化とその変化の加速化に対応できない。新しい営業様式としての機動営業が必要になる。機動営業を支える、営業の分権化、戦場構成、情報武装、顧客信頼などを検討する。	同上	同上
13	市場発展と戦略構想力	市場は絶えず変化している。その変化の中でも、過去からの飛躍を含んだ断絶的変化が生じることがある。この種の構造変化を含んだ市場の長期的変化が市場発展である。市場発展の中で、存続するには戦略構想力が必要になる。	同上	同上
14	リーダー地位の優位性の形成と消滅	企業は市場地位によって、リーダー、挑戦者、追随者、ニチャーなどに分けられる。市場発展の成長期には、リーダーの地位が、競争優位性を生み出すが、市場が成熟するにつれてそれが消滅する。そのメカニズムを探る。	同上	同上
15	挑戦者の戦略：競争ゲームのルール転換	市場発展の構造変化期には、企業の盛衰が激しくなり、業界の再編が起こる。このような構造変化の過程で、次代のリーダーになる企業の戦略構想には、どのような特徴が見られるか。その戦略構想力の内容を探る。	同上	同上

＝ 企業の経済学（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：黒澤　昌子（城西大学助教授）〕

全体のねらい

企業とは、生産要素を投入して生産活動を行い、生産物を市場で供給する経済主体である。本科目の焦点は、社会経済的法則性の中にある企業活動の展開のルールにある。企業を主体としたミクロ経済学の基礎的理論を、それらの日本への応用を含めて学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	本講義の一般的枠組みと狙い	「企業という主体の活動に寄与する経済学」という本科目の対象と方法、及び全体の流れを概説する。特に、資源の希少性やそれに由来する機会費用の概念、さらには市場を介した資源配分のシステムとそのメカニズムへの展望と共に、本講義で意図している幾つかの独自性に触れる。	黒澤昌子（城西大学助教授）	黒澤昌子（城西大学助教授）
2	消費者選択の理論	消費者行動の分析は、企業行動分析の大前提となる。本章では、消費者行動のメカニズムと需要の創出の基礎、及び所得変化が需要に与える影響などについて考察する。	同上	同上
3	需要の分析と予測	財の価格などの与件の変化が個人需要並びに市場需要に及ぼす影響を詳しく分析する。企業の意思決定において不可欠な、弾力性という概念とその測定・予測の方法について考察する。	同上	同上
4	生産の基礎理論	企業は、産出物と生産要素の量、及びそれらをいかに効率よく最小費用で生産するかを決定しなければならない。本章ではそのメカニズムの基礎理論を考察する。	同上	同上
5	費用の分析	生産の理論を経済価値の空間に移すときの第１歩が、費用の分析である。本章では長期と短期における生産量と費用の関係を分析し、最適な産出物と生産要素の量を決定するメカニズムを考察する。	同上	同上
6	市場メカニズム	希少な資源の配分の基盤となるのが市場における需要と供給の相互作用である。本章では価格調整のメカニズムを中心として、完全競争における生産・資源配分の効率性の概念、効率性を妨げる市場における与件の変化とそれらの基本問題などを、実際例を取り上げながら考察する。	同上	同上
7	不完全競争：独占と値付け	完全競争以外の市場構造のなかでも、特に独占市場について学習する。さらに、価格差別と、事業部門における移転価格などのメカニズムとその重要性についても考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	不完全競争：寡占と非価格競争	寡占市場における企業の戦略的行動のメカニズムを、簡単な例を踏まえながらゲームの理論を用いて学習する。さらに、寡占における非価格競争のなかでも、特に広告・宣伝による差別化競争と、独占的競争について学ぶ。	黒澤昌子	黒澤昌子
9	投資決定メカニズム	現在価値の概念を紹介し、確実性下、あるいは不確実性下における投資決定のメカニズムを学習する。	同上	同上
10	不完全情報	情報の非対称性がある場合に生じる逆選択やプリンシパル・エージェント（モラルハザード）問題と、その解決策などについて考察する。	同上	同上
11	外部性	企業活動に付随する環境破壊、公害などは外部不経済の典型的な例であり、イノベーションは外部経済をもたらす例である。これらの現象をもたらす外部性の一般理論的考察と共に、具体例に即した実践的課題、たとえば政府の役割についても言及する。	同上	同上
12	労働市場	各種の投入資源のうちで独特な性格を持つものが労働力である。伝統的なテーマである労働の需要と供給の理論、及び賃金決定のメカニズムについて、社会経済の21世紀展望という緊急な課題の観点から、これらをユニークに考察する。特に、日本的雇用慣行が変革を迫られている現状の把握と今後の展望を行う。	同上	同上
13	人的資本論	前章で学んだ理論を応用しながら、人的投資の経済学的分析の基礎を考察する。高等教育の人的資本形成の推移とその役割や、企業の労使関係における人的資本形成の問題点について、米国および日本での研究業績をもつゼムスキー教授と対談する。企業内訓練の実態と問題点に関してここで展開される議論の幾つかは、今後の我が国の在り方への展望を与える上に役立てられるに違いない。	同上	同上
14	収益性と生産性	これまで展開されてきた理論を企業経営の成果分析の場で実践上の問題として考察する。それの第1として、生産性と収益性の測定の問題を考える。	同上	同上
15	国際競争力：日・米自動車貿易	前章の講義を国際貿易関係の上に展開する。この水準になるとミクロ経済学の諸概念と、マクロ経済学、さらには経済学の境界を越えた領域との媒介的な考察にもはいることになる。	同上	同上

＝管理会計（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：古川浩一（東京工業大学教授）〕
〔主任講師：佐藤宗彌（横浜市立大学教授）〕

全体のねらい

管理関係は、経営管理に必要な、様々な価値情報を提供するための方法である。本講では、そこで用いられる価値情報の性質、管理会計で利用される諸方法を概説し、それらがどのように応用されるかの概略を示す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	管理会計の意義と役割	効果的な経営管理のためには、客観的な情報が必要である。管理会計は、そのような情報を価値によって提供する。本章では、このような役割を持つ管理関係の意義について述べる。	古川浩一（東京工業大学教授）	古川浩一（東京工業大学教授）
2	会計制度における価値情報	本章では、企業などの組織体における会計制度が作り出す会計情報の特色と作成方法を説明する。営利企業においては、財産計算と損益（利益）計算を同時に行う複式簿記の理解が、企業分析や意思決定にとり非常に重要である。	佐藤宗彌（横浜市立大学教授）	佐藤宗彌（横浜市立大学教授）
3	経済的価値に関する情報	経営管理は経済的行為でもあるので、そのために、経済的な立場での情報を必要としている。この章では、管理会計で用いられる経済的な情報の特質を述べる。	古川浩一	古川浩一
4	原価計算の考え方と方法 (1)	原価計算とは、製品やサービスを作り出している企業で、どれ位のコストが発生するかを把握する計算方法である。その目的として、原価計算基準では、財務諸表作成目的、原価管理目的、予算編成目的など５つを挙げている。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
5	原価計算の考え方と方法 (2)	原価計算は、目的に応じて色々な計算方法がある。本章では財務諸表作成（決算）目的に役立つ実際原価計算の手続きとその考え方を、いろいろな計算例をとりあげ説明する。	同上	同上
6	生産活動の革新と原価	製品を製造するにはどのような作業と、どのような生産要素があるのか。また新技術と革新的な生産方法の採用により、原価はどのように変化するかを実例をまじえて考察する。	同上	同上
7	原価情報とコストマネジメント	製造コストを管理するためには、生産方法や作業時間、生産要素の価格を標準化し、標準原価を設定し、実際原価との差異によりどの作業が原価管理（原価削減）の焦点かを知る必要がある。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	原価削減と原価企画	わが国の製造企業は、1970年代から激しい原価切り下げ競争を行ってきた。そのためのさまざまな活動を検討し、製造現場からの製品開発段階までの原価切り下げ活動を述べる。	古川浩一	古川浩一
9	経営管理における収益－費用の情報		同上	同上
10	セグメント別収益－費用の把握	多角化、多国籍化した企業においては各セグメントごとの決算やグループ全体の連結決算が必要になる。とくに事業部、子会社、海外合併会社の利益管理や業績評価を適切に行うことが益々重要になっている。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
11	プロジェクトの経済性評価	多額の資本の支出を伴う投資プロジェクトを評価に当たって、経済性の検討が重要な課題。	古川浩一	古川浩一
12	振替価格と企業間関係	我が国では、最終メーカーに大して多くの部品製造企業が部品を納入している。この章では、長期的に関係を持つ企業間、あるいは企業内の部門間で問題となる振替価格を取り上げる。	同上	同上
13	海外事業の管理会計	海外での生産販売の段階まで進んだ国際企業にとって、為替変動、インフレーション、金利格差、カントリーリスクへの対処が大切になる。このような環境変動での海外事業の利益計画や原価管理をどうするか考察する。	佐藤宗彌	佐藤宗彌
14	業績評価と経営監査	企業の業績評価には企業自体の評価、各部門の評価、個々の管理者、従業員の評価、グループ全体の評価、各グループ企業の評価などがある。また監査役や外部・内部の監査人は、法律の順守、社会的責任などを考慮して、企業の評価を行う。	同上	同上
15	管理会計の現代的課題	この章では、これまでに学んできた管理会計の諸課題を要約し、それらが今日抱える問題点を探るとともに、その将来を展望する。この章の放送授業は、座談会形式で行う。	古川浩一 佐藤宗彌	古川浩一 佐藤宗彌

＝発展途上国の開発戦略（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：河合明宣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

経済開発の目標と戦略は、歴史、社会制度、政治体制、資源賦存、地政学的位置等に規定される。これらを視野に入れ、南アジア７ヵ国（インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、モルディヴ）の開発戦略の特徴を国別に考察する。南アジア諸国についての具体的理解は、日本の援助や南アジア地域と日本との協力関係の今後の在り方を考える材料となろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	南アジアの多様性と地域の統合	ネパールとブータンを除けば、南アジア諸国はイギリス植民地統治から独立して誕生した。各国は、植民地統治の歴史を開発戦略策定の初期条件とさぜるをえなかった。植民地統治期に形成された経済、政治、国家機構の特色について概観し、あわせて本科目の対象とする南アジア地域の概況説明を行う。	河合明宣（放送大学助教授）	河合明宣（放送大学助教授）
2	発展途上国の農業開発戦略	工業化が外国資本や援助によって推進された場合は、圧縮された産業構造の高度化が達成されるが農工間の格差は急速に拡大する。南アジアを事例として、経済発展と農業・農村の変容とその結果もたらされた変化の意味を考える。	同上	同上
3	多元的・混合経済的開発 インド (1)	多言語、多民族、多宗教・カーストが交錯するインド社会の実態をふまえて、議会制民主主義国家形態のもで遂行されてきたインドの経済開発戦略の特質について、多民族の国民的統合課題とかかわらせて、産業政策の展開に焦点をあてて考察し、あわせて経済開発の成果と問題点について論究する。	西口章雄（同志社大学教授）	西口章雄（同志社大学教授）
4	経済改革の現状と諸問題 インド (2)	1991年７月以降、米ソ冷戦体制の崩壊と共に、インドの経済開発戦略も大転換を遂げた。インド経済の世界市場への統合を目指して、マクロ経済安定化・構造調整政策が経済改革の名の下で着々と実行されてきた。ここでは同改革の特徴・内在的諸問題・展望について考察する。	同上	同上
5	「社会主義型」開発戦略下の農業政策 インド (3)	インドの経済開発戦略における農業政策の展開を跡づける。農業生産力の向上と社会的公正の達成がどのように調整されたか、工業化のために農業部門がどのような役割を担ったかについてインドの特徴をまとめる。	河合明宣	河合明宣
6	経済開放政策下での農村改革 インド (4)	1960年代後半に開始された「緑の革命」によって、食糧自給の見通しがついたとはいえ、農村の所得格差や地域格差は拡大している。多数の貧困線以下層の存在、人口増加、環境の悪化等にどう対処するのか。問題点と解決の方向を探る。	同上	同上
7	軍部・官僚支配の開発戦略 パキスタン (1)	国連開発計画によれば、1994年のパキスタンの１人当たり所得は430ドル、貧困層は12％で、生活水準は南アジア諸国のなかでも上位にあるのに、成人識字率37％など社会開発の遅れが目立つのはなぜか。その原因を独立後のパキスタン政治に対する軍部・官僚支配とその下実施された開発戦略に探る。	浜口恒夫（大阪外国語大学教授）	浜口恒夫（大阪外国語大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経済発展と構造的不均衡 パキスタン (2)	独立後の工業化の結果、国内総生産に占める工業の役割は25%で農業と同比率となり、輸出構造も工業製品が主となった。農業増産で食糧自給もほぼ達成された。しかし膨大な財政赤字や国際収支赤字など構造的不均衡を抱え込んだパキスタン経済の実態を捉える。	浜口恒夫	浜口恒夫
9	若い独立国の自立の課題 バングラデシュ (1)	1971年に独立したバングラデシュは、一国の経済運営と国民統合のための物的及び人的資本の蓄積が乏しく、軍人政権の交代を繰り返す不安定な政権が続いた。地方行政改革を中心に従属的経済構造からの脱却の模索を跡づける。	河合明宣	河合明宣
10	農村開発における環境問題と在地の技術 バングラデシュ (2)	バングラデシュでは、新しい乾季稲作が環境を大きく変え、それに呼応するかのように砒素中毒、マラリアの蔓延等、誰もが予想しなかった問題が生じている。人々を豊かにするはずであった緑の革命の長期的実践の結果である。豊かさをはき違え、短期的成長の罠に囚われたのだろう。今こそ在地に生きてきた人々の知恵と技術が求められている。環境問題の視点かに農村開発戦略を具体的に考察したい。	安藤和雄 (京都大学助教授)	安藤和雄 (京都大学助教授)
11	ヒマラヤ山間地の開発課題 ネパール	ネパールは1950年代から混合経済体制下で5か年計画を中心に開発戦略を立ててきた。間もなく第9次5か年計画が実施されるが、その狙いと裏腹に経済は伸び悩み、従来主産業であった農業も生産の構造的基盤が揺るがされている。この問題点を考察する。	ケシャプ・ラル・マハラジャン (広島大学助教授)	ケシャプ・ラル・マハラジャン (広島大学助教授)
12	開発と自然保護の戦略 ブータン	ブータン王国は、ヒマラヤ山脈の南に位置している。ブータンは、今日まで急速な近代化を望まず、伝統的各生活を大事にしてきている。ブータンのこのような姿勢は、工業化に代表される近代化のもたらすメリットとデメリットを考えさせるよい例である。	栗田靖之 (国立民族学博物館教授)	栗田靖之 (国立民族学博物館教授)
13	社会福祉、社会開発重視の開発戦略 スリランカ、モルディヴ	スリランカとモルディヴは、ともに南アジア諸国中一人当たり国民所得や社会開発の点で一、二を争う国である。70年代末以降政府主導型経済開発から経済自由化、外資導入へと転換したスリランカ経済の変貌と問題点を明らかにする。モルディヴは珊瑚礁からなる小国で、独立以来対外経済開放政策をとり、漁業近代化と観光業の開発を進めてきた過程を説明し、その問題点を指摘する。	古賀正則 (明治大学教授)	古賀正則 (明治大学教授)
14	南アジアの開発戦略	インドは、東西冷戦体制のもとで非同盟中立の立場を取り、社会主義型社会の建設を目標として内向きの経済開発戦略を採用した。パキスタンは、対外依存、民間資本、大地主重視の開発を進めた。アセアンやＮＩＥＳとの比較を念頭に、第二次大戦以降の開発戦略の展開を概観し、各国の主要な特色や南アジア全体の流れを考察する。	河合明宣	河合明宣
15	南アジア地域と日本	政府開発援助や経済開放政策下での外国資本投資は、経済開発戦略に大きな影響力を与える。外的インパクトによる経済構造の調整は、国内に様々な戦慄と対応を引き起こす。地方分権等の行政機構の改革や農民や地域住民レベルでの新しい動きに注目し、市民レベルでの国際協力や交流活動にも触れて南アジア地域と日本との関係の在り方を考える。	同上	同上

＝都市・地域経営（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：小泉允圀（明海大学教授）〕
〔主任講師：岡崎昌之（福井県立大学教授）〕
〔主任講師：林　亜夫（明海大学教授）〕

全体のねらい

21世紀を向かえ、我が国の都市や広く地域の活力を維持し、また地域の活性化を維持していかなければならない。そのためには新たな制度や地域に分散している様々な資源を有効に利用し、着実に政策を実施していく経営的視点が必要である。このような視点に立ったときどのような問題があるか、制度的、財政的あるいは地域的制約を通じて明らかにしながら、問題解決の方策や技術を探究することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市・地域経営学の必要性	21世紀をむかえた日本の都市、地域の活力を維持あるいは活性化していくために、都市や地域の資源を有効に利用するという経営的視点が必要である。３人の講師の間でのディスカッションを通じて、経営的視点とは何か、現実の問題は何かを議論し、問題解決の制度的、技術的論点の明確化を行う。	小泉允圀（明海大学教授） 岡崎昌之（福井県立大学教授） 林　亜夫（明海大学教授）	
2	都市経営の視点と方策	わが国で「都市経営」に関する議論がどのようになされてきたかその歴史的経緯をまず整理し、次いで都市経営が目指す方向や視点をどのように考えるか、また都市経営の具体的対象領域としてどのようなものが有り、現実にどのような方策が採られているか整理解説する。	小泉允圀	小泉允圀
3	地方財政のしくみとその運営	地方財政の特色をふまえ、まず国と地方との財政関係について概括的に整理し、次いで地方財政のうち市町村財政を着目し、そのしくみや財政運営上の原則について述べ、都市・地域経営における財政問題の重要性について理解を深める。	同　上	同　上
4	都市・地域計画の役割とその立案過程	都市・地域に関する様々な計画は、都市や地域を経営・管理する上で重要な役割を果たしている。また、複雑化する社会状況の中で、自治体や企業体にとって合理的意思決定として欠くことができない。それ故、各種計画の役割とその立案過程について解説する。	同　上	同　上
5	生活環境整備とその経営	いずれの都市、地域にとっても住民の生活環境をより豊かに、快適に整備してゆくことが求められている。そこで、生活環境整備をより積極的に推進して行くための諸方策について、制度面や財政面から検討を加え、今後の整備のあり方について考察を加える。	同　上	同　上
6	地域経営の視点と方策	地域外の力に安易に依存することなく、地域に内包された力を基本に、地域の可能性を長期的な視点で追求するという、地域経営の原点をいかに実現していくか。地域資源の活用、整備拡充、規制排除等、具体的な地域経営の方策を検討する。	岡崎昌之	岡崎昌之
7	過疎化の進展と対応策	過疎化、高齢化により日本の国土の荒廃が進んでいる。中山間地域、豪雪地域、離島等々の条件不利地域での農林業をはじめとする産業振興の行方も不透明である。こうした地域の実像を明確にしつつ、条件不利地域への対応を日本国内、海外の事例から模索する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	都市農村交流と地域経営の担い手	高速道路や新幹線等の社会的基盤がほぼ整ってきた今日の社会では、人々の移動性も高まり、地域の定住人口に加えて、その地域を訪れる交流人口も視野に入れて地域経営を考えることが必要になった。またそうした交流を支える地域経営の担い手も重要である。	岡崎昌之	岡崎昌之
9	地域の経済的振興－特産品開発、刊行、新しい産業振興	地域の資源と技術を活用する身近な特産品開発の産業振興、その特産品や景観、地域の歴史文化を活かした観光振興をいかに着実に展開していくか。また空洞化しがちな日本の地域にいかに新しい産業を根づかせるか。地域に視点をおいた産業構造の新しい枠組みを考える。	同上	同上
10	地方公営企業と公社	都市、地域での様々な公共・公益サービスを供給する主体として地方公営企業や公社、そして第三セクターといった組織が存在する。これら組織の性格と機能を明らかにしながら、その効用と問題点を分析する。	林亜夫	林亜夫
11	都市・地域経営手法－シミュレーション	都市、地域の動態を把握し、将来の予測あるいは都市、地域政策の結果の影響分析を行い、計画や政策を評価するために様々な計算機モデルが構築される。この章では、一つのシミュレーション手法を取上げ、このような手法の有効性と問題点を理解する。	同上	同上
12	都市・地域経営手法－都市・地域計量分析	都市、地域の人口動態、経済、財政の構造を計量経済学の手法を用いてモデル化し、地域政策の結果の影響分析や将来予測を行う手法論を具体的に修得する。実際のモデルの構築方法から始めて、モデルの検証や利用の仕方を学ぶ。	山口誠（豊橋科学技術大学教授）	山口誠（豊橋科学技術大学教授）
13	都市・地域経営手法－地理情報システム	都市、地域の現況や動態を計算機上の電子地図の上に落とし、様々な都市、地域の態様や政策的影響を計算機の地図上で効率よく分析、解析する手法ＧＩＳの基礎を学習する。さらに、このＧＩＳを用いて政策の土地利用等に与える分析例を学習する。	川口有一郎（明海大学助教授）	川口有一郎（明海大学助教授）
14	広域行政	市町村の行政区域を越えて公共サービスを供給する広域行政機構について、その制度的性格さらにその効用と問題点について、経済学、財政学さらには都市・地域経営上の視点から学習する。	林亜夫	林亜夫
15	市町村合併	市町村を統合し一つの行政区域にする市町村合併について、その傾向と目的、さらに広域行政との比較において、その効用と問題点を経済学、財政学さらには都市・地域経営上の視点から学習する。	同上	同上

＝エネルギー工学と社会（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：牛山　泉（足利工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギー工学と現代社会の関わりをいろいろな視点から明らかにする。国内外のエネルギー事情や地球規模での環境問題を調べ、次に、エネルギー技術や環境問題の歴史をたどる。さらに、エネルギー技術と現代社会の現状を学んだ後、エネルギー工学と持続可能な社会の構築に向けて将来のあるべき姿を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	エネルギーと現代社会	現代社会の経済活動は化石燃料を中心とする大量のエネルギー消費により支えられているが、これに伴なう環境問題が顕在化している。これら経済、エネルギー、環境のトリレンマについて考察する。	牛山　泉（足利工業大学教授）	牛山　泉（足利工業大学教授）
2	世界のエネルギー事情	世界の一次エネルギー消費量とエネルギー資源の埋蔵量とを比較し、国際的なエネルギーの需要と供給の現状を明らかにすると共に、エネルギー資源がいつまでもつのかについて考察する。	同　上	同　上
3	日本のエネルギー事情	日本国内における近年のエネルギー需要と供給の動向を明らかにし、産業、民生、運輸の各部門のエネルギー消費やはエネルギー転換部門の現況について調べる。また、経済成長とエネルギー消費についても考える。	同　上	同　上
4	地球環境問題とその解決策	地域規模での環境問題を分類し、地域環境問題とエネルギー消費の関係を調べる。また、温暖化や酸性雨の問題と二酸化炭素排出量の現状を明らかにすると共に、問題解決の対策を考える。	同　上	同　上
5	エネルギーの社会学	エネルギー問題と現代社会の関係を概観した上で、エネルギーと国際政治、エネルギーと環境との調和、エネルギーの安全保障、さらには、エントロピーと世界観などについても言及する。	同　上	同　上
6	エネルギー工学の技術史	エネルギー工学のうちで主に動力技術に焦点を絞り、水車や風車のような自然エネルギーの利用から、熱エネルギーから動力を取り出す蒸気機関や内燃機関、さらには電気エネルギーについても述べる。	同　上	同　上
7	エネルギー技術と環境問題の歴史	エネルギー資源とその利用技術の歴史を木材・木炭の時代から石炭への転換、さらには石油文明の時代へとたどり、これらに伴なう大気汚染などの環境問題についても明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	エネルギー技術と日本の産業社会	日本における産業、民生、運輸の各部門におけるエネルギー需要の変遷と現状について明らかにし、エネルギー供給の側からは、石油、石炭、ガス、電力の産業構造とその動向について調べる。	牛山　泉	牛山　泉
9	エネルギー変換の技術	現代社会の産業・経済活動を支えているエネルギー技術のうちで、エネルギー変換の工学について焦点を絞り、力学、熱、化学、電気、光・放射の各エネルギーの変換について概括する。	同　上	同　上
10	原子力発電システム	現代のエネルギーシステムの中で賛否両論のある原子力発電について、世界の原子力発電の現状、原子力発電のしくみと燃料サイクルについて学び、原子力利用の安全性と経済性について考える。	同　上	同　上
11	自然エネルギー利用技術	環境に優しいクリーンなエネルギー源である自然エネルギーの利用技術を、太陽光・太陽熱、海洋熱、地熱などの熱や光と、水力、風力、波力なでの液体エネルギー、さらにはバイオマスとに分けて概説する。	同　上	同　上
12	エネルギー評価	エネルギーの有効利用を考える上で、エネルギーの適正な評価が不可欠である。そこでエクセルギーという概念を導入して、資源と環境を再評価すると共に、エネルギーの利用効率を評価する。	同　上	同　上
13	省エネルギーとエネルギーパス	現代社会における省エネルギーの取り組みについて明らかにすると共に、エネルギーの消費構造を調べ、ソフトエネルギーパスの選択によるエネルギーの有効利用の可能性について考察する。	同　上	同　上
14	開発途上国とエネルギー問題	開発途上国における人口爆発とこれに伴なう食糧不足やエネルギー不足が深刻化している。持続可能な開発のための途上国援助をエネルギー及び環境問題の視点から提案する。	同　上	同　上
15	エネルギー工学と持続可能な社会	エネルギー問題と環境危機について再認識すると共に、環境と調和する将来の持続可能な社会のあり方を提案し、これに果すべきエネルギー工学の役割りや目標について考える。	同　上	同　上

＝情報工学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：都倉信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

情報工学で取り扱う事項は非常に広く深くなっている。この講義では、その入門として、この分野の基礎的な概念と基本的な知識とともに、この分野の考え方を伝えることを目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コンピュータ	情報工学の対象分野の全体像の簡単な概観とこの講義の全体構想にふれる。まず、コンピュータとは何か、定義を与え、その構成を示す。歴史的事実も簡単に取り扱う。	都倉信樹（大阪大学教授）	都倉信樹（大阪大学教授）
2	情報	情報とはなにか、データ、コード化などの概念を、身の回りの情報についてみていく。情報量の比較、いくつかの情報の扱い方の例をコード化を中心に見ていく。	同上	同上
3	データの表現	データの表現法について考える。各種の符号を紹介し、また、２進法についてやや詳しく扱う。	同上	同上
4	回路素子	コンピュータの構成要素を歴史的にみてみる。スイッチ、リレー、真空管、ＭＯＳ、ＩＣなど順に説明する。	同上	同上
5	組合せ回路	データの分類機能を果たす回路としての組合せ回路を扱う。まず、ゲートを導入し、セレクタ、その他の回路を順次紹介していく。目標はいかなる組合せ回路も原理的に実現可能であることを知らせることである。	同上	同上
6	データの加工	データの加工法を考える。加算、引き算などが、組合せ回路で構成できることを示す。シイタなども紹介し、ＡＬＵの概念を導入する。	同上	同上
7	記憶	記憶装置についての過去の例から、動的記憶静的記憶の概念を導入し、現行の記憶を整理していく。フリップフロップ、メモリなどを紹介し、順序回路の概念を述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	計算機の構成	コンピュータの構成と働きについて概観する。機械語命令の形のいろいろ。実例の表。ＣＰＵの仕組みと働き。いくつかの命令の動きを説明し、機械語プログラムの断片を示す。	都倉信樹	都倉信樹
9	制御方式	制御の方法を考える。非同期、同期の考え方、外部バスとのデータのやりとり、マイクロプログラムの考え方などを述べる。また、マイクロプロセッサの動向にもふれる。	同上	同上
10	通信	通信とコンピュータの融合が重要である。まず、通信のモデル、通信のいろいろ、基本的な方式を通じて通信の際考慮すべき本質的な点を押さえていく。モデムなど重要なものを解説する。	同上	同上
11	ネットワーク	前章につづき、通信とコンピュータの融合形態であるコンピュータネットワークについてみてみる。ＬＡＮ、ＷＡＮ、Internetなどネットワークの形態。電子メール、ＷＷＷなどネットワークの代表的利用例についてふれる。	同上	同上
12	ＯＳ	仮想機械を提供するという意義付けを行ってＯＳの機能を整理して述べる。また、その実現に重要な役割を果たす、割込み機能についても説明する。	同上	同上
13	ソフトウェア	ソフトウェアの世界を紹介する。ソフトウェアとはなにか？　言語について、ソフトウェア工学の知見から重要かつ基本的な概念を選択し紹介する。	同上	同上
14	種々の応用	計算機の応用は実に幅広い。いくつかの事例を扱う。コンピュータにできることとできないこと。ハードとソフトの機能分担。	同上	同上
15	情報社会	高度情報社会の明暗について考えてみよう。知的財産権、セキュリティ、コンピュータ犯罪、…　さらに、学習するために。	同上	同上

＝21世紀への技術発展（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：森谷正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

21世紀に技術はいかに発展するか、社会、生活、産業をどのように変えていくのかを、総合的、体系的に展望する。まず20世紀の技術は何であったかを明らかにして、21世紀の新しい発展方向を示し、各分野について発展の可能性を述べ、それがいかに実現するか、21世紀はいかなる時代になるかを洞察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	技術は変わる	20世紀後半に、エネルギー・物質・情報の技術の基本三要素が出揃って、爆発的な技術発展が生じた。したがって、技術はある意味で成熟に達した。情報技術は急速に進むか、応用が広がるか。これからは「社会」に技術を向ける時であり、21世紀の技術は変わる。	森谷正規（放送大学教授）	森谷正規（放送大学教授）
2	自然を知り、地球環境を守る	技術は、「社会」「人間」「自然」の複雑系に向かうが、まず「知る」ことがきわめて重要になる。地球、大気、海洋などをいかに「知る」ことができるか、地震予知はできるのか、地球温暖化は正しく把握できるのかなどを展望する。	同上	同上
3	環境保全とエネルギー	地球温暖化、酸性雨などの地球環境問題は主として化石燃料消費のエネルギー問題である。核融合は期待できるのか、自然エネルギーはいかに伸びるか、新しい発電システム、コジェネレーションはいかに発展するかを展望する。	同上	同上
4	廃棄物のリサイクルへ	静脈産業としての廃棄物処理は、多様に発展し始めた。都市ゴミ処理は新しい方向に進んでおり、プラスチックや廃家電製品など難しかったリサイクルも進み始めた。理想的なゼロ・エミッションにいかに近づきうるのかを展望する。	同上	同上
5	都市を保つ	都市の新技術としては、大深度地下利用や超々高層ビルなどがあるが、現実には、都市が抱えるさまざまな問題を解決していくことが求められている。防災、美観・アメニティ向上、住まいの向上などが大きな課題であり、そうした技術がいかに発展するか。	同上	同上
6	都市内交通の改善へ	ＳＳＴ、リニアエキスプレスなど高速化のシステムは難しい。より重要な技術は、都市内交通であり、とくに自動車がいかに変わるかに最大の関心が集まる。無公害自動車にいかに進むか、事故、渋滞問題を緩和する道路システムはいかに整備されていくのか。	同上	同上
7	人間とバイオテクノロジー	人間を「知る」のは医学によって進められてきたが、遺伝子の解明によって、一段と進み始めた。しかし、なお「知る」べき課題はきわめて多く、いかに進んでいくか。また、農業や工業へのバイオテクノロジーの応用はいかに進むのかを展望する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	医療と福祉の充実へ	医療は、遺伝子治療などにより新たな方向に進み始めている。人間を「知る」ことの寄与も多い。診断機器はさらに進んでいく。また、いよいよ高齢化社会に入り、福祉はいっそう重要になる。それらの技術はいかに進展していくのかを展望する。	森谷正規	森谷正規
9	情報技術は大きく進むが	情報技術は大きく進むが、応用がいかに開けていくのかが、現実の技術発展を左右することになる。まず、その急速に進む技術を、半導体、光ディスクメモリ、通信ネットワーク、コンピュータについて展望する。技術としてはギガを超え、テラに進む可能性がある。	同上	同上
10	家庭の情報化は大きく進むのか	これまで進んだのは一次の情報化であり、これから高次の情報化に進むのだが、それは容易ではない。目的情報、手段情報に分けてネットワーク、パッケージ、放送のそれぞれにおいて、インタラクティブで働きかけを要する高度の情報化がいかに進むかを展望する。	同上	同上
11	産業、社会の情報化はいかに進むか	産業も高度の情報化に進むが、その核となるパソコンはいかに変わるか。また、産業は社会と情報化において深く結びつくが、その一つがＥＣ（エレクトロニック・コマース）であり、一つの画像の駆使であり、それらがいかに進むかを展望する。	同上	同上
12	進めるべき医療と教育の情報化	教育の情報化は遅れているが、カギはコンテンツにあり、その充実を目指すべき時だ。医療にも遠隔診断、電子カルテなどなすべきことは多い。情報化のまとめとして、農業社会、工業社会に対する情報社会の将来像を深く考えてみる。	同上	同上
13	産業はどう変わるのか	技術は成熟したように見える製造業が進む新しい方向は何か。やはり環境問題はきわめて大きい。また、サービス産業はどう変わるのか。農林水産業が技術によって新しい方向に進むのか。技術の担い手としての産業の将来を展望する。	同上	同上
14	新しい技術の時代へ	きわめて高度な人工物を創り出すよりも、非常に複雑な「社会」「人間」「自然」に対する技術を進めていく時代となった。また、「個」の技術から「場」の技術へのパラダイム転換が生じる。技術の基本的な性格が変わり、新しい技術の時代に入る。	同上	同上
15	技術をいかに進めるか	20世紀には、技術はもっぱら企業とくに大企業が進めてきた。しかし、21世紀には、ベンチャー企業の活躍が期待され、また、企業を超えて、政治あるいは広く社会が、技術推進の大きな担い手となる。技術の進めようが21世紀には変わってくる。	同上	同上

＝西洋古代中世哲学史＝（Ｒ）

〔主任講師：クラウス・リーゼンフーバー（上智大学教授）〕

全体のねらい

本講義では、西洋哲学全体の起源であり、その基盤でありつづける古代哲学と、近世・近代思想の背景をなす中世哲学の基本的理解を目指す。各時代の社会的精神的状況を踏まえた上で、重要な哲学者を中心に、各思想家に固有な問題提起とその解決の試みの諸特徴を、その思想史的連続性において解明していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	古代哲学の誕生	哲学の歴史的性格　哲学史の課題　古代哲学の意義　神話からの脱出　世界の元素と宇宙の生成を問うイオニア（ミレトス）学派　宇宙を数学を通して考えるピュタゴラス学派　クセノファネスの神　対立の一致におけるロゴスを発見したヘラクレイトス	クラウス・リーゼンフーバー（上智大学教授）	クラウス・リーゼンフーバー（上智大学教授）
2	ソクラテス以前の哲学	エレア学派の神学的存在論：パルメニデスにおける存在と思惟。ゼノンのパラドクス　多様性と変化の問題：エンペドクレスの四元素説、アナクサゴラスの理性、原子論者たち	同　上	同　上
3	ソフィストとソクラテス	ソフィストたち：その人間中心的思考法　ソクラテス：多様なソクラテス像、その生涯と死、魂への配慮、徳と快楽、知による徳、普遍的本質・定義の探求、対話の問答法、無知の知としての自己認識、死に向かう哲学、プラトンへの問題提起	同　上	同　上
4	プラトンの哲学	生涯　著作：成立年代の区分と解釈　認識の諸段階とイデア論：イデア、善のイデア、線分の比喩・洞窟の比喩、分有　学の構造：ディアレクティケーと分割法　善への上昇：エロースと美　想起説と魂の不滅　徳と国家：魂の構造と国家の構造、哲学的教育の目的	同　上	同　上
5	アリストテレスの理論哲学	著作と全体像　認識：感覚知覚から本質認識へ、魂の諸能力、抽象　形而上学の方法と構造：概念の類比、論理学の定式化、第一哲学、存在者論から神学へ　存在者とその変化の原理：実体・属性、形相・質料、現実態・可能態、四原因説、世界の永遠性、不動の動者	同　上	同　上
6	アリストテレスの実践哲学	学としての論理学：学の三区分、実践的認識の特徴、倫理学の対象と方法　善き生の目的：行為原理である目的、究極目的としての幸福、善の三区分　徳：習慣、知性的徳と倫理的徳、情念と中庸、知慮、倫理的行為の核心としての自由選択　友愛と共同体　観想的生	同　上	同　上
7	ストア学派	ヘレニズム時代　学問論：学の三区分、ロゴスという普遍的原理　論理学：認識の構造、真理基準、言語と論理　自然学：有機体としての世界、世界霊魂、ロゴス神学、決定論的思惟と宗教観・倫理観　倫理学：ロゴスに従って生きる、賢者、世界市民の理念と自然法	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	新プラトン主義	プラトン主義の発展　プロティノスの生涯　思索の源泉と意図　流出・環帰の形而上学：世界の段階的秩序、一者即ち善、知性、魂、質料的世界　宗教哲学・倫理学：一者への魂の自己環帰、環帰の始点としての美的体験　プロクロスによる体系化　後世への影響	クラウス・リーゼンフーバー	クラウス・リーゼンフーバー
9	キリスト教哲学の起源	聖書の歴史経験と哲学の理性原理　ヘレニズム的ユダヤ教　キリスト教思想の形成とギリシア哲学：2世紀護教家のロゴス思想、3世紀アレクサンドレイア学派の知性論・人間論・聖書解釈学、4世紀カッパドキア学派、アウグスティススの生涯とその精神的背景	同　上	同　上
10	アウグスティヌスの思想	真理そのものとしての神：自己認識における真理発見、内への自己超越、照明説　精神の三一的構造：記憶・知解・意志、内的言葉　自由意志：愛の秩序、根本決断の構造、恩寵　時間：精神の時間性、創造論、歴史観　影響　ボエティウス　偽ディオニュシオス	同　上	同　上
11	12世紀の初期スコラ学	カロリング・ルネサンス：エリウゲナの体系的思惟　12世紀ルネサンス：修道院神学とスコラ学、アンセルムスにおける信仰と理性、アベラルドゥスと普遍論争、シャルトル学派の自然哲学、ベルナルドゥスの自由論、サン＝ヴィクトルのフーゴーの学問論	同　上	同　上
12	13世紀のスコラ学とアリストテレスの受容	大学の成立　アラブ哲学とアリストテレスの受容　オックスフォード学派：数学と経験論的方法論、光の形而上学　ボナヴィントゥラの伝統的思惟：範型因性とキリスト中心主義　アルベルトゥス・マグススの自然学　神学と哲学：世界の永遠性をめぐる論争	同　上	同　上
13	トマス・アクィナスの哲学	生涯と諸作　認識論：アリストテレス的構成：感覚、抽象説、知性と存在の関係、存在論：本質と存在、存在そのもの、超越論的規定、存在概念の類比性、分有　神証明　肯定神学　神と世界の関係　人間論　倫理学：情念、習慣、徳論、法概念、国家　後世への影響	同　上	同　上
14	14世紀の後期スコラ学	14世紀の思想的状況　スコトゥス：哲学の限界、実践的学である神学、個物認識と個別化の原理、存在概念の一義性、主意主義　オッカム：論理学の先鋭化と形而上学の制限、唯名論、神の全能、倫理基盤としての神の意志、自由　影響：ルター、近代自然科学の前史	同　上	同　上
15	中世の神秘思想と近代への移行	神秘主義の歴史　エックハルト：存在理解と類比論、肯定神学と否定神学、離脱、神との一致、魂の根底における神の誕生　クザーヌス：知ある無知、対立物の一致、最大な一性としての神、宇宙論・包含－展開、小宇宙であり神の似姿である人間　近代への移行	同　上	クラウス・リーゼンフーバー 佐藤直子（上智大学講師）

＝西洋近世哲学史＝（Ｒ）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの哲学からヘーゲル哲学にいたる西洋近世哲学史は、西洋哲学史全体のなかできわめて重要な位置を占めている。主要な哲学者たちの哲学の客観的な考察を通じて、各時代の、さらには近世哲学全体の流れを見定めてゆくようにしたい。精選された客観的な西洋哲学史の叙述を試みたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世哲学の概観	ふたつのことを考えている。ひとつは古代・中世哲学との関係である。もうひとつは近世哲学自体の流れである。後者は、具体的には、揺籃期の哲学、イギリス経験論、大陸合理論、批判哲学、そしてドイツ観念論である。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	揺籃期の哲学Ⅰ	「ルネサンス」とは再生を意味する。すなわち、キリスト教以前のギリシア・ローマの文化を再生しようとするものである。具体的には、クザーヌス、エラスムス、ポンポナッツィの哲学を取り上げて考察する。	同　上	同　上
3	揺籃期の哲学Ⅱ	宗教改革は狭義の哲学史の範疇には入らない。しかし近世初頭における思想の変革のひとつとして、また、その後の影響を考え合わせるとき、欠落させることはできない。具体的には、ルターとカルヴァンの思想を取り上げる。	同　上	同　上
4	揺籃期の哲学Ⅲ	「科学革命」という言葉はふた通りの意味でつかわれる。ひとつは英語で大文字で書かれる科学革命であり、もうひとつは小文字で書かれる科学革命である。前者は近代自然科学の基礎となった16世紀半ばから17世紀末にかけての自然科学を指す。	同　上	同　上
5	経験論の哲学Ⅰ	中世以来もともとイギリスには経験論的傾向の伝統があったが、近世における経験論の哲学はＦ・ベーコンをもって始まる。ベーコンに続くホッブズは徹底的機械論的自然観を樹立した。そしてそれを道徳や社会の分野にまで拡張しようとした。	同　上	同　上
6	経験論の哲学Ⅱ	ベーコンやホッブズを先駆とするイギリス経験論はロックをもって確立する。経験論はすべての認識は経験をもって始まるのであって、経験に先立っては、われわれの心は「白紙」または「暗室」である、と主張する認識論上の立場である。	同　上	同　上
7	経験論の哲学Ⅲ	バークリとヒュームはロックの経験論を継承発展させた。バークリの「存在することは知覚されてあることである」というテーゼは有名である。ヒュームは、経験論を徹底させていった結果、いっさいの認識の確実性を疑う懐疑論に陥ってしまった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	合理論の哲学Ⅰ	「われ思う、ゆえにわれ在り」という言葉によって知られるデカルトは、単に大陸の合理論の祖であるだけではなくて、人間というものを哲学の中心に据えたという意味で、近世哲学の祖である、と言うことができる。したがって当然、今日にまで及ぶ影響史がある。	量　義治	量　義治
9	合理論の哲学Ⅱ	「神即自然」という言葉によって知られるスピノザの哲学は汎神論である。デカルトは精神と物体という二つの実体を認めたが、神のみが唯一の実体であって、精神と物体はこの唯一の実体である神の様態であるとしたスピノザ哲学はデカルト哲学の徹底である。	同　上	同　上
10	合理論の哲学Ⅲ	ライプニッツの実体は単子と呼ばれる。その数は無限である。単子の本性は作用にある。しかし単子と単子との間には相互作用はない（「単子は窓をもたない」）。けれども被造物としての単子全体は創造者が定めた「予定調和」の秩序のなかに置かれている。	同　上	同　上
11	批判哲学Ⅰ	カント哲学は批判哲学と称される。すなわち理性による理性の批判、つまり理性の自己批判の哲学である。批判哲学はそれ以前の全哲学を批判し、真の哲学を構築しようとした。カントは西洋哲学史上最大の哲学者であると言っても、けっして過言ではない。	同　上	同　上
12	批判哲学Ⅱ	理性には三つの関心がある。すなわち、(1)「わたしはなにを知ることができるか」。(2)「わたしはなにをなすべきであるか」。(3)「わたしはなにを望むことが許されるか」。これら3つの問いははけっきょく「人間とはなにか」という問いに帰着する。	同　上	同　上
13	ドイツ観念論の哲学Ⅰ	ドイツ観念論の哲学の起点は批判哲学にある。批判哲学の特徴はその二元論にある。この二元論の一元論化、つまり体系化の試みがドイツ観念論の哲学の基本的意図である。このことと深い関わりをもって、ドイツ概念論の哲学は絶対者についての哲学となる。	同　上	同　上
14	ドイツ観念論の哲学Ⅱ	フィヒテにおける二元論の克服は不徹底に終わった。というのは、その絶対者は自我と非我の両者の根底にあるというよりは、むしろ自我の根底にあるものであったからである。これにたいして、シェリングの同一哲学は精神と自然との同一性を主張する文字どおり絶対者の哲学である。	同　上	同　上
15	ドイツ観念論の哲学　Ⅲ	ヘーゲルによれば実体は客体ではなくて主体である。そして主体の本質は自由にある。精神こそこのような自由を本質とする実体としての主体にほかならない。精神はその自由に基づいて自己を自己の外に発現しつつ運動する主体である。	同　上	同　上

＝現代の思想的状況＝（Ｒ）

〔主任講師：渡邊二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

20世紀も終わりに近づき、新たな世紀を迎えようとする現代においては、大きな歴史的社会的変動が起きている。いったい、人間は歴史のなかに立っていかに生きるべきなのか。このことを考えるために、そもそも歴史とは何か、それはいかに認識されるのか、いかなる歴史の見方が可能なのか、こうした歴史哲学の根本を考え直す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	歴史の問題点	歴史の語は二義をもつ。ひとつは、実際に起こった出来事という意味であり、もうひとつは、その出来事について人間が調べ記述した物語という意味である。ここから歴史にまつわる難問が生じてくる。歴史の基本にかかわる諸問題をまず哲学的に明らかにする。	渡邊二郎（放送大学教授）	渡邊二郎（放送大学教授）
2	ベルンハイムの見解の検討	20世紀の初めに出たベルンハイムの『歴史とは何ぞや』という著作は、歴史叙述のあるべき姿を、物語的でも教訓的でもない発展的歴史叙述として明らかにして有名である。その所説を詳しく検討し直し、ベルンハイムでは残された問題点を明らかにしてみる。	同上	同上
3	現在の立場を立脚する歴史	ベルンハイムでは欠如していた「現在」の立場からする生きた歴史の見方が、20世紀初め、クローチェによって説かれた。日本の三木清も同じ考え方を採る。20世紀のイギリスのE.H.カーの『歴史とは何か』も同様の立場に立つ。この新しい見方を展望する。	同上	同上
4	レーヴィットの見解	20世紀の現時点に立って、歴史の見方を考えるとき、重要なのは、第二次世界大戦後、カール・レーヴィットのなした指摘である。それによれば、東西の古代人は、自然の円環運動を観照していたのみであり、歴史意識はキリスト教の終末論的見方から発したという。	同上	同上
5	ヘーゲルの歴史観	キリスト教の終末論的歴史観の世俗化において、近代の「超越的歴史観」が成立した。その最初の代表例が、ヘーゲルの歴史観である。それは、精神の発展過程として世界史を見るものであって、それの発端と終末を見通した直線的運動として、歴史の進歩を考える。	同上	同上
6	マルクスの唯物史観	ヘーゲルの考え方をさらに徹底して世俗化し、唯物論化したのが、マルクスの唯物史観である。この唯物史観の基本主張を省みる。しかし、いかに唯物論化しているとはいえ、これは、期待・希望・信仰を織り込んだ超越論的歴史観であって、そこに難点をもつ。	同上	同上
7	ウェーバーの社会主義批判	マルクスの社会主義を、20世紀初頭に早くもマックス・ウェーバーは、適切に批判していた。そのウェーバーの社会主義批判の論点を省みる。そこから浮かび上がってくるのは、合理的組織と官僚制の機構のなかでは生きざるをえない現代人へのウェーバーの洞察である。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ウェーバーとマルクス	カール・レーヴィットは、早くから、ウェーバーとマルクスを対比させていた。人間の自己疎外からの全面的解放を夢見るマルクスと、合理的官僚機構のなかを生きざるをえない現代人の宿命を直視するウェーバーとの、鋭く重要な対立に思いを馳せ、考え直す。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	ディルタイと新カント学派（その1）	ヘーゲル、マルクスの「超越的歴史観」が崩壊したあと、19世紀後半から20世紀に欠けては「内在的歴史観」が登場した。これは、歴史の発端も終末を問わず、特殊的出来事を了解し、その個性記述を目指す。そのディルタイとヴィンデルバントの見解を辿り直す。	同上	同上
10	ディルタイと新カント学派（その2）	新カント学派のリッケルトは、歴史科学を文化科学として確立し、その方法論的基礎づけに努力を傾注した。価値関係的に有意義な出来事の個性を明らかにするというところに、リッケルトは歴史的文化科学の意義を見た。同時にそこに解き難い難問も出てくる。	同上	同上
11	歴史における普遍性と特殊的個別	「超越的歴史観」では普遍が重視され、特殊的個別はそのなかに強引に位置づけられる。「内在的歴史観」では逆に、特殊的個別が重視され、普遍が見えにくくなる。この点を解決しようとしたウェーバーの理念型と因果的帰属に関する見解を詳しく検討し直してみる。	同上	同上
12	ニーチェの登場	「超越的歴史観」も「内在的歴史観」も、歴史を理論的に傍観している。これに対し、ニーチェに始まる「実存的歴史観」は、歴史に関する認識のみならず、そのなかでの行為を支える実存する根源的主体性を自覚化した。ニーチェの鮮烈な歴史論を詳しく追跡する。	同上	同上
13	ハイデッガーと歴史の問題	ニーチェを承けて、現代において歴史認識と行為の根源を究めたのが、ハイデッガーである。彼の『存在と時間』において示された「現存在の歴史性」の思想は、人間の時間的歴史的在り方の根本を照らし出し、歴史学の成立根拠をも解明した画期的なものである。	同上	同上
14	歴史の意味	このハイデッガーとの繋がりにおいて、ゴロ・マン、レーヴィット、そしてブルトマンの現在における決断重視の思想を見る。他方ポッパー、トインビー、カーなどを振り返って、現代における歴史の意味の問題に光を当てる。人間愛と理性が、大切となってくる。	同上	同上
15	ヤスパースの歴史観	最後に、現代の最大の実存哲学者ヤスパースの歴史哲学を取り上げて考察する。世界史の基本構図を描き出しながら、現代の動向を探り当てつつ、歴史の意味を考究するヤスパースの広汎な「実存的歴史観」は、現代に生きる私たちに、大きな示唆と支えを与える。	同上	同上

＝科　学　の　哲　学＝　（Ｒ）

〔主任講師：伊藤笏康（聖徳大学教授）〕

全体のねらい

現代の日本で、教養とは何であろうか。それは、場合に応じて、いろいろな知的活動ができることではなかろうか。本講義では、知的活動の型として「技術」「科学」「形而上学」を区別し、それらによって何を知ることができ、何を知ることができないかを調べてみる。これによって、科学のもつ限界も明らかになろう。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	科学の哲学はなぜできたのか	世の中にはいろいろな学問があり、中でも自然科学は、もっとも信頼できる学問とされている。しかしそれはなぜ信頼できるのだろうか。それを糸口にして、科学の哲学が生まれた理由を述べる。	伊藤笏康（聖徳大学教授）	伊藤笏康（聖徳大学教授）
2	科学と哲学のかかわり	歴史のうえから考えても、哲学と科学にはいろいろなかかわりがあった。ここでは哲学の立場を中心として、哲学が科学に対してどんな立場をとって来たのか。それを分類し、形而上学、実用主義、批判哲学の３つの型を提出する。	同　上	同　上
3	生　活　知	知的活動には、物事を遂行できるそれと、ものごとを説明できるそれとがある。このうち、物事の遂行に主としてかかわるのは、われわれが生命を保持し、生活を営むために必要な「生活知」であるが、そのような知的活動のもつ特徴を述べる。	同　上	同　上
4	説明によって知るとはどういうことか（１）－省略と変形－	ものごとを説明によって了解するとは、どのようなことか。説明には必ず、現実との剝離が含まれる。現実を省略し、変形するのが説明の特徴であり、その意味で、説明による知識にはフィクションが含まれることを述べる。	同　上	同　上
5	説明によって知るとはどういうことか（２）－説明と原理－	説明が信頼を得るには、説明すべきことをあらかじめ、全体的に把握しておかなければならない。この全体的な見通しは、説明の原理と呼ばれる。そしてこの原理によって、説明上大切なことと瑣末なことが区別され、その上で現実の省略や変形が行われる。	同　上	同　上
6	説明の例（１）－自動車教習所のエンジンの説明－	自動車の教習所でなされるエンジンの説明を取り上げ、そのような説明では何が理解されるのかを考える。自分の自動車のエンジンとはちがう「模式図」が、ドライバーにとってどんな役に立つかを考える。	同　上	同　上
7	説明の例（２）－フックの法則によるバネの伸びの説明－	説明には常に原理とともに、説明の目的がある。その目的は多様であるとともに、説明自体が目的となったものもある。その例としてフックの法則を取り上げ、科学的説明が常に現実から一歩離れたものであることを述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	説明の例（3）－虚構の必要性－	これまでの例を検討し、説明はその目的によってさまざまな形を取ることを確認する。そしてとくに科学における説明と密接に関連する例に注目し、そこには常に理想的世界が仮定されることを述べる。	伊藤笏康	伊藤笏康
9	技術と科学	生活知と科学の中間領域としての「技術」について、①それが科学とは異なること、②それを説明するのは容易でないこと、③それがさまざまな知的活動の接点領域であることを述べる。	同上	同上
10	世界観としての説明原理	説明のための説明が一般的、総体的、体系的になると、原理は世界観としての性格をもつようになり、容易に否定されなくなる。科学と宗教との論争が、しばしば世界観の間の論争であったことを例に引きつつ、説明原理が世界観として働いてきたことを述べる。	同上	同上
11	トマス・クーンの科学革命論とその問題	科学における世界観を「パラダイム」という言葉で捉え、科学の発展をパラダイム変換と考えたのが、トマス・クーンの科学革命論である。彼の考えと、その問題点を検討しつつ、「科学は進歩するか」という問題を考える。	同上	同上
12	科学的説明の「垂直的」構造	パラダイムとして有利な条件は、ものごとの意味を捨象し、客観としての現象を記述することである。このような説明は、現実世界と理想世界とが二重化すると同時に、理想世界は二次的な世界になる。また、このような説明における実験の意味を述べる。	同上	同上
13	形而上学的説明の「水平的」構造	科学的な説明から抜け落ちてしまう、「自分」と「世界の意味」を解明しようとするのが伝統的な形而上学である。形而上学の説明は、科学の説明とは対照的な構造をもつ。このことを述べると同時に、「現実以前」「現実以後」という区別を述べる。	同上	同上
14	形而上学の歴史と諸形態	形而上学の説明には、科学での実験に当たる手続きがなかったこと、またそれによって、学問として否定された歴史のあったことを述べる。これは第2回で述べた、実用主義と形而上学の立場の解説に当たる。	同上	同上
15	まとめ－教養の条件－	第2回で述べた批判哲学の立場を説明し、現代における教養の条件として、「問い」のタイプを見分けつつ、それに応じた解答方式を取れることが大切であることを述べる。	同上	同上

＝人生の哲学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：渡邊二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

人生の根本問題を改めて考え直し、生きる支えとなる人生観を探究してみたい。全体で五つの部分より成る。「生と死を考える」、「愛の深さ」、「自己と他者」、「幸福論の射程」、「生きがいへの問い」が、それである。全体として、人生体験を直視しながら、しかし過去の大思想家の知恵に学びつつ、考察を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	生と死を考える（その１）－問題への接近－	生と死を考える態度に、まず、東洋と西洋では伝統的に大きな違いのあることに眼を向ける。とりわけ、仏教は十分かが問われる。そのあと、無常観や厭世観が省みられる。そして老境の問題が取り上げられる。	渡邊二郎（放送大学教授）	渡邊二郎（放送大学教授）
2	生と死を考える（その２）－死を見つめる－	死とは何かを鋭く見つめた、エピクロス、ハイデッガー、サルトル、モンテーニュ、ヤスパースの見解を取り上げ、死の哲学的分析を行う。それによって、人生を十全に生き抜く覚悟を覚醒させることが狙いとなる。	同上	同上
3	生と死を考える（その３）－永遠性の問題－	死にさらされた人生のなかで、切実な問いとして浮かび上がるのは、永遠性の問題である。カント、プラトン、ニーチェ、ヘーゲルに即して、不滅のものに眼を向ける思想の意義を問い直す。	同上	同上
4	愛の深さ（その１）－愛と、呼びかけてくるもの－	愛は、まず人生への愛として見定められる。フィヒテに即して、人生への愛ということが確認されたあと、それが具体的に現れてくる場面として、美による呼びかけと、良心による呼びかけを論ずる。	同上	同上
5	愛の深さ（その２）－葛藤を秘めた人間－	愛の葛藤は、古くから、アガペー的愛と、エロース的愛という、二つの形の分裂として知られていた。キリスト教的アガペーと、ギリシア的エロース（プラトンの『饗宴』）とを、詳しくたどり直す。	同上	同上
6	愛の深さ（その３）－愛の諸相－	愛の諸相として、まず最初に、アガペー的な自己滅却と、エロース的な自己拡充との二つの調停を図ったあと、とりわけエロース的愛の姿をいろいろの点から、「愛の憧れ」のありさまとして、追究する。	同上	同上
7	自己と他者（その１）－交流と対立－	愛の問題は、おのずと、自己と他者の問題に発展する。まず、「我と汝」の思想の流れをたどり、そのあと、人間のあいだに「争い」を不可避とみた思想の意義を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自己と他者（その2）－世間と役割－	しかし、争いだけでなく、人間は「世人」として共同存在のなかを、「役割」をもって、「組織」のうちで生きるものである。この面への思想史的照明を当てる。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	自己と他者（その3）－他者認識と相互承認－	自己と他者の問題は、やがて、「他者認識」の可能性の問題に及び、最後には、自己と他者のあいだの「相互承認」の問題に極まってゆく。この重要な局面の考察を企てる。	同上	同上
10	幸福論の射程（その1）－老年と、幸福への問い－	人生の幸福とは何かという問いは、誰もが心の底で気にしながら、容易には答えられぬ疑問をなす。老年の意味を問い、老境が、幸福を問う思索の時であることを明らかにする。そのあと、幸福の三義を問題にする。	同上	同上
11	幸福論の射程（その2）－幸福論の教え(1)－	世に多くある幸福論のうちから、まずアランの社会的儀礼の勧めを見、次にラッセルの外向的活動の勧めを省みて、それらの幸福論の教えの長短を考え直す。	同上	同上
12	幸福論の射程（その3）－幸福論の教え(2)－	次に、さらにエピクテトス、ショーペンハウアー、セネカによる内省と諦念の勧めを省み、さらにヒルティと三谷隆正による揺るぎない信仰の勧めを考え直す。これらの幸福論の長短を考える。	同上	同上
13	生きがいへの問い（その1）－必然性を生きる自己－	生きがいへの問いこそ、私たちの人生の核心をなす。ここでは、生きがいの意味を考え、それを必然性を生きる自己のうちに求め、ニーチェを視野に入れて、それを補強する。	同上	同上
14	生きがいへの問い（その2）－時代の現実のなかで－	必然性を生きる自己は、しかし、けっして悪を犯してはならず、また時代の現実のなかにあって、広く世界の出来事に知的理解をもたなければ、成立しないことを論ずる。	同上	同上
15	生きがいへの問い（その3）－意味と無意味の間－	生きがいへの問いは、東西における人間観の系譜への問いとなり、さらには、人さまざまの現実から、人間の性格論、タイプ論にまで広がる。最後に、意味と無意味の間を生きる人間の姿が描き出される。	同上	同上

＝宗　教　の　哲　学＝（Ｒ）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）

全体のねらい

「宗教の哲学の課題」を発見するために現象学的方法を採る。具体的には、仏教、キリスト教、イスラム教という三大世界宗教とこれらに基づく特殊的宗教の哲学の考察をとおして、宗教の哲学の課題の発見、およびその解決に迫る。特定の宗教および宗教の哲学に偏ることなく、できるだけ普遍的・客観的に叙述することを旨とする。しかし同時に、主体的なものを排除しない。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	課題と方法	「宗教の哲学」を現象学的方法によって省察する。すなわち、最初に代表的な世界宗教を取り上げ、つぎに特定の宗教の、立場を背景にした宗教の哲学および宗教批判の哲学を取り上げる。こうしてはじめて「宗教の哲学の課題」に答えることができる。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	宗教Ⅰ仏教	ゴータマ・シッダールタを開祖とする仏教にはキリスト教やイスラム教の神に相当する絶対者は存在しない。また、聖書やコーランに相当するような正典というものもない。それだけにあまたある経典のなかからどの経典を尊重するかということが問題となる。	同　上	同　上
3	宗教Ⅱキリスト教	キリスト教は聖書の宗教である。聖書には旧約聖書と新約聖書とがある。両聖書は一体不可分の全体を成している。その中心に位するのがイエス・キリストである。キリスト教はイエス・キリストの宗教なのである。	同　上	同　上
4	宗教Ⅲイスラム教	ムハンマドを開祖とするイスラム教では正典コーランとともにハディース（伝承）およびシャリーア（イスラム法）が尊重される。イスラム教においてはモーセもイエスも預言者と見なされるが、ムハンマドが最後最大の預言者である。	同　上	同　上
5	特殊的宗教の哲学Ⅰ　仏教的宗教の哲学	世界的に著名な日本の代表的仏教学者鈴木大拙をとおして考える。そのさい、宗教の地平としての霊性と霊性の論理としての即非の論理に注目する。	同　上	同　上
6	特殊的宗教の哲学Ⅱ　キリスト教的宗教の哲学	日本の代表的キリスト教哲学者波多野精一をとおして考察する。「超越的・実在的・絶対他者」「神の愛」「永久の命」等のテーマを取り上げる。	同　上	同　上
7	特殊的宗教の哲学Ⅲ　イスラーム的宗教の哲学	世界的に著名な日本のイスラム学者井筒俊彦をとおしてイスラム神秘主義スーフィズムを考察する。具体的には十三世紀のイブン・アラビーの「存在一性論」を省察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	宗教批判の哲学	現代において宗教の哲学の構築を試みようとする場合に、宗教批判の哲学に一顧を与えておくことは不可欠である。これなしには、この時代においては宗教の哲学の構築も砂上に楼閣を建てるようなことになりかねないであろう。フォイエルバッハ、マルクス、ニーチェを取り上げる。	量　義治	量　義治
9	宗教批判の批判の哲学	フォイエルバッハとマルクスの、宗教批判は、要約すれば、神は実在ではなくて虚構である、というものである。また、ニーチェのそれは「神は死んだ」という衝撃的な言葉で表される。これらの宗教批判を反駁する。	同　上	同　上
10	宗教の哲学の課題	基礎作業を了えたいま、われわれは「宗教の哲学の課題」を確定することができる。それは「救済の問題」と「絶対者の問題」と「信仰と行為の問題」と解することができる。これらの諸問題のなかで中心問題は「救済の問題」である。	同　上	同　上
11	救済の問題	救済は単に個人の救済ではなくて、全人類の、いな全宇宙の救済でなければならない。救済の方法としては他力、自力、自力・他力の方法があるが、全宇宙の救済のためには絶対他力が必然的である。	同　上	同　上
12	絶対者の問題	救済とは、それが自己であれ、他者であれ、絶対者による救済である。したがって宗教の哲学において絶対者の問題はきわめて重要である。さまざまな絶対者観を考察するが、アブラハムの神と哲学者の神との対置は思想史上有名である。	同　上	同　上
13	信仰の問題	宗教の中心問題である救済は絶対者による救済であるが、そのさい人間の側が一切問題にならないのではない。人間の信仰が問われる。そしてその信仰とは意識の問題ではなくて実存の問題である。ここから必然的に行為と深く関わる。	同　上	同　上
14	宗教における真理の問題	世にはさまざまな宗教がある。いったいどの宗教が真理なのであろうか。そもそも宗教における「真理」とはなんであろうか。イエスを尋問した総督ピラトもイエスに向かって「真理とはなにか」（ティ・エスティン・アレーテイア）という問いを発したのである。	同　上	同　上
15	宗教の哲学と現代	宗教的真理はわれわれ自身が「そのために生き、かつ死ぬことを願うような実存的真理」でなければならない。したがって理論的・傍観的立場に終始することは、許されない。この無神論・ニヒリズムの時代の只中にあって、われわれはいかにして信仰を持ちうるか。	同　上	同　上

＝老　荘　思　想＝（Ｒ）

〔主任講師：池田知久（東京大学教授）〕

全体のねらい

老荘思想、すなわち中国古代の思想家である老子や荘子の思想は、中国だけでなく日本を含む東アジアの諸地域の文化にとって、近代に至るまできわめて重要な思想の一つであった。それだけでなく、現代社会の典型である今日の日本のなかに生きる我々にとって、かえりみるに値する重要な思想の一つである。

この講義では、従来の老荘思想の研究とは異なった新しい観点に立って、老荘思想の主な内容を解明するとともに、近年の出土資料をも利用して、戦国時代より六朝時代に至るその歴史的な展開を大ざっぱに跡づけてみたいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老荘思想の思想家たち	老荘思想の誕生した背景にある、戦国時代～前漢時代の社会状況を考察し、そのなかにおける老聃・荘周・劉安といった思想の担い手たちの生き方について考える。	池田知久（東京大学教授）	池田知久（東京大学教授）
2	老荘思想の書物	老荘思想を記した書物である、『老子』『荘子』『淮南子』などに関して、それらの成立・由来・構成などについて述べ、あわせてこれらの書物の正しい取り扱い方を解説する。	同　上	同　上
3	「老荘」という観念の成立	「老荘」という概念は、老荘的な諸思想をグルーピングするために、後の時代になって作られた人工的な概念である。「黄老」「道家」などの概念をも考慮しながら、これらの概念の変遷のなかに見られる老荘思想についての歴史的事実と、後の時代における学者の机上の整理との乖離について分析する。	同　上	同　上
4	老荘思想の誕生	戦国時代中期の紀元前３００年ごろ、老荘思想は人間疎外の克服や人間の主体性の獲得をめざして誕生し、そして、これがどの時代の老荘思想にも流れている通奏低音となった。以上のような内容の、老荘思想の誕生について述べる。	同　上	同　上
5	老荘思想の先駆者たち	戦国時代中期の紀元前３００年ごろに誕生した老荘思想の先駆者たちについて考える。それは、生命の重視の思想、主体性論、寡欲説、既成の価値観への批判、名家の知識論・論理思想、などである。	同　上	同　上
6	万物斉同の哲学	戦国時代中期の紀元前３００年ごろ、老荘思想がこの世に初めて誕生したとき、かれらが抱いた思想は、万物斉同の知識論－存在論であった。中国古代哲学のなかで最も難解なこの哲学について、その理論構造や目的などを解説する。	同　上	同　上
7	「道」の存在論	老荘思想はまた道家とも呼ばれる。それは、かれらにとって「道」が最も重要なキー・コンセプトだったからであるが、この回は、人間をも含めた「万物」を存在させ変化させている実在としての「道」に関する哲学を分析する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	物化・転生・輪廻の思想	老荘思想の「物」という存在者に関する哲学、すなわち、物化・転生・輪廻の思想について解明する。これらの思想は単なる存在論の一つではなく、同時に人間の死の意味づけでもあった。	池田知久	池田知久
9	「気」の思想と宇宙生成論	老荘思想は戦国時代後期に至って「気」の思想を他から取り入れた。また、それにもとづいて宇宙生成論を論じた。後者には、人類の文化・文明の発展を人間の本来性からの堕落であると見る退歩史観がともなっている。この回は、これらの諸思想の内容と意味について考える。	同上	同上
10	「遊」の思想	「遊」とは、ひとまず「あそび」であるが、より深刻には世間的な単なる存在者の世界から、否定的超出を通じて、真の実在の世界に出ていくことである。この回は、「遊」の思想をはじめとする、人間の自由や独立についての諸思想を議論したい。	同上	同上
11	「自然」の思想	老荘思想にとって「無為」や「自然」の思想は、当初から抱いていたものではなく、当初の「道」の存在論を修正するために唱えらるに至ったものである。この回は、人間や万物の自主性・自律性を主張する哲学としての「自然」について解明し、あわせて六朝時代の老荘思想（魏晋玄学）の「自生自化」への展開を述べる。	同上	同上
12	養生の思想	老荘思想の「生（また性）を養う」という思想は、当初から存在していたものではなく、「気」の思想などとともに他から取り入れたものであるが、後の道教の「不老長生」とも関係して重要な思想である。この回は、この思想について考える。	同上	同上
13	老荘の政治思想	老荘思想のなかにはあい反する二つの政治思想がある。一つは、万民平等の無政府主義的なユートピア思想であり、二つは、一君万民の中央集権的な専制主義を強化する黄老思想である。これらの両者の内容と、その由来について考える。	同上	同上
14	ことば・論理・知識に関する思想	無言の提唱、矛盾律の否定などをはじめとして、老荘思想はことば・論理・知識について重要な思索を行っている。この回は、中国古代の知識論の歴史における老荘思想の位置と意義に関して述べる。	同上	同上
15	諸子百家に対する批判と後世への影響	老荘思想もまた諸子百家の一つであり、先行する諸子百家の思想を批判的に摂取しながら自己を形成していった。しかし、前漢初期の老荘思想はむしろ諸子百家の統一・総合に努力を傾注している。これらの問題を解明しつつ、あわせて老荘思想の後世に与えた巨大な影響について考えてみたい。	同上	同上

＝仏　教　思　想＝（Ｒ）

〔主任講師：末木文美士（東京大学教授）〕

全体のねらい

仏教は日本人にとって身近な宗教であるが、その思想となるとなかなか解りにくい。その理由の一つは、インドに発して以来、さまざまな文化圏で多様な展開を遂げ、焦点を絞りにくいことにある。ここでは、歴史的な事情も勘案しながら、日本という場を原点としてその思想を解体、再構成してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	いまなぜ仏教か	仏教は古代のインドに発して、東南アジア・チベット・東アジアなどのさまざまな文化圏で多様に展開した。その多様な思想をどのような視点から見てゆくことができるのか。方法論的な問題を研究史を振り返りながら考察する。	末木文美士（東京大学教授）	末木文美士（東京大学教授）
2	歴史的概観	仏教思想史のさまざまな問題を見てゆくにあたって、一通りインド以来のさまざまな文化圏における仏教の歴史的展開を頭に入れておく必要がある。最近の研究に基づきながら、最低限必要な知識を概観する。	同上	同上
3	テキストの森	仏教の聖典は三蔵（経・律・論）とか大蔵経とか呼ばれて膨大な量にのぼる。また、その言語もパーリ語・サンスクリット語・チベット語・漢文など多様である。それらの成立や特徴、扱い方について論ずる。	同上	同上
4	解釈のパラダイム	膨大な仏典を整理し、体系化するために、教判と呼ばれる方法が工夫された。また、近代になると、大乗仏教はブッダの説でないとする大乗非仏説論などが現れ、議論を呼んだ。こうしたさまざまな仏典解釈の方法について考えてみる。	同上	同上
5	苦悩としての存在	ブッダの教説は人生を苦と見るところに出発点を持ち、その原理を求めて、無常・無我・縁起などの教説が展開された。原始仏教に由来しつつ、大乗にも生きているそれらの根本原理の意味を探る。	同上	同上
6	言語と存在	大乗仏教の一つの特徴は、存在の問題を考えるのに、言語論の立場から考察する点にあり、日常的言語の世界の無根拠性を鋭く突いた。その典型的な発想をインドの中観派の理論、及び中国の禅思想を中心に考察する。	同上	同上
7	象徴としての世界	日常言語を超えれば、そこには沈黙しかないのだろうか。果敢にもその恐るべき領域に踏み込み、世界を象徴として言語化したのが密教であった。マンダラとして展開される壮大な世界解釈の体系を読み解いてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	心の深層	大乗仏教における人間論は、心の理論として展開される。心を清浄なものと見る如来蔵系と、汚れたものと見る唯識系の思想があり、また、中国の天台では心を観察する止観と呼ばれる行法が展開した。これらの理論を考えてみる。	末木文美士	末木文美士
9	他者と関わる	内的な心の観察は独我論に陥りはしないか。他者はどのような形で必然性を持つのか。大乗における菩提の理想は他者との関わりを我々に迫るものであり、その極限に『法華経』が位置する。他者論としての大乗の意味を考える。	同上	同上
10	コミュニティの形成	以上考察してきた原理論に対して、以下では実践思想を扱う。具体的な他者との共存はサンガ（僧伽）と呼ばれる共同体において実現される。その共同体を支える規律が戒律である。さまざまなサンガのあり方を比較検討する。	同上	同上
11	超脱の道	苦なる世界を超脱するためにさまざまな修行法が開発され、悟りに至る道筋が示された。それに対して、瞬時に悟りに至る密教の即身成仏や禅の頓悟も主張された。そもそも悟りとは何か、修行とは何か、考えてみたい。	同上	同上
12	来世と救済	自力の修行に対して、仏・菩薩の力に頼って救済を受けるという道も考えられた。特に来世における救済を説く浄土教（阿弥陀仏信仰）は東アジアで大きな勢力を得た。浄土経典から親鸞にまで至る思想の系譜を考える。	同上	同上
13	楽観論の陥穽	東アジアの仏教の大きな特徴は、我々に仏性（仏になる可能性）が内在すると考えるところにある。この思想はさらに発展して、本覚（我々は本来的に悟っている）という立場にまで至る。余りに楽観的なこのような思想傾向の問題点を考える。	同上	同上
14	差別と平等	仏教はすべての生命ある存在は平等に尊重されるべきであると説く。だが、同じ仏教がもう一方で社会的な差別を認め、むしろ差別を積極的に生み出してゆく一面も持った。差別の原理となる業と輪廻の思想などを取り上げる。	同上	同上
15	思想史の中の仏教	仏教はそれぞれの文化圏において、それぞれ土着の思想と交渉しつつ展開した。土着の思想から影響を受けた面も、逆に土着の思想が発展するのに寄与した面もある。仏教をより広い思想史の中でどう位置付けるか、最後に考えてみる。	同上	同上

＝上代の日本文学＝（R）

〔主任講師：稲岡耕二（上智大学教授）〕

全体のねらい

やまと歌が文字化されたのは七世紀後半以後のことである。初期万葉の時代は言わば文字化以前、声の文化から文字の文化に至る過渡的な時期であった。その間に、中国文化の影響により新たな文学に対する意識も育ち、歌の表現にも変化が現れた。本講座は初期万葉歌を味読しつつその変化を理解することを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに －声の文化から文字の文化へ	初期万葉以前の歌として万葉集に収録されている作品の中には、声の文化の歌であることが表現上明らかな作品のみでなく、文字化以後の、文字を通して作られた歌を遡って位置づけている場合もある。雄略と磐媛の伝承歌を読み、声の文化の歌の特徴を探る。	稲岡耕二（上智大学教授）	稲岡耕二（上智大学教授）
2	国見歌の完成	記紀の国見歌・国ぼめ歌から舒明天皇の国見歌へ、どのように表現は変化したか。それぞれの表現を確かめながら、国見歌の完成への道を探る。	同上	同上
3	宇智野の狩の歌	宇智野の狩の歌を読み、呪術と抒情、古さと新しさの問題を考えるとともに、この歌の表現の新しさをどのように把握すべきかを理解する。	内田賢徳（京都大学教授）	内田賢徳（京都大学教授）
4	中皇命の旅の歌	「中皇命、紀の温泉に往く時の御歌」の題詞をもつ三首の旅の歌が、形式面で歌謡との連続的な性格をうかがわせながら、新しさの指摘される短歌であることを理解する。	同上	同上
5	記紀歌謡と初期万葉歌	記紀歌謡として物語と結びつけられている歌が、初期万葉歌とどのような点で相違し、どのような点で性格を等しくするか、幾つかの作品を読みつつ考える。	同上	同上
6	額田王作歌（その一）	額田王の作品のうち、蒲生野における贈答歌、熟田津の歌、宇治のみやこ回想歌、近江天皇を思う歌を読み、初期万葉の歌としての特徴を探る。	稲岡耕二	稲岡耕二
7	額田王作家（その二）	近江遷都の時の作歌を読み、その表現の意義を考える。また「反歌」「和歌」として添えられた短歌の性格や成り立ちをも理解する。	神野志隆光（東京大学教授）	神野志隆光（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	額田王作家（その三）	春秋競憐歌を生み出した天智朝の文学的環境を理解しつつ、集団の場で歌われた歌としての表現の特徴を探る。	神野志隆光	神野志隆光
9	三山歌	三山の妻争いを詠む長歌の意味を理解し、二首の反歌との関係について考える。	同上	同上
10	天智朝の相聞歌1	鏡王女・久米禅師と石川郎女・藤原鎌足などの歌を読み、この時期の贈答歌の特徴を理解する。	稲岡耕二	稲岡耕二
11	天智天皇挽歌	天智天皇の死後に歌われた挽歌は、どのような特徴を持っているか。その表現を詳細に検討しつつ理解する。	同上	同上
12	天武天皇の歌	天武天皇の作とされている吉野入りの時の歌の本文の形と或本の歌の形が、意味の上でどのように異なるか、読みくらべる。そのほか天武八年五月五日の盟約時の作、藤原婦人との贈報歌なども読む。	同上	同上
13	吹芡刀自歌など	十市皇女の伊勢参宮の途次、波多の横山で作歌している吹芡刀自とは、どのような歌人であったか。巻四の作品とあわせ、その表現に即して理解する。	同上	同上
14	人麻呂歌集歌について	やまと歌が文字に書かれるようになったのは天武朝以後のことであり、人麻呂歌集は最初の歌集だったと考えられる。声の文化の歌とくらべて、それはどのような特徴を持つようになったか。古体歌と呼ばれる歌の表現と漢字表記との関連を探る。	同上	同上
15	むすび －文字の歌の表現へ－	宣命大書体表記によって、やまと歌の精細な文字化が可能となった。人麻呂以後の枕詞や序詞は文字の歌の方法として大きく変容することになる。その変化を明らかにしつつ、舒明朝の作とされている軍王作歌の表現の性格について考える。	同上	同上

＝中古の日本文学＝（R）

〔主任講師：小町谷照彦（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

平安京という都の環境の中で宮廷貴族を中心にして営まれ、男性を主体とした漢文学を基盤としつつも、女流による仮名文学が盛んであった平安時代の文学の特質を念頭に置きながら、ジャンル別に文学史の流れをたどると共に、顕著な存在であった人物や事象を取り上げて、幅広い見地から当時の文学活動の実態を明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文学史の流れ1 漢文学	勅撰三集（凌雲集・文華秀麗集・経国集）、藤原明衡の本朝文粋などの撰集、空海、菅原道真、慶滋保胤、大江匡房などの文人を中心に、具体的な作品に即して、漢文学の流れを展望する。本朝一人一首、日本詩史、日本詩紀など、後世の著述にも触れる。	小町谷照彦（東京学芸大学教授）	小町谷照彦（東京学芸大学教授）
2	文学史の流れ2 和歌	三代集（古今集・後撰集・拾遺集）、後拾遺集、金葉集、詞花集などの勅撰集を中心に、歌壇活動にも注目しながら、具体的な個々の詠歌に即して、和歌史の展開を追う。新撰万葉集、新撰和歌、古今六帖などの私撰集、主な歌合や歌学書にも及ぶ。	同　上	同　上
3	文学史の流れ3 前期の作り物語	竹取物語、うつほ物語、落窪物語など、源氏物語以前の物語を取り上げ、作品の内容や主な作中人物を紹介しながら、個々の作品の特色などを論じる。三宝絵序、蜻蛉日記序、源氏物語、蛍巻の物語論などを通して、物語の実態や本質についても目を向ける。	同　上	同　上
4	文学史の流れ4 歌物語の周辺	皇統、美貌、和歌の名手、奔放不羈の愛、流離放浪など、いわゆる色好みを主人公とする伊勢物語や平中物語を典型として、歌物語の本質を考える。歌語りに関心を持つ大和物語は、和歌説話集的と見る。豊蔭、伊勢日記、篁物語、多武峰少将物語などにも及ぶ。	同　上	同　上
5	文学史の流れ5 源氏物語	光源氏に、藤壺、六条御息所、紫の上、明石の君などが関わって展開する光源氏物語、薫と匂宮に宇治の女君たちが関わって展開する宇治の物語を、愛と栄華、人間不信と宗教的救済の主題や、語りや和歌という方法の問題をからめて、読解の方向性を探っていく。	同　上	同　上
6	文学史の流れ6 後期の作り物語	狭衣物語、浜松中納言物語、夜の寝覚、堤中納言物語などの作品の内容に触れながら、源氏物語の影響のもとに深化した主題や方法の特色について注目したい。過渡期の作品であるとりかへばや物語や有明の別れ、また、関連する無名草子や風葉集などにも触れる。	同　上	同　上
7	文学史の流れ7 日記文学と枕草子	身の上を語るのが女流日記の本質と見て、蜻蛉日記や更級日記を中心に取り上げ、和泉式部日記、紫式部日記、成尋阿闍梨母集、讃岐典侍日記などにも及びたい。また、日記、随想、類聚の章段より成る枕草子の性格を、日記という面に重点を置いて考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	文学史の流れ8 歴史物語と軍記	源氏物語を意識しながら編年体の形をとる栄花物語、対話形式で紀伝体の形をとる大鏡の作品としての特質に注目しながら、歴史の渦中を生きた人間像を取り出すようにする。また、中世の軍記物語の萌芽として、将門記や陸奥話記などの軍記文学にも触れたい。	小町谷照彦	小町谷照彦
9	文学史の流れ9 説話文学	日本霊異記、今昔物語、古本説話集などを中心に、説話文学に見られる、多様な階層の人々の生き方に目を向けたい。散逸した宇治大納言物語、また、三宝絵、日本往生極楽記、続本朝往生伝などの往生伝、法華験記、江談抄、打聞集、唐物語などにも触れる。	同　上	同　上
10	紀　貫　之	古今集・新撰和歌の撰者、貫之集に集成された屏風歌の作者、古今集仮名序・大堰川御幸和歌序・新撰和歌真名序の執筆、土佐日記の執筆など、多様な文学活動をした貫之の業績を、時代的な背景を視座に置きながら、具体的な作品の読解を通して跡づけする。	同　上	同　上
11	源　順	和名類聚抄の著者で、戯作的な無尾牛の歌など異色の漢詩文の作品を多数残し、梨壺の五人の一人として、万葉集の訓読や後撰集の編纂に従事し、あめつちの歌・双六盤の歌・碁盤の歌など特異な歌を詠んだ多才さを、和歌に傾倒する男性歌人の系譜に位置づけする。	同　上	同　上
12	藤原公任	拾遺集に発展した拾遺抄、和漢朗詠集の撰者で、三十六歌仙の基になった三十六人撰など秀歌撰を編纂し、歌学書の新撰髄脳や和歌九品、有識故実書の北山抄などを著わし、三舟の才を称されたその活動をたどり、当時の文学状況の中での存在の意味を考える。	同　上	同　上
13	女性たちの文化圏	一条朝の大斎院選子・皇后定子・中宮彰子を中心とする文化圏、後冷泉朝の六条斎院禖子内親王・祐子内親王・四条宮寛子の文化圏で女房たちや風流な殿上人たちによって営まれた、王朝文学の粋ともいうべきサロン的な文学活動の実態を作品を通して明らかにする。	同　上	同　上
14	女流歌人と女歌	小野小町、伊勢、斎宮女御、和泉式部などの女流歌人の歌を読解しながら、女性独自の発想や表現の特徴を探ってみる。また、男性との贈答歌を取り上げて、女歌といわれる、歌垣以来の応酬の方法に注目する。和泉式部日記に見られる独特の形態の贈答歌にも触れる。	同　上	同　上
15	歌謡の世界	神事や遊宴の場で歌われた神楽歌や催馬楽、また、今様の集成である梁塵秘抄に収められた歌謡を読解しながら、神仏信仰や庶民生活の具体相に触れてみたい。また、源氏物語などに引用された歌謡を検討して、和歌とは異なる表現性に注目する。	同　上	同　上

＝中世の日本文学＝（R）

（主任講師：久保田　淳（白百合女子大学教授）
主任講師：島内　裕子（放送大学助教授））

全体のねらい

12世紀半ばから16世紀にいたる日本の中世文学を概観する。各回の講義は、中心となる作家または文学ジャンルに焦点をあて、原文を掲げて作品の内容に踏み込んだ講義を行う。同時に個別的な作家や作品以外の他の関連作家や関連作品にも広く言及し、中世文学の全体像も学べるように配慮する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中世の序曲	「中世の日本文学 ― 作家と作品 ― 」の開講にあたり、本講義の全体のねらいに触れながら中世の序曲としての『平家物語』を取り上げる。	久保田　淳（白百合女子大学教授）	久保田　淳（白百合女子大学教授）
2	長明	『方丈記』・『無名抄』・『発心集』・和歌など、長明の著作を広く取り上げて、長明文学の多様性を理解する。加えて、中古から中世への過渡期における文学的意義を考察する。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
3	西行	西行の生涯と作品を辿り、その独自の文学的魅力を描く。	渡部泰明（上智大学助教授）	渡部泰明（上智大学助教授）
4	定家	新古今時代の代表的歌人である定家の和歌を中心に、同時代の他の歌人たちも取り上げて、『新古今和歌集』の特色を学ぶ。	同上	同上
5	阿仏	阿仏若き日の自伝的作品である。『うたたね』と、晩年の紀行文『十六夜日記』により、ひとりの作家の文学的変貌を探る。あわせて歌壇の分立、および女流文学の変質にも触れる。さらに紀行文学にも言及する。	島内裕子	島内裕子
6	無住	無住の生涯と代表作『沙石集』・『雑談集』について概観し、あわせて中世の説話文学にも言及する。	同上	同上
7	後深草院二条	『とはずがたり』を取り上げ、この作品の独自性および女流文学の流れの中での位置づけを論じる。	久保田　淳	久保田　淳

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中世の転換期	本講義の中間点にあたり、中世後期の文学的特徴を中世前期と比較しながら考察する。作品としては『太平記』を取り上げ、新時代の価値観や美意識の変化を概観する。	久保田　淳	久保田　淳
9	兼好	二条派歌人としての兼好と、『徒然草』の作者としての兼好の両面を提え、当時の和歌と散文の文学的状況を考察する。	島内裕子	島内裕子
10	五山文学	中世の漢文学「五山文学」について、その概要に触れ、代表的な作者と作品を取り上げる。	堀川貴司（愛知県立女子短期大学助教授）	堀川貴司（愛知県立女子短期大学助教授）
11	連歌	連歌について概説し、二条良基・心敬・宗祇などの連歌論や連歌作品を具体的に取り上げる。	同上	同上
12	御伽草子	御伽草子とはどのような作品群を指し、そこにはどのような文学的意義が見出されるのか、従来の物語との相違点などについて、いくつかの作品に即して考察する。	島内裕子	島内裕子
13	能	能について、その様式などをめぐって広く概説するとともに、世阿弥の作品などを取り上げて具体的に考察する。 法政大学	山中玲子（法政大学助教授）	山中玲子（法政大学助教授）
14	狂言	狂言の特色や、独自の文化的意義について考えるとともに、いくつかの作品に即して、その特質に触れる。	同上	同上
15	中世文学のゆくえ	本講義全体のまとめとして、これまで触れられなかった文学ジャンルや作家などを補足説明し、中世文学のゆくえを、近世・近代・現代の文学への影響を通して探る。	島内裕子	島内裕子

＝近世の日本文学（'９８）＝（Ｒ）

（主任講師：長島弘明（東京大学助教授）
主任講師：清登典子（筑波大学助教授））

全体のねらい

中世までの文学は、貴族や武家などの支配層によって作られ享受されていたが、近世（江戸時代）の文学は、被支配層である町人が作者・読者として大きな役割を果たすようになり、前代とは異なった様々なジャンルの作品が生まれた。その多様な近世文学の成立・展開の様相を、作家・作品に即して具体的に見てゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世文学の特徴	前代の文学と比較した時の近世文学の顕著な特徴を、出版文化の成立と大衆化、雅俗の並立・混淆の様相、滑稽と教訓の要素、上方と江戸の地域的な対比等々、様々な観点から考察する。	長島弘明（東京大学助教授）	長島弘明（東京大学助教授）
2	仮名草子から浮世草子へ	近世初期の小説である仮名草子の諸相に触れ、その特徴を明らかにする。また、仮名草子の代わる新しい小説形式である浮世草子の初作、井原西鶴の『好色一代男』の出現の意義について説明する。	同上	同上
3	西鶴の文学	西鶴の伝記を略述し、好色物・武家物・町人物等の西鶴浮世草子の各作品について、それぞれのテーマ的特色等を考察する。あわせて、八文字屋本等の西鶴以後の浮世草子について通覧し、浮世草子の展開の様を探る。	同上	同上
4	貞門・談林から蕉風俳諧へ	俳諧の源流から、近世俳諧の形式を定めた貞門俳諧、新風としての談林俳諧、さらに芭蕉の登場までを扱う。主要俳人と作品について触れながら、各派の特色を説明する。芭蕉については、深川隠棲までの時期を対象とする。	清登典子（筑波大学助教授）	清登典子（筑波大学助教授）
5	芭蕉の文学	天和期以降の芭蕉の俳諧について考察する。俳風（連句・発句）の時期的な変遷、蕉風俳諧の理念と表現、俳文と紀行の意義等、多方面から考察する。必要があれば、門人についても適宜触れることにする。	同上	同上
6	浄瑠璃と近松門左衛門	浄瑠璃の歴史を、近松門左衛門を中心に概観する。浄瑠璃の成立、古浄瑠璃、近松の人と時代物・世話物の各作について、また海音・宗輔・出雲・半二、江戸浄瑠璃等、近松以後の浄瑠璃の展開について解説する。	池山晃（大東文化大学専任講師）	池山晃（大東文化大学専任講師）
7	国学と和歌	伝統的な歌学から国学への学問的革新と平行する形で、堂上派から古学派・江戸派、あるいは蘆庵・桂園派など、様々に展開して行った近世和歌の歴史を説明する。幕末の良寛・元義・言道・曙覧らにも触れる。	鈴木健一（茨城大学助教授）	鈴木健一（茨城大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	漢学と漢詩文	朱子学・古義学・徂徠学の文学観をとりあげ、儒学各派の詩文に対する見解を押さえつつ、丈山・元政から古文辞派の擬古主義、反古文辞の江湖社、幕末の個性的な詩人たちまでの、漢詩文の変遷を解説する。文人の概念についても触れる。	鈴木健一	鈴木健一
9	前期読本と上田秋成	前期読本成立の背景に触れ、都賀庭鐘・建部綾足の読本、さらに上田秋成の文業を、『雨月物語』『春雨物語』を中心にして考察する。浮世草子との相違、また後期読本との相違等にも言及する。	長島弘明	長島弘明
10	中興期俳諧と蕪村	芭蕉没後の享保期俳諧から説き起こし、蕉風中興運動の経緯について概説し、この時期を代表する文人風の俳人である、与謝蕪村の人と作品について考察する。蕪村の俳論俳詩等にも言及する。	清登典子	清登典子
11	一茶と雑俳・川柳	蕪村以後の俳諧大衆化時代の後期俳諧を、一茶調と呼ばれる個性的な句を多く残した小林一茶を中心に概観する。また、雑俳について略述し、特に川柳について、その庶民詩としての本質について解説する。	同上	同上
12	笑いと舌耕の文学	笑いを旨とした文学形式である狂歌・狂詩・咄本の流れをそれぞれ概説し、近世的な笑いの質について考える。また、仏教談義・講談と密接な関係を持つ、舌耕の小説ともいうべき仏教長編小説・実録体小説について略述する。	板坂則子(専修大学教授)	板坂則子(専修大学教授)
13	江戸の戯作 (1)	文運東漸後、江戸で盛んになった小説類について概説する。本章では、江戸小説の草分けといってよい『当世下手談義』以下の談義本、遊里を舞台とする洒落本、画文が同等の比重を持つ黄表紙、洒落本の流れを引く滑稽本を取り上げる。	同上	同上
14	江戸の戯作 (2)	江戸中心の小説の続き。後期読本の展開を、山東京伝・曲亭馬琴の作品を中心に概観する。また、市井の男女の恋愛を描いた人情本、黄表紙の後継ジャンルである合巻について解説し、それぞれの小説としての特徴を検証する。	同上	同上
15	歌舞伎と南北・黙阿弥	歌舞伎の歴史を、後期を中心に概観する。歌舞伎の成立、元禄歌舞伎、丸本物の時代、正三・五瓶・治助、特に鶴屋南北・河竹黙阿弥の作に比重をおいて解説する。歌舞伎役者についても、適宜言及する。	池山晃	池山晃

＝近代の日本文学＝（R）

〔主任講師：浅井　清（帝京大学教授）〕

全体のねらい

明治文学から戦後文学にいたるまでの小説を中心とした近代の日本文学の流れを跡づける。近代の小説の方法や特性を説き明かしながら、新聞・雑誌との関係や文学諸流派の相互関係や西欧文学の影響関係等を解明し、それぞれの時代における文学と人間と社会の関係を歴史的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文明開化期の文学	明治維新に始まる急激な近代化と文学状況を概観する。新聞・雑誌のメディアの登場を背景とする戯作の変貌、さらに翻訳小説・政治小説の出現を経て『小説神髄』にいたるまでの転換期の文学を解説する。	浅井　清（帝京大学教授）	浅井　清（帝京大学教授）
2	〈近代小説〉の誕生	坪内逍遙・二葉亭四迷らが紹介した西洋の文学理論を背景に、一方で日本の古典を受容・再生しながら、どのような形で〈近代小説〉が誕生していったのかを概観し、新旧文学観の交替と、森鷗外・尾崎紅葉・幸田露伴ら新世代の作家たちの登場のさまをとらえる。	菅　聡子（お茶の水女子大学助教授）	菅　聡子（お茶の水女子大学助教授）
3	文壇の形成	〈近代小説〉の誕生はまた〈近代的読者〉の誕生でもあった。本章では新聞・雑誌の発刊が象徴する明治ジャーナリズムの形成とそれを支えた読者の登場を背景に、前章で紹介した新世代の作家たちの活動の展開と、樋口一葉を中心とする女性作家達の諸相を見る。	同　上	同　上
4	日清戦争後の文学	日清戦争後の文学状況を、当時新傾向の文学として脚光を浴びた、川上眉山・広津柳浪・泉鏡花らの諸作品に照明をあてて概説する。あわせて鏡花文学の明治二十年代以降の展開にも触れる。	鈴木啓子（宇都宮大学助教授）	鈴木啓子（宇都宮大学助教授）
5	近代文学の展開	明治30年代の文学を、自然や神秘幻想への関心の高まり、家庭小説・懸賞小説や写生文の流行、社会小説・社会主義小説の登場などの諸点から概観し、その多様な展開の諸相をとらえる。	同　上	同　上
6	自然主義の文学	明治文学の帰結としての自然主義文学を考察する。主要な作家の全貌を概観し、個々の作品の主題・方法・文章等の特色を解明する。	浅井　清	浅井　清
7	鷗外と漱石	明治40年代の森鷗外・夏目漱石の文学を、日露戦争後顕在してきた日本の近代化に対する批判的な社会状況と関連付けながら解説する。また、同じ西欧体験者でもあった永井荷風・高村光太郎などとの差異にも触れる。	中村三代司（淑徳大学教授）	中村三代司（淑徳大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	反自然主義の潮流	明治40年代に全盛であった自然主義文学に対抗しようと創刊された「スバル」系の木下杢太郎・北原白秋などや、「三田文学」系の荷風・水上瀧太郎・佐藤春夫などの文学傾向について考察する。	中村三代司	中村三代司
9	白樺派の文学	「白樺」の指導者であった武者小路実篤を中心に、創刊に至る経緯や理念、また〈新しき村〉運動について解説する。その他、同人であった志賀直哉・有島武郎・長与善郎などの文学にも言及する。	同上	同上
10	市民文学の成立と展開	「白樺」「三田文学」「奇蹟」「新思潮」の作家たちの多彩な文学活動を、芥川龍之介を中心にして概観する。また大正10年代に盛んになった〈私小説〉についても考察を加える。	同上	同上
11	大衆文学の成立と展開	マス・メディアの時代を迎え、いわゆる時代小説の変貌、通俗小説の登場、推理小説の誕生等を明らかにして、文学の大衆化の状況を概説する。	浅井清	浅井清
12	プロレタリア文学とモダニズム文学	第一次世界大戦後の新しい動きは、日本の文学にも影響を与えた。政治革命を求めるプロレタリア文学と表現の革命を求めるモダニズム文学は逆の方向を向いているようでその根には時代的共通性がある。このふたつの新しい文学運動について概観する。	宮内淳子(帝塚山学院大学助教授)	宮内淳子(帝塚山学院大学助教授)
13	「文芸復興」の内外	いわゆる「文芸復興」期における、新人の登場、既成作家の復活、転向作家の仕事などをとおし、プロレタリア文学退潮後、戦時下の抑圧的な状況へ移行する間に見られる様々な問題点を考える。	同上	同上
14	戦時下の文学	昭和12年日中戦争開始、昭和16年太平洋戦争開始といった状況の中で、文学はどのような変質を見せたか。また、どのように自分の文学を守ろうとしたか。様々な作家の動きを見てゆく。植民地文学にも触れる。	同上	同上
15	第二次世界大戦後の文学	敗戦後の混乱の中、書けずにいた作家たちがいっせいに作品を発表し始めた。戦争体験や戦前の左翼運動の挫折体験などを語る若手に加えて、戦前から独自の路線を貫いて見せる作家もあった。高度成長期に移る昭和30年代、60年安保の頃までをたどる。	同上	同上

＝清少納言と紫式部（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：鈴木日出男（東京大学教授）〕

全体のねらい

平安時代に、女流の手になるいわゆる女流文学がおこった。本講義では、その女流文学全体相への展望のもとに、日本文学史上に屹立する清少納言と紫式部の文学に照明をあててその本質に近づくことを目的とする。女流文学全体をも展望するために、道綱の母・和泉式部・孝標の娘などにもふれることになる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	女流文学の担い手たち	平安時代に開花する女流文学はどのようなものであったか、またどのような人々によって、なぜそのような文学営為がおこったかを考えることをもって、全体の序説とする。	鈴木日出男（東京大学教授）	鈴木日出男（東京大学教授）
2	『蜻蛉日記』とその作者	『蜻蛉日記』は、女流によって書かれた最初の長大な散文文学である。その作品と作者を通して、女流文学の一つのあり方を考える。	同上	同上
3	清少納言伝	『枕草子』の作者である清少納言がどのような環境のなかでいかに生涯を生きたかを浮き彫りにする。	同上	同上
4	『枕草子』とその成立	『枕草子』の本性にふれながら、清少納言がこの作品をどのような環境や条件のもとで作りえたかを考える。	同上	同上
5	『枕草子』の類聚章段	『枕草子』作品研究①として、この作品を最も特徴づけている類聚章段（ものづくしの段）をとりあげる。	同上	同上
6	『枕草子』の類聚から随想章段へ	『枕草子』作品研究②として、随想章段をとりあげる。また、ここでは特に前回の類聚章段との関連について考えることになる。	同上	同上
7	『枕草子』日記回想章段	『枕草子』作品研究③として、作者の体験見聞にもとづく日記回想章段をとりあげる。いわゆる日記文学とも異なる点に注意したい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	『枕草子』の文体と本質	『枕草子』の表現のあり方を通して、この作品の文体と本質を考える。これをもってこの作品論のしめくくりとしたい。	鈴木日出男	鈴木日出男
9	和泉式部の文学	平安時代屈指の女流歌人の和泉式部は、清少納言や紫式部と同時代の人。その和歌と『和泉式部日記』をとりあげ、その本質に迫る。	同　上	同　上
10	紫式部伝	『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』をのこしたこの作家が、どのような人生を歩んだか、を浮き彫りにする。	同　上	同　上
11	『源氏物語』への道	この作者の精神生活のありように注意しながら、物語創作の必然や意義について考える。	同　上	同　上
12	『源氏物語』の世界　(1)	虚構の人物、光源氏の創出をはじめとして、この物語のさまざまな特性にふれながら、作品世界の本質に迫る。	同　上	同　上
13	『源氏物語』の世界　(2)		同　上	同　上
14	『紫式部日記』の文体と本質	この作品の表現のあり方を通して、紫式部の文体、思想、本質を考える。	同　上	同　上
15	女流文学の本性	菅原孝標の娘の『更級日記』にも触れながら、それぞれの作家・作品をあらためて考え、本講義のまとめとする。	同　上	同　上

＝徒然草の遠景（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：島内裕子（放送大学助教授）〕

全体のねらい
徒然草下巻の世界を辿りながら、そこで展開される批評の達成について遠望するとともに、徒然草を随筆として捉える従来の考え方を再検討し、日本文学の中で、徒然草とは何であったのかという、新しい位置づけを提示する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	内景から遠景へ	徒然草上巻の世界を振り返り、下巻への展望を示す。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
2	王朝の余薫	第１３８段・１３９段を中心に、王朝文学の余韻が、なぜここに書かれているかを探る。	同上	同上
3	人間観さまざま	第１４０段から１４６段までを中心に、人間観の描かれ方を考える。	同上	同上
4	外界と内界	世間とのかかわりについて、兼好がどのように捉えていたかを考える。	同上	同上
5	筆法の変化	上巻と比べて、下巻の書き方には、どのような特徴がみられるかを探る。	同上	同上
6	時間の遠景	徒然草に多数みられる有職故実の章段を、新しい視点から捉え直す。	同上	同上
7	批評の達成	徒然草における批評の到達点について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	個性と普遍	徒然草に登場する個性的な人物群像と、人間の普遍性について考える。	島内裕子	島内裕子
9	兼好の憂愁	徒然草末尾の数段に現れる兼好の心情を探る。	同上	同上
10	八つになりし年	徒然草最終段をめぐって、なぜここで擱筆されたのかを考える。	同上	同上
11	晩年の兼好	徒然草執筆終了後から最晩年までの、兼好の事跡を辿る。	同上	同上
12	徒然草の復活	室町時代から近世にかけて、徒然草が再発見される過程と、徒然草研究の開始について概観する。	同上	同上
13	近世における徒然草	芭蕉や宣長たちにみる徒然草の影響力について考える。	同上	同上
14	近代における徒然草	近代における徒然草研究史、および近代の文学者への影響力について考える。	同上	同上
15	徒然草とは何か	日本文学における徒然草の位置付けを、文学史の中に遠望し、徒然草とは何であったのか、その新しい文学像を提示する。	同上	同上

＝日　本　語　の　変　遷＝（Ｒ）

〔主任講師：山口明穂（中央大学教授）〕

全体のねらい
日本語の現在の姿をよく知るために、これまで日本語がどのように変化して来たかを知る。主要な要素の面から、時代の面からと二方面から観察し、理解を深めることを求める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	概説	日本語の変遷の全体の流れを概観し、どのように時代区分するか等の問題を含めて、日本語の全体像を考えることを目指す。	山口明穂（中央大学教授）	山口明穂（中央大学教授）
2	漢字の移入	漢字が中国から移入されて来た後、どのように日本語の中に定着したか、音と訓との関係を含めて、初期の漢字の使われ方を考える。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
3	漢字の働き	漢字が日本語の中に定着した後、どのような発展を遂げたか、日本語の文字文化を形成する上での漢字の果たした役割、西欧文化の流入に際して漢字をもとに過去の人々がどのように対処したかを考える。	山口明穂	山口明穂
4	五十音図の成立	五十音図は日本語の発音体系を示したものであるが、成立の過程、その後の日本語の中で果した役割を考える。	月本雅幸（東京大学助教授）	月本雅幸（東京大学助教授）
5	仮名の成立	独自の文字を持たなかった日本語で、漢字をもとに日本語に適した文字体系である仮名文字が作られるが、成立の過程を始め、それが日本語の言語生活の中で果した役割を考える。	同上	同上
6	文法の変遷	日本語の文法はどのように変化したか、その変化の中側にある日本語をもとにした人々の考え方の変化をも含めて考える。	山口明穂	山口明穂
7	擬古文	平安時代の仮名文が成立した後、後の時代の人達は、仮名文で出来上った体系を模す形で、書記生活を送るようになる。平安時代の言葉を研究し、それに従った言葉を綴る生活をしたのである。その擬古文の実態、変らざるように見えながらも、そこにどのような変化があったかを考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	奈良時代の言葉	奈良時代の言葉は『万葉集』を中心に考えられるる言葉であるが、その実態を考える。	杉浦克己	杉浦克己
9	平安時代の言葉（仮名文）	平安時代の言葉は、大きく分けて仮名文と漢文訓読文とに分けることができる。仮名文は、『源氏物語』を始めとして多くの文学作品に綴られた言葉であるが、その実態を考える。	山口　明穂	山口　明穂
10	平安時代の言葉（漢文訓読文）	経文を始め、漢籍を読む言葉は平安時代に独自の世界を作り上げた。同じ時代の仮名文との関係を含めて、平安時代の漢文訓読語の実態を考える。	月本雅幸	月本雅幸
11	鎌倉時代の言葉	武士の時代となる鎌倉時代に於いても、文化の中心には前代と同様に京都の公家を中心とした人達がいた。言葉も京都を中心とした言葉となる。しかし、前代と変らないように見えるこの時代の言葉にも、少しずつ新しい傾向が見られるようになる。その実態を考える。	山口明穂	山口明穂
12	室町時代の言葉	室町時代には、キリシタン資料を中心に新しい言葉が見られるようになる。そこに使われている言葉は現在我々の周囲の言葉と似た点が多く見られる。一つの考え方で、この時代を近代語の始りとする考えがあるが、そのようなこの時代の言葉を考えての結果である。その実態を考える。	同　上	同　上
13	江戸時代前期の言葉	江戸時代の言葉は、前期上方を中心にした時代と後期江戸を中心にした時代とにわけることができる。ここでは、前期上方語を考える。	坂梨隆三（東京大学教授）	坂梨隆三（東京大学教授）
14	江戸時代後期の言葉	18世紀半ば以降、文化の中心が上方から江戸に移り、江戸を中心にした地域の言葉が分るようになる。その実態を考える。	同　上	同　上
15	明治以降の言葉	幕末から明治時代にかけて西欧文化が流入し、日本語も大きく変わろうとするが、その実態を考える。	鈴木英夫（白百合女子大学教授）	鈴木英夫（白百合女子大学教授）

＝日本語教育概論＝（ＴＶ）

〔主任講師：水谷信子（明海大学教授）〕

全体のねらい

この講義は日本語教育の基礎知識を与えることを目的とする。具体的にはコミュニケーション能力をつけるという学習目的に合った教育方法を考察するとともに、日本語を客観的にとらえる態度を養うことを主眼とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本語教育の意義	日本語教育の現状。日本国内・海外の学習者の数や学習目的など。学習目的に合った教育の重要性。外国語教育としての日本語教育のためには、日本語そのものの知識と学習者に対する態度が大切であることを確認する。	水谷信子（明海大学教授）	水谷信子（明海大学教授）
2	日本語の教室	日本語の実際を少しでも体験するために、日本語の教室に身をおいたと仮定して、入門期の授業、初級の文型練習、中級の読解、討論の練習などの典型的な教室作業を見て、教育上の問題点を考える。	同上	同上
3	入門期の指導	入門期から初級の指導項目、授業計画、目的に合った教授法、教科書、最初の授業の前の準備、基本的な練習方法と基本的な語彙の導入、教材・教具の使い方、指示の与え方、発音練習の方法など、入門期の指導を考える。	同上	同上
4	音声の指導	日本語の音声の指導法を具体的に考察する。拍感覚の重要性、母音・子音の中で気をつけるべきもの、母音の連続、促音、「ん」の発音、口蓋化、有気と無気、無声化、アクセント、プロミネンス、イントネーションなど。	同上	同上
5	「こそあど」等と場面性	「こそあど」の体系、「こそあど」の提示と練習、「こそあど」の場面性の考察。場面から来る「省略」と「完全文」、単文と談話の違い、構造練習と談話練習、具体的な練習方法から、自然な日本語を教えることを考える。	同上	同上
6	動詞を中心として(1)	動詞を中心とした指導項目についての考察。国文法との違い、動詞と助動詞、「～ます」から始める方法、普通形への移行、動詞の活用の型、「～て形」と補助動詞、「～ている」の導入、「た」の用法などを考える。	同上	同上
7	助詞と接続	外国人にとって習得しにくいとされる助詞の指導法。助詞と動詞をむすびつけて練習させる方法と助詞の用法の理解。助詞と動詞・形容詞・形容動詞の接続の誤用。「頭が痛いんです」の「ん」の用法。文と文の接続など。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	動詞を中心として(2)	願望を表す「～たい」と「～たがる」、可能形、使役形、受け身形の用法と指導法の考察。日本語の受け身表現は外国人学習者にとって習得が困難とされるが、人間関係を中心として具体的に動作を伴って考える方法を考える。	水谷信子	水谷信子
9	「やりもらい」と待遇表現	「やりもらい」表現の特殊性と効果的な指導法の考察。補助動詞としての用法。尊敬表現・謙譲表現。家族の呼称。語彙による待遇表現。親愛表現・内と外。身体表現。話し手と聞き手との距離などを考える。	同上	同上
10	話し方と聞き取りの指導	話し方と聞き取りの向上のための実際的な指導方法。あいづちの理解。文完成練習の効果。わくの中での練習と自由会話。録音による話し方指導。ミニマルペアを利用した聞き取り指導。文構造と音声の両面から指導。	同上	同上
11	語いと表記の指導	日本語の語彙と表記の特徴と指導法を考える。語彙と文体。語彙の与えかた。基本語彙と基本漢字。類義語の説明能力の養い方。外来語の指導。擬声・擬態語の基本的な傾向。表記の指導法などを考察する。	同上	同上
12	読解と総合練習	中上級の指導法と読解。文体の違い。学習者の準備方法。理解の確認方法。読んだことを話させる、聞かせる、書かせる、応用練習をさせるなどの総合練習によって全般的な能力の向上を図ることを考える。	同上	同上
13	補助動詞と形式名詞	中上級の段階で特に必要な補助動詞と形式名詞についての考察。「ている」と「てある」、「てくると」「ていく」の対応：「こと」「わけ」「ため」「もの」「ところ」「はず」等の用法説明と例文作成の方法を考える。	同上	同上
14	人間関係と言語生活	日本人の話し方の特徴。感謝の表現と謝罪表現、「やっぱり」の用法。「お茶でも」「お茶をのんだり」などの例示表現と間接表現。「おかげさまで」など理解しにくい挨拶。性別・地域・世代の違い、学習者のアイデンティティの問題の考察。	同上	同上
15	評価と指導	教育の上での評価の意義。試験と評価の関係。試験の目的と利用法。試験問題の作り方。作文や話し方の評価等。講義全体の結びとして、これまで学んだ基本的な教授法の応用法と、今後の研究課題や研究方法を考察する。	同上	同上

＝書誌学・古文書学＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉浦克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい

古い時代の文献資料を読むためにはどのような知識が必要なのだろうか。様々な種類の文献資料を示すことによって、日本語の文字や表記法の変遷を解説し、「書く」ことの発達とその意味について考えると共にそれらの文献資料の取扱いの実際や、読解のための基本的な知識を概説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「書く」ということ	人間は書くことによって、コミュニケーションの範囲を大きく拡大すると共に、情報（記憶）を外部に保持できるようになった。身近な例でこのことを説明する。 漢字の輸入によって始まった、日本語の書記法の初源的な姿を紹介する。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
2	上代の書記法	上代の一般的な書記法（漢文＋固有名詞の万葉仮名書き）による資料を紹介し、漢字の様々な用法とその読解の実際を解説する。特に漢文（変体漢文）が、日本語の表記法として決して十全なものではなく、いかに読むべきかが常に問題となることに留意する	同上	同上
3	紙と筆記用具	紙（和紙）の製造工程を紹介し、その特色や性質を示すと共に、紙の種類や歴史的な変遷を解説する。特に紙の使用が書記言語の発達に果たした役割を考える。 筆、墨、硯等の筆記用具について解説する。	同上	同上
4	書物の形状と取扱い	単に紙に書き留めていただけのものから、書物としてまとまったものへ発展して行ったことの意味を考え、書物の代表的な形状とその歴史的変遷を実物（または複製品）によって示し、その取扱い方について留意すべき事項を解説する。	同上	同上
5	保存・修補と閲覧の実際	文献資料の保存（温度や湿度等の管理、虫・鼠などの害からの保護、散逸の防止など）や修補（補綴や虫損等の補修など）の実際を紹介すると共に、資料閲覧時の基本的な心構えや留意事項を、実際に図書館訪問して解説する。	同上	同上
6	読解の実際（平仮名文書）	平仮名の生まれた背景や発達について解説すると共に、平仮名書き文書変体仮名文）の読解の実際を解説する。特に墨継ぎや行替え、異体仮名の使用によって、より効果的な書記法になっていることに留意し、日本語独自の書記法として発展して行った過程をたどる。	同上	同上
7	読解の実際（漢文文書）	長年にわたって日本語の公式文書の書記法として代表的なものであった漢文及び変体漢文文書を紹介し、その読解を解説する。特にこれらの書記法が、漢字の「意味」を媒介にして成立しているものである点に留意する。また行草書漢字の読み方の基本的事項を示す。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	読解の実際(訓点資料)	漢籍や仏典などの漢文資料を紹介し、訓読資料の言語資料としての価値と、そこから明らかになる国語史的な事実について概説する。片仮名やヲコト点の実際を示す。 特に平安時代以降、日本語に和文脈語と漢文訓読語の二層があったことに留意する。	杉浦克己	杉浦克己
9	読解の実際(片仮名文書)	漢文訓読によって発達した片仮名の変遷を紹介すると共に、代用的な片仮名文書の読解の実際を示し、なぜ平仮名と片仮名の二種が生まれ、用いられてきたかを考える。また、片仮名文書から明らかになる国語史的な諸事実を解説する。	同上	同上
10	読解の実際(書状)	各時代におけつ書状の形式の実際を紹介すると共に、その典型例を取り上げて、読解の実際を示す。また、書簡文の定型性やいわゆる書簡用語の生まれた背景を考える。 特に、これまで学習した仮名文書や漢字文書の読解の復習的な意味を持たせる。	同上	同上
11	古筆	和歌色紙や装飾経など、美術的な価値の高い文献資料を紹介する。特に、それらが「古筆」として珍重されてきた歴史を解説すると共に、主に古筆手鑑の類を通覧することによって、書法や書風の変遷を概観する。	同上	同上
12	版本	版木の実物を示し、摺刷の実際を紹介すると共に、印刷技術の発達を概説し、それが文字文化の普及に果たした役割の意味を考える。特に製版印刷と活字印刷の違いをわかりやすく解説することに留意する。	同上	同上
13	辞書の歴史	様々な古辞書を紹介することによって、日本における辞書の歴史を概観し、「読むための辞書」「書くための辞書」の発達と、それらが生まれ用いられてきた背景を考える。	同上	同上
14	校合	古典を読む上での不可欠な基本的作業としての「校合(本文批判)」を実例に基づいて紹介し、その意味を考える。特に、作者と読者との間に書写者が介在することをどうとらえるべきか、という点に留意する。 また交合に際して問題となる異体字についての考え方を、実例に基づいて解説する。	同上	同上
15	書記法の変遷と現代の書記法	日本語の書記法の変遷を概観すると共に、現代の日本語の書記法の成立の背景を考え、仮名遣いや異体の文字など、現代の書記法の抱える問題を考える。またこれから後、大きく変わって行くであろう書記法について考え、講義全体のまとめとする。	同上	同上

＝中　国　古　典　詩　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：佐藤　保（お茶の水女子大学長）〕

全体のねらい

中国の伝統的な詩（古典詩）について、その基本的な詩観・形式・技巧・主題等いわゆる「詩法」の基礎を学習し、豊かな内容をもつ中国の詩を享受する具体的な方法を習得するのが本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国詩概観(1)『詩経』から南北朝まで	中国の詩の歴史を概観しながら、併せて中国人の詩に対する考え方を説明する。第1回は唐以前の時期について講義する。	佐藤　保（お茶の水女子大学長）	佐藤　保（お茶の水女子大学長）
2	中国詩概観(2)隋・唐詩から文学革命まで	前回に引きつづき、唐以後、新しい近代詩が出現する20世紀初頭の文学革命の時期までの詩の流れと詩観について述べる。	同　上	同　上
3	中国詩の形式(1)韻律と句法	中国の詩の媒体である漢字の特色、漢字の音に基づいて生まれた詩の韻律・句法等、形式の基礎となることがらを講義する。	同　上	同　上
4	中国詩の形式(2)古体詩と近体詩	前回の学習をもとに、中国の伝統的な詩形の分類とそれぞれの特徴・規則等をまとめる。	同　上	同　上
5	中国詩の技巧(1)対句法	中国詩の形式と関連して、以下の4回にわたって詩の技巧について考察する。最初は対句の意味及び種類を検討する。	同　上	同　上
6	中国詩の技巧(2)双声・畳韻	詩の用語のうちから、双声・畳韻及び畳語を取り上げて検討する。	同　上	同　上
7	中国詩の技巧(3)省略法・倒置法	省略法・倒置法等によって詩句がどのように構成されるか、またなぜそのような手法が用いられるのかを検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中国詩の技巧(4) 典故・詩語	詩の内容を豊にする典故と詩語の実際、それらの用法等を検討する。	佐藤　保	佐藤　保
9	中国詩のテーマ(1) 政治と仕官	以下4回にわたって、中国詩の重要なテーマ（主題）について検討する。最初は政治とのかかわりの検討である。科挙と詩の関係等についても言及する。	同　上	同　上
10	中国詩のテーマ(2) 隠棲と自然	政治社会への参加とは対局に見える隠棲への志向、自然への憧憬をテーマとする作品や詩人について検討する。	同　上	同　上
11	中国詩のテーマ(3) 行旅と別離	旅と必ずそれに伴う別離について、旅する人と残された者の情感がどのように詩に表現されるかを検討する。	同　上	同　上
12	中国詩のテーマ(4) 書画・音楽と詩	書画・音楽等、詩は諸芸術と深いかかわりをもつが、詩の効用・役割についての考察も含めて、中国詩のテーマをまとめる。	同　上	同　上
13	詩人の生活	中国の伝統的な詩人のありかたを歴史的に概観すると同時に、女性詩人の活躍についても考察する。	同　上	同　上
14	詩のテキスト	詩集の成立・伝承、テキストと解釈の問題、歴代の詩を研究する場合の参考文献等について述べる。	同　上	同　上
15	中国詩の広がり	本講義のまとめとして、中国詩と日本文学等との関係、さらには伝統的な詩が今日においても生き続けている現状について考察する。	同　上	同　上

＝ 中国における小説の成立 ＝ （ R ）

〔主任講師：竹田　晃（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

中国においては、唐代8世紀末になって初めて小説らしい小説 ― 伝奇 ― が出現した。本講義では、この伝奇が発生するまでのいわば中国小説前史ともいうべき流れを講じ、さらに唐の伝奇の発生と流行の情況、及び伝奇の特徴を説明する。これによって受講者が中国小説史の基礎的な問題点を理解してくれることを期待する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	〈序章〉 中国の小説	3000年にわたる中国の文化の歴史の中に小説らしい小説が現れるのは8世紀末になってからである。しかし、このような作品群は突然出現したわけではない。中国小説史を構想する場合には、このような作品群を生み出すに至った豊かな伝統に配慮する必要がある。	竹田　晃（東京女子大学教授）	竹田　晃（東京女子大学教授）
2	〈小説前史1〉 神話と伝説	まずわれわれは、〈小説〉という話がが中国でいかなる概念で用いられてきたかを考えると同時に、小説らしい小説を生み出すに至った伝統を追求するという意味で、民族的なエネルギーとロマンを包含する神話・伝説の類を小説史の中に位置づけて考えてみたい。	同　上	同　上
3	〈小説前史2〉 虚構文学の伝統	近代小説の特徴の一つとして、〈虚構〉の中で作者の思想を展開することがあげられる。中国では、小説の成立以前にすでにこのような虚構文学の伝統が存在している。このような観点から、先秦の思想家の文章に用いられた寓話、漢代の賦について考えてみたい。	同　上	同　上
4	〈小説前史3〉 史伝の小説的特徴	古代中国には『春秋左氏伝』『史記』『戦国策』などいくつかの歴史書が著されている。これらはいずれも単なる無味乾燥な記録ではなく、個性ある人物像を形成し、感動的に伝える歴史文学としての特徴を備え、小説史の中にも位置づけることができる。	同　上	同　上
5	〈怪異を語る伝統1〉 子は怪力乱神を語らず	現実的な実践倫理を説く儒家思想に支配されていた古代中国の知識人のあいだでは、人間にとって不可知な怪異を口にすることをタブーとされていた。にもかかわらず人びとは怪異を語ることを好み、その痕跡は文献資料にきわめて数多く遺されている。	同　上	同　上
6	〈怪異を語る伝統2〉 六朝志怪の流行	後漢王朝滅亡後、政治的社会的には混乱の時代を迎えたが、文化の面では清新で活発な状況を生じた。その中で、知識人のあいだに怪異を語り、記録する風潮が盛んになり、いわるゆ〈六朝志怪〉の流行を見るに至った。仏教の影響もこの風潮に拍車をかけた。	同　上	同　上
7	〈怪異を語る伝統3〉 仏教の影響	志怪に語られる怪異の内容は多様であるが、人間の死後の魂、つまり幽霊及び霊界に関する話が比較的多く、そして面白い。これらの話は本来中国独自の観念や宗教的信仰にもとづくものであるが、六朝後半には仏教の因果応報・転生輪廻の観念の影響が顕著になった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	〈人間を見つめる確かな眼〉『世説新語』の世界	中国では人間を描く伝統は主として歴史書の列伝という形で形成されてきたが、六朝時代になって、それとは一風変わった趣きの、実在の人物のエピソード集が著された。劉義慶の『世説新語』がそれであり、小説史上にユニークな役割を果している。	竹田　晃	竹田　晃
9	〈唐代伝奇1〉伝奇発生の背景	唐は南北両朝の文化を総合し、スケールの大きな、また多彩な独特の唐文化を花開かせた。小説史の流れの中においても、8世紀半ばになって初めて個人の創作と言える作品群が著された。なぜこの時期にこのような作品が出現したのか。その文化的社会的背景を考える。	同　上	同　上
10	〈唐代伝奇2〉記録から物語へ	六朝志怪の基本的特徴は、怪異を事実として認識し、それをそのまま記録に留める点にある。唐代に入ると、題材は同じく怪異に取りながら、それを単なる記録ではなく、物語として読者に面白く読ませようとする工夫の見られる作品が出現した。	同　上	同　上
11	〈唐代伝奇3〉夢幻的で華麗な『遊仙窟』の世界	中国には古くから人間と神仙界との交流に関する話が数多く伝えられている。唐になってこれら先行の説話を踏まえて新しい仙境訪問の物語が出現した。張鷟の『遊仙窟』がそれである。夢幻的かつ華麗な、いかにも唐代らしいこの物語の雰囲気に浸ってみたい。	同　上	同　上
12	〈唐代伝奇4〉唐都長安と伝奇	唐都長安は国際的な大都会であった。この花の都は伝奇のような物語にとっては格好の舞台となる。この長安にくりひろげられるさまざまな人間模様を、情愛（「任氏伝」）・仙（「杜子春伝」）・侠（「無双伝」）という三つのテーマについて捉えてみたい。	同　上	同　上
13	〈唐代伝奇5〉物語による抽象的な観念の追求	安禄山の大乱後も唐の政情は安定しなかった。このような情況の中で有為転変を身をもって体験した官僚の中に、社会や人生の問題を伝奇の形で追求しようとする者が現れた。彼らは名利の空しさ、人生のはかなさという抽象的な観念を密度の濃い物語の中に盛りこんだ作品に完成させた。	同　上	同　上
14	〈唐代伝奇6〉怪異からの脱却	唐の伝奇が怪異に取材しながら物語性に富んだ作品に昇華していることはすでに述べた。ところが、伝奇の中にまったく怪異の要素のない物語がついに出現した。白行簡「李娃伝」・元稹「鶯鶯伝」がそれである。これは中国小説上実に画期的なことであった。	同　上	同　上
15	伝奇以後の中国小説史の展開	伝奇のような文言小説は唐以後の知識人の文学として書き続けられるが、宋代になると市民も文化を享受できる情況が生まれ、その中から白話小説が出現する。白話小説は明代に大いに発展し、『水滸伝』や『三国志演義』のような雄大なロマンも世に現れた。そして中国の小説史の流れは、近代文学へと導かれてゆく。	同　上	同　上

＝歴　史　考　古　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長）〕

全体のねらい

考古学は、遺跡・遺物から人間の歴史を考える学問であり、その対象とする時代は文献史料のない先史時代に限定されるわけではない。日本でも最近では、古代はもとより、中世や近世の遺跡も発掘の対象になり、文献史料のみでは明らかにしがたい歴史の実像がつぎつぎと解明されている。この講義では、過去20年ほどの間に研究の著しく進んだ飛鳥・奈良・平安時代を対象とする考古学的研究の成果を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古墳の終末	3世紀後半以降 300年間造られ続けた前方後円墳の造営が飛鳥時代のはじめに停止され、以後7世紀代を通じて古墳が大きく変貌し、ついに終末をむかえる過程を示し、それが古代国家体制の整備と対応することを示す。	白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長）	白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長）
2	飛鳥の諸宮	藤原京以前の諸宮について、前期難波宮や大津宮をもふくめてその変遷と構造の変化を示すとともに、古代国家の形成過程と関連させて考える。	大脇　潔（近畿大学助教授）	大脇　潔（近畿大学助教授）
3	藤原京の出現	藤原京・藤原宮の調査研究の成果を示し、律令国家の成立と関連させて説く。また日本の都城制の源流についてもふれる。	同　上	同　上
4	飛鳥・白鳳の寺院	飛鳥寺、山田寺など発掘調査の成果を具体的に示すとともに、古代寺院の変遷過程やその建立の意味、仏教の隆盛について説く。地方寺院についてもふれ、その広範な造立の意味をさぐる。	同　上	同　上
5	平城京と平城宮	平城京・平城宮の調査研究の成果を示すとともに日本の古代都市の特質についても説く。最近の長屋王邸の調査成果にもふれる。	町田　章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）	町田　章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）
6	国府と郡家	奈良・平安時代の国府、郡家のあり方を解説し、律令制にもとずく地方支配のシステムを説く。古代の交通についてもふれる。	阿部義平（国立歴史民俗博物館教授）	阿部義平（国立歴史民俗博物館教授）
7	古代の村落	律令体制下の村落の実態を最近の調査成果にもとずいて示し、民衆の生活のあり方と支配のシステムの両面から考える。東西の差についてもふれる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	火葬墓と墓誌	古墳の終末以降、奈良・平安時代の墳墓のあり方を具体的に示し、墓誌をともなう墳墓の実例から葬送の実態や人びとの意識をさぐる。	白石太一郎	白石太一郎
9	沖ノ島と古代の神まつり	沖ノ島の祭祀遺跡やその出土遺物を紹介し、古代の神まつりについて考える。沖ノ島以外の遺跡や遺物にもふれる。	同上	同上
10	太宰府と鴻臚館	太宰府と鴻臚館に関する最近の調査成果を紹介し、その機能や役割を考える。また貿易陶磁を通して大陸との交渉についてもふれる。	亀井明徳（専修大学教授）	亀井明徳（専修大学教授）
11	多賀城と古代の東北	多賀城の調査成果を紹介し、その役割について考えるとともに、古代の東北、特に蝦夷の問題をとりあげる。平泉の最近の調査成果にもふれる。	岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授）	岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授）
12	木簡と漆紙文書	古代遺跡出土の文字史料としての木簡と漆紙文書をとりあげ、その解読や史料化の方法にもふれ、具体的な研究成果を紹介する。	平川南（国立歴史民俗博物館教授）	平川南（国立歴史民俗博物館教授）
13	長岡京・平安京の実像	最近の調査の成果にもとずき、平安時代の長岡京・長岡宮、平安京・平安宮の実像を示す。	山中章（三重大学教授）	山中章（三重大学教授）
14	土器の生産と流通	古代の生産のあり方や物資の流通の実態について、土器を中心に考える。	吉岡康暢（国立歴史民俗博物館教授）	吉岡康暢（国立歴史民俗博物館教授）
15	8～10世紀の北海道と南島	奈良・平安時代の北海道と南島には、本州・四国・九州とはまた別個の文化があり、別個の歴史が存在した。現在までに明らかにされているところを紹介するとともに、奈良・平安文化との交流関係にもふれる。	藤本強（新潟大学名誉教授）	藤本強（新潟大学名誉教授）

＝日　本　の　古　代＝（ＴＶ）

〔主任講師：青木和夫（お茶の水女子大学名誉教授）〕
〔主任講師：吉田　孝（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

日本の原始・古代を概観する。おおむね前回の「日本古代史」と同じ範囲を扱うが、近年いちじるしい古代遺跡の発掘の成果の紹介は、平成７年度開始の科目「歴史考古学」にゆずり、この科目では政治・経済・文化の展開を述べ、歴史上の人物にも重点を置く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	研究の歴史と方法	①考古学と文献史学 ②素材と工具 ③研究の実例	青木和夫（お茶の水女子大学名誉教授）	青木和夫（お茶の水女子大学名誉教授）
2	列島文化の形成	①旧石器時代 ②縄文時代 ③列島外との交流	鷹野光行（お茶の水女子大学教授）	鷹野光行（お茶の水女子大学教授）
3	耶馬台国から統一国家へ	①稲作の受容と広がり ②弥生時代の社会 ③統一国家への道	同　上	同　上
4	ヤマト政権と飛鳥文化	①ヤマト政権 ②隋唐帝国 ③飛鳥時代	青木和夫	青木和夫
5	大化改新と壬申の乱	①大化改新 ②白村江の敗戦と天智朝 ③壬申の乱と天武・持統朝	同　上	同　上
6	律令国家の構想	①大宝律令と「日本」 ②大宝律令の構造 ③文書行政のシステム	吉田　孝（青山学院大学教授）	吉田　孝（青山学院大学教授）
7	奈良時代の政治	①女帝と藤原氏 ②律令制の浸透と社会の激動 ③揺れ動く天皇の正当性	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	天平文化	①遣唐使 ②国分寺と東大寺 ③正倉院宝庫	青木和夫	青木和夫
9	新しい王朝の成立	①光仁朝の改革 ②桓武と革命思想 ③薬子の変と嵯峨天皇の宮廷	吉田　孝	吉田　孝
10	摂関政治	①藤原北家の進出 ②公営田と富豪 ③延喜・天暦の治	梅村恵子(川村学園女子大学教授)	梅村恵子(川村学園女子大学教授)
11	都の人々	①御堂関白記と小右記 ②儀式と政務 ③承平・天慶の乱	同上	同上
12	古代 ～家族とくらし	①外戚と国母 ②竹取・宇津保から源氏・蜻蛉へ ③浄土の救済	同上	同上
13	受領と地方支配	①承平・天慶の乱 ②尾張国解文 ③時範記	上杉和彦(明治大学助教授)	上杉和彦(明治大学助教授)
14	院政の成立とその基盤	①院政の成立 ②荘園の類型 ③武士の成長	同上	同上
15	日本古代の歴史的特質	①日本史上の古代 ②世界史上の日本古代 ③時代区分論	吉田　孝	吉田　孝

＝日本の中世（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：五味文彦（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本の中世社会の歴史とその特質を明らかにすることを第一のねらいとして、さらにそれが現代社会とどう関わっているのかを考えることとする。中世社会のあり方は混迷する現代社会を考える手がかりともなる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	中世という時代	中世社会の時代区分やその特徴について通観する。中世社会の歴史を学ぶための史料や学習・研究の意義についても考える。	五味文彦（東京大学教授）	五味文彦（東京大学教授）
2	幕府の誕生と成長	源平の争乱や、朝廷との交渉を経て、以降７００年存続する“武士の政権”が誕生する。鎌倉幕府の歩みを追いながら、武士とはいかなる存在なのかを考えてゆく。	本郷和人（東京大学助手）	本郷和人（東京大学助手）
3	廟堂の群像	鎌倉幕府の成立は朝廷のありように多大な影響を与えた。幕府と共に歩もうとする者、激しく対立する者。個性豊かな朝廷の指導者たちに言及しながら、朝廷の政治・経済を概観する。	同上	同上
4	文書と日記の世界	中世社会を知る手がかりになる史料には、文書と日記がある。両史料を読みこむことにより、人々のいぶきにふれる。また文書、日記の残存状況を考慮しながら、文学史料の可能性にも言及する。	同上	同上
5	都と鄙の遊びとくらし	京の都では朝廷の文士が優雅に文化空間を生成し、地方では武士を中心に新しい文化が育くまれてた。彼らの日常を復原しながら、鎌倉文化の特質に迫る。	同上	同上
6	蒙古来襲	モンゴルの来襲は日本社会に大きな衝撃を与えた。御家人制はゆらぎ、それを抑えるために幕府は専制へと歩み始める。幕府の姿勢と在地領主たちとの矛盾は増大し、また悪党が活発な行動をみせる。	同上	同上
7	再生する仏教	天台・真言両宗は朝廷と深く結びつき、“仏法と王法は車の両輪”といわれた。両宗は貴族化し、人々の救済はなおざりにされていたが、やがて天台宗の中から新しい仏教が誕生する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中世社会の転換	蒙古襲来の打撃、貨幣経済への対応に苦しむ幕府に対して、朝廷は承久の乱の敗北後、着実に力を蓄えていった。やがて朝廷は後醍醐天皇の指導のもとに討幕を成功させる。朝幕の関係を述べながら、中世社会が転換していくさまを述べる。	本郷和人	本郷和人
9	『太平記』の時代	建武の新政から南北朝動乱期にかけての政治・経済・社会の動向を、この時代を活写した軍記物語『太平記』に拠りながら概観する。国人一揆の形成や荘園の生活、請負代官の活動といった地方の動向にも言及する。	櫻井英治（北海道大学助教授）	櫻井英治（北海道大学助教授）
10	室町殿と守護大名	室町幕府の最盛期であり、また将軍専制化の時代ともいわれる義満・義持・義教の三代から応仁・文明の乱にいたるまでの政治過程を、将軍と守護大名との対抗関係や家の企業体的性質等に着目しながら概観する。	同上	同上
11	「日本文化」の生成	日本の伝統文化の原型といわれる室町文化（南北朝・北山・東山文化）の実像を、室町幕府の財政体質や唐物好みの盛衰、世阿弥・心敬の芸術論等に着目しながら明らかにし、その後の戦国～桃山文化との系譜関係を考える。	同上	同上
12	村と町の誕生	室町～戦国時代に形成され、その後の日本社会を長く規定してゆくことになった村（惣村）と町の成立過程とその構造・特質等について検討し、日本における自治の系譜のついて考える。	同上	同上
13	戦国大名と地域社会	戦国大名の権力としての先進性を、法思想や政治理念、権力基盤などの諸側面から解明するとともに、戦国大名の分国をはじめ、国一揆、一向一揆など、さまざまな地域的権力によって国土を分断された戦国期日本の歴史的位置を考える。	同上	同上
14	アジアの中の中世日本	中世日本が当時のアジア世界の中で経済的、文化的にどのような位置を占めていたのかを、中国銭・手形の流通や倭寇の活動、貫高制から石高制への移行の問題などに触れながら、また中国や朝鮮、蝦夷地、琉球など周辺の諸国・諸地域の社会にも目を配りながら検討する。	同上	同上
15	中世から現代に	中世社会が現代社会とどのように関わっているのか、歴史的にどう位置づけられるものなのか、これらの点をこれまでの講義の上に立って明らかにしてゆく。	五味文彦	五味文彦

＝日本の近世（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）〕
〔主任講師：高木　昭作（帯広大谷短期大学長）〕
〔主任講師：杉森　哲也（放送大学助教授）〕

全体のねらい

豊臣秀吉が全国を統合した1590（天正18）年から、徳川慶喜が政権を朝廷に返還した1868（慶応４）年までを近世といい、その支配のしくみを幕藩制という。この講義では、幕藩制の成立から解体に至るまでの歴史的諸事象を素材としながら、近世または幕藩制が日本史・世界史のなかでどのような特質をもつのかを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世とは	第二次大戦直後の「民主化」の時期、近世（江戸時代）とは「封建性」の時代であり、それだけで否定されるべき時代であった。この「封建的」の内容、また最近の江戸時代観をも紹介して導入部とする。	高木昭作（帯広大谷短期大学長）	高木昭作（帯広大谷短期大学長）
2	近世の成立と太閤検地	将軍（秀吉）・大名・家臣の武士の間の関係と、大名・農民（百姓）の間の関係が太閤検地により同時に決定されたことを説明し、あわせて太閤検地との関連で幕藩体制という概念について説明する。	同上	同上
3	役と身分	近世大名と戦国大名の軍隊編成方式の差、あわせて合戦や城攻めの様相について指摘した後に、近世的軍団の機動性をささえた役と軍隊、役と身分の関係について述べる。	同上	同上
4	天皇とキリシタン	秀吉や家康のキリスト教禁止令が神仏習合理論によって書かれていることの指摘を通じて天皇の存在意義について述べる。また日本的華夷思想について触れ、鎖国の実態と意義に再検討をくわえる。	同上	同上
5	「惣無事」令と元和偃武	表題の意味を説明した後、前者が近世を通じて身分統制の原型となったこと、後者を契機にいわゆる「徳川の平和」がどのようにしてもたらされたか、それにともなう近世武士像の変化について述べる。	同上	同上
6	描かれた近世都市（１） －「洛中洛外図」の成立と展開－	戦国末期から近世初頭にかけて、都市の諸相を描いた屏風絵が出現する。洛中洛外図に代表されるこれらの屏風絵は、美術史のみならず都市史の上でも貴重な研究史料であるといえる。本章では、洛中洛外図を主たる素材として取り上げ、その成立と展開の過程を見るとともに、絵画史料分析の方法についても検討を試みる。	杉森哲也（放送大学助教授）	杉森哲也（放送大学助教授）
7	描かれた近世都市（２） －幻の「安土図屏風」－	本章では、前章に続き「描かれた近世の都市」というテーマを取り上げる。前章では洛中洛外図を中心として都市図屏風の成立と展開の過程を見たが、本章では安土の城と城下町を描いた一つの屏風絵を取り上げる。この安土屏風について、関連史料から詳細を明らかにするとともに、その歴史的意義について検討する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	町（ちょう）	町（ちょう）は、近世の都市における最も基礎的な自治・支配の単位である。町人たちによって構成される町中をその中核とする身分的な共同体でもあり、村と並んで近世における最も基本的な社会集団であるといえる。本章では、町が最も早期に成立した京都の町を事例として取り上げ、その特質について検討する。	杉森哲也	杉森哲也
9	巨大都市・三都	三都とは、江戸・京都・大阪の三つの都市を意味する。これら三つの都市は、人口規模をとっても、江戸が約100万人、京都・大阪が約30～40万人にも達する巨大都市であった。そして、いずれも幕府の直轄都市であるとともに、幕藩制の中で固有の機能を有していた。本章では、三都が持つ機能の特質の一端について検討する。	同上	同上
10	近世の考古学	近年の近世史研究の新しい動向の一つとして、近世の考古学が挙げることができる。これまで日本考古学は、原始・古代を主たる研究対象としてきた。しかし、近年は中世さらには近世をもその対象に含めるようになりつつある。本章では、江戸を中心に都市考古学として急速に進展している「近世考古学」の現状について紹介する。	同上	同上
11	享保改革から見た幕府と藩	享保改革を推進した徳川吉宗は、紀州藩主から幕府へ入り8代将軍を継いだ人物であることを踏まえて、改めて幕府と藩、将軍と大名の関係を検討する。吉宗は「恥辱を顧みず」大名に対し参勤交代の期間半減と引換えに、上げ米を要求した。	大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）	大口勇次郎（お茶の水女子大学教授）
12	幕府と朝廷	寛政年間、幕府は「尊号一件」問題で調停を一時対立し、緊迫した関係にあった。明正天皇、後桜町天皇と二人も女性を即位させた江戸時代の天皇とは何なのであろうか。幕府と朝廷との関係を「禁中並びに公家諸法度」にさかのぼって考えてみたい。	同上	同上
13	鎖国と海防	鎖国によって徳川の平和が保たれていたとするなら、18世紀後半からのロシアや欧米からの開国の誘いは、たんなる外交問題としてよりも幕府の独占的な国内支配体制に対する危険信号であった。諸大名を意識した海防計画を具体的に明らかにしたい。	同上	同上
14	天保改革と領地替えの失敗	天保年間、幕府は大名の国替えを意図した三方領地替えに失敗し、江戸・大阪周辺の私領を幕領に編入しようとした上知令も撤回せざるを得なかった。将軍といえども恣意的に大名たちの領地替えをすることが出来なくなっていたことの意味を考える。	同上	同上
15	幕藩体制の崩壊	強固に見えた幕藩体制のシステムもペリーの来航を期に一挙に変質した。幕末の諸事件を具体的に検討することによって、幕府と藩の関係、武士と農民の身分関係、天皇の役割などが変質していく過程を明らかにし、合わせて明治維新を考える。	同上	同上

＝日　本　の　近　代＝（Ｒ）

〔主任講師：鳥海　靖（中央大学教授）〕

全体のねらい

明治維新から第２次世界大戦の敗戦に至る日本の歩みについて、政治と国際関係を中心に主要なテーマを設けて重点的に講義する。通史的概説をさけ、第８回までは「立憲政治の形成」を、第９回以降は「国際社会における協調から孤立へ」をテーマに、それを多角的に取りあげ、日本の近代の歴史的特色と問題点を明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本の近代をどう見るか	日本の近代化についての理解と評価の変遷をたどり、あわせて、日本の近代化の国内的、国際的条件とその目標を明らかにして、日本の近代化の特色について考える。	鳥海　靖（中央大学教授）	鳥海　靖（中央大学教授）
2	明治維新前の立憲政治論	加藤弘之の「隣艸」（となりぐさ）を中心に、幕末の立憲政治論を、対外危機意識との関連で考察する。	同　上	同　上
3	明治初年の立憲政治構想とその理念	明治５（1872）年ごろに立案された議会開設案や大久保利通の立憲政体に関する意見書を中心に、明治初年の政府の立憲政治構想とそれを支える理念について検討する。	同　上	同　上
4	国会開設運動と明治14年政変	民撰議院設立の建白・民撰議院論争、および明治13（1880）年ごろピークを迎えた民権派による国会開設運動と、これに競合する形で進められた政府側の立憲制への動きについて、明治14年の政変のころまでを取りあげる。	同　上	同　上
5	憲法調査と行政改革	伊藤博文らによるヨーロッパでの憲法調査、帰国後の宮中改革、行政諸制度の改革（とくに内閣制度の確立）の具体的過程を明らかにし、改革の意図について考察する。	同　上	同　上
6	明治立憲制の成立	大日本帝国憲法の制定過程における論争点を検討し、明治立憲制における君権主義の原理と立憲主義の原理について、憲法にあらわれた天皇と議会の地位及び権限を中心に考察する。	同　上	同　上
7	初期議会の政府と政党	初期議会における政府と政党の対立と妥協を予算紛争を中心に検討し、立憲政治の運用の実際を明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	立憲政治の定着	日清戦争後の戦後経営をめぐる第2次伊藤内閣と自由党との提携から、憲政党内閣の成立を経て、立憲政友会の結成（明治33＝1900年）に至る過程を考察し、いわゆる1900年体制」について検討する。	鳥海　靖	鳥海　靖
9	近代国家形成期の国際環境と外交政策	19世紀後半から20世紀初頭の日本を取り巻く国際的環境を考え、日本の対外危機意識と対外政策を検討する。とりわけ日露戦争における日本の勝利がもたらした国際社会への衝撃と日本の国際的立場の変化を考察する。	同　上	同　上
10	東と西の狭間で	日本の急速な強国化が、かえって欧米諸国と東アジア諸国の反発と警戒を受けるに至った事情について、第一次世界大戦と戦後のパリ講和会議における日本の立場を中心に検討する。	同　上	同　上
11	協調外交と軍縮	1920年代における国際協調の外交路線と軍縮政策について、ワシントン体制の形成とそのもとでの幣原外交の基本方針の検討を通じて考察する。	同　上	同　上
12	国際的孤立化への歩み	1930年代初めの対外危機の深まりを背景に、満州事変の国際的反響と国内的影響を考察し、国際連盟脱退に至る過程を明らかにする。	同　上	同　上
13	東亜新秩序をめざして	日中戦争の勃発とその長期化とともに具体化された「東亜新秩序」構想と国内における国家総動員体制の形成について考察する。	同　上	同　上
14	第二次世界大戦と日本	第二次世界大戦の勃発、とりわけナチス＝ドイツのヨーロッパ戦線における勝利が、日本の対外政策と国内体制の変革に与えた影響を、南進論・日独伊三国同盟の成立・新体制運動の推進などを通じて考察する。	同　上	同　上
15	太平洋戦争とその結末	日本の「大東亜共栄圏」構想とアメリカの東アジア政策の衝突から、日本の対米英開戦の決定過程を検討し、あわせて日本の東南アジア占領と敗戦が戦後の国際秩序にどのような影響をもたらしたか考察する。	同　上	同　上

＝朝鮮の歴史と文化＝（Ｒ）

〔主任講師：武田幸男（名古屋市立大学教授）〕

全体のねらい

日本に住む私たちにとって、最も近い外国は朝鮮であり、朝鮮は最も深い関係を結んできた隣国であった。これからアジアの一員として、２１世紀の世界に向かって進もうとするとき、改めて朝鮮の歴史と文化を学ぶことの意義は大きいといえよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	朝鮮半島と朝鮮の歴史	朝鮮半島は、長期にわたって今日まで、朝鮮それ独自の歴史と文化をはぐくんできた主な舞台であった。そこで、朝鮮半島の地理上の特色をつかみ、また歴史の大きな流れにそった道筋をたどり、朝鮮の歴史と文化を理解する基盤とする。	武田幸男（名古屋市立大学教授）	武田幸男（名古屋市立大学教授）
2	朝鮮神話の世界	今日まで伝わる朝鮮神話には、檀君神話をはじめとして、高句麗・百済・新羅や加耶諸国（金官加耶・大加耶）の建国神話などがある。個性豊かなこれらの神話をとおして、東アジアにおいて占める朝鮮文化の位置と特徴について考える。	李成市（早稲田大学教授）	李成市（早稲田大学教授）
3	歴史の曙から古代社会へ	朝鮮半島での人類の活動は、数十万年前にさかのぼる。やがて農耕社会の誕生から政治社会の成立を経て、各地の首長層の活動が活発化する。以上、およそ紀元後三世紀までの動向について、考古学の成果をまじえながらたどってみる。	同上	同上
4	古代三国の成立と抗争	四世紀に百済と新羅があいついで登場し、これに高句麗が加わって、朝鮮半島ではこれら三国の抗争が本格的に展開することになる。ここでは、三国の成立から抗争へ、そして新羅による統一にいたる複雑な過程をあとづける。	木村誠（東京都立大学助教授）	木村誠（東京都立大学助教授）
5	統一新羅と渤海	七世紀後半の百済・高句麗の滅亡は、朝鮮史の転換点となる大きな事件であった。それ以後、朝鮮半島から中国東北部にかけ、新羅と渤海が二百年以上にわたって南・北に並立した。この間の動向を概観し、その歴史的意味を考えてみる。	同上	同上
6	高麗時代の政治と社会	十世紀の初め、後三国を統一して高麗が成立し、十四世紀末まで五百年間にわたって朝鮮半島を支配した。中国の制度を導入しながら支配体制を整備した前期から、モンゴルの侵入を契機にさまざまな問題に直面した後期にかけて概観する。	吉田光男（東京大学教授）	吉田光男（東京大学教授）
7	朝鮮王朝前期の政治と社会	十四世紀末、高麗に替わって成立した朝鮮王朝は、朱子学を政治理念として採用し、やがて中央集権的な官僚制度をととのえた。それから十六世紀まで、王朝前期の社会の変化、新しい文化の発展、国際関係の変動などについてのべる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	朝鮮の言語と文字	朝鮮人は自国の言語を記録するために漢字をどう利用したか、漢文をどう読んだか、民族の文学「訓民正音」は世界の文字の中でどう位置づけられるか、朝鮮語はどのような言語かといった問題を考察する。	菅野裕臣(元東京外語大学教授)	菅野裕臣(元東京外語大学教授)
9	朝鮮の宗教と民間信仰	朝鮮王朝時代には儒教(朱子学)が公的な社会理念として受容される一方、仏教は国教の地位を失ったが、土俗的な信仰と結びついて民衆に浸透していった。儒教・仏教・道教・風水地理・巫俗など、民間信仰の特質とその社会的背景を考える。	伊藤亜人(東京大学教授)	伊藤亜人(東京大学教授)
10	朝鮮王朝後期の展開	十六世紀末の豊臣秀吉の侵略をきっかけに、朝鮮王朝は大きく変化し、各方面に新しい様相があらわれた。ここでは、王朝後期の支配体制・政治過程や対外関係の展開、経済の発達と社会の変容、文化の発展などについて概観する	糟谷憲一(一橋大学教授)	糟谷憲一(一橋大学教授)
11	近代への模索	十九世紀後半、朝鮮は世界資本主義の体制に編入され、旧来の支配体制は動揺した。一方で、独立と改革の運動もおこるが、日本は日露戦争を契機に、朝鮮の植民地化をおしすすめた。以上の政治過程を中心に、大院君政権から植民地化までをたどる。	同上	同上
12	日本による植民地支配	植民地となった朝鮮は、米の生産地や工業の進出先として日本に結びつけられた。直ちに民族独立運動が展開されたが、日本は皇民化政策をとり、民族文化を抑圧した。当時の植民地支配が、社会・経済・文化に及ぼした影響について考えてみたい。	橋谷弘(東京経済大学助教授)	橋谷弘(東京経済大学助教授)
13	解放から統一へ	植民地からの解放後、統一国家樹立への動きは挫折し、国家は南・北に分断され、戦火を交えあった。その後、韓国は新興工業経済地域の一員となり、北朝鮮も独自の社会主義建設を進めた。今日に直結する第二次大戦後の歩みについて検討したい。	同上	同上
14	民俗文化と現代生活	朝鮮における衣食住などの生活文化や、信仰儀礼などの民俗文化の特質を概観しながら、近年の都市化や経済発展のもとでの衰退や変容、新しい民衆文化としての再認識や復活、郷土文化としての再創造の動きなどの現状について考える。	伊藤亜人	伊藤亜人
15	朝鮮歴史と国際関係	朝鮮における長い歴史の展開や豊かな文化の発展は、朝鮮半島の内部で完結するものではなかった。アジア大陸や日本列島など、隣接地域の諸民族や諸国家との密接な交流をふまえ、国際的な視野のもとで理解し、展望することがのぞまれる。	武田幸男	武田幸男

＝ 中国の歴史と社会（'９８） ＝ （Ｒ）

（主任講師：斯波義信（国際基督教大学教授）
主任講師：浜口允子（放送大学教授））

全体のねらい

中国の歴史は長い。その歴史は、すべて刻々と変容し生成を重ねてきた生きた社会から生みだされた。本講は、その歴史と社会の全体性をトータルに示し、あわせて、現在の中国問題や、アジアの世紀の中に立つ中国の理解をも深めようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国社会の特徴	中国人性（チャイニーズネス）を考える 風土の特色 人種・言語そして民族 漢字というボンド剤 農業と家族	斯波義信（国際基督教育大学教授）	斯波義信（国際基督教育大学教授）
2	都市国家連合と中華の世界	「中華」世界のおこり 殷・周の都市国家連合 鉄器時代へ 諸子百家 天下、天命、天子	同上	同上
3	統一国家の幕あけ	郡県制への登場 中央の強化 財政ベース 武帝の遺産 後漢の社会	同上	同上
4	地方の時代	遠心トレンド 散村と結社 通俗道教 仏教の吸収 集権の再生	同上	同上
5	隋唐帝国の意義	中華帝国の蘇生（一）－華夷の融合－ 中華帝国の蘇生（二）－集権の再建－ 中華帝国の蘇生（三）－仏教、大運河、科挙 開かれた中国 新しい秩序のはじまり	同上	同上
6	宋型社会文化へのシフト	南方中国の優位 農業と商業 開発地主：形勢戸・士大夫 王安石と朱熹 都市と郷鎮	同上	同上
7	世界との出会い	元朝の遺産（一）征服王朝 元朝の遺産（二）東西世界の直接交渉 東南中国の成長 朱元璋の課題 海上発展の顛末	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	明後半代中国社会	北京遷都のインパクト 銀経済への傾斜 西洋大帆船の登場 郷紳の役割り 明から清へ	斯波義信	斯波義信
9	清朝の光と影	政権の特色（一）伝統保守の清政権 政権の特色（二）その内陸重視 資源と人口 思想の流れ 衰微の前兆	同上	同上
10	近代のはじまり	アヘンと外国 内なる危機 たて直しの担い手たち 日清戦争が顕らかにしたもの 辛亥革命	浜口允子	浜口允子
11	国民国家への模索	共和国建設の方式 第一次大戦とナショナリズムの興起 企業家たちの活動 国民革命の時代 南京国民政府の諸相	同上	同上
12	戦いの20年	満州国 囲剿と長征 日中戦争（一） 日中戦争（二） 戦後の内戦と中華民国の終焉	同上	同上
13	社会主義の選択	中華人民共和国の成立 集団化と公有化 人々の生活 文化大革命 毛沢東時代の特質	同上	同上
14	「現代化」追求の時代	改革と開放 平等主義の放棄 一人っ子政策 一国二制度 90年代：鄧小平時代の諸相	同上	同上
15	20世紀の中国	王朝体制との訣別 国民国家建設の課題 統一とその担い手 富強、民主、そして次の課題 歴史をかえりみる	同上	同上

＝南アジアの歴史と文化＝（ＴＶ）

〔主任講師：辛島　昇（大正大学教授）〕

全体のねらい

インドの文化は決して一つの民族が創り上げたものではなく、異なった民族がその地で邂逅し、相剋する中で創りあげられたものである。その長い過程は当然、世界の他の地域の歴史とも関わってくる。その様な縦の流れと横の関係を、インドという「一つの文化」の発展に収斂させながら理解できるよう解説する。15回のうち、6回は現地ロケによって作成する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	諸民族の来住とインダス文明	インダス文明の担い手であったと考えられるドラヴィダ民族、それよりも古いオーストロ・アジア、シナ・チベット諸民族のインド亜大陸への来住と、かれらがインド文化形成に果たした役割と貢献について考察する。	辛島　昇（大正大学教授）	辛島　昇（大正大学教授）
2	アーリヤ民族の進出	インド文化形成に主役を演じたアーリヤ民族のインドへの進出と彼等が定住して社会を発展させていった様を、文献と考古学の史料を基に明らかにして行く。先住民の隷属化と社会の階層化により、カースト制度の原型も築かれた。	同　上	同　上
3	仏教とマウリヤ朝	紀元前６・５世紀ガンジス川流域に新しい国家が出現する。そのころバラモンと儀礼中心のバラモン教に対する革新宗教として仏教・ジャイナ教が起こった。マガダ国のマウリヤ朝は、新しい統治理念の下にそれを保護した。	同　上	同　上
4	クシャーナ朝と南インドの発展	紀元１・２世紀のころ、インド西北部にはアフガン台地から進出したクシャーナ朝、デカンではサータヴァーハナ朝、半島南部ではタミル民族の諸国家が発展し、国際的交流の中で新しい文化を築き上げていった。	同　上	同　上
5	グプタ朝とヒンドゥー文化	４世紀のガンジス川中流域に発展したグプタ朝の下では、ヒンドゥー文化の華が開いた。仏教などの新興宗教に影響され、先住諸民族の文化をとりいれて自己改革したバラモン教は、ヒンドゥー教として発展し、その後の社会を規定することになる。	同　上	同　上
6	ラージプート諸国家とチョーラ朝	異民族の侵入によるグプタ朝の崩壊後、７世紀にハルシャ・ヴァルダナが北インドを統一するが、その後の北インドはラージプート諸国家の争いの場となる。半島部では９世紀にチョーラ朝が興って、大きく発展する。	同　上	同　上
7	イスラーム政権の出現	アフガニスタンのイスラーム政権ガズニ、ゴール両朝はインドへの侵入を繰り返し、13世紀初頭にはラージプート連合軍が破られ、デリーにイスラーム政権「奴隷王朝」が成立する。そこからインドのイスラーム化が始まる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ムガル帝国の発展とヴィジャヤナガル王国	16世紀にはムガル朝の支配が始まる。第3代アクバル帝の下では、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の融和がはかられ、続くジャハーンギール・シャージャハーン両帝の支配下で、建築、絵画、音楽などに新しい文化の華が開いた。	辛島　昇	辛島　昇
9	マラーターの台頭とムガル帝国の瓦解	アウラングゼーブ帝はデカンをも攻略し、ムガル帝国最大の版図を築き上げたが、帝国の瓦解はそこから始まっていた。それを早めたのは西部デカンにおけるマラーター勢力の台頭であった。	同　上	同　上
10	ヨーロッパ諸勢力の進出	15世紀末ヴァスコ・ダ・ガマの来航以来、インドへのヨーロッパ人の進出が始まった。初めは交易と布教の拡大を求めてのものであったが、地方諸勢力との争いが起こるにつれて、領土の獲得が計られ、植民地支配へと発展する。	同　上	同　上
11	イギリス植民地支配の確立とインド大反乱	イギリス東インド会社は、インドの諸勢力およびフランスに勝って広大な領土を獲得し、それを支配するようになる。18世紀の後半イギリスに起きた産業革命はインドの綿工業に大きな打撃を与えた。蓄積された不満は1857年の「大反乱」となって爆発する。	同　上	同　上
12	国民会議派の出現	イギリスは東インド会社の支配を取り止めて、インドを女王の下に直接統治するようになる。この支配の強化に対抗して、西洋の思想にも影響されたインドの知識人階層は、伝統社会の改革と共に独立を目指して、「インド国民会議」を発足させる。	同　上	同　上
13	ガンディーの登場	1905年の「ベンガル分割令」は独立運動の発展に火をつけることになった。国民会議の過激派はテロ活動に走った。1915年アフリカから戻ったガンディーは、非暴力、不服従の抵抗運動を組織して、独立運動をリードする。	同　上	同　上
14	分離と独立	激しい独立運動の末、第2次世界大戦が終わった1947年8月インドは独立を達成する。しかし、独立はインドとパキスタンの二つの国家に分かれてのものであった。セイロンも1948年に独立し、各国は新しい発展を目指す。	同　上	同　上
15	新しい秩序の模索	独立後の経済発展政策で、インド亜大陸諸国は異なった歩みを見せるが、いづれも、一国の中に多民族を抱える状況は同様で、それが民族紛争を引き起こし、経済発展を阻害している状況が見られる。インドのカースト問題も深刻である。	同　上	同　上

＝イスラーム世界史＝（R）

〔主任講師：後藤　明（東京大学教授）〕

全体のねらい

イスラームが勃興・発展した中東は、世界最古の文明を発生させた地で、またユダヤ教・キリスト教というイスラームの兄弟宗教を育んだ地域である。そのことを意識しながらイスラームを軸に、中東を中心にして、イスラーム世界の歴史を現代まで述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代とイスラーム	19世紀以来、ヨーロッパ文明が世界を覆ったかにみえる。しかし、20世紀の末えの現在、ヨーロッパ文明以外の体系的な文明が滅び去ったのではなく再生していることが露になった。イスラームがその一つである。今日のイスラームの有り様を多角的に述べる。	後藤　明（東京大学教授）	後藤　明（東京大学教授）
2	中東の自然と歴史	イスラームが勃興・発展した中東地域の自然環境の特色と、そこに興った古代文明の特質を、地球規模の人類史を背景に述べる。	同　上	同　上
3	一神教革命	紀元前1千年紀から、中東の文明は地中海全域に普及していった。そこではさまざまな神々が活躍し、人間の知的活動の大半は神に捧げられた。その中でユダヤ教・キリスト教という一神教が発展し、地中海世界を制覇していく過程を、イスラームの前史として述べる。	同　上	同　上
4	アラビアの預言者ムハンマド	地中海世界での一神教の普及をうけて、7世紀にアラビアでイスラームが勃興した。当時のアラビア社会の実情と、そこでイスラームを説いたムハンマドの生涯を述べる。	同　上	同　上
5	アラブの大征服	アラビアの住民であるアラブ人はイスラームを奉じて、中東全域を征服し、巨大な帝国を建設した。帝国建設の過程と変遷を述べ、その世界史的意味を考える。	同　上	同　上
6	イスラームの確立	征服者となったアラブ・ムスリム（イスラーム教徒）は、被支配者であったユダヤ教徒・キリスト教徒と自らを区別して、次第にイスラーム独自の神学・儀礼体系を整えていった。このようにして確立されたイスラームについて述べる。	同　上	同　上
7	シーア派の隆盛	10世紀後半から約100年間、イスラーム世界ではシーア派が優越していた。シーア派の起源からその特色について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	スンナ派の復興	11世紀後半になると、スンナ派がシーア派の勢力を押えて、政治的多数派としての地位を確立する。それと同時にスンナ派のウラマー（イスラーム知識人）を養成するマドラサ（高等学院）の制度が確立してイスラームは固定化していく、その過程を述べる。	後藤　明	後藤　明
9	民衆のイスラーム	イスラーム法学の確立・固定化と並行して、民衆の間では神秘主義教団が根を下していく。そして聖者廟参拝や聖者聖誕祭などが盛んになる。このような民衆の間のイスラームについて述べる。	同　上	同　上
10	モンゴル帝国とマムルーク朝	13世紀のモンゴル人の西征以来、東方イスラーム世界では遊牧民の勢力が卓越するようになった。一方西方イスラーム世界でもベルベル人が政権をつくるようになる。これらの政権の性格とイスラーム世界の有り様について述べる。	同　上	同　上
11	拡大するイスラーム世界	12・3世紀ごろから、インド、東南アジア、黒人アフリカ社会などへ、イスラーム世界は拡大していった。当時の世界の構造的変化を背景に、この拡大について述べる。	同　上	同　上
12	イスラーム世界の大帝国	14世紀から、オスマン帝国のもとでイスラーム世界は、東欧を含めて政治的に統合された。オスマン朝の統治の特徴について述べる。	同　上	同　上
13	イスラーム世界の再編	18世紀からヨーロッパ勢力の世界侵略が始まる。この時期まではイスラームに対抗できる理念はなかった。ここではじめてヨーロッパ文明という対抗物をもった。そのことによってイスラームはイスラームであることを自覚してゆくが、その様子を述べる。	同　上	同　上
14	国民国家とイスラーム	20世紀は、全地球が「国民国家」によって分割された時代である。「国民国家」はそれ独自の理念をもち、自己成長していくが、それはイスラームの理念と矛盾する場合が少なくない。「国民国家」とイスラームの関係について述べる。	同　上	同　上
15	民族運動からイスラーム運動	1979年のイラン・イスラーム革命は、イスラームが現代政治のイデオロギーであることを立証した。革命は湾岸地域の力関係を激変させて、イラン＝イラク戦争と湾岸戦争の引き金となった。現代国際政治とイスラームの関係について述べる。	同　上	同　上

＝古　典　古　代　史＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊藤貞夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

古代ギリシア・ローマの歴史を、自由な市民たちが築き上げた、その独自な社会と文化に焦点を合せつつ辿る。ギリシアとローマを対比しながら、同時に古典古代全体が世界史上に占める位置を明らかにし、その歴史を学ぶ意義を伝えたい。古典古代を受講者にとり身近なものとするよう努めるとともに、先端的な研究状況にも触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古典古代史を学ぶために	序論。ギリシア・ローマと現代とのかかわりを糸口に古典古代を学ぶ意味を考えるとともに、歴史展開の場である地中海周辺地域の風土を眺め、且つ通史的枠組を時期区分により明らかにする。19世紀以来の研究史、史料の伝存状況にも言及する。	伊藤貞夫（放送大学教授）	伊藤貞夫（放送大学教授）
2	混沌の中から	ギリシアの先史時代を扱う。シュリーマン、エヴァンズの発掘成果を紹介するとともに、ヴェントリスによる線文字Ｂ文書の解読の成果を基に小王国分立時代の社会像を再構成する。諸王国崩壊後の混乱の中からポリスが姿を現わす過程にも推論は及ぶ。	同　上	同　上
3	ポリスとは何か	古典古代の本来的特徴は、都市を核とする独立の社会の多数分立にある。その様相を最も純粋な形で具現したのが前８～４世紀のギリシアであった。ポリスと呼ばれるこの種の小国家の外観、住民構成、人的結合の状況を盛期アテネをモデルに再現する。	同　上	同　上
4	民主政への歩み	盛期ポリスで具現された世界史上希有の徹底した直接民主政は、一挙に成立したものではない。ポリスの初期には貴族政が布かれ、それが長い年月をかけ、いくつかの節目をへて民主政に移行する。その過程をアテネとスパルタを例にとり説明する。	同　上	同　上
5	直接民主政のしくみ	前 462年から前 322年にかけてのアテネは、アリストテレス『アテナイ人の国制』のパピルス写本の発見によって、国政運営のしくみが細部にわたり明らかにされている。立法・行政・司法について制度の詳細を述べるとともに、その運用の実態にも言及する。	同　上	同　上
6	ポリス市民の生活	民主政のもとで市民たちはどのような生活を送っていただろうか。家の中で営まれる日常生活、戸外でのスポーツ、家とポリスとを共に支える経済活動などに論及する。ペロポネソス戦争後、市民たちの意識や行動に変化が生ずる点にも留意したい。	同　上	同　上
7	アレクサンドロスと後継者たち	ヘレニズム時代の政治史。前 338年マケドニアのフィリポス２世によるギリシア本土諸ポリスの制覇が成り、アレクサンドロスの東征と後継者たちによるエジプト・シリア両王国の建設により、ギリシア世界は遙か東方に拡がる。ローマの東方進出も見逃せない。	大戸千之（立命館大学教授）	大戸千之（立命館大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ヘレニズムの社会と文化	ヘレニズム時代のいわゆる東西文化融合の実態とはいかなるものか、マケドニア人・ギリシア人の支配は古代オリエントの故地にどれほどの社会的変容をもたらしたかを、西は小アジア・エジプトから東は中央アジアまでを視野に入れて幅広く論究する。	大戸千之	大戸千之
9	都市国家ローマの成り立ち	イタリア半島も本来、都市国家分立の世界であり、初期にはエトルスキの諸市が優勢で、ローマもその影響下にあった。エトルスキ研究の現状を述べるとともに、ローマ貴族の政権奪取に始まる共和政成立史を、僅かな史料を基に再構成する。	平田隆一（東北大学教授）	平田隆一（東北大学教授）
10	共和政から帝政へ	ローマ共和政では貴族の実力と威信が温存され、有力貴族間の角逐と外征とが絡み合い、オクタヴィアヌス（アウグストゥス）による地中海世界統一と、その単独支配すなわち帝政の成立へと帰結する。ギリシアの場合との対比を念頭に、以上の経緯を説明する。	同上	同上
11	ローマ市民の世界	ローマは多くの民族を漸次包摂し、それら諸民族の文化を吸収しつつ発展した。伝存史料に恵まれた共和政末期から帝政初期に焦点を合せ、ローマ人はいかなる社会に生き、いかなる文化を育んだかを、具象的に述べる。	同上	同上
12	「ローマの平和」	五賢帝の時代はローマ帝政の安定期であり、帝国の支配領域が最大規模に達するとともに、属州都市にローマ風の生活様式と古典文化が広くゆきわたる。しかしそれはローマによる諸民族支配の進展をも意味していた。「平和」と「繁栄」の実態を史料に即して考察する。	松本宣郎（東北大学教授）	松本宣郎（東北大学教授）
13	帝国とキリスト教	ギリシア文化と同じく、キリスト教もローマ帝国を媒体として、のちのヨーロッパに伝えられる。この教えが当初、異教徒や帝国側の迫害に遭いながら遂に国教化する、両者の錯雑した関係を、最近の研究成果を踏まえて明らかにする。	同上	同上
14	時代の転換	3世紀以後、帝国の危機的状況は専制君主政を生み、自由な市民たちの世界は閉塞へと向かう。中世社会形成への胎動が始まるが、この古代末期の様相を浮彫りにするとともに、なぜローマ帝国は滅んだかを、諸説を紹介しつつ考える。	同上	同上
15	古典古代の歴史的位置	ギリシアとローマの相違を考えるとともに、両者が世界史の上でどのような位置を占めるかを論ずる。古典古代の特殊な社会と文化が近代ヨーロッパに承け継がれ、本来は対極的位置にありながら、私たちの生活をも半ば規定している事実を指摘したい。	伊藤貞夫	伊藤貞夫

＝ヨーロッパの歴史＝（ＴＶ）

〔主任講師：樺山紘一（東京大学教授）〕

全体のねらい

西ヨーロッパの歴史を中心として、その全体的構造を解説しようとするものである。平成７年度に開設される古典古代の歴史、および将来において開設が期待される近代・現代についての講座との連携を念頭において、中世と近世における西ヨーロッパの歴史を政治・社会・文化など広範な角度から論じようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ヨーロッパの歴史を考える－総論	ヨーロッパ史の舞台となる地域の自然環境や人文的状況を解きあかし、また中世から近世にかけての時代変遷を区分して全体としての見通しを明らかにする。ヨーロッパにおける現地ロケーションを中心に講義する。	樺山紘一（東京大学教授）	樺山紘一（東京大学教授）
2	ゲルマン人諸国家の成立	東西のゴート王国、フランク王国の成立と旧来のローマ文明との連続および断絶を念頭におきつつ、あらたな社会的構造原理の登場について、当時の記述史料にもよりつつ論ずる。	高山博（東京大学助教授）	高山博（東京大学助教授）
3	封建社会の構造	9世紀以後、12・3世紀にかけてのヨーロッパにおける封建制社会の成立をあつかう。戦士集団の構造原理をはじめ、その経済的基礎としての荘園制の形成と変容をも視野にくわえる。	河原温（東京都立大学助教授）	河原温（東京都立大学助教授）
4	都市の出現	古代の伝統をうけた都市が、中世の展開のなかでいかに存続したか、またあらたな環境のなかでいかに新生したかをみとおしながら、中世に固有の自治都市をうみだしてゆく過程を追跡する。	同上	同上
5	国家と王権	封建社会の無政府的状況のなかから、行政上の主権をもった国家と王権が自立してゆく道を、イギリス・フランス・ドイツなど個々の事情を参照し、また比較史的視野をも導入しつつ論ずる。	高山博	高山博
6	中世の地中海世界	北方のヨーロッパにおける封建社会の形成に並行して、十字軍や商業などによる東方イスラム世界などとの接触をとおして、あらたな文明の刺激をうけながら成長するヨーロッパ世界を描く。	同上	同上
7	キリスト教会とその文化	キリスト教の浸透とその成熟過程をみながら、西欧的文化の核心が形成されてゆくありさまを、修道院・大学などの施設の成立と機能をとおして解明する。現地のロケーションによる検証を中心に講義する。	樺山紘一	樺山紘一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中世世界の展開と終焉	14・5世紀以降のヨーロッパ世界が、疾病・凶作さらに戦乱・暴動など困難な状況のなかで、次第に再編成への機軸をみいだし、あらたな時代への原理を作りだしてゆく過程を描写する。	河原　温	河原　温
9	ルネサンスの開花	イタリアに始まるルネサンス運動が、固有のヨーロッパ的内在力と外世界からの衝撃をうけつつ成熟するありさまを、現在まで伝承された文化遺産の解読をとおして、現地ロケーションを中心に講義する。	樺山紘一	樺山紘一
10	ヨーロッパ世界の拡大	インド航路とアメリカ航路の開発によって急速に世界各地での植民活動を開始するヨーロッパ諸国の拡大活動と、それにより受けとることになった外世界の商品や情報のインパクトについて扱う。	高澤紀恵（国際基督教大学準教授）	高澤紀恵（国際基督教大学準教授）
11	絶対王政期の国家Ⅰ イギリス	集権的国家としてのイングランドが16世紀以降、国家としての緊密さと社会的な成熟とを進行させ、ついには2次にわたる革命によっていちはやく近代社会への道筋を発見する道程をたどる。	青木　康（立教大学教授）	青木　康（立教大学教授）
12	絶対王政期の国家Ⅱ フランス	大国フランスの王権が特権的貴族集団の抵抗を相手にしながら、徐々に集権的国家機構を整備し、ついには行政的な絶対権力を構築する経過をたどりつつ、近世社会の本質的な強さと弱さとを明らかにする。	高澤紀恵	高澤紀恵
13	絶対王政期の国家Ⅲ ドイツと東欧	領邦の分裂になやみつづけるドイツと、さらに新生のスラブ国家の樹立に挑ぶ東欧の諸国とが、絶対王政への道を開発する特異な機軸を追求し、中央・東ヨーロッパ世が構築されるありさまを描く。	青木　康	青木　康
14	近代文化への道	キリスト教における改革、科学と哲学における近代啓蒙への道、さらに芸術や学術の諸分野における発展が、西欧の精神的基礎をうみだし、ついには伝統的文化の刷新に到達する過程をたどる。	高澤紀恵	高澤紀恵
15	近世ヨーロッパの終焉	17・8世紀のヨーロッパ世界を全体として概観し、絶対主義国家がその基盤において揺らぎながら、あらたな社会への萌芽を形成してゆく過程を問題とする。フランス大革命の直前までを対象とする。	青木　康	青木　康

＝ヨーロッパと近代世界＝（R）

〔主任講師：川北　稔（大阪大学教授）〕

全体のねらい

現代世界はひとつだといわれる。そのような一体としての世界は、どのようにして成立してきたのか。南北格差はなぜ生じたのか。なぜ、ヨーロッパが中心となり、資本主義が発達したのか。このような問題に、歴史的な観点から解答を与える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界システムという考え方	近代世界を一つの巨大な生き物のように考え、近代の世界史をその展開過程として捉える見方を世界システム論という。この講義の基本的な視角として、世界システム論の要点を解説し、従来の一国史的な見方との違いを説明する。	川北　稔（大阪大学教授）	川北　稔（大阪大学教授）
2	近代への序曲	15世紀のヨーロッパ封建社会は、経済的にも、社会的にも、危機の状態にあった。この危機への対応策として、世界システムの形成が進むことになる。なぜ、ヨーロッパが対外進出に危機の解決策を求めたのかを検討する。	同　上	同　上
3	キリスト教徒と香料を求めて	十字軍と国土回復運動の延長として対外進出に乗り出したポルトガルの事情と、ポルトガル人到来以前のアフリカの状況、アジアの諸交易圏の繁栄ぶりをまじえて検討する。ヨーロッパ経済圏とアジアのそれのつながりかたをみる。	同　上	同　上
4	スペイン帝国の成立と世界システムの確立	スペイン国王カルロス一世による世界帝国形成の企図とその挫折、フェリーペ二世の下でのアメリカ開発の進行を論じ、ラス・カサスの見解をもとに、先住民“クリオージョ（現地生まれの白人）”スペイン人の関係について検討する。	同　上	同　上
5	17世紀の危機	17世紀はヨーロッパをはじめ世界全体が危機的な状況にあったとされ、世界システムは収縮の局面に入った。この時期に英・仏・蘭三国が、スペイン・ポルトガルに挑戦し、オランダがヘゲモニーを確立することを論じる。	同　上	同　上
6	環大西洋経済圏の成立	16世紀末から経済的危機に陥ったイギリスが、北米における植民地形成にむかい、その結果、貿易の爆発的な展開をみたこと（商業革命）を論じる。また、この現象が、イギリスの社会構造を転換させ、産業革命の展開の前提となったことをも論じる。	同　上	同　上
7	ヨーロッパの生活革命	商業革命が展開するにつれて、アジアやアメリカの新奇な商品が流入した。これに伴って、ヨーロッパ人の生活が一変したことを、イギリスにおける綿織物の消費や紅茶の普及を例にとりあげて説明する。こうして近代ヨーロッパ人の生活様式が成立し、生活必需品となったアジア商品の国産化の過程として、工業化が進行することを示唆する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	砂糖王と煙草貴族	植民地に基礎をおく富裕な階級の成立を、プラッシーの戦い以後のインドの状況やカリブ海・北米植民地の事情を中心に検討する。同時に、北米・アジア・ラテンアメリカのヨーロッパとの関わりかたの違いを、それぞれの地域の現況との関係を念頭におきつつ検討する。ヨーロッパ人のアジア観の転換にも言及する。	川北　稔	川北　稔
9	奴隷貿易の展開	トリニダード・トバゴの首相でもあった歴史家エリック・ウィリアムズの生涯とその学説を紹介しながら、イギリスの産業革命が黒人奴隷制度との深い関係のもとに展開したことを論じる。	同　上	同　上
10	だれがアメリカをつくったのか	イギリスから北米植民地への移民の出自を分析し、アメリカ植民地が貧困・犯罪・家庭崩壊などの、本国の社会問題の解決の場とされたことを指摘する。この傾向は、はるかのちの時代まで継続することをも説明する。	同　上	同　上
11	二重革命の時代	産業革命とフランス革命の歴史的意味を、世界システム論の立場から再検討する。産業革命はなぜフランスではなく、イギリスに起こったのか。フランス革命とは、結局、何であったのか。アメリカ独立革命やハイチやラテンアメリカ諸国の独立を含めての環大西洋革命論にも触れる。	同　上	同　上
12	奴隷解放と産業革命	イギリスの工業化や都市化が、世界システムの展開とどのように結びついていたかを、生活史の側面から説明する。砂糖関税が引き下げられ、穀物法が廃止され、東インド会社の特権が制約されていく過程（「自由主義的諸改革」）を、ひろく論じる。	同　上	同　上
13	ポテト飢饉とアメリカへの移民	アイルランドにおけるポテト飢餓を契機に、大量の移民がアメリカに渡ったが、イギリス帝国を中心に19世紀における労働者の地球規模での移動に焦点をあわせる。アメリカやオーストラリアにおける人種主義思想の形成にも言及する。	同　上	同　上
14	パクス・ブリタニカの裏表	イギリスの繁栄の象徴といわれた1851年のロンドン万国博と、1877年のインド帝国式典を象徴的なイヴェントとしてとりあげつつ、大英帝国の繁栄とその陰り、とくにアジア支配のありかたについて論じる。	同　上	同　上
15	ロンドンのカーニヴァル	旧植民地各地からの大量の入移民によって、多民族国家となりつつあるイギリスの現状を中心に、ヨーロッパにおける移民労働者の問題を、生活文化の側面から検討し、あわせて世界システムのゆくえをさぐることで、講義全体のエピローグとする。	同　上	同　上

＝アメリカの歴史＝（ＴＶ）

〔主任講師：紀平英作（京都大学教授）〕

全体のねらい

近代の初頭に、ヨーロッパ人の植民によって様相を一変した「新大陸」社会は、その後、18世紀から20世紀にかけて独自の国家群を形成していった。本コースは、ヨーロッパ人の進出から始まる近代以降の南北アメリカ大陸の歴史を現代まで、概観する。アメリカ合衆国のほかに、中南米諸国にもふれる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新旧両世界の出会い	（1）新大陸「発見」の思想史的な意味、（2）アメリカ大陸の文明（アステカ・インカ）とスペイン人征服者による征服、（3）銀の採掘とヨーロッパ経済への影響、（4）英・仏・蘭のカリブ海地域への進出、についてみる	清水忠重（神戸女学院大学教授）	清水忠重（神戸女学院大学教授）
2	北米大陸の植民と合衆国の独立	（1）最初期の移民の性格、（2）本国と植民地の対立と独立への道、（3）連邦体制の再編（連合規約から合衆国憲法）、（4）対外政策と政治制度の特徴、（5）建国期の領土膨張の思想、についてみる。	同上	同上
3	中南米植民地の独立	（1）砂糖プランテーションと大西洋奴隷貿易、（2）独立運動の背景（「フルボン改革」「ポンバル改革」など）、（3）合衆国の対応（「モンロー主義」）、についてみる。	同上	同上
4	合衆国の西への膨張と民主主義の興隆	（1）政治的民主化の進展、（2）「改革の時代」の諸相、（3）異人種の抑圧と排除（自由黒人の植民とインディアンの強制移住）、（4）大陸国家の実現、についてみる。	同上	同上
5	合衆国における南北対立の激化	（1）交通革命、産業革命の進展と地域利害の対立、（2）ミズーリ論争以後の新領土における線引きの問題、（3）南北の思想的対立（北部の反奴隷制・反黒人の論理と南部の奴隷制擁護論、少数派擁護論）、についてみる。	同上	同上
6	南北戦争と再建の時代	（1）南北戦争の勃発、（2）南北戦争と奴隷解放、（3）南北戦争下のアメリカ合衆国社会、（4）南北戦争と国際社会、（5）南部の再建、（6）南北戦争・再建の時代の意味、についてみる。	横山良（神戸大学教授）	横山良（神戸大学教授）
7	19世紀末の合衆国社会	（1）フロンティアの時代の終幕、（2）技術開発と工業化および「独占」の発生、（3）移民と都市化、（4）「ギルディッド・エイジ」の政治と文化、（5）労働者・農民の抵抗、（6）1890年代の意味、についてみる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	中南米諸国における「近代化」の苦悩	（1）国民国家形成の苦悩、（2）中南米諸国と国際社会、（3）輸入経済の発展と従属化、（4）近代化と都市化、についてみる。	横山　良	横山　良
9	20世紀初頭の合衆国	（1）「帝国」への道、（2）革新主義運動の進展、（3）「新しい社会」の理念と現実、（4）第一次世界大戦と合衆国社会、についてみる。	同　上	同　上
10	中南米諸国と合衆国の影	（1）中南米諸国における民衆の登場と変革の時代、（2）汎米主義と反米主義、（3）メキシコ革命についてみる。	同　上	同　上
11	戦間期の合衆国と第二次世界大戦	（1）「新時代」の到来、（2）大恐慌の嵐、（3）フランクリン・ローズヴェルトの登場、（4）ニューディール政治の展開と帰結、（5）変動する国際政治と合衆国、（6）第二次世界大戦、についてみる。	紀平英作（京都大学教授）	紀平英作（京都大学教授）
12	中南米諸国による自立の試み	（1）戦間期の米州関係、（2）世界恐慌と中南米諸国、（3）メキシコの動向、（4）ブラジル、中南米の動向、（5）第二次世界大戦と中南米諸国、についてみる。	同　上	同　上
13	冷戦開始から1960年代	（1）世界政治の覇者として、（2）冷戦の開始、（3）朝鮮戦争と冷戦の激化、（4）豊かな社会とアメリカ的生活様式、（5）60年代の改革の潮流、についてみる。	同　上	同　上
14	苦悩する中南米諸国	（1）冷戦と中南米諸国、（2）キューバ革命と社会主義への動き、（3）軍事政権の台頭、（4）輸入代替工業化政策の内実とその帰結、（5）失われた10年間、についてみる。	同　上	同　上
15	パクス・アメリカーナの時代をこえて	（1）泥沼化するヴェトナム戦争、（2）世界経済における合衆国の覇権の後退、（3）冷戦の終息、（4）苦悩を抱える合衆国社会、（5）21世紀を間近にして、についてみる。	同　上	同　上

＝芸術の古典と現代＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

芸術とは何か、芸術が分かるとはどういうことか、という問いから始めて、絵画・彫刻・音楽・文学・演劇・映画・建築の各々の本質を探り、それらの代表的な古典作品と現代作品を例に挙げて、具体的にその基本性格を明らかにする。特に私達が現に生きている現代社会との関わりを重視して、現代芸術の意味の解明に力点を置く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	芸術とは何か	1.芸術について考えるということの意義 2.「芸術」という概念の歴史	青山昌文（放送大学助教授）	青山昌文（放送大学助教授）
2	自然美と芸術美	1.自然美の本質・自然美学の歴史 2.自然美と芸術美－その相違性と同一性	同上	同上
3	芸術の分類	1.古典的諸分類－アリストテレス、カインツ等による分類 2.現代的諸分類－スーリオ、竹内敏雄等による分類	同上	同上
4	絵画・平面の古典	1.絵画・平面の基本的性格 2.絵画・平面の古典作品の基本的性格 3.ミケランジェロのシスティナ礼拝堂天井画－トルナイ等によるその美的解明 4.フラ・アンジェリコやシモーネ・マルティーニの『受胎告知』等の作品－ルネサンス美術研究家によるその美的解明 5.シャルダンの静物画－ディドロによるその美的解明	同上	同上
5	絵画・平面の現代	1.絵画・平面の現代作品の基本的性格 2.ウォーホルの『マリリン・モンロー』等の作品－現代の批評家によるその美的解明 3.キーファー『イカルス』等の作品－現代の批評家によるその美的解明 4.森村泰昌の『批評とその愛人』等の作品－現代の批評家によるその美的解明	同上	同上
6	彫刻・立体の古典	1.彫刻・立体の基本的性格 2.彫刻・立体の古典作品の基本的性格 3.ギリシア彫刻『ポセイドーン』等の作品－古代美術研究家によるその美的解明 4.ミケランジェロやドナテッロの『ダビデ』等の作品－トルナイ等によるその美的解明 5.鎌倉彫刻の作品－日本美術研究家によるその美的解明	同上	同上
7	彫刻・立体の現代	1.彫刻・立体の現代作品の基本的性格 2.シーガルの『ゲイ・リベレーション』等の作品－現代の批評家によるその美的解明 3.アバカノヴィッチの『ワルシャワ』等の作品－現代の批評家によるその美的解明 4.キーファーの『革命の女たち』等の作品－現代の批評家によるその美的解明 5.工藤哲巳の『連鎖反応』や土屋公雄の灰作品等の作品－現代の批評家によるその美的解明	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	音楽の古典と現代	1.音楽の基本的性格－古典と現代 2.モーツァルトの『フィガロの結婚』や『レクイエム』等の作品－デント等によるその美的解明 3.リゲティの『レクイエム』等の作品－現代音楽研究家やベンヤミン美学によるその美的解明	青山昌文	青山昌文
9	文学の古典と現代	1.文学の基本的性格－古典と現代－ 2.ホメロスの『イリアス』オデュッセイア』作品－古典文学研究家やプラトンによるその美的解明 3.ジョイスの『ユリシーズ』等の作品－現代文学研究家によるその美的解明	同上	同上
10	演劇の古典と現代	1.演劇の基本的性格－古典と現代－ 2.ソフォクレスの『オイディプス』等の作品－アリストテレスによるその美的解明 3.ブレヒトの『ガリレイの生涯』等の作品－現代演劇研究家によるその美的解明	同上	同上
11	映画・映像の古典と現代	1.映画・映像の基本的性格－古典と現代－ 2.キューブリックの『2001年宇宙の旅』等の作品－映画研究家によるその美的解明 3.河口洋一郎の『GIGALOPOLIS』等の作品－CGアート研究家によるその美的解明	同上	同上
12	建築の古典	1.建築の基本的性格 2.建築の古典作品の基本的性格 3.パルテノン神殿・アファイア神殿－ウィトルウィウスやギリシア美術・建築研究家によるその美的解明 4.シャルトル大聖堂－ゴシック美術・建築研究家によるその美的解明	同上	同上
13	建築の現代	1.建築の現代作品の基本的性格 2.ボフィルのアブラクサス館－現代建築研究家によるその美的解明 3.ヤノブスキーの『ピカソ・アリーナ』－現代建築研究家によるその美的解明 4.安藤忠雄の『水の教会』－現代建築研究家によるその美的解明	同上	同上
14	古典芸術と社会	1.芸術と社会の基本的関係 2.古典芸術と社会の基本的関係 3.ミケランジェロの『ダビデ』とルネサンスのフィレンツェ社会－トルナイ等による分析	同上	同上
15	現代芸術と社会	1.現代芸術と社会の基本的関係 2.クリストの『ライヒスターク・プロジェクト』とベルリン・ライヒスタークの現代史－クリスト自身等による証言と分析	同上	同上

＝美術史と美術理論＝（ＴＶ）

〔主任講師：木村三郎（日本大学教授）〕

全体のねらい

1．西洋17世紀絵画の見方
2．美術史学史の紹介
3．わが国にある西洋17世紀絵画の紹介
4．リサーチ・ガイド

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	美術史を学ぶ楽しみ	「受胎告知」を描いた２点の作品を並列して見せ、西洋美術史において代表的な作品の比較を行なう。そこから、受講生の感覚による自主的な判断を尊重しつつ、帰納的方法で美術作品の美しさの秘密を考える。一方で、美術史通史としての、副読本の指定を行なう。大原美術館の作品にも触れる。	木村三郎（日本大学教授）	木村三郎（日本大学教授）
2	画家伝から見た絵画	ヴァザーリ、ベローリの二人の代表的な画家伝作者にしぼって、16～17世紀の初期資料を紹介する。実証主義美術史にも触れる。	同　上	同　上
3	情念表現から見た絵画	プッサン作《マナの収集》（ルーヴル美術館）とティントレット《マナの収集》（ヴェネツイア・・スクオーラ・サン・ロッコ）の比較をしながら、17世紀における、絵画のなかの情念表現のありかたを紹介する。「バロック」という概念について、その成立についても触れる。	同　上	同　上
4	時代考証から見た絵画	絵画作品の制作過程を作品に即しつつ分析する。古代美術の17世紀美術への影響を論じる。また、この時代重要であったデコールム理論について述べる。	同　上	同　上
5	様式から見た絵画	ラファエロとルーベンスが描いた、同主題の作品の比較をしながら、ヴェルフリンを中心として、バロックの概念の整理を行ないつつ、その著「美術史の基礎概念」を学ぶ。	同　上	同　上
6	図像学から見た絵画(1)	神話主題、宗教主題の作品を取り上げ、そこに描き込まれた「典拠」「アトリビュート（持物）」を中心に説明し、イコノグラフィー（図像学）の基礎を学ぶ。	同　上	同　上
7	図像学から見た絵画(2)	寓意画を取り上げ、抽象的な観念を表す擬人像を手がかりに、一層複雑な意味の担った絵画のありかたを考える。国立西洋美術館を訪れる。イコノロジー（図像解釈学）のありかたにも触れる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	風景画を見る	西洋画のなかで、風景画がジャンルとして確立するのが、17世紀である。わが国にある作品にも触れながら、その展開を考える。19世紀の印象派風景への影響にも触れる。	木村三郎	木村三郎
9	文化財保存科学から見た絵画	美術作品を、素材と側面から考える。文化財の修復の視点から、17世紀絵画の事情を認識し、ものそのものとしての作品の歴史的なありかたを分析する。	同上	同上
10	バロック建築とその展開	印刷教材では、絵画とコレクターの関係を論じているが、映像では、「バロック建築とその展開」を扱いたいと考えている。ローマにおけるバロック建築誕生の過程を紹介し、一方では、中央ヨーロッパにおける、たとえば、ドイツのアザム兄弟の建築を初めとした、その代表作の展開を跡づけたいと考えている。	同上	同上
11	美術の東西交流(1)……西洋から日本へ	17世紀は、東西交流が始まった時代であり、美術におけるその事例を学ぶ。イエズス会の宗教美術上の意味、版画の影響などを確認し、わが国の洋風画への影響を学ぶ。特にフランシスコ・ザビエルの図像問題を中心にその関係を考える。	同上	同上
12	美術の東西交流(2)……日本から西洋へ	この時代は、前回の講義とは逆に、東洋から、西洋美術に伝わった美術的、文化的な関係を論じる。イエズス会の問題、シノワズリー、ジャポニスムの問題などに焦点をあてる。	同上	同上
13	美術研究旅行の方法	美術史研究で必要な初歩の写真撮影の方法を、具体的に学ぶ。日本美術を対象に選んで、研究に必要な基礎的な技術を確認する。	同上	同上
14	展覧会カタログの意味	展覧会会場で、近年特に入手しやすい展覧会カタログの意味とその歴史的な背景、また学術的な意味を考える。	同上	同上
15	美術情報を探す	印刷教材に執筆された多くの参考文献を、どのように入手し、学ぶか、という問題を、実際に美術館図書室で研究するという視点から確認する。図書館学的な視点から分析する。一方で、アート・ドキュメンテーションの現場も、ヨーロッパの実例から紹介したい。	同上	同上

＝西洋音楽の歴史＝（ＴＶ）

〔主任講師：笠原　潔（放送大学助教授）〕

全体のねらい
西洋音楽の歴史を辿りながら、その背景となった西洋文化全般について学ぶ。前半では、西洋音楽文化の基盤となった音楽観や諸制度、各時代の音楽に影響を及ぼした政治・社会状況の解明に重点を置き、後半では近代の代表的な作曲家を取り上げて、その表現法を具体的な作品に即して分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	西洋音楽の時代区分と様式	西洋音楽史の流れを追いながら、各時代の音楽の様式的特徴を明らかにする。	笠原　潔（放送大学助教授）	笠原　潔（放送大学助教授）
2	古代ギリシアの音楽	西洋の音学観の根底にある古代ギリシアの音楽観を、「ムーシケー」という概念の分析を中心に概観する。	同　上	同　上
3	ユダヤ教からキリスト教へ	キリスト教が、母体となったユダヤ教からどのような音楽上の諸制度を継承し、それをどのように発展させて西洋音楽の枠組みとなる諸制度を構築していったかを明らかにする。	同　上	同　上
4	キリスト教の聖歌	西洋中世前半の時代を彩るローマ・カトリック教会聖歌の成立と展開の歴史を追いながら、フランク王国とローマ教会の関係、修道院の果たした役割などの点を明らかにする。	同　上	同　上
5	世俗音楽の隆盛	西洋中世後半の時代における世俗音楽隆盛の様子を紹介しながら、その背景にある西洋文化とアラビア文化の接触、都市文化の繁栄、恋愛観の変化、など当時の西欧文化の新動向を紹介する。	同　上	同　上
6	十四世紀からルネサンスへ	十四世紀から初期ルネサンス時代に至る作曲様式の変化を追いながら、こうした変化をもたらした当時の西洋の政治状況を紹介する。	同　上	同　上
7	盛期ルネサンス	十六世紀の盛期ルネサンス時代の西洋音楽の様相を紹介するとともに、宗教改革が音楽に投げかけた波紋についても論ずる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	南蛮音楽到来	前八章のまとめとして、キリシタン時代の洋楽流入の問題を取り上げ、当時の日欧交渉の様子を紹介する他、イエズス会文書などの日本側資料を通じてのルネサンス音楽研究の可能性を探る。	笠原　潔	笠原　潔
9	初期バロック時代	オペラの誕生など、初期バロック時代の音楽活動の中から生まれ、その後の時代に受け継がれていった音楽語法、楽曲形式について解説するほか、音律の問題についても触れる。	同　上	同　上
10	J.S.バッハの音楽表現	J.S.バッハの『マタイ受難曲』を取り上げ、その表現技法を紹介する。	同　上	同　上
11	W.A.モーツァルト	W.A.モーツァルトのオペラの中のアリアや重唱を教材に、彼の表現技法を紹介する。	同　上	同　上
12	ベートーヴェンとその時代	ベートーヴェンの生涯をバッハやモーツァルトの生涯と比較して、三者が生きた十八世紀から十九世紀前半にかけて、音楽を取り巻く状況に大きく変化が生じたことを示すとともに、音楽の資本主義化の進捗に伴う楽器の変化の様子を紹介する。	同　上	同　上
13	シューベルトの『冬の旅』	シューベルトの歌曲集『冬の旅』を題材に、この歌曲集の背景にある西欧の社会構造の民俗文化を紹介するとともに、この歌曲集の描いた実存世界の様相を解明する。	同　上	同　上
14	ヴァーグナーから現代へ	ロマン派から現代に至る西洋音楽史の流れを追いながら、調性が崩壊し、新たな音楽語法が生まれてきた経過を紹介する。	同　上	同　上
15	楽譜の問題	現在の五線記譜法に至る西洋の記譜法の歴史を辿りながら、記譜体系は固定したものではなく、時代とともに変化してきたものであることに注意を喚起する。	同　上	同　上

＝日本音楽の基礎概念＝（Ｒ）

〔主任講師：竹内道敬（元国立音楽大学教授）〕

全体のねらい

日本音楽はつまらない、わからない、というので、片隅に追いやられている。そんなことはない。その基礎的な考え方を探ってみると、面白いことがたくさんある音楽で、日本とはなにかということも見えてくるのである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	日本音楽と楽器(1)	我が国は稀にみる高温多湿の国である。そこでは金属楽器は錆びてしまう。楽器の材料も呼吸する必要があったから、木、竹、革などになった。 したがって楽器は生き物であり、生きていなければならない。案外寿命は短いが、日本の楽器は作り替えることで生き続ける。今一番演奏しやすい楽器が名器なのである。	竹内道敬（元国立音楽大学教授）	竹内道敬（元国立音楽大学教授）
2	日本音楽と楽器(2)	三味線音楽には、実にさまざまな種類がある。これは音色を追求してきた結果である。それにはどんな音色があるか、どこを変えてきたのか。上方と江戸には大きな差がある。	同上	同上
3	楽器演奏者と発声	楽器演奏者が声を出すのは、我が国独特の習慣である。なぜ声を出すのか。なぜ邪魔とは感じないのか。あれでも音楽といえるのだろうか。考えてみよう。	同上	同上
4	流派と特色	日本音楽もいいけれども、なにを歌っているのかわからないという意見がある。なぜわからないのか。日本語の特色から考え直してみよう。	同上	同上
5	発声のきまり	同じように、歌の語尾をふるわせるからわからないという。なぜふるわせるのか。理由はあるはずである。	同上	同上
6	日本音楽と指揮者	日本音楽には、西洋音楽のような指揮者はいない。聴衆に背をむけている演奏家はいない。全員お客のほうを向いている。でも揃っているのはなぜだろうか。	同上	同上
7	日本音楽と形式	苦しそうな歌を聞くことがある。男が女の声の真似をする。パート分けをすれば楽なのに、そうしないのはなぜか。また声楽四部合唱曲のような形式は、なぜ生まれなかったのか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	調弦・調律	三味線には本調子、二上り、三下りという調弦がある。演奏途中で変更する。箏曲でも琴柱を演奏中に動かす。こんな忙しい演奏は日本だけらしい。	竹内道敬	竹内道敬
9	入門曲・練習	日本音楽にはピアノのバイエルのような練習曲がない。初心者が習う曲をききながら、「学ぶ」とはなにか。その理由を考える。	同上	同上
10	演奏の姿勢	正座して演奏するのは、現代では（たぶん昔も）苦痛である。それはいつごろ誰がきめたのか。なぜ変えないのか。無理な姿勢でいい演奏はできないはずだが。	同上	同上
11	流儀の区別	能には五流ある。箏曲も生田と山田というおおきな流派がある。三味線音楽には長唄、常磐津、清元、義太夫、新内などの流派がある。なぜこの流派が生まれたのだろうか。どうしたら聞き分けられるのだろうか。	同上	同上
12	名人・上手	録音技術のなかった時代でも、一世を風靡した美声家、名人上手がいた。昔の人はどんな声を美声と感じたか。想像してみるのも楽しいことだろう。	同上	同上
13	リズム・メロディー・テンポ	日本音楽の基本は二拍子である。なぜワルツは生まれなかったのだろう。またなぜすてきなメロディーがなかったのだろう。そしてなぜあんなにもゆっくりしているのだろう。	同上	同上
14	伝統芸能	伝統音楽の危機が叫ばれている。後継者がいないという。なぜいないのか。ものの考え方が変わったのだろうか。なぜ魅力がなくなったのだろうか。音楽だけではなく、伝統芸能とはなにかを考え、その解決方法を探ってみたい。	同上	同上
15	まとめ・日本音楽の特色	雅楽は1300年以上、能は600年以上、箏曲、三味線は300年以上の伝統がある。それらを通していえることは、伝承と創造との巧みなバランスである。それらを考えながら、日本音楽の将来のあり方を見極めてみよう。	同上	同上

＝民族音楽学理論＝（Ｒ）

〔主任講師：徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

民族音楽学は、人間と音楽の関係を総合的に研究する学問である。すべての音楽は、人間の所産であり、人間は必ず、何処か一つあるいは複数の民族に所属しているので、その所産である音楽はすべて民族的なものである。特定の音楽を「民族音楽」と呼ぶのは、差別の表現と同じである。したがって、民族音楽学の対象は、すべての音楽であり、ただ、その方法が音楽学の他の分野（例えば、西洋音楽史学）と異なるだけである。今回の講義では、現代の最先端の民族音楽学の理論を扱うことによって、音楽学全体への理解も深められるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	民族音楽学の発想の歴史	人間と音楽の関係、異文化理解の方法、比較音楽学の成立と民俗音楽への関心。	徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）	徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）
2	民族音楽学の範囲と方法	現代の民族音楽学のモデルの提示と、その後の各章で述べる概念の関係を説明する。	同上	同上
3	個人にとっての音楽	個人にとっての音楽の意義を、主として、認知と表現、好みの観点から、聴覚以外の感覚との関連、そして、個人の音楽的発達を扱う。最終的には、人間にとっての仲間意識を論じて、次の章へ進む。	同上	同上
4	社会的・文化的アイデンティティー	集団にとっての音楽の問題が中心の課題である。宗教的活動での音楽や、民族的なアイデンティティーとしての音楽の研究を通して、文化的・民族的少数者や移民の音楽活動の問題に入る。 ・対談：南晃子（福井大学）、現地録音：スコットランドのトラヴェラーの歌。	同上	同上
5	音楽実践	音楽を演奏することの意義とその諸形態。フェスティヴァルや観光での音楽。国のような大規模集団における音楽実践の意味。 ・対談：金子敦子（名古屋芸術大学講師） 協力者：小池淳一（弘前大学）、田尻隆介（宮崎県高千穂町教育委員会）	同上	同上
6	音楽と身体	音楽演奏の手段としての声と身体の意義を、比較文化的に考察。この中には音楽と密接な関係をもつ舞踊を含める。 ・対談：大谷紀美子（高知大学教授）、橋本聖園（東大寺）	同上	同上
7	音楽における人とものとのインターフェイス	音楽演奏の手段としての楽器を、ものとしての構造の面と、それに対応する人間の心構え・技法の双方から扱う。出演は米川裕枝（地歌・箏曲家）	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	音の運用規則	音楽での音の関係の研究。具体的には、箏の調弦、三味線の調子、音階理論、線の組み合わせとしての音楽を扱う。	徳丸吉彦	徳丸吉彦
9	言語テクストと音楽	音楽での声の使用は、言語の使用一般と密接な関係にあり、また、多くの音楽が言葉を用いているので、この問題を特別に扱っておく必要がある。	同上	同上
10	伝承	音楽における伝承を口頭性と楽譜による書記性の両面から扱う。また、伝承の継続や復活の問題をヴェトナムの雅楽の復興運動を例にして論じる。 ・対談：山口修（大阪大学）	同上	同上
11	創造と変化	音楽における様式のもつ意義とそれからの逸脱による創造の問題をあつかう。即興演奏もこの枠で行なう。 ・対談：近藤譲（エリザベート音楽大学）	同上	同上
12	音楽記号学	音楽における表象と音楽おける間テキスト性を扱う。人間が音楽をどのように概念化しているか、の研究である。	同上	同上
13	人間の歴史における音楽	歴史的民族音楽学を扱い、古い音楽の復活上演、歴史的な正当性、伝承の担い手の間の男女の差異を研究する。 ・対談：月渓恒子（大阪芸術大学）	同上	同上
14	美学・解釈学と民族音楽学	民族音楽学の立場からの音楽美学の再検討。人はなぜ音楽を必要とするか、また音楽とは何か、という問いが課題である。	同上	同上
15	新しい民族音楽学理論をめざして	結論的な総括。現代社会における多様性の容認、音楽の国際貢献、日本における学校教育の異常さ、文化触変の意義、普遍性と価値の問題等が論じられる。 ・対談：卜田隆嗣（島根大学助教授）	同上	同上

＝舞　台　芸　術　論＝（ＴＶ）

〔主任講師：渡邊守章（放送大学教授）〕

全体のねらい

○現代において「舞台芸術」すなわち広い意味での演劇を考える場合に、具体的にどのような問題があるのか。可能な限り、具体的で意味のある映像資料を用いて、舞台芸術の最も重要な様相を、グローバルに理解する。○歴史的観点は重要だが、あくまでも現代の問題意識に照らして考える。○概説的に断片的知識を羅列するのではなく、生きた表現としての舞台芸術を考える。○現代の日本で行われているものだけではなく、舞台芸術の多様性を、世界的な視野で理解する。○積極的に制作等の現場の仕事に加わる人にも、基本的な教養として役に立つ授業にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	演劇この多様なるもの	演劇ならびに広く舞台芸術について考えようとする場合、どのような問いを、どのように立てるべきか。演劇の基本をなす「四要素」、即ち「劇場」「演者」「演じられるもの」「観客」について、歴史的な記憶と現代の状況を踏まえて、問題の所在を明らかにする。	渡邊守章（放送大学教授）	渡邊守章（放送大学教授）
2	劇場の系譜	演じる者と見る者が同じ場に集まり、その空間を共有することは、演劇の基本である。その場を劇場と呼ぶならば、劇場の成立はどのような系譜をもち、またその構造はどのような特性を担っていたのか。古代ギリシアから近代ヨーロッパまで、また日本の芸能の場も視野に入れつつ、劇場の構造と機能と役割を考えてみる。	同上	同上
3	劇場とその機構 －システムとしての劇場	劇場は単なる建築物ではない。舞台芸術創造のための有機的作業の場である。オペラ劇場を始めとするヨーロッパの劇場、日本の歌舞伎の劇場、等を例に、舞台空間の具体的な様相、舞台のテクノロジーといったハード面と、舞台と不可分の諸機構、舞台を作るスタッフといったソフト面まで、具体的に検証してみる。	同上	同上
4	演じる者の系譜	演じる者には、自分とは別の存在になって虚構の行動を演じる「再現－代行－表象」(representation)の構造をもつものと、特殊な身体的資質や特殊技能の洗練を見せる「パフォーマンス」(performance) の二つの系譜がある。「ドラマ」と「ショウ」あるいは猿楽と田楽の対比である。俳優の役割と作業についての基本的な分析を試みる。	同上	同上
5	稽古という作業	演劇創造は集団の作業である。俳優の訓練から、演出家の作品まで、そこには様々な作業のレベルがある。具体的な作品（ジュネの『女中たち』）読解を例に取って、制作の打合せ、顔寄せ、本読み、立ち稽古、スタッフの打合せ、舞台稽古、本番と、作品が舞台に立ち上がっていくプロセスを追ってみる。	同上	同上
6	劇作の仕組み	演劇にテクストがあるとは限らないが、歴史的に見て、優れたテクストの出現は演劇に大きな飛躍をもたらしている。それは身体的伝承と共存して、演劇の記憶を複雑なものにしている。「劇作術」の基本をなす「人物」「筋＝劇的物語」「場あるいは時空的な広がり」について、西洋演劇と日本演劇の典型的な例を取り上げて考察する。	同上	同上
7	悲劇と運命	西洋演劇において「悲劇」が「劇的なるもの」の典型と見なされた歴史を振り返り、「神々と運命」「情念の宿命」「人間の条件の劇」といった悲劇の基本的な様相を考察する。ギリシア悲劇、ローマ悲劇、シェークスピア、ラシーヌの悲劇について、具体例を分析し、あわせて能のある局面を考察しつつ、「劇」と「演劇」の原点を問う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	喜劇と道化	「悲劇」と対になる「喜劇」について、その構造と機能を分析する。「反－悲劇」としての喜劇の力を、社会的な風刺からカーニヴァル的な呪力まで、「道化」と「笑い」に焦点を当てて考察する。分析の対象は、主としてモリエールの喜劇と日本の狂言である。	渡邊守章	渡邊守章
9	近代劇とその対部－前衛の出現	西洋19世紀中葉に成立する「近代劇」は、現在我々が演劇という言葉で想像する表現の重要な核をなしている。従って、その実態を分析しておくことは、現代演劇の問題を考える上にも不可避である。「同時代風俗劇」の地平を明らかにしつつ、その「アンチ」である二十世紀の前衛の出現を、「演出家」の誕生と「メタシアター」の仕組みに焦点を当てて分析する。	同上	同上
10	東洋演劇の幻惑(1)	19世紀の末以来、近代の西洋文明を超えようとする西欧の知識人や芸術家のなかには、東洋に人類の文化の始原を、求めようとする人々がいた。舞台芸術の領域でも、1889年のパリ万国博覧会を機に、クローデルのような劇詩人が東洋の伝統演劇に強い刺激を受け、20世紀における舞台芸術の変革の一つのベクトルを作るようになる。1回目は大正年間に大使として滞在したクローデルが、日本の伝統演劇（舞楽・能・文楽・歌舞伎）をどのように受け取ったかを、その日本文化論『朝日のなかの黒い鳥』や『日記』から再構成しつつ分析する。	同上	同上
11	東洋演劇の幻惑(2)	20世紀ヨーロッパの演劇的前衛と東洋演劇との関わりにおいて、アルトーとブレヒトの名は忘れることが出来ない特にアルートは、バリ島の舞踊劇に強烈な印象を受けて、「残酷演劇」のヴィジョンを明らかにした。その主張は、1950年代の「不条理劇」と、特に60年代の「肉体の演劇」に強い影響力をもったから、アルトーによるバリ島の演劇のヴィジョンを、実際の舞台に照らして分析してみる。またアルトーとは対極にあったブレヒトが日本や中国の伝統演劇から学んだものを、構造主義の批評家ロラン・バルトの日本文化論を照合しつつ考察する。	同上	同上
12	前衛劇の地平	ブレヒトとアルトーが、20世紀演劇の変革において果たした役割を考察し、第2次世界大戦後の二つの前衛劇、つまり「不条理劇」――イヨネスコ、ベケット、アダモフ、それにジュネも加える――と「68年型演劇」――フランスの「太陽劇団」を中心に、日本のいわゆる「アングラ演劇」や「暗黒舞踏」も含める――とを具体的な例によって分析する。更に、ヨーロッパ演劇の新しい方向として極めて重要な「古典の読み直し」の作業を、プランション演出『タルチュフ』を例に考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	理論と実践－世阿弥の思考	14世紀から15世紀にかけて猿楽の能を大成した世阿弥は、俳優・座長・演出家・劇作家・振付家・作曲家という、まさにトータルな演劇人であったが、その上に、能という舞台芸術をその多様な局面において考え抜いた「伝書」によって、他に類例を見ない優れた理論家であった。現代の舞台芸術の問題意識から読み直しても、なお驚くべき理論的な言説であるその伝書を、演劇論として読み、その問題形成の具体例を分析してみる。	同上	同上
14	オペラとバレエ――新しいキマイラ	欧米では、狭い意味での演劇にオペラやバレエを入れない伝統がある。しかし、1970年代からのオペラとバレエの隆盛は、この発想の見直しを求めている。それはマラルメの予言したところでもあった。ルネッサンス以降のオペラとバレエの例譜を概観しつつ、現代おけるその流行の根拠を、舞台芸術の観点から考えてみる。	同上	同上
15	舞台芸術論の現在	20世紀後半の舞台芸術の変革を見ると、その大きなベクトルは、19世紀末にフランスの詩人ステファヌ・マラルメによって予言されていたことが分かる。その「未来の群衆的祝祭演劇」のパラダイムをヒントに、現代おけるお舞台芸術論の問題を整理してみる。また、現在の国際化の地平において、日本の伝統と現代」の問題や「国際交流」の問題はどのようなものであるのか、それを具体的な事例について考えてみる。最後に、再び「システムとしての劇場」について、ヨーロッパの代表的な劇場総監査の意見を聞く。	同上	同上

＝演　劇　を　読　む＝（ＴＶ）

主任講師：渡邊守章（放送大学教授）
主任講師：渡辺　保（淑徳大学教授）
主任講師：浅田　彰（京都大学助教授）

全体のねらい

演劇を読む操作には、「舞台を読む」ことと「テクスト〔戯曲〕を立てて読む」ことの二つの方向がある。どのような演劇でも、舞台の様々な表現は、ある＜決まり＝コード＞に従って組織されている。しかし、その＜決まり＝コード＞が厳密で、しかもかなり長い歴史的な時間にわたって伝承されている舞台芸術と、そうではなく、戯曲というテクストが常に出発点にあって、舞台の具体的な形象は時代によって変わるものとがある。大雑把に言って、日本の伝統演劇は前者であり、西洋演劇は後者である。前者は我々日本人の劇場的・舞台的想像力について、教えてくれることが多いだろう。後者の場合、戯曲を具体的に「立てて読む」作業を分析することにより、舞台芸術としての一般コードと、その作品固有のコードとの弁証法的な働きを見ることが出来よう。いずれの場合も「演劇を読む」ことは、舞台表現とテクストの間の創造的な往復運動の実践である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	演劇を読むとは	演劇を読むとはどのような作業か。「舞台を読む」は、日本の伝統演劇の具体的な例（歌舞伎と能）によって、意味的に組織された舞台空間の分析を、また「テクストを立てて読む」は、戯曲における「ト書き」の問題に焦点を当てて、近代劇と古典劇の新演出の例を分析する。	渡邊守章（放送大学教授）	渡邊守章（放送大学教授）
2	引用のゲーム『かもめ』／『ハムレット』	日本でも新劇のレパートリーとしてよく知られているチエホフ作『かもめ』を取り上げ、戯曲のテクストとそれを取り巻くテクスト（下敷きとしての『ハムレット』とその変形の仕方、演出と解釈、メタシアターの諸相）について考える。	同　上	同　上
3	歴史の劇作術ミュッセ作『ロレンザッチョ』の場合	フランス・ロマン派の詩人アルフレッド・ド・ミュッセの長編歴史政治劇『ロレンザッチョ』は、19世紀ヨーロッパの戯曲のなかでも、20世紀に最も評価の高い作品である。この戯曲の本邦初演の舞台を素材に、「シュークスピア・モデル」（人物と構成、４つの筋、演劇における歴史の語り方）、権力と幻想の＜装置＞（「壁」と「照明」）、同化と異化などの問題を考える。	同　上	同　上
4	ごっこ芝居、あるいは『女中たち』の演技	現代フランスの前衛戯曲のうちで、現在でも世界中で最も上演頻度の高いジャン・ジュネの『女中たち』の舞台（本木雅弘主演）を取り上げ、舞台表現の分析における記号論の手法（パラダイム変奏）、演技と情念と身体の関係、イメージとドラマ、ジェンダーの演劇等の問題を考える。	同　上	同　上
5	能の詩法 (1) 叙景と憑依	２回にわたって、能における舞台の幻想と言語の関係を考える。１回目は、元来田楽系の能とされる『松風』と世阿弥作の『井筒』を取り上げ、「叙景」の意味、衣装による「憑依」、「詰めどころ」の設定（「松に取りつく」／「井戸をのぞく」）を、二作について対比的に分析する。	同　上	同　上
6	能の詩法 (2) 風景の装置	前回に続き、『松風』と世阿弥作の『融』の対比を中心に、演劇的な詩を保証する「風景」の作用を考える。『融』における２段構成の意味、「風景」と「汐汲」、風景の呪力と庭園装置、ならびに詞章のパラダイム変奏の分析が中心である。	同　上	同　上
7	歌舞伎の論理	『積恋雪関扉』は、多くの歌舞伎のなかでも最も「歌舞伎らしい」演目である。しかし「歌舞伎らしい」というのはどういうことか。「歌舞伎らしさ」の精神の＜かたち＞と、その＜かたち＞のもつ論理を見ていく。	渡辺　保（淑徳大学教授）	渡辺　保（淑徳大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	踊りの世界	日本の古典舞踊の本質とは何か。そしてそれを支えてきた「芸」とは何か。歌舞伎舞踊の代表作である。『京鹿子娘道成寺』を踊る中村歌右衛門を分析する。	渡辺　保（淑徳大学教授）	渡辺　保（淑徳大学教授）
9	歌舞伎と文楽	『仮名手本忠臣蔵』は義太夫狂言の典型であり、最も上演頻度が高く、根強い人気をもつ。その構造はホーム・ドラマであり、士農工商のうち、士農商の三つの階級にわたって、ほとんど社会の上層から下層にまで及ぶ。文楽と歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』を通して、義太夫狂言の世界を考える。	同　上	同　上
10	世話物の技法	『三人吉三廓初買』は河竹黙阿弥の代表作である。それは単なる因果話しではない。そこに隠された時代の実相、そこに潜む人間の歌には、私たちの官能を揺さぶる普遍的な何物かがある。『三人吉三』を通して、世話物の世界を見ていく。	同　上	同　上
11	演劇的女体～女形の文法～	舞台の上で男性が女性を演じるとはどういうことなのか。京劇における女形＝男旦（歌舞劇における虚構の女体）の例を取り上げ、それを能における女体（女体の美的観念）、歌舞伎における女形（様式化された女）、新派における女形（芸者という典型）などとを対比しつつ、現代の舞台芸術における「虚構の女体」やジェンダーの問題も視野に入れ、分析する。	渡邊守章	渡邊守章
12	オペラのアルケオロジー	オペラは19世紀ヨーロッパで完成を見た舞台芸術の典型である。バロック時代のオペラに遡りつつ、西洋型音楽劇を成立させている論理と美学を考える。	浅田　彰（京都大学助教授）	浅田　彰（京都大学助教授）
13	総合芸術としての楽劇	20世紀後半には、19世紀型オペラの様々な新しい演出・演奏がなされて今日に至っている。「全体芸術」を目指したワーグナーの楽劇以降、全体演劇としてのオペラは、現代においてどのように生きつづけているのか。舞台芸術における音楽と舞台の関係を分析する。	同　上	同　上
14	クラシック・バレエとその解体	いわゆる「クラシック・バレエ」は、19世紀ヨーロッパのロマン派の運動と深い関係を持って生まれた。踊りと舞台の幻想の関わりを、クラシック・バレエを中心に考えてみる。	同　上	同　上
15	現代における舞踊芸術	20世紀は舞踊の世紀だとも言われる。舞台芸術として、舞踊がこれほど重要な位置を占めたことは、歴史的にも珍しいのではないかと思われる。現代の舞踊における様々な実験を展望しつつ、舞台における身体性の問題を考える。	同　上	同　上

＝文　化　人　類　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：祖父江孝男（国立民族学博物館名誉教授）
主任講師：原尻　英樹（放　送　大　学　助　教　授）〕

全体のねらい

文化人類学の考え方を学説史を中心に論じる。学説史といっても主要学説を平板に並べたものではなく、各学説の生まれた歴史的、社会的、政治的文脈を考察しながら、諸理論による文化人類学研究の意味を解釈している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化人類学とはどのような学問か？	アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストラリア、フランス等々におけるその成り立ちについて、比較の観点から学説史を中心に論じる。また、欧米各国の文化人類学の日本における受容についても触れる。	原尻英樹（放送大学助教授）	祖父江孝男（国立民族学博物館名誉教授）
2	進化主義と伝播主義	進化主義と伝播主義についてケーススタディーを例示しながら、各理論の持つ学説史的意義について論じる。	同　上	原尻英樹（放送大学助教授）
3	近代人類学の夜明け：(1)マリノフスキーをめぐって	マリノフスキーが残した人類学的な業績を紹介し、彼の具体例な民族誌の記述と分析について理解を深める。	同　上	同　上
4	近代人類学の夜明け：(2)ラドクリフ＝ブラウンとその弟子たち	ラドクリフ＝ブラウンとその弟子たちの具体的な分析を概観し、構造主義登場以前のイギリス社会人類学の特徴をまとめる。	同　上	同　上
5	アメリカ文化人類学の出発：ボアズとその弟子たち	ボアズの人類学の諸方法についてまとめ、その弟子たちがそれらの諸方法をどのように発展させていったかを彼等の具体的な分析を通して明らかにする。	同　上	同　上
6	アメリカ文化人類学の発展：ボアズ派と反ボアズ派	ボアズの弟子たち以後のアメリカ文化人類学の発展について、代表的な人物たちの具体的な事例分析を通してまとめる。	同　上	同　上
7	構造主義以前の人類学	構造主義以前の文化人類学の諸理論をまとめ、構造主義によって何が批判されたかについて明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	構造主義の系譜	デュルケーム、モース等構造主義の先駆者とレヴィ＝ストロースとの関係について論じ、その系譜を明らかにする。	原尻英樹	原尻英樹
9	構造主義の考え方	構造主義の基本的考え方をレヴィ＝ストロースの具体的事例分析をふまえながら紹介し、構造主義以後の人類学にどのように影響を与えたかを概観する。	同上	同上
10	構造主義以後の文化人類学	構造主義の影響を受けた人類学を概観し、特に象徴研究の事例分析と通して構造主義のインパクトの意味について考える。	同上	同上
11	イギリス人類学の現在	イギリス社会人類学の現在について論じる。	船曳建夫（東京大学教授）	船曳建夫（東京大学教授）
12	フランス人類学の現在	フランス人類学の現在について論じる。	渡辺公三（立命館大教授）	渡辺公三（立命館大教授）
13	アメリカ人類学の現在	多様なアメリカ人類学の現在について論じる	竹沢康子（筑波大学助教授）	竹沢康子（筑波大学助教授）
14	日本人類学の現在	日本の人類学の研究を具体的に概観する。家族、親族、社会構造、都市の祭り、食についての研究等を具体的に紹介する。	原尻英樹	祖父江孝男 原尻英樹
15	これからの文化人類学	今後の文化人類学の研究方向はどのようなものが期待されるか、どんな研究が望まれるか等々について取り上げる。医療人類学、異文化間教育学、多文化間精神医学との関連等についても論じ、理論とその応用の両面について検討をおこなう。	同上	同上

＝世界の民族（'９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：原尻英樹（放送大学助教授）〕

全体のねらい

「世界の民族」は、文化人類学者を中心とした世界の諸「民族」の研究をする第一線の研究者によって制作される。学問の研究方法論としては、「民族」概念の再検討をねらいとしているが、放送授業の教育効果としては、「民族」の多様性のみならず、「民族」へのアプローチの多様性についての紹介も意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「民族」へのアプローチ	この回では、これからはじまる各講義の全体的な紹介とともに、「民族」という概念の恣意性を明らかにする。この恣意的な概念の形成は近代と密接に関わっているので、各講義の担当者のアプローチがこの基本的主題である「『民族』形成と近代」へどのような回答を与えられるかを概観する。	原尻英樹（放送大学助教授）	原尻英樹（放送大学助教授）
2	ウチナー 沖縄へのこだわり～大阪・大正区～	沖縄の近現代史の中からいくつかの歴史的事件や社会運動をとりあげ、そこで「同じ沖縄人（ウチナーンチュ）」という主張がなされていることの意味を、生活史にかかわらせながら考える。	冨山一郎（大阪大学助教授）	冨山一郎（大阪大学助教授）
3	「アイヌ」－その再認識	『アイヌ新法（仮称）』の制定運動に伴い、あたかも一民族としての「アイヌ民族」の歴史が形成されてきたかのような理解の仕方が広められた。しかし、「アイヌ」は言語上の共通性が認められるにせよ、生活様式についてみると地域差が非常に大きく、それがかつて一社会的集団を形成していたわけでもない。このような点を再検討することによって「アイヌ民族」と「和人」との二者対立的な歴史的理解の危険性を指摘し、誤った「アイヌ」観がつくられてきたことに警鐘を鳴らす。	河野本道（北海道教育大学非常勤講師）	河野本道（北海道教育大学非常勤講師）
4	国境をこえる「民族」 ～済州島人のネットワークコミュニティ～	済州島人のネットワークコミュニティの分析を通して、近代前の「共同体」アイデンティティ、済州島人アイデンティティ、それに近代国民アイデンティティの重層化の過程を明らかにする。この重層化の過程には日本による朝鮮の植民地化、それに「日本人」という言説の形成が関わっており、以上についての考察は個体・要素主義的な「アイデンティティ」形成論にはならない。	原尻英樹	原尻英樹

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	日本「民族」	(1)Nationという概念の示す世界像と「民族」という訳語の持つ世界像のズレについて、(2)大和という世界認識と日本という世界認識の違い、(3)さまざまなイデオローグ達が創造した「『日本民族』の歴史」の虚構性について（中国の「皇帝」支配と日本の「天皇」支配の社会構造上の違い）、(4)理論的問題（「聖／俗」二分法的世界観の再検討、日本的二重聖性原理、「ケガレ」を巡る民族学の言説の持つ意味、あるいは学問の名による差別の隠蔽）、(5)結び（現代社会を支配している神話としてnationalism概念について)。	笠井正弘（西日本短期大学教授）	笠井正弘（西日本短期大学教授）
6	多様性の日本	（日本国内の各回のまとめ） 「日本」の多様性について、これまでの各講師の講義を振り返り、各講師への質問とその応答から始まり、次にゲスト対談者とのトークにうつる。	原尻英樹	原尻英樹
7	近代メキシコ人の文化的自画像	1821年に独立し国民国家の建設に着手したメキシコは、どのような歴史意識のもとで自国文化の育成に努めてきたのか。近代メキシコの〈文化的自画像〉の生産と消費のプロセスを文教政策・造形芸術等の展開のなかに追跡し、〈メキシコ人である〉とは何かを考える。	落合一泰（一橋大学教授）	落合一泰（一橋大学教授）
8	統合と分裂のヨーロッパ ～文化と民族の視点から～	ヨーロッパは、経済統合から社会・政治統合へと向かい、そのなかで文化も大きな影響をうけている。他方、こうした新たな文脈のなかで、民族マイノリティの主張やイスラムの覚醒が生じつつある。このような統合と分裂の二側面から、今日のヨーロッパの民族・文化状況を分析する。	梶田孝道（一橋大学教授）	梶田孝道（一橋大学教授）
9	中国の漢族 ～世界最大の「民族」とその内部的多様性～	中国漢民族の内部的多様性を、いくつかの具体的事例を通して考察し、フィールドワークの実践で今まで語られてきた「民族」と現実に生活する「民族」とのズレの意味を明らかにする。	瀬川昌久（東北大学教授）	瀬川昌久（東北大学教授）
10	東南アジアにおける民族の移動 ～ボルネオ島を中心として～	東南アジアの海域および島嶼世界は古くから人の移動のはげしい世界である。この移動は、今日でも国境を越えた広がりをもって持続している。本講義では、島嶼世界で最大のボルネオ島を舞台とする民族の移動と、それにともなう民族間の関係を探求する。	内堀基光（一橋大学教授）	内堀基光（一橋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	現代社会を生きる先住民 ～カナダ・イヌイット～	アザラシ猟を事例に、カナダ・イヌイットの社会における狩猟がもっている現在的な意義をとり上げる。その視点から、彼らの文化がどのように継承されているか、または変化しているかを考察して、現代社会に生きる先住民の実態に迫る。	スチュアート・ヘンリ（昭和女子大学教授）	スチュアート・ヘンリ（昭和女子大学教授）
12	島の歴史と海の歴史 ～ポリネシアの民族と文化～	南太平洋ポリネシアのハワイイ（「ハワイ」ではない）、ニュージーランド、タヒチ、クック諸島などを対象に伝統復興や主権回復を巡る動きについて述べ、閉鎖系としての島に生まれた「伝統文化」という語りと、海とカヌーで繋がれた開放系を生きる「ポリネシアン」としての名乗りの間に生じる文化的アイデンティティーの葛藤を考察する。	棚橋　訓（慶応大学助教授）	棚橋　訓（慶応大学助教授）
13	部族・宗派・民族 ～北スーダンの事例～	主にアラブの事例に基づき、近代におけるアラブ「民族」の生成。その中における部族（カビーラ）集団の位置を考える。またユダヤ教・キリスト教・イスラームなどの各宗派が「民族」のように扱われることを、近年のイスラーム主義の動向を絡めながら論じる。	大塚和夫（東京都立大学助教授）	大塚和夫（東京都立大学助教授）
14	民族紛争の深層 ～アフリカの場合～	アフリカでは現在民族紛争が激化しているが、実はこの紛争のもととなる「部族」の概念は、ヨーロッパ植民地支配者によってつくり出されたあるいは名づけられたものである。近代前のアフリカの人々のアイデンティティは浮遊する無定形のそれであり、現在の「部族」あるいは「民族」は植民地支配およびその後の国民国家形成のためにつくり出されたものである。以上の「アイデンティティ」の検討を通して、その多重的性格を浮きぼりにする。	松田素二（京都大学助教授）	松田素二（京都大学助教授）
15	「民族」再考	（最終回のまとめ） 日本国外についての各講義の講師への質問とその応答でそれらの全体的構成を明示し、ゲスト対談者とのトークを通して、「民族」へのアプローチをまとめる。	原尻英樹	原尻英樹

＝博 物 館 学 Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：大塚和義（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

1960年代より急激に増加した日本の各地の博物館建設は、現在約8000館をかぞえるほどの盛況である。これら多様な展示手法や意欲的な博物館活動をとおして、今日的な博物館の現在を理解し、問題点を整理する。そして市民のニーズにこたえながら成長する博物館の未来像の考えてみたい。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	市民のための博物館の誕生	1960年代における道府県立の中央博物館の誕生と、そのあゆみをたどる。北海道の地域の歴史と文化を展開する北海道開拓記念館に例をとる。創設から約20年の経験をもとに全面改装された。学問的成果をふまえた最新の展示と博物館をみる。	大塚和義（国立民族学博物館教授）	大塚和義（国立民族学博物館教授）
2	地域社会と博物館	地域文化の活性化をはかるための博物館の役割りをふたつの例でみる。ひとつは巨大な江戸東京博物館のめざす歴史をふまえた地域文化の総合的な活性化であり、もうひとつは東京都墨田区にみる「小さな博物館」活動である。	同 上	同 上
3	アイヌ民族と博物館	日本のなかの先住・少数民族であるアイヌの伝統文化と民族の現在における諸問題を博物館展示をとおして考える。北海道平取町立アイヌ文化博物館と、白老のアイヌ民族博物館および北海道ウタリ協会資料室の展示を中心に学ぶ。	同 上	同 上
4	戦争と博物館	人類によるおろかな戦争の繰り返しは現在も止むことがない。この悲惨な歴史体験を風化させないで次代へ継承し、平和を求める博物館活動を「ひろしま原爆資料館」と大阪平和資料館や沖縄ひめゆりの塔資料館を中心にとりあげる。	同 上	同 上
5	地方都市の活性化と博物館	北海道小樽市におけるシンボル的運河を背景とした市立の博物館や文学館、企業経営の北一ガラス、玩具博物館、にしん御殿、石原裕次郎記念館などの多彩な文化施設のはたす役割について考える。	同 上	同 上
6	人権と博物館	一人ひとりの人間が平等に生きる民主的な社会をつくりあげるための博物館活動をとりあげる。差別からの開放をめざす大阪人権歴史資料館や目に障害のある人たちのための美術館である東京渋谷のＴＯＭなどの日本の事例と海外の活動を紹介する。	同 上	同 上
7	史跡整備と博物館	最近、各地で歴史的に貴重な遺跡が発掘され、これを復元・整備して市民に歴史的追体験の場となっている。ここでは山口県土井ヶ浜遺跡資料館、佐賀県吉野が里遺跡、沖縄県那覇・首里城復元などをとりあげる。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自然と共生をめざす博物館	現在、地球環境を守る重要性が認識されつつある。ここでは動植物の問題を具体的に動物園と植物園をとおして人間と自然との関係を考えたい。東京都の上野と多摩の両動物園と東京目黒自然園や小石川植物園をとりあげたい。	大塚和義	大塚和義
9	水族館	都市における巨大な水族館が驚くほどの人気を集めている。さまざまな最新の技術を駆使した展示手法の効果もあるが、水族館でしか「自然」を求められない現代社会の実態も背景にあるだろう。大阪海遊館と東京葛西臨海水族館などをとおして考えたい。	同上	同上
10	大学の博物館	大学における教育と研究のための資料を蓄積する博物館は、市民にも広く開放されている。京都大学文学部博物館と東海大学海洋学部水族館、東京芸術大学の楽器博物館、東京農工大学の繊維博物館などを紹介する。	同上	同上
11	企業の博物館	企業がさまざまな文化貢献を果たす時代となっている。全国で3000館以上といわれるこの種の博物館の役割をみる。岐阜の薬博物館、神戸ＵＣＣコーヒー博物館、竹中大工道具博物館などを紹介する。	同上	同上
12	美術館	美術作品の収集と展示のみの活動ばかりでなく、演劇や音楽あるいはパフォーマンスなど、さまざまな表現の場としての機能も大きくなりつつある。横浜美術館や水戸芸術館や東京都庭園美術館などをとおして問題点をさぐる。	同上	同上
13	科学技術と博物館	人類の文化を革新していく道具である科学とその技術を分かりやすく示す博物館活動を紹介する。東京国立科学博物館にみる子どもたちへのアプローチの状況や北九州の科学館、新津市石油博物館などにおける試みをとおして、人間と科学技術の問題点を考える。	同上	同上
14	野外博物館	移設あるいは復元された建物群によって構成される野外博物館やこの類似施設が、最近注目を浴びている。愛知県明治村や飛騨民族村、長崎ハウステンボスなどを訪ねる。	同上	同上
15	日本における博物館の歴史と現在	日本の近代以前から培われた博物学の蓄積と、近代に移植された博物館、さらに戦後の教育改革での博物館学への展開をたどる。また、情報化社会に対応した博物館の役割も考える。	同上	同上

＝博　物　館　学　Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：大塚和義（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

博物館は、いかに市民社会とともに成長していくことが可能であるのか。多面的な博物館機能と活動を西欧の例もとりあげてみたい。また博物館機能の基礎である資料の収集と保存の問題から、調査研究、展示技術、博物館資料の情報化などのとりくみも紹介する。また、博物館と公教育との関係や学芸員の役割についても述べ、最近の博物館学をとりまく課題を把握できるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物学と博物館学	日本において、近代以前から盛んであったすぐれた博物学の蓄積が、近代に導入された博物館の思想とうまく整合しなかったのはなぜか。また、近代日本の博物館はいかに機能したのか。戦後の開かれた市民社会のもとでの博物館と博物館学の現在を問う。	大塚和義（国立民族学博物館教授）	大塚和義（国立民族学博物館教授）
2	市民社会と博物館	ヨーロッパにおける博物館は、市民社会にとって欠かせない存在になっている。このような成熟した状況は、市民の意識を高める社会環境の形成によって可能である。博物館側の資料蓄積のうえに、文化情報の市民への提供を意欲的に進める活動の様相をみることにする。ことに博物館に関心をもたない青少年の文化的なニーズを敏感にくみとり、博物館の魅力を認識させる手法で、多様な接点をもとめて実験をつづける博物館の姿も紹介したい。	同　上	同　上
3	スペインの科学館	科学をテーマにした博物館は、欧米ではすぐれた内容のものが数多く建設されている。成人の知的欲求をみたすだけでなく、子どもたちにとっても楽しく遊びながら科学への興味をかきたて、科学的知識を身につけられるように工夫されている。日本でも科学館というかたちで各地に設置されてはいるが、館と利用する側との関係を含む社会的環境の醸成がいまだ十分とはいえない。ここでは、西欧の科学館でも中心的存在のひとつとして活動するスペイン・バナルセロの科学館を紹介したい。	同　上	同　上
4	博物館のネットワーク	一定の行政区内に多種類の博物館施設を分散して設け、それぞれの博物館が立地する地域的な個性を生かしながらネットワークを組むことが行われている。意識的にネットワークを組むことによって、総体として質量ともにすぐれた地域文化の創造にむすびつく研究成果や資料の蓄積が可能となり、これらの文化情報を市民が有効に活用できるようにもなる。こうした整備を進めている事例を埼玉県を中心に紹介する。	同　上	同　上
5	博物館職員の仕事	博物館における学芸員をはじめ職員の仕事はどのようなものか、その日常業務の一端をみながら、市民のニーズに対応することの多様な問題点を検証する。博物館の資料が「もの」としてだけでなく、情報処理によってデータ化されている状況も紹介する。	同　上	同　上
6	フランスの博物館資料の保存と修復	フランスの誇る文化創造の拠点であるルーヴル美術館。その誕生から今日までの道程と問題点は、ある意味で世界の美術館活動のありかたを集約しているといえよう。最近、装いもあらたにして、美の殿堂としてのめざましい活動を展開しているが、それは絵画の科学的研究と保存技術などの高度なバックアップがあって成り立っているのである。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	子どものための博物館	子ども博物館は、欧米においてはすぐれた内容のものが数多く建設され、子どもたちが楽しく遊びながら科学的な知識や美的感性、あるいは社会的規範を身につける「場」を提供している。日本では本格的な子ども博物館はいまだ設置されていない。ここでは日本に最近設置されはじめた子どもを対象とする博物館施設を紹介しながら、子ども博物館の重要性に対する社会的認識の醸成の必要性など、日本の現状をみながら問題点を考える。	大塚和義	大塚和義
8	展示技術論1 シナリオ	博物館における展示は、「もの」だけで成り立つものではない。どのようなストーリー構成で展示を行うのかという博物館側の理念と展示の基本構想がまずなければならない。基本構想にもとづいて展示シナリオが作成されるが、その実例を福岡市立博物館の常設展示の例から学ぶ。	同上	同上
9	展示技術論2 ディスプレイ	展示シナリオの原案を、いかに魅力的な展示として実現させるか。めざましく改善されてきたディスプレイの方法や機器、つまり見せかたの技術の理論と実際を学ぶ。ことに展示資料の保全をはかりながら、照明などによる褐色や劣化からの影響をできるだけ少なくして、資料のもつ情報を効果的にみるものが読みとれるように工夫している最新のディスクプレイをみる。	同上	同上
10	フランスの博物館学	フランスの博物館学は理論と実践において、きわめて高度な展開がみられる。ここでは、実際の展示に博物館学がどのように生かされているかをみる。ことに博物館を訪れる観客がいかなる文化情報を得ているのか、また情報の送り手である博物館は観客の意識をどのようにして科学的に把握できるのか、こうした博物館展示の評価は重要であるが、日本ではほとんどなされていない。展示評価を客観的に捉える方法とその実際を紹介する。	同上	同上
11	保存科学と博物館	博物館における資料は、木、紙、布、金属など材質的にみて多様である。それらは、いずれも時間の経過とともに、なんらかの保存処理や補修が必要となる。そのためにはまず資料の精密な分析が必須である。最新の機器を用いて行われる分析と、各種の保存処理の実例を紹介する。	沢田正昭（奈良国立文化財研究所遺物処理室長）	沢田正昭（奈良国立文化財研究所遺物処理室長）
12	修復技術と博物館	資料を未来に向けて長く伝えていかねばならないという博物館の使命をいかに達成するか。ことに日本の博物館思慮に多い紙・絹・漆器などの有機質のものを、カビや害虫や劣化などからいかに守っていくか。主として日本の伝統的な職人の技術を駆使して行われる修理・修復の技術を紹介し、その効果と問題点について学ぶ。	増田勝彦（東京国立文化財研究所修復技術部長）	同上
13	国際協力と博物館	現在、海外の博物館施設に所蔵されなが保存状態が危機的状況にある日本絵画を日本の技術で修復するというプロジェクトが官民双方で進められている。また、いまや博物館資料の交流ばかりでなく、博物館の運営や展示技術や情報化などの分野で先進諸国は、人材養成にも協力する体制を整えつつある。日本でもこうした体制を整備する必要性とともに博物館情報学とでもいうべき分野の構築が急務である。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	観光と博物館	観光は、いまや巨大な産業になっており、観光客を積極的に呼ぶためにさまざまな工夫が行われている。巨大なテーマパークの建設もそのひとつである。ここにも博物館的な施設が含まれることが多いばかりでなく、中心的施設として設置される場合も多い。さらに地域の活性化をはかる核として博物館が機能しており、結果として観光客を増やすことになる場合もある。	同上	同上
15	未来の博物館	これからの市民社会には、博物館という文化的装置がかかせないであろう。人間はたえまなく膨大なモノを創造し、これを使用し、消耗させたり放棄するという歴史的ないとなみに対して、モノを保存展示し、モノが語る情報を蓄積していかなければならない博物館の未来展望はなにか。	同上	同上

＝言　　語　　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：大江孝男（東京外国語大学名誉教授）
　主任講師：湯川恭敏（東　京　大　学　教　授）〕

全体のねらい

人間の文化活動は言語による伝達活動によって行われる。社会的連帯を生み分業と協業の基礎ともなる。伝達内容を表現形式（言語）に変還し表現形式によって内容を諒解する。言語の役割は、どの社会でもほぼ同じである。言語がどのような構造をもち、どのようにして機能を果たすのか、考え方と研究方法の基礎について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言語と言語学（一）：言語学の研究対象	言語活動では、伝えたいと思う表現内容が発音行動を通じて音声に置き換えられて空中を伝わり、聴覚を刺激して理解される。この過程の中から、研究対象を取り出し、他の分野との関連を検討する。	大江孝男（東京外国語大学名誉教授）	大江孝男（東京外国語大学名誉教授）
2	言語と言語活動	言語活動は、人間が伝達内容を他に理解させる活動である。表現と諒解は個人のレベルで別々に行われるにもかかわらず、両者の間に共通の理解が成立する理油と機構について考察し、研究分野について紹介する。	同　上	同　上
3	言語と言語集団	伝達活動が効率よく成立するには言語活動は等質的であるのが望ましいが、広がりをもつ社会では「ことば」の違いがみられるのは常識である。同じ社会の中で違いの生ずる原因、方言と共通語について考える。	同　上	同　上
4	音声と音声記号	言語表現の外形である言語音声がどのような機構でどのように発せられるか、人間の発しうる言語音声にはどのようなものであるかについて考え、あわせて言語音声を観察する方法と記録する方法とについて考察する。	同　上	同　上
5	世界の諸言語	地球上には、何千という数の言語が話されており、よく知られている言語はそのなかのごく少数のものにすぎない。世界の言語の状況をみるため、ヨーロッパからアフリカ、アジア、アメリカ、オーストリアと各地域の言語の分布を概観する。（巻末附：世界の「言語分布地図」「共通語地図」	湯川恭敏（東京大学教授）	湯川恭敏（東京大学教授）
6	言語の構造	音声と意味の結合した単位としての言語記号のもつ特質について考察する。音声面の構成単位、意味の面の特質、単語の機能、語順の役割などについて概観する。	同　上	同　上
7	音声と音韻(1)〜音楽分析〜	記号の形について、それを構成する機能的単位としての音素とその弁別素性、分析の方法をめぐって考える。	大江孝男	大江孝男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	音声と音韻(2)～音節とプロソディー～	形式の形を構成する音素の結合の仕方に関する規制、構成された音素連結に音調律動をあたえるアクセントや声調について考える。	大江孝男	大江孝男
9	形態論（一）	動詞は活用するといい、名詞は曲用するというが、それぞれ、意味は同じで形が部分的に異なっていて文の中での機能も異なる形式がセットをなす単語の集合である。形の違いと機能の違いとの関係を追求する。	湯川恭敏	湯川恭敏
10	形態論（二）	内部に別の単語を構成成分としている単語は意外に多い。構成は単語を土台に小形式との接合構造をなしているものと、単語同士の結合構造をなるものとがある。このような単語の構造と構成について考察する。	同上	同上
11	統辞構造と統合型	単語が統合されて文の構成成分をなし、構成成分が統合されて文をつくる。統合される形式の文法的関係、機能規則などを考慮する。	大江孝男	大江孝男
12	文型と文構造	規則に従って統合された形式が発話されて文としての機能を果たす。文が連続してまとまった内容を表現する。文の種別、機能等について検討する。	同上	同上
13	言語の変化（一）	個人レベルでみると安定している言語も長い期間をかけて変化する。言語変化を引き起こす原因について考察し、規則的な音変化のもつ意義について考える。	同上	同上
14	言語の変化（二）	言語の変化は音変化だけではなく、形式の形はいろいろな要因によって変化する。いろいろな変化とその要因について考える。	同上	同上
15	言語と言語学（二）：20世紀の言語学	今世紀の言語研究の特徴と現在の研究の動向について概観する。	同上	同上

＝古代ギリシャ・ローマの文学＝（Ｒ）

〔主任講師：逸身喜一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパ文学を一貫する特徴のひとつに、淵源をたどればギリシャ・ラテンにたどりつくジャンルの意識がある。時代による差異はあるが、後代は先行する作品の様式を、常に規範と仰いだ。本講義では、古典文学のうち韻文で書かれた主な作品を、たんに年代順ではなく分野毎にたどり、各ジャンルの特質を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論	古典古代は一千年以上にわたる。その間、社会の有様はいうまでもなく、作品の発表と受容の場も変化した。こうした歴史の簡単な把握と、ギリシャ語・ラテン語の特徴、さらにジャンルとはどういったものかを概説する。	逸身喜一郎（東京大学教授）	逸身喜一郎（東京大学教授）
2	エポス：叙事詩（1）	『イーリアス』は西洋最古の文学であるとともに、その後の古典文学に著しい影響を与えた。その構成と成立の問題を中心に、英雄叙事詩の特質、ならびに口誦叙事詩なる概念について説明する。	同上	同上
3	エポス：叙事詩（2）	同じホメーロスの名で伝えられていても、『オデュッセイア』は『イーリアス』にくらべると、物語の内容にも構成にも「新しさ」が見られる。もともとその核に、おとぎ話の要素を持つものの、『オデュッセイア』は英雄叙事詩の別モデルとなることに成功している。	同上	同上
4	エポス：叙事詩（3）	ウェルギリウスはローマ建国を描いた叙事詩『アエネーイス』を作るにあたり、『イーリアス』『オデュッセイア』双方をともども規範にすえた。とはいえこのローマの叙事詩を貫いている精神は、ホメーロスとは随分、違っている。エポスのラテン化は容易ではなかったが、陰影に富む作品が生まれることになった。	同上	同上
5	エポス：叙事詩（4）	偉大な作品との葛藤から、新しい作品が生まれてくる。本章では、ホメーロス・ウェルギリウスとの対決を通じて生まれた新しい傾向の叙事詩から、アポッローニオス『アルゴー号冒険物語』・オウィディウス『変身物語』・ルーカーヌス『内乱記』を選んで、それらの異質さを明らかにする。	同上	同上
6	エポス：教訓詩	英雄叙事詩だけがエポスではない。神々の系譜という形によって世界観をヘーシオドスはこの詩型に託し、かつ農夫の日々の努めを教えた。古典文学にはこうした様々な知識を披瀝し、箴言を告げる一群の作品が、脈々と続いている。	同上	同上
7	エポス：牧歌	大都会アレクサンドリアの発展は、田園への憧れを生み出した。テオクリトスに始まり、ローマのウェルギリウスが一層洗練させた牧歌もまた、エポスの韻律であるヘクサメトロスで書かれている。本章では、あわせて「小さな物語詩」とでもいうべきエピュッリオンをあつかう。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	エレゲイア（1）	エレゲイアとはヘクサメトロスという本流に対する傍流として古典文学を貫いて用いられた韻律である。アルキロコスからはじめ、この詩型の発展の歴史をたどる。あわせてイアンボスとエピグラムにも言及する。	逸身喜一郎	逸身喜一郎
9	エレゲイア（2）	ラテン文学は恋愛詩という独自のジャンルをうちたてた。その韻律はエレゲイアであった。プロペルティウスその他の詩人の特徴を、ヘレニズム期文学の影響という観点に重点をおいて説明する。	同　上	同　上
10	抒情詩　（1）	「抒情詩」と訳されることばは、元来、弦楽器リラの合わせて歌われた歌を意味した。サッフォー・アルカイオス・アナクレオーンは独唱詩の代表である。そこには個人の感性が、各人独特の言葉遣いで表わされているように思われる。しかしそこで歌われる「私」は、約束事をふまえた「私」でもある。	同　上	同　上
11	抒情詩　（2）	ジャンルとしての抒情詩は、アルカイック期以後、主要な作品がない。5世紀の後に、ホラーティウスは、ギリシャの抒情詩を復活し、ラテン語世界に取り込むことに成功した。その歌の対象は幅広く、抒情詩という訳語はとりわけこの詩人には不適切である。	同　上	同　上
12	抒情詩　（3）	オリンピック競技をはじめとする競技祝勝歌をピンダロスは作った。競技での優勝とは、はかなき存在である人間が、栄光の高みに到達する機会なのである。そして勝利者を賛美する詩こそ、彼の名声を永遠に留める、という自負を、詩人は担っている。	同　上	同　上
13	演　劇　（1）	ギリシャ悲劇と喜劇は、アテナイのディオニューシア祭において催されるポリスをあげての行事であった。そのため特殊な約束事にいろいろ縛られている。それらの知識は、一見、普遍的内容をもつ演劇理解に必須である。	同　上	同　上
14	演　劇　（2）	三大悲劇詩人（アイスキュロス・ソフォクレース・エウリーピデース）は、それぞれ特色ある作品を作った。悲劇は英雄神話を題材に選ぶが、その扱いは詩人の裁量に委ねられていた。	同　上	同　上
15	演　劇　（3）	アリストファネースの喜劇は、突拍子もない設定から出発して、想像力を飛翔させる。そのおかしさは「高級な笑い」から「行儀の悪さ」まで振幅がはなはだしい。しかし彼の喜劇は後継者をもたない。1世紀のちのメナンドロスの人情喜劇はプラウトゥスによってローマに移入され、ついにはヨーロッパ演劇の基礎となる。	同　上	同　上

＝イギリス文学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：高松雄一（駒澤大学教授）〕

全体のねらい

文学作品は、一方で神話伝説や幻想などの非日常的な世界を素材に取り入れるが、他方ではそれぞれの時代の風俗習慣や社会のあり方と密接に結びついている。信仰表明の場となることもある。イギリス文学の流れのなかから、各時代ごとにその具体的な現れをとりあげて考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イギリス文学の流れ	序論として、イギリス民族と言語の成立や初期の文学のあり方など、基本的な問題について概観する。	高松雄一（駒澤大学教授）	高松雄一（駒澤大学教授）
2	ルネッサンス期の詩と散文	シドニーからシェイクスピアにいたるソネット集、スペンサーの寓意物語詩『妖精女王』、その他、牧歌物語、モアベーコンの散文などを中心に、イギリス・ルネッサンス期文学の特質を探る。	川西進（フェリス女学院大学教授）	川西進（フェリス女学院大学教授）
3	ルネッサンス期の演劇	シェイクスピアの演劇作品を中心に、エリザベス朝演劇からジェイムズ朝演劇への変化、ピューリタンによる劇場閉鎖から王政復古後の演劇の復活にいたる推移を、時代思潮の変遷と絡めて考察する。	同上	同上
4	宗教と革命と文学	ピューリタン革命から王政復古にいたる激動の時代における文学とキリスト教の係わりを、英訳聖書、ダン、ハーバートら形而上派詩人の宗教詩、ミルトンの叙事詩『楽園喪失』などを中心に検討する。	同上	同上
5	イギリス小説の成立	18世紀になると、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』スウィフトの『ガリヴァー旅行記』を先駆として、リチャードソン、フィールディング、スターンらが出現し、小説というジャンルが確立する。これらについて考察する。	海老根宏（東洋大学教授）	海老根宏（東洋大学教授）
6	ロマン主義の特質	18世紀末にイギリスのロマン主義運動が興る。ここではロマン主義想像力の基本的な特質をさぐり、その意義を考える。	高松雄一	高松雄一
7	18世紀詩人および前期ロマン主義詩人	18世紀の詩を概観し、さらにロマン主義詩人の第一世代に属するブレイク、ワーズワース、コールリッジらの作品をとりあげて、具体的に特徴を論ずる。	笠原順路（東京大学助教授）	笠原順路（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	後期ロマン主義詩人	ロマン主義詩人の第二世代のバイロン、シェリー、キーツらの作品をとりあげて、ロマン主義の変移をみる。	笠原順路	笠原順路
9	近代社会と小説	19世紀に入って、オースティン、およびヴィクトリア朝のブロンテ姉妹、ディケンズ、ジョージ・エリオットらによって、本格的なリアリズム小説が確立する。これについて考察する。	海老根宏	海老根宏
10	ヴィクトリア朝詩人	テニスン、アーノルド、ブラウニング、およびラファエル前派のロセッティなど、ロマン主義以後の詩人たちのあり方を見る。	笠原順路	笠原順路
11	唯美主義と世紀末	19世紀後半の批評家ラスキン、ペイター及びワイルドの立場を中心において、唯美主義と世紀末文学の関連を考察する。	富士川義之(東京大学教授)	富士川義之(東京大学教授)
12	イギリス小説の変貌	19世紀末から20世紀の、リアリズムからモダニズムへの橋渡し役となったハーディ、コンラッドらの意義を考察し、E.M.フォースター、ウルフ、D.H.ロレンス、ジョイスにいたる20世紀小説を論じる。	海老根宏	海老根宏
13	モダニズム文学の意味	1910年前後から、新しい技法による新しい文学の確立をめざす動きが現れ、やがて20世紀前半の文学の主流を占めるにいたる。ここではイェイツ、ジョイス、ウルフ、T.S.エリオットらを念頭におき、その全体的な特徴をさぐる。	高松雄一	高松雄一
14	1930～40年代の文学	モダニズム以後の文学の諸相を見る。30年代の社会派人として出発したオーデンら、ディラン・トマスなどの詩人や、グリーン、ウォー、オーウェルらの小説家の出現がある。	富士川義之	富士川義之
15	現代の文学	第二次大戦後から現代にいたるイギリス文学の状況を、とくに小説と詩を中心にして展望する。	同上	同上

＝ドイツ文学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：神品芳夫(明治大学教授)〕

全体のねらい

ドイツ文学は苛烈な歴史を生きた人間たちの真実の声の集合である。その観点に立ち、中世から現代までのドイツ文学の成果を、社会の流れとの相関関係に留意しながら、自由に語ることにしたい。各担当講師が受持つ３回のうち、２回は分担する時代の文学を概観し、１回は「特論」としてテーマを絞って問題を掘り下げたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	中世の文学	ゲルマン諸族の移動と神聖ローマ帝国の成立・分裂によってヨーロッパが生まれるが、ドイツではドイツ語そのものが成立してゆくと共に、教会主導のキリスト教文学、ゲルマンの伝統をひく英雄文学と、フランス渡りの宮廷文学とが展開してゆく。その諸相を紹介する。	松浦　純（東京大学教授）	松浦　純（東京大学教授）
2	宗教改革からバロック	活版印刷の発明のメディア革命としての意義は特に宗教改革期になって発揮されたが、なかでもルターの著作と聖書翻訳は新たな文学の基盤となる標準的なドイツ語をも準備した。その時代の文筆活動、続いて三十年戦争を経たバロック時代までの文学について概観する。	同　上	同　上
3	（特論）知られざるルター	マルティン・ルターは宗教改革のリーダーとして、また聖書翻訳者として知られているが、その思想像は多分に図式化されている。時代背景を描きつつ、己と他者についての彼の思索がもっていた特質を考えてみたい。	同　上	同　上
4	ゲーテ時代の文学	ドイツ文学の隆昌期であるゲーテ時代とは、啓蒙主義と「若いドイツ」に前後を挟まれた時期に当たり、いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラング、古典主義、ロマン主義を包括する。人間性の時代である十八世紀を起点として、その流れを追いつつ、古典文学の意義を問い直す。	木村直司（上智大学教授）	木村直司（上智大学教授）
5	ゲーテとロマン派	古典主義のあとにロマン主義が始まったわけではなく、両者はかなりの期間平行して進行した。初期ロマン派が活躍した時代はゲーテの長い生涯と重なり合い、ゲーテ自身にもそれら両面が認められる。現実的なものと理念的なものとの相互関係を中心に、両者の関わりについて解明したい。	同　上	同　上
6	（特論）ゲーテ像の変遷	ゲーテの特徴は、詩人から自然研究者、政治家にまで及ぶ多面性である。それはまた若いゲーテ・古典主義者・晩年のゲーテに分けられる。どれに焦点を合わせるかに従って多様なゲーテ像が生じてくることを示したい。ゲーテ像の変遷が十八世紀以降のドイツ精心史の反映であることにも注目したい。	同　上	同　上
7	後期ロマン派	ホフマン、アイヒェンドルフを中心に後期ロマン派の特性を分析し、さらにリュッケルト、ミュラーやハイネの詩、グリルパルツァーの演劇やウィーン民衆喜劇にも触れて、ロマン派の視野から十九世紀前半のドイツ文学の魅力を総括的に捉える。	光野正幸（武蔵大学教授）	光野正幸（武蔵大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	リアリズム文学	ゲーテの死からドイツの国家統一に至る時代の文学の主潮はリアリズムである。その中核をなすシュティフター、ケラー、シュトルム、ラーベらの小説手法を探るとともに、メーリケ、ドロステの詩、ビューヒナー、ヘッベルの演劇にも触れ、「詩的リアリズム」の文学の諸相を概観する。	光野正幸	光野正幸
9	(特論)ドイツ・オペラ文学	十九世紀におけるドイツ・オペラの自立の過程を、モーツァルト/サリエリの時代からヴェーバー/スポンティーニを経てヴァーグナーの「楽劇」、さらに二十世紀のリヒャルト・シュトラウスまで音声資料をまじえて辿り、「音楽と文学の結びつき」の文化史的文脈を明らかにする。	同上	同上
10	世紀転換期から表現主義	政治上ではヴィルヘルム2世の対外拡張政策と第一次世界大戦の時期。一方文化的には国際交流が進み、ドイツ文学が世界の流れに合流し、ホフマンスタール、マン、カフカらが輩出、二十世紀文学の視座を開いた。郷土文学とモデルネの文学の対立の構図を示したい。	神品芳夫(明治大学教授)	神品芳夫(明治大学教授)
11	亡命文学	1920年代に現代文学の基礎が築かれたあと、ナチの時代になって、ドイツ文学は決定的に国内と国外に分裂した。亡命文学者には大別して、ユダヤ系、左翼系、リベラル系があり、それぞれの例として S.ツヴァイク、ブレヒト、Th.マンの場合を見たい。国内亡命者にも言及する。	同上	同上
12	(特論)リルケと現代詩	ドイツ的土着性とは無縁のリルケは、ロシヤからスペインに至るヨーロッパの空間と詩伝統をふまえて多様な詩作を展開した。他方でブレヒトなどの社会派の詩が優位を占めるなか、リルケの詩がどのように受容されてきたかを考える。さらにドイツに独特の自然詩の系譜にも触れる。	同上	同上
13	第二次大戦後の文学	国土荒廃のなかでまず声を上げたボルヒェルトら戦中派の作品を紹介し、47年グループの成立事情を説明する。Th.マンほか亡命作家の受容とともに、50年代におけるバッハマンやツェランの登場、そしてフリッシュとデュレンマットの仕事に触れる。	藤本淳雄(成城大学教授)	藤本淳雄(成城大学教授)
14	東西ドイツ並立の文学	帰国したブレヒトをはじめ社会主義の東ドイツ国家におけるさまざまな立場の作家の活動を紹介する一方、西でもエンツェンスベルガーやベル、グラス、さらに東から「移住」したヨーンゾンらの活躍、ア・ヴァイスらによるユダヤ人問題との対決、東欧バルト海地域を舞台とするボグロフスキーの作品にも触れる。	同上	同上
15	(特論)東西統一の前後	1968年の「学生の反乱」以降の社会状況を背景とするハントケ、ヴァルラス、B.シュトラウスの仕事と、東ドイツ末期の文学状況を概観したあと、近作『メーディア』に至るCH.ヴォルクの仕事とヨーンゾンの大作『記念の日々』を考察したい。	同上	同上

＝ フランスの文学（'９８） ＝ （Ｒ）

〔主任講師：渡辺守章（放送大学教授）〕
〔主任講師：塩川徹也（東京大学教授）〕

全体のねらい

国民文学としてのフランス文学の成立は、17世紀の絶対王政の成立と密接に結びついている。フランス人と対等に話が出来るためには、17世紀以降の「古典的な文学」に、フランス人並に通じている必要があると語ったのは、ドイツの評論家クルチウスであった。それは、フランス語とフランス文化における文学の重要性を指摘したものであり、その事情は、現在でも基本的には変わっていない。この講義では、17世紀から現代までのフランス文学を、主としてジャンル毎に、その代表的な作家と作品について考えてみる。同時代の社会や文化との関わりを視野に入れておくことは言うまでもないが、ただ、日本では、フランスの歴史の基本的な様相も局面も、十分に知られているとは言いがたいので、その点にも配慮する。対象にするテクストは、原則として日本語訳のあるものを念頭におくが、特に韻文の場合は、原文を引用することもありうる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総説	何故17世紀から現代か。「古典主義の時代」に何が起きたか。近代性の時代。17世紀と現代を通底するもの（制度と文学）。	渡辺守章（放送大学教授） 塩川徹也（東京大学教授）	渡辺守章（放送大学教授） 塩川徹也（東京大学教授）
2	古典主義時代の劇文学 (1)	文学言語の厳密化と洗練。ピエール・コルネイユとその時代。モリエールの喜劇。ラ・フォンテーヌあるいは　話詩の劇場。	渡辺守章	渡辺守章
3	古典主義時代の劇文学 (2)	ラシーヌ、ボワロー、マリヴォー、ボーマルシェ 古典主義の頂点、ラシーヌ喜劇。喜劇の変質、マリヴォー喜劇。ディドロと市民劇（演劇美容の拡大・変貌）。	同上	同上
4	古典主義時代の小説	ジャンルとしての小説。デュルフェ『アストレ』、ラ・ファェット夫人『クレーヴの奥方』、プレヴォー『マノン・レスコー』、ラクロ『危険な関係』	塩川徹也	塩川徹也
5	モラリストの系譜	「モラリスト」とは何か。モンテーニュ。ラ・ロシュフーコー。パスカル。ラ・ブリュイエール。	同上	同上
6	「フィロゾフ」の文学	「フィロゾフ」とは何か。モンテスキュー。ヴォルテール。ルソー。ディドロ。	同上	同上
7	近代詩 (1)	ロマン派の詩と詩人（ベランジェ、ラマルチーヌ、ミュッセ、ヴィニー、ユゴー、ネルヴァル、ゴーチエ）	田村毅（東京大学教授）	田村毅（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	近代詩 (2)	ボードレール。ヴェルレーヌ。ランボー。マラルメ。詩の危機。	渡辺守章 松浦寿輝(東京大学教授)	渡辺守章 松浦寿輝(東京大学教授)
9	近代小説 (1)	ロマン派からレアリスムへ(ノディエ、ネルヴァル、ユゴー、バルザック、スタンダール)	田村毅	田村毅
10	近代小説 (2)	レアリスム以降(メリメ、デュマ・フィス、フローベール、モーパッサン、ゾラ)	同上	同上
11	近代劇	ロマン派革命。同時代風俗劇あるいは近代劇の成立。世紀末のパラダイム(演劇における前衛の出現)	渡辺守章	渡辺守章
12	現代詩－言語とイメージの冒険	アポリネール。ヴァレリー。『NRF』派とモダニズム。ダダからシュルレアリスムへ。ブルトン。シュルレアリスムの内と外。第二次対戦後の詩。	松浦寿輝 渡辺守章	松浦寿輝 渡辺守章
13	現代小説－プルースト以後	プルースト。ジッド。セリーヌとマルロー。サルトルとカミュ。映像への越境、あるいは文学の危機。	松浦寿輝	松浦寿輝
14	現代劇	演出家の世紀(アルトーの影)。演劇における前衛(1)(クローデルの演劇的宇宙)。「30年代演劇」とその系譜(ジロドゥーから実在主義演劇へ)。 演劇における前衛(2)(「不条理劇」以降)	渡辺守章	渡辺守章
15	思想と文学	危機と文学。構造主義の地平。文学とその外部。	渡辺守章 松浦寿輝	渡辺守章 松浦寿輝

＝ギリシャ哲学（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：天野正幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、語源的にも歴史的にも「哲学」の故郷と言うべき古代ギリシャにおいて哲学という学問がどのように生まれ成長していったかを解き明かし、哲学とはいかなる学問であるかをその原点に立ち返って理解するための手懸りを提供することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ソクラテスの「知恵」（『ソクラテスの弁明』）	「哲学」を意味するギリシャ語「フィロソフィアー」の原義である「知恵の愛求」としての「哲学」を実質的に確立したのはソクラテスである。彼の「知恵」概念を手懸りに、彼にとっての「知恵の愛求」について考察する。	天野正幸（東京大学教授）	天野正幸（東京大学教授）
2	ソクラテスのエレンコス（プラトン初期対話篇）	ソクラテスの「知恵の愛求」の活動は他者との議論を通して遂行される。彼の議論はいつでも相手を論駁して相手の無知を暴露する（「エレンコス」と呼ばれる）。その議論を手懸りに、彼の「知恵の愛求」について考察する。	同上	同上
3	プラトンは超越的イデア論者か	プラトンのイデア論は「超越的イデア論」と一般に考えられている。そのような理解は彼の弟子のアリストテレスから始まる。だが、プラトンのイデア論を「超越的」イデア論と理解するのは誤解のもとである。	同上	同上
4	仮説的イデア論（『パイドーン』）	プラトンのイデア論は、イデアの存在を仮説する仮説的理論であり、「仮説的イデア論」という名がむしろ相応しい。それは『パイドーン』において初めて、一個の理論として確立された。	同上	同上
5	善のイデア（『国家』）	『国家』において、仮説的イデア論の仮説を正当化する究極の根拠として「善のイデア」が導入され、それが「太陽」・「線分」・「洞窟」の譬喩によって説明される。その説明の目的は真の哲学者を規定することにある。	同上	同上
6	イデア論の再検討（『パルメニデス』）	『パルメニデス』において、プラトンは自らイデア論を批判する。その批判はイデア論にとって、致命的とは言えないまでも、少なからぬ打撃を与えるものと思われるが、プラトンにとってはどのような意味を持つのだろうか。	同上	同上
7	「エピステーメー」概念の再検討Ⅰ（『テアイテートス』）	『パルメニデス』のイデア論批判は「エピステーメー」概念についての再検討をプラトンに促し、『テアイテートス』において、エピステーメーを獲得する方法が根本的に考察し直される。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	「エピステーメー」概念の再検討Ⅱ(『デアイテートス』)	「エピステーメー」は最終的には「ロゴスを伴った真なるドクサ」と定義される。この定義も結局は批判されるが、エピステーメーは「他のすべてのものとの差異の認識」であるというとが積極的な成果として確保される。	天野正幸	天野正幸
9	分割法(『ソフィステース』『ポリーティコス』)	『ソフィステース』『ポーティコス』において、「他のすべてのものとの差異」を体系的に認識する方法として、「分割と統括」という方法が導入される。この方法について考察する。	同上	同上
10	イデアのコイノーニアー(『ソフィステース』)	『ソフィステース』において、虚偽の言明がいかにして成立し得るかを説明するために、イデアのコイノーニアー(結合あいては分有)という考え方が導入される。この考え方について考察する。	同上	同上
11	アリストテレスにとっての「哲学」(『形而上学』)	アリストテレスは『形而上学』の冒頭で「知恵」を「原理・原因についての知」と規定している。これは彼にとって「哲学」の根本規定である。それでは、アリストテレスにとって「哲学」とはどのような学であったのか。	同上	同上
12	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」(『形而上学』)	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」(「あるもの」は多義的である)というテーゼがアリストテレスの存在論の根本前提となっている。このテーゼの意味と意義について解説する。	同上	同上
13	本質をめぐる議論Ⅰ(『形而上学』)	アリストテレスは『形而上学』第7、8、9巻において、実体の存在の原因について論じている。それは彼の形而上学の精髄と言っても過言ではないが、極めて難解である。それをできるだけわかりやすく解説する。	同上	同上
14	本質をめぐる議論Ⅱ —— 知の対象としての本質(『形而上学』)	存在の原因としての本質を知の対象という観点から見ると、例えば「本質は個別か普遍か」、「類と種差(という二つのもの)からなる本質がなぜ単一なものであり得るのか」など、様々な問題が生じる。これらの問題について考察する。	同上	同上
15	論証理論(『分析論後書』)	最後に、アリストテレスの「知」の概念について解説する。彼は、最も厳密な知は論証に基く知だと考える。それについて、主として『分析論後書』における論述に基いて解説する。	同上	同上

＝西洋近世哲学史（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：量　義治（東洋大学教授）〕

全体のねらい

ネルサンスの哲学からヘーゲル哲学にいたる西洋近世哲学史は、西洋哲学史全体のなかできわめて重要な位置を占めている。全体のねらいは二つのねらいから成っている。一つは、近世哲学全体の流れを正確に把握することである。もう一つは、基本的な諸概念を厳密に理解することである。精選された西洋近世哲学史の客観的な叙述を試みたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世哲学の概観	二つのことを考えている。一つは古代・中世哲学との関係である。もう一つは近世哲学自体の流れである。後者は、イギリス経験論、具体的には、揺籃期の哲学、大陸合理論、批判哲学、そしてドイツ観念論として展開する。	量　義治（東洋大学教授）	量　義治（東洋大学教授）
2	揺籃期の哲学Ⅰ ルネサンスの哲学	「ルネサンス」とは「再生」を意味する。すなわち、キリスト教以前のギリシア・ローマの文化を再生しようとするものである。具体的には、クザーヌス、エラスムス、ポンナッツィの哲学を取り上げて考察する。	同　上	同　上
3	揺籃期の哲学Ⅱ 宗教改革	16世紀の宗教改革は狭義の近世哲学史の範時には入らない。しかし近世体験における思想の変革の一つとして、また、その後の影響先を考え合わせるとき、欠落させることはできない。具体的には、ルターとカルヴァンの思想を取り上げる。	同　上	同　上
4	揺籃期の哲学Ⅱ 科学革命	「科学革命」という言葉は二とおりの意味で使われる。一つは英語で大文字で書かれる科学革命であり、もう一つは小文字で書かれる科学革命である。前者は近代自然科学の基礎となった16世紀半ばから17世紀後半にかけての自然科学の興隆のことを指す。	同　上	同　上
5	合理論の哲学Ⅰ デカルト	「われ思う、ゆえにわれ在り」という言葉によって知られるデカルトは、単に大陸の合理論の祖であるだけではなくて、人間というものを哲学の中心に握えたという意味で、近世哲学の祖である、ということができる。したがって、当然、今日にまで及ぶ影響史がある。	同　上	同　上
6	合理論の哲学Ⅱ スピノザ	「神即自然」という言葉によって知られるスピノザの哲学は汎神論である。デカルトは精神を物体という二つの実体を認めたが、神のみが唯一の実体であって、精神と物体はこの唯一の実体である神の様態である。としたスピノザ哲学は、デカルト哲学の徹底である。	同　上	同　上
7	合理論の哲学Ⅲ ライプニッツ	ライプニッツの実体は「単子」と呼ばれる。その数は無数である。単子の本性は作用にある。しかし単子と単子との間には相互作用はない（「単子は窓をもたない」）。けれども、被造物としての単子の全体は創造者が定めた「予定調和」の秩序のなかに置かれている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経験論の哲学Ⅰ ベーコンとホッブズ	中世以来もともとイギリスには経験論的傾向の伝統があったが、近世における経験論の哲学はF・ベーコンをもって始まる。ベーコンに続くホッブズは徹底的に機械論的な自然観を樹立した。そしてそれを道徳や社会の分野にまで拡張しようとした。	量　義治	量　義治
9	経験論の哲学Ⅱ ロック	ベーコンやホッブズを先駆とするイギリス経験論はロックをもって確立する。経験論はすべての認識は経験をもって始まるのであって、経験に先立っては、われわれの心は「白紙」または「暗室」である、と主張する認識諸上の立場である。	同　上	同　上
10	経験論の哲学Ⅲ バークリとヒューム	バークリとヒュームはロックの経験論を継承発展させた。バークリの「存在することは知覚されることである」というテーゼは有名である。ヒュームは、経験論を徹底させていった結果、いっさいの認識の確実性を疑う懐疑論に陥ってしまった。	同　上	同　上
11	批判哲学Ⅰ 形而上学	カント哲学は批判哲学と称される。すなわち、理性による理性の批判、つまり、理性の自主批判の哲学である。批判哲学はそれ以前の全哲学を批判し、真の哲学を構築しようとした。カントは西洋哲学史上最大の哲学者である、といってもけっして過ちではない。	同　上	同　上
12	批判哲学Ⅱ 道徳と宗教	理性には三つの関心がある。すなわち、(1)「わたしはなにを知ることができるか。」(2)「わたしはなにをなすべきであるか。」(3)「わたしはなにを望むことを論されるか。」第一の関心は形而上学、第二の関心は道徳、そして第三の関心は宗教にかかわる。	同　上	同　上
13	ドイツ観念論の哲学Ⅰ フィヒテ	ドイツ観念論の哲学の起点は批判哲学である。批判哲学の特　はその二元論にある。この二元論の一元論化、つまり体系化の試みがドイツ観念論の哲学の基本的意図である。フィヒテの「知識学」はその最の体系的哲学である。	同　上	同　上
14	ドイツ観念論の哲学Ⅱ シェリング	フィヒテにおける二元論の克服は不徹底に終わった。というのは、その絶対者は自我を非我との根底にあるというよりは、むしろ自我の根底にあるものであったからである。これにたいして、シェリングの「同一哲学」は文字であり絶対者の哲学である。	同　上	同　上
15	ドイツ観念論の哲学Ⅲ ヘーゲル	ヘーゲルによれば、実体は客体ではなくて主体である。そして主体の本質は自由にある。「精神」は自由を本質とする実体としての主体である。精神はその自由に基づいて、自己を自己の外に発現しつつ運動する主体である。ヘーゲル哲学をもって近世哲学は終焉する。	同　上	同　上

＝美と詩の哲学（'９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：渡邊二郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

西洋における「美」の概念の伝統をとらえなおし、あわせて、それが、「言語」芸術である「詩」に関する考え方のなかに具体的に姿を現した重要ないくつかの局面を省みて、現代の人間論や芸術論に示唆を与えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	調和としての美	ピュタゴラス、プラトン、アリストテレス以来の、調和、秩序、均斉、節度に美を求める、永い伝統のある美意識の系譜をたどる。	渡邊二郎（放送大学教授）	渡邊二郎（放送大学教授）
2	呼ぶものとしての美	プラトン、プロティノス、偽ディオニュシオス・アレオパギタ、エリウゲナに発する、光の形而上学、もしくは「美（カロス）」を「呼ぶもの（カレイン）」ととらえた伝統の重要性を際立たせる。	同上	同上
3	中世の美学	トマス・アクィナスを中心とする中世の美学が、「呼ぶもの」としての「光輝く」美の概念のうえに成り立つことを明らかにする。	同上	同上
4	近世初期の美学	近世初期に、こうした中世美学の伝承のなかから、美と愛の思想があふれ出ることを突き止める。	同上	同上
5	カントとシラー	カントの『判断力批判』を契機にして、新しい、ドイツの芸術文化運動が起こり、さまざまな活動が生ずるが、そのなかでも、シラーの見解に注目してみる。	同上	同上
6	ロマン主義の問題	フィヒテの自我論から、やがてドイツ・ロマン派の運動が起こるが、それのもつ意味について、全般的考察を加える	同上	同上
7	F・シュレーゲル	ドイツ・ロマン派の旗手、F・シュレーゲルの活動とその文学的思想的運動を、その根本から明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	シェリングの芸術論	ロマン派と結びついて、大きな活躍をしたシェリングの芸術論と人間観をたどりなおす。	渡邊二郎	渡邊二郎
9	ヘーゲルの美学	ヘーゲルは、ロマン派を引き継ぎつつ、芸術の意義を高めながらも、芸術の時代は終わったと見た。そのヘーゲルの見解をとらえなおす。	同上	同上
10	ディルタイと近代美学	ディルタイの近代美学論と詩人論を省みる。	同上	同上
11	フッサールとハイデッガーの言語論	フッサールの言語論、それの問題点、ハイデッガーの言語論と詩人論を理解する。	同上	同上
12	現象学派の美学	ベッカーその他、数多くの現象学派の美学の問題点を探る。	同上	同上
13	ソシュール言語学の周辺	ソシュールに始まる構造言語学の射程と、そこに登場する議論を省みる。	同上	同上
14	リクールの隠喩論と物語論	現代フランスのポール・リクールの隠喩と物語に関する見解を検討する。	同上	同上
15	サルトルの文学論	サルトルの文学論の意義を考えなおす。	同上	同上

＝書　誌　学（'99）＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉浦克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい

文献資料（書籍）を扱う書誌学は、歴史学や文学のための基礎となるばかりでなく、書きことばの変遷の具現した姿をとらえる学でもある。様々な時代の書籍の実例を、形状や書き表わし方によって整理して示し、その特色を考えながら、実際に個々の資料を読みとることで、古文献資料を扱う基礎的な知識を概説しようとするのが本講義の主なねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	書誌学への扉	書籍さらには文字書写物一般の歴史の概略を振り返り、古文献資料を扱う書誌学の主な項目やその意義を概説し、より古い時代の書籍の代表的な形状や装丁の実物例を挙げて紹介し、講義全体への導入とする。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
2	書籍の形状と料紙	書籍の形状や書函などの付随物についての基本的な事項を実物例を示して概説する。また料紙の材料や製法とその変遷、装飾などについて各々の特色を実際例を挙げて概説する。	同　上	同　上
3	書籍の取扱いと保存・修補	書籍の取り扱いを様々な装丁や付属物について概説する。また保存方法や修補の実際例を紹介し、保存と利用の関係を考えることで閲覧の際の注意事項を併せて概説する。	同　上	同　上
4	平仮名の読み方（1）	平仮名の発生・発達を概説し、いわゆる異体仮名の読み方について、主に版本の平仮名文の実例を用いて、類型的な字形・字体の平仮名の読み方を概説する。	同　上	同　上
5	平仮名の読み方（2）	主に古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、字母漢字を考えながら読むことによって、いわゆる異体仮名をある程度読みこなす方法を概説する。	同　上	同　上
6	仮名文の読み方	主に漢字仮名交じりの古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、平仮名文・漢字仮名交じり文の表記方法としての特色を考え、文章の内容や前後関係等も考慮した上での平仮名文の読み方を概説する。	同　上	同　上
7	漢字の読み方（1）	主に行書の版本資料の実例を用いて、類型的な字形・字体を部首などによって整理して把握することで個々の文字を読みとるための参考とするための要点を概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	漢字の読み方(2)	主に行書の資料の実例を用いて、筆跡を辿りながら漢字を判読するための要点を概説し、複数の伝本を互いに参考にしながら読む実例を示す。	杉浦克己	杉浦克己
9	漢文の読み方	基本的な漢文の句法や助字などの漢文中での働きを整理して示し、漢文・変体漢文の表記方法としての特色を考え、返点や送り仮名がなくてもある程度基本的な文意を把握するための要点を概説する。	同上	同上
10	訓点資料と片仮名文	漢文訓読の歴史を辿り、漢文の訓読の仕方の変遷と基本的な訓点資料の読み方を概説すると共に、漢文訓読と共に発達してきた片仮名文の代表例を紹介する。	同上	同上
11	書状と文書	書状の代表的な様式を、仮名・漢文各々の実例を挙げて紹介すると共に、公式令に挙げられた基本的な文書の様式を、公文書の実例によって概説する。	同上	同上
12	辞書の利用	古辞書の発達の歴史を、「読むための辞書」と「書くための辞書」という観点から整理して概説すると共に、その性格を活かして古文献資料の読解に役立つ実例を示す。	同上	同上
13	書写の経緯	古文献資料の書写の経緯を、奥書や周辺資料から辿る実例を示すと共に、複数の本文を比較検討してあるべき本文を考える校合の基本的な方法を実例を挙げて概説する。	同上	同上
14	古筆	古筆資料の実際例を時代やジャンルで整理して挙げ、書風だけではなく文字や用字法の変遷という観点からも比較対照して、各々の特色を整理し概説する。	同上	同上
15	出版と書籍	近世頃から盛んになった印刷の歴史を整理概説し、印刷によって出版業や書籍の流通経路が整備されていった跡を辿る。さらにこの変遷の最先端としての現代の印刷・出版・流通の実際例を紹介する。	同上	同上

＝ 発掘された古代日本（'９９） ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長）〕

全体のねらい

考古学は、人びとが生きるために大地に働きかけた跡である遺跡や、そこから出土するさまざまなモノ、すなわち遺物から人間の歴史を考える学問である。日本列島の各地で進められている発掘調査によって、考古学が旧石器時代から中世に至る日本列島の歴史をどこまで明かにしたかを紹介し、あわせて文献史学とはまた異なる歴史学としての考古学の役割を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	考古学への招待	考古学は、もの言わぬ遺跡や遺物からどのようにして歴史を読み取るのか。考古資料の特質、年代決定法、時期区分論、考古学による歴史の復元法など、考古学とはどのような学問であるかを解説する。	白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長）	白石太一郎（国立歴史民俗博物館副館長）
2	旧石器時代の日本列島	数十万年前に遡る原人の存在を明らかにした前期旧石器時代の遺跡や、日本列島固有の後期旧石器文化の成立など旧石器時代の研究の現状を紹介する。人類の進化についてもふれる。	岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）	岡村道雄（文化庁主任文化財調査官）
3	縄文文化の成立と展開	縄文文化の成立過程から１万年間にも及ぶ縄文時代の展開過程を概観し、世界史的な立場から日本列島に展開した特異な新石器文化の意味を考える。	同上	同上
4	縄文人の生活と文化	集落や貝塚などの発掘調査の成果にもとづき、食料採集民としてはきわめて豊かな生活文化であったとされる縄文人の生活の実態にせまる。実証的な研究成果によって縄文文化の実像を示す。	同上	同上
5	弥生文化の成立と展開	稲作農耕文化に基礎を置く弥生文化の成立過程とその後の展開過程を、東アジア史的視点で考える。弥生人の成立や縄文人との同異の問題や、西日本とは異なった東日本の弥生文化にもふれる。	設楽博己（国立歴史民俗博物館助教授）	設楽博己（国立歴史民俗博物館助教授）
6	弥生人の生活と文化	最近の考古学的調査の成果にもとづき、弥生時代の人びとの生活と文化の実相をわかりやすく示す。銅鐸などの青銅製祭器から想定される弥生人の宗教や精神生活にもふれる。	同上	同上
7	古墳のつくられた時代	古墳とは何かを、その出現の経過を跡づけることによって明らかにし、古墳造営の背後にある首長連合としてのヤマト政権の構造を考える。また各地の古墳のあり方の変化からヤマト政権の変質の過程を明確にする。	白石太一郎	白石太一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	古墳時代の社会と文化	豪族の居館や民衆の集落、さらに古墳のあり方などから古墳時代の社会の仕組みとその変化を追求するとともに、中国や朝鮮半島からの人や文物の流入が日本の社会や文化をどう変えたかを考える。	白石太一郎	白石太一郎
9	律令社会の成立とひろまり	7世紀末葉頃、日本は中国にならった中央集権的な律令国家を完成する。その成立の経緯とともに、出来上がった律令国家の構造や支配の仕組みを、考古学の成果をもとに考える。律令国家の世界史的位置づけやそれがその後の日本の歴史に与えた影響についてもふれる。	宇野隆夫（富山大学教授）	宇野隆夫（富山大学教授）
10	律令社会の産業と文化	最近の考古学の研究成果にもとづき、律令時代におけるさまざまな生産活動や流通の仕組み、さらに生産に従事する人びとがどう組織されていたのかなど、この時代に生きた人びとの生活の実態や文化のあり方を考える。	同上	同上
11	中世の富と権力	中世における経済や政治のあり方を博多、京都、越前一乗谷、鎌倉の発掘調査など、最近著しく進展した中世考古学の成果にもとづいて考える。東国政権の成立と展開や中世的世界の終末、近世への動きにもふれる。	小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）	小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
12	中世の町と村	考古学の立場から、中世を特徴づける都市をめぐるさまざまな問題、さらに東国と西国といった視点に立って、人びとの生活の舞台や生活文化から中世という時代を考える。	同上	同上
13	北海道の考古学	北海道が本州とは異なった歴史を歩みはじめた縄文時代以降の続縄文文化の時代から、擦文文化とオホーツク文化の時代を中心に、北海道考古学の研究成果を概観する。北方文化との交流やアイヌ文化の成立についてもふれる。	菊池徹夫（早稲田大学教授）	菊池徹夫（早稲田大学教授）
14	琉球列島の考古学	琉球列島が本州や九州の歴史とは違った歩みを明確にしはじめた貝塚時代から11～13世紀のグスク時代を中心に、琉球考古学の研究成果を概観する。また琉球王朝の成立や中国や東南アジアとの交流についてもふれる。	安里進（浦添市教育委員会文化課主幹）	安里進（浦添市教育委員会文化課主幹）
15	考古学と現代	最近進展の著しい環境考古学の研究成果を紹介するとともに、21世紀の人類が直面する環境問題などの大きな課題に考古学が何をなしえるのか、現代社会における考古学の役割や課題を討論形式で考える。	白石太一郎 辻誠一郎（国立歴史民俗博物館助教授）	白石太一郎 辻誠一郎（国立歴史民俗博物館助教授）

＝博物館概論（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石森秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、多様な博物館のあり方を紹介することによって、博物館に関する基礎的知識を概説することにある。とくに、現代社会における博物館の多様な展開を具体的に取り上げることによって、博物館が担う現代的役割を多面的に講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物館ことはじめ	現代世界において、博物館の多様化が急速に進みつつある。各種資料の収集・保管・展示・調査研究のあり方から、生涯学習や文化創造の拠点としての博物館の役割などを入門的に明らかにする。また、博物館関係法規や博物館倫理の問題についても概説する。	石森秀三（国立民族学博物館教授）	石森秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の歴史	近代博物館の原型は17世紀のヨーロッパでエリートによって形づくられた。米国では、18世紀に大衆教育のために博物館づくりが進展した。日本では欧米博物館の影響を受けつつ、独自の発展を遂げてきた。博物館の歴史を通して、その役割の変遷を明らかにする。	同上	同上
3	自然と生態の博物館	地球の多様な自然と生態をテーマにした博物館は数多くある。自然界における動植物の生態などの展示を通して、自然との共生の重要性を学ぶことができる。具体的事例を通して、自然生態系博物館の多様な役割を明らかにする。	同上	同上
4	科学と技術の博物館	人類がうみだした科学技術をテーマにした博物館は数多くある。科学技術系の博物館では、科学技術の歴史の展示だけでなく、現代における科学技術を遊びながら学べる工夫もなされている。具体的事例を通して、科学技術系博物館の役割を明らかにする。	同上	同上
5	芸術の博物館	芸術をテーマにした博物館は多様である。美術館は、代表的な芸術系博物館の一つである。そのほか、演劇や園芸をテーマにした芸術系博物館もある。さらに、科学技術と芸術文化を融合させたテクノロジー・アートを扱う博物館なども紹介する。	同上	同上
6	歴史の博物館	近年、日本では、歴史遺産の重要性がとみに高まっている。世界遺産の登録が相次ぐとともに、新しい歴史遺産の発掘が行われている。歴史をテーマにする博物館の役割を多面的に取り上げるとともに、歴史的追体験の場を提供する具体的事例を紹介する。	同上	同上
7	民族の博物館	欧米諸国では、世界の諸民族文化をテーマにした博物館が重要な役割を果たしてきた。日本における民族博物館の歴史は浅いが、民族問題がグローバルな課題になる中で、その重要性が増している。具体的事例を通して、民族博物館の役割を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	大学の博物館	欧米諸国では、大学附属の各種博物館が重要な役割を果たしている。米国では、1,158の大学のうち、526大学に博物館がある。それに対して、日本では大学附属博物館がいまだに未発達である。具体的事例を通して、大学博物館の役割を明らかにする。	石森秀三	石森秀三
9	企業の博物館	企業はその利益を社会に還元するために、さまざまな文化的貢献を果たしている。日本では現在、約400館の企業博物館が存在しており、社会的・文化的貢献をなしている。具体的な事例を通して、企業博物館が果たす多様な社会的役割を明らかにする。	同上	同上
10	途上国の博物館	近年、世界の数多くの開発途上国で博物館づくりが進められている。国家の歴史や諸民族の伝統文化を学ぶための教育施設だけでなく、新しい文化創造拠点としての役割も担っている。多様な役割を担う開発途上国の博物館の現状を紹介する。	同上	同上
11	エコ・ミュージアム	欧米諸国では、1960年代からエコ・ミュージアム（生活・環境博物館）という新しいタイプの博物館づくりが展開されてきた。1つの地域における人間と環境の関わりを一体的に表現する博物館をめざす「エコ・ミュージアム」の役割を具体的に紹介する。	同上	同上
12	博物館と地域社会	日本では近年、地域社会の活性化を図るために、博物館の役割が見直されている。博物館は、地域文化の活性化だけでなく、観光客誘致による地域経済の活性化にも貢献している。具体的事例を通して、地域社会における博物館の役割を明らかにする。	同上	同上
13	生涯学習と博物館	欧米諸国では、博物館が生涯学習の場として機能している。子どものための博物館や美術館などにおける具体的事例を通して、生涯学習拠点としての博物館の役割を明らかにするとともに、日本における問題点を多面的に検討する。	同上	同上
14	文化創造と博物館	博物館は、各種資料の収集・保管・展示・調査研究だけを目的にした施設ではなく、新しい文化の創造拠点としても重要な役割を果たしている。国内外における具体的事例を通して、文化創造拠点としての博物館の役割を紹介する。	同上	同上
15	博物館の未来	情報通信やマルチメディアの高度な発展によって、世界的に博物館のあり方が大きく変貌しつつある。21世紀を視野に入れて、デジタル・ミュージアムなどの新しい博物館の動きを取り上げ、博物館の未来を展望する。合わせて、博物館倫理の問題にも言及する。	同上	同上

＝言　語　学（'99）＝（ＴＶ）

〔主任講師：大江孝男（東京外国語大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間活動は言語による伝達活動によって組織され、社会的連帯を生み分業と協業を可能にする。どの社会でも言語の担う相対的な役割はほぼ同じである。伝達活動は内容を表現形式（言語）に変換し、表現形式によって諒解する。どのような構造をもち、どのようにして機能を果たすのか、考え方と研究方法の基礎について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	言語と言語学（一）言語学の研究対象	言語活動では、伝えたいと思う表現内容が発音行動を通じて音声に置き換えられて空中を伝わり、聴覚を刺激して理解される。発話行為を中心とするこの過程の中から研究対象を取り出して、その特質を考察し、研究分野について紹介する。	大江孝男（東京外国語大学名誉教授）	大江孝男（東京外国語大学名誉教授）
2	言語と言語活動	言語活動は、人間が伝達内容を他に理解させる活動である。表現と諒解は個人のレベルで別々に行われる心理活動であるにもかかわらず、共通の理解が成立する。言語が相互理解を媒介し得る機構とその機構が成立する理由とについて考察する。	同　上	同　上
3	言語と言語集団	伝達活動が効率よく成立するには言語の構造が等質的であるのが望ましいが、広がりをもつ社会では「ことば」の違いがみられるのが常識である。同じ社会の中で、違いの生ずる原因、方言の発生と共通語の成立について考える。	同　上	同　上
4	音声と音声記号	言語表現の外形である言語音声をどのようにして観察し記述するのか。音声の発音機構と聴覚印象との相互関係を考察し、実在の音声と可能な発音とについて正確に観察する方法と記録する方法とについて解説する。	同　上	同　上
5	世界と諸言語	地球上には何千という言語が話されておりよく知られてた言語はそのなかのごく少数である。世界の言語の分布をアジアから、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアへと、概観する。（巻末：世界の「言語分布地図」「共通語地図」）	同　上	同　上
6	言語の構造	音声と意味の結合した単位としての言語記号のもつ特質について考察する。音声面の構成単位、意味の面の特質、単語の機能、語順の役割などについて概観する。	同　上	同　上
7	音声と音韻（一）音素分析	音声資料から、記号の音形を構成する機能的単位である音素を抽出するための分析方法とその弁別素性をめぐって考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	音声と音韻(二) 音節とプロソディー	音素が互いに結合して記号の音形を構成するには、各言語に特有の結合規則に従ってまず音節を構成し、音節が単位となって音形を構成する。音節を構成する音素の結合規則、音形を構成する音節連結に音調律動を与えるアクセントや声調の規則について考える。	大江孝男	大江孝男
9	形態構造(一) 曲用と活用	動詞は活用するといい、名詞は曲用するというが、それぞれ、音形が一部は異なるが同じ形と意味を共有し形の違いが文中での機能の違いに並行的に対応してセットをなす単語の集合である。形の違いと機能の違いとの関係を追求する。	同上	同上
10	形態構造(二) 派生と合成	構成成分として別の単語を内部にふくむ単語は意外に多い。構成は単語を土台に小形式との接合構造をなしているものと、単語同士の結合構造をなすものとがある。このような単語の構造と構成について考察する。	同上	同上
11	統辞構造と統合型	単語が統合されて文の構成成分をなし、構成成分が統合されて文をつくる。統合される形式の文法的関係、機能、規則などを考察する。	同上	同上
12	文型と文構造	規則に従って統合された形式が発話されて文としての機能を果たす。文が連続してまとまった内容を表現する。文は、文全体に関わるイントネーションを持って発話され同じ構文でも意味が異なることがある。構文、イントネーションと文の種別について考察する。	同上	同上
13	言語の変化(一) 比較方法の基礎	個人のレベルでみると安定している言語も長い期間をかけて変化し、いくつかの言語に分かれることもある。言語変化の原因について考察し、規則的な音変化のもつ意義について考える。	同上	同上
14	言語の変化(二) 変遷の諸相	言語の変化は音変化だけではなく、形式の形はいろいろな要因によって変化する。いろいろな変化とその要因について考える。	同上	同上
15	言語と言語学(二) 20世紀の言語学	言語学は、19世紀の歴史研究の発達を契機に方法論をもつ近代科学として発展し、今世紀にいたって構造体系の研究へと展開してきた。これらの言語研究の特徴と現在の研究の動向について概観する。	同上	同上

＝応　　用　　数　　学＝（Ｒ）

〔主任講師：藤田　宏（明治大学教授）〕

全体のねらい

コンピュータなどによる数値的手段の進歩や対象領域の拡大を遠望しつつ、応用数学の基本的な発想法、概念、方法を解説する。数学的な明快さと具体性による納得にもとづいて展開し、数学による自然の理解と自然への働きかけを任務とする応用解析学への平易な入り口からの、しかし、現代風の誘いとしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	増殖の数理	最も初歩的な発展系である増殖の数理モデルから入り、1階微分方程式の基礎およびその豊かな応用について学ぶ。	藤田　宏（明治大学教授）	藤田　宏（明治大学教授）
2	振動の数理	微分方程式の最も重要な応用は力学における発展系の解析である。簡単な調和振動子から入り、特性根の方法を含め、2階微分方程式の初期値問題およびその応用の初歩について学ぶ。	同　上	同　上
3	競合の数理	量的に表される二つの勢力の間の時間発展をともなう競合の数理モデルは、簡単な場合については、連立微分方程式で与えられる。軍備拡張競争のモデルを扱うこの章は連立微分方程式への初期値問題への入門でもある。	同　上	同　上
4	惑星運動の数理（その1）	ニュートンによる力学と解析学の同時誕生のとき以来、惑星の運動の解析は数学による自然の理解の最大の成功例の一つである。特殊な非線形連立微分方程式の初期値問題に帰着するこの現象の数学モデルとその解析の理解に挑戦することは感激にあたいしよう。	同　上	同　上
5	惑星運動の数理（その2）	前回に引き続いて解析をすすめ、惑星の起動が楕円などの円錐曲線になることを導く。デカルトによる解析幾何が自然の理解に顕著な貢献をした例であることも学ぶ。	同　上	同　上
6	弦のつり合いの数理	多くの安定な発展系は時間が立つにつれてつり合いの状態、すなわち、定常状態に到達する。この定常状態の解析は数学的には境界値問題に帰着する。簡単な弦のつり合いを通じて境界値問題の基礎とその応用について学ぶ。	同　上	同　上
7	熱伝導と波動の数理（その1）	状態が時間のみならず空間変数にも依存する発展系、いいかえれば、分布定数系の時間発展の数学モデルは偏微分方程式の初期値問題になる。現象的にも数学的にも典型例である熱伝導と波動の数理を通じて、応用解析のハイライトであるこの問題と取り組む。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	熱伝導と波動の数理（その２）	前回に引き続き、当面の問題の扱いの基礎であり、応用数学の柱の一つであるフーリエ級数の概念および方法について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
9	熱伝導と波動の数理（その３）	前回および前前回に引き続き、フーリエ級数およびフーリエの変数分離法を用いて、針金の熱伝導（１次元放物型方程式）および弦の振動（１次元双曲型方程式）の問題を解決する。	同　上	同　上
10	発展系の数値解析（その１）	現在の科学技術における、偏微分方程式の、すなわち、分布定数系の実際的な応用は、コンピュータによる数値解法を抜きにしては成り立たない。そのための普遍的な方法である差分法による数値解法の基礎をすでに学んだ熱伝導の問題等について解説する。	桂田祐史（明治大学講師）	桂田祐史（明治大学講師）
11	発展系の数値解析（その２）	前回に引き続いて差分法による発展系の数値解法の考察を行い、かつ、定常状態への移行の問題、非線形問題への拡張について学ぶ。	同　上	同　上
12	フーリエ級数からフーリエ変換へ（その１）	フーリエ級数の威力を、変域が無限区間におよび場合に拡張しようとすれば、フーリエ変換あるいはフーリエ積分に到らねばならない。この趣旨どおりにフーリエ変換を導入しその基礎について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
13	フーリエ級数からフーリエ変換へ（その２）	前回に引き続き、理論的にも応用的にも全前空間を変域とする偏微分方程式の解析の基本であるフーリエ変換の性質および応用について学ぶ。	同　上	同　上
14	超関数；出合いとなじみ（その１）	δ関数を典型とする超関数の概念の理解は解析の自由な応用の支えである。その解説に当たっては、数学的な明快さは尊重しながらも、超関数との友好的な出会いと応用志向のなじみの構築を目的として展開していく。	同　上	同　上
15	超関数；出合いとなじみ（その２）	前回に引き続き、超関数が自由な解析操作を許す寛大な世界であることを学ぶ。	同　上	同　上

＝ 対称性の数学（'９８）＝（Ｒ）

〔主任講師：高橋礼司（元放送大学教授）〕

全体のねらい
平面図形の対称性の考察を通して群論的思考への入門をはかる。平面の結晶群の分類が一つの目標である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	対称性（シンメトリー）とは何か	シンメトリーという言葉の語源、左右対称、回転対称	高橋礼司（元放送大学教授）	高橋礼司（元放送大学教授）
2	平面の運動群（Ⅰ）	平行移動と回転	同　上	同　上
3	平面の運動群（Ⅱ）	反転、鏡映、ずらし鏡映	同　上	同　上
4	平面の運動群（Ⅲ）	平面の合同変換の分類について述べる。	同　上	同　上
5	正多角形とその対称群	正二面体群について述べる。	同　上	同　上
6	文様の対称群（Ⅰ）	有限な対称群をもつ文様に関するレオナルド・ダ・ヴィンチの定理	同　上	同　上
7	文様の対称群（Ⅱ）	帯状文様の対称群について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	文様の対称群(Ⅲ)	2次元の結晶群とその分類について述べる。	高橋礼司	高橋礼司
9	文様の対称群(Ⅳ)	続き	同上	同上
10	群の作用、軌道、固定群	定義と物質的性質	同上	同上
11	バーンサイドの定理	軌道個数の数え上げに関するバーンサイドの定理	同上	同上
12	空間の合同変換	3次元の運動群について述べる。	同上	同上
13	プラトンの正多面体	5個の正多面体について述べる。	同上	同上
14	回転群の有限部分群	バーンサイドの定理の応用	同上	同上
15	対称性の数学	まとめとこの後の発展について述べる。	同上	同上

＝解　　析　　学＝（Ｒ）

〔主任講師：長坂建二（法政大学教授）〕

全体のねらい

複素数の微分積分学である関数論から講義を始める。次いで、微分方程式を導入し、簡単な微分方程式の解法と解の存在について述べる。さらに、留数定理とその応用、ラプラス変換による線形微分方程式の解法、複素数の幾何学、等角写像等を論ずる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	複素数の定義と演算	代数的に複素数を定義し、その演算を定める。また、複素平面を導入し、複素数と平面上の１点を同一視する。さらに、位相をいれ、無限遠点を表現するリーマン球に触れる。	長坂建二（法政大学教授）	長坂建二（法政大学教授）
2	複素微分	複素数列の極限から複素関数の連続性について述べ、次いで微分可能の必要条件として、コーシー・リーマンの微分方程式を導く。また、十分条件を求め、放送教材ではその背景を探る。	同上	同上
3	オイラーの公式	複素指数関数を定め、その性質を述べる。特に、オイラーの公式を導き、（実）三角関数との関連を述べる。さらに、逆関数の一般論から対数関数を定義し、三角関数とその逆関数を求め、初等関数の範囲を定める。	同上	同上
4	複素積分	複素関数の積分を、線積分として定義できることを示し、正則弧上の計算例を与える。さらに、複素積分の基本的な性質、原始関数を持つ場合には実関数の積分と同様に微分積分学の基本定理が成り立つことを示す。	同上	同上
5	コーシーの定理	関数論の理論の立場ではもっとも重要なコーシーの定理について述べ、その意味を考える。完全な形での証明は無理のため、特別な場合についての証明を与え、位相の観点から説明を補う。	同上	同上
6	コーシーの積分公式	積分により正則関数やその導関数の値が表されるコーシーの積分公式を示し、複素関数まで拡張して微分積分学が始めて完結する状況を説明する。放送教材では複素積分の特徴を議論する。	同上	同上
7	１階微分方程式の解法	微分方程式とその解について説明し、簡単ではあっても応用上および理論的にも重要な１階微分方程式の主要なタイプの解法を説明し、例を与える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	存在定理	微分方程式の解が適当な条件の下では存在して、かつ一意的に定まるという「存在定理」を示す。線形微分方程式の解についても適用する。放送教材では、コーシーの貢献や決定論について論ずる。	長坂建二	長坂建二
9	特異点	複素関数の特異点の概念を導入し、その分類を与え、級数の展開項との関連を論ずる。さらに、留数とその計算法について詳しく述べ、特異点の本質に迫る。	同上	同上
10	留数定理	コーシーの定理の拡張より、複素関数の積分が、積分路で囲まれる領域に含まれる特異点の留数の和により本質的に表されることを示す。応用として、実関数の定積分の計算例を与える。	同上	同上
11	ラプラス変換	積分変換として重要なラプラス変換を定義し、複素関数の立場からその存在条件、基本性質、について述べる。また、いくつかの計算例を与える。	同上	同上
12	定数係数線形微分方程式	線形微分方程式の解の構造を明らかにする。また、一次独立な関数の判定法や生成法について述べ、ラプラス変換を用いて定数係数線形微分方程式を解く。放送教材では、回路の音を聞いて、微分方程式の解の性質について考える。	同上	同上
13	フロベニウスの方法	定数係数ではない線形微分方程式の解法について、巾級数による方法をまず述べる。また、特異点を利用するフロベニウスの方法により、特殊関数を生成するいくつかの微分方程式を解く。	同上	同上
14	複素数の幾何学	複素数の演算を、ベクトル空間の演算として理解し、四則演算を幾何学的に表す。また、方程式の解の分布への応用などを述べる。放送教材では、虚数の存在の認識を例に、科学哲学の立場からも追究する。	同上	同上
15	一次変換	簡単な関数である一次分数変換が、円を円に対応させる幾何学的な性質を持つことを示す。さらに、複素関数を写像として捕えて、その様子を述べると共に、いくつかの定理について言及する。	同上	同上

＝数　学　基　礎　論＝（Ｒ）

〔主任講師：隈部正博（放送大学助教授）〕

全体のねらい

論理学の基礎を数学的立場から解説する。目標はゲーデルの完全性定理の理解である。予備知識は特に要求しない。自然の理解専攻以外の学生向けでもある。数学的論理学の概要を理解するのがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	準備	この授業を受けるにあたって必要な予備知識について述べる。	隈部正博（放送大学助教授）	隈部正博（放送大学助教授）
2	同値関係と命題論理	同値関係について述べる。その後、命題論理とは何かについて述べ、論理式の定義をする。	同上	同上
3	真偽値	命題論理における真偽値を定義する。	同上	同上
4	トートロジー	命題論理におけるトートロジーの概念について述べる。	同上	同上
5	論理記号について	論理記号の完全性について述べる。	同上	同上
6	コンパクト性定理	コンパクト性定理の証明をする。	同上	同上
7	述語論理	述語論理を定義する。対象式と論理式を定義する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	構造	構造を定義する。そして、述語論理における論理式の真偽について考える。	隈部正博	隈部正博
9	ロジカルな満足性と演繹計算	述語論理における、ロジカルな満足性という概念について考える。その後、演繹計算とはどういうものか、簡単に述べる。合わせてゲーデルの完全性定理のもつ意味について述べる。	同上	同上
10	論理公理	論理公理とはどういうものかについて述べる。	同上	同上
11	演繹計算に関するいくつかの定理 その1	演繹計算についていくつかの定理を述べる。	同上	同上
12	演繹計算に関するいくつかの定理 その2	ひきつづき、演繹計算についていくつかの定理を述べる。	同上	同上
13	完全性定理の証明 その1	完全性定理の証明をする。	同上	同上
14	完全性定理の証明 その2	完全性定理の証明の続きをする。	同上	同上
15	完全性定理の証明 その3	完全性定理の証明を終える。また、述語論理におけるコンパクト性定理を証明する。	同上	同上

＝計　算　の　理　論＝　（Ｒ）

（主任講師：野崎昭弘（大妻女子大学教授））
（主任講師：仙波一郎（茨　城　大　学　教　授））

全体のねらい

いろいろな具体例を通して、異る型の計算問題に触れさせ、関連する技法の紹介や、効率の比較を行う。

全体をⅠ．計算の基礎、Ⅱ．計算の効率に分ける。Ⅰでは入門を兼ねて親しみやすい問題を多く入れ、解をさがす技法や「解がない」ことの証明の技法、Ⅱでは実用的な問題についての技法と効率の比較を行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数学的帰納法①	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	仙波一郎（茨城大学教授）	仙波一郎（茨城大学教授）
2	数学的帰納法②	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	同　上	同　上
3	背理法①	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくに、ピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同　上	同　上
4	背理法②	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくに、ピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同　上	同　上
5	部屋割論法	部屋割論法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ある条件を満たす解を具体的に求めることなく、解の存在を示すときに有用な論法である。	同　上	同　上
6	2値化	2値化の考え方を具体的な問題を通して説明する。解が存在しないことを示す場合にその切れ味を味わってほしい。	同　上	同　上
7	1対1対応	1対1対応の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。うまい対応づけによって、解が求められていく過程に注目してほしい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	バックトラック①	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	仙波一郎	仙波一郎
9	バックトラック②	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	同上	同上
10	順列の生成	順列を生成するいろいろな方法を紹介する。興味ある応用例を示す。	同上	同上
11	計算の効率	電卓を使って、複利計算 10万円×1.05×……×1.05 を実行する方法について考えてみます。こんな問題でも、方法の上手・下手によって、効率が全く違うのが、おもしろいところです。	野崎昭弘（大妻女子大学教授）	野崎昭弘（大妻女子大学教授）
12	方程式の解法	5次以上の代数方程式には、解の公式がありません。わからないのではなく「ありえない」のです。しかし数値計算で近似値を求めるのなら、何次方程式でもできます。このことをまた、効率の観点から、	同上	同上
13	表の検索	コンピューターに記憶された大量のデータから、目あてのものをさがしだす場合に典型的に現れるのが、「表の検索」です。簡単な工夫で検索時間が短くなり、卓抜なアイデでさらに劇的な短縮ができる例を紹介したいと思います。	同上	同上
14	旅行計画	東京．名古屋．金沢．新潟．大阪の各都市を訪問したいのですが、どんな順序で、どんなコースを通ればいいでしょうか？2都市間の最短コースをさがす問題から始めて、いくつかの計算問題とその解法を紹介します。	同上	同上
15	計算の理論の歴史	ギリシャ時代の工夫、たとえば「ユークリッドの互除法」から始まって、現代の最先端をゆく並列計算の理論まで、いくつかのポイントをひろいながら概説してみたいと思います。	同上	同上

＝ データとデータ解析 ＝ （Ｒ）

〔主任講師：栗原考次（岡山大学助教授）〕

全体のねらい

データ解析では、データに含まれるばらつきを客観的に分析し、不規則の中での法則性を見つけ、得られたデータから有効な情報をより多く引き出すことが必要である。

講義ではデータ解析のために各分野で共通に利用される統計的解析法の中から代表的な解析法を取り上げ、その考え方と利用方法について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現象とデータ	現象の解明などのために種々の情報が日々蓄積されている。これらの情報を正しくデータ解析するためには、観測する尺度およびデータの属性や構造に対する知識を身につける必要がある。講義では、こうしたデータに関わること全般について概説する。	栗原考次（岡山大学助教授）	栗原考次（岡山大学助教授）
2	データの分布	データに含まれるばらつきの分析のためには、統計グラフの有効的な利用やデータの分布の特性について知る必要がある。講義では、各種データの統計グラフ化の方法および種々のモデルをあてはめた場合の統計量の分布について概説する。	同　上	同　上
3	統計的推測法	対象とする母集団を解明するためには、母集団を特徴づける平均や分散などの母数についての推定や統計的仮説検定が不可欠である。講義では、推定を行う際に望まれる性質や仮説検定の手順や考え方を例題を含みながら概説する。	同　上	同　上
4	ノンパラメトリック検定法	対象とする母集団の分布形を仮定せず、ゆるい仮定でのモデルに基づき推測を行うのが、ノンパラメトリック法である。講義では、その中で最も利用されている2標本のノンパラメトリック検定について概説する。	同　上	同　上
5	相関分析	変量間の関連を調べるには、関連性を指標を用いて表す相関分析が行われる。講義では、量的データ、質的データおよび順序データについて、各々の指標の作成法とその利用法について解説する。	同　上	同　上
6	回帰分析	ある変量が他の変量にどのように依存しているかのように、変量間の因果関係を解明するためには回帰分析が用いられる。講義では、最もよく利用されている重回帰分析の考え方とその利用法について解説する。	同　上	同　上
7	主成分分析 その1	各個体について多変量のデータが観測される場合、構造を単純化するために、次元を縮小することが望まれる。講義では、そのための一つの方法である主成分分析を取り上げ、その考え方および利用法について概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	主成分分析その2	前の章の続きである。多くの変量をなるべく情報を失わずに少数の総合的な指標で代表させる観点から考える。講義では、具体的な例題を取り上げ、その解析結果の解釈なども含めて解説する。	栗原考次	栗原考次
9	判別分析その1	判別分析は、データをいくつかのグループに分けたり、新しくデータが観測された場合、そのデータがそれまでに分けられたどのグループに入るかを判別する解析法である。講義では、判別分析の考え方について変量数が少ない場合を例に概説する。	同上	同上
10	判別分析その2	前の章の続きである。講義では、2つ以上の変量の場合を取り上げ、判別の概念および誤判断確率や期待損失などについて具体例とともに解説する。	同上	同上
11	クラスター分析その1	得られたデータをいくつかのグループに分ける分類は古くから行われてきた。これらの分類手法を総称してクラスター分析と呼んでいる。講義では、クラスター分析の概念およびその利用法について概説する。	同上	同上
12	クラスター分析その2	前の章の続きである。講義では、分類を行うためのデータおよび変量間の類似度、非類似度さらに分類手法について具体例とともに解説する。	同上	同上
13	寿命データの解析	寿命データの特徴として、観測中の中途打ち切りデータなどの不完全データが多数含まれ、さらに関与する要因が複数であることがあげられる。ハザードや競合リスクの基本的概念とともにこれらのデータに対する解析法について解説する。	同上	同上
14	多段推測	データ解析の過程では逐次的に得られる情報の活用を行い、必要であれば標本を追加し、種々の統計的解析法を系列的に適用することも多い。講義では、統計的推測法の系列的適用に対する総有意水準、検出力、平均期待個数などの理論特性について解説する。	同上	同上
15	時系列分析	株価や空気中の二酸化炭素の量など時間の経過とともに順序をもって観測されるデータは時系列データとよばれる。こうしたデータの解析法は時系列に内存する統計的性質および将来の予測に使われる。講義では具体的な時系列データを通じて方法論を解説する。	同上	同上

＝統計の考え方＝（R）

〔主任講師：松原　望（東京大学教授）〕

全体のねらい
ベイズの定理を基礎とした、ベイズ統計学、ベイズ決定の基礎と、いろいろな方面への応用。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ベイズの定理	ベイズの定理の紹介と、基礎的意味づけ。	松原　望（東京大学教授）	松原　望（東京大学教授）
2	社会的リスクと決定	ベイズの定理を、確信の形成プロセスと考えて、いくつかの応用を通して、ベイズの定理の意味の理解を深める。	同　上	同　上
3	安全と社会的決定	確信形成のプロセスを、社会的決定に応用する。原子力発展の安全性を題材とする。	同　上	同　上
4	事後分布と統計的決定	ベイズ決定の最も基礎的部分の解説。	同　上	同　上
5	通信とベイズ決定	通信モデルを、ベイズ決定の典型と考えて、信号検出理論を理解する。	同　上	同　上
6	医学とベイズ決定	病名と症状の関係を、ベイズの定理でとらえて、ベイズ決定の理論を応用する。	同　上	同　上
7	医薬とベイズ統計学	新薬開発の採否の問題を、ベイズ統計学の立場から検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ベイズ推定	推定をベイズ統計学の立場から考える。特に線型回帰の問題、多変量の場合を扱う。	松原　望	松原　望
9	カルマン・フィルターとベイズ統計学	動的制御では不可欠のカルマン・フィルターを、ベイズ統計学の立場からとらえなおす。	同　上	同　上
10	イメージ・プロセシングとベイズ推定	ベイズの定理のもつ、事前予想のとり込み機能を、くずれたイメージの雑音除去に用いる。	同　上	同　上
11	パターン認識とベイズ決定	図形の判定を、ベイズ決定（推定）として行なう。従来から試みられている方法。	同　上	同　上
12	情報検索とベイズ決定	あまり触れられないが、情報を検索すべきか、どのカテゴリーに入れるかを、ベイズ決定として扱う。	同　上	同　上
13	信頼性とベイズ統計学	確率分布から確率を求めるプロセスで、ベイズの定理を用いる方法を考える。	同　上	同　上
14	経験的ベイズ決定	ベイズ統計学の変型として、しばしば提案される経験的ベイズ法の、紹介を行なう。	同　上	同　上
15	まとめ	ベイズ決定の応用の将来の可能性について、その問題点を検討する。	同　上	同　上

＝カオスの数理と技術＝（ＴＶ）

〔主任講師：合原一幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

本講義では、今世紀の科学における大きな発見の一つであるカオス（Ｃｈａｏｓ）を取り上げ、その数理的基礎及び応用技術について、様々な側面から解説する。本講義によって、カオス数理と技術に関する基本的知識を得るとともに、自然観・世界観を深め、さらにはカオス工学の将来を展望することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	カオスとその研究の歴史	カオスの理解が大きく進展したのは、最近二十年間のことであるが、その源流はニュートン力学が確立された十七世紀までさかのぼることができる。カオスの典型例を紹介するとともに、カオスの発見とその理解の深まりの背景と歴史を概説する。	合原一幸（東京大学教授）	合原一幸（東京大学教授）
2	離散時間力学系のカオス	カオスの基本的性質を理解するために、１変数の写像（離散時間力学系）であるベルヌーイ写像、ロジスティック写像、テント写像を取り上げ、その力学構造を解説する。さらに、より高い次元のカオス写像の例も紹介する。	同上	同上
3	連続時間力学系のカオス	連続時間力学系であるローレンツ方程式、レスラー方程式、ダフィング方程式などのカオスについて解説する。さらに、離散時間力学系と連続時間力学系との関連について考察する。	同上	同上
4	カオスと分岐	離散時間力学系や連続時間力学系において、パラメータ値の変化に伴なって、解の定性的性質が変化する分岐現象について解説する。さらにこの知識をふまえて、カオスが生成されるプロセス、すなわちカオスへ至る道すじについて考察する。	同上	合原一幸 上田哲史（徳島大学教授講師）
5	カオスとフラクタル	カオスの幾何学的性質は、自己相似すなわちフラクタルの概念で特徴づけることができる。フラクタルの典型例であるカントール集合を取り上げ、その直観に反した不思議な性質を明らかにするとともに、カオスとの関連を議論する。	同上	同上
6	カオスの特徴	カオスはその現象の底の深さゆえに、今だに数学的に厳密な定義はない。しかしながら多くのカオスが共有するいくつかの基本的性質は、明らかになってきている。これまでの講義の内容を基にして、カオスの数理的性質を整理する。	同上	合原一幸
7	リアルワールドのカオス	この世の中に実在するほとんどすべてのシステムは、人工システム、自然システムを問わず非線形性を有している。したがって、非線形システムの典型的振る舞いであるカオスも、世の中に広く見られる。これらの多様なカオスを実例を含めて紹介する。	同上	合原一幸 村重淳（運輸省船舶技術研究所研究官） 宮野尚哉（住友金属工業㈱未来技術研究所主任研究員）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	カオスと脳神経系	脳神経系は、21世紀科学の最大研究テーマとされ、現在世界中で大規模な研究計画が進行中である。他方で脳神経系においては、ミクロレベルからマクロレベルに至る様々な時空間スケールでカオス的現象が観測される。脳神経系のカオスについて概説する。	合原一幸	合原一幸
9	カオスニューラルネットワーク	脳神経系の高度情報処理機能を工学的に実現する人工的ニューラルネットワークが、新並列分散処理原理として注目を集めている。他方で脳を構成するニューロンは、一種のカオスデバイスである。カオスの人工的ニューラルネットワークへの応用について概説する。	同上	同上
10	カオスと計算	ある種のカオスは、計算能力を潜在的に有しており、現在のコンピュータの原型であるチューリングマシンと対応づけることも出来る。このようなカオスの複雑な性質を解説するとともに、カオスの計算の本質的困難さについても議論する。	同上	同上
11	カオスと制御	カオスと制御との関連について、はじめにカオスを抑制して周期状態を実現するカオス制御手法について解説する。次に、カオスをむしろ積極的に活用する制御原理であるハーネシングおよびホメオダイナミクスの考え方について議論する。	同上	合原一幸 安達雅春 (理化学研究所フロンティア研究員)
12	カオスと時系列解析	世の中には不規則に変動する時系列データが、あふれている。これらの時系列データをカオスの立場から解析するカオス時系列解析について、アトラクタ再構成、フラクタル次元解析、リアプノフスペクトラム解析など基礎的解析手法を概説する。	同上	合原一幸 池口徹 (東京理科大学助手)
13	カオスと予測	カオスはしばしば、単純な非線形法則に従って極めて複雑な振る舞いを生み出す。このことは逆に、複雑な時系列データの将来を、単純な非線形法則を用いて予測できる可能性を示唆している。カオスを予測する決定論的非線形予測手法について解説する。	同上	同上
14	カオスと電子回路	単純な非線形法則によって生成されるカオスは、その原理の単純さゆえに電子回路で容易に実装することができる。カオスを作る電子回路技術について解説するとともに、その多様な応用可能性を議論する。	同上	合原一幸 堀尾喜彦 (東京電機大学助教授)
15	カオス・複雑系と科学技術	工学の立場からカオスを研究するカオス工学の概要を整理するとともに、その将来を展望する。さらに21世紀の科学技術に向けて、高次元カオスや複雑系の研究の重要性とその工学的意義について考察する。	同上	合原一幸 田仲広明 (宇宙環境利用推進センター客員研究員)

＝パソコンによる解析入門＝（ＴＶ）

〔主任講師：森本光生（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

パーソナルコンピュータを利用して、数値実験を行い、グラフを描き、解析学（数列、級数、微分、積分、微分方程式）について解説する。

プログラミング言語としては、ＵＢＡＳＩＣを利用する。講義の中でプログラムにも触れるが、数学の理解を深めることが主たる目的である。

解析学は、無限ということを前提にして成り立っている。実数は、無限小数として表されるし、パラメータを無限大にして極限を取ることはごく普通の操作である。一方、パソコンでは、数値は有限桁でしか表示できないし、一つの演算には一定の時間がかかるので、演算を無限回繰り返すことは不可能である。従って、解析学とパソコンによる数値計算には、本質的な差異がある。この講義では、この差異を逆手に取って、パソコンによる数値計算という新しい観点に立って解析学を見直してみたいと思う。そのため、数値実験と理論を交差させながら、講義を進めたいと考えている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	パソコンによる計算	まず第一に、パソコンによる数値計算をするための手段としてＵＢＡＳＩＣという言語によるプログラム技法を学ぶ。基本的に、小学校以来習い覚えている加減乗除を行って数値計算はなされるが、誤差の累積の危険性を避けるためにも、数列の収束の遅速が問題になる。例えば、自然対数の底 e を求めるための級数 $e=1+\frac{1}{1!}+\frac{1}{2!}+\frac{1}{3!}+\cdots$ の収束は速いが、円周率に収束するライプニッツの級数 $\frac{\pi}{4}=1-\frac{1}{3}+\frac{1}{5}-\frac{1}{7}+\frac{1}{9}-\cdots$ の収束は遅い。	森本光生（国際基督教大学教授）	森本光生（国際基督教大学教授）
2	反復による平方根の求め方	a を正の数とする。$x\mapsto\frac{1}{2}\left(x+\frac{a}{x}\right)$ の反復で x は $\sqrt{a}$ に収束する。この収束は、『２乗収束』で高速である。これは、ニュートン法の一例である。数列の収束の概念を復習し、上の事実を証明する。また、パソコンによる数値実験も行う。	同　上	同　上
3	ライプニッツの級数とマチンの公式	第１回に述べたように、ライプニッツの級数の収束は遅く、円周率の数値計算には役に立たない。通常、円周率の数値計算は、マチンの公式により逆正接関数のべき級数展開を利用する。今回はマチンの公式を証明し、その威力をパソコンで確かめてみる。	同　上	同　上
4	パソコンによるグラフィックス	モニターのグラフィックス画面は方眼紙である。この方眼紙の枡目は、標準的には、 640×400 である。今回は、ここに描画するためのＵＢＡＳＩＣの命令を学ぶ。$y=f(x)$ のグラフをＵＢＡＳＩＣで描いてみよう。また、モニター画面に円を描いてみて、その面積をモンテカルロ法で求めれば、円周率が求められるはずである。どのくらい精度が得られるかＵＢＡＳＩＣの乱数で実験してみよう。	同　上	同　上
5	フーリエ級数のグラフ	フーリエ級数とは、三角級数とも呼ばれ、$f(x)=\frac{a_0}{2}+\sum_{m=1}^{\infty}(a_m\cos mx+b_m\sin mx)$ の形の級数である。周期 2π の関数はフーリエ級数に展開されることが知られている。無限級数はグラフに描くことはできないが、有限和のグラフを描いてみて、極限の関数の様子を探ってみたいと思う。必要なフーリエ級数の定理をいくつか紹介する。ワイエルストラウスは、連続だが至るところで微分できない関数をフーリエ級数として構成した。	同　上	同　上
6	テイラー展開のグラフ	関数のテイラー展開について説明する。例えば、$y=\sin x$ とそのテイラー展開の（始めの数項の）グラフを描いてみることによって、テイラー展開の意味を探る。これを利用して、ネピアの定数 e, 三角関数の値 $\sin x, \cos x$ などの精密な近似値を加減乗除だけで計算してみる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	関孝和の円周率計算	正方形の周の長さから出発して、辺の数を倍々に増やしていく。正2^n角形の周の長さは、整数から、加減乗除と開平算を組み合わせて求めることが出来る。$n \to \infty$とすれば円周率が求まるのであるが、この収束は遅くて数値計算に適さない。しかし、和算家の関孝和などは巧妙な加速法を知っていた。	森本光生	森本光生
8	建部賢弘の円周率計算	建部賢弘（たけべかたひろ）は、単位円に内接する正4角形、正8角形、正16角形、…、正1024角形の周の長さを計算し、この10個の数値から、43桁の円周率を求めた。彼は、いったいどのような方法で計算したのであろうか探ってみたい。	同上	同上
9	数値積分の公式	増加関数あるいは減少関数は積分を考えるとき基本的である。多くの積分可能な関数は増加関数と減少関数の差として表せるからである。$f(x)$を増加（減少）関数とした時、$\frac{1}{2}f(0)$は定積分$I=\int_0^1 f(x)dx$の不足（過剰）近似値で、$\frac{1}{2}f(1)$はIの過剰（不足）近似値である。従って、その平均$\frac{1}{2}(f(0)+f(1))$はIの近似値として適当である。これを台形公式という。今回は、台形の公式やシンプソンの公式について考察する。	同上	同上
10	数値積分の誤差解析	滑らかな関数の台形公式による数値積分の誤差解析は詳しく実行することができる。オイラーマクローリンの公式を紹介しよう。また、より高度の数値積分法についても触れてみたいと思う。	同上	同上
11	微分方程式の意味	$\dot{x}=ax$, $\dot{x}=a(1-x)x$ 等の例で微分方程式の表す自然現象について解説する。また、流れの図をパソコンによって描かせることにより、微分方程式とその解の数学的な関係について考える。微分方程式の一般解は曲線群を表す。適切な初期値を持つ解は、一意的に定まる。	同上	同上
12	微分方程式の求積法	変数分離型、同次型、一階線形微分方程式など、積分を実行することによって微分方程式の解が具体的に求められる場合がある。今回は、このような微分方程式の実例をいくつか取り上げ、計算例を見ることとする。	同上	同上
13	微分方程式の数値解法	最も簡単な微分方程式 $\dot{x}=\frac{dx}{dt}=f(x,t)$ を考察する。ここで $\dot{x}=\frac{dx}{dt}$ は関数$x(t)$の（時間）変数tによる導関数を表す。初期値$x(0)=x_0$を与えた時の近似解を折れ線近似（オイラー法）で求めてみる。オイラー法は近似が悪いので、それを改良する方策について述べる。	同上	同上
14	2次元線形自励系	$\dot{x}=ax+dy$, $\dot{y}=cx+dy$ という2次元の自励系は、$\dot{x}=Ax$という行列形で記述できる。パソコンの描く軌道図を眺めながら、この自励系の軌道と行列Aの固有値の関連について考察する。	同上	同上
15	2次元自励系の定常解	$\dot{x}=f(x,y)$, $\dot{y}=g(x,y)$ という2次元の自励系の解 $x=x(t)$, $y=y(t)$をパソコンに描かせながら、定常解の安定性について説明する。いわゆる極限円もパソコンで容易に描くことができる。	同上	同上

＝力　　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：堀　源一郎（富山国際大学教授）〕

全体のねらい

力学は物理学の基礎をなし、力学で使われる概念や法則は物理学の全分野に現われて、物理学そのものが力学から発展した歴史を示している。本講では、このような視点から、物理学入門としての力学の基本概念・法則を解説し、合せて日常身近かな力学現象から天体の運動まで、興味ある力学的話題を取り上げる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	落下の法則	物体の落下現象を力学的に理想化すると“質点の自由落下”となる。日常の最もありふれたこの現象を通して、質点、速度、加速度、自由落下などの力学量や概念を導入する。なお質量と重量の違いを明確にし、宇宙飛行士の体験する無重量状態にも言及する。	堀　源一郎（富山国際大学教授）	堀　源一郎（富山国際大学教授）
2	平行四辺形の法則	曲線運動を論ずる基礎として、ベクトルとしての変位、速度、加速度、力の合成・分解（平行四辺形の法則）を解説する。大きさと方向をもつ量でも、平行四辺形の法則に従わないものはベクトルではない。２つの運動の合成として放物運動を論ずる。	同　上	同　上
3	等速円運動	面積速度の法則を導入し、等速円運動の加速度が円の中心に向かうことを示してv^2/rの式を導く。次に非等速円運動を経て、曲率円を援用して一般の曲線運動に進む。その例として等速楕円運動、調和運動、惑星運動を取り上げる。	同　上	同　上
4	運動の法則	ニュートンの運動の法則には、力、運動量、力積などの力学量が現われる。これらもベクトルであり、運動の法則はベクトル式で表される。２つの物体の間に働く力は作用・反作用の法則に従う。なおここでベクトル算法の基本を解説する。	同　上	同　上
5	単振動	単振り子の小振動やフックの法則に従うバネの伸縮運動を単振動という。質点に働く力が平衡点からの変位に比例するときの運動であって、振動の周期は振幅によらない（等時性）。一般に平衡点の周りの小振動が単振動であるとき、その平衡点を安定という。	同　上	同　上
6	運動量と運動エネルギー・位置エネルギー	力学の創成期に争われた“活力論争”を紹介し、運動量と運動エネルギーを対比する。運動物体は停止するまでに仕事をし、高所の物体は落下によって仕事をする。仕事に変換される量としてエネルギーを導入する。なお運動量に関連してロケットの運動を論ずる。	同　上	同　上
7	衝突現象	２つの粒子の衝突の前後で粒子系の運動量は保存する。その際に系の運動エネルギーが保存するか減少するかで、それぞれ弾性、非弾性衝突という。前者の例として“カチカチ玉”を取り上げる。等質量粒子の衝突についてのホイヘンスの思考実験を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	万有引力	ニュートンの万有引力の法則は2つの質点間の引力として与えられ、広がりのある物体間の引力は物体を質点（質点要素）の集まりとして求める。ここでは薄い球殻と質点間の引力から始めて、均質球と質点の引力・ポテンシャル、自己重力ポテンシャルを求める。	堀　源一郎	堀　源一郎
9	慣性力と潮汐力	ダランベールの原理を解説し慣性力を導入する。遠心力は身近かな慣性力である。また潮汐力も慣性力によって理解が容易になる。さらに慣性力の例として、太陽と地球に引かれる月の運動、および太陽と木星に引かれるトロヤ群小惑星の運動を解説する。	同　上	同　上
10	回転座標系とフーコー振り子	ニュートンの運動方程式を回転座標系に移すと、慣性力として遠心力とコリオリ力が現われる。地表の物体には地球の万有引力と遠心力とが働き、その合力を重力という。一方のコリオリ力は大気や海水の流れに影響し、またフーコー振り子の振動面を回転させる。	同　上	同　上
11	剛体に働く力とその釣合	物体に働く力の効果は物体の変形と運動に現われるが、変形しない物体を考えて剛体という。剛体の重心を導入して、剛体の運動を、重心の運動（並進運動）と重心の回りの回転運動に分解する。剛体に幾つかの力が働いて並進も回転も起きないとき力は釣合っている。	同　上	同　上
12	固定軸の回りの回転	物体の固定軸の回りの回転は質点の直線運動に対比される。後者の速度、加速度、力、運動量にそれぞれ前者の角速度、角加速度、トルク、角運動量が対応し、特に質量に対するのは慣性モーメントとなる。また運動エネルギーも両者で類似の形に表される。	同　上	同　上
13	コマの運動	一定の角速度で回転し、回転軸が首振り（歳差運動）をするコマは、質点の等速円運動に対比される。後者で速度の方向が刻々変るのが前者の首振りに対応する。地球の自転もコマの運動であり、歳差運動を伴う。そのため生ずる天の北極の移動を歳差という。	同　上	同　上
14	束縛のある運動	天体の運動を除いて、地上で目にする運動は大方が束縛運動である。自動車は地面に、電車は線路に、ジェットコースターはその軌条に束縛されている。これらの束縛が実現されるのも力によるものと考えて束縛力を導入すれば、自由運動として扱える。	同　上	同　上
15	摩擦のある運動	天体の運動を除いて、地上で目にする運動は大方が摩擦を伴う運動である。摩擦のためにアリストテレスは力と速度が比例すると観察した。しかし摩擦がなければ人も車も進めない。クーロンの法則に基づいて静止摩擦、滑り摩擦、転がり摩擦を解説する。	同　上	同　上

＝光 と 電 磁 場＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部龍蔵（放送大学副学長）〕

全体のねらい

光は、私達の日常生活と密接な関係をもつだけでなく、大は宇宙から小は分子・原子にいたるまで、物理学上の重要な対象である。本講義では、光が電磁波であるとの前提に立ちその性質を調べるとともに、光を理解するための基礎ともいうべき電磁場を支配する基本的な物理法則について学んでいく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	光と光線	1.光線 2.光の反射・屈折 3.光の分散 4.レンズと光学器械 5.幾何光学と波動光学	阿部龍蔵（放送大学副学長）	阿部龍蔵（放送大学副学長）
2	波の性質 (1)	1.進行波 2.正弦波 3.波動方程式 4.ホイヘンスの原理	同上	同上
3	波の性質 (2)	1.反射の法則 2.屈折の法則 3.干渉と回折 4.光の干渉	同上	同上
4	光と電磁波	1.振動電流と電磁波 2.偏光 3.電磁波の分類 4.原子の出す光 5.レーザー	同上	同上
5	電流	1.電流のキャリヤー 2.オームの法則 3.電流密度 4.ジュール熱	同上	同上
6	電荷と電場	1.クーロンの法則 2.電場 3.ガウスの法則 4.ガウスの法則の応用	同上	同上
7	電位	1.電位 2.電位と仕事 3.導体 4.コンデンサー	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	誘電体中の電場	1.誘電体 2.電気双極子 3.電気分極 4.電束密度	阿部龍蔵	阿部龍蔵
9	ベクトル解析	1.ベクトル積 2.発散と回転 3.ガウスの定理 4.ストークスの定理	同上	同上
10	磁石と磁場	1.磁石と磁荷 2.磁気双極子 3.磁化 4.磁束密度	同上	同上
11	電流と磁場	1.電流が磁場から受ける力 2.電流の作る磁場 3.小さな長方形回路の作る磁場 4.アンペールの法則	同上	同上
12	時間変化する電磁場	1.電磁誘導 2.ファラデーの法則 3.マクスウェル・アンペールの法則 4.変位電流 5.自己インダクタンス	同上	同上
13	電磁場の基礎方程式	1.積分形の諸法則 2.マクスウェルの方程式 3.電場に対する境界条件 4.磁場に対する境界条件	同上	同上
14	電磁波の性質	1.マクスウェルの方程式の特別な場合 2.1次元の電磁波 3.電磁波の反射と屈折 4.光学的な疎密と位相変化	同上	同上
15	電磁場のエネルギー	1.電場のエネルギー 2.磁場のエネルギー 3.エネルギー保存則 4.ポインティングベクトル	同上	同上

＝ エネルギーと熱（'９８） ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：阿部龍蔵（放送大学副学長）〕
〔主任講師：堂寺知成（放送大学助教授）〕

全体のねらい

エネルギーとか熱という言葉は、日常生活でもよく使われる。本講義の目的は、エネルギーと熱の物理学としての正しい理解を提供することである。このため、豊富な映像を学習の一助とするとともに、CGを駆使し分子の熱運動などを視覚的に把握できるよう試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	各種のエネルギー	1．エネルギーとは 2．各種のエネルギー 3．エネルギーの変換とエネルギー保存則 4．仕事	阿部龍蔵（放送大学副学長）	阿部龍蔵（放送大学副学長）
2	力学的エネルギー	1．運動方程式と運動エネルギー 2．力学的エネルギー保存則 3．力学的エネルギーの例 4．力学的エネルギーの散逸	同上	同上
3	温度と熱	1．温度と熱平衡 2．圧力 3．ボイル・シャルルの法則 4．理想気体の状態方程式 5．熱量と比熱 6．熱と仕事	堂寺知成（放送大学助教授）	堂寺知成（放送大学助教授）
4	熱力学第一法則	1．エネルギーの保存（熱力学第一法則） 2．熱力学第一法則の応用 3．カルノーエンジン	同上	同上
5	熱力学第二法則(1)	1．可逆過程と不可逆過程 2．クラウジウスの原理とトムソンの原理 3．可逆サイクルと不可逆サイクル 4．クラウジウスの不等式	阿部龍蔵	阿部龍蔵
6	熱力学第二法則(2)	1．エントロピー 2．不可逆過程とエントロピー 3．第二法則の応用 4．各種の熱力学関数 5．化学ポテンシャル	同上	同上
7	分子の熱運動	1．ブラウン運動 2．分子運動論	堂寺知成	堂寺知成

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	マクスウェルの速度分布則	1．平均自由行程 2．ガウス積分 3．マクスウェルの速度分布 4．マクスウェルの速度分布の応用	堂寺知成	堂寺知成
9	統計力学の基本的な考え方	1．ほとんど独立な粒子の集まり 2．位相空間 3．エルゴード仮説 4．最大確率の分布	阿部龍蔵	阿部龍蔵
10	マクスウェル－ボルツマン分布	1．マクスウェル－ボルツマン分布 2．ボルツマンの原理 3．理想気体への応用 4．固体の比熱（アインシュタイン模型）	同上	同上
11	熱とエントロピー	1．配置のエントロピー 2．混合エントロピー	堂寺知成	堂寺知成
12	相転移の熱力学	1．相転移 2．多成分系の熱力学 3．相平衡 4．臨界現象	阿部龍蔵	阿部龍蔵
13	気相－液相の相転移	1．ファン・デル・ワールスの状態方程式 2．ファン・デル・ワールス気体の性質 3．格子気体 4．平均場近似 5．格子気体の気相－液相相転移 6．イジング模型	同上	同上
14	量子統計力学入門	1．スピンと量子統計 2．ボース分布とフェルミ分布 3．分子の振動・回転	同上	同上
15	理想フェルミ気体と理想ボース気体	1．理想フェルミ気体 2．電子比熱 3．デバイ模型 4．固体の比熱	同上	同上

＝相　　対　　論＝（Ｒ）

〔主任講師：藤井保憲（日本福祉大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、相対性理論全般にわたって平易な解説を目指す。数式の使用は必要最低限にし、直観的な説明を心がける。重要な点については、時間をかけて丁寧な説明をする。また相対性理論が現在の基礎研究や技術にどのように役立っているかにも焦点をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	相対性理論とは何か	特殊、および一般相対性理論とはどんなものか、詳細にはいる前に概観と現代の姿を与える。次に特殊相対性理論の成り立ちにはいる。以後の説明の準備として座標系、慣性系、またガリレイ変換などを解説し、また電磁気学における光速度との関連にもふれる。	藤井保憲（日本福祉大学教授）	藤井保憲（日本福祉大学教授）
2	同時刻とはどういうことか	光速度不変の原理から出発し、直感的な議論によって同時刻の相対性や動いている時計のおくれを示す。絶対時間概念の崩壊を強調し、ローレンツ変換を紹介する。それによって新しい速度の合成則を導く。	同　上	同　上
3	時空とは何か	ローレンツ変換の作用する場所としてミンコフスキー時空、その中の世界点、世界線、固有時について述べる。2次元から出発し、時計のおくれなどの現象を再現する。光円錐を説明する。4次元ベクトル、スカラー、ローレンツ不変量を解説する。	同　上	同　上
4	特殊相対性理論によって何がわかったか	4次元エネルギー・運動量ベクトルから $E=mc^2$ を導き、原子核エネルギーについて説明する。さらに速度とエネルギーの関係も議論し、加速器の原理を述べる。ディラック方程式、それに関連してスピンについても述べる。レーザージャイロなど、最近の応用にもふれる。	同　上	同　上
5	パズルはいかが	特殊相対性理論にかかわるいくつかのパズルに挑戦してみる。これまでに習ったことの練習問題にもなるし、さらに深い理解のためにもなるだろう。	同　上	同　上
6	一般相対性理論への道	一般相対性理論に導くいくつかの概念について説明する。特に非慣性系、慣性力、2種類の質量などを通じてニュートン力学の微妙な点にふれ、等価原理を理解する。エトヴェッシュの実験もとりあげる。	同　上	同　上
7	曲がった時空	加速度運動をあらわす曲がった世界線から、曲がった時空への着想について述べる。曲がった空間の幾何学の話しにはいる。計量、平行性、曲率、測地線などの概念を説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	重力は力ではない	運動方程式としての測地線の考え方を述べる。ニュートン的極限で、計量が重力ポテンシャルと解釈できることを示す。また回転座標系における円心力の例も考察する。等価原理のさらに深い到達点として、単なる慣性力と真の重力との違いについて説明する。	藤井保憲	藤井保憲
9	重力による時計のおくれ	等価原理の適用例として重力的赤方変位を導く。Pound-Rebka の実験、およびVessotの実験、さらにはこれを利用した重力計にも触れる。また最近の地球的規模の時計合わせの話題も含める。	同上	同上
10	アインシュタイン方程式	基本的考え方と結果を簡潔に述べる。またその苦心談も交える。ニュートン理論との関係、またその非線形性を強調する。その解として、線形解、静的厳密解、宇宙論的解があることを説明する。時空と物質との相互関係についても述べる。	同上	同上
11	シュワルツシルト解	シュワルツシルトに関する挿話を交えながら、解の特徴を説明する。ついでブラックホールの説明にはいる。地平線の性質、またそれへの落下の様子を解説する。またブラックホールの現実性についても語る。超新星との関連にも触れる。	同上	同上
12	太陽系	水星の近日点移動、太陽のまわりの光の曲がりについて、歴史的挿話と共に説明する。ついで最近の太陽系実験について述べる。さらに連星パルサーに関する話題も含め、実験重力の発展について語る。	同上	同上
13	重力波	重力波の特徴について説明し、その検出のための努力について述べる。また重力波天文学としての将来性についてもふれる。ついで宇宙論の基礎にはいる。	同上	同上
14	宇宙論	膨張宇宙の解を提示する。宇宙定数の挿話とハブルの発見について語る。赤方変位について説明し、現代のビグバン宇宙観について解説する。宇宙背景輻射、暗黒物質や宇宙定数などに関する話題も含める。	同上	同上
15	統一理論	素粒子物理学との接近について述べる。アインシュタイン理論のさらに奥にある統一理論について概説する。	同上	同上

＝量　子　力　学＝（ＴＶ）

（主任講師：阿部龍蔵（放送大学副学長））
（主任講師：川村　清（慶應義塾大学教授））

全体のねらい

分子、原子、電子などの挙動は量子力学の法則に従っている。したがって、素粒子、原子核、物性論などの現代的な物理学を理解するのに量子力学は必須の学問である。本講義では、量子力学の初等的なレベルから出発し、その基礎的な事項、応用面などに言及し、量子力学の全体像を紹介する予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	量子力学はなぜ必要か	1．古典物理学の破綻 2．ラザフォードの原子模型の欠点 3．水素原子のスペクトル 4．光電効果	阿部龍蔵（放送大学副学長）	阿部龍蔵（放送大学副学長）
2	波と粒子の二重性	1．アインシュタインの関係 2．ド・ブロイ波 3．ボーアの水素原子模型	同　上	同　上
3	シュレーディンガー方程式	1．古典的な波動方程式 2．シュレーディンガー方程式	同　上	同　上
4	シュレーディンガー方程式の簡単な例	1．波動関数 2．固い壁間の一次元粒子 3．水素原子の基底状態	同　上	同　上
5	一次元調和振動子	1．一次元調和振動子 2．エネルギー固有値 3．エルミート多項式	同　上	同　上
6	量子力学の一般原理	1．物理量と演算子 2．エルミート演算子 3．確率の法則 4．固有関数の完全性 5．行列による表現	同　上	同　上
7	量子力学と古典力学	1．波束 2．エーレンフェストの定理 3．不確定性原理 4．不確定性関係と交換関係	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	水素原子	1．シュレーディンガー方程式 2．球面調和関数 3．水素原子のエネルギー	阿部龍蔵	阿部龍蔵
9	角運動量	1．角運動量と角運動量保存則 2．角運動量演算子 3．角運動量保存則の証明 4．角運動量の固有値と交換関係	川村清(慶應義塾大学教授)	川村清(慶應義塾大学教授)
10	スピンと量子統計	1．スピン角運動量 2．スピン演算子とその固有値 3．スピン演算子の行列表現 4．フェルミ粒子とボーズ粒子	同上	同上
11	摂動論 (1) 時間に依存しない場合	1．摂動論とは 2．縮退のない場合の摂動論 3．縮退のある場合の摂動論 4．摂動論の応用	同上	同上
12	摂動論 (2) 時間に依存する場合	1．量子状態の時間変化 2．遷移確率 3．エネルギーの不確定性 4．原子による光の吸収と放出	同上	同上
13	変分法	1．変分原理 2．ラグランジュの未定係数法 3．ハートレー・フォック近似 4．パウリの原理と原子の構造	同上	同上
14	散乱問題 (1) 1次元系	1．1次元の散乱問題 2．ポテンシャル障壁とトンネル効果 3．電流連続の法則	同上	同上
15	散乱問題 (2) 3次元系	1．ド・ブロイ波の散乱 2．遠方での漸近形 3．入射波の波長と散乱角の関係 4．散乱断面積	同上	同上

＝現　代　物　理　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：小沼通二（武蔵工業大学教授）〕

全体のねらい

自然現象は、すべて基本的な法則に従っている。物理学は基本的な法則を次々に明らかにしてきた。20世紀の物理は特に大きな発展を遂げた。その成果は、興味深く、今日の技術に、そして生活に密接に関わっている。この講義では、現代の物理学の基本的な問題を丁寧に取り上げる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代の物理学	力学や電磁気学を中心にして確立したと思われた19世紀までの物理の限界を明らかにして、大きな飛躍を遂げた20世紀の物理の特徴を概観する。	小沼通二（武蔵工業大学教授）	小沼通二（武蔵工業大学教授）
2	相対性理論とは	アインシュタインはどのようにして相対性理論を作ったか。それまでの時間の概念はどのように変更されたか。その結果何が起こったか。	同　上	同　上
3	4次元の世界	相対性理論では、時間と空間の4次元の世界を扱わなければならない。その分析から、質量とエネルギーのアインシュタインの関係を導く。	同　上	同　上
4	重力と相対性理論	重力のある場合に拡張された一般相対性理論によれば、重力の影響で、光も曲がる。密度が極端に大きい天体であるブラックホールの近くでは重力がきわめて強くなっている。	同　上	同　上
5	量子の世界	20世紀の開幕とともに光が粒子のような性質を持つことが明らかになった。続いて粒子も波の性質を持つことがわかった。この二重性はなにを意味したのか？　量子力学への道をたどる。	同　上	同　上
6	量子力学では	量子力学の波動の特徴を、いくつかの例を使って明らかにする。元素の周期表は量子力学によって理解できる。	同　上	同　上
7	反粒子の存在	極微粒子の世界では、質量その他の性質が同じで、電荷などの量子数が逆の符号を持つ反粒子が存在する。特に電子の反粒子である陽電子は、研究用だけでなく、社会においても有効に利用されている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	加速器の物理	電磁気の力で微粒子を加速し、激しい衝突をさせてこれらの粒子の内部構造を調べたり、衝突の際に作られる粒子を分析することができる加速器が発明された。今日の加速器は広い科学技術の分野で応用・利用されている。	小沼通二	小沼通二
9	原子核とは	原子の芯の原子核は陽子と中性子が集まってできている。原子核の性質を調べ、原子核の構造を分析する。	同上	同上
10	原子核の変化	中世の錬金術の失敗以来、不変と思われてきた元素は、加速器を使って人工的に、また放射能を利用して天然に変化させることができるようになった。人類はプルトニウムなどの天然に存在しない元素も作り出した。	同上	同上
11	素粒子とは	自然界のあらゆるものは、素粒子からできている。かつては陽子や中性子が基本的な素粒子とされていたが、今日ではクォークとレプトンが基本とされている。	同上	同上
12	基本的な力	19世紀までに知られていた電磁気力と重力に、強い力と弱い力を加えた4つの力と、これらの力を媒介する粒子によって、自然界のすべての相互作用は説明できる。	同上	同上
13	宇宙の現在の姿	最近のいろいろな観測によって明らかになった現在の宇宙の姿を調べる。地球・月・太陽から太陽系・恒星・銀河に目を広げていこう。	表實(慶應義塾大学教授)	表實(慶應義塾大学教授)
14	宇宙の過去と未来	宇宙は不変でなく、進化している。これは観測によって裏付けられている。宇宙の年齢と今後について学ぼう。	同上	同上
15	物理と社会	物理は他の科学や技術に大きな影響を与え、技術の発展の成果が物理の研究にも貢献してきた。20世紀は、物理が国際社会の政治・経済・軍事などに深く関わった時代であった。これからの科学はどうあるべきだろうか。	小沼通二	小沼通二

＝物質科学－物理編＝（ＴＶ）

〔主任講師：上村　洸（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

物質の示す様々な巨視的性質をミクロの法則で如何に解明できるかを、量子論の初歩的な段階から出発して、分かり易く講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の構成要素－原子－	物質の構成要素である原子の電子状態について、最も簡単な原子である水素原子を例にとって、そのミクロな特徴を解説する。特にミクロな世界を支配する量子力学の復習に力点をおく。これを基にして原子の周期表を統一的に説明する。	上村　洸（東京理科大学教授）	上村　洸（東京理科大学教授）
2	原子から分子へ	自然界には、原子が単独として存在するよりは、分子あるいはその凝集体として存在するものが多い。原子が集って結晶ができる機構を学ぶ第一歩として、なぜ分子ができるかの原因を最も簡単な水素分子を例にとって説明する。	同　上	同　上
3	原子から結晶へ	日常我々が対象とする物質の多くは結晶状になっている。まずいろいろなタイプの結晶がなぜできるのかを考察する。次に原子が規則正しく配列している結晶の特徴について、並進対称性と逆格子の概念を説明し、結晶によるＸ線回析や格子振動について説明する	中尾憲司（筑波大学教授）	中尾憲司（筑波大学教授）
4	結晶の中の電子	結晶中の電子の基本的性質（ブロッホの定理）を説明し、それに由来するエネルギーバンド構造を、殆ど自由な電子の近似で議論し、その特徴を説明する。バンド構造による金属と絶縁体の違いを明らかにする。	同　上	同　上
5	金属	金属中の伝導電子は、フェルミ統計に従う互いに独立な粒子とし振舞う。この考え方に基づいて、電子比熱、パウリスピン常磁性、フェルミ面の形状等、金属中の伝導電子の示す重要な性質について説明する。さらにド・ハースファン・アルフェン効果等磁場中の伝導電子の振舞いについて、そのエネルギー準位（ランダワ準位）に基づいて説明をする。	上村　洸	上村　洸
6	半導体	代表的な半導体のシリコン、GaAs等のエネルギーバンドの特徴を概観する。特にエネルギーギャップと有効質量の重要性、不純物の導入による浅い不純物準位の存在を指摘して、半導体中の伝導電子の特徴、絶縁体との違いを説明する。	中尾憲司	中尾憲司
7	固体の伝導現象	電気伝導とホール効果について説明する。次に金属と半導体現象について、その特徴の違いを議論する。	川路紳治（学習院大学教授）	川路紳治（学習院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	光に対する性質	固体の光に対する性質の特徴を考察する。たとえば、金属についてはなぜ光沢があるか、半導体と絶縁体についてはなぜ透明かなど、固体での光の吸収，反射，発光現象とその電子論的メカニズムを説明する。	国府田隆夫（日本女子大学教授） 五神　誠（東京大学助教授）	五神　誠（東京大学助教授）
9	磁性体とは	巨視的な物質は、反磁性体、常磁性体、強磁性体である。これらの磁性をになうものは、その構成要素である電子の磁気モーメントである。巨視的な物質に磁場を加えると、どのようにして磁化が発生するのかを、ミクロなメカニズムに立って説明する。	近　桂一郎（早稲田大学教授	近　桂一郎（早稲田大学教授
10	磁性のミクロな起源	強磁性体、反強磁性体では、ミクロな磁気モーメントが自発的に整列した秩序状態ができ上がっている。このことを示す実験事実を紹介する。さらに、モーメントの整列を引き起こす力の原因について説明し、特に種々の強磁性物質を紹介する	同　上	同　上
11	磁性体と光	ルビー、サファイアなどの宝石はなぜ美しい色を示すか、鉄族イオンを含む常磁性体を例にとって、その光物性の特徴を説明する	同　上	三須　明（東京理科大学教授）
12	超伝導	量子効果の最も目ざましい巨視的発現である超伝導の本質をできるかぎり平易に解説する。	小林俊一（東京大学教授）	小林俊一（東京大学教授）
13	半導体素子の基礎	ｐｎ接合の構造と整流特性を説明し、これを利用したトランジスタ作用を解説する。	川路紳治	川路紳治
14	固体表面の電子	表面の電子状態は結晶内部の状態とは異なる。表面で起こるいろいろな現象を理解するには、表面の電子状態を知ることが重要である。表面にとらえられた電子の状態、仕事関数の成立ち、化学吸着のメカニズムについて述べる。さらに表面の励起機構や、電子分光法の原理について説明する。	塚田　捷（東京大学教授）	塚田　捷（東京大学教授）
15	固体の表面構造	固体の表面は結晶内部とは異なる原子構造となっている。いくつかの特徴的な例を示し、その原因について考える。表面に特有な秩序状態や表面上の原子の振動や拡散についても紹介する。	同　上	同　上

＝ 物質の科学・量子化学（'９８） ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：朽津耕三（城西大学教授）〕
〔主任講師：濱田嘉昭（放送大学助教授）〕

全体のねらい

物質の織りなす様々な現象を理解し、特に化学的な知識と技術で物質を調べ、あるいは新しい物質を創造するには分子およびその集合体の性質を量子論に基づいて理解することが必要である。この自然科学の重要な分野である量子化学の基礎をわかりやすく講義するとともに、日常の自然現象の理解あるいは様々な物質研究への量子化学の適用例を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論－物質の個性と分子の個性	物質の基本単位である分子は非常に小さく、軽いばかりでなく、マクロの物質の性質とは異なった独特の個性を持っている。われわれが見たり触れたりするマクロの物質の性質は、それを構成する分子の個性によって決められている。その関連について説明する。	朽津耕三（城西大学教授）	朽津耕三（城西大学教授）
2	ミクロの世界の記述	分子の不思議な性質・挙動を理解するには、ミクロの粒子の運動と性質を正しく記述する量子力学を学ぶ必要がある。分子に適用する量子力学として、波動関数とエネルギー固有値という考え方の基本について説明する。	同上	同上
3	原子の電子構造	分子は原子が結合してできたものである。分子の成り立ちを理解するには原子の性質、特に原子の中の電子の性質を知る必要がある。電子のエネルギーと電子が運動する空間＝オービタルについての考え方を量子力学に基づいて説明する。	同上	同上
4	原子から分子へ－化学結合のなりたち	原子と原子が結合して分子を形づくる理由を原子価結合法と分子軌道法の考え方で説明する。分子軌道の対称性、ポテンシャルエネルギー曲線、および量子状態の考え方について説明する。	同上	同上
5	二原子分子の結合と電子構造	いくつかの典型的な二原子分子をとって、分子軌道の性質、電子の配置、軌道エネルギーなどを説明する。電荷分布の偏り、結合の強さと分子軌道の関連について説明する。	同上	同上
6	多原子分子の結合と電子構造	有機化合物の結合を考える場合に重要な混成軌道について述べ、分子の化学的性質を理解する上で重要な分子軌道の考え方と使い方について説明する。	同上	同上
7	ミクロの世界の観測	分子を実験的に測定する方法の特徴を解説し、特に量子化されたエネルギー準位の間の遷移を測定する分光法の原理を詳しく説明する。分光法の特徴を利用した分子構造研究の例を紹介する。	濱田嘉昭（放送大学助教授）	濱田嘉昭（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	π電子系の電子構造	電子のエネルギー準位を測定する可視・紫外スペクトルについて述べる。電子遷移は物体の色に直接の関連した現象であることを説明し、実例としてカラー写真およびカラーコピーの原理と実際を解説する。	濱田嘉昭	濱田嘉昭
9	d電子系の電子構造	第4周期以降の原子からなる分子の化学結合にはd電子が関与する。また金属と有機分子を含む化合物でもd電子が関与しており、複雑な色合いや反応の原因となっている。分子構造を決める有力な実験手法の一つであるX線回折法について、錯体の構造と電子密度を例にとって説明する。	齋藤太郎(東京大学教授)	齋藤太郎(東京大学教授)
10	分子の振動	分子の結合は微小な周期的振動をしている。この振動運動のエネルギーを赤外線スペクトルとして測定することにより、結合の強さを決定できる。振動分光法とその応用について解説する。	濱田嘉昭	濱田嘉昭
11	分子の回転	分子の回転運動のエネルギーも量子化されており、そのスペクトルをマイクロ波あるいは遠赤外線領域で測定することにより分子構造を決めることを実例によって示す。	同上	同上
12	電子スピンと核スピン	電子スピンや核スピンが関係するスペクトルについて説明する。電子スピン共鳴法や核磁気共鳴法を利用した分子構造決定の例を紹介し、分子磁性を利用した将来の発展性を考える。	濱田嘉昭 工位武治(大阪市立大学教授)	濱田嘉昭 工位武治(大阪市立大学教授)
13	分子の動的構造	非常に短い時間スケールで分子の構造や結合の変化はレーザーにより追跡できる。レーザーの発振の原理と特徴について解説し、それによって明らかにされた分子の姿の例を紹介する。	佐藤博保(三重大学教授)	佐藤博保(三重大学教授)
14	分子間相互作用	マクロの物体は多くの分子が積み重なってできあがっている。この分子同士を結びつけている弱い力の原因について述べる。マクロとミクロを結ぶ分子集合体として注目を集めているいくつかの物質系とその性質および実験について紹介する。	朽津耕三	朽津耕三
15	量子化学の最前線	分子の構造と性質を測定する実験手段と理論の現在の展開を概観し、新しい物質の個性を創造する化学の将来の見通しを述べる。	同上	同上

＝物質の科学・物理化学＝（ＴＶ）

〔主任講師：平川暁子（放送大学教授）〕
〔主任講師：土屋荘次（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

物質は、原子・分子の集合体である。本講義の目標は、物質の示す多様性を原子・分子のレベルで解明するための考え方を体得させることにある。すなわち、物質の構造・物性・反応を構成原子・分子のミクロな振舞いに基づいて平易に講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質と原子・分子	序論、物質を原子・分子の集合体として扱う必然性を例を挙げて説明した後、本講義の他の自然科学科目の中での位置付けを与え、15回の講義の内容を概観する。 物理化学の基礎　ミクロとマクロの関係、エネルギー量子、原子スペクトル、原子の電子構造、周期律を説明し、物質のミクロな視点の準備を行う。	土屋荘次（日本女子大学教授）	土屋荘次（日本女子大学教授）
2	原子の構造と周期律		同上	同上
3	回析でみる分子の構造	回析法による分子の構造決定　原理の易しい説明と、X線回析・電子回折の実際を紹介する。2原子分子からタンパク質のような巨大分子の構造を基本原則に立って理解させる。	小谷正博（学習院大学教授）	小谷正博（学習院大学教授）
4	スペクトルでみる分子の構造	分光法による分子の構造決定　分子の回転や振動のスペクトル測定から分子構造がいかに決定できるかを解説する。マイクロ波、赤外、ラマン分光の基本を紹介した後、分子内部回転、すなわち、単結合周りの構造の分光研究をとりあげ、これが有機分子のコンフォーメーションや生体物質を含む高分子構造の基礎であることを解説する。	平川暁子（放送大学教授）	平川暁子（放送大学教授）
5	分子の振動運動と構造		同上	同上
6	化学結合のしくみ(1)	分子の構造と性質の量子化学的基礎づけ　回折法・分光法で求められた構造を量子力学の立場から再構築する。化学結合の多様性が電子の波動関数によって明解に説明できることを示す。 分子軌道、シグマとパイ結合、結合の極性、混成軌道、錯化合物、共役系（色素・芳香族など）。	同上	同上
7	化学結合のしくみ(2)		同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	物質のエネルギーと変化(1)	内部エネルギーとエントロピー　分子のもつさまざまな運動自由度の量子準位を基礎として、分子集合体が統計平均としてとり得るエネルギーを計算する。これは、熱力学で定義される内部エネルギーと等価である。また、各量子準位への分布の可能性がエントロピーと結びつき、この二つの量が物質のとり得る平衡状態を決定づけていることを解説する。 次に、化学結合の切断を含む物質変化の起る方向を予測し、最終的に到達する化学平衡状態を明らかにする。多様な化学変化の研究のために熱力学関数のデータが整備されていることを紹介する。 内部エネルギー、熱容量、エントロピー、自由エネルギー、平衡、化学平衡、熱力学関数データベース	土屋荘次	土屋荘次
9	物質のエネルギーと変化(2)		同上	同上
10	化学平衡		同上	同上
11	固体の構造	原子・分子の集合体として物質のとり得るさまざまな構造を紹介し、それらの構造をもたらす要因を解説する。 結晶構造とそれを決める要因	小谷正博	小谷正博
12	固体の性質(1)	物質の熱的性質を支配している分子論的要因を検討し、そのとり得る相とその変化をとりあげる。さらに、物質の電子的性質をその電子構造に基づいて説明する。 固体の力学的性質、熱的性質、電気的性質、金属の自由電子、バンド構造、金属と絶縁体、半導体。	同上	同上
13	固体の性質(2)		同上	同上
14	化学反応のしくみ	化学変化の起る速さ、反応速度を規定する分子レベルの基礎を解説する。すべての化学反応は、分子間相互作用、すなわち、素反応の組み合わせであることを明らかにする。また、反応速度を支配している分子的要因も追及する。	土屋荘次	土屋荘次
15	いろいろな化学反応	化学反応は反応の起る環境によっても大きく変化する。表面や酵素の関与する反応の特徴を実例を挙げて解説する。 素反応、複合反応、表面反応、酵素反応。	同上	同上

＝物質の科学・有機化合物（９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：徳丸克己(筑波大学名誉教授)〕

全体のねらい

有機化合物は吾々の衣食住の数多くの材料として、自動車や電気製品などに、また半導体、情報表示機器、高度の医薬など先端的産業に不可欠の物質として数多く使用されている。このような産業の基礎物質の有機化合物を主題として、その製造の流れ、特徴、その反応や物性に及ぼす構造の効果を分子レベルで述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	有機化合物の世界～化学原料としての石油～	衣食住、自動車、電気製品、先端材料における有機化合物の重要な役割。そのさまざまな物質の原料となる重要な資源としての石油と天然ガス。燃料としての石油。燃焼とその排ガスによる汚染の防除。	徳丸克己（筑波大学名誉教授）	徳丸克己（筑波大学名誉教授）
2	都市ガス、ロウソク、ポリエチレン	炭化水素：メタン、エタン、エチレン、アセチレン、シクロヘキサン、ベンゼンなど。飽和、不飽和、脂環、芳香族。シグマ電子とパイ電子。種々の異性体（構造、幾何、回転、立体）。重合。塩素化。ポリ塩化ビニル。殺虫剤、フロン。	同上	同上
3	香りのもとの酸素化合物、酸素の働き	炭化水素、アルコール、アルデヒド、ケトン、カルボン酸。メタノール、エタノール（合成とバイオ）、アセトアルデヒド、エチレンオキシド、エチレングリコール、酢酸の製造。実験室の合成と触媒を用いる工業的製造。香料。	同上	同上
4	反応の進み方	基本的な反応（置換反応、脱離反応、付加反応）の特徴。１分子反応と２分子反応。カルボカチオンとその観測。立体化学、光学異性。	同上	同上
5	油脂と洗剤	生体内で生成する天然の油脂とそれを構成する脂肪酸。エステル。石鹸。界面活性剤、種々の合成洗剤。有機酸の強さ。	同上	同上
6	合成繊維と炭素材料	石油の精留と石油からのポリエステルの製造。セルロースのエステル。石油からポリアクリル酸メチル、ポリメタクリル酸メチルの製造。光学材料。ポリアクリロニトリル、炭素繊維、さまざまな炭素の同素体：ダイアモンド、グラファイト、フラーレン。	同上	同上
7	染料と芳香族化合物の反応の進み方	石油や石炭からのベンゼン系炭化水素から種々の物質やアゾ染料の製造。芳香族性。石炭化学、インヂゴなどの染料の合成。建染め染料。ハイテクとしての色素。芳香族化合物の反応の進み方：ニトロ化の配向性、相対反応性。電荷移動。分子軌道。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	プラスチック、ナイロンと絹	石油からのプラスチックやナイロンの製造。ナイロン66とナイロン6。絹フィブロイン。タンパク質。核酸。	徳丸克己	徳丸克己
9	高性能ポリマーと酸素による劣化の抑止	立体規則的なポリマーの製造。硬い構造のポリマー、ベークライト、尿素ホルマリン樹脂。天然ゴムと合成ゴム。酸素による物質の劣化、生体の老化とその抑止、抗酸化剤。	同上	同上
10	光るによる物質の変化	物質に対する光の作用の化学。物質製造としての植物の光合成、情報伝達としての動物の視覚の化学。光の作用による結合の開裂、変化と電子の移動。蛍光物質。レーザー。フォトクロミズム。半導体製造のためのフォトレジスト。印刷。	同上	徳丸克己 新井達郎（筑波大学科学系助教授）
11	光・電子有機機能材料の化学	カラー写真、電子写真（コピー）、エレクトロルミネッセンス、有機電導体、「合成金属」などの電子機能材料。光や電場による電子の移動（酸化還元）の進み方。	同上	徳丸克己 成田彦（筑波大学科学系助教授）
12	調味料、医薬、農薬	いくつかの調味料、医薬、農薬の構造、とくにその立体化学。立体特異的合成。有機金属化合物。バイオの役割。	同上	徳丸克己
13	天然有機化合物の世界	さまざまな機能を示す天然有機化合物のうち二三の例。その構造と機能。	中西香爾（コロンビア大学教授）	中西香爾（コロンビア大学教授）
14	有機ケイ素化合物の世界	さまざまな有機ケイ素化合物。その合成、物性、利用。	櫻井英樹（東京理科大学教授）	櫻井英樹（東京理科大学教授）
15	拡がりゆく有機化合物の世界	将来の展開が期待されている各種の有機化合物、種々の反応や性質。	徳丸克己	徳丸克己

＝物質の科学・分析（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：一國雅巳（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

科学技術の進歩に伴って多種多様な化学分析法が開発されてきた。それに伴って化学分析に対する要求も高度化し、分析法の選択に当たっては、それぞれの分析法にどのような特徴があるかを知らなければならない。この講義の目標はそのための基礎知識を与えることにある。環境分析を例に具体的問題を取り扱う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	化学分析とはなにか	現代の化学分析は機器を用いた定量分析が主流である。化学分析に要求される条件として正確さ、迅速性、コストがある。機器の高度化、コンピュータの導入はこれらの要求を満足する上での当然の帰結であり、この進歩を支えているのが化学分析の基礎研究である。	一國雅巳（東京工業大学名誉教授）	一國雅巳（東京工業大学名誉教授）
2	容量分析	滴定を例に化学分析でどこまで正確な結果が得られるかを考察する。試薬の秤量、標準溶液の調製、滴定量の測定、終点の判定、妨害成分の共存など誤差の原因となる事項を個別的に検討する。終点の決定に機器分析を導入することの利点についても述べる。	同上	同上
3	重量分析	重量分析は正確さが要求されるときに用いられる分析法である。重量分析の核心部分は溶液中の化学種の沈殿分離にあるが、その研究は溶液中のイオン種の挙動の解明と沈殿分離法の開発に大きく貢献した。重量分析を原理と実用性の両面から解説する。	同上	同上
4	吸光光度分析	着色した溶液が光を吸収することを利用した吸光光度分析は古典的機器分析である。原理は簡単であるが、実用面では発色条件の最適化、検量線の作成、共存成分による妨害の除去などの問題がある。この分析法を例に機器分析の基本的事項について解説する。	一國雅巳 吉村和久（九州大学理学部教授）	同上
5	原子吸光分析	金属元素の分析法として広く利用されている原子吸光分析の原理・応用とその限界について述べる。この分析法では試料中の成分の原子化と共存成分による干渉の除去が重要である。フレーム、電熱による原子化を比較し、この分析法の高感度化について解説する。	一國雅巳	同上
6	発光分光分析	標題分析法の原理、その発展の歴史と現状について述べる。古典的アーク、スパーク光源を用いた分析、フレーム光源の実用化によるアルカリ金属定量、近年におけるプラズマ光源の導入が実現した高感度・多元素同時分析について解説する。	同上	同上
7	試料の採取と調製	与えられた試料が大量である場合、そこから全体を代表するように、一部分を取り出し、それを分析に適した形態、たとえば溶液に変える操作が必要となる。試料の採取における問題点、分析データ処理の方法、固体試料の溶解法について述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	分離と濃縮	マトリックス成分から特定の成分を分離・濃縮する方法について述べる。沈殿、溶媒抽出は古典的分離法であるが、分離に関与する因子の影響を定量的に解析することができる。分離・濃縮法と定量法が密接に関連していることを例をあげて説明する。	一國雅巳	一國雅巳
9	電気分析	電気分析を物性特性（電気伝導度など）と電気化学反応を伴う測定（電位差、電流など）に分け、それぞれの方法の原理、特徴、装置、応用例について述べる。ガラス電極などのイオン選択電極を用いた電位差測定と他の分析法との組み合わせにも言及する。	同上	同上
10	質量分析	高感度分析法としての質量分析の重要性について述べる。試料をイオン化し、イオンを質量／電荷比に従って分離し、電気的に検出するまでの過程について説明する。目的に応じて使用される各種の質量分析計とその応用例（同位体存在比の測定など）を紹介する。	同上	同上
11	放射化分析	試料を中性子で照射し、生成した放射性核種が放射するγ線のエネルギーと強度を利用して定性、定量分析を行う方法、とくに機器中性子放射化分析について解説する。実際の操作を説明し、環境試料の分析で得られた結果を紹介する。	一國雅巳 松尾基之（東京大学助教授）	同上
12	ガスクロマトグラフィー	分離手段としてのクロマトグラフィーの重要性を述べ、用語の解説を含めてその種類、原理、装置に関する基礎的事項を説明する。ガスクロマトグラフィーを例に試料中の成分の定性、定量法を示し、この方法の実用面における重要性を探る。	一國雅巳	同上
13	液体クロマトグラフィー	ガスクロマトグラフィーと比較しながら液体クロマトグラフィーの特徴を述べる。多様な検出器の利用、高速液体クロマトグラフィーによる分析の迅速化について解説する。無機陰イオンの分析手段として重要なイオンクロマトグラフィーを紹介する。	同上	同上
14	状態分析	複雑な混合物中の特定の元素の存在状態を調べるための方法について解説する。非破壊的な方法として結晶相を調べるX線回折法、鉄の化学的状態を調べるメスバウアー分光法について述べる。複雑な混合物中の元素に適用される分別溶解法についても言及する。	一國雅巳 松尾基之	一國雅巳 松尾基之
15	環境分析	環境試料を例に試料からできるだけ多くの化学的情報を取り出すための化学分析について考える。非破壊的分析の必要性を述べ、その例として蛍光X線分析その他の方法を紹介する。環境分析を通じて今後の化学分析のあるべき姿を議論する。	一國雅巳	一國雅巳

＝化　学　熱　力　学＝（Ｒ）

〔主任講師：池上雄作（東北大学名誉教授）〕

全体のねらい

物質の状態の変化や化学変化はつねに発熱や吸熱といった熱の移動を伴う。化学熱力学は熱の存在や移動に関してあらゆる物質系を通して統一的、体系的に解釈する基本的学理である。その基礎の理解に向かって学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の理解	多様な化学物質や構成をどう理解するかについて述べ、原子・分子・イオン・モルの概念を簡潔にまとめる。さらに物質の三態や変化について熱力学と関わりの深いことがらに重点をおいて解説する。	池上雄作（東北大学名誉教授）	池上雄作（東北大学名誉教授）
2	気体の性質	化学熱力学の理解にとって気体の性質を知ることが一つの基本となる。Boyle の法則からはじめ、理想気体の状態方程式などをまとめたあと、P、V、Tの意味を含めて気体の一般的性質を学習する。	同　上	同　上
3	エネルギーと熱	広い視野から“仕事をする能力”としてのエネルギーのいろいろな姿と相互の変換について整理する。つづいて、エネルギー、熱、温度について述べたあと、物質に内在するエネルギーに関する考え方を概説する。	同　上	同　上
4	物質の状態と熱	熱力学における系の概念、系のエネルギー、内部エネルギー、熱力学第一法則を解説する。そして可逆過程と非可逆過程、状態量、状態関数、容量因子と強度因子について詳しく説明する。	長谷部　亨（福島大学教授）	長谷部　亨（福島大学教授）
5	熱化学方程式とエンタルピー	熱容量とエンタルピーを導入してその関係を説明する。さらに化学変化とエンタルピーの関係を学び、熱化学方程式の理解を深める。Hessの法則を含む。	同　上	同　上
6	物質の変化とエンタルピー	標準エンタルピーを定義し、物質の変化に伴うエンタルピー変化を学ぶ。さらにBorn-Haberのエネルギーサイクルを理解し、格子エンタルピーや結合エンタルピー等を求める方法を説明する。	同　上	同　上
7	物質変化の方向(1)	自発的に起こる変化について、前章までに学んだ概念では説明できないことを取り上げる。熱力学第二法則を導入し、自発変化の説明に“乱雑さ”の関数が必要であることを解説し、エントロピーの定義と求め方を学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	物質変化の方向(2)	分子1個の場合のエネルギーと分子集団のエネルギーの比較から乱雑さとエネルギーの関係を説明し、エントロピーの統計論的定義を解説する。さらに、熱力学第三法則と絶対エントロピーを導入する。	長谷部　亨	長谷部　亨
9	物質変化の方向と自由エネルギー	自由エネルギーの概念（GibbsとHelmholtzの自由エネルギー）を導入する。系のエンタルピーおよびエントロピーと自由エネルギーの関係を説明し、自由エネルギーの求め方を述べる。	同　上	同　上
10	自由エネルギーと化学変化(1)	具体的な化学変化と自由エネルギーの関係を理解し、圧力、温度との関係を学ぶ。実在気体の自由エネルギーを用いた取扱いについても解説する。	同　上	同　上
11	自由エネルギーと化学変化(2)	熱力学の関係式を理解し、化学ポテンシャルの概念と自由エネルギーとの関係を解説する。化学熱力学の基礎方程式にも触れ、化学変化の終点である平衡状態におよぼす外的条件を論考する。	同　上	同　上
12	物質の相平衡および溶液	前回までに解説してきた化学熱力学の基本的な学理を物質系の性質により具体的に拡張する。最初に水を、そして物質の相の安定性、相移転、つづいて溶液を取りあげる。	池上雄作	池上雄作
13	化学平衡	自由エネルギーと平衡定数を中心に詳しく解説する。平衡に及ぼす温度や圧力の影響、ル・シャトリエの原理、自発変化の方向に対する温度の効果等が取り上げられる。	同　上	同　上
14	化学反応の速度	化学反応の速度や反応機構は熱力学的数値と密接な関係をもつ。化学反応速度論と結びつけて解説する。反応座標とエネルギーの関係、活性化エネルギーおよび遷移状態理論が対象となる。	同　上	同　上
15	まとめ	物質変化と化学熱力学の総合的理解にとって基本的な事項をまとめる。つづいて、応用例として凝固点降下と中和エンタルピーの求め方を解説する。	同　上	同　上

＝生物有機化学＝（ＴＶ）

〔主任講師：井上祥平（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

生物有機化学は、生命現象に関連した有機化学の分野であり、解析的な面と合成的な面の双方をその目的として持っている。生化学反応の特徴を理解するにはその原理に相当するより単純なアナログの設定が有効である。これは同時に生体系を模倣した有用な人工系の構築につながる。この分野の基礎とトピックスを解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	化学の目で見た生物	生物の主要な機能は、生体の構造の形成、物質とエネルギーの変換、これらのための情報の保持・伝達、そして以上すべてに関する調節・制御とである。ここでは生体を構成する物質の種類とその機能との関連を人工物質と対比しながら概説する。	井上祥平（東京理科大学教授）	井上祥平（東京理科大学教授）
2	酵素とは何か－生合成と機能	生物は体外から摂取した栄養を自らの構成成分に変え、エネルギー源として利用する。その変換反応を触媒し、生命体の秩序を保つ作用をしているのが酵素である。その生合成、触媒としての特徴、機能のからくり等を説明する。	太田博道（慶應義塾大学教授）	太田博道（慶應義塾大学教授）
3	酵素の利用	酵素は生体内の反応の触媒であるが、生体から取り出してもその活性を維持できる。従って酵素は生体物質の生産はもちろん非生体物質の生産手段として利用できる。他にも酵素の特徴を生かした利用法は多く、その例を解説する。	同上	同上
4	分子を見分ける(1) ホストとゲスト	生物の体の中では、数多くの化学反応が秩序正しく進行しているが、ここで重要な働きをしているのは、分子のわずかな差を見分ける分子認識である。ここでは、人工物による分子認識について概説する。	小宮山真（東京大学教授）	小宮山真（東京大学教授）
5	分子を見分ける(2) 人工酵素	天然の酵素の反応機構を模倣することにより、酵素と同様に、様々な化合物の中から特定のものを選び出して、この化合物だけを選択的かつ効率的に化学変換する触媒（人工酵素）の合成の基本原理について学ぶ。	同上	同上
6	分子を見分ける(3) 分子認識の応用	人工物による分子認識をさらに拡張して、私たちの生活に実際に役立つ機能材料の構築について学ぶ。さらに、無駄な生成物を生むことなく、また温和な条件で反応を進行させる人工酵素の産業等への利用について学ぶ。	同上	同上
7	核酸のヒミツ(1) 核酸の構造とダイナミクス	核酸（ＤＮＡ及びＲＮＡ）の構造と機能について概説する。構造については、一次塩基配列から予測される二次構造の安定性及びその二次構造形成の速度過程のメカニズムを、機能については、核酸と他の化学物質（薬物や蛋白質）との関係を取り扱う。	杉本直己（甲南大学教授）	杉本直己（甲南大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	核酸のヒミツ(2) 核酸の機能とリボザイム	情報と触媒機能をあわせもつ化学物質としての新しい核酸の化学を概説する。特に、触媒機能をもつＲＮＡ（リボザイム）の挙動や酵素を利用しない核酸の自己複製システムについて解説した後、核酸の未知の機能の探索方法について最近のホットな話題を提供する。	杉本直己 （甲南大学教授）	杉本直己 （甲南大学教授）
9	生体膜とは	細胞膜を構成しているたんぱく、脂質膜などの役割について易しく解説する。細胞やウイルスなど生化学を中心に置く。	岡畑恵雄 （東京工業大学教授）	岡畑恵雄 （東京工業大学教授）
10	生体膜をまねる(1) 人工脂質二分子膜	たんぱくの生体膜中での機能を紹介したあと人工モデルとして利用する例について解説する。同様に脂質膜についても人工モデル化する具体例について述べる。	同上	同上
11	生体膜をまねる(2) 人工膜材料への展開	たんぱく、脂質膜を使った人工モデルとして、カプセル膜、フィルム化、有機溶媒中での触媒作用などの具体例について解説する。	同上	同上
12	リズムに生物らしさを見る	生きている状態を象徴するものとして、様々なリズム現象がある。心臓拍動、自発呼吸、脳波や日周性、月周性の生物時計など、いずれも、自発的なリズムである。このようなリズム現象が、どのような仕組で作り出されているのかを考える。	吉川研一 （名古屋大学院教授） 森義仁 （名古屋工業大学助手）	吉川研一 （名古屋大学院教授） 森義仁 （名古屋工業大学助手）
13	情報の流れから生命を捉える	生物は、自分自身で組織体を作り出し（自己組織化）。病傷があれば、自己修理する（自己修復）。このような機能を一次元鎖と環状のＤＮＡ分子に帰因させることには無理がある。ＤＮＡから、自己秩序形成に到る情報の流れを考える。	吉川研一 小畑繁樹 （愛知技術短期大学助手）	吉川研一 小畑繁樹 （愛知技術短期大学助手）
14	エネルギーを変換する	ガソリン・エンジンなどの化学エネルギーでは、「化学エネルギー」⇨「熱エネルギー」⇨「仕事」の形で、エネルギーの変換が行われている。それに対して、私達の筋肉は、化学エネルギーを直接、仕事に変えている。この仕組を考えてみる。	吉川研一 熊沢紀之 （筑波大学助教授）	吉川研一 熊沢紀之 （筑波大学助教授）
15	モノを感じる	私達の感覚器は、時間的な変化を捉えることに優れている。頭で物を考えるときも、時間的な情報の流れが重要な役割りを果たしている。神経や感覚器の人工的なモデルでの研究を紹介するなかで、私達の感覚や意識・記憶などの仕組みを考えてみる。	吉川研一 中田聡 （奈良教育大学助教授）	吉川研一 中田聡 （奈良教育大学助教授）

＝物質の科学と技術開発＝（Ｒ）

〔主任講師：平川暁子（放送大学教授）〕

全体のねらい

技術開発・技術革新にはつねに物質の科学が関与している。この講義では、1）有機半導体の研究、2）物質の状態分析の研究、3）超ＬＳＩの開発、4）強誘電体の研究、5）原子力開発、の5例について、科学の基礎研究が技術開発へどのように発展したかを解説する。各々は3回の講義で行い、関連する科学の基礎事項、研究の発端、研究を発展させた際の指針、開発後の影響等を述べる。科学知識に乏しい学生は、印刷教材を参考にして理解し、或る程度の知識があれば教材なしでも興味をもてる講義とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに 物質の科学と技術開発	1～3章では、物質の科学の技術開発への寄与について概説し、有機半導体研究の例により、具体的に解説する。	井口洋夫（東京大学名誉教授）	平川暁子（放送大学教授） 井口洋夫（東京大学名誉教授）
2	有機半導体研究と物質科学		同上	井口洋夫
3	有機半導体から生まれたもの－その技術開発－		同上	同上
4	新素材開発の鍵と状態分析 Ⅰ－形態学からのアプローチ－	4～6章では、物質の状態分析研究が、新素材分質の開発、品質改良に寄与した例について解説する。	額田健吉（㈶神奈川科学技術アカデミー・専務理事）	額田健吉（㈶神奈川科学技術アカデミー・専務理事）
5	新素材開発の鍵と状態分析 Ⅱ－分子レベルからのアプローチ		同上	同上
6	新素材開発の鍵と状態分析 Ⅲ－分離的手段からのアプローチ		同上	同上
7	物質の科学に導かれる超ＬＳＩの開発 Ⅰ－コンピュータとＩＣ－	7～9章では、半導体を中心とした物質の科学を土台とし、コンピュータからの強いニーズに導かれて進歩してきた超ＬＳＩについて、その基礎から解析し、将来を展望する。	外山正春（㈱川崎製鉄・LSI事業部専門主監）	外山正春（㈱川崎製鉄・LSI事業部専門主監）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	物質の科学に導かれる超ＬＳＩの開発 Ⅱ －CMOS LSI－		外山正春	外山正春
9	物質の科学に導かれる超ＬＳＩの開発 Ⅲ －高集積化技術		同上	同上
10	強誘電体の基礎研究と技術開発 Ⅰ －誘電分極と強誘電性－	１０～１２章では、強誘電体に特有な面白い物性を説明し、応用面ではその特性がどのように生かされているかを解説する。	沢口悦郎（北海道大学名誉教授）	沢口悦郎（北海道大学名誉教授）
11	強誘電体の基礎研究と技術開発 Ⅱ －強誘電体の興味ある性質－		同上	同上
12	強誘電体の基礎研究と技術開発 Ⅲ －強誘電体の応用－		同上	同上
13	原子力開発と化学 Ⅰ －核分裂の発見とマンハッタン計画－	13～15章では、核化学と原子力エネルギー関連の問題を解説する。13章は、核分裂の発見に導いた新しい化学としての核化学の誕生と発展について述べ、核分裂発見から直ちに開始された原子爆弾製造計画、マンハッタン計画について述べる。	内藤奎爾（名古屋大学名誉教授）	内藤奎爾（名古屋大学名誉教授）
14	原子力開発と化学 Ⅱ －動力炉の開発と材料科学－	14章は、第２次大戦後のエネルギー源としての原子力の開発の概要と、その中での材料科学の重要性を、いくつかの例について述べる。	同上	同上
15	原子力開発と化学 Ⅲ －将来の科学・技術としての原子力－	15章は、人類の将来エネルギーとしての原子力とその今後の問題点、および原子核科学技術の将来について述べる。	同上	同上

＝自然と科学－物質編＝（Ｒ）

〔主任講師：阿部龍蔵（放送大学副学長）〕
〔主任講師：平川暁子（放送大学教授）〕

全体のねらい

星、太陽、地球、地球上に存在する物体、私達の身体などは多種多様な物質から構成されている。このような点で、物質の探求は自然科学の大きな目的の一つである。本講義では物質の起源、変化、性質、活用、環境・生命との関係などを宇宙地球科学、物理学、化学、生物学などの総合的な立場から論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の構造と物質	宇宙の天体と宇宙の全体的構造について概略を話し、それらの天体を構成する物質について述べる。	小尾信彌（元送大学学長）	小尾信彌（放送大学学長）
2	宇宙の物質・起源と進化	現在ひろく受け入れられているビッグバン宇宙論にもとづいて、宇宙と天体、物質の起源と進化について述べる。	同上	同上
3	地球の形と構造	地球の形、地球の層状構造、大気と海洋、固体地球、プレート	奈須紀幸（東京大学名誉教授）	奈須紀幸（東京大学名誉教授）
4	固体地球の構成物質	地殻、マントル、外核、内核、地磁気	同上	同上
5	地球の歴史	地球の誕生、地質時代－相対年代と絶対年代、古生物の進化、プレートの動態、造山運動と大陸の拡大	同上	同上
6	物質の理解	物質観の歴史と近代化学の誕生によって物質がどのように体系化されてきたか、純物質と混合物、元素と化合物、物質を調べる方法	平川暁子（放送大学教授）	平川暁子（放送大学教授）
7	化学変化	化学変化とは何か、物質の中で働いている力	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	物理変化	状態方程式、物質の三態と相図、相転移と臨海現象、超流動と超伝導	阿部龍蔵（放送大学副学長）	阿部龍蔵（放送大学副学長）
9	物質の性質	電気的性質（導体と絶縁体）、磁気的性質（強磁性、常磁性、反磁性）、光学的性質（透明体と不透明体）	同上	同上
10	物質の究極	分子と原子、原子核と電子、核反応、素粒子について認識してもらう。	同上	同上
11	物質と生命	生命体を構成する物質、その構造と変化、生命体と非生命体との境界	野田春彦（東京大学名誉教授）	野田春彦（東京大学名誉教授）
12	物質の活用	人間は自然界の物質をどのように活用してきたか、人間の生活を豊かにする手段としての物質、自然界の神秘を探る手段としての物質	平川暁子	平川暁子
13	物質科学の進歩	科学の力で物質文明をどのように発展してきたか。将来どのように開発されるか。	田中郁三（東京工業大学名誉教授）	田中郁三（東京工業大学名誉教授）
14	地球上の資源	土地資源、水資源、鉱物資源、エネルギー資源	奈須紀幸	奈須紀幸
15	環境問題	地球環境、環境の汚染と破壊、環境保全・改善への努力	同上	同上

＝生　命　と　物　質＝（ＴＶ）

〔主任講師：中澤　透（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物の構造や機能を支えるしくみについて、物質との関連を生化学や生理学の知識に照らして通覧する。生体物質、反応、かたち、生物機能、外界との対応、がん、など生物学の基礎的問題を整理し、考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の生存 －環境と進化	地球上の生物の多様性は環境と生物自身の物質的な条件によってつくられてきた。生物にとって生命維持に必要なしくみについて、進化とも関連して全般的に考察する	中澤　透（放送大学教授）	中澤　透（放送大学教授）
2	生体物質の多様性	生体物質は数種の元素が主成分であるが、結合様式などによって細胞内で多様である。生体内の低分子は大部分が高分子の構成要素であるが、低分子の組み合わせなどによっても性質が異なる。生体物質のはたらきについて説明する。	同　上	同　上
3	生体高分子	ＤＮＡ、ＲＮＡ、タンパク質の構造上の特徴とはたらき、ＤＮＡ→ＲＮＡ→タンパク質という情報の流れについて説明し、ウイルスを例にとって互いの関係を具体的に説明する。タンパク質の立体構造と機能の関係、かたちを決める原理などを考察する	小林芳郎（東邦大学教授）	小林芳郎（東邦大学教授）
4	酵　素	以下の４項目に分けて解説する。 １．酵素の発見とその研究の歴史（リボザイムまで） ２．酵素の働き（リボヌクレアーゼＴ１を例として）とその特長 ３．酵素利用（日常生活の中の酵素、酵素診断）、酵素工学とタンパク質工学 ４．酵素の種類、酵素の進化、酵素から描く系統進化	大島泰郎（東京薬科大学教授）	大島泰郎（東京薬科大学教授）
5	生物と酸素	大部分の生物は大気中の酸素に依存して生きている。細胞では、ミトコンドリアの呼吸によるエネルギー生産や、小胞体の薬物代謝などの反応がある。しかし、酸素は活性酸素のかたちになると強い毒性もある。	中澤　透	中澤　透
6	細胞間の情報交換と物質	生体の細胞はそれぞれの機能を営みながら、細胞間の化学的情報交換によって個体全体としてのまとまりを保つことを概観する。また、他個体とのコミュニケーションや、他種生物を含めた環境の認識などと、その情報を担う物質の化学構造や性質についての知識を解説する。	星　元紀（東京工業大学教授）	星　元紀（東京工業大学教授）
7	ホルモンと神経	ウグイスは春になるとさえずり繁殖する。日が長くなるとホルモンが分泌されて交尾をし卵を産むようになる。どこで光を感じそれがどのような仕組みでホルモンの分泌を引き起こすのだろうか。外部からの刺激、神経系での受容、内分泌系の切換えなど胎内で何が起こるかを見ていこう。	石居　進（早稲田大学教授）	石居　進（早稲田大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ホルモンは何故効くか	あるホルモンはある決まった細胞にしか作用しない。また、ホルモンに対する細胞の感受性はいつも同じとは限らない。哺乳類のホルモンは魚類には効きにくい。ホルモンが細胞にどのようにして作用を及ぼすことが出来るのかという問題を調べよう。	石居　進	石居　進
9	細胞の情報伝達	ホルモンなどの細胞外シグナルは、細胞膜表層上に存在する受容体と結合してそのシグナルを細胞の内側に送っている。この細胞膜を横切るシグナルの伝達機構を中心に、細胞における情報伝達のしくみを解説する。	堅田利明(東京大学教授)	堅田利明(東京大学教授)
10	発生に関わる物質	受精から初期発生に至る過程においては、細胞間認識や細胞間相互作用がきわめて重要である。これに関わる細胞表面物質、細胞間物質あるいは分化誘導因子などの構造と機能を概観する。	星　元紀	星　元紀
11	生物のかたちをつくる	生物自身が自分の体（姿・形）を再構築する方法を、変態や再生を例示しながら説明する。次に、これに学びながら、人工的に生物の体を再構築することができるのかという問題設定のもとに、研究の現状を具体的に説明する。また、このような研究に、この目的には一見関係ないような基礎研究が、いかに重要であるか解説する。	吉里勝利(広島大学教授)	吉里勝利(広島大学教授)
12	免疫のしくみ	予防接種を例にとって、体液性免疫と細胞性免疫、免疫担当細胞（T細胞とB細胞）、細胞間相互作用について説明し、T細胞の抗原認識機構とそれが成立する過程およびその異常としての自己免疫病についてふれる。	小林芳郎	小林芳郎
13	植物の物質	生物の生産する物質のうち植物でしか合成されない有機物がある。この物質が動物に不可欠の場合、動物は食物連鎖により補充する。一方、限られた植物で合成され、その植物にとってもはたらきが不明な有機物がある。これらの有機物とその生合性について考察する。	山田晃弘(放送大学教授) 西村弘行(北海道東海大学教授)	山田晃弘(放送大学教授) 西村弘行(北海道東海大学教授)
14	生物毒	代表的な海洋生物毒であるフグ毒のテトロドトキシンを例にとり、毒の細菌起源、フグにおける機能、Na^+ チャンネル阻害作用、生化学試薬としての利用、フグの耐性機構等について説明する。	安元　健(東北大学教授)	安元　健(東北大学教授)
15	がんと物質の関わり	がんはDNAの病気である。環境中の物質が細胞内に入り込んでDNAに傷をつけ、がん化がはじまる。その結果変異遺伝子から、細胞のがん化に関与する質的あるいは量的に異常なたんぱく質が作り出される。これらの物質、がんの予防、治療への寄与が期待される物質について解説する。	関谷剛男(国立がんセンター研究所腫瘍遺伝子研究部長)	関谷剛男(国立がんセンター研究所腫瘍遺伝子研究部長)

＝植 物 生 理 学＝（ＴＶ）

（主任講師：増田芳雄（大阪市立大学名誉教授）
主任講師：菊山宗弘（放送大学助教授））

全体のねらい

食料、生活資材、環境など、人間生活に不可欠な存在である緑色高等植物の基本的な機能、すなわち成長、分化、物質移動、光合成、開花、微生物との相互作用などを取り上げ、構造としての関係を平易に説明する。これにより、人間と密着した存在である植物の生理的な働きを理解してもらうよう努める

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間生活と植物 植物生理学の役割	世界の３大穀物であるイネ、コムギ、トウモロコシ、およびマメ科植物ダイズなどの生産力、陸上および海中植物の酸素発生、森林などの環境・生活資材植物の人間生活との関係を見る。また、植物生理学の発展の歴史をふりかえり、第２回以後の講義について紹介する。	増田芳雄（大阪市立大学名誉教授）	増田芳雄（大阪市立大学名誉教授） 菊山宗弘（放送大学助教授）
2	植物は水とミネラルで育つ	植物はその生存のため水を必要とする。水は根によって吸収され、体内を通導組織によって上昇し、葉の気孔から蒸散する。この間水は成長、生化学反応に用いられ、また植物体の体温調節に働く。また、水液とともに土壌中の無機塩類を吸収し、これを利用する。	賀来章輔（九州大学名誉教授）	賀来章輔（九州大学名誉教授）
3	植物成長ホルモンのはたらき	植物の成長・分化および形態形成は一般に植物ホルモンによって調節される。ジベレリン、オーキシン、サイトカイニン、アブシジン酸、エチレン、ブラシノステロイドなどのホルモンの生理作用、ホルモンの相互作用などについて解説する。	神阪盛一郎（大阪市立大学教授）	神阪盛一郎（大阪市立大学教授）
4	植物のかたちのできるまで	植物は分化全能性という特殊は性質を持ち、一個の細胞から一個体を再生分化する能力を持っている。組織培養と再分化は植物ホルモンの濃度と組み合わせによって制御することができる。この植物の持つ能力と、そのホルモンによる制御について解説する。	山本良一（帝塚山短期大学教授）	山本良一（帝塚山短期大学教授）
5	植物にとって大切な細胞壁	植物に特有の構造のうち、細胞壁と液胞は細胞成長に基本的な働きをする。すなわち、細胞壁の力学的性質と液胞液の浸透圧である。これらに対するホルモンの働きを解説する。あわせて、成長停止後に合成される二次壁や通導組織の細胞壁、すなわち木材について述べる。	同上	同上
6	運動する植物	植物は動物ほど目立たないが、巻きひげなど運動のほか、刺激に反応する屈性、傾性などの運動を示す。これには刺激反応受容体と植物ホルモンが働いている。これら運動、屈性、傾性の例を挙げて、その機構について解説する。	神阪盛一郎	神阪盛一郎
7	植物をとりまくストレス	植物は第２回講義で取り上げる水のほか、土壌条件などの環境要因の影響の下に生活している。不都合な環境条件でも植物はある程度適応する能力を備えているが、これら水、塩類、水素イオン濃度、重金属その他の環境条件と植物の生活について解説する。	賀来章輔	賀来章輔

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	植物は光信号を受けとる	植物の生活にとって光はきわめて重要である。光合成のほか、シグナルとしての光が形態形成に重要な働きをしており、特に青色光と赤色光に植物は敏感に反応する。これらの光に対する受容体色素、光形態形成反応などについて解説したい。	瀧本　敦（京都大学名誉教授）	瀧本　敦（京都大学名誉教授）
9	花ごよみ、花時計	開花、結実は植物の生殖の基本で、人間生活にも深いつながりを持つ。植物にとって花成のために長い夜を必要とするもの、短い夜を必要とするものなどがあり、それは植物の生理時計と関係しており、また光受容機構も関与している。これらについて解説する。	同　上	同　上
10	植物は太陽の光エネルギーをとらえる	糖、でんぷんなどの人間に必要な有機化合物は葉緑体が太陽の光エネルギーを利用して化学エネルギーＡＴＰおよび酸素などを作り、これを用いて空気中の二酸化炭素を固定することによって行う。この最も重要な生理機能の第一段階、すなわち光合成明反応について解説する。	辻　英夫（神戸女子大学教授）	辻　英夫（神戸女子大学教授）
11	植物は人間に必要な有機物をつくる	光合成の明反応に連携し、植物は二酸化炭素を固定して糖、でんぷんなどを合成する。これらは人間生活を支える食料などの原料となる。この反応、すなわち光合成の暗反応について解説し、あわせて環境などによって異なる暗反応の様式の異なる植物について述べる。	同　上	同　上
12	植物と微生物とのつきあい	植物をとりまく環境のうち、生物環境も重要である。病原微生物に対抗する手段も植物はもっている。さらに土壌微生物の存在は大切で、マメ科植物はこれらと共生して根粒を形成し、空気中の窒素を固定する。これによってアミノ酸を合成し、他の植物が利用する。また、微生物による植物への遺伝子導入について紹介する。	森川弘道（広島大学教授）	森川弘道（広島大学教授）
13	植物のバイオテクノロジー	第４回に取り上げる植物の分化全能性は植物に特有の能力である。この能力は近年発展してきたバイオテクノロジーに利用される。また、これに必要な遺伝子導入もいろいろな方法で行われるようになってきた。これら植物のバイオテクノロジーについて解説する。	同　上	同　上
14	植物における物流	植物の細胞は動物と比べて一般に大型である。またその体制は「軸性」という特徴を備えている。このため、水液通導のほか同化産物、イオンなど物質の植物体内の移動には特別な機構がある。細胞中の原形質流動、膜を通る移動、通導組織の働きなどを解説する。	菊山宗弘	菊山宗弘
15	これからの植物生理学～遺伝学の利用～	植物には成長、運動などの異なる遺伝的変異種が多くあり、それらの遺伝的解析と生理的反応の対応が現在詳しく研究されている。これら遺伝的変異種は生理学の研究にきわめて有用である。これら生理学の今後の発展の方向を考察し、本科目の結びとしたい。	神阪盛一郎 増田芳雄	神阪盛一郎

＝生　　態　　学＝（Ｒ）

〔主任講師：藤井宏一（筑 波 大 学 教 授）〕

全体のねらい

生物群集の構造は個体、個体群、群集のレベルからなっている。本講義では各レベルでの、生物と無機的環境、生物と生物との関係を理論的に、そして具体例をあげながら講義し、生物集団の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびそれらの動態についての理解を深めることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生態学とは	生態学は生物学の１分野として存在し、その中心問題は生物の分布と個体数の変動を理解することにある。生態学の成り立ちと歴史、現在の研究の中心課題、人間の生活との係わりなどについて述べる。	藤井宏一（筑波大学教授）	藤井宏一（筑波大学教授）
2	生物と環境	生物の生活を環境と切り放して考えることはできない。この章では生物の環境とは何か、環境はどのように構成されているか、生物と環境とはどのような関係で結ばれているかについて考える。	前田　修（筑波大学教授）	前田　修（筑波大学教授）
3	生産者と物質生産	無機物を原料に有機物を合成し、同時に光エネルギーを動物などにも利用可能な化学エネルギーに変換する過程を物質生産、物質生産を営む生物を生産者という。この章では物質生産のしくみ、緑色植物が果たす生産者としての役割、年間の生産量などについて述べる。	同　上	同　上
4	消費者と食物連鎖	動物のすべてと微生物の大半は緑色植物が生産した有機物を直接・間接に消費して生活する。この章では消費者の生活、食う－食われる関係で結ばれる生物どうしの関係すなわち食物連鎖、連鎖の複合である食物網について述べる。	同　上	同　上
5	物質とエネルギーの流れ	地球の表面近くには生物界と非生物界にまたがる壮大な物質エネルギーの流れがあり、これが生物界の永続性を保証している。この章では生物体を構成する主要な元素に関する物質循環、および生物界を通過するエネルギーの流れについて考える。	同　上	同　上
6	生態系	生態系はさまざまな生物が構成する生物群集とその環境とが不可分な関係を保って機能する場である。この章では生態系の構造と生態系に生じる物質・エネルギー・情報の流れについて考察する。	同　上	同　上
7	自然選択による進化と適応	「適応」の生態的メカニズムである「自然選択」とそれにもとづく進化の過程について解説する。具体的な適応の例をいくつか紹介するとともに、数理モデルを用いた理論的なアプローチの有効性についても簡単に触れる。	鷲谷いづみ（筑波大学助教授）	鷲谷いづみ（筑波大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	植物の生活史戦略と栄養成長期の適応	生活史のとらえ方、生態学における「戦略」概念について述べ、植物に作用する主要選択圧（ストレス、競争、攪乱）とそれに応じて進化した主要戦略について概説する。栄養成長期特有の適応や生物間相互作用についても触れる。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
9	植物の繁殖と生物間相互作用	植物の多様な繁殖様式を紹介し、その生態的意義について述べる。種子による繁殖の諸過程、すなわち、受粉、結実、種子散布、種子休眠、発芽、実生確立期の特徴と生物間相互作用が果たす役割について解説し、共進化についても触れる。	同上	同上
10	個体群の成長と調節	生物集団（個体群）の個体数は、有限の環境においては無限に増加することはできない。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、まずその機構について理論的に述べ、ついで実例を見ながら密度効果、種内競争の機構などについて論じる。	藤井宏一	藤井宏一
11	種間競争	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か、まずその機構について理論的に取り扱い、さらに種間競争の結果として起こる諸現像（“すみわけ”、形質置換など）について、観察例を用いて説明する。	同上	同上
12	食うものと食われるものの関係	食うものと食われるものの関係（捕食関係）は、生物間の相互作用の中でも一番重要な関係の一つである。まず捕食関係にある生物種の動態の理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食関係のはたす役割について説明する。	同上	同上
13	動物の生存戦略	生物はなんのために生存するのか、またその目的を達成するために無機的環境、そして他の生物に対して如何に適応してきたかについて、まず理論的考察を行ない、ついで動物の採餌戦略、繁殖戦略などを例にとりながら、説明する。	同上	同上
14	生物群集と種の分布・交代	生態系における生物多様性のとらえ方および多種共存をもたらす条件や作用について解説する。また、種と生物群集の空間的分布及び時間的交代（遷移）を支配する要因とメカニズムについて、具体的な例を挙げながら述べる。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
15	生態学と人間	これまで学んできた自然界の生物の生き方の知識と、我々人間の今後の生存との関わりを議論する。生態学の知識が、人口問題、食料問題、環境汚染など現在の我々が直面する諸問題の解決に、どんな示唆を与えられるか、どのように貢献できるかを論じる。	藤井宏一	藤井宏一

＝分　子　生　物　学＝（ＴＶ）

〔主任講師：三浦謹一郎（学習院大学教授）〕

全体のねらい

分子生物学は生命体の構造やはたらきを分子、原子のレベルで解明しようという科学であるが、まず生物に共通な遺伝の現象を解明するため遺伝子の研究が盛んに行われた。昨今は遺伝子がもつ情報を知ることが可能になり、それを契機として分子生物学は大きな発展を遂げつつあるので、その概要を述べ、将来の課題についても触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	遺伝子の本体	遺伝形質の情報を荷っていると考えられる生物学的単位は遺伝子と呼ばれていた。細胞核の中の染色体上にあるとされていた。染色体は核酸と蛋白質からできているが、種々の実験から遺伝子はデオキシリボ酸（ＤＮＡ）であることが明らかにされた。	三浦謹一郎（学習院大学教授）	三浦謹一郎（学習院大学教授）
2	ＤＮＡの構造(1)二重らせん構造	ＤＮＡは化学者の研究では塩基と糖デオキシリボースとリン酸基からできたヌクレオチドが重合したものであることがわかった。ＤＮＡの糸をＸ線解析した結果などから、ＤＮＡは規則正しい塩基対をもった二重らせん構造をとる分子であることが明らかにされた。	同　上	同　上
3	ＤＮＡの構造(2)塩基配列の分析	ＤＮＡは巨大な分子であるが、これをきまった塩基配列の場所で切断することができる制限酵素が発見されて以来、ＤＮＡの小断片を得ることができ、ＤＮＡ分子の中で一本の鎖の上に塩基がどのような順序に配列しているかを調べることが可能になった。	同　上	同　上
4	ＤＮＡの複製	ＤＮＡが複製するとき、二本の鎖がそれぞれ鋳型になって、正確な塩基対によって親と同じ構造をもった子ＤＮＡの鎖が合成される。ＤＮＡの複製過程はＤＮＡポリメラーゼ（合成酵素）などの働きによって進められる。	同　上	同　上
5	遺伝情報の発現機構(1)転写	ＤＮＡの情報発現はまずＤＮＡの二本の鎖のうち情報をもった鎖のコピーであるＲＮＡをつくることから始まる。この過程は転写と呼ばれ、ＲＮＡポリメラーゼ（合成酵素）によって進められる。ＤＮＡの鎖にＲＮＡ合成の開始、終了、調節などの信号がある。	同　上	同　上
6	遺伝情報の発現機構(2)翻訳	遺伝情報発現第二の段階はメッセンジャーＲＮＡ（ｍＲＮＡ）を鋳型にしてアミノ酸を定まった順序に結合させて蛋白質を合成する階段で、この過程は翻訳と呼ばれる。蛋白質の合成はリボソーム上で転移ＲＮＡが順次アミノ酸を運びこむことによって進行する。	渡辺公綱（東京大学教授）	渡辺公綱（東京大学教授）
7	遺伝の情報(1)暗号の解読	遺伝情報は主として蛋白質の情報（アミノ酸配列）である。細胞内の蛋白質合成系を試験管内に組み立て、ｍＲＮＡの塩基配列とアミノ酸の対応関係が調べられ、遺伝暗号が解読された。３塩基の配列が１個のアミノ酸を指定する。	三浦謹一郎	三浦謹一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	遺伝の情報(2) 暗号と実証	試験管内で解読された遺伝暗号表は、mRNAあるいはDNAの塩基配列と指定される蛋白質のアミノ酸配列を対応させることによって、生体内でも同様に使われていることが判明した。DNA中では一つの蛋白質の情報が分断されている場合もある。	三浦謹一郎	三浦謹一郎
9	遺伝の情報(3) 転移RNAによる情報変換	蛋白質が合成されるとき、アミノ酸移転RNA（tRNA）は特定のアミノ酸1ケを末端に結合し、tRNA中のコドン読みとり部位（アンチコドン）により正確にmRNA上の暗号通りにアミノ酸を運びこむ。tRNAの構造と機能の関係が詳しく研究されている。	渡辺公綱	渡辺公綱
10	ウィルス－最小の自己増殖系	最小の遺伝子はウィルスにみられる。このためウィルス遺伝子とその情報発現の研究は分子生物学の発展に大きく貢献してきた。ウィルスの遺伝子は二重らせんDNAの場合だけでなく、一本鎖の場合もあり、RNAの二本鎖、一本鎖の場合もある。	三浦謹一郎	三浦謹一郎
11	突然変異・がん	放射線をはじめ種々の突然変異誘起剤はDNAの主として塩基に変化を与えることにより生物に変異やがんをひき起こす。一方、生体はDNAに損傷を与えたとき修復する機能も具えている。それらの機構についての研究が進んでいる。	関口睦夫（福岡歯科大学教授）	関口睦夫（福岡歯科大学教授）
12	遺伝子操作	遺伝子の構造を調べるために発達した技術は遺伝子を特定の場所で切断し、特定の遺伝子断片を得ることを可能にし、さらにそれを増殖させ、保持している遺伝情報を発現させる方法を産み出した。さらに遺伝子の特定部位を変換させることも可能にした。	百瀬春生（東京理科大学教授）	百瀬春生（東京理科大学教授）
13	蛋白質の構造と機能(1) 基礎	遺伝子の研究の進展により、遺伝子がもつ情報としての蛋白質が注目されている。蛋白質は生体の機能にとって最も重要な物質であるが、蛋白質の構造についての研究も物理科学的研究方法の発達によって大きな進展がみられる。その基本を述べる。	小島修一（学習院大学助教授）	小島修一（学習院大学助教授）
14	蛋白質の構造と機能(2) 蛋白質工学	遺伝子操作法の発展によって蛋白質の改造が可能になった。蛋白質の構造と機能の相関関係の研究が大きく進み始めた。そこで得られた原理に基づいて高機能蛋白質を設計することが可能となり、基礎生物学のみならず、応用生物学や工学の分野への貢献が期待される。	同上	同上
15	分子生物学の今後の課題	遺伝子研究を軸として分子生物学は大きな発展を遂げ、さらに高次の生物現象の解明に立ち向っている。細胞調節、免疫、発生分化、神経系などへの挑戦について専門家を交えた座談会を行なって分子生物学の将来への展望を試みる。	三浦謹一郎	三浦謹一郎

＝動　物　の　進　化＝（ＴＶ）

〔主任講師：野田春彦（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

生物の進化を理解するために、さまざまな角度から解説する。まず、生命の起源について現在の考え方を知り、化石のもたらす進化のあとを追う。遺伝子の変異にもとずいた分子レベルの進化を学んだ上で、動物の系統樹をたどり、さいごにはヒトの進化を学ぶ。多くのわが国の専門家に解説していただく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の進化	生物の進化とは何か、どう学んでいくのかを述べる。いわば進化学への招待である。	野田春彦（東京大学名誉教授）	野田春彦（東京大学名誉教授）
2	ガラパゴスの動物相	ダーウィンが「種の起源」を著わすきっかけとなったガラパゴスの動物相について映像を通じて解説する。	川島　誠（東京大学名誉教授）	川島　誠（東京大学名誉教授）
3	化石の世界	進化の直接的な証拠である化石について最新の知見にもとずいて解説する。	大野照文（京都大学教授）	大野照文（京都大学教授）
4	生命の起源	生命の起源はどのように考えるか、さまざまな見方を紹介する。タンパク質が先か、それともＤＮＡが先かの議論とともに最近のＲＮＡ説を述べる。	野田春彦	野田春彦
5	分子レベルの進化と中立説(1)	遺伝子（ＤＮＡ）やタンパク質のそれぞれの単位配列順序の対応－遺伝子暗号－について解説する。そしてＤＮＡの塩基配列変異のもたらすタンパク質のアミノ酸配列の変化がどのようにして起こるのかを学ぶ。	高畑尚之（総合研究大学院大学教授）	高畑尚之（総合研究大学院大学教授）
6	分子レベルの進化と中立説(2)	生物の進化が環境に無関係に起こる遺伝子の突然変異によってもたされるとする中立進化説について解説する。	同　上	同　上
7	分子進化系統樹と動物の起源	中立進化説にもとずいて、ＲＮＡの配列の変化からさまざまな動物の系統を論ずる。	堀　寛（名古屋大学教授）	堀　寛（名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	動物の系統樹	いろいろな動物の系統を形や化石からみて論じ、系統樹を解説する。分子進化からみた系統との関連についてふれる。	白山義久（京都大学教授）	白山義久（京都大学教授）
9	細胞器官の起源	ミトコンドリアと葉緑体という細胞器官が原核細胞の共生によって生じたとする説を分子レベルの証拠をあげて述べる。	石川統（東京大学教授）	石川統（東京大学教授）
10	種の分化	数百万種におよぶ地球上の生物の単位がどのようにして生じてきたのかを実例にもとずいて解説する。	濱田隆士（放送大学教授）	浜田隆士（放送大学教授）
11	無脊椎動物にみられる退行進化	洞窟に住む昆虫など小動物には眼が退化したりして特殊な形態をもつものがある。これら環境に適応した逆向きの進化について述べる。	上野俊一（国立科学博物館名誉研究員）	上野俊一（国立科学博物館名誉研究員）
12	脊椎動物	脊椎動物の体制－脊椎の形態進化について実例を通じて解説する。	養老孟司（北里大学教授）	養老孟司（北里大学教授）
13	ヒトの進化(1)	ヒトがどのようにして進化してきたかを化石ならびに形態から論ずる。	木村賛（京都大学教授）	木村賛（京都大学教授）
14	ヒトの進化(2)	ヒトの進化を分子レベルでたどる。ミトコンドリアのDNAなどの変化からオランウータンやチンパンジーと分岐した年代を推定する。	長谷川政美（統計数理研究所教授）	長谷川政美（統計数理研究所教授）
15	進化をめぐって	進化における諸問題、とくに形態の保守性や環境への適応性などについてどう考えるかを討論する。	野田春彦 堀寛 白山義久	野田春彦 堀寛 白山義久

＝植物と菌の系統と進化＝（ＴＶ）

〔主任講師：岩槻邦男（立教大学教授）〕

全体のねらい

生物界のうち植物界と菌界に焦点をあて、生物の種多様性の研究の現状を紹介する。生物の多様性は生命のもつ歴史的特性を示しているものであり、その解析のためにはどのような形質を手がかりにすることができるのかを概説する。生きているとはどういうことかについて、生命の連能性、進化の面から考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	植物と菌の多様性とその由来	地球がつくられてから生物がどのように発生し、進化してきたかについて、今までに分かっていることを紹介し、分からせるためにどんな方法があるかを概説する。生物相研究の現状から、分子系統学による解析までの研究手法で何が分かるのかを説明する。	岩槻邦男（立教大学教授）	岩槻邦男（立教大学教授）
2	植物と菌の分類体系 －原核生物から真核生物へ－	地球上に発生した生命がどんなものであったか、現生の原核生物の多様な姿から推定する。約15億年前に真核生物が進化してきたが、どのように真核生物がつくられたか、その起源は単元か多元かについて、分かっている事実を紹介する。	同上	同上
3	藻類の多様な姿 1	光合成をする真核生物は単元的に起源したものかどうかを考察し、藻類段階で生物がどのように多様化していたかを説明する。細胞形態の比較と分子情報から藻類の分類と系統について、現在までに明らかになった事実を考察し、藻類の多様性と分類の概略を紹介する。	井上勲（筑波大学教授）	井上勲（筑波大学教授）
4	藻類の多様な姿 2	藻類の三大系統群である紅色、黄色そして緑色藻類の分類について説明し、それぞれにおいてどのような多様化が見られるかを説明する。また黄色藻類では菌類や原生動物との系統的なつながり、緑色藻類では陸上植物との関係についても考察する。	同上	同上
5	陸上植物の起源	約千億年前のシルリア紀に植物は陸上へ進出した、陸上植物は単元的に進化してきたのかどうか、起源を線藻類に求める根拠は何かを考察する。水の中で生活していた生物が陸上へ進出するためにどのような形態が整えられてきたのかを設明する。	岩槻邦男	岩槻邦男
6	維管束植物の分化	陸上へ進出した植物のうち、維管束植物とコケ植物の関係はどうであったか、維管束植物は陸上でどのように多様化してきたか、現生のシダ植物の多様性を手がかりに探求する。古植物にみられる生殖を確かめるために、現生植物の形態を詳細に見る。	同上	同上
7	種子植物の起源	陸上へ進出した植物は種子をつくることによって適応的に進化してきた。シダ植物段階の植物に比して、種子をもつとどのように有利であったのか、種子そのものの起源をたどることによって概証する。種子植物が出現して陸上植物相はどのように多様化したかをみる。	西田治文（中央大学教授）	西田治文（中央大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	古植物がものがたる進化	化石は過去の植物の形や生活の証拠である。しかし、化石は断片的にしか得られない、化石によって進化の道すじはどこまで明らかにできるのか、植物進化史上の重要なトピックスについて最新の成果を紹介する。	西田治文	西田治文
9	種子植物の多様化	種子植物は陸上を覆うように多様に分化してきた、被子植物段階でどこまで適応的になったか、被子植物の出現によって生活域がどのように拡げられてきたのか、進化のあとを追いながら現在地球上で多様化している植物の姿を見る。	岩槻邦男	岩槻邦男
10	菌類の多様な姿 1	菌類は植物とどれだけ異なるかを詳細に比較し、菌類界と植物界との異同について整理する。菌類の系統について概説し、菌類の多様性について、まだ分かっていないことか多いことを解説する。また、変形菌類、鞭毛菌類及び接合菌門を概説する。	土居祥兌(国立科学博物館植物第二研究室長)	土居祥兌(国立科学博物館植物第二研究室長)
11	菌類の多様な姿 2	子嚢菌類、担子菌類について概説する。また不完全菌類はどのような菌類でどのように分類されているかについて解説する。さらに地衣類は藻類と菌類の共生体であることおよび、地衣類はどのように分類されるかについて解説し、地衣類にはどのようなものがあるかを紹介する。	同上	同上
12	種分化 1	生物の種分化は遺伝子の分化から始まるか、原理としてどのようなプロセスが考えられるかをいくつかのモデルで説明する。具体例を通じて植物の種がどのように多様化するかを示す。特殊な生態系においてみられる分化をみる。	岩槻邦男	岩槻邦男
13	種分化 2	ダーウィンに大きな影響をあたえたガラパゴス諸島をはじめとする大洋島では独自の生物が分化している。種分化の研究のモデルケースとしてこのような大洋島での適応放散的種分化を形態、分子レベルなどさまざまな手法で解析した例を紹介する。	伊藤元己(千葉大学助教授)	伊藤元己(千葉大学助教授)
14	種分化 3	植物の種分化を引き起こすメカニズムは数多くあるが、被子植物においてはその送粉動物との関係が注目され、しばしば両者の間には共生関係がみられる。このような植物と送粉動物の共進化による種分化の解析例を紹介する。	同上	同上
15	植物と菌の系統と分類	これまでの講義をふまえて、植物と菌の系統分類についてどれまで分かっているかをまとめ、分類系としてどれだけの確からしさでどのような体系が示されたかを説明する。さらに検討されるべき課題として何があるかを示し、生命の歴史的側面について考察する。	岩槻邦男	岩槻邦男 土居祥兌 井上勲

＝動物の行動と社会＝（ＴＶ）

〔主任講師：日高敏隆（滋賀県立大学長）〕

全体のねらい

動物たちは、ローレンツ時代に考えられていたように集団や種を維持するためにではなく、それぞれの個体がそれぞれ自分の適応度を高めようと努力しているのだという見かたが、研究者たちの基本的認識になった。そうなると、動物たちの行動も動物たちの社会も、これまでとはまったく違ったものとして、われわれの目に映ってくる。われわれ人間自身の行動や社会を見る目も、おのずと変わってくる。この講義では、この新しい視点から“動物の行動と社会”をとらえてみようと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動物行動学とは	はじめに エソロジーを確立した３人の学者 エソロジーの基本概念 エソロジーの４つの分野	日高敏隆（滋賀県立大学長）	日高敏隆（滋賀県立大学長）
2	行動のおこるしくみ	はじめに モンシロチョウの配偶行動 イトヨの攻撃行動 アカスジドクチョウの配偶行動 セグロカモメのヒナのつつき行動	同上	同上
3	環境世界と外界認識	はじめに 餌への定位 外界の知覚と媒体 環境世界	櫻井一彦（成城大学短期大学部助教授）	櫻井一彦（成城大学短期大学部助教授）
4	信号とコミュニケーション	はじめに 信号の媒体 各媒体の特性 信号によって伝えられる内容 ディスプレイの由来・儀式化・信号の進化 信号のねらい	同上	同上
5	行動の発達と学習 (1)	はじめに 本能か学習か 行動の個体発生 発達：成熟と学習 学習	同上	同上
6	行動の発達と学習 (2)	刷り込み さえずりの発達 文化	同上	同上
7	行動の進化と遺伝	はじめに 共通祖先からの由来 行動の進化的変化 ダーウィンの自然淘汰説と適応的変化 ガータースネークの食性の地理的変異 コオロギの一種のコーリング時間の変異	近雅博（滋賀県立大学助教授）	近雅博（滋賀県立大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	適応度とは	はじめに ダーウィンの自然淘汰説 適応度 行動の機能 カワトンボの一種の精子置換 ハヌマンラングールの子殺し	近　雅博	近　雅博
9	最適戦略とＥＳＳ	はじめに 戦略とは 最適戦略 シジュウカラの１腹卵数 ＥＳＳ（進化的に安定な戦略） 性比	同　上	同　上
10	代替戦略	はじめに 戦略と戦術 頻度依存の代替戦略 代替戦略としてのオスとメス 地位依存の代替戦略	中嶋康裕（宮城大学助教授）	中嶋康裕（宮城大学助教授）
11	利他行動と包括適応度	はじめに 利他行動 ミツバチの社会／アブラムシの兵隊 包括適応度／互恵的行動 囚人のジレンマ／“しっぺ返し”戦略 チスイコウモリの互恵的行動	近　雅博	近　雅博
12	社会構造 (1) 群れとなわばり	はじめに 動物はなぜ群れるのか－群れの経済学 群れ生活の出費と相克 なわばりの経済学	中嶋康裕	中嶋康裕
13	社会構造 (2) 配偶システム	はじめに 子育てと配偶システム 単婚の社会 一夫多妻の社会 真社会性動物	同　上	同　上
14	性淘汰	はじめに 性淘汰の強さとはたらき方 メスは本当にオスを選んでいるのか 魅力的なオスは本当に有利なのか なぜメスは選択するのか	同　上	同　上
15	動物行動学からみた家族	はじめに 親と子の対立 きょうだい間の対立 親と子のかけひき	中嶋康裕	中嶋康裕

＝細胞生物学（’９８）＝（ＴＶ）

〔主任講師：石川春律（群　馬　大　学　教　授）〕
〔主任講師：藤原敬己（国立循環器病センター部長）〕

全体のねらい

生命はさまざまな分子が特殊な環境の中で反応しあって成り立っている。細胞は生命現象が認められる最小単位で、生命維持に必要なすべての分子を持っている。それらの分子の多くは細胞内で無秩序な溶液状態としてあるのではなく、いろいろな構造に組み込まれている。ここでは細胞の構造やはたらき、それらを支える生命の化学について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	細胞とは	細胞は生物を構成する基本単位であり、生命の最小単位でもある。生命の始まりは、35億年前にさかのぼる。無機質から作られた有機質が地球の原始の海で小塊を作り、生命を持つ細胞へと進化した。細胞の種類や、基本的形態と機能から細胞像をイメージする。	石川春律（群馬大学教授） 佐藤英美（名古屋大学名誉教授）	石川春律（群馬大学教授） 佐藤英美（名古屋大学名誉教授） 藤原敬己（国立循環器病ｾﾝﾀｰ研究所部長）
2	生命を狙う分子	生命はさまざまな分子間の複雑な反応により維持されるが、細胞は生命の最小単位であり、それに必要な分子を備えている。細胞を構成する主な分子の基本的性質や機能、それらが形成する細胞の構造などについて学び、細胞の分子構築をイメージする。	藤原敬己（国立循環器病ｾﾝﾀｰ研究所部長）	藤原敬己
3	細胞のしらべ方	細胞の構造や機能、生命現象の機構などを研究するためにはいろいろな方法が用いられる。顕微鏡による細胞の観察、細胞の培養法、電気泳動法、遺伝子操作法など、細胞生物学分野の研究によく使われる解析技術について、その基本原理と得られる情報について学ぶ。	尾張部克志（名古屋大学助教授）	尾張部克志（名古屋大学助教授）
4	細胞膜のはたらき	細胞表面には外界から境する細胞膜がある。細胞膜は、隔壁としての役割、物質の透過や輸送、取り込み、分泌、細胞同士の接着やコミニケーション、情報の受容など多様な機能を果たす。細胞膜の構造や細胞表面の特殊化について機能と関連させて学ぶ。	石川春律	石川春律
5	細胞内小器官のはたらき	細胞内部にも細胞膜と同じような膜が存在し、動物の器官のような働きをする構造を作っている。これらの構造は細胞小器官と呼ばれ、小胞体、ゴルジ装置、リソソーム、ペロキシソーム、ミトコンドリア、葉緑体がある。それぞれの形態的特徴と機能について学ぶ。	同　上	同　上
6	細胞を支える骨組	細胞質には蛋白質から作られた線維成分が存在し、細胞骨格と総称される。主として微小管、アクチンフィラメント、中間径フィラメントの３種類からなり、細胞の形を支える骨組みや、細胞の運動装置など、多様な役割を果たす。ここでは細胞骨格の構造と機能について学ぶ。	同　上	同　上
7	細胞の動き	筋細胞は収縮を目的に分化した細胞で、細胞質内は収縮装置で満たされている。筋細胞以外の細胞にも運動能があり、細胞全体の移動や細胞内の動きなど、さまざまな運動がみられる。いろいろな細胞の収縮や運動を引き起こす構造、動きの分子機構などについて学ぶ。	尾張部克志	尾張部克志

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	細胞分裂と染色体	生物の発生や成長は、1個の細胞が分裂して2個になることから始まる。細胞分裂には核内で複製したDNAが凝集して染色体を形成し、紡錘体によって正確に娘細胞に分配される。ここでは紡錘体の構造や動態、染色体の構造、数、形状などについて学ぶ。	佐藤英美 黒田行昭（国立遺伝学研究所名誉教授）	佐藤英美 黒田行昭（国立遺伝学研究所名誉教授）
9	遺伝のしくみとＤＮＡ	遺伝のしくみはメンデルの法則を基本とする。これに合わない現象として遺伝子の連鎖、連鎖を破る遺伝子の乗り換えなどがある。その頻度を利用して染色体地図が作成される。その遺伝子の本体はDNAでる。ここではDNAの構造、タンパク質の合成のしくみなどについて学ぶ。	黒田行昭	黒田行昭
10	生殖と発生	生殖細胞形成、増殖、成熟、そしてそれに引き続く受精、発生という一連の変化は、真核細胞に共通するパターンである。この章では卵や精子の形成過程と構造変化、受精の分子機構、初期発生と変態のしくみなどについて学ぶ。	佐藤英美	佐藤英美
11	細胞内情報伝達	生体の統合的制御には神経に加え、ホルモンなどいろいろな細胞が産生する生理活性物質による液性制御機構が働く。こうした液性情報が特定の細胞にだけ働く機構について、細胞にある受容体、その特異性、細胞内情報伝達などの機構を中心に学ぶ。	藤原敬己	藤原敬己
12	細胞間情報伝達－神経のはたらき－	神経細胞は情報の伝達や処理を行う特殊な細胞で、その性質は遺伝的に与えられているが、環境によって変化する性質（可塑性）としない性質がある。神経細胞が個体の生命の営みの情報処理を行う脳の主要構成要素であるという立場から、その特殊性について学ぶ。	松本元（理化学研究所グループディレクター）	松本元（理化学研究所グループディレクター）
13	生体防御－免疫のはたらき－	生物は環境中の多くの危険因子から自己を守るため、さまざまな防御機構を備えている。免疫は最も高度に発達した、いわば最後の砦ともいえる生体防御機構である。この機構の主役である抗体の産生や構造、体液性免疫と細胞性免疫のしくみなどについて学ぶ。	藤原敬己	藤原敬己
14	細胞の変異とがん	生物の遺伝子ＤＮＡは安定なものであるが、化学物質や放射線など環境因子によって突然変異が起こる。これが遺伝病や老化、がんなどの原因となる。がんは正常細胞が多くの段階を経て生じるが、特にがん遺伝子やがん抑制遺伝子の関与が最近明らかになった。	黒田行昭	黒田行昭
15	細胞の老化と死	個体の老化や死には、個体を構成する個々の細胞の老化や加齢が深く関わっている。これら細胞のＤＮＡにプログラムされた遺伝情報によるか、または環境因子によるＤＮＡ損傷の蓄積によると考えられる。その証拠として老化遺伝子やテロメアの存在が見出された。	佐藤英美 黒田行昭	佐藤英美 黒田行昭

＝現代生物学＝（ＴＶ）

〔主任講師：毛利秀雄（岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長）〕
〔主任講師：平本幸男（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代生物学は、今世紀後半の分子生物学の発展の影響を受けて著しい進歩をとげつつある。その中で、遺伝と遺伝子のはたらき、発生における分化と形態形成、物質代謝、エネルギー代謝、運動、およびホメオスタシスについて解説する。あらかじめ、生物学概論または同程度の基礎的知識を学習しておくことが望ましい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	タンパク質の構造と機能	生命の根源物質であるタンパク質についてその合成と分解、一次構造や立体構造、変性と再生などを概説し、タンパク質はどういう機能をもっているのかについて述べる。	大隅良典（岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所教授）	大隅良典（岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所教授）
2	解糖と呼吸	解糖と呼吸の役割を考える。生体内におけるエネルギーの生成と利用が解糖と呼ばれる代謝のどのような反応によっておこるかを述べ、この代謝を進める反応と細胞内構造との関連を解説する。	山田晃弘（放送大学教授）	山田晃弘（放送大学教授）
3	光合成	光合成が植物体のどのような構造を利用して行われ、その産物がどのように利用されるかを述べ、光合成の代謝反応と葉緑体の構造との関連について解説する。	同上	同上
4	代謝調節	生体内でおこる代謝（物質交代）は酵素のはたらきにより進行する。「生物学概論」で学んだ酵素および代謝についての知識を整理し、さらに深く解説する。	同上	同上
5	遺伝情報とは何か －セントラルドグマ－	遺伝物質はＤＮＡと呼ばれる高分子化合物である。遺伝情報は４つの塩基の配列順序の中にある。遺伝情報の本質は何か、どのようにして形質として発現するのか、セントラルドグマについて概説する。	大隅良典	大隅良典
6	遺伝暗号の解読	地球上の生物は、バクテリアからヒトに至るまで同じ遺伝暗号を用いている。このことは全ての生物が共通の原始生物の子孫であることを強く示唆している。遺伝暗号の解読と、その発現に重要な役割を担うＲＮＡについて学ぶ。	同上	同上
7	遺伝子の発現とその調節	ＤＮＡの情報がＲＮＡを介してタンパク質へとほん訳されるか、遺伝子の発現はどのように調節されているかについて概説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	遺伝子操作の進歩と真核生物の遺伝子	分子生物学の進歩によって、遺伝情報の本質が理解され、人類は遺伝子を操作することが可能となった。生物学上のこの重大な変革をもたらした技術とその応用面について概説する。	大隅良典	大隅良典
9	発生のしくみ	動物の発生における細胞分化と形態形成の実際について概観し、さらに分化と形態形成のしくみについてこれまでどのような考えが出されているかについて学ぶ。	毛利秀雄(岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長)	毛利秀雄(岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長)
10	哺乳類の発生と形態形成Ⅰ	1960年のキメラマウス作製の報告から現在の発生工学に至るまでの発展を素材として、ヒトを含む哺乳類の発生の原理と特性とを理解させる。	近藤寿人(大阪大学教授)	近藤寿人(大阪大学教授)
11	哺乳類の発生と形態形成Ⅱ	短尾突然変異体マウス、単眼突然変異体セブラフィッシュなどを題材としながら、体軸形成などの過程と遺伝子の作用とを結びつけ、実感をもって理解させる。	同上	同上
12	植物の分化と形態形成	植物の成長および発生の過程を学び、動物のそれらとは異なる面に注目する。植物の成長および発生の特徴を生かし、バイオテクノロジーの手法により農業、園芸面で役立っている現状をも解説する。	山田晃弘	山田晃弘
13	細胞の運動	細胞の移動運動や、細胞内の原形質や細胞小器官の運動とそのしくみについて、顕微鏡レベル、分子レベルでの研究方法を含めて解説する。	平本幸男(東京工業大学名誉教授)	平本幸男(東京工業大学名誉教授)
14	動物の運動	走る、泳ぐ、飛ぶなどさまざまな型の動物の運動における運動モーターの種類とそのはたらき、神経による調節について述べる。さらに異なる種類の筋肉の収縮のしくみについて比較、解説する。	同上	同上
15	ホメオスタシス	生物には、外界や体内の環境変化に対してその形態や生理的状態をできるだけ一定に保とうとする性質がある。このようなホメオスタシスのしくみについて、いくつかの例をあげて説明する。	毛利秀雄	毛利秀雄

＝自然と科学－生命編＝（Ｒ）

〔主任講師：平本幸男（東京工業大学名誉教授）〕
〔主任講師：毛利秀雄（岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長）〕

全体のねらい

生命の誕生と生物の進化、生物と環境の関わり合い、バイオテクノロジーと生命倫理など、現代生命科学が抱えている諸問題について述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命とは何か	生物と無生物のちがい、生命とは何かという問題を個体、細胞、分子などさまざまなレベルから述べる。	平本幸男（東京工業大学名誉教授） 毛利秀雄（岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長）	平本幸男（東京工業大学名誉教授） 毛利秀雄（岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長）
2	生命の起源	生命現象は物質の特殊な状態である。地球上の生命現象の物質的基礎については相当の部分が解明されているが、物質だけの世界に生命現象がどうして現るかを知るためには、物質一般を考える必要がある。	野田春彦（東京大学名誉教授）	野田春彦（東京大学名誉教授）
3	細胞進化	「むかしから人々の注目を集めてきたのは、生物の形の進化であったが、分子の進化はこれとどう関係するのか。また、現在の細胞はどのように進化してきたと考えられているか、これらについて概説する。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
4	化石の証拠	地球物質はすべて歴史的産物であり、46億年の地史のどこかに位置づけられる。生物史はおよそ35億年を占めるが、地層に含まれる化石の変遷をたどることによって、非可逆過程としての大進化の様相が証拠だてられる。	石川統（東京大学教授）	石川統（東京大学教授）
5	種とは何か	地球上に現在どのくらいの数の種が存在するか誰も正確に答えられない。進化はなぜこのような多様な種を作り出したのか、なぜ我々は種を識別できるのか、種とは一体何か、以上の疑問に遺伝子学と分類学の立場から答える。	馬波駿介（北海道大学教授）	馬波駿介（北海道大学教授）
6	生物と環境Ⅰ －植物と環境－	生物と環境とのかかわりを、生物の環境調節、生物の環境作用、環境形成作用を含め、できるだけ具体例を入れて個体から生物圏の問題まで概説したい。	大島康行（早稲田大学名誉教授）	大島康行（早稲田大学名誉教授）
7	生物と環境Ⅱ －動物の生態－	生物と環境とのかかわりを、生物の環境調節、生物の環境作用、環境形成作用を含め、できるだけ具体例を入れて個体から生物圏の問題まで概説したい。	川那部浩哉（滋賀県立琵琶湖博物館館長）	川那部浩哉（滋賀県立琵琶湖博物館館長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	生物による物質の蓄積	生命体はおよそ30種の元素から構成されている。原始海洋で誕生した生命体はどのようにしてこれらの元素をその生息環境から選んだのであろうか。また、それらの元素はどのようにして生体に取り込まれ、どのような生理機能を担っているのだろうか。金属元素を中心にしてこの問題を論じたい。	道端　齋（広島大学教授）	道端　齋（広島大学教授）
9	自然保護	①自然の保護はまず自然の構造と機能について、興味を持ち、よく認識することから始まる。恐らく生物と環境の部分で自然についても述べられると思うので、それを生かして、自然とは何か、についてまず話したい。 ②地球上における生物の地理的分布。その特殊性。例えば、何故インドとアフリカの哺乳類には比較的共通の種類がいるのか？など、について話す。次に、身近な環境として、日本の動物について紹介し、世界とのつながりについて認識してもらう。 ③自然界に存在している種は全て個体群と言う存在様式であるので、個体群とそれをとりまく環境の認識なしには自然の保護は有り得ない。個体群の特性の中で、種の保護に関連する部分をとりあげて、解説する。 ④最後に自然の保護の思想について述べる。その基本的考え方は「自然の生物の種の生活を尊重しつつ、人の生活と“すみわけ”をすることである。」また、環境の保全・設計、ランドスケープ・エコロジーについても説明する。	小野勇一（九州大学名誉教授）	小野勇一（九州大学名誉教授）
10	植物バイオテクノロジー　I	植物バイオテクノロジーがどのような植物細胞機能の上に成り立っているか、その現状と将来の展望はどのようなものかを概説する。	駒嶺　穆（進化生物学研究所主任研究員）	駒嶺　穆（進化生物学研究所主任研究員）
11	植物バイオテクノロジー　II	植物バイオテクノロジーがどのような植物細胞機能の上に成り立っているか、その現状と将来の展望はどのようなものかを概説する。	同　上	同　上
12	動物バイオテクノロジーIII	栽培漁業や遺伝子導入によるトランスジェニック動物の作製、発生工学など、動物に関するバイオテクノロジーの現状について述べる。	毛利秀雄	毛利秀雄
13	動物バイオテクノロジーIV		平本幸男	平本幸男
14	人工臓器	人工臓器は目的の臓器の機能を代行するシミュレーションモデルであり、その形状や大きさや位置にとらわれることがない。人工臓器の研究により生体臓器の機能の本質を知ることができるし、それを越えることもできる。	渥美和彦（鈴鹿医療科学技術大学長）	渥美和彦（鈴鹿医療科学技術大学長）
15	生命倫理	従来のヒポクラテス以来の医の倫理では、意志の独善的医療になりがちであり、患者中心の医療にするために新しい生命倫理学（バイオエシックス）が生まれ、医師や医療関係者の考え方や態度に変化が生じてきている。	星野一正（京都女子大学教授）	星野一正（京都女子大学教授）

＝太陽系の科学＝（ＴＶ）

（主任講師：小尾信彌（元放送大学長）
主任講師：吉岡一男（放送大学助教授））

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や、個々の天体の性質等について、最近の惑星探査などによる研究成果をふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	研究の歴史	古代やギリシア時代から太陽系天文学の発展の歴史を概観し、最近の探査機による太陽系研究にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。全15回の講義の展開についても述べる。	小尾信彌（元放送大学長）	小尾信彌（元放送大学長）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等の特徴について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同上	同上
3	地球と月の運動	自転や公転およびそれにかかわる地球の運動の様子をそれらが解明されてきた過程とともに学ぶ。さらに、地球のまわりの月の運動についても学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）	吉岡一男（放送大学助教授）
4	天球座標と時間・時刻	天球上での位置を表わす天球座標および時間・時刻の決定は、地球の自転や公転と深くかかわっている。ここでは、これらの決定がどのようにして行われ、その結果どのような種類の天球座標や時間・時刻が定められているかを学ぶ。	同上	同上
5	惑星の視運動と月の現象	天球上での惑星の動きすなわち視運動は、太陽系のモデルをつくる際の観測的基礎となってきた。ここでは視運動がどのように説明されるかについて学ぶ。また月の運動に関連して、日・月食などの現象についても学ぶ。	同上	同上
6	惑星運動の法則	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（富山国際大学教授）	堀源一郎（富山国際大学教授）
7	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは面積速度の法則（第2法則）について、その諸側面を学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	堀　源一郎	堀　源一郎
9	第3法則と万有引力	万有引力の法則からは、2体の運動について公転の平均距離と公転周期の間に、いわゆる第3法則が導かれる。ここではその導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	同　上	同　上
10	惑星以外の天体の運動	地球をまわる月、一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同　上	同　上
11	摂動	現実の太陽系においては、惑星や衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降発展した摂動について学ぶ。	同　上	同　上
12	地球型惑星	水星、金星、地球、火星、さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理学的な性質を学ぶ。	松井孝典（東京大学助教授）	松井孝典（東京大学助教授）
13	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の成果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。	同　上	同　上
14	小惑星・小天体	太陽系には、惑星のような比較的大型の天体の他に火星と木星の軌道内を公転する非常に多数の小惑星や、さらに非常に多数の彗星などの小天体が知られている。これらの小天体についても、最近の分光観測や直接探査によって多くのことが知られるようになった。これらの小天体について学ぶ。	同　上	同　上
15	太陽系の起源	太陽系の諸天体は、およそ46億年以前に銀河系内の星間雲のなかで太陽が形成されるのに伴って誕生した。惑星をはじめとする太陽系の天体の誕生については18世紀中ごろ以来多くの説が出されている。ここでは最近の考え方を中心に太陽系の起源について学ぶ。	同　上	同　上

＝天体物理学入門＝（ＴＶ）

〔主任講師：吉岡一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本科目では、天体についての知識がどのような観測や理論にもとづいて得られるのかの理解を目ざしている。そのために、主として恒星の可視域の観測を実例にとって、その運動や質量や表面温度・圧力あるいは内部構造を得る具体的過程を、演習を交えて解説する。これらの知識は、他の天体の解析の基礎にもなっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	天体の位置の表示と年周視差	まず、15回の講義の全体の流れについて概説される。ついで、天球の概念と天球上での天体の位置の表し方を学ぶ。そのあと、恒星とはどのような天体かが説明され、最後に、恒星の直接的な距離を与える年周視差とその測定法について学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）	吉岡一男（放送大学助教授）
2	天球上での天体の動きと視線速度	天球上での天体の動きとその原因について学ぶ。ついで、天体の視線上の動きを表す視線速度とその測定法について学ぶ。さらに、天体の宇宙空間内での運動が説明され、最後に、太陽およびその近傍の星々の運動を学ぶ。	同上	同上
3	恒星の集団の距離の決定	年周視差を直接に測定することのできないより遠い距離の測定法として、ここでは恒星の集団に適用されるいくつかの方法について学ぶ。	同上	同上
4	天体の明るさの測定と等級	天体の明るさは、等級で表される。ここでは、等級の定義とその測定法について学ぶ。等級には、見かけの等級と絶対等級の区別があり、また、測定される波長域による区別もされているが、それらについても学ぶ。	同上	同上
5	連星とその種類	かなりの恒星が、連星として存在している。連星は、質量をはじめとして恒星のさまざまな物理量の貴重な情報源となっている。ここでは、連星の頻度とその種類について学ぶ。また、連星を構成する星の公転運動についても学ぶ。	同上	同上
6	連星の解析	連星を観測して星の物理量を得るのに、いくつかの方法がある。すなわち、天球上で動きを観察したり、視線速度や光度の変化を観測する。ここでは、これらの方法について学ぶ。	同上	同上
7	天体物理現象の解析のための基礎的法則	これまでは、天体の運動や明るさ等の知識で間に合う現象を扱ってきた。以後は、温度や圧力等の物理量もかかわる現象を扱うので、ここではその準備として、それらの概念やそれらの間で成り立つ法則について、基礎的なものを学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	天体の温度の決定とスペクトル	天体の温度は、主に天体からの放射とスペクトルをもとに求められる。ここでは、それらの決定法をその基礎となる物理的知識とともに学ぶ。さらに、温度決定のいくつかの例も学ぶ。	吉岡一男	吉岡一男
9	恒星の表面温度とスペクトル型・色指数	恒星は、スペクトルをもとにスペクトル型に分類されているが、スペクトル型は星の表面温度や色指数と密接な関係にある。ここでは、それらの関係について学ぶ。	同上	同上
10	HR図と恒星の分類	横軸に表面温度を示す量を目盛り、縦軸に光度を示す量を目盛ったHR図は、恒星の研究に重要な役割を演じてきた。ここでは、HR図が導かれた歴史も交えて、HR図にもとづく恒星の分類について学ぶ。	同上	同上
11	太陽の年齢とそのエネルギー源	太陽は46億年もの間、現在とほぼ同じ明るさで輝いている。ここでは、このエネルギー源が核融合のエネルギーであることを、太陽の年齢が推定された過程とともに学ぶ。さらに、他の恒星のエネルギー源についても学ぶ。	同上	同上
12	恒星の内部構造の決定	現在、恒星の内部構造について、かなりのことが知られている。ここでは、恒星の内部構造がどのような原理にもとづいて決定されているかを学ぶ。また、それらをもとに、恒星の中心部の物理量が概算される。	同上	同上
13	恒星の表層構造の決定	われわれが直接に受け取る恒星からの放射は、恒星の表層から来たものである。ここでは、これらの表層の構造がどのような原理にもとづいて決定されているかを学ぶ。この原理は、星間雲など恒星以外の天体にも適用できる。	同上	同上
14	天体の化学組成の決定	ここでは、前章で学んだ知識も用いて、恒星をはじめとする天体の化学組成や温度・圧力などの物理量がどのようして求められるかを学ぶ。	同上	同上
15	太陽の世界	ここでは、われわれに最も身近な恒星である太陽で観測される現象について学ぶ。さらに、これまで学んだ表面温度や表層構造や内部構造などの決定法を太陽に適用し、具体的な結果を得る。	同上	同上

＝天体と宇宙の進化Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

天体とそれらすべてを包含する大局的宇宙について、現代の理解と解釈を述べる。宇宙が誕生し、いろいろな天体が生まれ、多様な階層構造をもつに至った過程を明らかにする。最前線の研究成果に重点をおくが、歴史と、それらを理解するための基礎も述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近代宇宙観への道	1．天上の運動と地上の運動 2．天上の物質と地上の物質 3．物質世界の歴史	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	宇宙の広がりとその認識	1．距離の測定 2．銀河の世界 3．膨張宇宙	同上	同上
3	宇宙からの情報	1．可視光線による観測 2．宇宙観測のチャンネル	同上	同上
4	星の誕生と主系列星	1．恒星の世界 2．星の誕生と原始星 3．星の内部はなぜ分かる 4．星のエネルギー源 5．主系列星とその寿命 6．太陽からのニュートリノ 7．白色矮星と褐色矮星	野本憲一（東京大学教授）	野本憲一（東京大学教授）
5	赤色巨星と進化の終末	1．赤色巨星への進化 2．散開星団の進化と年齢 3．小質量星の進化と球状星団 4．炭素の合成 5．質量放出と惑星状星雲 6．大質量星の進化と元素合成	同上	同上
6	超新星爆発と元素合成	1．超新星とは 2．大マゼラン雲に出現した超新星1987A 3．大質量星の進化と重力崩壊 4．ニュートリノ・バースト 5．超新星1987Aの光度曲線 6．超新星からのＸ線・ガンマ線と物質混合 7．超新星での元素合成と固体微粒子の形成 8．超新星での対流不安定と混合	同上	同上
7	連星の進化	1．新星 2．Ｉａ型超新星 3．連星と超新星の多様性 4．Ｘ線連星 5．中性子星連星と重力波 6．中性子星 7．元素の起源と太陽組織	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	銀河系と銀河	1．銀河宇宙 2．銀河の観測 3．銀河系内での星の運動 4．銀河系の概観	岡村定矩(東京大学教授)	岡村定矩(東京大学教授)
9	銀河の構造と銀河進化モデル	1．いろいろな銀河 2．自己重力系としての銀河 3．銀河内での物質とエネルギーの循環 4．銀河進化モデル 5．銀河の力学進化	同上	同上
10	銀河進化と宇宙環境	1．宇宙の階層構造とダークマター 2．銀河の形態－密度相関 3．銀河の光度関数 4．ブッチャー・エムラー効果と不規則銀河 5．楕円銀河とバルジの力学特性	同上	同上
11	銀河から宇宙へ	1．宇宙の構造を決める宇宙論パラメータ 2．宇宙の距離はしご 3．遠方銀河の距離決定法とハッブル定数 4．密度パラメータの決定 5．さらに遠くさらに広く	同上	同上
12	宇宙論の観測的基礎	1．ハッブルの法則 2．軽元素の存在量 3．宇宙マイクロ波背景輻射	須藤靖(東京大学助教授)	須藤靖(東京大学助教授)
13	ビックバン宇宙モデル	1．一様等方宇宙モデルの進化 2．宇宙論パラメータ	同上	同上
14	暗黒物質と宇宙の大構造	1．暗黒物質：観測的示唆 2．暗黒物質の候補 3．暗黒物質と宇宙の構造形成	同上	同上
15	初期宇宙の進化	1．膨張宇宙の年譜 2．4つの相互作用の分化 3．インフレーション理論 4．宇宙論の展望	同上	須藤靖 杉本大一郎

＝天体と宇宙の進化Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：杉本大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

同じ天体でもいろいろな波長の電磁波など異なる観測チャンネルによって、また異なる観測技術によって、それぞれに特有の側面を見せる。また、特定のチャンネルや技術をとおして初めて観測出来る現象もある。宇宙の探究は、広い意味での視野の拡大をとおして進む。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい技術が開く新しい天文学	1．視野を広げる 2．詳細に見る 3．情報を引き出す。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	電波天文観測Ⅰ	1．電波天文学の誕生 2．電波の発生機構 3．電波望遠鏡のしくみ	石黒正人（国立天文台教授）	石黒正人（国立天文台教授）
3	電波天文観測Ⅱ	1．電波天文観測の方法 2．干渉計型電波望遠鏡 3．ＶＬＢＩ（超長基線電波干渉計） 4．その他の電波望遠鏡	同上	同上
4	電波で見る太陽および星の誕生と死	1．電波で見る太陽 2．星間ガスから星へ 3．原始惑星系 4．超新星残骸とパルサー	同上	同上
5	電波で見る銀河系および銀河	1．銀河系の大局構造 2．銀河系中心部 3．電波で見るさまざまな銀河の姿 4．活動銀河中心核と巨大ブラックホール	同上	同上
6	大気圏外から観測するＸ線	1．見える宇宙 2．Ｘ線とは 3．Ｘ線と大気 4．Ｘ線天文学の始まり 5．わが国のＸ線天文学 6．ロケット	牧島一夫（東京大学教授）	牧島一夫（東京大学教授）
7	銀河系からのＸ線	1．Ｘ線で見た太陽 2．超新星の残骸 3．かに星雲とパルサー 4．連星Ｘ線パルサーと中性子星の磁場 5．中性子星の半径とＸ線バースト現象 6．中性子星の質量とブラックホール 7．この章のまとめ	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	銀河系の外から来るX線	1．X線を反射させる 2．X線で見た銀河 3．銀河の中心の巨大ブラックホール 4．銀河団と暗黒物質 5．宇宙の物質量と構造形成 6．宇宙の生い立ちを探る	牧島一夫	牧島一夫
9	可視光・赤外線観測の原理	1．天体からの光 2．光を集める 3．光を分ける 4．光を記録する	家正則（国立天文台教授）	家正則（国立天文台教授）
10	光・赤外線観測の新技術	1．望遠鏡大型化と能動光学 2．大気ゆらぎの克服 3．国際観測所 4．スペースと地上	同上	同上
11	光・赤外線で見る星、星雲、銀河	1．赤外線観測 2．惑星の観測 3．原始星・惑星系形成 4．スペクトル線診断 5．銀河の活動現象	同上	同上
12	深宇宙の観測	1．銀河の分布と宇宙の大構造 2．銀河の形成 3．銀河の進化	同上	同上
13	天文学における理論とその役割	1．総合科学としての天文学 2．宇宙における極限状態 3．宇宙における形態形成と進化	杉本大一郎	杉本大一郎
14	計算機という理論天文台	1．シュミレーションがひらく宇宙像 2．宇宙の流体現象 3．宇宙の多体現象 4．超高速計算とその将来	同上	同上
15	21世紀の天文学	1．人類の宇宙認識 2．宇宙像の拡大と観測手段 3．「発見の時代」の天文学 4．宇宙認識の拡がり 5．21世紀へ向かう観測の展望	同上	天体と宇宙の進化Ⅰ・Ⅱの講師全員

＝固　体　地　球＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球という術語は、大気圏と水圏を除いた地球部分を指す。しかし、実はその固体地球の本質は、大きな時間スケールが必要であることを条件でみると、むしろ流体運動が支配的な、美しい成層構造をなす球体であることを概説する。地球時間の長さと目前の物体が今示す挙動との落差の大きさに、地球の偉大さが示されよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	特異な成層惑星	太陽系の惑星の中で、唯一の水惑星地球は、外観としてブループラネットであるばかりでなく、内部まで“水浸し”の、しかも美しく密度成層した特異な惑星であるとの認識を深める。成層単位内、あるいはそれらの間で大規模な、ゆっくりとした循理が成立している。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	鉱物の世界	地球物質を構成している、地球科学的な最小単位とされる鉱物を、さまざまな角度から捉えてみる。結晶という秩序体系が、地球内部や表層での多様な環境条件に応じて形成されていくかを示し、大きな意味で、地球科学的環境示標物質としての存在を解説する。	同上	同上
3	岩石・地層の世界	岩石や地層は、すでに複雑な構成をもつ地球表層近辺の物質である。鉱物ほど局所的ではないが、環境支配のもとに、それなりに特有の岩石・地層が形成されることを示し、さらにその性質を逆に利用して、現存する岩石・地層から地球の過去の状態を知る手段とする。	同上	同上
4	化石の世界	生命を持つ水惑星の歴史をたどる一つの大きな柱は、生命を形として成している化石の研究である。化石は生命環境の示標であると同時に、地球上で生起した進化の道にのった、地球時間の指示者でもありうる。増大してきた種の多様性の特性も化石によって語られる。	同上	同上
5	地球物質の循環	地球は一つの巨大なオープン・システムと考えてよい。太陽エネルギーと共に、地球内部エネルギー、天体としての回転エネルギーが相互に関わり合う場には、様々な理論と時間スケールでの物質循環が生起している。地球事象は物質循環で語られるといってよい。	同上	同上
6	地殻変動と地形	地球は生きている、あるいは休みなく動く地球という表現を地球科学の立場から模写してみる。現在の地形は、さまざまな過去の積算された結果であるから、地殻変動や気候変化などを地表（海中を含め）形態からたどる糸口になりうることを示す。	同上	同上
7	地史－1 先カンブリア時代	地球46億年の歴史のうち、最後の僅か6億年弱が生物史をフルに活用して復元される地史である。それ以前の40億年には、いったい何事が進行していたのか、生物史のみならず、火成史・変成史を含む地殻変動史をひもとき、地球史の理解を深める。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	地史－2 古生代	数多くのビジュアルな化石記録を成すようになった顕生累代のうち、最初の6億～23億年間の歴史を概観する。この間に、さんご礁の形成・魚類の出現、生物の上陸など、生命史上の大事件が含まれている。日本列島の歴史もこの頃から詳しくなってくる。	濱田隆士	濱田隆士
9	地史－3 中生代	中生代といえば、恐竜やアンモナイトの全盛時代、という印象が深い。しかし、それらの発展やいわゆる大絶滅事件は、実は大局的にみると発展していく生命世界のほんの1エピソードであり、生物危機の意味を再考する必要もあることを説く。	同上	同上
10	地史－4 新生代	人類の出現も含み、現在に到る約6500万年間は、一言では哺乳類時代と通称される。若い地史であるだけに、環境はより複雑化し、生物種も多様性を益々増大させ、地域特性が著しくなってくる。日本列島の形成史も詳しく理解できる時代となり、未来予測にもつながる。	同上	同上
11	生物の大進化と絶滅	生物界の多様性増大が、まぎれもない生物大進化の不可逆特性であるとされるが、そのメカニズムは単純ではない。化石素材から見えてくる繁栄と絶滅のくり返しには、周期性らしき棒粗も認められ、種々の解析が進んでいる。恐竜の絶滅仮説にもふれる。	同上	同上
12	人類の足跡	人類の起源はまだ確定していないが。しかし、かつて予想されたよりもはるかに古く、少なくとも 500万年前に遡ることとなり、 200万年以降の第四紀を“人類記”と呼ぶことはできなくなった。人類の進化の特徴は、智的社会の形成にあるが、地球環境の破壊も起こした。	同上	同上
13	新しい地球像の形成に向けて	文化の進展、科学の光隆につれて、人類の地球に対する考え方は大きく変わってきた。それは、単に地球史の詳細が解明されてきたことのみによるのではなく、ヒトと地球自然環境との相互作用やそれについての認識が移り変わってきたことにもよる。	同上	同上
14	プレート・テクトニクス	プレート・テクトニクス理論誕生への道は、科学史に大きく記されるべき経過である。ウェゲナーの大陸移動説にも言及しながら、科学の協同作業が解き明かす、ダイナミック地球像の流れを浮き彫りにする。動かざるごと大地の如し、の認識は音を立てて崩壊した。	同上	同上
15	プリューム・テクトニクス	プレート・テクトニクス仮説にも解決できない地殻～地球内部運動メカニズムがある。それを成層構造の再調査や地史的ないきさつからのプレート成長記録の新しい解析法を組み合わせ、より可能性の大きなグローバル・テクトニクス理論がいま展開されつつある。	同上	同上

＝ 日本列島の地球科学 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：濱田隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本列島の形質は、地球の歴史の中で育てられてきた。しかも地殻の激動の場からの産物である。赤道直下に近い熱帯のサンゴ礁地帯であった部分が、プレート・テクトニクスによって北上し、アジア大陸の東縁と衝突して誕生した結果であることを、周辺の海域を含めた幅広い地球科学の眼でたどってみる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	列島の特徴	日本列島とその周辺の、海水をとり去った結果の大地形を概観し、プレート・テクトニクスによる変動帯として成長してきた諸々の特徴を、グローバルな構造論の立場を通して理解する。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	列島の地質構造	日本列島は、複雑な地殻変動の重なりとして形成されたので、現在見られる地質構造も複雑である。プレート衝突場としての特徴として、変成帯と非変成帯とが繰り返し配列していたり、火山が帯状に連なるなど、豊かな歴史を反映したものであることを理解する。	同上	同上
3	列島の気象	現在の日本列島は、西に日本海を隔ててアジア大陸に向かい合い、ほぼ南北に細長くのび黒潮・親潮という二大海流に囲まれ、さらに東は太平洋に面しながら、北半球の偏西風帯に位置する。この配置が季節毎に特徴的な気象をもたらすことを理解する。	同上	同上
4	列島をめぐる海	日本は、海洋国と呼ばれるのに相応しい。海洋とは、ただ単に水をたたえた広大な低地というだけではない。地球の自転運動により、太平洋の西縁に当たる日本列島近辺の海水は特異な運動をとるようになっていることを理解する。	同上	同上
5	島弧とプレート運動	日本列島は、グローバル・テクトニクスとしてのプレートの運動によってでき上がった。地球表層部にはプレートがどのように配置され、どのような動きをしてきたのか、列島形成の原動力になった地殻運動のモデルを検証する。	同上	同上
6	列島周辺の海底	海の歴史は、海底の地形と地質、そしてその形成年代が語ってくれる。海底の歴史は、プレートのどの位置を占めるかで大きく異なる。列島地形や地質構造との調和のとれた配列が、海底の相対的な動きを示していることを理解する。	同上	同上
7	地震活動	変動帯に位置する日本列島には、過去・現在そして未来を通じ、地震・断層運動が激しい。地震とそれによって起こされる地震災害は、日本列島のもつ宿命であることを理解し、地震対策の現況をも併せ理解する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	火山活動	伊豆大島や雲仙普賢岳だけが火山ではない。日本列島は、プレートの押し合う場として、地震帯と火山帯とが併存しているので、地質時代から現在に至るまで、多数の火山活動が起こって現在の地形・地質を形成していることを理解する。	濱田隆士	濱田隆士
9	地史 (1) 古生代	日本列島の基礎をつくり上げた古生代やそれ以前の地層が語る歴史はまさにグローバルで、アジア大陸の要素と、今は消え去った南海のパシフィカ要素との出会いにある。化石の語る古生代地理を考え、ダイナミックな列島形成史前半を理解する。	同上	同上
10	地史 (2) 中生代	日本列島形成史に占める中生代の位置は特別である。かつては古生代のものと思われてきた秩父統のかなりの部分が中生代前半の形成によることが明らかとなり、列島史は大きく塗りかえられてきている。恐竜の産出は、大陸とのつながりを示すものと理解できる。	同上	同上
11	地史 (3) 新生代	日本列島がほぼ現在の姿になる、いわば仕上げの時代であり、火山活動、隆起・沈降運動も激しかった。したがって侵食力も強く、堆積作用も大きかったので、山肌・半島・平野の形成期となり、海流系も安定化してきた時代であることを理解する。	同上	同上
12	地下資源	小さな島国の日本は、多種大量の資源を外国に依存している。そのような中で、日本の地史を反映した鉱化作用・地下資源鉱床の形成もあった。石灰岩やヨードなどは、完全自給型地下資源であることを理解し、エネルギー資源には乏しい実情をみつめる。	同上	同上
13	多島海型自然環境	日本は島国といわれるが、それはただ列島をなしているということだけなく、大小様々の島々を抱えた多島海的自然環境下にある、ということに他ならない。わが国の気候・風土・文化へもその影響が大きいことを理解する。	同上	同上
14	日本の地球科学の進展	日本列島の歴史が複雑な分、その研究史も多彩である。輸入文化として始まった系統的な日本の地球科学を認識し、それが時と共に消化・吸収され、今では日本からならではの地球科学が、世界に向けて発信される時代となった発展の経緯を概観する。	同上	同上
15	人と暮らし	日本列島の歴史の主役が大陸系と南方系であったことに似て、日本列島での人類発展史・生活型にも、南方型と大陸型とがある。自然環境に見合った風土が形づくられてきた縄文・弥生時代以降、次第にグローバル化も混じ、現在ではヒトと自然の接点が変容を遂げた。	同上	同上

＝応用数学（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：藤田　宏（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

最近のコンピュータによる数値的手段の進歩や対象領域の拡大を遠望しつつ、応用数学の基本的な発想法、概念、方法を解説する。数学的な明快さと具体性による納得にもとづいて展開し、数学による自然の理解と自然への働きかけを任務とする応用解析学への平易な入り口からの、しかし、現代風の誘いとしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	増殖の数理	最も初歩的な発展系である増殖の数理モデルから入り、1階微分方程式の基礎およびその豊かな応用について学ぶ。	藤田　宏（東京大学名誉教授）	藤田　宏（東京大学名誉教授）
2	振動の数理	微分方程式の最も重要な応用は力学における発展系の解析である。簡単な調和振動子から入り、特性根の方法を含め、2階微分方程式の初期値問題およびその応用の初歩について学ぶ。	同　上	同　上
3	競合の数理	量的に表される二つの勢力の間の時間発展をともなう競合の数理モデルは、簡単な場合については、連立微分方程式で与えられる。軍備拡張競争のモデルを扱うこの章は連立微分方程式への初期値問題への入門でもある。	同　上	同　上
4	惑星運動の数理（その1）	ニュートンによる力学と解析学の同時誕生のとき以来、惑星の運動の解析は数学による自然の理解の最大の成功例の一つである。特殊な非線形連立微分方程式の初期値問題に帰着するこの現象の数学モデルとその解析の理解に挑戦することは感激にあたいする。	同　上	同　上
5	惑星運動の数理（その2）	前回に引き続いて解析をすすめ、惑星の起動が楕円などの円錐曲線になることを導く。デカルトによる解析幾何が自然の理解に顕著な貢献をした例であることも学ぶ。	同　上	同　上
6	弦のつり合いの数理	多くの安定な発展系は時間が立つにつれてつり合いの状態、すなわち、定常状態に到達する。この定常状態の解析は数学的には境界値問題に帰着する。簡単な弦のつり合いを通じて境界値問題の基礎とその応用について学ぶ。	同　上	同　上
7	熱伝導と波動の数理（その1）	状態が時間のみならず空間変数にも依存する発展系、いいかえれば、分布定数系の時間発展の数学モデルは偏微分方程式の初期値問題になる。現象的にも数学的にも典型例である熱伝導と波動の数理を通じて、応用解析のハイライトであるこの問題と取り組む。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	熱伝導と波動の数理（その２）	前回に引き続き、当面の問題の扱いの基礎であり、応用数学の柱の一つであるフーリエ級数の概念および方法について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
9	熱伝導と波動の数理（その３）	前回および前前回に引き続き、フーリエ級数およびフーリエの変数分離法を用いて、針金の熱伝導（１次元放物型方程式）および弦の振動（１次元双曲型方程式）の問題を解決する。	同　上	同　上
10	発展系の数値解析（その１）	現在の科学技術における、偏微分方程式の、すなわち、分布定数系の実際的な応用は、コンピュータによる数値解法を抜きにしては成り立たない。そのための普遍的な方法である差分法による数値解法の基礎をすでに学んだ熱伝導の問題等について解説する。	桂田祐史（明治大学講師）	桂田祐史（明治大学講師）
11	発展系の数値解析（その２）	前回に引き続いて差分法による発展系の数値解法の考察を行い、かつ、定常状態への移行の問題、非線形問題への拡張について学ぶ。	同　上	同　上
12	フーリエ変換；出会いとなじみ（その１）	フーリエ級数の威力を、変域が無限区間におよび場合に拡張しようとすれば、フーリエ変換あるいはフーリエ積分に到らねばならない。この趣旨どおりにフーリエ変換を導入しその基礎について学ぶ。	藤田　宏	藤田　宏
13	フーリエ変換；出会いとなじみ（その２）	前回に引き続き、理論的にも応用的にも全前空間を変域とする偏微分方程式の解析の基本であるフーリエ変換の性質および応用について学ぶ。	同　上	同　上
14	超関数；出会いから応用へ（その１）	δ関数を典型とする超関数の概念の理解は解析の自由な応用の支えである。その解説に当たっては、数学的な明快さは尊重しながらも、超関数との友好的な出会いと応用志向のなじみの構築を目的として展開していく。	同　上	同　上
15	超関数；出会いから応用へ（その２）	前回に引き続き、超関数が自由な解析操作を許す寛大な世界であることを学ぶ。	同　上	同　上

＝数学基礎論（'99）＝（R）

〔主任講師：隈部正博（放送大学助教授）〕

全体のねらい

論理学の基礎を数学的立場から解説する。目標はゲーデルの不完全性定理の理解である。予備知識は特に要求しない。自然の理解専攻以外の学生向けでもある。数学的論理学の概要を理解するのがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	準備	この印刷教材を読むにあたって必要な予備知識について述べる。	隈部正博（放送大学助教授）	隈部正博（放送大学助教授）
2	命題論理	命題論理とは何かについて述べ、論理式の定義、真偽値について述べる。	同上	同上
3	トートロジー	論理式の真偽値についてさらに考察し、トートロジーの概念について述べる。	同上	同上
4	論理記号について	論理記号の完全性について述べる。	同上	同上
5	コンパクト性定理	命題論理のコンパクト性定理の証明をする。	同上	同上
6	一階述語論理	述語論理とは何かについて述べる。対象式と論理式を定義する。	同上	同上
7	構造	構造を定義し、述語論理における論理式の真偽について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ロジカルな満足性と演繹計算	述語論理におけるロジカルな満足性という概念について述べる。その後演繹計算とはどういうものか簡単に述べる。合わせてゲーデルの完全性定理のもつ意味について述べる。	隈部正博	隈部正博
9	論理公理	論理公理について述べる。	同上	同上
10	演繹計算についてのいくつかの定理	演繹計算についてのいくつかの定理を述べる。	同上	同上
11	自然数論	自然数論について述べる。	同上	同上
12	表現可能性と計算可能性	自然数上の関係や関数の表現可能性、計算可能性について述べる。	同上	同上
13	ゲーデル数と証明の算術化	ゲーデル数の定義をした後、自然数論における証明の算術化とはどういう事かについて述べる。	同上	同上
14	不完全性定理その1	ゲーデルの第一不完全性定理の証明をする。	同上	同上
15	不完全性定理その2	ゲーデルの第二不完全性定理の証明をする。	同上	同上

＝計　算　の　理　論（'９９）＝（Ｒ）

（主任講師：野崎昭弘（大妻女子大学教授）
主任講師：仙波一郎（茨　城　大　学　教　授））

全体のねらい

いろいろな具体例を通して、異る型の計算問題に触れさせ、関連する技法の紹介や、効率の比較を行う。全体をⅠ．計算の基礎、Ⅱ．計算の効率に分ける。Ⅰでは入門を兼ねて親しみやすい問題を多く入れ、解をさがす技法や「解がない」ことの証明の技法、Ⅱでは実用的な問題についての技法と効率の比較を行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数学的帰納法について①	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	仙波一郎（茨城大学教授）	仙波一郎（茨城大学教授）
2	数学的帰納法について②	数学的帰納法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ハノイの塔問題について、その解法手順を詳しく考察する。	同　上	同　上
3	背理法について①	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくに、ピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同　上	同　上
4	背理法について②	背理法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。解が無数にあることや、解が存在しないことを示すときなどに有用である。とくに、ピタゴラス数と素数について、その性質や生成法などを詳しく考察する。	同　上	同　上
5	部屋割論法	部屋割論法の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。ある条件を満たす解を具体的に求めることなく、解の存在を示すときに有用な論法である。	同　上	同　上
6	2　値　化	2値化の考え方を具体的な問題を通して説明する。解が存在しないことを示す場合にその切れ味を味わってほしい。	同　上	同　上
7	1対1対応	1対1対応の考え方を説明し、具体的な問題を解きながら理解を深める。うまい対応づけによって、解が求められていく過程に注目してほしい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	バックトラック①	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	仙波一郎	仙波一郎
9	バックトラック②	バックトラックの考え方を具体的な問題を通して説明する。パズル問題（川渡り問題、はかり分け問題など）、数学的問題（集合分割問題、整数分割問題など）、フラクタル図形などを取り上げる。具体的な解をすべて求める場合に、汎用的かつ強力な方法である。	同上	同上
10	順列の生成	順列を生成するいろいろな方法を紹介する。興味ある応用例を示す。	同上	同上
11	計算の効率	電卓を使って、複利計算 10万円×1.05×……×1.05 を実行する方法について考えてみます。こんな簡単な問題でも、計算の上手・下手によって、効率がずいぶん違うことに、注目して下さい。	野崎昭弘（大妻女子大学教授）	野崎昭弘（大妻女子大学教授）
12	方程式の解法	5次以上の代数方程式には解の公式がありません。しかし数値計算で解の近似値を求めることなら、もっと複雑な方程式でもできます。そのことを具体的な例で説明し、効率の観点も加えて検討します。	同上	同上
13	表の検索	コンピューターに記憶された大量のデータから、目あての情報をさがすことを「検索」といいます。ここでは基本的な「表の検索」について、簡単な工夫で所要時間をずっと短くできることを説明します。	同上	同上
14	旅行計画	東京、名古屋、金沢、新潟、大阪の各都市を訪問したいのですが、どんな順序で、どんなコースを通ればいいでしょうか？2都市間の最短コースをさがす問題から始めて、いくつかの計算問題とその解法を紹介します。	同上	同上
15	計算の理論の歴史	ギリシャ時代の工夫、たとえば「ユークリッドの互除法」から始まって、現代の最先端をゆく並列計算の理論まで、いくつかのポイントをひろいながら概説してみたいと思います。	同上	同上

＝パソコンによる解析学（'９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：森本光生（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

パーソナルコンピュータを利用して、数値実験を行い、グラフを描き、解析学（数列、級数、微分、積分、微分方程式）について解説する。解析学は無限を前提として成立しており、コンピュータは有限のシステムである。この差異を十分に注意しながら、パソコンによる数値計算という観点より、解析学を見直してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	パソコンによる計算	パソコンによる数値計算の手段として、ＵＢＡＳＩＣという言語を学ぶ。基本的には、加減乗除をくりかえして数値計算はなされるが、誤差の累積の危険性を避けるために、収束のスピードが問題になる。遅い収束をする数列と、速い収束をする数列の例をあげたい。	森本光生（国際基督教大学教授）	森本光生（国際基督教大学教授）
2	反復による平方根の求め方	a を正の数とするとき、$x \mapsto \frac{1}{2}\left(x+\frac{a}{x}\right)$ の反復で x は$\sqrt{a}$に収束する。この収束は“２乗収束”と呼ばれ、高速である。今回は数列の収束の概念を復習し、上記のニュートン法について学ぶ。パソコンによる数値計算も行う。	同　上	同　上
3	ライプニッツの級数とマチンの公式	ライプニッツの級数は、緩慢に円周率に収束するが、遅すぎて円周率の数値計算には適さない。通常、円周率の数値計算は、マチンの公式により、逆正接関数のテイラー展開を利用する。今回はマチンの公式を証明し、その威力をパソコンによって確かめてみる。	同　上	同　上
4	パソコンによるグラフィックス	モニターのグラフィックス画面は方眼紙である。この方眼紙の枡目は、標準的には640×400である。今回は、ここに描画するためのＵＢＡＳＩＣの命令を学び、$y=f(x)$のグラフを描いて見る。また描画の例として、モンテカルロ法を視覚化してみよう。	同　上	同　上
5	フーリエ級数のグラフ	フーリエ級数は三角級数とも呼ばれる。周期関数はすべてフーリエ級数に展開される。無限級数はグラフに描くことはできないが、有限和のグラフを描いてみて、極限の関数の様子を探ってみたい。連続だが微分できない関数もフーリエ級数で表わせる。	同　上	同　上
6	イタリック、sin 立体テイラー展開のグラフ	関数のテイラー展開について説明する。例えば、$y=sinx$のテイラー展開のはじめの数項のグラフを描いてみて、テイラー展開の意味を探る。テイラー展開を利用して、ネピアの定数や三角関数の値の精密な近似値を加減乗除だけで計算してみる。	同　上	同　上
7	数値積分の公式Ｉ	$f(x)$を増加（減少）関数とした時、$\frac{1}{2}f(0)$は定積分 $I=\int_0^1 f(x)dx$ の不足（過剰）近似値で、$\frac{1}{2}f(1)$はＩの過剰（不足）近似値である。したがってその平均値はＩの近似値として適当である。これを台形公式という。これを改良してシンプソンの公式が得られる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	数値積分法の誤差解析	滑らかな関数の台形公式による数値積分の誤差解析は詳しく実行することができる。オイラーマクローリンの公式を紹介しよう。シンプソン公式の誤差解析や、より高度の数値積分の公式（ロンバーグ法）についても触れてみたいと思う。	森本光生	森本光生
9	関孝和の円周率計算	正方形の周の長さから出発して、辺の数を倍々に増やしていく。正2^n角形の周の長さは整数から出発して加減乗除を開平算を組み合せて求めることができる。$n \to \infty$とすれば円周率が求まるが、収束は遅い。和算家の関孝和は、巧妙な加速法を発見した。	同上	同上
10	建部賢弘の円周率計算	建部賢弘（たけべかたひろ）は、単位円に内接する正4角形、正8角形、正16角形、…、正1024角形の周の長さを計算し、この9個の数値から、43桁の円周率を求めた。彼は、いったいどのような方法で計算したのであろうか探ってみたい。	同上	同上
11	微分方程式の意味	簡単な微分方程式により、微分方程式の表わす自然現象について解説する。流れの図をパソコンに描かせて、微分方程式とその解の数学的な関係について考える。微分方程式の一般解は曲線群を表すことと、適切な初期値を持つ解は一意的に定まることを確認する。	同上	同上
12	微分方程式の求積法	変数分離型、同次型、一階線形微分方程式など、積分を実行することにより微分方程式の解が具体的に求められる場合がある。今回はこのような微分方程式の実例をいくつか取り上げ、計算例をみることにする。	同上	同上
13	微分方程式の数値解法	最も簡単な微分方程式$\dot{x} = f(x,t)$を考察する。ここで、$\dot{x} = \frac{dx}{dt}$は関数$x(t)$の時間パラメータtによる導関数を表わす。初期値$x(0)=x_0$を与えた時の近似解を折れ線近似で求めることを、オイラー法という。オイラー法を改良することについても述べよう。	同上	同上
14	2次元線形自励系	$\dot{x} = ax+dy, \quad \dot{y} = cx+dy$ という2次元の自励系は、$\dot{x} = Ax$という行列形で記述できる。パソコンが描く解軌道図を眺めながら、この自励系の軌道の様子と行列Aの固有値の関連について考察しよう。	同上	同上
15	2次元自励系の定常解	$\dot{x} = f(x,y), \quad \dot{y} = g(x,y)$ という2次元の自励系の解$x=x(t), y=y(t)$の軌道をパソコンに描かせながら、定常解の安定性について説明する。いわゆる極限円もパソコンで容易に描くことができる。	同上	同上

＝相対論（’９９）＝（Ｒ）

〔主任講師：藤井保憲（日本福祉大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、相対性理論全般にわたって平易な解説を目指す。数式の使用は必要最低限にし、直観的な説明を心がける。重要な点については、時間をかけて丁寧な説明をする。また相対性理論が現在の基礎研究や技術にどのように役立っているかにも焦点をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	相対性理論とは何か	特殊、および一般相対性理論とはどんなものか、詳細にはいる前に概観と現代の姿を与える。次に特殊相対性理論の成り立ちにはいる。以後の説明の準備として座標系、慣性系、またガリレイ変換などを解説し、また電磁気学における光速度との関連にもふれる。	藤井保憲（日本福祉大学教授）	藤井保憲（日本福祉大学教授）
2	同時刻とはどういうことか	光速度不変の原理から出発し、直感的な議論によって同時刻の相対性や動いている時計のおくれを示す。絶対時間概念の崩壊を強調し、ローレンツ変換を紹介する。それによって新しい速度の合成則を導く。	同上	同上
3	時空とは何か	ローレンツ変換の作用する場所としてミンコフスキー時空、その中の世界点、世界線、固有時について述べる。2次元から出発し、時計のおくれなどの現象を再現する。光円錐を説明する。4次元ベクトル、スカラー、ローレンツ不変量を解説する。	同上	同上
4	特殊相対性理論によって何がわかったか	4次元エネルギー・運動量ベクトルから $E=mc^2$ を導き、原子核エネルギーについて説明する。さらに速度とエネルギーの関係も議論し、加速器の原理を述べる。ディラック方程式、それに関連してスピンについても述べる。レーザージャイロなど、最近の応用にもふれる。	同上	同上
5	パズルはいかが	特殊相対性理論にかかわるいくつかのパズルに挑戦してみる。これまでに習ったことの練習問題にもなるし、さらに深い理解のためにもなるだろう。	同上	同上
6	一般相対性理論への道	一般相対性理論に導くいくつかの概念について説明する。特に非慣性系、慣性力、2種類の質量などを通じてニュートン力学の微妙な点にふれ、等価原理を理解する。エトヴェッシュの実験もとりあげる。	同上	同上
7	曲がった時空	加速度運動をあらわす曲がった世界線から、曲がった時空への着想について述べる。曲がった空間の幾何学の話しにはいる。計量、平行性、曲率、測地線などの概念を説明する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	重力は力ではない	運動方程式としての測地線の考え方を述べる。ニュートン的極限で、計量が重力ポテンシャルと解釈できることを示す。また回転座標系における円心力の例も考察する。等価原理のさらに深い到達点として、単なる慣性力と真の重力との違いについて説明する。	藤井保憲	藤井保憲
9	重力による時計のおくれ	等価原理の適用例として重力的赤方変位を導く。Pound-Rebka の実験、およびVessotの実験、さらにはこれを利用した重力計にも触れる。また最近の地球的規模の時計合わせの話題も含める。	同上	同上
10	アインシュタイン方程式	基本的考え方と結果を簡潔に述べる。またその苦心談も交える。ニュートン理論との関係、またその非線形性を強調する。その解として、線形解、静的厳密解、宇宙論的解があることを説明する。時空と物質との相互関係についても述べる。	同上	同上
11	シュワルツシルト解	シュワルツシルトに関する挿話を交えながら、解の特徴を説明する。ついでブラックホールの説明にはいる。地平線の性質、またそれへの落下の様子を解説する。またブラックホールの現実性についても語る。超新星との関連にも触れる。	同上	同上
12	太陽系	水星の近日点移動、太陽のまわりの光の曲がりについて、歴史的挿話と共に説明する。ついで最近の太陽系実験について述べる。さらに連星パルサーに関する話題も含め、実験重力の発展について語る。	同上	同上
13	重力波	重力波の特徴について説明し、その検出のための努力について述べる。また重力波天文学としての将来性についてもふれる。ついで宇宙論の基礎にはいる。	同上	同上
14	宇宙論	膨張宇宙の解を提示する。宇宙定数の挿話とハブルの発見について語る。赤方変位について説明し、現代のビグバン宇宙観について解説する。宇宙背景輻射、暗黒物質や宇宙定数などに関する話題も含める。	同上	同上
15	統一理論	素粒子物理学との接近について述べる。アインシュタイン理論のさらに奥にある統一理論について概説する。	同上	同上

＝物質の科学・反応と物性（９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：土屋荘次（日本女子大学教授））
（主任講師：平川暁子（放送大学教授））

全体のねらい

この講義では、物質の示すさまざまな状態・性質と化学変化を熱力学と反応速度論という２つの方法論によって探求する。方法論の原則を実験事実を通して理解し易く解説することを念頭におく。なお、これらの原則がどのように現代の先端的な問題に関連しているかの解説にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論：物質探究の方法論	本講義の目標と背景、その概要を説明する。物質の科学は、物質のもつさまざまな特性を原子・分子のレベルで探求する学問である。この講義では、主として熱力学と反応速度論に基づいて物質の反応と物性を解き明かす予定である。	土屋荘次（日本女子大学教授）	土屋荘次（日本女子大学教授）
2	物質のもつエネルギー	物質はそれを構成する原子分子の運動による固有なエネルギーをもっている。エネルギーの大きさを規定しているのは温度であり、また、エネルギーの変化は、熱や仕事として認識される。この章の目標は、物質のエネルギーの根源とその変化についてを学ぶことである。	同上	同上
3	熱化学	物質の化学変化にともなってエネルギーの吸収、または放出がある。この章では、物質の構成成分について標準状態エネルギーを定義することによって、結合エネルギーなど物質固有なエネルギー、および反応にともなうエネルギー変化を考察する。	同上	同上
4	物質のエントロピー	物質の状態を規定するには、エネルギー以外にエントロピーという物質固有な物理量を必要とする。この章では、エントロピーの物理的な意義とそれが何故物質の状態を支配するのかを説明する。	同上	同上
5	化学平衡	物質の化学変化や状態変化は、最終的には平衡状態となる。この講義では、平衡状態がギブスエネルギーが最小となる条件で達成されることを説明し、化学平衡への応用を考察する。	同上	同上
6	相平衡	物質は、固体、液体、気体の３つの状態のいずれかをとる。純物質について、どのような条件でどのような状態をとるかを論ずるのが本章の課題である。	同上	同上
7	溶液	２つの成分物質の混合系のとりうる状態を論ずるのを目的とする。組成によって平衡状態がどう違って来るか、また、「溶ける」とはどういうことなのかも論ずる予定である。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	相転移	物質の気体、液体、固体の3つの状態間の相の変化の他に、結晶や液体状態で様々な相変化（相転移）をする物質が数多く存在する。相転移がなぜ起こるのかを、エネルギーとエントロピーの立場から、いくつかの例で解説する。	徂徠道夫（大阪大学教授）	徂徠道夫（大阪大学教授）
9	高分子の構造	高分子物質の多彩な性質は、それがとり得る複雑な構造とその分子運動に起因している。ここでは高分子の構造を、単量体の一次構から始めて、高分子鎖の一次構造、二次構造、高次構造を主として熱力学の立場から説明する。	西敏夫（東京大学教授）	西敏夫（東京大学教授）
10	高分子の物性	高分子に特徴的な物性として、ゴム弾性やゲルの物性、高性能繊維、粘弾性などを取り上げ、構造と物性の関係を説明する。また、機能性高分子の例として、光学的特性、導電性、圧電性などを示すと共に、これからの高分子の可能性について述べる。	同上	同上
11	化学反応のしくみ（1）	物質の化学変化、つまり、反応の速度をどう表現するか、その速度を支配しているものは何かなど、反応速度の基本を学ぶ。	土屋荘次	土屋荘次
12	化学反応のしくみ（2）	化学反応は、原子分子同士の衝突によって起こる多くの素反応から組み立てられる複合反応の形式をとる。その場合、反応を推進する機構がどうなっているかを燃焼や爆発反応などの例について学ぶ。	同上	同上
13	大気の化学	地球の大気は太陽光をエネルギー源とした光化学反応の場である。この章では、オゾン層の生成などの自然大気で起っている光化学反応と、人間活動によって大気中に放出された汚染気体が起す光化学反応を学び、同時に人間活動が自然に与える影響を考える。	鷲田伸明（国立環境研究所部長）	鷲田伸明（国立環境研究所部長）
14	エネルギー変換の化学	電子のやりとりで進むプロセスのあらましを説明し、エネルギー変換の原理を解説する。とくに、人間社会にとってもっとも重要なエネルギー変換である光合成をとり上げ、光エネルギー変換のメカニズムを検討する。	渡邊正（東京大学教授）	渡邊正（東京大学教授）
15	触媒の化学	われわれの生活は、さまざまな有用な合成物質に支えられている。それらの大部分は、触媒という特定の化学反応を媒介する機能物質によって合成される。この章では、触媒のもつ反応メカニズムを学び、その多様な可能性を探る。	御園生誠（東京大学教授）	御園生誠（東京大学教授）

＝生　態　学（'99）＝（TV）

〔主任講師：藤井宏一（筑波大学教授）〕

全体のねらい

生物群集の構造は固体、固体群、群集のレベルからなっている。本講義では各レベルでの、生物と無機的環境、生物と生物との関係を理論的に、そして具体例をあげながら講義し、生物集団の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびそれらの動態についての理解を深めることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生態学とは	生態学は生物学の1分野として存在し、その中心課題は生物の分布と固体数の変動を理解することにある。生態学の成り立ちと歴史、現在の研究の中心課題、人間生活との関わりなどについて述べる。	藤井宏一（筑波大学教授）	藤井宏一（筑波大学教授）
2	生物活動の舞台	生物の活動は、生活場所の地学的条件で決まる無機的環境に大きく規制される。生物の活動に大きく影響する物理・化学的要因ならびに生物にとっての生活必要資源について解説し、あわせて気候など無機的環境条件に対する生物の応答について考える。	同上	同上
3	光合成－葉から群落へ	生態系における一次生産者の役割を担う植物の光合成と微気象・環境要因によるその制御や、環境への生理的・形態的馴化について述べる。一枚の葉の光合成から群落の物質生産までのスケールアップにも触れる。	鷲谷いづみ（筑波大学助教授）	鷲谷いづみ（筑波大学助教授）
4	消費者と食物網	すべての動物と大半の微生物は緑色植物が生産した有機物を直接・間接に消費して生活する。食う－食われるの関係で網目状に結ばれている生物どうしの関係について考え、この網の構造とそれを構成する物質とエネルギーの流れに見られる法則を探る。	藤井宏一	藤井宏一
5	物質とエネルギーの流れ	生物世界と非生物世界とを包含する複雑な物質とエネルギーの流れの場を生態系と呼ぶ。地球全体はひとつの生態系複合である。生物を構成する主要な元素に着目して、系内外におけるそれらの挙動を追うとともに、系を出入りするエネルギーの流れをたどる。	同上	同上
6	さまざまな生態系	生物間相互作用を介した生物群集／生態系のなりたち、大きな空間的スケールで捉えた生態系として世界のバイオーム、日本のバイオームについて述べる。また、いくつかの代表的な生態系を取り上げてその特徴を紹介する。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
7	自然淘汰と適応	自然淘汰にもとづく進化、それによってもたらされる適応について述べる。いくつかの具体的な適応の例を紹介するとともに、理論的なアプローチの有効性についても述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	植物の生活史戦略	植物の生活史の進化の主要な淘汰圧について考察し、C－R－Sモデルを紹介する。さらに、植物の栄養成長期の適応として、可塑的な形態形成と被食適応について述べる。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
9	植物の繁殖戦略	植物にみられるきわめて多様な種子繁殖の様式について、開花・授粉、結実、種子分散、種子の休眠・発芽、実生確立のそれぞれの生活史ステージごとに概説し、それぞれの生態的意義について考える。	同　上	同　上
10	個体数の変動	生物集団（個体群）の個体数は、有限の環境においては無限に増加することはできない。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、まずその機構について理論的に述べ、ついで実例を見ながら密度効果、“なわばり”などについて論じる。	藤井宏一	藤井宏一
11	種間競争	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か、まずその機構について理論的に取り扱い、さらに種間競争の結果として起こる諸現象（“すみわけ”、形質置換など）について、観察例を用いて説明する。	同　上	同　上
12	食うものと食われるものの関係	食うものと食われるものの関係（捕食－被食関係）は、生物間の相互作用の中でも一番重要な関係のひとつである。まず捕食－被食関係にある生物種の動態の理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食－被食関係のはたす役割について説明する。	同　上	同　上
13	動物の生存戦略	生物はなんのために存在するのか、またその目的を達成するために、無機的環境、そして他の生物に対して如何に適応してきたかについて、まず理論的考察を行ない、ついで動物の採餌戦略、繁殖戦略などを例にとりながら説明する。	同　上	同　上
14	生物多様性の保全	現代の生物多様性の急速な喪失の主要な原因は、乱獲・過剰採集とともに生育場所の分断・孤立化および生物学的侵入といった「生態的」なプロセスである。ここでは生物多様性の保全のための生態学を紹介する。	鷲谷いづみ	鷲谷いづみ
15	生態学と人間	これまでに学んできた生物の生き方の知識と、我々人間の今後の生存との関わりを議論する。生態学の知識が、人口問題、食料問題、環境汚染など現在我々が直面する諸問題の解決にどんな示唆を与えられるのか、どのように貢献できるのかを論じる。	藤井宏一	藤井宏一

＝ 生物の進化と多様性（'９９） ＝ （ＴＶ）

（主任講師：森脇和郎（総合研究大学院大学副学長）
主任講師：岩槻邦男（立教大学教授））

全体のねらい

生物の示す性質には、すべての生物に共通の普遍的な性質もあるが、数多くの種に分化している生物の種が個別に示す多様な性質も知られている。生物の示す多様性は、30数億年に亘る生物の進化の歴史を刻んだものであり、この多様な生物の姿を系統と進化を軸にして理解しようとするのがこの科目の目的である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物多様性と生物の進化	地球上に150万種認知されており、実際は千万を超えるかも知れないと推定されるほど多くの種に分化している生物の多様性とは何か。歴史的な存在である生物多様性の由来を進化の視点で総説し、主な分類体系を紹介する。	岩槻邦男（立教大学教授）	岩槻邦男（立教大学教授）
2	分子レベルの進化と中立説	表現型レベルの進化は生存と繁殖に有利な突然変異の蓄積によって起こり、分子レベルでの進化は主に自然選択に中立な突然変異遺伝子が偶然的に種内に蓄積することによって起こる。進化学における中立説の意義を講ずる。	高畑尚之（総合研究大学院大学教授）	高畑尚之（総合研究大学院大学教授）
3	生物の分子系統樹	脊椎動物の個体発生をモデルとして作られた古典的な系統樹と並んで、近年研究が進んでいる分子レベル、特にタンパク質のアミノ酸配列や核酸の塩基配列における差異を指標に動物の起源と系統進化を明らかにする手法を紹介する。	堀寛（名古屋大学教授）	堀寛（名古屋大学教授）
4	動物ゲノム進化の道筋	全生物の究極の祖先は、原核生物シアノバクテリウムであったが、動物細胞は、その先祖と思われる原真核動物以来、各種細菌の細胞質内寄生によって小器官を獲得し、それらの細菌の有効な遺伝子を核内の染色体上に集めることによって進化を続けてきた。	大野乾（Beckman Research Indstitute of the City of Hope）	
5	動物の系統樹	ダーウィン以来生物が進化することが広く受け入れられるようになり、この視点をふまえた系統樹が作られている。系統分類学の立場から、現在の多様な動物たちの進化の過程と起源を概説する。	白山義久（京都大学教授）	白山義久（京都大学教授）
6	化石が語る動物の進化	過去の生物の記録である化石を通じて、動物の巨視的な形態的進化や多様性を紹介する。生物が地球環境の変化や共存する他の生物種との相互作用の中で、時間とともに進化してきたことを、主に脊椎動物を例に講ずる。	冨田幸光（国立科学博物館室長）	冨田幸光（国立科学博物館室長）
7	動物のかたちの起源と進化	多細胞動物の体づくりはすべて１個の細胞である受精卵から始まる。したがって、動物の形の起源と進化を考えるためには発生のメカニズムを理解することが必須である。最近になって、動物の体づくりを制御する遺伝子の働きが明らかになりだしている。そうした遺伝子の働きから体制の進化に至るまでを概説する。	佐藤矩行（京都大学教授）	佐藤矩行（京都大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	種の遺伝的分化	種分化は生物進化の基本となる過程である。生物学的「種」の概念に準拠すれば、種の遺伝子構成には特異性がある。遺伝子分析のもっとも進んだ哺乳動物であるマウスを対象に、種の遺伝的分化の実体を探る。	森脇和郎（総合研究大学院大学副学長）	森脇和郎（総合研究大学院大学副学長）
9	陸上植物の種分化	陸上に生活する植物は20数万種に分化しているが、そのためには特有の多様化の過程を踏んでいる。遺伝子突然変異だけでなく、染色体突然変異が、植物の種形成にどのように現れ、具体化されているかを、実際の例を挙げながら概説する。	伊藤元己（千葉大学助教授）	伊藤元己（千葉大学助教授）
10	藻類の系統と進化	真核生物の進化は具体的にどのような過程を経ていたか、新たに真核生物となった藻類の多様性はどのように形成され、維持されているか。現生の藻類の多様性の基づく研究成果から、藻類の系統と進化を紹介する。	井上勲（筑波大学教授）	井上勲（筑波大学教授）
11	陸上植物の起源と多様化	陸上植物は、4億年あまり前に、緑藻類の1群が、陸上に進出してきたものである。植物が陸上へ進出してくる背景と、陸上へ進出してどのように多様化したのか、陸上植物の系統を、葉の形成を具体的な指標としながら紹介する。	岩槻邦男	岩槻邦男
12	種子植物の系統と進化	現生の陸上植物の多様性の大部分は種子植物で占められる。陸上植物のうちから、種子植物はどのような過程を経て形成され、何故このように多様化することができたのか。種子植物の起源と多様化について、とりわけ花と実の進化を紹介する。	西田治文（中央大学教授）	西田治文（中央大学教授）
13	菌類の系統と進化	菌類は動物でも植物でもない生物の世界の第3の群を作る。菌類の起源と進化について、現生の菌類の多様性を整理しつつ、その進化の過程を追跡する。菌界にまとめられる真菌類と、変形菌類、ツボカビ類、卵菌類などの原生生物との比較も試みる。	土居祥兌（国立科学博物館室長）	土居祥兌（国立科学博物館室長）
14	人類の起源と進化	ヒトが類人猿と共通な祖先から進化してきたことは疑う余地はない。しかし、いつ、どのようにして今日のヒトができたかは充分に解明されてはいない。化石と分子時計の両面から進められているこの問題へのアプローチを解説する。	長谷川政美（統計数理研究所教授）	長谷川政美（統計数理研究所教授）
15	種の多様化と滅失	自然界における種の分化の実態はすでに紹介されているが、種形成と逆に、種には絶滅が必然である。さらに、ヒトの営為が地球環境を変貌させたことによって、種の絶滅は新たな問題を生み出している。種の形成と滅失について概説する。	岩槻邦男	岩槻邦男

＝太陽系の科学（’９９）＝（ＴＶ）

（主任講師：小尾信彌（元放送大学長）
主任講師：吉岡一男（放送大学助教授））

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や、個々の天体の性質等について、最近の惑星探査などによる研究成果もふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	研究の歴史	古代やギリシア時代から太陽系天文学の発展の歴史を概観し、最近の探査機による成果や研究にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。全15回の講義の展開についても述べる。	小尾信彌（元放送大学長）	小尾信彌（元放送大学長）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等の特徴について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同上	同上
3	地球と月の運動	自転や公転およびそれにかかわる地球の運動の様子を、それらが解明されてきた歴史とともに学ぶ。さらに、地球のまわりの月の運動についても学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）	吉岡一男（放送大学助教授）
4	天球座標と時間・時刻	天球上での位置を表わす天球座標および時刻の決定は、地球の自転や公転と深くかかわっている。ここでは、これらの決定がどのようにして行われ、どのような種類の天球座標や時間・時刻が定められているかを学ぶ。	同上	同上
5	惑星の視運動と月の現象	天球上の惑星の動きすなわち視運動は、太陽系のモデルの観測的基礎となってきた。ここでは、惑星の視運動がどのように説明されるかについて学ぶ。また、月の運動に関連して、日・月食などの現象についても学ぶ。	同上	同上
6	惑星運動の法則	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する３法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（富山国際大学教授）	堀源一郎（富山国際大学教授）
7	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの３法則は理論的に導かれた。ここでは、面積速度の法則（第２法則）について、その諸側面を学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として、楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	堀　源一郎	堀　源一郎
9	第3法則と万有引力	万有引力の法則からは、2体の運動について、公転の平均距離と公転周期の間にいわゆる第3法則が導かれる。ここでは、その導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	同　上	同　上
10	惑星以外の天体の運動	地球をまわる月やより一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同　上	同　上
11	摂動	現実の太陽系においては、惑星や衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降に発展した摂動について学ぶ。	同　上	同　上
12	地球型惑星	水星、金星、地球、火星、さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理的な性質を学ぶ。	松井孝典（東京大学助教授）	松井孝典（東京大学助教授）
13	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の成果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。	同　上	同　上
14	小惑星、小天体	太陽系には、惑星のような比較的大型の天体の他に火星と木星の軌道内を公転する非常に多数の小惑星や、さらに数の多い彗星などの小天体が知られている。これらの小天体についても、最近の分光観測や直接探査により多くの知見が得られている。これら小天体について学ぶ。	同　上	同　上
15	太陽系の起源	太陽系の諸天体は、およそ46億年以前に銀河系内の星間雲の中で太陽が形成されるのに伴って誕生した。惑星をはじめとする太陽系の天体の誕生については18世紀中ごろ以来多くの説が出されている。ここでは最近の考え方を中心に太陽系の起源について学ぶ。	同　上	同　上

＝ 日本列島の地球科学（’９９）＝（ＴＶ）

〔主任講師：濱田隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本列島の形質は、地球の歴史の中で育てられてきた。しかも地殻の激動の場からの産物である。赤道直下に近い熱帯のサンゴ礁地帯であった部分が、プレート・テクトニクスによって北上し、アジア大陸の東縁と衝突して誕生した結果であることを、周辺の海域を含めた幅広い地球科学の眼でたどってみる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	列島の特徴	日本列島とその周辺の、海水をとり去った結果の大地形を概観し、プレート・テクトニクスによる変動帯として成長してきた諸々の特徴を、グローバルな構造論の立場を通して理解する。	濱田隆士（放送大学教授）	濱田隆士（放送大学教授）
2	列島の地質構造	日本列島は、複雑な地殻変動の重なりとして形成されたので、現在見られる地質構造も複雑である。プレート衝突場の特徴として、変成帯と非変成帯とが繰り返し配列していたり、火山が帯状に連なるなど、豊かな歴史を反映したものであることを理解する。	同上	同上
3	列島の気象	現在の日本列島は、北半球中緯度西に日本海を隔ててアジア大陸に向かい合い、ほぼ南北に細長くのび黒潮・親潮という二大海流に囲まれ、さらに東は太平洋に面しながら、北半球の偏西風帯に位置する。この配置が季節毎に特徴的な気象をもたらすことを理解する。	同上	同上
4	列島をめぐる海	日本は、海洋国・臨海国家と呼ばれるのに相応しい。海洋とは、ただ単に水をたたえた広大な低地というだけではない。地球の自転運動により、太平洋の西縁に当たる日本列島近辺の海水は特異な運動をとるようになっていることを理解する	同上	同上
5	島弧とプレート運動	日本列島は、グローバル・テクトニクスとしてのプレートの運動によってでき上がった。地球表層部にはプレートがどのように配置され、どのような動きをしてきたのか、列島形成の原動力になった地殻運動のモデルを検証する。	同上	同上
6	列島周辺の海底	海の歴史は、海底の地形と地質、そしてその形成年代が語ってくれる。海底の歴史は、プレートのどの位置を占めるかで大きく異なる。列島地形や地質構造との調和のとれた配列が、海底の相対的な動きを示していることを理解する。	同上	同上
7	地震活動	変動帯に位置する日本列島には、過去・現在そして未来を通じ、地震・断層運動が激しい。地震とそれによって起こされる地震災害は、日本列島のもつ宿命であることを理解し、地震対策の現況をも併せ理解する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	火山活動	伊豆大島や雲仙普賢岳だけが火山ではない。日本列島は、プレートの押し合う場として、地震帯と火山帯とが併存しているので、地質時代から現在に至るまで、多数の火山活動が起こって現在の地形・地質を形成していることを理解する。	濱田隆士	濱田隆士
9	地史 (1) 古生代	日本列島の基礎をつくり上げた古生代やそれ以前の地層が語る歴史はまさにグローバルで、アジア大陸の要素と、今は消え去った南海のパシフィカ大陸要素との出会いにある。化石の語る古生代地理を考え、ダイナミックな列島形成史前半を理解する。	同上	同上
10	地史 (2) 中生代	日本列島形成史に占める中生代の位置は特別である。かつては古生代のものと思われてきた秩父帯のかなりの部分が中生代前半の形成によることが明らかとなり、列島史は大きく塗りかえられてきている。恐竜化石の産出は、大陸とのつながりを示すものと理解できる。	同上	同上
11	地史 (3) 新生代	日本列島がほぼ現在の姿になる、いわば仕上げの時代であり、火山活動、隆起・沈降運動も激しかった。したがって侵食力も強く、堆積作用も大きかったので、山肌・半島・平野の形成期となり、海流系も安定化してきた時代であることを理解する。	同上	同上
12	地下資源	小さな島国の日本は、多種大量の資源を外国に依存している。そのような中で、日本の地史を反映した鉱化作用・地下資源鉱床の形成もあった。石灰岩やヨードなどのみが完全自給型地下資源であることを理解し、エネルギー資源には乏しい実情をみつめる。	同上	同上
13	多島海型自然環境	日本は島国といわれるが、それはただ列島をなしているということだけなく、大小様々の島々を抱えた多島海的自然環境下にある、ということに他ならない。わが国の気候・風土・産業・文化へもその影響が大きいことを理解する。	同上	同上
14	日本の地球科学の進展	日本列島の歴史が複雑な分、その研究史も多彩である。輸入文化として始まった系統的な日本の地球科学を認識し、それが時と共に消化・吸収され、今では日本からならではの地球科学が、世界に向けて発信される時代となった発展の経緯を概観する。	同上	同上
15	人と暮らし	日本列島の歴史の主役が大陸系と南方系であったことに似て、日本列島での人類発展史・生活型にも、南方型と大陸型とがある。自然環境に見合った風土が形づくられてきた縄文・弥生時代以降、次第にグローバル化も混じ、現在ではヒトと自然の接点が変容を遂げた。	同上	同上

この冊子に掲載した講義内容のうち、最新の開設年次の科目は、教材の原稿等を作成する時点で主任講師等が執筆しており、実際に印刷教材及び放送教材を制作する時点で内容等を組み替えていることもあり、必ずしも最終的な印刷教材・放送教材と一致していない部分がありますので、ご容赦ください。